

Force Detonater

世嗣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星が美しいのは絶望的な程に遠くで輝くから。

届かぬ夢を目指すのは、諦められないから。

叶わぬからこそ、届かないからこそ美しい。

これは、星を目指して手を伸ばし続けた、彼と彼女の物語。

——不屈の想いこそが、フォースネットネイター彼らの力の源。

目次

番外

聖夜をあなたと

1

一章 新暦66年

《星と出会う》

桜色の星光

15

二人になる日

36

三課流の語り方

58

心の光

79

光、堕ちて

101

そして三課

119

宴の前

136

宴の始まり

149

陸のストライカー

160

旧友

181

魔導師たちのトリガーロンド

197

その心は不屈

219

託し託されて

238

海の鳴る町

255

海鳴での日常

275

雪降る夜に

299

ボーズ／ガールズトーク

311

警護任務

328

泣いてる子を

353

星の光

377

閑話

398

二章 新暦67年

《星に思いを》

親というもの	412
生まれる疑念	427
始動	443
それぞれの戦い	459
鏡越しの星	473
束の間の休息	490
不可視の意思	508
侵食する意思	521
浸して食われてく	541
重ねて合わせて	563
声は届かず	580
その決断は	601
それが管理局(ぼくら)	625

加速する戦場	656
想いを貫け	685
ドライブ・イグニッション	706
青光は謳う	733
星に、思いを	766
終わり、始まる	792
そうして歯車は	809
幕間	826
第三章 新暦68年 《喪失の代償》	
ありふれた日常	841
いつかきつと	865
密着！航空魔導隊三課24時！「前編」	882

密着！航空魔導隊三課24時！「中編」

901

密着！航空魔導隊三課24時！「後編」

924

風邪をひかないのはなんとやら

942

泡沫の夢

956

静かな足音

969

その目を信じてる

981

想いの萌芽

1001

稽古

1019

修行

1035

その関係を

1053

背中を通して見えるモノ

ボーイズナイト

家族あるいは『あの人』の話

少しの背伸びと勇気

暁の空で

空を見上げて

青年を取り巻く環境と、動き出す歯車

想いのバトン

星は見えない

喪失の代償

雨は止まない

別離

1073

1102

1171

1128

1142

1161

1184

1207

1231

1262

1284

1309

幕間

四章 新暦71年 《星を見上げて》

再起動（リブート）

奪われたモノ

歩幅

家族

二人の差

本気の嘘

彼と彼

サモンパニック！

何が君の幸い

その日の空は青かった

再会

1323

14901477146514461429141513951377136313481336

ララバイ

そして、半年

希望と、喝采と、星空と

きつとあの日はもう遠い

追憶

選択

紅い空

かつて信じた君へ

今を戦う者たちへ

星を見上げて

起点となる者

幕間

183518041759171616781651162416011581155515391519

番外

聖夜をあなたと

窓からさした光になのはがもぞもぞと身動きをした。その身体は完全に大人と言いき難いながらも、膨らんだ胸や括れた腰はしっかりと女性的魅力に満ちている。

いつもはサイドポニーでまとめられている栗色の艶やかな髪が流れるように頬を撫でた。

「ん、にゃ……」

すっかり冷たくなった冬の気配を感じさせる外気から逃げるように手を伸ばして、近くにいるはずの存在を探す。未だ眠さで開かない目のまま手探りすれば、どうやらなのはに背を向けて寝ているらしい。

なのはが布団の中で自分よりか幾分大きな背中に身を寄せて、はにゆうと安心したように声を漏らした。

顔は見えないが触れ合う背中から温かさが伝わってきて、柔らかい眠気がまたなのはこのことを占拠する。

「……………」

「あー」

だが、そのタイミングを狙い澄ますようにベッドの端に置いてある目覚まし時計がやかましく鳴り始めた。

(起きちゃった、かなあ)

なのはが引っ付いていた人物は身を震わせると手を伸ばして時計を止めるとむくりと半身を起こした。

がりがりと癖のある淡い金髪を掻いた彼は未だ眠気の宿る翠の目でまだ眠たそうななのはに目を向けた。

「……おはよう、なのは」

「んー、おはよう、セルジオくん……」

二人の間で名前と名前が呼び交わされる。けれど寒さのせいかどちらも反応は芳しくなく、気を抜けば二度寝しそうであった。

セルジオが欠伸を噛み殺してベッドから抜け出した。素足で触れた床が冷たくて体がびくりと震えたが、そのおかげか思考が随分回り始める。

「なのは、早く起きろ。今日出かけるんだらう?」

「けどまだねむいのお……」

「けどいつまでもベットにはいれないだろう。ほら起きろって」

「やだあ、寒いもん……」

「冬は寒いもんだ。我慢しろ」

「じゃあセルジオくんがリビングまで連れてってよ……」

「……仕方ないな」

まだ半目のなののが、ん、と手を伸ばすと、セルジオが呆れたようにため息を吐いた。だが、その表情は柔らかく、どちらかと言えばなのはの我儘を喜んでいるようにも見える。

両手を伸ばすなのはをひよいと横抱きにして抱える。

「えへへ、お姫様だー」

「これが一番効率的なだけだよ」

ほにやと笑ったなのはがセルジオの首に手を回すと、セルジオの鼻孔をなのはの花のような芳香がくすぐった。鎌首を持ち上げそうになる劣情をぐっと抑えて、リビングへと歩みを進める。

なのはを抱いたままリビングに入るとソファに下ろしてブランケットをかけてやるとエアコンの暖房をつける。

「まだ、寒いな」

だが冬の冷氣はそんなものですぐさま和らぐほど容易い敵ではない。ふむ、と唸った

セルジオは、ソファの近くに置いてある電気ストーブをつける。

するとぼんやりと中に赤い光をたたえて、ストーブから熱気が漏れ出してくる。これで部屋が温まるのが早くなるのは間違いない。

「お、お、おっと」

ストーブから離れようとしたセルジオだったが、その抗いがたい温かさからストーブの前で座り込んでしまった。

「うーん、冬のストーブには恐ろしい魔力がある……」

「ずるい！ 私も寒いのにー」

「俺は悪くない。冬が寒いのが悪い」

「じゃあ私もあつたまるー」

「あ、こら俺が入らなくなる」

なのはがブランケットを肩に乗せたままソファから歩いてきてストーブの前で座って熱気を独り占めしようとする。それをセルジオが軽く押して場所を取ろうとするが、なのはの方も譲る気はないようでごいぐいと抵抗する。

しばらくの間、セルジオとなのはがストーブの前で温かさを独り占めしようと押し合

う。
「セルジオくんも強情だね」

「なのはがそれを言うか」

「ねえねえ、お兄さん、かわいい恋人に譲る気はないですか？」

「俺も寒いのでこれは譲れませんね、お嬢さん」

「おねがいつ！」

「可愛く言ってもダメです」

「むう」

「……可愛いけど譲らないぞ」

「むー、なら」

なのはが頬を膨らませたが、なにかを思いついたのか立ち上がるとストープの前に座るセルジオの前に立った。

「……何をする気かな高町」

「こうするのっ。えいつ」

なのはがセルジオの足の間に尻を落とすと、背中をセルジオの胸に預ける。

艶やかな長髪を揺らしたなのはが悪戯っぽい笑みを見せながら、セルジオの肩に頭を乗せて至近距離から見上げた。

「これなら二人で一緒にあつたまれるね」

透き通ったその瞳はアメジストのようにきらきらと輝いているようにも見えた。

「……あざといやり直し」

「とわいつつ、胸は随分煩いみたいだけど？」

「気のせいだ」

「またまた、セルジオくんは強がってー」

セルジオの胸に背中を預けたなのは、がくすつと笑みをこぼした。

「ほんとは、すごくドキドキしてるでしょ？」

「ほう、年上をからかう子には罰が必要だな」

「きゃー、おそわれるー」

なのはの指がつつと首元をなぞると、セルジオは冗談めかした口調で腕の中の恋人の肩を引き寄せて強く抱きしめた。

ふわり、とまた立ち上った花のような香りに意識が侵食されてふわふわ揺れるような気がする。

抱きしめられているのは、が楽しそうに笑って、そつとセルジオの手に自分の手を重ねた。

「朝ごはん、どうしようか」

「軽くでもいいよ。どうせこの後は出かけるんだし、ちよつといいところで昼ごはんでも食べよう」

「そっか、せつかくのクリスマス、だしね」

「ああ、せつかくのクリスマス、だしな」

合わせられた手を握り返してくすりと笑みをこぼした。

部屋はまだ寒かったはずなのに二人で身を寄せ合っている今は、何故かそのことが全く気にならなかった。

クリスマス。それはなのはの故郷である地球にある文化だ。もちろん、ミッドチルダには一管理外世界の行事であるクリスマスはないが、偶然にも聖王生誕祭が同じ時期にあっているため、最近では地球に理解のある人には『クリスマス』で割と意味が通じたりする。

昔はもつと厳かなベルカだけのイベントだったが、少し前に一部企業がマーケティングに組み込んでから、ミッドチルダ全体でも祝われるようになった。

最近ではイルミネーションで街を飾り、家族でご馳走を食べたり、恋人と過ごしたり

する日、というイメージが強い。

つまり、最近のクリスマスはミッドチルダも恋人たちで賑わっており、セルジオとなのはもその中の一組であった。

街路樹を飾る無数の光が夜を賑やかに照らす中、なのはとセルジオは二人で並んでクラナガンの街を歩く。

「イルミネーション綺麗だねー」

「すごい数だ。電気代凄そうだな」

「あ、ケーキ。一ホールだと安くなるんだって」

「ケーキならシロウさんから貰ってきた。昨日なのはが持ってきたじゃないか」

「むー、セルジオくんって絶妙に女心わかってないよね」

「……………?」

「あー、そのほんとにわかってない顔。悪気ないから手に負えないよね」

「つまり、俺が何かしたのか?」

「べっつにー」

はあ、と大仰にため息をついて頬を少しだけ膨らませるのは。どうやら何か腹に据えかねることがあったらしいのだが、セルジオには何が悪かったのかはわからなかった。

「一先ず隣の恋人の姿を観察してみる。わからなければ推理するだけだ。
(……よしわからん)」

少し頭を悩ませてみたが女心に疎い彼の頭脳はこの状況を解決する方法を教えてくれなかった。

セルジオも今年で二十五歳だが、その女心に関する理解は十七歳の頃からほとんど変わっていないようだ。なんて残念な奴。

なので、取り敢えず隣で不満そうに揺れていた手を握ってみる。

「……………」機嫌取り?」

「いや寒そうだったから」と言葉にして、すぐに「いや、嘘だ」と言うと、次の言葉が続けた。

「本当は俺が繋ぎたかったんだ」

なのはがまじまじと繋がれた手を見て、くすつと笑った。

「ふふ、随分素直だね」

「合格か?」

「うん、合格ですつ。許してあげる」

嬉しそうに手をぶんぶんふるなのはにセルジオも思わず笑みを漏らしてしまう。

なのはの柔らかい手の感触。そこから伝わってくる彼女のぬくもり。その全てがど

うしようもなく得難いと思っていたもので、今のセルジオにとってたまらなく愛おしい。

だから、なんとなく昔していたようになるのは頭を軽く撫でてしまう。

「可愛いなあ、なのはは」

「にや、こ、子ども扱いしないでよ!」

「子ども扱いなんてしてないよ。大切な恋人扱いしてるんだ」

「こ、言葉を変えてもダメ! ちよつときめいたけど、人前で頭撫でるのはダメです」

「なら家でならいいのか?」

「……からかってる?」

「バレたか?」

「……やっぱ子ども扱いしてる」

「まあ、24と18じゃあなあ……」

ふ、と頬を緩めるとなのはが半目でじとつとセルジオを睨んでいたが、えいっと小さな掛け声を出してセルジオと腕を絡めた。

ふよん、なのはの年の割に大きな胸がセルジオの肘に当たった。

「……なのはさん胸が当たってます」

「当ててるんです。これで子ども扱いできないでしょ」

「わかった、わかったから離れる。少し心臓に悪い」

「だーめ。セルジオくんがちゃんと私の事を対等に見てくれるまでこのままです」

「……顔赤いぞ。恥ずかしけりややめればいいのに」

「さ、寒いからだもん！　　は、恥ずかしくなんてないよー！」

ふふん、と得意げな表情を浮かべるなのは顔は赤い。それはきつと外が寒いせいだけではない事は明らかだった。そもそも胸を当てているせいでセルジオは腕を通してなのは心臓の鼓動が伝わっているの、誤魔化してもあんまり意味はなかったり。

ほう、とセルジオが息を吐くと、呼気が外気の冷たさのせいで白く変わり、きらきらと細かく光って空へと立ち上るようにして消えていく。

なんとなく、セルジオがそのまま空を見上げた。

いつもは薄く見える星は今はイルミネーションの光のせいか随分と淡い輝きになってしまっている。

星の光。いつかセルジオがなのは魔法を見て連想して光だった。

「セルジオくん？」

「ん？　　どうかしたか」

そんなセルジオの様子を不思議に思ったのか腕を組んでいるのは小さく首を傾

げた。

「なんとなく、何か考え込んでみたいに見えたから」

「んー、まあ、ちよつとな。なのはと出会ったときのことをな」

「ていうと……、8年前？」

「もうそんなになるかあ」

セルジオが隣にいるのはと、もう記憶の中にしかないちいさなのはとを比べてみる。

栗色の髪と水晶のように澄んだ瞳は変わらないが、スタイルも、髪型も随分変わっている。何よりその関係も、八年前とは大きく変わってしまったている。

「まさか、六つも年下の子と付き合うことになるとはな」

「……そう聞くともしかして私達って結構年の差あるのかな」

「まあたぶんな。俺散々ロリコン呼ばわりされたし」

「う、それはなんかごめんね」

「いいんだよ、それ言われるとしてもお前が好きで一緒に居たいって思ったんだから」

「——そ、そそそ、そっかあ」

さらに、と言われた言葉になのはの顔が赤みを増したが、当のセルジオは空を見上げているせいか全く気づいていない。

しばらくの間腕を組む二人の間に沈黙が訪れた。

「随分と、遠いところまで来たな」

ぼつり、とセルジオが沈黙を破る言葉を漏らした。その言葉になのはの表情がふつとフラットに戻り、そして柔らかいものへと変わった。

「セルジオくんと二人だから来れたと思うな」

「……俺もそう思うよ、なのは」

なのはの言葉をセルジオが薄く笑みを浮かべて肯定すると、またゆつくりと歩き始める。

「ねえ、そう言えばお父さんが今年の年末はセルジオくんも連れてないのかーって、言ってたよ」

「え、俺か?」

「うん。『そろそろ挨拶に来る頃合いじゃないか?』って言ってたよ」

「う、やっぱ末娘に手を出してるんだもん、本腰入れて挨拶には行かなきゃだよな……」

「あ、それか、隊長のところにご挨拶でもいいんじゃないかな」

「ゼストさ——義父ととうさんは、今はいいだろ。そのうちちゃんに行くし」

「まだ呼び方治ってないんだ。私が『お義父さん』って呼ぶまでには治してね」

「ぜ、善処しよう」

イルミネーションの光の中をセルジオとなのはが腕を組んで歩いていく。その後ろ姿は、どこか初々しくも、けれど安心しきったように互いのことを支え合っていた。

「あ、そうだセルジオくん、まだ『アレ』言っていないよ」

「『アレ』……？　ああ、そう言えば朝言っただけだったな」

なのはが春の花のような鮮やかさの笑みをセルジオに向けて、セルジオもまた彼にとつて最大限優しい笑顔をなのはへと向けた。

「メリークリスマス、なのは」

「セルジオくんも、メリークリスマス」

ふ、とセルジオが、なのはがくすつと、小さく笑い声を漏らす。

数多の人工の星から照らされた光に、二人の胸元の揃いの星のネックレスが反射して、きらりと光って揺れていた。

一章 新暦66年 《星と出会う》

桜色の星光

『正義』とは何か。

それは酷くありふれた問いだ。

英雄と呼ばれる男は、『義に背かないこと』と答えるだろう。

地上を守ることを志す男は、『何としても地上を守ること』と答えるだろう。

ある若き執務官は、『法を守り、悲しむ人を減らすこと』と答えるだろう。

そして、地上本部の局員の一人である彼はこう答えた。

『傷つく人を、涙を流す人を、これ以上出さない』

それが彼にとっての、絶対的な、不変的な、引き継ぐべき『正義』だった。



ミッドチルダの首都クラナガンに本拠地を置く管理局地上本部。その一角では、いつもと同じ問答が繰り返されていた。

「ねー、セルジオくん、ここんところの書類仕事手伝ってくれないかなー」

「無理です。俺も忙しいですし。というか、隊長にその案件任されたのクイントさんじゃないですか」

「だってここ最近緊急の案件続きで書類まとめてる時間なんて無かったのよお」

「それは少し同情しますけど……」

「家族のために時間もつくんなきゃいけないしさあ……」

青髪の女性——クイントの「お願い」と手を合わせて頼む姿に、少年——セルジオが困った様に自身のデスクを見る。そこにはクイントの持ち込みとしてある案件と同じくらいの書類が重なっていた。

しかし、クイントに出される家族の話に彼はどうにも弱い傾向があった。セルジオが幾度かクイントとデスクとを見比べて、やがて小さく息を吐いた。

「わかりました。お手伝いしますから」

「え、ホントに？」

「はい。どれを手伝えればいいですか？」

困った様に笑うセルジオに、ぱあと表情を明るくさせるクイント。

「いやー、流石私の弟分！　頼りになる！」

「む、なんか調子いいなあ。別にいいですけど」

「えつとね、この前の……あいたつ！」

ぐつと親指を立てたクイントの頭の上に、突如どでかいファイルが叩き落される。過去数年間にわたる厚みと重みを持ったそれは、ズドン、という紙とは思えない音を立てる。

「なにすんのおメガーヌ！」

「クイント、貴女またセルジオ君に手伝ってもらおうとしてるでしょ」

「ぎくー」

クイントが召喚魔法で送り込まれてきたファイルを判断材料に下手人の方へと振り返る。するとそこには呆れた顔の紫髪の女性がデバイスを片手に立っていた。

「いや貴女ね、いつでもセルジオ君に頼るのはダメよ」

「だからってこのファイルは無いでしょ！　私じゃなかったら首折れてるわよ?!」

「貴女だからいいでしょう、別に」

「メガーヌさん、俺から手伝うって言ったんです。だから、そこまで怒らなくても」

「あのね、セルジオ君」

じろり、とメガーヌの視線がクイントからセルジオへと移る。

「君も君よ。いつつもそうやって誰かの仕事を手伝って。君がこなせなかったらみんな困ることになるのよ?」

「あー、まあ俺こういう仕事だけが取り柄ですし。こんくらいの事務仕事はばっちりって感じですよ」

「君はその地頭の良さが問題よね、ほんと」

「それに」とセルジオが頭を抑えてへたり込んでいるクイントへと目を向ける。

「クイントさんにも、メガーヌさんにも普段からお世話になってますから。出来る限り恩返しはしたいです」

「このー、可愛いこと言ってくれちゃってー。このこのー」

「あいたたた、クイントさん痛いですって! 背中叩かないで! いや、ほんと痛い!」
「あっはっは」

脳味噌ベルカのノリで嬉しそうにバンバンと背中を叩くクイント。それを本気で痛がるセルジオの二人を見ながら、はあとメガーヌがより一層大きなため息をついた。

そんな三人の様子を同じ部隊の職員は「まーたいつもものやつだ」とでも言うように楽しそうに見つめる。

この部隊、地上本部航空魔導隊三課、通称『サード三課』のありふれたそんな日常の一コマだった。

バンバンと背中を叩かれ続けるセルジオがふとデスクに置いてある古びた懐中時計へと目を写して、あ、と小さく声を漏らした。

「すみません、クイントさん。俺このあと少し行くところがあつて、書類、帰ってきてからでもいいですか？」

「……行くところ？」

「はい、人を迎えに駅の方まで」

「もしかして以前隊長に頼んでた新人さんのことかしら？」

「新人？ なんのこと？」

クイントが首を傾げる。

「まだ正式には部隊のみんなには話してないんですが、知り合いの後輩を預かることになつてて」

「あ、それつて時々話してた海のエリート執務官くん？」

「まあ、はい。どうしてもつて言われて断りきれなくて」

セルジオの脳裏に黒髪童顔の少年の姿が浮かんでくる。

ひとつ年下の彼は士官学校の頃のルームメイトである。共に学び高め合い、いくつかの面倒ごとと行動を共にして親友と言える間柄になった。

道は別れてしまったもののセルジオの数少ない心を許した友人だった。

ふむ、とメガーンが顎に手を当ててしばらく考え込む。

「ねえセルジオ君、預かる子のポジションとかわかるかしら？」

「あいつが言うには砲撃魔導師で射撃と空戦が得意らしいです。おそらくセンターガードでしょう」

「遠、中距離の純魔導師タイプが少ない三課としては嬉しい所だけど……」

「三課に、新人を育成している余裕はないわよ？」

「あー、たしかにそうですが、多分実力面なら問題ないと思いますよ？」

新人なのに、実力面は問題ない、と言うおかしな言葉に、思わず二人が眉を寄せる。

訳がわからない、と伝えてくる視線に、セルジオが困った様に頭を書いた。なんと説明したものか、としばらく頭を悩ませていたが、やがてああと小さく声を漏らす。

『『闇の書事件』って知ってますか？』



天を衝く高さの高層ビルが立ち並ぶクラナガンの市街を、茶色の制服のセルジオが一人で歩く。

「あー、バイクで来れば良かったかな……」

セルジオが身にまとう地上本部——通称『陸』の制服は、引き締まる黒の『海』や、白と青のコントラストが美しい『空』の制服と異なりどこか地味な色合いだ。

そのため女子局員からは文句が出ることもあるのだが、現在の陸の上層部はオッサンばかりなのでそんなことに気づくことはないだろう。

「いや、あそこあたりの駐車場高いしな、歩きで良かったな」

別にお金を普段から使うわけではないが無駄遣いしないに越したことはない。

暫く歩き、胸ポケットからカード状のデバイスを取り出してもらっていたメールで場所の確認。

「ここだな。時間も問題ない」

最後に懐中時計で時間を確認、指定されていた喫茶店、指定時間の十分前である事を確認する。そして、気を引き締める様に軽くネクタイを締め直すと扉に手をかける。

軽やかな鈴の音と、「いらっしやいませー」という明るい声に招かれて、軽く会釈しながら店に入る。すると、店内の一席に見知った黒髪を見つめる。

ふ、と思わず笑みを浮かべてしまう。

「よう、クロノ変わりないか？」

「ああおかげさまでな。そういう君も変わりない……いやまた身長が伸びたな？
くつだ」

「確かこの前病院に行った時に、174だったか」

「君はまた勝手に身長を伸ばして……！」

悔しげな色に染まるクロノの童顔に、軽く笑いを返してその対面に腰掛ける。古めかしい椅子はセルジオが腰を落とすとぎしり、と軋む。

セルジオは一先ずメニューに目を通すとコーヒーを注文して、クロノの横で静かに腰掛ける少女へと目をやった。

年の頃は10歳か、下手すれば一桁。自身より幼いのは間違いない。さらりとした手触りの良さそうな茶髪をリボンで二つに結んでいるのが余計幼く見せているのかもしれなかった。

(これが、あの『ナノハ・タカマチ』か……)

あの『闇の書事件』を解決した立役者。幼いながらに既にAAAランク魔導師級の實力を持っているという未来の『一流魔導師』候補。

(こんなに幼いのにな)

セルジオをチラチラと見ながら自身のココアを冷ましている姿は、どこにでもいるよ

うな子供に見えた。

やがて店員がセルジオのコーヒーを運んでくると、クロノが口を開く。

「今日は忙しいところ来てくれてすまなかったな」

「なあに、陸が忙しいのはいつものことだ。気にすることじゃない」

「そうか。そう言ってくれるとありがたい」

「そう真面目くさった顔するなよ、クロノはオフだろ？」

楽に行こうぜ、楽に。神経質

な奴は将来ハゲるぞ」

「う、うるさいっ！　僕はいつだってこういう顔だ！

それに君がズボラなだけだ

ろう。寝癖だっていつつもそのままで……」

「さっすが女子の寝癖までナチュラルに治しちゃうクロノの言葉は違うな」

「え、エイミイのことは関係ないだろう」

「別にリミエツタの名前なんて出してないだろ？」

「い、このっ」

「ぷっ」

にひ、とからかうようなセルジオにクロノが言い返すと、その隣で小さく吹き出すような声が上がった。思わず二人の視線がそこに集まる。

「あ、えと、そのお……クロノ君がそういう風にかかわれるのって、珍しくて、つい……」

「ごめんなさい」

声の主人は、その二房の髪をびよこびよこ揺らしながら小さな声で弁解する。

そんな様子を見てセルジオとクロノが目を合わせる。

「クロノ、紹介してくれ。元から今日はそれが目的なんだしな」

「ああ、君の事からでも？」

首肯だけで返答を返し、ちょうど店員が運んで来てくれたコーヒーを一口。まだ淹れたで舌がひりつくように熱く、驚いたセルジオはそつとカップをソーサーに戻した。

「なのは、彼は『セルジオ・アウディ』。以前話した通り、次に君が配属される部隊で分隊長をやっている男だ。顔がいいから騙されるなよ」

「おい」

クロノはまずなのはの方に向けてセルジオを紹介する。最後にほんの少し棘が混ざったのは先ほどの意趣返しか。

「セルジオ、彼女は『高町なのは』。出身世界は管理外世界だが、本人たつての希望でミッドの方に配属される。迷惑をかけるが、面倒を見てあげてほしい」

「よ、よろしくお願ひします！」

クロノの言葉が終わるとなのは勢いよく頭を下げた。どうやらかなり緊張しているらしいが、なぜなのかはセルジオにはよくわからない。

だからとりあえずクロノに念話を飛ばしてみることにする。

「(なあクロノ、なんでタカマチさんはこんなに緊張している?)」

「(あー、おそらく君に萎縮してるんじゃないのか?)」

「(俺に? お前と一つしか違わないぞ、俺は)」

「(推測だが、僕と違って君のことがかなり年上に見えるんじゃないだろうか)」

「(ああ、お前チビだもんな)」

「(——! いや、今は何もいうまい。いつか見返してやるからな)」

「(はいはい)」

適当にクロノとの念話を切つて未だ頭を下げているのはなるべく優しく声をかける。

「ええと、タカマチさん、取り敢えず顔をあげるといい」

「は、はい」

「俺は、航空魔導隊三課、通称三課サードのセルジオ・アウデイ三等空尉だ」

「高町なのは二等相当空士です。あ、この相当つていうのは正式配属までには無くなる予定です」

「ああ、わかつてるよ。俺も訓練校については理解している」

「そ、そうですよね。失礼しました」

「まあ、そう固くならず、タカマチさんは、サード……いや、航空魔導隊がどういふことをするところか分かってる？」

「は、はい。確か、ミッドチルダで行われる犯罪行為に備えて普段から訓練、有事の時は率先した犯人逮捕、調査をする部隊だって聞いてます」

「ああ、その認識で問題ないよ。でも、俺たち三課はそこにプラスアルファでの仕事も結構多い」

「プラスアルファですか？」

「こてん、と可愛らしくなのはが首をかしげる。

「俺たちの隊は魔導師ランクよりも長年管理局に務めてきた、所謂ベテランが多い。俺みたいに若いのはごく少数だ。どうしてかわかるか？」

「えと、大変な事件に対応するため、ですか？」

「それもあるが、この場合答えは『少数部隊で動くことが多いから』だ」

「ええと、つまりどういう事ですか？」

「セルジオ、なのはが混乱している。結論を言ってあげてくれ」

「悪いな、回りくどい話し方をするのは俺の悪い癖だ」

真面目な様子でセルジオを見つめるのは、少しぬるくなったコーヒーを口に運ぶ。舌に残るような強い苦味が、午前のデスクワークの疲れを少し飛ばしてくれるよう

な気がした。

カップをソーサーに置いて小さく息を吐く。

「俺たちの別名は『後始末部隊』。詰まる所どつか困っているトコに人を派遣して解決するっていう目的もある。忙しさは他の比じゃないが、やれるか？」

セルジオがその薄い翠の瞳をなのはに向けた。すると、なのははしばらく黙りこくっていたが、やがて少し顔を引き締めてこくりと頷いた。

（んー、まだ少し固いな）

なのはの瞳は真剣そのもので、かなり覚悟しているようだった。ガチガチ、そのうちポツキリ折れられでもすればクロノに顔向けできないのはセルジオだ。ここで一つなのは緊張をほぐす必要があった。

「タカマチさん、話は変わるがキャンディーは好きかな？」

「え、あ、はい甘いものは好きですけど」

「それは良かった」

セルジオは薄く笑むと胸ポケットから一つの飴玉を取り出した。それを見て、クロノがああ、アレをやるのかと小さく呟く。

「今から見せるのはちよつとした面白芸だ」

そう言ってセルジオはキャンディーを右手の平に置くと左手でパタンと手を閉じて

しまう。

「この手、開いたらどうなると思う?」

「なくなってる、かな?」

「ほう、よく分かったな大したものだ。さてさて、では今のキャンディーはどこにやったかな」

少し芝居掛かった口調でセルジオが自身の金髪をかくと、少し驚いたような表情を浮かべる。

「おつとこんなところに」

「え?」

セルジオが手を引き抜くとそこには先ほどのキャンディーが。それを見てなのはが驚いたように目を開く。

「ほらクロノ」

「突然飴を投げるな」

軽く放られたものをクロノが片手で受け取る。

「じゃ、次はタカマチさん、その机の上の手をゆーっくり開いてもらえるか?」

「手を、ですか?」

ああ、と頷くと、なのはは訝しげな表情をしながらゆっくりと手を開くと、そのなか

ら先ほどクロノが受け取ったはずのキャンディーが現れる。

「ええっ?! ま、魔法ですよね? で、でもどうやってやったんですか今の!」

「It^内s a^緒 secret^だよ」

「ず、ずるい!」

以前、士官学校に通っていたころ仲間内で一発芸大会を開いたときに考えたものだったのだが、今でもこうして時々役立つしてくれる。特にクイントの娘なんかにはバカウケである。

(本当に、普通の女の子に見えるな)

不思議そうに手のひらを見つめて首をかしげるなのは。そんな姿にセルジオの中でなのは疑う気持ちが芽生えてしまう。

噂では『ナノハ・タカマチ』は管理外世界が生んだ突然変異種。犯罪者には容赦なく砲撃を叩き込み、自身を悪魔であるとまで自称したと言う魔導師だ。

そんな噂これっぽっちも信じてなくても、イメージとの違いに少し拍子抜けする気持ちがないわけでもない。

(まあそれはこれから確かめていけばいいか)

もし噂ほどの実力がなくとも俺が鍛えていけばいいんだし、と結論つけて再びなのはへと向き直る。

そして、可能な限り優しい笑みを浮かべてみせる。

「タカマチさん、しばらくの間よろしく」

「こ、こちらこそお世話になります」

セルジオが片手を差し出すと、なのはの方もおさおすと手を差し出す。

そして、二人の手が重なるうとして、あたりに爆音が響いた。

瞬時にクロノとセルジオが立ち上がり、窓の向こう、音の発生源へと視線を向けた。するとそこには、もうもうと煙をあげる自動車の向こうに拳銃型のデバイスを片手に、女性を人質に取った男の姿があった。

「どう言う状況かわかるか？」

「さあな。でも右肩にポストンバックがある。近くに金も落ちてるし、大方銀行強盗して逃げきれなくなつて人質をとつた、とかそんなところだろ」

「クラナガンも治安が悪くなったものだな」

「今のここじや時々あることだよ」

悔しげなクロノの声を聞きながら、セルジオが胸ポケットから銀色のカードを取り出した。そして、そのまま素早く起動してバリアジャケットを纏うと、三課の本部へと通信を繋いだ。

「はい、アウディです……はい……そうです偶然近くに……わかりました。そち

らで対応部隊への連絡をお願いします………了解です」

通信を切ると、窓の向こうで未だ人質を取った違法魔導師と駆けつけた局員が睨み合っていることを確認する。

(跳ぶなら、あそこの信号機で一旦足をつけて、後は加速するのがベストか)

カードを軽く振って一瞬のうちで槍として変形させる。

「あの、どうするつもりなんですか？」

「見たらわかるだろう。仕事をするんだ」

「一人でですか？」

「いつものことだよ」

「なら私も行きます。一人なんて危険です」

「駄目だ」

「な、なんでっ」

「タカマチさんはまだ正式には陸の所属じゃない。そんな状態で現場に出れば混乱が生じる。そういう面ではクロノも同じだな」

「だからって、人を助けなくていい理由には、ならない、と思います」

「だから俺が行くんだ。俺は、俺なら助けられる立場にあるから」

セルジオの薄い翠の瞳がなのはを見つめる。その奥には先程までの優しげなものは

鳴りを潜め、ただただ凧いだ意思がただけだ。なのはが黙り込んだのを見て、セルジオはそれ以上何も語ることなく槍を構えた。

「さて——」

すう、と切り替えるように大きく息を吸って、吐いた。そして、頭の中で並列思考マルチタスクを作り出すと、片方に加速魔法、もう片方で座標演算を始める。

「——行くか」

短距離転移。ショートシフト

心の中でだけそう呟いて魔法式を発動させる。すると、魔力を起爆剤とした転移が起動して、瞬時にセルジオの体を犯罪者と先ほどの喫茶店の中間の信号機ほどまで跳ばした。

軽く足を信号機へとつける。

ブリッツアクション
「加速機動」

起動句と共にマルチタスクで演算しておいて待機状態だったブリッツアクションを発動させ、瞬時に距離を詰めて行く。

転移に半秒、道路へと着地して一秒、そして犯人と人質を槍の射程範囲に捉えるまで一秒。三秒に満たない時間で一気にセルジオが犯人へと肉薄する。セルジオが両手で槍を握り体を沈み込ませながら強く踏み込んだ。

「な、魔導、師」

そこでようやく犯人が自身を襲う存在に気がついたが、もう間に合うはずもない。

「くそ、喰ら——」

「遅い」

電光一閃。

槍に反射した光が一瞬光ったことしかわからない刹那。振われた槍は瞬時に犯人の男の手の中からデバイスを弾き飛ばした。

男の顔にあからさまな驚きの表情が浮かぶ。セルジオはその一瞬を見逃さず、片手の捻りで槍を翻すと石突きの部分で男の肩をしたたかに叩いた。男の捕縛する手が緩み、人質が自由になる。女性の体が路上に倒れこむ。

「うぐつ、クソツ！　人質を」

その一瞬でセルジオが人質を解放し、もう一発留めを叩き込もうとして、男の腰のホルスターに隠すようにしてもう一つデバイスがさげられているのを見た。

（「いつ、二丁拳銃……」）

男の空いた手がホルスターに向かい、デバイスが引き抜かれる。その銃口は、傍にいる人質だった女性。

（不味いつ！）

「食らえやつー！」

「ブリッツアクションッ！」

瞬時に体が加速し飛行魔法を併用した高速移動で人質を救出、一気に戦線まで離脱するべく全力で跳ぶ。と、この辺りで、背後で銃撃が行われる……というのがセルジオの予想だった。

（爆発音が、ない？）

だが、いくら待っても男がするはずの銃撃音がない。そして、思わず犯人がいるはずの背後を振り返り、絶句した。

桜色の流星が走ったのだ。

太い一条の流星は、同色の弾丸に弾かれた手を抑える男を飲み込み、そして瞬時に晴れる。

「桜色の、砲撃……」

女性を抱きかかえて、着地したセルジオがポツリと呟いて、光の源へと視線をやった。

そこには、先程までセルジオのいた喫茶店の開け放った窓から杖を構えている幼い少女。その少女は、心底ホツとしたように小さく息を吐いていた。

（まさか、あの距離から直射弾で犯人のデバイスを狙い撃って間髪入れずに砲撃を撃つたっていうのか……）

だとしたら恐ろしい。あんな年端もいかない子供が、ベテラン魔導師ですらできるか怪しいことを軽くやってのけたのだ。ここまでされたらもう疑う気力も湧いてこない。クロノの言葉は間違いがなかった。

「タカマチ・ナノハ……」

なんとなく、その名前とは、長い付き合いになるような気がしていた。

これは、少年と少女が出会い、そしてForce Detonator^カ_の^源を見つける物語。

ただ、それだけの、残酷で、だからこそどこまでも美しい、そんな物語。

二人になる日

「お前正気か？」

「何がだ、セルジオ」

「タカマチさんの事だ！ あんなのを手放すとか海は正気か？」

なのはを地球の転移ゲートへと送っていた帰り、人目のないところに行くのももどかしくセルジオがクロノを問い詰めた。

「少し、落ち着くんだ、セルジオ」

「……悪い、ちよつと驚きすぎて」

「それも無理ないだろう。僕だって初めて見たときは夢じゃないかと疑ったものさ」

クロノが近くの自販機で缶コーヒーを買って片方をセルジオに放り投げた。

「ここじゃ人目がある。少し歩きながら話そう」

そう言つてクロノが歩き出したのでセルジオはそれ以上は問い詰めずその後を追いかける。

しばらく歩いて二人は街外れの公園で腰掛けた。時刻はもう夕方近く。あたりは閑散としており、普通なら遊んでいる子供もすでに帰り始める時間である。

「始まりは『闇の書事件』が終わってからの『陸』の介入だった」

かしゆ、と小気味のいい音ともにプルタブが開く。しかし、クロノは口をつける事なくそのまま缶の中のコーヒーを見つめている。

『陸』の一隊員であるセルジオには知る権限は与えられていないが、『P・T事件』と『闇の書事件』その僅か一年足らずの間で管理局は非常に優秀な魔導師を入局させることができている。

クロノの義妹となる予定の『フェイト・テスタロツサ』、夜天の書最後の主『八神はやて』とその騎士『ヴォルケンリッター』。そして、未来のストライカー、『高町なのは』。どれも若く、才能に溢れた優秀な魔導師だった。

順当に行けば管理外世界出身であるし、『次元航行部隊』つまり、『海』に所属するのが普通だ。

だが、それを快く思わなかった人間もいた。言わずもがな、地上本部の面々である。

『陸』の要求は至ってシンプル。『多くは望まないから一人ぐらい高ランク魔導師を寄せ』、というものだった」

「ほんとにシンプルだな。それでいて滅茶苦茶だ」

「ああ全くだな」

「でも『海』は呑んだ。どうしてだ？」

クロノが手にした缶コーヒーを見つめたまま自嘲気味に笑み浮かべた。いつも毅然とした態度を崩さない執務官としては非常に珍しい表情。

「僕みたいな末端までは伝わらないが、察せることもある。あの指示の感じは、恐らく裏で何かが行われたんだろう」

「金、か？ いや、資金不足の陸が海へ払えるものなんてたかが知れてるか」

「そうだな、あるに越したことはないが金程度では恐らく海は動かないだろうさ」
「……まさか、もつと上からの指令ってことか？」

クロノは何も言わない。ただ黙って缶コーヒーをすするだけだ。一口口をつけて、クロノが何か面白いものでも思い出しかのように薄く笑んだ。

「君好みのいいぬるさのコーヒーだぞ」

「くだらねえこと、言っつてんじやねえよ」

クロノは一気に残りのコーヒーを呷ると空になった缶を遠くにあるゴミ箱の方へと放った。くるくると回る空き缶が放物線を描きながら飛んでいく。

その空き缶の行き先をそれ以上見ることなく、クロノは立ち上がって立ち去って行く。

「君になのはを任せるよ。君なら、僕の友人を任せられる」

「ああ、全力を尽くす」

セルジオが真剣な面持ちで頷くと、クロノが安心したように頬を綻ばせた。そして、去り際に軽く胸を叩いていく。

「頼りにしてるよ、親友」

その言葉と重なるように、からん、と遠くの方で空き缶がゴミ箱の中で跳ねた。



ちら、と所々色が剥がれた懐中時計で時間を確認して周囲を見渡す。

「十分前、か。そろそろ来るかもな」

場所は地上本部のロビー。セルジオは茶色の地上本部の制服を身に纏い、なんとなく自身の薄めの金髪をかいた。一応きちんと寝癖は直しているつもりだが、彼は度々知り

合いから寝癖を指摘されていたりする。

(別に三課ならいいけど、ここで上官にあつたりしたら事だしな)

割とメンバーが絞られた少数精鋭のきらいがある三課ならば笑い話で済むが、これが二課や一課の隊員となるとそうもいかない。ただでさえ好かれていないのに、余計に陰口を叩かれてしまう。

「す、すみませーん」

そんなことをしながらぼんやり待っていると、見覚えのあるツイントールが揺れながら近づいて来るのが見えた。

「お待たせしちやいましたか？」

「いいや、時間の八分前だ。問題はないよ」

セルジオがにこりと笑ってみせると、ロビーにいる他の局員と同じような制服に身を包んだ高町なのはは安心してのように息を吐いた。

その息は随分と荒く、年相応の柔らかかそうな頬も赤く上気していて、どうやら疲れているようだった。

「随分疲れているが、どうかしたのか？」

「あの、実は道に迷ってしまって。途中人に道を聞いたんですけど、皆さん三課の隊舎はわからないって言うばかりで」

「ああ、成る程。それは災難だったな。あとできちんとあたりを案内しよう」
「ご迷惑かけます」

「何、配属された以上、最低でも一年の付き合いだ。そう気負わなくていいさ」
「じゃ、こつちだ」と言つてセルジオがなのはを先導する。170半ばのセルジオと140ないなのはが並んで歩く姿は下手すれば事案ものだが、管理局の制服がその印象を打ち消している。

「あの、アウディ三尉、質問してもいいですか？」

「どうしたタカマチ二士？」

「三課ってどんな感じの魔導師さんが居るんですか？ 私、あんまり他の人と連携とかしたことなくつて」

見上げるようにして見つめて来るのはに、セルジオがふむと少しばかり考え込む。

「ウチは部隊長がベルカの魔法適性がある人でな、そのせいか全体的にフロントアタッカー……つまり前衛が多めの傾向がある。タカマチ二士のような後衛は少なめだな」

「へえー、隊長さんベルカ式の使い手なんですね」

「ああ。口数は少ないし、不器用だけど、今地上での『ストライカー』はあの人と他に何人かしかいないんだ。寡黙な武人っていうイメージしやすいかな」

「凄い人なんですね」

「そうだ、凄い。本当にすごい人なんだ」

(その隊長さんのこと尊敬してるんだなあ)

なのはの言葉をセルジオが得意そうに肯定するのに、なんとなくなのはの中で以前教科書で見た織田信長を敵つくしたような人が現れる。

「因みにアウディ三尉はどういったポジションなんですか？」

「俺？　まあ俺は割と何でもやるかな。射撃は苦手だけど、近接と砲撃はそこそこ得意だしな」

へー、と興味深そうに声をあげたなのはが、そこでハツとしたような立ち止まった。不思議そうにセルジオがなのはの顔を覗き込むが、なのはは立ち止まったままだ。

「タカマチ二士？」

「あの、もしかして、三課って男の人ばかりだったり……？」

突如浮上してきたなのはの不安。

今までなのはどちらかというところと女所帯の、女子の比率が高めの職場だったが、それはただ偶然が重なっていただけだ。クロノや魔法の師であるユーノのような少年ならともかく、三課は打って変わって男の人ばかりかも……と思ったのだ。

不安そうに、上目遣いで見つめてくるなのはを、セルジオは愉快そうに笑い飛ばす。

「ははは、そんな事はないよ。男女比は半々くらいだな。さすがにタカマチ二士のように

な若い人はいないが、頼りになる人たちはいるよ」

「そ、そうですかー、よかったですー」

ほっとしたのかなのは再びセルジオの背中を追いかけて歩き始める。その安心しきった様子に、少年の中の悪戯心が首をもたげる。

「でも、タカマチ二士は見た目が可愛いからな、他の人たちにはめちやくちやに可愛がられるかもな」

「え、ええっ！　な、なのはなんて全然ですよ。フェイトちゃんの方が目もぱっちりしててすごく可愛くて……」

「フェイトちゃん？」

「あ、えーと、私の大切なお友達です。すっごく優しく可愛いです」

「ふむ、俺にはタカマチ二士の友達がどれほど可愛いかはわからないけど、タカマチ二士も十分可愛いと思うぞ」

「そ、そんなことないですって」

「いいや、可愛いぞ。自己評価が低いのは良くない」

「え、えーとそのお……」

「俺がもつと若ければ積極的にアプローチを仕掛けていたところだな、うん」

「もしかしてなのはのことからかってますか？」

「バレたか？」

最初の方はセルジオの言葉に頬を赤くして困っていたのはだったが、やがて自身を見つめる表情が以前クロノに向けていたものに近いことに気がつく。

なのはの問いかけにおどけたように笑うセルジオに、軽く頬を膨らませてなのはが不満を表すが、ただ可愛らしいだけで怖くとも何ともなかった。

「まあ、そう怒らないでほしいなタカマチ二士。緊張は解けたる？」

「あ、確かに。で、でもからかった事とそれは別ですっ」

「あはは、そいつは手厳しいな」

セルジオが困った様に笑いながら、足を止めてなのはに向き直った。その様子になのはも隊舎についたのだということを理解して立ち止まる。

「さて、ここが三課の隊舎になるが、中に入る前にタカマチ二士には気にかけてほしいことがある」

セルジオが薄い翠の目の中に、少し不安そうに両手を組むなのはの姿が映る。

「三課にはベテラン魔導師が多い。みんないい人だが、もしかしたら中にはタカマチ二士に辛く当たる人もいるかもしれない」

「……はい」

「それに時期外れの新人だ。最初から溶け込むのは難しいかもしれないが、俺も手助け

するから頑張つてくれ」

「はいっ」

「よし、じゃ扉を開けるぞ」

「はい、お願いしますっ!」

ぐつと気合いを入れるなのはの姿を背後に、三課の扉をゆつくりと開けて中に入ろうとして——色とりどりの紙吹雪が炸裂した。

「ごはあつ!」

「あ、アウディ三尉——!」

紙とは思えない勢いで炸裂した一撃にセルジオの体が吹き飛んでいく。

「クイントさんバズーカ早い!　今のはただのセルジオです!」

「え、嘘、何よ邪魔くさいセルジオくんねー。普通こういうの新人から中に入れるでしよ」

「いや女の子を身を呈して守った彼はある意味勇者なのでは……?」

「あれは完璧に偶然にみえたなー、ボクは」

「やはり奴には天性の女たらしの才がありおるわ……俺の目に間違いはなかった。俺童貞だけど」

「うわー、信頼できないわねー」

「アウディ三尉、アウディ三尉、大丈夫ですか？」

「ぐ、だ、大丈夫だタカマチ二士。心配ありがとう」

必死になのはが体を揺ると、体に無数の髪テープを巻きつけながらよろよろとセルジオが立ち上がる。そして、猛然と三課の中の面々に掴みかかりにいった。

「何してくれやがるんですかつ！」

「おいセルジオが乱心だ！」

「若さゆえの過ちだ！」

「うう、ついうちのセルジオにも反抗期が……」

「うるさいですよ！　　というか何ですか今の質量兵器は！」

管理局法に引っかけ

ますよ！」

「いやこれただの紙だしいいかなーって」

「人が軽く飛んだんですよ?!　　あんなのタカマチ二士が食らってたら普通に死んでま

したよ！」

「まあまあ、セルジオくんが食らったなら別に良かったじゃないの」

「そんなボールは友達、だから友達の君は蹴るものさ！」

とでも言うレベルの暴論を

俺が認めるはず無いでしょう！」

ほかーん、となのはが扉の向こうの光景を見つめる。

そこには巨大なバズーカ（らしきもの）を肩に乗せてセルジオと言いかう青髪の女性と、職員らしき男女十数名。どの人も手の中に紙テープを持ち、壁の向こうには『ようこそ三課へ！ 高町なのはさん！』と書いた垂れ幕が貼ってあった。

なのはが見る限り、嫌そうな顔をしている人など一人もない。

「はっ」

あまりのセルジオの物言いとの違いに思わず笑いをこらえきれず吹き出してしまふ。

想像よりも数倍温かな雰囲気、なのはは「ここなら楽しくやっていけそうだ」と肩の力を抜いた。

しばらくして外回りから帰ってきたメガースに漏れなくクイント率いる紙吹雪組は雷が落ちることになるのだが、今は誰も知る由もない。



しばらくして、紙吹雪の片付けが終わり三課が平常運行になってから、なのはは三課

のメンバーの紹介を受けていた。

「タカマチ二士、こちらクイント・ナカジマ陸曹長。近代ベルカ式の使い手で、三課きつてのフロントアタッカーだよ」

「よろしくね、なのはちゃん！ 後衛として頼りにしてるわ！」

「よ、よろしくお願いします、ナカジマ曹長」

「ノンノン、私のことはクイントでいいわ。そのかわり私もなのはちゃんって呼ばせてもらうから、ね？」

「は、はい。お願いしますクイントさん」

クイントは自分の娘とさして違いのないような身長なのはと腰を折って目線を合わせてにつこりと笑う。

紫に近い青い髪。ツリ目がちな目は凛々しさと、笑った時のギャップを大きくしている。

なのはがその笑顔を見て、明るい人だなあ、なんとなくお姉ちゃんに似てるかも、という感想を抱く。

「そして、こちらがメガーヌ・アルピーノ三等陸尉。魔法式はミッドだけど、召喚魔法って言う少し珍しい魔法を行使する人だ。頼りになる人だから困ったら相談してみるといい」

「私のこともメガガーヌって呼んで頂戴？　おんなじ後衛だし仲良くしてね」

「こちらこそお世話になりますメガガーヌさん」

ぺこり、と礼儀正しく頭をさげるなのはメガガーヌは可愛い妹にでもするかのよう
に優しい手つきで頭を撫でる。

濃い紫の髪をロングに伸ばしたメガガーヌは、クイントが「動」のイメージを与える美人なのに対して、「静」の美しさをもっていた。

この人はなんだか大人っぽくて、お兄ちゃんの彼女さんみたいだという感想がなの
の中に浮かんできた。

「と、まあ三課の主要なメンバーはこんな感じだな。他にも何人か外回りに行つてい
るが、それはまた後日にしよう」

「は、はい！」

「じゃあ次は部隊長に挨拶に行こうか」
「わかりました」

最後になのがクイントとメガガーヌの二人に頭を下げて、セルジオの後をトコトコと
ついていく。

その後ろ姿を見ながら、クイントが隣のメガガーヌにだけ聞こえる大きさのため息をつ
いた。それは、いつも朗らかな笑みを絶やさないクイントにしては珍しくネガティブな

雰囲気を感じていた。

「あんな小さい子でも戦わなきゃいけないのね。この世界は」

ポツリ、と寂しそうに呟くクイント。メガヌも心の中ではその言葉に同意しながらも、特に何もいうことなく、クイントの肩を軽く叩いて「仕事に戻りましょ」と声をかけた。

セルジオは三課内の廊下をしばらく歩いて、少し古びた扉の前で足を止める。そこには『部隊長執務室』という札がかかっている。

なのはがごくり、と生唾を飲み込む。

「隊長、入りますよ」

セルジオが軽くノックをしながら声をかけると、扉越しのくぐもった男の低い声が帰ってくる。

「開けるぞ、タカマチ二士」

「は、はいっ」

「そんな緊張しなくていいって」

またもや肩に力を入れているのはの背中を苦笑いと共に軽く叩くと、ゆっくりと扉を開いた。

ぱんっ！

「へ？」

「え？」

今度は並んで入った二人を小さな破裂音と紙吹雪が迎えた。だだっ広い執務室の中でひらひらと色鮮やかな紙片が舞い散っていく。

「……何してんすか、ゼスト隊長」

「歓迎だ」

「いや、そりや見たらわかりますけど……」

「親しみは持てたか？」

「ははーん、さてはクイントさんの入れ知恵ですね」

「ああ」

肩に紙片をつけた金髪の少年が目の前でクラッカーを構える筋肉質な男を半目でじろりと見つめる。だが、男は特に動じた様子もなく、頭にクラッカーのゴミをつけたままのなのはへと向き直る。

「君がタカマチ・ナノハ二等陸士だな。私はゼスト・グランガイツ。この部隊の長を務めている」

「た、高町なのは二等陸士です！」

「そこまでかしこまらなくてもいい。所詮、槍を振るしか能のない男だ」

思わずビシッと敬礼をしたなのはゼストが軽く手を振った。

「タカマチ二等陸士、三課は苦勞サドすることも多いが、共にミッドチルダのために励もう」
「は、はいっ！　よろしく願いますゼスト隊長っ」

なのはがゼストの膝について差し出してきたがっしりとした手と握手を交わす。

茶髪に近い黒髪。身長はセルジオよりもわずかに大きいだけだが、筋肉がみっちり詰まっているかのように体格がいい。

表情は先程からほとんど変わらず、低い声も相まって非常に威圧感がある。あるのだが……

（なんだか、そんなに怖くない？）

初めてセルジオと出会った時よりもゼストは怖くなかった。先ほどのクラッカーのやり取りを見てしまったからか、なんだかズレた印象が先行してしまって怖い、と感じるところまで行かないのだ。

クイントのクラッカー作戦は案外成功していたりするのもかもしれない。

少し緊張が緩んだなのはゼストが目線を合わせたまま問いかける。

「タカマチ二等陸士は三課が基本的に二人一組ツーマンセルで行動する事を知っているか」

「一応、事前にアウディ三尉からの説明を受けました」

「なら都合がいい」

こくりと頷くとゼストが立ち上がってセルジオとなのは二人に向き直った。

「セルジオ・アウデイ三等空尉、タカマチ・ナノハ二等陸士、兩名本日付で二人ツーマンセル一組とする」

え、と二人の声が重なった。

「タカマチ二士と、俺がですか？」

「ああ、ちょうど今お前は相棒がいなかっただろう」

「で、ですけど俺は三課で数少ない後衛を……」

「元はお前が頼みこんできた事だ。しっかりと最後まで面倒を見る」

「……了解」

驚いたように目を見開き反論するセルジオだったが、ゼストの言葉に黙り困らざるを得なくなる。

「そ、そのなのは……私でいいんでしょうか」

「問題ない。セルジオにしっかりと指導を受けるといい」

「わかりました……」

心配そうなのははちらりと横を伺ってすぐに目をそらした。全く予想していなかった、とは言わないがそれでもいざ本場にセルジオとコンビを組むとなると色々緊張

することもあった。

「じゃあ、失礼します」

その後、しばらくゼストから部隊の説明を受けたのはセルジオに連れられて部隊長室を後にした。

「なんとというか、困ったな……」

たはは、と何かを誤魔化すようにセルジオが頭をかきながら笑う。

セルジオとしては、なのはのコンビはおそらく前衛の、それも女性の誰か、彼個人の予想としてはクイント辺りと組むことになると思っていた。

その方が組み合わせもいいだろうし、なのはだつて安心して仕事ができると思っていた。

しかし、蓋を開けてみればなのはのコンビにはセルジオが指名された。

もちろん、ゼストにはゼストの考えがあつてこそだというのは理解しているが、クロノと約束した事もありなるべく働きやすい職場を提供したかった。

だが、決まってしまったものは仕方ない。

セルジオがなのはに向き直ると、緊張した面持ちのなのはが顔を上げる。

「今日から俺たちはコンビになった。タカマチ二士としては納得できない面もあるかもしれないが、そこは飲み込んで欲しい」

「いえ、そんな事ないです！　なんとというか、その……よろしくお願いします！」

「ああ、こちらこそよろしくタカマチ二士……というのも他人行儀だな。コンビなんだし、これからはタカマチと呼ばせてもらうが構わないか？」

「あ、タカマチ、ですか……」

「——？　ダメだったか？」

「あ、いやいやダメじゃないんですが、その、発音がちよつと違って……」

「発音？」

はい、となのはが頷いた。

「なのはの名前は話しくいのははわかってるんですけど、出来ればちゃんと『高町』って呼んでもらえると嬉しいですよ」

「タカマチ……タカ、町、た、かまち……高マチ……高町、ん、『高町』。これでいいか？」

「はい、バツチリです」

「そうか、高町か。うん、じゃあ、高町も俺の事を好きに呼ぶといい」

「わ、私もですかっ？」

「ああ、コンビなんだから当たり前だろう」

なのははしばらく「ええと」とか「でもお」とか口の中で声にならない声を出していたが、やがて指を付き合わせて考え込み始める。

「アウデイくん、いやセルジオさん、ここはあえてセルジオくん……いや、それは流石に無理……」

「——？ 俺は特に呼び方にこだわりは無いから好きに呼んでもらって構わないぞ」

「じゃ、じゃあセルジオく……」

「——？」

「アウデイさんでお願いします……」

なのははしばらく悩んだあげく、上目遣いでセルジオを見上げながら名前を呼ぼうとして、相手の翠の瞳の中の自分に恥ずかしさを感じてしまう。

そして結局一番無難な呼び方に落ち着いたようだった。

「ほい」

「あの、これは？」

「今日何度もしたろ？ 握手だよ、あの日できなかつたしな」

柔らかな笑みとともに差し出された手をなのはが不思議そうに見る。

あの日、初めて高町なのはとセルジオ・アウデイが出会った日。二人が握手を交わす直前で一悶着が起きたため結局しないままだった。

「これからいろいろあると思うが、頼りにしてるよ高町」

「（ちら）そよろしくお願いします、アウデイさん」

おずおずとなのはが自分のものよりも一回り大きい掌へと手を伸ばし、二人の間で強い握手が交わされた。

三課流の語り方

なのはが三課に配属されて一週間。それはつまりセルジオとコンビを組んでそれだけの時間が経ったということだった。

基本的になのははまだ十歳の学生。普段は学校に行き、放課後になって転移ゲートからミッドチルダに来る、というスタンスになっている。

もちろんやろうと思えば学校を休んで朝から、ということもできるし、なのはも配属された以上は毎日とは言わずとも平日は週に二日、最低でも一日は朝から出勤したいと考えている。

しかし、その旨を三課の面々に相談したところ。

セルジオにはきつぱりと。

「いや、学校には行くべきだ。有事の際ならともかく高町は高町の生活を崩すべきじゃない」

クイントは言い聞かせるように。

「なのはちゃんの十歳は今しかないんだしお友達との時間を大切にすべきよ」

メガーヌは諭すように。

「仕事のことを気にしているのなら大丈夫よ。なのはちちゃんはよく頑張ってる。休日と放課後だけでも立派にやってるわ」

ゼストは一言。

「心配はない」

と言われてしまった。

本当は新人といえどなのはに仕事がないわけではないのだが、その殆ど内緒でセルジオが片付けてしまっているのだからのは負担は殆ど無いのだ。

まあ、その分セルジオに仕事を手伝ってもらえず涙目で書類をまとめるクイントの姿があるのだが今は些事だろう。

では、今高町なのはが何をしているのかと言うと。

「つまり、基本的に管理局のフォーマーセッションに使われる名称は、
フルバック
後衛、そしてあと一つは？」
フロントアタッカー
前衛、遊撃手、

「私が引き受けることになる中衛、センターガードだよね」

「はい正解です」

座学、であった。

会議室の一室を借りてホワイトボードを使って説明をするセルジオと、メモを取りながら聞くのは。

どちらも真剣そのもので、今はコンビ、というより家庭教師と生徒といった雰囲気が出ている。

一通りなのはへの講義を終えるとふう、とセルジオが息をついた。

「高町は本当に優秀だな。流石、訓練校を半年で卒業しただけはある」

「にやはは、先生が優秀だったんです」

そして照れたように笑った。

なのはは陸士訓練校と呼ばれる管理局附属の学校で半年の間訓練を受けている。そこさえ卒業していれば局員はある程度戦力として使えるのだが、いかんせんなのはその期間が短い。それは優秀であることの証左なのだが、その分講義の時間が短いためこうした基本知識が身についているか心配だったのだが、どうやら問題ないようだった。

「取り敢えずここまで確認できれば、高町を前線に出すのに心配はないんだけど、一応互いの使用魔法くらいは確認しておこうか」

そう言ってセルジオはペンを置く。

「俺の魔法適性はミッドチルダ式。ベルカ式の適性はゼロだ。ああ、後魔力保有量はB十。高町みたいなAAAなんて夢のまた夢だな」

リンカーコアの性能指し示す魔力保有量。これが多ければ多いほど豊潤な魔力を持ち、レベルの高い魔法などが使えたりする。一概にこの数値が高ければいいというもの

ではないが、高いに越したことはないものである。

管理局員の魔力保有量の平均はBという発表があつているため、セルジオは平均の範囲内と言えた。

「基本的には槍型のアームドデバイスを使って戦うことがメインかな。収束砲撃もそこそこ得意だ。遠距離をやるときは威力を絞った砲撃を使い分ける感じだ」

ただ、と指を一本立ててみせる。

「俺は魔力の固形化が死ぬほど苦手だな。射撃、シールド、バインドといった類が一切できない。魔力刃は作れるが……それだけだ」

「し、シールドも？　じゃあどうやってフロントアタッカーの仕事をこなしてるんですか？　射撃魔法とか撃たれたりしたら」

「あー、そこは見切りだな。撃たれる方向を予測、槍で斬りはらうか受け流すって感じだな」

「そ、そんなことできるんですか……」

「そこは慣れというやつだ。無駄にクイントさんや隊長にしごかれてないさ」

これは見てももらわないとわからないかな、といつて肩をすくめてみせるセルジオ。

なのは彼が槍を振るうのを遠目にしか見たことがないため、はつきりとは言えないが、ずいぶん鮮やかな腕前だったような気もしていた。

フェイトといいセルジオといいミッドチルダ式には、ベルカ式と対等に殴り合えそうな魔導師が多すぎるような気がしていた。

「なのはは砲撃と飛行と射撃とシールド系が得意です。加速魔法も使えない事も無いですけれど、レイジングハートの助けがないならあんまり使いたくはないかもですね」

「レイジングハート?」

「そういえば紹介してませんでした。いま紹介しますね」

いうなり、なのはがぐいっと制服の襟首を引つ張つてその中に手を突っ込んだ。

思わずセルジオがぎよつとして慌てて目をそらした。六つも年下の相手に何かを感じたりすることは無いが、それでもびびくりすることはびびくりするのだ。

セルジオの動揺など気づいた様子もなくなのはが胸元から真つ赤な宝石の様なペンダントを取り出した。

「ああ、デバイスのことか」

「はい。私の魔法の先生から貰ったものなんです。レイジングハート、起きて」

なのはが手の中の赤い宝石——レイジングハートに声をかけると、電子音声を流しながら桜色の光を明滅させる。

『Hello, my master. How goes it?』

「うん、大丈夫だよ」

「インテリジェント……もしかしてこの前使ってたあの杖型のやつか？」

「はいっ。今は一応、射撃特化、砲撃特化、フルドライブの三形態を使い分けて戦ってる感じですよ」

「なるほど。なら俺たちが一緒に戦うときは完璧に高町に後衛を任せの方が良さそう
だ」

「そうですね……あ、でもフルドライブの時はA・C・Sを使ったりできますよ！」

「A・C・S? ああ、Accelerate Charge System 収束加速砲撃機構だな。結構物騒な魔法使うんだな、

高町は。悪魔云々もあながち嘘じゃないってことか」

「あ、悪魔っ!？」

最後の方は呟くような言葉だったのだがどうやらなのはには聞こえてしまったようで、目を見開いて詰め寄った。

確かにヴィータには悪魔めと言われたことのあるのはだが、まだ幼い女の子を捕まえて悪魔などと看過できるものではなかった。

「今のどういうことですかっ」

「どうたって、そういう噂が流れてる、としかかな……」

「た、例えばどんな噂が流れてるんですか?」

「んー、色々あるが『自分は悪魔だと自称した』とか、『闇の書と市街地を滅ぼしながら

殴り合った』とか、『高町なのはの幼い姿は仮の姿で本当は180の巨漢だ』とか、『次元航行船を砲撃で撃ち落とした』とか、『アルカンシエルと砲撃で拮抗した』とか……」

「うーそーでーすー！　　ぜーんぶ、嘘ですっ！」

『犯罪者に向けてバインドで動きを封じてトラウマレベルの収束砲撃を撃つ砲撃魔』とかもあつたけど」

「……それも嘘です」

へえ、最後の言葉にだけほんの一瞬頬がひくついたのをセルジオが鍛え上げた観察眼で察知する。

「そーなのか、レイジングハートさん？」

『Most are completely lies』

「レイジングハート……」

『but only the last word is true』

「レイジングハートお！」

一瞬感動したようにレイジングハートの名を呼んだのはだったが、愛機の意図せぬ裏切りに涙声で叫んだ。

「へー、レイジングハートさん、それってなんか証拠とかあつたりする？」

『There is evidence here……』

「わーわー、もういいからー、レイジングハートやめてー!」

「まーまー、いいじゃないか高町。これもコンビの仲を深めるためだよ、うん」

「こんな形で深まる絆なんていらないうっ」

なのはからレイジングハートをかつさらったセルジオになのはがしがみついて必死に取り返そうとする。が、悲しいかな、身長140足らずのなのはではどんなに頑張ってもセルジオの手には届きそうにもなかった。

「返してくださいー!」

「はっはっは、魔法なしで取り返してみるといい。それも楽しいんじゃないか」

「もー!」

(あれ、これ完璧に事案じゃないか?)

幼女をしがみつかせて笑う十六歳男子。往来でやれば取り敢えず局員を呼ばれる光景だろう。

よし、そろそろやめよう、そうセルジオが心に決めた瞬間会議室の扉が大きく開け放たれた。

「何やってるの、君たち」

(あ、死んだ)

現れたのはクイント・ナカジマ。ストライクアーツの有段者の、三課きつての実力者

でセルジオにいつも稽古をつけてくれる方である。

「まあよくわからないけど」

慌ててセルジオがなのはを地面におろして距離を取らせた瞬間、クイントが懐へと潜り込んでくる。

「お仕置きね」

くるり、とセルジオの視界が回転し綺麗に背中から地面に叩きつけられる。

「ぐ、ふう」

鮮やかに投げられたセルジオはついでとばかりに込められていた魔力付与効果により、がくり、と気を失った。

「よし、いい仕事したー。で、なのはちゃんセルジオくんと何話してたの?」

ふー、とクイントは額を制服の袖で拭うと足元のセルジオには目もくれず、朗らかな笑顔をなのはに向けた。

「ええと、その互いの使用魔法の確認と、フォーメーションの確認ですけど……アウディさんの事いいんですか?」

「セルジオくん? ああ、大丈夫よ、三課ではよくある事だし」

それはどういう意味のよくあるなのか。

セルジオがよく気絶しているのか、三課の局員がよく気絶しているのか、はたまたク

イントがよく人を気絶させるのか、その答えはわからない。なのはには聞く勇氣はなかった。

クイントが腕を組んでうーん、と唸る。

「それでこうして会議室で長々とお話ししてたわけね……。セルジオくんもまだわかってないわねえ」

「えっと、どういう意味ですか？」

「なのはちゃん、覚えておくといいわ。私たちみたいな武装隊は、お話より体に叩き込んだ方が早かったりするのよ」

持論だけどね、と最後に悪戯っぽく笑うと、クイントは足元で転がっているセルジオをゆすりだした。

「ちよつとー、そろそろ起きてるでしょーがー」

「あ、父……さん……？」

「こらこら、寝ぼけてないでしやんとしなさいな」

「あ、ああクイントさんですか。あれ、俺はなんでこんなところで？」

「さあね？ 私となのはちゃんが来た時はもう寝てたわよ」

「あれ、そうですか、それは申し訳ないことを……」

ナチュラルに嘘をついていくクイントに苦笑いしか出ないのは。

「そんなことより、セルジオくん今なのはちゃんと出来ることの確認してるんですよ？」
「ええ、まあはい」

「じゃあ模擬戦して来なさい。二人で」

「はい？ 誰と、誰がですか？」

「セルジオくんと、なのはちゃんが」

「はあ？」とセルジオの端正な眉が歪んで素っ頓狂な声が出てくるが、クイントは気にした様子もなくニツコリと笑った。

「全力全開の模擬戦、やってきなさい？」



場所は変わって三課内の訓練室。

「なんかすまないな高町」

「いえいえ、大丈夫です。なのは、魔法使うの好きですから」

「そう言ってくれると助かるよ」

なのもセルジオもすでにセットアップして、その服装はバリアジャケットへと変わっている。

なのはのバリアジャケットは白をメインカラーに所々青のラインと赤のアクセントが入っており、胸の大きなリボンが目を引いた。

対する、セルジオのバリアジャケットは、白いコートの中には黒いスーツ。腕には騎士がするようなガントレットが装着されている。三課のメンバーが見れば、セルジオのバリアジャケットを、『ゼストの色を反転させたようなデザインのもの』と評するだろう。

向かい合う二人の間でクイントが審判でもするかのように手を広げて立っている。

「じゃあルール確認ね。基本的には有効打が先に入った方が勝ち。使っちゃいけない魔法もなし。あ、でも流石に怪我しそうだったら止めるわよ」

「わかりました」

「了解です」

「じゃあ、試合——」

セルジオが槍を両手で軽く握って、軽く踵をあげる。

なのはがレイジングハートを左手で握って、先端をセルジオの方へと向けた。

「——開始ッ!」

「アクセルシューター!」

クイントの合図があつた瞬間になのはが空へと飛び、それと並行して十五発の魔力弾を発射する。

セルジオはそれをサイドステップでかわして、空のなのはを追いかけようとして、視界の端で避けたはずの魔力弾が直角に曲がるのを見た。

(まさか、これ全部誘導弾か)

手の中の槍に魔力を流し込み出力を増加させると、直撃コースの物だけ斬りはらうべく槍を振るつた。

十五発のうち四発を一太刀で消滅させると、今度は背後から迫ってきた三発の誘導弾を槍の石突きでそらす。

「本当に大したもんだよ」

そして、あらかじめマルチタスクを分けて演算しておいた飛行魔法を発動させて宙を舞う。それに追従するように誘導弾がセルジオを追いかけるが、あえてそれを無視してなのはの方へと視線向ける。

セルジオがなのはの方を向いた瞬間、視界を桜色の光が染め上げた。

「ディバイン——」

『——Buster』

いつか見た桜色の流星が空を翔ける。

「シヨートバスター」

が、あらかじめ発動していた解析魔法でそれを感じ取っていたセルジオは、特に焦ることなく槍の先端からデイベインバスターを下からかちあげるように発射、軌道を僅かにずらす。

セルジオの白い砲撃に、なのはの桜色の砲撃がそれと背後の誘導弾のうち半数をまとめて消しとばした。

「嘘おっ?」

「俺じゃあ砲撃の撃ち合いは出来ないが、頭を使えばズラすくらいは出来る」

「ならっ!　　アクセル!」

なのはが叫ぶともう残り半分ほどになった誘導弾が一気に加速し、セルジオに殺到する。

「遅い。ブリッツアクション」

が、それを行うには一手遅かった。あらかじめ、飛行魔法とは更に別のマルチタスクで待機させていた加速機動を使用して、セルジオの体がなのはへと肉薄していく。

なのはが驚いたように目を見開いたが、それも一瞬のこと。レイジングハートの助け

を借りて360度を覆うようにシールドを張った。

なのはの規格外の魔力を使ったその障壁は見るからに堅固そうで、セルジオの槍の一振りでは砕けそうにもない。

(なら、弱いところを探せばいい)

「解析——見つけた」
アナライズ

一瞬、セルジオの瞳が薄い白色に染まり、槍が大きく後ろへ大きく引きしぼられる。
「バリアブレイク」

また更に別のマルチタスクで待機させていた障壁破壊の魔法が青白いスパークを弾かせながら槍の先端へと宿る。

(私の障壁はそう簡単には壊れない！　一瞬の時間さえあればまた砲撃を——)

なのはが自身の張ったシールドの強度を信じてレイジングハートを砲撃重視のバスターモードへと変形、その砲身へと魔力を充填して——視界からセルジオが消失する。

「バリア、ブレイクッ！」

次に声が聞こえたのは背後からだ。何が何だかわからないのはが、慌てたように背後に向き直って、目の前に槍が突きつけられた。

「勝負あり、だな」

「負けまし、た……?」

槍の向こうには、不敵な笑みを浮かべた淡い金髪に翠の瞳の少年——セルジオがいる。ぐうの音も出ないほどのなのはの敗北だった。

「はい、そこまでー」

下の方からクイントの間の抜けたような声が聞こえてくる。

「そら、降りるぞ」

セルジオは突きつけていた槍を手の中でくるりと回すと待機状態である銀色のカ―ドに戻すとさっさと高度を落としていく。

なのはは慌ててその後を追いかける。

二人が地上で待っていたクイントの前で着地した。

「さて、セルジオくん勝利おめでとう。先輩の威厳は保てたわね」

「からかうのはやめてください、クイントさん。高町が最後に何が起きたかわからない、って感じの表情浮かべてますよ」

「それもそうね。ねえ、なのはちゃん。最後に何が起こったか、わかる?」

「え、ええと……」

なのはがクイントの質問に顔をしかめて必死に思考を巡らせていく。

（アウデイさんがバリアブレイクを発動させたところまでは見えてたから、その直後に何かが……）

何度も自問自答を繰り返しながら記憶の本棚の中でなにか関係がありそうな事柄を片っ端から確かめていく。

その中で、初めてセルジオと出会った日のことが思い返される。

かちり、となのはの中で何かがハマる音がした。

「もしかして短距離転移……?」

そう言うのとクイントが大きく頷き、隣ではセルジオがへえと感心するように声を漏らした。

「多分話した事はなかったはずだけど、よくわかったな」

「初めて会った日に使ったので、もしかしたらって思ってた」

「よく覚えてたな、大したもんだ」

「で、でも、それだけじゃ説明つかないです!　　アウデイさん、あんなにポンポン魔法

出してて!　　展開速度が速すぎると思います!」

「ああ、それ?　　並列思考だよ、マルチタスク。高町も使ってるだろう?」

「確かに使ってますけど……、マルチタスクをどうしたんですか?」

「えつとな、あらかじめマルチタスクを十個くらい作っておいてそれぞれに魔法の演算を待機させとくんのだ。すると、使う時に座標を代入するだけでさくつと発動できる」

「じゅっ——」

何でも無いように言ったセルジオの言葉になのはが言葉を失う。
マルチタスク
分割並列思考。

それは魔導師ならば皆標準的に持っている能力である。普通なら一つしか考えられないところを、特殊な魔法式を代用する事で、思考に自由を持たせ同時に複数の事を思考できるようにする事だ。

なのはもちろんその技能を用いて、自身の指の本数よりも多い誘導弾を操作するのだが、それでもマルチタスクの数は一つだけだ。

因みに、バインドを多用する若き秀才執務官クロノ・ハラオウン、彼でもマルチタスクの数は大体五つがせいぜいである。

それ以上増やせば思考がまとまらず、頭痛により一歩も動けなくなってしまうという。

「アウデイさんって物凄い人ですね……」

「んー、なんか不思議とマルチタスクは人より多く操れてさ」

「ほわー、となのはが少年がトランペットを見るような熱っぽい視線をセルジオに向ける。」

しかし、それをバツサリ切り捨てる人が一人。

「いや、なのはちゃん騙されちゃダメよ。セルジオくんはいつもああいう戦い方をす

るって訳じゃないわよ」

「え?」

呆れたような表情のクイント。

「なのはちゃん、この子の魔力保有量どんくらいかきいた?」

「えと、確かB+?」

「じゃああんな無茶苦茶な魔力運用しててこの子の中にはどのくらい魔力が残ってるでしよーか?」

「うーん、七割、くらいですか?」

「はい、正解をセルジオくん」

「四割」

「嘘おつ?」

クイントから頭をたむたむと叩かれながらセルジオが申告すると、なのはが大きく声を上げる。心なしか、そのツインテールをぴよこぴよこと跳ねて、その心の動きを伝えようにも見える。

そのなのはの様子を見て、セルジオが自嘲気味に空を見上げる。

「高町、実は俺ああいう戦い方したら速攻で魔力不足になるんだよ。今回は模擬戦だから短期決着で良かったけどさ」

そうやって自身の手の中を見つめるセルジオ。翠の瞳はどこか悔しそうな色を宿していたが、すぐにそれを霧散させて、なのはに向けて柔らかく笑ってみせる。

「だから、これから任務を受けるときはコンビである高町の力が必要だ」

「なのはの……」

「力、貸してくれるか？」

「勿論ですつ。なのはの魔法は、人を助けるための素敵な力ですから」

「がんばります、とでも言うかのようにポーズを取るなのはに、なんとなくセルジオが頭を優しく撫でた。

なのはは一瞬顔を赤くしたが、やがて照れたようにえへへ、と笑った。

「ねえ、セルジオくん、仲良くしてるところ悪いんだけど、さっきのつてもしかして」

「クイントさんには隠し事が出来ませんね……」

「じゃあこの前の隊長が言ってた案件ね？」

「はい、少し危険ですが高町なら信じて背中を預けられます」

「あの、なんの話ですか？」

「なのはがセルジオに撫でられながら、クイントとセルジオの二人を見上げて首をかしげる。

「……高町、今週の土曜は何か予定があるか？」

「特に無いですけど、それがどうかしたんですか？」

セルジオがああ、と頷く。

「その日、ある違法研究所へ行くこうと思う」

——俺たちの、初任務だ。

心の光

真夜中の道路を一台のバイクが風を切るようにして疾走する。

運転するのはセルジオ・アウデイ。航空魔導隊三課に所属する武装局員である。

士官学校をそこそこの成績で卒業した彼は、多くの部隊から勧誘がくる中、その全てを蹴って現在の部隊を希望した。その理由を知る者は多くはないが、わざわざ後始末部隊と呼ばれる部隊に行つた事もあり彼の顔はそこそこ知られていたりする。

まだ十六歳という若さながら既に空戦A Aを取っているあたり優秀さがよくわかる。

「(うわー、バイクって早いんですねー。なのは初めて乗りました)」

「(この風を切る感じは空を飛ぶ時とはまた違うよな)」

「(これってアウデイさんの私物ですか?)」

「(まあ一応な。給料貯めて去年買ったやつだ)」

「(アウデイさんってもしかして結構稼いでたりします?)」

「(流石に陸とはいえ俺も三尉だからな。それなりには貰ってるよ)」

興奮したように念話を飛ばしてきたのは高町なのは。本人の希望と上層部のあれこれ三課に配属された未来を嘱望される魔導師である。

一年前、第97管理外世界で起きた二つの大事件の解決に大きく貢献し、雑誌などにも大きく取り上げられた。現在は順調に三課に馴染み始め、マスコットキャラとしての地位を確立し始めている。

「(目的地はクラナガン郊外の廃棄都市……その地下道でしたっけ?)」

「(ああ。1035陸士部隊の捜査官が見つけた研究所なんだが、どうやら厄介らしくてな。既に重体が二人出ている)」

「(それで三課に回ってきたって感じですか。本当に後始末するんですね)」

「(まあなあ。でもこれって言い換えると手柄の横取りだからな。まーた、嫌味を言われるかもな)」

「(でもやるんですよね?)」

「(当たり前だ。人は救う。そこに俺たちの感情は関係ないからな……つとそろそろだな)」

二人の視界に映る風景が次第に寂れていく。クラナガンの様に高層ビルが立ち並んで入るが、その多くは途中で崩れ、窓ガラスが割れている。道路も同様にひび割れているため、セルジオがなるべく走れそうなところを探してバイクを走らせていく。

ミッドチルダにはこうした廃棄都市がいくつ也存在する。

そも、ミッドチルダというのはとにかく発展と荒廃のスピードが早い。

それは『魔法』という科学文明が発展しやすい土壌があつてこそなのだが、これは良い面だけではない。

盛んに行われる革命的発明。インフラ整備などではどうしようもない交通システムの進化。そうした早すぎる発展に都市自体がついていけなくなる。

故に、捨てる。

ある程度使つて付いていけなくなった都市は捨ててしまふ。

そうして、発展と荒廃を繰り返し、都市機能を移すことでミッドチルダは栄えてきた。

これは言うなれば副産物だ。影の面だ。

一部の廃棄都市は管理局が買い取り訓練などに使用することもあるがそんなの全体に比べればごくわずかな数である。

人々が喜ぶ発展の影で、こうした廃墟は増え続け、違法犯罪者や、社会的に行き場を失つた人の温床となるのだ。

そうした、問題の一つが、今夜セルジオとなのはが担当する違法研究所の調査だった。

「ほれ、ヘルメット」

「あ、お願いします」

セルジオがバイクを停めて軽く結界を発動。封鎖結界の中に自身のバイクと受け取ったヘルメットを隠した。こうすることで事件解決後帰ってきたらバイクがパクラれてましたという悲しい事態を回避できる。

そんなことがあつたらなのはの前でも少し涙を流す自信があつた。

「高町、そろそろバリアジャケット起動させとけ」

「わかりました。レイジングハート、セットアップ」

「S2U・カスタム、セットアップ」

なのはが桜色の魔力光に、セルジオの身体が白色の魔力光に包まれ、次の瞬間には二人の身体がバリアジャケットへと変わった。

「アウデイさんのデバイスって、もしかてクロノくんのもものチューン機ですか?」

「今俺のデバイスはメンテ中だな。友人にいじって貰った奴だな、コイツは」

「え、そうなんですか。知りませんでした」

「そういえば言つてなかったか。今度見せてやるよ」

さて、とセルジオが切り替えるように口を開く。通常の杖のものから僅かに変形して、魔力刃を使った槍へと形を変えているデバイスを肩に担ぐと情報のあつた辺りをにらんだ。

「情報ではここあたりだが……このマンホールかな」

槍の穂先を隙間に差し込んで蓋を弾く様にして開いた。その中は黒々とした闇に包まれており、どれほどの深さがあるかはわからない。一応はしごも付いているため降りるのは問題なさそうではあるのだが。

「高町サーチャー下の方まで飛ばしてくれるか？」

「わかりました。どこあたりまで偵察しますか？」

「真下まででいい。とりあえず罨とかがないかだけ確認頼む」

なのはがレイジングハートを闇の中へと向けるとその先端から、魔力光と同色の拳大の球がゆっくりと射出される。

その可愛らしい顔を引き締めていたなのはは、やがてセルジオの方を向いてこくりと頷く。

問題ない、と瞳が語っている。

「じゃあ、高町から降りてくれ。俺はお前した後で降りるから」

「ええっ！　なのはからですか？」

「なんだ、ダメな理由があるのか」

「べ、別にないですけど……」

なのはとしては真つ暗な中一人で降りるのは怖いなー、とか思っていたりするのだが、それを言うところセルジオに子供扱いされそうでなんだか嫌だった。

だが、一人で降りるのに抵抗がないかと言われればそう言うわけでもなく。なので、なんとかセルジオから下に降りてもらおうとする。

「セルジオさんから降りてください。なのは後から降りるので」

「いや、それは駄目だ」

「な、なんでですかっ！ 別にいいじゃないですかっ」

だが、セルジオは首を振るだけで先に降りてくれそうにない。

なのはが頬を膨らましながら文句を言うと、セルジオは人差し指で頬を掻きながら、言いにくそうに、非常に言いにくそうに、なのはから目をそらす。

「だって俺から降りたら高町のスカートの中が見えるかもしれないだろうが」

「にやっ！」

「別にめくりやしないよ……」

ぼつと弾かれる様になのはが自身のバリアジャケットのスカートを抑える。いくらバリアジャケットとは言えやはりスカートの体をなしているの、なんとなく見られるのは恥ずかしさがある。

「先におります……」

「そうしてくれ」

セルジオとしてはガキのパンツの一つや二つで騒ぎ立てる様なことはないが、言わな

くて後で騒がれるのも面倒だった。

彼の好みは気立てのいい長髪の女性なのでなのはストライクゾーン外である。

「アウデイさん、そこに居ますよね」

「あーいるよー」

「……居ますよね？」

「おー」

「返事が聞こえないですうっ」

「いいから早くおりなさいよ……」

そんなこんなで二人がマンホールから地下水路に入る。

「水とか無いんですね」

「ここは廃棄されて長いしな。もう水道はとっくの昔に通ってないよ」

なのはの疑問に答えながら、セルジオがしゃがんで目に魔力を流し込む。

アナライズ
「解析ー……こっちか」

セルジオの瞳に白が走り、暗闇の中で残っていた前回の捜査員の足跡、そして更に他の人物のものを発見する。

（この新しいのが1035の捜査官のもので、こっちの古いのはここの主人のものか。
この感じからしてもう研究所はもぬけの殻だな）

読み取った情報を整理しながら研究所についてあたりをつける。

(血痕とかも無いし人体実験とかじゃなくて、マシンかなんかのラボが妥当か)

セルジオが立ち上がって遠くを見渡す。次回は薄暗く遠くまで見渡せるわけではないが、解析魔法さえ飛ばせば構造だけは完璧に把握できる。

光源もなしにセルジオは迷いなく通路を歩く。その後をなのはがレイジングハートを握ったままついていく。

暗い通路で二人の足音だけが響く。

それがなんだか不気味で、なのはが思わず目の前でひらひら揺れていたセルジオのコートの裾を握ってしまう。

それに気づいたセルジオが足を止める。

「これは……？」

「へ、あ、ごめんなさいっ。今離しますっ」

「いや、別に心配なら握っておいてもいい。いざという時に仕事ができなきや困るが……高町なら問題はないだろう」

それ以上セルジオは何も言わずまた黙々と歩き始める。なのははとりあえず今回はその言葉に甘えておくことに決めて、裾を控えめに握って足を進めた。

「ハハ、かな」

「え？　でも何もありませんよ？」

「いや……」

しばらく歩いてセルジオが下水路の壁に手を触れた。薄い翠の瞳が白く光り解析が開始されると、どうやら壁の一部分がやたらとすり減っているのがわかる。

「たぶんパネルを投影してパスワード打つタイプだな。前にメガーヌさんと潜入した研究所で似たタイプを見たことがある」

「そのパネルはどこにあるんですか？」

「いやそれはわからないな。だが、これは触るところをしっかりとさりゃれば開くタイプだ」
「で、でもただの壁を見分けることなんて……」

「開いたぞ」

「ええええええ！」

「声がでかいな」

解析魔法で得た情報から、セルジオはどういった形のパネルかを推測し、磨り減り具合やどこが一番触られているかなどの情報からさくつと扉を開いてしまう。

目を見開くなのはの前で下水路の壁が重苦しい音ともに開いていき、研究所への通路が姿をあらわす。

「ど、どうやったんですか今の」

「別に？ 戦うのと違ってこういうのは頭を使うかどうかだ」

なんでもないことのように言うセルジオ。それに一瞬そうなのかな、と騙されそうになるが、すぐにそんな訳ないと思い直した。

「高町、念のためいつでもシューターが撃てるようにしとけ」

「は、はい」

「今回の通路は狭い。シューター系はともかくバスター系を撃つなら念話で俺に合図を送ってくれ」

「じゃあ前衛はアウデイさんが？」

「ああ。昨日確認した通りだ」

「が、頑張ります……！」

「ああ、そいつは結構。裾を掴む手をそろそろ離してくれればなお嬉しい」

「すすすすすみません」

なのはの手がセルジオの裾から離れてレイジングハートを強く握る。それを見て、ふ、と薄く笑って後でしっかり労ってやらなきやなあと考えながらセルジオが槍を構える。

静かに通路を進んで行く。

一定のリズムで刻まれる二人の足音。

耳に痛いほどの静寂が広がる中をしばらく歩いたところで、セルジオの解析魔法に反応があった。

（これは、なんだ……？　魔力反応がないぞ）

その物体の不可解さに眉をひそめると、それと時を同じくして、ソレが小さな機械音とともに起動する。

ブウン、という低い音がなのはとセルジオの耳に届いた。

「高町！　敵がくるぞ！　光源頼む！」

「了解です！」

なのはが数発の魔力弾を通路の天井近くに滞空させ、即席の光源として、そのタイミングでソレが姿を現した。

「これは、なんだ……？」

卵のような体に多脚生物のようにカサカサと動く足、アームと思わしき部分には巨大な鎌が付いており、胴体の中央の単眼はなのはとセルジオを捉えて離さない。

ソレが、同時に三体。

この時の二人は知らないが、そのマシンの名を、『ガジェットドローン』と言う。

「高町！」

「はい！　アクセルシューター！」

セルジオの背後からなのは六発の誘導弾を発射する。以前模擬戦した時よりも数が少ないのは通路ということを考えてか。

なのはのアクセルシューターのうち三発ずつがガジエットの後続二体を弾いて先頭の個体だけを孤立させる。

「はああああっ！」

セルジオが魔力刃を纏った槍を胴体を薙ぐようにして振るう。しかし、ガジエットの体は固く、槍は半ばまで食い込んでその動きを止めた。

ガジエットの体から電弧が走り、辺りを白く照らす。

(固いッ！)

素早く槍を引き抜きながら、袈裟懸けに振り下ろされるガジエットの右手の鎌を魔力刃で受け止める。

つばぜり会う槍と鎌が軋み、がりつと魔力刃が削れる。

(くそ、やつば魔力刃は安定しねえな)

ちっ、と小さく舌打ち。

「(アウデイさん、三秒後砲撃を打ちます！)」

「——！ 了解した)」

セルジオがガジエットのアームの力に逆らわず、刃の上を滑らせるように受け流すと

バックステップで距離を取る。

『Three』

今度は左から横薙ぎに振るわれる鎌を下から弾くようにそらしたセルジオはマルチタスクで待機させていた加速魔法に魔力を流す。

『Two』

セルジオの体が白い燐光に包まれてガジェットの眼前から消える。

『One』

「ダイバイン——」

ブレーキをかけながらなのはのすぐ隣まで来たセルジオが加速を終了させると、ちようどなのはが砲身に魔力を充填し終える。

そして、大きく目を見開いた。

『Zero. Divine Buster』

「——バスター！」

魔法陣が強く輝き、なのはの砲撃の代名詞、『ダイバインバスター』が炸裂した。

辺りの空気を纏めて薙ぎ払うようにして放たれた魔力砲はその全てを桜色に染め上げながら先程までセルジオが相手になっていたガジェットを粉々にした。

「oh……………」

その威力を見てセルジオが絶句する。

何も初めて見るわけではないが、こうして自分が先程まで対峙していた敵を粉々にされるとその規格外さに開いた口が塞がらない。

砲撃を打ち終わったレイジングハートが排熱機構を開いて、使用済みのマガジンを排出する。

「第二射、行きます！」

「え、それ連射できんの！」

なのはがベルカ式を応用したカートリッジシステムをを起動させ、次のカートリッジを装填。再び砲身に桜色の魔力が収束されていく。

狙いは先ほどアクセルシューターで弾いた二体のガジェットドローン。

一秒ごとになのはの砲撃は光を強めていき、臨界点まで達した魔力が一気にビームとして放たれる。

再び根こそぎ辺りの空気を巻き込むようにして極太の砲撃がガジェットへと向かっていき、空中で解けるように溶けた。

え、となのはから驚きの声が漏れた。

「な、なんでダイバインバスターが？」

ばしゅう、と砲撃を終えたレイジングハートが再び熱を輩出して数発のマガジンを吐

き出した。

「高町、もう一度だ！　次撃つまでに何秒かかる？」

「ええと、じゅ、十秒！　それで間に合わせます！」

「なら俺は十秒時間を稼ごう」

ブリッツアクション、そう呟くと魔法式をS2U・カスタムに乗せて演算を代行させ魔力を温存した加速を行う。

十メートルはあった距離が瞬時に半分まで詰まり、セルジオが魔力刃を纏った槍を踏み込みとともに突いた。加速のスピードと鍛えた踏み込みの最大限にスピードとパワーの乗った一撃は手前のガジェットの体を突き刺した。

「お、らあつー！」

そして、今度は身体強化で膂力を強めてもう一体のガジェットを挟み込むようにして通路の壁に叩きつけた。

機械同士を叩きつけた物凄い音が辺りに響く。

叩きつけられた一体が足がひしゃげてしまったのかごろん、と無様にひっくり返る。

だが、ガジェットもそれだけでは終わらない。

セルジオに突き刺された方のガジェットが跳ね上げるような軌道で鎌を振るおうとする。瞬時にセルジオが槍を引き抜いて、魔力刃で逸らそうとする。

音を切つて鎌が走り、セルジオの魔力刃がしつかりとそれを防ぐ。

「は？」

ことはなく、槍の白い魔力刃が跡形もなく霧散し、ガジェットドローンの鎌がセルジオの腹部に突き刺さった。

はじめにセルジオの腹部に冷たい感覚が、そして次に炎をぶち込まれたかのような感覚へと変わり、一瞬遅れてその全てが痛みへと変わる。

（魔力刃が、消えた……？ いや、それよりも今は離脱を……！）

セルジオがあらかじめ待機させていた短距離転移に魔力を流し込んで、魔法が発動しない。

「な、にが……？」

口から苦悶の声を漏らしながらセルジオがガジェットのマシンアームを掴んだ。これ以上押し込まれれば背中から鎌の先端が突き出しそうだった。

必死に力を込める、が、いつのまにか身体強化魔法すら解除されているため、引き抜くことができない。

(これはまさか、AMFか……?)

痛みではつきりしない思考で、いつか聞いた魔法理論を思い出す。

「くそつ、たれ……ッ！」

セルジオの口から汚い言葉が溢れて、唇を強く噛んだ瞬間、視界の端で桜色の弾丸が走った。

「アクセルシューター！」

なのはの誘導弾がセルジオを綺麗に避けてガジェット装甲だけを叩いて、押しつけるように距離を取らせた。

その拍子にガジェットの鎌部分が腹部から抜けていく。

「あ、ぎ……」

「アウデイさんっ！　大丈夫ですかっ?!」

「問題、ない」

「そんなはずないです！　だって血がこんなに……」

倒れ込んだセルジオの元になのはが駆け寄ってきて、刺された腹からとめどなく溢れてくる血を見て顔をさっと青くした。

鎌という武器は先端は細く、根元に向かうにつれて太くなる構造をしている。そして、セルジオはその鎌の半ばほどまで突き刺されて、腹に小さくない切り傷が生まれて

いた。下手すればそこから腹の中身が溢れるかもしれないレベルの大きさである。

セルジオの体を支えるなのは白いバリアジャケットが血で濡れる。白の中で血の赤が、その色が、薄暗い通路の中でも良く映えていた。

なのはの雰囲気が一変する。

今までの年相応のものから、強い決意を孕んだ強さを持ったものへと。

「私、行つてきます。だからアウディさんはここで待つていてください」

そして、儚げに笑みを浮かべた。

「あなたを、助けます」

なのはがレイジングハートを構えるとベルカ式の物を応用したカートリッジシステムが駆動し、次々にロードされていく。

彼女は自身の魔法を『人のためになる素敵な力』と評している。

偶然、なのはの中に宿っていた魔法の力。多くの人と出会い、成長して、それでも救えなかった人がいて。

だからこそ高町なのはは誓ったのだ。

『絶対に救う』と。

故に、友人のいる『海』ではなく『陸』の舞台を選んだし、必死に三課で努力してきたのだ。

「レイジングハート・エクセリオン、フルドライブ——」

だが、彼は、『それ』をなのは一人で背負うことを認めない。

「待て、高町。フルドライブは、使うな」

「アウデイさん、安静にしてないと、あなたは——」

「俺は！」

なのはの心配する声をセルジオが遮る。そして、ゆっくりと迫ってくるガジェットを視界の端に捉えながら、なのはと見つめ合う。

「俺は、高町の何だ」

「コンビ、です」

「……高町が、まだ信頼できないのはわかる。信用できないのもわかる」

セルジオが少女の肩を掴む。

「でも、さ。『それ』は、お前が、守るんじゃない。俺たちが、守るものだ」

なのはが、セルジオの翠の瞳の奥に、強い光を見た気がした。

「だから、俺にも、一緒に無茶くらいさせてくれ」

最後に、ふ、と笑って見せて、セルジオが目の前に迫っていたガジェットに向けて、魔力の消えた槍を突き出し、叫ぶ。

「ブレイクツ、インパルスッ！」

先端から衝撃波を叩き込む魔法が発動する。ズ、と槍は僅かにガジェットの体に食い込むが、威力が足りなかったのか粉碎までは行かず、軽く吹き飛ばすだけにとどまった。「今のは、魔法？」

「へ、やっぱりな」

今の光景を見てセルジオが、白く目を輝かせながら不敵に笑う。

「高町、この魔法使用不可の空間は、常にそうってわけでもないみたいだぞ」

「それって、どういう……」

「あそこにある、馬鹿でかいマシンが見えるか？」

セルジオの指差す方向をなのはの視線が追うと、二体のガジェットの後ろに薄く光る自動車サイズのマシンがあった。

「詳細は省くがあれが原因だ。どうやら完成品ってわけじゃないみたいだな、一瞬だが、出力が低下してる」

「ならその瞬間を狙いませば魔法が使えるって事ですか？」

「ああ。でも砲撃とかは無理だ。魔力が多過ぎて途中で解けちゃう」

だから、とセルジオが額から流れる汗をコートで拭って、槍を握る。

「俺が短距離転移であそこまでとんで、マシンを壊してくる」

「アウデイさん、その怪我で……」

「やる。だから、高町はそのタイミングで機械二体を破壊する砲撃を叩き込め」
できるんですか、という質問が来るよりも早くセルジオが答えた。そして、また強い光を宿した翠の瞳でなのはを見つめた。

その目が、出来るか、と聞いてくる。

「わかりました。私の全力全開で、砲撃を撃ちます」

なのはの答えを聴くとセルジオは満足そうに頬を吊り上げて、翠の目を白く染め上げる。

「頼むぜ、相棒」

今の状態では解析魔法はうまく機能しない。だが、常に発動していれば、偶然遠くまで解析できてしまうこともある。あの、ガジェットドローンの背後の機械の方まで。

機械の引き起こす現象に偶然はあるのか。その答えは否であり、ならば偶然は必然へと変わる。

解析魔法が遠くまで届く、それがすなわち魔法使用不可の効果弱まる瞬間である、と言うことだ。

（———今ッ！）

短距離転移。

言葉に出すことはないが、心の中でそう唱える。そうする事で、研ぎ澄ましたひと時

の間に、なのはの隣からガジェットの背後へと瞬時にセルジオの体が転移する。

血を吹き出しながら酷い痛みを訴えかけてくる腹部を無視して、槍を強く握った。

「ぶっ壊れろおおッ！」

そして、槍を振り下ろす。

魔力刃はないが、それがそもそも鉄の塊であるデバイスは、精密機械であるそれに鈍器のごとく叩きつけられる。

マシンが、光を大きく瞬かせて、動きを止めた。それと同時にいつもの、魔法が使える感覚が体に戻ってくる。そこまでやって、セルジオの体が崩れ落ちる。ひどい出血と、無理な魔力行使でついに体力が底をついたのだった。

暗くなっていく視界の中で、最後にぼんやりと目を開ける。

（ああ、本当に綺麗な光だ——）

淡い桜色。

それがセルジオ・アウデイが最後に見た光景だった。

光、墮ちて

「ええと、ここらは確か……」

三課のデスクでなのはが書類とにらめっこを始める。

今なのはが行なっているのは先日の違法研究所の調査に関する報告書である。新人のなのはには少し難しい仕事だが、物は試しと任されていたりする。

「大変そうね、なのはちゃん」

「メガーヌさん」

唸るなのはに声をかけたのは同僚であり、先輩でもあるメガーヌ・アルピーノ。

「どこらへんで悩んでるの？」

「ええと、こここの形式と、報告方法がほかの紙となんだか違つて……」

「ああこれはね……」

なのは質問すると、メガータは柔らかい表情のまま一つ一つ丁寧に書き方を指導していく。ただ、わからないところはこう書け、と言うだけではなく、なのはの方が理解しやすいように噛み砕きながら指導している姿はなかなか手馴れたもので、彼女がこうした指導が初めてではないことがわかる。

指導の甲斐あつてか、なのはの報告書が完成する。

「で、できたー!」

「お疲れ様、なのはちゃん。ココアでよかつた?」

「ありがとうございます、メガータさん」

完成した報告書を感じ深く見つめるなのはの元にココアの入ったカップを手渡しにしてくれるメガータ。

なのはと同様にコーヒーのカップを片手にした彼女は、柔らかい笑みを浮かべたままなのはの横、今は空席のデスクの椅子を引いて腰掛ける。

「どう、なのはちゃん、これからは上手く書けそう?」

「うーん、難しいです。算数とかの計算は得意なんですけど、こういう国語っぽいのは苦手です」

「あら、なのはちゃんって結構なんでも出来るイメージがあつたわ」

「いえいえ、なのはなんて全然です。国語とか社会とかは苦手だし、体育だつてお兄ちゃ

ん達みたいにはとても……」

「なのはちゃんにはお兄ちゃんがいるのね」

「はいっ。なのはの家族は、お父さんと、お母さんと、お兄ちゃんと、お姉ちゃんで、五大家族なんです」

「へえー、そうなのね。今私は旦那さんと二人家族だからそういうの羨ましいかも」

「メガーヌさん旦那さんがいるんですか？　じゃ、じゃあウエディングドレスも

……」

「もちろん着せてもらってたわ。とーっても綺麗なやつ」

「わあー、凄いです……」

年相応にきらきらと目を輝かせるなのはと楽しげに笑うメガーヌ。やはり、なのはも女の子というだけあって『お嫁さん』『ウエディングドレス』という単語には憧れがあるらしかった。

「なーになになに、なんの話ー、私もまーせて」

「家族の話をしてたの。とかどこいってたの？」

「んー、ちよーつと、準備？　かしら？」

そんな二人の元にクイントも朗らかな笑顔とともに割ってはいってくる。

「クイントさんも結婚されてるんですか？」

「ん、そーよー。旦那さんと、娘二人の四大家族ねー。上の子はなのはちゃんの二つ下」
「どんな子なんですか、クイントさんの子どもさん」

「私に似てるわね、すごく。ご飯もいっぱい食べるし、髪も青くて、ほーんと私に似ててカワイイ子達よー」

「クイントってば、娘のこととなるいつつもこうなんだから……」

「ああ、でも旦那はちよつと頼りないかなあ。もうちよつとどつしり構えてくれたら安心できるんだけどね。もちろん今のままでも大好きよ?」

「はいはい」馳走様」

「もう、何よその適当な返しは〜」

クイントの旦那への不満、側から聞けば惚気話のそれにメガーヌがコーヒーを飲みながら適当に対応した。

それにぶーぶー言いながら絡みつくクイントを、ため息交じりでメガーヌが引き剥がす。

なのはが、くすつ、と笑う。

「お二人って仲いいんですね」

まだ付き合いの短いのはから見ても二人が話しているのはよく見るし、とても仲よさそうに見えていた。

「まあね！ 私たち長い仲だし！」

「こんだけ長く一緒にいれば嫌でも仲良くなるわ」

「お二人つてそんなに長い仲なんですか？」

「そうそう、あたし達が入局したのが15の時だから……もう十年以上？」

「まあ、部隊が違う時もあったけど、まあそのくらいの付き合いになるわね」

「十年以上?!」

なのはがツインテールをびよこんと立てて驚く。

なんとなく長い付き合いなんだろうとは予想していたが、まさか十年以上とは思っても
していなかったなのは。

「お二人つて、凄いですね」

ほえー、と見上げるなのは視点ではクイントとメガーヌが歴戦の英雄のように見えて
いた。なにせ、なのはが生きた年数よりも長く管理局で働いているのだから。

しかし、そんななのはの言葉を、クイントはむず痒そうに否定してみせる。

「私なんてまだまだだよ。陸の外での任務なんてほとんどしたことないし」

「なのはちゃんだって、すごい才能を秘めてるんだから、私よりも、クイントよりも、
みんなに認められる魔導師になれるはずよ」

メガーヌはそう言ってなのはの肩を優しく叩く。

「それ、に、本当に凄い人って言うのは、ウチの隊長みたいな人の事をいうのよ」

「隊長……ゼスト隊長ですか？」

「そーそ」

なののがこてん、と可愛らしく首をかしげると、クイントが間髪入れずに机の上に足を載せて吠える。

「ゼスト・グランガイツ！　　我らが航空魔導師の隊長！　　その魔導師ランクは総合

AAランクながらも過去にはSランクの魔導師を完封したことすらある実力者！

ついたあだ名は格上殺し、ジャイアントキラー、こんぐろウ、黒狼と数知れず！　　管理局員ながらもベルカ式に適性を持つ

ち、聖王協会騎士団からの勧誘が来たほどの騎士！　　週間ミッドジャンプの『父親に

したい魔導師ランキング』では堂々の三位！　　『恋人にしたい魔導師ランキング』では

驚きの四位！　　その卓越した槍の腕前は、一手指南を希望する人が絶えないわ！

因みに年は四十八歳！　　未婚！　　独身！」

「来た！　　クイントの高速説明長台詞！」

「相変わらず隊長のことになると気持ち悪い！」

「隊長なんで結婚してないんだろ？」

「心に決めた女性と死別したとか噂で聞いたことあるぞ」

「でもたしかに隊長は父親にして見たいよな……」

「それ知りたきやセルジオあたりに聞いて見りゃいいじゃん」

「しっかし相変わらずミッドジャンプのランキングは意味がわからんな。この前は何だっけ？」

『『ビーフストロガノフを得意顔で作ってそんな魔導師』。うん、意味わからん』

「とうか、どうでも良いけどクイント、スカートの中が見えそうよ。男衆に見られても良いの？」

「えっ？ ……誰も見てないでしょうね？」

「イエスマム！」

やんややんやと楽しそうに騒ぎ立てる三課のメンバーを見て、なのはも笑って、ふと自身の相棒のことを思い出す。

なのはの陰った表情をメガーヌだけが気づく。

「なのはちゃん、今日も行くの？」

「……はい。それくらいしか出来ませんし」

メガーヌには、強がったように笑うなのはの顔が痛々しかった。

なのはの相棒、セルジオ・アウデイ三等空尉。

未だ入院しており、その意識は戻っていない。



「すみません、ゼスト隊長、車出してもらっちゃって」

「ありがとうございます、隊長」

「構わん。どちらにしろ、俺も行く予定だったしな」

「流石、我らが隊長です！」

なのは、メガーヌ、クイントの三人はゼストの車に乗せてもらってセルジオの入院している病院へ来ていた。

地上本部の近くにあるこの病院は管理局員御用達のところで、前に似たような事で入院した時に知り合ったセルジオの主治医もいるらしかった。

ちなみに、他の隊員も見舞いに行きたがったのだが、一気に押し寄せても迷惑だろうと判断して今回はこの四人が選ばれた。

「えーと、確か道は……」

「こつちよ、こつち」

「ああ、そうでした」

一度来たもののイマイチ記憶のはっきりしないのはが先導しながらセルジオの病室へ向かう。ところどころ大人たちからのアドバイスをもらっているが。

セルジオの病室は七階。エレベーターは他の患者の迷惑になるといけないから階段で行こう、という事になった一同はヒーヒー言いながら少しずつ上へと登る。

主に、ヒーヒー言ってるのは運動の苦手なのはだけだが。

「アウデイさん、大丈夫ですよね」

階段を登りながらなのはがポツリと呟いた。

それはなのはにしては酷く珍しい弱音だった。

高町なのはは不屈レイジングハートの心をもつ少女だ。

その心は折れず、曲がらず、自分の信じた道を突き進む。

一度や二度跳ね除けられたところで、戦うべき相手とわかり合いたいと思う心は無くならないし、むしろ相手が根負けするまで何度だって食らいついていく。

だから、彼女は友人たちにどんなに心配をかけても笑顔で「大丈夫！」と返すことがほとんどだ。

しかし、そんなのはがこの場だけは違った。

それは、知り合ってからずっと良くしてくれた先輩のセルジオが怪我したからかもしれない。配属されてからの初任務でのことだったからかもしれない。もしかすると、周りの大人が家族や友人のように近すぎない、適度な距離感を保つ人たちだったからかもしれない。

いずれにせよ、なのはは今少しばかり参っていた。

そんななのはを励ますようにメガーヌが優しい手つきで背中を叩いた。

「大丈夫よ、だってセルジオ君結構頑丈なのよ？」

ねえ、クイント」

「ん、んー、そうね！　前、お腹を銃弾でぶち抜かれた時も三日後にはピンピンしてたしー！」

「そ、そうなんですか……」

「だから、ね？　心配しなくても大丈夫」

メガーヌの言葉に、ふ、となのはが綻ぶように笑う。

その後、病室に行くまでメガーヌはセルジオの失敗談や、今までの怪我などのことを話してなのはの気を軽くする事に努める。

（まったく、こんな子に心配かけて。目が覚めたらお仕置きね、ホント）

メガーヌが心の中で自身の召喚獣でもけしかけるか、と考えながら誓いを立てる。

そうしてなのはたちがセルジオの病室へとたどり着く。

なのはが扉に手をかけて、思い出したように軽くノック。しばらく待つが、そこから返答が返ってくるなどない。

もしかしたら、という淡い期待を折られてなのはがしゅんとなるが、すぐにハツとしたように顔をパンパンと叩いて引き締める。

そして、努めて明るい表情と声色を作つて扉をゆつくりと開いた。

「——え」

そして、口から小さな音が溢れて落ちる。

あるはずのものが、ない。

病室の扉から見える景色はほとんど同じ。

よく見るリノリウムの病院の床。備え付けの小さなテレビに、小さな棚。申し訳程度の患者の私物。前になのはの持つてきた花のいけられた花瓶。

ただ、一つ違うところをあげるとすれば、患者が、セルジオが寝ているべき場所に、顔に白い布がかけられた人がいるということだ。

後ろで息をのむ声が聞こえるがなのはにはそんなことすら聞こえない。

「あ——」

ふらふらと魂が抜けたかのようになのはがベッドの方まで歩いていく。

勘違いだ、人違いだ、そう思いながら足を進める。耳に痛いほど響く、動悸の音を聞

きながら。

なのはがいつもなら顔のあるであろう部分にかかった布をめくり、そこに青白い顔のセルジオを見た。

「う、そ——」

その現実を認識した瞬間なのはの膝から力が抜けてぺたん、と傍にあつた椅子に腰を下ろした。そこに偶然椅子があつたのは幸運か。

なのはがもう一度セルジオの顔を見る。その表情は以前見た時とほとんど違いはなく、まるで眠っているかのようだった。

じわりとなのはの視界が滲むと目頭が熱くなつて、そのまま目の前を見ていられなくなつて思わず視線を下ろした。

「——う、く……」

必死に唇を噛むがそれだけでは耐えきれずに、なのはの小さな手の甲に一雫の水滴が跳ねた。

水滴はそのままなのはの皮膚を滑るように落ちていき地上本部の茶色の制服に小さなシミをつくる。

悔しかった。救えたかもしれない人だった。

まだ付き合いは短かったが、尊敬できる人だと、そう思っていた。

これから長い付き合いになったらいいな、そう思っていた人だった。だけど、それも伝える機会はない。

なのはの嗚咽が病室に響く。

そんな中、なのはの頭が優しく撫でられる。労わるように、ひどく優しい手つきで。
「や、めてください……」

「子どもは大人しく優しさを受けとくもんだ」

「そんなの、いいです」

「自分の相棒が泣いてるのに放ってはおけないだろ？」

「え——」

その言葉を聞いて、なのはが顔を上げる。

「セルジオ、くん……?」

「ああ。そんなに泣かれると俺としても困る」

そこには、普段となら変わらない様子のセルジオが困ったように笑っていた。
なのはの思考が完璧に停止する。

「——え」

「——?」

「ええええええええええええ?!」

そして部屋に響き渡る大声をあげて、勢いよく立ち上がった。

「な、なんで生きてるの?!」

「お、おまつ!　なんてこと言いやがる!　人の心持ってるのか高町?!」

「だつてさつき死んでたもん!」

「死んでねえよ!　　ずっと生きてたよ!　　なんならこれからだつて生き続けるよ

!」

「じゃあこれなに!」

ベットで半身を起こしたセルジオに涙目のままのなのが先程まで顔にかけてあった白い布を見せる。

「高町のハンカチか?」

「さつきまでセルジオくんの顔にかけてあったの……!」

「え、嘘お……」

訳がわからないという表情のセルジオの胸になのはが飛び込んだ。流石にこれにはセルジオも驚いたのか僅かに顔を赤くする。

「た、高町?」

「私、アウデイくんが、死んじやったかと、思つて……」

(あ、これはいかな……)

「本当に、心配したんだよ……」

ぐず、となのはの目からとめどなく涙が零れだす。そして次の瞬間には、なのははついに堪えきれなくなったかのように声をあげて泣き始めた。

「心配、かけたな」

胸の中でなく年下の相棒の背中を軽く撫でながら、扉付近にいる大人三人、特に気まぐすように頬をかいているクイントに、じとつとした視線を送るセルジオ。

「俺、昼前には目覚ましたって連絡が入っているはずなんすけど」

「えっ?! そうなのクイント?」

その言葉にメガーヌが隣を見ると、クイントが誤魔化すようにたははー、と笑っていた。

「え、えーと、外回りの時セルジオくんの病室に寄ったら丁度目を覚ましてたって聞いてさ。連絡まだみただったから、私が引き受けたんだけど……」

「まさか、クイントあなた……」

「いや、ちよつとした悪ふざけのつもりだったのよ? 現に隊長には伝えたし!

ま、まさかこんな重苦しい雰囲気になるとは思わなくて」

ゴメンね、と舌を出して戯けるクイント。

メガーヌとセルジオはよっほど何か言っただろうかと思っただがそんな気力も湧いて

こず、大きくため息をついた。

「隊長はもちろん知ってたんですよね」

「ああ」

「何でセルジオ君が生きてるって教えてくれなかったんですか？」

「……そういうコントなのかと、な」

「人の生き死にで遊ぶのはやりませんって……」

ゼストが寡黙すぎるのも問題だとメガーヌが頭を抑えた。

その微妙な空気は、自身の胸の中で泣きじやくるのをセルジオが何とかなだめるまで続いた。



「ご心配おかけしました。ゼストさん」

「構わん。体は大事だからな」

泣き止んで突然自分のしたことが恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にしてなのはをクイントとメガーンが連れ帰った後、病室はセルジオとゼストの二人つきりだった。

「タカマチとは随分仲良くなったみたいだな。俺も嬉しい」

「いや、あれは仲の深さに関係なく泣くタイプだと思えますよ、俺は」

そんな事より、とセルジオが真剣な面持ちでゼストと向かい合う。

「今回の報告書、高町から提出されましたか？」

「さっき目を通してきた。謎の機械兵器に、魔力使用不可空間を作り出す装置……あれはまさか……」

「ああ。実用化されていないはずのAMF、ですね。あんなとこの研究所にあつていい代物じゃない」

Anti-Magicking-Field
魔力結合無効化空間、略してAMF。

ランクとしてはAAAランクの防御魔法に分類されるものだが、二年ほど前これが魔力を消費せずとも機械的なシステムだけで発生させられるという論文が発表された。

そこそこの説得力のある論文ではあったものの、その発生に必要なメカニズムがやたらと難解で、金も食うことから机上の空論扱いされた。

一応いくつかの研究機関で研究は始められたものの、持ち運びできるサイズとなるに

は最低でも五年は必要になるとの事だった。

だったのだが……

「今回俺が見たAMF発生装置は、自動車くらい。管理局の研究機関がこの前発表したのは、確かスパコン並みのでかさだったから比べるまでもないな」

「……誰か、管理局も知らない違法科学者がいる、そういうことか？」

「わからない。わからないけど……」

セルジオがゼストから目をそらして、窓の外へと目を向けた。

「この件、もしかしたらこれだけじゃ終わらないかもしれない」

薄く雲のかかった夏空をからの太陽が眩しく、セルジオは思わず目を細めた。

そして三課

「皆さんご迷惑おかけしました。今日からセルジオ・アウデイ三等空尉現場復帰します」
そう言つてセルジオが深く頭を下げた。すると、三課の男連中が雪崩れるようにセルジオの元へと駆け寄っていく。

「おかえりー。休んでた分バリバリ働かせっからなー」

「ねえねえ、今回の傷のサイズはどんくらいなのー」

「がっはっは、というか今さらなんじやいなんじやい！
お前だいたいいつでも怪我しとるわー！」

「そうそう、この前なんて火事の中突っ込んでいつてさ！
流石にありや死んだと思つてたぞー！」

「いつそ死んだら俺の役職がスライドで上がるし、ここはもうちよい休んどこ？
な？」

「お前の階級じやセルジオがいなくなつてもなんも変わんねーよ」

「あ、暑苦しい！
いい年した男が絡んでこないでください！
せつかくの復帰なんですから清々しい気持ちで迎えさせてくださいよー！」

「んだとー、俺たちの愛になんてこと言いやがる。野郎ども囲めー!」

わちやわちやと揉みくちやにされながら何だかんだ胴上げされ始めたセルジオ。

「わーっしょい! わーっしょい! わーっしょい!」

「怖い怖い! 高くて怖い! 天井! 天井に当たる!」

「わーっしょい! わーっしょい! わーっしょい!」

「や、やめてっつて言ってるでしょうっ!」

「「そして死ぬえ!」」

「何という管理局員にあるまじき言葉遣いっ?!」

最後は天井に叩きつけられそうになったセルジオは直前で飛行魔法を使ってギリギリで静止する。

「危なくもう一回病院送りですよ! あんたら蛮族すぎるぞ!」

「はっはっはっはっはっ」

「笑い事じゃねー!」

これは三課職員のしばらく休んでいた事を気に病まない為にいつもよりはつちやけた行動でくだらない事は吹き飛ばしてしまえ、という気遣いなのだがセルジオがそれに気づくことはないだろう。

全体的にあまりに蛮族すぎる。

「やれやれ酷い目にあつた」

ため息とともにセルジオが自分のデスク、現在のコンビであるところのなのはの隣に座つた。

「よう高町。書類任せて悪かつたな」

「い、いえいえ。ア、アウデイさんこそ退院おめでとうございます」

「ん、本当は起きたらすぐに退院したかつただけどな、主治医がなかなか離してくれなかつた」

「あ、当たり前だよつ。あんな怪我してたんだからちゃんと休まないとー」

「でも病院暇なんだよなあ。メシも味付け薄いし。ピザとか体に悪いもんが食いたかつた」

「セルジオくんは自分の体のことに無頓着すぎるよ……」

げんなりとしたようにいうなのはの言葉にセルジオが少し目を開く。

「セルジオくんね」

「あ、ごごめんなさいっ！ つ、つい崩れた口調に」

「いや別にいいよ。あん時も敬語崩れてたしね」

あの時、というのがいつのことを指すのか察したなのはの顔が茹で上がったように一

気に赤くなる。どうやら病院での事はまだかなり恥ずかしいらしいかった。

そんななのは頭をセルジオが軽く撫でる。

「な、なに？」

「俺が倒れた後、急いで三課に連絡いれてくれたんだろ？」

高町のおかげだ。ありが

とう」

「べ、別に、コンビ、ですし」

恥ずかしそうに唇を尖らせながら発した言葉に、リボンで結んだ二房の髪がびよこびよこ揺れる。

「かーわいい、奴だな、高町は」

「ちよ、髪！ 髪が乱れちゃうから〜」

そんな小さな相棒の頭をセルジオがわしゃわしゃと荒つぽく撫でると、なのはがきやあきやあ言いながら逃げていく。

そんなのはを見てセルジオはひとしきり笑うと胸ポケットから銀色のカード、友人に改造してもらったという『S2U・カスタム』を取り出すと卓上のコンピュータに接続した。

そして、データを選択すると書式ファイルを開いてモニタに写ったそれを確認し始める。

「それなんなの？」

なのはが乱れた髪を結びなおしながらセルジオのデスクを覗き込んだ。

「んー、入院中に纏めた捜査資料。次引き受ける案件とかに使おうかなー、と思つて」

「もう次のお仕事決めてるの？」

「おう、暇な入院中にデスクワークしながらな」

「セルジオくん病室で安静にしときなさいって言われてなかった？」

「だから安静にデスクワークしてた」

「頭いいぶん言葉尻を捕まえて都合のいい解釈してる……」

じとつと睨むなのはの視線などどこ吹く風で資料を整理していくセルジオ。その手は淀みなく、なのはがしていたように悩んだり、モニタを睨んで唸ったりなどしない。

（そう言えばメガーヌさんがセルジオくんは最初から優秀だったって言ってたなあ）

メガーヌ曰く、セルジオが三課に配属されたのは五年前、十一歳の時。

メガーヌはデスクワークでの教育担当だったらしいのだが、少し説明を受けただけで割とさくつと理解したセルジオはそれ以後特に手を煩わせる事はなかったという。

「セルジオさんって優秀なんですね。羨ましいです」

ぶく、となのはが頬つべたを膨らませる。

「俺が？　面白い事を言うな、高町は」

ハツとセルジオが鼻で笑う。

「俺は魔力が低かったからな。代わりに頭を使うしか無かっただけだよ。学生の頃からちまちまマルチタスクの練習をして、ゼストさんに槍の稽古つけてもらったりしてなんとかここまで来たんだよ」

そもそもセルジオの魔法適性自体があまり戦闘に向いているものではなかったりする。

人並み程度の身体強化、多用できない加速魔法、人より脆い魔力刃、射撃はできずシルドもはれない。比較的適性に恵まれた砲撃も、自前ではすぐに魔力不足になりかねない。

解析と短距離転移。そしてマルチタスク。

それだけが学生の頃のセルジオの頼みの綱で、鍛え上げて来た魔法であった。

「だから、俺としては高町の魔力の多さはかなり羨ましかったりするんだぞ?」

「で、でも、セルジオくんの方がなんか凄いなもん!」

「じゃあ互いに補っていく形で行こうぜ、な?」

「むうー」

未だ不満そうなのは頭をまた軽く撫でてなだめるとまた資料に目をやった。

(……ない、か。まあ、AMFの研究所なんてそうそうあるもんでもないよな)

一応ゼストと話し合って裏で捜査は継続しよう、ということにはなったものの目に見える範囲でそれっぽい案件はなさそうだった。

「まあ今考えても仕方ないか」

「え？」

「何でもない。独り言だ」

セルジオは大きく伸びをするとデバイスとの接続をきって胸ポケットへとしまう。そして、今度はいつも持ち歩いている古びた懐中時計をだして時間を確認する。

（約束の時間まで一時間……、軽く外回りしたら潰れるか）

ついになのはのコネクションづくりの顔周りでもしようと思いつ。

「高町、午後の予定は？」

「クイントさんから近接戦の指導を受ける予定だけど……なんぞ？」

「この後俺のデバイスを受け取りに行くんだが、そのついでに俺の知り合いに顔見せでもしようかな」

「じゃあ今日はそれについていけばいいの？」

「ああ。多分午前いっぱい終わるからクイントさんの件は問題ないだろうよ」

「わかった。準備しておくね」

「準備できたら俺のバイクが置いてある車庫に……」

そこまで言ってセルジオの動きがピタリと止まる。

「なあ高町、俺を回収しに来たのって誰だっけ」

「クイントさんと救急隊の人だけど？」

「だよなあ……」

なのはの答えを聴いてセルジオが顔をさーっと一気に青くしながらダラダラと汗を流し始める。

「どうしたの？」

なのはがこてん、と首をかしげる。

「いや、俺のバイクつてもしかして置きっぱじゃね？」

「あ……………」

「だよなあ…………」

泣きそうな顔でセルジオが先ほどと同じセリフを繰り返した。

「悪い高町俺は現場に急行しなければ無くなった」

「わ、私も行くよ！」

「これはベストさんに飛行申請許可を出させるのも辞さない…………！」

「そ、それは流石に無理じゃないかなあ」

三十分後、研究所の近くにあったバイクが奇跡的にまだ結界に守られているのを見て

安心したように崩れ落ちるセルジオの姿があつたとか無かつたとか。



「センセイ、お客様ですよ」

クラナガンの研究区画の一室になのはとセルジオは訪れていた。

入るときに一通りチェックを受けた後、スタッフさんに研究室の一つに通される。

薄暗いそこはなのには理解できそうもない無数の機械類が無造作並んでおり、足の不見所があるかも怪しい。

そんな研究室で楽しげに動き回る、髪を軽く切りそろえている瘦躯の男が一人。

セルジオが、またやつてるなあ、と頭をかいた。

「お久しぶりです、ベゼル教授」

「おお、これはこれは君はバルクス君じゃないか！」

「セルジオですよ」

「うむ、確かそんな名前だった！　まあすきなところにかけたまえ！」

教授は愉快そうに笑うと弄っていた機械類を退けて、棚の中を「そそそことあさり始める。

「セルジオくんセルジオくん、座るってこれどこに座るの?」

「(座らない)」

「(え?) でも座れって……)」

「(因みに高町の斜め後ろにある機械、魔力を自動的に吸い出して電気へ変換するモンだ。触ったら魔力欠乏になってぶっ倒れるぞ)」

「(え)」

「(そして俺の右手側にあるUSBみたいなのは触ったやつに自動的に戦闘技能をインストールするものだが……容量が多すぎて脳味噌がパンクする。無事で帰るには発明品を触れないことだ)」

「(何でこんなとこ連れて来たのおっ!)」

「(前俺のデバイス見たいって言ってたし)」

「(こんなとこなら三課で見せてくれても良かったよ……)」

ふんふんと鼻歌を歌いながら未だ棚を漁っている教授の背中を見て、なのはが小さくため息。

「(そういえばセルジオくん発明品の詳細どうやってわかったの?)」

「(解析魔法)」

「こういう時にもセルジオの解析は役立つってくれる。

「おー! あつたぞーバーゼルくん!」

「連絡していたんですからもうちよつとすつと出してくれると嬉しいですね、ベゼル教授。あと俺の名前はセルジオです」

「あつはつは、そうだったな」

「楽しそうに笑いながら教授が、セルジオへ銀色のガントレットを投げて渡した。それを他の発明品に触らないように慎重に受け取ると、セルジオが眉をしかめる。

「これは……」

「私の発明品、デバイスタイプZー3X、通称『ゼファー』。気に入ってくれたかネ」

「いや、デカくないですか。前のゼファーはプレスレットだったじゃないですか」

「色々詰め込んでたらデカくなっちゃったネ。一応制服の下に仕込めるんじゃないかな?」

「適当ですね……」

「イヤイヤ、その分性能は上がってるから。優秀なキミなら使いこなせるサ」

「それとも、とセルジオの瞳を見つめて瘦躯の男は、頬を吊り上げて薄い笑みを浮かべる。

「機械兵に遅れをとったバックスクンの手には余る代物かな?」

意図せぬ言葉にセルジオが言葉に詰まる。

「知ってたんですか」

「まあ、ネ。あれの解析が私の方まで回って来たんだヨ。その時、チラツとね」

「そうでしたか……」

目の前の教授は少し人格的にはおかしいが極めて優秀であるしそういうこともあるだろう。現に、適当に転がしてある発明品の中には管理局のデバイスシステムに採用されたことがあるものも混ざっていたりする。

「どうだネ? 『ゼファー』使うのやめとく?」

「いえ、そこまで言われたら立つ瀬が有りませんからね。あなたの『ゼファー』、大切に使用させていただきます」

「キミならそういうだろうと思っていたヨ」

満足そうに笑う教授の前でセルジオが前腕部を半ば程まで覆う『ゼファー』をどうしようか決めあぐねて、仕方なく制服の上から装着する。

と、ここで教授がじつと自分を見ている存在をみつめかえした。というか今の今までその存在に気付きもしていなかったのだが、セルジオから気がそれた瞬間に目にはいったのだった。

「君は……へえ、面白いネ。魔力の量が桁違いだ」

興味深そうにそういうと、教授がなのはの目を覗き込む。なのはは、その深い洞のよ
うな瞳から目をそらすことができない。

教授は頬を半月状にして一歩近寄ろうとして、視線を遮るようにセルジオが踏み出
した。

そうすることでまだ小さいなのはの体はすっぽりとセルジオの陰に隠れてしまう。

「ダメですよ教授。高町はもうC・W社と契約してますから。下手なことすると怒ら
れますよ」

「ム？ 『フォートレス』と『カノン』の所カ。ならば仕方あるまい」

興味が失せたとばかりに大きいため息をつく、教授は先程まで座っていた席に戻
り、つまらなそうに手を振った。

「さて用事は終わったねベゼルくん。さっさと自慢のバイクで帰らたまえ」

「俺の名前はセルジオ……って、ベゼルはあなたの名前ですよ！」

「そうだったかもネ。また定期メンテの頃に会いましょうウ」

もうこちらをみることもなく、ばいばい、と手を振る姿にセルジオが仕方ないあとで
も言いたげに笑みをこぼして研究室を出た。

帰り際、出口近くまで見送ってくれたスタッフに軽く手を振りながら、二人はバイク

を停めた駐車場まで歩き始める。

「んー、『ゼファー』デカくなったなあ」

自身の色素薄めの金髪を触りながら左腕のガントレットに視線を送る。『陸』の地味な茶色の制服とはミスマツチ甚だしかった。

セルジオの視線がガントレットから滑るように、自身の左側の無言でとことこ歩くなのはへと移る。

その肩を励ますように軽く叩く。

「今回は高町も災難だったな。けど、教授も悪い人じゃないから誤解しないでやってほしい」

セルジオの知る限り教授が自分も含めて他人に興味を持つのは初めてであるように見えた。

（もしかして女だから、いやねえな。クイントさんと来た時は見向きもしてなかったし）
もしかすれば教授がロリコンという線も残っていたが、その可能性はあえて無視するセルジオ。というか無視したかった。

「ねえ、セルジオくんとあの人とはどうやって知り合ったの？」

「俺と教授？」

突然無口だったのはから声がかかる。その意図しない質問にセルジオがしばらく

なんと答えたものか、と考え込み、そして、言葉を選びながら説明を始めた。

「ええと、教授は管理局と契約した研究者なんだ。それで、デバイスのテストを欲しがってたんだけど、俺より上の人間には適任者がいなくて、俺に白羽の矢がたったんだ。挨拶に行つたのが去年の夏だから、そろそろ一年くらいか？」

「そつ、か……」

実を言うとテストの条件というのが『なるべく演算能力の高い人間』というもので、しかも変わり者で知られた教授からのものという事もあって誰も引き受けたがらなかっただけだったのだが。

まあ、セルジオはそこまで話す必要はないだろうと判断する。

「どうかしたのか？」

「いや、その……なんとなくあの人は苦手だなあ、と思つて」

「ははは、あの人とあつたらみんな同じこと言うな」

少し言いくそうなのはセルジオが笑い飛ばす。だが、まだなのは表情は暗いままだった。

どうやら、人の事を苦手と思つてしまった自分に暗い感情を抱いているらしかった。

ふむ、と腕を組む。

セルジオが懐から懐中時計を取り出して今の時間を確認すると、頭の中で目的地まで

の道筋と待ち時間諸々合わせて計算をする。

「なんとか間に合うか」

結果、昼休みの終わりにはギリギリ、と言う所だった。

「なあ高町、甘いものは好きか？」

「え、うん、好きだけど……」

「君に選択肢をあげよう！」

ぴつとセルジオが指を一本たてる。

「ひとつ、このまままっすぐ三課に帰る」

びしつとさらにひとつ指を増やす。

「ふたつ、昼休みギリギリになるが、俺のオススメのカフェで飯を食って帰るか」

そして、にひ、と笑う。

なのはが一瞬ぼかんとしたようにセルジオを見つめた。

やがて何を言わんとしてるか理解すると、なのはが悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「それはセルジオくんがご馳走してくれらるってこと？」

「ん、まあな。初任務の事の労いだとも思ってくれ」

「えへへ、じゃあいっぱい食べちゃおう」

「お、俺の財布が死なない程度程度に頼むぞ……」

少し雰囲気を楽しげなのは顔を見てセルジオがゆるく笑って、ふと研究所の方を振り向いた。

(教授って、なんの研究してるんだっけ……)

少し考えて見たが思い出せそうにない。

「セルジオくん？」

「いや、何でもないよ」

不思議そうに見ているなのは頭を軽く撫でて気をそらして歩き出すと、セルジオはなんとなくガントレットを触った。

宴の前

クラナガンの空を二つの影が飛んでいく。

一つは白い光を纏いながら飛行魔法による追跡を行うセルジオ。そしてもう一つはクラナガンの高層ビルの隙間を縫うようにして逃走を続ける魔導師の男。

男の飛行は空戦魔導師であるセルジオの目から見てもなかなか堂に入ったもので、なんらかの訓練機関で修練を積んできたと言うことがうかがえた。

「その魔導師の人！即刻魔法の使用を中止して投降してください！　悪いようにはしないから！」

「管理局の言うことなんか信じられるかよ！」

「さもないと凄いとラウマを植え付けられるかもしれないぞ！」

「うるさいって言ってんだろ！」

男が量産品の杖型デバイスの先端をセルジオに向けると、そこから青い三つの弾丸を発生させ射出してくる。

ビルに当たる、と判断したセルジオが急遽飛行を停止させて解析魔法を広範囲に発動させる。そうする事で高速弾の軌道を視線を動かすことなく把握、加速魔法を併用してその全てを叩き斬った。

青色の弾丸が銀色の槍に払われ、薙がれ、切り裂かれて、構成魔力を大気に溶かしながら薄い光を放つ。

その光の向こうで行われた曲芸じみた動きに男が悔しげに唇を噛む。

「バケモンかよ……!」

「練習すれば誰にでもできるぞ」

飄々と言つてのけるセルジオは、デバイスである槍、ゼファーを肩にのせて男に向き直る。

「これが一応最後の警告だ。現在のあなたの罪状は違法質量兵器保持、無断魔法使用。此方としてはこれに公務執行妨害まではつけたくない。あなたは取り締まるべき犯罪者でもあります、守るべき市民でもありますから」

どうですか、と問いかけるも男から返答はなく、ただ先程よりも鋭い目で睨み返してくるだけだった。

その目が、何よりも雄弁に男の意思を語っている。

「(交渉は決裂?)」

「ああ。いつも通りに頼む」

「了解です。セルジオくん慎重にお願いね」

「そつちこそ外すなよ」

頭の中に響く声に軽く応答して、セルジオは槍を握りなおす。そして、デバイスでの代替演算と自己演算を両立させる事で、通常より遥かに早くかつ、低い魔力での加速魔法を発動させる。

白光が瞬き、ゼストのものによく似たコートの裾をはためかせながら魔導師の男へ向けて一気に距離を詰めていく。

男はそれを阻止するように先程のように無数の直射弾を撃つて来るが、セルジオはその全てをいなし、流して、ビルや人への被害を防いでいく。

(マルチタスク分割ルーラー短距離転移演算式駆動)

思考が分割され、男を見据えて槍を振るう自分と、転移のために演算をする自分とが同じ脳内に同居し、一つの目的のために動き始める。

(演算完了。短距離転移)

魔力を流し込んで魔法を発動すると三次元平面上からセルジオの存在が消失、100万分の1秒のラグと共に十メートル近くあった距離を跳躍し、男の真下へと姿を現した。

突如、掻き消え、そして現れた存在に男が慌てて杖を向けるが、それが間に合うほどの時間をセルジオは与えない。

セルジオが槍を握らない右手で拳の形を作ると、足場のない空中で飛行魔法で擬似的に体を固定、即席の力を伝える流れを作り出す。

心の中に、実現すべき姿を映し出す。

ゼファアーに流し込んだそのデータを並列結合したマルチタスクで解析、分解したそれを自己流にトレースしなおす。

「模倣——アンチエイン・ナックル繋かれぬ拳」

閃光が、走る。

音を切りながら拳が振るわれて、魔導師の男の杖と腹をまとめて殴り抜きながら遙か上空まで吹き飛ばした。

「よし、撃て」

男の体がビルの間から抜けて、遮蔽物のない空に至ったのを空間解析で感じ取ると、遠くにいる相方へと念話を送る。

するとその後間髪おかずに桜色の砲撃が遙か遠距離から向かって放たれた。

まるで流星。空気をも消しとばして、まとめて薙ぎ払うような超一流魔導師にしか許されない高ランク魔法。

男はそれに気づき焦ったように回避しようとして、それを防ぐように砲撃と同色のリングバインドが無数に現れた。

急いで破壊しようとして、そのバインドの異常な強度が、男の力では歯が立たないということがわかる。

「ひ——」

男の絶望したような表情を見られたのは一瞬、あつという間に襲ってきた奔流が辺りをしばらくの間桜色に染め上げる。

「俺は一応、投降を薦めたぞ」

随分見慣れてしまったその光景が終わると、バリアジャケットを大きく破損した男が落下していく。

それを空中で回収しながら言い訳するように呟くセルジオ。

『お疲れ様、セルジオくん』

男に魔力使用不能の手錠をつけていると、あるビルの上を陣取り超遠距離砲撃を難なく当ててみせたなのはが念話を送ってきた。

「そつちこそお疲れ。相変わらず鮮やかな手際だ」

『えへへー、じゃあ今日もご飯はセルジオくんの奢りかなー』

「それ昨日も俺だったよな。まあいいけどさ」

『やったー。アイスもつけてもらおう』

念話越しにも楽しさをにじませるなのは。その様子を耳にしながら、セルジオは魔導師の男を小脇に抱えて連行していく。

(高町、随分仕事に慣れたなあ)

高町なのはが三課に配属されて二ヶ月近く。今の彼女はミッドの空で猛威を振るっていた。



「昇進、ですか？」

「ああ」

その日なのはは隊長執務室に呼び出されていた。二ヶ月がたちその間の働きぶりへの評価でも貰うのかな、と思っていたなのはに意外な話が飛び込んで来た。

なのはが執務室のソファでテーブルを挟んで反対側にいるゼストの顔を見ている。相変わらず寡黙で何を考えているかわからなかった。

「本来はもつと時間がかかるが今の功績を見れば妥当なところだろう」

「えーと、ありがとうございます」

「近く正式に通達がある。詳細はその時にでも」

「わ、わかりました」

なのはは立ち上がるとゼストに深々と一礼、そして部隊長室を出て行くとする。そんな背中に低い渋さのあるゼストの声呼び止めた。

「高町」

「は、はい何でしょう?」

「昇進、おめでとう。これからセルジオと頑張ってくれ」

その予想外の言葉になのははじかれるように振り向くと、そこには唇を緩めるだけのわかりにくい笑みを浮かべるゼストがいた。

「ありがとうございますっ!」

その寡黙な男の不器用な優しさを受け取って、なのははまた大きく頭を下げ、礼を言う。と執務室を後にして自身のデスクまで戻っていく。

「お、帰ってきた」

「セルジオくん」

「よ、お疲れ」

一人で黙々とホログラムのキーボードを叩いていたセルジオが、なのはが入ってくるのを見て軽く手を挙げた。

「隊長なんて？」

「なんかなのはに昇進のお話が出るみたいで、そのことについていろいろ」

「ふーん」

なのははセルジオの隣に腰掛けるとぐでー、と机に体をもたれかからせると伸びてしまった。

（二ヶ月で昇進か。まあ妥当なところか）

高町なのはは少し特殊な形で地上本部預かりになっている魔導師である。

彼女の本当の所属は次元航行艦隊、つまり『海』であるのだが、その優秀さに目をつけた『陸』がいくつかの条件を提示して引き取ったのだ。

元からAAAクラスの超一流魔導師、しかも長年管理局の頭を悩ませていた『闇の書事件』を集結させた立役者でもある。

話題性は抜群であるし、見た目の方も少女らしい可愛らしさがあって人受けもしそう

だった。支持率の低下している地上本部としてはこれ以上ない人物であるし、彼女をガン目立たせていこう、という思惑もあったりする。

なのはが三課に配属されて二ヶ月。午後と休日だけしか顔を見せないにも関わらずその出撃回数は三十を軽く超えており、その出撃回数にふさわしい数の検挙も行なっている。

上層部の、いい機会だしどうせ昇進するならさっさと昇進させて上手く使おうぜ、という考えが透けて見えていた。

(なるべく負担少なくてやらなきゃなあ)

セルジオが頭をかきながら隣の少女について考えていると、そろーつと後ろから忍び寄る姿が一つ。

「隙ありっ」

「ないです」

ひゅつと書類をまとめた剣が振り回されたがそれを感じ取っていたセルジオは頭を下げて回避した。

「何ですかクイントさん。俺は見ての通り仕事なんですが」

「私だって仕事だよ。ただ暇になったからなのはちゃんと話しに来ただけ」

「なら俺への一撃を挟まずに話しかけて欲しいもんですね」

「ねー、なのはちゃん隊長と何話してたのー?」

「聞けや」

セルジオの文句もクイントには効かない。というかそもそもクイントは聞いていなかった。天衣無縫な彼女は、いつもセルジオを振り回していた。

「え、えーと」

なのはがちらりと視線を隣に送る。話していいのかな、と問いかけてくる視線にセルジオは特に何も考えず、いいんじゃないの、と目で答えた。

「実は隊長から昇進のお話を貰って」

「あら、そうなの。結構早めだったのね」

「なのはとしてはまだ早いとは思うんですけど……」

「うーん、でも能力がある子を下手に低い階級のままというのも外聞も悪いし、部隊運用もし辛いから。なのはちゃんなら妥当でしょう」

「そうなんでしょうか……?」

今ひとつ納得しきれていないようななのはを珍しく優しく優しげな表情でクイントが小さく笑んだ。そして、なのはの頭をポンポンと優しく撫でる。

「そっかー、ついになのはちゃんも昇進ね。うんうん、よく頑張りました」

「あ、ありがとうございます」

「この分だとセルジオくんみたいに私の階級抜いていくのも時間の問題ね」

「そ、そんなことつ。クイントさんの上なんて……!」

「あつはつは、いーのよいーのよ。私階級なんて気にしないし」

クイントの階級は陸曹長。一応現在のなのは階級、二等空士の三つ上だが、なのはその差を二ヶ月で二つ差にした。クイントはおそらくこれが一つ差になり、同じになり、抜いていくのに一年かかるまいと踏んでいた。

「とうかなのはちゃん頑張るんだから気にしなくてもいいのよ」

「でも、セルジオくんに助けてもらうことも多いですし、なのは力だけじゃ無いような」

「それこそ気にしなくていいじゃない。だってこの子はあなたのコンビなんだし」

「それを決めるのはクイントさんではなく俺ですがね。まあ、高町の頑張り、という点では同感です」

クイントの勝手な物言いに口を挟むセルジオ。

「俺には超遠距離からの砲撃なんてできないし、お前がいるから安定して戦えるって面もある」

「でもでもなのは近づかれたらあんまりできること多くないし……」

「いやバインドでガチガチにしてから砲撃撃つたりとかあるよな。その畜生戦法昔やつ

たんだろ？」

「それはやむを得ずです！ フェイトちゃんものすごく強かったし！ とうかセ

ルジオくんが言うほどじゃなかったし！」

「レイジングハート、その時の映像見せて貰ったりできますー？」

「にやー！ やめてー！ レイジングハートも真面目に応えようとしなくていいか

らー！」

セルジオの言葉に真面目に対応しようとする赤い宝石に必死に言い聞かせるのはと、楽しそうに笑うセルジオ。

そんな二人をクイントが興味深そうに見る。

最初はどこか互いに遠慮がある風だったが、今では随分打ち解けているようにも見える。まあそもそも誰に対しても比較的寛容な態度で接するセルジオと、人当たりのいいのはでは仲良くなるのも時間の問題であったのかもしれない。

「結構二人って良いコンビになったわね」

だから、思わずクイントはそんな事を言ってしまった、二人が同時に不思議そうな顔で首をかしげる。

「まあ、二ヶ月にしてはそこそこ、ですかね。俺のバトルスタイルにも上手く合わせてくれますし」

「セルジオくん、フェイトちゃんと似た感じの戦い方するから比較的合わせやすかったんだよね」

「フェイトちゃんって言うが高町の親友の、か。どうりで慣れてると思ったよ」

クイントは、そう意味じゃなかったんだけどなー、と思いながらも本人たちに言うのも野暮かと結論づけて黙っておく。

ふむ、とクイントが腕を組んで考え込む。

「じゃあ、タイミングも良いしここら辺でやつちやおうかな」

独り言のように呟かれたその言葉にセルジオが露骨に反応する。

「えー、それ俺行かなきゃダメですか……」

「なのはちやんを一人にするのに心が痛まないなら別に良いわよ」

「またそうやって断りにくい事を……」

珍しく露骨に嫌そうな表情を浮かべたセルジオの背中を軽く叩くと、クイントはなのはの両肩を掴んでにこりと笑った。

「なのはちやん」

「はい？」

「なのはちやん次の休日の夜って暇だったりする？」

そう言って、にこりと笑うクイントの横で、セルジオが小さく息をついた。

宴の始まり

「えー、ではなのはちゃんの昇進を祝ってかんぱーい」

『かんぱーい!』

クイントの音頭に合わせて三課のメンバーが声を合わせてグラスをぶつける。そして「めでたい」と何度も言いながらグラスの中身を飲み干していく。その中身は大人だけあって、なのはの飲めないアルコールを含むものだったりする。

「あ、ありがとうございます」

(この人たちただ理由にかこつけて騒ぎたいだけじゃねえかな……)

その様子を少し照れながら見ているなのはの横で、セルジオが小さくため息。

時刻は夕刻。場所は三課行きつけの食事処。参加人員はゼストと一部を除く非番の局員。金は太っ腹なゼスト持ちで、高町なのはの昇進を祝う食事会である。

言い出しっぺはクイントだが、できなかつたなのはの歓迎会も兼ねて盛大にやればいい、と言ったのはゼスト。じゃあ店を予約しておくわね、と手早く準備したのはメガー

又。それにやんやんやと騒ぎながら賛成したのがほかのメンバー。なのはは嬉しそうに礼を言つて、セルジオはそんなみんなにため息交じりでついてきた形だ。

まあ、なのはが未成年なこともあつて飲み屋に入らないあたりがメガーヌの気遣いで、時間が早めになつていゝことに三課のメンバーの根本的な人の良さがわかるだろう。はつちやけるだけできちんと良識はあるのだ。

しばらく乾杯の嵐を受けていたなのはが落ち着くと、注文したウーロン茶を一口飲んで、隣のセルジオへと目を向ける。

「こういうのつてよくあつたりするの？」

「んー、どうだろうな。その時々によるが、デカイ事件ヤマが終わつた後とか、誰かの祝い事の時とかにあるかな。前だとメガーヌさんが結婚した時とかな」

「へえー、仲いいんだね皆さん」

「まあそれが三課の良さだよ。隊長が適度に締めてくれるお蔭」

「さすがゼスト隊長だなあ」

「はいはい、ほら飯食え高町。その有難いゼスト隊長の奢りなんだから」

運ばれてきた料理をセルジオが小皿に取り分けてなのはに渡す。お礼を言つたなのはが、自身の母親が作るものとは違う見慣れない料理を物珍しそうに口に運んでいると、不意にとなりにクイントがやってきて腰掛ける。

「や、改めておめでとうねなのはちゃん」

「ありがとうございます、クイントさん」

「ちゃんんと乾杯も終わったし、なのはちゃんが帰りたくなったらいつでも帰っていいからね」

「なのはのための会なのにそれは悪いですよ」

「いや、いいんだよ高町。この人達の目的の一つは君のお祝いをすること。つまり、この会に高町が来た時点で目的は達成してる」

「うんうん。それに子供を無理やり私たちに付き合わせるなんてできないもの」

「心配ありがとうございます。でも大丈夫です。こういう賑やかなの楽しいですから」

「ならよかったわ」

にっこりと嬉しそうに笑うクイント。

にしても、とクイントがセルジオの肩を抱き寄せる。

「セルジオくんがこういうのに来るのは随分久しぶりねー。いつぶり？」

「前は確かギンガちゃんたちがいた時ですから……、半年前ぐらいですかね」

「ギンガちゃん？」

聞き慣れない名前になのはが首を傾げるとクイントがすぐに補足してくれた。

「ウチの娘。こういうのには時々連れて来たりするのよ」

「そう言えばギンガちゃんたちは今日居ないんですね。ナカジマさんが面倒を？」

「そうそう。一応誘ったけどなんでも見たいテレビがあるらしくて。断られちゃった」

まあ、でも、と言ってからかうようにクイントが笑みを浮かべる。

「セルジオくんが来るって言ったら二人とも来たかもね。あの子達あなたのこと大好きだし。どうする？」 どちらかお嫁さんに予約しとく？」

「またそういう冗談を。あの子たちは俺を時々遊んでくれる親戚のお兄ちゃんくらいにしか思ってませんって」

「さーて、どうかしらね。そんなこと言っていると足元掬われるわよー」

「どうかそもそも俺とあの子達は一回りくらい違うんですよ。無理ですって」

「そんなの私とゲンヤさんだって100くらい違うわよ。愛の前では年の差なんて無力よ。ねー、なのはちゃん」

「そのタイミングでなのはに振られても……」

あはは、と苦笑いをするなのは。まだ初恋すらししたことのない彼女にとっては酷な話題だ。

そのなののはの様子にクイントが目を光らせながら食いついた。

「その様子じゃなのはちゃん初恋まだだと見たわ。なにー、気になる人くらいいいの？」

「えーと、そういうのは、あんまりわからなくて」

「あら、クラスに一人くらいカッコいい男の子いるでしょ？」

「クラスの男の子は、なんだかお話が合わなくて……。だから、あんまり」

「じゃあなのはちゃんは年上のオトナっぽい人が好みなのかしら。じゃあ、ウチのセルジオくんなんてどーお？　安くしとくわよ」

「セルジオくんは尊敬できる先輩ですけど、そういうのはあんまり……」

「そっか、残念ねセルジオくん」

「なんで勝手に引き合いに出されて振られたみたいになってんの？　俺一回も高町に好きとか言っていないんだけど」

「次の恋を探しなさい」

「ごめんねセルジオくん」

「なんで今度は励まされてんの？　いや、クイントさんそんな肩を叩かれても困りませんから」

しばらく三人でたわいもない会話をしていると、両手に花のセルジオを目ざとい男性局員の一人が発見する。

「おいおいセルジオ、久しぶりに来たんだから俺らと飲もうぜ？　もう16超えたか

ら飲めるだろー？」

「いや俺酒はあんまり……」

「まあまあそんなに強いのは飲ませないから。たまには男と絡んでくれよ」

「それなら構いませんが……」

「よし、言質とつたぞ」

「え」

「野郎どもこいつ潰してペロペロにして高町チャンの前に叩き出してやろうぜ」

「さーせん、店員さーん、注文いいですかー」

「くくく、ついにこの時が……、お前が死ぬ前に適度にストレス抜いてやる」

「いややめてくださいよ？ 適度に頼みます適度に」

「ボクたちがお前を自制心の枷から解放してやるよ……い！」

「信頼できない……。明日も仕事するつもりなんで頼みますよ？」

ずりずりと男衆にヘッドロックとともに連れ去られていくセルジオ。

「あー、ごめんねなのはちゃん。私あつちを見て来て来るわ。阿保はいないと思うけど、一応ね。あ、でもそれじゃあなのはちゃんが一人になっちゃうか……」

「なのはなら大丈夫ですよ。ここでご飯食べてますし」

「いやそういうわけにはいかないでしょう。うーん、どうするか」

「じゃあ、私がなのはちゃんのお話は私が引き受けようかしら」

胸元で腕を組むという思春期男子がいれば釘付けになってしまいそうなポーズをとるクイントの背後から紫髪の女性が姿を現わす。未だコートを着たままで、顔も僅かに赤い。片手にグラスを持っているが、どうやらまだ来たばかりらしい。

「あら、メガーヌ。いつ来たの？」

「今さつき。ほら、クイントはセルジオ君のここに行つてあげて。あの子が潰れたらめんどくさいわよ〜」

「ん、ありがとメガーヌ！」

クイントと入れ替わるようにメガーヌがなのはのとなりにも腰掛けた。メガーヌはコートを脱いで近くのハンガーにかけると、机にまだ残っている串に手を伸ばして一口かじる。

「メガーヌさん新しいの注文しましょうか？　もうあんまり残つてないですし」

「いいのよ。私あんまり食べるほうじゃないしね」

うふふ、と笑うメガーヌ。

「なのはちゃんの階級つて次なんだつたかしら？」

「一階級の昇進で、一等空士になるつて聞いてます」

「そうなると階級の差は、クイントと二つ、私とセルジオくんとは三つかしら。もう新人扱いはできないわね」

「いえいえ、年数はかありません。なにより皆さんにはまだまだまだお世話になってばかりですし！」

メガーヌはぶんぶんと首を振るなのはの姿に少し笑みを漏らして、手の中のグラスを傾ける。その姿はなのから見ればとても大人っぽくて、まるでドラマで見るワンシーンのようにも見えた。

思わずなのはは見惚れたようにメガーヌを見つめてしまう。それに気づいたメガーヌは優しげな笑みと共に「なあに？」と問いかける。

「メガーヌさんって大人っぽくて凄いです。なんだか憧れちゃいます」

「ふふ、なのはちゃんも私から見ればとつても可愛いわ。娘ができたらあなたみたいになつてくれたら嬉しいもの」

「あはは、ありがとうございます」

なのははそう言つて笑うもののその表情はどこか納得していないような色を示している。

「可愛いって言われるのは嫌？」

「嫌、じゃないですけど。子ども扱いされてるみたいで、少し苦手かもです」

「じゃあなのはちゃんは早く大人になりたいのかしら？」

「そう、ですね」

目を閉じれば今でも昨日のことに思い出す光景がある。

必死に戦って、守ろうとして、それでも守れなかった、救いきれなかった、手の中からこぼれていった人がいた。

おそらくなのはその事をずっと忘れないだろう。もつと、どうしようもない現実をも何とかできる力があれば救えた存在があつた事を。

「私は、救いたい人を、救われなきやいけない人を、ちゃんと助けられるような大人になりたいです」

なのはの答えを聞いてメガーンが少し目を細める。

(早く大人に、ね)

よく子どもと大人の違いを表す言葉に次のような表現が使われる。

『大人になりたい、と思うのは子ども。子どもに戻りたい、と思うのが大人』だと。

子どもは大人に希望を抱く。自分より身長も高く、力もあるそんな存在は、まだ幼い彼ら、彼女らにはとても遠い存在で、なんだか何でもできそうな超人的な存在にも見える。

けれど、大人になれば色々と思ひ知るのだ。自分の力の限界とか、努力しても実現しない夢だとか、どうしようもない才能の差だとか。そうした事を知って、身を以て体験して、彼ら、彼女らは現実を抱く。そして過去へと想いを馳せるのだ。

それに照らし合わせて考えるならば、『大人になれば今より凄くなれる』と考えているのははどうしようもない子どもで、メガーヌは大人ということになるだろう。

メガーヌがグラスを傾けながら少し離れたところで、男たちと酒を飲むセルジオへと目を向ける。特に酒の好みはないらしく、先程から勧められたものを飲んでいようだ。

「ねえ、セルジオ君と仕事しててどう思う？」

「え、セルジオくんですか？」

「そ、セルジオ君」

唐突に投げかけられた話題に目をぱちくりさせながらも、今まで二ヶ月の間引き受けた任務のことについて考えてみる。

「結構なものにも気をつけてくれて、サポートとかも上手い先輩だと思います。ただ、ちょっと何考えてるかはわからないかもです」

「そーねー、セルジオ君ちよつと変なところあるものねー」

「そうなんですよ。一緒にご飯食べに行っても、高町に任せる、としか言わないし、飲み物すら自分で選ばないんですよ」

「あはは、あつたわねそんなの。私と前組んでた時もそうだったわ」

メガーヌとなのはが顔を見合わせてくすり、と笑いを漏らす。共通の相手への悪口と

いうのは人を仲良くするいい方法だ。どうやらこの場合もうまくいったらしい。

くすくすと小さく笑うなのは、メガーヌがひどく優しい笑みを浮かべた。

「なのはちゃん、あの子の事よく見ておいてあげてね」

そして、メガーヌはグラスを傾けた。

「たぶん、あの子は、あなたの目指すものの一つなのかもしれないから」

その不思議な言葉をこの時のなのはは理解できなかった。

だが、しばらくして、『セルジオ・アウデイ』という人間が、どういう存在なのかを本当の意味で知った時、深く理解することになる。

からん、とグラスの中の氷が、滑るように沈んだ。

陸のストライカー

その日、三課の空気は一変していた。

「クイント、少し打ち合わせしておきましょう」

「そうね。私のデスクでいい？」

「いえ、少しフォードの調子を確かめときたいの。第三会議室にしましょう」

普段は和やかな笑みを絶やさないクイントも今日ばかりは表情を鋭くして、メガースと真剣に話し合っている。

その他三課の面々も互いのパートナーと熱心に話し合いながら、自身のデバイスの調子確かめたり、何やらモニタを穴が空くほど見つめている。

その雰囲気はセルジオとなのはの二人も例外ではない。

いつもはデスクで事務仕事をするか外回りをすることの多いセルジオだが、銀色の籠手型デバイス『ゼファー』のプログラム面と睨み合い、術式を細かくいじっている。

そんなセルジオの隣でなのはがそわそわとした様子で辺りを見回す。

「皆さん凄いやる気だなあ」

「そーういや高町は初めてか」

「うん。クイントさんからお話は聞いてたけど、こんな感じだとは思ひもしなかったかな」

「この日だけはみんなピリつくんだよなあ」

しばらくしてゼファアの術式構成が決まったのかホログラムを消すと、籠手を陸の茶色の制服の下に装着する。

そして、椅子に座ったまま背を伸ばして大きく伸びをして肩を回しながら息を吐いた。

なのはと違いセルジオは初めてではないがどうやら少しばかり緊張しているらしかった。

緊張感の走る三課の扉が開かれて、局員の一人が顔を出した。

「おーい、そろそろ時間だぞー。いい加減悪あがきはやめたまえ」

「るせーい、この最後の足掻きがあの人に触れるかどうかをわかるんじやい」

「目標低いなあ」

呆れたようにドア口から言った局員は他のメンツにぶーぶーと文句を言われながら出て行った。

三課の局員が、行くかー、とか、やってやるぜ、とか、それぞれの抱負とやる気の言葉を呟きながら足を動かし始める。

それに続くようにセルジオ達も立ち上がって今日の目的地を目指して歩き始めた。

三課の廊下をしばらく歩くと、クラナガン郊外の廃棄都市をそのまま切り取ってきたかのような、そんな部屋に辿り着く。

以前、セルジオとなのはがコンピを組んだばかりの頃に使った訓練室の一つである。

この訓練室。実際はもつとのつぺりとした無機質な部屋なのだが、管理局の技術部が結界魔法を応用して作り出したもので、擬似的にビルや家屋、自然環境まで再現できる優れものだ。

そんな部屋の中で一人、無骨な槍を片手にした大丈夫が佇んでいる。

「ごくり、となのはが生唾を飲み込んだ。

「高町」

「なに、セルジオくん」

「今日はいあんまり指示は出せないかも知れないが、頼むぞ」

「うん。わかっている。そういう、相手だもんね」

「ああ、なにせ俺たちが相手にするのは——」

セルジオが頬に汗を流しながら、無理矢理に笑ってみせる。

「ゼスト・グランガイツなんだからな」

男が、地上本部最強とも呼ばれることのある『ストライカー』級魔導師、『ゼスト・グ

ランガイツ』が訓練室に三課の戦闘員が全員揃っていることを確認する。

「来たか」

「はい、ゼスト・グランガイツ隊長、三課戦闘員総員揃っています」

ゼストが声をかけると、他のメンバーを代表しメガーヌが答える。すると、全員が一糸乱れぬ敬礼を返した。

それを見てゼストは薄く笑みを浮かべると、槍を手の中で軽く回してその切っ先を自身の部下達へと向けた。

「全力で来るがいい。私は容赦も手加減も一切しない」

今日は、三課の総員訓練日。現場に出ることがメインの航空魔導隊三課の数少ない、模擬戦が行われる日。

「お前達の力、見せてみる」

数少ない、ゼストと全力で刃を交えることのできる日であった。



「ぜ、ああああっ！」

「踏み込みが甘い。剣はふり終えた後の隙が大きい。次の一手まで見ろ」
「あり、がとうございます……」

巨大な両手剣を振り回した陸士の一撃を槍で滑らせるように弾くと、ガラ空きになった腹部へと助言とともに蹴りを叩き込んで吹き飛ばした。

その隙を狙うようにして頭上から雨の如く浴びせられた速射弾を加速魔法を瞬時に発動する事でもかわす。そして、魔力で強化した槍で空中を陣取っていた空士の一人を叩き落とす。

「いい連携だ。しかしワンパターンな速射弾ほど避けやすいものはない」

爆発したかのような音とともに空士の体が叩きつけられて壁際まで転がって動かなくなる。

空中で槍を握り直すゼストの前に青色の魔法式が書かれた帯のようなものが出現する。

「一手ご指導お願いしますッ！」

「クイントか」

青色の帯、クイントの先天性技能である『ウイングロード』の上をローラー型のデバイスで疾走しながらクイントがゼストに肉薄していく。

クイントは他の魔導師のように自在に空を駆ける能力を持たない。しかし、この空に地面を作る『ウイングロード』こそが、彼女を陸士でありながらも、『航空』魔導隊のフロントアタッカー足らしめるのだ。

「リボルバアアアア！ ナックルツ！」

長い髪をはためかせながら振るわれたクイントのリボルバーナックルをゼストが槍で受けると、辺りに甲高い音が響く。

鏑迫り合う槍とガンレット。しかし、それも一瞬のこと、次第にゼストの槍にクイントの拳が押し込まれていく。

「いい一撃だった」

「お褒め頂き恐悦至極！ でも、これじゃあ終わりませんッ！」

「むっ。」

がしよん、とクイントのリボルバーナックルがカートリッジの空葉莢を吐き出すと、ガンレット付属の回転機構が勢いよく駆動をはじめ。

カートリッジシステムのブーストがかかったクイントの拳が勢いを取り戻し、そこに螺旋回転のエネルギーが加わる。

ふ、とゼストは薄く笑みを見せる。

「大した手だ。俺でも力負けしそうだ」

「それは、どうもッ！」

「だが、まだまだだ」

ズ、とゼストが突如ウインググロードを踏みしめると、そのままゼストの足が貫通してウインググロードを粉碎する。

蹴った？　魔法を使った？　否、否。

ただ、ゼストは全力で踏み込んだだけだ。

「嘘お?!　これ数百キロの物でも耐えられるのよ?!」

驚きの声を上げるクイントが体勢を崩して落下していくのを、ゼストがとどめを刺そうと槍を振り下ろして、その間に黒い影が割り込んで来る。

その影は槍をその身で受けても傷つくどころかひるむ様子も無い。

「お前は、メガーヌの召喚獣の……」

「――」

ゼストの攻撃を受けても傷つかない黒光りする甲殻。魔力刃にコーティングされた刃のような腕部。どこか甲虫を思わせるような羽。四つの複眼はゼストからひと時も逸らされない。

「俺の槍が効かない、か」

「――」

「面白〜」

ゼストの槍と召喚獣の刃がぶつかり、弾かれ、そしてそのまま刃の応酬を始める。

その間に空中の無防備なクイントをメガーヌが回収、自分の側まで召喚魔法を応用した転移を行った。

「よし、フオード、そのままお願い」

「ひー、今のは死ぬかと思ったわ……」

「いつまでも呆けてないでさっさと行く。フオードだっていつまでもは抑えておけないわよ」

「オーケーメガーヌ！」

クイントが再びウイングロードを発動して、召喚獣——フオードと戦うゼストの背後に回り込んで行く。

「一撃必倒！」

クイントのリボルバーナックルがカートリッジを三つ吐き出して爆発的な勢いを発生させる。

狙うはゼスト。完璧に魔力を通し、一撃での昏倒を狙う。

「む——」

ゼストが背後のクイントに気がつき迎撃に動こうとしたのをメガーヌの指示で

フォードが邪魔し、さらにそこに後方からのメガーンの紫の誘導弾が襲う。

「リボルバアアツ！ ブレイクツ！」

四方を誘導弾に囲まれ、背後にクイント、正面に槍の効かぬ召喚獣。最早これで決まったかと、思われた瞬間、ゼストの姿が掻き消えた。

「フルドライブ」

起動句は短く、されどその効果は絶大。一人だけ時間から切り離されたかのような感覚の中、ゼストがフォードの懐に潜り込み、腕を掴んで、体術を使って投げ飛ばすように振り回す。

フォードの固い甲殻はメガーンの魔力弾をまとめて弾きながら、背後にいたクイントに叩きつけられる。

上から叩きつけられたフォードのせいでクイントがバランスを崩して、サンドイッチのようにウイングロードとの間に挟まれてしまう。

「——破アツ！」

裂帛の気合と共に、槍を握らない方の腕を掌底でフォードの背中に叩きつけた。魔法に頼らない技術を用いて使われたその一撃は、フォードの固い甲殻を通り抜けて、内部に衝撃を流し込みながらそのままクイントにまで確かなダメージを与えて、ついと言わんばかりにウイングロードを粉碎した。

「——」

「け、ほ……」

青白い光に包まれながら撃墜される二人には目もくれず、ゼストが加速魔法を使用、瞬時にメガーヌの前に躍り出た。

「良い召喚獣だった」

「そう言っていただけだと、主人冥利に尽きます、ねっ！」

メガーヌが反射的にチャージ時間の短い砲撃を放つが、ゼストはそれを槍で切り裂きながら、槍の刃の平の部分でメガーヌを殴り飛ばした。

さて、次は、と辺りを見回したゼストの体が、拘束されたように動かなくなる。見れば、桜色のバインドが右足首と左手首に現れていた。

「これは……」

少しだけ目を見開いたゼストは、すぐに背後に槍を振るい、そして案の定短距離転移ショートシフトで現れたセルジオの槍を受け止めた。

「相変わらず規格外……！」

「お前を鍛えたのは俺だ。忘れたか」

「まさかっ！」

一瞬のうちにバインドをハッキングと腕力の二つの要因で砕いたゼストが、黒いコー

トを風に揺らしながら襲いかかる。

(マルチタスク分割——アナライズ・シミュレート模倣解析)

セルジオが今までの戦闘経験、あらかじめゼファーに仕込んでおいたゼストの戦闘パターンを、マルチタスクで解析することで、未来予知じみた予測を可能にする。

視認するのも難しい槍をセルジオは先読みでカバー、なんとか受け止める。

「随分と腕を上げた」

「そうしなければならぬ理由がありますから」

「そうか。——ブリッツアクション加速機動」

「加速機動ッ！」

白光に包まれるセルジオと暁色に包まれるゼストが同時に加速、ビルの間を縫うように飛び回りながら槍をぶつけ合う。

「(セルジオくん三秒後、壁を抜いてデイバインバスター行くよ!)」

「(了解!)」

「(あとその先に設置型バインドおいてるから。座標はゼファーに送るね)」

白のコートのセルジオと、黒のコートのゼスト、という対照的な色合いの二人がぶつかり、そして離れて行く。

(3、2、1……、)で敢えて受ける！)

なのはとの念話での情報を元にゼストを指定ポイントに誘導すると、セルジオは敢えてゼストの攻撃を受けて、大きく吹き飛ばされる。

訝しく思ったゼストだったが、視界の端でビルをぶち抜きながら迫って来る極太の砲撃に気づくと、セルジオの行動の意味を理解した。

(加速と飛行では俺を振り切れないから、自分を囮に、か。悪くない手だが、連携が甘い。落ちるのが少し早かったな)

ゼストは瞬時に離脱しようとして、またもや体が動かないのに気づいて、なのはのバインドの厄介さを思い知る。

(これは、脱げ出せん、か)

先ほどのような脆さはなく、今ゼストを縛るのはセルジオが時間稼ぎをした間になのはが作った特別固いバインドらしかった。

「ブレイク、シュートツ！」

なのはの声に反応し、ゼストに迫っていた砲撃が炸裂し、辺りのビルを根こそぎぶち壊すような激しい爆発と共に、辺りを桜色一色に染め上げる。

「やった？」

サーチャー越しにその爆発を見ていたなのはが一瞬、喜びの声をあげる。なのは必殺のバインドからの砲撃のダメ押しである。あんまりやりたくなかったが、セルジオにど

うしても頼み込まれたのだから、一定の成果が見込めてなければ困る。

「砲撃する際は、自分の場所が割れることも考えろ」

『Master!』

突如聞こえたレイジングハートからの警告に、なのはが疑うこともなく空へと逃げる。

「よく逃げたな、いいデバイスだ」

「ぜ、ゼスト隊長?!　　なんで?」

『Probably it moved by short-range metas-tasis.』

Mr Sergio seems to have been used as well.』

「そ、そつか。ゼスト隊長はセルジオくんのお師匠さんなんだもんね……」

槍と加速魔法を使うゼスト。それに師事する形で似たバトルスタイルを取るセルジオ。ならば同じように短距離転移も使えても不思議ではないのかもしれない。

だが、どうやら完璧にかわしきれたというわけでもないようで、バリアジャケットの端々が黒く焦げている。

(セルジオくんほど上手くないのかな)

そんなことを考えるなのは。

「話は終わったな。行くぞ、高町」

ゼストの体が、加速する。

その恐ろしいスピードをなのは目で追うことはできなかったが、堅固なシールドを張り、その上で誘導^{アクセルニューター}弾で動きを阻害することで、なんとか持ちこたえる。

（何とか、耐えられはするけど、これじゃあその内削りきられちゃう……！）

なのはが薄く唇を噛む。すると、そのタイミングで割り込んでくる念話の一つ。

「高町、聞こえるか」

「セルジオくん！　まだ落ちてなかったんだね！」

「（何とか、な）」

なのはがマルチタスクを三つ展開、一つをセルジオとの会話に当てる。

「（今そっちにゼストさんいるだろ？　どんな感じだ？）」

「（ちよつとダメージは受けてるけど、物凄く元気、かな。なのはだけじゃ厳しいかも）」

「（そうか。俺が一撃デカイの当てられれば、戦局はひっくり返ると思うんだがな……）」

「（何か切り札があるの？）」

「（一応な。たぶん公式では使っていないし、ゼストさんも知らないんじゃないかな）」

「（それって、なのはが一瞬隊長の足止めできたら使える？）」

「(え、まあ一瞬あれば使えるが。おい、何するつもりだ)」

「(一瞬、動きを止めるからセルジオくんは転移してきてね!)」

最後は無理やり言いくるめて、なのはが念話を切る。

「レイジングハート、この前考えた、アレ、使えるかな?」

『I o n l y f o l l o w w h a t m y m a s t e r w i s h e d f o r』

「よし、じゃあやってみよう!」

『A x e l f i n』

なのはは薄く笑みを浮かべると、一旦シールドを解除し、ゼストから加速しながら距離を取った。

だが、基本的に空中で飛行、堅固な防御とバインドを併用して、砲撃で倒す、という純魔導師タイプのなのはが、本職のゼストから逃げ切れるはずもなくすぐに追いつかれてしまう。

ゼストが槍を振るうのに、なのはがタイミングを合わせて盾を発生させる。

「ブレイクインパルス」

だが、ゼストはここで、魔法での衝撃を体術を使用して、バリアを通りぬけてなのはに当てる、という曲芸じみた技を披露。なのはの盾に槍が防がれたまま、なのはを撃墜

してみせる。

「惜しかったぞ。しかし、お前たちは誤射を気にしすぎている。それが隙になったな」
「いえ、これで、いいんです」

「何……?」

「レイジング、ハート」

『All right my muster. Binding shield』

なのは桜色の盾から、無数の鎖が生み出され槍ごとゼストを空中で固定した。これが、なのはがレイジングハートと編み出した、対近接戦闘型魔導師対策、『バインディングシールド捕縛盾』である。

ゼストにかかれば十秒もあれば抜け出すのだろうか、今必要なのはその十秒だった。

セルジオが、ゼストの背後に出現する。

「セルジオ……!」

「ゼスト隊長ツ!」

セルジオがゼファアを引きしぼり、全力の突きを放とうとして、ゼストがまたもや想像を超えた動きをしてくる。

「嘖ツ!」

捕縛された槍だけを転移させて、手の中で持ち直すという荒業。それをやってみせた

ゼストが、カウンターの突きを放ってくる。

アナライズ・シミュレートフルコネクト
 (模倣解析全力接続)

それに瞬時にゼファアの予測能力を発動させて、数秒先の未来を予測、セルジオが見事、槍の柄の部分をつまみ取ってみせる。

「見事。しかし、これからどうする。この距離では槍は振るえんぞ」

「ええ、だから、こうします」

なに、とゼストが眉をひそめる。

「ゼファア第二形態！」
セカンドモード

セルジオが叫ぶと、ゼファアが腕のガントレットから吐き出された機構と合体、変形して槍の柄をそのまま一つの巨大な砲門へと変えてしまう。

陸の変人研究家通称『教授』につくられたゼファア、その第二形態、いわゆる砲撃特化の形態である。

セルジオがガントレットが変形した持ち手を握り、砲門の先をゼストの胸へと向けた。

驚きの色に染まるゼストに、不敵に笑みを返したセルジオが引き金に指をかける。

「ダイバインカンッ！」

ズ、と瞬間的にチャージされた砲撃がゼストの胸部に炸裂して、眩い光を放った。



「あー、あれで負けるとかありえないだろ……」

「あれは流石に予想外だったねー」

模擬戦が終了した三課のデスクではセルジオが頭を机に突っ伏していた。

「いやゼロ距離砲撃食らってからすぐに反撃するとか……、アレが『ストライカー』か……」

「バリア三枚を瞬時に張って、防げなかった分は体術で衝撃を逃がすって、隊長はすごいなあ」

本気で悔しがるセルジオに、隣で「もうわけわかんねえな」と理解することをやめたのは。ゼストは魔法とか以前に、なのはの家族のような身体的な性能のおかしさがありそうな気がしていた。

「結局今回は、セルジオたちとメガーヌさん達が一番善戦したよなー」

「結局俺はいつも通りかすりもしなかったぞ、ホント」

「私とか地面に叩き落とされてから記憶が怪しいの。私の恋人ってだれだっけ……」

「んなもん、最初からいねえだろ」

「いても画面の向こうじゃね」

「がやがやと反省会混じりの軽口を叩く三課の扉が開いて、話題の中心の人物であるゼストが顔を出した。

「全員起きたようだな」

「ぜ、ゼスト隊長！ お疲れ様です！」

「「お疲れ様です！」」

「そう固くなるな。ほら、これは差し入れだ。食べるといい」

「わーい、シュークリームだ！ 隊長大好きー！」

「何人ぶんある？ ここは敢えて半分の間人が食べることにしてみようぜ」

「じゃあ今日の模擬戦で生き残ってた順番な。ちなみに俺はちようど半分なので食べれ
マース」

「おい、俺食べねえぞ、それ」

「楽しげに三課で差し入れが配られていると、ちよいちよい、とゼストがセルジオに軽く手招きするのが見えた。」

セルジオは眉を寄せながら呼ばれた通り近くによると、ゼストはセルジオを連れて三課のオフィスから出て、背中をドアに預けた。

セルジオが、なぜ二人きりになったのか理解できず、なんとなく頭をかいた。

「今日の模擬戦、ヒヤリとする場面がいくつもあつた。腕を上げたな」

「いや、無傷で勝つちやつた人のセリフじゃないですよ、それ」

「それはそうかもな」

ふ、と楽しげに笑うゼストに、セルジオが小さくため息。どうやら師匠をこえるのはまだ遠そうだった。

「話は変わるが、セルジオ。お前には確か首都航空隊に知り合いがいたな？」

「え、まあいるつちや居ますが、それが何か？」

「実はあそこから人を寄越して欲しいという申請が来ていてな。それで、お前と高町を送ろうと思うんだが、構わないか？」

「別に良いですけど、そんなのわざわざここまで呼び出していうほどのことじゃないでしょう？」

何があるんです？」

セルジオが真剣な瞳でそう尋ねると、背中を壁に預けたままのゼストが「察しが良くて助かる」と短く返答した。

「これはレジアスから聞いたことだが、首都航空隊の相手にしている、テロ組織と戦う

中、お前の接敵した仮称『ガジェットドローン』らしき影があったらしい」

「――！」

「わかったな。おそらく、そのテロ組織は、俺たちの追っている件と繋がっているぞ」

ゼストがセルジオを見下ろすように見つめる。

「セルジオ・アウデイ三等空尉、行ってくれるな？」

その問いかけに、セルジオは迷いなく頷いた。

旧友

「首都航空隊？」

「そうだ」

セルジオと並んで歩くのはが首をかしげる。

「名前くらいは聞いたことあるだろ？」

「それは、一応勉強してあるけど」

首都航空隊。

セルジオたちの属する航空魔導隊と良く似た部隊名を持つが、その実態は全くの別物である。

航空魔導隊の方は地上本部所属の部隊であり、後見人には提督であるレジアス・ゲイズがついている。

コンセプトとしてはネットワークの軽い部隊を作ること、人員が足りなくなつたところへの助力を送る、というもの。一課と二課は比較的警邏や、航空防衛に赴くことが多いが、三課は比較的このコンセプトが強く反映されて居たりする。

対して、首都航空隊は『管理局本局』に属する部隊である。預かりとしては、地上本部になることもあるが、原則本局の局員で構成される。

どちらかという魔力ランクや魔導師ランクではなく、現場での対応力に重きを置いた三課などとは違い、入隊するのにも最低魔導師ランクと魔力ランクがあるというエリート集団。

現在の世界の中心であるとすら言えるミッドチルダ、特に首都クラナガンを守る事が使命である。

記憶していたことをセルジオに伝えるなのは。セルジオはそれを聞くと満足そうに頷きながら頭を撫でてみると、なのは髪が乱れる！と怒った。

少ししゅんとするセルジオだったが、すぐに切り替えて話を続ける。

「原則首都航空隊の人たちは俺たちに助けは求めないんだが、珍しいこともあるもんだ」「そうなの？」

「おう。あつちはウチのこと好きじゃない……いや、濁すのはやめるか、嫌いだからな、三課」

「おんなじ管理局の部隊なのに、変なの」

「まあ、言っちゃえば海と陸の縮図みたいなもんだしなあ。それに、あつちの主力はエリート、こつちは叩き上げのベテラン。噛み合うはずねえんだなあ……」

あはは、と苦笑い交じりにいうセルジオだが、なのははまだまいち納得がいかない。「力が足りないなら協力するのが一番だよ。一人より、二人、二人より、もつとたくさんの方ができることも増えるよね」

「みんなが高町みたいにあれればいいんだろうけどな」

そして、また困ったようにセルジオが笑う。

なのはの言う事は、誰でも心の底から協力できる、と信じているからこそ出てくる言葉だ。しかし、現実はそのではないのだ。

相手を妬み、足を引っ張り、手柄を取ることに躍起になる。大人になればなるほど、そんな傾向が強くなる人も出てくる。

子どもの頃、あんなに容易くできていたことなのに。

なのはの考えは、心の在り方は美しい。間違っていることではない。

しかし、それが遠い夢のように聞こえるならば、きつと今の現実は汚く、醜く、そして残酷だと、そう言うことなのだろう。

「みんな、ミッドチルダの事を守りたくないのかな」

不思議そうに言ったなのはの言葉にセルジオが一瞬目を見開いたが、すぐに緩めて空を見上げた。

「きつと、みんな『管理局』って組織でしたい事が違うんだと思う。こんだけでかいから

仕方ないよな」

きつと管理局の局員一人一人、「あなたの管理局でしたい事はなんですか？」と聞くと、それぞれ別のことを答えるだろう。

昇進とか、給料とか、平和とか、まあ千差万別だろう。それが、当たり前だ。そうあるのが普通だ。

セルジオが空を見上げたまま、でもさ、と言葉を続ける。

「目指すものは同じはずなんだよ。根本的などころまで突き詰めれば、俺たちは同じものを目指しているはずなんだ」

「俺は、そう思う」と、言葉で締めくくるとしばらく空を見上げて黙り込んでしまう。

(何を考えているんだろう)

その瞳が何を見ているのか、ではセルジオ何を目指しているのか、などとはなのはには聞けない。

それを理解するにはあまりにもなのはとセルジオの距離は遠い。

身長も、心も。

ただ、なのはは風に運ばれてくるセルジオの声が、ひどく寂しそうに、泣きそうになりながら、話しているような気がしていた。



「なにあれー！ー！」

「ここら、高町落ち着けて。ここは三課じゃないんだぞ」

「だってだってだって〜！」

場所は変わって首都航空隊の隊舎、その部隊長室から出てしばらくした廊下。

そこでセルジオは必死になのはを宥めていた。

「セルジオくんは腹が立たないんだ」

「いやまあ、そりゃ俺も思うところはあがるが……悪い人じゃなさそうだったじゃないか」

「セルジオくんは誰にだってそういうからダメだよ！」

「ええ……、俺にどうしろと……」

事の発端はセルジオとなのはが部隊長に挨拶に行った時のことだった。

首都航空隊の部隊長はセルジオの顔を見るなり、またお前か、とでも言いたげな表情

を浮かべた後、隣のなのを見て、なんだ子供か、と呟いた。

この時点でなのは多少ムツとしていたのだが、いちいち目くじらをたてるほどの
はも子どもではない。いや、年齢的には子供なので部隊長の言葉も間違っているわけ
はないのだが。

その後、軽い挨拶と自己紹介をした後に今回の任務の確認をしようとして、部隊長か
ら「また手柄の独り占めか、ハイエナ部隊」と言われると、もうなのは我慢ならなかつ
た。

自分が悪口を言われるのなら耐えられる。しかし、あの優しい三課の人たちが文句
を言われるのは耐えられなかった。

流石に一言くらい物申してやろうとしたのだが……。

——駄目だよ、高町。

——言われて嫌なのはわかる。俺だって嫌だ。

——でもだからと言ってそれはお前がやるべき事じゃない。

——同じところまでお前が降りて言い争う必要はないよ。

と、念話で諭されて止められてしまった。

そう言われてはなのも引き下がるを得ず、あとはセルジオに任せて大人しくしてい
たのだが、出るわ出るわ嫌味のオンパレード。

その迂遠な言葉の数々は一月分の日めくりカレンダーにしてもまだ余裕があるほどの数であった。

やつと話——要約すると「詳しい隊員をお前達の説明につけるから邪魔すんなよ」という事——が、終わり部隊長室を後にすると、ついになのはが怒り出した、そういう事だ。

ひとまずセルジオに宥められて文句を言うのはやめたものの、未だ頬を膨らませて怒りをにじませるなのは。その白いリボンで結ばれたツインテールも、怒りのあまりびよこびよこ揺れていた。

そのあんまりもな怒りようにセルジオは思わずくすり、と笑いをこぼしてしまった。

「なんで笑うの。私たちがバカにされたんだよ」

「——いや、悪い。案外高町は俺たちを好きなんだなあ、とな。他意はない」

「そ、そんなの当たり前だよ。みんな優しいし」

少し頬を赤くしながらそっぽを向くのは。いつもよりも答えも歯切れ悪いことから照れていることが丸わかりだった。

「それに——」

「それに？」

「いや、何でもない。気にしなくていいよ」

「言いかけて止めるのやめてよー。それって一番気になるんだよ」

「はっはっはっ」

「笑って誤魔化さないで〜〜!」

本当は、「それに三課を私たちと言ってくれた事が嬉しかった」という事を言おうとしていたのだが、途中でやめてしまう。何故だかわからないが、言ってしまうと気恥ずかしくなるような気がしたのだ。

取り敢えずなのは頭を撫でながら詰問をのらりくらりとかわしていると、背後からためらいがちに声がかかった。

「あの一、すみませんが、そういうのは三課でやって頂けますか」

言われて二人ともここが他の部署だという事を思い出す。なのはがそそくさと離れて、セルジオはこほん、と咳払いを一つ。

そして、声を掛けてきた人物に、にこやかな笑みとともに挨拶をしようとして、目を丸くした。

「なんだ、ティーダじゃないか」

「そうだよ。久しぶりだね、セルジオ」

そう言つて爽やかな笑み浮かべるオレンジがかつた茶髪の男性——ティーダは、セルジオと軽く拳を合わせる。

落ち着いているがどこか捉えどころのないセルジオとは異なり、ティーダは常に笑顔を絶やさないう爽やかな雰囲気のある好青年、と言った感じだ。さぞかし女にモテることだろう。

「ここにいてるってことは、俺たちへの任務の説明とかをしてくれるのはティーダって認識でいいのか？」

「それで構わないよ。加えて、一応ウチとの橋渡しと、任務の手伝いも俺の仕事かな」

「もしかして俺が来るって知っててこの仕事引き受けたのか？　だとしたら大したもんだよ」

「いや俺も誰が来るかなんてはわからなかったけど、セルジオがいるのは知ってたから。最悪お前が来なくても、話題には困らなかつただろうね」

「そこまで話してセルジオは隣ののが置いてけぼりになっていることに気がつく。

「高町、この優男は——」

「挨拶なら自分でするよ、セルジオ」

ティーダが身長の高いなのはと視線を合わせるために膝をつく、人に好かれそうな爽やかな笑顔を浮かべた。

「俺はティーダ・ランスター。階級は空曹長。セルジオとは一応、友達って事になるかな？」

「一応は余計だ、一応は」

「じゃあ普通に友達。君の名前は？」

「高町なのは一等空士です。セルジオく——アウディ三尉とは、コンビを組ませて貰ってます。よろしくお願いします、ランスター空曹長」

「ティーダでいいよ、なのはちゃん」

「で、でも……」

「堅苦しいのは苦手なんだ。俺を助けると思つて、ね？」

「じゃあ、よろしくお願いしますティーダさん」

なのはが明るい笑みを浮かべてティーダの差し出した手に応じる。

すると相手の名前を呼んで、あつという間に握手までかわしてしまった姿をみてセルジオが何とも言えない気持ちにもなる。

(俺もまだ高町呼びなんだがな)

別にそこに何かを感じるわけではないが、なんか、こう、もによるのだ。

なので取り敢えずなのはに言葉を投げかけとくことにする。

「そいつシスコンだぞ、高町」

「え、シスコンさんなんですか……」

「いや、それ今関係ないだろ、セルジオ」

え、と少し驚くのはと、呆れるティータ。そんな表情すらも爽やかさが隠れてるのに、セルジオはイマイチ釈然としない感情を抱える。

セルジオが微妙な表情をしていると、その珍しい表情を見てなのはが不思議そうにセルジオを覗き込んで来る。

「セルジオくん怒ってる?」

「別に、普通だ」

「嘘だよ。だってセルジオくんがそんなむすつとした顔……」

「気のせいだ」

「でも……」

それ以上セルジオはなのには取り合うことなくティータへと向き直る。するとそこには少しばかり意地悪そうな笑顔を浮かべる友人の姿が。

ぐいつとティータがセルジオの首に腕を掛けて自分よりも高い位置にある頭を低くさせながら肩を組んだ。そしてなのは一瞬視線を送ってから、音量を低くして話し始める。

「別にお前の大切な相棒をとったりはしないさ」

「高町にそんなこと考えたりしてない」

「へえ、珍しく相棒云々は否定しないんだな」

「クロノに任されたから面倒を見る義務がある。それだけだ」

「ふーん」

「というか、そろそろ任務の話だ。いつまでも油売つとくわけにもいかないだろ」

ティードの腕を払うとそう言うセルジオ。

「それもそうか。会議室抑えてるからそこでもいいか？」

「ああ。高町も良いよな？」

「え、うん」

なのはが頷くとセルジオはティードを小突いて案内を促した。

そんな、珍しく不機嫌そうなセルジオをなのはなおも不思議そうに見つめていた。



今回の任務、発端はあるテロ組織が動こうとしているという情報がある捜査官が掴んだことから始まる。

調べていくうちに、組織の規模や人員構成、そして狙いはクラナガンであるという事がわかってくる。そこまでわかればもう一捜査官の案件ではなく、首都航空隊の案件となってくる。

行おうとしているのは大規模な爆弾テロ。狙いはビル、シヨツピングなど合わせて三つで、そこで爆弾騒ぎがあれば人が何人死ぬかなどわざわざいう必要もない。

故にさつさと潜伏場所を潰そうとしていたのだが、ここにどうやら何体かのガジェットドローンがいるらしいということがわかる。

首都航空隊はエリート集団のため、部隊長もまさか機械兵ごときに負けるとは思ってはいないが、かといって相手にしていてテロ組織の構成員に逃げられても事だ。

そのため、ガジェットドローンを相手にする人間が欲しかった。そして、白羽の矢が立った部隊があった。

「それが、俺たちというわけか」

「まあそういうこと」

会議室でひとしきりティーダから任務の説明を受け終わると、セルジオはなぜ今回仲の悪い首都航空隊が依頼をしてきたのか大体の思惑を理解した。

「ティーダ」

「ん？」

「これは随分賢い使い方だな。人の動かし方をわかってる」

「気を悪くしたなら謝る。でもこれが部隊長の意向でさ」

「いや問題ない。人を守る、という目的ならこれが一番だな」

すこし申し訳なさそうに眉を歪めるティータに、セルジオは薄く笑って応じる。そんな二人の会話の意味がわからなかったのはが首を傾げた。

その様子に気づいたセルジオは、腕を組んでなんといったものか、と思案する。

「えーとな。今回の件は、主導は首都航空隊になるから、俺たちはその手伝いつて感じなんだけど、それはわかるな」

「うん」

「そんで俺たちが相手にするのは機械兵、仮称ガジェットドローン。というかそれしかさせてもらえないだろうな」

「その何がダメなの？」

「いや、駄目というかなんというか……」

なのはの問いかけにセルジオがなにやら言い澁みながら、ティータの方に視線を向ける。

ティータはそれだけでセルジオの意思を汲み取ったらしく、いいよ、とでも言うようににこりと笑った。

ティードから許可をもらったセルジオがなのはに向き直る。

「簡潔に言う俺たちは今回タダ働きだ」

「え？ お給料が出ないってこと？」

いつもいっぱいもらってるし、一回くらいなら全然いいけど、となのはは思うが、セルジオはそうじゃないと言わんばかりに首を振る。

「そうじゃなくて、今回俺たちになにも手柄はないだろう、って事だ」

ティードの説明と、その後の会話から判断する限り、部長は、セルジオたちにガジェットドローン相手に時間稼ぎをさせてその間にテロ組織の構成員の検挙などを行うつもりだろう。

そうなる事と事件が解決した際でもセルジオたちの手元にはガジェットドローンの相手という結果しか残らない。

わざわざ出向いてきたのに上がった功績がそれだけではあまりにも割に合わない。

だから、セルジオは『タダ働き』という表現を使ったのだ。

「まあだから最悪俺たちは骨折り損のくたびれもうけになるかもって事だ」

「それっていいの？ 独り占めなんてずるいよ」

「まあそこが今回の部長さんの運用のうまいとこだな。三課にやってもいい功績の最低ラインをついてきた感じだ」

部隊長、と言われて先程あった偏屈そうな人を思い出して、なのはの中の怒りがふつふつと再燃します。

「またあの人……。そんなに意地悪ばっかりして、そんなに手柄が欲しいのかな」

「あはは、ウチの隊長上昇志向強いからなあ」

「あ、ご、ごめんなさいっ！　　ティーダさんの上司さんなのに」

「いや良いよ。隊長が君たち三課に厳しいのは本当のことだし。此方こそ嫌な思いをさせてごめんね」

聞き様によっては自身の上司の悪口と取れる言葉だったが、ティーダは笑って流してしまふ。

もしかしたらティーダも部隊長には何か思うところがあるのかもしれない。

「まあ、任務の件は了解だ」

「悪いな」

「気にするな。テロ事件となれば、俺たちが手を貸さない理由はないさ」

ふ、と軽く笑ってセルジオが制服の胸ポケットの中にある古びた懐中時計を、制服越しに触った。

「無意味に人が死ぬのは、本当に、本当に、許されない事だから」

魔導師たちのトリガーロンド

ティーダが近くの自販機から買ってきた缶ジュースをなのはへと差し出した。

「はいどうぞ、なのはちゃん。俺の奢りね」

「あ、ありがとうございます、ティーダさん」

「ん。年下にジュースの一つくらいは当たり前さ」

今二人がいるのはここ数日はなのはたちの待機場所となりつつある会議室である。

セルジオとなのはが首都航空隊に出走してから数日間は大きく任務が動きだすことはなかった。

そのせいで嫌われ者の三課、部隊長の言葉を借りれば「ハイエナ部隊」であるところの、セルジオとなのはは大変肩身がせまい思いをした。

訓練も一応首都航空隊との合同なのだが、これがなかなかきつい。肉体的なものではレストやクイントのしごきの方がきついのだが、精神的なものではそれを凌駕していた。

まだ幼いのにAAAランクあるのはと魔力ランクB+のセルジオでは首都航空隊

のコンセプトにはあまりにもあっていない。煙たがられるのも無理はない。

もちろん中にはティーダのように接してくれる人もいたが、それもごくごく少数だった。

だから、ついに部隊長からテロ組織のアジトへの突入を通達された時は、感極まっていたのはとセルジオは隠れてハイタッチしたりしたのだが、それを知る人は本人たち以外にはいない。

ティーダはなのはと手渡したのとは別の缶コーヒーを手元に置くと、自分の分の缶コーヒーのプルタブをあける。

なのはも同じように缶を開けて一口飲むと、壁にかけてある時計へと目を移す。

(セルジオくん、遅いな)

セルジオが部隊長と任務の詳細を話し合いに行ってしばらくの時間が経つ。ティーダと二人きりが嫌なわけではないが、最近の仕事は大体いつでもセルジオがいたので、ちよつと変な感じがしていた。

「セルジオのこと考えてるでしょ、なのはちゃん」

「ええっ?! な、なんで?」

くすり、とすこし笑いを漏らしながらティーダが問いかけてくる。それが丁度、無理にでもついていけばよかったかなあ、となのはが驚きのあまり声を上げてしまった。

一瞬ティーダは目を丸くしたが、すぐにまた面白そうに笑いをこぼす。

「ふふ、勘、かな」

本当は先程からわかりやすく何度も時計と部隊長室のある方角へと視線を歩き来させているため、見ていれば誰にでもわかることだったが、敢えてそれを言わないティーダ。

それは優しさと気遣いでもあつたし、からかいの意味も込められていたりした。

「なのはちゃん結構セルジオの事好きなんだね」

「べ、別に好きとかじゃ……」

「おっと、ごめん言葉が足りなかった。セルジオの事パートナーとして、好きなんだね」

「……………ティーダさんってすこし意地悪って言われませんか」

「うーん、妹にはよく言われるかな」

からかわれたのだ、という事に気付いたのはがじとつとティーダを睨むが、ティーダは柔らかに笑みを返すだけだ。

そんなティーダの表情になのはが毒気を抜かれたようにため息をついた。ちらりと時計を見るが針はほとんど進んでおらず、セルジオはまだ帰ってこない。

「そう言えばセルジオくんとティーダさんは随分仲がいいですよ。どこで知り合ったんですか？」

そこでふと以前からの疑問をティーダに尋ねてみる事にする。

「んー、なのはちゃんはセルジオが士官学校の出だつて言うのは聞いてる?」

「あ、聞いてます。クロノくんとかとルームメイトだったつて」

「お、クロノの事も知ってるのか。なら話は早い。学生時代、俺とセルジオとクロノと、あと一人後輩とでよくつるんでいたんだよ」

ティーダは更に、クロノとセルジオが同級で、俺は一つ下、と付け加える。

「セルジオは学生時代から変な奴でさ。魔力は平均的なのに、頭と成績は良かったから悪目立ちしてたよ」

「ああー、それはなんかセルジオくんって感じですね。一人で黙々とテスト勉強とかしてそう」

「あはは、そうそう。それで俺とか後輩が無理やり遊びに連れて行ったりしてさ。懐かしいなあ……」

最後は昔を思い出したように笑いだすティーダ。いつもの爽やかなものとは違って、どこか子どものような無邪気な笑顔だった。

「ティーダさんが少し羨ましいかもです」

「羨ましい?」

はい、となのが頷く。

「なのはは、セルジオくんの事がよくわからないですから」

「ええと、それはどの辺りが？」

「だって好きなものも嫌いなものもはつきりしないですし、それに何のためにお仕事してるのかも」

よく笑うが、どこか掴み所がなく、あまり好ましくない人でも悪口は避けて、頼りになるが、過剰に関わろうとしない。どこか寂しそうなのに、何を考えているかは悟らせない。

一緒に時間を過ごしていても、なのははセルジオのことが理解できていつている感覚がなかった。

「え？　セルジオが何のために管理局にいるのかわからないの？」

だが、ティードダはなのはの言葉に本気で驚いたように目を丸くした。

「なのはちゃんは、あのセルジオと仕事しても何か伝わってきたりしない？」

「——？　だって、セルジオくん大抵冷静に仕事片付けちゃうじゃないですか。なんか、こう、さらつとした感じで」

「え、いやでもさ……」

ティードダは何かを言いかけていたが何やら難しい表情で腕を組んだ。

「あいつの……でなのはちゃんが年下だから？　いや……信頼で……か？」

「あの一、ティーダさん？」

ぶつぶつと呟くティーダが唐突に顔を上げた。

「話が変わるけどなのはちゃんセルジオと知り合つてどのくらい？」

「知り合つて、ですか……？ たぶん、半年、くらいですかね」

「それならそういう事もある、か……」

半年、という言葉聞いて何やら一人で納得したように頷くティーダ。

「うーん、なんと言えればいいかわからないけど、たぶん見てればわかると思うよ、セルジ

オのこと」

「見てれば？」

「なんというか、あいつ、根本的なところはすぐわかりやすい奴だからね」

「それって——」

曖昧なことを言つてお茶を濁すティーダになのはがどういふことか問い詰めようとする。

「すまん、話が長引いた。どうやら俺がいらんことを言つたらしくてさ……」

「せ、せせせせセルジオくんっ?! なんて来たの?!」

「いやそりやお前がいるんだからここに来るだろ……」

だがそれも大きく開け放たれた扉によって途切れてしまう。

セルジオはやたらと焦っているのはの様子に、曖昧に笑っているティータへと目を向けた。

「おい、お前また高町に何かちよつかいかけてないだろうな」

「まさか。俺の守備範囲はそこまで広くないよ」

「シスコン野郎の言葉を鵜呑みには出来ないな……」

「ははは、俺はシスコンかもしれないがロリコンじゃない。セルジオとは違うよ」

「俺だってロリコンじゃねえよ」

はあ、とセルジオが大きいため息をつくとき、未だどこか落ち着かない様子なののはの目を見つめる。

「高町、深呼吸だ。吸って、吐け」

「すうー、はあー」

「吸え」

「すうー」

「吐け」

「はあー」

「吸え」

「すうー」

「吸え」

「は、すうー、って無理だよ?! 何度息させるつもりなの?」

「よし、だいぶ普通に戻ったな。あのままじゃ使い物にならなかったからな」

ニヒルに笑うセルジオは軽くぼんぼんとなのはの頭を撫でると、自身も大きく深呼吸をした。

「さて、仕事の時間だ」

セルジオは最後に制服越しに懐中時計を触って、荒つぽく髪をかきあげた。



組織のアジトはやはり、というか定番通り、というべきか、廃棄都市郊外の廃工場の一つであった。

大体の犯罪組織はお財布事情と戦っていたりもするので、クラナガンからもそこそこ近くて、適度に施設の残っている事もある廃棄都市は便利なのだろう、とはセルジオの弁だ。

そしてそんな廃工場前では八人の首都航空隊の突入班と三課の二人にティーダを加えた人員が幻影魔法に隠れて様子を伺っていた。

ここに来ていない首都航空隊員は一応テロの狙いとなる三箇所の警護に当てられており、後は通常の警邏を担当している。

「三課、お前達の仕事は一階で徘徊しているだろう機械兵の相手だ」

「了解です。確認のために聞きますが、掃討が終われば現場待機という指示に変更はありませんか？」

「ない。お前達が来ればかえって混乱をきたす。静かに待っている」

「突入時の露払いは打ち合わせ通りウチがやりますが構いませんか？」

「砲撃の名手なのだろう？　上手く使ってやる」

「わかりました。では、全て打ち合わせ通りに」

首都航空隊の分隊長の一人、厳つい剣使いにセルジオが頭を下げ、なのはとティーダの元へと戻ってくる。

するとなのはがセルジオに念話を飛ばしてくる。昔は突入前にしゃべるな、と注意さ

れる事もあったが三課で仕事をするうちにそんな事もなくなった。

「(なんて?)」

「(変更はないとき。予定通りだ)」

「(なら初めはなのはちゃんの砲撃で活路を作って、その後突入班って感じか)」

「(ひえー、なのはの役割重大だなあ)」

「(今からなら俺が変わってやってもいいが)」

「(いいよ。私ができることをちゃんとするから)」

「(なのはちゃんは頼もしいなあ)」

目標である廃工場を前にして、幻影魔法で姿を隠す一同が戦闘態勢に始める。

「(高町、そろそろ)」

「(任せて)」

なのはがレイジングハート・エクセリオンに意思を送ると通常の射撃特化の形態アクセルモードから、砲撃特化のバスターモードへと変形する。

その姿は、標準デバイスに近かったアクセルモードとは大きく異なり、砲撃を溜めるための砲身、長距離射撃補助を行う為のグリップなどが付属しており、正に砲撃の為の形態である。

(「(デバイスバスター)」)

なのはが心の中でそう唱えると、レイジングハートが二発のカートリッジをロード、その砲身にブーストされて威力のました魔力を充填し始める。

桜色の光は小さく圧縮され、超高密度の魔力を内包し始める。その魔力に耐えきれずあたりを覆う幻影魔法が歪み始めたのだからその凄まじさがよくわかる。

「(撃ちます)」

そして、閃光が翔ける。

幻影魔法を根こそぎ吹き飛ばしながら砲撃が走り、廃工場の壁面の一部をぶち抜きながら、大きな入り口を作り出した。

「突入ー！ー！」

分隊長が声をかけると突入班が飛行魔法を使用しながらなのはの砲撃で作られた穴に向かって行く。

「俺たちも行くか、ティーダ、高町」

「極めて了解。俺は今回は遊撃手ガードウイングで」

「私の中には入ってからは後方援護のセンターガード」

「俺はいつも通りフロントアタッカーだな」

よし、と頷くとセルジオは加速魔法と飛行魔法を併用して、突入班の後を追った。

ティーダとなのはは加速魔法は使わないので少し遅れて追いかけてくる形となる。

セルジオが廃工場に入ると視界の端でガジェットの残骸を踏み越えた突入班が地下への階段を駆け下りて行くのが見える。

どうやらなのはの砲撃に巻き込まれて何体かは倒せたらしかった。

その背中を見送りながら、セルジオは得意の空間解析魔法を発動する。

(数は、二十……三十八……六十七……とここか。AMF発動装置は無さそうだが……)

翠の瞳を白く染めながら瞬時にガジェットドロンの数を把握すると、目の前でうごめくマシンを睨んだ。

「見かけた、とかそんなレベルじゃねえじゃないかよ、ガジェット」

これは徘徊とか、そういうレベルだ。一階部分にそれなりの数いるとは聞いていたがこれは流石に予想外だった。

一先ず解析で得た情報をティータとなのはのデバイスに送っておくと、セルジオは槍状態のゼファーを構えた。

すると一番近くにいたガジェットが敵の存在に気づいたのかその単眼を向けて、動き出そうとする。

「まあ、一先ず」

セルジオがマルチタスクを分割、あらかじめ待機していた加速魔法を再度発動させる。

「先日のもやり返しだ」

白光を纏ったセルジオの体がブレて、一番近かった三体のガジェットを槍で切り裂くと加速を使用して離脱する。

以前使っていたS2U・カスタムではその装甲の硬さに手こずったが、質量を持つゼファアの槍はいくらか強力らしくガジェットの装甲をもともしない。

三体のガジェットはセルジオの離脱の直後に殆ど同時に爆発、辺りへと金属片をまき散らした。

ふむ、とセルジオが槍を肩に担いでこの分だと問題ないかな、と判断すると、背後からセルジオでも未知の飛行型のガジェットが迫ってくる。

どうやらセルジオの広範囲解析から飛行で逃れた個体があったらしい。

取り敢えず同じように槍で叩き斬ろうとして、それよりも早く橙色の速射弾がガジェットを蜂の巣にされる。

「慢心は良くないよ、セルジオ」

「ちゃんと対応してたさ、ティーダ」

「どうだか」

ティーダは銃型のデバイスを手の中でくるりと回す。セルジオはそんなティーダの側に加勢して移動する。

「お前と組むのはいつぶりだ？」

「ざっと5年ぶりつてとこじやない？」

ティーダが襲い掛かってくる無数のガジェットへとホルスターに吊るしてあった二丁目のデバイスの早撃ちで弾き飛ばした。

ふ、とセルジオが笑う。

「まあ、全員揃ったって訳じゃないが」

「昔みたいに馬鹿やるかい？」

「それも悪くない」

にや、と笑みをかわしてセルジオが無数のガジェットへと踏み込んで行く。

ガジェットが四方から飛び込んできた敵へとアームパーツの鎌を振り下ろすが、セルジオは左手で槍を頭上で回転されることで弾いて、右拳を強く握りしめる。

(マルチタスク分割——模倣)

ゼファーにあらかじめインストールされていたクイントのデータが解析にかけられ、セルジオの体に会うように演算され直される。

インストール
「模倣——繋がらぬ拳」
アンチエイ・ナックル

体術による技術の応用でセルジオの拳がガジェットの一体をがちあげて空へと吹き飛ばす。

「——ランスタアの弾丸は全てを貫く」

そのガジェットへとティーダが銃口を向ける。

「ヴァリアブルバレット・パラドクスシフト」

引かれる引き金。飛び出す魔力弾。

ティーダのそれは一直線に空へと向かい、セルジオの打ち上げたガジェットのど真ん中を貫いて一瞬で壊滅させる。そして、貫いた魔力弾はついでとばかりに三つに分裂、セルジオを囲っていたガジェットも粉々に粉碎する。

「Jackpot全弾命中ってとこな」

そして銃口へ息をふつと吐いてみせるティーダ。

別に質量兵器のそれと違って火薬を用いたものではないため煙などは出ないが、それでもこういう気障な仕草はティーダにはよく似合っていた。

二人が視線を交わしてまた笑いあう。

今のは学生時代に考えたものだったが、どうやらどちらもまだ忘れていなかったようで、五年の月日があっても非常に息のあったコンビネーションだった。

だが、少しばかりタイミングがよくなかった。

「あ——！ それなのはとやっつたコンビネーション！」

どうやらティーダとの連携の様子が、一人だけ足（運動的ではなく移動速度）が

遅かったせいでしょうやく到着したなのには見られていたらしかった。

「なに、今のコンビネーションなのはちゃんともやってるの?」

「いや新しいの考えるよりも便利だから……」

「うーわ、マジかよ。いや別に良いけどき……」

なのははぶんぶんという擬音が似合いそうな表情で極太のビームをぶつ放し、周囲のガジェット十体を一気に粉々してしまう。

「セルジオくんは私のコンビなんだから他の人に浮気しないでよ!」

「おう、気をつけるわ……」

「ははは、意図せず間男になっちゃったよ、俺」

その後ようやく揃った三人で五十体以上のガジェットを相手にするのだが、これが本当に危なげなく戦闘が進む。

そもそもが前回セルジオたちが苦戦したのは『AMF発生装置』という未知の技術が相手にあつたからであり、それのないガジェットははつきり言って雑魚に近い。

装甲は硬いし、ところどころ空を飛んでいる個体もいるが、だからといって脅威になるわけでもない。

セルジオの槍なら問題なくスクラップにできるし、なのはの砲撃も同様だ。ティータは弾丸が弾かれることはあるものの、ヴァリアブルバレットならば問題なく貫けてい

る。

非常に良いペースでガジェットの掃討は進んでいた。

戦闘を始めて二十分近くで、ガジェットの数がおよそ半分になり、そこで一度セルジオが突入班の様子をティーターへと尋ねる。

「ティーター、突入班は今何割制圧した？」

「ちよつと待て。——はい。——わかりました。驚いたな……」

「なんだって？」

「いや、もう八割制圧だとさ」

「八割？　随分早いな」

「ああ。何でもデータより構成人数が少ないとかで……」

その言葉に、セルジオざらりとした感覚を感じる。まるで、何かのボタンを掛け違えたような、嫌な雰囲気だ。

（何か嫌な予感がするな……）

セルジオはその感覚を明確に言葉にすることはできない。ただ、その嫌な感覚は、三課で扱った事件からくる、経験則による直感だと言うことは何となくわかっていた。

「高町、少し嫌な予感がする。早めに決めたいんだが、準備はできてるか？」

「一応できてるけど……全部を倒す方砲撃を撃つのは無理だと思うよ？」

「ならそこは俺とティータで補う。さくつと捕縛してくれ」

「わかった」

こくり、と頷いたのはが目測できている限りにいる、凡そ三十体近くのガジェットドローンの胴体、全てにリングバインドを発動、身動き一つできないレベルでその体を空間に固定した。

「せーので行くぞー！」

「わかった！」

「了解！」

なのはがその場でレイジングハートをバスターモードに変形、カートリッジのロードをしながらその砲身の先を拘束されたガジェットへ向ける。

「行くよ、レイジングハート」

『All right, master』

ティータが走りながら二つの銃口の先に二発の砲撃を収束していく。そこになのはのような一撃必殺の威力はないが、丁寧に編まれた魔力弾は自分の役目を果たせるだけの威力が内包されてある。

「さて、行くうか」

セルジオが加速魔法で移動しながらなのはの対面へと飛んで、左腕のガントレットか

ら吐き出された合体パーツをゼファアに接続、砲撃特化の第二形態へと変形する。

「行くぞ！　セーラーのツ！」

なのはがレイジングハートから桜色の砲撃を、ティーダが銃口から橙色の砲撃を、セルジオがゼファアの砲身から白色の砲撃を、それぞれ解き放つ。

「デイバインバスター・エクステインクション！」

「フアントムブレイカー！」

「デイバインカノンツ！」

三人の砲撃がまるで『米』の字のように交錯し、その中央にいたガジェットを一体残らず、爆発すらできないほどに粉々に吹き飛ばした。

セルジオは素早く解析魔法でもうガジェットの刈り残しがないかどうかを確認し、もう敵性反応はないことを確信する。

「ティーダ、突入班は……」

「今確認してる。少し待て」

しばらくの間ティーダが黙り込みこめかみを指で抑える。どうやら今念話を繋いでくれているらしかった。

だが今のセルジオにとってはそれすらもどかしい。何か言いようもない不安と違和感が胸に巣喰い、セルジオをあせらせる。

「セルジオくん、何か起こったの？」

「いや、わからない、けど……」

その様子を流石に放っておけなかったのかなのはが駆け寄ってきたが、セルジオは曖昧な表情を浮かべるしかない。

「俺の勘違いなら、それで良いんだ」

むしろ、そうであってほしい、とでも言いたそうな様子のセルジオ。

しかし、現実はそうもいかない。

願いじゃ世界は変わらないし、時に死ぬほど残酷な、後悔したくなるようなことさえ容易く引き起こす。

「なんですって！……道理で————はい、でも……！」

突然ティーダが声を荒げた。普段からは想像できないほどの鋭さでなのは体がびくりと震えたほど、荒々しく、彼らしくない声で。

「どうしたティーダ。何が起こった」

ティーダは悔しげに歪めていた表情を無理やり押し込めると、ため息をひとつした後、状況の説明を始める。

「今日だったんだよ。テロの決行日だ。しかも爆発まで20分切ってるらしい」

「——！」

「成る程な、道理で制圧が早すぎたわけだ。殆どの人員は現場に行っていたって事か」
目を見開くなのはの横でセルジオはティーダへと視線を向ける。

「だが、それだけじゃないんだろ」

「——ッ」

「俺に言うなど言われたか。まあそんなところかとは思ってたが」

首都航空隊の部隊長は、突入日やそれ以前にテロが起きた場合に備えて現地には常に警護班も置いていた。もしテロの決行日が今日だとしても十分対応できるはずだった。

しかし、ティーダは焦っている。それはつまり、警護班では対応できないような事態が引き起こった、そう言うことだ。

「ティーダ」

セルジオの翠の瞳が、ティーダを見つめる。その中には過去、何度もティーダが目にした決意の炎が燃えている。

「責任は全部俺が取る。お前の昇進の邪魔はしない。だから、教えろ」

「し、かし……」

「頼むから教えてくれ、もしお前が俺に友情を感じてると言うなら」

「それを……っ！ それを今言うのはずるいだろう……！」

「……自覚してる」

ティーダが拳を握りしめて目を伏せた。そしてしばらく考えを巡らせていたが、やがて諦めたようにポツリと呟いた。

「俺たちも知らなかった四つめのテロのポイントが見つかった。制圧したアジトから見つかったらしい」

「場所は？」

「中央駅手前のリニアレール、だそうだ」

「おい、それって……」

セルジオの言葉に、ティーダがああ、と頷いた。

「首都航空隊の隊舎からじゃあ最低でも30分かかる。間違いなく爆発までに間に合わない」

ティーダが唇を噛み締めながら、次の言葉を吐き出した。

「起こるぞ、テロが」

その心は不屈

これは夢だと、そう思いたかった。

「や、大丈夫？」

燃え盛る炎の中、僕を抱えて飛ぶ人がいた。

額から血を流しながらもお頼り甲斐のある笑顔を浮かべるその人は、僕の顔を覗き込む。

「ははは、酷い顔だな。そんな顔じゃあ、守るものも守れないぞ？」

しばらく飛んで、その人は僕を地面に下ろして、力尽きたように倒れこむ。慌てて駆け寄って抱き起すが、その人の胸には大きな穴が空いていて、そこからとめどなく赤い液体が溢れてくる。

「なあ、覚えておいて欲しい。これは、お前に残せる最後のものだ。遺言、みたいなもんかも」

必死に、必死に名前を呼ぶ。だけれども、その人の翠の瞳からは次第に光が失われていく。

「相手の心を想え。想いを絶やすな。希望を捨てるな。自分を信じろ」

名前を呼ぶ。だけど、その人はもうその瞳に僕の姿を映していない。

「人を、救え」

その言葉を最後にその人は力を失った。今まで確かにそこにあつたものが、僕の中で、今、確かに跡形もなくなつた。

ばかり、と、僕の——俺の何かが歪む音がした。



首都航空隊の部隊長である男は率直に言つて焦つていた。

事前調査は完璧だったはずなのに、突如現れた四つめのテロポイント。しかも、狙つたように隊舎からの距離が遠いポイント。

まるで、こちらの動きを理解して、敢えて対応できない場所にしたかのように。「落ち着け、まだ手はあるはずだ」

伊達にエリート部隊である首都航空隊の部隊長を名乗っているわけではない。若いうちは現場でいくつもの功績を挙げ、そして指揮権限を得てからも多くの難事件に立ち向かってきたのだ。

たかがテロ事件の一つで焦る必要はない。

部隊長は時間を気にしながらも、大きく息をついて頭を巡らせ始める。

四つめのポイントである中央駅の路線は、ミッドの交通の要とも言えるリニアモーターカーが走る物だ。

その路線はクラナガンの市街の頭上を走るように作られており、そこでのテロは路線の破壊による二次被害で、多くの建物の損壊、死傷者へとつながるだろう。

そして今の時間帯も最悪に近い。休日の昼間という時間帯では、街へと繰り出そうとした家族連れやなどで駅は賑わっているはずだ。乗客もいつもにも増して多いはず。

一番恐ろしいのは路線の破壊でも、駅への被害でもなく、破壊された路線に気づかずリニアモーターカーが突っ込んでくる事。

地球におけるリニアは積載人数は凡そ七百人、最高速度はおよそ時速500キロほど、通常運行時でさえ時速300キロを優に超える。

ならば、地球より遥かに科学の発展したミッドならばそれと同等以上の性能を持つリニアを走らせているのは当然のことだ。

時速500キロのものが脱線し市街地に突っ込む。それで、何が引き起こされるかなど想像するだけでも恐ろしかった。

「犠牲者を出すわけにはいかんのだ。しかし、現場に誰を送る……！」

既に首都航空隊の隊舎で待機していた隊員を送ったが、それでも間に合うとは思えない。かといって他の警護班に連絡をすれば混乱をきたし被害を拡大する恐れすらある。

ならば、どうするのか。

部隊長が深く唸った時、不意に卓上の通信デバイスに連絡が入り、半透明のホログラムが現れた。

液晶には『SOUND ONLY』と映されているが、それが何者であるか、名乗らずとも部隊長は理解できた。

「セルジオ・アウディ……！」

『丁寧に挨拶をしたいところですが時間がありません。無礼は見逃してもらいます』

「何の用だ。私は忙しい」

『テロポイントの件、聞きました。一刻の猶予もないはずです』

ちっ、と部隊長は小さく舌打ちして何の姿も映さないホログラムを睨んだ。どうやら

耳ざとい三課らしく、どこかから聞き出したらしい。

「現場には首都航空隊の者が向かっている。お前に出来ることはない」

『……そこからじゃ現場には間に合わない。最低三十分はかかります』

「そんなのはわかっている！　だがどうしろというのだ！　現場に避難を促すか?!

そんなのかえって混乱を招くだけだ!」

『ええ、だから、俺が行きます』

「なに……?」

『俺が、行きます』

部隊長は告げられた言葉に思わず言葉を失う。

「間に合うはずがない！　現場までどれだけの距離があると……」

『俺なら間に合います。いえ、間に合わせてみせる』

「いや仮に間に合うとしてもそれ以前の問題だ！　お前がやろうとしているのは命令

無視に独断専行だ!」

『罰なら後でいくらでも。責任も俺が負って構いません』

「そんなもの許せるはずが……!」

『俺は!』

通信機越しのセルジオの声が部隊長の言葉を遮る。その迫力に、思わず言葉を失う。

『俺は、自分ができていることがあるのに諦めたくない』

「——ッ！」

『俺は、人を救うことだけは、絶対に絶対に諦めない！』

その言葉に、部隊長が唇を噛んだ。自分のことすらいとわかないその姿に、ひどく、懐かしくて、辛いものを思い出したかのように。

『それが、『セルジオ・アウデイ』だから！ あの人に貫った俺の思いだから！』

ぶつり、とその言葉を最後にセルジオからの通信が切れる。

部隊長が拳を握りしめて机に叩きつけると、ぶるぶると体を震わせる。

「また、また三課……！ 勝手に上からの口利きで割り込んで来た分際で……！」

爆発まで、あと、十分。



(間に合え間に合え間に合え間に合え間に合え間に合え！)

白光を纏ったセルジオがミッドの空を弾丸の様に飛んでいく。

マルチタスクは十個全てがフル稼働。加速魔法を並列的に処理しながら普段の数倍の効率を叩き出している。

魔力消費のことなど考えない我武者羅な魔法行使。そんな事をすればリンカーコアが平均的なセルジオではすぐに魔力が尽きてしまわだろうが、今はそんなことすら無視してひたすらに飛ぶ。

無茶な加速魔法に体が耐えきれず体が関節からぎしぎしと軋む。だが、それでもセルジオは加速をやめようとはしない。

それどころか更にマルチタスクを二つ追加して、それすらも加速魔法の行使に当て。限界を超えたのか頭が内側から割れるような痛みを訴えてくる。

「——ブリッツ！ アクション！」

己の体の痛みという警告を全て無視して、重ねて加速魔法を発動させる。

それは、ただ、人を救うためだけに。

廃工場の一階で、ガジェットドロンの残骸に囲まれるのはとティーダ。どちらも視線は先ほど飛び出していったセルジオの方角を向いている。

「なのはちゃん」

そんな中ティーダがなのはの名前を呼んだ。

酷く寂しそうに、辛そうに、何かに耐えるように。

「あいつの後を、追ってやってくれ」

「セルジオくんのか？」

「ああ。君はセルジオのコンビなんだろう？　俺にはもう——」

何かを言いかけてティーダが途中でやめる。そして、いつものようにさわやかな、でもどこか無理したようなそんな笑顔を見せた。

「あいつが、どういう人間なのかを、ちゃんと見届けてやってくれ」

「——はい。私、追いかけます」

なのはは強く頷くと先に一人で行ってしまったパートナーを追いかけて、外へと飛び

出していった。

なのはの飛行速度ではセルジオに追いつけはしないだろうが、それでも追いかけると
いう行動に意味があるのだと、ティーダは思っていた。

ティーダが廃工場の天井の穴から覗く空を見上げて、ポツリと呟いた。

「お前は、本当に変わらないな、セルジオ」

爆発まで、あと、五分。

無茶に無茶を重ねて、セルジオは廃棄都市からクラナガンの中央駅付近までようやく
辿り着いた。

残り時間はわからないが、それでも爆発したならばひどい騒ぎになっているだろう。
それが無いということは、まだ時間が尽きていないということだ。

(頭が、痛い。胸、リンカーコアも、痛い)

疲労のせいで息は荒く、目もぼんやりと薄暗くなっているようにすら感じる。腕も足

も末端の方から痺れて、気をつけていなければゼファーを落とすそうだった。

「あと、少しなんだ。いそが、なきや……」

そして、あと少しの距離をセルジオが縮めようとした時、胸の懐中時計の針が、かちりと動く。

瞬間、目の前のリニアの路線が凄まじい爆音とともに粉々に砕けた。

セルジオの思考が真っ白になる。間に合わなかった、間に合わなかった、という後悔が何度も何度も頭の中で繰り返される。

「まだ、終わりじゃないッ！」

だが、諦める事はしない。まだ、諦める段階ではない。これは、ただ路線が爆発しただけだ。幸い今のタイミングでリニアは走っていない。

なら、するべきなのはこの爆発の二次被害を食い止める事だ。

「ゼファー第二形態！」

セルジオは加速魔法を途切れさせないまま、ゼファーを素早く変形させて、市街地へと落ちていく路線の破片の下に潜り込む。

そして、市街地を守るように背中を向けて、ゼファーの砲身を落ちてくる無数の破片へと向けた。

「デイバインカノンッ！」

ズ、とゼファアのシステムによって無理やりリンカーコアから魔力が抽出され、瞬間的に砲撃を放つ。

非殺傷設定の解除されたセルジオの『デイバインカノン』は市街地へと降り注ぐ、路線の破片を一つ残らず消滅させ、空へと巨大な柱を屹立させた。

「はあ、はあ、はあ、く、まだ、まだ……！」

破片は全て消滅させた。これで、市街地への被害は食い止められたが、だからといって休んでいるわけにはいかない。

（次は爆発の後の対応、か）

今回のテロによる爆発で路線巨大な穴を作ってしまったっている。早く駅へと連絡を入れて早くリニアの運行を停止してもらわなければ、今回の件は終了したとは言えない。

満身創痍のセルジオは駅に向かって飛ぼうとする。

「なんだ、これ……！」

だが、それよりも早く遠くから低い音が響いてくるのを感じてしまう。既に玉のような汗を流すセルジオに、つつ、と冷たい汗が流れた。

荒い息のまま、広範囲解析を発動させて、その端から高速で此方へと走る存在を検知した。

「うそ、だろ……!」

その存在がなんであるかなどいちいち思案する必要すらない。ここは、リニアが走る為の路線なのだから、時速500キロの速さで運行するリニア以外、走る存在があるわけがないのだ。

(なんで運行を止めない! 爆発が起きたんだぞ! まさか、テロの他にハツキン

グが……、いやでも……!)

「ああ、もうわけわからねえッ!」

珍しく荒っぽい言葉を吐いて舌打ちするとセルジオは未だ砲撃形態のゼファーを左腕に装着したまま、思考を巡らせる。

(このままリニアが突っ込んでくれば脱線して地上に落ちる。そうなれば乗客も、市街地の市民も死ぬかもしれない……)

リニアの乗客、およそ七百人。最悪、もしこのままリニアが止まらなければ、その全てが死亡し、ついだとばかりに市街地に突っ込んだリニアはそれと同じか、それ以上の人間を殺すだろう。

「なら、リニアはこの直前で止めなきゃな」

リニアがブレーキをするという事は考えないほうがいいだろう。もし出来るなら、爆発があった時点ですべては止まるはずであるし、この近さでそれに気づかなかつたというのは無

理な話だ。

おそらくハッキングか何かを受けて操作不能の状況なのだろう。

ふう、とセルジオが息を吐いた。

マルチタスクを三つまで減らして、一つを砲撃、一つを身体強化、一つを飛行、最後の一つは予備用にあけておく。

「ブリッツ、アクション」

そして、セルジオは加速魔法を発動させ、高速で迫るリニアに向けて突っ込むと、迷う事なく真つ正面から受け止めた。

「ぐ、がああああああつー」

止まらない。なら、自分の腕で止めよう、という至つてシンプルな考え。ただ、相手が、時速500キロで向かってくる鉄の塊、というスケールを相手に、それをやる、という事だけが異常。

そんなものに正面から向かえば普通は体が弾き飛ばされるか、ぐしゃぐしゃのミンチになる事だろう。

だがセルジオは、そうなる未来を直ぐに足を地面につけて、そこから身体操作魔法で一ミリも動かないように固定、自身の体勢を完全に固定してしまう。

路線につけた足がガリガリと削れ、あつという間にバリアジャケットすらも消滅させ

てしまい、そのまま足裏の肉を削ろうとする。

だが、それよりも早くサブのマルチタスクにバリアジャケットの再構成の術式を叩き込み、瞬時にバリアジャケットを再生成。そしてまた、バリアジャケットが削られて、再生成、という行程を何度も繰り返した。

「ゼ、フアーッ！　　デイバイン、カノンッ！」

そして完璧に受け止める体勢ができると、セルジオは左腕を背後へと向けて、砲撃を発射、その威力全てを破壊ではなくリニアのブレーキとして使う。

「あああああああッ！」

何度も何度も再生成されるバリアジャケットと、絶え間なく撃ち続けなければならない砲撃にセルジオの中の魔力はあっという間に吸い尽くされていく。

先程からじくじくと痛んでいたリンカーコアも、最早痛いという感覚すら感じなくなり始めていた。

「あ、きらめ、ない……！」

セルジオはそこで足以外のバリアジャケットを全て解除。ただの魔力に変わったそれを片っ端から砲撃に回していく。

何も防護機能のなくなった体が、リニアから発せられる圧力に耐えきれず、あちこちの筋肉が断裂を始める。陸の茶色の制服が、セルジオの血で瞬く間に真っ赤に染まって

いく。

「俺は！」

それでも、身体操作で体は全く動かさない。血が吹き出し、骨が軋み、肉が裂けても、それでも、ただひたすらに前を向く。

「人を救うことを諦めないッ！」

セルジオの空間解析が路線の巨大な穴を捉える。その距離はもう直ぐそこで、ここで止められなければ乗客も、セルジオも間違いない死を迎えることだろう。

「止、ま、れええええええっ！」

セルジオが強く地面を踏みしめる。残り少ない魔力と、周囲の魔力すらも収束して砲撃を放つ。そして、祈るように叫ぶ。

「く、はは、どんな、もんだ……」

そして、奇跡か必然か、リニアは路線の穴の直前で、ゆっくりと動きを止めた。

笑うセルジオ。だが、その顔も、体も血まみれで、最早生きているのかすら怪しい見た目だ。

「あ、れ……」

そんな状態で人が意識を保てるはずもなく、セルジオの体から力が抜けて、ふらりとよろめいた。思わずたたたらをふもうとして、筋肉が断裂した足がいうことを聞かない。

もう、自分の体重すら支えきれなくなったのか、セルジオが後ろへと、路線に空いた巨大な穴へと倒れ込んでしまう。

「あ——」

一瞬浮遊感がして、セルジオの体が真っ直ぐ落下を始める。なんとか飛行魔法を使おうとするが、マルチタスクの酷使により、思考が鈍化してうまく演算ができない。

重力に引かれるように、セルジオが落下していく。

（魔法が、使えない。このままじゃ、死ぬ）

ぼんやりと、そう考えて、心の残骸が動き出す。

（死ぬ、のは駄目だ。まだ、しなきゃいけないことが——）

必死に体を動かすが、だが、もう意識を保っておくのすら困難で、脳の端からずぶずぶと闇に吸い込まれていく。

（俺は、まだしなきゃいけないことが——）

そして、真っ暗になる意識の中で、桜色の星が光った。それは、次第に光を強めながらセルジオへと向かってきて、優しく抱きとめた。

「セルジオくんっ！」

星が、名前を呼んだ。

「高町、か」

「そうだよセルジオくん！　しっかりして！　死んじやだめだよ！」

「そう、だなあ。死ねないんだ……」

「うん、うん！　　そうだよ、だからセルジオくん、しっかりして」

星が、必死になるのがなんだかおかしくて笑ってしまう。朦朧とした意識のまま、泣きそうな顔の子をポンポンと優しく撫でる。

「だいじょうぶ、だつて。まだ、死ねないから」

——ただ、少し眠るだけだ。

そして、セルジオは、どろりとした闇に意識を委ねた。



なのはが病室にかかった札をぼんやりと見つめる。

ICU。日本語にすれば集中治療室。

詳しいことはなのにはよくわからないが、それは、なのにとってはあまり好ましくない、もしかしたら嫌いな言葉かもしれない。

それは、たぶん、その病室にいるのが、半年の付き合いになるコンビ、セルジオがいる部屋だということと、なのはが幼い頃、父が長い間そこにいたということ覚えているからかもしれない。

「……………セルジオくん」

セルジオは、あの日一人でリニアを受け止めてテロ被害をゼロに抑えてみせた。

もちろんリニアの乗客の中には無理なブレーキによって怪我した人もいたが、どれも軽傷の範囲だ。もし、彼が受け止めてなければ七百人の乗客はもちろん、市街地の人も何人死んでいたかわからなかった。

しかし、功績の代償は大きく、なのはがゼストから聞いた話では、両足骨折、あちこちの筋肉断裂、リンカーコアの著しい衰弱、失血多量と、どれか一つ間違えれば死んでいたレベルの大怪我をいくつもしていたらしかった。

「なんで……………」

思い出すのは血だらけのセルジオの姿。そして、なん度も呟いていた「まだ死ねない」という言葉。その言葉が、『すべきことが終われば死んでいい』と言っているようで、なんだか怖かった。

——哀しみ苦しむ人を救い出す。

それは、今もなのはの胸の中にある、魔法を使うための誓いだ。

そして、それだけのために努力してきたのはだからこそ、いまならメガーヌの、ティーダの言葉の意味が理解できる。

セルジオは、人を救うためだけに、迷うことなくその身を投げ捨て、そして多くの命を助けた。

無茶と、その思いだけで、無理と道理を叩き壊してみせたのだ。

その姿は、高町なのはの理想の、その行き着く先であるように感じられた。

「でも、あんなになってまで、すること、だったのかな……」

意図せずに、『セルジオ・アウデイ』という存在は、高町なのはに小さな波紋を与えていた。

託し託されて

半身を起こしてぼんやりと窓の外を眺める。

「生き残った、か……」

呟いてあの人と同じ金髪を触って、目蓋を閉じた。

俺はちゃんとあの人への想いを継いでいるのか、それだけが気がかりだった。



ある、魔導師がいました。

色素の薄い淡い金髪の翠の瞳の、とても優秀な魔導師でした。

魔力量も平均より多く、努力に裏付けされた確かな実力、そしてなにより人格者で

あつた魔導師は、多くの人に慕われ、尊敬されてきました。

そんな魔導師にも家族がいました。

自分と同じ瞳と、髪の色をした男の子です。魔導師には他に家族はいませんでした。が、その男の子をとても可愛がっていました。

時に厳しく、優しく接し、どんな時でも、男の子の憧れであり続けました。

周りの人たちも、あの二人が幸せに暮らせる日々が続けばいいと、そう思っていました。

でも、ある時大きなテロ事件が起きました。今でもどの組織が起こしたのかも、どういう技術が使われたのかもわかっていないほどの、大きな事件です。

たくさんの方が亡くなりました。多くの魔導師が犠牲となりました。そして、ほんの僅かな人がテロの現場から助けられました。数える程の魔導師が帰還できました。

しかし、その生存者の中に翠の瞳の魔導師の名前はなく男の子の名前はありました。

男の子の名前は『セルジオ・アウデイ』。

今、魔導師の戦友の一人であるゼスト・グランガイツの下で戦う魔導師の一人となった、そんな少年の名前です。



がたがたと小さな音を立てる電車に揺られながら、なのはいつもの病院を目指す。仕事が終わりいつもはまっすぐ転移ポートまで向かうのだが、最近は帰宅時間を少しだけ遅らせてセルジオの面会に向かうことにしている。

地球ならば一年は寝たままの生活なのだろうが、セルジオは少しばかり優秀な治癒能力と、ミッドの科学と魔法を用いた優秀な治療で一週間経った頃には目を覚ました。

最近では勝手にベットのうえで書類仕事をしてよくメガーマに怒られたりしているほどのワーカーホリックっぷりだ。

以前は、凄いなあと思っていたなのも、先日の無茶苦茶な様子をみてしまったせいか素直に受け取れず、なんとなくセルジオが生き急いでるんじゃないかと疑ってしま

う。
(私って、めんどくさいなあ……)

ごん、と電車の窓に頭をぶつけると、眼だけを動かしてクラナガンの町並みをぼんやりと見つめる。

なのはの故郷の地球とは比べ物にならないほど発展した町並み。
(三課の人たちはずっとここ守ってきたんだろうな)

ここにクイントやセルジオがいたならば、今はお前も一緒に守ってる場所だよ、とでも声をかけるのだろうかが残念ながら今はなのは一人だけだ。

電車から降りると、セルジオの入院している病院はすぐそこだ。

すでに何度もきたところだし、今さら道順に迷ったりはしない。

「ちよつと寒くなってきたなあ」

突然吹いた気まぐれな風に、なのはが軽く身を震わせる。

地球の季節はもう秋の終わりを迎えようとしており、なのはにとつての異世界であるミッドチルダも相応に寒さの兆しを見せ始めていた。

少し早足で病院へと入るといつものように面会のカウンターの女性へ挨拶をする。

「こんにちは。面会したいんですけどいいでしょうか」

「アウデイさんのとこね？　　後三十分くらいだから気をつけてね」

「わかりました。いつもありがとうございます」

「いえいえー。というか、アウデイさんも男冥利に尽きるわねー、こんな可愛い彼女さんがお見舞いに来てくれるなんてー」

「にや、な、なのはたちはそういうんじゃないです」

なのは否定するが女性は全て分かつてるのよ、とでも言いたげな表情でニコニコに笑うだけだ。

ひとまず頭を下げて無理やり会話を打ち切ると逃げのようにセルジオの病室へ向かう。

いつものようにエレベーターは使わずに階段を登っていく。運動音痴のなのはからしたらなかなかの重労働だが、体を動かす訓練にはこのくらいがちょうどいいのかもしれない。

「彼女に、見えたのかなあ」

「ミッドチルダは男性はともかく、女性は見た目と実年齢が釣り合っていない人が多い。そのせいか、外見年齢的にめちやくちや離れてそうにも見える人たちが結婚していたりする事もよくある。身近なところで言えば、クイントとその夫、ゲンヤのナカジマ夫妻なんかそれぞれに当たる。」

「セルジオくんが聞いたらなんていうだろう」

たぶん、いつだかのように「俺と高町はそういうのじゃない」とむすつとした態度で言うだろう。いや、案外「俺と付き合いたいのか」とか言ってからかってくるのかもしれない。

その様子を想像して、なのははくすつと笑みをこぼした。

まあそんなことを考えていると階段なんてあつという間に登り終わって、セルジオの病室も見えてくる。

ちら、と就職祝いに兄に買ってもらった時計をみれば、面会終了時間まであと二十五分ほど。たくさんあると言うわけでもないが、話すことも大してあるわけでもない。

今日の仕事はどうだった、とか、メガーヌさんが産休を取ることになったんだよ、とか、クイントさんが書類仕事手伝ってくれる人がいなくて大変そうだ、とかそんな感じのことだ。

「ん、そこにいるのはなのはか？」

「あれ、クロノくん」

ふと、名前を呼ばれて前を見れば、海の制服を着たクロノの姿があった。

「なのはもセルジオの見舞いか？」

「つてことは、クロノくんも？」

「まあね。ちょうどどこつちに寄港してたし、あいつの醜態を拝みに来たんだよ」

「なにそれ」

いつものクロノからはなかなか聞かない皮肉めいた言い方にくすつとなのはが笑う。

なのはにとつてのクロノはいつもどっしりと冷静に構えている先輩、雰囲気的には親戚のお兄ちゃんといったものに近い。そんな彼が、こうして少しくだけた話しをするの

は、珍しく、なんだか不思議な感じでもあった。

「クロノくんってセルジオくんと仲良いよね」

「そうかな。別に普通だと思うぞ」

「そんなことないよ。だって、セルジオくんがクロノくんのことを話す時って、結構楽しそうだし」

「なんだか素直に喜べない情報だな、それは」

眉をハの字に歪めて、けれどどこか楽しそうに肩をすくめるクロノ。口では素直でないものの、悪い気はしていないことがなのにもなんとなく伝わってくる。

たぶん、その関係はなのはと、その親友のフェイトのような友情とはまた違う。

なのはとフェイトは互いに互いが大切だと理解して、普段から言葉や行動でその意思を示す。だから、少々過剰なスキンシップ、有り体に言えばハグとか、をしたりもする。

だが、クロノとセルジオはそこまで表には出さない。適当に話し、時には貶し合うこともある。だが、ふとした行動に相手への信頼が見て取れる。互いに全てを語ることはないが、行動で伝わる相手への信頼があるようだった。

(あれ……?)

そこまで考えたなのはの中に疑問が一つ浮かんでくる。

それは、クロノがセルジオの事をどこまで理解していたのかと言うこと。

いや、そんなこと言うまでもないだろう。士官学校の友人であったティータも、同じ部隊であるメガーヌも知っていたのだ。クロノが、セルジオの異常とも言えるそのあり方を、その想いを知らないはずはない。

「ねえ、クロノくん。どうして、なのはをセルジオくんに紹介したの？」

「……どうして、か」

なのはの問いかけに、クロノは少し困ったように制服のネクタイを触って、そしてふうと息をついた。

「まあ立ち話もなんだし少し座ろうか。なに、セルジオの面会には間に合うようにする」

そう言ってセルジオの病室の反対、いくつかの自販機と椅子が並ぶ、待合所のようなところへ歩いていく。

「飲み物はココアとコーヒーどちらがいい？」

「じゃあココアで」

「わかった」

クロノは自販機でココアとコーヒーを一つずつ購入すると、片方をなのはに渡して腰を下ろした。

なのはが一人分の間を開けて椅子に座ると、クロノはコーヒーを一口飲んで、ゆっ

くりと話し始める。

「君をセルジオに預けたのは、あいつが信頼できるってのもあつた。でも、本当はさ、他にも理由があつたんだ」

「うん……」

「なのはは、あいつを、セルジオのことをどう思う？」

それは、いつかメガーヌにも聞かれた言葉。その時のなのはは確か、頼りになる先輩、とか掴み所がない、と言つた答えをしたものだった。

けれど、今は違う。

あの日の光景、血だらけになつて、死にそうになりながらも、必死に現実に抗うあの姿を現わすならば、きつと。

「人を、助ける……救うことに全力な人、だと思う、セルジオくんは」

その言葉以外では表せない。

その答えを聞いて、クロノが薄く笑つた。

「そうだな。セルジオを表す言葉は、きつとそれが一番正しいだろう」

「そう、だね」

「そして、それは君を表す言葉でもある」

「——！」

驚いた表情を浮かべたなのは、クロノが自分で言うのもなんだけど、僕はこれでも人をよく見てる方だね、と薄く笑みを返す。

「君は、魔法が好きと言うよりも、自分の使う魔法が好きと言うよりも、自分の魔法が役に立つことが好きだろう?」

「なん、で……………?」

「そういう奴をずっと近くで見ってきたんだ。結局、なんにも変わらなかったがね」

自嘲気味に顔を歪めるクロノ。

「正直な話、僕は自分の気持ちを上手く言い表せない。もしかしたら、僕は君にあいつを見て止まって欲しかったのかもしれない。君とあいつなら、君たちの目標に届くと思っただのかもしれない」

そしてクロノはまだ熱さのこるコーヒを一気に飲み干して、腕で目を覆った。

「——高町なのはに、セルジオ・アウディを救って欲しかったのかもしれない」
人を救うならば、彼をこそ、救って欲しかった。

そこまで言ってしまうと、クロノは誤魔化すように軽く笑った。

「……勝手な言い分だった。突然すまなかった」

小さく謝ってクロノは立ち上がると、自販機横のゴミ箱に飲み干した空き缶を捨てる。

そして、最後に座ったままのなのはに軽く目をやって、優しい笑顔を浮かべた。「これからも、セルジオをよろしく頼むよ」



セルジオがとベットの上で小さく伸びをすると、それだけで、この前受けた傷が痛んだ。

「あいたたた、さすがにまだ治ってないか」

瀕死だったのだから普通ならこんな軽口も叩けないのだが、どうやらセルジオの主治医は随分と優秀らしい。

「ふむ、高町は今日は来ないみたいだな」

手元の懐中時計に目を落とせば面会時間は残り十五分ほど。今からなのはが来るとは思い難かった。

「高町だって俺のとこなんかきても暇だらうしな」

セルジオの中で『高町なのは』という存在は同じ三課の仲間で、一応パートナーで、クノから託されたすごい才能を持つ後輩、という認識だった。

もちろん相応に信頼もしているが、それでもイマイチ守る対象というイメージからは脱却しきれていない。

だから、相手も自分への信頼はそのくらいだろうと思ってたし、なのはが来なくても不審に思うことも、不満に思うこともなかった。

「んー、これから飯までどうするか……。仕事はメガーヌさんが持つて帰っちゃったからなあ……」

セルジオの脳裏に産休で比較的暇だったのか、見舞いに来るなり片っ端から書類を持つて帰ったメガーヌの姿が蘇る。その後、やってきたクイントとクイントの娘にそのことを笑い話として話したところ、めちやくちやに怒られたりしたのだが、セルジオは全くこたえていなかった。

「この前の戦闘ログでも確認するか」

頭をかきながら近くにあつた銀色のガントレット、ゼファーに手を伸ばそうとして、不意にノックがされる。

「あの、セルジオくん、今いいかな？」

ひよこつと栗色の髪を揺らしながらなのはが顔を出した。

「いいよ……と言つても面会時間あと少しだし、遅くなつてもいけないから、手短になら」

「ありがとう」

なのはは少し俯きながらセルジオのベットの近くの椅子にちよこんと腰掛ける。その、いつもと違う様子にセルジオが眉を寄せた。

（うーん、こういう時はどうしたらいいんだ？）

あいにくセルジオに妹なんかはいないし、今は家族もいない。クイントの娘なんかとは微妙に付き合いがあるものの、こういう場面にはなかなか出くわさない。

「あー、高町、この前の案件のことだけど、どうだった？」

「どうだったって、どういうこと？」

「いや、怪我人とか出てなかったか？ ゼストさんに聞いたけど『怪我を治してからだ』の一点張りで教えてくれなくてさ」

「当たり前だよ。今は大人しくしてなきやダメだよ」

「いや、被害だけでも頼むよ。一応、ほら、俺を安心させると思つてさ」

「……仕方ないなあ」

頼む、と頭を下げるセルジオに、なのはが根負けしたように大きいため息をついた。

「計四ヶ所であったテロだったけど、セルジオくん以外のところは未然に防げたみたい。建物の被害は少しあったけど、目立った被害はなかったよ」

「死人は？　重傷者とかは？　リニアの中の人も無事だったか？」

「うん。軽傷のひとはいたけど、それも擦り傷くらいだつて」

「そつ、かぁー、それは良かった。本当に良かった」

なのはの報告を聞いて、セルジオが心底安心したように肩を落とした。その表情はいつもと比べると随分柔らかなもので、被害が少なかったことが相当嬉しかったことがわかる。

「悲しむ人が、いなくてよかった。ちゃんと、救えてよかった」

そう、自身に言い聞かせるように呟くセルジオ。

その様子をなんだかなのはには素直に喜べない。

「ねえ、セルジオくん」

「ん？」

名前を呼ばれたセルジオが隣に座るなのはへと視線を送るが、俯いてしまっているなのはとは視線が交わることはない。

「なのはは——私は悲しかったよ」

ポツリ、となのはがそう言った。

「セルジオくんが死にそうになって、とつても悲しかった」

「え？」

セルジオの眉が寄せられる。どうして、なのはがそう言ったか、わからない、とでも言うように。

「たぶん、なのはだけじゃないよ。クイントさんも、メガーヌさんも、ゼスト隊長も、クロノくんだって、きつととつても悲しかったと思う」

そう言つて、なのはが顔をあげる。その瞳には涙こそ浮かんでいないものの、ひどく寂しそうで、深い悲しみの色が沈んでいる。

「そろそろ、時間だね」

言われて懐中時計を見れば、もう面会時間は二分くらいしか残っていない。下に降りることも考えれば、もうセルジオと話している時間は残っていないだろう。

「また明日ね、セルジオくん」

「あ、ああ、また」

立ち上がったなのはが薄く笑みを浮かべて、手を振るとセルジオの病室から去っていく。

その背中をぼんやりと見つめていると、胸の奥がちくりと痛みを訴えたような気がして、思わず手で抑えた。



ラボの中に床を叩く靴の音が、カツカツと絶え間なく響き、その音の主である瘦躯の男の白衣が音が鳴る度にゆらゆらと揺れる。

辺りにはいくつかのポッドと培養液。その中には人型らしき、何かの影が浮かんでいるが、男はそんなものには気にも留めない。

「ドクター、ご報告が」

「そのまま言いたまえ、我が娘よ」

そんな男の後ろを付き従う姿が一つ。凜々しいその顔は無表情で固定されたように動かない。

「実験稼働中の二番から先日のテロについての報告書が届いています」

「テロ？ 何の事だね？」

「管理局ではガジェットドローンと呼ばれているらしいあの機械兵を買い取った組織が起こしたものですよ」

「ああ、あのオモチャを買い取ったところか。ちゃんとうまく使えたのかい？」

「いえ、報告書を見る限り本拠地の防衛に使っていたため高ランク魔導師に一方的に破壊されたようですね」

「大方そんなところだろうとは思っていたよ」

男がつまらなさそうに息をつく。

「データベースのデータは？ ちゃんとアレを使って相手にしたんだろうね？」

「ええ。そこは上が上手くやってくれているようです」

「そうかね。ならばもういいよ」

「報告書はどうされますか？」

「捨てておいてくれて構わないよ。ああでも二番に労いの言葉はかけておいてくれたまえよ」

「わかりました、ドクター」

名を呼ばれた男は、ふ、と笑みを浮かべて、自身の長髪をかきあげた。

海の鳴る町

時刻は夕刻。場所は海鳴市のなのはの家の前。そこで問答を繰り返す姿が二つ。

一人は栗色の髪を二つに結んだ可愛らしい女の子、高町なのは。

もう一人は、淡い金髪に翠の瞳の少年、セルジオ・アウディ。

「行くよ、セルジオくん」

「な、なあ少し待ってくれ、本当に大丈夫なんだろうな」

「お母さんもお父さんも良い人だから大丈夫だって！」

「しかし、だな……」

「もー、ここまで来たんだから！」

「あ、こら引つ張るな」

尻込みし始めるセルジオになのはが詰め寄って無理やり引つ張り始める。

その姿は結婚の報告に来た恋人同士のそれに、どこか似たものがある。

二人がどうしてこうなっているのかというと、時計の針を少しばかり戻さなければならぬだろう。



セルジオのロシア受け止め血みどろ事件（命名クイント）からしばらくの時間が経ち、セルジオも無事完治、というか、医者をおねじ伏せて無理やりかなり早く出てきていたのだが、それがようやく完治した。

季節はすっかり冬の、そして年末である。

「うひー、さむーい。誰かコーヒーちようだい〜」

「そういうだろうと思って準備してましたよ」

「ひゃー、なのはちゃんありがとー」

変わったことといえばメガーヌが産休に入ったことくらい。その事を三課で報告した時には仕事も放り出して、えらい騒ぎになったものだ。いつもはそんな事をすれば注意を飛ばすメガーヌも、この日ばかりは嬉しそうに感謝を述べるだけだった。

ちなみに、メガーヌの夫は三課の一人であるのだが、その彼は男衆からめちやくちや

な胸上げを食らったとか食らってないとか。

なのはから渡された紙コップに息を吹きかけながらチビチビと啜るクイント。

「あつたまるわねー」

「それなら良かったです」

お盆を胸に抱いてにっこにこと笑うのは。

「あら、そう言えばセルジオくんいわね。外回りにでも行ったの？」

「あ、いえなんかさつき部隊長室に行っていました。こう、なんかすごく難しい顔で」

「ふーん、何か仕事の案件かしら？」

「なのも聞いてみたんですけどなんかはぐらかされちゃって。信頼されてないのかなあ」

「うーん、そういうわけじゃないと思うわよ。あの子、もともと考えてること全部話すわけじゃないし」

少し不満そうなのはの頭を手を伸ばしてぽんぽんと撫でるクイント。セルジオにされた時は少し恥ずかしながら払うこともあるのはだが、同性ということもあつてか特に嫌がるそぶりは見せない。

(ことうしてると普通の女の子なんだけどなー)

自分の娘と大して変わらない年の女の子が、血生臭い現場に出るといふ今の状況が、

クイントにはなんだか少し寂しい。

寂しさを押し込めて笑うクイントのことをなのはが不思議そうに見上げるが、なのはにはどうしてそういう表情を浮かべているかはわからなかった。

そうこうしているとオフィスの扉が開いて、見慣れた淡い金髪と、その後ろから敵つい男が姿を見せる。

言うまでもなくセルジオとゼストだった。どうやら話し合いは終わったらしい。

「クイントさん、帰ってたんですか。外回りお疲れ様です」

「ご苦労だった、クイント」

「いいえ、産休のメガーヌの代わりに頑張らなきゃいけませんしね」

帰ってきたセルジオが自分のデスクに座ろうとして、お盆を胸に抱えたままのなのと目があつた。一瞬、二人は見つめあつたが、やがてセルジオの方から視線を外した。

普段はからかいの言葉なり労いの言葉なりが飛んでくるところだが、今は気まずそうに目をそらすだけだ。

その様子になのはが心の中で頭を抱える。

（うう、あの日変なこと言わなきゃ良かったよ……）

セルジオの見舞いに行つて以来二人の間にはこうした、仲違いと言うほどではないが、微妙に気まずい空気が流れている。

セルジオはプライベートと仕事を混合するタイプでないため、仕事をする分には問題ないのだが、前のように弾んだ会話はとんとなくなってしまった。

あの日なのはが言ったことは本心ではあるものの、だからといってこうなってしまうと後悔すると言う方が無理な話である。

その二人の様子をなんとなく察したクイントは適当に話題を振っておくことにする。

「あー、なのはちゃんは今日で仕事納めだったわよね。地球の年末ってなにをするのかしら？」

「え、地球のですか？」

「そうそう。なのはちゃんはお休みの間なにをするの？」

「そうですねえ、と少し上を向いて考え込むのは。」

「地球のお友達と遊んだりする予定はあるんですけど、なのはのおうちは喫茶店なのでそのお手伝いですかね」

「実家の仕事の手伝いか。高町は勤勉だな」

「あ、いえ、今年はお兄ちゃんもお姉ちゃんもいないし、それに、この時期の地球の製菓店って凄く忙しくなるんですよ」

ゼストの感心したような言葉をなのはが慌てて否定する。

「クリスマスって言って、ケーキを食べたりしてお祝いするんです」

「くりすます?」

「はい。家族とかお友達とかで集まってチキンを食べたり、ケーキを食べたり。あ、後はプレゼントを交換したりします」

「なんのためにそんな事するの?」

「新年の祝いとはまた違うのかしら?」

「え、えーと……」

イマイチ理解できないように首をひねるクイント。その頭の上には大きな?マークが浮かんでるのが見えるようだ。その後ろのゼストも黙ってはいるが理解できてはいないようだ。

生まれた時からそこにあるのを他者に説明するのは非常に難しい。それも、全く異なる文化形態の相手へとなると難易度が跳ね上がる。そもそもクリスマスを手タクローズが来る日くらいにしか思っていない小学生に説明しろって方が難しいだろう。

「仕方ねえなあ……」

いいよどむなのはを見て、セルジオが大きくため息。助け舟を出してやることにする。

『クリスマス』。俺の知識では『地球』の文化圏では割と一般的な行事みたいです。なんでもある宗教の過去の偉人の生誕を祝う祭事とか。高町の故郷ではその前夜が殊更盛り上がるようです。おそらくベルカ自治区の聖王生誕祭みたいなものでしょう」

「せ、セルジオくん?!」

「生誕祭かー。それならなんとなくわかる気がするわね」

「偉人の誕生日を祝うとは、よっぽど信心深い国なのだ。高町の国は」

うんうんと頷くミッドチルダ出身の二人の横で、なのはが目を丸くした。

「せ、セルジオくんなんでそんなこと知ってるの?」

「……クロノが以前話してくれたのを覚えていただけだ。興味深い祭事だったし、たまたま、な」

「あ、相変わらず凄いな」

「貸し一な。いつか返せよ」

さーらり、と説明してまたデスクワークに戻るセルジオ。本当にこうした頭を使う作業ならば、誰にも引けを取らないようになのはは思えた。

「ミッドの年末近くはそういった祭事はないな。せいぜい親戚と集まるくらいだろう」

「へえー、皆さんも家族と過ごされるんですか?」

「私は今年は旦那さんと娘たちとちよつと温泉街までお出かけしてくる予定。せつかく有給で固まった休み取れたし」

「俺は非常時に備えてここにいて、夜は友人と酒を飲みに行くつもりだ」

忙しい三課といえど、どうやら年末はそれぞれに予定がある様子。

「じゃ、じゃあセルジオくんは？」

「んー、そうだなあ」

ホログラムのキーボードを叩きながらセルジオが唸る。いつもならゼストに付き合って三課にいるセルジオも、今年のはとの兼ね合いで有給を取っていた。

というかクイントたちから無理やり取らされていた。

普通は入院している間に食いつぶすのだが、今年のはのお陰か例年より入院が少なかったせいで何日か余っていたのだ。

「ま、訪ねる家族もない。大人しく宿舎で仕事でもしてるかな」

「わ、ワーカーホリック……！ 適度にお休みはとるべきだよ！」

「つってもここ十年くらいこうやって過ごしてきたからなあ」

そこでクイントが不思議そうに首を傾げた。

「ねえ、セルジオくんは年末どこで過ごす気なの？」

「ですから隊舎で……」

「隊舎耐久調査あるから年明けるまで使えないでしょう？」

「は？」

今まで止まることなくキーボードを叩いてセルジオの動きがぴたりと止まる。そして、ぎぎぎと錆び付いたロボットのように首を動かして引きつった笑顔を浮かべる。

「ま、またまた、クイントさん悪ふざけが過ぎますよ。ねえ、ゼストさん」

「隊舎は使用できません。事前にメールで送ってあるはずだが？」

「嘘でしょ。……………うーわ、確かにそういうのメールあるわ……………」

ゼストに言われて調べれば、メールボックスの中に仕事の案件に紛れて、『年末の三課隊舎耐久調査の件について』といった内容のメールがあるのを発見する。

「完璧に見落としてた……………。うわー、年末どうしよう」

セルジオが頭を抱える。

「クロノ……………は義妹とのはじめの正月だし論外。ティーダとヴァイスも妹いるからな……………」

一瞬ゼストを頼ろうかとも思ったが、これ以上迷惑はかけられない。

「うーん、ウチが旅行じやなかったら寝泊まりさせてあげても良かったんだけど。誰もいないけどウチ使う？」

「いえ、そのお気持ちだけ受け取つときます」

むむむ、とセルジオが考え込む。知り合いは全滅。その他宿の心当たりもないし、今からではホテルも取れないだろう。

「まあ今回は俺の不注意です。仕方ないですけど——」

「せ、セルジオくん！」

「ん?」

ネットカフェで過ごすか、とセルジオが結論を下しかけた時、なのはが上ずった声でセルジオの名前を呼んだ。

「な、なのはのおうちに来ますかっ!」

「は?」

「ね、年末! 行く当てないならなのはのおうちで過ごせばいいと、思います」

「いや、それは駄目だろ。親御さんに迷惑がかかるし、それに俺は家族水入らずを邪魔する趣味はないよ」

「あ、それは多分大丈夫! 今年お兄ちゃんもお姉ちゃんもいなくて人手足りてないから喜ぶと思う」

「だとしても急に押しかけるのは迷惑だ。親御さんの許可なくというのもいただけない」

あせあせと顔を僅かに赤くして早口で喋るなのは。

「じゃあちよつと連絡してみるから! 絶対大丈夫だと思う!」

なのはは待つてね! とセルジオに言っておフィスを走って出て行く。

その背中を見送るとクイントは楽しそうにセルジオの背中を叩いた。

「よかったわねー、なのはちゃんとシエアルームできるかもね」

「しませんって。例え親御さんから許可が出ても俺は男で、高町は女です。何かあったら問題です」

「何かするつもりなの？」

「いや、しないですけど」

「なら良いじゃないのー」

クイントが笑いながらまた背中をバシバシと叩いてくる。しかし、未だセルジオはどこか納得いいっていないように、眉を寄せている。

「セルジオ」

「ゼストさん？」

「俺はお前たちに何があったか知らんし、何を考えているのかもわからん」

ゼストの鈍色の瞳がセルジオを見つめ、ゆっくりと言葉が投げかけられる。

「信頼はきちんとして行動で示してやるものだ。お前が高町を『相棒』だと思ふのならばな」

「それだけだ。お前の好きにすると良い」

そう言つて最後にわしわしとセルジオの髪を掻き回してゼストはオフィスから出て行った。

そして、それと入れ替わるようになるのはが息を切らしながら三課のオフィスに帰つて

くる。

「お母さんもお父さんも良いって。お店のお手伝いはしてもらうかもだけど、新年まで泊まる場所もあるよって言ってくれたよ」

そしてなのはがちら、と椅子に座って目線が同じくらいの高さになったセルジオを伺う。

「もちろん無理にとは、言わないけど。もしよかったら」

最後の方は消え入るような声になり、なのはが俯いてしまう。

そして、そんななのはの様子に、セルジオは、今日一番の大きなため息を一つ。

「これで貸し借りなしにしよう」

「え？」

「クリスマスの件だ。まあ俺のは押し売りに近かった気がするが、そこは高町も似たようなものだから流してくれ」

「う、うん！ てことは——」

「ただし！」

嬉しそうに顔を上げたなのはの前に、セルジオがビシツと指を立てたみせた。

「宿泊代と食費くらいは払わせてくれ。そうじゃないとあまりにも肩身が狭い」

そして、セルジオがそっぽを向いて人差し指で頬をかいた。

「それで良ければ、その、よろしく」

「うん！　うん、こっちこそよろしくお願いしますっ」

なのはが嬉しそうに笑って、セルジオの手を取った。

「じゃあ今日のお仕事が終わったら一緒になのはの家に帰ろうね！」

「え、いやまだいいだろ」

「でもセルジオくんも今日で仕事納めだよね？」

「それは、そうだけど」

「どっちにしろなのはがいなきや場所はわからないだし。善は急げ、だよ」

ね？　言い聞かせるように笑うなのはに、セルジオが「変なことになってきたな」と

心の中でボヤいて、またため息をついた。



仕事が終わリセルジオは着替えやその他軽い手荷物をボストンバッグに詰めて隊舎前で待っていたのはと二人で一旦時空間の狭間にある時空管理局の本局へと移動。

地球への転移ポータルを使って第97管理外世界、『地球』の海鳴市へと転移し、さらにそこからなのは案内で街を歩いて、ようやく高町家に到着する。

まあ、そうして冒頭の展開へとつながる、という訳だ。

「ほら、入るよセルジオくん」

「ああ。その、いろいろよろしくな？」

「うん任せて！」

にこにこ笑うなのはと少し気まずそうに後ろをついていくセルジオ。いつもはセルジオがなのはの前を歩くことが多いため、こうして反対の立場になるのは珍しいことだった。

「ただいまー」

「あらなのは、おかえり〜」

なのはが玄関のを開けて声をかけると、リビングから一人の女性が姿を見せた。なのはと同じ栗色の髪をロングに伸ばしてエプロンをつけた外見年齢二十歳くらいの女性。

セルジオが瞬時に思考を巡らせる。

(ど、どっちだ！ 姉か、母親か！ わ、わからないな……)

クイントみたいに比較的若い人なのか、クロノの母のリンディのような見た目と実年齢が釣り合っていないタイプなのか。

それはセルジオの優れた観察眼でも見分けることができない。というか、そもそもリンディすら見分けられなかったので、目の前の女性のことを見分けるのは不可能だ。

(いや、でも姉は今いないと言っていたな。なら、この人は母親か……)

セルジオは小さく息をつく、先程までの動揺が嘘のように背筋を正してにつこりと優しい笑みを浮かべる女性に向き直る。

「時空管理局地上本部所属、セルジオ・アウディ三等空尉です。突然押しかける形になってしまい申し訳ありません」

そして、ペこりと頭を下げた。

「セルジオくんってそういう固い話し方できたんだ……」

「おい、俺は最初は高町にもこうして話してただろうが」

「あれ、そうだったけ？」

「そうだよ。タカマチさんとか呼んでただろ？」

「そういえばそうだったかも」

「うふふ、二人とも仲がいいのね」

自分をそつちのけで話し始める二人に、なのはの母親が楽しそうに笑った。

「す、すみません。ついいつもの感じで……」

「いいのいいの。取り敢えずあがって、アウデイさん。リビングで土郎さんがそわそわしながら待つてるから」

「あ、セルジオくん靴は脱いであがってね」

「ああ、そういえばそれがニホンのスタイルだったな。了解だ」

陸の制服のままのセルジオが靴を脱ぐとなのはたちに連れられてリビングへ入る。

「む、君が話に聞いてた……」

すると既に腰掛けている男性が一人、セルジオの方へと目を向ける。おそらくこの人がなのはの父親なのだろう。

「私は……」

「まあまあ、そう固くならず。ひとまず座るといい」

「ほら、セルジオくんはこっち」

テーブルの窓側になのはの両親が腰掛けたので、セルジオはなのはに言われた通りその反対側、なのはの隣に腰掛ける。

ぎしり、と少しだけ椅子が軋む。

「ええと、まずはなのはから紹介するね。お父さん、お母さん、この人はセルジオくん。私の……」

言いかけて、なのはが止まる。

「(ねえ、セルジオくんとなのはってどんな関係?)」

「(別になんだつていいだろ。適当に、先輩とか言つとけいい)」

「(いまいち納得できないけど、まあ仕方ないよね)」

なのはがセルジオとの念話を切る。

「私の、先輩? です」

「ご紹介に預かりました、時空管理局地上本部所属、セルジオ・アウデイ三等空尉です。お嬢さんには日頃からお世話になってます」

そしてなのはの両親に向けて頭を下げた。

「頭を上げて、アウデイさん」

「はい、ええと……」

「桃子です。『高町桃子』。なのはのお母さんと、パティシエをやっています。桃子って呼んでね」

「じゃあ、私のこともセルジオと読んで頂いて構いません」

「そう、じゃあよろしくねセルジオくん」

「よろしくお願いしますモモコさん」

「じゃあ私の方も、自己紹介をさせてもらおうよ」

少しだけズレた発音で桃子の名前を呼んで、また頭を下げていたセルジオに、隣から声がかかった。

「私は『高町士郎』。なのはの父親だ。君の事情は聞いている。しばらくの間自分の家だと思つてくつろぐといい」

黒髪の男性——士郎が爽やかな笑顔を添えて差し出した握手に、セルジオが応じる。

「む」

「ああ、成る程」

そして互いに握手した感覚と、肌がピリつくような雰囲気、なんとなく相手が武術を嗜む類の人間だということを理解する。

（強い、な。たぶん、魔法を使わないゼストさんと同じくらい。俺じゃ敵わないだろう）
（年の割に鍛えている。恭也程じゃないが、美由希と同じくらいには戦えそうだ）

ふ、と男二人の間で薄い笑みが交わされる。

「かなり使えるようだね。武器は槍かな、セルジオくん？」

「そこまでお見通しですか。本当にお強いようですね、高町さん」

「ははは、いやもうただの老兵だよ。あと私のことは士郎で構わない」

「ではシロウさんと。お世話になります」

握手を交わしたままあつという間に打ち解けた様子の父と先輩に、なのはが少しだけ不満そうに唇を尖らせる。

「なんかあつという間に仲良くなっちゃったね」

「まあ、男の人つてみんなそんなものじゃないかしら」

「なんか納得できない……」

まあ、でもセルジオが打ち解けてくれたのはいいいことだと自分に言い聞かせる。

「じゃあ、お父さんお母さん、なのははセルジオくんを客間に連れて行ってくるね。ほら、セルジオくん荷物持って」

「あ、ああ、じゃあ、その荷物置いてきます」

ぐいぐいとなのはに引つ張られながらリビングから出て行くセルジオ。その様子を桃子は楽しげに見つめて、いつもと少しだけ違う雰囲気なのはに、士郎が目を細めて、にやりと意地悪そうに笑った。

「セルジオくん、一つ言っておきたいことがある」

「……はい、なんででしょう?」

「俺はなのはを嫁にするなら俺を倒したやつじゃないと認めないと決めているんだ」

「お、お父さん?!」

「はあ、そうですか」

顔を真っ赤にするのはと、『それは高町の旦那になりたい奴は大変そうだな』とか考えて、自分に結びつけるつもりのないセルジオ。

まあ、そんな感じの出来事で、セルジオの高町家滞在の一日目が始まるのだった。

海鳴での日常

断続的な鳥の囀りだけが道場に響く。

向かい合うのは二人の男。

一人は小太刀二刀を順手で構える高町士郎。

もう一人は魔力刃を応用した非殺傷の槍を前傾姿勢で構えるセルジオ。

どちらも握るのは相手を殺すための武器ではないものの、表情は真剣そのもので、張り詰めたような緊張感がある。

セルジオが士郎の一挙一動を見逃すまいと目を見開く。相手は遥かに格上の技巧者であり、彼では追い追われるかすら不明だが、それでもゼストの弟子としてやれるだけはやる義務があった。

無言の二人の睨み合いはその後しばらく続き、もはや永劫終わらないのではないかとすら思わせる。

かちり、と秒針が動き壁の時計が一際大きな音を立てた時、士郎が疾風の如く踏み込んだ。

それに一瞬遅れる形でセルジオもそれに応じ、右足を軸に体を半回転させ槍を薙ぐが、士郎はそれを僅かにしやがむことでかわすとさらに踏み込んでくる。

それを防ぐため振り切った槍を手首のスナップだけで方向転換、横合いからの突きを放つが、今度は小太刀の刃の上で槍を滑らせて逸らしてしまう。

「——ふッ！」

刹那を見定めた必殺の小太刀が、セルジオの首を狙って振るわれる。

あまりの速さに残像しか見えないレベルの一撃を、なんとなく予想できていたセルジオは僅かに体をそらすことでかわした。

いつのまにか懐まで潜り込まれていたセルジオは士郎の胸を蹴飛ばして距離を取ろうとするが、それも小太刀でしつかりと防御されてしまう。

だが、なんとか距離を取ることだけには成功した。

(ホントに強いな、シロウさん)

戦いの歴史とはいかに遠距離から敵を攻撃するか、というものを競ってきたと言える。

それは相手より遠くから攻撃ができるというのは、戦闘においては絶対的な有利となるからだ。

剣より槍、槍より弓、弓より銃、といった風いだ。

その面で考えるならばセルジオの槍という武器に対して、士郎の小太刀という武器は絶対的な不利となるものだ。

しかし、今の戦闘においてセルジオは士郎との戦いでは一度も有利にたてていない。その理由は至極単純だ。

士郎はただ巧く、速い。

戦闘経験からくる先読みと、優れた動体視力、積み重ねた研鑽による、技術の巧みさ。それに加えて魔法などは使っていないにもかかわらず、肉体的な面と、足運びによる移動の速さ。

この二つが小太刀と槍という不利を覆して余りある実力差となっている。

(さっきの蹴りもたぶんわざと食らってくれた。俺が距離を取りたかったのがわかってたから)

舐められているのではない。士郎はおそらくセルジオの技術を見極めてくれている。おそらく本気でやるならばセルジオの体は既に十回は床に転がっているはず。

(勝つまではできなくても一泡くらいは吹かせたいもんだな)

セルジオが細く息を吐き出して、今までの士郎の動きを全て頭の中に叩き込んで、これからの未来にするであろう士郎の行動を予知に近いレベルの予測を行う。

(擬似解析——四手)

ゼファーを使わないためそれほど多くは予測できないだろうが、ある程度わかっていれば対応のしようはある。

「——見えた」

ふ、とセルジオが槍を両手で握り踏み込むと、士郎は軽いステップをでセルジオの左へと回り込む。

「——一手」

予測通り動いた士郎に完璧に合わせたタイミングで突きをやめて槍の自重を使った薙ぎ払いを行う。

「二手」

だがそれを士郎は両手の小太刀を合わせると挟み込むようにして受け止めて、体重移動と手首の振りだけでセルジオを自分の方へと引き寄せる。

「三手」

セルジオの体が強い力に引かれて士郎の方へ寄せられていき、その向こうには首を狙ったカウンターが待っているのが見える。

故に、迷う事なく槍から手を離す。

「——！」

流石にこれには驚いたのか士郎の目が僅かに見開かれた。

「四手——」

すう、とセルジオが息を吸い、頭の中にある理想のイメージを、体になじませるようにして再現する。

体を通じる流れを意識して、右拳を、強く握りしめる。

「——擬似再現・繋アンチエイン・オックスがらぬ拳」

クイントに師事して指導を受けても八割程度の再現しかできなかった技を、士郎へと放つ。

槍を捨てるという悪手による意識の不意。事前に拳を使えることすらも話していなかったため知識の不意。二重の不意をついたその一撃が向かう。

そして、その下手に当たれば骨折必至のその一撃を、士郎は敢えて肩口で受けた。ズ、とセルジオの拳に軽すぎるインパクトが伝わる。

(う、そだろ……)

士郎は避けるのは不可能とみたのか体を半回転させて、威力のほとんどを移動のエネルギーに変換、一気にセルジオの背後へと回り込む。

「勝負あり、かな」

「完敗です。手も足も出ない」

そして、次の瞬間には首元へと小太刀の刃を向けられていた。

セルジオが槍を消して降参とでもいうように両手を上げる。

「また負けですか。いや、本当にシロウさんはお強いです」

「君も良く鍛えてはいるが……しかし、君はなんといいかその……」

「あ、わかつてますから正直にいつていただいて大丈夫ですよ」

士郎が何やら言いくさそうにしているのを見て、セルジオが笑う。その表情に影はないため、本当に大丈夫なのだろう。

「そうか。なら言うが、君はきつと槍使いとしては大成できないだろうと、私は思う」

「でしょうね。俺の師匠にも『お前は槍使いとしてはあまりにも才がない』って言われました」

思い出すのはまだ士官学校に入ったばかりの頃、毎日頼み込んでゼストに稽古をつけてもらっていた日々。一年以上の訓練と、更に2年近くの実戦訓練によってなんとか形になりはしたものの、周囲からは近接戦闘の才能の不足に関してはよく言われてしま

う。
「最後の、槍を捨てて拳で戦うのは悪くない手だった。たぶん君はあやつて自分の手札や、あたりの地形、時には他人まで巻き込んで柔軟に戦うのが本領だろう」

「そこまでわかりますか」

驚くセルジオに、士郎は「伊達に経験を積んでないさ」と肩をすくめる。

「俺、目もあんまり良くないし、近接戦闘者特有の直感みたいなものもなくて。たぶん近接戦闘全般にあんまり向いてないんですよね」

「そうだな。君のようなタイプはどちらかというと、スナイパーなんかにかかった気がする」

「あー、本当に強い人にはおんなじような道を勧められるなあ……」

「後はそうだな……指揮官なんかも多かつたように思う」

「指揮官、ですか？」

セルジオがキョトンとした顔で首をかしげる。

今まで遠距離への転向や、スナイパーへの転向を勧められたことはあれど、指揮官と行った、人の上に立つ立場を勧められたことはなかったのだ。

「指揮官、指揮官。俺が、指揮官ですか」

「ピンと来ないかい？」

「そう、ですね。俺が誰かの上で何かをするっていうのは、なんかイメージできないです」

「ははは、まだセルジオ君には早い話だったかな。まあ戯言と思つて聞き流してもらつて構わないよ」

「はあ」

ちらり、と士郎が壁にかかった時計へと目をやった。

「さて、セルジオ君。そろそろ桃子の食事ができる頃だ。そろそろ行くとしようか」

「あ、俺は道場の掃除してから行くので士郎さんは先に行ってください」

「ん、そうか悪いな。じゃあ俺は風呂を沸かしておこう」

「はい、お願いします」

士郎が道場から出て行くと、セルジオは倉庫の中で干してあった雑巾を外の蛇口で濡らして絞り端から端まで雑巾掛けを始める。

ミッド出身のセルジオは道場の掃除など知るはずもないのだが、一応昨日の夜ゼファーで日本の一般常識っぽいことは調べておいたのだ。

「結構、足とかに来るな。これは一種の肉体鍛錬だ……」

日本の小学生なら誰でも知っている『雑巾がけ』はきついという事実。それをセルジオは今身を以て体験していた。

セルジオが道場を走り回って、だいたい掃除が終わってしまった頃には、士郎との模擬戦で疲れ切っていた手足にはさらなる疲労がたまっていた。

「な、なんてハードなんだニホンの訓練……」

一応軍人みたいなもののセルジオはこの程度では根を上げることはないが、これを一桁ぐらいの子供がやることもあるというのだから舌をまかざるを得ない。

セルジオが地味なカルチャーショックを受けていると、なかなか朝食にセルジオをなのはが呼びに来る。

「セルジオくん、ご飯だつてー」

「高町か」

「うんそうだよ……というか、今この家にいるのはみんな高町かな」

「俺はアウディだ」

「いやそれはわかっているけど……」

ふうと頬を膨らませるがセルジオはどこ吹く風で掃除道具を片付けてリビングへと歩き出す。すると、なのはが慌てたようにその後を追いかけて隣に並んだ。

「どうだったお父さんとの模擬戦。勝てた？」

「いやボロ負けだ途中完璧に目で追えなくなった。地球人って凄いな」

「いやたぶんお父さんとかは地球の中でも別格だと思ふな。私とかお母さんは普通だし」

「たしかに高町めちやくちや足遅かったもんな」

「む、今は普通だもん。たぶん」

「運動音痴の『普通にできる』は自己評価高いからなあ。全く信用できないな」

そんな話を話していると桃子と士郎のまつりビングに到着する。

「あ、なのはと、セルジオくんもきたわね。もうご飯の準備はできてるの。早く食べましょっ。」

「ほら、セルジオくん座って座って」

なのはに椅子を引かれて頭を下げながら席に着く。そこには、茶色のつぶつぶが入った小鉢、茶碗の中には白くつやつやと光るもの（これはコメだと昨晚教えてもらった）、椀の中にはほのかに赤みを帯びた汁。中心の大皿には開かれた焼き魚。そして小皿には白い四角いものという、全く見覚えのない料理ばかりが並んでいる。

（わかるものが魚しかないぞ……）

それすらも骨の形状で判断しただけで、ミッドでは見たことがない種類という、ここが異世界だという事をよく理解できるメニューである。

ぼーっとセルジオが朝食を見ていると、桃子が心配そうにセルジオの顔を覗き込んだ。

「あの、何か嫌いなものでもあったかしら？」

「いえ、俺はなんでも食べますから。ただ、見慣れない料理だっただけです」

「無理しなくてもいいのよ？」

「あ、それは大丈夫だよお母さん。セルジオくん食べ物の好き嫌いなから。うん。ホントないから」

食べ物に好きもなければ嫌いもない。それがセルジオだという事を半年以上の付き合いとなったのはよくわかっていた。

「じゃあ、母さんの手料理いただこうか」

士郎が声をかけると三人が声を合わせていただきます、と言ってセルジオもそれに少し遅れて声を合わせた。

「かー、美味しい！ いや、今日の朝ごはんもすごく美味しいぞ桃子！」

「うん、すごく美味しいよ、お母さん」

「うふふ、そうかしら。そう言ってもらえると作りがいがあるわー」

手を頬に当てて嬉しそうに笑う桃子は、ふとセルジオだけが自分たちをじつと見つめて、一口も食べていないのに気がついた。

「あの、セルジオくん、やっぱり嫌いなものがあつたかしら？」

「いえ、ただ『ハシ』の使い方を見てただけですから。お気になさらず」

「お箸の……?」

言われて昨日の夜はセルジオにナイフとフォークを出したのを思い出した。

「ごめんなさいね、ついうっかり。ごめん、なのはナイフとフォーク取ってくれない」

「あ、いや大丈夫です。もう覚えましたから」

「覚えた? と首をかしげる三人の前でセルジオが箸を、なのはと遜色ないレベルの

美しい持ち方で、士郎と同じように器用に魚の小骨を避けて身をほぐして、米と一緒に口にいられた。

そして、何回か咀嚼して飲み込むと、表情を柔らかくして桃子に向けて薄く笑んだ。

「モモコさん、とても美味しいです」

「そ、そう。なら良かったわ」

「セルジオくんってホントに器用だね……」

「いや、こういうのは見て真似るだけだからな。時々クイントさんの技とか真似するだろ？」

あれと同じだよ

「そ、そうなのか」

いや、そういう問題じゃない、という言葉をはぐつと飲み込んだ。もうこれ以上の上の問答は無駄なような気がしはじめていたのだ。

まあ何はともあれ食事が再開される。最初こそセルジオがかましたものの、後はごくごく自然なものだった。

「お米美味しいです」

「だろ？ 外国に行くとパンばかりでこれが恋しくてなー」

「外国？ シロウさんは喫茶店の店主ですよね」

「昔はボディーガードをやってたんだ。いろいろあつて、やめてしまったがね」

「成る程」

「今は言うなれば桃子専用のボディーガードさ。人生という難敵からの、ね」
「まあ士郎さんつたら」

とか。

「このナツトウつての美味しいです。なんでできてるんですか？」

「豆だな」

「トーフは全然味がないですね。何を加工してるんですか？」

「豆よ」

「ん、このソースおいしい。なんて名前ですか？」

「醤油って言うんだよ」

「シヨージュ……。深い味わいですね。原材料はなんですか？」

「豆だよ」

「ほら、セルジオくんお味噌汁もどう？ たぶんあつたまると思うわ？」

「トーフは、すごく美味しいです。これはちなみに何から？ 流石に豆じゃ——」

「豆」

「また豆か！ ニホン人豆への情熱ありすぎでしょ！」

とかとか。

「なのはの働きぶりはどうだろう？　迷惑かけていないかい？」

「いえいえ、同僚も上司も高く評価してますよ。とても頑張ってくれています」

「あの、なのはは鈍臭いでしょう？　問題は……」

「何この突然の家庭訪問みたいな感じ?!　二人ともやめてよ!」

「あはは、お嬢さんの凄さつたらないですよ。今ではクラナガンの空で白いバリアジャケットを見たら逃げろ、とか犯罪者の中での標語が……」

「わーわー!　セルジオくんも答えなくていいから!」

とまあこんな感じで割と話は弾み、無事朝食が終わる。

そして——問題の喫茶店でのアルバイトが始まった。



「お会計、以上で2250円になります」

「は、はい」

「2300円からですね。こちらお釣りとレシートになります」

「あ、あの、お兄さんここでアルバイトしてるんですか？」

「はい。少しの間ですが、お仕事をお手伝いさせていただいてます」

「わ、わたしたちまた来ますね！　来ますから！」

「はい、またどうぞ」

セルジオが爽やかに笑ってみせると、女性客の三人組がぼーつとした雰囲気店で出て行ったかと思うと、きやあきやあとはしやぎながら去って行く。

(慣れれば楽なもんだ)

レジが終わると店を見渡して見る。

所謂『クリスマススイブ』なだけあって洋菓子店兼喫茶店の土郎の店『翠屋』は人も多い。どうやら、お茶したついでにケーキを買って帰る、といった人も多いらしい。

(ん、あそこの注文そろそろか)

先ほど入って来たグループがそろそろ注文のようだったので、側に行つてまた爽やかな笑顔を浮かべる。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「は、はい」

そして女子中学生くらいの二人組はそのセルジオの笑顔をぼかん、とした顔で見つめて、赤い顔で注文をし始める。

セルジオはまだ若いながらもベテラン揃いの三課に所属し、多くの事件に関わって来た。その中には気難しい人と付き合わなければならぬ事もたくさんあったし、そういう人には素で接してもいいことがないこともある。

そういう時には、今のような笑顔を作る、ということは大事だ。人の第一印象は八割見た目のみだから、好感が抱ける表情の方がいいに決まっている。

仕事のために身につけた技術だったが、今接客をして役に立つのだから人生どう転ぶかわからないものである。

だが、そんな笑顔にいまいち納得していない人物が一人。

「な、なんかいまいち納得いかない……」

「セルジオ君のことか？」

「うん。レジ打ちも接客も、果てにはお母さんの手伝いで軽食まではいはいできるようなやつちゃって」

「いやー、全部一度見ただけで覚えちゃうんだもんなあ。模倣トレスって言うんだっけ、魔法って便利だなあ」

「それに笑顔もすごく変だし」

「無愛想よりはいいじゃないか」

「それはそうだけど」

なのはの中では、セルジオの笑顔は薄いもの、柔らかいもの、からかうようなものの三つのイメージが強い。

一つ目が一番よく見る笑顔で、二つ目はクイントなどのお願いを聞く時によく浮かべる。三つ目は言わずもがななのはをからかう時だ。

だからか、ああいった笑顔らしい笑顔は初めて見て、なんだか落ち着かない感じがするのだ。

(本当のセルジオくんはあんなのじゃないんだけどなあ)

思わずそんなことを考えるなのは。

なのは気づいていないが、知り合ったばかりの頃は、なのはにもああいう作った笑顔浮かべていることも多かった。

しかし、なのはの中に作った顔のイメージは残っておらず、違和感を覚えられたということは、セルジオとの距離がそれなりに近くなったことの証左なのだろう。

「ほら、なのはいつまでもむくれてないで接客に戻ってくれないか？　なのはの笑顔ならセルジオくんにも負けやしないさ」

「ふふ、なにそれ。でもありがとう、お父さん」

「はっはっは、いいともいいとも」

なのははセルジオのことを頭から一旦追い出して、にこりと笑うと接客に戻った。

その後、セルジオがちらちら視界に入ってはくるが、ちょうどそのタイミングで客の入りもよくなって来た事で、そんなことを考える暇もなくなってしまった。

そうしてしばらく必死に接客していると、ピークの時間を過ぎて、ようやく店から客がいなくなった。

「高町」

なのはが「ちよつと疲れたかな」と小さく息をついていると、不意にセルジオに名前を呼ばれる。

「もうあの爽やかな笑顔はいいの?」

「何を突つかかっている? それより、アレ、なんとかしろ。お前の知り合いだろう」

セルジオが親指で、背後の窓を指差した。

なのははアレ? と首を傾げながら目を凝らしてみると、窓から金髪の大きなツインテールがのぞいているのが見える。

「ふえ、フェイトちゃん?!」

なのはが思わず名前を呼ぶと、窓の向こうの髪が慌ただしく動き出した。

「因みに解析魔法で見た感じ合計四人いるぞ」

「ということは、アリサちゃんたちと一緒にのかなあ」

じーつとしばらくそのまま金色のツインテールを見ていると、そーつとこつちを伺おうとしていたフェイトと目が合った。

フェイトはしばらく目を泳がせていたが、なのはが手招きしたのを見てすすごと翠屋に入って来た。そして、その後ろをカルガモのようにアリサ、すずか、はやての三人もついてくる。

「えーと、フェイトちゃんたち何やってたの？」

「そ、その、応援？」

「監視よ！　なのはがちよっかい出されないか！」

「いや、今日遊びに誘ったらなんやセルジオくんがどうのーっていうとったから、野次馬やな」

「わ、私はみんなの付き添いかな？」

「どうしようみんな言ってることが違う」

「さーて、俺はシロウさんにコーヒーでも淹れてもらおうとしようかな」

「ちよつとセルジオくんも関係あるじゃん！」

「嫌な予感がする。俺は一刻も早く離れたい」

なのはが逃すまいとセルジオの腕を掴んで引き止める。すると、なのはの友人の一人の金髪の少女、アリサが見上げるようにしてセルジオを見つめた。

「へー、アンタがああ『セルジオくん』ってワケね」

「どのセルジオなのかは後学のために是非とも教えていただきたい」

「なんや思ったより普通のお兄さんやけどな」

「ああその通りだよ。俺は至って普通の好青年だ。だから取り囲むのはやめてほしい」

「まあ、そうしてやつても私としてはええんやけどな？　フェイトちゃんがセルジオさんに聞きたい事あるんやて」

すると、セルジオの足下をじつと見ていたフェイトが勢いをつけて顔を上げた。

「あ、あ、セルジオ、さん」

「ん？」

「な、なのはとどういう関係なんですかっ！」

「はっ？」

なのはとセルジオの口から全く同時に声が漏れて、そして首が傾げられた。

「ふえ、フェイトちゃん？　あ、突然どうしたの？」

「だって、なのはと『セルジオ』って人のこと褒めてたし、もしかしたらって……」

「それに急に家に泊めたとかいうやん？　こりゃ、なんかあるに違いないちゆうこと

になつてな」

「翠屋でどういう様子が見張つてたつてわけよ！」

そこまで聞くと、セルジオの中で何となく今のこのトンチンカンな状況に理解が及ぶ。

たぶん始まりはセルジオとなのはがコンビを組んだこと。

そして、なのはの話題に今まで聞かなかつた『セルジオ』という名前がではじめた事。トドメはおそらくセルジオがなのはの家に厄介になつた事。

そのことを小学生女子の妄想力が化学反応を起こし「なのはと『セルジオ』とかいう男はただならぬ関係なのでは？」という推理を生み出したのだろう。たぶん、一番ポンコツ臭のするフェイトが。

(く、くだらねえ……)

セルジオが思わず頭を抱える。

こんな気持ちになるのは魔力弾を上手く調整すればおっぱいの感触にできるのでは？ と同僚の一人が言い出して以来である。

「で、どうなんなのはちゃん？ やっぱそこのお兄さんとはそう言った関係なんですよーか」

「恋人ができて私となのはは一番の友達だよね！　ね！」

「ほらほら、いろいろ教えなさいよー」

「あはは、みんなほどほどに、ね。後でお休みの時にでも問い詰められ……お話聞けるんだし」

「いや、その、何といいますか……」

「ちらり、と助けを呼ぶようになのはが見上げてきて、セルジオは大きくため息を一つ。
「仕方ないなあ」

セルジオがぼそりとなのはにだけ聞こえる音量で呟いた。

「はいはい、お嬢さん方ここに取り出したるは一つの飴。では、コイツをこのエプロンのポケットに入れるとどうなるか、はいそこの紫の子！」

「え、えーと、消える？」

「残念、増えるんだなこれが」

ひゅつとセルジオがエプロンのポケットから五つの飴玉を取り出した。桃、赤、黄、茶、紫の今いる五人を示すかのような五色の飴に、みんなの目が丸くなる。

「じゃあ、今度はこの飴を俺が手で隠したらどうなるでしょうか。はい、そこの髪留めした子」

「私？ そやなあ、一つに戻る、とか？」

「答えは君たちのポケットの中、かな」

「ポケット？　　って、ええ?!　　なんでこんなところにあるん？」

「ちよ、ちよつと今のどうやったのよ！」

「それを言つては手品にならないよ。じゃあ、次手を叩くとどうなるでしょうか、はい、高町」

「え？　　飴が、なくなつちやうとか？」

「いいや、違うな」

セルジオがなのはの答えを聞いて、にひ、と唇の端を吊り上げて、意地悪そうに笑つて、手を打った。

ばん、と乾いた音がしたかと思うと、なのはの視界が急に翠屋の店内から、青空へと変わった。

「ええええええ?!」

「正解は、俺たちが消える、だ」

慌ててなのはが足元を見ると、そこには見慣れた屋根と、道路があつた。よく耳をすませば、アリサたちの叫び声が聞こえてくるあたり、どうやら翠屋の屋根に転移してきたらしい。

「な、なんで転移なんかしたの」

「高町が何とかしろって言ったからな」

「これじゃあ根本的な解決にはならないよお〜」

「まあそこは高町が頑張れ。まあ、お嬢さん方も落ち着けば話しやすくなるさ」

「人ごとみたいに言つて……」

これからのことを考えて頭を抱えるなのは肩がぽんぽんと叩かれる。

こんな状況に追い込んだ根元をなのはがじとりとにらむと、そこには接客時のような爽やかな笑顔を浮かべたセルジオ。

「頑張れ、高町」

その微塵も心のこもっていない応援に、なのははばかりと背中を殴った。

雪降る夜に

「セルジオくーん、お客様よー」

「俺、ですか?」

桃子から声がかかると、翠屋のエプロン姿のセルジオが戸惑ったように眉を寄せた。

「そうそう。あそこの席のところよ」

「あそこ……?」

桃子の指差した方を見れば、見慣れた黒髪が軽く片手を上げた。

「ちようどいいしお昼の休憩に入っいいわ。ほら、遠慮せずに」

「はあ……」

セルジオは桃子に押し付けられた昼の賄いのサンドイッチを片手に曖昧に頷くと、見慣れた黒髪へ足を運ぶ。

「何の用だクロノ。見ての通り俺は仕事中だったんだが」

「いや、なに。翠屋に新しいバイトが入ったと聞いたものでね。様子を見に来たんだ」

「冷やかしなら他所でやれよ」

「残念ながらここは僕の行きつけだ。士郎さんのコーヒーを飲み到时々訪れるんだ」

対面で楽しげに笑うクロノを、サンドイッチを齧るセルジオが半目で睨む。

「もうすぐ年末だろうが。こんなところで油売っていいのよ」

「だからここにいるんだ」

「お前の実家ミッドだろ」

「いやあそこは引き払った。今は僕の実家は地球にある」

「は？」

「母さんの思いつきだ。フェイトのためにもその方がいいだろう、とな」

「相変わらず行動力凄えな、リンデイ提督」

セルジオはあの年齢不詳のクロノの母親を思い出す。さすが、あの若さ？
で提督

まで上り詰めた女性らしい、大胆な決断力と行動力があるらしかった。

「あ、そういうや昨日お前の義妹がトンチンカンなことを言いに来たぞ。なんでも」

「君となのはがどういう関係か、か？」

「知ってたのか？」

「なにせアレが最初にそのことを尋ねたのは僕だからな」

「てめ！　そこはちゃんと否定しとけよ！　そのせいで昨日俺はめんどくさい絡み

をされたんだぞ」

「すまん、なんか面白そうだったもので」

「ふざけるなよ……。もしかして、妹が可愛くて否定できなかつたとかじゃないだろうな」

「……………それもある」

「妹持ちはこれだから……。あいつらもお前も揃ってシスコンかましやがって」

「いや僕はあそこまで重症じゃない」

きつぱりと否定するクロノだが、その言葉も怪しいものである。

「ちっ、もういい帰れクロノ。俺はこれからも仕事があるし暇じゃない」

「はいはい。午後からもヒモらしくせいで出すといい」

「ちゃんと家賃と食費は払うからヒモじゃない。ほら帰った帰った」

「はいはい」

しっしつと、手を払うとセルジオ。クロノはそれに肩をすくめて立ち上がろり、二人でレジへ向かう。

クロノが金を支払いお釣りを受け取ろうとして、あ、と小さく声を漏らした。

「ティード達から連絡がきてたぞ。また、今度食事にも行こう、だと」

「ん、そうか。そういう最近集まってないな」

「それは君が一向に休みを取ろうとしないからだ。お前が休めば僕たちはいつでも集ま

れるんだぞ」

「それは、悪いな」

「そう思うなら軽く連絡でも入れてくれ。予定を合わせて集まろう」

今度こそお釣りを受け取り、じゃあな、と軽く手を振って店を出て行くクロノ。

「あいつ、まさか最後のをいうためだけにここに来たのか？」

だとしたら悪いことをした、とセルジオは頭をかいて、近いうちにゼストに休みを頼もうと決めるのだった。



高町家の屋根の上で一人セルジオはホロウインドウと向き合っていた。

昼間のバイトもつつがなく終わり、日はもうとつぷりと暮れた。時刻はもう八時近

く。12月25日、いわゆるクリスマスだけあって外にいれば冷たい風が吹くが、そこはバリアジャケットの防寒機能を応用してカバーする。

しばらくゼファアの中にある魔法式や、戦闘データと睨めっこをしていると、不意に横合いから声がかかる。

「セルジオくん」

「おお、高町か。いつからそこに」

「ちよつと前かな。隣いい？」

「お好きに」

いつのまにかセルジオの隣にやってきていたなのはが屋根の上に腰を下ろす。髪は少し濡れていて、肌もわずかに上気しており、ほのかに花のような香りが漂ってくる。そこから、おそらくお風呂上がりなのだろう。

「風邪引くぞ」

「え、あ、ありがとう」

「どういたしまして」

セルジオがバリアジャケットのコートを脱いでなのはの肩にかけると、コートの中継点にして防寒フィールドの拡大を行なった。

しばらくの間二人が無言で並び、その間セルジオはホロウインドウを見ながら投影し

たキーボードを叩く。

なのはがセルジオのコートで口元まで覆いながら、視線を隣へ移す。無表情で固められたセルジオは、何を考えているのか推し量ることもできない。

「こんなところで何してるの」

「今までの戦闘データと、行動予測プログラムの改良。士郎さんとの模擬戦の記憶が薄れないうちにゼファーに移しときたくて」

「いやそうじゃなくてさ……」

「――?」

「ううん、なんでもない」

なのはとしてはなんでわざわざこんな寒いところで、と言いたかったのだがどうやら伝わらなかつたらしい。

なのはが落胆したように肩を落とす理由が分からず、セルジオが首をひねった。何か間違えたかな、と思っただが、なんでもないならいいか、と結論づけてまたキーボードを叩き始める。

そしてまた無言の時間。

(やっぱり、セルジオくんの事はわかんないや)

ぼーっと空を見上げてそんなことを考えるなのは。

たくさん話すのに何を考えているのかは分からなくて、頭はいいのに理解できない行動をとって、笑うこともあるのに心底楽しそうに見えない。

たぶん、セルジオとなのはが目指したいものは一緒のはずなのだ。

ただ、セルジオがなのはより年上で、前を歩いているだけ。

だからきつとセルジオがとつた行動はなのはにとつては『理想の姿』のはず。

でも、なのははセルジオが多くの人を『救って』、代償として大怪我をした時とても悲しかった。それが、正しいことだとそう思っていたはずなのに、だ。

これは、高町なのはとセルジオの関係が抱える矛盾だ。

なのはの救いたい『みんな』の中にセルジオは入っていて、なのは自身は入っていない。

セルジオの救いたいであろう人に、なのはは入っていて、セルジオ自身は入っていない。

互いに同じ目標を持つからこそ、絶対に相手のあり方を許容できないという矛盾。

でも、その姿はどうしようもなくなのはの理想であるから、相手の行動を否定できない。

その行動が、正しく、美しいと思っているから。

(もうぐちゃぐちゃだよ……)

人の役に立ちたい自分。そういう自分じゃないと安心できない自分。フェイトたちと笑っていたい自分。何もできないことが嫌いな自分。セルジオに憧れる自分。セルジオのあり方が悲しい自分。

いろんな考えが混ぜこぜになって、何が自分の事なのかわからない。

まだ小学生のなのには難しい事はわからない。でも、わかっている事が一つだけある。

(ぜんぶ、セルジオくんと会ってから考え始めたこと)

セルジオ・アウデイという、自分とよく似た夢を持つて、自分の理想を体現する少年が悩みの起点だということ。

はあー、と思わず大きくため息をついた。幸せが逃げるし、気分も落ちてしまうからため息は良くないとはわかってるものの、だからといってやめられるものではない。

コートに顔を埋めて目だけを動かして空を見上げようとして、なのはの視界に白いものが横切った。

「あ、雪……」

コートから顔を出してなのはが空を見上げれば、空には薄い雲がかかり、僅かに真白の雪を雨のように降らせていた。

うすい雲間から時々月が覗いて、月の光が透けた雪はきらきらと輝く様は、まるで空

から宝石が降るようだった。

空からの白銀の如き煌めきに、なのはの脳裏に蘇る記憶があった。

ちょうど一年前の今日、柔らかな笑みとともに空へと還って行つた高町なのはが救いきれず、そして今の原動力となった記憶が。

「セルジオくんは『闇の書事件』についてどのくらい知ってる?」

「……まあ公表されていることくらいは知ってるよ」

なのはがぼんやりと空を見つめたまましてきた問いかけに、セルジオは手を止めて答える。

「闇の書、正式には『夜天の書』は悪性プログラムが内部に潜んでおり、現地協力者と『アースラ』の局員は協力し打倒。世界崩壊の危機は免れた、とまあこのくらいだ」

「そっか。やつぱり、あの人のことは書かれてないんだね」

少しだけ、寂しそうなのはが笑って、舞い落ちてくる雪に手を伸ばすと、ひとかけらの雪が手のひらに落ちて、じわりととけた。

「なのは——私はね、闇の書事件で助けられなかった人がいたんだ」

ぼつり、となのはが呟いた。

「夜天の書の管制人格、ラインフォースさんって言って、私のお友達の大切な人だったんだ。でも、なのはの力じゃ助けられなかった」

そして、ゆっくりと言葉を続ける。その間セルジオは何も言わない。ただ、静かになのは話を聞いていた。

「泣いてる人だったんだ。自分のあり方が悲しくて、大好きな人を助けられないのが悔しくて、涙を流してる人」

なのはが雲の向こうにぼんやりと見える月へと目を向ける。

「それからかな。私の魔法の力は、泣いてる人を救うための『素敵な力』として使いたくなってるんだ」

「……………そうか」

セルジオはそれ以上何も言わない。でも、なのはと同じように空を見上げて何事かを考えているようだった。

「あれ？　なんでセルジオくんにこんな事話してるんだろう」

ふと、なのはの中にそんな疑問が浮かんでくる。あんまりほいほいと人に話すような内容ではなかったのだが、いつのまにか全部話してしまっていた。

クリスマスという日のせいかな。リインフォースを思い出す色合いの雪のせいかな。それとも考えごとをしていたせいでセンチメンタルな気持ちになっていたのか。

（でも、セルジオくんならいいか）

いずれにせよ、そう思えたので、なのはにとっては、ダメなことではなかったはずだ。

なのはの言葉を聞いてか、否か、薄く笑んでセルジオが口を開いた。

「ここは、いい所だな」

「そう、かな」

「人は優しいし、空気は澄んでいる。緑も多いし、近くに海もある。それに、空がとても綺麗だ」

「それは、そうかも」

「ああ、そうさ」

セルジオが雲間からまた姿を見せた月に向かって手を伸ばした。

「叶えばいいよな、人を救うってこと。哀しんでいる人を減らすってこと。幸せを守る
こととか、さ」

なのはが隣にいるセルジオの方を見る。

そこには、先ほどのなのはのようにぼんやりと雲の向こうに輪郭だけを写す月を見つめるセルジオの姿があった。その表情は、どこか柔らかなものだが、なのはにはそれが泣いているようにも見えた。

「みんな、笑っていれればいいよな」

そしてセルジオは黙り込む。まるで、なにかを思い出すかのように。

(この人の助けになれたらいいな)

なのはの中にそういう思いが浮いてくる。どうしてかはわからないが、今はその思いが強かった。

雲に隠れていた月がまた姿を見せて、ちらちらと雨S_n。wのように舞Rい散aる雪i_nを、透かして光らせる。

その光景を二人が、静かに見つめる。

「月が、綺麗なんだな、ここは」

「そうだね。今日はとつても月が綺麗」

それ以上二人が何かを話すことはなく、月を通して、自らの過去へと思いを馳せた。

そんな二人を、月はただ静かに見守っていた。

ボーイズ／ガールズトーク

クラナガンの街をセルジオはバイクで疾走していた。

今日は以前クロノに言われていたように士官学校時代の知り合いと食事をする事になって居るのだ。言ってしまうばちよつとした同窓会みたいなものだ。

その為に一応夕方は開けておいたのだが、突然書類仕事が舞い込んで来てずるずると残業してしまった。

(うう、スバルちゃんが風邪ひいたなら仕方ないんだけどさ……)

ごめん！ と頭を下げてくるクイントの姿が今でもありありと思い出せる。

バイクを集合場所付近の駐車場に停めて、クロノ達の元へと走る。集合時刻からはもう三十分近く遅れているので、おそらくもう中に入っているだろう。

「焼肉って結構久しぶりだなあ」

クラナガンの都市部にある焼肉店。そこが今日の集合場所である。中にはいり、店員さんに連れられて行くと、そこには既にじゃんじゃか肉を焼いている三人の男の姿があった。

「遅いぞ、セルジオ」

「や、怪我は治ったみたいで何より」

「お久しぶりでーす、セルジオ先輩！」

上から、クロノ・ハラオウン。ティード・ランスター。ヴァイス・グランセニツク。みな、そこそこ気の知れた仲の、セルジオにとってはあまり多くない気を許した友人だ。

「いや、悪い悪い、ちよつと急な仕事でな」

「どうせそんなとこだろうと思っていたさ。君は確か飲酒ができるが、飲むのか？」

「いや、バイクで来たからやめとく。明日も出勤するつもりだし」

「かー、相変わらず真面目っすねー、セルジオ先輩は。明日休みでしょう？」

「ははは、確かセルジオ休み取らなすぎて人事部からボヤかれてるって話だよ」

「うーわ、信じられないっすわー」

「そりやお前みたいな不真面目な奴と一緒にされてもなあ」

「ちよ、それは聞き捨てなりませんよ！　俺今は武装隊のエーススナイパーとか言わ

れてんすよー！」

「はは、士官学校の女子風呂侵入未遂事件の主犯格は言うことが違うね」

「それは俺が主犯に祭り上げられただけでほとんど関係してないですからティードさん

！！」

「管理局員とは思えないおぞましい前科だな」

「やめてくださいいよセルジオ先輩！」

「君たちは本当にいつでもやかましいな……」

ぎやーぎやーと騒ぐヴァイスと、爽やかに笑うティーダ。それをからかうセルジオに、呆れたようなクロノ。

今の一瞬だけでもある程度の信頼関係が見て取れるような会話。

因みにこの四人、セルジオ十六歳とクロノ十五歳が同級生。ティーダ十七歳のヴァイス十五歳の二人が同級生で、セルジオ達の後輩というやややこしい関係である。

クロノとヴァイスは同じ年なのに後輩とかいう関係だ。ややこしい。肉を食べながらも四人の話は続く。

「最近ティアナちゃんは どうしてる？　今年で七歳だっけ？」

「うん。最近は随分可愛くなってる。この前学校で告白されたんだってさ。はははは、興味深いよね」

「なあティーダ、持っているフォークが曲がりそうだ、落ち着け」

「ははは、悪い、つい」

謝るティーダだが目が座っていて全く笑っていない。

「あ、ウチのラグナもめちやくちや可愛くなつたんですよ！　ほら、写真！　ね！」

「うわー、可愛いな。本当にヴァイスの妹か？」

「そりやもうバツチリと！　　ここの、目のとこなんてそつくりじゃないっすか？」

「んー、残念だがお前は橋の下から拾われて来た子どもなんじゃないか？」

「アンタ人の家系に物凄いこと言いますね！」

「その、俺が隠された事実を暴いちやって悪いな」

「何も暴かれてない！　　ラグナは俺の可愛い実の妹！」

「待て、僕のティアはもつと可愛い。それは譲れない、絶対にだ」

「あ、この人酒入ってるわ。すいませーん、水くださーい」

「ティアナは可愛い。それは真理だ。君の妹もそれは可愛いだろう。でも、ティアナはそれよりも可愛い」

「いやそいつは問屋がおろしませんぜ、ティーダさん。あなたの妹は既に七歳、全盛期の幼さを宿した俺のラグナにはかないませんよ」

「愛を見た目で判断するともいえるのかい？　　違うよ、ヴァイス。人は心で人を愛するんだ。そこに、見た目なんか関係ない」

「待ってくれ、ティーダは妹のティアナが一番可愛いと思う」

「ああ」

「ヴァイスは妹のラグナが一番可愛いと思う」

「おう」

「僕にはわからないな。所詮主観なのだから、そこに何の違いもありはしないだろう？」
「違うのだ！」

ハラウオーズマンの言葉に、ティーダとヴァイスの中のザ・ニンジャが吠える！
はたから見ればなんの違いもありやしない。

「ほつとけクロノ。俺らには一生わからん………わけでもないか、クロノには妹でき
たんだし」

「あつバカ！」

ティーダが微笑みながら、ヴァイスがへえ、と目を細めながらクロノを見る。

「なーんだ、クロノ先輩、水臭いなあ。そんな事があつたなんて」

「一緒に妹談義しないか、クロノ？ きつと楽しいぞ」

「こうなるから言いたくなかつたんだ……」

「な、なんか悪い」

ヴァイスがずりずりと席を移動して強引にクロノと肩を組む。

「で？ 妹ちゃんにはなーんて呼ばれてるんですか？」

「クロノのキャラなら、兄さんだろうけど、あはは、案外兄貴とか兄様とかにいちやんと
か読んでもらつてたりするの？」

「別に普通だよ。変な呼び方はされてない」

「じゃあお兄ちゃんか」

「そ、そんなのじゃない」

「あ、こいつ言い淀んだぞ！　これをどうみまますか解説のセルジオさん」

「ええ、これはお兄ちゃんと呼んでもらって恥ずかしかつたことを思い出してる顔ですね」

「はっはっは、わかるよ、クロノ。普段兄さんなのに、ふとした時にお兄ちゃんと呼ばれる。その瞬間がたまらなく美しいよね」

「やめろ……！！　僕をそちら側に引き込むな……！！　僕はいい兄でいたい……！！」

「へへへ、シスコンは立派な兄の証拠さ。一緒に妹談義続けようぜ、クロノ先輩」

「く、くそっ！　せ、セルジオだ！　セルジオには最近ロリコンの疑惑がかかってい
る！」

「クロノッ！」

ヴァイスの魔の手から逃れるためかクロノが親友のセルジオを売り飛ばした。クロノにそこまでさせるとは、妹とはなんと罪深い存在か。

「こいつは住むところがないから年末年下の女の子の家で過ごしてたんだぞ！　有罪だ！」

「いや、ちゃんと親御さんもいたから。無罪だから」

「両親公認の仲ということか……」

「違う。そうじゃない」

「顔がいいのに恋人作る気配ないからホモかロリコンだつて昔から噂されてたもんな。うん」

「え、それ初耳なんだが……」

「ははは、まあそこらへんも含めてしつかり話そうよ。二次会にカラオケ予約してあるし」

「うーわ、嫌な予感しかしねえ……」

頭を抱えるセルジオに、楽しそうに笑うヴァイスとティード。矛先が逃れたことに安心して胸をなでおろすクロノ。

遠慮がなくて、馬鹿っぽくて、中身なんかなくて、てもだからこそ笑いながら話ができる。

そんな、セルジオにとって大切な友人たち。

「あ、お前とエイミイさんのこともきくからな」

「え」

どうやら、今日の夜も長そうだった。



セルジオが友人たちとカラオケでクロノを問い詰めている頃、なのはは自室のベッドに転がりながら、スピーカー状態にしたスマホでいつもの五人で話をしていた。

『で、結局あの『セルジオ』って人とはどういう関係なのよ!』

「いや、普通に先輩だって、アリサちゃん」

『甘いでなのはちゃん。そんな小手先の誤魔化し通用しいひんで』

『な、なのはのためなら私も応援するから。で、でも、私とも友達でいてね?』

「うーん、おかしいなあ。お話に通じてない気がする……」

『まあまあ、みんな。そんなに一気に問い詰めたらなのはちゃんも可愛そうだよ』

「すずかちゃん……!」

なのはが感動したようにすずかの名前を呼んだ。さすが、五人の中では一番大人びていて、気配りができるだけある。

すずかの言葉次第ではどうやらなんとかなりそうだ、となのはが少し頬を緩める。

『こういうのはゆつくりじわじわ聞いていかなきゃ』

「すずかちゃん？」

訂正、外堀を埋めに来た。おそろくなのはでは逃げ切れない。

『じゃあ、なのはちゃん』

「なあに、はやてちゃん」

『さつきみたいな質問はやめるわ。やから、なのはちゃんから見た『セルジオくん』のことを教えてくれへん？』

「ええと、どうして？」

『いや、聞けばクロノくんのお知り合いや言うやんか。それにそこそ優秀らしいし、気になるなあと思うて』

「ふーん。なら別にいいけど」

電話の向こうではやてが小さくガッツポーズ。後はゆつくりとなのはの本心を聞き出すだけだ。文学少女は伊達ではない。

「そうだね、セルジオくんは、頼りになるけど目を離せない先輩、かなあ」

『ほうほう、その心は』

「普段から割と普通なんだけどね、いざっていう時に、びつくりするようなことするんだ

よね」

(なのはみたいね……)

(なのはちゃんみたいだなあ……)

(なのはちゃんみたいやなあ……)

(なのはみたい……)

「後は割と無茶もしてるみたい。人のために頑張って、それで怪我しても、相手のことを先に心配したりして」

(なのはね……)

(なのはちゃんだ……)

(なのはちゃんや……)

(なのはだ……)

「ほっておいたら、なんかふわーっとどこかに行っちゃいそうっていうか。肝心な時は一人でやっちゃいがちっていうか」

(なのはね……!)

(なのはちゃんだ……!)

(なのはちゃんや……!)

(なのはだ……!)

四人の心が一つになる。なのはの言っていることはそっくりそのままなのはにも当てはまることだと思っていた。

「後は、強い人、かな」

その最後の言葉を聞いて、四人がおや？と思う。

『その、なのは、それはどういう意味？』

おずおずとフェイトがたずねるとなのはは寝転がったままうーんと唸る。

「力が強いのはもちろんんだけど、迷ったりしないっていうか、こういうの、なんて言えばいいのかなあ」

自分の中にあるイメージが言語化できず、なのはがもどかしそうに膝から先の足をパタパタと振りながら頭を悩ませる。

その話を聞いて、はやてとすずか、の文学少女二人はぴったりの表現を思いつく。

『なあ、なのはちゃん、それにぴったりの表現あるで』

「え？」

なのはが驚いたように声を上げると、電話の向こうから二人の含む笑いが聞こえてくる。

『たぶん、その『セルジオ』って人は、『不屈の心』を持ってる人なんだね』

『英語にすれば、『不屈の心』レイジングハートってところやろなあ』

「レイジングハート……」

偶然にもなのはデバイスと同じ言葉。まあはやとせずかはそれを狙って言ったのだろうか、そんなことまでなのはの中で考えは及ばない。

ただ、その偶然になんとなく気恥ずかしさを感じるだけだ。

もちろんすずかとはやて、そしてアリサもなのは様子を察している。たぶん、さっきの口ぶりからして満更でもないはずだ、と。

だが、それを口にしないうんが三人にはあつた。

『なのはのデバイスと同じ名前だね！』

「ふえ、フェイトちゃん?!」

だけど、フェイトにはそれを感じ取れる力がなかった。

『フェイトちゃん！』 それ口に出したらあかん奴ー！』

『え、そ、そうなの』

『あー、ほんと今のはフェイトって感じね。うん』

『あはは、今のは流石に、ね』

『だ、だつて偶然にも『レイジングハート』なんだよ?!』

思つて——』

まるで運命みたいだなあつて

「う、運命?!」

『フェイト、アンタよくそんなことばずかしいこと淡々と言えるわね……』

呆れたようなアリサの声は、もうなのは耳には届かない。

セルジオをそんな目でみたことなどほとんどなかったが、そんな単語を並べられればなのはも流石に動揺する。

(う、運命?　せ、セルジオくんとなのはが……?)

その言葉を心の中で表した瞬間、なのはの中にとてつもない恥ずかしさが襲ってくる。

「な、なのは用事思い出したから電話切るね!」

『え、あちよつとなのは』

「おやすみ!」

ぶち、となのはが通話を切ると、そのまままくらへ顔を埋めた。顔はほとんど見えな
いが、まくらに隠れない耳はわずかに赤みを帯びており、足はパタパタと揺れている。

(なんでこんなに恥ずかしくなっちゃったんだろう)

セルジオはコンビだ。先輩だ。ただの、頼りになる同僚だ。だから、恥ずかしがる必要はないはずだ。

「セルジオ・アウデイ……」

なんとなく呟いてみて、なんとなくそのことが恥ずかしくなったのは、またまく

らに顔を埋めた。



黄色の培養液に満たされたポッドを瘦躯の男が見上げていた。

そこには男と同じ髪の色をした全裸の女性の姿がある。やもすれば男がやましい目を向けているのか、と疑いそうだが、男の金色の瞳にはそのような雰囲気はない。

ただ、興味深いオモチャをみつめる子どものように、嬉々としたものがあるだけだ。

そんな男のすぐ後ろに、一人の女性が立っている。きつちりと胸元まで止められたボタン、伸ばされた背筋は、彼女に凜とした雰囲気をもたらしている

「ドクター」

「なんだね、我が娘」

「また上からです。あのデバイスのプロトタイプはまだできないのか、と」

「またかね」

男がうんざりしたようにため息をつく。

「何度も言うがあのデバイスに搭載されたシステムはデータの蓄積と経験の積み重ねでしか成長し得ない。もう、私の手ではどうしようもないのだ」

「ええ。上にもなんどもそう言っているのですが、一年以上たつたのだからもういいだろう、と」

「やれやれ、ご老人方は本当に頭が硬い」

男が髪をかきあげながら手元にある携帯端末を弄り始める。

「あのデバイス、『ゼファア』はこの前のメンテナンスで完成度は幾つだったかね」

「私の把握している限りでは、戦闘データ集積96.3%、予測精度87.4%、予測可能時間は最大134秒といったところでしょうか」

「ふむ、まあそこまで集まっていれば、後は私の方でも何とかなるだろう」

「そろそろ回収なさいますか?」

「そうだね。上に不機嫌になられても厄介だ。そろそろゼファアは返してもらおう」

「はい。では、担当者に回収の日程を連絡——」

「いやいや、それには及ばないよ我が娘よ」

男は女性の声を遮ると、ぺたりと目の前の培養液が満たされたポッドに手を触れる。

「せっかくの新しい娘だ。彼女に任せよう」

「それは、強奪する、という意味でしょうか？」

「おや、それは人聞きの悪い言い方だね。私はただ、預けたものを娘に取ってきてもらうだけだ」

くつくつと男が楽しそうに笑う。

「では、『セルジオ・アウデイ』への処遇はどのようにな？」

なかなか興味深い演算能力

があるようですが」

「セルジオ？　誰だね、それは」

「『ゼファア』のデバイス保有者です。『セルジオ・アウデイ』。三課のAAランク魔導師ですね」

「ああ、そういえばそんな名前だったね」

男はしばらく笑みを浮かべたまま考えるそぶりを見せたが、やがて興味を失ったかのように小さく息をついた。

「まあ、殺していいんじゃないかな」

そう言つて、男はポッドを見つめて、手元の端末を操作した。

「さあ起きたまえ、トーレ」

男が、嗤う。

ただ、楽しそうに、狂ったように、嗤い続ける。

そして、その声に応えるかのように、ポッドの中の人物の瞳が、ゆつくりと開かれた。

かくしてそれは、遅々として、しかし確実に、彼へと迫まろうとしていた。

警護任務

なのはいつものように学校が終わり三課のオフィスにやってくると、今までにないような超弩級におかしな絵面と遭遇した。

オフィスの一角でゼスト含む三課職員が簀巻きにしたセルジオを部屋の隅に転がしてうんうん唸っていたのだ。訳がわからない。

「あ、あの、どうかしたんですか」

「ああつ！　なのはちゃんじゃない！　奇遇ね！」

「一応お仕事なので奇遇じゃないと思いますけど……」

「それもそうね！　まあまあ、取り敢えずお座りなさいな」

「は、はあ」

クイントがニコニコしながらなのはの肩を掴んで座らせた。隣には何人かの女性局員、対面には難しい顔をしたゼストが座っている。

取り敢えずなのはは部屋の隅の簀巻きに念話を送ってみるが、特に応答はない。どうやら眠るか気絶してらしかった。

「実はねなのはちゃん、今回三課は厄介な任務を引き受けることになってしまったの。

ええと、クラナガンの中央シヨップینگモールってわかる？」

「あ、わかります。行ったことはないですけど場所くらいなら」

「それなら話が早くて助かるわ」

そこは以前の事件でテロの標的にされたところでもあった。さすがに行ったことはないが、座標くらいならまだレイジングハートに入っている。

「そのシヨップینگモールではね、今度開業20周年を祝して、グループが発掘したロストロギアを展示するらしいのよ」

「そ、それって大丈夫なんですか？」

「うん。まあ、封印してあるらしいし、一応問題ないってことにはなってるみたい。ま、ロストロギアなことには変わりないんだけどね」

「じゃあ、今回の任務っていうのはそのロストロギアの押収ってことですか？」

それなら、三課の人員がうんうん唸ってた意味がわかるような気もした。セルジオが簀巻きにされていた意味はわからない。

なのはは深刻な顔で尋ねたが、それに対してクイントはあつけからんと手を振った。

「あ、違う違う。ロストロギアは企業のものだし、管理局は危険性を証明できない限り押収はできないわ」

「——？ なら、任務ってなんのことなんですか？」

「警護任務だ」

「え？　ぜ、ゼスト隊長？」

「ロストログアの盗難や、万が一の封印崩壊に備えて魔導師を企業側には秘密裏に派遣してほしいと、上から命令が下った」

「と、いうことで、三課から人員を送ることになったのね」

ゼストの淡々とした言葉を途中で引き継ぐクイント。

「一人は言わずもがなセルジオくん。あの子、結界も封印も転移も使えるし、広範囲解析のお陰で怪しまれずに監視が行えるし」

「あの今更なんですけど、なんでセルジオくん簧巻きになってるんですか？」

「んー、なんか作戦の説明したら死ぬほど嫌がったから当て身した後にああいう感じになっただわ」

「せ、セルジオくん……」

本気でやれば抵抗できただろうに、相変わらずセルジオはクイントに弱いようだった。

「あの、セルジオくんの事は分かりましたけど、作戦ってどんなのなんですか？」

なのはのイメージではセルジオはどんな仕事でも淡々と引き受けることが多い。そのセルジオが嫌がるとは相当だ。

なのはの言葉にクイントがよくぞ聞いてくれたと言わんばかりに目をきらーんと光らせた。

「それは、ゼスト隊長から説明してもらいましよう！」

「あー、今回の任務は、あー、秘密裏にと言う原則がある。そのためー、えー、少人数での行動が、求められる。警護先は、恋人や、女性の多い、シヨツピングモール、そのためー次はなんだったか」

「セルジオと女性によるーってやつです」

「ああ、警護先に紛れるために、セルジオと女性のバディによる、潜入警護にしようと言うことになった。よし、これでいいなクイント」

「はいバツチリです！」

ぐっ、と親指を立てるクイント。

「それで、セルジオくんの恋人役として誰か女性の局員を送りたいんだけど、良さそうな人がいなくてね」

「ワタシは、その日有給で……」

「めちやくちや行きたいけど私には別件の捜査任務があつて……」

「悔しながらアタシも、その日は一週間後に迫るレポートを提出しなきゃいけない」

「私もその日は、その、アレなんで」

「そういうわけなの」

「あー、誰かその日たまたま仕事がない女性職員いないかナー」

「それでいてセルジオとある程度仲よくて一日中一緒にいても嫌がらないような子がベストだよナー」

「セルジオの苦手な射撃とかサーチャー系とかシールド系も得意だったら言うことなしだよナー」

「いないかなー、いないよなー、そんな都合のいい子ー」

「なんというか、ぐだぐだだった。というか、クイントをはじめとする三課の人員に隠そうとする意思がない。」

「メガーヌという三課の数少ない良識派が産休をとったせいで、クイント率いる過激派が野放しになってしまっている。」

「まあ、どつちにしろセルジオくんが引き受けるならなのはもいかなきゃだよね」

「なのはが苦笑いをしながら、そろそろと手をあげる。」

「あの一、なのはが行きますよ」

「ええっ！　なのはちゃん行ってくれるの?!」

「なんだと?!　セルジオと一日中一緒にいても大丈夫なのか?!」

「流石『闇の書事件』の立役者！　ミッドの白い彗星！」

「というか年頃の男と女の子が一緒にシヨツピングモールで過ごすなんて……ひよつと
しなくてもデートじゃないか!？」

「おお、たしかにこれは半分デートみたいなものじゃなあ?!」

「よし、そうとなれば作戦名は決まったわ!」

クイントがぼん、と近くにあつたホワイトボードを叩くと、ボードがぐるりと一回転
して裏に書いてある文字をあらわにした。

「デート大作戦! 決行よ!」



『あー、テスト。セルジオくん聞こえてるー?』

「はい、聞こえますよ。残念ながら」

『なら良かったわ。久々に使うからちよつと心配してたのよ』

シヨツピングモールのベンチで一人座るセルジオが耳につけたインカムから聞こえ

てくる声に応じる。

『いいわね、今日の任務は二つ。一つは、あなたの場所からも見える宝石状のロストロギアをしつかり監視すること』

「はい、それはもちろんですけど……。二つ？　もう一つはなんですか？」

『今日のデートでなのはちゃんを楽しませることよ』

「今日はデートじゃないです。潜入警護任務です。仕事です」

『こんな時にまでクソ真面目じゃなくていいの。なんのためにあなたの服を見繕ったと思ってるの？』

「ここで浮かないようにでしょ」

『全然違うわ。なのはちゃんをドキッとさせるためよ』

インカムからの声に、げんなりとして頭をかくセルジオ。その服装はジーンズに黒のジャケットに眼鏡と、カジュアルなものとなっている。いかにも、『デートの為の格好』という感じだ。

(なんて爆発的に頭の悪い作戦なんだ、これ……)

そう言いながらもセルジオがクイントの言葉に従っているのは、無茶苦茶なようで一応筋は通っているからだ。頭のいい馬鹿を相手にするとこういう時にすぐく面倒だった。

『クイントさん、クイントさん、あと少しで集合時間ですよ』

『あら、ほんと。セルジオくん、もうすぐなのはちゃんがるからね。来たらず服を褒めるのよ、服』

『適当に良いな、とかじゃダメよ。具体的に、ここが良いって褒めるコト』

『あんたら仕事あつたはずでしょ』

あからさまに楽しいな雰囲気的女性陣。それにところどころ男性の笑い声も混じっているし、おそらく三課総出で野次馬をしているのだろう。仕事しろ。

そうこうしていると、セルジオの手の中の懐中時計が集合時間の十分前を示した。(そろそろ来る頃か)

ぱたん、と懐中時計の蓋を閉じて胸ポケットに入れたところで、セルジオの解析魔法に見知った反応が引つかかるのを感じた。

「ごめん、待たせちゃった、かな」

「いや、八分前だ。全く問題な、い……」

俯いていたセルジオになのはの少しだけ照れたような声が降って来る。それに、薄い笑みを浮かべて対応しようとして、セルジオの目が丸くなる。

灰色の薄い生地のカーデイガンに、胸元の赤色のリボンがアクセントの膝下まである茶色のニットワンピース。そしてなのはの細い足を覆い隠す黒のロングソックス。そ

して、何よりも目を引くのは、なのはがいつもは二つに結んでいる栗色の髪を肩口までさらりと伸ばしていること。

見慣れたものでもあるにかかわらず、随分と雰囲気違ってセルジオは言葉を失ってしまう。

別に六も年下の相手に見惚れたりはないが、驚くものは驚くのだ。

「高町、だよな？」

「は、はい」

セルジオが戸惑ったように名前を呼ぶと、緊張を滲ませて返事をするのは。しばらくぼーっとしていたセルジオだったが、やがて薄く笑みを浮かべる。

「服もよく似合っていて、髪も新鮮だ」

「お、お母さんが、やってくれたの」

「そうか。似合ってるぞ。きっと誰でも可愛いと思うんじゃないか」

「そ、そっか」

『ひゃー、聞いた？』

今の聞いた？

なんとという甘酸っぱい雰囲気……。私もこ

うありたかった」

『それに見てよ、なのはちゃんの格好、まあまあ背伸びしちやって……。お母さんにやつてもらったのかしら？』

インカムにカメラ付いてて良かったわ」

『はっはっは、セルジオが珍しく言葉に詰まってるなあ。おーい、誰かお菓子食いながら鑑賞しようぜ』

インカムの連中へ黙れ、と言いたいのをぐっと堪えて腰掛けていた椅子から立ち上がった。

「今日は俺たちはあそこのロストログアの監視を行う。基本的には俺が広範囲解析を張ってるから高町は心配しなくても大丈夫だと思う」

「は、はい。私は、緊急事態にだけ備えておけば良いんですね」

「そういうことになる」

頷いたセルジオが、いつもよりも見上げて来るなのは顔が近いことに気がつく。

「高町、今日はヒールか？」

「う、うん。あんまり踵が高くないやつだけど、なんでわかったの？」

「いつもより顔が近いからな。今日は気をつけながら歩かなきゃな」

「あ、ありがとう」

少しうつむき気味に礼を言うなのは態度は、いつものものよりもどこかしおらしい。

(誰かに何か言われたか。面倒だな)

大方、クイントか桃子か友達か、そのどれかだろうがセルジオにそれを推理する力は

ない。というかなんだって良かった。

「ほら、行くぞ。いつまでもここにいるわけにもいかない」

「ま、待ってよ」

『よし、セルジオくんちゃんとエスコートしてあげるのよ!』

うるさい今日は仕事だ、と心の中で文句を言って、セルジオは歩き出した。

今回のショッピングモールでは雑貨店や飲食店が立ち並ぶ一階、主に洋服、そしてフードコートが内接された二階がセルジオたちのメインの行動場所となる。

問題のロストロギアは一階中央付近に展示されており、周辺には企業のガードマンもいる。

近くですっと監視していると怪しまれるので、吹き抜けになっており、二階から一階のロストロギアを監視しよう、というか作戦だ。

また、不審人物についてはセルジオの広範囲解析で対処する予定だ。休日ということもあってモール内には数百人の人間がいはするが、セルジオの演算能力とマルチタスクであれば問題ない。魔法が違法発動されようものなら瞬時に駆けつけて、取り押さえられるだろう。

セルジオとなのはがモールの中で並んで歩く。

「そ、そういうえばセルジオくんは今日は眼鏡なんだね」

「ん、まあな。変か？」

「ううん。ちよつと新鮮だっただけ。それ、わざわざ今日のために買ったの？」

「いいや、これは自前だな。クイントさんに眼鏡で行けって言われたからな」

「へ？　セルジオくんって目悪いの？」

「ああ。ないと生活に支障をきたすほどじゃないが、少しな。言っただけか」

「き、聞いてないよ！　だつてうちでは眼鏡してなかったもん」

「まあ他所の家だしな。そこは気がけてた」

「お父さんはくつろいでいいって言ってたのに」

「だからといって本当に寛ぐわけにはいかないだろうさ。俺は他人なんだし」

「むう……」

少し不満そうなのはの頭をセルジオがからかい交じりに軽く撫でようとして、なのはのいつもと違う髪型を見てやめる。

最近のなのはは撫でた時の反応が怒ったり無反応だったり、よくわからないのだが、今日は恥ずかしがられそうで面倒だったのだ。

(ほんとうに女性のことはわからん)

頭をかきながら隣のなのはへと目を向けると、不意になのはの足が止まった。

「どうかしたか?」

「いや、ああいう店ミッドにもあるんだなー、と想つて」

「……ああ、露店か」

なのが見ていたのはこういうショッピングモールには時々ある、アクセサリーなどを売っている露店。

どうやらこの店は指輪やチェーンなどのシルバーアクセや、ブレスレットやイヤリングなどの装飾品を売ってるらしい。

「お、そこのお嬢さん何かご購入かな?」

なのはがぼーつと露店を見ていると、それに気づいた店主が声をかけてくる。

「ええと、別にいるものはないんですけど、ただ綺麗だなあつて思つて」

「ハハツ、そいつは嬉しいね。俺も冥利につきるつてもんだ」

「えっ? これって店員さんが作ってるんですか?」

「そうそう。全部俺の手作りだぜ?」

そう言つてニカリ、と快活に笑う店主をよそに、監視のために発動していたセルジオの広範囲解析がアクセサリーの解析を勝手に始めてしまう。

(構成材質は銀に、木に、ガラスに、ああ、あれに使われてるのはルビーか?)

な。指輪にはほとんどダメージがないな。無機物操作あたりの応用か)

贅沢だ

そんな事を考えていると、セルジオのインカムがやかましくなり始める。

『チャンスよ！　ここでののはちゃんにリングなりをプレゼントして好感度を稼ぐのよー！』

『そうだ、女つてのは光り物とかちよつとした小物が好きだ。ここでフラグをたてとけ！』

『ついでにグツとくる殺し文句が言えればベストだね。ほらほら、その頭を生かしなさいな』

『あー、楽しい。あ、ポテチ無くなったから誰かとつてー』

あいつも変わらず聞こえてくる声は多く、どうやらまだみんなで野次馬してるらしい。本当に仕事しろ。

セルジオがインカムを無視しながら、しゃがみこんでじーつとアクセサリを見つめるのはへと視線を移す。

「何か欲しいものでもあるのか」

「あ、うん。なんか、買おうかなあつて思ってたんだけどね……」

「買えばいいんじゃないか？　俺は別に咎めたりはしないぞ」

「あはは、それがちよつとお金足りなくて。朝バタバタしてて換金するの忘れちゃった」
「なら、その兄さんに買って貰えばいいじゃないか。恋人なんだろう？」

「こつ、こつ、こつ！」

「高町、鶏の真似ならしくていい。店主、悪いが俺と彼女は——」

『恋人でしょ、今日は。企業側にバレた時の裏どりがめんどくさいからちゃんと言えな
きゃよ』

「その通り、恋人だ……。よくわかったな」

「へへ、だろ？　伊達にここで数多の恋人を見てないぜ。恋人の判定にかけては俺の
右に出るものはいねえと自負してる」

「なら、その自負は即刻引き下げるべきだ。目を養え」

「はあ、とセルジオがため息を一つして、しゃがんでなのはどの目線を合わせると、同
じようにアクセサリへと目をやる。

「で、何が欲しいんだ。このくらいなら買つてやる」

「ええっ！　悪いよ、セルジオくんにお金使わせるなんて。また来た時に買うよ」

「その時にこの店があるかわからないし、俺を恋人にも一つ買つてやれない甲斐性な
しにする気か？」

「ええっ！」

恋人、という言葉になのはが大きく声を上げたので、弁解の言葉を念話で送る。

「（アリーブイ作りだ。万が一局員だって企業にバレてプライベートできたっていう時、こ

この店主が証言してくれると助かるだろ？」

「（ああ、そういうこと……）」

なのはが納得したように声を漏らして、またアクセサリへと目を移す。

「えと、じゃあお言葉に甘えて、このネックレスとか、良いかな？」

選んだのはシンプルなデザインの星のネックレス。

「わかった。店主、これ貰えるか」

「お、毎度。兄さんもおんなじの買うかい？」

「いや俺は結構だ。彼女の分だけを頼む」

「ほいほい」

店主が提示した金額に、少しばかり眉をひそめながら金を払うセルジオ。こういう場所での買い物は割とバカにならない値段なものだ。

ご機嫌な店主に別れを告げて、セルジオとなのはがまたぶらぶらと歩き始める。

ちらりと横を見れば、なのはの方は胸元のネックレスをご機嫌そうに指で触っていた。

「好きなのか、そういうの」

「うーん、どうだろう。あんまり買ったことがなかったから」

「そうか」

「うん、でも、これはなんだか好きかな。ありがと、セルジオくん」

「それは何よりだ」

割と痛い出費だったが、まあなのは喜んでいるようなのでいいか、とセルジオが結論づける。

えへへ、と照れたように笑うのはから目を逸らして、ロストロギアがある一階へと目を向ける。

ケースに入れられて守られている赤い宝石状のロストロギアに一応解析をかけてみる。

（封印も頑健だし、特に危険な反応もない。聞いていたよりも魔力値は高めだがそれだけだ）

メガネを押し上げて目を細める。

「まあ、多分なんもないだろう」

ここはミッドチルダの首都なのだ。たかが用途不明のロストロギアごときに反応する犯罪者がいるとも思えない。

「——なんだこれ」

そう思った時、突然、セルジオの広範囲解析に引っかかる影が現れた。

それはモールの入り口からゆっくりと歩みを進めながら、ロストロギアの方へと向

かってくる。

「高町、俺は少し外す。ここで待っていてくれ」

「え？ どこか行くならなのはも行くよ？」

「なんだ、お前は手洗いの時までついてくるつもりか」

「え……………」

「冗談だ。少しここで待ってろ」

ふ、とからかうように笑うとセルジオはなのはを置いて駆け出した。

「クイントさん、聞こえていますか」

『なあに？ トイレの時は通信切つといて上げるわよ。それともセルジオくんは自分

のトイレを見て欲しい人？』

「冗談は後です。解析魔法に不審人物の影が引かかりました」

『——！ 詳細は』

「敵意や、狙いはまだわかりませんが、俺が内部構造を見た限り、相手は——」

一階に降りたセルジオが息を切らしながら走り、ロストログアと入り口のちようど中間で立ち止まる。

目の前には、紫の髪をしたコート姿の女性が立っている。

「——戦闘機人です」

インカム越しに、三課の人員が息を飲んだ。

その単語を知らないはずがない。なにせ、いま三課が総出で追っている事件、それが戦闘機人に関する事なのだから。

にこり、とセルジオは笑うと、女性に相對する。

「今日はこういった要件で来られたんですか？　もしよかつたら教えていただいても？」

「お前は？」

「管理局の人間です。見た感じ、少しお困りのようでしたので」

セルジオと女性の視線がぶつかり、しばし無言での睨み合いが続いていたが、やがて女性の方がゆっくりと口を開いた。

「金の髪、翠の目、貰っていた映像データの通りだ」

「何を……？」

「お前が、『セルジオ・アウディ』だな」

名を呼ばれた途端、セルジオの表情が険しいものへと変わる。そして、いつでも臨戦態勢へと移れるように足を肩幅まで開いた。

「お前、何者だ」

セルジオが問うと、女性は短く切りそろえた紫の髪の向こうで金の瞳を光らせなが

ら、短く名乗る。

「トーレ。戦闘機人の、トーレだ」

「^{トーレ}三番、だと」

「ああ、そうだ。それが私の名前です——」

(来るッ！)

トーレの体に入力を見て、セルジオが瞬時にセットアップしようとして、それよりも早く、トーレが目の前に現れた。

「お前を殺す者の名だ」

—— I S 《ライドインパルス》。

そして、トーレがセルジオに視認できない速度で腕のエネルギー刃を首を狙ってふる

い——

「がっ！」

「む………？」

奇跡的に左腕のガードに成功する。ごろごろと吹き飛ばされて地面を転がりながら、トーレとの距離を取る。

「今ほどゼファーが籠手型な事を嬉しく思ったことはないな……！」

「なるほど、防具を仕込んでいたか」

腕がきれなかった事を不思議に思ったトーレが感心したように声を漏らす。

その間に眼鏡を外し、破れたジャケットの下から覗くガントレットにセルジオが手を添えた。

「セツトアツプゼファー！」

セルジオの体が白い光に包まれると、その姿が白のバリアジャケットに変わり、左手の中には銀の槍が現れる。

そうしたところで、モールの人々が異常に気づいたのか、悲鳴をあげながらセルジオたちから離れ始める。その様子を横目で見ながら、セルジオは槍の穂先をトーレへと向ける。

「何が目的だ、戦闘機人トーレ。やはりロストログアか」

「ふ、特に言う必要もないだろう、セルジオ・アウデイ」

「確かに愚問だったな」

「こんなモールに堂々と姿を現したのだ。目的はロストログア以外にはあるまい、とセルジオが推測する。

「投降を勧める。いまならまだ罪は軽い」

「すると思うか？」

「これも、愚問、か……」

セルジオが目を閉じる。交渉は決裂。ならばもう取るべきでは一つだけ。
「実力行使に移らせてもらおう」

「望むところだ、セルジオ・アウディ」

「加速機動ッ！」

ブリッツアクション
インビュレントスキル

「I S 《ライドインパルス》」

セルジオの体が白に、トーレの体が紫の光に包まれ、加速、刃と槍を交えた。

ガイン、と激しい音とともに、ゼファーが軋みを上げる。打ち勝てない、と判断したセルジオは槍をひいて穂先を滑らせるようにしてトーレの刃を受け流す。

そしてまた加速しながらトーレの背後を取ろうとするが、トーレはひるむ事なくセルジオについて来る。

「どうしたセルジオ・アウディこの程度かッ！ スピードが落ちているぞッ！」

「ぐっ——」

セルジオが苦悶の声を漏らす、トーレのでは休まる事を知らない。

（くそ、こいつ俺よりも速い……！ 攻勢に、移れない）

一閃、また一閃とトーレが刃を振るうたびに守りを抜いた刃がバリアジャケットを削り、セルジオの体に傷を刻み込んで行く。

（このままじゃジリ貧。安易に見せるのは頂けないが、そうも言ってもらえない）

セルジオがエネルギー刃を防ぎながら脳内のマルチタスクを分割、そしてゼファアを併用する事で一秒足らずで魔法式を組み上げて行く。

(演算完了——短距離^{ショートシフト}転移)

世界から、セルジオという存在が消失。100万分の1秒のラグの後に、三メートルの距離を歪める事で三次元平面状を跳躍、トーレの背後に出現する。

「これで、終わりだっ！」

そして、魔力を込めた槍を叩き込み——トーレはあらかじめわかつていたかのように受け止めた。

「——は」

「残念だったな。それはもう識^しっている」

「ご、はあっ！」

そして、トーレは槍を引き寄せると自身へ向かってきたセルジオの体に向けて全力の蹴りを叩き込んだ。

エネルギー刃を纏った蹴りは、セルジオの腹部に深い切り傷を刻みながら、肋骨を大きく軋ませた。

170センチ以上のセルジオの体がいとも容易く蹴り飛ばされ、周囲の椅子や鑑賞物を纏めてなぎ倒しながら、サッカーボールのように地面を転がる。

ようやく体が止まった時には、その白いバリアジャケットは薄汚れて、腹部から血で赤く染まっていた。

無様に地面を這いつくばるセルジオをトーレが感情を感じさせない顔で見下ろす。

「な、んで……」

「動きが読まれたか、か？　なに、簡単な事だ」

トーレがセルジオのコートの襟首を掴み無理やり自分の方へと引き寄せた。

「私にはお前の一年以上にわたる戦闘データ、その全てが搭載されている。動きを読むのは赤子の手をひねるより容易い」

「な、んだと………」

セルジオの愕然とした表情に、トーレはそれ以上注意を払うことはない。既に、彼女の中では決着はついてしまっていた。

後は、腕を振るうだけだ。

「さらばだ、セルジオ・アウデイ」

そして、トーレのエネルギードが低い唸りを上げて、セルジオの胸めがけて振るわれ

て――

「がっ――」

小さな声が、
空気へと溶けた。

泣いてる子を

その時なのはベンチに座ってセルジオの帰りを待っていた。

集合してから二人でショッピングモールの中をいろいろ話をしながらぶらぶらと歩いて、途中ではネットクレスも買ってもらった。

これでいいのかな？　と思うくらいのおんぴりとしていて、これではまるで遊びに来たかのようなだったが、現状なのはにできることはない。

サーチャーなどは最低限使えはするものの、セルジオのように解析などは得意ではない。一応申し訳程度に、ロストログアのある方を見たり、怪しそうな人がいないかは確認していたものの、問題は見受けられなかった。

クイントも付いて行くだけでいいと言っていたし、おそらくこれでいいのだろう。

なのは手が自然とシルバーのネットクレスに向かう。

ちやり、と鎖が音を鳴らすのを聞いて、なんとなくそのままネットクレスの縁を指でなぞる。少し冷たい感覚の五芒の星がなのはの指を押し返す。

「セルジオくん、遅いなあ……」

先ほどセルジオが走って行った方に目を向けるが、そこには目当ての姿は見えなかつ

た。

クリスマスからはもう既に一ヶ月近くの時が経っている。

雪の日にセルジオと二人で月を見ている時なのはの中に浮かんできた『この人の力になりたい』という思いは今もそこにあるが、だからといって何をすればいいかはわからない。

ただ、ぼんやりと今の関係ではいけないだろう、とは感じている。

しばらくネットクレスを触りながらベンチに座っていると、肌にピリつくような圧迫感を感じた。

(なにか、変な感じがする……)

なのはが弾かれるようにして遠くへと目を向けると、遠くで爆音とともに一条の白光が走った。



そして、トーレのエネルギー刃が低い唸りを上げて、セルジオの胸めがけて振るわ
て――

「こんなところで、終われるかッ！」

「がッ――」

叫び声とともにセルジオの左手の中に白の光球が出現、勢い良く握りつぶされた瞬間、目も眩むような閃光と衝撃走り、トーレとセルジオの体が大きく吹き飛ばされる。

呻き声を上げたトーレは衝撃のあまりセルジオから手を離してしまいが、なんとか受け身をとってほとんど無傷で乗りきった。

「今のは、何をした」

トーレがふらふらと槍を支えにして立ち上がるセルジオを睨む。すると、セルジオは腹から胸にかけての傷口を手で抑えながら、にやりと不敵に笑う。

「炸裂弾^{コンカッション}。ただ魔力弾を放出して、全力で弾けさせただけ、の、しょうもない、技だが、ああやって距離を取りたい時には時々使う」

「自爆紛いの奥の手、というわけか」

「まあ、そんなところだ」

トーレが目を細めてセルジオを見つめる。槍を握る手は震え、先程から息も荒い。トーレに蹴りとともにつけられた裂傷は、自身の自爆で傷口が広がったらしく白のバリ

アジャケットを赤く染め上げている。

(容易く自爆を選ぶとはまともな人間とは思えんな)

トーレの中に『セルジオ』という人間についての興味が水泡の如く湧いてきたが、それも一瞬のこと。すぐに首を振ってその考えを打ち消した。

(私は戦闘機人。ただ、ドクターの命に従い行動する機械。ただそれだけであればいい)

トーレが己の内に湧いた感情の瞬きを消し去ると、エネルギー刃、インパルスブレードを発動させて、構えた。

「今度こそ死ぬがいい、セルジオ・アウデイ」

トーレの先天性技能である《ライドインパルス》が発動すると、翼にもなる刃、インパルスブレードに加速能力が付与され、爆発的な速度で踏み込んだ。

それは最早『高速移動』という領域ではなく、見る人によれば『瞬間移動』にすら感じることだろう。

迫るトーレを視界に収めながら、セルジオがゼファアの中（アナルライズ）に内包された行動予測プログラムを駆動させて、マルチタスクと併用することで一秒足らずで、三十秒先の未来まで見通した。

(解析ローリー五十三手)

セルジオの目が白く光ると、マルチタスクに待機させていた加速魔法に魔力を流し込

んで発動させてトーレの一撃目を回避する。

「読みきった——まず一手」

『ゼファー』の未来予測か。面白い」

トーレが加速して回り込むと、槍を握る左腕を切り落とそうと刃を振るう。だが、それをあらかじめわかっていたセルジオが、槍をくると回すことで弾く。

「二手」

白い光が瞬きセルジオの体が掻き消えたかと思えば、次の瞬間にはトーレの頭上に姿を現す。そして、落下の速度と自身の体重の全てを込めて全力の突きを放った。

セルジオの銀色の槍が目の前の敵へと直進し、その体を射抜かんと迫る。

「三手」

だが、それを戦闘データから可能性に留めていたトーレはエネルギー刃を交差させる事で頭上で受け止める。

爆発音を上げてぶつけられた槍の穂先と刃が鏝迫り合い、トーレの紫の刃が僅かに砕け、セルジオの槍が軋みを上げた。

セルジオが静かに告げる。

「四手」

「だからどうした!」

トーレが戦闘機人の通常の人間より数倍の筋力を全力で稼働させて槍を押し込めて弾き飛ばそうとする。

「五手——これ待っていた」

セルジオの目が大きく見開かれると、翠の中に走る白の色合いが強くなる。

「ゼファー、砲撃形態セカンドモードッ！」

がしゅん、とセルジオの左腕のガントレットが内部から槍との合体機構を吐き出しながら槍の柄を固定し、穂先を変形させる事で巨大な砲身を作り出した。

トーレのエネルギー刃に槍の穂先をそのまま変形させた巨大な砲身が添えられる。

「ダイバイン——」

起動句トリガーワードを唱えられた『ゼファー』のシステムがセルジオのリンカーコアから無理やり魔力を引っ張り出して瞬間的に砲身に魔力砲が充填していく。

その強い光は、本来ならあたりに散らばるものまでも砲身の中に収束、固定する事で威力の向上と発動速度の向上という荒業を実現してみせる。

「——カノンッ！」

ズ、と白の砲撃が炸裂し零距离砲撃が炸裂しトーレがいた空間を纏めて薙ぎ払った。

「やったかつ?!」

眩い閃光と地面に着弾した際に起こった土煙にセルジオが僅かに目を細める。そし

て、瞬時に解析魔法で空間探知を行い、辺りに何も反応がないことを確認する。

ふう、と息をついてセルジオが土煙の向こうのトーレの姿を確認しにゆつくりと移動を始めて、はた、と思いが当たる。

(反応が何もないだと。ならトーレの反応は一体どこに——)

もし撃墜されたならトーレ体が地面になればおかしい。けれど、解析魔法には何も探知しなかった。ならば、それが意味することは一つしか無いわけで。

「言っただろう。お前の行動を読むことは赤子の手をひねるより容易いと」
背後から、声がかかる。

「しまっ——」

セルジオは弾かれるように振り向いたが、時は既に遅い。

セルジオの視点では、突如背後に現れていたトーレが右腕のインパルスブレードで胸を真一文字に引き裂きながら、強烈な拳を叩き込んだ。

めきり、と骨が軋むと、セルジオが地面に叩きつけられ、大きなクレーターを作り出す。

「げほっ、な、にが……?」

地面に這い蹲り血反吐を吐きながらセルジオが困惑の声を上げる。

それは当然とも言える。セルジオの広範囲解析は生まれつきの適性の高さから非常

に少ない魔力で、しかも超広範囲に発動が可能だ。その最大捕捉は直径二十メートル。そこから逃げられるものなど、ほとんど存在しない。

ならば、なぜトーレは解析魔法に探知されなかったのか。その答えは、彼女のI Sにある。

トーレの先天性技能《インヒューレントスキルライドインパルス》。そのスピードは人間の動体視力を遥かに上回り、管理局のリーダーですら探知できないほどだ。

つまり、セルジオの広範囲解析を振り切るほどのスピードを出すことも、また可能。ただ、速い。

それが、魔導師ランクにすればSにもなるであろう戦闘機人『トーレ』である。

「く、そ、うご、け……」

セルジオがクレーターの中で無理矢理に体を動かそうとするが、二つの大きな裂傷に、身動き一つで鈍痛を訴える胸骨と肋骨の怪我のせいで、指を動かすのさえ困難な状況だ。

セルジオが万策尽きたかと悔しげに唇を噛んだ。

「デイバインバスター！」

聞き慣れた起動句が聞こえると、視界の端から端までぶち抜くようにして桜色の流星が空をかけて、空中に浮かぶトーレを目指して直進する。

「新手か」

だが、トーレはそれを視認してから容易く避けた。

砲撃の速度も遅くはないが、戦闘機人の思考速度とトーレのライドインパルスがあれば、視認してから避けるのも容易い。

「む、逃げたか」

だが、どうやら砲撃を撃った人物は一瞬の間、気を逸らせれば良かったようで、特に追撃を行うことなくセルジオとともに姿を消していた。

トーレがクレーターの中心に溜まる僅かな血だまりを見て、移動した祭の血痕が残っていないか探すが特にそれっぽいいものは見つからない。

「短距離転移で逃げたか。厄介だな」

彼女の目的は『セルジオ・アウディからデバイスを奪取すること』。そのついでにセルジオを殺すことである。

隠れられてしまつては目的が果たせなくなつてしまう。

既にセルジオとの交戦からは十分が経とうとしており、あと十分もすれば付近の管理局員が来てもおかしくない。

そうなればもうデバイスを取り返すこと不可能となつてしまふだろう。

「なら、あちらから来てもらうしかないな」

トーレの視線が移り、シヨツピングモール中央を見つめる。彼女の戦闘機人としての優れた目が、ロストログアとして展示されている、『赤い宝石』の姿を捉えた。



力を振り絞ってなのはと二人短距離転移でシヨツピングモールの二階の物陰に隠れたセルジオは、そこで限界を迎えたように膝をついた。

なのはが慌てて駆け寄ってセルジオの顔を覗き込んだ。

「セルジオくん！　しっかりしてよ！」

「大丈夫、だから、あんま喋るな」

「そんなのできるわけないよ！　自分の怪我のこと……」

「いいから、黙れ。声で、バレる」

荒い息のままなのはの口を抑えるセルジオ。目でわかったか？　と聞くとなのは

がこくこくと何度も首を縦に振った。

「俺なら大丈夫だ。怪我はしたが意識が飛ぶほどじゃない」

「う、うん。でも無理しないでね」

「それなら問題ない。もう無理をする必要もない」

「(どうということ?)」

「理由はわからないがどうやらあの戦闘機人の狙いは俺らしい。何度かロストロギアを取りに行くチャンスもあつたのに、それを無視して俺を殺しに来た」

「(それってセルジオくんの勘違いとかじゃなくて?)」

「(サーチャー飛ばしてみるといい。そしたら多分わかる)」

「(う、うん)」

なのはがレイジングハートからサーチャーを出す隣で、セルジオはゆっくりと背中を壁に預けて息を吐く。

「(ほんとだ。さっきの場所から動かない)」

「(だろう。なら、後は応援を呼べばいい。今からクイントさんたちに……)」

インカムに伸びたセルジオの手がからぶる。どうやら三課につながっていたインカムは戦いの余波でどこかに飛んで行ってしまったらしい。

ちっ、とセルジオが小さく舌打ち。

おそらく騒ぎを聞きつけた管理局員がやってくるまで後十分か十五分。時間はかかるが、そこまで経てばもう半ば勝ちのようなものである。

(屋内の客は………一階と二階は避難したみたいだけど、3階から上はぼちぼち取り残された人がいるな)

広範囲解析の精度をあえて落とすことで、探知範囲を広げてモール内の大まかな人数を把握する。

(上に行かれたら厄介だ。ここは俺が囷になって外に誘き寄せるか、いや——)

「——！ セルジオくん、女の人動き出したよ！」

なのはの声でセルジオが思考の海から帰還する。

「俺にもサーチャーの映像共有できるか」

「うんわかった」

なのはが共有のための魔法式を発動するためにセルジオの体に触れる。

「——っ」

「(ご、ごめん痛かった?)」

「(問題ない。少しだけ傷に触っただけだ)」

「(う、うん……)」

力など全く込めず、ただ軽く肩に触っただけなのに今の痛がりようだ。大丈夫なはず

はないのだが、セルジオはそれをなのはに悟らせまいと必死に強がってみせる。

その甲斐あつてかなのはがサーチャーの映像を送ってきて、マルチタスクの一つにロストログアの入ったショーウィンドウを見つめるトーレの姿のイメージが映し出される。

トーレは感情を感じさせない顔でしばらくショーウィンドウを見つめていたが、やがてゆつくりと目をそらした。

『セルジオ・アウデイ、どこかで聞いているんだろう。お前に少し話がある』

「(セルジオくんにお話?)」

なのはがサーチャー越しに聞こえてくる声に首をかしげる。

『私はお前に用があつてな。隠れられたら面倒だ。どうだ、私の前に姿を見せる気はないか』

トーレは少しの間返答を待つかのように黙っていたが、なにも行動がないことに小さく息をついた。

『ところでセルジオ・アウデイ、お前たちはここにあるロストログアがなんだと思つている。まさか、唯の宝石だとは思つていないだろうか?』

「(どういう、事だ……?)」

『いや、もしかしたらそう思つているのかもしれないな、随分偽装も完璧なようだし、

なッ!」

セルジオの疑問に答えるように、トーレが思いつきりショーケースを殴り抜くと、ガラスとともに、『魔法陣』が砕け散った。

そして、今まで偽装されていたその姿と魔力が一気に漏れ出した。

(まさか、ケースとロストロギア自体への二重の幻影魔法で解析魔法を、いやそれよりもあの赤い宝石は……!)

セルジオが小さく息を飲んだ。

「レリック、だと……………」

思わず念話にすることも忘れてその単語が漏れ出した。

「(セルジオくん、レリックって?)」

「(高エネルギー魔力結晶体レリック。管理局がアレを見つけたのは過去二度だけだが、その時はいずれも大規模災害が起きてる)」

「(それって、つまり…………)」

「(簡単に言えば、質量兵器の超大型爆弾みたいなものだ)」

ぎりっとセルジオが強く唇を噛む。

『お前が一分以内に出てこない場合は、私もうっかりコイツの封印を解いてしまいかねん。そうなれば、どうなるかなどわかるだろう?』

「——ッ」

『私も無意味な殺傷は好まない。では、一分待とう』

そこまで聞くとセルジオはなのはからのサーチャーの映像を切って、まだ槍として展開していたゼファアーを杖代わりにして立ち上がる。

この件はトーレが本当に暴走させる気があるかなどは関係ないのだ。例え暴走させればトーレもただでは済まないため、実際にはさせないで脅しの言葉だけなのだとしても、市民を人質に取られた以上動かざるを得ない。

それが、八割がデマで、本当に暴走させる危険が二割程度だとしても、セルジオはその二割を捨て置くことはできなかった。

「(行くの?)」

「(ああ)」

「(私も行くよ。セルジオくんの怪我じゃ……)」

なのはが言いかけた言葉をセルジオが首を横に振って止めた。

「(高町は俺がトーレを引き付けているうちに市民を避難させてくれ。そのくらいの時間稼げる)」

「(そ、そんなの駄目だよっ！ 一人で行くなんて、そんなの……)」

きつと目を鋭くしてなのはがセルジオを見上げるようにして睨んだ。

「そんなの、死に行くようなものだよ！」

「(レリックを暴走させるわけにはいかない。誰かがやらなきゃいけないことだ)」

「(でも、でも……!)」

「(聞き分けてくれ高町。お前しかできないことなんだ)」

「(そんな、そんな言い方、ずるいよ……)」

なのはが唇を噛んで俯く。

「後は任せただ」

セルジオは、そう言つてなのはの頭をいつものように軽く撫でて、ゆっくりと歩き出す。

その足取りは軽いが、その先は確実に死へと繋がる道がある。今のセルジオの実力では、トーレには勝てない。ただ、速さで圧倒され、そしてきつと殺されてしまう。

(でも、私は——)

けれど、なのははセルジオを止められない。

なぜならセルジオの指示は正しいかったから。『未避難民を助ける』という目的は、なのはの『人を救う』という誓いそのものを体現したようなもので、だからこそなのははセルジオを止められない。

「セル、ジオくん……」

思わず呼んでいた名前を聞いてか、最後にセルジオが一瞬だけ、こちらを向いて、ふ、と綻ぶように笑った。

それが、なのはには、なんだか堪らなく悲しそうで泣いているようにみえて――

――あの子のこと、よく見ておいてあげてね。

――あいつのことを、見届けてやってくれ。

――これからも、セルジオのことをよろしく頼むよ。

声が、聞こえた気がした。

いつか、誰かとした話。

託してもらった、想いが。

――私の魔法は、泣いてる人を助けるための『素敵な力』として使いたくなってしまうんだ。

最後に、そう言った誰かの声を聞いた時、なのはの足は動き出していた。

「……何のつもりだ、高町」

「セルジオくん行っちゃだめだよ」

なのはがセルジオの背中に抱きついて、その歩みを止めた。

「わかってるのか、俺がいかなきゃレリックが……」

「だって！」

遮るように声をあげたなのはが、セルジオの背中にこつんと頭をぶつけて、呟いた。

「だって、セルジオくん、ずっと泣いてるんだもん。泣いてる子を、放ってなんかおけないよ」

セルジオが息を飲む声が聞こえる。

ずっと、なのはは感じていた。ふと、した時、会話をしている時、いつもセルジオはどこかとても悲しそうで、泣くのを我慢しているようだった。

それが、気のせいではなくない。だって、高町なのはもう一年近くずっと隣で、セルジオを見ていたのだ。

それが、気のせいではなくない。

「セルジオくんがき、私のことを完璧に信頼してないのもわかる。だって、いつつも大切な時は一人で行こうとするもんね」

抱きしめていた手をなのはがとくと、セルジオが力が抜けたようにへたり込んだ。

「ねえ、セルジオくん。私は、セルジオくんのなに？」

「高町は、俺の……」

なのはがセルジオの翠の瞳を見つめて問いかける。

「相棒……」

セルジオが細い声で答えると、なのはは優しい笑みを浮かべた。

「なら、私も一緒に無茶させてよ」

なのはが、セルジオの瞳を見つめる。

「だって、『それ』は私たちが守るものなんだよね？」

「あ……………」

それは、セルジオがいつかなのはに言った言葉そのまま。

「セルジオくんの背負ってるもの、私も一緒に背負わせて」

惚けたように、セルジオがなのはの瞳を見つめる。

「行こう、セルジオくん」

その瞳には、星のように綺麗な、強い光が宿っていた。



「二分、か……」

トーレが閉じていた目を開いた。

結局セルジオは現れなかった。つまり、それは同時に、ショッピングモールの未避難民の死亡へと繋がる。

（仕方ない。今回はこのレリックをドクターの手土産としよう。『ゼファー』は次回に……）

そう思ったトーレの戦闘機人としての聴覚がこちらへと歩いてくる足音を捉えた。

「遅かったな、セルジオ………」

トーレが足音の方へ目を向けて、目を細めた。

「誰だ、お前は」

「なのは。高町なのは。セルジオくんなら来ないよ」

「約束が違う。それともこれはわざとか」

「ねえ、トーレさんお話で解決することってできないのかな？」

戦うことしかできな

いなんて悲しいよ」

「愚問だ。私はドクターに従う。個人の意思などありはしない」

「ドクター？ それってあなたに命令をしている人なの？」

「ドクターは……」

トーレが思わず言葉を漏らしかけて首を振って、雑念を払う。その様子を見て、なのはが「これ以上お話はできなさそう」と結論づける。

「まどろっこしいのはやめにしよう。私はお前を打ち倒してセルジオを追う。もし奴が逃げていれば……」

「どうするの？」

「私がさっき何と言ったかは覚えているだろうか？」

「そっか、なら」

白いバリアジャケット姿のなのはが目を鋭くしてトーレを見据えると、レイジングハートの砲身をトーレへと向ける。

「あなたにはなにもさせない！」

（あの砲撃が来るッ！）

瞬間、トーレが《ライドインパルス》を発動したが、それよりも早くなのは、レリツクに向けて魔法を放った。

赤い宝石の周囲に桜色のシールドが展開される。

「あなたが優位に立ててるのはそのロストロギアを持つてるから！　じゃあ、それを使えなくしてしまつたらいい！」

「まさか、最初からこれが狙いかつ！」

「ううん、それだけじゃないよ！」

なのは再びトーレに向けてレイジングハートを向けると威力を引き換えにした代わりに、高速で放てるショートバスターを砲撃する。

それをトーレはライドインパルスの加速で避けて、なのはに襲い掛かろうと肉薄し、後数十センチというところで、桜色のバインドに絡め取られる。

「バインド……！　だがこんなもの数秒もあれば……！」

「いいや、欲しかったのはこの数秒なのさ、トーレ」

頭上から男の声が聞こえた。先程まで、トーレと顔を合わせていた男の声が。

「セルジオ・アウディツ！」

トーレがその名を呼ぶと、セルジオはふつと笑って右手をトーレの背中に、片方をなのはの左腕に触れた。

「何を——」

「少し、遠くまでデートと洒落込もうじゃないか、戦闘機人トーレ」

セルジオの両腕に環状魔法陣が展開され、そして三人を包んで強い光が放たれて、思わずトーレは目を閉じてしまう。

「トランスポーター・ハイ
長距離転移」

次に、トーレが目を開けた時、そこは海の上であつた。

「なんだ、これは……」

驚きの声を上げるトーレから少し離れた位置に転移したセルジオは淡々と話し始める。
る。

「正直、あの場所ではお前に利がありすぎた。モール内は狭いし、未避難民のせいで俺たちは満足に砲撃も撃てない」

「だから、私がセルジオくんに聞いたんだ。私たち三人をどこか遠くにやれないかなつて。そうしたら、できるけど時間がかかるっていうから」

途中でなのはが言葉を引き継いで、セルジオの顔を見上げた。

「だから、高町に時間を稼いでもらった。一分ギリギリ、限界まで時間を使って、後はお

話をしたりしながら、な」

トールは驚いているが、これはおかしい話でも、突拍子もない話ではない。クイントも言っていたはずだ、セルジオは転移も使える、と。

ただ、それは戦闘に使える技能ではなく、トールの持っている『セルジオ・アウデイの戦闘データ』には、そんなデータはなかったというだけ。

「お前の優位はなくなつたぞ、戦闘機人トール」

「セルジオ・アウデイ……！」

「ようやく、感情らしい感情が見えたな」

セルジオがゼファーをくるりと回して、穂先を自身を静かに睨むトールへと向ける。

「行くぞ、高町。お前を信じる」

「うん、背中を任せて！ やろう！ 二人で！」

なのはがにつこりと、セルジオは薄く、笑みをかわした。

「行くぞ、ここからが俺たちの『全力全開』だ」

星の光

ミツドの海上で二つの光が弾けた。

ブリッツァクション
「加速機動ッ！」

「《ライドインパルス》」

加速したセルジオの槍とトーレの刃がぶつかり、そして弾かれる。

セルジオは加速を発動したまま足元に足場となる魔法陣を展開、空中での擬似的な踏み込みを行い体重を乗せた突きを放つ。

しかし、トーレはそれを予測していたかのように回避、空中で旋回しながら首を狙ってくる。

セルジオはそれを待機させていた短距離転移を発動して、背後に回り込むがトーレは瞬時に高速で移動して、カウンターの蹴りを叩き込んでくる。

流石にそれはかわしきれなかったセルジオは、トーレのエネルギー刃、インパルスブレードをゼファアで受け止める。

「ぐっ——」

みしり、と骨が軋む音が聞こえた。

セルジオの技量では、トーレの音速に近い速度の蹴りの衝撃を完全に殺すことはできない。ある程度は受け流せたとしても、少ないくない圧力が体に生じて、トーレとの戦闘で生じた傷にさらなるダメージを与えて行く。

「どうやら、気合いは十分でも体の方が持たんらしいな、セルジオ・アウディ」

ちら、と蹴りを受け止めている槍の向こうに見えるセルジオの白のバリジャケットに目をやるトーレ。どうやら、一度は止まっていたらしいが今の衝撃で再び傷口が開き出血し始めたらしかった。

トーレが静かにセルジオを睨む。

「お前では私には勝てない。速度も、技量も私の方が上だ」

「ああ、そうだな。そのどっちもお前は俺より上だろう」

ぎり、と体の痛みを無理やり押し込めながら、セルジオが唇を吊り上げて無理やり笑みを浮かべてみせる。

「だから、二人で戦うんだろう」

トーレの蹴りを受け止めていたセルジオが霧散し、そして、トーレへといつか見た桜色の高速砲が唸りを上げながら向かってきた。

多少威力は落ちていたとはいえ、その速度は一級品。それも死角から放たれた一撃である。通常なら容易く避けられるはずはなく、セオリーに従うならば防御するのが一般的だ。

「なるほど。だが、見えている」

だが、トーレはそれを視認してからでも避けられる性能がある。

ライドインパルス的高速移動により姿を震ませながら見事かわした敵の姿に、レイジングハートを構えるなのはの眉が少し寄せられる。

「あんなにひよひよい砲撃避けられたら困るなあ……」

「まあ相手は俺のゼロコンマの転移に速攻で対応してくる化け物だ。仕方ないだろう」

トーレとの戦闘域から離脱し、一時的になのはの隣に避難してきたセルジオが槍を構える。

「セルジオくん、怪我はどんな感じ？」

「全く問題ない……と言いたいが、流石に少しきつい。長時間戦闘は避けたいな」

そう言うセルジオの胸元の傷口からの血が、バリアジャケットを伝って海に落ちていく。

なのはが見れば額には玉のような汗をかき、顔もどこか青白い。現在進行形で血と体力を失い続けるセルジオは、長引けば長引くだけ思考は鈍化し、体も動かなくなる。あ

と十分もすれば意識が飛んでもおかしくないだろう。

そうなれば今でさえ追いつくのがやつとのトーレに万が一にも勝つ機会はなくなってしまう。

「なら早く決着をつけて病院に行かなきゃね。また倒れられたら困るし」

「はいはい、頑張りますよ——ほら相手が来るぞ！ 避ける高町！」

二人が話しているとライドインパルスを放ったトーレが突っ込んで来るが、あらかじめそれを予見していたセルジオの声で、旋回しながら回避する。

（やはり追いかけてくるのは俺か）

空を飛びながら解析魔法にかすかに感じるトーレの反応。どうやら、トーレにはセルジオをどうしても殺さなければならぬ理由があるのか。

「セルジオ・アウディツ！」

「いい加減にしろ戦闘機人ツ！」

頭上から落下速度を重ねて勢いをつけたエネルギー刃の振り下ろしを、槍の穂先の部分で滑らせるようにして流すと、開いた右腕を握る。

ゼファアのシステムとセルジオの記憶データが接続され、放つべき技を解析、使用者の体に適応できるように最適化し直した。

「模倣——^{トレス}——^{アシチェイン・オックス}繋からぬ拳」

放たれる拳は間違いなくセルジオの撃てる技の中でもトップクラスの破壊力を内包しており、当たりさえすればトーレにも確かなダメージを与えられるだろう。

「言っただろう、お前の戦闘データは全て持っているよ！」

だが、トーレには当たらない。

セルジオを上回るスピード、加えてその戦闘データにより、彼女は対セルジオにおいて絶対的な天敵となっている。

繋がらぬ拳を体を半身にして避けたトーレはそのままの加速を保ちながら手首のエネルギー刃と手刀によってセルジオの首を狙う。

その速度は音速を超え、人間の動体視力すら振り切つて、そのままセルジオの無防備な首を跳ね飛ばそうとする。その一撃は必至。トーレの戦闘データにあるセルジオではどうあがいても避けきれぬ無慈悲な刃。

(殺^とった)

トーレが相手の死を確信して、その思考にセルジオが割り込んで来る。

「それはもう視^みた」

がいん、と手刀と首の間に左腕が挟み込まれ、銀色のガントレットが受け止めた。

その事実^{じじつ}にトーレの顔が驚きに染まり、息を呑んだ。

「十分、いや、十五分くらいだな」

「なに?」

「俺たちが戦った時間。たぶん、まあそんなくらいだろうな」

ぎりぎりどガントレットを必死に抑えるセルジオの顔が上がり、トーレの金色の瞳を見つめる。

「それだけあればお前の戦闘データは充分だ——ゼファー、フルドライブ全力稼働」

トリガーワード起動句の詠唱に応えて、ゼファーのシステムが今まで設けてあつた演算上のセーフティを完全撤廃し、内蔵された機能全てを起動させた。

「——イグニッションッ!」

ゼファーが今までに集めた戦闘データの全てを解析、さらにトーレとの戦闘に生じた攻防のデータを無理やりセルジオのマルチタスクの一つから引つ張り出すと、さらなる解析と模倣により、これからの未来を予測する。

シミュレート・アナライズ「模倣解析————百四十八手」

セルジオの瞳の翠に、白い光が混ざる。

それに気づいたトーレは瞬時に離脱しようとして、行く手を遮るようにして現れた桜色の誘導弾に体を弾かれる。

トーレが腹部への意図せぬ一撃に苛立たしげに舌打ちして、再び高速移動をしようとするが、今度はあらかじめわかつていたセルジオが加速で回り込む。

「終わりは見えた、付き合ってもらおうぞトーレ」

「戯言をッ！」

二人が、再び加速する。

白のセルジオ、紫のトーレ。

時にはその周囲で桜色の誘導弾が空を飛んでトーレの動きの障害や、セルジオのカーブを行う。

海上で無数の残像を残しながら何度も武器を交える姿は、まるで真昼に輝く流れ星のようにも思えた。

そんな美しさに反する荒々しきで、トーレとセルジオが吠える。

「二十三、四、五、六、七アッ！」

「ぐっ、なめ、るなッ！」

トーレがハイキック気味の蹴りを放つが、セルジオはそれをわかっていたかのようにかわして、石突き部分で脛を狙ってくる。

「八、九、三十手ッ！」

（なんだ、これは。ゼファアの予測機能か、いや、しかし、もうこれは既に一分以上の時間か——）

「三十一！」

セルジオの足がトーレのガードをすり抜けて腿のエネルギー刃もろとも蹴りつける。

トーレの体がふらりと空中でよろめき、僅かにスピードが落ちる。

「――、三十二一！」

一瞬眉を寄せたセルジオだったが、すぐに槍を袈裟懸けに振り下ろそうとする。だが、トーレは両手のインパルスブレードと足首のエネルギー刃を強く光らせると素早くかわした。

（今の……なら、あのコンビネーションが使えるか）

トーレと斬り合うセルジオの脳裏に黒髪やかましい友人の顔が浮かんでくる。その姿を首を軽く振って消し去ると、マルチタスクを一つ増やして、なのはへと念話をつないだ。

「(高町、今から作戦をデバイスに送る。正直ぶつつけ本番に近いが……やれるか?)」

「(……………これはちょっと難しいコンビネーションだね。要求タイミングもシビアだし)」

「(高町ならできると信じてるぞ)」

「(そう言えばなんでも許してもらえないと思わないことっ。でも、いいよ。任せて)」

「(すまん、助かるよ)」

少し悩むようなそぶりを見せながらも最後は快諾してくれたのはに短く感謝の意

を述べると、目の前のトーレへと意識を戻す。

(勝ち筋は見えたが……問題はこの予測が詰みの状況まで維持できるか、だな)

槍を振るい、時には攻撃をかるうじてかわしながら、薄く息を吐いて、歯を噛み締めた。ただ、先程から頭がひどく痛んでいて、そうしなければ耐えれそうになかったのだ。(やるしかない。やって、勝つ)

セルジオはまた小さく息を吐くと、トーレとの攻防をしながらその高度を僅かに下げ、指定のポイントへとトーレを誘導する。

後一撃くれば間違いなく撃墜される、という状況で相手をおびき寄せながら、防御を続ける、しかも格上相手に、という無茶とも言える事を、今まで培った技量と、先読みで無理やり可能にする。

「百四十五、ろ——ぐつ」

だが、そこまで来てセルジオのゼファーによる予測の限界よりも早く、セルジオの限界が訪れてしまう。

槍の防御をすり抜けた拳が、セルジオの肋骨に突き刺さり、切り傷と戦闘機人の筋力による拳打を叩き込んだ。

セルジオの体が、がくりと折れる。

「残念だったな、セルジオ・アウデイ。その怪我がなければ、私に追い縋れたかもしれん

な」

トーレは無慈悲にセルジオを見下ろす。

だが、セルジオはそこで面を上げると、にやりと笑う。

「いいや、これでいいんだよ、なあ高町」

桜色が、空を翔けた。

「デイバインバスター！」

『Divine Buster full power』

「しまっ——」

風になのはの声とレイジングハートの声が運ばれて来て、トーレの聴覚機能がそれを捉えた時には、桜色の壁が視界を埋め尽くすようにして迫って来ていた。

『デイバインバスター・フルパワー』

なのはの代名詞、『デイバインバスター』のバリエーションのひとつ、大幅に使用魔力が増えるものの射程範囲を拡大する、広域直射型砲撃魔法である。

「舐めるなッ！ 《ライドインパルス》ッ！」

だが、トーレはその広域魔法を瞬時に刃にエネルギーを送り、瞬時にトップスピードまで持つていくと、見事になのはの砲撃をかわしてみせた。

「はあ、はあ、セルジオ・アウディは……」

僅かに息を切らして周囲を伺うトーレ。しかし、砲撃が放たれた場所も、砲撃を撃ち終わつたなのは隣のセルジオの姿はない。

それどころか、セルジオの姿など、この海上のどこにもありはしなかった。

まさか逃げたか、とトーレが疑つた時、足元の海が僅かに脈打つたような気がした。

なんだ、と真下に目を向けようとして、海中から、ほとんど零距离で砲撃魔法が放たれた。

ズ、と海水を消しとばしながら向かつてくる魔法を避けられるはずもなく、トーレの体が真下からの衝撃に跳ねあげられて行く。

「流石にお前のデータには俺が海中に入った、なんてものはなかっただろう」

その姿を見て、セルジオが海の中から飛び出して来る。

セルジオのやった事は簡単。ただ、なのはの砲撃をかわすために海中へと転移して、トーレの真下で潜んでいただけ。

トーレがセルジオの攻撃を正確に読んでくるのは、彼女がセルジオの今までの戦い方を熟知しているから。なら、今までにセルジオが戦つたことのない場所で戦えば、その不意をつく事はできる。

セルジオは『地上本部』所属の、『航空魔導隊』である。その任務は主に、ミッドチルダの犯罪に対応する事であり、その中でセルジオは一度も『海上』での戦闘などをした

ことがない。

つまり、この『海上』という場所に限り、セルジオはトーレの不意をつく手を取ることができない。

以前士郎が言ったように、力が足りないから、辺りにあるものを使って補うことこそが、『セルジオ・アウデイ』の戦い方だ。

「ぐ、がああああつ、ライド、インパルス……！」

トーレは吹き飛ばされながらもライドインパルスを無理矢理に発動、砲撃によってダメージを負った体に鞭打って白い砲撃から抜け出した。

（この厄介さはセルジオ・アウデイ単体のものではない、鍵となっているのは、あの少女……！）

強い視線でなのはを睨むトーレは、インパルスブレードにエネルギーを送り込みなのはへと迫る。

（ここいつから先に墮とすッ！）

十メートル近い距離を一気にトーレが縮めて来るのを、なのはが見て慌てた様にシールドを張る。

「そんなものっ！」

トーレはそれを旋回してシールドのない背中へと回り込むと、エネルギー刃を振り下

ろし——

「バインディングシールド！」

目の前に現れた桜色の盾を殴り抜いてしまい、それをトリガーにして無数の鎖がシールドから出現してトーレを絡め取った。

「これは——」

「やっぱり、明確な死角があればそこを攻撃したくなっちゃうよね」

「貴様、わざと……！」

少し頬を緩めたなのは鎖に絡め取られたトーレを置いて、はるか上空まで上がっていく。

「言っただろ、終わりは見えたって」

「セルジ——」

セルジオがブリツツアクションで加速してトーレへと迫りながら、槍の穂先へと魔力を充填していく。それは、白く、白く、ただただ、眩しいほどに白く輝きながら魔力を刃の一点に収束する。

「白光——」

セルジオが白く光る槍でトーレの絡め取られた右腕に狙いを定める。セルジオの中に、模倣するべき、師匠とも言える、男の大きな背中と、その槍術が映し出される。

「——一刃ッ！」

斬、と槍が振るわれてトーレの右腕、右腿、右足首のインパルスブレードを一太刀で断ち切ってみせる。

「なん。だと……………」

「これで、加速はできないだろう、トーレ」

トーレが、息を呑んだ。

トーレの先天性技能《ライドインパルス》は、両手首、両足首、両腿の合計八箇所にあるエネルギー刃『インパルスブレード』にエネルギーを送り込むことによつて、加速推進を行うものだ。

つまり、加速機能を付与するセルジオのブリッツアクションと違って、刃がなければ何もできないのだ。

「貴様、私に情けを……………」

「俺の槍でお前の腕を切り落としてもよかったが、それで死なれても困るからな」

短く答えるセルジオにトーレが悔しげに顔を歪める。

その視線を受けながら、セルジオは先ほどの一撃で空になりかけている魔力を集めると、バインドを抜け出そうとするトーレを槍で押さえ込んだ。

ぎり、と左腕に残るとインパルスブレードとセルジオのゼファアールが今日幾度目かの鏝

迫り合いを起こす。

「なに、を……………」

「足止めだよ、お前を倒す準備ができるまでの、な」

「まさか——！」

頭上で、強い光源が発生した。

桜色の巨大な球体、それは辺りへと散った未使用魔力を根こそぎ集めて、収束してさらに大きさと、輝きを増していく。

その姿はまるで、スターライト星の光。

そして、それをトーレへと狙いを定める少女が一人。

「ぶちかませ、高町」

セルジオが声をかけると、上空のなのはが薄い笑みを浮かべた。

「行くよ！ 私の全力全開！」

その声に応えたかのように、なのはの周囲に魔力光と同色の環状魔法陣が現れた。

「スターライト——」

『St arll igh t B re ak er』

「——ブレイカー！」

星が落ちたかと思う様な衝撃とともに、なのは最大の収束砲撃魔法が放たれて、トーレとセルジオに迫って行く。

それを解析魔法で感じながら、セルジオが最後にトーレへの表情を緩めた。

「じゃあな、トーレ。もう、会わないことを祈ってる」

「————」

そして、トーレの返答を聞くことなく掻き集めた魔力で待機させていた短距離転移を発動させた。

目前からセルジオが消え失せて、自由になるトーレの体。悔しさを唇をかみしめて押し込めると、《ライドインパルス》を発動し、逃げようとする。

「間に合わない——」

だが、それよりも早く桜色の星がトーレを襲う。その一撃を、インパルスブレードが半分しかない今のトーレでは振り切れない。

星が落ちたかと思う様な衝撃をその身に受けながら、魔力ダメージで消えゆく意識の中で、一つの言葉をトーレは繰り返す。

(セルジオ・アウデイ、私は貴様を——)
それを最後に、トーレの意識はなのはの砲撃に吹き飛ばされた。



後日談、というか今回の一件について。

ショッピングモールに展示してあったロストログア——実はレリックだったと判明したものの——を強奪しに来た襲撃犯に対し、その日、偶然、たまたま、二人で遊びに来ていた『セルジオ・アウデイ』と『高町なのは』は、これまた偶然襲撃犯と交戦、そして、止むを得ず、管轄の魔導師の代わりに撃退した。

ということになった。というかそれ以外に説明もできないので、そう処理された。

一応非番扱いとはいえ、二人が大きな貢献をしたのは事実であるため、この功績は三課のものとなることに。

また一歩間違えば大災害となっていた事件である。そのことから二人には昇進の話

も出ているらしかった。

まあ有り体に言えば大金星。

二人は直々に地上本部長に劳いの言葉をかけられたりしたのだが、では、その二人がなにをしているのかというと。

「なあ高町、書類仕事くらいさせてくれ。もうすっかりよくなってるよ」

「だーめでーすー！　お医者さんも言った通り絶対安静だよ！」

「いやもう大丈夫——」

「えい」

「はぐつ、ぐぐぐ……」

「ちよつと小突いただけでそんなに痛がってるのに大丈夫も何もないよ」

がつくしとセルジオがベットのうえで肩を落とした。その隣ではなのはが手を腰に当ててめつ！　とセルジオを叱っている。

しばらくの間不満そうな表情を浮かべていたセルジオだったが、まあ後でゼファー經由で三課のデータを持ってくればいいか、と思い直して大人しく従っておいた。

「わかったよ、今日は大人しくしとくことにする」

「なら、よしとします」

なのはが安心して様に緩く笑うとベットの隣に置いてある椅子に腰掛けた。セルジオがぼんやりと窓の外を見ながら、それにしても、と言葉を漏らす。

「高町の収束砲撃凄かったなあ……。トールレ死んだんじゃないかと思っただぞ」

「だ、だって、それはセルジオくんが一番強い攻撃、とか言っただからだもん！」

「いや、確かにそうだけどあれは流石に、なあ……。？」 人間の出せる破壊力じゃないと

いうか……」

「ふうん、セルジオくんは魔力不足で気絶したのを運んでくれた相棒にそういうこと言うんだ。ティーダさんに愚痴言いに行こうかな」

「オーケー、訂正する。だから、ティーダはやめよう、な？」

「うーん、どうしようかなあ……。なのははさっきの言葉で深く傷ついたからなあ」

「わかった。退院したら何か食事にも連れて行ってやるから」

「ほんど？ 約束だからねっ」

「はいはい」

苦笑いをこぼすセルジオをよそになのはは機嫌良さそうに目を細めてにつこりと笑う。その顔が、とても嬉しそうで、楽しそうで、セルジオの方もなんだか少しだけ心が上向きになるのを感じる。

だからか、なんとなく、なのはの頭へと手が伸びた。

「ありがとう、高町」

「へ、と、とつぜんどうしたの」

「いや——」

なんでもないよ、と言おうとしてこの前の一件の時なのはと交わした会話を思い出
す。

(俺の背負ってるものを一緒に、か……)

ふ、とセルジオが一瞬視線を落として、なのはの頭から手を離れた。そして、空を見
上げて、少し遠い目をした。

「俺、さ。昔、ある人と約束したことがあってさ。その日から俺は、その言葉をどうやっ
たら守れるか考えてたんだ」

そして、ぼつぼつと語り始める。

「でも、それは難しくくて、だから俺は今まで必死に努力してきたんだ。向いてないって言
われてもいろいろやっつたし、バカじやないかって言われたこともある」

じつとセルジオが太陽を見つめる。

「俺は、みんなを助けたい。泣いてる人も、悲しむ人も、これ以上増やしたくない。みん
なに、笑顔でいて欲しいんだ」

「素敵な夢だね」

「そう、かな……」

そこまで話して、セルジオは窓から目をそらしてなのは方へ、柔らかく、少しだけ嬉しそうな笑顔を向ける。

それは、なのが始めてみる、本当に優しい、セルジオの笑顔で。

「だから、その、これからもよろしく頼む、高町」

「うん。よろしくね、セルジオくん」

そんな、セルジオの笑顔になのはも満面の笑みを返して、手を差し出した。

セルジオは、一瞬戸惑った様子を見せたが、やがてまた柔らかく笑うと、同じように手を差し出して、自分よりも小さな、だけど自分を勇気付けてくれた大切な少女の手を、優しく握り返した。

閑話

ゼスト・グランガイツ。

航空魔導隊三課の部隊長であり、言わずと知れた地上本部の超一流の魔導師。いわゆるストライカーである。

寡黙でありながらも、腕はたち、部下にも、またそれ以外の局員にも慕われている。実は、一般市民にもひっそりとファンクラブもあつたりするらしい。

まあ詳しくはクイントが以前話していたのを見て欲しい。

そんなゼストだが、彼には一人親友とも言える男がいた。
レジアス・ゲイズ。

ゼストやセルジオの所属する『地上本部』の総司令であり入局は既に30年を超えるベテランである。魔力資質はないものの、その手腕で中将まで登りつめた男である。だが、最近ではどこか黒い噂が付き纏うこともある。

武装隊員らしく引き締まったゼストとは対照的な、でつぷりと肥えた体。眉にはいつ

も険しいシワが寄っていて、いかにも気難しい中年男性といった風貌である。

その事をゼストに言えば「昔はもう少し痩せてたんだがな……」と遠い目をしながら答えてくれるに違いない。

武官のゼスト。文官のレジアス。

あまりにも対照的に思える二人だが、いくつか共通点も存在する。

それは、二人が「地上の平和」を見据えていて、人によつては「英雄」と呼ばれることもある、という点だ。

二人は英雄と呼ばれ、同じものを目指している。故に、例え黒い噂があつたとしてもゼストはレジアスを信じてるし、レジアスもゼストに信頼を置いている。今でもごくたまに休みが合えば、酒を組み合わすことがある、無二の親友なのだ。

そう、ちょうど今のように。

「ほら、飲めゼスト。久々に会えたのだ」

「悪いが遠慮しておくレジアス」

「何、俺の酒が飲めんというのか」

少し顔を赤くしてめんどくさい絡みをするレジアスに、ゼストは苦笑いを返す。

「明日は朝早くにセルジオへの稽古が入つてな。流石に、二日酔いになるわけにはいかん」

「うむ、なら仕方ない、か」

「だがまあ、やはり明日に響かない程度なら付き合おう。一杯頼めるか？」

「ふ、そうだろう。やはりお前ならそういうだろうと思っていたのだ」

少しだけ残念そうに引き下がろうとしていたレジアスが頬を緩めてゼストへと酒を注ぐ。とくとくとくとくとコップを満たしていく半透明の液体をゼストが一口煽った。

「にしても、セルジオと、か……」

レジアスがつまみとして頼んでいた焼き鳥を頬張りながら目を細める。

「あやつはお前から見てどうだ？ 使えるか？」

「魔力は低いがそれを補う頭がある。この前も金星を挙げてくれた」

「……あの、『戦闘機人』とやらを捉えた件だな」

「ああ。相棒と二人よくやってくれたよ。大したものだ」

「ほほう、ならばこれからは俺もガンガン使っていくとするか」

「やめてやれ。見舞いに行つた時は、『正直もう二度と戦いたくない』とボヤいていたからな」

「かかか、流石のセルジオでも、か」

「流石のセルジオでも、だ」

含むように笑つて二人はまた酒を煽る。レジアスの顔がまた僅かに赤みを増すが、ゼ

ストの顔はまだほとんど変わっているようには見えない。

「そうか、しかしセルジオがなあ。……どうだ親として鼻が高いのではないか、ゼスト」
「……………いや、俺は奴を引き取っただけだ。親として、何かをできたとは思えん」

「それを言えば俺とて同じだ。娘にはいつも苦勞をかけっぱなしだ」
「オーリスか。今年で幾つになるんだったか」

「25だ。今は陸士部隊で指揮官補佐をしている。年々死に別れた女房と似てきて困ぞ、本当に」

「そちらの方は仲が良好そうで何よりだ」

ゼストが薄く笑って酒をまた一口含み、自嘲気味に笑みを浮かべた。

「あいつは、セルジオは、あいつは俺の事をどう思っているんだろうな」

「嫌つてはおるまい。養父となつてもらった恩を忘れるような人間ではないだろう、あれは」

「どうだかな。あいつは俺に迷惑をかけまいとしているようにも見える」

それに、とゼストが言葉をつなげる。

「セルジオにとつての親は、『彼女』だけだろう」

「ゼスト……………」

「俺に代わりは務まらんさ」

ゼストが手の中の半ばほどまで飲み干したグラスを見つめる。

半透明故に、鏡のようにゼストの顔を映し出すことはないが、今自分はさぞ情けない顔をしているに違いないと、ぼんやりと思う。

「ゼスト」

ゼストが顔を上げれば、そこには酒を片手にこちらを据えるレジアスの姿。

「飲め」

「さつきも言ったが俺は……」

「飲め」

レジアスは先ほどのように引き下がらず、ただ淡々とゼストを見つめる。

子どもに酒の味はわからない。なぜなら酒を飲む事は大人の特権だからだ。弱い人間は現実から目を背けるために、忘れるために酒を飲む。酒に飲まれる。自分を忘れたがる。

それは常識に照らし合わせれば、いい事だとは言い難いのだろう。でも、大人にはそれが必要な時もある。

そして、レジアスは酒を飲む事はいい事だとも、悪い事だとも言えないが、少なくとも酒を飲むという行為が必要な時もある、という事を深く理解していた。

だから、レジアスは短く告げる。

「いいから飲め。ゼスト」

「……まだ半分ほど残っている。それからでいいか？」

「ふん、急ぎはせん。今日はとことん付き合ってもらうからな」

「手柔らかに頼む」

親友のぶつきらぼうな気遣いを察したゼストは困ったように笑いながら、ぐいと酒を飲み干した。

直接何かを言うわけではない。だが、その姿をなのはあたりがみれば、なんだかクロノとセルジオに似てる、というような友情関係が二人の間にはあった。

もし、この二人の共通点があと一つあるとすれば、それにはおそらく「子どもとの距離を測りかねている」とかそう言ったものが足されるのだろう。



瘦躯の男はただ静かに目のモニターを見つめていた。椅子に深く腰をかけ、ただ静かに。

一見興味なさげに見えるが、実際に彼と顔を合わせれば、濃い紫の長髪の向こうに輝く金の瞳が愉しげに歪められている事を感じ取ることができるだろう。

「ウーノ、いるかね」

「はい、なんででしょうかドクター」

男が声をかけると、ウーノ、と呼ばれた女性が側に現れる。

「トーレはどうしてるかね。確かドウエに助け出されていたはずだが」

「はい。既にこちらに帰還して治療とパーツの交換も終了しています」

「その割に姿を見ないね」

「それは……」

言い淀むトーレへと男が首だけを隣へと向ける。

「問題と言うほどではないですが、少し以前になかった傾向が」

「ふむ、何か精神的に問題でも生じたかい？」

「それが、ボディの修復が終わるとすぐに一言『私をセルジオ・アウデイと戦わせろ』と」

「……それで君は」

「命令がない以上は許可は出せないと仰いました。すると、それ以来トーレはトレーニングルームで一人で鍛錬を」

「———そうか」

「ドクター？」

ウーノが突然目を閉じて俯いた男を訝しく思ったのか、僅かに眉を寄せて名を呼ぶが、全くなんの反応も返ってこない。

しばらくウーノはそのまま黙って男のそばに控えていたが、やがてその耳が低く響くような声を捉え始める。

「そうか！　　そうなったかトーレ！　　随分と人間らしくなつたじゃないか！」

男が、嗤う。

声を上げて、とても愉しそうに。

「それこそが人間だ！　　人だ！　　正しい心の形だ！」

せつかく人の心があるのだから機械のままではあまりにも勿体無い！

嗚呼、そうだトーレ！　　君の中に芽生えたその感情、それこそが———」

くは、と金の瞳を光らせながら男が、嗤う。

「———欲望というものだ」

しばし笑い続けていた男は、やがてそれを小さなものにしながら、再び目前のモニ

ターへと目を向けた。

そこにはトーレの記憶内から抽出された、ある魔導師たちとの戦闘が映し出されている。

「ウーノ、この映像を見てどう思う？」

「どう思う、とは？」

「何でもいい。君の感じた事を述べたまえ」

言われてウーノは映像をしばらく見つめて、命じられた通り自身の考えを述べ始める。

「トーレの敗因は幾つか挙げられます。一つは不用意に会話を選びすぎた事。一つは標的を侮り付け入る隙を与えた事。一つは遠距離型の魔導師に対する警戒が足りなかった事……後いくつか挙げられますがどうなさいますか？」

「いやもう充分だよ。では、今回の標的に関してはどう思う？」

「今回の標的、ですか」

ウーノの視線が映像の、翠の瞳の槍使いへと向かう。

「どう、と言われても典型的な前衛型の魔導師だと思います。短距離転移や解析には目を見張るものがありますが、それ以外はどれも凡夫の域を出ません」

「それで？」

「所感ですがもう一人の魔導師と、ドクターの『ゼファー』がなければトーレに追いすが
る事すら出来なかつたかと」

「……そうかね」

男はウーノの話を聞くとゆっくりと腰をあげる。

「デバイスタイプZー3X、『ゼファー』。変形機構は槍と砲撃の二つだけ。だが、その特
色はその内部システムにある」

男が軽く手を振るとモニターの映像が消えて、代わりにゼファーの設計図が映し出さ
れた。

「行動予測プログラム。相手の戦闘パターン、過去の戦闘データを解析し、集積、演算す
る事で擬似的な未来予測を可能にするシステム。そして、行動模倣プログラム。集積し
たデータを元手に、術者の体に合うように再定義し直し、再現するシステム。この二つ
がゼファーには内蔵されている」

「どちらも上からの指示によって制作されたものだったと記憶しています」

「そうだね。自分で言うのはアレだが、私としては中々の出来だったとは自負してい
るよ」

だが、と男が言葉を続ける。

「正直私はこれらは失敗作だと言わざるを得なかつたと思つていたんだ」

ゼファーに内蔵されている二つのプログラム。これは集積された無数の戦闘データ、その全てを演算するところから全てが始まる。

一から十まで、映像の端から端まで、全ての動きを統計や、バトルスタイル、果ては細かい気象条件その細部に至るまでも、計算し、検討し、そして相手の動きを読み切る。普通に考えて、そんなことが戦いながらできるはずがないのだ。

良いところ、脳の負担と引き換えに二、三秒先の未来を見ることと、簡単な魔法式をちよつと真似するくらい。

「上の方々はこのシステムを使って一般局員をストライカーレベルまで引き上げたかったのだろうけども、そんなのは不可能だよ」

「だから、ゼファーの引き渡しを渋っていたのですか？」

「そうだね。もし渡したら渡したで汎用性を高めるシステムに落とし込め、とか面倒くさい依頼も来そうだったしね」

また男が手を振るとゼファーの設計図が消えて、今度はトーレとほぼ互角に攻防を繰り返す槍使いの映像へと切り替わる。

槍使いは速さで劣ってはいるものの、トーレの動きを、全て事前にかわして、時には背後からの攻撃を振り向くことなく反撃をしている。

その目は、明らかにトーレを追えていないはずなのに、トーレと互角に渡り合う少年。

「だが、彼はそれを使いこなした。しかも、百四十八手、秒数にすれば九十六秒の間、重傷を負いながら、だ」

く、と男が声を漏らす。

「彼の事を色々調べて見たよ。経歴、家族構成、そして、生まれまで。いや、優秀な助手がいて助かったよ、以前捨てて良い、と言った報告書まで取っているとはね」

ウーノが男を見せて来た報告書が、以前潜入中の妹——ドゥーエが送ってきたものである事に気付いた。

男が資料をパラパラとめくりながら、くく、と愉しそうに口を歪める。

「はつきり言つてどれも異常。私をして、狂っているとしか言えないような経歴ばかりだ」

そして、そこで耐えきれなくなったように、再び狂笑した。

「故にこそ面白いッ！」

男が手に持っていた書類を投げ捨てると、無数の紙が空へと舞って、雨の如くあたりへと落ちていく。

「他の魔導師が？　ゼファーが？」

否！　極めて否だ！

我が娘、ウーノよ！

始まりはそこではないのだ！」

男が、嗤う。

髪をかきあげて、空を見上げて、ただただ声高に。

「あの狂った意思！ あれこそが全てを突き動かしたのだ！ あの少女の力を！」

ゼファアの力を！ あの少年の異常とも言える欲望がッ！」

男の嗤いを止めるものはいない。

共感するものも、反論するものもまたいない。

「故にこそ、喝采を送ろう。君たちが、トーレを下したという現実に」

恍惚とした表情で、男が呟いた。

「ウーノ、上へのゼファアの報告は遅らせてくれ。私がまだ実験したいことがあるとでも伝えてくれれば良い」

男が、白衣を翻してモニターの前から去っていく。

その顔は、歪んだ笑みに彩られている。

「嗚呼、君たちの欲望を見せてくれ、『高町なのは』。そして——」

男が金に輝かせた目を背後のモニターにやって、そこに移る少年の姿を捉えて、小さく笑みを漏らした。

「——セルジオ・アウデイ」

其の男の名『ジェイル・スカリエッテイ』。
アンリミテッドデザイア
『無限の欲望』の二つ名を持つ狂気に身を置く男。

彼らが出会うのは、未だ遠く——

二章 新暦67年 《星に思いを》

親というもの

「セルジオくん」

「なんだ」

三課のオフィスでなのはがじとつと睨む。

「なんでここで仕事してるの」

「ここが俺の職場だからな」

「昨日お医者さんから安静だって言われたよね」

「ああ、だから安静に仕事してる」

「ぜんぜん安静にしてないよ!」

それから逃げるようにセルジオは書類を片手にオフィスの中をウロウロ歩き回り、なのははそれを小言とともに追いかける。

「なんでそんなに自分のことに無頓着なの? みんな心配してたんだからね」

「はいはい」

「なのにセルジオくんはいつつもそうやって無茶ばかりして。見てることちがハラハラするのわかってる？」

「はいはい」

「それに最近なんか隠してるでしょ。ちゃんと話してよ」

「はいはい」

「もー！ こっち向いてってば！」

「はいはい」

頬を少し膨らませて怒るなのはの姿に、三課内の空気が「最近ああいう掛け合い増えてきたな」という感じになる。

いつからかはわからないがなのはから遠慮が抜けて、ああしてセルジオを叱り、セルジオはそれから逃げる、といった光景が見られるようになった。

以前はクイントやメガーヌがやっていた事なのだが、どうやらセルジオにはなのはの叱責の方が効くらしい。

「まあ待て高町。ここに俺がいるのにはちゃんと理由があるんだよ」

「理由？」

「そうだ。ちゃんと医療的な面も考えられた理由だ」

「あ、そうだったんだ……その理由って？」

少し申し訳なさそうに謝るなのは。その後首を可愛らしく傾げてセルジオを見上げる。

「簡単だ。まず治療をするってのは良いことだ。体の怪我が治ると俺は嬉しい」

「そうだね」

「仕事をするっていうのも良いことだ。人のためになるし、俺も嬉しい」

「そうだね」

「ならどつちも同じだし仕事をする事は治療と言えるんじゃないか」

「そうだ……って言わないよ！　ぜんぜん違うよ！　ちよつと悪いことしたな……って思ったなのはの気持ち返してよ！」

「うーん、流石に無理があったか」

「とうか一つ目は肉体的な事で、二つ目は精神的な事だよ！」

「病は気からっていうだろ」

「それで押し通せるほどなのは国語の成績悪くないからー！」

ははは、と笑うセルジオをなのはが叱る。

新暦六十七年。

航空魔導隊三課、通称三課サードに配属されてから一年。小学五年生、年齢にすれば十一歳

となつた高町なのはの最近の姿だつた。



ある日、なのはとセルジオはクイントの家にお呼ばれをしていた。

先日のメガーヌの出産祝いも兼ねたホームパーティーをするらしく、そこにもしよかつたら、と誘われたのだ。

なのははもちろん喜んで頷き、悩んだ様子を見せたセルジオもクイントに引きずられる形で参加する運びに。

そうして、とある休日のナカジマ家。

「はじめまして、ギンガ・ナカジマです。お母さんがいつもお世話になってます」
ぺこり、とクイントと同じ長い青髪を揺らしながら頭が下げられる。

「はじめまして。高町なのはです」

「しつてます！ お母さんからすごい人だつていつも！」

「あはは、なんかこそばゆいな。ギンガちゃんって呼んでも良いかな？」

「はい！ 私もなのはさんってよんでいいですか？」

「うん、よろしくね」

ナカジマ家の玄関で出迎えてくれたギンガとなのはが挨拶をすると、ギンガの視線は隣の金髪の少年へ。

「え、えと、おひさしぶりです、セルジオさん」

「ああ。ギンガちゃんも元気にしていたか？」

「は、はい。さ、最近はお母さんにシューティングアーツを習ってます。筋がいいってほめられたりするんですよ」

「それは凄いな。きつとギンガちゃんはクイントさんみたいに強くなるだろうね」

「えへへ、ありがとうございます。さ、はやく中に入ってください！」

頭を軽く撫でられて嬉しそうに笑うギンガは、赤い顔のままパタパタとリビングへと走っていった。

「あ、なのはちゃんにセルジオくん。いらつしやい」

「どうも、お邪魔します」

「今日はお招きありがとうございます」

「いいのよいいのよ、そういうお堅いのは。自分ちだと思つてゆるーりとしてね。ギンガ、挨拶した？」

「うん、さつき玄関で」

「じゃあ、あとはスバルね」

ギンガの後を追ひ、リビングに入ると出迎えてくれたのはエプロン姿のクイント。そんなクイントの背中に隠れるようにしてセルジオとなのはを伺っている姿が一つ。

「クイントさん、その子は？」

「ウチの娘のちっちゃい方。ほらスバル、いつまでも隠れてないでちゃんとご挨拶しなさい」

「で、でも……」

クイントは自身の陰に隠れてなかなか出てこようとしなないスバルの背中を軽く叩くが、スバルは不安そうに母の顔を見上げるだけだ。

「ごめんなさい、なのはさん。スバルちよつと人見知りする方で……」

「ううん。初めて会う人だし仕方ないよ」

なのはがしやがんでまだ小さいスバルと視線の高さを同じにすると、花が咲いたように明るい笑みを浮かべる。

「私、高町なのはです。あなたのお名前は？」

「スバル……」

「スバルか。とつても綺麗でいいお名前だね」

「きれい？」

「うん。私の出身世界では『スバル』っていうお星様があるんだ。だから、綺麗なお名前」
スバルはなのはの言葉に目を丸くしたが、やがて顔を赤くしながら嬉しそうに笑った。

その様子を後ろから見つめていたセルジオがへえ、と感心したように声を漏らす。

「スバルちゃんとすぐに仲良くなったな。さすが高町、コミュニケーションスター だな。あのスバルちゃんを笑わせるとは」

「なのはさんは今のスバルにとって憧れみたいところがあるので、あんまり人見知りしなかったのかも」

「憧れ？」

「はい。お母さんに話を聞いてて、なんか凄く気になってるみたいで」

「たしかに見た目も良くて才能もあって、実際会えば優しいんだもんな。いつまでもビビられている俺とは違うか……」

「せ、セルジオさんもやさしいですよ！ 私はその、す、好きですよ、セルジオさん！」

「うんうん、ありがとな。そう言ってくれるのはギンガちゃんだけだよ」

「あ、はい。あはは……はあ」

なにやらガツカリした様子の子のギンガの頭を撫でるセルジオ。九も年が離れてればこんなものである。

その後、料理の準備があるクイントとギンガはキッチンへ。スバルは興奮気味になのはと話し続けており、セルジオは一人手持ち無沙汰になる。

「ご無沙汰しています、ナカジマさん」

「前会った時と比べると随分と背が伸びたな、セルジオの坊主」

「坊主はやめてくださいって」

なので、一人リビングのソファで新聞を読んでいたクイントの夫、ゲンヤの隣へと腰掛ける。

「ええと、いつぶりになるか。確か前会ったのが合同捜査の時だから……」

「ざつと半年つてところじゃないでしょうか。その節は高町共々お世話になりました」

「いんにや、お前達が来てくれて助かった。クイントだとも、な……」

たはは、と笑いながら頭をかくゲンヤ。

「やつぱり、奥さんがそばにいると仕事気分になりきれませんか？」

「いや、そういうんじゃないで、ただ、緊張しちゃうんだよ」

「え？」

「あいつ合同捜査になったら俺への当たりがきつくなるんだ……。飯の時もその話するから気が休まる時がない」

「ああ、そういう……」

「娘ができてからはそういうのはないが、まあそれでも仕事でまで嫁に叱られたくねえよ、俺は」

「し、尻に敷かれている……」

「まああんない女の尻に敷かれるのは悪い気分ではないんだが」

「あ、これ愚痴に見せかけた惚気だわ」

照れたようなゲンヤと、全てを察して菩薩のような表情になるセルジオ。既婚者だらけの職場に長くいた彼は、こういう嫁、旦那自慢には慣れていた。

そうしてしばらくすれば、アルピーノ夫妻もナカジマ家に到着する。隣に夫を伴ったメガーヌの腕の中には小さな子どもがいて。

その小さな天使の登場にクイントやなのはなどが目を輝かせながら、覗き込んできやあきやあとはしゃぐ。

「ひゃー、メガーヌに似てるわね。名前は確か、ルーテシアちゃんだったわよね」

「あ、目がむずむずしてます。眩しいのかなあ」

「おかあさん、おかあさん、私も赤ちゃんみたい」

「ええと、メガーヌさん、ほっぺた触ってみていいですか」

「ええ、いいわよ。優しくお願いね」

幸せそうに、本当に幸せそうにメガーヌが微笑んでいる姿をセルジオがじっと見つめる。隣のメガーヌの旦那も同じくらい嬉しそうな笑顔を浮かべていて。

「ああいうのが親、なんですかね」

「……そうだな。誰だって自分の子どもにはああなるもんさ」

「そっか。親がいるっていうのは良いことですね」

「坊主にはゼストさんがまだいるだろう。何か思うなら、しっかりと頼ってやんな」

「そういうわけにもいきませんって」

セルジオが、ナカジマ親子を、アルピーノ夫妻とその子供を見つめてポツリと呟いた。

「子どもにとつて親って、大切ですよね」

ゲンヤがセルジオの顔を見つめる。まだ若いはずのその横顔は随分と大人びているように見えた。



食事も終わりパーティゲームに誘ってくるギンガに謝罪して、セルジオはナカジマ家のベランダから中庭に出た。

「このタイミングのメールはたぶん……やつぱぜストさんか」

不意に届いたメールを開封すれば宛名には『ゼスト・グランガイツ』の文字が。

「なにになに………んー、やつぱそうなったかー」

メールを読んで頭をかくセルジオ。その口調は軽いものだが、顔に浮かんだ表情は眉が寄せられていて、少し悩ましい。

「この分だと少し計画を早めなきゃいけない……」

「なにそれー」

「おわっ」

一人で唸っていたセルジオの背中に突如クイントが抱きついてくる。

その拍子にクイントの大きく主張するアレやこれがセルジオの肘やらに当たる。

「それ、仕事の件かなにか？」

「人妻がやめてください」

「なーに、恥ずかしがってるの？」

セルジオくんも男の子ねー」

「いえクイントさんは付き合いが長すぎて女とはちよつと……。いいとこ姉です」
「ふーん、この胸を見てもそう言えるかしら？」

「正直クイントさんの胸はただの脂肪の塊にしが見えませんね」

胸を強調してみせるが表情一つ変えないセルジオに、クイントが眉を寄せた。

「あんた本当に思春期男子？　ちゃんとマンゴーとかちんすこうで大喜びしてる？」

「なんなんすかその爆発的に頭の悪い思春期男子のイメージ」

「三課の男連中はこの前飛行魔法でどのくらいのスピードで飛ばば一番胸の感触に近いかを熱く語ってたわよ」

「あの人たちもう25超えてる人ばつかなのに……。馬鹿じゃないだろうか……」

「この前はすね毛剃って誰が一番女子っぽい脚か競ってたわね」

「間違いない。あの人たちはただの馬鹿だ」

基本的に人の悪口を言わないセルジオでもさすがにかばいきれないレベルの行動だった。なんというか、知能指数が低すぎる。

「で？　話を逸らさないで答えなさい。なんかきな臭い案件見つけたんでしょ？」

「……クイントさんには勝てないなあ」

「何年の付き合いと思ってるのよ。ほれ、吐いちやいなさい」

困ったように頭をかいていたセルジオも、もうバレているならば仕方ないと思ったの

か大人しくデバイスを操作していくつかの報告書を投影した。

空中に投影されたそれをぼーっと読んでいたクイントが何かに気づいたように、目を見開いた。

「これ、どこから」

「俺とゼストさんの今まで担当した案件と、レジアスさんに口をきいてもらったのと、後は裏でごにによごにによっと」

「呆れた。これなのはちゃんには？」

「いつかは言いますが、まだ内緒ですかね」

「それは、私たちにも、か」

「ん、まあ、まだその時じゃないってだけです」

誤魔化すように笑うセルジオ。

「この報告書にうつってる写真の素体サンプルって……」

「たぶんクイントさんの見立てで間違いないです。ついでにその付近の研究所からはガジェットのプロトタイプっぽい残骸もありました」

「この案件どの程度足はつかめてるの」

「場所は絞り込めてますけど令状がないことには踏み込めませんね」

「じゃあまだ動く時じゃない、ってことね」

「そう言っつていられる状況だったら良かったんすけどね……」

「どういうこと？」

「ま、それもそのうちゼストさんから話がありますよ」

クイントが報告書から目を離して、隣のセルジオの横顔を見やる。

とても優秀で、自分の目標が見えていて、その為の努力を欠かさない、だからこそとても危なっかしい、そんな少年の姿。

見た目は多少変わってもその本質は幼い頃からほとんど変質していない。

「ねえ、セルジオくん」

「なんでしよう？」

「もしかして私と娘のためにこの案件調べてるの？」

「あはは、クイントさんって結構自惚れてますね。普通はそんなことなかなか言えませんよ」

からかうように笑うセルジオ。しかし、それが否定を意味しないことは付き合いの長いクイントだからこそわかる。彼は、人のために平気で自分の時間を割く人間だ。

(ここまで情報が集まったってことは、ついに終わりが見えてきたって事なのかしら) クイントがセルジオから目をそらしてまたじつと報告書を見つめる。

そこには、『戦闘機人及びガジェットドローン生産プラント』というタイトルがつけら

れていた。

生まれる疑念

航空魔導隊三課はレジアス・ゲイズの後見の元設立された部隊である。

コンセプトとしては緊急事態に即時対応できる部隊であり、現状その意思は大まかにだが実現されていると言える。

それでも常に何処かに向向しているというわけでもなく、普段は隊長であるゼストの指示のもと一つの案件を全体で調査するということが多い。

では、今三課の一部で調査が行われている案件が何かと言うと、『戦闘機人』についてと答えなければならぬだろう。

『戦闘機人』。

その名前を三課が知ったのは、高町なのはが三課に配属される前、セルジオがまだ新人であった頃の話だ。

当時セルジオはクイントやメガーナとチームを組んである研究施設に踏み込んだことがある。その中で、彼らは無数の人型らしき死体と、無数の人型らしき機械と、そして培養液の中に眠る二人の子どもを発見した。

子どもは見た目は見たところ五歳前後と言ったところで、そしてその見た目は非常に

クイントのものと似通っていた。

研究所のデータを見る限り子どもたちは、『クイント・ナカジマ』の遺伝子をもとに、機械による生命強化を行われた存在らしかった。

この二人の子ども、後に『スバル』と『ギンガ』と名付けられクイントの養子となる二人の保護をきっかけに、三課は数年にわたり戦闘機人についての捜査に取り掛かることになる。

しかし年数を重ねても捜査は難航し、戦闘機人に関する決定的な証拠、特にメインの生産プラントと、戦闘機人という理論の構築者については影も形も掴めなかった。

だがここで大きく状況が好転する出来事が起こる。

それがセルジオとなのはが解決した『戦闘機人襲撃事件』、つまりトーレとの戦闘である。

トーレの逮捕でセルジオたちの手から離れ、トーレの脱走という形で終結してしまつたこの事件。聴取すらできずに逃がしてしまつたため、正直なところ三課としてはたまったもんじゃなかったのだが、それでも何も収穫がなかったわけではない。

トーレが逃げさせたということは、外部からの助けがあったか、もしくは——セルジオはそんな可能性はないとは思っているもの——管理局内部からのなんらかの手引きがあったかのどちらかということ。

そして、脱走が判明してからトーレの潜伏までにかかる時間の短さ。いくらトーレがリーダーすら振り切るスピードを持っていても、流石に次元間の移動を行えば探知できないはずはない。

つまり、トーレの潜伏場所は、ミッドチルダのどこかに存在し、またそこには彼女が『ドクター』と呼んだ存在もいる可能性が高いということ。

それだけわかれば搜索範囲は限定されるし、いくらでもやりようはある。

後は一つずつ怪しいポイントを潰していくだけでいいと思っていた矢先だった。

ゼストに上司、レジアスからの呼び出しがかかったのは。

「なんの話ですかね」

「さてな。わざわざ呼び出すのだから、書類に残されたくない話なのかもな」

レジアスの執務室のある地上本部に向かう道すがらゼストとセルジオの会話に登るのはやはりこれからのこと。

「やっぱこれってきな臭い案件なんですかね」

「あまりにも未知な部分が多すぎるとは感じている。先日脱走の件も含めてな」

「なんかの情報提供だと嬉しいんですが」

「そうであれば俺もこれほど頭を悩ませずに済むんだがな」

どちらも具体的な単語を出すことはないが、それでもなんの話をしているかは理解し

ていた。

しばらく歩きレジアスの執務室に軽いノックをすると、扉越しに女性の「どうぞ」というくぐもつた声が聞こえた。

「航空魔導隊三課、部隊長ゼスト・グランガイツ三等空佐現着しました」

「同所属、セルジオ・アウデイニ二等空尉現着しました」

中に入ったゼストとセルジオが敬礼をすると、部屋の奥の机にはレジアスが、その隣には二人も見知った女性が控えていた。

バインダーを脇に抱えてピリピリとした緊張感を纏っており、そのツリ目の印象も相まってきつめの美人といった様子だ。

「わざわざご苦労様です。私はオーリス・ゲイズ一等陸尉です。この度ゲイズ中将の補佐となりました。以後お見知り置きください」

「ゲイズさん念願叶ったみたいですね」

「ああ。レジアスは胃が痛いことだろう」

以前飲んだ時の苦い顔を思い出してゼストがレジアスの心を察して目を瞑った。娘が同じ職場というのとはなかなかに大変であるだろう。まあそれを言えば義理の息子が三課にいるゼストもそうなのだが。

「よく来たな、ゼスト、セルジオ。話し方は崩していい」

「……………いいのか」

「構わん。別に公的な記録に残るわけでもない」

「ならば言葉に甘えさせてもらう」

「そうしてくれ」

レジアスが手元の端末を操作して、自身の目の前に幾つかのホロウインドウを展開する。

「……儂も、そこまで時間的な余裕があるわけではない。手短に話すが構わんな」

「ああ。俺たちも最近忙しくてな。そうしてくれると助かる」

「それは、『戦闘機人』とやらに関わることか」

「――！」

「その表情、やはり関わっておったか」

レジアスの言葉にゼストの顔があからさまに驚きに染まる。

それもそうだろう、その事を三課が調べていることはゼストやセルジオなどの一部の人間しか知らないのだ。もちろん、レジアスに伝えた覚えもない。

どういう事だ、と二人が思わず眉を寄せる中、レジアスは淡々と言葉を続けた。

「航空魔導隊三課にはこの案件から手を引く事を命じる」

「な、に……………？」

『戦闘機人』に関しては別の部隊の担当となる。お前たちには別任務の捜査に当たってもらう。正式な指示は追って書類を送る」

「ちよ、待つてくださいレジアスさん！」

「アウデイ二尉、相手は仮にも上官です。言葉遣いには気をつけてください」

「構わんオーリス、儂が許可したのだ。なんだ、セルジオ」

「思わず声をあげたセルジオにオーリスからの叱責が飛ぶが、それをレジアスは手で制した。

「この案件は俺たちが年単位で取り掛かっていたものです。それを今更手放せと言われてはいそですか、と頷けるほど俺は物分りが良くありません」

「この案件は非常にデリケートだ。故にお前たちの手に余ると判断したまでだ」

「——つ、俺たちよりこの件に関して詳しい人間はいません！ どう考えても三課が担当しないのはおかしいです！」

「セルジオ、これは決定事項だ。お前がなんと言おうと変わることはない」

セルジオの問いかけにも静かにレジアスは答える。その目は、先程から静かにホロウインドウを見つめるだけで、そこから何の感情も読み取れそうにない。

「でも——」

「セルジオ」

「……はい。失礼しましたレジアスさん」

セルジオが唇を噛んで、さらにレジアスへと食ってかかろうとするのをゼストが短く名前を呼ぶことで止めた。

「レジアス、今回の件はもう決定したことなんだな」

「ああ。二週間後には通達があるはずだ。それまで捜査資料の引き継ぎに専念することだ」

「……拝領した。お前のいう通りにしよう、レジアス」

ゼストはまぶたを下ろして小さく息をつくど、隣で強く拳を握りしめるセルジオの背中を軽く叩いてレジアスの執務室から出て行く。

「レジアス」

「……どうした」

ゼストが扉に手をかけ、背中を向けたまま自身の親友へと言葉を投げかける。

「俺たちの夢は、変わっていないと信じているぞ」

「……勿論だ。すまん、ゼスト」

「お前が謝る事ではあるまい」

「それも、そうだな」

レジアスのどこか歯切れ悪い返答を背中に受けながらも、ゼストは一度も振り返る事

なく執務室を後にした。

そうしてレジアスの執務室に広がる静寂。レジアスはゼストが出ていった姿、セルジオの悔しげな表情を思い出して、深く息を吐いた。

「中将、大丈夫ですか」

「ああ、この程度では最高評議会はなんとも言わん。むしろゼストが死なないことは奴らにとつての利益となる」

「いえ、そうではなく、中将が大丈夫か、という事です」

オーリスの言葉にレジアスが目を少し丸くする。

「ああいう言い方をすれば三課から貴方への不信が募ります。貴方が憎まれ役になることはなかったのでは？」

「……いや、これで良かったのだ。他の方法で引き下がるような奴らでもない」

レジアスは自嘲気味に笑みを浮かべると自身の背後に広がるまどの向こうに見える、クラナガンの景色を見つめた。

友と、守ると誓ったその街を。

「奴らを、無駄に死なせるわけにはいかんだ」

自身に言い聞かせるようなその言葉に、オーリスはそれ以上追求することなく、これからの予定をレジアスへと告げた。



三課のゼストの執務室でゼストとセルジオが向かい合って座り、空中に投影されたホロウインドウを睨んだ。

「あと二週間、か」

「正直それだけじゃこの数の研究所は回りきれないと思います。せめて一月あれば違つたと思うんですが……」

「それを言っても始まらない。今はなんとかする方法を考えなければな」

ゼストとセルジオの表情は優れない。

二週間後と言われはしたが何もその間ぼんやりとデータのまとめをするほどそれを鵜呑みにするほど聞き分けがいい二人ではなかった。

今はこうしてデータと睨み合いをしながらいかに今の状況を解決するか頭を悩ませているところなのだ。

いくら範囲が狭まっているとはいえ、搜索対象は広大なミッドチルダ全域の違法研究

施設だ。二週間では手が回るはずもない。

ゼストが腕を組んだままむう、と唸る。

「今動かせる人数はどのくらいだ」

「確か来週末あたりには引き受けてる案件はひとまず片付きます。なので、来週からなら全員が。今すぐなら、一人二人つてとところですかね」

「そうか。なら本格的に動けるとすれば一週間だけ、か」

「正直この二週間つてのもいやらしいですね。書類上の兼ね合いと、俺たちが動きにくいラインを上手くついています。こつちの情報はだいたい漏れてるでしょうね」

「一体どこ経由で漏れたのか」

とんとんとこめかみを軽く叩きながらゼストは大きくため息を一つ。

「セルジオ、お前の個人的な読みとしては、どこからこの情報を掴んだと見る」

「……そうですね。おそらく、レジアさんの一存で決まったものじゃないでしょう。流石に中将といえど度が過ぎてる」

「そうだな、ならばそれより上、本局もしくは海の介入といったところか」

「レジアスさんより上の階級なんて本当に数えるくらいしかいないですけどね」

皮肉げに言葉を付け加えたセルジオは、空中に投影されたホロウインドウを睨んだ。

「考えられるルートは二つ。一つは、ふつうに三課の誰かが漏らしたことですけど、これ

はちよつと考えにくいですね。戦闘機人の詳細知ってるの多くないですし、メガーヌさんやクイントさんとかそこあたりの人が漏らすとも考えにくいです」

「俺もそう思う。それに、身内はあまり疑いたくない」

「それは俺もですよ。んで、二つ目ですが、まあこれは三課のコンピュータがハックされたって可能性。一応ロックはかけてますけど、その道の人間からしたら破れないほどじゃないでしょうし」

「だが、そうだとしたらなぜそんな事をする必要がある。それに、そんな事をすれば間違はなく罪に問われる。レジアスはどうかやってその事を知った？」

「それは、なんとも言えませんね」

一つ目はほぼ可能性はゼロと言い切れる。ならば二つ目の、ハックされた可能性が高いのだろうが、もしそうならばなぜレジアスは犯罪者経由の情報を持っているのか。

ゼストもセルジオもレジアスとは短くない付き合いだ。レジアスはその人間性として、犯罪者は決して許さないという心情を持ち合わせている。時には更生して現在は管理局員として奉仕している人間を過剰に弾劾糾糾することがあるくらいには、レジアスが犯罪という行為を憎んでいる事を知っている。

だから、そんなレジアスが犯罪者の情報を受け取ることなど、あり得るはずがないと、二人は信じている。

けれど、状況がそれを許さない。

レジアス・ゲイズ。

魔導師としての経歴を持たないにもかかわらず、地上のトップへと上り詰めた男。時には英雄と呼ばれることすらあるが、それでもその栄光の陰には黒い噂が付き従ってきた。

今までは嘘だと思っていたことも、明らかな違和感が浮上して、レジアスへの疑念を膨らませてしまう。

セルジオが静かに目を伏せる。

「あの噂、本当なんでしようか」

「レジアスが非合法な手を使っている、というアレか」

「最初は昇進を妬んだ誰かの策略かと思ってましたけど、最近は少し見逃せない話もいくつか聞こえてて」

「……ありえん。奴は地上の平和を守る男だ。犯罪者に加担することなど、天地がひっくり返ってもあり得ることではない」

「です、よね。レジアスさんに限ってそんな事をするはずないですよね」

セルジオが自身に言い聞かせるようにゆっくりと言葉を口にして、大きくため息をついた。

「セルジオ、俺は今から残りの研究施設を全部潰せるように日程を組む。お前は研究施設の情報について洗って、他の奴らへと渡せ」

「わかりました。一日で全部終わらせてみせます」

「なら三日やるからその三倍の情報を集める。お前ならばできるだろう」

「——はい、任せてください」

セルジオは強く頷くと、話は終わったとばかりに急いで立ち上がり走り出した。

時間は一刻もないのだ。いかに早く仕事に取り掛かるかが、事件解決につながる。

「では、ゼストさん俺はこれで——」

「あの一、隊長いますか」

「——がはっ!」

焦る気持ちを押さえつけて、セルジオがドアに手をかけようとして、それよりも早く扉が開きセルジオの顔面に炸裂した。

「—————!」

「え、わ! セルジオくんごめん! ノックしたんだけど、返答がなかったから」

声にならない叫びをあげて執務室を転がるセルジオ。そして、意図せずセルジオにクリーンヒットを当ててしまつて、慌てて駆け寄るなのは。

「セルジオくん、大丈夫?」

「だ、だいじょうびだ。思考も回ってるよ」

「ほ、ほんとに？　呂律の方は回ってないけど……」

「ちよつと高町が三人に見えるだけだから。幻影魔法上手くなったな」

「大丈夫じゃない?!　　しつかり目が回ってた！　　ちゃんと休んで?!」

しばらくしてなのはが無事一人に戻り（セルジオ視点）、そこでゼストがなのはの手に何やら書類が握られているのに気がつく。

何だ？　と首を傾けて、書類の上段に書かれている文字を見れば、そこにはどうやら『有給申請』云々と言う文字が踊っている。

「高町、有給の申請か？」

「あ、はい。以前お話しした通り、夏休みのタイミングでしばらくお願いしたいんですけど、いいでしょうか？」

「夏休み、と言うと来週の半ばあたりから始まる高町の夏期休暇で間違いなかったか？」

「はい。お友達と社会科学見学に行くことになってるんです！」

「成る程、来週、か……」

「あ、だめならいいんです！　お仕事がもしあるならなのはは断るので！　お友達もわかってくれると思いますし」

来週、と言う言葉にゼストが思わず眉を寄せると、それを見たなのはが慌ててゼスト

へと手渡そうとしていた紙を引つ込めようとする。

「いや、行けばいいだろ社会科見学」

だが、それよりも早くセルジオがなのは手から紙をさらう。

「友達つてのは大切だし、それに有給の申請は一応先月からくれてたしな。立て込んだ仕事だつて、何も無い。気にせず行つて来い」

「え、でも、いいの？」

「問題ないよ。ね、ゼストさん」

「……ああ。楽しんでくるといい高町」

「ありがとうございます！」

セルジオが念話で「俺が埋め合わせをするのでお願いします」と言ってきたので、「俺も元からそのつもりだ」と短く返答をしたゼストはセルジオと上手く話を合わせる。

するとなのはは喜色を滲ませて綻ぶように笑う。

「それで、場所はどこに行くんだつたか？　確か、海鳴の……」

「遊園地だよ。アリサちゃんやすずかちゃんのご家族が作つてる遊園地」

そう言つて、なのははは楽しみでたまらない、というような空気を滲ませてセルジオを見上げて楽しげに笑う。

「『オールストン・シー』って言うんだけどね」

始動

高町なのは十歳。小学五年生。

ついに夏休みである。

日本の学生が遍く恋い焦がれ、別れを告げる際には涙まで流すあの夏休みである。まあ長さに応じてそれなりの量の宿題が出たりもするのだが、それはそれである。

普段から友人にワーカーホリックではないかと言われ、もつと休めという言葉で睡眠時間は減つてないよとか会話になつていようになつてないよと言葉を吐くのはだが、基本的には小学生。ならば夏休みという一大イベントに心を躍らせないわけはなかった。

仕事はちよこちよこ入っているものの、アリサ率いる海鳴の友人たちのおかげで既になのはの夏の予定は埋まりつつある。

現に夏休みが始まったばかりの今日も、自由研究も兼ねて『オールストーン・シーアリスとすずかの親の会社が共同で開発をしている海上レジャー施設。内部には目玉である巨大水晶の展示された水族館、そして遊園地が内接されている』へ社会科見学に行く

ことになっていった。

午前中は水族館や遊園地を見て回っていたなのはたちだったが、時間もお昼時になったということもありアリサの父親の引率で施設内のレストランで食事をとることに。

「にしても、はやても残念だったわねー。せっかく五人でこれらと思つてたのに」

「お仕事なら仕方ないよ。それに夜にはこつちに来れるつて言つてたから、ね？」

「それはわかつてるけど、なんかちよつと悪いと思つたのよ」

「はやてちゃん、結構ガツカリしてたもんね」

コップに挿したストローでジュースを飲みながらアリサがボヤク。

一応はやても今日の朝から一緒に来る予定だったのだが、急遽入った仕事はずれ込んで出勤せざるを得なくなったのだ。

その事情をアリサもわかつてはいるものの、だからといってガツカリしなかつた訳ではないわけで。

なのはが昨日「仕事入つてもうた……」と肩を落として報告してきたはやての姿を思ひ出す。

「じゃあ、はやてちゃんが夜来るまでお風呂に入るのは待つてのはどうかな？」

お母さんがホテルのお風呂は大きいつて言つてたし」

「あ、それいいね。きつとはやても喜ぶよ。どうかな、アリサ」

「ん、それは悪くない考えね。そうとも決まればメールしときましょ」

「じゃあ私が送っておくよ。今たぶん本局にいるからデバイスを介さなきゃ送れないと思うし」

「そう？　悪いわね」

「いいよ。どっちにしろさっきの水族館での写真をユーノくんたちに送る予定だったから」

そういうとなのははまずはやてにすずかの提案をメールで送り、その後午前の間に四人で撮った写真をレイジンググハート経由でユーノに一言添えて送信した。

(……セルジオくん、興味あるかな)

浮かんできたのは翠の瞳の先輩の姿。

今は仕事でだろうし送ったところで一言、「楽しんでいて何より」とかそんな無愛想な返信しか来ないのだろうが。

(おやすみもらってるし報告くらいしとくべきかな。うん、きつとそう)

えいや、と勢いをつけてメールと写真を送信して、ふうとため息を一つ。

そして携帯からアリサたちへと視線を戻せば、今はどうやらはやての管理局でのことについて話しているらしい。

「にしても、本当に『管理局』って忙しい所よねー。小学生が仕事なんて」

「うーん、なんというかミッドチルダは全体的に地球よりもメインの働き手が若い傾向があるから。兄さん、クロノだって十六歳だけど今は支部局長してるし」

「なんというか、それはフェイトちゃんのお兄さんがとつても優秀なだけな気もするけど……」

「いやそれはそうとして問題ははやてよ。十歳に夏休みまで働かせるなんて社会としてやばいんじゃないの、ミッドチルダ」

「あはは、はやてちゃんは他の人の使えない魔法とかいっぱい使えるからどうしても引つ張りだこになつちやうみたいだね」

そう言つて苦笑うなのは。

はやては夜天の書由来の『探索』『解析』『分析』『レア魔法、ミッドとベルカの魔法をどちらもSランクで扱えるという稀少な魔導師であり、その手を借りたい人間は多い。

またははやては『闇の書事件』の中心人物であり、本人は被害者ということにはなつてゐるものの、守護騎士たちが違法行為を行つていたのは事実。そういう後ろめたさも重なつて、仕事をついつい引き受けてしまうのだろう。

「なのはとしてははやてちゃんもつと休んで良いとは思うんだけどね」

ね、と隣のフェイトへと賛同を求めると、そこには微妙な顔で笑う親友が。

なにか変なこと言ったかな、となのはが首をかしげると対面に座っていたアリサが深い、本当に深い、肺の空気を全て吐き出したのではないかと思えるほどのため息をついた。

「あのね、なのは」

「なあにアリサちゃん」

「それ、あんたが言うう？」

「え？」

「だーかーらー、休んだ方が良く云々をあんたが言うのかって言うてんのー」

「その、悪いけどなのはちゃんにははやてちゃんの仕事に関してどうこう言う筋合いはないと言うか、盛大なブーメランというか」

「ええ、でもなのはは、ほら、大丈夫だから」

「なのはのことは信頼してるけど、根拠のない『大丈夫』を信じて本当に大丈夫だった事は無いので信じられません」

「フエイトちゃん……」

「それこそ縁日でハズレなし！

と言っておいて八等のハリセンをアタリと言い張る

お店くらい信用ならない……」

「そ、そこまで信用ならないかな……」

「フェイトちゃんが去年のお祭りのことまだ気にしてる……」

なのはが眉を寄せてむむと唸る。

「これでも休んでるつもりなんだけどなあ。なのはより仕事してる人とか他にもいるし……」

「……ナポレオンとか歴史上の人物はナシよ。あと物語のキャラクターとか」

「ひ、ひどい！　ちゃんと今生きてるもん！　現実にいる人だから！」

「ええと、参考にまで聞くけどそれって誰のこと？」

「え？　セルジオくん」

その言葉を聞いて、三人がまたか、と頭を抱えた。

「最近のなのは仕事関係になると『セルジオ』さんの話多いよね」

「その人実は人間じゃなくて仕事するために生み出されたアンドロイドかなんかじゃないの」

「そんなことないよ！　ちゃんと血の通った人間だよ！　凄く頭が良くて向こう見

ずで、いっぱい怪我してもへっっちゃらの………たぶん人間だよ？」

「なのはも自信がなくなってる……」

「薄々感じてたけどその人を基準に考えるのは間違ってる気がするかなあ」

なのはも自分で話しながら首を傾げてしまう。あの人は毎回入院するレベルの怪我

を負っているが、果たして同じ人間なのだろうか。

昔三課の職員たちが『セルジオの体は傷跡だらけだからノーメイクゾンビできるぜ！』とか騒いでいたのを思い出す。

実際にはセルジオの服の下を見たことなんかないが、それでも無数の傷跡があるだろう事は想像に難くなかった。

「ねえ、なのは、なのは少し自分の事に無頓着すぎだと思います。私とかアリサたちも心配してるんですからね」

「は、はい」

「そもそもあんたは小学生なの。社会人じゃないの。小学生が一人前になんでもできると思い上がるんじゃないわよ」

「そ、それはそうだけど……でもさ」

「でも何もありません！」

なのはフェイトとアリサのお叱りの言葉を頂戴しながら、すずかに助けを求めるように視線を送るが、すずかはにこにここと笑うだけで何も言っはくれない。

なのはが肩を落としたその時、胸元のレイジングハートを經由して送られてきたメールに卓上の携帯が軽く震えた。

「あ、あー！　はやてちゃんとユーノくんからだ！　ほ、ほら！　みんなで返信考

えよう！」

チャンスとばかりに全力で話を逸らしにいくなのはに、アリサが小さくため息。フェイトの方も仕方ないなあ、と薄く笑む。二人とも小言は言い足りないが、不承不承ながら乗ってやる事に。

二人はただなのはが自身の体を少しでも顧みて、あなたの事を心配する人がいるんだよ、と伝えられればそれで良かった。それはきつとちゃんとなのはには伝わっているだろう。

あんまり言い過ぎててもかわいそうだ。今日はせつかくの楽しい夏休みなのだから。

「はやてちゃんなんて？」

「ほら、ユーノの方にも何か送ってやりましょ。たぶん羨ましがるわよ」

アリサとすずかが席を移動してなのはの携帯を覗き込む。

そして、四人が笑みをかわしながら返信の言葉を考える中、ふとなのはの頭の端にもう一人のメールを送った人物のことが思い起こされる。

(返信、いつ来るかな)

思わず遠い空を見上げるが、きらりと光った太陽が眩しくてなのはは思わず目を細めた。



三課のオフィスに向かってふらふらと頼りない足取りでセルジオが歩く。

いつもはしっかりとアイロンのかけられた制服も今日は皺が目立ち、セルジオがやたらと疲れている様子が見て取れる。

ふらふらとセルジオがオフィスへと入ると、中の光景を見て顔をしかめる。

「こ、こんなところで寝ないでくださいよ、皆さん」

死屍累々の三課の面々がソファや机、果ては地べたに転がって眠りこけていた。

「う、おう、セルジオか、今俺たちは死ぬ気で仕事を片付けてクソ眠いんだよ……」

「お願い、一時間、ダメなら三十分でいいから寝かせて……」

「それもこれもお前が今日までに期限の仕事片付けるとか無茶言うからなんだぞ……」

「隊長から頭下げられんかったら逃げ出しとったワイ……ぐがー」

「……どうぞお眠りください。用があるときは起こしますから」

「まじ、たすか、んぐー」

半分寝ながら喋る同僚に感謝の念を送って自分のデスクへと戻るセルジオ。

（期限ギリギリだけど、一応戦闘機人に聞われるだけの人は集まった）

ゼファーから抜き出したデータを見てセルジオの表情が曇る。

（けど思ったよりも情報が集まりきらなかった。たぶん場所とか規模に間違いは無いけど、防衛システムなんかまでは手が回りきらなかった）

ぎり、とセルジオが薄く唇を噛む。

通常なら今セルジオの手元にある程度の情報があれば充分だ。しかし、今回はいかにせん調査するべき場所が多い。

そうなれば一箇所に割ける頭数は減るし、危険性も高くなってしまう。

そのため少しでも多く情報を得たかったのだが、そんなものが三日やそこらで手に入るわけもなかった。

「くそ、ままならねえな……」

髪をかきあげて天井を見上げると、備え付けのライトの光が眩しくて目にしみる。セルジオが僅かに目を細めて、息を吐いた時、ゼファーが小さな音を立てた。

「ん、メール？ 誰からだ」

セルジオが手元の、銀色の『プレスレット』型のゼファーに目を落として、ウィンド

ウを開く。

「お魚がいつぱい………ああ、高町か。周りのはいつぞやの友達だな」

ぼーっとイマイチ回っていない頭で写真を見つめて、三秒後ほどにそこに写っているのがなのはだという事を理解する。

「返信、した方がいいか。なんと返したものかな」

なんとなく卓上にあつた古びた懐中時計を手の中で弄びながら返信の文面を考える。

「まあ、なんだっていいか。高町も気の利いた返しなんか求めてないだろう」

適当に「楽しそうで何よりだ。怪我などをしないように」と打ち込んで送信してウインドウを閉じた。

送られてきた写真のデータも一緒に閉じようとして、なのはと友人たちが楽しげに笑いあっている姿に目が止まる。

「……高町、楽しそうだな」

なんだか、その笑顔がセルジオには嬉しい。思わずセルジオも頬に薄い笑みを浮かべてしまいそうになり、それを慌てて手のひらで隠した。

今は仕事である。それに、こんなのを誰かに見られた日には三日三晩からかわれまくることは目に見えていた。

「あらなのはちゃんの写真ね。わざわざ報告するなんて律儀ね」

「もしかしたら以前俺がこういう施設には行ったことがないって言ったから氣遣つてくれたのかもしれない」

「あら、なら一緒にに行けば良かったじゃない。誘われたつて聞いたけど？」

「社交辞令でしょ、そんなの。俺はあいつが楽しんでくれてるならそれでいいです」

「ふふ、セルジオ君もなのはちゃんが大切なのね」

「そういうのはやめてください、メガーヌさん。俺たちは只の相棒……メガーヌさん？」
頭が回りきつていないからかかけられた言葉に半ば反射的に応じて、自分の言葉に正氣に戻った。

勢いよくセルジオが振り向くとそこには紫髪の柔らかな笑みを浮かべた女性、現在育休中のはずのメガーヌがそこにいた。

「はい、お久しぶり……でもないかしらね。この前クイントの家であつた以来ね」

「え、メガーヌさん?! 何でここに?!」

「クイントから呼ばれたのよ。どうも手が足りないらしいじゃない?」

「で、でもルーテシアちゃんは……」

「今日は託児施設に預けてきたわ。こればかりは仕方ないわ」

「何考えてるんですか! そんな、娘を一人残してくるなんて、もし何かあつたら」

「ないわ」

その先は言わせない、とばかりに断言するメガーヌ。

「私が娘を置いて死ぬなんてことは絶対にない。あの子を親無し子にする気は無いわ」

メガーヌはぼんぼんとセルジオの頭を軽く撫でると、ふと目を細めて笑う。その笑顔を見てセルジオは唇を噛んで、顔を上げる。

「……俺がちゃんと、メガーヌさんを無事に返してみせ——あいたつ」

「三年早いわ。せめて二十歳になってからそういう事は言つて欲しいものね」

セルジオの脳天に撫でていた手をチョップに変えて落としたメガーヌは、はあと隠す気もなくため息をする。

「私もまた弟分に守られるほどじゃないわ。それに君と同じ場所に行くかもわからないでしょう?」

「それは、そうですが……」

「だからいいのよ。君は自分のことだけを心配しなさい」

そう言つてまた柔らかく笑うメガーヌに、セルジオは俯きながら小さく頷いた。眉間には深い皺が刻まれており、唇はへの字に曲がついて、いかにも不承不承と言つた様子である。

そんな自らの弟分の頭をまた軽く撫でるメガーヌ。彼女の弟分は昔から『親子』という関係に關しては少し過剰に反応するきらいがある。それが悪いこととは言わないが、

こと今に関しては余計な心配に感じた。

「……………メガーヌさん」

「何？」

「無事に帰ってください。貴女のことを心配する人がいるんです」

そんな此の期に及んでまで他人の心配をするセルジオに、メガーヌは思わず困ったように笑った。



三課のオフィスにゼストを含めた全ての三課局員が姿を見せていた。ここにいないのは現在地球で夏休みを過ごしているのはだけだ。

ゼストがオフィスから見えるクラナガンのビル街に視線を送ったまま、背後の部下たちへと声をかけた。

「全員、来たか」

「はい。高町空曹長を除く三課職員、計十五名ここに」

ゼストが振り返ると、そこには一糸乱れぬ姿で整理している部下たちの姿があった。「ここに来たという事は、今回の件についての詳細を聞き、そして了承したという事だな」

「戦闘機人及びガジェットドローン生産プラント、その違法研究施設計十三箇所の制圧。また万が一存在するかもしれない管理局との繋がりを明らかにする。そう、聞いています」

「そうだ。そして、これは正規任務ではない。むしろ、独断専行として罰される可能性すらある。それでも、やるか」

答えはない。しかし、その無言こそが三課の総意だ。

「安全な任務ではない。最悪命を落とすことになるかもしれない。それでも、やるか」

答えはない。既に、ここに来たことが彼らの答えだから。

ゼストが瞼を閉じて、そうか、と呟いて、そして、目を大きく見開いた。

「諸君！ 俺たちが今から赴くのは命を弄ぶ許されざる行為を行う研究所だ！

許してはならない！ 見逃してはならない！ それで踏みじられる命が

ある！ 人知れず消えて行く命がある！

俺たちの戦いは正義を守るものではない！ 俺たちが管理局員であるならば、

守るものは正義ではない！ 守るものは法ではない！

俺たちは無辜の人々を守るために！

虐げられる命を守るために武器を握れ

！

危険であろう！　しかし、俺に言わせてくれ必ず生きて帰って来い！　そし

て、そしてまた共に同じ釜の飯を食うぞ、仲間達よ！」

ゼストが叫ぶと、セルジオが、メガーンが、クイントが、全ての三課職員が声を合わせた。

「行くぞ、戦闘機人その全てに終止符を打つ」

それぞれ戦い

「では、クロノ支部局長67年時点で地球には時空管理局の地球支部が存在しクロノはその支部局長となっている。補佐はエイミー。クロノまだ十六だぞ有能すぎである、後は指示のあった通りに」

「了解しました、レティ提督時空管理局本局運用部部长。クロノの母リンディの旧友。地球などの管理外世界の対応はこの人に一任されることも多い」

クロノが通信を切ると半透明の液晶に写っていた上司の姿が掻き消える。

「まったく厄介なことになって来たな」

「うん、まさか異世界渡航者が二人。しかもその片方はなのはちゃんやフェイトちゃん、さらにはヴォルケンリッターの人たちまで倒しちゃうなんてね」

「まあ不意をつかれた形にはなるが、少し無視できない戦力だな、これは」

なのはたちの夏休みが始まる前日、地球に異世界渡航者が現れた。

その人物の名はキリエ・フローリアン。

その目的は死にかけた故郷、惑星エルトリアを救うことにあるらしく、そのために必要な力を宿したはやての『夜天の書』を強奪。その際に戦闘になった、『高町なのは』、

『フェイト・T・ハラオウン』、『八神はやて』及びその守護騎士四名、そして彼女の姉『アミティエ・フロリアン』を一人で撃退してみせた。

アミティエを除くアースラメンバーの怪我は軽いものの、数の利をひっくり返されたのも事実。舐めてかかっていたいい相手ではないだろう。

「エイミィ、周囲に夜天の書と思わしき魔力反応はあるか？」

「うーん、流星にさっきの今じゃ追いきれないかな。逃げ足も早かったし、隠蔽もかなり上手にやってるみたい」

「わかった。アンディ、本局を通してカレド・ヴルフ社管理局と提携を行なっているデバイス制作会社。『カノン』『フォートレス』といったAMF下でも稼働する武装や非魔導師にも有効な武装を製作中に武装の貸与を頼んでくれ。後はマリーにデバイス調整の連絡も頼む」

「了解しました！」

「アルフレッド、君には武装隊の組織を頼みたい。潜伏地点が判明次第すぐに突入できるように」

「了解です、支部局長」

そこまで指示してクロノが今地球にいるメンバーでの編成を考えようとして、一人の名前が目に入った。

「……あいつにも連絡入れなきゃ、か」

『高町なのは』という名前を見て、クロノが軽く頭をかいて、卓上のコンソールを操作して自身の友人への回線をつなぐ。

それを隣で見ていたエイミーが、あれ？ という首を傾げた。

「セルジオくんに通信？」

「ん、エイミーか。ちょうどよかった公的通信だから一応記録を頼めるかな」

「別に良いけど、何であるの人に連絡を？　　こういうのって陸にバラすとまずいんじゃない？」

「まあそうなんだけどね……」

海、次元航行隊と、陸、地上本部はそのあり方の違いから仲があまりよろしくない。その都合上、あまり情報を漏らすのは喜ばれないし、そうでなくとも『夜天の書』の強奪が行われている事件である。

あまり積極的に口外はしたくないのだが。

「そうも言つてられないよ。だって、今回はなのはも事件に関わっている。上司のあいっに連絡を入れとかなきゃめんどくさいことになる」

「あー、そっか。なのはちゃん今陸の預かりだもんね。一応許可取らなきゃ筋は通らないかー」

「そういうことだ。まあこの緊急事態にセルジオがとやかく言うとは思えないが、それでも一応、ね」

コンソールが操作され公的な回線を通じて、セルジオのデバイスへと通信を届ける。

一コール。出ない。

二コール。出ない。

三コール。出ない。

四コール。出ない。

一分経つても二分経つてもセルジオが通信に応じることはない。

「……出ないね」

「出ないな」

「ちよつと早いけどもう帰って寝ちやつてるとか?」

「あのセルジオがこの時間にオフィスにいないはずがない。普通なら絶対に残業しているはずだ」

「うーわー、嫌な信頼だなー。でも確かにあのワーカーホリックが八時より早く家にいるイメージじゃないな」

「あいつは家にいるよりオフィスにいる時間の方が長いからな。自分で言っていたから間違いない」

エイミーが金髪の同級生の顔を思い浮かべんなりとした表情になる。あの男は学生時代からまったく進歩していない。

しばらく待っても一向に通信に応じられないことにクロノが眉を寄せる。

「おかしいな。なら、三課のオフィスへの通信に変えようか、エイミー」

「そういうだろうと思つて準備できてるよー」

だが、出ない。セルジオどころか、三課のオフィスへの通信がまったく繋がらない。まるで誰もそこにいないかのように。

「オフィスにも繋がらない、か」

「何か特殊な仕事でもしてるのかな？ あ、でもそれならなのはちゃんが有給を取れ

てるのはちよつと変かも……」

「エイミー、なのはに通信を繋げて欲しい。少し聞きたいことがある」

「オツケー、ほいほいっと」

エイミーが慣れた手つきで手の中のタブレット型端末をいじると、セルジオと繋いでいるウインドウのとなりになのはの顔が映し出された。

『あ、クロノくん？　なのはに何か用かな？』

「突然すまない。今は海の管轄じゃないのに協力してくれたこと、感謝するよ」

『それなら全然いいんだ。私にできることがあるならなんでもやりたいってただけだか

ら。次は、ちゃんとやってみせるよ」

頬に絆創膏をつけて真剣な表情のなのはに、少しだけクロノの目が細まった。

その表情が少し、見知った友人に似ているような気がしたのだ。

その考えを軽く首を振って振り払う。

「少し聞きたいことがある。三課のことだ」

『三課の？』

「ああ。今三課は何か厄介な案件を抱えていたりするかい？」

例えば、三課の局員が

総出で関わるような事だ」

『——？ 特にないと思うけど……何かあったの？』

「いや、個人的な興味だ。おかしなことを聞いてすまなかった。この後の予定に関しては追って連絡を入れる。その時には頼むよ」

『うん、わかった』

「頼りにしてるよ」

『あ、クロノくん待って！』

通信を切ろうとした時、なのはが慌てたようにクロノのことを呼び止める。少し眉を寄せたクロノがどうした、と尋ねれば、なのはは少し言いくさそうにぼつぼつと話し始めた。

『ええと、その、アミティエさんって今はどうしてるのかな』

「先ほど目を覚まして今は食事をとっているよ。怪我はしているが、命に別状はないぞうだ」

『そっかあ、よかった。あの位置の傷なら大丈夫とはわかってたけど、ちよつと心配だったから』

「へえ、なのはちゃん、良くそこまでわかったねー。やっぱり武装隊にいとさういうのにも詳しくなるのかな」

『あー、その、それは……』

エイミーが感心したようなのはを褒めるが、当のなのは少し苦い笑顔で、頬を人差し指で撫でる。

『セルジオくんのせい、かな。普段から傷だらけだからさういう知識が増えちやつて……』

「またあいつか……」

クロノが軽く頭を抱えて、セルジオの姿を脳裏に浮かべる。今度一言小言を言わなければ、と心に誓う。

その後二、三言葉を交わすとセルジオにつないでいたものごと、通信を切った。

「なのはは何も知らない、か」

「なのはちゃんの事だし、隠してらってわけでもなさそうだしねえ」

「仕方ないけどこれはもう事後承諾だな。ログは残っているしこちらに非はないだろう」

クロノもセルジオも少しお咎めを受けるかもしれないが、緊急事態だ、少しくらいは大目に見てもらわなければ困る。

「さて、次は重要参考人の『アミティエ・フロリアン』に連絡を取らなければね」

「ふふ、大変だね支部局長は」

「全くだよ。まだ僕には早いとは思うんだがね」

軽く肩をすくめてみせるクロノに、エイミイが優しく笑みを返す。

「お茶入れてくるよ、あつーい奴」

「悪いね、エイミイ」

「いえいえ、補佐官ですから。あ、砂糖とミルク入れてリンデイさんみたいなお茶にしてあげよっか？」

「それだけは勘弁してほしい」

悪戯っぽく舌を出すエイミイの提案をクロノはげんなりとした表情で否定した。



闇の中で白光が煌く。

「四十三、これで終わりだ」

銀閃が目の前ガジェットの胴体を真つ二つにすると、その単眼からは光が失われた。

ガジェットを倒した人物——槍を肩に担いだセルジオは足元に転がる見慣れた多足型のガジェットを蹴飛ばすと念話で後ろの同僚へと指示を出して証拠品の応酬を始める。

ゼファーをコンソールに接続してプログラムを走らせてめぼしいデータを抜き取っていると、別働隊であるゼストからの連絡が入った。

「セルジオ、そちらはどうだ？」

「二班は今二つ目が終わりました。まあ、ハズレみたいですが。そちらは？」

「こちらにも二つ目で、ハズレだ。運が悪かった」

「ですか。三班、メガーヌさんたちからは何か聞いてますか」

「一つ目が終わったところだそうさ。さつき連絡があった」

「残りは後八、ですか。時間的にはギリギリってところでしょか」

「その事に関してでは三課に戻ってから詳しく話し合う。一度帰還しろ」

「了解」

念話を切るとちようどデータの抽出が終わっていたゼファアの接続を切ると、周囲のメンバーへと声をかけて研究所からの脱出するため走り出す。

（広範囲解析、駆動）

いつものようにマルチタスクで無理やり組み上げるとはせず、一つ一つ丁寧に魔法式を発動させる。

合計十三の研究所、ゼスト班、セルジオ班、メガーヌ班の三つで割ったとしても、最低四つの研究所に一日で侵入しなければならぬのだ。

そんな事をすればすぐに魔力が枯渇してしまう。マルチタスクによる高速演算は無駄に魔力を食い過ぎる。

セルジオの翠の目に白い光が走ると、瞬時に研究所全域、そして脱出口までのルート
の索敵が行われる。

「来た道をそのまま戻るのは危険なので途中で左に曲がって関係者通路から出ます。
途中ガジェットが3体ほどいますが、気にせず蹴散らしましょう」

「応。正直、あの機械兵ただの雑魚じゃからなあ」

「あれにセルジオがやられたつてのは信じられないね、ボク」

「(ログ見た限り厄介だったのはA M F発生装置でしょう。まああんな馬鹿でかいものそうそうはないでしょうけど)」

「(そういう無駄口はしつかり帰つてからにしましょう。油断は禁物ですよ)」

「(ほいほい、アウディ二尉)」

自身を合わせて五人のメンバーで脱出口へと走っていると、解析通り扉の前に三体の多足型ガジェットがいるのを捉える。

セルジオはデバイスを砲撃形態に変形させると威力と範囲を絞つたショートバスターを砲身に収束。

扉をまとめてぶち抜くように砲撃を放つた。

白い光が三体の機械兵を纏めて吹き飛ばしながら、扉に大きく穴を開けた。

そこからセルジオたちは飛び出すと素早く飛行魔法を発動して局員の一人に偽装の幻影魔法をかけてもらいながら、ミッドチルダの空を飛んだ。

今回の研究所検挙に関しては秘密裏に行われていることのため、三課にこの時間帯の飛行許可は出ていない。そのためこうした偽装が必要になってしまうのだ。

セルジオやメガーヌの転移で移動してもいいが、それでは魔力を無駄に食うしどうしても痕跡が残ってしまう。査察官あたりにそれを嗅ぎつけられれば厄介どころの話で

はない。

（魔力は残り、七、いや六割つてところか。後一日で、二、三箇所、やれるか？）
ちら、とセルジオの視線が左腕を半ばまで覆うガントレットへと移る。

（もし魔力がなくなっても手が無いわけじゃない。俺は、やれる事をやるだけだ）
ミッドチルダの夜空に浮かぶ二つの月の光が、セルジオの『深紅』のガントレットに
反射してきらりと光った。



「く、ククク、そうかやはりそれ程度で止まるはずもなかったか」

薄暗い研究所の最奥で、『ジェイル・スカリエツティ』が愉しげに笑う。

先程自身の助手であるウーノから伝えられた情報によると、彼が昔使っていた研究所
や、ダミーとして残しておいた施設が次々に侵入者が出ているらしかった。

「今のところあちらに掴まれても何の痛手にもならないものばかりですが、このままで
はここに来るのも時間の問題です」

「……残りのダミーはいくつあるかね」

「後七つといったところでしょうか。いかなされますか、ドクター」

「ふむ、そうだね。ここに立ち入られるのは確かに面倒だ」

愉しげな笑顔のまま、困った、と言うスカリエッティ。その様子には言葉とは裏腹に余裕すら感じ取れた。

「時にウーノ、今回の三課の魔導師たちに彼らはいるのかね」

「彼ら、と言うと？」

「トーレゴ執心の『セルジオ・アウデイ』たちだよ。三課が動くのはわかっていたが、彼らもちやんといるのかい？」

「ドゥーエの情報によれば、『セルジオ・アウデイ』はいるようですが『高町なのは』はいませんね」

「ほう？」

スカリエッティが少し眉を寄せた。

「それは奇妙だ。ドゥーエ曰く彼女は今の三課の中核なのだろうか？ 何故いない」

「そこまでは流石にわかりかねます。ドゥーエに探らせてみますか？」

「ん、いやいいだろう。今すぐ理由がわかるとも考えられない」

首を緩く振ったスカリエッティは、モニターに映るゼファアの設計図を見て、口を半

月状に歪める。

「さあ、私の下までやって来れるかな、『セルジオ・アウデイ』」

スカリエッティが髪をかきあげながら、愉しそうに嗤った。

「君と、私で、少し語り合おうじゃないか」

スカリエッティの見つめるモニターの先、そこには今までのゼファアーにはなかった一つの機構が組み込まれていた。

鏡越しの星

夜天に明星^{あかほし}と星光が輝く。

「デイバインバスターー！」

「デイザスターヒートー！」

レイジングハートではなく、『カノンカレド・ヴルフ社の武装。射撃特化の巨大な砲身を持つ。重量、魔力ともに重量級であり、現在飛行しながら使用できるのはなのはだけ。』と『デイフェンサー同社の武装。二つの浮遊型の盾。こちらも満足に使えるのはなのはだけ』を装備したなのはと、デバイス、ルシフェリオンを装備したシユテル夜天の書に眠っていたデータ体。マテリアルズとも呼ばれる。なのはのデータをもとに構築されているためよく似た容姿、戦闘能力を保有する。通り名は『殲滅のシユテル』が空を縦横無尽に駆けながら互いの魔法をぶつけ合う。

その度にシユテルの変換資質である炎熱が付与された魔力が夜空を照らして、なのはの桜色の魔力が桜吹雪のように舞い落ちる。

シユテルから放たれた無数の魔力弾を旋回してかわしながらなのはもマルチタスクを分割し『アクセルシユーター』で迎撃——しようとして、今手に握るのが『カノン』で

あったことを思い出した。

慌てて迫って来る炎を『カノン』からの直射弾で撃ち落としながら、シユテルへ速射砲撃、ショートバスターを撃つ。

（ついレイジングハートのつもりでやっちゃうな。強いけど、少し、使いづらいかも『カノン』）

放たれた桜色のショートバスターをなのはと同じような見事な飛行技術でかわしてみせたシユテルはなのはへと火炎弾を向けながら口を開いた。

「見たところ、使い慣れた武装というわけでは無いようですね」

「……そうだね。確かにちよつと使い慣れない武器かな」

「そんなもので相手されるとは私も舐められたものですね」

シユテルの表情が険しいものへと変わり、それに比例するようになのはを攻め立てる火炎の勢いは増していく。

空気を焼き焦がすような獄炎がなのはの肌をかすめるたびに、ちりとバリアジャケットを撫でて、焦げ臭い匂いを漂わせる。

「私は何者にも負けません。それが、我が王に誓った忠義なのですから」

シユテルがそう言つてルシフェリオンを振るうと、空を埋めつくように速射弾がなのはへと肉薄する。

（速い！ 回避じゃ間に合わないっ！）

火炎の過半数をカノンで迎撃し、残りの直撃ルートだけを『ディフェンサー』のシールドで防ぐ。

（防ぎきつ——）

「甘いですよ」

が、突如なのはのディフェンサーに当たった魔力弾が爆炎で生じた眩い光によつてなのはの視界を大きく遮った。

なのはの目が反射的に細めて、僅かな間の隙が生じる。それはきつと一秒にも満たぬ僅かな時間の隙間。でも、シュテルにしてみれば、その僅かな一秒があればなのはの死角に回り込むことは容易かった。

なのはの背後に現れたシュテルはなのはの背中へと軽く左手を添える。

「お覚悟を」

「シュテル……！」

「ブラストクロウ」

トリガーワード起動句に反応して彼女の左手の武装、『ブラストクロウ』が紅く輝くと内部から魔力を変換した業火を生み出して一気に炸裂させた。

「————っ！」

なのはの白いバリアジャケットが黒く焦げて、炎熱耐性でも防ぎ切れなかった炎が僅かになのはの地肌を焼いて、そして爆発により吹き飛ばした。

声にならない叫び声をあげてなのはの体がオールストーン・シーの施設の上を吹き飛ばんでいく。

(このままじゃ、施設に当たっちゃう……)

なのはの痛みでぼやけた視界に施設中央の城のような建造物が迫っているのが映る。もしこの速度で吹き飛ばす体がこのまま当たれば施設が無事にいられるはずがない。

(それだけは、だめだ)

ぎり、となのはが唇を噛む。

「それだけは、絶対だめなんだからー」

なのはが、周囲を旋回していた『ディフェンサー』を操作して、その側面で自身の体を叩き落とす。

無理矢理に加えられた力によってなのはの体が方向転換を行い、白の軌道から逸れて施設を横切つて海に叩きつけられる。

「はー、はー、なんとか、なった」

一度海に沈んで濡れ鼠になったのはが肩で息しながら、頭上で佇むシユテルを見上げる。

「不可解です。ナノハ、貴女はなぜあんな捨て身な方向転換を？」

「お城に当たつちやいそうだったから、かな」

「あの城はただの建造物です。そこに守る価値はないと思いますが」

「シユテルにとつてはただの建物でも、これを作った人にとつてはきつと違う。毎日一生懸命作ったもので、それを壊すことなんて私にはできない」

「不可解です。貴女の言っていることは理解できない」

ふるふるとシユテルが海に足をつけたなのはを見下ろしながら首を振った。

「貴女たち、管理局と言うのでしたかは人を守る組織だと思っていました」

「そうだよ。私たちは、人を守るためにいつも戦ってる」

「それならば貴女は無人の建造物など気にせず私を倒すべきでしょう。なにせ、貴女達からすれば私たちは貴女達の守りたいものを脅かす存在なのでしよう？」

「そう、なのかもね。もし人を守りたいって思うだけならそれでもいいのかも」

焼き焦げたバリアジャケットに魔力を回して修復をしているのはが静かに目を閉じて胸に手を置いた。

「でも、私はその人たちの心だつて助けてあげたい」

それはきつと人によつて違う。それは助けを求める人に差し伸べる手だつたり、立ち上がれない人を励ますことだつたり、大切にしている施設を守ることだつたりするのだ

ろう。

目をゆつくりと開いたなのは、自分とよく似た容姿の少女を見上げた。

「あなたもだよ、シユテル。私はあなたの力になりたいとも思ってる」

「……不可解です。私はあなたの守るものを脅かすというのに、その私も助けるとい
のですか」

「うん。それが私の偽らない本当の気持ち」

なのはの水晶のような色合いの瞳がシユテルを見つめる。

「シユテルは、何のために戦ってるの？」

「私、ですか」

「うん。シユテルにもあるんでしょ、戦う理由」

「……私は過去に此の身の全てを我が王に捧げると誓いました。全ては、あの方のため
に」

「そっか。じゃあこんな形じゃなくてさ、傷つけ合うなんて悲しい形じゃなくて、もつと
違う方法はないのかな」

「それは絶対じゃないでしょう。私への王からの指示はあなた達を害することではか叶わ
ない」

なのはとシユテル。

片や桜色と片や紅色の魔力光。

片や白と片や黒のバリアジャケット。

片や星光と片や明星。

片や焼け焦げた服のなのはと片やほとんど無傷のシユテル。

みんなのために戦うのはと一人のために戦うシユテル。

どこか似ているようで、どこか違うそんな二人。

「私は、シユテルのことも諦めたくないよ。きつと何か力になれることがあるはずだと信じてる」

「だからその考えは矛盾している。そんな暴論が通ると思っているのですか」

「たぶん、ちよつと難しいんだろうね」

そこでなのはが下ろしていたカノンの砲身を持ち上げてシユテルへと向けた。

「だけど、私の魔法はその為のものだから」

なのはがふ、と笑ってみせる。

「私はずつとそういう無茶を通してきた人を隣で見てきた。だから、私もあの人みたい
に」

「誰のことを言っているかは知りませんが、思いだけで貫ける現実などありません」

「だから、通すよ。私の魔法で、私の想いで」

なのはが、加速してシュテルへと迫っていく。

「デイバインバスターー！」

ごぼ、と辺りの空気をまとめて吹き飛ばしながらカノンによりブーストがかけられた砲撃がシュテルへと迫る。

それをシュテルはルシフェリオンによる砲撃で相殺しながら、素早く迎撃の火炎を放つがなのははわずかな隙間を縫いながらかわしていく。

（動きが良くなりましたね。武装の扱いに慣れ始めましたか）

時にデイフェンサーでシュテルの視界を塞ぎながら、魔力弾を盾で反らしながらなのはが空を飛び回る。

（ならば、長引かせては面倒ですね。早めに落とすに限りません）

シュテルが飛び回るなのはへの攻撃の手を僅かに緩めるとルシフェリオンを両手で握った。

「集え、明星」

辺りの空気が、否、魔力素が胎動した。

（まさか、収束砲撃魔法……?!）

なのはとシュテルの攻防でばら撒かれた魔法になりきれなかった魔力が、ルシフェリオンを通したシュテルの魔法による一つの巨大な火球として収束されていく。

なのははそれに少し遅れた形で、相殺するための収束砲撃を発動しようとして、その手足がバインドに固め取られる。

「このくらいっ！」

だが、この程度のバインドならば数秒あれば破壊できるのが高町なのはだ。だが、その数秒が今は致命的な差と変わる。

「ルシフェリオン——」

火球が蠢いた。

その収束は既に臨界点を迎えつつあり、シユテルの魔法は完成を迎えようとしていた。

（私もスターライトブレイカーを……、でもカノンじゃ間に合わない……！）

『カノン』は基本的には射撃、砲撃特化の武装だ。そこにレイジングハートのような人格は存在せず、ストレージデバイスのような演算機能も存在しない。

けれどそれを代償に砲撃のチャージを手助けする機構が存在する。故に、たとえシユテルから数秒遅れたとしても十分相殺できるだけの威力は確保できるだけのスペックがある。

もし、なのはがカノンの扱いに熟達していたら。

だが、なのはは日頃三課とカレド・ヴルフ社のテスターとして二足の草鞋を履いていた。

それは、カノンに触れる時間が少なかったということであり、レイジングハートほど扱いに慣れていないということでもある。

もしなのはが三課などにおらず、本局の魔導師だったなら、カノンに触れる時間は増え、熟達したカノンの扱いによる速攻での『スターライトブレイカー』のチャージが可能だっただろう。

けれど、現実はそうではない。

なのはの砲撃は間に合わず、シユテルの砲撃は完成する。

猶予は後数秒。それだけあればシユテルはなのはへと業火の砲撃を放つことだろう。

「(なのは!)」

「(ユーノ君! 来てくれたんだね!)」

「(うん、遅れてごめん)」

その時ユーノからの念話がなのはの元へと届いた。見れば遙か下方の遊園地にユーノの姿があつた。

「(なのは、相手の砲撃は相殺できそう?)」

悪いけど僕じゃ力になれそうになくて)」

「ちよつと難しいかも。相手に先手取られちゃったし」

なのはが眉を寄せながら加速した思考で自分の現在の武装へと目を向けて、そしてユーノの使える魔法へと想いを馳せて、よし、と小さく頷く。

「ねえ、ユーノくん、この辺りの施設を守って、ついでにいい感じでなのはのフォローとかしてくれたりする？　ちよつとなのはじゃそこまで手は回りそうになくて」

「（それは勿論いいけど……なのは何を）」

「（よろしくね！　ユーノくん！）」

なのはが念話を打ち切ると同時にシユテルの収束砲撃魔法が完成する。

「――ブレイカー」

紅蓮に染まる火球がシユテルの声とともに収束砲撃としての形をとり、なのはへと殺到する。

凄まじい熱気がなのはの肌をちりちりと焦がし、あまりの熱さに思わず閉じそうになる目を必死に見開いて、『ディフェンサー』での防御を敢行する。

カレド・ヴルフ社謹製の盾は最上級レベルのシユテルの砲撃『ルシフェリオンブレイカー』を食らって尚、持ちこたえてみせる。

「その程度で防げるとは思わない事です」

だが、それも一瞬の事。次第にディフェンサーの表面が魔力と熱量の圧力によって、赤熱化して次第に融解を始める。

シユテルから見えるディフェンサーの体積が半分ほどになり、後ろへと砲撃の威力を漏らし始める。

それを見てシユテルが自身の杖、ルシフェリオンを強く握ると魔力を一層強く込めた。

「ヒート・エンドッ！」

『ルシフェリオンブレイカー』がシユテルの叫びに反応して、炎が炸裂して夜天の空を真昼の如く明るく染めた。

「さて、ナノハは……」

シユテルが先程までディフェンサーがあつた場所、今は融解して鉄くずとなつたものが転がっている海上へと目をやる。

「私の砲撃を防ぐとは、正直予想外です」

「だいぶ、疲れちゃつたし、ユーノくんの手も借りたけどね」

シユテルの視線の先、そこには無数の亀裂の入つた桜色のシールドの向こうで肩で息をするなのはの姿があつた。

「ですが、防げただけです。もう貴女には私と戦う力は残っていないでしょう」

「……そうかもね。魔力はあるけど、ちよつと体の方はきついかも」

「私の勝ちです、ナノハ。命までは取らないでおきます」

「勝ち？ ううん、これでいいんだよ」

そう言つて笑みを浮かべるなのは、シュテルが眉を寄せた瞬間、ソレはやつて来た。

「ぐ、はっ——」

背後から突如、ディフエンサーが現れて、シュテルの背中を強打した。

（これは、ナノハの使っていた盾？ でも、これはさつき融解したはず……）

ディフエンサーがシュテルの背中を強打したそのままの衝撃で、空中のシュテルを海上のなのはの下まで引きずり落としていく。

（まさか、二つ目の盾を砲撃で視界が塞がれたタイミングで海中に隠していた？ そ

れを死角を縫つて——）

なのはがカノンの砲身をを自分の下まで落ちて来ようとしているシュテルへと向ける。

「カノン、ストライクフレイム起動。エクセリオンバスター・A・C・S、スタンバイ」

カノンの砲身に赤い魔力刃が展開され、瞬間的に充填された魔力による加速が組み上げられていく。

「ドライブ・イグニツションッ！」

なのはの身体が爆発したかのように加速し、デیفエンサーに叩きつけられたシュテルの腹部に向けて砲身を向けた。

「いっけええええええええっ！」

零距离まで肉薄したカノンのストライクフレイムがシュテルの腹部に触れた瞬間、蓄えられた爆発的な魔力の渦が砲撃という形をとって一気に放出した。

シュテルを突き抜けるような衝撃は、天へと桜色の柱を屹立させ、そしてその威力はシュテルの意識を刈り取るのにも十分な威力であることには間違いなかった。

「ふう、なんとかなった」

気を失ったシュテルをなのはが抱きとめると辺りを旋回しているデیفエンサーへと目を向けて小さく息を吐いた。

一か八かのデیفエンサーを攻撃に使うという作戦だったが、正直成功するかは五分五分だったのだ。砲撃に隠して、とやうにシュテルがデیفエンサーの残骸が一つしか

ない事に気付いていれば上手くいかなかった。それに、ユーノが気を利かせて防御をいくらか回してくれていなければ砲撃で落ちていた可能性もあった。

「でも、上手くいったからよし、かな？」

「良いわけなでしょ！　なのは、もつとしつかり指示出してくれなきゃ困るよ！」

「えへへ、ごめんユーノくん。ユーノくんならできるかな、って思ってた」

「……できたから良いけど、ちよつと作戦が無茶すぎるよ。あそこは回避が普通でしょ」

「うーん、なんといいかあそこは無茶して逆転を狙うところかなーって思ってた」

「……なのはちよつと作戦が大胆になったね。別に悪い事だとは言わないけどさ」

「そ、そうかなあ」

ユーノの少し呆れたような物言いに、なのはが首をかしげる。

自覚はないのだが、なのはの師匠でもあるユーノがいうならばもしかしてそうなのかもしれない。もしかした。

なのはの脳裏に彼女の中での『無茶苦茶やる人』というイメージの翠の瞳の少年が浮かんでくるが、すぐに首を振って打ち消した。

(そんなに影響は受けてない……はず。尊敬はしてるけど、真似してるわけじゃないし)

心の中で言い訳のような言葉を吐きながら、なのははシユテルを抱え直して本部のある場所へと空を翔けた。



オールストン ・ シーの水族館の入り口付近に設置された本部で、クロノは各自の通信を受け取っていた。

『こちらフェイト、ただ今敵を撃破しました。今から本部へと身柄を移送します』

『こちらなのは、ジェットコースター付近の魔導師の対応終了。今から帰還します』

「了解した。状況が落ち着き次第エイミィに連絡を頼む。僕は今からキリエ・フローリアンとイリスへの拘束に行く」

『了解。気をつけてね、クロノ』

「ああ。そちらも移送者を逃さないように」

クロノが通信を切るとバリアジャケットの胸ポケットからカード型待機状態のデバイス『S2Uクロノの使う杖型汎用デバイス。闇の書事件まで使用していた』を取り出した。

それを見て隣に控えていたエイミーが表情を曇らせた。

『デュランダルクロノの父の形見のデバイス。広範囲氷結魔法が使用可能』、間に合わなかったね」

「仕方ないさ。緊急事態だったし、デュランダルは調整が難しいしね」

クロノが指でカードを弾くと空中で数回転の後に、見慣れた黒い杖型のデバイスへと変形した。

「それに、S2Uだって充分優秀だ。デュランダルにだって劣らないと僕は思ってる」

クロノが落ちてきたS2Uを受け止めると手の中でくると回して調子を確かめると石突きを地面につけた。

「さて、行こうか。この現実を終わらせるために」

クロノは自身に言い聞かせるようにそういうと、オールストーン・シーの目玉、『巨大水晶』がある方へと目を向けた。

束の間の休息

キリエ・フロリアンが地球にやってきたことから始まった一連の事件。

その目的は終わりを迎えつつある故郷『惑星エルトリア』を救うための方法を別世界のロストロギア、『夜天の書』に求めたからであった。

キリエはエルトリアで眠っていた人工知能『イリス』の力を借りて、夜天の書を通して『永遠結晶』をその手に収めようとしていた。

ついにイリスたちがオールストン・シー内の永遠結晶の前までたどり着いたところでイリスがその真の目的をキリエに明かし、永遠結晶の中に眠っていた『ユーリ』と呼ばれる人物を目覚めさせた。

その中でクロノ率いる武装隊が負傷、そしてユーリの力に一時アースラメンバーも壊滅しかけるのだが、アマタ經由で取り入れたフォーミュラシステムを用いたレイジングハートで、なのはがなんとかユーリを打倒。

その後、イリスが負傷したユーリとともに潜伏する事で、一連の事件は一旦の休戦状態へと突入した。

イリスにより負傷させられたクロノは治療が終わり次第、潜伏したイリスへの対応

へ。

シユテル、レヴィ、デイアーチエの三人は一旦本局預かりになり、はやてと守護騎士とともに東京湾の仮設本部で待機。

異世界渡航者のフロリーアン姉妹は本局での治療、そして聴取が行われた。

そしてユーリとの戦闘の際に軽い怪我をしたなのは、それに付き添うようにフェイトは本局の装備科でデバイスの改修が行われている間、束の間の休憩ということになった。

「うん、じゃあねアリサちゃん、すずかちゃん」

モニターに映し出されたなのはフェイトが手を振ると、画面の向こうの友人たちも同じように手を振って、通信が切れた。

ほう、となのはが息をつく。

「なのは疲れてる？」

「ううん、大丈夫だよ。ちよつと喉が渴いただけ」

心配そうに顔を覗き込んでくるフェイトの質問を否定して、なのははストローからジュースを飲んだ。

「本当に？」

「大丈夫だって、フェイトちゃん」

「……なら良いけど」

「心配してくれてありがとう。さ、早くご飯食べちゃおう？」

につこりと笑ってみせるなのはにフェイトは渋々と言った様子で引き下がる。

ユーリとの戦いで足首を捻り、その前のシユテルとの戦いでも少くないダメージを負っていたなのは。たった半日程度で疲労がなくなっているはずなのだが、なのははそれをおくびにも出そうとしない。

(私じゃ、頼ってもらえないのかな)

もむもむとサンドイッチを頬張るなのはの横顔をフェイトが盗み見る。

なのははフェイトにとつて大切な友人だ。初めて自分のところまで踏み込んできてくれて、そして何度も手を取り合つて一緒に走ってきた。

なのはに助けられた記憶は数え切れないほどある。

なのはが助けているのを隣で見ていることも、一緒に助けようと戦った記憶も同じくらいある。

しかし、自分がなのはの助けになっているかと言うと自分でははつきりわからない。なのはは弱音を滅多に吐かない。

辛いことがあつても、悲しいことがあつても、静かに拳を握つて戦う人間だ。

フェイトはそれを頼もしく思う反面、危うくも感じていた。

一人でガチガチに固まって、いつかポツキリと折れてしまいそんな感じがしているのだ。

そんな事がないようなのはには自分や、はやてなどの同じ悩みを共有できる友人に相談をして欲しいのだが、一朝一夕で変わるものでもないだろう。

それこそ、一度なのはの人生観が変わるような大きな出来事が――

「フェイトちゃん！」

「へ？」

「もう、さつきからぼんやりしてるよ？　　なにか考え事？」

「あ、うん、ちよつとね」

呼びかけられた声に弾かれるように意識が深層から帰ってくる。

首をかしげるなのはに言葉を濁して答えながらフェイトもサンドイッチを一口頬張った。しやしやしきとしたレタスの歯ごたえを感じながら、自分を律した。

なのはのことを考えるあまり、逆に心配されるとは本末転倒もいとこらだ。

せめてこれ以上なのはに負担をかけないように自分は努力しなければならぬのだ。

「そういえば、なのはのフォーミュラモードってどんな感じなの？　　見た目はあんま

りカノンとは変わってないけど」

「フォーミュラの？　　うーん、そうだなあ」

サンドイッチを食べながら思いついた質問を試してみるフェイト。

「アミタさんも言ってたけど、あれってナノマシンが周囲のエネルギーを変換して体に供給してくれるんだけど、あんまり私の魔法とは相性が良くないんだよね」

「なのはの魔法っていうと、砲撃？　いつもとあんまり変わってないように見えたけど」

「ちよつと感覚的な説明になっちゃうけど、ミッドの魔法と違って、エルトリア式フォーミュラってエネルギーが流動的な気がするんだよね」

「流動的？」

「そうそう、なんとというかエネルギーが動き続けてるっていうのかな？」

アミタの戦法やイリスのバトルスタイルを見ればわかるが、基本的にエルトリア式には、なのはが撃つような砲撃は存在しない。

それはフォーミュラが原則、『エネルギーを溜め込む』といった方法をとらないところに問題がある。

ナノマシンで変換したエネルギーを体に供給し、それにより稼働率を向上させることにより『アクセラレイター』やヴァリアントシステムを起動させる。

故に、どちらかといえれば生じたエネルギーを瞬間的に込める弾丸による銃器や、エネルギーを纏わせ続ける剣といった武器が多用されることになる。

言ってしまうえば、魔力を一点に溜め込むのは収束砲撃などとは対極にあるとも言える運用方法である。

なので本来はフォーミュラによるエネルギーの供給を行いながら、砲撃を打つというのはあまり噛み合った戦闘法ではない。

「けど、その時はそんなに贅沢も言ってもらえなかったから、カノンを砲身に見立ててエネルギーを充填させてたんだ。こう、逃げていかないようにぐるぐるーって回して」

「——??？」

「うーん、説明するのが難しいなあ。イメージ的には水鉄砲とかがわかりやすいのかな」
首をほとんど九十度に曲げそうになっている親友の姿になのが困ったように笑う。

「水のことを魔力って考えて欲しいんだけど、ホースから水を勢いよく出すのがいつもの砲撃。リンカーコアから魔力を吸い上げながら撃つスタイルね」

「う、うん」

「それで、フォーミュラモードの砲撃は、ホースじゃなくて水鉄砲って感じ。あらかじめ用意された水鉄砲に水を込めてぴゅーっと撃つ感じ」

「それならなんとなくわかる、かな？」

「あはは、上手く説明できなくてごめんね。なのはもちよつと感覚的に使っているとこあるから」

本当は水と油を均等に混ぜ合わせるに近い無理難行なのだが、それを感覚でやってしまえるのはは砲撃と魔力運用に関しては天賦の才があると言えるだろう。

おそらくミツドの魔導師にフォーミュラを渡しても同じ事ができる人間は数えるほどしかないことだろう。

「イメージ的にはセルジオくんの『ゼファー』の砲撃なんか近いんだけど、フェイトちゃんはわからないよね……」

「んー、それはちよつとわからないかな……」

「だよねー」

あいにくフェイトは『海』所属の魔導師。『陸』のセルジオと一緒に仕事をする機会は滅多なことでは訪れることはないだろう。

なのはの手が自然に胸元の服の下にあるものへと伸びると、ちやり、と金属がこすれるような軽い音。

「セルジオくん、無茶してないかなあ」

そしてなんとなしにそう呟いてしまった事をなのはは気づかない。それは口にした、というよりは心からこぼれ落ちたものに近いように思えた。

(また『セルジオくん』だ)

隣には私がいるのに、という可愛らしい嫉妬と、その人とはどういう関係なんだろう

という興味がフェイトの中で混ぜこぜになる。

最近のなのはごくたまに胸元を触りながら『セルジオくん』という名前を出すことがある。

その度にアリサやはやてからは茶化しの言葉が飛ぶのだが、なのはいつも「先輩」とか「パートナー」だとか「尊敬してる人」と首を傾げながら答えを返す。

その真意はわからないが、首を傾げているあたりなのはにもわかってないんじゃないかな、というのがフェイトの意見だ。

(たぶんなのはなら友達なら友達って言いきると思うし)

それができないということはたぶんなのはも『セルジオくん』との関係をうまく言い表せないのかもしれない。

なのは名前をつけられない関係。じゃあ、その人はいったいどのような人間なのか。

「ねえ、なのは」

名前を呼ぶと聞こえていた軽い音が止まって、なのはの視線がフェイトへと戻ってくる。

なのはの透き通った瞳に映った自分を見つめながら、フェイトは自分の今の疑問を丁寧に言葉にしていく。

「ねえ、なのはにとつて友達って——」

フエイトが口にしようにとした言葉を、唐突に響いた電子音が遮った。

二人が同時に目を丸くして、なのはのポケットを見つめる。

「あれ、通信？　クロノくんかな」

なのはが取り出したのはデバイスの代わりに貸し出された通信用端末。先程までアリサたちとの通信に使っていたのだが、どうやら誰かからの連絡が来たらしい。

「ごめんフエイトちゃん。一回通信に出てもいいかな？」

「あ、うん。それはもちろん。私の話は別に今すぐじゃなくてもいいし」

「ごめんね、と手を軽く合わせたなのはは、通信端末を操作して通信に応じた。

『高町ツ！　お前大丈夫なのかっ!?!』

目の前にウインドウが現れた瞬間、鋭い声が二人の耳に届いた。

『今どこだ？　病院か？　怪我の具合は？　いやそもそもなんで有給で事件に巻き込まれてんだ？』

ファンタジスタか？　そういう星の元に生まれついてるのか

？　それに——』

「ちよ、ちよつと待って」

『よく見ればその背後の売店本局だな？　いるのは食堂、待ち時間潰しってところか。』

なら聴取中か？　ということとは異世界渡航者、もしくはロストログアかなんかが漂流

してきたか？ 規模は？ 一応俺も現場に——』

「もうちよつと落ち着いてよセルジオくん！ 隣でフェイトちゃんがびっくりしてるから！」

『む、すまん。つい、な』

少し声を荒げて自身の声が遮られるとモニターの向こうの、翠の目の少年——フェイトの記憶が正しければセルジオ・アウデイ——がふう、と息をついた。

『少し落ち着いた』

「うん、それなら良かった——」

『それで怪我の調子は？ どこをどのくらいやった？ ちゃんと医者に行けよ。もし長引いたら事だからな』

「全然落ち着いてない！ むしろものすごく焦ってるよセルジオくん！」

『煩い。お前が怪我したとか言われた状況で落ち着いていられるか。それでどのくらいの怪我をやったんだ？』

「ええと、捻挫、かな……」

『捻挫だと？ くそ、俺が近くにいれば………捻挫？』

「うん、捻挫」

『捻挫』

「しかも結構軽いやつ」

『軽いやつ』

「魔法を使えば明日には治るくらい」

『明日』

モニターの向こうのセルジオがめちやくちや強いボスにレベリングしまくって挑んだらあつさり勝ててしまったような、何とも言えない微妙な表情を浮かべた。

『……嘘とかじゃないよな』

「すごく重い怪我だったらなのは本局じゃなくて病院にいると思わない？」

『言われてみればたしかにそうだな……』

なのはにされた指摘にセルジオが一瞬目を丸くして、ちつと小さく舌打ちをした。

『くそ、クロノめ紛らわしい言い方しやがって。心配して損したぞ』

びく、となのはの耳が動く。

「心配、してくれただんだ」

『——！ 別に、心配なんて。ただ後輩に俺のいないところで怪我されたら寝覚めが悪いだけだ。他意はない』

「そっか」

それ以上追求することなく柔らかく笑ったのはにセルジオが居心地悪そうに目を

逸らした。

『無茶、するなよ』

「大丈夫だよ」

『……………本当に、無茶はするな』

「人一倍無茶するセルジオくんには言われたくないかな」

『お前だつてさして言う筋合いがあるわけでもないだろ』

「セルジオくんだけには言われたくないですー!」

お前らどつちもねえよ、と言う人はここにはいない。ぷく、と頬を膨らませるのには、呆れたように息を吐くセルジオ。

セルジオの視線がなのはから、隣のフェイトへと滑る。

『君はフェイト・テストロツサ・ハラオウン、確かクロノの義妹だな』

「え、は、はい!」

『そう固まらなくていい。俺は君の上官なんかじゃない』

突然名前を呼ばれて背筋を正したフェイトにセルジオが軽く手を振ってみせる。

『君は随分と強いと聞いている。今回も高町たちと一緒に出撃するんだろう?』

「一応、前線で動くつもりです」

『そうか。なら高町のことをよろしく頼む。君はよく知っているんだろうが、どうにも

危ういところがあるだろう、高町』

「あ、確かにそうですね。ちよつと無理しがちってどうか」

『やはりそう思うか。俺は陸の人間だからそちらに行くことはできないが……変なことをしでかさないように手綱を握ってやってくれ』

「はい、わかりました。任せてください」

最後には笑みとともに頷いたフェイトは、モニター越しの人物への印象が少しだけ変わるのを感じた。

「セルジオさんつてもつと厳しい人かも思っていましたけど、実は優しい人なんです」

『……そうだろうか?』

「はい、わざわざこうしてなのはに連絡を入れるくらいですし、優しい方だと思います。それに、とフェイトが思い出したように言葉を付け加えた。

「さっきのなのはを心配してないっていうの嘘でしょう?」

『え』

「え」

「ふふ、びっくりしました? 流石にわかります。でも、ダメですよ、ちゃんと気持ち

は言葉にしないと。本当は心配してたんでしょう?」

『いや、それはその言葉の綾というか……』

「え？ 心配してましたよね？ あんなに焦って通信してくるくらいですし」

『……く、なんだこれ、なんだこれ！ これはなんて羞恥プレイだ！』

「——？ なんて恥ずかしがるんですか？」

「フェイトちゃん……」

フェイトの無意識の純真さが羞恥の刃となつてセルジオを責めていた。

『通信は以上だ！ 怪我とかするなよ高町！』

「あ、きれちゃった」

「なんでだろうね、不思議」

「フェイトちゃんってナチュラルに鬼畜なところあるよね」

「えっ?!」

「うん、わかんないならいいんだ。わかんないなら」

最後は半ば無理やり切られた通信になのはが遠い目をして、セルジオをほんの少しだけ気の毒に思った。



『お前わざと言葉ぼかして俺に伝えたる』

「さて、何の話だ？」

『とぼけるなよ、高町の事だ』

モニター越しの翠の瞳が細められて、じとりとクロノを睨んでくる。

「ぼかすも何も君の方が『なのはが怪我した』と言ったら鬼気迫る表情で連絡させろ、と言ってきたんだろう」

デュランダル の 保管庫 から で た クロノ は、折り返してきた通信に出て呆れたように息をついた。

「この件に関して僕は責められる謂れはないぞ」

『そう、だったか』

「ああ、そうだとも。エイミィ、君も覚えているだろう？」

「うんうん、セルジオくん、なんとというか他のことなんか目に入ってないって感じだったもん」

『む……』

セルジオが少ししたじろいだ。どうやら気が動転でもしていたのかそこらへんの記憶

が今ひとつはつきりしていないらしかった。

その様子を見て、エイミーがにやと意地悪な笑みを浮かべた。

「セルジオくん、よつぽどなのはちちゃんが大切なんだねえ」

『……部下の心配をしたただけだ。他意はない』

「うんうん、わかっているわかつてる。他意はないよね」

『リミエツタ、言いたいことがあるなら俺は聞くぞ』

「あつはつは、何もないつて。ただ、なのはちちゃんは愛されてるなあ、と思つたわけです

よ」

『勝手に言つてろ』

エイミーのからかいに苦い顔で応じたセルジオ。否定するだけ無駄、ということは士官学校時代からの知り合いだからこそわかることなのかもしれない。

ふう、と息を吐いて一旦感情を落ち着けると、姿勢を正してクロノへと向き直る。

『クロノ』

「何だ」

『高町の事、任せた。お前なら信じて任せられる』

「——任せてくれ。君の相棒は無事に返すと約束する」

『……頼む』

ぺこり、とモニターの向こうで下げられた頭に少しだけクロノが笑みを漏らす。

「なんだかおかしいな。これじゃあ、去年とはまるで反対だ」

『確かに今さら俺が頼むことでもなかったな』

一年前には、なのはを預ける側だったクロノが今ではセルジオからなのはを預けられているという状況。それはセルジオがなのはを『三課の仲間である』と感じている証拠で。

クロノはその事がなんとなく嬉しく感じた。

『それじゃあな、クロノ』

「セルジオもまた。事件が終われば報告に行こう」

ぶつり、と通信が切れると隣のエイミーが困ったように肩をすくめた。

「セルジオくんもなのはちゃんの手が大切なら大切って認めちゃえばいいのに」

そのエイミーのぼやきにも似た呟きに、クロノは全くだと苦笑いととも頷いた。

夜天の守護者『ユーリ』

エルトリア出身のテラフォーミングユニット『イリス』
奪われた『夜天の書』

地球の魔導師

エルトリアのフローリアン姉妹

時空管理局

様々な要因が複雑に絡み合って引き起こされた一連の出来事。

もうすぐ、エルトリアと地球、二つの世界の未来をかけた戦いの火蓋が切られようとしていた。

不可視の意思

東京タワーから東京の街を見下ろしながら『イリス』が目を細めた。

「始まったわね……」

イリス間のネットワークを通して、各地で戦闘が始まったことを感じ取る。

「随分広範囲に結界を張っているのね。少し骨が折れそう」

親指の爪を噛んで、イリスは小さく舌打ち。

現在管理局が張った結界は関東全域面積にして32, 420 km²。その広すぎる範囲を管理局の魔導師は東京の各所に基点を作ることカバーしている。一つはスカイツリー。もう一つはおそらく東京ドームと思われる。を覆い、その中では外への通信は不可能となっている。

「私の手札は量産した私の模造品いわゆる『群体』イリス。多くは『量産型』だが中には意思や個性を持つ『固有型』と呼ばれる個体も存在する。と、機動外殻地球の鉄資材を元に作られた巨大兵器。有り体に言くと巨大ロボ、そしてユーリ。時間はかかるでしょ

うけど、戦力としては充分ね」

そう呟いて、自分の口から出た『ユーリ』と言う単語に胸の中がざわつくのを感じた。イリスは、エルトリアの『惑星再生委員会過去エルトリア再生を目指していた組織。研究中の事故によりその全員が死亡している』の製作物であるテラフォーミングユニット惑星再生委員会の製作物。フォーミュラ及びヴァリアントシステムを戦力として持つ。またヴァリアントを応用した事故増殖機能を持ち資材さえあれば無限に増え続ける。『群衆』イリスはこの機能により生み出されている。であり、その目的は過去に親友と呼んだはずの『ユーリ』『夜天の書』に付き従っていた守護者。非常に高い戦闘力を誇る。『永遠結晶』の中で眠っていた。』への復讐にあった。

その為に父を救いたいキリエを騙し、わざわざ遠い世界までやってきた。

そういう意味では、イリスはこの一連の事件の首謀者と言えるのかもしれない。

「……ユーリ」

その名前を口に出すたびに脳裏に蘇るのは、自分の大切だったものが全て壊された日のこと。

父と慕う人を、家族と想っていた大人たちを、自分の夢も全て、踏みにじられた。

他でもない親友だと思っていた人物によって。

嘘だと思いたかった。何かの勘違いだとも思いたかった。でも、現実はそのような

かった。

だって、イリスが血だらけの父を抱きしめながら問うた時、ユーリ自身が『自分がやった』と言ったのだから。

その言葉を聞いてイリスは思わずユーリを殴り飛ばしていた。そして、涙で滲む視界の中で、ユーリの体に父の血の赤が見えた時、まともな思考は全て吹き飛んだ。

殺してやる、と思った。

仇をとつてやる、と思った。

いつそ殺してくれ、と思った。

しかし、その全ての思いは叶えられることなくユーリはエルトリアを去った。

体が朽ちて、思考だけが遺跡板の中に封じ込められてからは、ユーリを忘れたことなど一日たりともなかった。

常に復讐だけを心の糧として、ユーリに同じ事をやり返し、絶望を叩きつける日を夢に見て必死に生にしがみついていた。

全てはユーリへの復讐のためだけの十数年だった。

「猫たちも、関係ない命も、この世界も、全部、全部あの子に殺させる。そして、私と同じ絶望を刻みつけてやる」

イリスが冷たい目でユーリがいるであろう方角へ吐き捨てるようにそう言った。

「だから、その為にまずは結界の破壊ね。そうしなければ、何も始まらないわ」
その言葉に質問を投げかける存在はない。

無数の群体イリスは個にして群、群にして個。

その意思はイリスの指示の元に統括される。故に、イリスの行動にも指示にも質問が投げかけられることはない。

「急いで行動しなくちゃ。最後に、笑うために」

自身の故郷とはまるで似ても似つかぬその風景を見下ろしたイリスの瞳が、ほんの一瞬赤く光った。



「せあつ!」

「——ハッ!」

東京の地下鉄の線路上で、裂帛の気合の声とともに二つの影が斬り結ぶ。

ラベンダーの色とともに地をかけるのははやての守護騎士が将『剣の騎士』シグナム。

右手には炎を纏わせた愛剣『レヴァンティン』を振るう。

対するのは片刃の長剣を手にした『固有型』イリス。本体とは似ても似つかぬ長い茶髪を揺らしながら、シグナムの斬撃を跳ね上げるようにして弾いた。

ちり、とシグナムの魔力が変換された炎が固有型の頬を撫でるが、全く身じろぎすらしない。

その容姿は変わることのない表情のせいか、作り物めいた美しさと、刃のような冷たさを宿している。

刃を交えながら「どこか昔の自分に似た雰囲気だ」とシグナムがひとりごちる。

「随分と良い太刀筋だ。量産品とは思えんな」

「当然だ。私は他の機体の約30体分の素材からできている」

「成る程。貴様が強いのも道理というわけか」

ふ、とシグナムが薄く笑みを見せながら剣を振るう。

「理解不能だ。何故笑う」

「む、すまんな、気を引き締めなければならぬのはわかっているが、好敵となるとどうにも抑えきれん」

「お前は戦闘行為に愉悦を感じるのか？」

「行為自体に楽しみを見出すのではない。好敵との戦いの過程に意味を感じるのだ」

「戦闘とは目的を勝ち得るための手段だ。過程に愉悦を感じるのは不合理だ」

「こればかりは性分だからな。機械である貴様には、理解しがたい話なのかもしれんが」
そう言うシグナムが苦笑した。

もしかすればプログラムであるシグナムがそういうのもどこか皮肉な話である、と言ったことを考えてるのかも知れなかった。

二人の剣戟は絶え間なく響きながら、薄暗い地下鉄の中を炎と、エネルギー光により断続的に明るく照らす。

シグナムが横薙ぎに剣を振るうと、それを量産型は峰の部分で受け止め、シグナムの騎士甲冑から覗いた足を払おうとローキックをしてくる。

だがそれをシグナムは空いた左手でレヴァンティンの鞘を動かす事で防いで見せると、受け止められた刃にぎりぎり力を込めた。

炎の魔剣が量産型の剣を押し込んでいき、炎が肌を焼く直前で固有型は自分から後ろに飛んでシグナムと一旦距離をとった。

(なんとなく間合いは掴めたな)

守護騎士であるシグナムと固有型イリスの身体性能は概ね互角。

「レヴァンティン、行くぞ」

《 J a w o h l 》

ならばそれを分けるのは積み上げてきた技量の差に他ならない。

シグナムが自身のデバイスを呼びかけると、相棒は短く了承の意を示した。

ラベンダーの魔力光にシグナムの体が包まれると、地を蹴って固有型へと一気に肉薄していく。

固有型も同じように体に光を宿しながら両手で握った剣を唐竹に振り下ろして迎撃を行う。風を切る音とともに白刃がシグナムの頭を狙う軌道で振るわれる。

高い肉体の性能よるその一撃は常人では目で追うのは困難なほど鮮やかで、素早いものであった。

「だが、速いだけで届く刃はないと知れ」

シグナムは腰の鞘を左手で引き抜くと、刃を滑らせるようにして逸らして、固有型の懐へと潜り込んだ。

「レヴァンティンッ！」

《《 Explosion! 》》

業、とレヴァンティンに纏われた炎が主人の魔力を吸い上げて、今までよりも一層紅く燃え上がった。

シグナムが弾いた勢いをそのままに鞘を動かしてレヴァンティンの刃を納刀して、カートリッジを装填する。がしよん、とユニットが動くで一発分の魔力のブーストが

かる。

「——紫電一閃ッ！」

闇の中で焔く炎の剣は、抜刀の勢いそのままに腹部から肩口にかけて切り上げながら魔力ダメージのみを固有型に与えてみせる。

「あ、か……」

非殺傷モードによる魔力付与の一撃は的確に殺さないよう加減されて固有型の意識を刈り取った。剣の扱いにおいて熟達し、達人の域に足を踏み込んでいるシグナムだからこそ可能な妙技。

呻き声を上げながら倒れる固有型を視界の端に捉えながら、シグナムが空中でレヴァンティンを軽く薙いで炎を消した。

「すまない、誰か此奴を拘束してくれないか。私はあまりバインドが得意でなくてな」
量産型イリスの拘束に当たっていた魔導師の一人が杖を片手に駆け寄ってきて、シグナムの足元に転がっている固有型を拘束し始める。

それを確認したシグナムはふう、と小さく息をついて静かに鞆に剣を納めた。



シグナムが固有型と刃を交えている頃、高町なのはと八神はやては『オールストーン・シー』で別の固有型との交戦。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは結界防衛の要である東京ドームに。

シグナムを除いた他の守護騎士も各地で固有型との戦闘を。

そしてディアアーチェ率いるレヴィとシュテルの三人は夜天の守護者たるユーリと交戦中。

そして時空管理局東京支部の支部長たるクロノ・ハラオウンが何をしているのかという。

「デュランダル」

《 ok, boss 》

ほう、とクロノの吐息が白く染まる。

それは地球の季節でいう『冬』などの寒い時期にしか起こりえない現象であり、七月半ばである現在、いわゆる『夏』に起こるはずがないもの。

ならば、いかな理由で白い吐息が出ているのか。

その答えはクロノが行使した魔法により明らかになる。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ」

眼下の街に動く無数の機動外郭、量産型を視界に捉えながらクロノが静かに詠唱すると、その意思に従うようにして周囲を旋回していたビットが捜査範囲限界まで飛んでいく。

「——凍てつけ！」

《 Eternal coffin 》

クロノの詠唱によりデュランダルが唸りを上げて、Sランクの高範囲凍結魔法を発動させる。

はじめに一陣の風が吹いたかと思うとクロノの魔力がデュランダルの機能により、氷結の息吹をへと形を変える。

クロノの魔法により発動した吹雪は旋回するビットによって反射、射程範囲を広げていきながら、辺り一面を白銀の世界に閉じ込めた。

「状況終了。エイミイ敵性反応は」

『バッチリ沈黙してるよー。たぶん取りこぼしはないよ』

「わかった。一応周囲を確認した後次のポイントへ急行する」

『オツケー。敵の生産拠点と洗っておくね』

「頼んだ」

クロノが吹雪の中一人で小さく息を吐いた。

『エターナルコフィン』。

今したようにその気になれば一つの都市をまるごと凍りつかせることすらできる大規模凍結魔法。

それは本来なら魔力量がさほど多いわけではないクロノにとって一回使うのすら困難なもの。

しかし、それをクロノは彼の父の形見のデバイス『デュランダルテレビ版ではギル・グレアムに製作されたものだが劇場版では父の形見ということになっている。Force Detonaterではクロノの父の形見をグレアムが受け取っていたということになっている。理由は形見の方がかっこいいから。』に備え付けられている凍結機能により遥かに少ない魔力で発動を可能にしていた。

だからといって魔法の難度が下がるわけではないし、その削減された魔力も軽視できるレベルではない。

発動速度、射程範囲をこのレベルまで持つてこれているのは一重にクロノの努力の賜物であった。

空を飛びながら凍りついた機動外郭や、雪に埋まるようにして固まった量産型を見な

がらクロノが眉を寄せた。

「こいつらは何故結界外部を目指しているんだ？」

それはクロノがイリスが動き出していた時から感じていた疑問だった。

「イリスの目的は言動から察するにユーリへの復讐。なら、何故結界から出ようとする」
本当にユーリが憎いならすぐに殺せばいい。

ユーリに人を殺させたいならユーリを戦力に組み込まず単体で結界外周部を目指させればいい。

ユーリの真意を聞き出したいなら量産型を作るなど捕捉される可能性を増やさず
ずっと潜伏しておけばよかった。

結界を壊したいなら全戦力をスカイツリーにでも集めればいい。

ちぐはぐだ。イリスの行動は言葉と矛盾する点があまりにも多すぎる。

「イリス、君は一体何を企んでいる」

クロノは直接イリスと言葉を交わしたわけではない。けれど、ユーリの残した映像か
ら推察されるイリスの目的からはあまりにも行動が伴っていない。

「何か、なにか、言葉にできないものが動いている気がする」

執務官としての経験が警鐘を鳴らしている。

理知的なクロノとしてはこうした直感あまり好まないが、時に経験則に基づく感覚

がバカにできないことをクロノは知っていた。

「今考えても答えは出ないか」

だが、それは後回しだ。

今はすべきことが他にもある。

「今回の事件、一筋縄ではいきそうにないな」

銀色に染まった街並みに佇む巨大な機動外郭をひと睨みすると、クロノは背中を向けて次のポイントへと飛び立って行った。

「ふむ、なかなか驚異的な能力だ」

クロノが立ち去った街で、その声が響いたことは誰も知らない。

見えない意思が、動き出そうとしていた。

侵食する意思

「全て、思い出した」

ユーリの拳を握った瞬間、デИАーチエ達の中で消えていた全ての記憶が帰ってくるのを感じた。

自分たちがエルトリアに生きた猫だったこと。

ユーリに命を救われたこと。

主人であるユーリを救うために力を欲したこと。

その全てを思い出した。

「我らは、ユーリのために力を欲した」

王の魂、デИАーチエが。

「私たちは、ユーリの事を守りたかった」

王の為の炎、シユテルが。

「ボクたちは、ユーリのこと大好きだった！」

王の為の雷、レヴィが。

自身の主人であった『ユーリ・エーベルヴァイン』という優しかった少女のことを思

い出す。

それと同時に彼女たちが『無限の力』を欲した理由も。

「ならば、取り戻さねばなるまい、我らの主人を」

黒が、赤が、青が、夜空を駆ける。

「シユテル！ その炎は何のためにある！」

「王の敵を斬り払い、主人の未来を照らす為に！」

黒が問い、赤は静かに、けれど熱さを滲ませながら答える。

「レヴィ！ 貴様はその雷で何を成す！」

「王様の為に敵を倒して、あの子の元に誰よりも早く行く為に！」

黒が問い、青は声高々に、眩しく笑いながら答える。

「ならば私の闇は貴様らを包み、ユーリを守る為の存在であろう！
それが、王たる我

の使命だ！」

黒が、王としての自分を誇るように、叫んだ。

赤と青と黒の魔力が夜天を彩る。それは星のように、虹のようにただ眩しく輝いた。

三人はユーリの鎧装の機械腕から逃げ回りながら、己がデバイスによる迎撃の魔力弾を放つが、ユーリはさしてダメージを負う様子は見られない。

「早く、逃げて……下さい」

それどころか敵と認識させられているはずのディアーチエ達を気遣う始末。

意思の力だけで抗おうとするユーリだが、イリスにより打ち込まれたウイルスコードの力は強くその意に反して、目の前の存在を塵殺へと駆り立てる。

機械腕が飛び回る三人を殴り飛ばそうとし、発動した魔法は常に追尾しながら撃ち落そうとしてくる。

その力はユーリの全力からは程遠く、おそらく六割かそこらの出力しか出せていないだろう。

けれど、ユーリとはディアーチエ達三人を相手取っても余りある實力差が存在する。

「あ、ああああああああっ！」

ユーリの意思に反して魔法が発動。『炎の矢』と呼ばれる広範囲型射撃が空を埋め尽くすように放たれた。

「くっ——！」

視界の端から端までユーリの魔力光に染められ、回避は不可能と断じたディアーチエは魔導書型デバイスから無数のページを飛ばして、臣下と自分の前に多重の防壁を展開した。

「ええい、埒が明かん！」

シユテル！

レヴィー！

一気に決めるぞー！」

「りよーかいつ！」

「心得ました」

炎の矢が止まったタイミングでレヴィとシユテルが防壁から飛び出すと、それぞれ青と赤の魔力を纏わせて加速した。

「く、うううううっ!」

それを撃墜しようとした機械腕がシユテルとレヴィに迫り、シユテルは左腕に、レヴィはバルフィニカスに魔力を集めた。

「ブラストクロウツ!」

「光翼連斬ツ!」

シユテルの左手のアームがユーリの機械腕を受け止めると炎を爆発させながら粉々に砕き、レヴィに素早く振るわれたバルフィニカスは二つの魔力刃を飛ばして、四分割してみせた。

「いくよ、シユテル!」

「ええ、レヴィ!」

機械腕を砕きユーリの防御が緩むその瞬きほどの隙を見逃さず、レヴィとシユテルがフェイトとなのはから汲み上げた魔法を応用し、チェーン付きのバインドで腕を縛り上げた。

「後は任せました」

「最後は王様が決めて！」

臣下は彼女たちの王へと呼びかける。

生涯の忠義を捧げた、彼女たちの王へ、信じて、託した。
ならばそれに応えるは王たる存在の責務であろう。

「ああ、大儀であつたシユテル、レヴイ」

バインドに縛り上げられ、身動きが取れなくなつたユーリを見据えてディアーチエが
尊大に頷き、ゆつくりと杖先を己が主人へと向けた。

「デイ、アーチエ……逃げて……」

「断る。王たる我に指図するとはいかに主人といえど許すとは思わん事だ」

「私の為に、あなたたちが、傷つくのは、みたく……」

「……この戯けが」

苦しげに言葉を漏らすユーリにディアーチエが目を怒らせる。

「我らが命をかけるのは我らの為だ。貴様という主人を救いたいという我らのエゴに過ぎん。断じて貴様の為などではない。勘違いするな」

「……」

「涙を流している我らの主人を救いたいというこの願い！ 神にも！ 悪魔にも！

この世の何者にも！ 否定などさせてたまるものか！」

ディアーチエが叫びながら、目の前に魔法陣を展開した。

「それが、ユーリ！ 例え貴様であつたとしても！」

その色は全てを飲み込む闇であり、夜天の空よりもただただ黒く、暗い。

「だから、貴様は大人しく我らに救われていろッ！」

「ごう、と魔力が唸った。

「我らが得たこの力をもつて—— 貴様を今その縛の鎖から解き放つッ！」

ユーリの視界が、黒く染まる。

「出よ巨獣—— ジャガーノートオオオツ！」

ディアーチエから放たれた極大の砲撃魔法。その色はどこまでも暗いにもかかわらず、なぜかそれに包まれたユーリはどこか暖かく、満たされるような感覚がした。

（ああ、あの子たちが私を助けてくれる日が来るなんて——）

ユーリが身を包む微睡みに身を委ねようとした時、思考の中にノイズが走るのを感じた。

——それじゃあ駄目だよ、ユーリ。

(え?)

ばちり、赤いスパークが弾けた。

「ユーリの力が増大した?」

「はい。母様が予測していた数値を遥かに上回るエネルギーが検出されました」

東京タワーの一角でイリスが眉を寄せた。

(ユーリが自分の意思で反抗する限り最大出力が出るはずがないと思っていただけ、まさかあの子が猫たちを自ら?)

その推測をふるふると首を振って自分で否定した。

(あり得ない。あの子が自分の意思で誰かを殺す事なんて——)

ばち、と思考が弾ける。

「あれ、今何を考えてたんだっけ……?」

「母様?」

「……何も無いわ。ユーリの事は放っておいていい」

突然黙り込んだイリスの態度を不審に思ったのか、量産型の一人が首を傾げた。

「早く、結界の外に出なきや……」

熱に浮かされるようにイリスが呟いた。

「早く、早く」

その目に、赤いプログラムコードが走ったのに、誰も気づく事はなかった。

固有型、シグナムと剣を交えていた個体がしばらくの間をおいて意識を取り戻す。

(……………私は、負けたか)

ゆっくりとした速度で自分のメインコンピュータ、人間でいうと脳の領域が稼働し始め、記憶を再生し始める。

(……)は、先ほど戦闘を行った場所か)

固有型はぼんやりとした意識のまま現状を確認し始める。

体は何やらエネルギーにより拘束されており身動き一つ取れない。フォーミュラをシステムとして保有する固有型にかかれば時間さえあれば解析して破壊ができるだろ

うが、今の固有型は先のダメージが糸を引いていて、直ぐに実行するのは難しそうだった。

(あの、剣士はいないな)

自分に杖を向けている魔導師の男たちを薄く開けた目で確認して、さらに周りを見回した。

(私との戦闘が終わり別の地点へと赴いたか)

炎の剣と、ラベンダーの光。

自分との戦いで笑みを浮かべていたあの不可解な剣士。

手も足も出なかった。肉体性能では互角だったにも関わらず、自分を大きく上回る技量によって容易く斬り捨てられた。

(……情けないな)

事実を言葉にして浮かんできたその言葉に、固有型が心の中で首を傾げた。

(なぜ、今私はそんな事を？　まるで感情があるように……?)

『群体』イリスに個人の意思はない。なぜなら全てはイリスという母体から製造された機械であり、兵器である。

故にいくら固有型とは言え個人の意思が芽生えることなどないはず。けれど、今自分
はまるで心があるように『情けない』と――

「やあ、彼女を解放してやってくれるかな。私の大切な娘なんだ」

かつん、と地下鉄の中に高い音が響いた。

(なんだ……?)

「何者だ! その服装、管理局の人間ではないな」

がしやん、と向けられていた杖が固有型の背後の空間へと照準を定めた。横向きに倒れている固有型にはその背後の光景を伺い知る事は出来ないが、どうやらそこには敵となる誰かがいるらしかった。

(共有ネットワークには反応がない。群体ではない……?)

今管理局と争っているのはその全てがイリスの手駒の筈だ。ならば杖を向けられているのは『量産型』、『固有型』イリスのどちらかの筈であり、それならばイリス間に繋がれたネットワークで識別できる。

けれど、今背後にいるだろう個体は、全くもって識別信号が存在しなかった。

「私は、そうだね。彼女たちの父とでも言っておこうか」

含むような声色で背後の人物が答えた。

「さて、それでどうだい? 私の娘を放してくれるかな?」

「そんなふざけた提案が本当に通ると思っっているのか」

「そうだね。それが当然の反応だ。なら私も少し取りたくなかった方法をとらなければ

ね」

ふう、と息を吐く音が聞こえた。

「あまり荒事は得意ではないのだけれど、仕方ない」

その言葉に管理局員の体が強張り、それぞれのデバイスを構えて魔法陣を展開され――

――それよりも早く背後の声は一言呟いた。

「アクセラレイター・オルタ」

光が瞬いた。

「さて、面倒ごとは片付いたね」

本当に何かが一瞬光った、としか認識できない速度で固有型を囲んでいた数人の魔導師が蹴り飛ばされた。

鈍い音がほとんど同時に路線内に響いた。その音の出所である魔導師たちは吹き飛ばされた後は気を失ったのか、ピクリとも動かない。

「君は『固有型』だね。以前プログラムした覚えがある」

「……お前は何だ」

「君たちと出自は同じだ。けれどわかりやすく言えば、『イリス』にとつての父ということになる」

「私たちは『群体』だ。生命でいう『父』は存在しない」

「ならば今はそれでも良いだろう」

声の主は拘束されて転がる固有型を見下ろしてゆつくりと、言い聞かせるように会話を続ける。

「君は一度負けたんだね」

「私を責めるのか」

「まさか。娘の失敗を責める父はいないよ。ただ愛おしく思い、そして次の一歩へと繋げる為の手助けするだけだ」

声の主は、膝を折って固有型に顔を近づけてにこり、と笑った。

「どうだい、リベンジしたいと思わないかい？」

「リベンジ、だと……？」

「そうさ。君を倒した相手ともう一度戦うんだ。その為の力もあげよう」

「そんなもの、私は……」

「本当の事を言っただららん？」

「あ……」

ぱちり、と固有型の思考が赤く染まった。

「どうする？」 私と共に来るなら君にチャンスを与えるよ」

固有型の脳裏に桃色の長髪を揺らして戦う剣士の姿が蘇らされて、端からじわじわと

侵食されるように思考が研ぎ澄まされていく。

「私を、もう一度戦わせるのか」

「君が望むなら」

「ならば、私に剣を振るわせろ」

「それは私と共に来るということかな」

底の見えない笑顔を浮かべた相手に対して、固有型は赤い瞳でゆっくりと頷いた。

ぱきり、と髪の手先が凍りついたのを感じた。

「これで二つ」

デュランダルの『エターナルコフィン』で機動外殻と群体イリス共々都市を一つ丸ごと凍りつかせたクロノは息を吐いた。

「これで少しは負担が軽くなればいいんだが」

ばんばんと肩についた雪を払う。

脳裏に浮かぶのは自身の部下たちと、妹とその友人たち。

「あいつに約束した手前、少しでも無理させるわけにはいかないからな」

まあそんな約束は無くともクロノは部下を一人も怪我させるつもりなんかなかったのだろうが、それでも男同士約束だ。

反故にするつもりなどクロノはさらさら無かった。

戦闘が始まってもうそこそこの時間が経つ。管理局側の戦力的には次第に敵を撃破して、仲間の援護に向かう人間が出始める頃だ。

そうなれば戦力が減っていく一方のイリスでは対応できるとは考えにくい。

後は次第に形勢は管理局に傾き、主犯であるイリスも捕縛できることだろう。

一度エイミーにでも連絡を取るか、とクロノが通信を開こうとデュランダルから念話を飛ばそうとする。

すると示し合わせたようなタイミングでエイミーからの通信が繋がった。

『クロノ君！』

「ああ、エイミー丁度良かった。僕も今連絡を——」

『そんな事言ってる場合じゃないよ！ 大変だよクロノ君！』

「——どうした。何があつたんだ」

鬼気迫るエイミーの様子にクロノの顔が瞬時に引き締められた。

『さつきクロノ君が氷結したはずの都市の機動外殻が動き出してるの！』

「なんだと?! 理由は?」

『そんなのわかんないよ! とにかく、突然動き出したの!』

エイミイの言葉にクロノがらしく無く舌打ちをした。

「まさか僕のエターナルコフィンの発動が甘かったか?」

『ううん、そんなはずないよ。こっちで確認していた限り氷結は完璧だった。敵性反応も全て沈黙していた』

「なら何が起こった? まさかステルス機体でも隠れていたのか」

『正直私の索敵から隠れ切る相手がいるなんて考えたくないけど、その可能性は否定できないかも。ごめん』

「……悔やんでも仕方ない。相手は僕たちからすれば未知の技術だ」

エルトリア式フォーミュラ。

協力者、アミティエ・フローリアンによれば魔力などでは無くナノマシンによる周囲のエネルギーを変換して力に変える技術。

プログラムである魔法を解析して、以降それを無効化する力まで持つ魔導師からすれば天敵のような技術。

そんなものが相手ともなれば、エイミイの索敵にも引つかからない未知の敵もいるのかもしれない。

「僕はひとまず先ほどの区画に戻って氷結をし直す。悪いが生産プラントは少し待ってくれ」

『うん、突入隊はその間付近の援護に回すね』

「ああ。僕の方ももう一度氷結が終わり次第また連絡を入れる」

『じゃあね、気をつけてクロノ君』

「……ちよつと待ってくれ、エイミイ」

通信を切ろうとしたエイミイをクロノが呼び止めた。

『……クロノ君?』

そのらしくない行動にエイミイが不思議そうに名前を呼んだ。それに対してクロノは、小さく息をつくくと、思い切ったように口を開いた。

「君は僕の補佐だ。今までも、そしてこれからも疑う事なんてない」

『へ……………?』

「それだけだ。通信はこれで切っていい」

『もしかして、クロノ君励ましてくれてる?』

「……ノーコメントだ」

ぶつきらばうなクロノの答えに、エイミイが含むように笑った。

『優しいなあ、クロノ君は』

「……僕は現場に急行する。通信は以上だ」

通信を切ったクロノは最後の囁くようなエイミイの言葉を大きな深呼吸とともに吐き出して、手の中のデュランダルを強く握った。

「行くぞ、デュランダル。もう一仕事と行こう」

《 ok, boss 》

デバイスコアを淡く光らせながら答えた相棒を片手にクロノが空を飛んだ。

「……何が、起こっている」

ぼつりと眩かれたその言葉は、白銀の世界に溶けるように消えた。

「現場の状況は？ 報告を急いで！」

時空の海に浮かぶ管理局本局、その今回の地球で起きた事件の一連の事件の臨時対策部でレティ・ロウランは部下たちに鋭い声で指示を出した。

彼女は今回の事件の指揮官としてのトップ、立場としてはクロノやリンデイの直属の上司という形になる。

そのレティは今、目まぐるしく変化し始めた状況に表情を険しくしていた。

「クロノ支部長が氷結していた機動外殻が動き始めました！　このままでは、あと十五分足らずで結界外周部へと辿り着かれます！」

「捉えていたはずの『固成型』が何者かの手によって逃走！　輸送に当たっていた魔導師の多くが負傷！」

「な、これは……………機動外殻反応増大！　東京湾から機動外殻が陸地に上陸してきます！　その数、凡そ三十！」

「協力者、『ディアーチエ』ら三名と交戦中の『ユーリ』の鎧装が変化！　エネルギー量も桁違いに増えています！」

「レティ提督、リミエツタ補佐官からの連絡が。もしかするとリーダーにも映らないアソノウンがいるかもしれないとのこと」

「指示を出します！　一言一句聞き漏らさないように！」

レティは部下からされる報告に対応しながら、心の中だけで動揺を押し込める。
(何が、何が起こっているというの)

事態は時間を置くほどに好転している、そう思っていた。
先程から突然予想外の出来事が多発し始めている。

(この感じ、何度か覚えがある。これは敵性戦力が補充された時に生じる混乱)

目まぐるしく変わる戦局、相手の不規則な対応。長年管理局で働くレティには雰囲気
に覚えがあった。

(これも『イリス』の作戦？ いや、順次導入する意味はない。なら、一体……)

どこかちぐはぐで、まるで敵の行動に一貫性を感じない。まるで、何かを通して戦力
を動かしているような、そんな感覚。

「レティ提督、外部からの通信です」

部下に見えないように小さく息をついたレティに部下の一人から声がかかる。

「今はこちらも緊急事態よ。後にしてと伝えて」

「私もそう言ったのですが、絶対に繋いでくれと言って聞かなくて」

「相手は何と言っているの？」

「名前と所属を教えればわかる、としか」

レティは隠す気もなく頭を抱えた。どうしてややこしい状況とは重なるものなの
だろうか。

やがてため息とともに渋々と言った様子でレティが口を開いた。

「相手の所属と名前は？ それで応じるかどうかを決めます」

「はい、ええと……」

部下の一人が手元のメモを見て、その名前と所属をレティに伝えた。

「航空魔導隊三課の『セルジオ・アウデイ』と、そう名乗りました」

浸して食われてく

視点はオールストーン・シーのなのはへと移る。

「なのはちゃんお疲れ様や」

「はやてちゃんこそお疲れ様」

「一旦連絡せなあかな、この場合はクロノくんよりレティさんがええかな」

「それならユーノくんがさつきしてくれたよ。今は指示待ち」

「おー、流石ユーノ君や。頼りになるわ」

なのははやてやユーノと協力してオールストーン・シーに陣取った固有型と数体の機動外殻を制圧して、今は本部からの指示を待っていた。

それにしても、と前置きをしてなのはが白いバインドに雁字搦めにされて気を失っている青い髪の少女を見た。

「思ったよりも手強かったね、固有型さん」

「ほんまやな。私一人じゃ多分勝てへんかったわ」

固有型一体あたりにかかるコストは量産型30体分。イリスのようにアクセラレイターを扱うことはできないが、ヴァリアントウェポンならばある程度使うことができ

る。

そんな相手を対人特化のなのはやフェイトならばともかく、制圧攻撃が得意なはやてでは勝つのは難しかっただろう。

「ほんで、固有型さんの親つちゆうことは、イリスさんはその何倍も強いってことやろ？」

「うん、アマタさんは自分じゃ勝てるか怪しいって」

「キリエさん大丈夫なんやろか」

「わかんないけど、私はキリエさんならできるって信じたいな」

「そやなあ。まあ危なくなったら通信入るやろうしな」

二人の話題に上がるのは、桃色の髪をした『キリエ・フローリアン』の事。最初はなのはたちと敵対していた彼女。イリスに裏切られたと気づいてしばらくはシヨックを受けていた様子だった。

しかし、イリスとユーリを取り巻く事件の真相を知ってからは心を入れ替えたように積極的になった。

今回の東京タワーにいると思われるイリスの確保に向かう役目を引き受けたのだった。

わざわざ直談判に来たキリエに最初はクロノも眉を寄せたが、なのはやアマタの助力

もあつてその大役を任せられることになった。

二人の会話がひと段落ついた時、なのはのレイジングハートへと通信が入った。

「はい、こちら高町なのはです」

『こちら本部、オールストーン・シーの敵殲滅はお疲れ様。はやては近くにいるかしら』

「あ、はいおりますよー、レテイさん」

『なら通信し直す手間が省けたわね。二人にはそれぞれ今手薄になっている部隊へと急行してもらいたいんだけど、構わないかしら？』

レテイの問いかけには、と返事で頷く。

『ありがとう。まず、はやては沿岸部に急行して欲しいの』

「沿岸部に？ それはまたなんでです？」

『海から機動外殻が上陸して来たの。その数は、凡そ三十』

「それまた、大変ですね。わかりました。八神はやて、融合機リインフォース現場へ向かいます」

『助かるわ。到着したら現地の部隊と協力しながら、広範囲殲滅攻撃で薙ぎ払って頂戴』

機動外殻はその大きさと装甲の硬さから、ストライカークラスの魔導師、シグナムやフェイト、なのはらをぶつけるよりはやてのような広域型をぶつけた方が有効に作用する。

固有型にはやては対応できないからなのはがフオローに入るように、機動外殻ならはやてがフオローに入る。

これも適材適所、という奴だ。

「レテイ提督、私はどうしたらいいでしょうか」

『なのはさんはディアアーチェエさん達のところへ行ってもらえるかしら？』

「ディアアーチェエちゃんたちっていうと、ユーリちゃんのところですか？」

なのはが首を傾げた。

話に聞く限りではユーリへの対応はディアアーチェエ達に一任されており、他の管理局の魔導師は手を出さないことが決まっていた。

これは本人達の強い希望と、戦闘力を見る限りあの三人ならば問題ない、と判断されたからであった。

「私が行くってことは、ディアアーチェエちゃんたちがユーリちゃんに負けそうってこと、って考えていいんでしょうか」

『ええ』

なのはが眉を寄せた。

ユーリは強い。

機械腕の一撃は強力だし、防御も硬く、素早い。射撃魔法も広範囲かつ高速で、多様

な種類のものを使い分けていた。

けれどそれを考えてもディアーチエ、シュテル、レヴィの三人で相手取れば問題ないと感じていた。

直接ユーリと戦ったのはがそう言うのだからそれはきつと間違いないだろう。

なのはが怪訝な顔をしているのに気がついてレティも難しい顔のままは説明始める。

『実は、ディアーチエさんたちとの交戦中にユーリさんの鎧装の形状が変化したの。それに伴ってエネルギーも一気に増加した。三人とも短期決戦を狙っていたこともあって魔力が尽きる寸前みたいで』

「変化、ですか？」

『戦闘力も再生能力もさつきまでとは桁違い。本当はあの子たちとの約束を守ってあげたいけれど、流石に撃墜されそうなのを黙って見ておくことはできないわ』

「わかりました。高町なのは、ディアーチエちゃんたちの救援に向かいます」

『ええ、よろしくね』

こくり、と頷いたレティは通信を切ろうとして、最後に思い出したように言葉を付け加えた。

『後捕縛した固有型だけどユーノ君に頼んで本部へ転送してもらえるかしら？』

「転送ですか？ 一応武装隊の皆さんもいらっしやいますし、見張つとくだけで充分

「なんとちゃいますか?」

『手間もかかるしそうしたいところなんだけど、そうも言ってもらえない状況なの』

「それはどういう?」

『……誰かが固有型の解放を行なってるの。いつもシグナムさんたちが居なくなつたタ
イミングを狙つて来るものだから対応しきれなくてね』

「それで本部へ転送して対策つちゆう訳ですか」

固有型は魔導師ランクで見ればBとAの間というところだろう。守護騎士やなのはたちならともかく、他の武装局員で対応するのは難しい。しかもわざわざ捕まえた固有型を解放されては、埒があかない。

「わかりました。じゃあユーノくんに今から連絡とつてみます。まだそんなに遠くに
入つてへんはずですから」

『お願いね。後なのはさんには用件がもう一つあるわ』

「私にですか?」

『そうあのね、航空——』

レティとなのはが話しているのを視界の端に捉えながらはやてがユーノへ念話を繋
ごうとする。

「はやてちゃんっ!」

瞬間、辺りにモニターが割れる音と、甲高い金属音が響いた。
「なんとか、間に合った」

なのはから突き飛ばされたはやてが慌てたように顔を上げると、周囲を旋回していたのはのデیفエンサーが表面から煙を上げていた。

「まさか、遠距離狙撃……？」

「……みたいだね。レイジングハートがいなければ気づけなかった」

顔を引き締めたなのはが弾丸が飛んできた方を静かに見つめると、何の変哲も無い空間が揺らぐようにして人影を映し出し始める。

「どこのだなですか。イリスさんの中の誰か、っていう訳ではなさそうですね」

「さて、そう尋ねられても何と答えたものかな。今の私は、イリスでは無いが、ある意味『イリス』であると言える曖昧な存在だからね」

ゆらり、と空間が揺らめくと長身の男性が姿を現した。

短く切りそろえられたダークブラウンの髪。黒とダークブルーをメインカラーにしたイリスのものとどこか似た鎧装。そして何より緩い笑みを浮かべているにも関わらずどこか空虚なその表情が、その男の不気味さを際立たせていた。

そして、なのははその男の名前を知っていた。

「ファイル・マクスウエルさん、ですな」

「ほう、私のことを知っていたのかい？　今まで特に尻尾は見せてなかったと思うが」

「アミタさんのお母さんが教えてくださいました。ユーリちゃんの残したデータのお陰でエルトリアと連絡が取れましたから」

「なるほど、あの子の行動にはそういった意図もあつたのか。いや、見た目に反して抜け目のない子だね、ユーリは」

「がしやん、となのはが左腕部固定の砲、『レイジングハート・ストリーマ』をファイルへと向けて構えた。」

「投降をして下さい。あなたの目的がエルトリアの再生なら私たちもお手伝いします。だから——」

「再生？　まさか。君は私がそんな事のためにわざわざ行動しているとも思っていないのかい」

「違うんですか？」

「ああ違うとも。さしずめ、私の目標はその彼女の解放、といったところかな」

彼女、と言ったところでフィルの目はやてのバインドで縛り上げられている固有型へと移った。

その視線を遮るようにはやてが移動して、なのはへと念話を送った。

「(なのはちゃん、正直に答えて欲しいんやけど、あの人どのくらい強い?)」

「……かなり強いと思う。たぶん、私と互角か、ちよつと強いくらいかな」

「(そこに私がおつてなのはちゃんの勝率は変わる?)」

「(……たぶんそんなに変わらないかも。相手の人がキリエさんみたいな凄い加速ができるなら、だけど)」

「(まあそんだけ強かつたら出来るやろうな)」

はやてが頬を強張らせながら手の中にチェーンバインドを待機状態で作り出した。

「(なら今から私はこの固有型さんを連れてオールストーン・シーを離脱する。なのはちゃんは……)」

「(この人をここで抑えておく、だよ。大丈夫任せて、何とかやってみる)」

「(悪いけど頼むな)」

はやてがこちらをじつと見つめているフィルの視線を睨み返しながら、ゆつくりと左手を固有型へと向けた。

行くよ、と二人の視線が交わるとなのははフィルに向けたストリーマに、フォーミュラ由来のエネルギーを充填した。

「カノン！」

「チェーンバインド！」

なのはが引き金を引くと桜色の砲撃が空からなのはたちを見つめていたフィルの視

界を塞いだ。

その隙にはやてはチェーンバインドを伸ばして固有型の体を鎖で引き寄せて、そして空へと飛び出した。

「おや、ここで逃げの一手、か」

固有型を抱えて空を飛んで行くはやてを見ながらファイルが感心したように呟くと、その視界をさらに塞ぐようになのはは砲撃を撃った。

だが、ファイルはそれを危なげなくかわしてみせる。

「私を足止めして固有型の解放を防ぐ、か。合理的な作戦だね。君たちの指揮官は優秀だ」

にこりと笑うファイル。

「大方、君は現行の最高戦力とかそう言ったところだろう？　彼女の信頼具合と、君の

自身から何となくわかるよ」

「私より強い人は他にもいます。私にやれることを今やるだけです」

「でも、ここにはいない。そして君は私を足止めできる自信がある、違うかな？」

なのはは何も言わない。いや、正確には何を言えばいいのかがわからない。

ファイルはなののはにとつて初めて会う類の人間で、全く何を考えているかがわからない。か

何を考えているのかわからない、という点では彼女の相棒であるセルジオもそうなのだが、セルジオの持つ雰囲気ともまた違う。

(何だろこの人、得体が知れない)

なのはこのことを視界に捉えているはずなのに、ちゃんとなのは見ていないようなそんな感覚。

つ、となのはの頬に一筋の雫が流れる。

「君は私が『アクセラレイター』を使うと思つてここに残つたのかな？　まあきつとそうなんだろうね。イリスが使つてたものを私が使わないと考えるほど楽観的な人間には見えないからね」

フィルの視線がまた動き、随分と小さくなつたはやての背中を見つめた。

「だけど、残念だつたね。君の予想は外れだよ」

「——ッ、カノン！」

そしてまた緩く笑うフィルに、嫌な予感がしたなのははストリーマの砲身に集めたエネルギーでフィルを狙う。

「アクセラレイター・オルタ」

だが、それよりも早くフィルの体が加速した。

なののは目前からフィルの体が掻き消えて、五百メートル近くあつたはやてとの距離

を一呼吸の間にゼロにした。

「なっ——」

「返してもらおうよ、私の娘だ」

突如目の前に現れたフィルの姿にはやてが目を丸くして、片手の杖で迎撃の魔法を放とうとする。

「クラウソラ——」

「遅い」

フィルが『アクセラレイター・オルタ』と呼んだ技術により行われた加速は容易く音を置き去りにして、はやての首を狙って蹴りを放った。

それが近接戦の経験がほとんどない無防備なはやてへと迫り——

『はやてちゃんっ！』

はやてに融合していたリインフォース・ユニゾン ツヴァイ IIの操作した小型ディフェンサーにより

防がれた。

「何らかの仕掛けがあったか」

「優秀な子連れとるんよ」

「ならば彼女が来るまで耐えられるかな？」

はやてがフィルの向こうのなのを見る。なのも最速ではやての元へと駆けつけ

ようとしている釜、その距離は未だ遠く、フィルであればなのはが駆けつけるまでにはやてを切り刻んで余りある時間があるだろう。

ふ、と笑ったフィルの手の中に銃と剣が一つずつ現れる。

(ディフェンサーで防御を――)

「アクセラレイター・オルタ」

またもやフィルの姿が掻き消えた。

そして今度はわざと周囲を旋回するディフェンサーへと剣を突き立てた。はやてのディフェンサーは、はやて用にチューンしたCW社特製の盾だ。

それはなのはの物よりも小型化している分機動性に優れ、フォーミュラなどの対エネルギー性能に優れている。

そしてフィルはそれをバターののように叩き斬った。

「う、そやろ……」

真つ二つになった盾がその機能を停止させ、驚愕の表情のはやてを無防備にフィルの前に晒した。

「さようならだ、お嬢さん」

フィルが剣を振り下ろした。

なのはでは間に合わない。

はやてのもう一つのデیفエンサーも間に合わない。

助けられる武装局員はいない。

守護騎士も今は彼女の近くにいない。

高町なのは都合のいい覚醒など起こらない。彼女はそれほど見てもいない『アクセラレイター』など使えはしないのだから。

ゆつくりとフィルの剣がはやてへと迫っていく。

そしてはやての体に無慈悲に剣が突き立てられる。

「アクセラレイターッ！」

——直前に一陣の烈風がはやての頬を撫でた。

「はやてさんは私がお守りしますッ！　そう、初めてお会いした時に約束したはずです！」

「あ、アマタさんっ！」

アマティエ・フローリアン、推参。



何故アマタが敵が一人もないはずのオールストン・シーに来たのか。
その理由はもちろんある。

発端はユーリの救援になのはが行くことになったこと。

結論から言えばアミタはなののことは迎えに行つていたのだ。彼女はアクセラレイターによるフェイトに負けない速度での加速が可能だ。

もちろん使い続けと言うわけには行かないが、適度になのはと加速を共有しながら到着を早めることならできる。

故に彼女はなのはを迎えに行つており、突如通信が切れたことを心配したレティがアミタを急行させてくれた、と言うわけだ。

ぎり、とファイルが振り下ろした剣をアミタのヴァリアントザッパーが受け止める。

「やはり、全て貴方の仕業だったんですね、ファイル・マクスウエル所長！」

「君は……エレノアの娘のアミティエだね。面影がある」

薄い笑みを浮かべるファイルを見上げるようにしてアミタが睨みつけた。

「貴方は一体何のためにこんなことをしているんですか！ キリエを、イリスを騙して！」

「何の為？ 愚問だね、アミティエ。そんなもの研究のために決まってるだろう？」

「研究のため、ですって？」

「そうさ、この星はあん^{エルトリア}な星と違って、土地も資源も溢れんばかりにある。新天地にはふ

さわしいじゃないか」

「たかが、たかがそんなことの為に……！」

「ははは、何を下らないことを。いつだって世界を動かすのは私のような革新的な行動を起こす者だよ」

怒りを滲ませるアマタにファイルは余裕を崩さない態度で薄い笑みを浮かべる。

「私、人に心底怒ったことはあまりありませんが、初めて我を忘れそうなくらい怒りを覚えます」

「ほう、ならその怒りでどうすると言うんだい？」

「貴方を、倒しますっ！」

アマタがそこでザツパーを変形。片刃の部分は今より丸みを帯びて歪曲させ、手首を捻ることでファイルの剣を滑らせながら逸らした。

そして体制の崩れたファイルの体を狙ってザツパーを変形させたハンドガンの弾を叩き込もうと構える。

「悪いが、君じゃあ私には勝てないよ」

だが、ファイルのアクセラレーターはアマタの動きを超えていく。

影が霞むような速度で加速したファイルは空中で宙返りをして、その勢いのままアマタの首を薙ごうとする。

「カノン、撃ちますっ！」

けれど、それをなのはのストリーマによる砲撃が防いだ。完璧に意識外から放たれた砲撃に、ファイルは回避が間に合わず左足が桜色の奔流に飲み込まれた。

一瞬、ファイルの顔が苦悶に歪む。

「——ッ！」

その隙を見逃さずアミタがハンドガンを乱射、ファイルの体を吹き飛ばした。

「はやてさん、お怪我がありませんか？」

「大丈夫、はやてちゃん？」

「なのはちゃんもアミタさんもおおきに。ほんま助かったわ」

アミタとなのはがはやてに駆け寄るとはやては少し照れたように笑った。

「……少し、今のは驚いたよ」

その三人の姿を見ながらアミタに撃たれた腹を抑えながらファイルが緩い笑みを浮かべた。

「あの人、ほんま頑丈やな」

「そうだね、それに私の砲撃も半分くらい避けられちゃったし」

「はやてさん、ここは危険です。お早い離脱を」

「なんやごめんな。後は任せるわ」

はやてが一つになったデイフエンサーを旋回させながら飛び去っていくのを背中で守りながら、アミタがハンドガンの銃口を、なのはがストリーマを、フィルへと向けた。「たしかに『私』では貴方に敵わないのかもかもしれません」

「でも今は、私も、アミタさんも一人じゃない」

「―― 私たちが、貴方を止めるっ！――」

「ふ、くく、そうか、なら性能比べと行こうか」

含むようにフィルが笑うと、体内のナノマシンを稼働、紫のエネルギーをまとった。

それに応えるようにアミタが桃色のエネルギーを纏い、なのははストリーマに桜色のエネルギーを充填した。

「アクセラレイター・オルタ」

「アクセラレイターツ！」

「レイジングハート・ストリーマ！」

東京の海上、『オールストーン・シー』付近で、『フィル・マクスウエル』との戦闘が始まった。



『フィル・マクスウエル』とアマタとなのはが戦っている頃、東京タワーでイリスが一人爪を噛んだ。

「何が、起こってるのよ」

先ほど一度『固有型』はその多くが管理局側に撃破され、そのイリス間ネットワークによる反応は途絶した。

けれど、その後殆どの『固有型』が何者かによって解放された。

されたのはいいのだが……………。

「その全てと通信ができないってどう言うことよ……………」

最初は通信機能の故障かと思った。けれど、固有型の通信が一つ、二つと消えていき、ついに索敵を行わせていた『量産型』とも連絡が取れなくなった。

その状況に苛立たしげに地面を蹴ったイリスの耳に、かっかつ、と一定のリズムで足音が届いた。

険しい顔つきでイリスが足音の方へと目を向けて、はあとため息をついた。

「なんだ、キリエか」

桃色の癬つ毛。それと同色のフォーミュラ。手にはヴァリアントウエポンの変形したザッパが握られている。

「今さら何しに来たの。私はもう、貴女に用はないわ」

「——」

「なんで何も言わないのよ。何しに来たって聞いているの」

「——」

「……なんなのよ」

キリエは、何も言わない。

「何だつて言ってるのよッ！」

イリスが癩癩を起こしたように手の中にヴァリアントウエポンを変形させた迫撃砲『ブラスター』を作り出して、引き金を引いた。

ナノマシンから作り出されたエネルギー弾は、何も言わず立ち尽くすキリエにまっすぐ向かって、そして空中で撃ち落とされた。

「ははは、少し見ない間に随分元気になったじゃないか、イリス」

「え……………」

その声を聞いてイリスが言葉を失う。

聞き覚えのある声だった。当たり前だ。生まれてから、ユーリに全てを奪われるまで毎日聞いていた声なのだから。

「こうして友だちが会いに来てくれたのに手荒い歓迎をするような子に育てた覚えはないぞ」

声の主は赤く染まった瞳のキリエの肩を軽く叩きながらイリスに一步近づいてくる。聞き覚えのある声だった。当たり前だ。キリエと出会ってから毎日思い出そうとしていた声なのだから。

「所、長……………」

声の主が、にこりと笑う。

見間違えようがない。

イリスの父と慕った人物が、ユーリに殺されたはずの人物が、『フィル・マクスウエル』がそこにいた。

「ああ、久しぶりだね、『イリス』」

重ねて合わせて

「アクセラレイター・オルタ」

「アクセラレイターッ！」

夜闇の中で二色の光が踊る。

一つは紫のエネルギー光をまとったフィル・マクスウエル。

一つは桃色のエネルギー光をまとったアミティエ・フロリアン。

「貴方も同じアクセラレイターをつ！」

「同じではないよ。稼働効率で言えば私は君を超えていく」

フィルが右手の剣を振り下ろしたのをアミタはザッパで受け止める。甲高い金属音が響き、ぎじぎしとザッパの刀身が軋んだ。

「『アクセラレイター・オルタ』。救助用の君達のフォーミュラと違い私のは戦闘用だ。そもそも理念からして異なるのさ」

苦しげな顔でザッパを抑えるアミタに軽い笑みを返して、フィルが左手の中にヴァリアントウエポンである大型片手銃を出現させた。

「だからこういふこともできる」

「なっ——」

右手で剣を作りながら、左手で全く別種の武器を作り出す。それはアマタやキリエのフォーミュラでは使われない機能だ。

ヴァリアントシステムは体内のナノマシンによって外部の無機物をエネルギーを通す事で武器へと変える技術を指す。

その武器に定型はない。故に武器の形成には個人の想像力が大きく影響するところが多い。

そのため、アマタもキリエも、左手と右手で別種の武器を作り出す、ということはない。

両方銃、両方剣、といった形態をとることはあっても、片手に剣、片手に銃、といったスタイルは、アクセラレイターで加速した思考速度でも形成が間に合わないのだ。

けれど、ファイルは簡単にそれをやってみせた。

ファイルの戦闘用のフォーミュラと、アマタの救助用のフォーミュラの違いが、武器の形成補助、という形で現れていた。

キュイン、と低い音を立てながらファイルの銃の中にエネルギーが充填されていく。

アマタでは避けられない。

けれど、この戦場においてアマタは一人で戦っているわけではない。

「——撃ちます」

桜色の光線がなのは『レイジングハート・ストリーマ』から放たれてフィルの手に握られていた銃を弾いた。

「はあっ！」

「む——」

その隙にアミタはアクセラレイターの稼働効率を上昇させ、フィルの剣を弾くと、そのまま加速。ザッパーをハンドガンに変形させた。

加速で距離を取りながら乱射される銃弾。雨のように降り注ぐそれをフィルはかわしながら自身も左手に再生成した銃によって迎撃の弾丸をアミタに放つが、なのはデیفエンサーがそれを遮った。

「なのはさんナイスです！」

「いえお気になさらず！」

空中でアミタが笑ってアクセラレイターの稼働率を通常加速状態から、再度高稼働状態まで引き上げる。

世界の動きが、遅くなる。

アミタの主観の世界の中で、全ての物理運動がゆっくりと流れる。音も、空気の間も、全てが遅い。

その中でアミタだけが通常の速度で動き、そして思考ができる。

「アクセラレイターッ！」

アミタの体が桃色のオーラに包まれてファイルに向かって一直線に空を駆けた。

ミッドチルダの飛行魔法とは違う、エルトリア式フォーミュラのエネルギー操作による空中移動。

その速度はどうに音を置き去りにして、空気を弾けさせる。

「行き、ますっ！」

アミタが両手にハンドガンを生成し、ファイルを囲むようにして、弾丸を『置いた』。

時間が何倍にも引き伸ばされた中で、銃弾だけはその恩恵を受けることなく空間に固定され、ファイルの動きを阻害する檻となる。

「アクセラレイター——」

けれどファイルもまた、アミタと同じ世界を共有できる数少ない存在だ。

「——オルタ」

ナノマシンによるエネルギー変換。しかも戦闘用にチューンされたそれはアミタの稼働率を容易く超えて、ファイルの体感時間を数十倍に引き伸ばした。

「隙が見えるよ、アミティエ」

その速さがあればアミタが置いた青色の弾丸の檻をかわしながら、迫って行くことが

可能。

ファイルが弾丸の一つを斬り落とそうと剣を振るい、青色の檻に脱出ルートを作り出した。そこを紫のオーラに守られたファイルが飛び出して、横合いから桜色の砲撃に殴り飛ばされる。

「がつ——」

最高のタイミングでのなのはの砲撃支援に、アマタが手の中のハンドガンをくるりと回して、エネルギーを充填。

フォーミュラ由来の赤い光は銃口に高い音を立てて溜まりながら、臨界点を迎えて眩い光を集めた。

「ファイネストツ！」

キュイン、と小さな音を立ててアマタの弾丸が砲撃に殴り飛ばされたファイルの無防備な腹部を狙い、そして炸裂した。

赤い閃光は爆発とともに激しい衝撃をファイルへと与え、纏った紫のオーラを吹き飛ばしながら大きくのけぞらせた。

その光景を見てなのはは砲撃が当たったことに安心したように、ふう、と一息。直ぐに転送魔法によってストリーマの魔力バッテリーを交換する。

(アマタさんもマクスウエルさんも速いけど、なんとか目で追える)

バツテリーが交換が無事に行われたことを確認すると、ストリーマの先をフィルへと向ける。

「行くよ、レイジングハート」

《 All right, master. 》

「デイバイン——」

《 Divine Buster 》

「バスターアアア！」

高町なのはの代名詞『デイバインバスター』。フォーミュラと魔導の融合技術により、通常よりも遥かに早く充填されて、空中へのフィルへと真つ直ぐに延びた。

消しとばされた空気による悲鳴が聞こえそうな、そんな速度と威力。

「アクセラレイター・オルタアアアッ！」

フィルの姿がなのはの視界から掻き消える。そして、今の戦場で一番めんどくさい相手を高町なのはだと断定し、なのはを落とすために肉薄する。

なのはにはアマタやフィルのような加速の技術はない。飛行魔法である程度の高速飛行はするが、それだけだ。

視界から消えるような速さも、認知させないような攻撃もない。

だが、高速戦闘をする相手には慣れていた。

なのはの親友はフェイト。

もう既に2年近くの付き合いで模擬戦も何度もしている。

なのはの今の相棒はセルジオ。

一年近くの間何度も共闘してきた。

そして、その二人とも加速魔法を好んで使う。

だから、なのはが、高速で移動する相手と、共闘するのも、戦うのも非常に慣れてい
るのは当然とも言えた。

なのはには高速戦闘下においての仲間の取りそうな行動も、そのためにどのようなサ
ポートをすればいいかの経験がある。

そして、ファイルは数度の攻防の中でそのことを読み取って、なのはから先に倒すべき
だと判断した。

「レイジングハート！」

《 All right, master. mode:Esutoria 》

アミタを無視して自身へと向かってくるファイルに対し、なのははストリーマを素早く
近接戦闘型の『エストレア』に変形。多重のシールドを展開してファイルの行く手を阻ん
だ。

「ハッ——ッ！」

「うそ——」

「盾なんかで防げると思わないことだ！」

だがその多重シールドもフィルは銃で半分を破壊。残り半分は叩きつけた剣で斬り裂いていく。なのははなんとか剣をエストレアで受け止めたものの、余りの圧力に耐えきれず少しずつ刃が押し込まれてバリアジャケットの肩口に触れた。

桜色の粒子が漏れ出している『フォーミュラⅡ』のバリアジャケットのフィールド防御も、バリアジャケットの繊維も纏めてきれていく。

「やあっ！」

だがここでのなのはは周囲に旋回したデイフェンサーをフィルに叩きつけて、無理やりに距離を取ろうとする。

なのはの身の丈ほどの鉄の塊がフィルを横つ面からなぐりつけようと迫るが、当のフィルは片方の手の銃を剣に変形。距離を詰めてきたデイフェンサーを横一闪、半ばまで大きく切り込みを入れた。

デイフェンサーから軽いスパークが走り、一瞬だけその動きが鈍った。

「ほうらっ！」

「あぐうっ」

そしてその間にフィルは剣を手の中で半回転。持ち手を握り直すとナックルガード

の部分でなのはの横つ面を殴り飛ばした。

近接戦闘などまともにできないなのはは交わすこともできずに、まともにその一撃を受けて吹き飛んでいく。

「少し手間取らせてくれた」

フィルが手の中の剣を再び銃へと変形させて、なのはに銃口を向ける。吹き飛んだのははその攻撃が見えているが、頭が揺れたせいか思うように飛行魔法を使うことができない。

フィルの銃口へとエネルギーが圧縮され、引き金が引かれた。

「アクセラレイターツ！」

だが、アミタは弾丸が到達するよりも早くなのはの元へ駆けつけて、横抱きにしてなのはを攫った。

「アミティエ……！」

「私のフォーミュラは救助用！　人を助ける事が本分です！」

アミタはフォーミュラ起動の証である淡く光る髪を揺らしながらなのはを横抱きにして縦横無尽に飛び回る。

それを銃で狙おうとするフィルだが、空中をジグザグに移動し続けるアミタになかなか照準を合わせる事ができない。

「あ、アマタさん……」

「目を覚まされましたか！　大丈夫ですか？」

「は、はい。なんとか、動けそうです」

そんな中アマタの腕の中なのはの朦朧とした意識が通常まで戻ってくる。軽く頭を振って意識をはつきりさせたなのは。

「……アマタさん、何か勝つための方策はあつたりしますか？」

「残念ですが、今はこれといって思いつくものは……」

なのはの質問にアマタの表情が曇る。

（今問題なのはマクスウエルさんの動きが速いこと。そのせいで、二対一の状況じゃなくて、一対一と、一人の状況を作らされてる）

ちら、と射撃をやめてアマタを追いかけてくるファイルへと視線が映る。

（必要なのはマクスウエルさんの動きを止めて二対一の状況に落とし込む事）

よし、となのはが作戦を組み上げて小さく頷いた。

「アマタさん、今から私はわざとマクスウエルさんの前に出て囿になります。それで、なんとかして動きを止めるので、後はお任せしますね」

「な、何を言ってるんですか！　そんな危険な事させられるわけじゃないです！」

「でもこのままじゃどっちにしるジリ貧になっちゃうと思います」

「なら私がやります！　私が囹をやりますから！」

「それも正直難しいです。例えばアマタさんに足止めしてもらっても、私の攻撃じゃアマタさんも巻き込んだじゃいますし」

「でも……」

「大丈夫ですつ。アマタさんほどじゃないかもですけど、なのは結構頑丈なんです！」
曇った表情のアミタになのはは笑みを返して答える。

「じゃあ、よろしくお願いします！」

「なのはさんっ！」

最後にそういうとなのははアミタの制止の言葉を聞く事なく、腕の中から逃れると追いかけてきていたフィルに砲撃、注意を自分へと逸らした。

低い唸り声を鳴らした桜色のビームは、それをはるかに上回るスピードを持つフィルによつて容易くかわされてしまう。

アミタをはるかに上回る速度で移動するフィルがなのはへと向けて銃を乱射する。

それをシールドと体運びで避けるなのはは速射弾と誘導弾で応戦するが、視認するのも困難なフィルには有効に機能しない。

（——来る）

なのはが目の前に桜色の魔法陣によるシールドを五枚重ねて展開する。

「これで、終わりだっ！」

フィルが肉薄しながら先ほどと同じように速度と体重を乗せて叩きつけるように剣を振り下ろす。

一枚、二枚と魔法陣が真つ二つに斬られていき、そして、五枚目の魔法陣によるフィルの剣が触れた時に、『事』が起こる。

《 Binding shield 》

「これは、鎖……っ?!」

なのはのバインディングシールドが発動し、フィルの剣と体を魔法陣に縛り付けた。

今までになかったその未知の技術にフィルが目を見開き、そして、それをはるか上空から確認したアミタは、手の中のヴァリアントウェポンを作り変えた。

「良い位置に来ました」

がしゃん、と音を立てながらアミタの手の中のハンドガンが変形を始め、青をメインカラーにしたロングライフルへと変わった。

「これで、終わりです！」

アミタの網膜に弾道ルートが映し出され、なのはに当たらない軌道で弾丸が射出される。

「ファイネストカノンッ！」

青い閃光と共に弾丸がフィルの体に命中して、そのままなのはバインドを引きちぎり、吹き飛ばす。

アミタの弾丸はそれでも消える事なくフィルの身体を押しながら、海面に叩きつけて、ようやく炸裂した。

ズ、と辺りを震わせる振動と共に海水もろとも弾丸が弾けて、そして凄まじい水しぶきを散らせた。

「終わった、かな？」

《 Prob ably he is fainting. 》

「そっか。なら一応安心だね」

「なのはさん！」

「ひゃっ！」

やれやれ終わったと言わんばかりになのが息をつこうとして、隣にやって来たアミタの声で身を竦めた。

「本当に無茶をします！ 私のは確かに攻撃範囲は狭いですが、それでも当たる危険性だつてあつたんですよ?!」

「あー、あはは、すみません」

「もう、ああいうのはご家族もお友達も心配されます。気をつけてください」

「はあ……」

叱る姿と叱られる姿がやけに板についているのは、アミタが姉で、なのはが末っ子だからなのか。それとも、アミタが日頃から叱る側で、なのはは叱られる側だからなのか。

「でも、本当に勝って良かったです。アミタさんもお疲れ様でしたっ」

「……………フェイトさんたちの苦勞が少しわかる気がしますね」

「？」

「ご自愛ください、という事です」

にこりと笑って労りの言葉をかけてくるのはに、アミタががっくりと肩を落としました。

「では所長の拘束に行きましようか。起きられては面倒です。申し訳ありませんが——」

—— キュイン。

「は？」

アミタの腹部を、弾丸が貫通した。

貫いた弾丸はなのはのバリアジャケットに炸裂して、少なくともダメージを残す。

アミタの体から力が抜けてなのはの方へと倒れかかってくる。

「くっ——アミタさんっ！」

「あ、なの、はさん……ご無事で、すか……」

脇腹を抑えながら受け止めたアミタの貫通銃創から、どぼどぼと赤い液体が溢れ出して海へと落ちていく。

「ほう、守りきったか。流石、拍手を送らせてもらおうよ」

ぱちぱちと乾いた拍手が辺りに響いた。なのはがアミタを腕に抱いたまま、弾かれるように音の方を見ると、フィール・マクスウェルがそこにいた。

「は、え………なんで？」

なののはは慌てて、先ほど倒したはずのフィールへと目を向けて、そこにもフィールがいることを確認する。

「混乱しているようだね」

ゆっくりと言いつき聞かせるように、フィールは口を開いた。

「さつき、あなたは倒したはずで——！」

「さて、なんでだろうね。君でもいくつか理由は思いつくだろうが……」

ぱちん、とフィールが指を鳴らした。

「私が教える必要はないだろう」

瞬間、青い閃光が空からなのはたちへと降りて来た。

それはなのはのディバンバスターをはるかに凌ぐ範囲ですっぽりと包み込み、速射に優れたショートバスターよりも遥かに高速で二人を狙っていた。

それはさながら青白い壁。そんなもの、アミタならともかくなのはでは避ける手段などない。

(逃げられ——)

宇宙からの狙撃が、辺りを丸ごと包み込んで明るく照らした。



びゅう、と風が吹いた。

「また来たな、地球」

リンディやユーノの尽力で作られ出された結界の外ギリギリの市街地に転移して来た、少年は茶色の制服のネクタイを緩めながら遠くを見つめる。

魔力を持たない人間にはわからないが、ミッドチルダの魔導師である彼には、その『現実』と『非現実』を分ける境界線を感じることができる。

少年が軽くシルバーのブレスレットを叩くと、体が淡い白の光に包まれる。

そして晴れた時には茶色の制服は消え失せ、代わりに白のコートに長い槍を手にして
いた。

「こういう形では、来たくなかったが」

そう言った少年の翠の瞳がほんの少しだけ細められた。

声は届かず

「驚いたな……………」

宇宙で待機させていた『群体』イリスに操作させた衛星砲。その宇宙から飛来したエネルギーは海水を瞬間的に蒸発させ、海底までぶち抜くように巨大な穴を作ったが、そしてそこに間髪入れずに海水が流れ込んで行く。

それはついさつきファイル・マクスウエルを倒したアミタとなのはを狙ったもので、回避不可能の一撃のはずだった。

万一にも『アクセラレイター』で逃げられないようにアミタを撃ち、もう一人の少女にも少なくともダメージを与えておいた。

撃墜されるのは必至であり、後は傷ついた二人を煮るなり焼くなり好きにすればいい、と考えていたのだが。

けれど、予想と現実は違った。

ファイルの視線が海上から、『オールストーン・シー』上にいる二人の少女へと移った。

「アレを避けるには高速移動、『アクセラレイター』が必要だった。だからアミティエを潰しておいたんだが……」

けれど、アミタは腹部の傷を抑えてぐったりとしており加速を使える体ではない。ならば残る答えは一つだけだ。

「君が使ったのか、アクセラレイターを、魔導師の君が」

「はあ、はあ、はあ、何度も、見てました、から……」

もう一人の少女——高町なのはがアクセラレイターを使ったのだ。

理論的には可能だ。なのはの今のレイジングハートにはナノマシンが仕込まれており、エネルギー応用上もアミタのフォーミュラと同じ出力がある。

ならば、たしかに使おうと思えばアクセラレイターを使えるのだろう。

「けど、そう都合のいい力ではないだろう？　見た限り、君はもう限界のようだ」

「そんなことっ」

「強がりはやしたまえ」

ふらつく体に鞭打ち体を持ち上げようとしたなのはの足元に弾丸が撃ち込まれると、それだけでなのははバランスを崩して倒れ込んでしまう。

「エルトリア式フォーミュラは『イリス』のようなテラフォーミングユニットしか扱えない技術だ。普通の人間では身体性能が足りないんだよ」

「ファイル・マクスウエル……うぐっ」

「アミタ、さん……」

「最も、グランツは娘たちをそれに適用できるように何かをしたようだが、どっちにしろ君に扱える代物じゃないということだ」

倒れ臥すなのはたちの元へやってきたファイルが体を引きずって近づいてくるアミタを踏みつける。

「けれど君は本当に面白い。負担があるとはいえ、フォーミュラと魔導の融合をこの小さな体一つで為したのだから」

ファイルは肩で息をするなのはの襟首を掴むと自分の目線まで吊り上げた。

『『イリス』、ユーリ、どちらも私の大切な子どもたちだが……君はそのどちらにも劣らないほど素晴らしいよ』

ファイルが口を半月に歪めて笑うと、至近距離から見つめられるなのはの背筋に冷たいものが走る。

なのはの本能が、危険だと叫んでいた。

「なのはさんっ！ アクセラ——」

「君は邪魔だ。あとで構ってあげるから少し待っていたまえ」

「——か」

加速を發動しようとしたアマタにフィルが素早く蹴りを叩き込む。

めしり、とアマタの常人の数十倍の強度を誇る体が大きく軋み、弾丸に貫かれた傷口から真つ赤な鮮血がほとぼしる。

アマタの体がボールのように吹き飛んでごろごろと地面を転がっていく。そんなものには目もくれず自身の手の中なのはの瞳を覗き込む。

「君の名前はなんというのかな、お嬢さん」

「――」

「話さないか。まあいい、名前なんて些細な問題だ。君にはそんなものには囚われない価値がある」

ふ、とフィルが含むように笑う。その笑みは優しいものにも見えるのに、どこか虚ろで、腹の底のよめないような得体の知れなさがある。

「少し、昔話をさせてもらえないかな、お嬢さん」

「――」

「私がまだ生命という形を保っていたころ、私は結婚といったものにはほとんど縁がなかった。信頼する助手はいたが……彼女に恋愛感情を抱くことはなかった」

フィルはそこで残念、とでもいうかのように目を伏せた。

なのはの腕が僅かに動く。今のなのはのデバイスは『レイジングハート・エストレ

ア』中近距離に対応した形態であり、指示一つで魔力弾を撃つことができる。

今まではフィルに隙がなかったため撃てなかったが、いまなら魔力弾を撃つことができる。

(アクセルシューターっ！)

なのはが心の中で起動句を叫ぶと、エストレアから無数の桜色の魔力弾が飛び出してなのはを拘束するフィルに喰らいかかる。

「え——？」

けれど、なのはの誘導弾はフィルに辿り着く前に半透明のシールドのようなものになり、溶けるように消えてしまった。

「私たちのエルトリア式フォーミュラは解析により君たちの魔導を封じることができ。何のために私が隠れて君たちを観察していたと思っている」

アミティエに聞いていなかったのかい、とフィルがなのはの瞳を覗き込みながら笑う。

「さて、私を攻撃した悪い手はこれかな」

「ooooooooo！」

ズキユン、と躊躇いなくフィルがなのはの杖を持っていた左手を至近距離から撃つた。フォーミュラのエネルギーを内包したそれは、なのはの堅固なバリアジャケットに

多少防がれながらも、すさまじい衝撃を与えた。

なのはの手からエストレアが溢れて、金属が地面に転がる音がした。

「話を戻そう。私は結婚に縁はなかったが、少しばかり『親』というのに憧れていてね。自分の子どもという存在にも興味があったんだ」

だから、とフィルがなのはの瞳を覗き込みながら、またどこか虚ろな笑みを浮かべた。

「君も私の子どもになってみないかい？」

「え——？」

フィルが、明日の天気でもいうように、さらりと言った言葉をなのは理解することができない。

「やっぱりそういう反応が返ってくるのか。まあ仕方ない、それが普通なんだろう」

そのなのはの混乱すら慈しむように、フィルが優しく笑んだ。それは確かに父親が娘を見る目なのに、どこか決定的なところが歪んでいる。

「あ——」

なのはの水晶の瞳を覗き込むフィルの目が赤く光る。

それだけでとなのはの心が何かにしわじわと侵食されていく。

「これ、は……………」

「ウイルスコードだよ。ユーリに使っているものと同種の、ね」

ぐずり、と何かが目を通して頭の中を染め上げていく。

「本来はフォーミュラ以外には通りにくいんだが、君が魔導にフォーミュラを混ぜてくれたおかげで少しばかり楽にウイルスが流せそうだ」

「や、だ……………」

どろりとしたものが中に入ってくる。

なのはの意識が、少しずつ薄れていく。

「怖がらなくてもいい。なあに、最後には笑えるようになるさ」

薄紫の透き通るような瞳が、端から赤く染め上げられていく。

なのはの中から『高町なのは』を構成するパーツが薄れていく。家族が、友人が、知り合いの姿が、見えなくなっていく。

(やだ、やだやだやだやだやだ)

ぼろり、となのはの目尻から雫が溢れる。

(フェイトちゃんはやてちゃんアリサちゃんすずかちゃんお父さんお母さんお兄ちゃんお姉ちゃん——)

雫が頬を伝いそして、静かに顔の輪郭に沿って流れていく。

「セルジオく——」

その言葉を言い終わる前に、なのはの瞳が真っ赤に染まり、とぷん、と中身がなにか

に沈んでいった。

雫が、ゆつくりと流れて、落ちた。



「ぐ、ああああっ！ ドウムブリンガーッ！」

腕部だけだった鎧装から巨大な鎧装へと形を変えたユーリへとダイアーチエが無数の魔力弾を叩き込むが、ほんの少し表面を削るだけですぐに再生されてしまう。

「く、そ……」

「王様！」

「すまん、レヴィ……」

空中でよろめいたダイアーチエをレヴィが支えると、そこを狙ってユーリが右の腕を振りかぶり全力で叩きつけようとしてくる。

「させませんっ！」

そこにすかさずシュテルがカバーに入り赤いシールドを展開してユーリの拳撃を受け止めた。

シュテルのオリジナルは高町なのはであるからして、そのシールドの硬さは三人の中では一番である。

けれど、そのシールドに容易くヒビが入った。

「シュテルん！」

「流石に、もう魔力が足りません……！」

必死に耐えるシュテルの背中を見てぎり、とディアーチエが歯の根を噛み締めた。

ユーリは強い。本気になればおそらく今地球上にいる誰よりも。

そんな相手と渡り合うには魔力消費を無視した短期決戦での決着が必要だった。もし、ユーリが何らかの影響を受けて、鎧装を変化させていなければ勝っていたのかもしれない。

けれど現実にはユーリの瞳の赤色が強くなった瞬間、ユーリはその力を増加させて、三人に襲いかかってきた。

後先考えない大技の連発に三人の魔力は大きく減っており、特に最後に『ジャガーノート』を撃ったディアーチエは魔力の底が見え始めていた。

(我らだけでは、勝てぬ。いや、もうこれは生きて帰れるのかというレベルの話だ)

レヴィに支えられながら、ディアーチエは杖を強く握りしめる。
「くっ、ぐうううっ！」

シュテルのシールドの亀裂が広がっていき、そして端から魔力になって砕けていく。
(もはや、打つ手なし、か……)

そうディアーチエが目を落とした。彼女たちに今、取れる手段はない。

少し時間は巻き戻る。

都市の再氷結を終えたタイミングで、クロノへと一本の通信が入った。

それはアマタとなのはによって『オールストン・シー』から脱出できたはやてからであり、その報告はクロノの今までの疑念を払拭してみせるものだった。

「そうか、ファイル・マクスウェルが……」

『うん。なのはちゃんは自分とおんなじくらい強い言うつつた』

『では今までの『固有型』脱走を手助けしたアンノウンや、氷結を解除したのもその存在と見て良さそうね』

『おそらくそうですね。私の近くにおった『固有型』さん連れて行こうとした訳ですし』

「……本当に、そうなのか？」

『え？』

全て『ファイル・マクスウエル』一人のせいだ。彼が暗躍していたのだ、と言われれば腑に落ちる部分もある。

けれど、納得できない部分もまた、存在するのだ。

「余りにも手が多すぎる。これがファイル・マクスウエル一人の仕業とは僕には到底思えない」

『……どういふことですか、クロノ支部長』

「先ほどエイミィから送られたデータを見ればわかるでしょうが、この四つ目の固有型解放と機動外殻の反応復活の差はおよそ四、五分といったところ。けれどその距離は直線距離にして十キロ以上離れています」

『あんまりにも相手の動きが速すぎるっちゆうことか？』

「ああ、相手がいかに高速移動を使えるからとはいえ、これはあり得ないレベルだろう」

そういつたクロノが自分の中に生まれ始めている、最もあつて欲しくない予想は口に出した。

「相手は、『ファイル・マクスウェル』は本当に一人でこれをやっているのか？」

そのクロノの言葉にはやては何も言えない。あまりにも突拍子も無いその言葉に思考が追いついていない。

『クロノ支部長、それはイリスを裏から操る存在が、『ファイル・マクスウェル』以外にもいる、そういうことですか？』

「ええ。最低でも二人、いや三人はマクスウェルの意思に従って動いている存在がいると見ます」

『ちよ、ちよお待ってや！ それって、今なのはちちゃんと戦つとる所長さん以外にも、気いつけなあかん人がおるっちゆうこと？』

「断言はできないが、その可能性が高いと僕は思う」

クロノははやての言葉を肯定しながら眉間に寄ったしわを揉んだ、

『ファイル・マクスウェルはイリスに強い執着を見せているのでしたね。そうなれば、今行われている『固有型』の解放は目くらまし、という可能性が高そうね』

「そうですね、僕なら今のうちに『イリス』の本体に接触しようとするでしょうね」

『本体のイリス……つまり、東京タワーに陣取っているとされる固体ね』

「現場がどうなっているかわかりません。早くキリエ・フロリーアンに連絡を——」

ピリ、と三人の会話に一つの電子音が割り込んできた。モニターの向こうのレティが

目をそらすと、ほんの少し表情を緩めた。

『キリエさんからよ。たぶん東京タワーに着いた時の連絡ね。事前に報告を頼んでおいてよかったわ』

レティが二、三操作をすると四分割されたモニターの一部分に『SOUND ONLY』の表示が現れた。

「キリエ・フロリアンか？　今はどこにいるのか教えて欲しい。早急に伝えたいことがある」

『あんな、そつちにちよお危ない人が行くかも知れへんくて、その事で———』
『君たちが、今の司令官かな』

声が、響いた。

それはキリエの声とは似ても似つかない、深く、暗い、男の声だった。

『フィル・マクスウェル、ですか、貴方は』

『おや、私のことを知っていたのか。君たちとは面識はないはずだが』

『え、所長、さん……？』

『その名前で呼ばれるのも随分久しぶり、という気もするね』

はやての驚くようにこぼした言葉に男の声が楽しそうに笑った。

『あ、ありえへん！　だつてさつき所長さんオールストーン・シーでなのはちゃんたち

と戦つてたはずや!』

『生憎その記憶は私にはないが、それも私だ、と言つておこなかな』

クロノが薄く唇を噛んだ。一番想定として嫌だったものが、現実を起こっていた。

「フィル・マクスウエル、なぜ僕たちに連絡をしてきた。黙つて隠れていた方が賢かったんじゃないか」

『いや、何少しばかり取引をしたくね』

「取引、だど?」

怪訝な表情を浮かべるクロノとレティ。相手は犯罪者であり管理局である彼らにそれに応じる義務もなければ、その必要も感じない。

『少し空を見上げてみて欲しいんだが、何か見えないかい?』

『空……?』

はやてがつぶやきモニターの向こうで上空を見上げた。それにつられるようにクロノも朝焼けへと変わりつつある空を見上げて、やけに明るい星を一つ見つけた。

「なんだ、アレは……?」

それは、まるで自ら光っているかのように、ぎらぎらと輝いていた。まるで得体の知れない不気味な星。

そして、その疑問にはフィル自身がすぐに教えてくれることとなる。

『衛星砲だ。小型だし、少しズレてはいるが……この街を狙うのには問題ない。その気になれば周囲を丸ごと消し飛ばすことはわけないよ』

はやてが息を飲む声が聞こえる。

『私としても手荒な真似はしたくない。君たちが取引を飲んでくれるならこの衛星砲に発射命令を出さなくて済む』

『そんな言葉、私たちが信じると思っているんですか？』

『ほう？』

『今関東全域に広がっている結界は魔力や音どころか、電波すら遮断するものです。群体のどれかが結界外にいるならともかく、東京タワーにいるお前は外部との通信なんてできないはずでしょう』

『……』

『私たちにブラフが通じるとは思わないことです』

『信じてもらえない、か。なら、仕方ないか』

はあ、とため息の音が聞こえて、そしてすぐにぱちん、と乾いた音が響いた。

『自分の目で見てもらった方が早そうだ』

瞬間、『オールストーン・シー』へ、青い閃光が放たれた。

「な——」

遙か上空から貫いた一撃に、クロノも、はやても、そしてレティも言葉を失った。

『悪いが混乱に乗じて私とイリスのバックアップデータを乗せた小型ロケットを打ち上げさせてもらった。そして、それが先ほど結界外に出たものでね』

楽しみにファイルが笑う。

『さて、ここでもう一度取引の提案だ。どうかな、話を聞く気になったかな?』

『……………お話を、聞きましょう』

『要求は一つだ。私は衛星砲でこの街を狙わない代わりに、君たちはこの件から手を引いて欲しい』

「僕らにお前たちを見逃せと、そう言うのか」

『有り体に言えばそうだ。別に君たちの故郷でもないのだろうか?』

「そんなこと認められはずが——っ!」

『ならこの街は消えるがどうする?』

「——ッ」

クロノが言葉に詰まる。

『さて、どうするかね?』

私はどちらでもいい』



クロノたちが『フィール・マクスウエル』から取引を持ちかけられているのと時を同じくして、吹き飛ばされたアミタは必死に立ち上がろうとしていた。

「なのはさんを、助けなくては……」

自身が不甲斐ないせいで小さな子どもを助け切ることができなかった。それは、アミタにとっては許せるはずのないことだ。

満身創痍の体を叱咤して、なのはとフィールがいるはずの場所へと足を進める。

「まだ動けたのか。本当に頑丈だね、アミティエ」

「なのはさんを、どこへやったんですか」

「ナノハ……？ ああ、なるほど彼女は『ナノハ』という名前なのか。教えてくれて感

謝するよ、アミティエ」

「——ッ！ なのはさんをどこへやったと尋ねているんですフィール・マクスウエルッ

！」

怒りの叫びに応えるように手の中にハンドガンが生成され銃口がフィル・マクスウェルに向けられる。

それを視界の端で見ながら、フィルは小さくため息を吐いた。

「そんなに会いたいなら、会わせてあげるとも。なあ、『ナノハ』」

瞬間、上空から桜色の砲撃がアミティエの真横へと着弾した。

「きゃあつー！」

あまりの衝撃にアミティエの体が宙に舞って、そしてまたオールストーン・シーの施設上を転がった。

「い、今のは、まさか……」

アミタが目を見開いて、上空を見上げて、一つの影を確認した。

「う、そ……」

栗色の髪。純白の防護服。長大な砲身。漏れ出す桜色のフォーミュラエネルギー。

アミタの見慣れた『高町なのは』の姿がそこにあった。

唯一違う点を挙げるとすれば、それは、本来は水晶のように美しい薄紫の瞳がプログラムが走る赤色に染められていること。

「フィル・マクスウェル貴方はっ！」

「ははは、そう怖い顔で睨まないでくれ。私も君に嫌われたいわけではないんだ」

過去にないほどに目を怒らせて睨んでくるアミタに軽く笑って見せながら、しゃがんだファイルはアミタの目を覗き込む。

「なにせ、君も私の子どもになるんだからね。娘には、嫌われたくない」

ファイルの目が、妖しく光る。目と目を合わせたことを起点として、ファイルのウイルスコードによる洗脳がアミタへと発動する。

それはエルトリア式フォーミュラによる『行動強制プログラム』であり、ユーリのような魔導師には細かい調整が必要だが、根幹システムが共通の『フォーミュラ』ならばそれは格段に早い速度で行うことができる。

「あ、ぐ——」

じくじくと視界が赤くなっていく感覚にアミタが呻き声をあげる。

必死に精神力だけで抵抗を試みるが、抵抗むなしく思考がどんどん鈍感していくのを感じる。

（なのはさんを、助けなきや、いけないのに——）

アミタが悔しさのあまり歯を強く噛み締めて、ファイルを睨むが、当のファイルはただ楽しそうに笑うだけで。

じくじくと浸食されていくアミタが最後になんとか一太刀、と殴りかかろうと拳を振

り上げて――

空が、一瞬眩しく輝くのを感じた。

(白い、光?)

アマタが思わず目を細めて、そして、ファイルとアマタの真ん中に白い閃光が落ちてきた。

「――白光一刃」

斬、とファイルの肩口から膝上までにかけて、槍が振り下ろされた。

「が、ぐうっ――」

その突如現れた人影からの一撃に、ファイルがよろめき傷を抑えながら後ろへと下がった。その傷口からは、血ともオイルとも判別できない液体が溢れ出す。

ファイルの集中が途切れたからか、アマタに流れていたはずのウイルスコードがとまり思考が通常まで戻ってきた。

アマタが地面に転がったまま顔を上げると、そこには銀色の槍に白いコートを風に揺らして佇む少年の姿があつた。

「あ、あの貴方は……………?」

「時空管理局地上本部航空魔導隊三課所属、『セルジオ・アウデイ』二等空尉だ」

少年は声をかけられると首だけをアマタの方へと向ける。

翠の瞳が、アミタを見つめる。
「すまないが、状況を教えてもらえるか」

その決断は

地球のなのはとフィル、そしてアミタの前に現れたセルジオ。

なぜ地上本部所属で、現在『戦闘機人』に関する調査をしているはずの彼がここにいるのか。

それを明らかにするには時間を半日ほど巻き戻さなければならぬだろう。

なのはの一応の無事の確認と、クロノへの連絡を終えてからしばらくの時間が経った。今、セルジオは三課の片隅のソファに体を沈めていた。

「気抜いたらそのまま眠りそうだし……」

先週からすでにセルジオは働きづめである。いや、もちろん普段からワーカーホリックと言われながら働いているが、今までの仕事量はその比ではない。

昼間はいつものように業務をしながら夜には違法研究所に関してのデータを纏めて、ついでに期限までに間に合わなさそうな仕事のフォローに回ったり。

いざ研究所に乗り込めば他の部隊に気づかれないように気を張り、そして大して強く

ないのにめんどくさいガジェットの手手で体力と魔力をガンガン持っていられる。

今の三課で最も疲れている人間は、セルジオと同じくらい働いているゼスト、といったところだろう。

「眠るのはダメだな。十五分後には後三箇所片付けなきゃいけないんだから」

目を揉みながらセルジオは何か適当に頭を回しておくことにする。

「確か異世界渡航者と『闇の書』関係だったか、クロノが言うには」

セルジオはクロノから大まかに事情を聞いていたものの、細かいところまでは理解していなかった。

『闇の書』は本局が大事に抱えている案件の一つだ。そんなものに関しての事件を『陸』の人間にやすやすと明かすわけにはいかないのだろう。それが例えクロノとセルジオの仲だとしても、だ。

セルジオは手首のゼファーを軽く操作すると、クロノから送られてきた現地の情報に軽く目を通す。

現地戦力は東京支部在中の武装局員と、『夜天の書』の主『八神はやて』とその守護騎士。クロノやフェイトのハラオウン家。無限書庫の司書『ユーノ・スクライア』。それに異世界渡航者の協力者二名と、詳細不明のニアS級魔導師三名。

そして、セルジオの部下、『高町なのは』。

もし一部隊に所属させようと思つたら一人当たり二、三ランクはリミッターをかけなきゃいけないレベルの管理外世界の事件としては超過剩戦力である。

「けど、『エルトリア式フォーミュラ』、ね……」

クロノのくれたデータ曰く、『魔導』を解析しプログラムを解体することでこちらの攻撃手段を奪いながら、体内のナノマシンによつて生み出したエネルギーで周囲の無機物を武装へと変形させる、ミッドチルダからすれば完璧に未知の技術形態。

それに何やら得体の知れない夜天の書のプログラムの体もいるらしい。

それを考えれば過剩戦力、と言うこともないのかも知れない。

「本当に大丈夫だろうか……」

クロノには、信じてる、任せた、とそう伝えた。そこに偽りはない。

セルジオの中で『クロノ・ハラオウン』という人間の信頼は容易く崩れるものではないし、きっとこれからもそうだと思つてる。

けど、クロノから『なのはが怪我をした』と伝えられた時一瞬だけ頭が白くなった。

そしてすぐにどうして、俺がいれば、とも思つた。

蓋を開けてみればなのはは捻挫程度の軽い怪我だったらしいが、だからといって安心できるわけではない。

今回は良くても次はどうかはわからない。なにせ相手は未知の技術形態を持つ相手

なのだ、一つのミスが大怪我へと繋がりがかねない。

「随分、過保護になったもんだ」

ふん、と自嘲気味に鼻を鳴らした。

一年間隣で戦った。

背中を預けてきた。

勘違いで無ければ、それなりの信頼も築いてきた。

守つてやりたいとも思っていた。

けれど今のなのは次元の壁を隔てたとてつもなく遠い距離にいて、危険かも知れないのに自分はそのこに行くことができない。

ぎり、と唇が白くなるほど強く噛みしめる。セルジオの表情に堪え切れない悔しさが滲む。

「俺はどうしたら良い……………」

セルジオが思わず胸ポケットの中の古びた懐中時計へ視線を落とすが、ただの機械であるそれはセルジオの質問に答えてくれることはない。

ふう、と息を吐いて空中に投影しているモニターの橋の時間を確認すれば、ゼストから告げられた集合時間の三分前を示していた。

「そろそろ行かなきゃな」

考え事をしているうちに思ったよりも時間を食ってしまった。こんな事ならなのはの事など考えるべきでなかったかも知れない。

よつこらと重い腰を持ち上げて三課のオフィスへと向かう。

「すみません、遅れました」

がちやり、と扉をあけて、じつと中にいた人たちの視線が一気にセルジオへと集まる。

「な、なんですか……」

十六人、三十二の圧力にセルジオがたじろぐ。しばらくの間誰も何も言わず、静かにセルジオを見つめていたが、やがてクイントが口を開いた。

「なのはちゃんになんかあったの？」

「——！」

「凶星って顔ね」

「な、なんで高町のことを……？」

「あなたね、あれだけでかい声でなのはちゃんの声を叫んだらわからないはずないじゃない」

「あ……………」

クイントが呆れたように肩を竦めた。

「どんな事件だった？　あなたがそんな顔するって事はそれなりにヤバイんでしょ

「？」

「……詳しくは言えませんが、規模としては『闇の書事件』とあまり変わらないだろう、との事です」

「それはなんというか………」

「なのはちゃんも災難ね」

微妙な顔を浮かべたクイントの言葉をメガースが引き継いだ。その言葉に周囲にいた三課の職員がうむ、と唸った。

有給のはずのなのはが自分たちと同じくらいヤバイ事件に巻き込まれているのに呆れているのか感心しているのか、それとも同情しているのか。

クイントがはあー、と大きなため息をこぼして扉のそばで立っているセルジオに向き直った。

「それで、どうするの」

「……それで、ってどういう意味ですか」

「わかっているのに惚けて煙に巻こうとするのは君の悪い癖よ」

いつもの朗らかな笑顔はクイントの表情にはない。ただ真面目な引き締めた様子で、静かにセルジオを見つめる。

「なのはちゃんの事、どうするの」

なのは、という言葉が出た途端、セルジオの体がびくりと揺れた。

「心配なんですよ。無理してほしくないんですよ。守りたいんですよ？」

クイントは声の調子をいくらか柔らかいものへと変えてゆっくりとセルジオへと言葉を投げかけていく。

「大切、なんですよ、なのはちゃん」

ぎり、とセルジオが悔しげに顔を歪める。

「だったら、だったら——！」

俯いていたセルジオが顔を上げて、自分を優しく見つめているクイントを睨み返した。

「だったらどうしろっていうんですか！　俺は陸の人間で、今は『戦闘機人』の事だっ

て……！」

「じゃあ捨てちゃいなさい、そんなめんどくさいもの」

「は……？」

さらに、とクイントが言った言葉にセルジオが目丸くする。

「何を、言ってるんですか……？」

「今の案件、全部私たちに任せてなのはちゃんのところに行きなさいって、そう言ってるの。今回の規模でならあなたがいなくてもちゃんと解決できるわ。ね、メガーヌ」

「……そうね。私もいるし、いざとなれば旦那でも引つ張ってくれば良いだけだし」
『戦闘機人』に関してのことを全て捨てる。その考えが一瞬でもよぎらなかつたわけではない。もしそれができれば、なのはの上司ということで現地に行くのも、まあ無理やり臭いが、できない事はない。

でも、それは、一考の価値もないほどに、ありえない選択肢だった。

「そんな事……!」

「……………」

「そんな事、出来るわけないだろ……!」

何年も、何年も追いかけてきたのだ。

三課に配属されて、クイントとメガーンと行った研究所で、ギンガとスバルを救出してから、ずっとこの日のためにやってきたのだ。

無駄に命が散らされたり、大切な人の体がいいように使われることがないように。もしこのチャンス逃せば、次この事件に関われるのはいつになるかわからない。

もしかすれば、二度とセルジオにチャンスが訪れる事はないかもしれないのだ。

「俺は、目の前のことを放つて高町のところに行くことなんて、できない……………」
「そう言い切ったセルジオにクイントが悲しそうに目を伏せた。」

「セルジオ君」

「……なんですか、メガーヌさん」

「今君は『なのはちゃん』と『ミッドの市民』を天秤にのせて考えてない？」

「……考えてますよ。だって、これはそういう話でしょう？」

「ううん、そうじゃないわ。君は今自分がやりたいことがちゃんと見えていないわ」

ふるふるとメガーヌが首を振ると長い紫の髪が追従するように揺れた。

「君が今考えるべきなのは、『ミッドの市民』と『なのはちゃんと地球の人たち』の命に差があるのかってこと」

「――」

「そこに違いはないと私は思うわ。ただ、今遠いか近いかだけ」

詭弁だとメガーヌは自分で言っていてわかってる。けれど、彼女の頑固な弟分はこれくらい言わないと自分の気持ちに素直になろうともしないのだ。

（なのはちゃんが大切ななんて、一目見ればわかることなのに）

ふ、とメガーヌが柔らかに笑ってみせる。

「それ、でも、俺は……」

セルジオが目を伏せる。

クイントに気持ちを言い当てられ、メガーヌに理由をもらっても、セルジオは動けない。

彼の根幹にある思いが、その動きを止めていた。

「セルジオ」

「ぜ、ゼストさん」

目を伏せていたセルジオの前にぬつとゼストがやってきて見下ろした。その表情はいつも通り険しい。

「セルジオ」

「なんですか」

「……………俺に『馬鹿』と言え」

「は？」

「「え？」」

今までシリアスだった雰囲気途端に解けた気がした。

「俺に馬鹿と言え」

「いや、なんで、え？」

「早く言え、なんならジジイでもクソオヤジでも好きにしろ」

「は？ いや、なんでですか?! いえるはずないでしょう?!」

「隊長突然被虐趣味に目覚めたのかな……………」

「考えたくないぞ、ワシ……………」

混乱するセルジオとただ同じ言葉を繰り返すゼスト。

周囲のクイントやメガーヌは『ちよつと早いボケが始まってしまったのか』と眉を寄せた。

「これは隊長命令だ。言わなければ命令違反と見なす」

「わ、わけわかんねえ!」

セルジオがゼストのトンチンカンな物言いに頭を悩ませながらも、『言うしかねえか』と腹を決める。

「こ、この、馬鹿っ!」

「よし、クイント、メガーヌ聞いたな?」

「え、はあ、聞きましたが」

「ふんっ!」

「ぐはっ!」

「どう言う意味——って隊長がセルジオくんを殴ったあつ?!」

クイントが頷くとゼストは割とシャレにならない感じでセルジオの頬を張った。

「ごころ、とセルジオが目を丸くして地面を転がる。」

「セルジオ、お前は上司への暴言行為により処罰を行うことにする」

「いや、どうしろって言うんですか?!」

「お前は今日から二日間内勤だ。俺たちの任務についてくることを禁止する。俺たちが目を離しても勝手な行動を取るなよ」

「なんでそうなる——え？」

ゼストに食つてかかろうとしたセルジオが、驚いたようにゼストのことを見上げた。

「あの、ゼストさん、それってどう言う……？」

「お前は内勤だが、俺たちは全員が外へと出ることになる。その間、この三課は無になるが、絶対に勝手な行動を取るな、と言っているんだ。そう例えば——」

ふう、とゼストが少しだけ表情を緩めてセルジオの手を引いて立ち上がらせる。

「——現在事件に巻き込まれている高町なのは空曹長の所に行ったり、な」

「ゼスト、さん……」

「もしお前がここからいなくなっても俺はお前を咎められないからな」

ゼストは最後にそう言つてセルジオの金髪をわしやわしやとかき回すと、唇を緩めるだけの笑みを、けれどどこか悲しそうな笑みを浮かべた。

「大切な女むすめを助けられる時に行かなければ一生後悔するぞ」

「——」

その言葉に、セルジオが言葉を失つた。

目の前の男が、誰のことを言っているのかをわかつたから。

ゼストはセルジオから手を離すと背中を向けて、短くけれど万感の想いを込めて、自身の弟子へと言葉をかけた。

「迷うな、行け、セルジオ」

それ以上ゼストは何も言わない。クイントも、メガーヌも、他の三課の局員もセルジオに何も言わない。

もう、セルジオを見る人はいない。

言うべきことはゼストが全て伝えてくれたと感じていた。

「……………はい」

セルジオは小さく返事をするとは振り返ることなく駆け出して行った。きっとこれから、彼の思うままに行動を取るのだろう。

「まったく、俺たちがいなくなつてからと言つたのに、せっかちな奴め」

「……………ですな。ちよつとセルジオくんらしくない行動でしたな」

「そうね、でも、悪くないんじゃないかしら。若いつて感じで」

「がはは、じゃな。ああいう青春っていうのも良いもんじやい」

「さてさて、セルジオが抜けた穴を埋めなきゃなあ。とりあえず五分でパーつとやっちゃおうか」

「あ、私が動くわ。その代わりに解析使える人ちようだい」

「おっけーです」

がやがやと騒がしくなり始めた三課でゼストが窓の外に見える太陽を見上げた。

(お前の息子はちゃんと俺とは違う選択をしてくれそうだよ、セピア)

そう心の中で呟いたゼストはほんの少しだけまぶしそうに目を細めた。



そして、セルジオは海鳴へ立った。

クイントに気持ちを教えてもらい、メガータに理由をもらって、ゼストに背中を押されて。

「事情は、なんとなくわかった」

アマタからの軽い説明、目の前の存在がなのはを洗脳した、テラフォーミングユニッ

トであるという事、自分よりも高性能なフォーミュラシステムを持つことなどを手短かに教えてもらう。

(やはり聞いていた通りか。取り敢えずあいつが『マクスウエル』って奴でいいらしい) 手の中で銀色の槍をくるりと回し、瞬間的に砲撃形態へと変形させて、空から虚ろな目でこちらを見ているのはへと視線を移す。

(高町……………)

セルジオが静かになのはを見つめて、唇を噛んだ。

「君は、何だ」

「セルジオ・アウディ。……そいつの上司だ」

「そうかなるほど、『ナノハ』の」

何というか迷った挙句『上司』と言うセルジオ。

そしてそれを聞いてマクスウエルが傷を抑えながらにやりと笑った。

「そうか、なら彼女を助けに来たのだろうが、残念だったね。彼女はもう私の手駒だ」

「なら、お前を倒せば良いんだろう」

「君にそれができるのかな？」

「やるさ。その為に来た」

「ならば、試してみればいいっ！」

マクスウエルの体内のナノマシンが駆動し、周囲のエネルギーをフォーミュラの動力へ変換する。

「アクセラレイ——」

「お前の土俵に立つ気はない」

だが、それよりも早くセルジオがあらかじめ待機させていた魔法式に魔力を流し込んで短距離転移を発動させ、マクスウエルの背後へと立った。

「デイベインカノン」

ズ、と無理やりリンカーコアから吸い上げられた魔力が瞬間的に砲身に収束され、零距离からマクスウエルの背中へと炸裂した。

「があああつー！」

そしてまったく抵抗することなく吹き飛ばされるマクスウエルにアマタが眉を寄せた。

（私となのはさんが相手した時に比べて格段に弱い。さつきまでの所長ならあんなにアクセラレイターに時間をかける事なんて……）

そんなアマタの思考など知る由もなくセルジオはゼファーを槍へと戻しながら、ふうとため息をついて、空のなのはへと駆け寄った。

俯いているためその表情は窺い知れないが、アマタからの情報ならマクスウエルの意

識が途切れれば洗脳は解けるらしい。あの距離の砲撃だいくら人間でないとはいえ流石に魔力ダメージの失神が起こるはずである。

「高ま——」

「Enemy reaction capture.

It begins to annihilate.

なのはの顔があげられて、真つ赤な瞳がセルジオを見据えた。がしゃんとエストレアが持ち上げられセルジオの腹に添えられる。

ぞくり、とセルジオの背に冷たいものが流れる。

「——ブリッツアクション
加速機動ッ！」

「Divine Buster」

瞬時にセルジオが待機させていた加速を発動させてなのはのデイバインバスターをかわして旋回。

なのはの背後へと回り込もうとする。

「Accelerator」

だが、なのはは加速機動中のセルジオよりも早く動き、そして背後を取った。

「な、嘘だろ……！」

「Divine Buster」

桜色が煌めき、そしてセルジオの背中に炸裂する——直前でセルジオが槍に魔力を集めて横合いから殴り飛ばす事でなんとか脇へと逸らした。

だが、それでも完璧に威力を殺すことはできずにセルジオの右腕をガリガリと削っていく。

「ローっ」

セルジオは声にならない声を上げてアミタの近くへ叩き落とされそうになり、なんとか空中で制御を取って墜落を回避する。

「Divine Buster」

だが、なのはの砲撃は終わらない。フォーミュラによる恩恵で普段とは比べ物にならないレベルの速度でデイバインバスターが連射される。

「巫山戯るなよッ！」

それを潰れた右腕を無視して左腕一本で槍を振るって何とか脇へと逸らそうとするが、片手では上手くいかず腹へとまともに砲撃を食らってしまう。

（魔力ダメージで意識が——）

ベストの槍の石突きでの打撃、クイントの拳をノーガードで受けた時を遥かに超える衝撃に、セルジオの意識が遠のいていく。

「ぎあッ！」

それを防ぐ為に左手の槍で思いつきり脇腹に叩きつけた。骨が軋むような鈍痛と引き換えに、意識が遠のくのを防いで、アミタの側に降り立った。

「Divine Buster」

そして、駄目押しでの四発目がセルジオとアミタに落ちてくる。

「ゼファーツ！ デイバインカノンツ！」

セルジオが叫び、瞬時に砲撃形態へとゼファーツを変形させ白い砲撃が桜色の砲撃を迎え撃った。けれど、先天的に砲撃の才能がなのはに劣るセルジオは、受け止めることすらできず、ぎりぎり押し込まれていく。

「フロリーアンさんとか言ったな、マクスウエルを倒しても高町の意識が戻ってない。どう言うことかわかるか？」

「それは、私にもなんとも。ですが、予想できることが一つあります」

「それはっ?！」

「あなたの倒した所長が本体でないと言う可能性です。さっきの所長はあまりに弱すぎました。もしかしたら、なのはさんを汚染したファイル・マクスウエルのメインデータは他にあるのかもしれない」

「成る程な、わかった」

「え、本当にわかったんですか？」

「それだけが取り柄だ。気にするな」

砲撃を撃ち続ける中みしみしと胸の奥のリンカーコアが痛みを訴える。それを無視しながらセルジオはなのを見つめて唇を噛んだ。

(今の俺じゃあ、勝てない。助けて、やれない)

白が桜色に塗りつぶされていっていると、セルジオの頭の中に見知った声による念話が届いた。

「(セルジオ!)」

「(クロノか)」

「(今どこにいる。こちらに來ているんだろう?)」

「(『オールストン・シー』ってところだ。すまないが用があるなら手短に頼む)」

「(そうか、なら簡潔に言う。撤退してくれ)」

「(……………理由くらいは、あるんだよな)」

「(宇宙からの衛星砲でここが狙われている。最悪、日本の地形が丸ごと変わりがねない)」

「(……………わかった。詳細は後で聞く)」

「(助かる。そっちにいる二人を連れて急いで帰還してくれ!)」

「二人は、少し無理かもしれない」

「(え?)」

「(……………何でもない)」

セルジオはそれ以上会話をすることはなく念話をきるとしきりに痛みを訴える右手でアミタを小脇に抱えた。

「な、何を…………?」

「帰還命令が出た。一度本部に戻る」

「え?」

「今から俺たち二人で戦線を離脱するな」

「ちよ、ちよつと待つてください!」

アミタが抱えられたまま、遠くで砲撃を撃ち終わり、セルジオとアミタを探しているのはへと目を向けた。

「置いていくんですか、なのはさんを」

「……………ああ」

「そんなの、できるはず——」

「この街を衛星砲が狙ってるそうだ。詳しくはわからんがこのまま戦闘を続ければ辺りが消し飛ぶそうだ。俺も、あなたも、高町も」

「わかるだろ。高町を助けるには、今ここで高町を見捨てるしかない」

やもすれば冷酷にも聞こえるセルジオの言葉。けれど、アミタはそれを攻めることができなかつた。

なぜならアミタの眼に映るセルジオの姿は、誰よりも、アミタなんかよりも何倍も悔しそうだったから。

その表情だけで、翠の瞳の少年がどんな気持ちでその提案をしているかがわかつたら。

セルジオは左手のゼファアで迫り来る桜色の砲撃になんとか耐えながら、マルチタスクに待機させていた短距離転移ショートシフトに座標を打ち込んだ。

「短距離転移ッ！」

三次元平面上からセルジオとアミタの存在が掻き消えて、マイクワロセカン100万分のド1秒のラグの後になのはの死角に降り立った。

そして、すぐに加速魔法を発動しようとして、胸のリンカーコアが大きく軋んだ。

「く、そ、魔力、が……」

デイバインカノンの無理な使用、魔力消費を無視したマルチタスクに待機させての連続発動。そしてここ数日の無茶がたたって、セルジオのリンカーコアが一時的に機能不

全に陥ってしまう。

そして、その間に、上空のなのはがセルジオとアミタに向けてエストレアの砲身を向けた。

「しまつ、た……」

魔力が瞬間的に収束される。眩い桜色の輝きがほのかに明るくなり始めている辺りを、照らして、照らして、照らして、いつまでたっても砲撃が二人を襲うことはなかった。

「ぐ、ううううう……っ!」

「なのはさん、まさか、精神力だけでウイルスコードを……」

顔を上げると、二人へと砲身を向けたなのはの瞳が薄紫と赤色とで明滅を繰り返している。

アミタに説明されなくてもわかる。今、なのはは精神力だけでアミタとセルジオを撃とうとする自信を必死に律していた。

「に、げて……、はや、く……!」

「高、町……」

「なの、はが、なんと、かできるうちに」

体を小刻みに揺らすなのはが、泣きそうになっている顔を無理やり口だけで笑みの形

を作って、セルジオと視線を合わせた。

「なのは、なら、だいじょうぶ、だから」

そのぐしやぐしやの笑顔にセルジオが強く、強く、拳を握った。爪が掌に食い込んで、皮が裂けて生ぬるい鮮血が指の間から溢れていく。

「ブリッツ、アクション」

痛むリンカーコアから魔力を絞り出してセルジオが白い光に包まれて、そして朝焼けの中を貫くように飛んでいく。

(……………高、町)

セルジオ・アウディ。

クロノの親友で、ゼストの弟子で、なのはの相棒。

彼が本当に助けたいものを助けるには、彼が来るのはあまりにも遅かった。

「必ず、必ず、助けるから。今度は、絶対」

その小さな呟きはすぐに風に吹き飛ばされて消えた。

それが管理局（ぼくら）

『さてどうする？ 私はどこらでもいい』

マクスウエルの間いかけに、静かにクロノが目を閉じた。

現状ではマクスウエルのこの取引は、ブラフかどうかはわからない。

衛星砲が撃たれたのはおそらく間違いないだろう。そしてその発射命令を出すための装置が既に結界外へ出た、というのめ。

だが読めないのは『本当にマクスウエルのいうような規模の砲撃ができるのか』ということ。

クロノの視線がエイミィに送られてきた衛星砲の解析映像に移る。

ミッドチルダの技術ならば辺りを消し飛ばすにはアルカンシエル並みの威力が必要で、その為にはそれなりのサイズの魔力炉と砲身が必要になる。

とてもじゃないが衛星砲ごときで出せる威力ではない。

現に先ほど『オールストーン・シー』付近へと投下されたものは確かに高威力ではあつ

たものの、とてもじゃないが関東どころか東京全域を破壊できるかも怪しい規模だった。

けれど相手は管理局にとつての『フォーミュラシステム』である。純粹な戦闘能力はさておき、そのエネルギー運用においてはミッドチルダの『魔法』技術の上を行くだろう。

もしかすれば先ほどのものは威力を抑えた砲撃であり、本来の威力ならばマクスウェルという通りの威力を出せるのかもしれない。

故に、判断ができない。ブラフか、それとも本当かを見極められない。

（考えろ、頭を回せ）

マクスウェルが求めているものはただ『自分を見逃がせ』という単純なもの。

もし仮にこの提案を突っぱねれば最悪関東が消し飛ぶ。だが、もし衛星砲のことがブラフだった場合マクスウェルは成立していない取引を持ちかけていることになり、それはイコールで管理局側の勝利といってもいいだろう。

反対に提案を受け入れた場合、状況は完全に管理局の敗北だ。もし衛星砲の射撃を防げたとしても、境界から出たマクスウェルはおそらく日本の占拠を始めるだろう。

ならば、選ぶのは僅かにでも可能性のある前者であるべきなのだろう。しかし、それは裏返せば何も知らない一般人の命をも天秤に載せるということだ。

現在の関東地区の2017年の時点で約4328万人。そして、衛星射撃による二次被害まで考えれば被害の数はもっと増えることだろう。

そんなこと、できるはずがない。

(状況は悪くなかったはずだ。どこで、一体どこで僕たちは——)

そこで、ふとクロノが今のマクスウエルが提案を持ちかけてきているという状況に眉を寄せた。

(待て、何でこいつは僕たちに提案を持ちかけてきた?)

衛星砲の衝撃と、キリエの通信機からの通信、という事でうまく頭が回っていないかったが、よく考えてみれば少しばかり解せない状況もある。

(僕の考えが正しければ……、いけるか?)

クロノが頭を回しながら小さく息を吸い込んだ。

「ファイル・マクスウエル、貴方に頼みたいことがある」

『……何だい?』

「貴方の取引に関して今の僕たちの一存では決めかねる。少し時間が欲しい」

『ほう』

クロノの言葉にはやてがえ、と驚いた表情を見せた。思わずはやてが口を開こうとして、そして未だマクスウエルとの通信がつかっていることに気づいて慌てて手で抑え

た。

僕に任せろ、と軽く頷く。

『たしかに、あまりせつかちなのは良くないね。私も鬼ではない、時間くらいはあげよう』

「感謝する」

『それで何時間欲しい？』

（やはり、か）

よし、と自分の予想があつていたことにクロノが小さく拳を握った。

「そうだな、ざつと十二時間でどうだ？」

僕らの本部は遠い世界にあるものでね」

『その半分だ。それで決断したまえ』

「……仕方ない。その提案を飲もう」

『なら一時停戦だ。私の方も兵を止めてあげよう、君たちも兵を引くといい。ああ、五分以内に頼むよ。もし確認できない場合辺りの安全は保証しかねる』

「わかった」

『では色よい返事を期待しているよ』

それつきりマクスウェルとの通信が切れて、『SOUND ONLY』の文字が消えてノイズが走った。

「なんとか、なったか」

ふう、とクロノが小さく息を吐いた。

『クロノくん今のは……』

「すまないが今は時間がない。その話は後で」

『私の方でも認識のすり合わせがしたいけれど、今は停戦が優先です。はやて、守護騎士へと停戦の指令を。交戦中の敵も見逃しなさいとも伝えて』

『……………わかりました』

クロノとレティの意図が読めないのかはやては難しい顔をしていたが、ひとまず領いて通信を切った。

(気になるのは、なぜマクスウェルが急に取引を持ちかけてきたのかだが……………)

軽く眉間のしわを揉みながら伸ばして朝焼けの空に不気味に輝く星を睨んだ。

「何か相手にも予想外の事態でも起きたのか？」



東京湾の配置された仮設本部に、現在の管理局側の戦力は一度収集されていた。

次元航行船『アースラ』艦長リンデイ・ハラオウン。

東京支部長兼本局執務官クロノ・ハラオウンとその補佐官エイミイ・リミエツタ。
嘱託魔導師であるフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。

無限書庫司書ユーノ・スクライア。

夜天の書の主八神はやてとその守護騎士。

エルトリア出身のアミティエ・フローリアン。

デイアーチエ、レヴィ、シユテルの三人。

モニターの向こうには本局人事部のレテイ・ロウラン。

そして部屋の間には航空魔導隊三課のセルジオ・アウデイ。

まず行われたのは状況の確認。

敵側にイリスを裏から思考誘導している『フィル・マクスウエル』がいること。

『フィル・マクスウエル』、あくまでもそう自称している存在が複数いるということ。

遙か上空、宇宙には衛星砲が存在し、今もまだここを狙っているということ。

ユーリ・エーベルヴァインの能力が上昇しデイアーチエら三人の連携でも勝てるか怪しいということ。

機動外殻は数は減らしたもののそこそこの数が残っていること。

一度捕らえた『固有型』七体のうち三体に逃げられているということ。

イリスのもとに行ったキリエ・フローリアンが音信不通であり、今どうなっているかはわからないこと。

そして、管理局側の主力魔導師の一人『高町なのは』が、ウイルスコードによって敵対しているということ。

そこまで話して進行をしていたクロノが軽く咳払いをして自分に視線を集める。

「ひとまず状況は理解してもらえたと思う。それで、次はこれからの対応について話したいんだが」

「ちよつと待ってくれよ、クロノ執務官」

少し強張ったクロノの言葉を遮る舌つたらずな声の一つ。

「何か認識に間違いでもあったか？」

「いやそこは何も問題はねえ。けど、そのそのいつに關してはもう少し話を聞きてえんだが」

むすつとした顔で腕を組んでいるヴィータが一人黙しているセルジオに視線を送った。

「話、と言われてもな。さつき紹介した通りアウディ二尉は今回の件に協力を申し出て

くれた」

「それではいそうですか、つてなるほどあたしも物分かりがいいわけじゃねえ。急に知らねえ奴が割り込んできても混乱するだけじゃないのかよ」

「そこならあいつも理解している。きつと作戦進行に支障をきたす事にはならないと僕が保証する」

「……………それに、あいつ『陸』の魔導師だろ」

その言葉が出ると視線がセルジオに、正確にはレティのものとは違う、『陸』の地味な茶色の制服に集まる。

ヴィータの言葉を受けてセルジオがを開けると翠の目を覗かせて、短く口を開いた。

「私は部下の高町空曹長が負傷したと聞いて様子を見に來ただけです」

「わざわざ、こんな遠いとこまでか」

「部下が負傷したら心配するのは普通でしょう。ただ、たまたまやって來たら少し込み入っていたようだったのでお手伝いを申し出ただけです」

「はん、たまたまねえ」

「何か、言いたいことがあるそうですね、ヴィータさん」

「別に？」

じろりとセルジオを覗んでいたヴィータが小馬鹿にするように鼻を鳴らした。

「ただ、そんなに手柄が欲しいんだなって思っただけだ」

「ヴィータ！　　そういう言い方したらあかんやろ！　　早よ謝り！」

「いや、構わない。そう見られても仕方ないだろう」

今まで少し眉を寄せながらヴィータの言い分を聞いていたはやてが咎めるように名前を呼んだ。それを軽くセルジオが手で制して、頬の筋肉を緩めるだけのような笑みを見せると、はやてが軽く頭を下げてヴィータを睨んだが、当の本人はそっぽを向いたまままだ。

「こほん、とまた軽くクロノが咳払い。」

「各々アウディ二尉に思うことはあるかもしれないが、戦力はあるに越したことはない。不満は飲み込んでくれると嬉しい」

「それにセルジオ君割と優秀だよ、たぶん！　　私は三年くらい前の頃しか知らないけどー！」

「絶妙にあてにならない補足ねえ」

ぐつとサムズアップするエイミィにリンディは困ったようにくすくすと声を漏らした。けれど、空気は重苦しく雰囲気は明るくならない。

(やっぱり、なのはがないのは大きいな)

『高町なのは』という存在は今のメンバーにとっては大きな意味を持つ。

戦力的にはもちろんだが、その影響はどちらかというと精神的なものが大きいだろう。

フェイトにとってなのは初めての友だちだ。

はやてにとつては自分を呪いから解放してくれた恩人の一人だ。

守護騎士たちにとっては頼りになる戦友といったところだろう。

彼女が笑顔でいればなんとなくみんな明るい気持ちになるし、「大丈夫！」と言われれば危なっかしいところはあるものの、それでもなんだか勇気付けられて大丈夫な気がしてくる。

そのなのは今はいない。

そのことが全員に重くのしかかっているようだった。

クロノが小さく息をついて気持ちを入れ替えると、部屋に声を響かせる。

「まず僕から話したいのは『フィル・マクスウェル』が僕たちに持ちかけて来た取引のことに關してだ」

『管理局に手を引いて欲しい』つちゆうアレやな。そう言えばクロノくんなんや話すことある言うとつたなあ」

「ああ。その件について少し気づいたことがあったんだ」

はやての問いに軽く頷いたクロノはエイミィに空中に巨大なスクリーンを投影して、

少し前の通信の映像を映し出した。

「いくつか見て欲しい場面はあるが、まずはここだ」

――

『キリエ・フロリアンか？　今はどこにいるのか教えて欲しい』

『あんな、そつちにちよお危ない人が行くかも知れへんくて、その事で――』

『君たちが、今の司令官かな』

『――『フィル・マクスウエル』、ですか、貴方は』

『おや、私のことを知っていたのか。君たちとは面識はないはずだが』

『あ、ありえへん！　だつてさつき所長さんオールストーン　・　シーで……』

『いや、何少しばかり取引をしたくね』

――

「……だ」

一旦クロノが映像を止める。

「えと、ここが何か変なところがあるのかな、クロノ。ふつうに相手が交渉を持ちかけてきたように見えるけど……」

「ああ、そうだ。相手は普通に僕たちへ連絡を入れてきただけだよ」

「——？　普通やったらええんちゃうん？」

「戯け、小鴉。その『普通』がおかしな状況だと、その指揮官は言うておるのだろうか？」

「あ、ひどい王様！　言うにしてももうちよいオブラートに包んでもええやんか！」

「ふん、戯けを戯けということに何の躊躇いがあるうか。ああ、シユテル、そこで船を漕いでいるレヴィを早急に起こせ」

「はい、ほら起きてくださいレヴィ」

「うーん、ボクまだ眠い……………日向ぼっこしながら昼寝する……………」

「猫の記憶が戻って猫の時の習慣が戻ってきてますね、これ」

「フエイトー、膝貸してー」

「え、わ、私？」

よだれを垂らしながらレヴィはもにもよると眠そうな表情で隣に座っていたフェイトの太ももに突っ伏した。

そんな様子に特に取り合うことなくシグナムが話を戻すべく口を開く。

「察するにクロノ執務官はこの一連の会話になんらかの意図が隠されていると、そう言いたいわけでしょう」

「隠された？」

「意図？」

首をかしげるはやてとフェイト。

「……………相手が連絡を入れてきた目的が見えないな」

ぼつり、とセルジオが呟く。

「それは、取引を持ちかけることが目的なのでは？」

「いやそれだけじゃ解せない。高——シユテルさんはなぜこのタイミングで相手が連絡を入れてきたと思う？」

「——！なるほど、それは考えつきませんでしたね」

「あの、セルジオさん、申し訳ありませんがどう言うことか説明していただいても……？」

「なら簡単に言い換えようか。クロノは、所長が何でこのタイミングで正体を明かしたのかがわからないって言いたいんだらう？」

「そうだ」

軽くクロノが首肯する。

「相手はキリエ・フローリアンに渡しておいた通信端末から自発的に接触してきた。僕たちの裏を書くなら、自分の存在は最後まで秘匿するべきだったのに、だ」

「つまりこのタイミングで取引を持ちかけなきゃいけない理由がマクスウェルさんには

あつたつてこと?」

「しかも自らの利点を捨ててまでということですか」

またクロノが頷いた。

「ここで僕は一つの仮説を立てた。それは、これはマクスウエルにとつても一種の賭けだったんじゃないか、と言う事だ」

「賭け?」

「エイミー」

「ほいほーい」

「これは、都市での戦闘ログ?」

「それも、随分と詳細ですね。『量産型』の反応から、こちら側の戦力まで」

「……………そうか、そう言うことか。ふん、所長の奴も背水の陣だったと見える」

「残っている生産プラントからしてもギリギリのラインだったのかもな」

投影されたデータを見てもイマイチわかっていないのはフェイトとアマタ。

対してデータを見てなんとなく理解できたのはディアーチェとシユテル、それに経験豊富な守護騎士やセルジオといったメンバー。

しばらくむむむ、と唸っていたはやてがあ、と声を漏らした。

「これ、もしかして私たちの方が形成有利なんやない?」

固有型は残り三体。機動外殻が残っているとはいえはやてやクロノなら十分対応できる。それに『量産型』の反応もありはするが管理局側が遅れを取る数でもない。

「まさか、マクスウエルさんの事知らず知らずに追い詰めとったん？」

「おそらく、な」

あくまでも仮説だが、と前置きしてクロノが言葉を続ける。

「僕たちが解放された固有型の再補足をするのが早かったとか、何人かいたはずの『フィール・マクスウエル』のコピーの撃破が増えていたとか、生産プラントが抑えられ始めて生産スピードが間に合わなくなったとかだろう」

「予定していたはずの時間が稼げなくなった、というところか。これ以上抵抗しても数で押し切れる自信がなかったか」

数は力だ、という話はよくある。

一人の英雄より百人の兵士。

ミッドチルダ的に言うならばニアSのエース一人がいるより、Aランク以下でも五十人の魔導師が連携を組む方が勝つ確率は上がる。

けれどそれはあくまでも練度が高かった場合の話だ。

シグナムが聞いた言葉によれば『固有型』は『量産型』三十体分の素材からできてい
るらしい。

その『固有型』でさえシグナムには手も足も出ない。ましてや『量産型』が相手になるはずもない。

『量産型』が小隊を組んでもアマタには敵わない。おそらく撃破にかかる時間は長くて二、三分といったところだ。

それでは力は拮抗しない。生み出すスピードよりも破壊が早くては戦線維持できない。

「だから、所長は今勝つ事より、最終的に勝つことへと目的を変えたと、そういうことですね」

「おそらく。そしてそれをファイル・マクスウェルに決断させたのは『オールストン・シー』で……………」

「なのはを、洗脳できたこと」

「つまりファイル・マクスウェルには高町がいる事で、もう一度時間さえできれば逆転できる目処がたつたってことか」

「でも、本当にそうだって言えんのかよ。クロノ執務官の勘違いって可能性は？」

「僕もそのことなら考えた。けど、僕の提案に乗ってきた時点で確信したよ」

び、とクロノが手元を操作すると映像が再開する。

『ファイル・マクスウェル、貴方に頼みたいことがある』

『……何だい？』

『貴方の取引に関して今の僕たちの一存では決めかねる。少し時間が欲しい』

『ほう』

『たしかに、あまりせっかちなのは良くないね。私も鬼ではない、時間くらいはあげよう』

『感謝する』

『それで何時間欲しい？』

『——ざつと十二時間でどうだ？』

『その半分だ。それで決断したまえ』

『……仕方ない』

『なら一時停戦だ。私の方も兵を止めてあげよう、君たちも兵を引くといい。ああ、五分以内に頼むよ。もし確認できない場合辺りの安全は保証しかねる』

『わかった』

『では色よい返事を期待しているよ』

「何時間、ね」

「思考時間にしては随分と長く感じるな」

「それも相手からです。これは、ほとんど確定ですね」

「ああ、一旦時間を取って戦線を立て直すこと、それがこの取引の目的だったことは明らかだ」

「じゃあ私たちは所長さんの思惑にまんまと引つかかっちゃったってことになるのかな……」

『いえ、あの場で衛星砲を出された時点で私たちは負けていたわ。あの選択は、仕方なかったと思うわ』

「衛星砲、か……」

その一言で表情は曇る。

関東を全域を消し炭にできるだけの威力を秘めた砲台。遙か上空にある人工衛星を改造したもの。『ファイル・マクスウエル』と『イリス』のデータバックアップがとられて

いるとは本人の言葉だ。

(まあ、あくまでも鵜呑みにするのなら、という枕詞がつくが)

クロノは静かに目を閉じる。

「辺りの人の命を握られとるつちゆうのは少し厄介やなあ。相手の機嫌損ねたらドカんとやられる可能性もあるしなあ」

「いや、その可能性はほとんどないだろう」

はやてが頭を抑えながら言った言葉をあつさりと否定する声が一つ。

視線がまた部屋の隅——澄ました顔のセルジオへと集まる。

『アウディ二尉、それはどう言った意味ですか?』

セルジオは少しばかりの居心地の悪さを感じながらも自身の考えを訥々と語っている。

「まず相手の最終的な目標に関してですが、これは『地球を拠点に研究を続ける』ってところでいいんだよな、アミタさん」

「はい、断言はできませんが……」

「ならマクスウェルは尚更ここを攻撃できないはずだ」

「どういうことですか?」

「まあ別に奴としては攻撃してもいいがイコールでそれは限りなく負けに近い勝利にな

るっていうことだ」

「——？」

「セルジオ」

「はいはい、回りくどい、な」

「はあ、とため息をつくクロノにセルジオは苦笑いで応じる。

「じゃあ、もし仮にマクスウエルが攻撃したらさ、あいつに残るのはなんだと思う？」
「残るものは、バックアップのあるデータと衛星砲、でしょうか？」

「そうだ。地球上の生産プラントも、固有型も機動外殻も量産型も俺らごとく消し飛ばすわけだからな。あいつの手元に残るのはそれだけだ」

では次、とセルジオがアミタの名を呼んだ。

「一つ聞きたい、衛星砲の素材を使って作れる量産型は何体くらいだと思う？」

「え、それは、詳しくはわかりませんが、おそらく五、六体ぐらいだと思います。十体は難しいかと」

「データと体積見る限り俺もそんなところだと思っている。じゃあ、もしマクスウエルがここを砲撃した際に管理局はどういった対応を取りますか、ロウラン提督」

『おそらく本局に連絡をして一両日中に新しい部隊を派遣する——ああ、これは確かに相手は砲撃できないわね』

「——？ どういうことですか。」

「簡単に言おう、もし砲撃して関東を消しとばした時、マクスウェルは次に来る管理局の増援に対抗できるほどの戦力は残らないんだよ」

生産プラントがない以上今のようなスピードでの量産もできないし、そもそも素材も丸ごと吹き飛ばしているので手ずからの量産も難しい。

そして、それをやれば人質がいるという有利を捨てるということなので、管理局の遠慮もなくなることだろう。

「つまり、マクスウェルはただ勝つだけじゃ駄目なんだよ。あいつは、管理局を倒した後の事まで考えて勝利を収めなきゃいけないんだ」

「それで、衛星砲は撃つてこない、となるわけか」

「それをやれば自分の首を締めることになるっちゆうわけなんか」

マクスウェルは今の目的は主に二つと考えられる。

一つが先ほどセルジオも言及した『地球を拠点に研究を続けること』。

もう一つは、『今の戦いをなるべく犠牲を少なく終わらせること』。それは生産プラント、固有型などの戦力を維持しつつ勝つということだ。

一つ目を達成するには後者の目的が必要で、そして後者は衛星砲を撃った時点で叶わなくなる目的なのだ。

「結論を述べれば、奴は自分のために衛星砲は撃てないんだよ」

「と、まあこのくらいは相手も察しているだろうね」

東京タワーから人気がないゴーストタウンを見つめるマクスウエル。その瞳は深い洞のようで何を考えているか、何を見ているのかすら推し量れない。

「ユーリが負けるとは思えなかったが、それでも状況は良くなかったからね。少し手を打たなきゃいけないかった」

戦乱に乗じてあらかじめバックアップのために準備しておいたロケットを打ち上げた事が予期せず交渉に役立ってくれた。

自分の死の後の置き土産のつもりだったのが、準備してしすぎるといふことはないらしい。

「私が一人だったなら、ユーリに警護をしてもらって一人で脱出を図る、というのもありだったんだけど、少し素体をわけてしまった」

イリスと早く合流したかったものでね、と誰にいうでもなくマクスウエルが笑う。

『フィル・マクスウエル』という素体には基本的に『アクセラレイター・オルタ』と『ウイルスコード』が搭載されている。

それも強いことは強いのだが、けれど『フィル・マクスウエル』がそのスペックを十全に使いこなすにはそれなりの身体スペックが必要だった。

具体的には『量産型』百数十体分なのだが、今回マクスウエルはあえて、一体あたり四十体前後で抑え、四体の自分を作り出した。

そうする事で、遥かに早く、そして効率的に作戦をとることができた。

けれど、問題が生じてしまった。

固有型の解放を行なっていた一人が撃破されてしまったのだ。相手はアミタと『高町なのは』の二人組。

流星に完敗、とまでは言わないがそれでも速さでは翻弄できたがその実力は拮抗していたと言えた。二人に大きな怪我はなく、けれど自分は大切な素体を一体失った。

「だから、私は力を蓄える必要があった。本当に、予想外な事ばかりで少し参っていたしね」

ふ、とマクスウエルが笑みを漏らして、自分の背後に控える存在へと目を向けた。栗色のツインテールに白色の防護服の、彼を魅せた魔導師の少女。

「でも、なあと最後に笑えばいいのさ」

その赤く染まった瞳に、以前あつた意思の光はなかった。



話し合いが終わり一先ず解散となると、今度はセルジオとクロノは二人で連れ立って自販機へ。

「ほら」

「ん」

クロノが買ったブラックコーヒーをセルジオは受け取って片手で器用に開けた。

かしゆ、という高い音が廊下に響く。

「苦いな」

「ああ、目が醒める」

それ以上何も言わない。痛いほどの沈黙が二人の間に横たわり、互いの息遣いだけが

耳に届く。

「……すまなかった」

しばらくして沈黙を破ったのはクロノが先だった。目だけを動かして盗み見たその横顔は重苦しく、何に対して謝っているかは火を見るより明らかだった。

「僕はなのはを……」

「言うな」

「しかし……」

「何も、言うな、クロノ」

セルジオがコーヒーを飲み干して強く握った。

「見捨てたのは、俺だ」

ぱき、とほんの少しだけ缶が軋んだ。

クロノが何かを言おうと口を開こうとして、やめる。今セルジオに言う言葉を彼は持たなかった。

「あ、あの……」

そんな二人の元へ長い金髪を揺らしながらやって来る少女が一人。

「どうしたんだ、フエイト？」

「その、セルジオさんに用があるんだ」

「……テストタロツサさんが、俺に？」

「はい、お話ししたいことがあって」

フェイトの赤い目がゆらゆらと心配そうに揺れた。

「あの、セルジオさんはなのはを助けに来て、くれたんですか……？」

「……………助けにつて、ほどじゃない。少し様子を見に来ただけだ」

「それでも、来てくれたんですよね」

セルジオがほんの少し目を細めて、そして小さな声でああと肯定した。それに、フェイトが困ったように笑いながら「そっか」と呟いた。

「セルジオさんつて、なのはの事どう思ってるんですか？」

「こんな時まで冗談に付き合うほど俺も余裕があるわけじゃないんだけど、そういうのじゃないみたいだな」

「はい、そういうのじゃなくて、なのはの事を、なんで助けに来てくれたのか、理由が知りたいんです」

じつとフェイトが見つめ、セルジオが何がしかを返答しようと口を開いて、しばし黙り込む。

なんで助けに来たのか、来てしまったのか。いくらゼストたちに背中を押されたとはいえ、それでも戦闘機人事件を捨ててまでやって来た理由。

ゆっくりと、セルジオが口を開く。

「なんで、だろうな。なんか、力になってやりたいって、思っ」

心には、なんとなくもやもやとした感情がある。けれど、それを言語化して説明しろ、と言われてもうまく言い表すことができなかった。

「言葉にはできないけど、今行かなきゃ、駄目だって、あいつのことを助けてやりたいって、思ったんだ」

「そうですか」

拙い言葉で、理由にもなっていないような、そんな言葉を紡いだ。

けれど、フエイトはそれでも満足したような、そんな柔らかい笑みを浮かべた。

「セルジオさん、なのはのこと、助けてあげてください。たぶん、なのはの事を『救える』のは、今はあなたただけなんです」

「……それは、どういう」

「なんというか、なのはは無茶をやってなんでも救っちゃおうとする姿を、心配してたけど、それよりも信じてたと思うんです」

フエイトがふ、とほころぶように笑った。

「きつと、なのはは『友だち』には助けを求めなくても、あなたになら、きつと助けを求めてくれる気がしてるんです」

だから、お願いしますとフェイトが勢いよく頭を下げると元来た方向へと駆け出していった。

二房の金髪が跳ねるように揺れる様を見送りながら、ため息とともにクロノに目を向ける。

「いい子だな、テストタロツサさん」

「だろう。自慢の妹だよ」

「は、着実にシスコンの道を歩みやがって」

「言ってる」

軽く二人で笑みをかわして拳を握った。

「助けなきやな、攫ほわれた人も、この世界も」

「そのための、管理局ぼくらだ」

静かに二人の拳が重ねられて、鈍い痛みが痺れるようにして伝わった。



がり、と親指の爪を噛んだ。

(所長と、また会えた)

ぼんやりとした思考でイリスは外を見つめる。

キリエを伴ってイリスが所長と呼ぶ男、『フィル・マクスウエル』は自身の前に現れた。なんでも自分の中にバックアップデータを残しておいたお陰で偶然『量産型』生産中に蘇生できたのだそうだ。

その姿も、話し方も生前からなんら変わりなく、そしてイリスのことを抱きしめてくれた。

——よく頑張ったね、イリス。

その言葉と、頭を撫でてくれる優しい手にいつかのことを思い出しそうになった。

——けど、あと少し頑張って欲しいんだ。

——私たちは、まだすべきことを終えていない。

——だから、共に最後まで戦って、そしていつかの日を取り戻そう。

——私と、君と、ユーリと。

そしてマクスウエルはイリスと指揮が変わると、しばらくの休戦と新しい戦力の補充を始めた。

ちらり、とイリスの目が部屋の端、剣を片手に佇む『固有型』へと移った。

元はデッドコピーの一体だったにも関わらず、今の彼女は完璧にイリスから独立し、マクスウエルの命令に従って動いている。

一度話したが、相手は「私は斬るためにいるだけだ」としか答えなかった。

イリスがふらふらと歩き出して赤い結晶に包まれて動きを封じてあるユーリの前で止まった。

ユーリ・エーベルヴァイン。

元、イリスの親友だった人。

マクスウエルは「私は生きていたんだ、許してあげてくれ」と言われたがイリスはそう簡単に折り合いをつけられるとは思えない。

そういえば結局まだ一度も会話してなくて、だからなんで所長たちを殺したかを聞き出せていない。

（あれ、なんで私はユーリと話してないんだっけ）

ぱちつと頭の中で何かが弾ける。

「あれ、何考えてたんだっけ……………?」

ぼーつとしたイリスがふらふらと歩いて、今度は赤い目で虚空を見つめている桃色の髪の少女、キリエの前で止まる。

「なんで、あなたはこんなところに来たのよ」

マクスウェル曰く、東京タワーの近くにいたとのこと。随分強かったが、奇襲を仕掛ければ楽にウイルスコードが使えたとも言っていた。

「……………さつさと逃げればよかったのに」

ぽつりと呟いてなんとなくキリエの髪を指で梳いた。丁寧に入れされた癖っ毛は、彼女が嫌っていて、イリスが「可愛いよ」といつも元気づけていたものだった。

「本当に、馬鹿な子なんだから」

イリスが目を閉じて手を髪から引き抜こうとすると、指がキリエのフォーミュラの一部分に引っかかり、何かを弾き落とした。

からん、と乾いた音を立てて青い板が床を転がる。

「これは、遺跡板……………?」

イリスが地面を滑ったそれを拾い上げて眉を寄せた。

これはエルトリアにとつてのコンピュータ、様々なデータを蓄積するためのツールだが、それをわざわざキリエが持っている理由がわからなかった。

なんとなく、イリスが遺跡板を起動して中のデータに目を滑らせた。

その目は、赤く、赤く、けれど、一瞬だけ元の色に戻ろうとしていた。

加速する戦場

時刻は昼前、太陽は頂点に近く夏場ということもあつて強い日差しは深い影を落としている。

マクスウエルの言った六時間という制限まで残り三時間と少し。

仮設本部の会議室に集まったのは支部長のクロノ、アースラ艦長リンディ、夜天の主のはやて、指揮官のレティは通信で参加している。そこにセルジオはいない。『陸』の彼がこの会議に加わることはできないからだ。

軽く仮眠をとったとは言え集まった卓を囲む面々の疲労の色は濃い。特にはやてなどは幼いということもあつて先程からしきりに目頭を押さえているようにも見えた。

「では衛星砲の対策はクロノの提案の通りに。けど、随分と突拍子も無いのを持ってきたわね」

「あ、ははは……、少し思いついて」

「ふーん、少しあなたらしく無いかなって母さんは思ったんだけど？」

「気のせいでしょう。そんなことより、はやて、段取りの方はよろしく頼む」

母親の視線から逃げるように口早にはやてに指示を出すと、こほんと軽く咳払い。

「敵の予測される特記戦力は、主に六つだ」

空中に半透明のウインドウが現れる。

「一人目は『イリス』。今回の事件の発端も彼女によるものだ。何より、自己増殖機能によつて彼女を抑えなければいつまでたつてもキリがない」

「そんで『ユーリ』。夜天の守護者で、王様たちの主人。おおよそ魔力が尽きる様子は見えへんで、しかも自己再生機能に生命結晶化まである、と」

「言うまでもなくこの事件の主犯格の一人『フィル・マクスウエル』。戦闘能力もかなり強い。頭に入れておいたほうがいいのは、何より何人いるかはわからない、つてことかしら」

『それに逃がした『固有型』も。今は反応をロストしてるけど、三体はいるとみていいわね』

「後は音信不通のキリエさんだけど、たぶんウイルススコードでの精神汚染がされてるんでしょうね」

そこまで話して話が一旦止まり、レティが意を決したように口を開く。

『そして、なのはさん、ね……』

「戦力に関しては一番なのはちやんが未知数やないかと思えます。なのはちやん、もともと強かったけど今はフォーミュラで磨きかかっていますし」

むう、と会議室の中で全員が腕を組んで唸った。

「個人的な考えだが」

だが一人だけクロノは口を開いた。

「おそらくマクスウエルが二人以上いるという事は、もうしない気がしています」

「どうして、クロノ」

「既に此方にタネが割れているからです。もう僕たちの頭に可能性が入っている以上、最初の時のように僕らの不意をつくことができない。なら、自分の性能の強化をすることをします」

『なるほど、では根拠は?』

「一応先ほどアミティエ・フロリアンに確認をとりました。今のマクスウエルは『アクセラレイター・オルタ』こそ驚異的ですが、身体性能に関してはそこまで高くない。なら、おそらくその穴を埋めようとするのは当然の思考です。」

と、先ほどセルジオとの話し合いで結論づけたということは黙っておく。言っても咎められはしないだろうが、友人の肩身が狭くなるのは本意ではない。

『ならば、やるべきことは見えましたね』

レティがくいつと眼鏡を押し上げる。

『特記戦力である、六人……固有型を考えれば八人に対して私たちも相応の戦力をぶつけないければならない、という事です』

「ああ、そういうえばアマタさんがキリエさんには自分が行きたい、いうてはりましたよ、さつきお話しした時」

「同じアクセラレイターを使える以上それが妥当でしょうけど、そうなると問題は『イリス』さんね」

「それに関しては、事前についておいた通り既に僕の方から彼女の方へ頼んであります。本人も、自分がやりたいと」

『ならそちらは任せましょう。では、固有型は、反応がロストしてしまった以上、機動外殻への対応者が臨機応変に動くって形がベストかしらね』

「ユーリさんは、やっぱり小隊をぶつけるよりあの三人か、守護騎士さんたちに任せたいけど……」

「そこは私たちの方で上手く分担しようと思います。王様たちも、たぶん協力してくれると思います」

『なら、問題はフィール・マクスウエルと、なのはさんね……』

苦い顔をしたレティ。

マクスウェルは知恵も回り、そして何よりなのはアマタ二人を相手にして互角に渡り合う実力者だ。それがクロノの予想によればさらに強くなっている可能性すらあるというのだから、手に負えない。

「普通に考えれば、マクスウェルは真つ先に落とせたらベストね」

「?」 最後やなくてですか?」

「ああ、この場合はマクスウェルに一番強くて、勝てる可能性が高い人を当てるべきだろうな」

はやてが首をかしげる。彼女も指揮官を目指しているとは言えその経験はまだ浅い。既に五年近く執務官のクロノや、はやてが生まれる前から管理局にいるレティやリンディとは違うのだ。

「今回は『指揮官が一番強い』というタイプだ。魔導師組織なんかじゃ間々あるケースだな。これの一番の特徴は、頭が潰れれば戦力が大幅にダウンするという事にある」

『特に今回はマクスウェルが『洗脳』と手段という取っているから、その傾向は特に強い』
「はあ、つまり今回は所長さんを倒せればまるつと相手に洗脳されとる人が此方の戦力になつてくれるかも知れへん、つちゆうことですか」

「うん、その認識でいいと思うわ」

指を唇に添えて頭を悩ませていたはやての答えにリンディが満足そうに頷く。

「マクスウェルに当てる人はシグナムが妥当ですかね。範囲攻撃も近接戦闘も慣れたものでしょうし」

『かしらね。はやて、シグナムさんを借りてもいいかしら。今の戦力で満足に戦えるのは彼女だけでしょうし』

「わかりました。私の方から頼んでおきます。たぶん、断ることはあらへんと思います」
シグナムの魔導師ランクはS―。今の戦力の中では最も高く、また守護騎士プログラムということもあって蓄積した戦闘経験も相当なものだ。

リンディもレティも彼女にマクスウェルの逮捕を任せる事に依存はなかった。

『では、なのはさんだけど、どうしましょうかね』

「戦場に出てけえへん、ちゆうこととかなかったり……………」

「おそらく、それはないでしょうね。なのはさんは曲がりなりにもマクスウェルさんを破っているのよ。戦わせないって選択肢はないでしょう」

「……………そのことに関して、僕の方から提案が一つあります」

重苦しくクロノが口を開くと、モニターの向こうのレティをしかと見つめた。

「あいつを、彼女に当てましょう」

◆

マクスウエルがにぎにぎと手を握ってみて、先ほどとは少し変わった自身の体の調子を確認する。

「ふむ、悪くはない、か。流石百八十体分だ。今ならアミテイエたちに遅れをとることもなさそうだ」

マクスウエルと管理局の取引の残り時間まで後一時間と少し。

一度凍結された生産プラントもいくつかは復旧し、今も『量産型』と機動外殻の生産を行っている。先ほどのように『固有型』は作らない。

下手に高性能機体を作るよりも既存のものの上げや、『量産型』の数を揃えた方が使いやすいという理由もあった。それにマクスウエルがセッティングしている『固有型』のベースシステム的に、八体以上を作ることにはできないのだ。今捕縛しているものが破壊されれば、また新しく作れはするが相手がそんなヘマをするとも思えなかった。

マクスウエルが隣に控えている量産型の一体に顔を動かすことなく問うた。

「生産ペースはどうだい」

「良好かと。このペースなら後30分ほどで規定の数に達するでしょう」
「素晴らしい」

含むようにマクスウェルが笑う。

規定の数、つまり最初にイリスが揃えていた数のことである。この短時間でそこまで持つていったならば、あと半時間でも相当な数が揃うはずである。

自分は既に一体に集めてしまつたが、それでもやはり数は力だ。
質より量を揃えることが今は重要だ。

「それに万一があつたとしても、私には衛星砲がある」

マクスウェルとイリスのバックアップデータのある衛星砲。それを撃つことは地球での未来と、ユーリを失うことにはなるが、自分が捕まることに比べれば随分マシだと言える。

それに衛星砲があるならばある程度マクスウェルは管理局にプレッシャーをかけられる。それに、なにせ宇宙は遠い。もし潰しに行こうとしても、付近を警護させているイリスの一体によつての迎撃も可能だ。

『あの、所長』

「おやイリス、何か用かな？」

目の前にウインドウが出現し、赤い髪の少女、イリスの姿を映し出した。

『あの、さ。所長にとつて、私はどんな存在？』

おや、とマクスウェルが目を開いた。

彼の記憶の中でイリスが自分にそういつたことを尋ねてきたことはない。彼女は自身のことを『テラフォーミングユニット』だということを理解していたし、それに誇りを持つていたはずだ。

その彼女が、自身の存在について問うとは珍しいこともあったものだ。

「君は僕の娘のようなものさ、イリス。大切な、大切な、ね」

『そつ、か。ごめんね、作戦の前に変なこと聞いて。ちよつと不安になつちやつて』

「構わないよ、戦い続けて君も参つてしまつているんだらう。なに、安心していい。この戦いが終わればまたユーリと仲良く暮らせるようになるさ」

『そう、だね』

曖昧な笑顔のままイリスが軽く手を振つて通信を切つた。

「……そろそろウイルスコードも限界なのかもしれないな」

マクスウェルが髪をかきあげながら、空を睨む。

イリスに仕込んであったウイルスコード。それはなのはやキリエに仕掛けたものと異なり、内側から思考誘導という形で働いているが、イリスの中に疑念が生まれているのだらう。

「あと一時間、こちらはどこまで……………おや?」

以前キリエから奪った通信機器が軽く振動しているのに気づく。

『数時間ぶりだな、フィル・マクスウェル』

「君か。約束の時間には少し早いようだが…………」

『そうだな。けど、少しあなたに見せたいものがあつたものでね』

「ほう……………?」

マクスウェルが目を細める。なぜ約束を守らずクロノが通信を取ってきたのか意図が読めなかった、こちらには見せしめに衛星砲を撃つ可能性すらあるのに。

『空を、見てほしい』

「空……………?」

マクスウェルが太陽が頂点近くまで登ろうとしている青空を見上げて、衛星砲のある場所に一瞬薄い緑の光が走つたような気がした。

誰か衛星砲の迎撃に行つたのか、と思つたのもつかの間、衛星砲が爆発を起こした。

「な—————」

目を剥いたマクスウェルが慌てて近くにいたはずのイリスの一体の目から映像を共有して、言葉を失つた。

緑の巨大な手によって、衛星砲が握りつぶされていた。

「これは、なんだ」

マクスウェルはエルトリア出身の人間だ。故に、魔法に関しては詳しくない。

イリスたちはなのはやフェイト、そしてはやてたちのことはよく調べていた。けれど、それはあくまでその三人のを中心に調べたのであって、守護騎士たちまできちんと調べきっていたわけではない。

もちろん守護騎士の一人が、転移の魔法を使うことは知っていたかもしれないが、あくまでもサポート魔法である『転移』で結界内から動くことなく衛星砲を握りつぶすなど誰が予想できようか。

「は、ははは………」

もはや笑い声しか出ない。固定砲台のイリスは近づく『人間』に対しての迎撃を行うようになってきている。転移による純粹魔力攻撃に関しての対策などあろうはずもない。

「やって、くれたものだ……！」

『宣戦布告にはちようどいい花火でしょう』

ぎり、とマクスウェルが睨むが、モニターの向こうのクロノは全く動じた様子すらない。

『ああ、後貴方の取引の返答だが』

そこでクロノが目を怒らせながら、吼えるように答えた。

『答えはNOだ！　僕たちがこの世界を諦めることは絶対にはないと思え！』

法に則り、人を守り、秩序を保つ。

『それが管理局だ！　覚えておけマクスウエル！』

彼らはいつだって、その為だけに戦うのだ。



機動外殻が軋みをあげながら都市を闊歩する。その数は既に五十を超えていた。

目指すは結界起点の一つであるスカイツリー。以前のように固有型を伴うことはないが、幾分か上等なプログラムでも積まれているのかその動きは的確だ。

時に仲間を囿にしながら、ビルの陰に隠れながら局員たちの『パイルスマツシャー』による砲撃をかわし、距離を縮めていく。

その機動外殻に向けて空を一直線に飛んでいく五つの影。色は、緑、紅、白、銀、そして夜闇のような黒。

「それにしてもさっきの衛星砲の撃墜には驚かされた。よく思いついたものだ」

「はあー、私の旅の鏡ってああいう魔法じゃないんだけどなあ……」

「別にいいだろ、最近ボコボコ機動外殻殴ったりしてたじゃんか、シヤマル」

「例えそうだとしても私は湖の騎士、癒しと補助が本領なんですよ……」

「まあまあ、ええやんか。上手くいっただなら何よりやろ」

ぶすくれるシヤマルをはやてがなだめて、自身の隣を黒い羽を広げて飛んでいるよく似た容姿の少女へと声をかけた。

「王様、手伝つてくれてありがとな。助かるわ」

「ふん、まさか小鴉と共に戦場を駆けることがあるとはな」

「あはは、それはこっちの台詞やなあ」

不遜な態度で腕を組むのは傍に魔導書型デバイスを伴ったディアーチエ。

それに笑みをこぼしながら応じるのはリインフォース・ツヴァイとユニゾンし、目を青く染めたはやて。

「でも、ごめんな。二人にもユーリを任してあげたかったんやけど」

「構わん。あの二人は我に比べ魔力も少なく、どちらかといえば対人戦向きだからな」

「うん、けどそれでもごめんな、王様」

「ふん。して、本当にユーリはここに来るのであろうな？」

「うん、たぶん。あの子どうやら戦闘力の高い順に襲ってくるみたいやし、私たちが広範

「囲攻撃を撃てば来るんちゃうかな？」

「根拠に欠ける話だな、本当に……」

「まあいっちょやってみようっちなことだ」

はやてが手の中の騎士杖、シユベルトクロイツを横一線に薙ぐと背後の空間に銀色の光球が三つ出現する。

「まあ、我も貴様らを信じるしかないというのもまた事実。乗せられてやるとしよう」

「ディーアーチェはやれやれと言わんばかりに手の中のはやてのものとはよく似た杖、エルシニアクロイツを軽く振るうと背後に巨大な一つの魔法陣が出現する。

「クラウ・ソラス！」

「アロンダイトオオオッ！」

銀と黒、正反対にも見える光が主人の起動句に従って魔力が魔法陣によるプログラム変換を受けて、鉄をも砕く破壊の雨へと変わる。

一番スカイツリーに近かった機動外殻がまとめて十体広範囲攻撃によって胸のコアごと消し飛んだ。

仲間の消滅を感じ取ったのか機動外殻の一体が空に浮かぶはやてとディーアーチェへ視線を動かす。

「ぶっつぶれろおおっ！」

直後、横合いからヴィータとグラーフアイゼンによってぶん殴られて、そして地面に沈んだ。

「て、おとおおあああつ！」

そしてすかさず空より一条の彗星が機動外殻の胸部、全ての動きを管制するコアが鎮座する部分に着弾した。

青白い魔力光に身を包んだザファイラが拳を打ち込むと、CW社の試作デバイスであるガントレットが唸り、そして突き抜けるようにぶち抜いた。

「クラールヴィント、風よ遍く広がり我が眼に敵の姿を映せ」

そしてその間にシヤマルがエリアサーチを行い辺りの量産型、機動外殻、そしてそのサーチの範囲ギリギリに高速で接近してくる存在を感知した。

「はやてちゃん！　　ダイアーチェちゃん！　　ユーリちゃんが来るわ！」

「言われずとも分かかっておる。我が、分からぬはずがなからう」

ダイアーチェがビル群の地平線の果てを睨むと高速で飛来してくる巨大な鎧装が二人の前に姿を現した。

「随分、大きいなあ。シグナムは確か戦艦とかを落とすための兵装や言うとな」

「ならば、今から我らがやるのは軽い戦艦落としみたいなものか。ふ、笑えるな」

「あら、王様まさか怖かったり？」

「冗談は寝て言うのだな、小鴉。我は王ぞ？　王が恐るるのは没落のみよ」

「でも王様たち実は猫やったんやろ？　王様つてつまり自分を王つて思い込んでるた

だの痛い人……………」

「喧しいわ！　我は自らの在り方を王と定めた！　故に我は退かぬし、臣下を守る

！　それだけだ！」

不満気に鼻を鳴らすと、ディアーチェが手の中で杖をくるりと回して目の前にやってきたユーリを傲岸不遜に見下ろす。

「ユーリ、また、救いに来たぞ。貴様をこれ以上泣かせぬために」

「夜天の主として夜天の書の一部やったあなたの事見逃せません」

「Feind 敵 Reaction 反 Ergänz 補ung

Es 職 beginnt 滅 zu 開 vernichten 始 し ま す

ユーリの目が、赤く光った。

「そら行くぞ小鴉！　遅れるなよ！」

「王様も氣いつけて！」

「誰に物を聞いているっ！」

銀と黒が、瞬間的に無数の速射弾を展開した。

「ドウムブリンガーッ！」

「ブリューナーク！」

炸裂した正反対の魔力光が、青空を眩しく染め上げた。

デバイスを通して受け取った指示を聞きながら、シグナムは一人東京の空を突っ切つて行く。

「二人で戦うのは一体いつぶりか」

彼女が目指すのは今回の事件の首謀者とも言える人物、『ファイル・マクスウェル』の元だ。

敵の中では一番脅威が高く、そして戦闘能力も桁違いという事で自分に白羽の矢が立ったらしい。その事にシグナムは不満は抱かない。

ただここ二年の間管理局で仕事をする際には何らかの形で他のヴォルケンリッターか、もしくは局員がいることが多かったせいかな、少しだけ新鮮に感じたただけだ。

そう考えて、自分の腰に帯びられた剣がデバイスコアをチカチカと光らせているのに気がついて、薄く笑みをこぼした。

「そうだな、レヴァンティン、お前がいるから一人ではないか」

わかってるよ、とでも言うように軽く鞆を叩くとレヴァンティンのコアの点滅が止まった。

「……急ぐか」

表情を引き締めたシグナムが飛行魔法による加速を行おうとした時、ぞわりと背筋が冷えるのを感じた。

シグナムが瞬時にパンツァーガイストを発動すると、橙色の光弾が発生したバリアに着弾した。

「防いだか」

短い言葉。

けれどしっかりとシグナムの耳まで届いた声。

「貴様は以前倒した固有型か……」

風に揺れる長い焦げ茶の髪。片手には以前と同じヴァリアントシステムを用いた長剣が。

「何の用だ、私は先を急ぐ。貴様に構っている暇はない」

「お前が私に用がなくとも私にはある」

「……何？」

固有型は長剣の先を眉を寄せるとシグナムへと向ける。

その瞳には以前になかった感情の揺らぎのようなものが見て取れる。

「私は、貴様に一度負けた」

「……ああ」

「その時に私は自身の中に何か波打つを感じた。それが何かを、確かめたい」

だから、と固有型が剣をシグナムに向けたまま口を開く。

「私はお前と戦わなければならぬ。これが何かを、確かめるために」

「………良からう。しかし、私も主の命を受けた身。先のように長引かせることはない」

「構わない。やれるものならやってみるがいい」

シグナムが親指で鐙を押して白刃を覗かせると居合気味にレヴァンティンを構えた。

それに対して固有型は膝を軽く折り曲げて剣を握り直した。

「推して参るッ！」

「望むところだッ！」

魔力のブーストを擬似的な踏み込みに使って、足場のない空の上でシグナムが加速する。スピードを乗せて引き抜かれたレヴァンティンが瞬間的に炎を纏い、そして固有型を狙う。

だが、それを同じくフォーミュラによる技術で加速をしていた固有型は下から上に逆

袈裟に斬りあげて弾いた。

ラベンダーとオレンジの光がぶつかって、あたりに凄まじい衝撃をまき散らした。その威力たるや、付近のビルの窓に衝撃だけで亀裂が走ったほどである。

「貴様、前に戦った時よりも格段に強く……！」

「以前の固有型一人分の私と思わないことだ。せいぜい、三人相手に戦つてるとでも思え」

「——まさか、貴様」

空を飛びながら二人の剣が応酬される。

以前通じていたはずのシグナムの剣が固有型に受け止められ、以前容易く躲せていた攻撃がかわせなくなっていた。

「喰つたのか、他の三体を」

「食つた、とは人聞きが悪い。私はただあの男に他の固有型をバラしたものを託されただけだ」

「ファイル・マクススウェルか。厄介なことを」

苦い顔でシグナムが剣を振るうが、固有型三体分、量産型にすれば九十体近い素材で作られた今の彼女の身体性能は母体であるイリスのものにすら迫るもの、危なげなくかわしてさらにカウンターすら合わせてみせる。

シグナムが空いた左手で鞘を引き抜くと固有型の剣を逸らしながらレヴァンティンの炎を炸裂させ、視界を遮って一度距離を取った。

がしゅん、とレヴァンティンに古代ベルカ由来のカートリッジが装填されて魔力ブーストを得た。

「レヴァンティン！」

《 B o g e n f o r m 》

炎での視界が遮られているうちにシグナムが鞘と剣を組み合わせて瞬時に弓へと変形させて矢を生み出すと固有型を狙って番えた。

「翔けよ、隼！」

《 S t u r m f a l k e n 》

ごう、と矢に炎が宿り隼へと姿を変えると、一瞬で音の壁を貫く。そして、炎の閃光となった隼は固有型に噛み付かんと迫った。

「アクセラレイター」

音速の矢が、超過加速により瞬時に躲かれてそして瞬きの間に矢を放って無防備なシグナムの真上に出現する。

加速状態の剣がシグナムの脳天めがけて唐竹に振り下ろされたのを、シグナムがかかるうじて弓となったレヴァンティンで受け止める。

あまりの威力にレヴァンティンが悲鳴をあげて、飛行魔法を併用してなお体が吹き飛びそうになる。

「言ったはずだ！　以前の私と、思ってくれるなとっ！」

互いの息がかかりそうな至近距離から固有型の顔を睨み返すシグナムの頬に汗が流れる。

（気を抜けばやられる……！）

もともと二人の間にあつたのは戦闘経験という壁。それは一朝一夕、それこそ半日やそこらで身につくものではない絶体的な壁だ。

けれど、それを固有型は身体能力をさらに引き上げることで埋めようとして、果たしてそれは成功した。

今の固有型には、技術の差を埋めてあまりあるだけの身体性能がある。

（これでは、マクスウェルの元に……！）

ビルの谷間に、固有型とシグナムの剣戟の音が絶え間なく響いた。

生産プラントを背後にイリスが自分のもとにやってきた少女の姿に、意外そうに声を漏らした。

「あなたが来るとは思わなかったな、『フェイト』ちゃん」

長い金色の髪に、赤い瞳、そして黒を基調としたバリアジャケット。片刃の剣であるバルディッシュは時折その刀身から電弧を走らせていた。

「なのはちゃんのところ、行かなくて良かったの」

「私の代わりに、頼りになる人に行ってもらったので」

「つまり、見捨ててきたんだ、お友だちを」

「違います。信じて、託したんです」

フェイトはバルディッシュを片手にイリスと向かい合う。それをイリスが至極面倒臭そうに見ると、片手に銃型のヴァリアントウェポンを生み出した。

「それで？　じゃあフェイトちゃんは私のどこに何しに来たっていうのよ」

イリスが銃口をフェイトに向ける。

しばらくフェイトは黙り込んで、そして口を開いた。

「あなたを止めに」

「……止める？　あなたが、私を？」

ぎり、とイリスが歯を噛み締めて、湧き上がる感情に任せて引き金を引いた。

「ふざけないでよっ！」

フォーミュラシステムによるエネルギー変換によって瞬時に光弾が発射され、フェイトへと放たれる。

バチ、と雷光が光った。

《 Sonic move 》

「ふざけてなんかいいんです。本当に、私はそう思っています」

「——ッ、五月蠅い！」

高速移動により瞬時に背後に回り込んだフェイトに向けてイリスはまたもや銃を撃つが感情の乱れた状態では、フェイトに当たるはずもない。

「イリスさん、私たちは本当に戦わなきゃいけないんですか？　話し合うんじゃない、だめ

なんですか？」

「話し合うなんて、そんなの、今更よ。ぜんぶ、ぜんぶ終わったことなんだから」

イリスがぎりとまた歯を噛み締めて目の前の自分を心配そうに、どこか悲しそうに見つめる少女を睨んだ。

「だから、私と所長のっ！」

「——ッ」

イリスが赤いエネルギーに包まれて、わずかな浮力を発生させて体を僅かに空へと浮かべた。

「邪魔をするなアアッ！」

「絶対に止めます！ バルディッシュ！」

《 Yes, sir. Sonic move 》

イリスがアクセラレーターにより加速し、それにフェイトが高速移動を発動、アクセラフィンによる慣性維持によりその驚異的なスピードに追従する。

「う、あああああつ！」

「はあああああつ！」

赤と金の音の速度を超えた戦闘が、始まった。

東京湾海上の仮設本部でエイミィは数人のオペレーターと共に現在の戦況を確認していた。

「補佐官！ 騎士シグナム、マクスウエルの元に辿り着く前に残存固有型との接敵！」

即刻の撃破は困難との事！」

「スカイツリーの武装隊から連絡が！　パイルスマツシャーの砲身が破壊されたりしないですー！」

「レヴィ、シユテル兩名、生産プラント内の中型機動外殻、及び『量産型』との交戦を開始しました！」

「はいはいはいはい、わかってますよー！ー！」

エイミイが素早くキーボードを叩きながら連絡があつた部隊一つずつにレティヤクロノからの指示を受けて対応する。

こういうことはクロノがいるときはクロノがやるのだが、今回は生産プラントの凍結の方に回っているため今はエイミイが引き受けていた。

忙しく頭と手を動かすエイミイだったが、不意にレーダーの端に高速で仮設本部へと飛来してくる存在を感知した。

「しかもこの反応——」

レーダーが感知したのは、魔力、しかもミッドチルダ式の使われた『魔法』とエルトリア式『フォーミュラ』の複合エネルギー。

慌てて窓の外を覗けば、『桜色』の魔力光が瞬いているのが見えた。

「うそ、本当に手薄になったタイミングで本部を潰しに来た?!」

遠くに見えるなのはが左手に固定されたレイジングハート・ストリーマの砲身が東京湾上の仮設本部へと向ける。

「Divine buster」

ストリーマに桜色の光球が集まり、臨界点を迎えたエネルギーは行き場を失い、そして主人のトリガーワードによって一気に放出される。

「Shoot」

桜色の閃光が船に一直線に向かっていく。

船内のオペレーターたちが思わず机や椅子にしがみついて衝撃に備えるが、いつまでたつても予想したような衝撃が来ることはない。

エイミーが恐る恐る目を開ければ、窓の向こうで白いバリアジャケットが風に揺れるのが見えた。

「クロノと予想していた通り、だったな」

銀色の槍でデイベインバスターを斬り払ったセルジオが海水に濡れた髪をかきあげて槍を肩に担いだ。

「リミエツタ、クロノに連絡入れといてくれ。そっちは頼んだって」

『別にいいけど、本当に予想通りだったね……』

「まあ頭を叩くつてのはセオリーだからな。イリスさんはともかく、マクスウエルがや

らない手はないからな」

セルジオが槍を握っていた左手を見下ろす。そこから砲撃が掠って血が滲んでいることを確認する。

「非殺傷設定がオフになってる、か。まあ誰がやったのかは大方わかるが……」

ちつと小さく舌を打って、ストリーマの砲身を向けているのはと向き合った。

「よ、高町………と言ってもお前が聞こえているかはわからないんだが」

「……」

「どうやらさつきみたいに微妙に意識が残っているって事もなさそうだな」

軽く解析魔法でなのはの事を調べてみて、その技術のわけのわからなさに呆れたように頭をかいて、大きく息をついた。

「俺は、一度逃げた。色々理由はあったが、それでもお前の元から逃げたことには変わらない」

「……」

「その事を許してくれとか、ましてや言い訳をするつもりはないよ。俺は、また間に合わなかったんだ。それは、事実なんだ」

だから、とセルジオが槍を構えて、マルチタスクに待機していた加速魔法に魔力を流し込む。

「お前を、助けに来た。だから、俺はここにいる」

それつきりセルジオは何も言わない。そしてまた、なのはも赤い目を光らせるだけで何も言うことはない。

「————」

「————」

遠くで、銀と黒の魔力が弾け、そして何かが崩れるような音が響いた瞬間、二人は全く同時に動き出していた。

「ブリッツアクション
加速機動ッ！」

「Accelerator」

今、それぞれの戦場で、それぞれの戦いが始まろうとしていた。

想いを貫け

現在の管理局戦力とマクスウェル陣営の戦力を簡単に纏めておこう。

管理局サイドは魔導師ランクS-のシグナムを頂点として、AAAランク級にフェイト、他の守護騎士、シユテルやレヴィが続く。アミタは魔導師でないが実力面で見ればフェイトたちに劣るといふ事はないと思われる。はやてはSランク以上、魔法公使の規模ならばSSランクにも届くだろうがいかんせん本人の技量が低く、個人での戦力としては望めないだろう。

ならばマクスウェルサイドはどうかというと、やはり一番強いのはマクスウェルだ。そのボディに使われた素材は量産型百八十という桁違いの数。なのはは例外だが、その力量は必ず抜けたものがある。

次いでイリス。そのスペックは百体以上といったところ。そして九十体程度の性能の『固有型』。そこに少しだけ下がる形でキリエ、といったところだろうか。

ユーリに関しては相性によりけり、といったところだろう。純粋な火力では今の地球

上で最強だろうが、本人の意志からその能力は半分ほどに抑えられていた。

交戦開始から三十分。各地では激しい戦闘が開始されており、その交戦相手は概ね管理局サイドの予想通りと言えたが、誤算が一つ。

シグナムが固有型の一人に足止めされたのだ。

もちろん固有型に足止めというつまりはないだろうが、マクスウエルの捕縛を任されていたはずのシグナムがそのせいで任務を全うできそうにないのも事実である。

固有型は総合的にみればシグナムよりも弱い。けれど、アクセラレイターという手札が今の固有型を支え、格上と渡り合っただけで見せていた。

もしかしたら固有型はシグナムには勝てないかもしれない。けれど、弱い駒が強い駒を抑える、という結果はもうそれだけで千金の価値がある。

ならば、その稼がれた時間によって生まれる結果は何か？ 答えは至極単純。

「やはり、そこを狙って来たか」

つまり、マクスウエルがフリーになる、という結果が生まれる。

よりにもよって一番最初に落とすべきだ、と言われていたマクスウエルがである。

東京タワーから爆炎が上がるのを見てマクスウエルは声を漏らしながら笑った。

身を侵攻武装『マクスウエル』の黒と紫に染め上げて、フォーミュラ由来のステルス

機能を起動する。

管理局にとつての未知の技術により、マクスウエルの体が視覚的、電子的にも完全に消失する。

「交戦に備えてメインサーバを移動させておいて良かった。拠点潰しは定石だからね」
再構築したイリス間ネットワークからまだ拠点が残っていることと、生産プラントも無事なことを確認する。

「これは、猫たちか。厄介だな」

だが、送られてきた生産プラントのデータに、雷と炎を撒き散らす二人の少女を見つけると表情を曇らせた。

「あそこには一応イリスも置いてあるが……少し苦戦しているようだね」
困ったようにマクスウエルは息をつく。

眉尻が下がったその表情は、仕方ないな、とでも言っているかのようだ。

「私が行くのが一番だろうね。あの猫たちはフォーミュラ由来でないからウイルススコアの調整は面倒だが、なあに倒して仕舞えばそんな必要はいらないさ」

あの二人では絶対に自分には勝てない。気絶なりなんなりさせた後にじっくり洗脳すればいい。

「さて、行くのでしょうか……ん？」

マクスウエルが呟くと、口から漏れ出た呼気が白く曇った。

「息が、白く……?」

自身の口から漏れ出た白い吐息は、気温が低い時に出る現象だとマクスウエルは記憶していた。

環境が死に絶えていたエルトリアで屋外見ることはなかったが、研究所内の冷凍保存プラントに入った時に見たことがあった。

研究者らしくこの日差しでいかにして、と頭をひねりかけて、そこでようやくマクスウエルが自身の失態を悟るが、もう遅い。

「エイミー」

『熱源探知、反応補足! もう逃がさないよ!』

「座標固定、範囲縮小、凍結加速——凍てつけ」

《 E t e r n a l c o f f i n 》

東京タワー付近、そこから薄く広く凍結を広げてエネルギー反応ではなく、『呼気』という可視化できる情報を元に、マクスウエルを発見。

そして広範囲にわたって放つエターナルコフィンの効果範囲を絞ることで普段よりはるかに高威力、かつ高速での術式展開を実現する。

「ぐ、お、これ、は……」

マクスウエルの周囲僅かに五メートル程にだけ凄まじい凍結魔法が発動し、髪、服、足といった末端から凍らせ始める。

『よーしっ！　上手くいっただ！　リーダーに引つかからない時は焦ったけど、一回補足しちやえば逃すもんか！』

「体温は消せないはず、というアミティエ・フロリアンとあいつらの予想だったけど、どうやら当たってたようだね」

デュランダルに魔力を送り込み続けると、アイスブルーの魔力光が凍てつく風へと変わり、ビットを通してマクスウエルを氷の棺へと閉じ込めていく。

摂氏マイナス二百七十三度。遍く生命の動きを止める絶対零度。

それがデュランダルの吹雪だ。一度囚われればそこから抜け出すことは能わず、術者次第ではその名の通り永遠の棺エターナルコフィンと化すことだろう。

ぱき、と氷がマクスウエルの膝上あたりまで侵食してき始めると、顔を歪めて手の中に剣型のヴァリアントウェポンを創造し、腹の部分で叩き割る。

しかし、それも囲まれたビットからの冷気によって瞬く間に元に戻され、ついではかりに剣までも巻き込みながら凍り始めた。

既に先制は取られている。生半な方法で棺から出ることは不可能だ。

「アクセラレイター・オルタアアアア！」

紫のオーラがマクスウエルを包み、イリスの分身、テラフォーミングユニットである彼の体の稼働率を爆発的に引き上げる。

跳ね上がった贅力で無理矢理に体を捻るとそれだけで体を覆っていた氷が砕ける。

そしてマクスウエルはそのままの勢いを保ちながら手の中の剣を銃へと変形させ、周囲のビットの一つへと弾丸を放つ。

マクスウエルを閉じ込めていたビットが吹き飛び、術式に僅かな隙間が生まれ、その隙にマクスウエルはエターナルコフィンの範囲外から脱出してしまふ。

ち、とクールなクロノに似合わない汚い舌打ちが漏れる。

出来ることなら今ので無力化しておきたかった。

クロノがビットを周囲へと戻しながら体の霜を振り払っているマクスウエルを見上げた。

「君が来たか、若い指揮官」

「ああ、貴方の相手は僕だ、フィール・マクスウエル」

氷結の杖デュランダルを片手にしたクロノはマクスウエルを睨め付けるが、マクスウエルは頬に薄い笑みを浮かべたままだ。

「私で、良かったのかな？」

「貴方は今回の事件の主犯といっても差し支えない。貴方を捕まえないという選択肢は

ない」

「ん、ああ、違うよ、そうじゃない」

マクスウェルが緩く首を振りながら、唇の端を吊り上げて嘲るようにクロノを見下ろす。

「君が私に勝てるのかい、という意味だったんだが」

クロノは何も言わない。

クロノの魔導師ランクはA A A +。それはシグナムに次いで高く、フェイトたちよりも高い実力があることを表す。

だが、そんなクロノですらマクスウェルに勝てるかは不明だ。

そもクロノはなのはやフェイトのような天才ではなく秀才タイプ。もちろん元の魔力量も多いが、戦うセンスに関して苦しまなかったわけでは無い。

何度も苦しみながら血肉にした技術を組み合わせ戦うことが彼のバトルスタイルで、故に実戦での爆発的な成長などは皆無に等しい。

なのはやフェイトが本番に強いという、ブレのある数値にできない力を持つものに対し、クロノは安定した実力を持つ分その力量は完璧に数値化されきっているのだ。

なのはとアミタが束になって互角程度の相手。しかも、その相手は今クロノの切り札である『エターナルコフィン』から容易く抜け出してみせた。

「——それでも、僕は貴方と戦わなければならない。フィル・マクスウェル」
でも、だからなんだというのだ。

クロノが背負うのは地球の未来と、そして友人たちの故郷だ。そうでなくとも、管理局である彼が戦わない理由などありはしない。

静かに、けれど確かな意思を秘めた瞳に見つめられてマクスウェルはやれやれと緩く首を振った。

「なら、仕方ない」

アクセラレイター・オルタ。

告げられた言葉によりマクスウェルに音の壁を突き抜ける力が付与されて、腕が霞むような早撃ち。クイックショット

紫の光弾が一条の光線となって音速超過の一撃を炸裂させる。

「——っ」

それをクロノは咄嗟に張ったシールドで辛うじて防ぐと空中を弾かれるように後退して体勢を立て直す。

「遅い」

しかし既に背後には回り込んだマクスウエルがいる。

そして、無防備なクロノの脇腹にマクスウエルの蹴りが突き刺さった。

めし、と音を響かせながら蹴りを受けた体が平行に吹き飛ばされて、周囲のビルを一つ貫通し、二つ目を突き抜けて、三つ目の直前で何とかブレーキをかけて踏みとどまった。

「ただの蹴りで、これか」

クロノの視線が手元のデュランダルへと落ちる。青みを帯びた銀色の槍はその柄の部分に軽い亀裂を走らせている。

先ほどの蹴りの時偶然右手に持っていた杖が防御の役割を果たしてくれたらしい。

「彼我の戦闘力差は絶望的、か。まあ、そんなもの——」

ふ、と強がるように笑みをこぼしてクロノがデュランダルを握り直して、横一文字に振り払った。

——僕が諦める理由になどなり得ない。

アイスブルーの魔力の残光が漏れて、きらきらと透き通った氷片を舞い散らせた。

夏空に、季節外れのダイヤモンドダストが輝いていた。



桜色の光線が走る空を白光に包まれたセルジオが飛び回る。

場所は仮設本部のあった海上から既に都市部へと移り、セルジオは右に、左に、旋回し、時にはビルの陰に隠れ、自身を撃墜せんと迫る白色のバリアジャケットの魔弾をかわして、逸らし、さらに追撃の魔力砲で応戦する。

だが、なのはには追いつけない。

「Accelerator」

ゼファアの砲撃形態の砲身から放たれた白色の砲撃をなのはは瞬時に加速すること
でかわし、セルジオの真下に潜り込んだところで加速を解除した。

低い音を立ててなのはのストリーマの砲身にフォーミュラと魔力の複合エネルギー
が充填される。

「——クソ、加速機動！」
ブリッツアクション

加速した次の瞬間には先ほどセルジオがいた空間を消し飛ばすような砲撃が放たれる。それを視界の端にとらえながら砲撃を撃ち終わり無防備に隙を晒したのはへと迫る。

「 Short Buster 」

「——ッ」

だがなのはは空いた右手で即効性のショットバスターでセルジオの動きを阻害し、広がった閃光で視界を塞いだ。

「 Accelerator 」

そして、また加速が行われる。

セルジオの短距離転移もかくや、というレベルの高速移動。そして、そのスピードはセルジオのブリッツアクションを大きく上回っていた。

「 Blust Shoot 」

死角に回ったなのはがフォーミュラの恩恵による高速砲撃を敢行し、そして一切のためらいなく引き金を引いた。

視界を埋め尽くす閃光、人間の動体視力で捉えられる限界を超えた速度での砲撃がセルジオへと迫る。

「――」

視界の端に映った光についてセルジオが思考したのはほんの一瞬、それだけで当たれば死ぬ、防いでも死ぬと推測する。

(待機演算式座標代入――短距離^{ショートシフト}転移)

セルジオが魔力消費が多くなることを厭うことなく、マルチタスクの一つに待機させていた短距離転移を発動させる。

胸の奥からごっそりとエネルギーが削れていくのを感じた。

「――ッ」

しかし、なのはの砲撃を躲すことはできず転移する直前のセルジオの左肩に砲撃がすすめる。

直後、ぱつ、と空に血飛沫が舞わせたセルジオの体が百万分の一秒^{マイクロセカンド}のラグをもつてなのはの背後へと現れる。

「ディバインカンソツッ！」

放つは真白の閃光。

ゼファアーに備え付けられたシステムによって半ば無理やり魔力の源、リンカーコアからセルジオの白い魔力が引き出され、その方針に充填された。

じくり、と魔導師にとっての心臓が鈍い痛みを訴える。

「そんなの、知った事か！」

痛みという警鐘を無視して砲撃を放つ。なのはのデイバインバスターには及ばないもののそれでも魔導師ランクA Aに相応しい威力を秘めた砲撃魔法。

困った時によく頼った、セルジオの切り札とも言える魔法。

「Protection」

けれど、それすらもなのには届かない。

周囲に旋回するひとつきりのデイフェンサーではなく、デバイスを用いたピンクの魔法陣による防御が出現する。

白い魔力の奔流はシルドの表面をガリガリと削ったものの、突き抜けることはおろか、輝一つ入れられず霧散した。

「Accelerator」

「——またか！　ブリッツアクション！」

機械的な詠唱でなのはの体が今日何度目かもわからない加速を行う。

それに食らいつくのようにセルジオも加速魔法を使って頭上を陣どろろとする動きを阻害する。

反撃はできない。速度に劣るセルジオでは必死に食らいつくのが精一杯だった。

（只でさえ硬いのに、加えて俺以上の速度とかお前は本当に——！）

セルジオが黒と赤が混ざったような色合いのガントレットを叩くとゼファーが接合パーツを内部に飲み込んで砲身の部分とガントレットが分解される。

手の中で砲身が一振りの長槍へと変わる。

「その才能少し俺に分けやがれ！」

ジグザグと襲ってくる直射弾をかわしながら薄い魔力でコーティングした槍を引きしぼり、ストリーマを握る左腕を狙う。

二人の体が交差する刹那の隙にセルジオの槍がなのはのバリアジャケットを浅く切り裂く。

「——」

なのはの表情の薄い顔にほんの少しの耐えるような険しいものが生まれる。

（——浅い。魔力は通らなかった）

けれどなのはを倒すにはあまりに弱々しい攻撃だった。

ストリーマの砲身が手傷を負わせた相手へと向けられる。

セルジオの思考に今までの戦闘経験に基づいた無数の選択肢が現れ、その中から一番死なない確率が高いものを選択。

（マルチタスク起動——待機術式演算）

あらかじめ用意されていた加速魔法に座標を代入し、飛行魔法との併用による回避を

行おうとリンカーコアから魔力を汲み上げる。

(演算完了ーブリティツ)

めし、と胸の奥が軋んだ。

「ぐっ——」

胸から全身へと電気が突き抜けるような痛みが伝わり、起動しかけていた加速魔法の術式の演算式が狂った。

座標がズレて、推進力の制御が乱れ、流れかけていた魔力だけが無駄に消費される。

(魔力が、足りない……！)

思わず槍を握りしめて舌打ちを一つ。

「ぜ、フアーアアアアッ！」

槍が仄かに白く光る。

裂帛一閃。叫びと共に目の前へと訪れていた破壊の嵐へとちっぽけな槍一本で立ち

向かう。

「解析ー予測」
アナライズ シミュレート

セルジオの翠の目が白く光り、なのはの放った砲撃の中心を解析によって明らかにして、そして横一文字に斬りはらう。

「あ、ああああああつ！」

槍を握った両手に凄まじい衝撃が伝わり、穂先と鬩ぎ合う魔力から細いスパークが弾ける。

ばち、と飛んできた魔力のかけらが手に刺さりそれだけでセルジオの肌から血を滲ませた。

「——か」

ぬめつく血が手の甲を伝って槍を握る手へと流れ、只でさえ衝撃に耐えきれず離しそうな槍を滑らせる。

「ま——た——る、か」

物理的な破壊を伴う砲撃にゼファーが悲鳴をあげる。

「負けてたまるか……！」

けれど、諦めることだけはしない。

ゼストに背中を押された。

クイントとメガーヌに励まされた。

三課の全員にやるべきことを任せてここに来た。

「その俺が、お前を助けることを諦めていい訳がないッ！」

セルジオの目が、白く輝く。

戦闘開始から既に時間は三十分。

データは既に集まった。

ゼファアの行動予測システムによりなのはとの交戦データがセルジオの無数のマルチタスクによって瞬時に解析にかけられて、その瞳に擬似的な未来を映し出す。

「視えたー……五十三手」

斬、と銀閃が虚空をなぞり、視界に広がる桜の壁が下と上とに泣き別れる。

震、と斬り裂かれた空気の悲鳴が耳に届く。

業、と身を包む白光が今度こそ正しく発動する。

「ブリッツァクションッ！」

リンカーコアから魔力を絞り出して再び加速魔法を発動すると、なのはの先手を取ってセルジオが動く。

白い光の尾を引きながら空を飛ぶ姿に数瞬遅れる形でなのはもアクセラレーターを発動。距離を詰めてくる相手へと牽制の速射弾を放つ。

「もう、最後まで視えてる」

だが、セルジオは空を埋め尽くす弾幕の隙間を縫って飛び回り、時折バリアジャケットを掠めるものの、その全てをかわしてみせる。

まるで、あらかじめわかっていたかのように。

「ゼファアッ！　行くぞッ！」

自らのデバイスに呼びかける行為に意味はない。ゼファアに意思はなく、答えることはない。

故にこれはただの感傷だ。

けれど、その叫びは槍を振るう力へと変わる。

(残りの全部をこれに集めろ！　どの道長引いても勝ち目はない！)

もう底が見え始めているリンカーコアから残りの全ての魔力、飛行に使うそれまでもを掻き集める。

銀色の槍に、ゼファアにセルジオの残り全ての白い魔力が収束される。

其は彼の師匠ゼストが使う古代ベルカの騎士の一撃を模倣したものであり、セルジオ

の槍技としては最高の完成度を誇る。

アナライズ
(解析) あらため
「紫電一閃(改)」

心に目指すべき男の一撃が映し出され、その一撃が少年の動きへと重なる。

「白光一刃」

銀の光が音を追い抜いて、そして眼下の少女へと迫る。

「Defencer active」

だが、その槍が振り下ろされるよりも早く、なのはが周囲を旋回していた浮遊盾『ディフェンサー』を操作し白く光る槍を受け止めた。

「それも、視えてた」

けれど、セルジオの槍は止まらない。

吸い込まれるようにゼファアの穂先がマクスウエルの戦闘の際についた刀傷へと叩き込まれ、デیفエンサーを真つ二つに斬り裂いた。

鉄を斬り裂いてもその一撃は止まらない。振り下ろされた槍はストリーマを片手にしたなのはへ向けられる。

（——勝った）

セルジオの翠の瞳が自らの演算通りの現実を映し出す。

「Accelerator」

その直前。

「——Alternative」

なのはの身を包むオーラが膨れ上がり、目が深紅に輝いた。

がしり、と音に届かんとしていた槍が掴んで止められる。

「な——」

セルジオが片手、しかも親指人差し指中指のたった三本で『白光一刃』が止められたことに目を剥いた。

そして、マクスウエルによって戦闘に適用化された思考を持つなのははその隙を見逃さない。

「 Restrict Lock F 」

機械的に告げられた起動句トリガーワードにより、セルジオの両腕に桜色のリングが出現し空中へと磔にした。

「あ——」

この後どうなるかなどセルジオが知らないはずがない。

これは空戦魔導士『高町なのは』の必勝戦術で、それを彼はいつも隣から見て来たのだから。

「 Exelion Buster 」

一切躊躇うことのない大規模砲撃。

相手を捕まえるための非殺傷ではなく、相手を殺すための殺傷設定。

その一撃は無慈悲に身動き一つ取れないセルジオに突き刺さり、左腕を根本から吹き飛ばした。

ドライブ・イグニッション

想いで覆る力はない。

けれど、その想いに意味が無いことはない。

決して、決して。

マクスウェルに向けて魔力刃を叩き込む。

『ステインガブブレイド・エクスキューションシフト』。クロノの持つ中で最大射程を誇り、その総数百を超える。その形は剣であり、着弾とともに炸裂効果ももたらす非常に優れた魔法だ。

「アクセラレイター・オルタ」

けれど、マクスウェルはそれをいつそ余裕すら感じる態度で躲す。

ならば、とクロノはデュランダルの杖先に魔力光弾を収束し射出する。デュランダ

に搭載された機能によりクロノの魔力は自動的に冷気へと変換され弾頭が氷結の力を帯びる。

「ステインガースナイプ！」

光弾がクロノの杖の指示に従って高速で移動するマクスウエルを追うが、マクスウエルは恐ろしいことにクロノのステインガースナイプの速度よりも速く移動していた。

「ならっっ！」

そこでクロノはマクスウエルを追いかけるのをやめて同時に直射弾で目くらましを行いながら、行動を予測することで光弾を先回りさせる。

「——はあ」

けれど、それすらもマクスウエルはひよいと避けて、ため息を混じらせながら雑に剣を振った。

アイスブルーの弾丸が真つ二つになり霧散し、その一瞬でマクスウエルの姿が掻き消えた。

「どっ……」

「……だよ」

一呼吸でマクスウエルがクロノの背後に現れる。それにクロノは魔力をブーストとして放出し、飛行魔法を活用することで体を半回転させしなるように蹴りを叩き込む。

「何度も言っているはずなんだけどね」

「君は遅い、と」

マクスウエルはクロノの足を何でもないように受け止めるとそのままぐるりと振り回してビルの壁に叩きつける。

「かつ、は……」

ひゅつと肺の中の空気が全て出てしまったのでは、と思うかの衝撃がクロノを襲い、悲鳴とも息とも判断できぬ音が喉から漏れた。

マクスウエルが握った手を離してぽいと空中に捨てると落ちていくクロノに向けて、ヴァリアントウエポンの銃口を向ける。

それは形状としては銃に近かったが、その銃口は何時ものよりも遥かに大口径であり、イリスの『ブラスター』と呼ばれる迫撃砲に酷似していた。

引き金がか引かれると銃声が響き、紫の光弾が無防備なクロノに撃ち込まれる。

弾丸は着弾とともに爆発しながら強い衝撃を与え、黒のバリアジャケットの上着部分を吹き飛ばす。

羽をもがれた虫のように地面へと墜落したクロノが激しく咳き込み、銀色のフルフィングァータイプの手甲がぬめついた液体で赤く染まる。

「く、そ……………」

体を震わせながら必死に立ち上がろうとするクロノを見下ろして、マクスウェルが小さく息を吐く。

「範囲攻撃、指揮官としての才覚、どちらも大したものだ」

マクスウェルが手の中で剣を軽く回した。

「けれど、私と渡り合うには君は少し手札が少ないよ。あの凍らせる魔法も、あの展開速度では躲すのも難しくない」

クロノが薄く唇を噛む。

その通りだった。

クロノは基本的に『ステインガースナイプ』や『ステインガールブレイド』といった遠、中距離魔法と『ブレイズキャノン』、『ブレイクインパルス』といった近距離魔法に、多彩なバインドでサポートを行うことで戦うタイプ。

けれど、マクスウェルはとにかく速い。

座標固定型のバインドはマクスウェルの動きの速さに座標を絞ることができず、発動すらできない。

ならばと設置型バインドを用意したものの、最初の数度通用したのみで解析が完了された今では発動と同時に破壊されてしまっていた。

頼みの綱のエターナルコフィンも大規模魔法ということもあり、マクスウエルの攻め手の激しさに詠唱すらできない始末だった。

マクスウエルから見て、クロノが自分に勝てるとは思えなかった。

「まだ、立つか……」

なのに、クロノは立ち上がる。

デュランダルを杖にして、ボロボロのバリアジャケットで、震える体に鞭打って、それでも立ち上がる。

す、とマクスウエルの目が細くなる。

「何故立てる、君は」

その質問に額から血を流すクロノが頬を緩めた。

「なぜ、か……」

その表情はどこか笑っているようで。

「そんなの——」

「 Exelion Buster 」

破壊の嵐が吹き荒れる。

僅かその距離二メートルあまり。

セルジオは避ける事は能わず、命中は必至だった。

故に、敢えてセルジオは攻勢に転じた。

インストリアル
アンチエイン・ナツクル
 (模倣——繋がりぬ拳)

クイントの技を瞬時に模倣し、足から力を流しながらわずかな魔力を混ぜ込んで増大させる。そして、生まれた勢いをそのままに、両手首に現れていた桜色のバインドを粉々に砕いた。

「アンチエインツ！ ナツクルウウツ！」

そして砕いたエネルギーを使って更に拳を加速させながらゼファーを握っていないかった右拳を使って体重移動を行い、なのはのエクセリオンバスターをかわそうとする。

幸運だったのはアンチエインナツクルが魔法技術よりも、どちらかというと格闘技術だったこと。もし魔法だったなら中身がほとんどなくなろうとしていたセルジオは見えなく胸を貫かれて死んでいただろう。

不運だったのは、なのはとの距離が遠くアンチエインナックルはなのはに当たらず、首元を軽く空振っただけだったということ。

そして、最悪なのは避けきれなかったエクセリオンバスターが、殺傷設定の砲撃がセルジオの肩口にあたり利き腕である左腕を根本から吹き飛ばしたということ。

「あ

エクセリオンバスターが、なのはの砲撃が、セルジオの腕を消失させる。

思わず目を向けた先で、ゼファアの銀色の槍を握った手首だけが落ちていくのが見える。

そして、肩口には二の腕の半ばから先は消えて、その断面では真つ赤な肉と何やら黄色いものがまじり、そして中心には白いものがあつて。

セルジオがぼやけた頭で、流石にここまでの怪我は初めてだな、と考えて、ようやく鈍っていた感覚が追いついた。

「あ、があああああああああああああ！」

視界が真つ赤に染まる。

痛い。

熱い。

痛い。

熱い。

痛い。

熱い。

痛い。

熱い。

まともな思考などない。

自分が今飛行魔法を使えず墜落を始めたことも気づかない。

ただ、今までに感じたことのないような痛みと熱が無慈悲に襲ってきた。

腕を失った断面から数瞬遅れて血を吹き出し始める。

よく晴れた夏の日。

頂点に登った太陽。

透き通るような夏空の下で、東京の空で血の雨が降り注いだ。



クロノ・ハラオウンは所謂『天才』タイプではなかった。もちろん才能がなかったとは言わない。

同世代に比べ魔力にも恵まれ、賢く、身体能力だって悪くはなかった。

けれどそれはイコールでクロノが苦勞しなかった理由にはなり得なかった。

思えば学生時代には優秀な人間が多くいたように思う。

高難易度魔法の構築に関しては他者の追隨を許さなかったティード。

射撃なら的を外すところなど見たところもなかったヴァイス。

解析魔法によって割と飲み込みだけはよかったセルジオ。

それに比べてクロノは特筆して優れているところというのはなかった。

『万能型』、と言えば聞こえはいいかもしれないが、クロノ自身は自分のことを『器用貧乏』だと思っていた。

砲撃は決め手になり得ず、射撃は数を増やせば弾速が落ちる。加速魔法は申し訳程度で、満足なのはバインドだけ。

こんなものでは自分の魔法の力を充分に使えているとは言い難かった。だから、友人や師匠の手を借りて魔法を自己流にアレンジした。

威力の足りない砲撃は物理破壊を伴う『ブレイズキャノン』にすることで底上げを。弾丸を一発にして貫通性能と速度を向上させた『ステインガースナイプ』。

ひたすら演算能力を鍛えて展開速度を上げて広範囲攻撃の『ステインガープレイド』も作り出した。

楽な道などではなかった。

毎日毎日血反吐を吐くような思いをしながら走り続けた日々だった。

故に、クロノはここで自問する。

「どうしてクロノ・ハラオウンは戦うんだ？」

なぜだろうか。

なぜ自分は辛い思いをしてまで努力して、そして戦うのだろうか。

答えはすぐに出た。

守りたいと思ったのだ、管理局という組織で、父と母が守ってきたものを。

父に憧れたのが、始まりだった。

幼い頃に『闇の書』によって殉職した父。

周囲からは「優秀な人だった」と聞いていた。

師匠からは「良い人だった。死ぬべき人じゃなかった」と言われた。

恩師からは「法に背かない男だった」と言われた。

そして、母からは「優しい人だった」と教えてもらった。

そのどれかが間違いであったとは思わない。きつと全て父の側面を捉えていて、どれも『クライド・ハラオウン』という人間だったのだろう。

父が死んでしばらくして、士官学校に入学し、幾人かの友人と出会って、何度か夢を語り明かしたことがあった。

執務官になる、だとか。陸きつてのエースになる、だとか。一人は、やけに夢想的なことを言っていたか。

ある日友人たちと同じ任務についたことがあった。

卒業前の検定のようなもので、他の二人は受けなくても良かったのだが不満を言うことなくついてきてくれた。

それで友人らと同じ仕事をして、そして守った人たちを見てしみじみと胸に熱い想いが湧いてきたのを感じた。

父の守っていたものを自分も同じところから見えて理解した。何のために両親が、師匠が、恩師たちが戦ってきたのかを、頭ではなく、心で理解した。

だから、守りたいと思ったのだ。

自分が大切だと、美しいと思ったものを。

「なに、寝てるんだ、クロノ・ハラオウン」

昔、決めたことだった。

法に背かず、かつて父がしたように、辛い現実には、認めたくない現実には立ち向かって、そして守るのだと。

「なら、立たなきゃな」

そして、クロノは立ち上がり、そして自分を見下ろしている男へと目を向ける。

「何故立てる、君は」

男がクロノに問い、迷うことなくクロノは答える。

「守るためだ。法を、なにより僕が守るべきだと思うものを」

「この世界は君が生まれた世界ではないだろう？　なのにそこまでして守るのか」

「ああ、そうだ」

クロノはマクスウエルを見上げたまま小さく頷いた。

「理解できないな。君に一体何の関係があると言うんだ。君自身や家族の命ならともかく、見ず知らずの、しかも君たちの存在を知らない人間の方が多いいだろう？ 一体何の価値があるというんだ？」

「話にならないな」

「なに……………？」

ふん、と不満げに鼻を鳴らして、クロノが額の血を拭った。

「守ることに価値を求めた時点で、僕とあなたは決して理解し合うことはないだろう」

自然と、クロノの手の中に力が入った。

「僕たちが戦うのは地球（ちきゅう）が守られる価値があるからじゃない！ ただそうあるべきだからだ！」

「この世界にある現実が否定されて良いものではないからだ！」

「……」

「あなたに過去に何があったかなんて関係ない！ あなたがどれほどの力を持ってい

るかも関係ない！ 例えあなたにどんな事情があったとしてもこの世界を侵してい

い理由にはなりはしない！」

「……………人が、過去を捨てて未来に進むことを否定するのか」

「未来に進むというなら、辛いことも、悲しいことも、全て抱えて前に進むべきだ。あな

たは逃げてるだけだ。過去にあった現実から。今横たわる現実から」

マクスウエルの顔から笑みが消える。その表情は、何の色もなくただ静かにクロノを見下ろす。

「僕は今のこの現実を守るためにここにいます。そこに価値があるからじゃない」
クロノがしかとマクスウエルを見据えて、言い放つ。

「それが、管理局だからだ」

マクスウエルが、はあ、と大きく息をついた。

「成る程、概ね理解したよ。私と君たちでは絶対に相入れる事はない、という事がね」

そして手の中のヴァリアントウェポンを銃型に戻して銃口の先をクロノへと向けた。

「それで？　御大層な題目を並べたところで私と君の実力差は変わらない。それで、君は私をどうするつもりなのかな？」

「勝つき。勝つて、そして守る。その為の方策だって、ちゃんとある」

なに、と眉を寄せるマクスウエルをよそに、クロノのデュランダルを握る手とは反対の左手がジャケットから引き抜かれる。

現れたのは、一枚のカード。

「S2U——セットアップ」
Song to you
『捧ぐ歌』。

それは、もう一つの彼の杖だった。

ずっと自問していた。

なぜ自分は『戦闘機人』の事よりも、なのはのところへやって来たのか、と。

セルジオの手元にあるデータではなのはの怪我はそこまで大した事がなかったと
なっていた。

クロノにも任せだし、フェイトもいる。

セルジオが行く必要などない。そも行ったとしても、いや行けるかどうかもわからない。
い。

セルジオは『陸』の人間で、今回は『海』の案件だ。そうやすやすと受け入れられる
ことはないだろう。

なのに、セルジオはなのはの事を考えない事が出来なかった。

事件の規模と、相手の能力を見て、ただ友人と、彼女のことを心配するだけ。

何度振り払おうとしても、振り払えなかった。

セルジオにはその理由がわからない。なぜ、こうまで『高町なのは』という一人の人間が気にかかるのかわからなかった。

左腕を消失したセルジオが地べたを無様に這い蹲る。

先程まで痛みと熱さで全く頭が回っていなかったが、地面に激突する直前で一度気を失って解除されたバリアジャケットから帰ってきた魔力でなんとか飛行魔法が発動、地面への着地ができた。

「ミスってたら、挽肉だったな」

青い顔で強がるように軽口を叩く。

茶色の地上本部の制服に身を包んだセルジオが残った右手で袖を引きちぎると口を使つて左腕をギリギリと縛つて止血する。

今までとめどなく流れていた血が少しだけ遅くなる。

「高町は……………まだ探してるか」

血が足りないせいで青白い顔を上げると、ビルの谷間に時折桜色の光が瞬くのが見えた。

どうやらビルを根こそぎ破壊したりという無茶苦茶な方法を取る気は無いらしい。それはマクスウェルの資源を破壊されては困るという意思なのか、果たしてなのはに僅かに残った意思がそうさせているのかはわからない。

「たちまちここが見つかるとは、ないとは思うが」

だがのんびりもしていられない。

セルジオはあまりにも血を失いすぎた。なのはに襲いかかれても死ぬが、かといってこのまま隠れていても失血死で死ぬだろう。

「八方塞がりだな」

くは、と乾いた笑いが漏れる。

責任を仲間に任せて、己の無茶を通して、そして、『救う』と豪語しておいてこの始末。本当に、もう笑うしかなかった。

でも、だからと言って諦めることだけはない。それでは、何のために生き残ったかわからない。

『あの人の』のことの、責任を取れてない」

歯を噛み締めて、セルジオが立ち上がるうとして、片腕がないせいでバランスが取れ

ずに盛大に転んだ。

「ooooooooo」

声にならない叫びが硬く引き締められた口から溢れた。

セルジオのなくなつた左腕はただ立ち上がるだけでも凄まじい激痛を訴えかける。それが、転んだ時にどうなるかなど言うまでもない。

「痛みが、あるなら、大丈夫だ。ほんとにやばいときは痛みもなくなるからな」
気が狂いそうな痛みの中必死に頭を巡らせる。

「打つ手が無いわけじゃない……………まあ片手はないんだが」

へへ、と自嘲するように笑う。

「ゼファアは、どこにあるか……………」

燻るリンカーコアからほんの雀の涙ほどの魔力が供給され、それでなんとかワイドエリアサーチを行う。

いつもの制度に比べれば酷いものだが、デバイスを見つけるだけならばこの程度で十分すぎるほど。

ゼファアを探す傍ら、『ゼファア』、否改良型『ゼファア』を受け取った時の製作者の言葉を思い出す。

「君は、何のために戦うのかね」

「ああ、そういう表向きのはいいから。ちゃんと、本当に思ったことを言つて欲しい」

「ほらほら、そんなに困つた顔をしないでくれたまえ。安心していい、私は口が硬い方だ」

「ならば私の荒唐無稽な欲望も明かしておく。――――だ。ほら、次は君の番だろう？」

「ほら、言いたまえ………ほう、ふむ」

「ん？ ああ、悪い悪い少し考え事を、ね」

「いやいい夢だと思う。まあ一人の人間が持つには少しばかり大きなものだとは思つが、ね」

「ははは、そうだと、君はそれを分かつた上でなおそれを目指すのだろう」

「ならば、一つだけ聞きたい。ん？ 何、そう難しい話でもない。これまた正直に、イエスカノーかで答えてくれればいい」

「君は、欲望のためならば自分が死ぬかもしれない方法を取ることをできるかね？」

「くく、そうだと。そうだと。やはり君はそう答えるだろうね」

「いいや、いけないことではないさ。その証拠に私は君にこの『ゼファー』を与えるよ。上手く、使いたまえ」

「ああ、そうそう忘れていたよ」

「君の欲望に喝采を送ろう、セルジオ・アウデイ」

「あつた、けど、これは……………」

ぎり、とセルジオが薄く唇を噛む。

ビルから少し離れた道路の中心。そこに何か問題があるわけではない。

ただ、上にあるものが問題だった。

「高町の、真下か…………」

なのは今動きを止めてただ静かに槍の上空で佇んでいた。

まるで、ゼファーを餌にセルジオをおびき寄せようとするかのように。

奥の手を使うための種火はゼファーの中に入っており、使うにしてもセルジオが手に触れなければならない。

それはイコールで、なのはの砲撃の嵐を切り抜けなければならないということ、今

の片腕のないセルジオがそれをできる可能性など絶無に近い。

「クソ、どうしろって……………」

残った右拳を握りしめて、軽く金属がこすれるような音を聞いた。

「なんだ、これ……………」

アンチエインナツクルを撃つてから握りっぱなしの拳の端から、血に濡れても薄く光る銀色のチェーンがのぞいている。

「どうやらアンチエインナツクルがなのは首元を掠めた時に引つかかっていたらしい。」

ゆつくりと、拳を開いた。

「これ、高町の、か……………」

「ちやり、と音を立てたのはシルバーの小さな星のネックレス。」

それは、いつぞやにセルジオがなのはに戯れで買ってやったもので、部屋にしまつてると聞いていたもので。

「なんで、こんなもの、持つてるんだよ」

「どうしてこんな戦場にまでつけてきているのか。」

「ほとんどつけてないと、そう言っていたはずだった。」

「なん、で……………」

ネットクレスを握って額につける。

「どうして、俺は高町のところへ来た」

幾度目かわからない自問をする。

尋ねることはいつも同じ。

ただいつも「わからない」としかいえなかった答えでなく、胸に巢食う言葉にならない思いに名前を与える。

『高町なのは』。

初めて会ったのはクロノに引き合わされてからで、そこからはもう一年の付き合い合っただ。

机を並べて仕事をして、時に背中を預け、時に隣に並んで、時には正面から向かい合っ
て。

一年にしては、随分と濃い付き合いだ。

いろんな、表情を見て来たと思う、見せて来たように思う。

泣いたり、恥ずかしがったり、怒ったり、拗ねたり、呆れたり、緊張してたり、いろいろだ。

でも、なのはの事を思い出そうとして浮かんでくるのはいつだって笑顔だ。優しく、柔らかく、微笑むなのはの姿が胸の奥にある。

そうして、この笑顔はいつの笑顔なんだ、とぼんやり考えて、答えはまたすぐにでた。「あの時の、高町だ」

トーレと戦った後、入院した先端医療研究所のベットの上で、なのはと二人で話した時のことだ。

なのはに面と向かって夢を告げたのだ。

自分でも荒唐無稽で、けど諦めきれなくて、そんな自分の夢をなのはに教えた時、なのはは柔らかい笑顔を浮かべていた。

否定しなかった。驚くこともなかった。

ただ一緒に背負おうと言って、素敵な夢だと、そう言ってくれた。

「ああ、なんだ、簡単じゃないか」

一つずつ丁寧に確かめればすぐにわかることだった。けれど、今まで理解できていなかったのは、今の関係に甘えていたからだ。

温くて、曖昧な関係で、満足していた。

けれど、一度なのはが離れて、怪我をしたと聞いてそれじゃあ駄目だと思つたのだ。

セルジオがゆっくりと目を開いて、思考の海の底から帰ってくる。

体は自然に立ち上がる。

血を失い、左腕を失い、しきりに体が痛みを訴えてなお、それでも心は前を向く。

ちやり、と手の中の星のペンダントが音を立てた。

「距離は、ギリギリまで陰に隠れていけば、150つてところか」

につと無理矢理に笑みを浮かべてみせる。

「じゃあ、行くか」

そして、未だバランスが上手くとれない体で、ゼファーめがけて走り出した。

一步、二歩、と歩みを進めていき、程なくなのはがセルジオの存在に気がついた。

ストリーマの砲身がセルジオに向けられ、素早く速射弾が連射された。

「擬似解析ローラー十四手」

それをゼファーがない状態での擬似的な予測によってかわして、また一步、また一步と足を進めていく。

その間も弾丸の雨が止むことはないが、セルジオはその全てを紙一重でふらふらと躲す。

そして、遂になのはが痺れを切らしたように瞬間的に砲身にエネルギーを充填し、セルジオへと撃ち放つ。

「こ、こっだっ！」

セルジオへと真つ直ぐに飛んでくる砲撃、それを見てセルジオが迷う事なく前へと跳んだ。

体が少しの間浮いて、そして背後へと着弾したなのはの砲撃の衝撃で体が吹き飛んで行く。

そう、百メートル近い距離があつたゼファアの方へと、飛んで行く。

「ぐ、届け……！」

残った右腕を必死に伸ばして、地面に転がる銀色の槍を掴み取った。

「よし——ぐ、おう、ぶ……！」

とつたはいいものの今の体の状態で受け身など取れるはずもなく無様に地面を転がって、そしてビルに背中をつける形で止まった。

「なあ、聞こえているか高町」

槍を片手に抱くようにして、自身を見下ろすなのはへと視線を向ける。

「いろいろ、迷ってたんだ。俺がお前のところに来ていいのかとか、なんでお前のことになつたら悩んでいるんだろうとか」

でも、その答えは、もう出た。

「きつと俺はお前のことが大切なんだ」

つまりは、そういうことだったのだろう。

自分と同じものを目指して、隣にいてくれる小さな彼女のことを、いつのまにか掛け替えのない存在になっていた。

それだけだった。

だから、とセルジオが前置く。

「今度こそ俺は高町を助けるよ。俺の、全力全開で」

「そうして、セルジオが銀色の槍を、改良型ゼファー、正式名称『ゼファー・EC』を強く握った。

「デュランダル、S2U」

「ゼファー・EC、アクティブ」

「デュアルドライブ」

「エクリプス・ドライブ」

「——イグニッションッ！」

「

」

青光は謳う

金と赤とが弾け、そして花が舞い散るように残光を漂わせた。

片や魔法により高速で飛行するフェイト。手にはアミタからもたらされたナノマシンにより多少の強化を経たバルディッシュ。彼女の生来の変換資質も相まってその剣からは雷光が光る。

片やアクセラレイターにより加速するイリス。体からフォーミュラ稼働の証の薄いオーラを纏つて、三又に分かれた斬鞭『スラストウィップ』を握る。

「アクセラレイター」

加速、そして斬撃。

「——バルディッシュ」

《 Sonic move 》

対し、フェイトが魔力に指向性を持たせ滑るように空を移動し、さらに慣性制御によ

る減速なしでの追従を可能とする。

三本の鞭による同時攻撃を剣で払いながら、続けて手の中にスフィアを出現させる。ばち、と青白い電弧が走る。

《 Photon Lancer 》

バルディッシュの低い声に導かれるようにスフィアから魔力弾が射出されイリスへと迫る。

「ザッパー」

けれどそれもイリスの手の中に現れた片手中により全て撃ち落とされてしまう。

そしてであろうことかフェイトのフォトンランサーを貫いた弾丸がそのままフェイトを狙う攻撃へと転じた。

堪らずフェイトは大きく旋回。剣での近接戦を挑もうとするが、イリスは鞭で空間を大きく薙ぐ事で近づかせない。

フェイトが慣性を維持したまま隣につつ、と滑っていき、紅い光弾がそこに待ち受けていた。

回避行動を予見していたイリスが、フェイトの視線が鞭へと移った瞬間に、迫撃砲へと変形させて、そこへ弾丸を置いたのだ。

さしものフェイトも回避が間に合うはずはない。

「——っ」

息を飲むのは一瞬。

フェイトが直撃を覚悟して身を固く縮める。

《 Protection 》

そこに挟み込むようにしてバルディッシュのフォローが入る。主人に防御を貼る余裕がないと見るや、デバイスによる高速演算で防御魔法を展開したのだ。

結果、フェイトに直撃するはずだった弾丸は金色の魔法陣に威力を大きく減衰させることとなる。

「ごめん、ありがとうバルディッシュ」

《 No problem sir. 》

助かった、とフェイトが小さく息をついた。

(イリスさん、本当に速い。移動速度も私と同じ、ううん、たぶんそれより速い)

もうもうと立ち上がった煙の中から身を踊らせ牽制の魔力弾を放つが、イリスはその全てをかわして、迎撃の弾丸の雨を叩き込んでくる。

(何より、思考が早い。私が一手打つ間に、それ以上の攻撃をしてくる……！)

イリスのアクセラレーターとフェイトのソニックムーブ。

どちらも簡単に言う「速く動く」というものだ。

しかし、その理論から紐解けばその実情は大きく異なる。

フェイトのソニックムーブ。

これは飛行魔法により高速移動、その移動する力、つまり慣性を維持することにより最高速度で移動し続けるというものだ。直角に曲がることも、下降することもブレーキをかけることなくやってのけることこそがこの魔法の強みだ。

ならばイリスやアマタが使うアクセラレイターはどうなのかというと、これは『身体稼働率上昇』である。

ナノマシンから変換した周囲のエネルギーを一時的、または継続的に供給し続けることで身体の性能を大幅に引き上げる。それは移動速度だけにとどまらず、膂力、そして思考速度までその範囲内となる。

つまりフェイトはあくまでも速く動いているだけに過ぎないが、イリスは周りを遅くしながら自分はそのままのスピードで動いているという状態なのだ。

イリスの優秀さも相まり、フェイトが一つ考える間にイリスは三つのことを考えられるだろう。

そのアドバンテージは言うまでもない。

いくら速度が拮抗しているからといってフェイトが互角に相手取るのは難しいだろう。

だからこそ、今の戦闘開始から三十分以上たつて、どちらもほとんど無傷であるという状況がひどく奇妙なものに感じる。

(もしかしたらイリスさんは……)

胸の内から一つの疑念が浮上してくる。

「……………確かめなきゃ」

ぽつりと眩くとソニックムーブで弾丸の雨をかわしていたフェイトが、閃光弾を使つてほんの一瞬イリスの視界を遮つた。

その隙に一気にフェイトが加速、頭上に回ると剣を振り下ろした。

「——ッ」

イリスがほんの少し息を呑むと、鞭で迎え討とうとして、ほんの少しの間の後剣型の『ブレード』に変形させて受け止めた。

バルディツシユの電光とブレードの燐光がぶつかり、そして金属同士がぶつかるような甲高い音を立てた。

「あなたも、しつこい子ね」

「確かめたいことが、ありますから」

黒い刃の向こうで忌々しげに歪められた顔にフェイトは淡々と応じる。

「見たんですよね、キリエさんの持っていた遺跡板」

「——ッ、何のこと」

「マクスウェルさんのやったことが書いてあったものです。イリスさんを騙して——」
「知らないって言ってるでしょ！」

フェイトの言葉を遮ってイリスの銃のマズルフラッシュ。

競り合っていた剣を弾くと体を逸らすことで銃弾をかわす。

「ならなんで迷ってるんですか！」

「迷ってなんかない！ 私は、迷ってなんか……！」

「私のこと、本気で攻撃もできないのに、ですか？」

「——それは、は」

「本気で倒したいなら銃だけじゃなくて剣も使えばいいじゃないですか！ 近づいて斬ればいいじゃないですか！ 私に避けられる余地なんか与えなければいい！」

加速しながら二人の銃弾と魔力弾が交錯する。その中で尚もフェイトがイリスへ呼びかける。

「それをできないのは、イリスさんが自分がやっていることを、マクスウェルさんの為に戦っていいかを迷っているからじゃないんですか?!」

「ならどうすれば良いってのよー！」

フェイトの言葉についてイリスが痲癩を起こしたように叫んだ。

「久しぶりに会えた！　もう会えないと思ってた！　死んだと、思ってた！」

鞭を振るい、塾で牽制するイリスの目は既にウイルスコードの赤は見えない。ただ、その瞳には薄い水の膜が覆っている。

「私のことを愛してくれてたのよ！　それが、それが、あんなちっぽけな遺跡板一つに『嘘だった』と言われて、信じられるわけないじゃない！」

マクスウエルにとってイリスは道具だったのかもしれない。便利な駒の一つだったのかもしれない。

けれど、イリスにとっては違った。

イリスは生まれた時からずっと一緒にいた、かけがえのない存在だったのだ。その過ごした時間は決して嘘じゃないのだ。

だって、と言葉を続けるイリスの瞳の涙の膜が割れる。

「所長の気持ちは嘘でも、私は好きだった！　私の所長を好きだったって気持ちは嘘じゃなかった！」

ぼろぼろと感情が決壊したかのように涙を流し始めるイリス。

彼女の言葉は、きつとキリエがイリスと戦えていれば彼女に言ったであろう言葉とよく似ていた。

「その所長が、私のことを必要だって、そう言ってるの！　なら私は間違っても良い

！ 騙されてたって良い！ その気持ちを、私の気持ちを——」

イリスが頬を涙の雫で濡らしながらブラスタ―へと変形させた銃口をフェイトへと向けた。

「あんた達なんかにはわかるわけないでしょうがっ！」

そして迫撃砲の引き金が引かれる。

真紅の弾丸が飛び出してアクセラレイターによる加速でフェイトに向かっていき、バルディッシュに真つ二つに叩き斬られた。

右と左に分かれた弾丸が流れて、そしてフェイトの背後で爆発した。

背後からの爆風で白いマントを揺らしながらフェイトがゆるく胸を握った。

「わかります、たぶん、私だけにはきつと」

そしてふ、とどこか儂さすら感じさせるような笑顔をイリスへと向けた。

「私も昔、大切な人をお願いされて、色々やってみましたから。私の場合は母さんでしたけど……」

「——」

「私たちのことを調べてたら知ってるんじゃないですか？」

イリスの攻勢が止まる。

過去フェイトは母親に頼まれて『ジュエルシード』というロストログアを集めていた

ことがあった。それが世間的にはあまり褒められた行為ではないことを理解していたけどそんなことは見ないようにしていた。

全ては母親に『母さん』と慕う人に笑って欲しかったから。

後に『P・T事件』と名付けられるこの一件でフェイトと母親が和解することはなかった。フェイトは「あなたの娘だ」と言ったけれど、それでも母親が彼女を認めることはなかった。

だからこそ、思う。

「『親』って、とつても大切だと思うんです。その人が幸せなら、それだけできつと満足しちゃうくらい」

親が大切に、その人のためなら他の人がどうなっても良いとすら感じてしまう。

その為に、親が間違った行為をしたとしても、その人のためになるなら、と飲み込んでしまう。

『親』と慕う人に、『作られた生命』である二人は、その生い立ちから今の状況までよく似ていた。

「でも、だからつてその人の間違いを見て見ぬ振りするのは、犯罪に走っちゃうのは、駄目だと思います」

フェイトとイリスが向かい合う。

彼女いわく『どこか似ている』二人が。

「私たちは心がある。きつと話し合えば理解できるはずですよ。『親』のためにできることは、他にもあるはずなんです」

そう、フェイトは友達に、今の家族に教えてもらった。

「そんなの、今さらよ」

ぽつりとイリスが呟いた。

「ユーリに、酷いこと言った。キリエを、ずっと騙してた。猫達にも。それに、この世界の人たちにも」

そしてイリスが顔を上げた。その美しい容貌にはどこか悲壮な決意すら浮かんでいるように見える。

「だから、今さらなのよ。ここまでやった私が、所長のためにすら戦わないなんて、そんなの一体なんだっていうのよ！ どっちにもなれないなんて、そんなのどれだけ惨めになると思う?!」

目を鋭くしたイリスがフェイトを睨んだ。

「だからもう、所長の邪魔しないでよおおおつ！」

感情の昂りに応えるようにアクセラレイターの速度が上昇する。そのあまりの速度に、向かい合っていたフェイトには対応できない。

無防備なフェイトへとイリスの凶刃が迫る。

「まー……っつた！」

ぎいん、と青い電光にイリスの斬撃が防がれる。

「あなた……」

「レヴィ……？」

突然の乱入者の存在に、イリスとフェイトの目が丸くなる。

名を呼ばれた人物は水色の長いツインテールを揺らしながら得意げに胸を張って、そして巨大な斧を片手にびしつとポーズを決めた。

「ふっふっふ、そうさ！」

誰が呼んだか知らないが、僕はレヴィ！

王様の臣下で、

シユてるんのマブダチ！

ユーリがご主人様で、イリスの友達」

ばかりとレヴィのデバイス、『バルフィニカス』からまたもや青白い電弧が走った。

『雷光』のレヴィ！　それが僕の名前だ！」

最後になつと悪戯つぽく笑ってみせる。

「レヴィ、なんでここに？」

予定じゃ固有型の方に……」

「んー、なんか王様が『こゆうがたがないから好きなどころに行つてやれー』つていうから。フェイトを助けに来てやつたんだ」

「私を、助けに？」

「うん。フェイトが怪我したり死んじやうのは、なんか、こう、嫌だったし」

少し恥ずかしそうに唇を尖らせたレヴィは、それにと前置いて、今も自分たちを静かに見つめているイリスへと目を向けた。

「王様とシユテるんと話したんだ。ユーリも、イリスもどっちも助けるんだって。だから、イリスを止めに来た」

「猫のあんたが、私を止めるっていうの?」

「そのために力を手に入れたんだ。みーんな、みんな助けて、ハッピーエンドで終わるんだ!」

にば、と笑ったレヴィがバルフィニカスを長剣へと変形させてフェイトの隣へと並んだ。

「だからさ、やろう一緒に。フェイト」

「——うん! レヴィ!」

フェイトはレヴィの言葉に嬉しそうに頷くと自身もバルディツシュを構えて、イリスへと向き直る。

「絶対に止めます! 昔なのはがそうしてくれたように!」

「またみんな一緒にエルトリアに帰るんだ! イリス!」

青白い電弧と、黄金の雷光が刀身から眩い光を発した。



シグナムのレヴァンティンと固有型のヴァリアントウエポンが鎬を削る。

「——ッ」

「——」

二人の間にあつた差は固有型の身体性能の向上により埋められ、以前のようにシグナムが一方的に優位に立つということはない。

「アクセラレイター」

固有型の体が加速する。

一呼吸の間に自らへと迫る固有型の斬撃を払いながらレヴァンティンの刃に炎が纏う。

炎の魔剣が横薙ぎに振るわれる。だが、固有型は加速により容易くかわして見せると

背後からの一撃にてシグナムを狙う。

「——はあっ！」

「させんさー！」

背中へと袈裟懸けに刃が迫り、それをシグナムは左手で鞘を引き抜いて防ぐ。

そして右手のレヴァンティンを手の中でくると回すと脇を抜けて固有型へと突きを放つ。

「がいん、と金属がぶつかると音が響き滑るように固有型の体がシグナムから離れて行く。」

「はあ、はあ、はあ、はあ……、やはり、強いな……」

固有型が荒い息の中シグナムへと向き直り、小さく呟く。その体の関節部分はアクセラレイターの影響か皮膚が裂けて、そこから細かな煙が立ち上っていた。

「貴様、まさか体を……」

「は、固有型三分、は、少し私の体には、過ぎたものだったらしい……」

凜々しい顔を苦痛に歪めた固有型がふらふらと剣を構える。

「……やめておけ。貴様、これ以上戦えば死ぬぞ」

「元より戦うための身体だ。今さら、機能停止を恐れることはない」

眉尻を上げた固有型の体を橙色のオーラが包み、そして再びの加速が敢行される。一

気に桃色の髪 of 剣士との距離を縮めることを引き換えに、固有型の体が軋んでいく。みしり、と関節が悲鳴をあげる。

ぎしり、と内部の歯車が外れかける音がした。

ばしゅ、と何かが流れていく感覚を感じる。

それでも、固有型は剣を振るうことやめない。

自分の残り少ない活動時間を縮めながら、一度負けた相手へと果敢に挑んでいく。

「一度負けた！　そして、胸の中に浮かぶものがあつた！　理由はわからん！

だが！」

剣閃が輝き、辺りに響くはラベンダーとオレンジの剣の見事な二重奏。

その音を彩る舞い散るシグナムと固有型の鮮血。

美しく、けれど相手へと破壊の一撃をもたらす残酷なオーケストラ。

「私は貴様に負けたままでは死んでも死にきれん！」

裂帛の叫び。

機械の咆哮。

その眩しいまでの光を受けるシグナム。

(……)までの気合、(……)から……)

そう考えてシグナムは相手の瞳に映る景色を、自身の姿を確認して緩く首を振った。

(愚問、か)

同じ剣士。

自身を『生命でない』と断じるその姿。

剣をぶつけた時に交わした会話。

そのどれがきつかけになったのかわからないが、どうやら目の前の固有型はシグナムに固執しているらしかった。

『心』などないと彼女は言う。

けれど、その瞳に宿るものはどうみても宿敵と相見えたものの熱い炎で。

(生命を分ける差とはなんなのだろうな)

シグナムは夜天の書の守護騎士システムのプログラムだ。故にその命も、姿も不変で、どれほどの時間を経ても磨り減ることはない。

それはまともな生命と言ってもいいのかわからない。人によつてはきつと生命でないと言う人もいるだろう。

けれど、彼女の主であるはやてに尋ねればその言葉はすぐさま否定されることだろう。

「貴様には」

剣閃応酬を繰り返しながら自身と向き合う剣士へと言葉を投げる。

「心が、あるのだな」

「心、だと？」

「勝利の為に命を投げ捨て、そして省みることなく前へと進む。そんなもの、心がなくては成し得ぬ事だよ」

「有り得ない。私は、群体だ。個にして全、全にして個。己と他を分けるものなどありはしない」

「それでも、私は貴様に心があると、そう思う」

「……………そうか。お前がそう言うならば、そうなのかもしれない」

固有型が剣を振るいながらも、一瞬なにか面白いものでも見たかのように笑みを漏らした。

「ならば一層この戦いに勝たねばな。私の、『心』が命じたものであると言うならば」

そして、またもや加速。

その橙のオーラはちかちかかと眩く光るその姿はさながら蛍のようで、その命が尽きようとしていることを示すようにすら見える。

おそらく、彼女が手を下さずとも固有型の命は長くない。

きつと十五分と持つことはないだろう。

けれど、だからこそシグナムは決着をつけねばならないと思う。

「レヴァンティン、シュランゲフォルムだ」

《 Aber …………… 》

「いい。これは、私がとるべき責任だ」

いいのか、と問いかけてくる相棒にシグナムは短くいいのだ、と返す。

つきかけの蠟燭が最後に眩く光るように、そんな強さを孕んだ光で固有型がその姿を霞ませながら高速で動き回る。

歴戦の勇士であるシグナムすら目で追うのは困難な相手。

そして、その相手に対し、シグナムが愛剣へと短く起動句を告げる。

「シュランゲフォルム、機能凍結解除」

《 Schlangeform 》

機械音とともにカートリッジが装填されるとレヴァンティンに魔力が満たされ、そして刀身に薄い線が入り、そして剣が細いワイヤーで繋がれた蛇腹剣に形を変える。

「これ、は……………」

加速していた固有型が、『視界を埋め尽くすように』広げられた刃とワイヤーに目を見開く。

それはさながら半径十メートル近くを覆う炎と刃の結界だった。

無闇に動けば斬れる。焼ける。

剣を振るおうにも、展開されてなお生きているかのように動き続けるレヴァンティンは固有型の自由な動きを許さない。

シユランゲフォルム。

剣、弓、に続くシグナムのレヴァンティンの形態の一つ。

そして、緊急改修によって凍結されていた形態の一つ。

それを起動したと言うことはシグナムのレヴァンティンがこれから先での戦闘を考えないと言うことで、そして、目の前の相手に全力を出したと言うことの証左だ。

「貴様は、我が全力で相対するに相応しい敵だった」

故に、眠れ。

「——飛龍一閃ッ！」



氷が吹き荒び、青光は高らかに謳う。

青光の中を高速で飛ぶマクスウェルと最低限の位置どりをして、牽制を続けるクロノ。

二人の戦いは均衡状態にあると言っても良かった。

「ステインガースナイプ！」

アイスブルーの魔力弾がレーザーのようにマクスウェルを追う。

マクスウェルはそれを振り切ってまだ年若い指揮官を銃で狙い、引き金に指をかけた。

ヴァリアントウエポンにナノマシンから供給されたエネルギーが装填されて、そして、目の前へと銀色のビットが現れた。

「ステインガープレイドッ！」

「な、くそっ！」

傍から飛んできていた魔力刃がビットで反射することで通常よりも早くマクスウェルの前へと割り込む。

ほのかな冷気を纏わせた刃は手の中のハンドガンの銃口に飛び込むと、内部に装填されていたエネルギーで誘爆を起こしながら爆発する。

マクスウェルが慌てたようにハンドガンを捨てると、あらかじめ用意していた素材を

元手に新たな銃を作り出す。

「――させるかっ!」

だが、その刹那の隙を縫ってクロノは飛行魔法での加速、そしてS2Uの先をマクスウエルへと向けた。

「――っ」

「ブレイクインパルスッ!」

《 Break Impulse 》

ズ、と大気を振動させながらS2Uから魔力をエネルギー波へと変換させた衝撃が放たれる。

小さく息を呑んだマクスウエルがクロノから距離を取ろうとする。

クロノとマクスウエルはそもそもその性能の差が存在する。この程度ならばアクセラレーターを使わなくても離脱は十分に可能であった。

がきん。

「何っ?!」

バックステップにて距離を取ろうとしていたマクスウエルの体を鉄のような硬さのリングが空へと縫い付けた。

ストラングルバインド。

拘束の名手、クロノによる疾風の如き術式展開による妨害。

止まった体へとアイスブルーの衝撃が叩き込まれる。生体部品も多いとはいえ、マクスウエルの体の多くは精密機械。純粋に物質を破壊する波へと変換された魔力が、体内部から軋ませる。

「アクセラレイター・オルタアアッ！」

堪らずフォーミュラシステムによる加速でバインドを砕いてクロノの頭上へと回り込むと片手の剣を迫撃砲へと瞬時に変形して特大の砲弾を叩き込んだ。

「デュランダル」

《 Protection 》

だが、クロノはそれを今までとは比べものにならないような速さで障壁を展開すると砲弾を魔法陣によって防いだ。

もちろん一枚で防ぎきる衝撃ではなかったものの、デュランダルの氷の壁が受け止めている間にS2Uのブレイクインパルスを解除、シールドをさらに一枚重ねてダメージゼロで乗り切った。

（何だ、此奴は……！）

マクスウエルが片手で先程撃ち抜かれたハンドガンを再生成しながら二本の杖を手に此方を見つめる少年を睨んだ。

(『魔法』の展開が早くなった。そのせいで、速さの利点が潰される)

今まではそうではなかった。クロノはマクスウェルの速さに対応できていなかったし、目で追ったとしても魔法の展開が明らかに間に合っていないなかった。

(あの杖のせいか……)

黒と白。

対照的な色合いの杖二本。

クロノの動きが変わったのは一本だった杖を二本へと変えてからだだった。

ほう、と障壁の砕けた氷に包まれながらクロノが小さく息をついた。

(上手くいったな)

フルフィンガーグローブの先に確かな鉄の感触を両手で感じながら気を引き締め直すクロノ。

白銀の氷杖デュランダル。

父の形見であり、恩師から託された彼の杖。

漆黒の魔導の杖S2U。

士官学校の頃から長い時間を共にした彼の武器。

今まで同時に握られることなどなかったその杖は、今までで最もの難敵を前に主人の手の中で静かに魔力を宿している。

(前から出来るかもと思って練習はしていたが、ここ一番でしつかりハマってくれたな)
マクスウエルとクロノには超えがたい一つの壁があった。

それは『速度』。

アクセラレイターの移動速度に、攻撃速度に、クロノのデュランダルはついていけていなかったのだ。

デュランダルの演算は早い。けれど、それでもマクスウエルには敵わない。

ならもう一つデバイスを足せばいい、というシンプルな発想。けれど、そんなこと普通の人間は思いつきもしない。

デュランダルが広範囲攻撃をしている間に、S2Uをサポートに回せばいい、などと。本来なら出来ない。

術式を同時に二つ展開し、なおかつ二つのデバイスを扱うなど。

けれど、デュランダルもS2Uもどちらも『ストレージデバイス』である。レイジン
グハートやバルディッシュにあるようなAIは搭載されておらず、故に純粋に代替演算
器としての使用ができる。

「——はあッ！」

「く——」

クロノが右手のデュランダルにステインガーブレイドを演算させながら左手のS2

Uのステインガースナイプの陽動で時間を稼ぐ。

「ステインガープレイド・エクスキューションシフトッ！」

「——ッ、アクセラレイター・オルタ」

百を超える剣の雨がマクスウエルへと降り注ぐ。それを加速にて振り切ったマクスウエルの前へと回り込んでいたステインガースナイプが迎え撃つ。

だがマクスウエルはそれを容易く剣にて斬り捨てる。

ち、とマクスウエルとクロノが小さく舌打ちをこぼす。

（此奴、手札が多い。これじゃあ）

（速い。僕の最大射程でも逃げ切られるか）

「決着が、つかないな」

「僕じゃあ、決め手にかけるか」

マクスウエルはクロノの攻撃は当たらないが、クロノの魔法の展開速度によつて距離を詰められない。

クロノはマクスウエルの攻撃を防ぐが、マクスウエルの速度を上回れるような攻撃は持っていない。

将棋で言うような千日手に近いような状況が二人の間に横たわっている。

「いや、魔力の消費がある分僕の方が不利か」

フォーミュラシステムは体内のナノマシンによって外部のエネルギーを変換して、自分へと注ぐ技術。

対して魔法は術者のリンカーコアから外部へと力を放出する技術。

長時間戦い続ければガス欠になるのはクロノの方なのは火を見るよりも明らかにとだ。

(なら後を気にしている場合じゃないな)

クロノの顔が引き締められて、体にアイスブルーの燐光が現れる。

「次で、決める」

デュランダルとS2Uとが、唸りを上げる。

「ステインガーブレイド——」

クロノの周りを旋回しているデュランダルのビットが大きく散会した。

クロノの残存魔力のおよそ半分を吸い上げて氷の魔力刃が辺りの空、上下左右に至る全てを埋め尽くすように展開される。

その数、およそ五百以上。

「——トリガーワード ジェノサイドシフトッ！」

起動句によって静止していたアイスブルーの刃の群れが命を吹き込まれたように吹き荒れた。

三百六十度から迫る刃の嵐の中で加速したままのマクスウェルが眉を寄せた。

(後先見ない大技だと? よっぼどこの技に自信があるのだろうか)

ふ、と唇だけを笑みの形へと変わる。

「私を倒すには少し遅い」

嵐の中で、その姿が霞む。

白銀の刃の中で、黒紫の光は踊るように刃を避けて、躲して、薄い笑みを浮かべながら一直線に嵐の外へと向かっていく。

大技を撃って、肩で息をするクロノへと、向かっていく。

(大方一か八かの勝負にでも出たか)

あたりをつけたマクスウェルが息をつく。まるでできの悪い生徒を見た教師のよう
に、小さく息をつく。

「君は指揮官としては優秀だったが、戦闘者としては今ひとつだ」

紫のオーラに包まれたマクスウェルがクロノの目の前へと踊り出す。

「ならっ——!」

クロノが素早く『S2U』を振るって魔力刃を操作。五本あまりをマクスウェルへと
向ける。

「その程度、私に見えないと思っていたのかい?」

けれど、マクスウエルにはそれすらも遅い。その驚異的な身体能力によって迫っていた魔力刃を剣で斬り裂いて――

「かかった」

――がきん。

剣が、何かに受け止められる。

驚きに目を張り碎いたはずの氷刃を見れば、白い氷の中から覗く青と銀の金属のビツトが一つ。

（まさか、氷の刃の中にビツトを隠して――）

最早隠す意味を無くしたからかばらりと氷による偽装が剥がれて五本の魔力刃のうち四本からデュランダル付属のビツトが飛び出してくる。

「く、アクセラレ――」

「逃すか！」

四本のビツトがクロノの命令によってマクスウエルを挟み込んでその体を固定してみせる。

そして、クロノが右手のデュランダルを構えて、吠える。

「凍てつけッ！」

《 E t e n a l c o f f i n 》

ビットを基点にしてSランク級の氷結魔法が、挟み込まれたマクスウエルへと叩き込まれる。

一瞬で霜が降りて、氷の棺へと閉じ込められていく体。だが、焦ることはない先ほどと同じように加速を使えば抜け出すのは難しくない。

「ア——」

ぱきり、と開けた口が一気に凍結した。

「————」

絶対零度の息吹はマクスウエルの口内を余さず凍らせて、そしてそれだけに留まらず内部機関へと侵入しナノマシンを端から凍らせ始める。

（此奴、狙いは私の体ではなくナノマシンを——）

「凍、れええええええッ！」

足止め程度にならなかつた魔法も、体内へと送り込みエネルギーの供給源を立てれば必殺の一撃へと変わる。

（問題は僕の氷結に魔力が持つかということだが……………！）

唇を噛みしめるクロノへの視線怒りに歪む。

（……で、終わらせるものか！）

端から凍らされていくマクスウエルは体内へと流し込まれたせいかわ、術者の魔力不足

のせいかな、未だ凍結しきっていないかった体を無理やり動かす。

ばきばきと氷を砕きながらハンドガンの銃口がクロノの額へと向けられる。

「良い位置です。しつかりと見える」

火炎が、ハンドガンを欠けらぬほど完全に燃やし尽くす。

「この、炎は……」

デュランダルとS2Uによる凍結を続行するクロノが遠くへと目を向ける。

すると、そこには。

「過去の我が主、ユーリとその友イリスへの非道を、ここで返しましょうフィル・マクスウェル」

真つ赤に燃える火球が、そこにあつた。

強大な熱量を内包したその収束砲撃はもとからそこにあつた魔力、クロノが撒き散らした魔力、そして彼女の——シユテルの魔力を、彼女たちの、彼らの思いを束ねて、もう一つの太陽へと変える。

「ルシフェリオンブレイカーッ！」

業火が、太陽が落ちる。

紅蓮の炎は彼女の二つ名の通り、クロノの拘束していたマクスウエルもろとも辺りを悉くを『殲滅』せしめる。

そして、残るのは業火に焼き尽くされて墜落していくマクスウエルと崩れ落ちそうな満身創痍のクロノ、そしてそれを受け止めるシュテル。

「お一人で立てますか」

「あ、ああ、けど君は確かユーリの方へ行く予定だったはずだが……」

「王に言われて此方の方へ。余計な手出しだったならば謝りますが……」

シュテルが腕の中のクロノへと楽しげにふふ、と含むような笑みを浮かべてみせる。それにクロノはよつぽど何か言おうと思ったが、結局素直に礼を述べることにする。

「いや、助かった。正直僕だけじゃ手が足りてなかった」

「それは良かった」

なのはとよく似た容姿、けれどどこか大人びた態度に居心地の悪さを感じながらクロ

ノは自分の力で立ち上がる。

急いでマクスウエルを拘束しなければならない。

彼の戦いは、決着がついた後も聴取という形で続くのだ。

逃げられたり、新たに手を打たれてしても面倒だった。

「僕はやったぞ」

クロノの目が、細められて透き通るような青空へと向けられた。

その言葉が、誰に向けられたのかは彼のみが知るところだ。



遙か上空、シャマルの旅の鏡によつて衛星砲ごとマクスウエルとイリスの根幹データのバックアップは碎かれた。最早復旧は不可能であり、その意味ではマクスウエルの企みは潰えたと言える。

けれど、そこに誰もいないかと言えばそうでもなく、『彼女』ができることがないわけ

でもなかった。

音のない世界で、『彼女』は巨大な銃を構える。

『彼女』に意思はない。

けれど、碎かれる前にされていた命令によってやるべきことだけは決まっていた。かくして、銃は構えられる。

『彼女』はいつだって命令を遂行するためだけに動くのだ。

ぐるぐるぐるぐる、歯車が回る。

全ては、マクスウエルが最後に笑うために。

結界の中、『彼女』の通信を受け取った量産型の内の一体の目が、赤く光った。

そうして、彼女は見下ろすだけだ、今フォーミュラエネルギーをまとって自身を撃ち墜すべく迫る姉妹を殲滅せんと、その巨大な銃を構えながら。

時が、来るまで、歯車は廻る。

星に、思いを

「デイバイダー550、ゼファー・E.C」
エクリップス

隣に娘であり助手であるウーノを待らせてスカリエツティが愉しそうに顔を歪めた。

「エクリップス、ですか……？　あまり聞き覚えのない単語ですが」

「そうだろうね。なにせまだ一般はおろかその道の研究者、管理局ですらほとんど認知していない代物だ」

スカリエツティが手元の端末を操作するとゼファーの設計図の横に『エクリップス』と書かれたデータを投影する。

『エクリップス』……これはいわゆるウイルスの一つでね、デイバイダーと呼ばれる病原からそれを保有する人間へと感染するんだ。このウイルスの面白いところは、感染者――
エクリップスキャリアー
 E.C 因子保有者の体を作り変えて絶大な力を与えるところにある」

「絶大な力、というと魔力の増加ですか？　そういつたウイルスがあつたのは何かの論文で読むことはありませんが……」

「いいや、そんな生易しいものではない」

ゆるゆると首を振るスカリエツティ。

「――『デイスライド分断』現象。そして不死に近い『再生能力』。それがEC因子保有者、もし

くはEC因子適合者へと与えられる恩恵だ」

『デイスライド分断』。

それはエクリプスドライバーたちが共通して使うことのできる能力を言う。

それは魔力エネルギーの結合分断作用。簡単に言えばエクリプスドライバーには須らく魔法が通用しない。

全ての魔法を破壊するその能力はまさしく『魔導殺し』。

そのウイルスをスカリエツティは手に入れていた。

「それは、恐ろしいですね」

「……魔法文明によつて発展をしてきた『管理局』に対してはまさしく天敵。もし犯罪者がこの力を手に入れたとすれば、本腰を据えて対策すべき敵となることだろうね」

まあ今の所はそうはなつてない訳だがね、と何が楽しいのかくつくつとスカリエツティが笑う。

「時にウーノ、そんな素晴らしい能力、まさか副作用がないとも思うのかい」

「つまり、エクリプスウイルスには副作用があるということですか？」

「ああ、しかもとびきりのがね。それこそが——」

『自己潰滅』、それと『破壊衝動』ですよねえ、ドクター」

ねつとりと絡みつくような口調で、スカリエツティの言葉を遮る人物が一人。

「感染するのすら百人に一人といるかいないかなのに、その適合者も殺人をし続けなければ生きていられないなんて、本当に生命として歪んでますねえ」

「何の用ですか、クアットロ。あなたには待機命令が出ていたはずですが」

「あらあら、そう怒らないで欲しいですねウーノ姉様。私には姉様のようにドクターを楽しませるためにわざわざ質問する、なんて優しさは無いものでして」

「クアットロ、あなたは………！」

「まあいいじゃ無いか、ウーノ。私のもとに来たということは何か用があるのだろうか？

話してみるという、クアットロ」

「はあい、ドクター」

くす、と声をこぼしたクアットロが眼鏡を押し上げてスカリエツティへとデータを送る。

そこには黒髪の厳つい男と、その後ろを追従する数人の魔導師の姿がある。

「航空魔導隊三課の魔導師です。先ほど、ここの第一層の警備ラインを超えて来ました」

「ほう、ついに。それで、誰がここに来ているんだね？」

「ドゥーエ姉様のデータによれば、部隊長の『ゼスト・グランガイツ』、分隊長『メガーヌ・アルピーノ』、後は『クイント・ナカジマ』ら十数名つて所でしょうか？」

「『セルジオ・アウディ』は？　彼の名前がなかったが……」

「残念ながらここにはいませんねえ。なんでも部隊長に言われて部下の下へ行つたんだとか」

「……………なんだ、つまらないな。彼はいないのか」

「はあ、と興味が失せたとばかりに肩を落とすスカリエッティ。それはどこか楽しみにしていたおもちゃを壊してしまった子供のようだった。

「それでどうしますか、ドクター？　一応チンク姉様やトーレ姉様たちを第二層に送ってますけど、撃退でもさせますか？」

「AMF発生装置内蔵のガジェットを警備に出しているだろう？　それで十分で無い

かね？」

「お言葉ですがレリックウエポン用の魔導師の件での期限が迫っています。どうでしょう、この『ゼスト・グランガイツ』を殺し、その素体にするというのは？」

「ん、確かにそれもいいか。それならガジェットよりトーレ達の方がいいか、クアットロ」

「はいはい、ではこの魔導師たち、みーんな殺しちゃいますねー」

何が楽しいのかくすぐすと笑いながらクアットロがスカリエッティへと背を向ける。

「はあ、セルジオ・アウデイがいるならば『私』として話しておきたかったんだが、まあ仕方ないか……」

呟いてスカリエッティがクアットロの送ってきたデータに目をやろうとした瞬間、その憂鬱を吹き飛ばすような甲高いアラームが鳴り響いた。

「アラーム？　　けど三課の魔導師はまだ……う？」

「いえ、これは警備システムではなく、ゼファアの……」

「そこに、いたのか……」

「ドクター？」

戸惑うように声を上げる二人には目もくれず、響いた音の中男は瘦躯を小さく震わせ、そして体を逸らして大きく声をあげた。

「く、くは、ははははははははっ！　　そうか！　　遂に！　　遂に使ったのか君は！　　何

の為になどという質問などは愚問だろう！　　君は誰かの為に使う、そうだろうセルジ

オ・アウデイツ！」

狂笑が残響する。

「喝采を！　　喝采を送ろう！　　その己を厭わぬ欲望に！　　人が抱くには過ぎたる

欲望に！　　妄執とも言える夢に、身を滅ぼすようなその欲望に！　　私は！　　私だ

けは祝福しようじゃ無いか！」

ゼファアの設計図が投影されていたモニターが赤々と輝く。

「——君の無限の欲望を！」

おお、喝采を。

運命の歯車は回るのだ。

無知な生贄はその階段を登るのだ。

欲望、それ即ち生の活力そのものだ。

ならば、彼の思いは欲望以外の何者でもあるまい。

「——喝采を！　　喝采を送ろう！」

暗がりの中でぼんやりと浮かび上がるスカリエツティの顔は、どこまで深い愉悦の色に歪んでいた。



「ゼファア・EC、アクティブ」

ゼファアー・エククリプス EC デイバイダー550。それが新しいゼファアーの名前。

このデバイスの内部には格納パーツがあるらしくそれを使えばセルジオの怪我を治すことができるらしい。

『エククリプス』ウイルスというそれは体に作用することによって、大きな力を与えてくれるらしかつた。

そして、その危険性について、セルジオは全てを教えてもらって尚、いや教えてもらったからこそ、その機能をゼファアーにつけてもらった。

死の危険。

二度と戻れなくなる危険。

それを全て了承して、セルジオはゼファアーを受け取った。

それが必要だと思ったのだ、

そうするべきだと思ったのだ。

なら、迷う必要はないだろう。

だって、自分の命一つで人が救えるのなら、救える可能性が得られるのなら、それはきつとそれほど悪い賭けではないはずだから。

「エククリプス・ドライブ」

銀の槍を握って、静かに目を閉じた。

思い出すのはクロノ、ゼスト、クイント、メガーヌ。ティーダ、ヴァイス、ギンガ、スバル、三課のメンバー。

そしてセルジオにいつも優しい笑顔を向けてくれていた、『あの人』と『高町なのは』のこと。

（あの人たちのためなら、戦える。まだ死ねないけど、死んでもいいくらいには、感謝してる）

そうして、過ぎ去っていった走馬灯のような記憶から帰還して、トリガーワード起動句を口にした。それは悪魔との契約。

地獄の片道切符。

自分の未来を、投げ捨てる行為。

「——イグニツションツ！」

そして、ゼファーからセルジオの体へと『ナニカ』が流れた。

どくん、と心臓が跳ねた。

「あ、が……………」

視界が真っ赤に染まり、体の端から熱が末端へと伝わっていく。ばきり、と骨が砕けるような痛みが襲う。

ぐちり、と肉が磨り潰されるような気持ちの悪い感触が広がる。

どろり、と何か別の事のために体が最適化されるのがわかる。

「う、ぎ、ぎい……………」

脳が、思考が、赤く染まる。

記憶が、大切な想いが端から侵食されていく。

「あ、あああああああああつ！」

壊したい。

殺したい。

血が見たい。

肉を裂きたい。

何でもいから力を使いたい。

早く、誰かを傷つけたくて仕方ないんだ。

叫ぶセルジオへとなのはがストリーマの砲身を向けて、引き金を引いた。

瞬間的にチャージされたエネルギーは桜色の閃光と変わり、そしてセルジオへと迫

る。

眩い光の前に、視界が、思考が、さつきまで胸に確かにあった大切な想いが赤く染まっ

ていつて――

——セルジオくん。

声が、聞こえた。

「——こんなところで、死ねるかアツ！」

セルジオが何かに抗うように大きく吠えて、そして間髪置かずになのは砲撃が炸裂した。

ビルに背をつけたセルジオを狙う砲撃が、地面へと炸裂して大きな粉塵を辺りに漂わせた。

なのはが紅く染まった瞳で無感動にその景色を見下ろして、ストリーマの砲身を下ろして飛び去ろうとする。

「待てよ、高町」

寸前、粉塵を白い閃光が貫いた。

すかさずなのははストリーマにフォーミュラと魔力の複合エネルギーをナノマシン
の助けを借りて充填、粉塵へと放つ。

「分断」
デイト

桜色の光線が解けるようにして、大気へと溶けていった。

思わず洗脳中でお、なのはが驚いたように目を見開く。

そして、かつかつと地面を叩く硬質な音とともに姿を見せた男へと目を向ける。

《 Z e p h y r E c l i p s e D r i v e A c t i v e 》

機械的な人工音声が槍から響く。

ばさり、とバリアジャケットの裾がはためき、服の袖から無傷の『左腕』が現れる。

白かった服の色は、所々黒く染まり、腕を覆うガントレットは真紅から黒混じりの赤

へと変わっている。

銀の槍も今は黒曜石の如く怪しげな色を湛える。

何より、セルジオの透き通るような翠の瞳が紅く染まり、襟からは藍色の痣が首元ま

で走っている。

そのセルジオの姿全てが、彼が『自己潰滅』の危険を乗り越えて、『エクリプスドライバー E C 因子適合者』

となった事を表していた。

「マルチタスク分割——アナライズ 解析」

紅く染まった瞳で、セルジオが呟いた。

思考が無数に分かれ、その中の一つへ今も心の奥底で暴れようとする意思を分割思考の一つへと押し込める。

「動けよ、俺の体」

死にかけのリンカーコアの魔力を熾して、飛行能力を発動させる。

今のセルジオの体は須らく魔力分断の影響下にあるため魔法を使うことはできない。

故に、魔力は火だ。

焚き火に火をつけ、さらに強く自身を燃やすための炎なのだ。

エクリプスウィルスによって作り変えられ、『世界を殺すための毒』のために最適化された体が魔力をエネルギーへと変えて、そして空を飛んだ。

白に青、桜の光を纏うなのは。

黒に紅、白の光を纏うセルジオ。

普段は同じ白のバリアジャケットの二人だが、今の二人の服装は対照的な色合いで、それが二人の変わり果てた姿を表すようだった。

「Accelerator Alternative」

「模倣——加速機動」

エルトリア式フォーミュラの機能の一つ、『アクセラレイター』が発動し加速して距離を取ろうとするのはを、ゼファアの演算機能によりトレースされた『加速機動』によ

りセルジオが追った。

青空の中で二人の姿が霞んで、そしてぶつかつた。

「ぜ、アツ！」

セルジオの横薙ぎに振るわれた槍をなのはが旋回で躲すと、長大なストリーマの砲身の先をセルジオへと向け、照準を合わせた。

「 Dv i n e B u s t e r 」

「マジリシグテイバイト
魔力分断」

エクリプスの能力が発動する。

体を包むような分断能力が放たれた砲撃の半分が解いたが、残り半分は分断フィールドを突き抜けてセルジオへとダメージを与える。

「く——」

殺傷設定による砲撃が肩口を抉り、肉を削いで生温かい鮮血を散らせた。

（くそ、なんで分断しきれない？ 魔力は無効化するんじゃ……………）

ぼこぼここと泡立つように傷口が修復されていく熱さを感じながらセルジオが薄く唇を噛む。

（フォーミュラエネルギーと、後はアレのせいかな）

セルジオの目がなのはの左腕に固定された巨大な魔力砲、『ストリーマ』へと向けられ

る。

なのはのストリーマはC W社の『カノン』を元にフォーミュラシステムを組み込み回収した武装である。

その設計コンセプトは『AMFなどの魔法使用不能空間においての魔法の使用』であり、その対抗策として、カノンは魔力をある程度物理的破壊を伴うエネルギーへと変換するのだ。

それはつまりAMF下だけでなく、分断現象の下でも魔法を使用できるということ。けれど、未だその理論は未完成で、本来は分断現象に対抗できるほどの出力は見込めないのだが、今のものにはフォーミュラがある。

フォーミュラと魔導、その二つのエネルギーを混ぜ込むことによって、たとえば半分だとしても、分断を突き抜けて砲撃を通してみせた。

「半分減衰できるだけありがたいもんか」

ち、と小さく舌打ちをするとゼファーを片手に加速、瞬きの間になのはへと肉薄していく。

「Accelerator Alternative」

だがそれよりも早くなのはがアクセラレイターを発動する。

なのはが桜色のオーラを包んで姿を霞ませてセルジオの頭上に回り込んでストリー

マを構えた。

(クソ、速い……！)

思わず直撃を覚悟しかけたセルジオが槍を構えるが、突如なのは肩口がばち、と弾けたのだ。

無表情を貫いていたのはの表情が痛みに歪む。

「高——ッ」

その表情に思わず一瞬敵ということを忘れたセルジオが駆け寄ろうとして、その腹部へとストリーマが向けられる。

「しまっ——」

「 Divine Buster 」

ズ、と魔力砲が無防備なセルジオへと放たれる。

「デイト分断ッ！」

瞬間的に対応したセルジオが桜色の光線を分断で消滅、突き抜けてきたものも槍で払うものの、全てを防ぐことはできず、4割程がセルジオの腹を貫いた。

「——ぎっ」

痛みにはを噛みしめるが、直ぐに傷口が沸騰して逆再生のように魔力砲によるダメージを癒していく。

「 Shoot 」

腹を抑えて呻くセルジオへとなのはが追撃の速射弾を放つ。

「——加速機動」

雨の如く降り注ぐ弾丸をかわしながらセルジオはなのはの桜色の粒子が漏れ出すバリジャケットへと目を向ける。

普段よりも黒の色合いが強くなった服は所々桜色のラインが走っているものの、セルジオが頭に入れていた情報よりもその色が濃く、漏れ出しているエネルギーが多いように見えた。

（あの加速、もしかしてかなり無理した仕様なのか？ それこそ高町が使いこなせないレベルの）

思わず槍を握る力が増して、セルジオの顔が悔しげに歪む。

（長引くと高町が危険だ。解析で読みきれたわけじゃないが、それでも高町にかなりのダメージがあるのはわかる）

腹部が泡立つのを感じながら、意識を研ぎ澄ますように息をつく。

「これ以上アイツに怪我させてたまるか」

それに、とセルジオが心の中で続ける。

（長時間戦えないのは俺も同じだしな）

目線が今も肉を泡立たせながら傷口を修復する腹部へと向けられる。

傷口が熱を持つのはいつものことだ。

けれど、今はまるで傷口はそのまま炎のようで、その炎は体へともへ広がっていくようだった。

それと同時に今も必死に保っている意識がごりごりとヤスリに削られるかのように、端から屑となっていくような気がする。

使い過ぎれば、それこそ炎に焼かれて、削られきって『セルジオ・アウデイ』という存在がなくなってしまうそうだった。

(だからといって、途中でやめる気はないが)

俺は高町を助けにきたんだから、と呟いたセルジオが再び加速、向かってくる魔力弾を分断で消しとばしていく。

そのセルジオをなのはが瞬間的にチャージした砲撃によって狙って、引き金に指をかける。

「——短距離転移」

その間際、回り込んだセルジオがなのはの背後へと立った。

虚をつかれたなのはが急いで振り返ろうとするも、もう遅い。

「俺の相棒を返してもらおうぞ」

セルジオの目が一瞬白く光り、なのはの背中へと手をつけた。
トレース
システムデバイスド
 「解析——術式分断」

ずるり、と外からエネルギーを引きずり出して、セルジオの目が瞬時に背中へと触れた手を通してシステムの解析を始める。

（情報が、多い……！） それに、この強化状態はレイジングハートを通したのか。くそ、駄目だ時間が——」

「Accelerator Alternative」

なのはの体を包んだオーラがセルジオの接続を弾いて、瞬きの間にセルジオの死角へと回った。

「Dvine——」

「加速機動ッ！」

チャージが完了されるより早くセルジオが加速、なのはのデバイスバスターをかわした。

光線が頬をかすめるが少しの肉を削ぐにとどまる。

デバイスド
 「Accel Shooter」

桜のかけらと、白のかけらが青空を彩る。

それはさながら雪の中に、桜吹雪が混ざるようで、現実にはあり得るはずのない美しさで。

その中に時折毒々しい血飛沫が舞う。

その血の主、セルジオは沸き立つ思考を必死に押さえ込みながら、なのはの一举一動を逃さぬように目を凝らす。

（俺の今の分断じや高町の洗脳を解けない。かといってエクリップスを攻撃に転用できるほどこいつに使い慣れてない。分断するので精一杯だ）

なら、とセルジオが魔力弾を斬りはらいながら小さく呟く。

「高町を解放するのに必要なのはシステムを焼き切れるほどの飽和魔力攻撃」

なのはと戦うに当たってなのはとよく似た容姿の少女——シユテルといったか、にどうやればウィルスコードを破壊できるかは聞いてあった。

魔力攻撃。しかも、特別に硬いなのはをノックアウトできるほどの威力の魔力。

そんなもの、魔力などとうに底をついて、リンカーコアのダメージと引き換えに魔力を絞り出しているセルジオにあるはずがない。

——セルジオくん。

一瞬、声が聞こえて、瞬きよりも更に短い一瞬で、いつかの光景がよぎった。

「——いや、手は、ある」

おそらく分の良い賭けではない。

けれど、できると信じる。

ゼファーと、自分と、そしてなのはくれたものがあれば、きつとできる。

だって、あの日見た光はとても綺麗だったのだから。

あの光景を忘れることなんて絶対にない。

すう、とセルジオが静かに息を吸い込んで目を見開く。

瞳の赤の中に、翠が混じって、白い光が走った。

「アナライズ・シミュレート解析模倣————十七手」

過度な演算にゼファーのシステムが唸りを上げて、その負荷に頭が激しい痛みを訴え

た。それも纏めて赤い唾棄すべき思考とまとめてマルチタスクに押し込める。

——痛みは、後だ。

——自分のことは、後だ。

——今は高町を救うことが何よりも大切だ。

「加速、機動ッ！」

リンカーコアを燃やして、絞り出したエネルギーをエクリプスにて増幅、擬似的な加

速魔法として再現する。

なのはのストリーマから砲撃が放たれる。

分断で消しとばす。

消しきれなかったものが体を襲うが無視。

デイバインバスターの一部が左足を貫く。

もう避ける余裕はない。この程度ならエクリップで治癒ができる。

だから、進め。

「――届け」

速射弾が雨の如く降り注ぐ。

視覚には頼らない。解析と先読みを併用して高速で移動するなのはを追う。

「届け」

なのはとの距離が数メートルになり、そして最後に目前へと桜色の光線が走る。

デイバインバスター。なのはの代名詞。

「届けえええええええええええええええええッ！」

それを、ゼファアの行動予測によって見通していたセルジオが分断によって半分を解

いて、残りを斬りあげた槍で逸らしてみせる。

血まみれのセルジオの前に、なのはが、砲撃を撃ち終わって無防備な姿を晒した。

「——ぜ、アあッ！」

一步でなのはの懐へと潜り込んで槍を振り下ろした。

セルジオ最後の魔力を乗せた、彼による真正正銘最後の魔法。

音の速度に追いつかんと振るわれた槍。

けれど、それでもものには届かない。

ストーリーマを握らない右手、それが先ほどのようにセルジオの槍を受け止めようとする。

「Accelerator Alter——」

詠唱が紡がれ、なのはの負担を顧みない無茶な加速が実現する。

——そんな事、させてたまるか。

そして、セルジオはそんなことを、これ以上なのはの体を酷使することを許さない。

「Divide——Eclipse——」

全てのエネルギーが、分断され食われた。

がくん、となのはの魔力も、フォーミュラも纏めて一時的に機能を止める。

「——ッ」

なのはが息を飲む中セルジオが槍の軌道が無理やり変えて、ストーリーマの砲身を突き

刺す。

「少し、我慢しろー！」

そしてエクリップスのせいで上手く空を飛べていないなのはをストリーマごとビルへと投げつけた。

「——い、た」

水平に投げ捨てられたのはがビルの壁へと突き刺さり、ほんの一瞬その動きを縫い止めた。

「なあ、高町」

その姿を視界の端に捉えたセルジオが、しきりに訴えられる痛みを無視して、静かに口を開いた。

「俺さ、正直お前になら殺されてもいいかも、くらいには思ってる。それくらい、お前のことが好きだと思う」

ゼファアのシステムを駆動。いつか見た『あの魔法』を再生、解析して魔法式を起動。セルジオの前に、白い巨大な魔法陣が現れる。

「けど、今のお前は、違うだろ。お前の魔法は、誰かの為の『素敵な力』なんだろ。そのお前は、きつと俺の好きな高町じゃない」

この魔法に、セルジオ自身の魔力は必要ない。

何故なら彼の魔力は既に先の槍に使われたからだ。

故に、この魔法は彼のみで撃つものではない。

「だから、帰って来い、高町なのは」

集めるのはなのはとセルジオの戦いで撒き散らされた魔力。

分断能力によって普段より遥かに多くが大気へと溶けており、なのはほどの『収束』のセンスがなくとも、十分な魔力を集めることができる。

一人じゃ撃てなかった。

なのはがセルジオと戦ってくれたからこそ、撃てる一撃だ。

「行くぞ、俺の、俺たちの、全力全開」

それは、いつかセルジオが見惚れた、心を奪われた、初めて相棒となった日に見た光。心からずっと離れない桜色。

その名を――

「――スターライトオオオ、ブレイカーアアアアアッ！」

白の砲撃が放たれる。

混じり気のない、だからこそ美しい、そんな白の色。それを見た人は、きつと同じことを口にするだろう。

——まるで、スターライト星の光みたいだった、と。



ごろん、と槍を投げ捨てたセルジオが空を見上げて小さく息をつく。

「ギリギリ、なんとかなったか」

本当に危ない賭けだった。

魔力が途中で足りなくなる可能性も、受け損ねたなのはの弾丸でノックアウトする可能性も、なのはが思ったよりも早く復帰する可能性もあった。

けれど、その全てに勝って、今セルジオはここにいる。

じくじくと頭は痛み、赤い思考は恐ろしいほどの衝動で精神を蝕む。

「けど、こいつのためなら、うん、そんなに悪くない」

セルジオの目が空から自分の胸元ですうすうと寝息を立てる少女へと移る。

魔力ダメージでノックアウトしたなのを受け止めたのだが、そのタイミングで魔力が切れてしまった。

なんとか受け身とブレーキをとって地面に転がったが、どうや、怪我はないようだった。

「今度こそ助けられて、良かった。俺の手が届いて、良かった」

ぼんぼんと亜麻色の髪を軽く撫でるとむず痒そうに手を払われて、苦く笑う。

そして、そのまま払われた手を拳の形へと変えて空へと突き上げた。

「やったぞ、俺は」

澄み渡るような青い空の下で、セルジオが柔らかなく笑って目を閉じた。

終わり、始まる

廻る、廻る、歯車は廻る。

ぐるぐるぐるぐる、静かに廻る。

「――」

『それ』の目が赤く光った。

『それ』が、目覚めたという事は『彼』が破壊、もしくは致命的な失敗をしたという事である。

『彼』の終わりは、『彼』の終わりにあらず、次があるのだと『それ』はわかっていた。

故に、それは目醒める。

鋼の体を震わせながら、己の運命を見定めて。

それは体の調子を確認すると、隠蔽能力を作動させる。

それは他の個体と異なり、存在隠蔽能力に特化した性能を持っていた。

『彼』が望みを絶やさぬためにつけた機能である。

ナノマシンは存在し、理論的には『アクセラレイター』も可能だが、そのボディでは不可には耐えられないだろう。

けれど、それで問題ないのだ。

それは戦うための機体ではない。

いつかの明日へと希望をつなぐための個体だ。

『彼』の記憶を継いで、そして未来へと。

そうして、時計の針は動き出す。

廻る、廻る、廻る。

歯車が、軋みをあげて動き出す。

ぐるぐるぐるぐる、廻り出す。

——『彼』が最後に笑うために。

そうして、廻って、廻って、廻って——

「ああ、見つけましたよ。アレが、ご要望のもですなえ」

がきん、と歯車が外れた。

閃光が走り、その身体を悉く撃ち抜いた。

魔力ではない。フォーミュラでもない。

閃光は、それにとって完璧に未知のものだった。

「ふう、全くドクターも無理を言いますねえ。急にこんな辺鄙なところに行けだなんて。私のISがなかったら潜入すらできませんでしたよ」

「どうでもいいよ。早く、帰ろう。目当てはこれだよね」

「はあ、面白くないわねえ、デイエチちゃんは。そうよ、そうそう。それを持ち帰るのが今回のお役目」

「じゃあこれでおしまい。早く帰ろう。万が一、管理局が私たちを捕捉する可能性がないわけでもないんだから」

やれやれ、と艶かしい雰囲気を潜ませて女が大仰に肩を落とした。

それに対し、少女は淡々と、いかにも機械的に応対した。

廻って、回って、回り続けるはずの歯車は、そうして、定めから外された。

大きなようで、小さな変化。

そして、それを知る者は未だ一人だけ。

喝采を、送り続ける一人だけだった。



戦いは終わった。

マクスウエルは拘束され、管理局との争いは終わった。

まだ事件が集結して半日、これからどう転がるかはわからないが、キリエやユーリの罪はほとんどないようなものだとかクロノは言った。

流石にイリスも無罪扱い、というわけにはいかないが、本人も騙されて酷いことをしたということを理解し深く反省しているようだし、そこまで重い罪にはならないそうだ。

そこまで管理局は非道な組織じゃない、とはクロノの弁だ。

セルジオは臨時対策室のレティに軽く挨拶をすると、本局の廊下を一人で歩く。

青い制服ばかりの本局で茶色の制服は非常に目立つが、まあ仕方ないだろう。なにせ無理いって割って入ったのだし、このくらいは我慢すべきだ。

そうして『無傷』になったセルジオが軽く型を回す。

「結果だけ見ればマクスウェルが殆どの罪を負った形か」

利用していた『娘』の罪を自身が請け負うとは、ある意味親らしく、どこか皮肉にも感じる話だ。

「親、親、ね……」

やれやれとでも言いたげに頭をかいて、また歩き出して、金色の小さな少女と曲がり角でぶつかった。

「おっと」

「わ」

危うくぶつかりそうになったが、二人とも素早く身を捻りすれ違うようにして互いの事をかわしてみせる。

さらり、と長い金髪のテールが宙で踊る。

「テストロツサさん」

「あ、セルジオさん、レティさんたちへの報告はおしまいですか？」

「一応ね。まあクロノには聴取とか書類の関係でまた会わなきゃだけど、憂鬱だよ」

「——？ 兄さんと仲良いですよね、セルジオさん」

「いや、クロノじゃなくてな……。うん、そのなんだ」

「何がですか？」

「……リミエツタがいるだろう。あいつ、学生の頃から事あるごとにからかつてきてな、口で勝てた試しがない。だからちよつと苦手なんだよ」

げんなりした表情を浮かべるセルジオに、フェイトがくすつと笑みを漏らした。

「そういうテスタロッサさんは？　見たところ見舞いの帰りつてところみたいだが

……」

「あ、はい。なのはのところに行つてたんです」

「そうか。高町は元気だったか？」

「はい、お医者さんも特に洗脳の影響は見られないつて……」

そこまで話して、フェイトが不思議そうに首を傾げた。紅玉のような瞳がセルジオのことを見上げ、まん丸になる。

「そんなこと聞かつてことは、セルジオさんなのはそのところに行つてないんですか？」

「ん、まあ。さつきまで報告とかで忙しかったし、でも元気つてことが聞ければ……」

「ダメですよ！　ちゃんとなのはのところに行つてあげてください！」

「いや、俺が行つて何か変わるわけじゃ……」

「心配なんでしょう、なのは？」

「そりゃ、心配じゃないとは言わんが」

「じゃあなのはのお見舞い行ってあげてください。きつと、喜びますから」

「そうだろうか？」

「きつと喜びますよ！」

イマイチピンと来ないのか煮え切らない返答のセルジオに、きつとですよ！ 最後

に言い残したフェイトがぱたと駆けていく。

その背中を見送りながら、フェイトがやってきた方向、つまりなのはの病室へと目を向ける。

彼としては、なのはのことは大切だとは分かったものの、だからといって大きく認識が変わるわけでもない。

なのはは部下で、相棒。

セルジオにとってその認識はそうそう変わらないし、なのはにとってもそうだと思ってる。

なのでわざわざ自分がすぐさま見舞いに行かなくても大して変わりはないと思っている。

「でも……まで言われて行かないのも変か」

なのでなのはのところに行かなくていいのはそんなにおかしいことではないはず。あくまでも上司として部下をの様子を見に行くだけ。

なんとなく胸元の懐中時計に手を触れる。金属の固い感触は触ってるだけで、少し乱れ始めた意識を正してくれるような気がした。

「つと、こゝこだな」

本局の医務室の並びの一つの病室の前で足を止める。

セルジオが思わず調べてしまった情報に誤りがなければ、気を失ったなのははこの病室で寝かされているはずだった。

思わず息を呑んで、あれ、とまたもや首を傾げた。

「なんで緊張してるんだ、俺」

少しばかり早くなっている鼓動に首を傾げながらも、ひとまず目の前の扉に軽くノック。コンコン、という乾いた音が響くと、扉越しに「はい」というくぐもった声が聞こえる。

「えと、俺だ、セルジオだ。その、今いいか」

「え、せ、セルジオくん?!　　ちよ、ちよつと待つて!」

少しだけ扉を開いて声をかけると、中から何やらばたばたと慌ただしい音が聞こえてくる。

「あー、入っていいか?」

「だ、だめ!　　今のなのは髪ボサボサだし、そのだめ!」

「いや、そのボサボサの髪のお前をここまで連れてきたのは俺だからな？」
「更」

今更だ、今

「で、でもお」

「ほら、開けるからな」

「せ、せめて髪くらいは整えさせて——」

なのはの言葉を最後まで待たずに扉に手をかけると、するりと滑るように扉が開いて、中の様子をセルジオの瞳に映し出した。

「あう……」

白いリリウムの床の清潔感のある病室。そのさまじまな計器に囲まれたベットの真ん中で、なのはが掛け布団で顔を隠すようにしてセルジオを覗き込んでいる。

「なんだ全然普通じゃ無いか」

「なのはから見たらボサボサだもん」

「そうか？」

「そうだよ」

「ふむ、俺から見れば充分……」

「可愛いと思うぞ、と言葉を続けようとして言葉が詰まった。

（あれ……？）

いつもならさらりと言えていたはずの軽口が今は喉でつつかえたようになかなか出てこようとしない。そればかりかなのは顔を見ただけで、軽く胸の鼓動が早くなるような感覚すらする。

「セルジオくん？」

「ん、あ、いや、その、椅子。座っていいか」

「あ、うん」

急に黙り込んだセルジオを訝しむようになのはに覗き込まれたセルジオが逃げるように視線を彷徨わせて、ベットの側の椅子へと目をつける。

丸椅子へと腰掛けると、自身の気持ちいを落ち着かせるために小さく息を吐く。

新鮮な酸素を頭へと回すと茹っていた頭がいくらかマシになって、いつものように思考が回り始める。

「それで高町、体の調子はどうだ？　どこか悪かったりは」

「それは大丈夫」

「……本当だろうか？　お前の大丈夫はあんまり頼りにならないとテストロッサさん

が……」

「それをセルジオくんには言われたくないですつ。ちゃんとお医者さんも問題ないつて言われたもん」

「……そうか、なら良かった」

「もう、心配性だなあ」

ゆるりと安心したように頬を緩めるセルジオに、なのはが困ったように笑みを返す。そのなんでもない笑顔にセルジオの胸が軽く跳ねる。

(なんだ、これ？ エクリプスの副作用か何かか？)

思わず胸を手で抑えるが、懐中時計越しに感じる鼓動は運動したわけでもないのに僅かに早くなっていた。

「そういえば、セルジオくん」

「ん？」

胸を抑えて小首をかしげるセルジオに、なのはから声がかかる。

「なんでここにいるの？ お仕事、良かったの？」

「あ、それは……」

「なのはに通信して来た時『俺は来れない』って何度も言ってたよね？ 何か、こつちに来なきやいけないことでもあった？」

「それは、その、なんだっていいだろう。お前には関係ない」

言葉に詰まったセルジオがぶつきらぼうに言つて、目を逸らそうとすると、その顔をなのはの小さな手が留めた。

無理やり合わせられたなのは水晶のような薄紫の瞳は不満げな色合いに染まっている。

「ねえ、なのはとセルジオくんは何？」

「何って、そんなのいう必要……」

「なあに」

「……相棒、です」

「だよね。なら、関係なくなんかないもん。ちゃんと教えてよ、セルジオくん」

「そ、れは……」

「セルジオくん」

ぶくとなのはが頬を膨らませて、半眼でセルジオの翠の瞳をじとつと睨んだ。その圧力に目を逸らそうとするが、なのはの手で顔を挟み込まれているせいで思うように動かしすることもできない。

（話せって、言うのか。高町に）

なのはに關係ない話ではない、とは分かっているものの、だからといって自分が地球に來た理由を話せと言うのか。

よりにもよって、『高町なのは』に。

「セルジオくん」

なのはがゆっくりと名前を呼ぶ。一字一字、しつかりと名前を通して自身の気持ち
伝えようとするかのように。

「だめ、かな？」

そしてなのはが少しだけ不安そうに覗き込んできて、ついにセルジオが折れた。

「心配、だったんだ。上司とかじゃなくて、高町の事が、心配だった」

「……なのはのことが？」

「ああ」

「そ、それだけで、地球に来たの？」

「……仕方ないだろ、大切だったんだよ、高町の事」

「え、ええっ?!」

最後の方は不貞腐れるようなセルジオの言葉になのはの顔が赤くなる。

挟まれていたセルジオの顔が解放される。

「え、えと、その、それはありがとう……でいいのかな？」

「……別に、感謝されるためにやったわけじゃない」

「そ、そっか」

頬を朱に染めたなのはが目を床に落としていじいじと指を付き合わせた。そんな

のはを視界の端に捉えながらセルジオも気恥ずかしげに頬を人差し指でかく。

しばらく二人の間に無言の時間が広がる。

セルジオは早くなる鼓動を必死で抑えながらそらしていた目線を一瞬なのはの方へと向けて、ちょうど同じように顔を上げていたなのはと視線がぶつかり、弾かれるように逸らす。

そんなことを三度ほど繰り返して、なのはの方がポツリと呟いた言葉によつてその沈黙が破られる。

「じゃあ、夢の中で聞こえたセルジオくんの言葉、なのはの聞き間違えとかじゃないんだ」

ぼしより、とつぶやかれた言葉。

普通なら聞こえない声量だが、今二人は無言であり、病室というのは得てして静かなものだ。

だから、聞こえた。聞こえてしまう。

「な、え、おま、は？　まさか、俺と戦った時の聞こえて……！」

「い、いちおう。ぜんぶ、聞こえたわけじゃないけど、だいたい覚えてる、ような」

「……………嘘だろ」

これには流石にセルジオの顔も赤くなる。

痛みとエクリプスの疲労のせいでもやたら思考が熱っぽく、相当小つ恥ずかしい台詞を宣っていたが、アレも全て聞かれたというのか。

いつもは何を考えているかよくわからない、と言われることもあるセルジオに浮かんだわかりやすい羞恥の赤。

「あ、あのさ、セルジオくん」

そんな、セルジオに、未だ赤い顔のままなのはが意を決したように口を開く。

「セルジオくんって、もしかして」

そうして、なのはの口から続きの言葉が——

「おわっ!」

「にゃっ!」

出る前に、甲高い電子音がなのはの言葉を遮った。

そろり、と二人の視線が互いの目から、セルジオの手首の電子音を響かせて喧しく存在を主張する銀色のブレスレットへと移る。

「……出てもっ?」

「あ、うん」

予期せぬ乱入者に落ち着きを取り戻した二人がフラットに対応する。

その事は果たしてセルジオにとってよかったのか悪かったのか。そのことを判断す

る術はない。

なにせなのは何を言おうとしたかなど彼女にしかわかりはしないのだから。

「あれ、レジアスさん？」

ホロウインドウを出現させ、その表示させた名前に眉を寄せた。

(もしかして『戦闘機人』の引き継ぎのことか?)

こほん、と軽く咳払いをしたセルジオが表情を引き締めて通信を繋ぐと、半透明の液晶の向こうにふてぶてしい態度の男性を映し出した。

「レジアスさん一体何でしょうか?　引き継ぎのデータなら……」

『セルジオ』

「ああ、もしかして俺がここにいることでしょうか。一応許可はとりましたが、確かに褒められた行為ではないですね、罰則ならいかようにも——」

『セルジオ、聞け』

一方的にまくしたてるように話していたセルジオの言葉を、レジアスの短い言葉が差し止めた。

「レジアス、さん……?」

モニターの向こうにいる男の名前を、セルジオが呼ぶ。

まるで、何かに詫びるように目を閉じて、ただ静かに。

『お前に、三課の分隊長の『セルジオ・アウデイ』に言わなければならないことがある』

そうして歯車は

走る、走る、走る。

何故走るかなど言うまでもない。

そんなこと、わざわざ言うことでもない。

本局の廊下をひた走る。

青い制服の本局の局員に何事かという怪訝な目を向けられたがそんなことを気にする様子もなく、セルジオは走り続ける。

転移ポートへと辿り着くと逸る気持ちを抑えて書類にチェックを入れて、ミッドチルダの駅へと転移。

そして、今度は連絡のあった場所へと、先端医療研究所へと、レジアスに言われた病院を目指す。

じとりと汗が滲む。

(魔力が使えれば身体強化でも何でも使うのに……！)

市街地での無闇な魔法使用が認められていけないことも今のセルジオの頭にはない。

ただ、今彼の頭を占拠するのは急がなければならないということだけ。

「くそ、何で俺は……」

口から漏れるのはそんな苦しい眩暈。

体が火照り、滲んだ汗によってシャツが背中にへばりつく感覚が気持ち悪く、茶色のジャケットを脱いで脇で抱えた。

顔をよぎるのは自分を送り出してくれた人たちの顔。

姉のようなクイント、メガーヌ。

喧しくも大切な先輩たちである三課のメンバー。

そして、師匠で、義父のゼスト。

そんな三課の仲間たちの顔を思い浮かべながらぼやけた意識で病院を指指して走り続けて、ついに目当ての場所へと辿り着いた。

「アウデイさん、何の——」

「三課は！　ここにいますはずだ！」

「……それでしたら、四階の」

「わかった。四階だな」

ロビーに入つてカウンターへと食らいつくようにして問いを投げて、顔見知りの職員
の言葉を最後まで聞かずエレベーターへと向かう。

ボタンを押して大きな鉄の扉の前でエレベーターの前で待つが、タイミングが悪かつ
たのか三つあるものの全てが上階からなかなか降りて来ようとしなない。

「くそっ！」

思わず口から汚い罵りが漏れた。

後数分待てば来るのだろうかそれがそれすらもどかしく、エレベーターを使うのをやめて
階段を駆け上がっていく。

いつのまにか息が荒い。

既に軽く三十分は走り続けだし、その間休憩どころか満足に呼吸したのかさえ記憶が
怪しい。

それでも、あと少しで目的の場所だ。

そこに行つて、確認しなければ、それが自分の責任だ。

全てを三課の仲間に押し付けてなのは元へ向かった自分の。

四階までの階段を一気に駆け上つてその中で見知った名前の書かれた札がさがる病
室の扉を大きく開け放った。

そして、目の前に真つ白の光景が広がった。

それはどこまでも白く、清潔感を漂わせ、まるで作り物めいたような白さ。

(え——)

その『白』が、困惑するセルジオの目の前に広がって、そして本当に視界が真つ白に染め上げてみせる。

「は、もがっ?!」

べしやり、粘着質な音がして、少しばかりの圧力とともにセルジオの顔面が何やら柔らかなものに包まれた。

「よし、ぶっ放せ」

「イエッサー」

何か投げられたのだ、と思った瞬間、セルジオの体が天高く舞い上がった。

(ああ、なんか昔にも似たような事された気がする)

突如視界を白で覆われているうちに、腹部を凄まじい衝撃が襲う。いつそ美しいとす

ら言える軌跡を描いてセルジオの体が吹き飛んで、そして数秒後に星の重力に従って落下、病院のリノリウムの床を転がる。

「い、もはあつ」

三回転ほどすると頭を強かに打ち付けながら体が止まり、ずるりと顔から柔らかいものが滑り落ちた。

「ぐ、ぎ……、なんだこれ……」

頭の痛みにちよびつと涙を流しそうになっていると口の中に白いものの一部が入ってくる。

「これ、クリームか？」

とろりとしていて、甘い。あまりセルジオ自身が買ったたりすることは無いが、それは彼の記憶の中の『生クリーム』と呼ばれるものの味に似ている気がした。

（いや、何が起こった？）

あまりの急展開に思考がついていかない。とりあえず目を開けようとするが、生クリームがべつたりと顔を覆うせいで満足に目すら開けられない。

そんなセルジオの醜態を尻目に開け放った病室から楽しい声が響いた。

「わはは、やはり引つかかりおったワイ。がはは、ナイスアシストメガネ」

「くくく、この程度エリアサーチを使えば訳ない。これは得意なのさ、ボク」

「にしてもパイなんぞよく持ち込めたわね。看護師さんになんて言ったの」

「そこは転移魔法でチヨチヨいと、ね。何、バレなきや罪じやねえよ」

「それに質量兵器スレスレのクラツカーの在庫処分もできた！　まあ紙吹雪ねえから

半ば火薬だけの空気砲みたいなもんだが」

「おい、下手すりやセルジオでも死んでたぞ、それ」

「生きてたんだしいいさ。クイントさんも昔そう言ってた」

「うむ、確かにそうだな」

「「ガツハツハツハツハ」」

「あらあら、手酷くやられたわね、ちよーつと待つてなさい。ギンガー、セルジオくんの顔拭ってあげてー」

「う、うん、わ、わかった！　不肖ギンガ、拭わせてもらいます」

とたとたと小さな足音が聞こえて真つ白になった顔が布で拭われていく。

「え、えとお加減どうでしょうか」

「ちよつと痛い、少し力抜いてくれると助かる。目に刺さる」

「こうですか？」

「ああ、助かる」

（「し」しとギンガが手を動かすと白いの粘着質なものが（クリーム）がなくなり、よ

うやく目があけられるようになる。

「じよ、上手にできましたか？」

「気持ちよかつたよ、ありがとさん」

「は、はい、えへへ」

手についた白いもの生クリームだつて言つてるでしょ！を口に運んでいたギンガの頭を軽く撫でて、セルジオはじとりと病室の中を睨んだ。

「これは、何ですか」

「何つて、なあ？」

「そりや、お前のなのはチャンの栄えある門出を祝したパイ投げ祭りだ」

「費用はメガネ持ちのな」

「聞いてないんだけどボクウ!? 言い出したのはゴリラだろおっ?!」

「ゴリラは今度嫁さんの誕生日迫ってるから勘弁してほしいワイ」

「ゴリラの嫁さん怖いもんなあ」

「——大怪我したつていうから来てみれば」

セルジオがぎゃいぎゃいと騒ぎ立てている三課の面子へにつこりと笑つてみせる。

「ふざけんなよてめえらあつ！」

「ぎゃー、セルジオがキレた！」

「珍しい！　珍しいぞ！　コイツが人に怒るのは珍しい！」

「今日という今日はキレました！　病人でも知った事じゃねえぞ！」

まだ顔の端にクリームをつけたセルジオが包帯を巻いたまま騒ぐ三課の面子を追いかける。

「もう、本当に仕方の無い子たちね」

「それけしかけたのは貴方でしょ、クイント」

「ありやバレた？」

「バレないはずないでしょ、もう」

そんな弟分の様子を見ながら、ベットに横たわっていたクイントとメガーヌが、楽しそうに笑みをかわしていた。

「どうもです、ゼストさん」

「セルジオか……何故お前の服はそんなに汚れている」

「聞かないでください。下らないことです」

場所は変わってゼストの病室。

流石に三課の隊長であるゼストは他の三課の面々と違って個室が与えられている。

ひとまずクイントやメガーンの無事を確認したのでセルジオは一つ上の階にあるゼストの元にやってきたのだ。

「レジアスさんから連絡が来ました。今回の、『戦闘機人』のことです」

「……そうか、まあ座れ。長くなるかもしれん」

ゼストに促されてセルジオがベットの側にあつた椅子に腰掛けると、目の前の男の姿に表情を濁らせる。

「あの、ゼストさん、その怪我……」

「ああこれか、少し、やらかしてしまつてな」

そう言うゼストは頭に包帯をまいて、利き腕である右腕を吊っており、病院着に隠された胸元にもやはりうっすらと血の滲んだ包帯が覗いていた。

「それは、例の……」

「ああ、AMF付きのガジェットだ。分断されてやられかけたが、俺やクイントがベルカ

式だったのが幸いしたな。それに、メガーヌの召喚獣も」

「AMF付きのガジェット、ですか。報告は聞きましたが、まさか本当にあるとは」

「俺も驚きだ。AMF装置の小型化もだが、何よりガジェットの数だ。目視できるだけでも、五十は超えていた」

「もう量産はできてる、と考えるのが普通ですかね」

腕を組んでセルジオが深く唸った。

「まあその事は後で考えるところでしょう。今は、今回の事だ」

『戦闘機人』のプラントと、『ドクター』、ですか」

「ごくりとセルジオが生唾を飲んで居住まいを正すと、ベットで半身を起こすゼストが目を閉じてゆっくりと話し始める。

「結論から言うと、今回の検挙は『成功』であり、『失敗』であつたと言える」

「成功であり、失敗？」

ゼストが深く頷く。

「まず俺たちは情報のほとんど得られなかった研究所に赴き、そして全員が生還して、生産プラントを潰すことができた。情報もいくらかは持ち帰ることができた」

だが、とゼストが言葉を続ける。

「肝心の『ドクター』も、それどころか『戦闘機人』も一人もいなかつた。いや、いた形

跡はあったが、殆ど痕跡を消して引き払っていた」

「それが、今回の『成功』と『失敗』って訳ですか」

「簡単に言えばな」

そう言つてゼストはまた目を伏せる。

その表情が苦々しく、なにかを耐え忍ぶようなもので固定されているのはきつと傷の痛みだけではあるまい。

「ゼストさん、俺のところレジアスさんから連絡が入りました」

「———そうか、あいつはなんと」

「戦闘機人の件、然るべき処分を覚悟しておくと、ただそれだけでした」

「そう、か」

セルジオの言葉を聞いてゼストは病室の窓から覗くミッドチルダの景色へと目を向けて、小さく、セルジオの耳にギリギリ届くような小さな嘆息を漏らした。

その横顔からは何かの感情を伺い知ることとはできない。

けれど、セルジオは今のゼストはひどく疲れたような、そして少しだけ悲しそうな表情を浮かべているような気がした。

しばらくの間ゼストは外を見つめていたが、やがて軽く笑みをこぼすと隣の少年へと目を移した。

「こちらはもういいだろう。そろそろお前の話をしよう」

「俺、ですか？」

「ああ、セルジオと高町、と言い換えてもいいかもしれないがな。どうだった？」

「どうだった、と言われても。一言では言えないので後で報告書を出します。それでいいでしょうか？」

「……………お前は、変なところに律儀だな」

「え？」

糞真面目な対応に頭を抱えるゼスト。

「こういうところがクイントらに「なんかセルジオとゼストは似てる」と言われる所以だということとは二人は知らない。

根本的なところで頭が硬いのだ、この義理の親子は。

「なら一言でいい、正直に答えろ」

「はあ」

「今回、お前はなぜ高町の元へ行った、セルジオ」

「――」

「それだけ、答えてくれ。それさえ聞ければ俺は充分だ」

ゼストの暁の色の瞳がセルジオを捉えて、二人の間に何物にも侵されることのない静

謚が生まれる。

「俺が、あいつの所に行ったのは」

けれどそれも一瞬のこと、セルジオが自分の中に生まれた気持ちを、ずっとそこにあつたものを口にした。

「高町の事が大切だからです。だから、助けになつてやりたかった」

澄んだ瞳で、淀みなくその言葉を口にして、セルジオがゼストと向かい合つた。

「いつのまにか、大きくなるもんだな」

「え？」

「なんでもないさ、セルジオ」

「うわ、ちよつとゼストさん」

不思議そうに見つめてくる少年をゼストが荒つぽく撫でた。

くしゃやくしゃと淡い金髪が乱雑にかき混ぜられて、ぐいぐいと無理やり頭が下へと押し込まれた。

「よくやったセルジオ。お前の事を誇りに思うぞ」

そして、セルジオに見えない角度でゼストの顔が緩む。

その顔に浮かんだ色はひどく嬉しそうで、それはまるで出来の悪い生徒を見るように可愛らしい弟子を見るように。

大切な、自身の息子を見るようで。

沈みかけていた空の暁が、そんな二人をゆるりと包んだ。

ぐるり、ぐるりと歯車は廻る。

「『エルトリア式フォーミュラ』システムか。非常に興味深いね」
男が新しい拠点の調子確かめるように施設の中を歩き回る。
多くのコンピュータ。

戦闘機人を作る際に用いる遺伝子と、生産プラント。

ガジェット製作のための素材と、その製造ライン。

どれも以前よりは小規模のものとなったが、それもしばらくすれば以前の規模に拡大

できるだろう。

「未知の部分が多い代物だ、まったく。いや、実に面白い」

瘦躯を震わせながら男は紫の長髪を掻き上げる。髪の間から垣間見える瞳にはどこまでも愉しげな金の光が宿っている。

「ドクター、一つご質問が」

「何だね」

「なぜ、あの研究所を放棄したのですか？　いえ、そもそも何故戦闘機人を出さなかつ

たのですか？　いくら次の拠点があるとは言え、あそこには検挙されればまずいデータもいくつかりました」

「ふむ、そうだね」

そんな男——スカリエッティの隣で付き従っていたウーノが質問を投げかけた。

スカリエッティは一度は許可した戦闘機人の出撃をとめ、あろうことか研究所を捨てるという逃げの一手すら取った。

それは合理的にものを考えるウーノからすれば理解できないことで、スカリエッティに心酔している彼女だからこそ、『理解したい』と思う、不可解さだった。

ウーノの質問に、スカリエッティの唇が半月を描いた。

「く、くく、やはりいいなあ、『彼』から始まる変化はとてもいい」

「それはどういう意味でしょうか？」

「いや、何も無い。君の質問に答えよう、ウーノ」

スカリエツティは楽しげに小さな笑い声を漏らすと、幼子が自らの成果を自慢するよ
うに、声高々に言い放つ。

「その方が、面白いからだ」

「面白い、ですか？」

「そうとも。『彼』とその周囲の存在は私に取って面白い。それに、試したいこともあつ
たんだ」

スカリエツティが笑う、楽しげに、愉しげに。

「故に今は満足しよう。私と、彼らの欲望に」

おお喝采を、運命の歯車は廻るのだ。

盲目の、無知な生贄は階段を登るのだ。

その身を毒へと変えて尚、衰えぬモノを抱いて前へと進むのだ。

それに応対するがは一人。

同じく無限の欲望を持つ存在だ。

それは鏡 Reflection 越しを見て、嗤うのだ。

愉しげに、どこまで悦びに満ちた声を上げるのだ。

これにて、一つの物語は幕を下ろす。

けれど、それは『彼ら』の物語は閉幕にあらず、むしろここからが開幕の時間である。

おお、おお、喝采を。

静かに、静かに、歯車は廻る。

唯、静かに。

幕間

「……………またか」

ミッドチルダにあるアパートでティーダが紙を睨んで、そしてがつくしと肩を落とし
た。

「あれ、兄さん、どうかしたの？」

「ああ、ティアナか。何も無いよ、ちよつと疲れてるだけ」

「そっか」

「それよりこんな時間にどうしたんだ？　もう夜遅いし、早く寝たほうがいいぞ」

「ちよつと喉が渴いただけよ。すぐに寝るわ」

「そうしてくれ。可愛いティアナの将来の美しさが損なわれる、なんて世界の損失だからね」

「……………またそういうこと言う」

「あはは、嘘じゃないさ。ティアナは僕の自慢の妹だよ」

「はいはい」

ティードダの軽口をティアナは適当にあしらうが、その頬は明らかに緩んでおりまんざらでもない事が見て取れる。

けれど、ティードダの手の中の書類を見つけるとふ、と悲しげに曇った。

「それ、もしかして執務官試験？」

「まあ、バレちゃったら仕方ないか。そ、この前受けた奴の筆記の結果。不合格だつてさ」

「そっか」

「いや、参ったな。流石にクロノみたいには上手くいかないな」

あえてティアナが寝る時を見計らつて書類を確認するぐらいだ、不合格だった場合ティアナに教えるつもりはなかったのだろう。

それは、あまり合格している気がしなかったという理由もあったが、本当の理由は別にあつた。

軽く笑うティードダの足元あたりを見つめてティアナがポツリと呟いた。

「ねえ、兄さん、私全寮制の学校に行くかうか？」

「………何で？」

「私の、せいだから。兄さんが筆記で落ちちゃうのは私のお世話してるせいだもん。兄

さんは私がいなければ勉強だつてできて、それで——」

俯くティアナをティーダが優しく抱きしめて、回した腕で軽く頭を撫でた。

「ティアナ」

「兄、さん？」

「兄さんはティアナのことを負担に思ったことなんてない。いつだつて、ティアナがいるから頑張れてる」

「——」

「だから、あんまり兄さんを寂しがらせることをら言わないでほしいな。兄さん、ティアナがいないと頑張れそうにないからさ。我儘な兄さんだけど、許してくれるかな？」

「……うん」

小さな返事によし、とティーダが満足そうに笑つてみせる。

「それに、兄さんだつてまだ諦めちゃいないよ。あいつに比べれば、うん、俺もまだ頑張れる」

「あいつつて、前話してた魔力が低いのにAA取った人のこと？」

「そうそう。あいつみてたらまだ俺も頑張らなきゃなー、つて思うんだ」

「ふーん、ちよつとあつてみたいかも……」

「……まあ機会があればね。そんな事よりティアナ、実はケーキ買つてきたんだけど食

べないか？　本当は明日の楽しみだったけど、たまには悪いことしちやおうか」

「え、いいの？」

「いいとも。今日は俺も少しティアナと夜更かしたい気分なんだ」

「ふふ、なにそれ。仕方ないから付き合っただけ」

「仕方ない、と言いつつも自然と上がっている語調にティーダは気づきつつも、それをあえて指摘しない。

優しさからではない。そんな事よりも、彼の心は一つの感情に満たされていたからだ。

（ティアナをセルジオに会わせるわけにはいかない……！　初恋キラーのあいっただけには……！）

親友よりも大切な妹の初恋がティーダにはあった。

「えつくし！　おかしいな、生まれてから風邪をひいたことはないんだけど……」

「おにーさん、だいじょうぶですか？」

「あ、セルジオさん、ハンカチです！」

「ああありがとな、ギンガちゃん」



時は流れて夏休みも半ば。

なのもも退院し、仕事の合間にはやての家で模擬戦をこなす日々。

「ふー、今日は私の勝ちだね、フェイトちゃん」

「む、次の模擬戦は負けないもん」

「あはは、激しくなりそうやね」

機嫌良さそうにシミユレーションルームの観戦席に向かうのはの後を少し不満そうなフェイトが追った。

「はい、お茶」

「ありがとう、はやてちゃん」

そんな二人を観戦席から眺めていたはやてが飲み物を渡しながら迎えた。

二人が受け取ったペットボトルの中のお茶を美味しそうに飲むのを見ながら、はやてが腕を組んだ。

「にしても、なのはちゃん最近いい感じに気合い入っとるなあ」

「そうかな？」

「せやでー。なんて言うか、程よく覚悟決まっとる？　　みたいなの？」

「ほ、程よく？」

「あ、それはなんとなくわかるかも。なんか前みたいに肩に力が入ってないって言うのかな。見ててちょっと安心できるかも」

「あはは、そんな前は安心できなかったみたいなの言い方……」

「いや前はかなりびびっとったで。この子風船みたいにどつか飛んでいきそうやなーって」

「ふ、風船」

「この前の事件の前は、喧嘩っ早いチワワみたいなイメージやったからな」

「ひ、ひどい……、そんな風に思われてたなんてなの……私ちよつとびつくりだよ」

「それ」

「へ？」

びしっとはやてがなのは指差した。

「なのはちゃん最近一人称変えたやろ」

「そう言えばそうだね。なにか心境の変化でもあった？」

「そ、それは……」

フェイトの質問になのはが言い淀むと、ほほう？ とはやてが目を光らせながらに

じり寄った。

「その態度、さては件の『セルジオ』さん関連やな。ほら、吐くんや、私ら親友やろ？」

「え、えと、流石に親友でもプライバシーは守っていききたいというか……」

「なんやケチやなあ。私らもう肌許し合ったなやかやんか」

「言い方、言い方！ ただお風呂一緒に入っただけだと思っの！」

「まあほら痛いの一瞬だけやから、へへへ」

「な、なんの話?! ふえ、フェイトちゃん……」

にひひ、と笑いながら手をわきわきと動かすはやてに、なのはが後ずさるが椅子の端まで追い詰められてしまう。

なのでなのはが一番の親友であるフェイトに助けを求める。

「え、えと、私もなのはが良ければ聞きたいな。ちよつと気になるかも」

だが、助けは来なかった。

フェイトは少し気恥ずかしそうに、けれど興味を隠しきれない様子でなのを見つめてくる。

小学生女子、三度の飯よりも男女の惚れた腫れたの話が好みなのである。

「わかったよ、お話しするからちよつと待つてよ……」

なのはががつくりと肩を落とす。

数は力である。この場でそれはつまりフェイトとはやてであつて、か弱き少数であるなのはに抗う術はなかつた。

(もしここにアリサちゃんかすずかちゃんでもいれば……いや、あの二人はさらに面白がりそうな気がする)

どつちにしろ未来なんてなかつた。

一度なのはがお茶を飲んで気持ちを落ち着けると訥々と話し始める。

「この前のイリスさんの事で、なのは洗脳されちゃつて、その時つてなんか意識がふわふわしててずっと夢を見てる感じだったんだ」

「ふむふむ」

「その時にうん、ちよつと自分の事を考える機会があつてね。それでちよつと色々考えて、そしたらさ、声が聞こえたんだ」

「声？」

「そ、なんだか熱っぽくてさ、あんまり覚えてないんだけど、その声だけはしっかりと届いてきたんだ」

なのはが手の中でペットボトルを弄びながら遠くを見つめる。

「セルジオくんが、私の——なのはのこと『大切』って言ったのが聞こえたの」

まあその後もかなり好きだとか、殺されていいとかも聞こえてきたがそれはわざわざ口にしない。

なのはの夢のことを話して、今のなのはのこと心配して、それで、彼女が大切だと、セルジオはそう言った。

「私ね、セルジオくんのこと尊敬してて、大切だなあって思ってた、それで怪我とかして帰ってくるのが悲しいなって思ってたんだけど、セルジオくんが『大切』って言われて、自分に置き換えて見て、思ったんだ」

シユミレータの中の空は目に痛いほどの青色で、その色があの日、セルジオと戦った日の空と重なる。

「『ああ、今のなのはが怪我したら悲しむ人がいるなあ』って」

「なのは……」

「それに気づいたら無理できないなあって思ったんだ」

そしてはにかんだようになのはがはやとフェイトへと向き直った。

「だから、人を助けるのも、自分を守るのも、私の夢のためには大切になって、今は思うんだ」

「……そやな、そういう変化は嬉しく思うで」

「私も。今のなのはの考え方、凄く好きだよ」

「そう、かな？」

フエイトとはやてからの言葉に少し顔を赤くしてなのはが照れたように笑う。

「んで？　なんで自分のこと『私』言うことにしたん？　それも『セルジオ』さんが

らみ？」

「それは、何といますか……」

「なあに、なのは？」

「えっと、それは何というか、セルジオくんはちよつと危ないかなあ、と想つて。でも、

夢とかは一緒に頑張つて、それで支えてあげたいなあと思つて、そのなのはつて言

うのはちよつと子供っぽいかなあとか……」

「——？」

（ははーん、わかつたわ）

最後の方はごによごによと言ひ淀んだなのはの態度にはやてがあたりをつける。

つまりなのは『セルジオと対等になりたいのだ』。

守る対象でも、年下の女の子でもなく、一緒に道を歩む相手として背中を預けてほしいのだろう。

(そのために、取り敢えず一人称を『私』に変えて見た、と。可愛いことするもんやなあ)
 以前から『なのは』と『私』を使い分けていた彼女だが、どうやらこれを機に変えてしまうことにしたらしい。

なんとなく察したはやてが楽しげににやにやと笑う。

因みにフェイトは全くわかってない。

「ハ、この話はおしまい！」

はやての下世話な笑みに耐えかねたようになのはは強引に話を打ち切ると手の中のペットボトルをかぶかぶと飲み始める。

「ねえ、はやてさっきのどう言う意味？」

「んー、なんちゆうか、フェイトちゃんに説明するのは難しいけど、なのはちゃんもお年頃で、なりたい自分があるんじゃないかな」

「(??)」

「(ま、簡単に言うと、なのはちゃんは『セルジオ』さんと私らと違う関係を築いてるってことやな)」

「(それは、なのはが頼れる人、って事?)」

「たぶんそんな感じやろなあ」

「(やつぱり、なのはにとつて『友達』は、背中を預ける相手じゃないのかな)」

「(さあ、どうやらなあ。私からはなんとも)」

フェイトの質問にはやては言葉を濁す。

もちろんなのはがフェイトとはやてを信頼していかないわけがない。背中を預けられないわけがない。

けれど、それでも二人は一度なのはに『助けられた』側の人間である。

なのはの中に二人を『助ける相手』として見る思いを完璧に払拭する事は難しいだろう。もつと時間が経つて、それこそ十年以上経てば同僚として信頼される事はあつても、今すぐにその認識を覆す事はできないだろう。

「(まあ急ぐことでもあらへんから……つてフェイトちゃん?)」

「ねえ、なのはつてやつぱりセルジオさんのこと大切なの?」

「ふえつ?! な、なななにやに?」

「フェイトちゃん……!! それも口に出して言つたらあかんやつー!」

「え? そうなの?」

「前もこんなんあつたやんな! ほんま、フェイトちゃん悪気ないからタチ悪いで!」

「だって、なのはがセルジオさんのこと好きで、大切に思つてるなら、言葉にするべき

じゃないの？　だつて——」

「いや、だつてセルジオくんは相棒で、えつとえつとえつと……はにや」

「やめたげて！　フェイトちゃんこういうのはあんまり触っちゃ駄目なんや！　友

達なら察してやらなあかん！」

「あ、そうなんだ。なら、友達で思い出したけど、セルジオさんつてなのはのこと『高町』つて呼ぶけど、それつてなのは的にはどうなの？」

「だからあかんつてえっ?!　　追撃やめたげて、ほんま！」

オーバーヒートしたかのようにくったりとしたなのは腕に抱えてはやてが怒涛のツツコミを入れた。

だが、当のフェイトは「訳がわからないよ」とでもいいたげに首をかしげるだけだ。フェイトの無自覚故の鬼畜っぷり、健在。

「……これ、模擬戦ではなのはちゃんの勝ちやけど、総合的には引き分けなんちゃうかな」

はあ、とため息をついてはやてが空を見上げる。

どこまでも青い人工の空はやたら目にしみるような気もした。



クラナガンの飲み屋街の一角で、ゼストとレジアスが向かい合っていた。

「じゃあ、今日は来てくれて嬉しかったぞ、ゼスト。正直、来てくれないだろうと思つていたからな」

「……俺とお前の誓いが、そう容易く破れるはずもないだろう。あの日、あいつの前での俺たちの事を」

「そうだな。言われてみればそうかもしれないな」

言葉を交わす二人の間には同じ日の出来事が誓いとして共有されている。

大切な仲間で、掛け替えのない存在を失い、そして罪の証を引き取った時の出来事が。「ではな、ゼスト。さつき話した件、考えておいてくれ」

「ああ、またなレジアス。新しい案件は、きちんとかなす」

そして、男たちは互いに背を向けて去っていく。

いつも通りにあっさりと、されどこか険しく、何かを決意したかのような表情で。夜に吹く一陣の風が、ゼストの手の中の書類をかざりと揺らす。

「俺も、身の振り方を考えなければならんか」

槍を握り、節くれだつたいかにも武人らしい手の中では『教導隊への異動について』と

いう書類と、『降格処分』という文字が踊っていた。

三章 新暦68年 《喪失の代償》

ありふれた日常

目が、覚めた。

「やあ、随分と苦しそうだったが何か悪い夢でも？」

「別に何でもありませんよ」

「そうかい。ならばいいが」

体に貼った電極をペリペリ剥がしながらセルジオが半身を起こした。

「で、今回の検査結果だけど、進行度は初期つてところかな。この程度なら私の薬でも進行を遅らせられるだろうね」

「そうですか。助かります」

「意識レベルもグリーンに近い……まあこれは君のマルチタスクの練度のおかげでもあるか。今の所負担は？」

「まだですね。話を聞いていたほどは」

「そうかね」

教授が興味深そうに目を細めると手の中のエンドをいじって情報を打ち込んでいく。「それにしても教授が生体関係の研究もしてたのは少し意外でした。今まで機械工学が中心でしたよね？」

「本来は私の専門はこつちだよ。デバイスなんかは手慰みの一つだ」

「アレだけの物作れて手慰みって……他の人が聞いたら悪い風に勘違いされますよ」

「君はしないだろう？　なら問題はないさ」

「確かにそうですが、教授だって人付き合いとかあるでしょう？」

「ないよ。というか、興味のない人間と話すのは苦痛なんでね」

「変わらないですね……」

病院着を脱ぐとセルジオの今までの事件でついた古傷の数々が晒されるが、それも何時もの陸の制服ですぐに隠されていく。

背後では教授がセルジオの体からのデータを興味深そうに見ているが特に気にしない。

もうそこそこ長い付き合いだ。裸の一つや二つ見せたところでもなんとも思わない。

ベルトをつけてジャケットを羽織り、最後に手慣れた様子でネクタイを締めると胸元を軽く叩いて教授の方へと振り返る。

「では、これは頼まれていた薬だ。用法を守って使いたまえ」

「ああ、すいません有り難いです」

「……ま、私は君が薬を飲まなくて進行進めても面白いから別にいいけど」

「因みにもしそうなった場合は俺どうなります?」

「ん? 最悪殺処分じゃない? まあ唯の肉塊になつて永遠に生き続ける可能性も

あるけど」

「うーわ、マジか。気をつけなきゃな」

「まあ私も殺処分はやめて欲しいからちゃんとしと気遣いたまえよ。君はいいモルモットなんだから」

「……その気持ちは正直微妙ですが、一応感謝はします」

なんとも言えない表情で薬の入った紙袋を受け取るとポケットに突っ込む。

「では、俺はここで失礼します。午後からは仕事なので」

「はいはい、次回の診察は半年後つてところだ。それまで薬は郵便でも送つておこう」

「助かります。次会うときまでお元気で」

手を振る教授に頭を下げて病室から出ると、先端医療研究所の廊下をあくび混じりに歩く。

「EC進行度初期、なあ……」

口に出してみるが、それが大変なことだというイメージはそれほどない。

一応セルジオも自分なりに調べては見たが管理局のデータベースにはそれほど有意義な情報は載ってなかった。

せいぜい感染時に自己対滅の危険性と破壊衝動があるというくらい。

「自己対滅は乗り越えたいし、破壊衝動だってマルチタスクを二つくらい維持に回せば問題ないしな」

ぐーぱーと軽く拳を握ってみるが以前と何か大きな違いがあるようには思えない。確かに少しばかりは以前と勝手が違うが、戦闘などは今のところ問題はない。

「まあだからって多用するつもりはないが」

ゼファーにはECウイルスを供給する機構はあるが、それを制御する機構はない。

なので現状ではECを使うときはゼファーの機能をオンにして無理やり体のウイルスを起動し、使わないときはゼファーのシステムで無理やり休眠させるという形がとられる。

なんでも、制御する機構に関しては研究データがほとんど無くて、これからセルジオのデータを取りつつ作るらしい。

「少し、涼しくなったか」

病院を出ると、ぴゅう、と吹いた気まぐれな風が制服の下に潜り込んでくるが、初夏

のような嫌味な熱気は感じない。

辺りの景色を見れば以前来たときは青々としていた街路樹も次第に晩夏の気配を漂わせ始めている。

「もうそろそろ秋だなあ」

ポケットからバイクのキーを取り出すと手の中で弄んだ。

「帰るか、三課に」

それが、セルジオのいる場所なのだから。

桜色の誘導弾が無数に放たれる。

なのはの魔力を固化化した弾丸は、指示に従って地をかけるクイントを囲むように向かっていく。

「ふむ、ウイングロード、かしらね」

クイントの足元から先天性技能である『ウイングロード』が出現し、空を飛べないクイントへなのは追いすがる手段を与える。

青い道の上をデバイスであるローラーで滑るように移動しながら瞬時に距離を詰めていく。

「レイジングハート！」

《 Short Buster 》

それに対してなのは瞬時に威力を犠牲にした規模縮小型の砲撃をチャージ、迎撃として撃ち放つ。

高速で飛来する砲撃に対してクイントは少し目を見開いたが、すぐにニツと笑ってみせる。

「カートリッジロード、ラウンドシールド」

「シールドで軌道を——」

「早いけど、まだ甘いわね」

放たれた砲撃をクイントはカートリッジ一発分の魔力ブーストをかけた盾で僅かに逸らすと、そのまま拳を強く握り込んだ。

（大きいのが来る。ならっ！）

勢い良く回り始めるクイントのリボルバーナックルになのはが備えて目の前に桜色

の盾を作り出した。

『バインディングシールド』。

捕縛盾とも呼ばれるこの魔法は、見た目は通常のシールドと変わらないながらも、シールドの表面に触れた物体へと彼女の特別硬いチエーンバインドで縛り付けるというオリジナル魔法。

そして、この後に砲撃を叩き込むことが魔導師高町なのはの必勝コンボだ。

クイントのナツクルスピナーが回転することによって一撃の威力を増大させながら、なのはの捕縛盾へと迫っていく。

そうして、拳の先が盾に触れる直前、クイントが大きく、足元のウイングロードが撓むほどに強く踏みしめた。

力が生まれる。

体を通して、衝撃が伝わる。

拳の先へと、螺旋の力が加わった。

「アンチエイ・ナツクル繋からぬ拳」

がしゅん、とガラスが砕けるような軽やかな音をたてて、なのはの捕縛盾が砕け散った。いとも呆気なく、クイントの拳に貫かれて。

けれど、クイントの拳の威力は衰えることなく、そのままなのはの腹部へと向かって

いて、直前でピタリと静止した。

「私の勝ちね」

「うう、私の負けです……」

「まあまあ、かなり強くなってたわよ」

「でもクイントさんには勝てなかったです」

「そこは私ももうそこそこの年だし。あ、今は年取つてるとかじゃなくて、そこそこ働いてるって意味ね？」

悔しげに負けを認めるなのはの頭をポンポンと軽く撫でると、二人はバリアジャケットを解除する。

いつもの陸の制服に汗がつくといけないので今は武装隊に支給されているジャージ姿だ。

二人は三課内の訓練室のベンチからタオルで汗を拭きながら、ペットボトルから水を飲んで一息つく。その後、シャワールームへと向かう道すがら、先ほどの模擬戦の反省会を始める。

「最後のバインディングシールドは上手かったけど、まあ私にはあんまり意味なかったかもね」

「セルジオくんの『繋がらぬ拳』なら防げたんですけど……」

「あー、あの子センスなくて上手く使えてないのよね。たぶん、いいとこ私の奴の八割の威力つてとこでしょうね」

「うーん、バインディングシールドは改善の余地ありかな」

「あとはー、アクセルシューターの使い方と、後は近接戦での立ち回りがかなり上手くなったと思うわ。何かあった？」

「なんとというか、少し武装を変えて戦う機会があつて、それでなんとなく近づかれた時の立ち回りが感覚で分かったというか？」

「なんでなのはちやんが疑問系なのかしらね……」

「あはは、なんか上手く言えなくて……」

誤魔化すように笑いながらなのはが胸元で下がるレイジングハートをなんとなく触った。

一時期なのはのレイジングハートはフォーミュラシステムを組み込んだ、『ストーリーマ』及び『エストレア』という形態への変形が可能だった。

しかし、今はその機能のどちらも取り外され事件前の『レイジングハート・エクセリオン』までバージョンが戻っている。

なのは個人としては今までの自分にない加速を失うのは少し勿体無い気もしたが、セルジオに小難しい理由とともに説得を受けたので大人しく従っておくことにした。

まあ、流石にデータを取らないのは管理局としてももったいなかったのか、ちょうど再戦をしたがっていたシユテルとの模擬戦は許してくれたが。

(シユテルとの模擬戦でアクセラレーターを使ったからかなんか近接のコツがわかった気がするんだよね)

どうやら今までできなかつた加速の感覚を掴んだことによつて、近接戦の立ち回りの感覚を掴んだらしい。

アクセラレーターと瞬間砲撃という鬼畜コンボの餌食、もとい実験台になつたシユテルには合掌。

その後も模擬戦に関してあれやこれやと話していると、航空魔導隊に内接されたシャワールームに到着する。

「さ、早くシャワー浴びちゃいませよ」

「は、はい」

クイントが脱衣所で勢いよくシャツを脱ぐと、日々の訓練によつて鍛えられているせいかよくくびれた腰と、弾かれるようにばるんと揺れる豊かな胸部が露わになつた。

その圧倒的な乳のパワーに気圧されたように、なのはが自身の胸部を見下ろしてしまふが、悲しい哉、なのははまだ十一歳。広がるのは年相応の哀れな平坦。

これがフェイトやすすずか辺りだと既にそこそこのサイズに膨らんでいるような気が

する。後は意外なことにはやてなんかもそこそこ大きかったりする。

ぐむむ、となのは小さく唸ったが、それで突然なのは胸が膨らむことはない。せいぜい今できるのはクイントや、後はメガーンの様に胸が大きくなることを祈るだけだ。

えいや、となのはがシャツを脱いだ。

すると布が当たったのか胸元でシルバーのチェーンに繋いである星のアクセサリとレイジングハートがぶつかって軽い音を立てた。

「それって、前は隠してつけてなかった？」

「えっと、はい。でも、この前バレちゃって」

「あら」

「だから、バレちゃったなら、もういいかなって」

クイントの記憶ではなのはシルバーのネックレスをそれはそれは大切にしていた。同じ女性なクイントだから知っているが、時たまこうしてつけていることも。

だが、それはオフの日や内勤だけの日のこと。こうした模擬戦のある日や、外回りのある日にはつけていなかった。

でも、どうやらとある人物に隠してつけていたのがバレたことをきっかけに普段からつけるようにしたらしい。

(……何かあったのかしらね)

クイントはなのはとセルジオの間に、先日の事件で何があったのかは知らない。けれど、それでも年長者として察せることもある。

「そっか、私は似合ってると思うわ、そのネックレス」

「私はちよつと大人っぽいかなあ、とも思ってたんですけど、なら良かったです」

えへへ、と照れたようになのが笑う。

(ああ、良い顔で笑うようになったわね、なのはちゃん)

頬をわずかに赤らめるなのはの姿がなんだかいつもより何割かまして、子どもらしく、年相応の笑顔に見えてクイントが柔らかに笑う。

願わくば、この小さな後輩と弟分が、二人で自然に笑い合える日がくればいいな、と思っただ。

(うーん、流石にギンガじゃ勝てないかしらね)

初恋は実らないの法則はそんなに間違っていないかもしれないわね、とクイントはひとりごちたのだった。

三課の部隊長執務室でゼストが提出書類を纏めていると、扉越しに乾いたノック音が耳に届いた。

短く返答をすれば、古びた木の扉が開いて紫髪のロングヘアの女性が見せた。

「失礼します。部隊長、私に何かご用でしょうか？」

「……立ち話もなんだ。ひとまず座れ、メガーヌ」

「はい、了解です。……コーヒーでもいれましょうか？」

「なら頼めるか。セットは——」

「その棚の下から二番目、ですよ。知ってます」

「助かる」

「いいんですよ、と返答してテキパキとコーヒーを入れる姿は完全にデキる女のそれだ。

手慣れた様子メガーヌはさくつと二人分のコーヒーを用意すると、ソファに腰掛けて待つゼストの前に置いた。

もう一つは自分の手の中のまま、テーブルを挟んだ反対側に腰掛ける。

「……娘は、変わりないか？」

「はい、お陰様で。最近では、少しずつ言葉を話したりして」

「すまん、そんな時期に仕事に出させて」

「いえ、良いんです。今は夫が育児とってるんですし。お気になさらず」

「そう言ってもらえると助かる」

「ず、とゼストがコーヒーを啜る。

「俺が、三等空佐から一等空尉に降格したのは知ってるな」

「……はい。この前の責任を取ったと。すみません」

「お前らが謝ることでは無い。俺はそもそもそこまで階級にはこだわっていない」

「そう言ってもまたコーヒーを啜るゼスト。その表情はいつもと変わらず、本当に降格に関してネガティブな感情はないことがわかる。

「だが、まあ俺が降格したらしたでめんどくさいことも起こっているな」

「面倒くさいこと、ですか」

「ああ。レジアスに他の部隊から『いつまでもゼストを航空魔導隊で遊ばせておくな』との抗議が入ったらしくてな、俺は部隊を移ることを打診された」

「——！」

「俺が三課の部隊長になってからもう五、六年。俺もそろそろ前線を引くべきだ、とレジ

アスにも言われた」

「レジアス中将が……」

「まあ今すぐ前線を引くわけではないが、それでも少し思うところはあつてな」

やれやれとでも言いたげに息を吐くとメガーヌと向き合つて居住まいを正す。

「それで、だ、メガーヌ。お前を今日呼んだのは他でもない。お前を俺の後任に据えたいと考えている」

「それつて、まさか」

「そうだ。メガーヌ・アルピーノ三等空尉、お前は、三課の部隊長をやる気はあるか？」

「——」

ゼストの言葉にメガーヌが言葉を失う。

まさか、そんな提案を受けるとは露ほども思つてなかつたのだ。

今の三課はゼストを隊長として、階級の高い二人、つまり二等空尉であるセルジオと三等空尉であるメガーヌが分隊長に据えている。

なので、メガーヌが打診されることはそこまでおかしな話でもないのだが。

「あの、なんで私に話を？」

「不満か？」

「いえ、そういう訳ではなくて、ただちよつと理由が知りたかつたものですから」

メガーヌの階級は高い。が、けれど一つ下にはゼストと同じベルカ式のクイントもいれば、他の局員にだってベテランも多い。

(それに、あの子だっている)

メガーヌに真剣に見つめられて、ゼストは間を持たせるようにコーヒーを口に運ぼうとして、既に中身がなかったことに気がつく。

「聞きたいか？」

「ええ、もし良ければ、ですが」

ふ、とゼストが小さく息を吐く。

「……お前が一番まともだからだ」

「んん??」

「お前はあのフリーダムな連中が部隊の長を務められると思ってるのか」

「あー」

「あいつらの誰かを後任にすると考えるだけで正直な話俺は胃が痛くなる」

メガーヌの脳裏に三課の面々の所業が思い出される。

なんというか、悪くない連中なのだが、ふざける時には全力でふざけようとするのだ。それこそ、少しばかりルールを破る、というかぶち破るレベルで。

「その点お前は安心だ。いざという時に奴らの手綱を握れるし、何よりフルバックとい

う立場上後方からの指揮に向いている」

それに、とゼストが続ける。

「俺はお前のいつでも冷静に物事を見る事の出来るそのスタンスは得難いものだと思う。きつと、良い指揮官となれるだろう」

「そう、ですか」

「……………どうだ、もしその時が来ればやってくれるか？」

二人が静かに見つめ合う。

ゼストの鋭い黒曜石の瞳に見つめられたまま、メガータは静かに目を閉じて思考を巡らせる。やがて、一つの答えを口にした。

「申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」

「……………だろうな」

「え？」

「お前を、いやお前達夫婦を見ていればわかる。…………お前達にはもう、部隊より大切なものがある」

「そ、そんなことっ」

「良い。俺に気遣うことはない」

思わず立ち上がって叫ぶようにしたメガータを、薄い笑みとともにゼストは制した。

「俺は地上を守る事が使命だと思ってる。おそらく、レジアスもそうだろう。だがな、メガーヌ、それを管理局全体に強要しようとは俺は思わん」

「ですが」

「まあ聞けメガーヌ。俺は、人が戦う以上、最後の心の拠り所は必要だと思う。そして、それは人によって異なるのが当たり前だ」

「隊長」

「だからメガーヌ、お前はお前の守るべきものの為に生きる。俺たちに気遣う必要はない」

そう言うトゼストは話は終わりだと言わんばかりにソファから立ち上がった。

その立ち去る直前の笑顔は、寡黙なゼストにしては珍しくニヒルな笑みを浮かべていた気がした。彼の養子がするような、悪戯っぽい雰囲気のある表情を。

(まさか、私に今の話をする為に……)

浮かんできた一つの疑問。

それはひどく独りよがりな、メガーヌの希望的観測にも近かったが、彼女はなんとなくゼストなら、部下のことをよく見ているゼストならばありえそうだと思う。

よっぽど口に出して問いかけたかったが、メガーヌはその言葉を飲み込んだ。アレが隊長の不器用な優しさだったのだと思つて。

「隊長は、セルジオ君を後任にすると思っていました」

「……………そうだな、その事を考えなかったとは言わん」

飲み込んだ代わりに投げかけた言葉は、執務室の窓から見える空を見上げたゼストの心を僅かに揺らした。

「だが、今のあいつにこれ以上の重荷を背負わせる事など俺にはできんよ」

ゼストの見上げた先の、彼らが守る空は、今日も透き通るように美しかった。

「さーて、お仕事やりますか」

バイクを三課の車庫に止めて、セルジオはキーホルダーで纏めたキーを指でくるくると回しながら隊舎に入る。

「お」

「あら」

「あ」

すると、ちょうど午前の訓練を終えたなのはとクイントと遭遇した。

「定期検診終わったの、セルジオくん」

「はい、一応。問題ないそうです」

「あら、何か風邪でも引いてればなのはちゃんがお見舞いに来てくれたのにね」

「わ、私？」

「残念だったわねー、セルジオくーん？」

「あはは、残念ですね」

主にクイントの頭が。

「クイントさん達は、訓練終わってシャワーでも浴びてきたところですか」

「あら、わかる？」

「ま、そりや見ればわかります。高町の髪とか少し湿ってますし」

「み、見ちゃダメ！」

「いや、別に減るものじゃないだろ？」

「減るの！ 私の、こう、乙女的な何かが減るの！」

「……そういうものか？」

「そういうものなの！」

「セルジオくん、デリカシー持とうね？」

その後、三人で道を進んでいると、オフィスの扉の前でちょうど扉を開けようとしているメガーヌとゼストが目に入る。

「珍しい組み合わせですね、ゼストさんとメガーヌさんって。何か厄介ごとでも？」

「ま、ちよつとね」

メガーヌが曖昧な答え方をしたのが少しだけ気にかかったが、すぐにまあいいかと流してしまふ。

「セルジオ、クイント、高町、この後三課のメンバーを食事に誘うつもりだが、お前達もどうだ？」

「あ、行きます！ 私行きたいお店あるんですけど奢ってくださいますか！」

「うむ、良いだろう。昼休みの間に帰って来られるなら皆で行くか」

「やた！ 今度家族と行くつもりだからリサーチしてきたかったですよねー」

「クイント、アンタ死ぬほど凶々しいわね」

「あはは、たまには良いんじゃないでしょうか。みんなでご飯、楽しみです」

「ふむ、じゃあ一応予約しときますかね。取り敢えず中のメンツの予定を」

聞きますかね、と言いかけながらセルジオが扉を開いて、高速でパイが飛来した。

「ハッピーイイイ、バーバーースデエエエイ！」

「——ッ、ゼファー！」

雄叫びと共に放たれた飛来物を瞬時にゼファーを起動して行動予測プログラムで認識すると、体の各部を通した勢いを使って手首のスナップだけで逸らしてみせる。

(習っててよかったストライクアーツ！ クイントさんに感謝)

もつと有意義に使え、という気がしないでもない。

何はともあれセルジオの顔面炸裂コースからパイは逸らされて、そして、遙か上方へと飛んでいく。

が、ここで一つだけ誤算。

今廊下にいるのは五人。

セルジオを先頭にして、その後ろに四人、なのは、ゼスト、そしてクイントとメガーヌ、が並んでいる。

セルジオの身長は170後半。その顔の軌道より上となると、相当身長の高い人間にしかパイは当たらない。

そう、身長180を超えているゼストのような。

べしや、とゼストの顔にパイが当たる。

「あ」

「あちゃー」

「あら」

「あ」

「む」

全員の時間が止まり、やべ、という空気が三課の中に広がる。

「あなた達ね……………」

そして、最も早く復活したメガースが蕩けそうなほど魅力的笑顔で、右手のグローブ型デバイスを起動させた。

「良い加減にしなさいよ！」

「ぎゃー、すいません今日メガネが誕生日だったから祝ってただけなんですウー！」

「ゴリラや！ 全部ゴリラが悪いんや！」

「問答無用よ。さっさと片付けなさい！」

「ゼストさんごめんなさいごめんなさいごめんなさい。ほんとごめんなさい」

「……甘いな」

「ゼスト隊長今言うべき感想はそうじゃないような……」

「ちよつと待って、もう無理、ひーひーひーひー、お腹痛い、ほんと勘弁して」

喧しく、賑やかで、どこか家族のような、そんな三課の温かな日常。

高町なのはが配属されて二年。

あの夏の事件からしばらく月日が流れた、三課のありふれた一日だった。

いつかきつと

マルチタスクを起動して、嫌な思いも、赤い思考も纏めて隔離する。

「――相変わらず代わり映えしないな」

三課の宿舎にある自室で目を覚ましたセルジオが小さくため息。

軽く伸びをして顔を叩いて目を覚ますと、僅かに気になり始めた冷気に眉をひそめながらベットから抜け出した。

「朝は……………まあなんだっていいか」

一応航空魔導隊にも食堂はあるが、三課の宿舎からは少し距離がある。そもそも、セルジオは食事に関しては大して興味がないほうだ。美味かろうが不味かろうが辛かろうが甘かろうが苦かろうが大体なんでも食べられるのだ。

わざわざ美味しいものを食べるためだけに遠くまで歩くつもりはなかった。

頭をかきながら、だだっ広い部屋の中にポツンと置いてある冷蔵庫から水と食パン、

それに近くの戸棚から栄養サプリメントを取り出す。

「ええと、最近の栄養素的に、まあこのくらいか」

昨晩の夕食、今日とるべきエネルギーから算出した目安に沿ってサプリを手の上に乗せると水で一気に流し込んだ。

ごくり、と飲み込んでしまうと残りの冷たいままの食パンを折りたたんで面積を小さくすると口に頬張り、咀嚼する。

「ブロックタイプの栄養食も便利だけど、やっぱりこれが一番手軽だな」

栄養補給を終わらせたセルジオは洗面所で荒っぽく顔を洗い、歯を磨くと、寝間着にしているジャージを脱いだ。

そして、そのまま服を脱ぎながら部屋の片隅の昨日のうちにアイロンをかけて置いてあったシャツをとって着替え始める。

「お、とと、危ない」

その際に床に無造作に転がしてあったアイロンを避ける。

「着替えながらは危ないな、うん」

パリッとアイロンのかかったシャツのボタンを閉めるとズボン、ジャケットを身につける。ネクタイを締めて、枕元に置いてある懐中時計を手を取った。

「今日も頑張ります」

小さく呟いて、胸ポケットに時計を押し込んで、最後にもう一度両手で顔を挟み込んで叩いて気合いを入れる。

「んじゃ、行きますか」

荷物を持つて部屋を出る。鍵は、締めない。管理局の寮に入ろうとするトンチキな泥棒はいないだろうし、それに、そこにセルジオがとられて困るものなどないから。

セルジオが扉を閉める音が、だだっ広い部屋に響いた。

「ん、ここ違うぞ。ほら、前メガヌさんに教えてもらってただろ」

「あつ、ごめん、ちよつとうっかりしてた」

「次同じ事しなけりやいいさ」

なのはにチェックを終えた書類を返すとあせあせとキーボードをうつて間違いの訂正を始める。

それを視界の端で見ながら、セルジオ自身も今の担当案件に関するデータをまとめ始

める。

(……本当に無難なところだよなあ)

それはレジアスから三課に到達された案件の一つ。もちろんそれは三課に見合うものとレジアスが判断しただけあって、重要性は高い。

犯罪組織の検挙であつたり、密輸品の足取りを探す事であつたり、そのほかクラナガンの航空警護など、どれも大切なものだ。

けれど、それでも『戦闘機人』から手を引いたことに関して、三課が思うところがなわけではない。長い間この事件を追つていて、肝心な所には関われなかつたセルジオは特に。

(でもゼストさんが納得してるのに俺がいろいろ言うのは筋違いだよな)

なにせレジアスとゼストは親友なのだ。その間にセルジオが割って入ることなどできなない。

「セルジオくん、できたよ」

「そうか……よし、これなら良いだろ。後でゼストさんに提出しとく」
「やった」

セルジオが頷くとなのは嬉しそうに小さくガッツポーズをした。思わず手が伸びて、ギンガヤスバルにするようになってなんとなく頭を撫でてしまう。さらに、とした髪の手

触りが伝わり、あ、とセルジオが声を漏らした。

(しまった、高町の頭は撫でたら嫌がれるんだった)

だが、それを思い出してももう遅い。すぐにいつものように『髪が乱れる』と頬を膨らませて手を払われる。

(あれ……?)

だが、いつまでたつても手を振り払われることはない。

不思議に思い、セルジオは手の下に隠れているなのは顔を覗き込もうとして、その頬と耳が、彼女の魔力光のように淡い桜の色に染まっているのに気づく。

「あ、あの、そろそろやめてくれると、嬉しい、です……」

「あ、ああ！　　す、すまん。撫でられるのはあんまり好きじゃなかったよな」

「別に、セルジオくんに撫でられるのは、嫌いじゃないけど」

「え？」

「なんでもない。気にしなくて良いから」

「ん、そうか」

か細い声での呟きに思わずセルジオが聞き返すが、なのははそっぽを向いてはぐらかした。どうやら教えてくれるつもりはないらしい。

困った、とでも言いたげな表情でセルジオが頭をかいたが、仕方なく先ほどまでのよ

うにデスクに向かった。

それを見てなのはも小さく息をついて気分を落ち着けると同じようにデスクに向かった。

「なあ高町、午後からって模擬戦だっけ」

「うん。クイントさんと」

「だよな。そういやメガーヌさん今日まだきてないな」

「言われてみれば。今日は旦那さんと、ゼストさんの三人で護衛任務だよな」

「……ルーテシアちゃんの事で少し戸惑ってるのかもな」

「託児所とかに預けなきゃだもんね」

「だな。あとさ高町」

「なあに、セルジオくん」

「別に俺に撫でられるの嫌いつて訳でもなかったのか？」

「うん、むしろ優しくてなんか好き……ええ？」

「ああ、やっぱ聞き間違いじゃなかったか。良かった安心した」

良かった、良かったと笑うセルジオの横顔をギココ、と錆びついたロボットのような動きでなのが見つめる。

「き、きこえてた、の……？」

「ん？ まあ、こんだけ近けりやな。あんなので聞き逃すのクロノだけだろ」

「ならなんで聞き返したりしたのおっ?!」

「いや、あんま自信なかったし」

「さざらりと言つてのけるセルジオと対照的に、なのは顔がみるみる真っ赤になつていく。」

「聞こえてたならわざわざ聞き返す事ないと思うの!」

「お前が嫌がつてるんだつたらもつと心に戒めなきやいけないだろ?」

「そーいうのは、心に留めておくの! デリカシー持つて欲しいよ!」

「でもさ」

「でももなにもないです! ……………セルジオくんのばか」

「ええ……………」

ぷく、と頬を膨らませてセルジオの肘のあたりをなのはが軽く小突いた。

なのはなりの、恥ずかしい思いをさせられたささやかな仕返しだった。

(…………女つてよくわからん)

クイントにもデリカシーを持ってと言われたが、男のセルジオにとつて女心は複雑怪奇な代物だ。もう青年と言われる歳なのだし、良い加減に察しが良くなるべきである。

まあ未だ恋すら自覚したことはないセルジオには酷な話か。こいつは本当に性欲あ

るのか？

むむむ、と唸るセルジオと、すーはーと深呼吸を繰り返すのは。

と、そんな中、唐突に三課の扉が開いた。

「メガーヌさん？」

艶やかな紫のロングヘア。その服装はいつもの茶色の陸の制服ではなく、どこか余所行き用のような、お洒落な服装である。

「あ、セルジオ君いた！ よかった、貴方だけが頼りだったから」

「俺、ですか？」

「そう、貴方にしか頼めないこと」

「は、はあ、メガーヌさんの頼みなら喜んで引き受けますけど……………」

「貴方ならそう言ってくれると信じてたわ」

がしつとメガーヌがセルジオの手を取って、にっこりと笑った。至近距離で男ならば皆見惚れてしまうような素敵な笑顔を向けられて、セルジオの頬が引きつった。

（あー、早まったかな。メガーヌさんがこの顔する時つてだいたいめんどくさいことを……………）

だが、今更断ることなどできるはずもない。貴方だけが頼り、なんてお人好しのセルジオに断れるはずもない。

「あなた、ルーテシア」

メガーヌが扉の方へと声をかけると、三課の一員であるメガーヌの夫と、その腕に抱えられた小さな女の子が姿を見せた。

母親とよく似た紫の髪の毛の、ぽやんと眠たそうなまん丸の目をした幼女に、セルジオとその隣のなのはが驚いたように目を開く。

「まさか、ルーテシアちゃん？」

「えっ、あの赤ちゃんが?!」

「そうそう、もう今年で二歳になるわ」

「子どもの成長って早いな……」

視線が焦点の合っていないようにぼんやりと虚空を見つめているルーテシアに集まる。

「それで、なんでこんなところにルーテシアちゃんを……」

言いかけたセルジオが、はっと何かに感づいたように頭を抑える。

「ま、まさかメガーヌさん、お願いってのは」

「察しが良くて助かるわ」

メガーヌが夫からぽやんとしたルーテシアを受け取ると、セルジオへはい、と渡してみせた。

「この子のお守り、お願いできない？」

ひきつるセルジオの顔を、きよとんとしたルーテシアが見つめて、小さくくちゅんとくしやみをこぼした。

事の顛末を説明しておく。

そもそも今どちらにも三課に所属するアルピーノ夫妻はどちらかが育休を取る間は、どちらかは三課で働く、というスタンスをとっていた。

産まれた直後はメガーヌだったようだが、今は夫の方が育休を取ってルーテシアを育てている。

だがメガーヌが引き受けた案件は、夫婦での潜入捜査が望まれるもので、そのためアルピーノ夫妻で当たることになっていた。その間はルーテシアは託児所に預けようという事になっていた。

ところが今日になってその託児所が風邪の大流行で一時的に閉まっていると知ってか

らはさあ大変。

今から新しいところを探すわけにもいかず、かといってアルピーノ夫妻には頼れる親戚もない。

そうして悩んだ挙句、三課の誰かに預けようとなり、セルジオに白羽の矢が立つたらしい。

もちろんセルジオだって二つ返事で引き受けたわけではない。「俺でなく子育て経験のある人にしてください」との文句を言ったが、「あの連中に娘を預けたくない」というメガーヌの言葉に一蹴された。

たしかに誕生日祝いにパイを投げ合うあの連中の存在はかなり教育に悪そうな気がした。

「セルジオ君は普段は普通だし、なのはちゃんもいれば安心」とはメガーヌの弁。

そうして、メガーヌが帰ってくるまでセルジオとなのはがルーテシアの面倒をみることになったのだが。

(子どもの世話って、どうすればいいんだ……?)

セルジオがオレンジジュースをストローで吸っているルーテシアに頬をひきつらせる。

「な、なあ高町、ここのうのってどうしたらいいんだ？」

「ええ、それ末っ子の私に聞く?」

「俺だつて兄弟なんていたことねえよ」

仕方ないなあ、となのはが息をつくと、膝をついてルーテシアと目線を合わせるとにつこりと笑った。

「こんにちは」

「……………わあ」

「うんうん、こんにちは。えっと、自分のお名前、いえるかな?」

「……………るー?」

「そっか、じゃあルーちゃんだ。お名前言えて偉いね」

ほわんとした目のままのルーテシアの頭をなでなでとなのはが撫でる。すると、ルーテシアは不思議そうに手を見た後に、なのはの顔をじつと見つめる。

「どうかした、ルーちゃん?」

なのはは尋ねてみるが、ルーテシアはじつとなのはを見つめたままそのまま何か話そうとはしない。

「……………もしかして、名前か」

「え?」

「ルーテシアちゃん、高町の名前聞いてるんじゃないのか?」

セルジオの言葉になのはが手を打った。確かに、今なのはを見つめているルーテシアは相手をなんと呼ぶべきか知りたがっているようにも見えた。

「私は、なのは、高町なのは」

「……………」

「な、の、は、だよ。『なのは』」

「なー?」

「うーん、そうそう、『なー』だよ、なー」

「なー」

ほにゃ、と笑うルーテシア。

「——! セルジオくん」

「どうした」

「どうしよう、ルーテシアちゃんめちやくちや可愛いよ。妹ってこんな感じだったのかなあ」

「そうか、それはよかったな」

無垢な笑顔を向けてくれるルーテシアにメロメロになっているのは。すると、そんなのはをよそにルーテシアは今度はセルジオへと目を向けた。

「……………今度は俺か」

ぼりぼりと頭をかくとなのはの隣にしゃがんでルーテシアのどろんとした目を覗き込んだ。

「俺はセルジオ・アウディだ。あー、セ、ル、ジ、オ、わかるかな？」

「せー、お？」

「んー、ちよつと違うけど、まあそれでいいや」

「せお」

「そ、せおで良いよ、ルーテシアちゃん」

ふ、と頬を緩めて見せるセルジオ。すると、ルーテシアはオレンジジュースを置いて、なのはとセルジオへと手を伸ばした。

なのはの頬を触る。

「なー」

「うんっ」

セルジオの顔をぺしぺしと叩く。

「せお？」

「ああ」

最後に自分を触る。

「るー」

そして、満足そうにほんにやりと笑って見せる。

「……これは確かに可愛いかもしれん」

「だよね。ルーちゃん可愛いな」

親友たちがシスコンの道に落ちた理由を垣間見た気がするセルジオだった。

その後、オレンジジュースが無くなって泣き止まそうになったルーテシアを得意の転移魔法でのちよつとした手品を披露して泣き止ませたり、魔力弾を応用したお手玉であやしたりして一時間ほど遊んでやると、ルーテシア突如こてんと寝こけてしまった。

まさか怪我でも?! 焦ったが、ただ疲れて寝てるだけだとわかって二人して胸をなでおろしたりした。

そして、ソファに寝かせたルーテシアの横になのはは腰掛け、セルジオはソファの側面に体を預けて、ようやく、二人は安心したようにして息をついた。

「子ども預かるのってすごく疲れるね。お姉ちゃんたちもこんなだったのかなあ……」

「そう言う高町は、末っ子と言う割に随分手慣れているように見えたけど」

「あはは、そうかな。自分がやって欲しかったことやってあげただけだからなあ……」

「……どう言う意味だ」

思わずそう問いかけてしまう。だって、なのはの横顔が寂しそうで、聞かずにはいられなかったのだ。

なのはが膝の上で組んだ手へと視線を落として、勤めて明るい様子で語り始める。

「私のお父さん覚えてる？」

「ああ、確かボディガードをしていたといってたけど、あの人がどうかしたのか？」

「うん。それでね、お父さんって私がちっちゃい頃に一度大怪我してるんだ。お医者さんからは、もう目を覚ますかわからないって言われちゃったくらいなの」

「大、怪我」

「それで当時は翠屋も軌道に乗ってなかったから、お母さんもお兄ちゃんもお店の方に行つて、お姉ちゃんもお父さんにつきつきりだったんだ。それで、私はちっちゃい頃独りぼっちなことが多かった」

「仕方ないことなんだけどね、と笑うと、なのはは膝を抱えてソファの上で体操座りのように足を組んだ。

なのはが膝の間に口元を埋めた。

「いつつも膝を抱えて部屋の片隅で震えてたなあ。独りぼっちの家はなんだか怖くて、おばあちゃんが来るまで寂しくて……って、なんか暗い話になっちゃったね」

間を取り繕うようになのはが声を出して笑うと、隣で静かに寝息を立てるルーテシアの頭を優しく撫でた。

「だから、なんとなくちっちゃい子には親近感湧いちゃうのかな」

「……………なんか、その気持ちはわかる気がする」
「え？」

なのはが膝の間から顔を上げると、露骨にしまったとでも言いたげな表情のセルジオの顔があつて。

「なんていうか、俺も、そうだったから」

セルジオがごによごによと何事かを言い淀む。

(……………仕方ないなあ)

なのはが、小さく息をつく。

「いいよ。無理して言わなくても」

「……………すまん」

「いいの。いつかセルジオくんが話したくなつた時に話してくればそれでいいよ」

膝の上に顔を乗せたなのはが、うつむき気味のセルジオを覗き込みくすつと笑つた。悪戯つぽく、優しげに。

「それまで、待つてるね」

二人の間に横たわつた静寂の中で、ルーテシアの小さな寝息だけが聞こえていた。

密着!航空魔導隊三課24時!「前編」

ナレーション「第一管理世界ミッドチルダ。魔法世界の中心とも言えるこの世界では年々犯罪率が増加している。危険はいつも我々に迫っている」

テロによって倒壊する建物。暴走するリニアレール。空を飛び回る犯罪者に、それを不安そうに見上げる市民の映像。

爆発が起こる中次々に魔導師から救助される子ども。そして、最後に映し出される管理局地上本部。

ナレーション「だがそうした恐るべき犯罪に立ち向かう人々がいる。時に迅速に、時に大胆に、罪なき人々を守るプロフェッショナル集団。それこそが航空魔導隊三課、通称『三課』である!」

番組のハイライトシーンが次々に。

にこやかに「おはようございます」と挨拶をする高町なのは。

真剣な表情で魔法を用いての激しい模擬戦を行う三課の局員たち。

デバイスのメンテナンスをして、軽くシャドーをするクイント・ナカジマ。

真面目な表情で捜査資料を覗むセルジオ・アウデイ。

「つまり三課というのは地上本部の精鋭部隊の一つなんです」と硬い表情で説明をするメガーヌ・アルピーノ。

「航空魔導隊三課、出動！」と叫ぶゼスト・グランガイツ。

ナレーション「取材をする中事件が発生！ 現場へと急行する三課に同行する取材

班。そして引き起こる緊急事態！ それに対して三課はどう対応するのか！」

ビルに立て籠もる違法魔導師。あたりを飛び回る円筒状の十体あまりの機械兵。

機械兵の放った弾丸が辺りへ雨あられの如く降り注ぐ。砕け散る道路のアスファルト。流れ弾が市民へと飛んでいく。

「急いで避難を！」との叫び声が響く中突如カメラがあらぬ方向を映し出す。誰かに押し倒されたのだ。「何やってるんだ！ 死にたいのか！」と叫ぶセルジオ・アウデイ。

次の瞬間、崩落するビル、そして聞こえる子供の甲高い悲鳴。

疾走するセルジオのバイクと、その背後でレイジングハートを構えるなのは。

ナレーション「今日の『突入サーズデー』は、日夜卑劣な犯罪者と戦う人々への密着取材を敢行。普段明かされることの無い彼らの日常と、その真実へと迫る」

一際派手なサウンドとエフェクトに合わせてテロップが出現する。

「密着! 航空魔導隊三課24時!」

地上本部三課隊舎。小走りで出勤するのは。少し鈍臭そうに走る彼女に動きに合わせて栗色の髪が揺れる。

ナレーション「某日、一人の少女が三課に出勤してきました。高町なのは空曹長、十歳。管理外世界での事件解決に貢献後、二年前に三課に配属されました。まだ幼いながらもその実力はエースにも劣りません」

「おはようございます」

三課のオフィスに入ってにこやかに挨拶をするのは。まだ人のまばらなオフィスからいくつか挨拶が帰ってくる。

ナレーション「彼女は三課の『アウデイ分隊』に所属する魔導師。緊急時には分隊長である彼女のコンビとともに出勤することも多いそう。その為に日夜努力を惜しみません」

シユミレータールームで模擬戦をするなのは。その相手には、クイントや三課の他の局員が当たる。

ナレーション「今日の高町空曹長は午前は内勤。報告書を仕上げ終わった後には、自主的に過去の事件を調べたりなどの、作業を行います」

分厚いファイルを難しい顔でめくるなのは。

ナレーション「事件が起こらなくても暇などではありません。こうした地道な努力が、まだ若い自分にとって必要なことだと彼女は知っているのです。それは時に一日十時間以上にもなることもあるそうです」

「いえ、流石に十時間もやらせて無いですよ」

「あ、そうなんですか」

「こういう風に撮ります、とディレクターに言われた事を慌てた様にセルジオが否定した。」

「局員と言えど、高町はまだ幼いですから。私が引き受けたり、させるとしても負担になりすぎない様にさせています」

「そうなんですか?」

「は、はい。最近は何れに任せてもらえてますけど、流石にそこまで書類仕事をしてたりは……」

「なら空いた時間とかは何してるんですか?」

「模擬戦をしたり、魔法理論の本とか読んだり、お茶とか飲んだり、後は他の局員の人とお話したりでしょうか?」

「それは、あまり良く無いですね」

「なのはの言葉に、中年のディレクターが眉を寄せた。割と優しげな顔をしている為怖いわけでは無いのだが、どうやら少しばかり困ってるらしい。」

「ちよつとそれは頂けないです。模擬戦はともかく、他のは税金使つて遊んでるのかつてクレーム来ちゃいますよ。ただでさえ、最近の地上本部は支持率が低下してるのに」

「ああ、今回ののはイメージアップを図る為、でしたもんね」

「はい。なので、ここらはばしーつと、こんなに可愛い子が頑張ってるんだぞ、という事を示していきたいんです」

「でも嘘はちよつと……」

「高町さん、あなたは今まで一度も過去のデータを確認したことがありませんか？ そんなことないでしょう？」

「ならそれはバッチリ真実です。嘘にはなりません」

「はあ」

「釈然としない様子で頷くのは。」

「（セルジオくん、これって私たちの本当の姿を映すんだよね）」

「（一応、コンセプトはそうだな）」

「（ならちゃんと本当の姿を映したほうがいいと思うの）」

「（まあ、それはそうなんだが……、ここらはぐつと抑えてくれ。全くの嘘でも無いんだし）」

「（セルジオくんがいうなら、わかった）」

「いかにも渋々といった様子で頷くなのはセルジオが苦笑いで頭をかいた。」

「ディレクターの言うことは間違っていない。真実を映す、という点ではなののは行為の一つも嘘はない。かといって映した事が100パーセントの真実か、と問われると首を傾げざるを得ない。」

「でも、そういった誇張が社会では、特にテレビなどでは必要だという事が、情報収集や他の部隊との対応に当たってきたセルジオはなくとなく理解している。」

「だが、真面目なのははイマイチ納得いかない事であるらしかった。」

「あー、じゃあそこら辺でモニタを見て、こう、シリアスな顔頼みます」

「は、はい」

シリアスな顔、と言われてなんとか表情を作るが、そんな上手くいくわけもなく、何か気に入らないことでもあったかのような不機嫌そうなかめっ面になってしまう。

「あ、そうだ、アウデイさんも背後から何か指導してる感じでお願ひします」

「私、でしょうか?」

「はい。さつき言つてたじゃないですか、指導もするつて」

「いえ、ですが何故今?」

「だって、アウデイさん顔がいいですから。高町さんと並べると画面が映えます!」

「……………そうですか」

ディレクターの言葉に微妙な気持ちになりつつデスクでモニタを見ているのはの背後に立った。

「それじゃあカメラに入りませんつて。もっと寄つて寄つて」

「あ、あーと、その、高町」

「う、うん、いいよ」

「すまん」

セルジオが腰を折つて椅子に座っているのはの真横まで顔を持つてくる。すると、

肩が少しなのは髪に触れてしまったのか、二つに結んだ栗色の髪が揺れて、ふわりと匂いを立ち上らせた。

（あ、やばい。なんかいい匂いする。鼓動もなんか早いぞ）

甘い、けれど嫌味のない花の様なにおいがくすぐってきて、セルジオの胸が少し跳ねる。

（落ち着け。相手はカメラだ。誰が見るかわからない。気持ちを入れ替えろ）

原因不明の動機に、顔に次第に熱が集まる様な感覚がする。それをなんとか顔に出さない様にしながら、モニタを睨む事で気をそらす。

「あ、あの、それじゃあ使えないんで、せめて何か話してくれませんか？」

「え、あ、はい。ええと、高町、ここはな」

「ひゃ、はい」

動揺をマルチタスクに押し込めて過去の記憶を引っ張り出して、トレース。いつかのようにな何食わぬ顔で説明を始める。

いつもより僅かに赤いなのは顔の顔を見無視して。

（くそ、なんだってこんな事……！）

セルジオが心の中で毒づいて、思わず出そうになるため息を押しとどめた。

少しばかり時間は巻き戻る。

その日、朝のミーティングの後、ゼストに三課のメンバー全員が集められていた。

「話ってなんですか、ゼストさん」

なんだなんだと首をかしげるセルジオたちにゼストは低く唸って、口を開いた。

「今度三課にテレビが来る。準備しろ」

「てれび、ですか?」

「そうだ。今度の土曜にな」

「随分急な話ですね。時々あるインタビュー系ですか?」

「いや今回は密着だそうさ。二十四時間」

「はい、隊長質問です」

「なんだナカジマ」

「密着系いくつかありますけど放送局ってどこですか?」

「MHKだ」

「なん……だと……?」

そのビッグネームにざわざわと三課の面子が沸き立つ。

「ミッドチルダ放送局……MHK俺のボケたばつちやんも見てるデカイとこだぞ……」

「ああ、イエスマムと一緒にウチのガキも見てるぞ……」

「それに伝説のおとうさんはべつきよを作ったところだ。あの筋金入りのやべーやつ」

「そうと決まればこうしちやおけねえ！ さつさと準備するぞ！」

「準備って何を」

「馬鹿野郎。パイ投げ祭り用のパイに決まってるだろ！ やってきたプロデューサーと

かをパイの海に沈めるんだよ！」

「サイコパス発言やめろ」

MHK。ミッドチルダ放送局。

「イエスマムといっしょ」「おはよう朝DEATH」などの他の世界に類を見ないオリジナルティあふれる番組を数多く持つ有名放送局の一つだ。それが三課に来るのだという。

思いがけぬ話にざわつく三課の面々を占めるようにメガーヌが手を打ち鳴らす。

「ほらほら、バカなこと言っていないでひとまずは片付けよ。土曜まで時間ないわよ」

「へいへーい。あ、メガーヌさん新しく作ったくす玉バズーカどうする?」

「もちろん捨てなさい」

メガーヌの指示でぼちぼち動き始める仲間たちの中でセルジオ一人だけ微妙な顔で立っていた。

「これって何で俺たちにお鉢が回ってきたんすかね」

「おそらく地上本部のイメージアップの一環だろう。最近の支持率低下は否めないからな」

「ああ、だから、高町がいるウチに投げた、と。ははあ、考え方は間違ってますが」

「ああ、間違ってるないが……………」

二人が机の中の質量兵器スレスレのグッズを見つかつてメガーヌに怒られているメガネや、そこから逃げるようにものを隠し始める他の人員に目を向けて、そして頭を抱えた。

「ウチで本当に大丈夫だろうか……………?」

たぶん、一筋縄じゃいかない。

時刻は昼休み。この時ばかりはディレクターもカメラマンの姿もない。今はなのと連れ立ってゼストのインタビューに行っているのだ。

「だ、はぁー」

「ごん、とセルジオが自分のデスクに額をつけた。

（くそう、あんなに予定コロコロ変えられたらやつてられねえぞ……）

心の中でボヤクセルジオ。すると、オフィスの扉が開いて露骨に疲れた様子メガーヌが入ってきた。

「あー、疲れた」

そして、彼女もまた自身のデスクに額をぶつけて深い嘆息を漏らした。

「フォードー、冷蔵庫からお茶とって頂戴」

「ー」

「あ、俺にもくれるのか？　ありがとう」

「ー」

メガーヌの召喚獣であるフォードからお茶が渡される。その黒い甲殻をてらてらと

光らせるだけで特に何も言わないが、礼を言われると少しだけ嬉しそうに羽を震わせた。

二人が自棄酒を煽るようにペットボトルを傾けていると、先ほどメガーンの入ってきた扉が勢いよく開け放たれた。

「やつほー、お昼食べましょー!」

「……元気ですね、クイントさん」

「まあいつもと変わらないしねー。あ、フォード、私にもお茶ちょうだい」

「ちよつと私の召喚獣をパシリにしないで欲しいんだけど」

「ーーー」

「まーまー、フォードは良いって言ってるしさ」

「本当にフォードがそう言ってるあたり、ほんとに貴女は……」

メガーンが頭を軽く押さえる。

「それで? 何で二人はそんなに疲れてるの?」

「……わざわざ言う必要がある?」

「わかってるわよ、テレビ屋さんでしょ?」

「正解」

はあ、とメガーンがまた嘆息。

「私、さつきまで視聴者向けに、三課の成り立ちからその役目まで説明してただけど、なんか上手く話せなくて、というか会話のキャッチボールに疲れたの」

「どういふこと？」

「ああ、それ俺見てたからわかりますよ。なんかディレクターに会話誘導されてる感じでしたよね」

「そう、そうなのよ。言いたいことも伝えたいことも伝わってるのに、少しずつ言葉が変えられていくこの感じ……」

例えば、メガーヌが三課の成り立ちを法律や、過去の事例などを含めながらレジアスの後見から作られた、素早い対応を旨とした部隊であることを説明する。

ディレクターはそれを聞いて、「これはこういう事ですか？」と聞く。それに対しメガーヌは「いえこういう事です」と訂正する。すると「ならこう言い方に変えても良いですか？」と提案される。それに渋々頷くというようなめんどくさいことを一時間はやっていったのだ。疲れるなどという方が無理がある。

「最終的には、『つまり三課というのは地上本部の精鋭部隊の一つなんです』とか死ぬほど不本意な事言わされたわよ……」

本当は「三課は地上本部の精鋭部隊なんです」だったのだが、言い方を少し変えたのはメガーヌの少しの抵抗だったりする。

「俺の方は今日の全体の調整を任されているので、あの人たちが動き回るたびにその対応に回らなきゃいけないくて……正直きついです」

「二人ともお疲れ様、としか言えないわね」

「なので昼休みは最大限休みます。この時ばかりはカメラが回ることもないでしょうし」

「そうね。ここにはテレビ屋さんたちに面白いものなんて……」

「すみませーん、カメラ回して良いですかー」

扉が開いてカメラが入ってきた時の三人の対応は迅速だった。メガーヌはフオードの使役を終了して居住まいを直し、クイントはいつもの明朗な笑顔を浮かべ、セルジオは余所行き用の表情を貼り付ける。

「はい、もちろん良いですけど、特に面白いものなんて有りませんよ」

「良いんです良いんです。捨てカットを撮りに来ただけなんで普通にしてくださいませれば」

「捨てカット、ですか」

「ああ、所謂映像と映像の繋ぎのカットですね。尺とかに困ったら使ったりするんですよ」

たははーと笑うディレクターにセルジオは曖昧な笑顔で応じておく。カメラマンが多くの局員が昼食を食べに行っているせいで疎らになったオフィスを撮影する。その

横で、ディレクターが腕を組んだ。

「にしても、案外平和なんですね。もつと四六時中事件に関わってるものかと」

「平時はこんなものですよ。最近のミッドは犯罪率こそ増加してますが、それに管理局が対応できていないというわけではないです」

「ははあ、つまり緊急性の高い事件の際なんかじゃないと、三課が緊急出動する事はない、と」

「そんなところですね」

「なるほどー、なら緊急の事件とか起こりませんかね。このままじゃ番組の盛り上がりにかけてそうだなー、なんちゃって。たははー」

「あはは」

一応笑っておいたがセルジオの目は笑っていない。「これ以上の予定変更など勘弁してくれ」というのが正直なところだった。

そういうしていると、ぼちぼち昼食を終えた局員がオフィスに帰ってき始める。

「ようー、セルジオー。ん、カメラ？」

「なんでも繋ぎの映像を撮りたいらしくて、しばらくここにいます」

「なん……だと……？ やべえ、早くあいつら止めねえと」

「へ？」

「忘れたのか、今日の昼休みはパイ投げ祭りの予定だったんだぞ!」

「知るかそんな事!　　なんでわざわざ今日やるんだよ!」

「馬鹿、今日やるからスリリングで楽しいんだろうが」

「あんた達のこと尊敬してるけどその思考回路はマジで理解できねえよ!」

小声で怒鳴るといふ器用なことをやっているのと、どたどたと数人の騒がしい足音が聞こえ始める。急いで念話を送ろうとするが、もう遅い。

「ハッピーイイイ——」

「(クイントさんメガーヌさん!)」

「クロスシフトD!」

扉が開かれてパイを片手に入ろうとしていた局員を襲うセルジオ達のコンビネーション。

投げられそうになったパイはセルジオの極小魔力砲撃に撃ち落とされ、中に入ろうとしていた数人の局員はクイントの蹴りで吹き飛び、最後はメガーヌの熟達した召喚魔法で三課の屋上に転移させられた。

その所要時間実に三秒。カメラマンとディレクターに振り向く暇さえ与えなかった。

なんでこんな事に完璧なコンビネーションを見せているのか。

「あの、今何か変な声が」

「幻影魔法です」

「でも」

「幻影魔法です（鉄の意志）」

「そ、そうですか」

流石に声は聞こえたのかディレクターは首を傾げていたがセルジオの笑顔に気圧されたのか最終的には納得してくれた。

（もうこんなのは勘弁だぞ……！）

なんで地上本部の評判をあげようとする番組で醜態を晒されそうになっているのだ。

思わずセルジオが隠す事なく嘆息を漏らした。それを目敏く見つけたクイントがセルジオの背中を叩いて喝を入れる。

「こら、セルジオくん、ため息つかないの。幸せ逃げるわよ」

「別に今更一つ二つ逃げたところで大して変わりませんよ」

「そういう問題じゃないの。あなたの幸せが逃げたのがきつかけでこれ以上悪いことが起きたらどうするのよ」

「……………それって例えばどんな」

「そうねえ、例えばこの後緊急出動が起これるか」

「やめてくださいよ、口は災いの元って……………」

——ジリリリリリ。

「……………メガーヌさん」

「……………メガーヌ」

「今のつてどつちのせいだと思う?」

「知らないわよ」

メガーヌが頭を抑えながら天を仰いだ。

「このタイミングで緊急出動とか、本当に勘弁して頂戴よ…………」

密着！航空魔導隊三課24時！ 「中編」

急に慌ただしくなる三課オフィス。既に昼休憩を切り上げて局員の多くが集まってきた。

ナレーション「取材中に急遽響く緊急出動の警報！
隊長のゼスト・グランガイツ
によつて瞬時に人が集められた！」

険しい顔のゼスト。

「今緊急出動の要請が入った。陸士部隊の一つからだ」

「状況は？」

「屋内立てこもりだそうだ。何人か人質がとられていると」

ナレーション「事件が起こったのはクラナガンのとあるデパートの一つ。そこで違法魔導師による立て籠もりが起こっているのだという」

腕を組んで唸る局員たち。

「立て籠もりだけなら俺たちを呼ぶ必要がわかりません」

「……なんでも、ガジエ——こほん、未確認の機械兵を見たそうだ。それで部隊長から連絡が」

「成る程、急行した方が良さそうですね」

「じゃあ今回はセルジオくん達と、私たちが出ます。AMF下になった時、私の召喚やフォードが役に立つはずです」

ナレーション「未だ事件の概要は掴めていないが、対応が遅れば大きな被害が出てしまう。直ぐさま部隊長のゼスト一尉の指示で対応部隊が派遣された!」

セルジオが車庫でバイクにエンジンをかけて走り出す。

ナレーション「アラートから30分後、アウデイ二尉や高町空曹長、他計四名が現場に到着した」

対応部隊との情報のすり合わせを始めるのはたち。

テロップ「こういうことはよくあるんでしょうか?」

「そうですね。多い時は週に三、四回ほどは」

テロップ「大変ですね」

「でもそれが私たちのお仕事ですし、市民の皆さんのために頑張れるのは嬉しいですよ」

ぐつとなのはがガッツポーズを見せると、ちょうど「高町」と声がかかり、「はい」と返事をして駆けて行く。

現地の陸士部隊の一人と何かを話し込むセルジオの顔のアップ。

ナレーション「現場に到着した彼らに与えられた情報は違法魔導師は推定魔導師ランクC以上であり、最悪質量兵器を保持しているとのことだった」

テロップ「質量兵器」。さらに、簡単な質量兵器のイメージ図がいくつか現れる。

ナレーション「質量兵器、それは魔力によるエネルギーを必要とせず敵を殺傷させることのできる武器の通称だ。ここ最近では『火薬』を用いた銃や『爆弾』などを指すことが多い」

映像が切り替わりデパートの全体像へ。

ナレーション「周辺住民はこの事件について——」

デパートを心配そうに見守る市民へのインタビュ。

「さっきまで母と買い物をしてたんですけど、急に銃声がして急いで逃げ出してきたんです」

「酷い話ですよ、ほんと。それに、ちらつと見えたんですけど、年が一桁の女の子まで……」

「早く管理局に解決して欲しいですね」

難しい顔でビルを見つめる陸士部隊の部隊長とセルジオ、メガーヌ。

ナレーション「犯人が人質と共に立て籠もったのはデパート三階のフードコート部

分。平時ならば昼は家族連れや恋人達で賑わう所も、今は人質を閉じ込める檻となっている。対応が話し合われるそんな中――」

窓から魔導師の男が体を出した。

「此方の要求を告げる!」

ナレーション「男が姿を見せた!」

《 中CM 》

CM終了後同じ映像が流れる。

難しい顔でビルを見つめる陸士部隊の部隊長とセルジオ、メガース。

ナレーション「犯人が人質と共に立て籠もったのはデパート三階のフードコート部分。平時ならば昼は家族連れや恋人達で賑わう所も、今は人質を閉じ込める檻となっている。対応が話し合われるそんな中――」

窓から魔導師の男が体を出した。

「此方の要求を告げる！」

ナレーション「男が姿を見せた！」

「んー、どうしたものでしょうかね」

「普通に考えりゃ少数精鋭での隠密潜入でしょうが……」

「残念ながら、それはちよつとやりたくない手ですね」

部隊長の提案にセルジオが眉をひそめた。

「建物の中のAMFが少し濃い。即座に魔法が使えなくなるほどじゃないでしょうが

……ガジェットに見つかれば犯人にはバレる可能性が高い」

「なら当初の予定通り……」

「はい、其方の狙撃手にお任せしたいと思えます。犯人が気絶し次第人質救助にこちらが動きます」

「了解です。ウチのエースを待機させときます。まだ犯人に出された時間まで少しありますから……狙撃は次に出てくるであろう十分後にしましょうか」

「では私たちもそれに備えて準備をしておきます」

「はい、よろしくお願ひします」

「此方こそ」

最後に互いに敬礼を交わすとそれぞれの持ち場へと戻る。部隊長の背中を見送って、セルジオはふんと呆れたように鼻を鳴らした。

「盗み聞きとは感心しないな、ヴァイス」

「あら、バレてたか」

「俺の十八番の広範囲解析を忘れたか。この距離なら隠蔽魔法使われてもわかる」

「流石だねえ、セルジオ先輩は」

物陰からロングライフル型のデバイスを手にしたヴァイスが出てきてにししと笑った。

「お前ここで何油売ってるんだ、さっさと持ち場に行けよ」

「ところがどっこい、ここが俺の持ち場でね」

「なに? ここにはエースが来ると……まさか」

「へへ、そのまさかですぜ」

信じられないと言った様子で目を見開くセルジオと、少し得意げに鼻をこするヴァイス。

「お前エースを気絶させて成り代わる気か……!」

「そう、実は俺がここの……ってちげえ! 俺がエース! ここのエーススナイ

「パー！」

「嘘をつくな。お前のような人間がエースと呼ばれるはずがないだろう」

「なんでアンタといいみんなやたら俺には辛辣なんすかねえっ！　俺の実力知ってるでしょう?!」

「そりゃ、実力は知っているが……」

ヴァイス・グランセニックという男はセルジオの後輩だ。一時期チームを組んでいたし、その力量も把握している。

ヴァイスは空も飛べないし、魔力量だって多いわけでは無いが、驚くべきはその命中精度。セルジオの知る限り、ヴァイスに背中を預けて彼がフレンドリーファイアをしたことも、それどころか誤射したことだって無い。

一撃必中。それがヴァイスの狙撃であり、確かにその実力はエースにふさわしいものであると言えた。

まあ、けれどそれがイコールで信頼につながるわけでは無い。

「……本当に?」

「本当ですって!　ほんとになんて信じないんすかねえ!」

「だって、女子風呂覗きの主犯格がエースなのはちよつと……」

「それ冤罪だって何度言えはいんすかね!」

ただ一つ間違いないことがあるとすれば、セルジオにとって、軽口を叩きあえるくらいにはヴァイスは気の置けない仲だと言うことだ。

三課本部。現場のセルジオから軽い事件の概要と作戦が部隊長であるゼストへと伝えられた。

ナレーション「三課の対応班は、現地武装隊と協力しながら事件解決に当たる。どうやら武装隊の狙撃により犯人を気絶させた後、人質救出に向かうという事になったようだ」

端末からの通信を受けて小さく頷くゼスト。

「わかった。くれぐれも慎重にな」

『了解』

「すみません、グランガイッ隊長」

「どうした」

セルジオからの通信を切ろうとしたゼストに三課に残っていたサブディレクターの一人が声をかけた。

「こう、他に何か声をかけたりはしないんですか？」

「声、とは？」

「なんといいいますか、『航空魔導隊三課出動！』みたいな、気合いを入れる感じのやつ」

「いや普段はしないが」

「ということはやる時もある、と」

「……極たまにだ。まさか、ここでやれというのか」

「あ、そうしてもらえたりしますか？」

むう、とゼストが唸る。確かに市民の中には「出動！」的な掛け声はこういった武装隊のイメージとして強くある。

だが、三課は厳密には他の武装隊とは少し違う。一つの事件に全ての人員が動くことの少ない故に、そういった掛け声はしないのだ。

だから、迷う。普段しないことを映像として残していいのか、と堅物のゼストは少し眉を寄せた。

『まあいいんじゃないですか。たまには私もそういうのしてみたってすし、ね』

『……それで満足していただけるならやっちゃいましょう』

「メガーヌ、セルジオ」

『あ、私たちも声合わせて了解!とか言つときましましょうか?』

なんかドラマみたいで

カッコいいですよ』

「……わかった。『航空魔導隊三課、出動』でいいんだな」

「わ、ありがとうございます。じゃあ、カメラ回すんで」

カメラの準備がされる中ゼストが小声で「航空魔導隊三課出動航空魔導隊三課出動航空魔導隊三課出動」ぶつぶつ呟く。

「じゃあお願いします。三、二、一……」

どうぞ、と手で示されたゼストが表情を引き締める。

「航空魔導隊三課、出動!」

『 了解! 』』

「はい、オーケーです。ありがとうございます」

映像が切り替わりビルを真剣な表情で見上げるなのは横顔に。その横には槍を手にしたセルジオ、デバイスの調子確かめるクイント。メガーヌは少し離れた所で部隊

長と話をしている。

ナレーション「いよいよ作戦開始まであと一分。現地の武装隊員たちの表情は硬いが三課の面々にはそこまでの強い緊張感を感じられない。彼らは過度な緊張が体の動きを硬くすることを理解しているのだろう。現に今回の突入班の一人であるナカジマ空曹長は——」

デバイスを装着して軽くシャドーをするクイント。

「緊張して状況が好転するなら幾らでも緊張しますけど、現実はそうじゃありません。なら、私たちは市民を助けられるような精神状態を保つべきだと思います。あくまでも緊張は適度に、です」

クイントの姿から再びビルの映像へと切り替わる。

ナレーション「いよいよ男との約束の時間です。果たして彼らをどのような真実が待ち受けているのか……!」

槍を握ってセルジオが小さく息をついた。

「(緊張してる?)」

「少し、な。まあカメラがいようとすることは変わらない。俺たちは……」

「(みんなで、市民を守る、でしょ?)」

「(……そうだ。一人だつて被害を出してたまるか)」

セルジオはマルチタスクに待機させてある解析魔法を発動させてみるが、やはり薄いAMFでもあるのかイマイチ調子が良くない。

「(……なんでこんなところにAMFのガジェットがいる)」

言い方は良くないが、今回の事件はただの立てこもりである。ミッドでは割とありふれた犯罪の一つで、その検挙率は十割に近い。捕まるとわかっているのにAMFガジェットという戦力が送られるのは、正直言っておかしい。

(何か狙いがあるんだろうが……今の俺にガジェットの捜査権はないから考えても無駄か)

ゼファアの平の部分で頭を軽く叩いて思考をフラットに戻すと狙撃ポイントで待機しているヴァイスへと念話を飛ばす。

「(はいよ、何か用ですかい?)」

「(行けそうか? 今回はお前が要だ)」

「(へへ、この程度の距離なら目を瞑ってても当たりますつて)」

「(そうか、心配はなさそうだな)」

「そんな事よりセルジオ先輩もそんなちっちゃな子にコナかけてないで、ちやーんと集中してくださいよ？」

「(勝手に言ってる)」

ふん、とセルジオが鼻を鳴らす。

「(セルジオ君、そろそろ)」

「(了解です。メガーヌさんは俺たちがマーカーをつけたら……)」

「(人質の転送、でしょ？ わかってるわ)」

メガーヌとセルジオが目を合わせて軽く頷くと、あたりがにわか騒がしくなり始める。男が姿を見せたのだ。

「時間になった！ お前たちの答えを聞かせてもらおう！」

男は片手で質量兵器である拳銃を握り、そしてもう片方の腕で小さな少女を拘束して窓から姿を見せた。

「(こちらアウディ。民間人の少女を確認。おそらく人質の一人だと思われます)」

「(了解。三十秒後、グランセニックに狙撃させます)」

「(アウディ了解。突入態勢に移ります)」

軽く頷くとマルチタスクを分割、今稼働している二つの他に、さらに二つの思考を生み出すと加速魔法を待機させる。

短距離転移は今回は使わない。アレは確かに便利ではあるのだが、マルチタスクを全力で使えない今のセルジオの手には余る代物だ。

セルジオが表情を引き締めると、となりのなのは、クイントもデバイスを構える。

(後、十秒)

一秒、また一秒と数えていた秒数が減っていき、そして、ついにゼロになり、あたりに銃声が響かなかった。

「——ヴァイス?」

その状況にセルジオが困惑したように声をこぼして、狙撃ポイントにいるはずのヴァイスの方へ視線を向ける。流石に肉眼では見えないが、解析魔法を使ってヴァイスを認識すれば、何やらぶつぶつと呟いていた。

その言葉を唇の動きを読んでゼファアのシステムの解析にかける。

(ら、グナ……?)

セルジオがその意味不明な言葉に眉をひそめた直後、フラッシュバックする記憶があった。

——あ、ウチのラグナもめっちゃ可愛くなっただすよ! ほら、写真! ね!

——こここの、目のとこなんてそっくりじゃないっすか?

——ラグナは俺の可愛い妹っすよ！

カチリ、と何かがハマる音がした。

「まさか、ヴァイス！ やめろ！ 撃たなくていい！」

思わずセルジオが大声を上げたが、時は既に遅い。自身の部隊の隊長に急かされたのか、ヴァイスが困惑のまま引き金を引いた。

銃声が、響いた。

ヴァイスのデバイスから射出された弾丸が空を駆ける。

普通のヴァイスならば一撃必中。外すことはあり得ない。けれど、今の彼は普通の精神状態でない。

故に本来なら、窓から姿を見せる男の頭部を狙うはずの弾丸は、僅かにそれで、隣の年端もいかぬ少女へと、運悪く人質になっていたヴァイスの妹のラグナへと向かった。

あ、とヴァイスの口から声がこぼれた。

狙撃手としての感が、この弾丸がラグナに当たるのだと訴えかけてきたのだ。

けれどももうどうにもできない。ヴァイスは既に引き金を引いた。覆水は盆に帰らな

いように、一度放った弾丸を逸らすすべはない。

ヴァイスの嘆きなど知らぬとばかりに弾丸は、ただ、残酷に最愛の妹への軌跡を描く。

「高町! ワイドシールドッ!」

だが、その現実には割り込む声の一つ。

ヴァイスのデバイスによる銃声が響いた直後、セルジオはなのはに短い声を飛ばした。それ以上時間をかければ間に合わない、と判断したのだ。

名前と、使う魔法だけ、という短い指示。普通ならそれだけで何をしてほしいかなど理解出来るはずもない。だが、なのはは、迷うことなくビルの前面に広範囲のシールドを展開した。

弾丸がなのはの桜色の障壁に防がれる。ヴァイスが撃った、撃ってしまった弾丸が空中で弾けた。

直後、その音に気づいた男が銃声によつて、自分が狙われていたことを理解してしまふ。

「狙撃、だど? そうかクソ、俺をハメやがったな!」

ラグナを人質にとつていた男が、ヴァイスの狙撃に気づいて逆上したように拳銃をラグナへと向けた。

「お前たちは俺の要求を無視した! ならどうなるかはわかつてるよなあっ?!」

男が拳銃を握る手に力を入れて、安全装置を外して引き金に指をかけた。近距離での質量兵器、という暴力にラグナの顔に恐怖の色が現れる。

瞬時にセルジオがラグナを救うための方策を叩き出す。

ブリッツアクション——間に合わない。

なのはのアクセルシューター——指示に時間がかかりすぎる。

メガーヌの召喚——座標がわからないので無理。

クイントのウイングロード——そもそもどうしようもない。

ぎり、とセルジオが歯を噛み締めた。

(やるしか、ない——！)

セルジオが手の中のゼファーを強く握り、脳内のマルチタスクを一つ解放し、ゼファーの演算機能を併用した高速の魔法構築を行う。

(マルチタスク解放——座標演算開始)

セルジオの目が一瞬紅く染まり、それと同時に今までマルチタスク二つによって蓋されていたモノが漏れ出し始める。

「シヨートシフトオツ！」

セルジオの存在が三次元平面上から消失、マイクログセカンド100万分の一秒のラグとともに、距離を歪める。

そして、引き金が引かれる直前、セルジオの体が、ラグナと拳銃の間に出現する。

「な――」

「え……………」

男が目を見開き、ラグナが驚きの声を漏らして、ぱん、という軽い音とともに拳銃から質量を持った鉛の弾が飛び出す。

圧倒的な破壊力を持ったそれをセルジオが体で受け止め、容易くバリアジャケットが貫かれて胸に赤を滲ませた。

なのはの眼前からセルジオが消失した。その事に多くの人間は驚いたように目を剥いたが、相棒であるなのはの行動は早かった。

「レイジングハート、エリアサーチ」

レイジングハートを素早く射撃特化のアクセルモードに変形させるとカートリッジを一発分ロード。手慣れた様子でアクセルシューターの魔法式を組み上げると光弾を

五つ展開する。

「アクセルシューター、シュート！」

《 Acceler Shooter 》

空薬莢が弾き飛ばされるのと同時にレイジングハートによるエリアサーチが終了。セルジオと、その後ろの人質、そして立てこもり犯の大まかな位置をつかんだ。AMF下でなければ完璧な座標を掴めたのだろうが、今は贅沢も言っていられない。

なのはのサポートの魔力弾が空を飛んで壁ごと犯人を弾き飛ばした。遠くからくぐもった呻き声が聞こえたため、おそらく犯人に命中したと思われる。

「クイントさんメガーヌさん！ 私はセルジオくんと要救助者の救出に行きます！」

もし犯人が逃亡した時はお願いします！」

「——ええ、任せて。絶対逃がさないわ」

「助かります！」

頷いたクイントの横でなのはがバリアジャケットの靴部分にアクセルフィンを展開し空を飛んだ。

(ほんとにセルジオくんは……)

先ほど射撃魔法を叩き込んだ場所を目指しながらなのはが小さく嘆息。相変わらず人の事となると自分の事が頭から抜け落ちてしまうのだ、セルジオは。

そうしてなのはがデパートの一室へ向かおうとする途中、視界の端で小さな光が目に見えた。

《 Master! 》

レイジンググハートの鋭い声に弾かれるようになのはが身を翻すと、白いバリアジャケットの裾をかすめて青白い光線が走った。見ればビルの窓の一室から見慣れた単眼が覗いている。

「ガジェットドローン……!」

なのはの眩きに答えるようにガジェットが機械的な呻き声を上げると、再び単眼にエネルギーを充填する。

そうはさせないとばかりになのはも射撃魔法で迎撃するも、放った弾丸はガジェットの前と溶けるように消えてしまう。

「——AMF?! 　　なんでこの距離で……まさかっ」

消滅した魔力弾になのはが思わず眉を寄せて、唐突に何かに思い至ったかのように地上へと目を向けた。するとそこには案の定ビルの陰に隠れている一体のガジェットの姿があった。

(二体でAMF濃度を上昇させてる。安易に近づいたら私でも魔法使えなくなってたかも)

危なかった、と独りごちたのはに向けてガジェットが充填を終えたレーザーを掃射する。もちろんその程度把握していないのはではない。迫り来る光線をアクセルフィンの操作によって素早く避けてみせる。

そして杖を変形させて今度は砲撃による迎撃を行おうとした瞬間、声が響いた。

「う、わあっ」

それは三課に密着していたテレビ局のカメラマンとディレクターのものだった。どうやら、なのはの射撃によって事件が終わったと思つて勝手に戦闘区域まで入つてしまったらしい。

その二人に、なのはが避けてそれたレーザーが迫っていた。

正直な話なのはの行動には、見事、と言う他無いだろう。AMF下のため強度の低下の恐れがある障壁ではなく回避を選択する頭の回転の速さも、そしてすぐさま迎撃に移ろうとする姿勢も誰もが持ち得るものでは無い。

故に彼女の行動には全く問題が無い。なのはの何が悪いと言うことはない。

ただ、運が悪かった。

三課も、陸士部隊もテレビ局には作戦の詳細は話していない。そんな暇もなかったし、後日データ化したものを送る予定だったからだ。

だから、彼らは敵は違法魔導師の立てこもり犯以外にもガジェットがいることを知ら

なかったし、そのせいで事件が終わったと思ひ込んでしまった。

そう、これは運が悪かった、としか言いようがないだろう。

「アクセラ——」

反射的になのはが叫びそうになって、自分には今^{フォーミュラ}その力がないと言うことを思い出す。

「ウインググロードッ!」

クイントが叫び、そして空中を駆けた。けれど、彼女の突入の位置からディレクター達の距離は遠く、とても間に合わない。

「フォード行って!」

「——!」

メガーヌが素早く召喚獣を召喚する。黒光りする甲殻を持ったフォードが地を走る。だがその距離は遠い。

運が悪かった。

位置が悪かった。

悪い人間など一人もおらず、ただ、運がどうしようもなく悪かったのだ。

そうして、レーザーが呆けたようにカメラを構える二人に肉薄していく。

なのはが、息を呑んだ。

なのはでは、クイントでは、メガーヌでは、間に合わない。

だが、そんな中『彼』だけは『運が悪い』なんていう理由で諦められるほど、物分りが良くなかった。

「イグニツションツ！」

誰かの叫び声と共になのはの頬を『紅い』烈風が撫でて、激しい閃光と共にディレクター達を思いつきり地面に引き倒した。

「何やってるんだ！ 死にたいのかあんたら！」

『紅い』瞳のセルジオが二人の男性を腕で引き倒した状態で叫んだ。

そう彼だけは、『運が悪い』なんて理由で人を死なせたりしない。

それが彼の誓いで、彼の全てだから。

絶対に、絶対守ると誓った約束だから。

密着!航空魔導隊三課24時! 「後編」

「何やってんだ! 死にたいのかあんたら!」

紅い瞳のセルジオが怒鳴るとディレクター達が目を丸くしてこくこくと何度も頷いた。

直ぐにガジェットに向き直ろうとするセルジオ。しかし、ビルから飛び出した数体のガジェットはいかなる原理か鉄の体を宙に飛ばして都市の方へと逃げていく。

その姿にセルジオが小さく舌を打った後、背後で弾け飛んだレーザーの残滓へと目をやって、遙か後方で待機するヴァイスへと念話を送った。

「サポートサンキューなヴァイス」

『(アンタまじで無茶苦茶しますねえ!」

俺が間に合わなかったらどうするつもり

だったんすか!』

「んー、お前ならレーザーくらい撃ち落としてくれるかなって」

『(先輩はもう、ほんとに……)』

よっぽどなにかを言おうとしたヴァイスだったが、セルジオの背後、後方のメガーヌのそばにいる少女の姿を見て言葉を飲み込んだ。

どうやらセルジオが座標を送ったお陰で召喚魔法によつての救出ができたらしかった。

「セルジオくん！」

「高町か、どうした」

「どうしたじゃないよ！　また無茶して——セルジオくん、目が……」

「ほらほら、なのはちゃん。この子を叱るのは良いけど今はそれよりいべきことがあるわ」

「そういうのは三課に帰ってからやりましょ、ね？」

「……はい。そう、ですね」

一瞬何かに気づいたようになのはが息を飲んだが、それを言葉にするよりも早く、ウイングロードに乗ったクイントと、フォードを伴ったメガーヌがセルジオの側までやってくる。

「状況を教えてもらえますか、メガーヌさん」

「さつき私が回収した人質の子に怪我はない。それになのはちゃんが撃った魔導師の男

も気絶してるわ。ただ、問題は……」

「AMFのついたガジェットが逃げてるってこと。しかも最悪なことに人口密集地の方に」

「なるほど。ガジェットの数と、その追跡は?」

「数は小型のものが八体。マシンアームが伸びるタイプだね。追跡は陸士の人たちがやってくれるけど、AMFのせいで追いつけてない。このままじゃ警戒網から出ちゃうと思う」

「わざわざ市街地に行くとは少し厄介な思考ルーチンだな」

話を聞いてふむ、とセルジオが腕を組んだ。

「高町、お前ならAMF抜ける弾丸作れたりするか?」

「それって、ティーダさんがやってたみたいなヴァリアブルバレット?」

「そうだ。術式は持つてるか?」

「一応持つてはいるけど、正直負担が大きくて飛びながらとか、エリアサーチをしながらとかは無理かも」

「わかった。そこあたりは俺がカバーする。クイントさん、今から言う場所にウイングロードお願いできますか」

「いいけど………こっつてAMFがあるんじゃないの?」

「はい。なのでAMFでも消えないような特別固いやつをお願いします」

「ちよ、ちよつと待つてセルジオ君、貴方何するつもりなの？」

メガーヌが問いかけると、セルジオは何でもないようにさらりと答えた。

「何つて走つて追いかけるんです、空飛べないみたいですし」

「走つて？」

首をかしげるメガーヌにセルジオが不敵な笑みを浮かべて頷いた。

「なので、メガーヌさんちよつと召喚して欲しいものがあるんです」

ナレーシヨン「予期せぬ緊急事態が三課を襲う！ 不運なことに人質の少女がスナイパーの妹だったのだと言う。なんとかフォローに回り立てこもり犯は確保したものの

の中に潜んでいた機械兵を取り逃がしてしまう」

空撮されたクラナガンの都市街。デパートの周囲は人が少ないものの、ある地点を超

えると一気に野次馬が詰め寄せている。

管理局員が避難をさせようとしているものの人の多さから避難がうまくいっていない。

ナレーション「今回逃げた機械兵は高速道路の立体道路沿いに飛行。それぞれがバラバラに飛ぶ事で一掃が難しくなってしまうている」

クラナガンの映像から都市の簡易マップとガジェット的位置を指し示す光点。八体どれもが離れており砲撃などでの殲滅は難しいことがわかる。

ナレーション「現地武装隊も頭を悩ませる中、高町空曹長の相棒であるアウディ分隊長が驚きの行動に出た！」

真剣な表情でウイングロードを作り出すクイントの側で、『バイク』のエンジンをかけるセルジオの姿。

ナレーション「そう、分隊長は魔法で組み上げた足場の上をバイクで走ろうと言うのだ」

セルジオの顔のアップ。その表情はいつもとなんら変わらない。

ナレーション「刻一刻と迫るリミット。その中でやはりアウディ分隊長の顔に緊張はない。これがエリートと呼ばれる彼の實力の一端なのだろうか」

体を内部から歪めるような振動がシート越しになのはへと伝わってくる。

「せ、セルジオくん」

「ん、どうした」

メガーヌに転移で持ってきてもらったセルジオのバイク、その後部のなのが不安そうにセルジオの名を呼んだ。

「ほ、ほんとにやるの？」

「……まあそれしか方法がないからな」

「でもお……」

「今のガジェットが大体時速50キロ。それに追いつこうと思うなら俺のバイクで行くのが良い。ほら、さっさと諦めて捕まっとけ。射撃はお前だけが頼りなんだぞ」

「うう……」

レイジングハートを手にしたなのはおつかかなびっくりバイクに身を委ねた。だが、体がイマイチ安定しないのか何度も座り直そうとしている。

「セルジオ君、そろそろいけそうよ。準備はいい？」

「はい、俺は……って、何やってるんだ高町。さっさと俺に掴まれ」

「へ、セルジオくんに？」

「当たり前だ。他に何に捕まるって言うんだ？」

「で、でもむ、胸とかが……」

「安心しろ、俺は年下に劣情を抱くほど飢えてはいない。そんなことはどうでもいいから、さっさとしてくれ」

「なんか凄く失礼なこと言われた気がする……」

釈然としない表情のなのはが左手でセルジオの腰辺りに掴まって自分よりも随分と大きな背中へと身を乗せた。

(セルジオくんの背中、けっこう大きいな)

とくん、となのはの胸が小さく跳ねる。セルジオと二人乗りをしたことがないわけではない。けれど、今はなぜか、いつもより心臓がうるさい気がした。

思わずなのはの思考がどこかに飛んでいきそうになるが、それを一際大きなエンジン音と振動が引き止めた。

「よーし、行くわよー、『ウイングロード』!」

クイントの掛け声とともに青色の帯が現れてその魔法名の通り、空への道を作り出した。その色は魔力が最大限に込められているのかいつもよりも濃い。

「本当にバイクで空に行くんだな」とウイングロードを見たなのはの思考が一瞬でフラットに戻ってくる。

「ねえ、セルジオくん、これもしかしてウイングロードから外れたら私たちが地上に真つ逆

やまっ。」

「もしかしなくてもそうだな」

「それって私たちでも死ぬんじゃない?」

「……………バリアジャケットを信じろ高町!」

「全然信用できない!　ねえ、セルジオくんウイングロードから落ちたりしないですよ

!?!」

「安心しろ高町、俺はゴールドドライバード!」

「何一つ安心できる要素がないよ!」

「さあ行くぞ高町……………」

「ちよつと待つて心の準備が——きゃあああああああ!」

グツとサムズアツプしたセルジオが思いっきりアクセルを入れると、バイクが一気に

加速、空へと繋がる道を一気に走り出す。

響く轟音の中でなのはの悲鳴が木霊する。その背中を見送りながらメガーンが小さ

く敬礼した。

「頑張つて来てね、なのはちゃん。後で空のドライブの感想聞かせて頂戴」

いまセルジオのやっていることの難易度がどれだけ高くても、失敗するとはさらさら

思っていないし、あまつさえ軽口すら叩く余裕がある。

そのあたりにセルジオに寄せられている信頼と、いわゆる三課『らしさ』が現れていた。

空に現れた青色の道の上を一台のバイクが疾走する。

太陽光を反射して銀光を瞬かせるセルジオの愛騎の速度はあつという間に100キロを超えて、尚も速度を上げながらガジェット達との距離を縮めていく。

「高町目を開けろ!　そろそろ俺の広範囲解析に敵影が引つかかる!」

「で、でもかなり速いよ……」

「安心しろもし落ちたらお前だけは何んとか無傷で降ろす!」

「私が聞きたいのはそういう決意じゃないんだけど……」

嘘でもいいので「絶対に落ちない」くらいの言葉は言つて欲しかったのは。けれどいつまでも怯えているわけにもいかない。言われた通り、そろそろと目を開いて、え、と小さな声が漏れた。

「なに、これ……」

クラナガンの市街を縫うようにして走るバイク。頬を撫でる風はいつもよりも強く、周囲の景色も飛ぶように変わっていく。

そう、これはまるで――

「私が、風になったみたい」

なのはの言葉に運転していたセルジオがわずかに頬を緩めた。

「感動してるところ悪いが敵影だ。ヴァリアブルバレット、行けるな？」

セルジオに言われてなのはが軽く息を吐いて、目線を前へと向けた。

「——うん。任せて」

なのはの言葉に応えるようにレイジングハートもデバイスコアを淡く光らせる。

「俺がサポートしてお前が決める。いつも通りだ。緊張することはない」

「(そうだね、いつも通り)」

そしてなのはの答えを聞くとセルジオも既に別の用途の為に起動していたゼファアの演算補助のシステムを駆動する。

(マルチタスク駆動——ワイドエリアサーチ)

セルジオの翠の目が紅混じりの白に染まり、自身を基点に前面への座標解析を始める。

空気の構成要素、ビルの材質、その他諸々の高速で叩き込まれていく情報の中から目当てのガジェットの反応を拾い上げようとするが、いつものようにすんなり発動してくれない。

(く、そ……！ 破壊衝動を抑えてる分割思考のせいでいつもより演算が遅い)

忌々しげに舌を打つセルジオ。

いくらセルジオが解析魔法に秀でるとは言えマルチタスクを余分に二つ使いながらの広範囲解析は難しいらしかった。

(仕方ない、マルチタスク凍結解除、EC抵抗破却——演算式駆動)

セルジオの目の紅色の割合が増して、思考がじわりと端から何かに沈み始める。そしてさらに畳み掛けるようにリンカーコアが少しばかり痛みを訴えかける。

セルジオが歯を噛み締めて演算を続行して、包囲網ギリギリでガジェットのを捕捉した。

「——高町!」

ゼファアーを通してなのはへとデータが送られてきて、レイジングハートを右手で掲げるとセルジオの肩に乗せて固定した。

「——敵影捕捉、撃ちます」

なのはがレイジングハートの助けを借りて、普段より難解な演算をゆつくりと、しかし確実に組み上げていく。

まず相手を貫く弾丸を、そして周囲を魔法を弱められるAMFのフィールドから守るための魔力層でコーティング。生み出した七つの魔力弾を遍く貫く一撃へと変える。

《Variable Bullet》

「——シュー——トッ!」

起動句を引き金として桜色の弾丸が高速で射出され、セルジオに渡された座標のガジェットトリガーワードのAMFフィールドを抜けて、鉄の装甲を撃ち抜いてみせる。

拳大の風穴が体を貫通したガジェットがばちり、とスパークし、次の瞬間には音を立って爆発した。

その事を解析魔法で感じ取ったセルジオが小さく息をついてバイクのスピードを緩めていく。

(なんとか、終わったか……)

広範囲解析の負担と紅く染まり始めてる思考からくる頭痛に耐えながら、作戦終了の念話を送ろうとする。だが、それよりも早くなのはに軽く肩を叩かれた。

「セルジオくん、あと一体は？」

「——？ ガジエツトは今……」

「何言ってるのセルジオくん、ガジエツトは『八体』いたよね？ 残りの一体を探さな

きゃ」

「え……ああ、クソそうか！ 今すぐ残りのを探す！」

セルジオが苛立たしげに舌打ちをした。

(ミスった、負担のせいで上手く思考が回ってなかったのか……いや、反省は後だ。今は残りのガジエツトを早く探せ)

がんばると頭蓋骨の内側を打ち付けるような痛みが襲ってくる中、必死に広範囲解析の演算式を組み上げていく。

(でもどうして引つかからなかった。いくら疲労していたとは言え俺が解析魔法で読み逃すなんてあるわけがない)

かちり、と何かがハマった音がした。

「まさかっ!?!」

セルジオが叫んで、バイクの真下へと目を向けようとした瞬間、ぐらり、とウイングロードの輪郭が歪んだ。

「きやあっ!」

「やっぱ隠密特化か、通りで、いやそれよりも——」

真下に見える四足歩行のガジェットからウイングロードへと目を向ける。真下のガジェットのAMFのせい、ウイングロードの構成が弱くなったのか、バイクの重さに耐えきれず軋み始めていた。

飛行魔法はAMF下の為満足に使えない。よしんば使えたとしてもガジェットのレーザーを躲せる程の機動が可能とはとても思えない。

「高町、ヴァリアブルバレットを」

「無理だよ! あれ最低でも十五秒は演算時間がないと……」

「くそ、なら何か別の方法を……」

めし、とウイングロードに大きく亀裂が走った。

「やばい、落ちる……!」

セルジオが焦ったように声を漏らし、そしてゼファー内部の『切り札』を使用しようとした瞬間、銃声が響き、ガジェットが粉々に碎け散った。

「——え?」

「これは、ヴァリアブルバレットか……?」

なのはが呆気にとられたように目を開く。それに対し、セルジオはガジェットを撃ち抜いた見覚えのある魔力光の残滓に、遠くへと目を向けた。

『(よう、セルジオ先輩、勝手に撃ちやしたが、余計なお世話でしたかね)』

頭へ響く、スカした声。聞き覚えのあるその声に、セルジオが参ったとばかりに薄い笑みを浮かべた。

「ったく、相変わらずお前は信頼はできないが、カツコイイやつだよ、ヴァイス」

夕方。映像は砕け散ったガジェットドローンと、そのレーザーの流れ弾によって被害を受けたビルへ。

ナレーション「事件は終了した。負傷者はゼロ。けれど予期せぬ機械兵の行動によって周囲の建造物には被害が出てしまった……」

砕けたビル、崩落した立体道路。魔導師の男との交戦によって割れてしまったガラスや、デパートの壁。

そしてそれを見て表情を曇らせる三課、武装隊の面々。

ナレーション「この結果では、任務は完全に成功とは言い難い結果となってしまったと、後に武装隊の隊長は語った」

事件は終わり、セルジオは撤収の準備をしていた。そんな時、セルジオへと念話が繋がった。

『(セルジオ先輩)』

「ヴァイス？」

『(その、言いたいことがあって)』

「んー？」

『(ラグナの、妹のこと、ありがとうございます)』

「仕事だからやったんだ。お前にわざわざ礼を言われることじゃない」

何でもなさそうに言ったセルジオが、それに、と言葉を続ける。

「お前だつて俺を助けてくれたろ？ おあいこだ。今さら気にすんなよ」

『(……ですね。——と、すみません隊長に呼ばれたんで俺はこれで)』

「応。せいぜい言い訳してこい」

『(たはは、そうするとします)』

二人で軽く笑うと念話をきる。そして、再び撤収の準備をしようとしたセルジオの視界の端で、走り回るカメラマンの姿が映った。そんなセルジオへ声をかける人物が一人。

「お疲れ様でした、アウデイ二尉」

「ダイレクターさん、ですか」

「あれもしかしたら頭痛でも？ 随分とお辛そうですが……」

「いえ、大したことじゃありません。ただ、こういうのも使うんだな、と」

そういうセルジオの目線の先には被害が出たビルなどを撮り続けるカメラマンの姿があった。

「……すみません、私たちは……」

「真実を映す、でももんね。良いんです、貴方達に非はありませんよ」

小さく頷いたセルジオが空を仰いだ。

「やっぱり難しいですよね」

「へ?」

「本当なら人質の子も怖い思いなんてさせずにしつかり助けて、建物の被害なんかも出さずに、犯罪を起こしてしまった人の心だつて助けてあげたい」

ふ、とセルジオが小さく嘆息。

「でも現実はどうじゃない。俺たちはヒーローじゃない。だから全てを助けられないけど、せめて、涙を流す人が一人でも減ってくれば、そう思います」

そしてセルジオはディレクターに頭を下げて背中を向ける。その背中へと、自分より一回り年下の青年へとディレクターが声をかけた。

「アウディ二尉」

セルジオが振り返ると、そこには真剣な表情で見つめてくるディレクターの瞳があった。

「今のカメラの前でもう一回お願いします。『涙を流す人を一人でも減らしたい』 つてくだり、最初から」

風邪をひかないのはなんとやら

地球に『馬鹿は風邪をひかない』という言葉がある。これは別に本当に馬鹿が風邪をひかないわけではなく、馬鹿な奴は自分が風邪であることに気づかないとかそういうつた揶揄の意味が込められている。

まあこれはあくまでも前置きだ。

なぜ今この話をしたのかと言うと、答えは一つに尽きる。

「セルジオ君が風邪をひいて今日も休み？」

「そ。朝連絡があつたわ」

「それはまた、珍しいこともあるもんねえ」

「これで二日連続ね。全く、珍しく」

「セルジオくんがお休みなのってそんなに珍しいんですか？」

テレビ局の撮影が終わって数日。三課のオフィスでなのはが首を傾げた。すると遠くにいたクイントは壁を蹴って勢いをつけると椅子に乗ったままなのはの元へとやつ

てくる。

「珍しいどころの話じゃないわよ。これは異常事態よ、異常事態。明日は槍でも降るに
違うわい」

「そ、それは流石に言い過ぎなような……」

「じゃあ聞くけど、なのはちゃんの知る限りセルジオくんが三課にいなかった事ある？

モチロン、怪我とかで入院してる時は除いて」

「ええと、ない、です。たぶん」

「じゃあセルジオ君がナーバスになってた事とかは？」

「……ないですね」

「ではセルジオ君が風邪引いたの見た事ある？」

「えっ、嘘、ない？」

「因みに付き合いがもう五、六年になる私も見た事ないわ」

神妙な顔で腕を組むクイントの横でため息交じりでメガーヌが口を開いた。

「因みにミッドでは大体一年に一度は風邪をひくという人が三割。滅多にひかないとい
う人でも二、三年に一度は、咳や、発熱、といった何かしらの症状を感じる、いわゆる
『風邪』にかかると言われているわ」

「へえ、そうなんですか」

「ところがセルジオ君との付き合いが長い私達はあの子が風邪はおろか、具合悪そうなそぶりを見せたのを見たことが無い」

「これは、おかしい、何かトリックがあるに違いないわ……」

「一体何が……」

戦慄するように眩くなのはの後ろで話を聞いていた三課の面々も腕を組んで、隣の同僚へと声をかける。

「セルジオ風邪だつてよ、珍しい事もあるもんだ」

「へえ、ワシの知る限りじやはじめての経験じゃな」

とても恐ろしい集団心理である。

「もうあいつが部屋にこもってから二日になるのに、その間音沙汰もない。どうしてるんだろうな」

「もしかして風邪で動けなくなってるのかもなあ」

「俺あいつとは長い付き合いだからな、ちよつと心配だよ」

そう！　もうお分かりだろう！　誰もお見舞いに行っていないのである！

「一人暮らしの男にとって初めて死を感じる瞬間は風邪になった瞬間だ。飯を作る元気も、なにかを買いに行く元気も、病院に行く元気すらない。普通そんな中すがりつくのが家族なんだが、残念ながらそれができる状況にないものもいる」

「俺なんかも昔そうだった事がある。あの時友人に念話が繋がらなければどうなっていたか……」

そう！ もうお分かりだろう！

こんな訳知り顔で頷いている局員でさえ！ お見舞いに行っていないのである！

「あいつ一人でどうしてるかなあ、心配だよ、ボクは」

「じゃなあ、早く元気になるといいが」

こう心配そうに呟くメガネとゴリラでさえ！ お見舞いに行っていないのである

！

「セルジオくんのお見舞い行こうかなあ」

ぼつりとなのはが呟いた瞬間、三課の視線全てがなのはへと集まる。その目は「え、まだ行つてなかったの？」とでも言いたげで。

みんな、なのははの一番にお見舞いに行ったものだと思っていたのだ。

「え、えーと、私、この後お見舞いに行ってもいいでしょうか？」

おずおずと発せられたなのはの言葉を否定する人は一人もいなかった。

地球での一件がひと段落した直後、セルジオは誰もいない三課の中で書類仕事で死にかけていた。

同僚はみんな入院。けれど始末書の期限は変わらないという鬼畜日程である。

「ありえねえ、ありえねえ、部隊長合わせて18人分の始末書とかほんとにありえねえ」
そも、三課の形態は少しばかり特殊である。

基本的には彼らのような武装隊は部隊長をトップとして、二人の分隊長の下に小隊がありバツクヤード、という形が一般的である。

けれど、三課は基本的に二人組で事件に当たることが多いためにそう言った小隊は無いのだが、書類上ではそうもいかない。

よって、立場の上では階級が高いメガーヌとセルジオが分隊長を引き受けている。

そう、セルジオは立場と階級だけで見れば三課のトップ2なのだ。

それが何を引き起こすのかというと。

「何、『戦闘機人』に関する報告書に、命令無視に関することと、高町の事件と、あーなになに、引き継ぎ資料も明日までだど？」
笑いしか出ねえ」

まあつまりこういうことになる。

もしセルジオも大怪我して入院でもしていれば期限は伸びたのかもしれないが、分隊長は無傷でピンピンしているとくればさつきと出せとせつつかれるのも道理といえよう。

「——っは、よし根気入れろ」

血走った眼でひたすらにキーボードを叩いていたセルジオが栄養ドリンクを飲み干して机に叩きつけると、既に五、六個並んでいた瓶がガチャリと揺れた。

「教授のくれた栄養ドリンクって便利だな。眠気も疲れも吹っ飛ばすもんな、うん」

ヤベー薬でも入ってんじや無いのだろうか、それ。

セルジオの脳裏に狭苦しい研究所の短髪の瘦躯の男が浮かんできて、苦笑いを浮かべた。

「——ッ」

そんなセルジオの頭に鋭い痛みが走り、マルチスクの一つに押し込めていたはずの思考がほんの少し溢れそうになる。それを大量の仕事の情報で押し潰して小さな嘆息。

「二度行った方が良いかもなEC関係のところ。メガーヌさんも勧めてくれたし」

あいたたた、と軽く頭を叩きながら仕事を続けていると不意に小さなノック音が聞こえてくる。

はて、とセルジオが首をかしげる。

未だ三課の面子も、なのはも入院中である。

「高町の退院は早いとは聞いていたが、流石にこんなに早く無いだろうしな」

セルジオが仕事の手を止めて三課の扉を開ける。

「お疲れ様です、セルジオさん」

「おひさしぶり、です、おにーさん」

「ありや、ギンガちゃんにスバルちゃん？」

そこには、クイントの娘二人、セルジオにとっては時々会う親戚の子、くらいの認識の二人がいた。

「どうしてまたこんなところに、というか学校はどうした？」

「もう夏季休暇です。それにスバルはまだ学校にはかよってないですし」

ギンガは今八歳、スバルは六歳。セルジオとは九と十一、なのは二つと四つ違う。

「それで、なにしにきたかってきかれると、これです」

でん、とセルジオの前にスバルとギンガが二人で協力して持っていたバスケットを掲げてみせる。

バスケットの蓋の隙間からはぎつしりとサンドイッチが詰まっているのが見えるのでどうやらお弁当らしい。

「これはっ。」

「さしいれです。スバルと二人でつくりました！」

「おかーさんが、おにーさんにもって行って、っていったので」

「おお、それはなんか悪い事したな」

「おじやまでしたか？」

「いやそんな事ないよ。すぐに飲み物持ってくるから好きなところで座って待つてな」

「ありがとな、と笑って軽く二人の頭を撫でたセルジオがバスケットをさらうと、三課のオフィスの一角にある長机の上に置いて二人をソファに座らせる。

「コーヒー、オレンジジュース、アップルジュース、ココア、紅茶、水とまあいろいろあるがどれが良い？」

「オレンジジュースがいいです」

「わ、私は、こ、コーヒーで！」

「はいはい、二人ともオレンジな」

「むう」

むくれるギンガに軽く笑ってみせるとコップに入れたオレンジジュースを二人の目の前において、自分の分のアイスコーヒーを手早く作った。

「じゃ、ありがたくいただきますよ」

「どうぞ頂いちゃってください」

そして三人でバスケットの中のサンドイッチに手を伸ばして三人でもしやもしやと食べ始める。

「えと、どうですか？」

「ん？　美味しいよ。ギンガちゃんもスバルちゃんも料理うまいな」

「え、えへへ、そうですか」

「よかつたねギンねえ。はりきってたもんね」

「ちよ、ちよつとスバル！　ち、違いますからね！　別にセルジオさんのために作つ

たとかじゃない……………わけでもないですけど」

赤い顔でごによごによごと言ひ淀むギンガをサンドイッチで頬をばんばんに膨らませたスバルが首を傾げながら見上げる。

スバルちゃんは六歳デリカシーなんてわかんない。

「ま、届けてくれてありがとう。ここんところ栄養ドリンクしか飲んでなかったから助かったよ」

「す、すごいですね…………」

「正直ようやく『人間』っぽいことしてる気がするな」

「セルジオさんはちゃんと人間なんですから体をだいにしなきゃだめですよっ」

「ここら、そう言う君だつてちゃんとお普通の可愛い女の子だ。そう言う卑下するこ

と言わないこと」

「か、かわ……は、はいっ！」

「わかったならよし」

少し戯けた風に言ったセルジオがまた顔を赤くしたギンガにしし、と悪戯つぽく笑った。

「あの、おにーさん、ひとつおねがいしていいですか？」

「スバルちゃん？」

スバルから声がかかり首をかしげる。

目を向ければ、スバルは小さな拳で服の裾を握っている。しばらく、クイントと同じ色の瞳で心配そうにセルジオを見上げていたが、やがて意を決したようにスバルが口を開く。

「あの、これからおかあさんが、けがとかしそうだったら助けてあげてほしいんです」

「クイントさんを、助ける？」

「はい。わたし、おかあさんが、大きなけがをしたのはじめてみて、だから、だから……」

「え、す、スバルちゃん？　な、泣かないで？」

言葉を紡いでいたスバルが途中で、玉のような水を目尻に溜めてぐずぐずと鼻を鳴らして俯いてしまう。

「ああ、ほらスバル泣かないの。ごめんなさい、この前おみまいに行っておかあさんのことが心配になっちゃったみたいで」

「なるほど、ん、じゃあなんで俺？ ゼストさんとかもいるけど……」

「だって、おにーさんだけ、してないんですね、けが」

（なるほど、そう来たかあ）

スバルの疑問は『お母さんは強い。けど怪我してる。なら怪我してないセルジオはもつと強い?』というシンプルな考えから現れるものだ。

その考え自体は間違いでは無いのだが、クイントよりセルジオが強いかと言うと、そう言うわけでもないと言いたいのが彼の本音だ。

「あのな、スバルちゃん、強さって言うのは一概に言えるもんじゃないと思うんだ」

「――?」

「例えばさ、俺は今AAランクの魔導師で確かにクイントさんよりランクは高い。けど、それはあくまでも形式としてそうあるだけで、本当に戦えばどうなるかはわからないと思うよ」

「??」

「えーと、なんていえば良いのかな、俺としては『強い』っていうのは魔法だけじゃなくてさ、もとの技術とか、後は心の強さとか、そういうものを全て鑑みて、『強い』ってい

うべきだと思うよ」

「でも、階級はセルジオさんの方が上ですよね？」

ならセルジオさんの方がお母さん

より凄いいんじゃないんですか？」

「んー、まあそう言われたら反論がしにくいんだけど……」

「だめ、ですか？」

「……わかったよ。俺に上手くできるかはわかんないけど、君たちのお母さんを助けるように頑張るよ」

スバルになんとか説明しようとしたが、やがてセルジオが困ったように頭をかいて、まあいいかと結論づけた。

管理局員になりたいのならいずれわかるようになるだろうし、そうでなくともいくらか大きくなってからもう一度話すのもアリだろう。

時間は、きつとたつぷりあるのだから。

「あ、く、そ、夢か……」

汗の気持ち悪い感覚を感じながら、セルジオが呟いた。

弾丸を受けた胸がじくじくと痛み、思考がじわじわと何かに沈んでいく感覚がする。体はやたらと熱っぽく気を抜けば意識が飛びそうだ。

ヴァイスの妹を助けようとした日、魔導師の男が撃った拳銃の弾丸はセルジオの胸に突き刺さった。

通常ならば、バリアジャケットで防げていたそれも、AMFのせいで強度が低下して、しかも至近距離だったせいで防ぎきる事ができなかった。

違法武器である質量を持った鉛玉はバリアジャケットを超えて、胸骨の間をすり抜け、そして心臓をかすめながら、『リンカーコア』をかすめていった。

そのせいで一時的に魔力が使えなくなつて、そしてセルジオを見た。窓の向こうにガジェットか浮かんでおり、そのレーザーがなのはの横をすり抜けてテレビ局の二人へと向かうのを。

頭が真っ白になつて、気づけばセルジオは眩いていた。

まだ使うな、と言われていたゼファアの機構の一つを目覚めさせる『イグニツション』、という短い起動句トリガーワードを。

「く、すり……、教授からの、やつが、まだ……」

ふらふらとベットから立ち上がりだだっ広い部屋を歩いて、床に転がっていたアイロン台に足をぶつけて派手に転んだ。

がんと頭が痛む。

(く、そ……、これは、やばい、かも……)

吐き気がするような不愉快な世界の中で、視界が色を失い、ぐるぐると回り始める。なんとか分割思考で制御しようとしても、それすらも満足に行かない。

(……すこし、休めば良いはず、なんだ。まだ、大丈夫、なはず)

自らに言い聞かせるように心の中で呟いて足に力を入れた。意識は未だはつきりしないが、どうやらまだいうことは聞いてくれるらしい。

そのまま一歩足を進めようとして、がくと膝から力が抜けた。そのまままた体が地面に崩れ落ちていくこうとして、誰かに受け止められた。

「——ル——ん——」

「————」

誰かの声が聞こえる。だが、今のセルジオにはそれが誰かすらうまく判別できない。

けれど、顔を上げた先に見えた瞳が、水晶の様に透き通ったその瞳がとても綺麗で、セルジオの体から力が抜ける。

何故か、その色はとても好きで、宿った輝きが星の姿を思い出させたから。

「すまん、まか、せた……」

そう呟いて、セルジオは自らの意思を手放した。

泡沫の夢

「ほら、早く起きろ」

誰かに体を揺すられている。

おかしいな、俺はずっと一人で暮らしているはずなのに。

俺を起こしてくれる人なんて、とうの昔にいなくなったはずなのに。

気だるい体に喝を入れて半身を起こして目を開くと、電灯の眩しい光が飛び込んできて思わずまた瞼を閉じそうになる。

「こら、寝るんじゃない。あたしは今日早いんだ。朝ごはんが一緒に食べられないだろう？」

朝ごはん？ 誰と、誰と一緒に食べるんだ？

「ん？ 誰って、あたしとセルジオだよ」

目を、開ける。すると、眩しい光の中に溶けるようにぼんやりと淡い金髪が踊ってい

る。見慣れていて、けど、ずっと見れなかった髪の色。

「親子なんだし、一緒にご飯を食べるのは普通だろ？」

あの人が、ふつと楽しそうに笑った。薄ぼんやりと見えるその笑顔は、どこか星とか、そういった美しさを持っているような気がした。

その人のその笑顔が堪らなく懐かしくて、腹が立つほど嬉しくて、そして同時に落胆する気持ちも現れる。

「ほら、さっさと行くよ。時間を無駄にするのは良くない」

言われるままにあの人の後ろをついていく。すると食卓にはスクランブルエッグとトマトのスープ、そして黄金色のトーストが並んでいる。どれもあの人の得意料理だったもの。

「ん、そう言えば今晩は???も来るぞ」

嗚呼、懐かしいな。そう言えば俺たちの、いやあの人の家には、???さんもよく来ていたんだっけ。そんな事も、最近では忘れかけていた。今思えば、あの二人は一体どんな関係だったんだろうか。そんなこと、今更考えたところでなんの意味もないのだけれど。

「何ぼーつとしてるんだ？　サクッと食べるといい」

あの人のが笑った。

ああ、これは夢だ。

だって、あの人が俺に笑いかけてくれることなんてもう無いんだから。

これはただの夢だ。

俺が死なせたんだから、もういないはずなんだよ、あの人は、セピア・アウディは。

——俺の母さんは。

だからこれは全部夢だ。なら、目覚めなきや駄目だ。

だって、俺はまだ全然あの人の代わりになれてないんだから。

そう心の中で呟く。すると、ぐんにやりと視界が歪んで、周りが真っ赤に染まっていく。なんだかエクリプスを使ったときみたいだ、と何となく考えていると、頬に焼けるような熱が俺のことを取り囲んだ。

感じるのは風が運んでくる熱か、もしくは耳を塞ぎたくなるような悲痛な声だけだ。

そして目の前には紅く濡れたあの人が転がっている。何度も夢に見た光景だ。何度も目に焼き付けた思い出だ。

「セルジオ」

ぼうつとあの人を見ていると背後から声がかかった。

「……セピアは」

ひどい表情だな、???さん。

昔、俺はこの人になんて答えたんだっけ？

確か、こんな感じだっけ。

俺が昔の記憶を頼りに問いかけると、厳つい表情に悲痛の色が刻まれる。しばらく、彼は何も言わなかった。けれど、俺に見つめられているせいか、それとも赤いあの人の体を見たせいか、ゆっくりと口を開いた。

「????????」
 嗚呼、懐かしい。そんな事を言われたのだった。
 ほんとうに、懐かしい思い出だ。



目の前で眠っている人の顔をちよい、とつついてみる。じつとりと汗が滲んでいる肌は青白く、自分のものよりかは弾力がなく堅めな感じがした。

「また、無理してたのかな」

多分そうだ、と心の中で結論づける。きつとまたなのはや、クイントやメガーヌ、ゼストの三課の仲間には悟られないように何か無茶をしていたのだろう。

「元気になったらたっぷり叱っちゃうからね」

なのは布団をかけ直してやるとベッドの側から立ち上がって部屋の中の小さな台所へと向かう。

すると、その途中床に転がっていたアイロンに気づいて、足が止まる。

「……制服のために、かな」

ぼう、となのはが呟いて、今自分のいる場所——宿舎のセルジオの部屋を見渡す。

そこは、ただ広く、大きな部屋だった。以前仕事の為に女子寮に泊めてもらったことがあるが、その部屋よりも何倍も大きく見える。

それは決してセルジオが分隊長だから大きな部屋を与えられている、とかそういうた理由ではない。

その部屋は、唯々空虚で、そのせいでだだっ広い印象を与えているのだ。

備え付けのクローゼットと、小さな台所と冷蔵庫。そしてそれ以外には何も無い。

あるものといえば乱雑に積み上げられた教本と、部屋の隅に転がしてあるアイロンくらい。

おおよそセルジオがここで生活しているなど信じられないような生活感のなさ。

「なんだか、寂しい感じ」

それは小さな眩きだったが、だだっ広い部屋でその声はよく響いた。

倒れたセルジオをベットに運んでからもうすぐ一時間が経とうとしていた。

少し早めに仕事を抜けさせてもらったので、急いで家に帰らなければならぬ時間でもない。なのでしばらくの間、せめてセルジオが起きるぐらいまではここにしようと思つたのは。

かといって何かする事があるわけでもない。できるのはせいぜいセルジオの近くについてやることと、頭に乗せた濡れたタオルを変えてやることくらい。

有り体に言うとう物凄く暇であつた。

むむむ、となのはが腕を組んで唸る。

せっかく来たのだから看病のついでに何かセルジオのためになる事をして帰りたいと思つたのだ。けれど、なのはも男の部屋に来ることなど初めての経験である。何をしたいけば喜ばれるかなど皆目見当もつかない。

「こういう時ドラマなんかだつたら……」

なのはの脳裏に先週姉と母親とみた夜のドラマの記憶が呼び起こされる。ちやうど主人公が風邪をひいた恋人の見舞いに行く回だつたのだ。

「たしか、ごはんを作つて、体を拭いてあげてたような」

ご飯は無理だ。そもそも食材がないし、それに人にお出しできるような満足な料理が作れる腕ではない。

それに、体を拭いてあげるのも……普通に考えて無理だ。相手が女性や、恋人ならと

もかく、相手はセルジオだ。ただの上司で相棒。それ以上でも以下でもない。

「こ、恋人かあ……」

もやもやとなのはの思考の中にまだ見ぬ未来の恋人の姿が現れる。まだ全然想像もできないがいつか自分にも現れる事があるのだろうか。

(できるなら優しい人がいいな。それに身長が高くて、お仕事とかも尊敬できる人で……あれ)

言葉にしているうちに変な気分になってくる。イメージなんてなかったはずなのに、なんだか一人の青年の姿が浮かび上がりそうだったのだ。

「か、片付け！ お部屋の片付けにしよう！」

なのはは茹だつて来た思考を無理やりカットすると、むん、と腕に力を入れる。真剣な面持ちで片付けを始めた。

「終わっちゃった」

そして速攻で終わった。

セルジオの部屋にあるものは小さな冷蔵庫とアイロン、そして何かの教本くらいである。冷蔵庫は何かをする必要はないし、アイロンはコードをしまつて部屋の隅に。残りの教本も本棚がないせいで邪魔にならないところに並べるくらいしかできる事がなかった。

所要時間、およそ五分。

「私物少なすぎるよセルジオくん……」

なのはかがつくりと肩を落とす。本当に生活感がなくて、正に寝て起きるためだけの部屋、といった様子だ。

「あれ？」

けれど、そんな中でふとなのは目を引くものがあつた。玄関の近くの戸棚の上につきつた写真立てが置かれているのだ。

伽藍堂の部屋の中で、まるでそれだけに色がついているようで、ことさら異色を放っている。

「誰の写真だろう」

百均にあるような安っぽい木の写真立てのなかでは、陸の制服を身に纏った女性が隣ついで男性二人に挟まれてにつこりと笑っていた。

隣の男二人もどこか見覚えがあるが、そんな事よりも、写真の中の女性の瞳がセルジオのものと同く似た翠色である事が気にかかった。

「これって……………」

思わずなのはが写真に手を伸ばして、背後からがたり、という大きな物音が聞こえた。

「セルジオくん！」

弾かれるように振り返ると青白い顔のセルジオがベットから転がり落ちていた。なのはが慌てて駆け寄って抱き起こす。

「この声、高町か……めいわく、かけたな」

「もう風邪なんだから無茶しないで！ 早く薬飲んで寝よう？」

「か、ぜ………ああ、そういや、そういうことにしてたんだっけ」

セルジオから乾いた笑い声が漏れた。

「悪いな、高町。薬なら、その台所のところにあるから、取ってきてくれないか」

「う、うん。今日は早く飲んで寝てね」

「はは、たかまちには、かてないなあ……」

ベットにもたれかかるように座らされたセルジオがまた乾いたように笑う。瞼は未だ開ききらず、ちゃんとなのはの顔が見えているのかも怪しい。

なのはは少しセルジオの様子に眉を寄せたが、ぱたぱたと台所へ薬を取りに走っている。

セルジオはその様子をぼんやりと見つめる。

風邪をひいたセルジオの為にわざわざ見舞いに来てくれた後輩。

いつも自分の体のことを心配してくれる相棒。

その存在がともてもありがたくて、そしてたまらなく大切だなと感じる。

壊してみたらどんなに楽しいだろう。

本当に、高町なのははセルジオ・アウデイにとって何物にも変えがたい。

「ほらとつてきたよ、飲み物はお水でよかったかな」

「ああ、ありがとう。助かるよ」

教授謹製の薬を受け取ると手に5、6粒ほどの錠剤を乗せて覚束ない様子で口に入れる。

「ほら、口開けて、水飲んで」

「ん、ん……」

言われるがままに口を開けるとなのはが軽く頭を抑えてペットボトルを口に添えてくれた。どうやらセルジオの体を気遣って飲ませてくれるつもりらしい。

軽く入れらる水で錠剤を全てまとめて流し込んでいると、ゆっくりと目蓋が開いて、なのはの真剣な表情が視界に広がった。

栗色のツインテールは水に濡れたように艶やかで、いつもの薄紫の瞳は宝石のアメジストを思わせるようにきらきらと輝いている。

頬もやわつこそうで、肌なんか透き通るように白い。髪から目、頬、とだんだん視線が下がって行って、なのはの首元あたりで動きが止まった。

細くて、白くて、少し力を入れられ折れてしまいそうなのはの首。

試しに少し締めてみても良いだろうか。きつと、とても綺麗だと思うのだけれど。

熱に侵されたような赤い思考のままでなんとなく目の前の少女へと手を伸ばそうとする。

「あれセルジオくん目が赤い……?」

だが、滑り込んできたなのは声に瞬時に正気に戻ると、上げかけていた手を思いっきり払った。

「——ッ!」

「きゃあつ」

がこん、とペットボトルに腕が当たって空を舞う。しばらくの間、水を撒き散らしながら回転していたボトルは数回転の後に、床へと落ちて、部屋の端へと転がっていく。

溢れた水が、押しつけられたなのはと、荒い息でベットに寄りかかっているセルジオとの間に流れて、一筋の小さな川を作った。

「セル、ジオくん……?」

なのはが戸惑った様に名前を呼んで、少しだけ身を引いた。

「あなたは、誰……」

「——」

セルジオは自分の目元を強く抑えたまま何も言わない。ただ、荒い息のまま何かを繰

り返し呟いているだけだ。

「悪い、高町、帰ってくれ」

「え、でも……」

「いいから！ 帰れっていつてるだろッ！」

珍しく荒げられた声になのは体がびくり、と震えた。

「明日には、普通の俺に戻ってるから。だから……」

——頼むから、今日は、帰ってくれ。

懇願するようにか細い声を絞り出すセルジオ。

なのにはその姿はまるで、泣き続ける幼子のようにも見えた。



ミッドチルダから海鳴へと帰ってきたのはがぼうつと空を見上げる。
がらんどうの部屋。

様子のおかしいセルジオ。

知らない女の人の写真。

一瞬、赤く見えた翠の瞳。

「私、セルジオくんのこと、何も知らない」

だからこそ、「待ってる」と彼にはそう伝えた。いつか話してくれたらいいと、そう思ったから。

けれど、そのいつかとは、いつたいいつ訪れるのだろうか。

セルジオくん、という小さな眩きが澄んだ秋の空に吸い込まれるように消えていく。もうすぐ、冬が訪れようとしていた。

静かな足音

「ハイペリオンスマッシュヤー！」

《Hyperion Smasher》

「デイバインカノンツ！」

三課の訓練場で、天上から押し潰すような桜色の砲撃が、空へと突き上げるような白色の砲撃が、それぞれ炸裂した。

威力は桜色の砲撃が遥かに上だが、白い砲撃は正面から威力勝負はせずに、僅かに発射角をずらす事で、砲撃の軌道を逸らそうとする。

弾頭が炸裂しピンクの光条がたわんだように見えたが、横合いからの一撃を食らつても勢いはほとんど死ぬことはなく、白を飲み込みながら直進した。

「相変わらずの馬鹿魔力ッ！」

「褒め言葉どうも！」

淡い金髪の青年、セルジオが舌を打ち、艶やかな栗色の髪の少女、なのはは皮肉たつ

ぷりに言い返す。

短距離転移ローラーではなく、砲撃のせめぎ合いで生じた勢いで体を吹き飛ばしてなのはの射程から逃げ出したセルジオ。一旦距離をとって仕切りなおそうとしているのだろう。

「アクセルシューター！」

だがそれをわかっていてみすみすセルジオを逃すのではない。レイジングハートに命じて瞬時に魔力を凝固、拳大の魔力弾を周囲に生み出した。

「シューーーーッ！」

「——ッ！」

無数に迫り来る誘導弾に息を呑むと、ゼファアのシステムへとアクセス。戦闘データを元にして、一気に三十秒後未来を読み取るために分割思考を三つ増やした。

（模倣解析接ぞ——ッ！）

だが突如セルジオの思考が揺れた。今まではものともしてなかった数の分割思考の負担に耐えきれず、ぐんにやりと視界が歪んで、少しずつ色合いが消えていく。

「く、そ……………」

毒づくセルジオは増やすマルチタスクを止む無く一つに減らす。覗き見れる擬似的な未来は、万全の時から半分以下になるだろうが制御できないのでは仕方ない。

(予測————三手)

セルジオの瞳に八秒後の未来が映し出され、果たして予測の通りに飛来してきた桜色の弾丸を砲撃形態のままの砲身で殴るようにして払う。

「————ッ！」

収束された魔力弾が魔力を込められたゼファーに砕かれて燐光を舞わせる中、セルジオは天井をバックにしたのはを見上げる。

(並列思考演算————加速機動)

今のセルジオの瞳には未知はない。ゼファーのシステムによってなのは行動全てを把握し、八秒間という限定した間でのみ彼女を上回る行動をとれる。

故に、次になのはが何をしてくるかもセルジオには分かっている。

「デイバイン——！」

《《 Divine Buster 》》

迫り来る砲撃を旋回して躲すと槍に魔力を纏わせてなのはとの距離を縮めていく。すかさずなのはは砲撃を中断すると、誘導^{アブセルシューター}弾を射出、セルジオの行く手を阻む。

(既に。見えてる)

だが、それはセルジオの予測の範疇だ。アクセルシューターで補助、デイバインシューターで相手を狙う、というのはなのはの得意戦術であるが、それはイコールでセ

ルジオにとってはよく知ったものであるとも言える。

故に、それは既知だ。

「それはもう知っている演算式駆動。加速機動」

並列思考、マルチタスクに待機させていた術式に数値を代入して瞬時に発動させる。するとセルジオが白光に包まれ、なのはへと迫っていた肉体が数倍の速度に加速する。

「デバイスン——ッ！」

白い閃光となったセルジオの握るデバイス砲身に眩い魔力が充填されていく。

「そう来ると思ってたよ！」

けれどセルジオがその程度読んでくるのはなのはもわかっていた。なのはは迎え撃つようにレイジンググハートの矛先をセルジオに向けてブレードを展開し、砲撃しながら突撃する、A・C・Sを起動。マガジンに指をかけて、楽しそうに笑みを浮かべた。

「これで、私の勝ちだよ！」

セルジオは優秀だが、なのはの才能は彼のものの遥かに上をいく。砲撃も飛行も魔力量も、ともに争えばセルジオがなのはに勝るものなどほとんど存在しない。

けれど、そんななのはでも、唯一速度だけはセルジオに敵わない。長年ゼストの下で培ってきた戦闘経験と加速魔法、それによってなのはにはない誰よりも早く動き回るといふ力を得ている。

けれど、なのはここで切り札を切った。

収束砲撃突撃機構^A。それはフォーミュラを失ったものにとっては唯一のセルジオに追いつくための翼で、勝負を決めるための決定打。

「いいや、俺はここまで見えていたッ！」

だが、セルジオもまた、この未来を予測していた。

「エクセリオンバスターA・C・S。スタンバイ！」

「ブリッツアクションッ！」

なのはが加速してセルジオに向かってくる。それを八秒ギリギリ、十三手の攻防で読み切っていたセルジオが、待機させていた加速魔法で回避する。

「——っ」

かわされたなのはが旋回して再びセルジオを追おうとするが、遅い。セルジオは加速のスピードを緩めることなくなのはへと迫っていく。

ごう、と風をきって白光が吠え、直撃を覚悟したなのはがシールドでの威力減衰の為に魔法陣を構築する。

「喰らえ、デイベインカノーリーあれ？」

そして、セルジオが左手の砲身をなのはへと向けて、特にブレーキをかけることなくなのはの目の前を素通りしていく。

「ほへ？」

「んー？」

これには歯を食いしばろうとしていたなのはも首を傾げたし、「これで勝った！」と確信していたセルジオも加速魔法の勢いで宙を滑りながら間抜けな声を漏らした。

「いふっー」

そして上空のなのは目指していたセルジオは、当然のように天井に激突、頭を強かにぶつけ、呻き声を上げた。

なのはが微妙な顔で天井にぶつかってふらふらと頭を振るセルジオを見つめて、砲身の先を向けた。

「えーと、デイベインバスター」

ばきゅん、とレイジングハートから飛び出した砲撃は、これまた当然のように無防備なセルジオに炸裂し、季節外れの花火となって訓練室を彩った。

「お疲れさん、高町」

「……セルジオくんもお疲れさま」

二人で訓練室のベンチに腰掛けてスポーツドリンクで喉を潤す。

「今日の試合を入れて、俺の勝率は……おお、ついに4割か。ついに高町に負け越しかー」

「……………そっか」

「ん？ なんだよ、浮かない顔だな。俺に勝ち越したことがそんなに不満か？」

「そ、そんなことないもん。セルジオくんに勝てたのは嬉しいよ。明日のご飯奢つてもらえるんだし」

「なら何がそんなに気に入らないんだよ？」

「べつに」

二人はこうして時々模擬戦をすることがある。それはコンビとして互いの戦法を理解するためでもあり、また事件のない間勤を鈍らせないようにする為でもある。

そして、今日の模擬戦は五試合中三勝二敗でセルジオの言う通りなのは勝ち越しだった。

「全く、よくわからんやつだな、高町は」

やれやれとセルジオが息をつく。するとその態度にイラつとしたのはが少し不機嫌そうに口を開いた。

「なら言わせてもらいますけどアウディ二尉」

「はい、なんでしよう」

すつとなのはが居住まいを正して向き直ってきたので、思わずセルジオの方も背筋を伸ばした。

「手、抜いたでしょう」

「いや抜いてないが」

「嘘です」

「ノータイムで断言されると俺でも傷つくぞ」

「誤魔化さないで」

「ずびし、となのはがセルジオの胸を指で突いた。」

「今回、セルジオくん一回も短距離転移使ってない」

「切り札だからな。そうポンポン使うものでもないだろう」

「それになんか行動予測もなんか鈍いし」

「なるべく頼らないようにしてるんだよ。あれは便利すぎて腕が落ちそうだ」

「……それに、なんというか、最近のセルジオくん魔法が雑だよ」

「雑」

セルジオの言葉に、うん、となのはが頷く。

曰く、選ぶ魔法が間違ってるわけじゃない。威力が弱いわけではない。発動速度が下

がったわけでもない。

「だけど、なんて言うのかな、心ここに在らずって感じがする」

（高町は俺のことよく見てるんだなあ）

思わずセルジオが苦笑いをこぼす。良い相棒だが、彼女に隠し事をするのは日に日に難しくなる。

「それにセルジオくんはこの前まで風邪ひいてたんだし……」

「わはは、こやつめ」

「わぶつ、髪崩れちやうからっ」

セルジオがわしわしとなのはの頭を撫でると、いつものようになのはが悲鳴をあげる。

「心配してくれてサンキューな。俺は大丈夫だよ」

「むー、誤魔化してる」

「誤魔化してないって」

「ほんとうに？」

「本当に」

「なら、良いけど……」

じとつとなのはがセルジオを見上げるようにして睨む。あはは、と乾いた笑みを零し

たセルジオが汗顔の頬をかく。

確かになのは言う通り自分の魔法が少し荒いのは自覚している。そして、その原因にも心当たりはある。

(けどそれは、いくら高町でも、言えない)

だって、自分はその事を姉同然のクイントやメガース、そして養父のゼストにも黙っているのだから。

(……時間が、ない)

ちり、と思考の端が揺らめく中で、セルジオが深い息を落とす。

まだ大丈夫。まだ意識はしっかりしている。保っていられる。セルジオ・アウデイは、まだ大切な人を傷つけたりしない。

「あ、セルジオくん、今年のクリスマスってどうなってる？ お母さんができれば来て欲しいって言ってただけけど……」

「クリスマスかあ……、今年は流石に無理かなあ」

「そっかあ、お父さんとかも模擬戦したいって言ってただけだなあ」

「ふむ、シロウさんがか」

「それには今年はお兄ちゃんとお姉ちゃんもいるから是非って！ なんかこう、山籠もりするって！」

「へー山籠もり……山籠もり？ 家族で？」

「うん、お父さんとお兄ちゃんとお姉ちゃんの三人でやってるんだって」

「ほー、地球のケーキ屋さんは凄いなあ」

「たぶん、私の家族が特殊なだけけどね」

かちり、と歯車が音を立てる。



「ドクター、彼から連絡が来ています」

「ほう？」

暗がりの中で金眼が愉しげに細められた。

「私の記憶が正しければ彼の定期検診は一月後だったはずだが……」

言いながら、瘦躯の男は幽鬼のように立ち上がり身をひしゃげさせてくつくつと低く笑った。

「この前使ったE.Cの件だね。随分と無茶な使い方をしたようだし、大方誰か親しい人をうつかり殺しそうになったかな？」

あり得る話だ、と男は半月のような深い笑みを刻んで、髪をかきあげた。

「お偉方よ、どうやら貴方方の欲する力、手に入るのはそう遠くないかもしれませんよ」

その目を信じてる

「ふむ、ここあたりは感じるのか」

「——っ」

「ああ我慢などはしてほしくないな。ちゃんと感じるならそう言ってくれたまえ」

「そこあたりは感じ——くっ」

「なんだ私の予想より随分敏感じゃないか」

セルジオから短い声が漏れた。滅多なことでは弱音などを漏らさない彼からそんな言葉が漏れるとは、教授はいかな方策を取っているのだろうか。

「教授、俺、もう……………」

「ほう、アウデイ君は案外我慢強いんだな。まあいいだろう、ならこれで最後にしようか」

そうして、教授が手に握った棒をセルジオに近づけていく。仄かに熱を帯びたそれはひたすらに固そうで、セルジオの顔がわずかに引きつった。

「いくよ、アウディ君」

「は——んっ」

「はい、データの収集は終了です。痛覚はまだ正常に残っているようですね」

「ありがとう、イチカ」

淡々とした声が傍から聞こえると教授は手の中の（軽い電流が流れていて仄かな熱を持った）棒を卓の上においた。

「一応今日の検査は終わりだ。上着着ても構わないよ」

「こちらお預かりしていた制服です」

「どうもありがとうございます、イチカさん」

「いえ、仕事ですから」

その日セルジオは教授の元に検査に訪れていた。先日風邪（ということになってい）になった際に教授に頼んだECの件である。

それだけだよ？

その後上着を着たセルジオは椅子に座って機器を弄っている教授の対面に座った。

「教授、さっきの検査ってなんの意味があったんですか？」

「これは私のデータの一つだが、エクリップス感染者は一部の感覚が鈍感になる例が挙げられているんだ」

「鈍感に……」

「そう。ある者は味覚、ある者は嗅覚、ある者は聴覚、ある者は触覚……つまり痛覚だね。それは恐らく体が急激な組み替えについていけず、過敏になった感覚が馴染めていいただけだとも思うが……まあ、君は今のところ五感に問題はないようだね」

「ですね。飯はいつも通り美味しいですし、聞き間違いとかもしないですし、他のところも今の所は問題を感じません」

「君が思ったよりも堪えてなさそうで何より」

実際、セルジオがエクリップスに感染してからも表面上、その変化に気づいた者は皆無だ。侵食は薬で送らせて、破壊衝動に関してはマルチタスクで抑え込んでいる。

だから、誰も彼が堕ちかけているのに気づかない。気づけない。

「というか、君はそんな目で私を見ていたのか。私は研究者であつてサディストではない。心外だね」

「す、すいません」

「まあ君が痛がるのは見てて愉快ではあつたが」

「え」

「イチカ、そこから私のデバイスを取ってくれないかね。いつものやつでは無くて研究用の……そうそれぞれ」

あまりにもさらりと言われたものだから一瞬間聞き間違いかとも思ったが、恐らく聞き間違いではない。

セルジオが心の中で「やっぱこの人サディストなのでは？」と疑う。

「さて、今回の検査の結果を伝えよう」

スツと教授の目が細くなり、思わずセルジオも居住まいを正す。

「エクリプス侵食度『中期』。もう、私の薬で進行を完全に抑えるのは不可能だ」

「そう、ですか」

「私は『死にたく無ければ使うな』と言った筈だが、いつ使ったんだい？」

じろり、と教授の青色の短髪の向こうから金色の瞳が見つめて来るが、どれ程時間が経ってもセルジオが何かを言うことはない。

「黙秘かね。まあそれもまたいいさ、あたりはついてる」

イチカ、と教授が部屋の隅に控えていた女性が軽く頷いて、手元のデバイスを操作、二人の目の前に半透明のウインドウを投影した。

「これは？」

「まあみたまえ。ええと、よし、これだな」

び、と教授が軽く虚空に指を滑らせるとウインドウに一つの映像が映し出された。

「密着！ 航空魔導隊三課24時！」

デデーン。

ぴきり、とセルジオの頬がひきつる。

「ははは、なかなか愉快な番組だった。人気もなかなかだったらしいじゃないか」

「ちよつときよ、教授？」

「特に私のお気に入りのシーンがあつてねえ、君もきつと氣にいると思うよ」

「あ、やめ」

『俺たちはヒーローじゃない。だから全てを助けられないけど、せめて、涙を流す人が一人でも減ってくれば、そう思います』

「あああああああああつ！ やめろやあ！」

「あ、間違つたこつちだ」

『何やつてんだ！ 死にたいのかあんたら！』

「これはなんの拷問だ!? 俺を虐めて楽しいですか！」

「はっはっはっはっはっはっ」

「笑ってんじゃねー！」

声を荒げたセルジオの顔は赤い。こんな小つ恥ずかしいセリフとシーンをまじまじ

と見せられて恥ずかしくないわけがない。

「まあまあ、そう怒らないでくれ。短気な男はモテないぞ」

「別にモテなくてもいいですよ。俺、そういうの興味ないです」

「ふむ、それはもう自分にはそういう相手がいるからという意味かね？」

「はい？」

「まあいい話を戻そう」

首を傾げたセルジオを尻目に教授はなんでもないように話を切って、映像を少し巻き戻して、セルジオが立てこもり犯のいるビルへと短距離転移する直前で止めた。

映像の中のセルジオは焦ったような表情で体を光で包んでカメラの前から忽然と消え、そして間をおかずに銃声が響く。

そこで一度教授が映像を止める。

「この時、たぶん君銃に撃たれてるだろう？　そして次の映像だ」

再び動き出した映像はしばらくしてガジェットドローンが映し出されて、唐突に空へと映像が変わる。セルジオがカメラマンたちを押し倒した時の映像である。

「だが、君はここでこうして傷一つなく駆けつけている。実に奇妙だ」

「バリアジャケットで防いだのかもしれないよ」

「誤魔化すのはやめ給え。ここ、ガントレットとゼファアの色。他の人間は騙せても私

の目は欺けんよ」

「――」

「大方リンカーコアに弾丸を受けて魔法を使えなくなつたからECで無理矢理直したというところかな？」

「どうだね、と教授が含むように笑つた。

教授は筋の通つたように話しているようにも聞こえる。だが、この話はあくまでも『セルジオがECを使った』という事実を元になされた予想であつて、シラを切ろうと思えば、セルジオはそうすることもできた。

（けどこの人に誤魔化す意味はない、か。変に言いふらす人でもないだろう）

「はあ、とセルジオが嘆息を一つ漏らして頷いた。

「やはりか。なら、正直に答えて欲しいんだが、今破壊衝動の制御にマルチタスクをいくつ使っているかね」

「そこまでお見通しですか」

「今の君の身体に一番詳しいのは間違ひなく私だからね」

セルジオが困つたように笑いながら頬をかく。

「八つ、つてところですかね」

「それより減らすのは不可能かね」

「今でもだいぶギリギリです。これ以上減らすと、衝動で人を殺しかねない」
破壊衝動と殺人衝動。初期の段階ならば、自傷行為とたまたまに部屋のことを叩き潰すくらいでなんとかなった。

だが今のセルジオは、『ついうっかり知人の首を絞め殺していました』がありうるレベルだ。

危ない、とは思っていたものの、実際に先日なのは首をうっかり締めかけて、ようやく自分が崖っぷちにいることを理解した。

「本当に愚かだな、君は。それ程までして救う価値が人にあると思うのかね」

「思います。どんな人でも、生きる価値はある。ない訳がない」

「それは、自分の命を投げ打つてまでするべき事なのかね？ 後悔することはないのかね？」

「後悔なんてするはずがない。それが『セルジオ・アウデイ』です」

セルジオがきつぱり、と迷いなくそう言い切った。

エクリプスは都合のいい力ではない。使えば必ず身を蝕み、精神を犯し、その存在を崩していく。四六時中破壊衝動に襲われ、自己対滅の恐怖に怯える。そんな生活が一生続く。しかも衝動の発散を怠れば物言わぬ肉塊へと変わる。

そして、現状エクリプスウイルスの治療方法は存在しない。

故に、教授は『後悔していないか』と尋ねたのだが、セルジオは『後悔していない』と
言い切った。

それはつまり自分の命より他人の命の方が大切なのだ、と言っていることと同義。

教授には『セルジオ・アウデイ』という存在は、人として致命的に歪んでいるように
さえ見えた。

「全く君は面白いね」

顔を手で隠し、くつくつと含むように嗤う。

愉しげに、青色の髪の毛の向こうに見える金色の瞳を光らせながら。

「何か言いました？」

「いいや、何も無いさ。何も、ね」

含むように笑う教授。その真意は窺い知れないが、彼のことを問い詰めてもその腹の
中を語ってくれる事は無いだろう。彼はそんな親切な面をしていない。

思えば、セルジオと教授もそれなりの付き合いになる。『ゼファー』のテストとして
初めて会った時は満足に愛想がいいとは言えず、一年以上変な名前前で呼ばれ続けていた
が、最近になってようやく名前を覚えてもらえるようになった。

特にセルジオの方から何かをした覚えはないのでおそらく教授側に何か心境の変化
でもあったのだろう。

「時に、アウデイ君」

「あ、はい。なんですか？」

「君は『フォーミュラ』についてどこまで知っている」

突然、頭を横合いからガツンと殴りつけられたようだった。

「どこでそれを？」

「どこで、とはまた愚問だな、アウデイ君。私は唯一管理局から『エクリップス』に関する研究を許されている人間だ。その私がフォーミュラなんて面白いモノを知らないはずがないだろう」

「面白いモノ、ですか」

「ああそうだとおも」

にこやかに頷いた教授は自身の頬を撫でながら、遠くへと目を向ける。まるでここには無いどこかに想いを馳せるように。

「異世界からの未知の技術。魔力を用いないエネルギー運用。なんとも心踊る話じゃ無いのか」

「俺が、なぜ知っていると思うんです。俺は——」

「陸の人間、かね。惚けるのはよしたまえ。地球で起きた一連の事件、その最中に君がいた事は聞いている。出来れば、詳しく教えてもらえると助かるのだが」

セルジオは思わず黙り込んだ。

結論から言えば、セルジオはフォーミュラシステム、つまりなのはの『レイジングハート・ストーリーマ』及び『エストレア』に内蔵されていたナノマシンについてのかかなり詳しくまで知っている。

『エルトリア式フォーミュラ』システム。

それは周囲のエネルギーを変換することによって無限に等しいエネルギー供給を行うことが出来る、ミッドチルダの『魔法』とは別種のシステム。それは起動に魔力を必要とせず、ただ負荷に耐えきる体さえあれば誰でも扱えてしまう。

これはつまり『魔法の才能を持たない』人間でも魔導師に等しい力を持ててしまう、という事である。

もしそんなものが一般に出回れば、現在の管理局の『魔法』による統治制度の崩壊を招きかねない。

なのはのレイジングハートに組み込まれたナノマシンは、ロストログア扱いで管理局の保管庫の中で眠っている事や、フォーミュラシステムを持つエルトリアには基本、渡航禁止とされていることから、管理局がその存在を如何に脅威に思っていることが伝わってくる。

「もし、もし仮に俺がそれを知っていたとして、俺がそれをほいほいという人間に見えま

すか」

「見えないね。君は何があつてもルールは破れないだろう。それが君という人間だ、セルジオ・アウディ」

でも、と教授が前置き、金色の目を細めた。

「もし、フォーミュラでならエクリプスの治療ができる、と言つたらどうする？」

「……できるんですか」

「可能性の話だ」

教授が楽しげに笑う。

「身体を改造するエクリプス。エネルギー供給によって身体を制御するフォーミュラ。これがあれば、君の身体を作り変えることで治療方法を見つけ出せるかもしれない」

「……」

「だが、その為には私の手元にはフォーミュラがいる。もちろん、容易に手に入るものではないから、君からある程度の情報が」

「お断りさせてもらいます」

「ほう」

教授の言葉をセルジオが遮った。その口調には淀みはなく、金色を見つめ返す翠の瞳に一分の迷いも感じられない。

「いいのかね？　正直、今の症状を考えるならこの手以外にはないと思うが」
「今日はやたらと色々聞いてきますね？」

何度も言いますが、自分の為に規則を犯すのは絶対に『悪い事』です。例えどんな理由があつたとしても正当化はできない」

それに、とセルジオが言葉を続ける。

「教授は凄い人です。そんな方法を取らなくてもいつか俺の治療方法を見つけられるって信じてます」

その言葉に教授は一瞬目を丸くしたが、やがて堪え切れなくなつたのか顔を覆いながら何々大笑した。からからと研究室の中に教授の笑い声が響く。

「嗚呼、成る程、確かにそうだ。君はそういう人間だ！　その言葉は実に君らしい！」
くくく、と教授が堪え切れない笑い声をこぼしながらも大仰に手を打つてみせる。

「良いだろう。私が、私である限り、君に尽力すると約束しようじゃ無いか」
「ありがとうございませす。頼りにしてませす」

そこまで話すとセルジオはジャケットを羽織り直すと、傍に控えていた教授の助手の女性から薬を受け取って部屋を後にしようとする。

「アウデイ君、最後に一つだけいいかな」

セルジオが扉に手をかけた時、背中へと声がかかった。

「どうして私をそこまで信じられる。こう言つては何だが、私は相当怪しいと思うぞ」
エクリプスという未知のウィルスを秘密裏に搭載し、フォーミュラという極秘の技術を認知している。いくら変人として知られているとはいえ、普通は怪しく思うだろう。そういう意図も込めて、尋ねたのだが、それに対してセルジオは何でも無いように、まるで今日の天気でも答えるかのようにさらりと答えた。

「教授の目が嘘をついていませんでした」

「嘘……?」

「はい。俺に死んでもらつては困る、と言つたときの貴方の目は、本当にそう思っている人の目だった」

「――」

「だから信じます。少なくとも貴方は、俺が死ぬことは望んでいませんから」

そしてセルジオは「じゃ、薬はいつもの感じでお願ひします」と言い残すと教授の研究室を出て行つた。

残されたのは青い髪の向こうに金色の瞳を光らせる教授と、その傍に控える助手の二人だけ。

「ドクター、何故あの様なことを」

「何故、とは?」

「最後の問いかけの事です。最高評議会のお三方からは、くれぐれも正体が露呈しない様に注意せよ、とのお達しがあったはずですが」

「ああ、そのことか」

くつくつと含む様に彼が笑う。

「だって、その方が面白いじゃ無いか。彼の本質が垣間見えるのは、とても稀有なことだしね」

透き通る様な金色の瞳がすつと細くなった。

「嗚呼、今は君と本音で語り明かせないのがもどかしい。私が彼らに囚われる哀れな存在でなければ思う様に言葉を紡げるといふのに」

男は瘦躯を歪めて高らかに笑い声を上げる。

「故に！ 故に！ 今私は傍観者に徹しようじゃ無いか！

君のために力を尽くそうじゃ無いか！

自らの欲望すら律してみせようじゃ無いか！」

——時が、来るまで。



いつものように三課の車庫にバイクを停めるとキーを手の中で弄びながら隊舎へと向かう。

「今日の教授なんか変だったな」

やたらと色々尋ねてきたり、果てにはフォーミュラの話まで飛び出してきた。

「少し、あの人の事調べてみるか」

ぼつりと呟いたセルジオがなんとなく淡い金髪を撫で付ける。

（勝手に人の素性を探るのは褒められた事じゃ無いけど、まあこのままモヤモヤしたままなのも良くないし……ん？）

隊舎に向かっていたセルジオの足がぴたりと止まり、その端正な顔がいびつに歪んだ。その視線の先には、彼の所属する三課の隊舎に幾人かの人間が詰めかけていた。

「なんだ、あれ」

見れば、どの人も手にボイスレコーダーやカメラなどを持っていることから、どうやら記者やそれに類する職業の人達らしい。

なにやら気になることでもあるのか我先にとがやがやと対応している人へと詰め寄っている。

「あれは……………クイントさんか」

長い青髪にすらりと引き締まった肢体。セルジオにストライクアーツを教えた、彼の姉貴分である。

取り敢えず念話を飛ばしてみる。

「クイントさん、何かあったんですか」

「……！ その声セルジオ君ね！ 待ってたわよ！」

待ってた？とセルジオが首を傾げたのと、クイントが遠くにいるセルジオを指差しながら、高らかに叫んだのは殆ど同時だった。

「彼！ 彼です！ 彼が貴方達お探しの『セルジオ・アウデイ』二等空尉です！」

途端、記者達の視線がセルジオに集まり、次の瞬間にはセルジオは無数のマイクとフラッシュに囲まれていた。

「アウデイ二尉！ 突然の抜擢ですが自信の程はどうですか!？」

「この件、自分に任されたことに関して何らかの意図を感じますか？」

「先日のMHKの番組による地上本部の支持率の影響に関して何か一言！」

「相手は随分と親しいようですがやりにくきなどはありますか？」

「聞けばご両親も管理局員ですがやはり幼少の頃からこの職に就こうと思っていたんですか?!」

「魔導師ランクにすれば格上との戦いですが勝機はどこにあると思いますか!」

フラッシュ、閃光、喧々囂々。人の熱気と圧力。今までセルジオの人生に感じたことのないマスコミパワーである。

「ちよ、ちよ、ちよつと待つて下さい!」

思わず仰け反りそうになりながら、大声と身振りで質問の嵐を遮った。

「戦う? 抜擢? 何の話ですか、俺——私には身に覚えがない話なんです……」

「あれ、まだご存知ないんですか?」

これですよ、と記者の一人が新聞を差し出してくる。開いてあるページは管理局の特集ページ。いつもは管理局の広報の担当が、軽いコラムや、ミッドチルダの市民に対しての注意や、お知らせなどを伝える事になっている。

けれど、その場所にかでかと、見覚えのある写真が載っている。

淡い金髪に翠の瞳。たぶん、見間違いでなければ毎朝鏡の向こうに写っている人物。

そして、その写真と向かい合うようにして、黒髪の童顔の少年の写真がこれまたでかでかと掲載されている。

「来月行われる『戦技披露会』での、『クロノ・ハラオウン』執務官との模擬戦の話ですよ」

不思議そうに続けられた「ご存知ないんですか?」という言葉に、セルジオが心の中

だけで「知るわけねえだろ」と返した。

想いの萌芽

詰め寄られたマスコミの猛攻をなんとかいなして隊舎へと帰ってきたセルジオがぐったりと椅子に座り込んだ。

「はい、お茶。喉乾いたでしょ？」

「すまん、サンキュー高町」

「このくらい大したことないよ」

お盆を胸に抱いて照れ臭そうに笑うのはから受け取ったグラスの中身を一気にあおるとクイントへと向き直る。

「んで、これ何の間違いですか？」

「間違いじゃないわよ。ちゃんと推薦きてるし」

「いや何でそれを俺じゃなくてクイントさんが持っているかは甚だ疑問なんですが」

三課のオフィスでクイントから一枚の書類を受け取った。目を通せば確かにセルジ

才が戦技披露会の参加についてのあれこれを書いてある。

「そこはなんか広報と企画部と人事部のミスみたいね。ウチに連絡が来たのもセルジオ君が定期検診に行つてからだつたし」

「なんすかそのミスの三重奏……」

「まあそうぐちぐち言わないの」

「しばしと背中を叩いてくるクイントを何か言いたげな表情で見返すセルジオだが、クイントに文句を言ったところで特に解決する問題でもないので、ため息と一緒に不満を吐き出した。

セルジオの様子を隣から見ていたなのはが小首を傾げた。

『戦技披露会』つてなんですか、メガーヌさん」

「あれなのはちゃん知らなかったかしら？　去年は……ああ、丁度遠くの方まで出向任務だったものね」

コーヒーを片手のメガーヌが指で唇をなぞって、ほんの少し考えるそぶりを見せた。

「まあ簡単に言えば管理局主催の格闘技の試合みたいなものね。なのはちゃんの世界でいうボクシングってやつかしら」

「格闘技ですか？」

「ええ。基本的には前座からファイナルまで合計三試合。それが空戦、陸戦にそれぞれ

ある形ね。目玉であるファイナルではニアSの一流魔導師が参加するのよ」

「ほえー、ニアSですか」

「ちなみにクイントとゼスト隊長は出たことあるのよ」

「そうなんですか、クイントさん！ 凄いですね！」

「いやいや、私とゼスト隊長を一緒にしちゃダメよ。私は陸戦の前座。ゼスト隊長は

ファイナル、つまり大トリ。私なんかとは注目度が全然違うわ」

「ここから、そんなこと言うもんじゃないわよ。戦技披露会はある意味武装隊員の憧れ

なんだから」

「だってゼスト隊長とかセピアさん見てたら私なんかー」

「セピア？」

唐突に出てきた聴きなれぬ名前になのはが繰り返すと、クイントが慌てたように言葉を重ねた。

「あー、戦技披露会の話よね？ 良いイベントよー、出店とかいっぱい出るし！ ね、セルジオ君！」

「……ですね。市民としても武装隊のエースクラスの魔法なんてなかなか見れるものでもないから、魔導スポーツ選手だとか、将来管理局員になる事を志す人、まああとは普通に観戦に来る人なんかも多い」

ま、一種のお祭りみたいなものだ、とセルジオがなのは頭を雑に撫でた。

一瞬、セルジオの顔が泣きそうにも見えたが、撫でられたせいで視線が下がってしまった。手を振り払ってセルジオの顔を再び見た時にはいつもの何を考えているかわからない彼に戻っていたので、もしかしたらなのは勘違いだったのかもしれない。

「しかし、なんでまた俺なんでしょうね」

やれやれとセルジオが書類を睨みながら頭をかく。

「航空魔導隊から人間を出すのはまだわかりませんが、よりもよって俺を出しますかね」

「……？ セルジオくん、強いよね？」

「いや、なんか勘違いしてそうだけど俺は高町が評価してるほど強くないからな？ 魔

導師ランクだってA A。A A A +のクロノはともかく、俺には少し荷が重いよ」

「……それもそうね。魔導師ランクで言えばなのはちゃんの方が上だものね」

「あー、それね、私はなんとなくわかるわよ」

「メガーヌさん？」

三人の視線がメガーヌに集まる。その中でメガーヌはびしり、とセルジオを指差して言い放った。

「顔よ！」

「顔っ!？」

「顔」

「……顔、ですか？」

クイントが背後に稲妻を走らせる用に大袈裟に驚いて見せ、セルジオは、あー、成る程、とげんなりした顔に、そしてなのは不思議そうにセルジオの顔をまじまじと見つめる。

「そんなに見つめて俺の顔に何かついてるか？」

「目と鼻と口がついてるか？」

「人間なら誰しもついてるもんだ」

「なら目が綺麗だね？」

「そりやどうも」

今ひとつメガーヌの話に得心がいつていないのかなのはあいも変わらず首を傾げたままである。

そんななのはと目を合わせて、メガーヌがゆつくりと話し始める。

「なのはちゃん、セルジオくんの良いところってどんなところだと思う？」

「い、良いところですか？ ええと、うーん、誰にでも優しいこととか、ご飯を奢ってくれる事とか、とつても頭がいい事とか、いざという時に頼りになることとか、好き嫌いがいいこととか、女心がわかんないこととか、デリカシーがないこととか、あと……」

「ああ、ちがうわ。そういう内面的なことじゃなくて、誰にでもわかる事ね」
「？」

(最後らへんが悪口に聞こえるのは俺のせいか……?)

指をおりおりセルジオを褒めていたなのはの動きが止まった。メガーヌの言わんとすることがわからなかったのだ。そんななか低く笑う人物が一人。

「ふっふっふっ、分かるわ、メガーヌ。私にはわかる！」

「じゃあ、クイント。何かしら？」

「セルジオ君の良いところ、それは………」

「それは？」

がしつとクイントは苦い顔をしたセルジオの肩を抱くと大きく言い切った。

「容姿よ！ この子無駄に顔が良いの！」

「おい無駄ってなんだ無駄って」

「そう正解。なのはちゃんが挙げたのもこの子の良いところではあるけれど、まあ初見じゃわからないしね。セルジオ君は身長が高くて、顔が良くて、愛想も悪くない。外面だけ見れば最高の素材よ」

「その内面は最悪みたいな言い方なんですかね……。なあ高町この二人になんとか——」

「確かに。セルジオ君外面は完璧ですもんね……」

「確かに?! 肯定しちゃったよ!」

一人で突っ込むセルジオを傍目に女性三人がうんうんと頷く。

短く切り揃えられた短髪。たまに寝癖がついてはいるものの淡いブロンドは清潔感があるし、高めの身長と武装隊にいるおかげで引き締まった体は、なるほど、内面を知らなければそこそこの美丈夫に見えるだろう。

その後、メガーヌがあくまで自分の予想だが、と前置きして話を続ける。

「たぶん、先に決まっていたのはクロノ執務官の方だと思うの。彼くらいなら普通に名前が挙がってもおかしくないしね。」

それで、たぶんクロノ執務官とつりあいが取れる人……ああ、これは容姿でも戦闘力でも、って意味ね、で、たぶんセルジオ君の名前が挙がったんでしよう」

プライベートでも仲が良くて、学生時代の同期とかマスコミが好きそうで宣伝しやすいしね、と言葉を結んだ。

「そ、れ、で? セルジオ君」

「はい?」

「もちろん参加するのよね? 前から興味はあったみたいだし、あんな大舞台に立つ機会なんてなかなか回ってくるものじゃないわよ?」

「……そうですね」

「それにきつとゼスト隊長に頼めば快く指導とかしてもらえるわよ。まあ、もうマスコミも動いてるみたいだし断れるものでもー」

「断ろうと思います」

「ないわよね、つて、へ？」

けろりとした物言いにクイントがアホのように口をぽかんと開けた。

「ハ、断る?!」

目を剥いたセルジオに詰め寄る。

「戦技披露会、しかもファイナル！ 武装隊員にとつての最大級の名誉じゃない！」

「んー、でも俺には荷が重いと思います。それに俺しなきゃ行けないことも色々ありますし」

「セルジオ君、断るのは良いけれど、マスコミの方はもう貴方だと踏んで動いてみたいだけ……」

「いや、そつちの方も多分問題ないかと。さっきの記者さんたちの腕章を見る限りまだ大きなところ、それこそMHKとかは動いてないです。このくらいの段階なら、まあギリギリセーフですかね。まあ広報は少し苦労するでしょうが、文句は言つてこないでしょう」

あつちがミスして僕に確認取ってなかったみたいですし、と言ってセルジオは軽く笑った。

「それに、俺は同年代の中では出世している方ですが、探せばもつと良い人が見つかりますよ。それこそティータなんか御誂え向きでしょう」

セルジオの言うことは最もであるし、断る理由にも筋が通っている。確かにSランクの魔導師が行う三試合目にA Aのセルジオには荷が重いのもかもしれない。

(今日はよく喋るな、セルジオくん)

けれど、なのははなんだかセルジオが何か他の理由で戦技披露会に出られないのに、なんとか理屈をつけて断ろうとしているように見えた。

(なんだか、ヘン?)

だが、なのははその違和感を上手く言い表すことができない。

フォーミュラを『見て使える気がしたから』使えてしまえる感覚派のなのはは、こうした自分の感覚を言語化するのが少し苦手だった。

なので、なのはは何かセルジオの態度に違和感を抱きながらも、何も言えずに横顔を見つめることしかできない。

しばらくクイントは「勿体ない」とか「憧れてたじゃない」とか言ってセルジオを説得しようとしていたが、いつまでたってもセルジオの意思が変わらないので、やがて

がつくりと肩を落とした。

「さて、話は終わりましたかね。俺、この後ゼストさんと話があるんで抜けさせてもらいますね」

書類を片手にオフィスを出て行くセルジオの姿が完璧に見えなくなると、メガークがやれやれとばかりに肩をすくめた。

「あの子はほんと強情ね……」

「うー、せつかく今年の年末は親子水入らずで過ごさせようと思ったのに……」

「あの二人似た者同士っていうか、素直じゃないものねえ」

「あーもー、あの親子本当にめんどくさい〜〜！」

彼女たちにとってのゼストは尊敬する上司で、セルジオは可愛い弟分。そんな彼らのお節介を焼くのは彼女たちにしてみれば当然のことでもあった。

これを機に二人がもつと親子らしくなれば良い、とも思っていたのだが、現実はなかなか思うようにはいかない。

そして残念そうに肩を落とす二人の横で理解できず首を傾げている少女が一人。言わずもがな高町なのである。

「あの、『親子』って、どういうことですか？」

「こてん、と可愛らしく首傾けながらされた質問に、クイントが何を今更、とでもいう

ように答える。

「セルジオ君とゼスト隊長。あの二人、義理の親子じゃない」

「え？」

「あれ、知らなかった？」

「え、ええええええええつ?!」



「戦技披露会に俺が、か……」

ぎゅつと拳を握る。

戦技披露会と言えば武装隊に所属する人間の憧れであり、管理局の魔導師の顔として市民の前に立つという事だ。その責任の重さはいうまでもない。

「今の俺じゃあ、出られないよな」

憧れがないとは言わない。

クロノと戦いたくないわけではない。

どこかの期待をかけてくれた誰かの気持ちを裏切りたくない気持ちもある。でも、駄目だ。

少し前までのセルジオならともかく、今の自分は駄目だ。

「正直な話、今の俺は魔導師ランクAあるかどうかも怪しい……」

重くなったECの負荷。それは平静を装う彼の仮面の下で着実に進行し、破壊衝動についてはセルジオの武器の一つであった『無数の並列思考』の半分以上を奪っていた。

そんなセルジオが戦技披露会に出ればどうなるかなど言うまでもない。きつと、航空魔導隊や、地上本部の顔に泥を塗る結果になるだろう。

だから、断るべきなのだ。

「でも断ったらもう二度とこんな話来ねえだろうなあ」

決意すれども、惨めったらしくぶちぶちと呟くセルジオ。やっぱりほんのちよつと出たかったのだ。

うう、と呻きながらセルジオが廊下の壁に頭を軽くぶつけると、背後の男子更衣室から声が響いたのは殆ど同時だった。

「おい、ほんとならしいぜ隊長が三課やめて教導隊に行くかもって話」

(は……?)

凍りついたように体がそこから動かなくなった。

「え、それほんとなのか？　なんか一課の方じゃ噂になってたみたいだけだよ」

「うん。俺も眉唾だつて思つてたんだけど、この前聞こえちまつたんだよ、レジアス中将与隊長がそのことについて話してんの」

「マジかよ……、あの人が降格したのつてそう言う理由もあつたのかー」

「それにさ、次の戦技披露会、セルジオに話行つてただろ？」

「ああ、凄えよな。まだ十七なのにファイナル任せられるなんてさ」

「それ、どうやら本当は隊長に回つてきてたやつらしくてさ。レジアス中將から回つてきた話を頼み込んでセルジオにしてもらつたらしい」

「え、なんでまた」

「うーん、そこは俺も扉越しに偶然聞こえただけだからよく聞こえなかつたから自信はないけど……」

扉の向こうの人物がしばらく考え込むと、ゆっくりと話し始める。

「確かー『セルジオを見極めたい』だっけ？　ちよつと自信ないけどそんなこと言つてた気が……」

「おいおい頼りねえなあ」

笑い声が響く。

「でもさ、もしそうだとしたらセルジオには頑張つて欲しいよな」

「だな。たぶんあいつならきつと完璧にこなしてくれるよ。あいつ、頑張ってるし」
「うん、あいつ、頑張ってるもんな」

そこまで聞いて、セルジオはそこから離れた。

手の中の書類がかさりと音を立てて、今聞いた話を何度も心の中で反芻させる。

(ゼストさんが、三課を辞める……?)

反芻する。

(俺に、戦技披露会の役目を譲った?)

反芻する。

(一体、何のために……?)

頭を回してみるが、今ある情報ではセルジオの中で納得できる答えは出てきそうにな
い。

「セルジオ?」

ふと、声がかかった。

「丁度良かった、この後の件だろう」

「ゼ、ゼストさん」

「どうした、そんな難しい顔をして。何か厄介ごとでもあったか」

「え、いや、その……ゼストさん、一つ、聞きたいことが」

「む？ どうした」

ゼストの鳶色の瞳に見据えられ、ほんの少しセルジオが後ずさりそうになるが、意を決して口を開いた。

「あの、三課を辞めるって話、本当なんですか」

「本当だ」

「——っ。この前の、降格のせいですか」

「それもあるが、以前からレジアスにはそういう話を持ちかけられていた」

「そう、ですか……………」

消え入るように眩きながら視線を落としたセルジオ。そんな彼の頭を、苦笑い混じりのゼストが雑にぐしゃぐしゃと掻きまわす。

「そんな俺が死ぬような顔をするな。あくまでもそういう話が出ているだけだ。まだ、前線を引いてやるつもりはない」

「すみません、なんか、つい」

セルジオもまた苦笑いながら、掻き回された髪を直そうと手を伸ばして、手の中の書類がかさりと揺れた。

「……………む、それは……………戦技披露会の書類か。どうする、参加するのか？」

「その、俺は……………」

一瞬、息ができなくなる。

断らなければならぬ。今のセルジオが戦技披露会に出ていい事などない。間違はなく普段の力量は出せないだろうし、最悪多くの人の顔に泥を塗ることになる。

けど、それでも、セルジオ・アウデイは、ここで引き下がって良いのだろうか。

もし、ゼストが何らかの意図を持って戦技披露会の役目を、セルジオに託したのだとしたら、それを投げ捨てて良いのか。

この責任に、背を向けて良いのだろうか。

セルジオが、小さく深呼吸をして、視線をあげる。

ゼストの鳶色の瞳を見つめる翠にはもう、迷いの色はない。

「俺は――」

三課のオフィスでなのはほんの少しだけ拗ねていた。

(ゼスト隊長と義理の親子だったなんて……、教えてくれてもいいのに)

あのデリカシー無しは普段は相棒とか得意げにいうくせにこういう大事な事を言うとうとしない。

「隊長のそこから帰ってきたら、顔が青くなるくらいとつちめてやるんだから」
むすつとしたなのはが腕を組んでいかにも「私怒ってます！」アピールをして待ち人を待っている、しばらくして扉が開いた。

視界の端に映った淡い金髪に、なのはがすぐにセルジオだということに気づいた。
なのはが最大限に不機嫌そうな顔を維持しながら振り返って問い詰めようとする。

「セルジオ——」

「高町！ 俺をお前の家族に紹介してくれ！」

「……………へ？」

より早くセルジオからぶち込まれた言葉に全ての思考が吹っ飛んだ。

「あ、あの、それってどういう……？」

「どういふも何もあるか。俺の事を紹介して欲しいんだ」

「ええっ？ で、でも、そういうのって、こう、順序というか……」

「——？ そこあたりは俺が自分でちゃんと言うから、頼む」

あわあわとうわ言のように呟いていたなのはだったが、息が触れ合うような近さから緑色の瞳に見つめられて、顔が赤く染まった。

「わ、わかった……、紹介、する」

「ありがとう、高町」

にこりと笑うセルジオと、赤い顔で俯くなのは。

そんな二人を側から見ていたメガーヌは「何か盛大な勘違いが起きてそう……」と思っていた。

稽古

「お願いしますシロウさん！」

海鳴のなのはの自宅のリビング、そのテーブルでセルジオが深々と頭を下げた。二つの湯気を立てるコーヒーを挟んで向こう側には壮年の男が座っている。

「ひとまず頭をあげてコーヒーでもどうかな。自分で言うのもなんだが、なかなかのものだと思ってるんだ」

「はい、いただきます」

セルジオに声をかけた高町士郎——なのはの父親である——が手ずから淹れたコーヒーに口をつけて対面のセルジオへと目を向ける。

彼の知る限り、なのはの上司で相棒で、食事の時にも時折名前がでる少年、いや年を考えるともう青年に差し掛かっている。

なのはの出す男の名前といえば、彼と、親友の兄と、後はユーノくらいのものであったためよく記憶に残っている。

(それに少し刃を交えたわけだしな、忘れる事はない)

軽く息を吹きかけて冷ましたコーヒードで僅かに口内を湿らせると、セルジオはほうつと息を漏らす。

「美味しいです。以前お手伝いした時には飲み損ねたので、残念に思ってたんです」

「それは良かった。なのはにでも軽く教えておくから仕事の時にでも淹れてもらおうと良い」

「あはは、それも良いかもしれませんね」

軽く二人は笑みを交わして、士郎がコーヒードのカップをテーブルに置いた。

「それで、話があるんだったね」

「はい。いきなり訪ねてきて手前勝手なものかもしれませんが……」

「構わないよ、話してみなさい」

士郎の言葉にセルジオが再び居住まいを正す。

「俺に、稽古をつけていただきたいんです」

「ほう……?」

「二月後、『戦技披露会』という市民に魔法を披露する場があります。こちらの文化で似

たようなものを探すならば、格闘技の試合のようなものです。それに選ばれるのは、武装隊員の誉れです」

「それは君にとつても？」

「……ですね。俺にとつても憧れの場所でもありません。それに俺もそこその立場のある人間なので無様を晒せません」

「だから私に稽古を、か」

士郎の「その認識でいいかな」という問いに、セルジオが頷く。

「シロウさんは俺の知る中でも指折りの武芸者です。教えを請うなら貴方の他にはいないと思えました。突然不躰な話をしているとは理解していません。それでも」

「お願いします、とまた頭を下げるセルジオに、士郎はしばらく腕を組んで考え込んでいたが、やがて苦笑いながら頭をかいた。

「まあそこまで言われて断るのも男が廢るか」

「な、なら……」

「ああ、構わないよ。君に稽古をつけてあげよう。私の納めている剣術は事情があつて無理だが、戦闘の手ほどきくらいはしてあげられる」

「あ、ありがとうございますっ！」

思わず弾かれるように立ち上がったセルジオに士郎は柔らかな笑みを返して、まあ座

りなさいと声をかける。

「まあさつきも言った通り私としては稽古をつけるのはいいんだが……セルジオ君」

「はい、なんでしようか」

「君には確か師匠がいただろう？　槍を扱うならその人の所へ行つた方が良かったん

じゃないのかい？」

「——」

「正直、私の専門は小太刀だ。君にとつて有意義な教えができるとは言ひ難い。もちろん一度引き受けると言つたからには言葉を違えたりはしないが……」

士郎の言うことは最もである。

たしかに高町士郎は戦闘経験という面においてはセルジオの知り合いの中ではトップクラスである。二十代の息子を持つ士郎は若く見えるとはいへ、セルジオの倍以上を生き、そして修羅場をくぐつてきている。魔法文明のない地球に住んでははいえ、素で彼ほどの実力を持つ人間は多くないだろう。

けれど、彼の本質は『小太刀使い』である。時折鉄針や鋼糸を使うとは言え、その部分は播らがない。

もし、セルジオが本当に槍使いとしての実力を伸ばしたいと思うならば、師匠にもう一度師事するべきなのである。

故に高町士郎は、「どうしてわざわざ私のところに教わりに来るんだい」と問うているのだ。

「……近いうちに、俺の上司が今の部隊から転属されるかもしれないという話が出てくるんです」

しばらくして訥々と語り始めるセルジオ。

「本当は戦技披露会にもその人が出る予定でした。けど、あの人はその役目を俺に譲った」

「その上司というのは、君の槍術の師匠なのかい？」

「はい。……正直あの人にどういう意図があつて俺にこの役目を託したのかはわかりません」

でも、と言葉を繋ぐ。

「もしあの人俺の『何か』を見極めようとしているなら、絶対に無様を晒せない。いつか、あの人を送り出す時は、胸を張って、安心させてあげたいんです」

「……なるほど」

それはセルジオにとって「貴方がいなくても戦える」、「自分は大丈夫だ」、という事を示すという事であり、その感情を地球、さらには日本人にわかりやすく例えたとするならば。

『一人でジャイアンを倒せなきゃドラえもんが安心して未来に帰れないんだ』、というところか」

人はそれをドラえもんが未来に帰る時のび太の気持ちというだろう。

「銅鑼衛門？ 歴史上の人物か何かですか？」

「あ、君はそう言えばこちらの世界の人じゃないのか。ずいぶん流暢に話すものだからつい忘れてたよ」

「そこからへんは魔法とかで。ええと、それで今の俺の気持ちは銅鑼衛門さんという人と似てるんですか？」

「厳密には違うが、まあその認識でいいよ。君の気持ちはわかった」

「はあ」

セルジオは生粋のミッドチルダ人。地球では有名な某青い猫型ロボットにはほとんど馴染みがなかった。

その後首をかしげるセルジオと土郎の話は週にどのくらい稽古に通うかという話に。

「基本的に私や、美由希や恭也……なのはの兄妹だが……は早朝から稽古をする事になっている。子ども達は大学もあるし、昼間は私も仕事だ。週に三度ほどは夕方も稽古している」

「ならお邪魔でないのなら朝と夕方、それに休日は通わせていただいてもいいでしょう」

か」

「構わないよ。私は忙しくていつもないかもしれないが、君の事は恭也に話を通しておく。きつと稽古をつけてくれるだろう」

はっはっは、と愉快そうに笑う士郎に、セルジオは恐縮したように体を縮こまらせる。「何から何まで申し訳ありません。このご恩に報いるためなら俺にできることがあれば何でもします。何でも言ってください」

「ん？ 今何でもすると言ったね」

「え、はあ、言いましたが……」

柔らかな笑みを浮かべた士郎がぼん、とセルジオの肩に手をかけた。

「なら休日、空いた時間に店を手伝ってくれないかい？ 去年、君が来た時は若い子に評判が良かったんでね」

「そのくらいなら喜んで」

「おおそうか！ 助かるよ、もうすぐクリスマスだから人手が欲しかったところなんだ」
士郎は上機嫌そうにセルジオの背中を叩くと、首だけを傾けてドアから覗いている茶髪のおさげへと声をかけた。

「おーい、美由希、そこで覗いてるんだろ。そんな感じだからよろしく頼むな」
「げ、バレてた？」

「バレてたも何も俺の方からは丸見えだったぞ」

「ありやー、それは仕方ない」

セルジオが振り返るとそこには長い茶髪を結った眼鏡の女性が悪戯っぽい表情を浮かべて軽く手を挙げていた。

「初めまして、私は高町美由希。なのはのお姉ちゃんやってます。歳は十八だからたぶん君の一つ上だね」

「これはご丁寧に。俺はセルジオ・アウデイです。ええと……」

「気軽に美由希でいいよー。私は今年受験だから稽古には付き合えないかもだけど、見かけたら仲良くしてね」

「こちらこそよろしくお願いします、ミユキさん」

セルジオが美由希の名前を呼んだ途端、廊下で何かがぶつかるような凄惨な音が響いた。

「今のは？」

「あー、もしかして私やつちやつたかなー」

「？」

「あー、うん。セルジオ君は気にしなくていいよ！ だから、うん！ 気にしないで！」

「こういうのは突っ込まない方が幸せでいられるぞ」

「……はあ、ミユキさんとシロウさんがそう言うなら、わかりました」
途端、また音が響く。

「いや流石に見たほうが」

「まあまあ、そこは流してあげよう。あの子もそういうところ見られたくないだろうし、うん」

美由希は誤魔化すように笑うなか、セルジオは土郎達の態度に眉をひそめるのだった。

その後、セルジオは休みを取っていたので一人で鍛錬をしながら土郎の仕事の終わりを待つことに。

約束通り手伝うと申し出たのだが、まだそれほど忙しいわけでもないし、恭也が帰ってくるまで道場で待っているといい、と言われたのだった。

「――」

静かな道場の中でトレーナー姿のセルジオが槍を振るう。

思い浮かべるのはゼストの姿。

初めて槍を握った日から自身を導き、そして目標であつてくれた師匠の槍術、その一突、一薙、一閃、その全てを脳内で再現しながら、模倣トシムスしていく。

ゼファーによるシステムではなく、記憶の中にだけある師匠の姿を何度も再生して、嘯みしめながら体に覚えこませる、染み込ませていく。

今のセルジオに以前までできていたマルチタスクを駆使した演算待機による高速の魔法発動。さらには短距離転移、収束砲撃デイクインガンを発動することは極めて困難だ。

魔法による回避、迎撃が困難だとわかっている以上、体術による技術向上以外にセルジオに取れる選択肢はない。

そして、ゼストに頼らず、かつクロノに対抗し得る体術を身につけるといふ点において、高町士郎にこれ以上ないほど適任だった。

(正直もし断られたらお手上げだったんだけど、シロウさん達が良い人でよかった)
一通りやりを振り終わると今度は軽くステップを踏みながら、拳を握ってクイントから教わったストライクアーツの型を確認する。

クイントにはよく「ストライクアーツのセンスがない」とは言われたものの、彼女の教えてくれた繋がらぬ拳は今でもセルジオの頼りにしている武器の一つだ。

踏み込みから関節を通して勢いを殺さず加速、余すことなく拳の先まで伝達すること

で爆発的な勢いを生じさせる『繋アンチエイ・ナックルからぬ拳』が虚空を削る音が耳に届いた。
(だいたいクイントさんのもの六割、良いところ七割くらいの威力か)

セルジオが自分の拳を見つめて、ため息を一つ。

「これでも結構練習したんだけどなあ」

ネガティブになりそうな思考を軽く頬を叩いて引き戻すと、近くに立てかけておいたゼファアーに手をかけようとして、視界の端に一人の青年の姿が映る。背中を道場の入り口近くの柱に預けた彼は静かにセルジオを見つめている。

黒髪と同色の瞳。肩幅はがっしりとしており、普段から鍛錬を怠らない人間であるということが窺いしれる。

いつからセルジオのことを見つめていたのかはわからないが、少なくともその青年の名前をセルジオは知っていた。

「高町、キョーヤさん、ですね」

「俺のことを知っているのか」

「時々高町……妹さんにお話は聞いていましたし、それにシロウさんに凄く似てますから」

「……確かに、それはよく言われるな」

恭也が軽く笑って道場に入ってくる。その視線は身長が170後半に差し掛かって

いるセルジオよりも僅かに高い。

「初めまして俺は……」

「セルジオ・アウデイ。妹たちから話は聞いている」

「あー、それはどうも……つて、達？」

「ああ、なのはの方からは『無茶しがちだが尊敬できる先輩』だと、そして美由希からはさつき『なのはが父さんに話をする為に連れてきた男』だと聞いた」

「高町が連れてきた……」

「ん？ 違うのか？」

「いえそうですね。俺は高町にシロウさんに（稽古をつけるお願いの）話をする為に連れてきてもらいました」

「そうか、やはり……」

遠い目をした恭也がため息をつくと壁にかけてあった小太刀二本へと手をかけると、その話で軽く振った。

「……妹は幼い頃俺が一人にしてしまつてな、そのせいで少し孤独な幼少期を過ごさせました」

「え、はい」

セルジオは「え？ なんで突然高町の話が出てくるんだ」とは思ったものの神妙に頷

いておく。

「そのなのはが男を連れてくるとは俺も少し思うところはあある。まあ美由希より早いのはまあこの際良いだろう」

恭也が木刀の切っ先をセルジオに向ける。

「構えると良い。その覚悟、見極めてやろう」

(……！　そうか、キョーヤさんは俺が稽古についていけるかどうか確かめようとしているのか！)

多分違う。

「どうした、怖気付いたか」

「いえ、胸を借りるつもりで行かせてもらいます。一太刀、ご教授ください！」

「その意気やよし！」

セルジオが魔力で作った槍を握り、恭也へと向かっていく。

「せ、アッ！」

「……ッ！」

美由希が意図的に伏せた言葉からの勘違いによる壮絶な戦いが幕を開けた……！

◆
高町なのはは腹を立てていた。

必ずやかなのデリカシーなし野郎に一言言つてやらねばならないと思つていた。

彼女にはこの感情の詳しいところはわからぬ。

けど、取り敢えず何か一言言つてやろうと思つていた。

「セルジオくんのばか」

ていつと枕に拳をいれたなのはが自室の窓からセルジオのいる道場を伺う。

おそらく今もそこで彼は一人きりで槍を振っているのだろう。彼の当初の目的通り。

「ほんと、ほんとにばか」

なにやら真剣な目で家族を紹介してとか言われるから思わず勢いに任せて頷いたなのは。詳細を聞くまで顔を真っ赤にしていたが、蓋を開けてみればなんて事のない稽古の話。肩透かしもいいところである。

しかもその後なのはの態度を察して「もしかして何か勘違いしたのか?」と聞かれ、さらには「突然そんなこと言うわけないだろ」と続いたものだからさあ大変。

あんまりな言い様に、流石のなのはも腹に据えかねたと言うわけだ。

彼は乙女の純情をなんだと思っているのだろうか。

まあ、それでもちゃんと士郎に話を通してくれるあたり、なのはらしいと言えらしい。意地悪で話に取り合わないこともできたのに、そんな事を考え付きもしないのは根本的なところで『良い子』なのだ。

なのはがいじけたように枕に顔を埋めっていると、枕元のスマホがバイブ音が響いて顔を上げた。

「フェイトちゃん……?」

液晶の名前になのはが首を傾げながらメールアプリに送られてきた文を読み上げた。

『今度クロノの戦技披露会はやて達と一緒に同じ場所から応援しませんか。シグナムも同じサイドみたいだし』……そういえばシグナムさんも出るんだっけ」

戦技披露会が行われるのはミッドの都市部にある東と西に別れたステージである。基本的に観客は応援したい魔導師がいる側で模擬戦を観戦するのが通例だ。

(ええと、セルジオくんが東サイドだったから、クロノくんとシグナムさんは西サイドって事なのかな)

つまりこのフェイトの提案は一緒に戦技披露会を見ようという申し出なのである。

結論から言えばなのはこの申し出を断る理由はない。どうせ行くこうと思っていたのだし、どうせならフェイトやはやてと一緒にの方が楽しいだろう。

「でも、それじゃあセルジオくんの応援できないのかな……」

こぼすように呟いて、なのはがハツとしたように顔を引き締めた。忘れそうになっていたがなのはは今セルジオに怒っているのだ。

ふう、となのはが気持ちを落ち着かせるために小さな嘆息。そして、スマホでフェイトへの返信を書き始めた。

戦技披露会まで、後一ヶ月余りとなった、そんな日の出来事だった。

修行

早朝の道場に乾いた音が響く。

「せあつー！」

「甘い！ 振り抜いた先を最後まで見ろ！」

「はいー！」

片や寸の詰まった木刀二本で攻撃をいなす恭也。ジャージ姿でなお刀を持つその姿は絵になり、その存在が普段から刀という武器に親しんでいることがよくわかる。

片や木槍を両手で握り恭也を攻め立てるセルジオ。涼しい顔の恭也とは対照的にその表情に余裕はなく、額に浮かんだ汗で髪が張り付いている。

セルジオが踏み込みながら木槍による突きを放つと恭也は小太刀の一本で刃の上を滑らせるようにして逸らした。

「そら足元がお留守だぞ」

「ーッ、はいー！」

「体を泳がせるな。無駄に動き回るとその分体力がなくなる」

「はいっ！ キョーヤさん！」

槍をそらされて前に流れた時を狙いすまして恭也の足払いが飛ぶが、セルジオはそれを横に跳ぶことでかわした。

だが、その大きな回避行動を狙い澄まして恭也の疾風の如き二刀が追従する。

（目では追えない……なら！）

風を切り自らを襲う刃は体術のみで音の速度に迫る。それはセルジオの目で捉えることは不可能。ならば、見らずに対応するしかあるまい。

（擬似予測——八手）

今までの戦闘で得た経験と恭也のバトルスタイルから一番確率の近い未来を予測、その瞳に三秒先の未来を映し出す。

その予測は外れない。ゼファーに組み込まれた術式を元に最適化されたそれは演算能力が不完全である今のセルジオであっても驚異の制度を誇る。

セルジオが槍を右手で持ち替え左手を空にして攻撃に備えた瞬間、恭也の目が細くなる。

「……何か、視ているな」

「——ッ」

恭也は寸前で直感的に刀の振りを修正、自分の見た光景に沿って動いていたセルジオを掻い潜り、鳩尾に掌底を叩き込んだ。

「か、はっ……」

強打されたことによつて横隔膜が痙攣し、息が詰まったセルジオが膝から崩れ落ちる。

細い息を漏らしながら込み上げる嘔吐感を飲み下して、手の中で半回転させて木刀を逆手に持ち直していた恭也を見上げる。

恭也は驚くほど強い。それこそセルジオと年が五つと違わないなど信じられないほどに。その底は初めて戦つて二週間が経つた今でも知れない。

(くそ、予想よりも遥かに強い)

悔しげに歯を噛むセルジオを労わるように恭也が声をかけた。

「どうする、今日はここまでにしておくか」

「冗、談……!」

優しげな声に奮起したように震える足に喝を入れて木槍を強く握ると、切っ先を恭也へと向けて構えた。

「もう一本お願いします!」

「よし、かかって来いっ!」

猛然と槍を振るいかかるセルジオと、柳のように柔らかな態度でその槍を受ける恭也。

そんな二人を高町士郎は道場の壁際で静かに見守っていた。



恭也とセルジオの小太刀と槍が斬り結んだ数が大まかに百を超え、セルジオが地面に這い蹲った数が五十に迫った頃、士郎が声をかけてその日の稽古は終わりとなった。

その後士郎が一足先に帰り、恭也とセルジオが道場の片付けと掃除を始める。

以前は恭也が年末に婚約者の実家に行っていた為一人で行った掃除だが、今年は恭也もいる為先日ほど苦労することはない。

セルジオがずびーつと雑巾掛けをしていると木刀などの装備を片付ける恭也が感心したように頬を撫でる。

「あれだけ俺や父さんに転がされたのによくそんなに体力が残ってるな」

「伊達に俺も局勤めじゃないってとこです。一桁の頃からコツコツ体力は作ってきました

たし」

「そうか、お前も管理局に所属して長いんだつたな」

「ですね。確か五、六……もうすぐ七年目つてところでしょうか」

「それ程か。ならその年で随分体が出来るのも納得だな」

世間話も交わす二人の間に険しいものも、勘違いから来るすれ違いもありはしない。

「ウチの稽古でやりたいことは実現できそうか」

「ううーん、そこはなんとも言えませんね。正直、こればかりは自分でなんとかしなきゃいけませんし」

「すまん、二刀流ならともかく、槍はな……俺も専門外だ」

「いえいえ、とても助かってます」

出合い方こそ変な感じだったものの、セルジオが恭也に百回以上致命打を貰って実力差を痛感した頃にやって来た土郎によって見事誤解は解かれていた。

まあ、恭也の方も「どうせ半分は美由希の冗談だろうが軽く揉んでやろう」ぐらいの気持ちでセルジオに試合を申し込んでいたらしい。

言つてしまえばセルジオのやられ損なのだが、当の本人はいい稽古をつけてもらったくらいにしか思つてない様子。

しばらくの間当たり障りのない会話を続けていたが、ふと恭也が思い出したように一

つの話題をセルジオに投げかけた。

「なあセルジオ、お前はそんなに自分に自信がないか？」

「え？」

セルジオが質問の意図がわからず眉を寄せる中、木刀を磨く恭也は振り返ることなく言葉を続ける。

「足払いの後の追撃、お前は途中目で追うのは諦めただろう」

「う、やっぱりわかりますか……」

「まああからさまに体の動かし方が変わったからな」

手入れし終えた木刀の内一本を元あったように壁に立てかけると、腕を組んでやれやれとでも言いたげに息をつく。

「お前はな、それまでには何とか見ようとしてヘツタクソな非効率な動きをしているが、諦めた途端に動きが良くなるんだよ。だから俺や父さんからすればモロバレだ」

「お恥ずかしい限りです」

「まったく、少しは自分のことを信じてやれ」

「そうは言われましても、自分が戦闘に向いてないって何となく察してますし……」

「だからな、お前のそういう態度が問題があると言っているんだ」

「え？」

セルジオに近接戦闘においての才能はない。それは今まで出会った多くの人に言われてきたことだ。

槍では大成しないとベストに言われ、格闘術はセンスがないとクイントに評価され、加えて動体視力も言い訳ではない。私生活では眼鏡か魔法を使って視力を補っているあたりからもそこがよくわかる。

故に、セルジオの戦いとはいつも自分の実力に見切りをつけて、代わりのもので補うというものだった。近接格闘の才能の代わりに、演算で、魔法の展開で、周囲の環境で。けれど、恭也はそれこそが問題だと言う。

「まあ取り敢えずこっちにきて座れ」

恭也が手招きして自分の隣を軽く叩くので、取り敢えず大人しく従って腰を下ろした。その横で恭也が傍に置いてあった残りの木刀の手入れを始める。

「セルジオ、お前は『強さ』ってどう言うことだと思う？」

「強さ、ですか？」

「そうだ。力でも技でも心でも何だっがいい。『強い』って言われる人間の共通点とは何だと考える」

「そうですね……」

セルジオが手を顎に添えてふむ、と考え込み始める。

すぐに浮かんでくるのはゼスト、クイント、メガーヌや、忘れられない『あの人』の姿だが、暫く考えてみても満足できる答えは出てこない。

眉を寄せて低く唸るセルジオの姿に、ふっと気障な笑みを漏らす恭也。そして今度は木刀を手入れしていた手を止めて光に照らして破損がないかどうか矯めつ眇めつ確かめる。

「これは俺の勝手な意見だが、『強い』奴らつてのは少なからず自分の『狂信者』なんだよ」

「狂信者……」

セルジオの呟きに恭也が軽く頷く。

「この世には自分より強い奴なんて山ほどいる。俺も成人してそこその腕になったと思っではいるが、それでも自分がどれほど未熟か日々思い知らされている」

「キョーヤさんでも、ですか?」

「お前は随分俺を高く買っているみたいだがまだまだ俺なんて四半世紀も生きていない若輩に過ぎないさ」

でもな、と恭也が繋ぐ。

「それでも、人生には負けられない時が、負けてはいけない時と言うものがある。例えば、相手が自分よりも強かったとしても、だ。」

そう言う時に、俺たちは何を信じて、どう言う思いをこの刃に載せるべきか」
「自分の強さ、ですか」

その問いかけに恭也は何も答えない。ただ、返答の代わりと言わんばかりに手入れしたばかりの木刀を片手で振り下ろした。

しん、と斬り裂かれた空気の鳴動が耳に届く。

「結局、俺たちは信じるしかない。例え負けそうになっても、それでも自分を信じて、自分の強さを信じて戦うしかないんだよ」

「――」

「それに、ここぞと言う時、お前は自分に自信がない奴に安心してその勝負を預けることができるか？」

「それは、確かにそうですねえ」

茶化したような恭也の言葉に苦笑いでセルジオも頷く。

(……なんか不思議な感じだな)

隣の恭也の横顔を見ながらふとそんなことを思う。

今までセルジオの周りには彼を導いてくれる存在は多くいた。師匠であるゼストはもちろん、姉貴分であるクイントやメガーヌなど、どれも頼りになる人たちだが、みんなが離れているか、女性ばかりだった。

だから、こうして同性で同じ目線を持ってアドバイスをくれる相手というのはセルジオの人生では初めての存在だった。

(もし俺に兄がいたらこんな感じだったのかな)

こうして同じ道場で汗を流して、こんな答えのない話をして、時には馬鹿な話をして、時には喧嘩をして、そんな関係が作れたのだろうか。

(そんなこと、考えるだけ無駄だな)

恭也はセルジオの兄ではないし、セルジオに家族ができることなどない。いくら感謝しているとはいえ、そのところを履き違えてはいけない。

(でも、感謝を伝えるくらいはいいよな)

そのくらいなら許される筈だ。

「恭也さん、色々ありがとうございます」

深々とセルジオが頭を下げる。

「おいおい急になんだ」

「木槍とか準備していただいたり、こうして稽古をしてもらったりしてるので、一応改めとお礼をと思ってます」

「引き受けたのは父さんだ。俺はおまけだよ」

「それでも、ありがとうございます、キョーヤさん」

「参ったな」

そしてまた頭を下げるセルジオに恭也が困ったとばかりに頭をかいていたが、ふと何かを思いついたのか手を打った。

「ならセルジオ、見返りと言つてはなんだが、一つ頼まれごとをしてくれないか」

「はい、俺にできることならなんでも」

「即答していいのかわ？」

「キョーヤさんの頼みなら俺には断れませんつて」

「そうか、なら……」

恭也がセルジオへと何かを頼み、ほんの少しだけセルジオは目を見開いたが、やがて力強く頷いた。

「その約束、絶対に守ってみせます。俺の命に代えても」

「そんなに気負わなくていいさ、お前のできる限りでやってくれ」

ぼんぼんと恭也が軽くセルジオの肩を叩くと、やがて二人は表情を緩めて笑い合う。どのような約束が交わされたのか、それは彼らしか知り得ぬことであり、きつと他人が尋ねたとしても教えてくれることはないだろう。

そこには、男同士の、稽古を通して互いの人柄を確認しあつた男同士の不思議な信頼が見て取れた。

「よし、なら約束ついでに一つ技を見せてやる。やりたいたいことがあるって言うたな、できんならその参考にでもするといい」

「え、でも士郎さんは技とかは教えられないって」

「ああ確かに教えられはしないが、まあ少し見せるくらいなら咎められはしないだろう」

誰にも言うなよ、と恭也がほんの少し目配せをして立ち上がると、手入れを終えたばかりの小太刀を手に構えをとった。

「一度しか使わない。目を、離すなよ」

そしてセルジオの前で、疾風の一閃が放たれた。



セルジオが高町家での稽古に励んでいた頃、戦技披露会での相手となるクロノはと言うと、東京での管理局支部での政務に励んでいた。

「あれ、クロノ君、今日は定時に上がるの？」

「なんだその嫌味な上司のような物言いは……」

「あ、や、ごめんごめん。いつも少し仕事をやってから帰るから珍しいなーって思ってた。僕だって早く帰る時くらいはあるさ、どこかのワーカーホリックとは違うんでね」

部下に帰るよう声をかけた後、皮肉げに表情を歪めたクロノが手早く荷物をまとめ、とコートと羽織る。そして今度は胸ポケットからデバイスを取り出すと転移の魔法陣を組み始めた。

「あれ、クロノ君今日は転移で帰るの?」

エイミーが言外にいつもは一緒に帰るのに、ということに匂わせるが、クロノは特にそれに気づいた様子もなくああ、と頷いた。

「少しイギリスに行ってくる」

「い、イギリス?!」

ちよつとコンビニ行ってくるくらいのノリで海外旅行をかまそうとしているクロノにエイミーが目がかつ開く。

「な、なににしに?」

「人と会うんだ。前から頼んでいたが、昨日突然返事が来てね」

「あの一、それってもしかして、女の子、だったりする……?」

「……? そうだが」

当たり前だろう、と言わんばかりの態度にエイミーが言葉に詰まった。

仕事一筋、他のことなど気にもとめていなかったクロノがいつのまにか何やら外国で女と会う約束をしている。これは由々しき事態である。

「あの、それ私もついていっちゃダメかな！」

「別に構わないけど、エイミーにはあまり楽しくないと思うよ？」

「で、でも、クロノ君のことはちゃんと確かめて艦長に報告しなきゃいけないと言いますか、騙されていないか自分の目で確かめたいと言いますか……」

「？」

「とにかく、私も行く！ 異論は認めません！」

「そ、そうか、なら一緒に行くか」

詰め寄ってきたエイミーに見上げられてクロノは頬を少し朱に染めながらも、二人揃ってあらかじめ許可を取っておいた転移を魔法の範囲内に選択、魔力を通して術式を起動させる。

二人の視界が青色の魔力光に染め上げられ、そして、晴れる。

すると、目の前にはよく似た顔で頭に猫耳を生やした二人の女性の姿があった。

「お、来た来た。時間ぴったし、さっすがクロスケ、律儀だねえ」

「こちらから頼んでいる立場だ。遅れるわけにもいかないだろう」

「あら、エイミーも来たのね、お久しぶり」

「ロツテに、アリアも？ どうしてまた……」

彼女たちはリーゼロツテとリーゼアリア。クロノにとつての魔法の師匠であり、彼の恩師でもあるギル・グレアムの使い魔である人たちだった。

「にしても、クロスケが私たちを頼るなんて珍しいじゃん。よーやくお師匠を敬うようになつた？」

「ふふ、このタイミングで連絡して来たつてことは、要件はやつぱり、『戦技披露会』のこと？」

「そうだ。話が早くて助かる」

瞬間、エイミーが全てを理解した。

（クロノ君の会う人つてのはリーゼ達で、その要件は完璧に戦技披露会に向けての修行をつけてもらうこと……何これ私の独り相撲じゃないの……）

エイミーが親しげに話す三人の横で頭を抱えた。

今回の件に関しては、エイミーの早とちりとクロノの言い方の問題で生じた悲しきすれ違いだったということだ。

自己嫌悪に陥っているエイミーなど気づきもせず、クロノが自身の魔法の師匠二人の前で背筋を正した。

「来月、戦技披露会でセルジオオーパー僕の友人と戦うことになった。自分を鍛え直したいんだ」

「ふむ、そりゃ別に構わないけど、その友達って魔導師ランクAAだろ？ 戦闘データ見てる感じクロスケが負けるとは思えないけど」

「……そうだな。僕とセルジオの戦績は7:3。データだけで見るなら僕の勝ち越した。でも、僕は自分がセルジオより強いとは思ってない」

「ふーん、それはどういう意味？」

「楽しんで笑うロッテに問いかけられて、クロノの脳裏に始めてセルジオと真剣勝負をした日のことが思い返される。」

「優しげで、今まで魔法戦において一度も負けたことなかった友との、初めての真剣勝負を。そして、その時の友の瞳を。」

「士官学校時代、模擬戦という形で幾度か戦ったことがあるが、あいつの僕への勝利の割合は、成績を決める評価試験の時だった。取り返しのつかない、年に一度しかない真剣勝負」

「へえ、それってつまり……」

「ああ、セルジオは本番に強いタイプだ」

「簡単に言うとう、クロノ非常に優秀なため、早々の相手には負けない。故に自然と勝率

は高くなるタイプ。

けれど、セルジオは百回戦って九十九回負ける相手にも、ここぞと言う時に一回の勝ちを持って来られるタイプ。クロノの言う通り、一度っきりの本番に強い人間だと言うことだ。

「きつとセルジオはやるからには本気で勝ちに来る」

——だから、僕も負けられない。

クロノの海の色が静かに闘志を燃やして、リーゼ達を見据えた。以前は二人の胸辺りまでしかなかった身長も今では随分と伸びて、目線の位置はもうほとんど変わらな

い。
リーゼ達の胸の中に大きくなったんだな、という感慨と、それでもまだ師匠として頼ってくれるんだな、という喜びが生まれる。

やがて、ロツテがくくつと堪え切れないように笑いをこぼした。

「いいよ、クロスケ、久しぶりに師匠の強さってやつ、刻み込んであげる」
それに続くようにアリアも薄い笑みを浮かべる。

「私たちも出来る限り協力させてもらおうわね」

その返答を受けて、最後にクロノがニツと笑みを浮かべて頷いた。

「ああ、よろしく頼む」

誰か一人が勝ちたい訳ではない。

誰か一人だけが努力をするのではない。

二人の想いを乗せて、時計の針は刻一刻と進む。

そうしてその日、彼らはそこに立つ。

その関係を――

ついに戦技披露会の日がやって来た。

その日、フェイトとはやてと三人でリニアで移動して来たのは、最寄りの駅に着いてからその賑わいに目を丸くした。

駅から降りると戦技披露会の行われる会場まで様々な出店が立ち並び、老若男女がやいやいと話しながら目的地向かって歩いていく。

「ほえー、すつごい人やなあ。なあフェイトちゃ――」

「なのはー、はやてー、クレープ買って来たよー、食べる?」

「ありがとうー、フェイトちゃん」

「早っ! え、さつきまでここにおつたやんな!?!」

「あ、はい、はやての分も買って来たよ」

「それはほんまありがとう……って、流されとるこの超絶行動! 私がおかしいんか?!」

「あはは、はやて、今日も元気だね」

「それだいたいフェイトちゃんたちのせいやからア! 私かてこんなツツコミセンス光

「らせたくないわ！」

天然ボケをかますフェイトにいつも律儀に突っ込んであげるはやては何だかんだ面倒見がいい。

相変わらずだなあ、と思いつながらもなのはが二人に挟まれたままクレープを頬張る。イチゴと生クリームのシンプルな具は値段に見合った味で実家が喫茶店のなのにとつては安っぽいとも取れる味だったのだが、こうして仲のいい友達と歩きながら食べると何割か増しで美味しく感じた。

もむもむとクレープを食べながら辺りを見渡すと、なのはより少し年上くらいの女性たちが雑誌を持ってなにやら興奮してように話している。

（あ、あれ戦技披露会に出る人たちのインタビュが載ってるやつだ）

三課の一人がセルジオをからかうために買い占めて、中の写真を引き延ばして三課に張り出していたからよく覚えているのだ。確かあの中に握手券かサイン会の参加券か何かが入っているらしい。

なのはがぼーっと雑誌を見ていると、隣のフェイトが不思議そうになのはを覗き込んだ。

「なのは、どうかした？」

「え、いや、セルジオくんが言ったみたいになんかお祭りみたいだなーって」

「まあなんや管理局も支持率アップの為に力入れとるらしいからなあ。こんだけ大きなイベントになるのも領けるってもんや」

にしても、と前おくと、はやてが会場の方を目を細めて見つめる。

「なのはちゃん今日は私たちと来て良かったん？」

「どういうこと？」

「いやだつて今回私たちが応援するの西サイドやん。それつてセルジオさんのおる方は逆サイドやろ？」

「うん、まあそうだけど……」

「そしたらセルジオさん応援する時凄いアウェイなんやない？」

「たぶん、そうだよね」

「そうだよね、つてんな適当な……」

はやての問いかけにもむすつとした様にクレープを頬張るだけのなのは。

これは何か喧嘩でもしたんかなー、と邪推するがそれを直接尋ねる気はしない。馬に蹴られるのははやてとしてもごめんなのである。

取り敢えずため息混じりになのはの隣にいるフェイトへと目を向けると、そこには真つ青な顔であわあわしている姿があった。

はやてが直感的に、あ、あいつまた何かやらかすな、と感じ取るが、悲しいかな距離

があるためその蛮行を止めることはできそうにない。

「ご、ごめんなのは！」

「突然どうしたの、フェイトちゃん」

「だ、だつて私たちと一緒に来るつてよく考えたらセルジオさんは応援できないつてことになつちやうよね。なのはセルジオさんの方を応援したかつたよね」

「ふえっ!? そ、そんなこと……」

「なのはがセルジオさんの事（友達として）好きなのはわかつてたのに、ごめんね……」（うん、もう私は知ーらん、と）

いつものようにフェイトが爆弾を打ち込み、なのはが沸騰した。その横ではやてはツツコミを放棄してクレープを齧った。

「ご、ごめん、私、そんなつもりじゃなくて……」

「そ、そんな事ないっ！ セルジオくんなんて知らないから！」

「え、でも……」

「いいの！ あのデリカシーのないセルジオくんは一度くらいクロノくんにつっ飛ばされればいいもん！」

ふんす、と鼻息荒く言い切るなのはに、フェイトは首をかしげるしか無い。

「あら、じゃあ今回なのはちゃんはセルジオ君のこと応援してあげないの？」

「べ、別に応援しないわけじゃないですけど、ちょっとは痛い目見た方がいいと思うだけです」

「そっかー、あの子少し落ち込んだじゃうかもねえ」

「でも、セルジオくんがどうしても応援して欲しいって言うなら考えてあげなくも……って、この声」

かけられた言葉に反射的に返答していたのはだったが、その声の正体に気づくと驚きの声を上げて振り返った。

「く、クイントさん?!」

「はろはろー」

するとそこには娘二人と白髪の男性を伴ってここにこと笑っているクイントの姿がそこにはあった。



「ぐえー、疲れた……」

戦技披露会、その会場の控え室の机に突っ伏したセルジオが呻き声を上げた。

「手が、痺れた……」

「お疲れ様、人気者」

「はいはい、どうも。まったく、なんで俺が握手会やらサイン会なんてしなきゃならんのです……」

「それもお仕事のうちなんだから仕方ないでしょう?」

「そりゃそうです……」

戦技披露会で僕と握手!

ボヤクセルジオはメガーヌに投げ渡されたペットボトルを片手で受け取ると、もう片方の手でゼファーで戦闘データを弄り始める。

出番まで時間は1時間と少し。勝率を上げるためにできることはやっておこうという訳だ。

その様子を見ていたメガーヌが真面目ねえ、と零した。

今日の彼女はセルジオのセコンド。こうしてサポートをしたり、いざとなった時に救護として彼の救出、治療に当たるのが役目となる。

召喚術による転移魔法、ミッドチルダ式をメインに古代ベルカ

「そう言えばメガーヌさん、今日旦那さんとルーテシアちゃんはどうしたんです?」

「んー、一緒に朝来ようかと思つてただけどルーがなんかぐずぐずちやつてねえ。だから二人は後から」

「あー、それはなんというか、すみません。ルーテシアちゃんから引き離すみたいなことしちやつて」

「良いのよ、あの子は賢い子だからちやーんと私のことをわかつてくれているし」

「いや、それは違うでしょう」

軽く笑みの添えられたその言葉にセルジオがホロウインドウから目を離れた。

「『親』つてのは子どもには唯一無二です。だから、冗談でもそんなこと言わないでください。ルーテシアちゃんにはメガーヌさんは世界で一人だけの母親なんですから」

真剣な色合いを孕んだ物言いにメガーヌがほんの少し目を開いて、そうね、と息を吐く。

「今のは私の言い方が悪かったわね。セルジオ君に諭されるなんて、お姉さんちよつと驚いちゃったかも」

「餓鬼の戯言ですよ。そんなに重く受け止めずに」

「いいえ、とつても良い言葉だつたと思うわ。君だからこそ、言えたことなのかしらね」
ふつとコケティッシュに目を流すメガーヌ。

「君は案外ウチのルーテシアのこと大切に思つてくれているのね。もしかして年下が趣

味だったりする?」

「あんなに小さい子に何思えってんですか。ただ、俺は大切な人メガーヌさんの大切な人は俺も大事にしたってだけです」

「ふふ、君は変わらないわね」

「これが『セルジオ・アウデイ』ですから。当然のことを言ってるだけです」

最後に少し冗談めかして言葉を濁すと胸を軽くドンと叩いた。二人の間でくすつと小さな笑みが交わされる。

「機会があつたらまたルーテシアと遊んであげて頂戴ね。君のこと気に入っているみたいだから」

「俺ルーテシアちゃんと会つたの二、三回しかなかつたと思いますけど……」

「でも時々『せお』とか『なー』と言うわよ?」

「む、それはたしかに俺と高町のことですね。何がそんなに気に入つたんだか」

不意に控え室のドアが軽くノックされる。

「あれ、来客の予定つてあつたかしら?」

「あ、たぶんティーダですね。ちよつと頼み事してて」

セルジオがドアを開けると、案の定そこには爽やかな笑みを浮かべた彼の友人が片手を上げて待つていた。

「や、友人の晴れ舞台、見に来てあげたよ」

「恩着せがましく言ってるんじゃないやねえよ、妹とデートする口実にした、の間違いだろ」

「ははは、言ってくれるね」

否定はしない。つまりイエスと言うことである。

「頼んでたものは？」

「ほら」

しゅつとティーダが手首のスナップを利かせて何かをセルジオの方へと放った。それを指で挟んで受け止めたセルジオは軽く解析魔法をかけて確認すると満足そうに頷いた。

「確かに。急な頼みだったのに引き受けてくれてサンキューな。今度飯でも奢るよ」

「いや、それはいいから君は絶対に今日勝ってくれよ」

「……？ お前らしくないな、何か裏があるな」

「セルジオは俺の事を何だと思ってるんだ……と言いたいが、強ち間違ってるから否定できないな」

くすりと笑ったティーダが胸ポケットから一枚のペラ紙を取り出した。

「なんだそれ？」

「さつき道すがらクロノとセルジオの模擬戦の賭博やったから参加してきた」

「何やってんだよ管理局員！」

「オツズ低かったからセルジオに幾らか入れてきた。俺に臨時収入くれよ？」

「仮にも執務官志望がやっていい事じゃないだろうが！」

「はっはっはっ」

「笑つて誤魔化してるんじゃないねー！」

それでいいのだろうかティエーダ・ランスター。

「と、冗談はこのくらいにして、セルジオを信じてるのは本当だ。まあ、見せてやつてくれよ」

「見せるつて、何を？」

「俺たち非才でも、エリート天才に勝てるつてトコ」

「ティエーダ」

その後、ま、信じてるよ、とティエーダはセルジオの肩を叩いて去つて行つた。

負けられない理由が、少し増えた。

またもやドアがノックされ、セルジオたちの返答を待たずに大きく開け放たれてクイントたち中島一家が姿を見せた。

「やつほー、セルジオ君！ 緊張してない？」

「せめてこつちが返事してから開けなさいよ、クイント」

「そうですよ、俺が着替えてもしてたらどうしたつもりなんですか？」

「そしたらギンガ喜ぶわ！」

「お、お母さん！ よ、喜びませんからね！ た、たぶん！」

「はいはい、わかってるよ、ギンガちゃん」

「そうね、ギンガならたぶん露骨に喜ばず指の隙間からチラツツと見るくらいに留めるわよね」

「お母さん！」

「てへー」

赤い顔でクイントに食ってかかるギンガの姿にセルジオが苦笑していると、旦那として責任でも感じたのか眠りこけたスバルを背負ったゲンヤも苦笑した。

「悪いな、試合前だったのに喧しくしちまって。クイントのやつが来るって聞かなくてよ」

「いえ、このくらいがいつも通りで落ち着きますよ。ゲンヤさんもわざわざありがたういいます」

「ま、世話した坊主の晴れの日だ。見に来ねえ手はねえだろ？」

「坊主はやめてくださいよ。もうそんな歳じゃないですって」

「おっと、そりゃ悪かったなセの字」

ニツとゲンヤが男らしく笑ってみせる。

何度言っても「坊主」呼びはやめてくれなさそうである。

まあたしかに彼のような歳の人間から見れば、セルジオのような四半世紀も生きていない人間は坊主になるのかもしれないのだが。

「にしても、凄え人だな。クラナガンの人間の半分くらいはここにゐるんじゃないのか？」

「流石に半分は言い過ぎでしょうが確かに中々の賑いですよ。さつき友人に聞きまして、賭け事やつてる連中までゐるとか」

「管理局の足元で何やつてんだそいつらは……」

「あ、それ私も参加したわよ」

「は?! おま、いつの間に?」

「ゲンヤさんがスバルたちのお茶会に行つてる時に、さくつと」

「うっそだろ……」

「因みにゲンヤさんの来月のお小遣い全額セルジオ君に突つ込んだわ!」

「オイ! クイントオ!」

「さあセルジオ君! ゲンヤさんのお小遣いをゼロにするか倍にするかは全て貴方の腕次第よ!」

「俺の模擬戦に他所様のお財布事情を背負わせないでくれますかねえ!!」

その後ギンガとクイントからは熱い声援を、気負わずに頑張れよという声援をゲンヤからは貰った。その時のゲンヤが菩薩のような悟った目をしていた事をセルジオはきつと忘れないだろう。

負けられない理由が一つ増えた。

クイントたちが帰った後、セルジオがバリアジャケットに着替えて軽く槍を振っていると、ドアが軽くノックされる。

「どうぞー」

声をかける。だがドアは開かない。

「あれ聞こえなかったか。どうぞー!」

少し声を大きくしたがドアは開かない。

「どうぞー! 入っていいですよー!」

だが、ドアは開かない。ほんの少しだけセルジオがムツとする。

「だから入っていいって……高町?」

「……うん」

セルジオが嘆息しながら扉を開けると、そこには私服姿のなのがむすつとした不機嫌そうな病状でそこにいた。胸にはいつものシルバーの星のネックレス。

「えーと、何か用か？」

「べつに……」

なら何のために来たんだよ！と言いたくなかったが、最近のなのはなぜか不機嫌なのはわかつていたのでぐつと堪える。

セルジオが困ったように頭をかく。

「何もなければ、いいか？ 俺も一応しなきゃいけないこともあるし……」

「今日、私、応援、フェイトちゃんたちと、する」

「何故にカタコト？」

思わず尋ねるとなのはが頬を膨らましてセルジオを見上げた。

「セルジオくんの！ 東サイドじゃなくて！ 西サイドで！ クロノくんの方で！ 見

ますー！」

一瞬、セルジオが言葉に詰まったが、すぐにいつもの笑みを浮かべてみせる。

「そっか、友達と見た方が楽しいもんな。楽しめよ」

機嫌の悪そうなのはを氣遣ってそう言ったのだが、なのはの方はなおも不機嫌そうなおーラを濃くして、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

「もうセルジオくんなんて知らない！ ばか！」

べし、となのはが後ろ手に隠していたタオルをセルジオに投げつけると走り去ってし

まう。

その後ろ姿にセルジオがはつとしたように言葉を投げた。

「高町！ スカートで走つたら下着が見えるぞ！」

「もうほんとセルジオくんデリカシーない！」

「君ほんと言葉選びなさいよ」

致命的にデリカシーのかけらもなかった。

しばらくして、ドアがノックされる。眉を寄せたセルジオがドアを開けると、そこには鳶色の瞳の大丈夫が佇んでいた。

「ゼストさん」

セルジオの表情と一緒にクイントたちのおかげで解れていた心も引き締まる。

「今日は解説に呼ばれてるって聞きました」

「ああ」

セルジオとゼストが静かに見つめ合う。

何を言うべきか、何を言わざるべきか、しばらくの間逡巡するが、やがてセルジオは短く、けれど力強くゼストへと言い放つ。

「勝ちます」

「期待している」

交わした言葉はそれだけ。けれど、彼らにとってはそれ以上の言葉は必要なかった。負けられない理由が、一つ増えた。



係員に呼ばれてクロノがステージに向かって足を進める。

隣にはセコンドを買って出てくれたリーゼロッテ。

「緊張してる?」

「多少はね」

「それは相手が『セルジオ』って彼だから?」

「……さあどうだろうね。もしかしたら、そうかもしれないな」

ふっと、クロノが笑うのに、ロッテが不思議そうに首をかしげる。

「なあ、お前なんであたしたちにもう一回師事しようと思ったんだ?」

「何故って、それは戦技披露会だから」

「違う違う。あの日、私たちのところを訪ねてきた時、クロスケは『僕も負けられない』

と言った。何でお前は負けられないって言ったんだって事だよ」

「あー、それか。そう聞かれると自分の中に明確な答えがあるわけじゃないんだけど……」

クロノがガントレットに覆われた指で頬をかいて、口を開いた。

「たぶん、僕は——」

係員に呼ばれてセルジオがステージへの通路を進んでいく。

その隣では薄紫のロングヘアのメガーヌ。

「緊張してる?」

「まあ、多少は。でも、いい緊張感ですよ」

セルジオが軽く伸びをしながらメガーヌに笑いかけた。

その笑みに頼り甲斐を感じて、ふとメガーヌが一つ問いかけをしてみる。

「そういえばセルジオ君、なんで急に戦技披露会出る事に変えたのかしら?」

「え?」

「だって君、最初は『戦技披露会には出ません』とか言ってたじゃない」

「あー、ですね」

セルジオは何故最初に断る気だったのか、そして、何故その言葉を撤回して出る事にしたのかを稽古をつけてもらった土郎と恭也を除いて誰にも話していない。

なので、メガーヌはなぜセルジオが急に戦技披露会に出る気になったのかを不思議に思ったのだろう。

セルジオが困ったように頭をかいた。

「色々理由はあるんですけど、俺はたぶん――」

「ようクロノ、体調は万全か？」

「そういう君もしっかり対策立ててきたか、セルジオ」

「俺はお前が涙目になるくらいバッチリ立てて来たさ」

「奇遇だな、僕の方もセルジオを情けなく地面に叩き落とす方策を考えて来た」

互いに背後に多くの声援を受けながら二人が軽口を交わす。

「お前との戦いなんていつぶりだ？」

「おそらく士官学校の卒業試験が最後だから、ざっと六年か七年というところだろう」

実況と声援を耳に捉えながら会話を続ける二人の間に油断はない。

どちらも、互いの力量を警戒して、評価して、そしてきつと誰よりも信頼していた。

——たぶん、僕は相手がセルジオだから、負けられないと思ったんだろう。

——俺はたぶん、クロノが相手だからっていうのも、戦う理由の一つだと思います。

——セルジオは僕の一番の友人だ。あいつの努力は、僕が一番知っている。

——俺はクロノの事を信じています。あいつの事は無条件で信じられるかもしれない。
い。

——でも。

——だからこそ、セルジオには負けられない。友人で、信じてるからこそ、僕は全力でぶつかりたい。

——だからこそ、クロノを落胆させるわけにはいかない。全力でぶつかって、勝つてみたい。

セルジオが左手のブレスレットに手を添えて、同じように銀色のカードを構えたクロ

ノを見据えた。

「行くぞ、クロノ」

「来い、セルジオ」

二人は親友で、似た境遇もあり、違ふところも多くある。だからこそ、負けられないと互いに思っている。

その関係をきつと、人はこう呼ぶだろう。

「セットアップ、ゼファーツ！」

「デュランダル、セットアップ！」

——
好敵手と。
ライバル

背中を通して見えるモノ

「どうも、皆さんこんにちは！ 今年もバリバリ大盛況で行われている戦技披露会！

次はいよいよ空戦の部の最終試合！ ファイナルマッチ 実況は広報部期待の星こと、私、セレナ・アール

ズですー！」

二人の魔導師が向き合うステージを見下ろして実況のセレナが楽しげにマイクを握る。

「私のことはさておき、戦闘空間の整備が行われている間に解説のお方々をご紹介したいと思います。まずは『次元航行隊』、通称『海』から。本局人事部のレティ・ロウラン提督ですー！」

「どうも、こんにちは」

「そして『地上本部』通称『陸』から航空魔導師三課の部隊長、エース級魔導師ゼスト・グランガイツ一尉！」

「よろしく頼む」

「お二人は最終試合に出場するお二人の直属の上司ということでこの場にお呼びさせて

いただきました」

テレビ局の飛ばしている小型カメラを搭載した魔力スフィアにレティとセレナが軽く手を振り、ゼストが浅く頭を下げる。

「さて、会場の皆さんはもちろんご存知でしょうがここで今一度選手の紹介をさせていただきます！」

カメラが白銀の杖を構えるクロノを映し出す。

「こちら時空管理局本局所属、現『東京支部』支部長でもありますクロノ・ハラオウン執務官！ ミッドチルダ式の魔導師であり、最年少執務官の記録保持者でもあります！」

魔導師ランクはAAA+。ですが数々の難事件に関わってきた彼の实力はほとんどSランクの域にあると言っても過言ではないでしょう！

ロウラン提督、彼はどのような魔導師なんですか？」

「そうですね、高い魔力量とミッドチルダ式の魔導師として典型的な全てのことを万能的にやれるタイプです。特にバインドに関して彼を上回る人物は同世代には二人といないでしょうね」

「なるほど。では、次はセルジオ・アウデイ二等空尉。その歳の若さで航空魔導師三課の分隊長を務める地上本部のホープです！ もしかしたら先日の密着ドキュメントでその名を初めて耳にした人も多いかもしれません。かくいう私もその一人だったり。」

では、ゼスト一尉、彼についてのお話をお聞かせ願いますか？」

「奴の使う魔法はミッドチルダ式。けれど執務官とは対照的に近接主体。ミッド式としては比較的少数派のスタイルだ」

「聞けばアウディ二尉はゼスト一尉のお弟子さんだそうですが」

「軽く槍を指南したただけだ。師匠とは言えないでしょう」

「なるほどー、お、戦闘空間の整備が終わったようです。」

開始位置は例年の如く有視界範囲200mとなります！

制限時間は二十五分の本勝負！ さあどのような戦いになるのか私も期待せずにはいられません！」

空中にホロウインドウが投影され、そのカウントが刻一刻と減っていき、やがてゼロになるのと同時にブザー音が鳴り響いた。

「では、試合開始ですっ！」

ブザー音が鳴り響くと同時にデュランダルに素早く魔法式を展開して、青光の一閃を紡いで撃ち放った。

「デイベインシューター」

「——シッ！」

だが、それをあらかじめ予期していたセルジオはゼファアの刃によって魔力弾を真っ二つに斬り裂いた。

ばあん、と眩しい光がまき散って、華々しい開幕の一閃となった。

その後クロノが無数の魔力弾を展開し、セルジオへと射出。多角的にセルジオを襲うが、それを予期していたセルジオは一瞬加速を発動して躲してみせると、一気にクロノへと肉薄していく。

「——セアツ！」

「ラウンドシールド」

クロノの生み出した魔力の盾がセルジオの突きを受け止めるが、高高度からの落下のスピードを乗せた一撃は重く、堅固なはずのシールドに軽い亀裂を走らせる。

それを見てこれ以上クロノも近距離型の相手の間合いに留まってやるほど優しくはない。すぐに牽制の速射弾でセルジオをこれ以上近づけさせない。

ならば、とセルジオは速射弾を斬りはらいながらゼファアを砲撃形態に変形させて、魔力を充填、砲身の先をクロノへと向ける。

収束される白光に迎え撃つようにクロノも魔法陣を展開、杖の先に青色の光球を生み出した。

「シヨートバスター！」

「——ブレイズカノン」

二色の光が二人の中央で炸裂し、視界を眩い光で染め上げた。

二人の戦いを見ながら西サイド、クロノの応援席にいるエイミイが感心したように唸った。

「二人とも随分上手く戦うわねー」

「そうですねえ、なんちゆうか、えらく結構いろんな魔法使ってますね」

「まあ戦技披露会の目的が『市民に魔法戦闘を見せること』っていうのもあるから、二人ともなるべく相手の魔法を色々引き出そうとしてるって所かしら」

「じゃあつまり、クロノもステインガーブレイドとかの高難度魔法じゃなくて、なるべく市民の人たちにもわかりやすいような簡単な魔法を使ってるってこと？」

「そうそう、そういうこと」

フェイトが首を傾げながらそういうといっしよに試合を見守っていたリーゼアリアが指で丸を作つてにつこりと笑つた。

えへへ、と照れたように笑うフェイト。

「ん、もしかしてこの戦技披露会って、一定の『流れ』があるつちゆうことですか？ いつ

「ぱい魔法を見せるパートとか、そういうの」

「察しがいいわね、はやてちゃん。基本、戦技披露会のファイナルは二十五分。その前半二十分は演舞に近いわ。前半が魔法の応用使用による撃ち合い、そして後半は今彼らがやってみたくない空中戦って暗黙のルールで決まってるの」

「二十分？　じゃあ、つまり残りの五分は……」

「そう、そこからが全力戦闘。制限なしの、正真正銘の全力全開。一番盛り上がるパートでもあるわね」

「ようできとるなあ」

「感心したようにはやてが唸り、ふと、自分の隣のなのはが何やら難しい顔でクロノたちを見つめているのに気がついた。

「なのはちゃん、どないしたん。えらい難しい顔しとるけど」

「んー、これなんとなくセルジオくんに不利な形式だなーって思ってただけ」

「ほう？」

「基本セルジオくんって短期決戦タイプなんだよね。魔力もそんなに多くないのに、砲撃以外は決定打にかけるから頼らざるを得ない。だからセルジオくんはあんまり長期戦はやらない。

だから、となのはが言葉をつなげる。

「セルジオくんが残りの五分に勝負をかけるならなるべく魔力を温存しとかなきゃいけないんだけど……」

「そういうルールがあるならセルジオさんは魔力を変に温存もでけへん、と」

「まあたぶんセルジオくんのことだから色々やって最後には勝つんだろうけど……って、何がおかしいの？」

真剣な様子で話している最中、はやてとフェイトが顔を見合わせてくすくす笑っているのに気がついて、なのはが首を傾げた。

「だって、なのは今の言い方だったらセルジオさんが勝つのを疑ってないみたいだよ」

「あんなに負けちゃえばいい、とか言ってたくせに、素直やないなあと思ってるなあ」

「そ、そんなことないもん。ふつうに負ければいいって思ってるもん」

「でもそれって妥当にやれば勝つって思ってるってことだよね」

「あ……」

言われて気づく。そう言えば自分はセルジオが何だかんだ言いつつ勝つことを確信しているような、そんな節があるように思えた。

なのはが僅かに頬を赤くして空で魔法の応酬をする二人を見上げる。

その横で、エイミーが腕時計に目を落として時間を確認した。

「もうすぐ、残り時間五分ね」

二人の本当の戦いは、もうすぐ始まる。

(残り六分半。もうちよいで全力戦闘だな)

クロノの射撃魔法を槍で打ち落としながら自分の現在の状態を確認する。

魔力の消費は感覚的におよそ四割と言ったところ。分割思考はその過半数をECの制御に回しており使えても五つ。それから派生する演算能力の低下により『ディバインカノン』、十秒以上の加速、切り札一つでもある短距離転移の発動も困難である。

そして何よりセルジオを苦しめるのが。

(今の俺じゃゼファアのシステムはたぶん殆ど使えない)

行動予測と技術模倣。苦しい時にいつも助けてくれたそのシステムを負担の問題で使うことができない。

どちらも数秒程度ならゼファアのシステムがなくとも擬似的な再現は可能だろうが、それでも頼りにはならないだろう。

使えるのは殆ど負担なしで使える広範囲解析、短時間加速、この一ヶ月鍛えなおしてきた体術だけ。

(でもやるしか無いんだ。今の俺がやれる全てで……！)
満足なものなどない。

(けど、足りないものがあることは、何かをなさない理由にはならないッ！)
故に、『セルジオ・アウディ』という人間は、不屈の想いをこの胸に、足掻き続けるしかない。

もう幾度かも分からぬほどに白光と青光が弾け、交わり、ぶつかり合って、そして、ついに制限時間が残り五分となる。

「――」

「――」

クロノ、セルジオの間で瞬きするのも能わぬほどの刹那、視線が交わされた。

互いに何かを語るのではない。何かを伝えるのではない。けれど二人は示し合わせたように遠慮を捨てた。

「ステインガースナイプ！」

「当たるかつ！」

瞬間的に放たれた、クロノの改良魔法は、一条の流星と変わり空中のセルジオを狙う。けれど、セルジオは空中で速度を上げて旋回して躲すと槍を構えクロノへの距離を縮めようとする。

「させるか、スナイプショット！」

だが、そこにクロノの魔力弾が加速追尾を付与されて逃げる白光を追隨する。なんとか加速を使わずに振り切ろうとするが、弾丸はまるで意思を持ったようにセルジオから離れようとしなない。

「演算式駆動——加速機動」
ブリッヅァクン

ならば、とセルジオが加速魔法を発動、白光を身に纏って地面ぎりぎりまで降下してから急旋回、その速度についてこれなかつた魔力弾が地面に突き刺さって弾けた。

その鮮やかな飛行技術に観客席からどよめきが起ころる中、セルジオは残り五秒となつた加速時間の中でクロノへと迫る。

クロノは少し速射弾で応戦するが加速したセルジオにはそれすら遅い。

「——隙が見えるぞ」

翠の瞳が真白に光る。その瞳に移したあからさまな空間翔けて、一直線にクロノへと向かつていき、視界に明らかに異なる色を見て取つた。

「——ッ！」

慌てたようにセルジオがブレーキをかけて無理やりルートを変更して脇へと逃げる。

一見奇妙にも見えるその行動にクロノの目がすつと細まる。

「直前で気づいたか」

「まああんだだけあからさまな術式ならな」
「厄介な目だ」

苦々しげにクロノが吐き捨てる。

彼はセルジオの飛行ルートを射撃で誘導しながら設置型バインドで捉えるつもりだった。空間の一点、敢えて空けておいた隙、迷いなく踏み込んで来ればよい。もし仮に直前でバインドを知覚されても、加速を使わせていけば回避は困難、そう踏んでいたのだが、セルジオの解析は存外優秀らしかった。

クロノがステインガースナイプで狙い、セルジオはそれを短時間加速と槍で斬り払う事でもかわしていく。

セルジオがちら、と空へと浮かんだパネルで残り時間を確認する。指し示す残り時間は三分。

今の二人の戦いはある程度相手の手札を把握し、信頼してるが故に起こる膠着状態。このままでは残り時間全てを使っても決着がつくとは考えにくい。

勝つためには今の手札にプラスした何かが必要だ。

(……使えるか、短距離転移)

魔力的にも演算難度の両方から見ても、そう何度も多用できる魔法ではない。使うならばこの攻防で決着をつける決意があるだろう。

セルジオが青光の中を飛びながら、細く息を吐いた。

勝たねばならない。ならば自分に手を選んでいる余裕などないはずだ。

(マルチタスク凍結部分解除——短距離転移術式駆動)

破壊衝動を封じ込めていたマルチタスクの一つを解放、同時に手の中に拳大の魔力弾を生み出して、クロノとの中間地点めがけて放る。

「炸裂弾！」

ばあ、と魔力弾がはじけて眩い光を生み出した。この魔力弾に直接的な破壊力はないが、こうして衝撃と共に生み出される魔力量で一時的に視界を奪うことくらいはできる。

「解析——視えた」

端に赤さが見えていた瞳に白が走り、得るべき座標を取得。並列思考で演算されている術式へと代入される。

その間、およそ二秒。

「術式駆動——短距離転移オ！」

クロノの射撃の只中であつたセルジオの身体が三次元平面上から消失。百万分の一秒のラグと共に数十メートルという距離を歪めて、クロノの背後に出現する。

「——白光一刃」

セルジオの槍に純白の魔力が収束されてクロノへと振り下ろされた。

振り返るクロノ。けれど彼のデュランダルは先程までセルジオがいたはずの空間へと向けられており、シールドはおろか、その杖で受け止めることすら叶わない。

「——取った」

セルジオが勝利を確信する。その瞳の中に勝利への道筋を思い描き——

「そ・う・来・る・と・思・っ・て・い・た」

直前で解析にすら引つかかっていたいなかった設置型バインドで身体が絡め取られた。

「解析にはそんな痕跡——」

「お前用に設えた『ハイレインクバインド隠密罫』だ！　いくら君でも見つけられるものだと思うな！」

両腕と両足にそれぞれ現れた青色の輪に縛られたセルジオから滑るようにクロノが距離を取る。

セルジオの短距離転移は彼の切り札だ。魔力量が豊富でないため多用できないし、一度認識されてしまえば相手の不意をつくことが難しくなる。突然現れればもちろん相手は驚くだろうが、この場合相手にそういう可能性もあると認識されているだけで、優

位性はぐっと薄れる。

（けどこのくらい五秒あれば——）

「五秒あれば抜けられる、か」

セルジオには繋がらぬ拳がある。その能力は拘束すら物ともせず高威力の拳を叩き込むこと。クイントほどの練度がないセルジオでも五秒もあれば砕いて抜け出すことだろう。

しかし、クロノにはその五秒があれば十分だった。

クロノが虚空に縫い付けたセルジオを見下ろして、軽く指を鳴らした。

瞬間、三百六十度埋め尽くすように青色の刃がセルジオを取り囲むように出現する。

「嘘だろ……」

「君が四方八方逃げ回ってくれたおかげで待機させておく時間が取れた。感謝する」

「こんのドSがつっ！」

「好きに言え」

ニイ、と唇の端を吊り上げて笑ってみせたクロノが手の中に漆黒の杖を生み出した。S2U、彼の二本目の杖。

セルジオが焦ったように繋がらぬ拳で両手足のバインドを砕いたが、魔力刃の包囲網から抜け出すには時は既に遅い。

「ステインガープレード・ジェノサイドシフトッ！」

紡がれる起動句。トリガーワード待機していた無数の刃その全てがセルジオに向かって殺到した。

「これはクロノ君の勝ちかなあー」

「流石にこれはちよつと難しいでしょうねえ。まあ1・5ランク差あるのによく戦ったと思うわ」

「そんなこと、ないです」

「なのはちゃん？」

「セルジオくんは、まだ負けてない」

解き放たれた魔力刃の嵐。視界全て、三百六十度を覆う大規模魔法。絶望的な状況の中瞬時に切り抜けるための方法を模索する。

加速——攻撃範囲が多すぎる。もし仮に行動は読み切れたとしても十秒という短い時間で逃げきれとは思えない。クロノは完璧に穴を潰している。

転移——不可能。セルジオの短距離転移ショートシフトの限界範囲をすっほり覆うようにステインガープレードは展開されている。それに演算時間も足りない。

ならば、セルジオに残された手札は一つだけ。

(全部、受けきるしかない)

槍で斬りはらうことでこの嵐を乗り切るしか勝利への道はない。

だが瞬時に胸の中でできるのか、という声が響く。

上下左右、自身の動体視力で捉えることすら難しい魔法を、行動予測も何もなしに槍で斬り払う。そんなこと、非才のセルジオができるのか。

弱気が叫ぶ。心の中で無理だと弱音が溢れる。

でも、やらなければならない。できるできないでなく、今ならなければならない。

セルジオがゼファーを強く握る。

視界、解析にかけられた情報、今までの経験を以って相対して、嵐の向こうのクロノを見て、ふと、目が観客席の方へと滑った。そこには、見慣れた『彼女』が、自分を静かに見つめていて。

『頑張れ』

声が届こえた気がした。

ふ、とセルジオが緩く笑んで、その佇まいが自然と緩んだ。
脳裏に蘇る声があった。

——自分を信じる、セルジオ。

——例え自分が信じられなくても、大切な人が信じる自分を信じて刃を握れ。

——それが、強さだ。

始まりの刃が迫る。僅かに冷気を帯びたそれはセルジオへと迫り、唯ひたすらに鮮やかに銀閃に叩き落とされた。

「全部、視える」

強くなることを望むならば、ゼストへと自らの覚悟を示すならば、己を信じて、この現実を振り払え。

「——は」

短く息を吐いて、下方から、上方から、横合いから、死角から、刃に隠れるようにやってくるもの、その全てを見切つて槍で撃ち落とす。

(研ぎ澄ませ、直撃するものだけを選び出せ、全てを予測しろ)

修行はした。死ぬほど槍を振つた。

ならば、この程度出来ないはずがない。

斬る。払う。突く。薙ぐ。叩く。弾く。いなす。

何百、何千、何万と繰り返してきたその動作。ゼストに鍛えられ、士郎にしごかれ、恭也に磨かれたセルジオの槍技。

その全てを総動員して——尚届かない。

「——ッ」

一撃、知覚から漏れた刃がセルジオの腕をかすめて白のバリアジャケットを削る。クロノのステインガブレイドの数は多く、セルジオの全力をとしても、手が足りない。

(この速さ、覚えてる。よく似たものを俺は知っている)

襲い来る冷気を纏った刃の群れが、恭也の振るう二刀と重なる。

どうしても手が足りず、槍一つじゃ凌げる数に限界がある。

(なら、手を増やせばいい)

セルジオが両手で握っていた槍から片手を空け、胸元から一つのデバイスを抜き取った。

「——来い、S2U・カスタム！」

ティータに託された銀色のカードが、白色の短槍をへと形を変えて、セルジオの右手に握られ、振るわれた。その太刀筋に淀みはない。はったりや、思いつきなどではない、確かな鍛錬の跡が見て取れる。

「——せ、アッ！」

斬、と氷雪の嵐が切り裂かれた。

「な、なんと、ハラオウン執務官が二つのデバイスを手に魔法を行使したのちアウデイニ尉も二つの槍を展開！ まさかこのようなことが起こるとは誰が予想したでしょう！」
「ハラオウン執務官の方はデュアルデバイスですね。非常に器用な彼だからこそできることです。おそらく同じことができる人はそういないでしょうね」

「なるほどー。グランガイツ一尉、一尉はこの状況を……一尉？」

その光景に会場の誰よりも驚いたのはゼストだった。

彼はセルジオの師匠である。幼き頃からセルジオに戦闘のイロハを叩き込んだのはゼストで、今までセルジオが使う魔法、技術、そのほとんどがゼスト直伝のものだ。

故にセルジオの技術に未知はなく、万が一にも自身が負けることはないとは思っていた。

「二槍……俺の知らない、バトルスタイル」

けれど、今の弟子は違う。

左に長槍、右に短槍、両手を器用に使って魔力刃の嵐の中を駆け抜けている。

「そうか、お前はいつのまにか……」

ふ、とゼストが遠くを見て薄く笑んだ。

セルジオには積み重ねた努力があった。才能はなくとも頭を使って、その技術を積み上げようとする意思があった。

けれど、セルジオの槍の技術が今ひとつ伸びきらなかつたのは、非才故の自信のなさ。非才故に努力できるその姿勢は、裏返せば自らを信じていないということ。

力は既にあつた。後は、それを貫く想いさえあればよかつた。

「想いを絶やすな、か」

いつのまにか大きくなつたその背中に、いつかの『彼女』の姿が見えた。

氷雪の嵐を斬り裂いて二槍のセルジオが加速した。

クロノの切り札であるステインガーブレイドは破られた、そう誰もが思う。それ程にセルジオのやったことは意表をついていたし、誰にも予想はできなかつた。

クロノを除いて。

「そのくらいやると思っていた！」

ニイ、とクロノが笑みを浮かべて、魔力刃をS2Uで演算する間、並行してデュラン

ダルで演算を進めていた『エターナルコフィン』を発動させる。

クロノへと肉薄していたセルジオの姿が吹雪の中に閉じ込められ、いつものように忽然と掻き消えた。

そして、セルジオがクロノの背後に――

(現れ、ない?)

クロノが眉を寄せた、その刹那、自分の上で何かがきらり、と光ったのを感じ取る。

「まさかっ!?!」

弾かれるように上を、眩い太陽が輝く青空を見上げると、槍を白く光らせながら墮ちて来る姿を見つけるが、回避をするにはもう遅い。

「セルジオッ!」

「クロノオオオッ!」

クロノが瞬時にS2Uの杖先を向けて魔力を収束し迎撃を試みようとするが、セルジオと重なる太陽の光に、上手く照準が合わせられない。

「紫電一閃改――白光双刃ッ!」

「く、ステインガースナイプ!」

二振りの槍と、青色の流星。

放たれたのは殆ど同時、けれど果たして打ち勝ったのは槍の方だった。

クロノの砲撃が短槍を吹き飛ばしながらも、軌道をわずかにそらされて空の彼方へと伸びていく。そして、長槍は真つ直ぐにクロノへと吸い込まれていく。

「僕を、舐、めるなっ！」

「そうそう簡単には勝たせちゃくれないかッ！」

だがクロノもみすみす直撃をくらうほど甘くはない。ゼファーによる唐竹の振り下ろしに何とかデュランダルを滑り込ませることで見事受け止めてみせる。

金属同士が甲高い音を響かせて、鏝迫り合い二人分の重量を受け止めきれなかったクロノとセルジオがもつれ合うように地上へと堕ちていき、激突寸前で離れた。

ガガガ、とブレーキをかけながら地上に降り立ったセルジオが手の中で軽くゼファーを回して、最後の加速を発動させる。

白光に包まれるセルジオ、そして墜落してすぐさまの迎撃は不可能と見てラウンドシールドを展開して凌ごうとするクロノ。

これが、最後の交錯だ。

「——は」

短く息を吐く。

思い描くのはいつか見たゼストの一撃、そして、恭也にあの日見せてもらった疾風のようない閃。二つに武器の違いはあれど、根源たる技術は同じである故に、その模倣は

難くない。

（擬似再現——）

クロノを前にして、瞳が白光が走り、二人の動きと技術がセルジオの動きと重なる。

「——ゼアツ！」

セルジオの槍がクロノの青色の障壁に触れると、杖を通してクロノへと槍の威力だけが余すことなく伝わっていく。

『鎧通し』。

それは物体を通して衝撃だけを伝える技術。約束の見返りとして恭也が特別に見せてくれた『徹』という技であり、ゼストもまた好んで使う技の一つだった。

「——か、はっ」

クロノが、訳がわからないというように目を剥いて膝を折る——直前に根性だけで持ちこたえると、目の前の友を強く睨んだ。その目に未だ闘志は消えていない。

「う、おおおおおッ！」

セルジオが槍を構えて、吼える。

「——スナイプ、ショットオー！」

クロノが消えゆく意識の中、最後の力を振り絞って腕を振り下ろした。

二人の叫び声の中、白光と青光が弾けて光った。



結論から言って、戦技披露会の最終戦は引き分けということでは決着がついた。

最後、セルジオの槍がクロノを捉えるかと思われたが、その直前でクロノの操作するステインガースナイプの弾丸がセルジオの後頭部を撃つたのだ。

流石にこれは予想できていなかったセルジオが膝をついて、それと同時に制限時間のブザーが鳴った。

結果、二人ともノックアウト前で試合が終わり、解説の二人が今回は引き分けである、との判断を下したのだった。

そして、試合を終えたセルジオはと言うと。

「あいた、いつつつ、メガータさん、扱いが雑！ 雑です！」

「はいはい、文句言わないの」

控え室に戻ってメガータに軽い治療を受けていた。

「この後にはもう一回インタビュー、その後には閉会のあれこれがあるんだから、のんび

りはやってられないの。我慢なさい」

「そりゃわかってますけど……」

「なら文句言わずに頑張って頂戴ね……よし、治療おしまい」

「あいた」

ぽん、と軽くメガーヌがセルジオの体を叩くと立ち上がって一息。

「じゃあ私は先に行つて段取りしとくから十五分くらい休んだらきて頂戴ね」

そう言つてメガーヌが控え室から立ち去ろうとして、ふと、振り返つて柔らかな表情を浮かべた。

「セルジオくん」

「はい？」

「その、大丈夫？」

「なんのことですか？ 怪我なら平気ですよ」

「……そう」

いつもと変わらない笑顔を浮かべて応じると、メガーヌは小さく首肯して部屋を出て行った。その背中を見送つて、広範囲解析にも反応しないほど遠くに行つたことを確認する。

「——ッ！」

セルジオが、拳を壁に打ち付けた。ぎりぎり歯を噛み締めて音を鳴らし、手が白くなるほど強く握ったセルジオには隠しきれない悔しさの色がある。

「勝てなかった……！」

努力はした。対策は立てたし、自分にやれることはなんだったってやったつもりだった。上手く扱えるかわからなかった二槍だって使えた。鎧通しだって、加速も、転移も、今自分にできる全部をやって戦った。それでも、望む結果は得られなかった。

胸の中にもしたられば、そんな女々しい後悔と仮定の事ばかりが浮かび、そして消えていく。そんなこと、考えても意味はないのに。

「ああ、クソ、悔しいなあ……！」

ガン、と再び拳を壁に打ち付けると、痺れるような痛みが肘先まで伝わった。

「あの、セルジオくん……！」

不意に扉がノックされて意識が現実まで引き戻される。ふう、と短い息を漏らすとセルジオが顔を軽く叩いて気分を入れ替えて、いつものように笑って扉を開けた。

そこには視線を下に落としたなのはの姿が。

「どうした、高町」

努めていつもと変わらない調子でそう言った途端、なのはが顔を上げてセルジオを覗き込んだ。

「セルジオくん、なんか無理してる？」

「——そんなこと、ないよ。俺は普通だ」

「……そっか」

ほんの少しの間を置いての答え。なのはは少しだけ眉を寄せたが、それ以上セルジオを問い詰めるようなことはしなかった。

「高町も、悪かったな」

「え？」

「せっかく応援してくれたのに負けちゃって。あっちでは応援しにくかっただろうに」

「……見てたんだ」

「偶然目に入ってたな」

「ははは、と乾いたように笑うセルジオを見つめたまま、なのはがスカートの裾をぎゅつと握った。

「それ、クロノくんの応援だとか、思わなかったの」

「え、あ、ああ……た、たしかにそういう見方もできたか」

セルジオが苦笑して頬をかきながら、でも、と言葉を繋いだ。

「なんとなく、『高町は俺を応援してくれてる』って、思っちゃってさ」

「——」

「たぶん、それはどこにいてもそうだって思ってた。でも、確かにクロノの席にいるんだもん、そりゃクロノの応援だよ……ははは、すまん、なんとなく自惚れて——」

その言葉の先をセルジオが言うことはなかった。

なぜなら、その先は言わせないとばかりに背伸びしたなのはがセルジオの頭を軽く抱き寄せて、優しく撫で始めたから。

（だから、私に応援して欲しいって、言わなかったんだ。私のこと、信じてたから）
すとな、となのはの中で何かが腑に落ちた。

「セルジオくん、よく頑張ったね」

「なんだよ、子どもみたいに。俺はお前より年上なんだが」

「うん。だから、私がこうしたいから、そのわがままに付き合っただけなんだ」

「なんだよ、それ」

ふっと、セルジオの体から力が抜けた。

「ありがとう、高町」

「どういたしまして」

それ以上言葉はなく、セルジオは悔しさを胸に瞳をゆつくりと閉じた。

セルジオの初めての戦技披露会は、こうして引き分けという形で幕を下ろしたのだった。

ボーイズナイト

戦技披露会の日から半年、光陰矢の如く時は移ろう。あれほど寒かった日々も今や遠く、世間は次第に夏の賑わいを見せ始めていた。

そんなある休日の夜、セルジオは昔馴染みの友人と卓を囲んでいた。

「んじや、かんぱーい」

掛け声をかけて酒の入った缶を重ねるや否や、ゴクゴクと一気に中身を呷るヴァイス、そして缶をにらんでチビチビと中身を傾けるクロノ。

「あー、美味いっすねー、今日もあくせく働いた甲斐がある！ セルジオ先輩も今日はどうですか？」

「あー、俺は遠慮しておく。明日も仕事だし」

「クロノは……あんまり美味しそうな感じでもないな」

「なんとというか、あまり僕は酒は好まないみたいだな」

「それは少し残念だけど、まあ俺はこうして四人で酒を飲める歳になったことが嬉しい

よ」

俺だけ少し年上だったからね、いつものように爽やかに笑うティータ。

新暦68年。今年でセルジオは十九、ティータは二十、クロノとヴァイスは十七になる。

ミッドでは十六から飲酒が許されており、ようやくいつもの面子でみんな酒が飲めることになったわけで。

まず「みんなで軽く飲もうぜ」と言い出したヴァイスにティータが「ならウチで集まって飲もう」と乗っかり、「え、仕事あんだけど」と宣うセルジオをクロノが引っ張ってきて今に至る。

苦い顔のクロノの手からひよいと缶を奪い取ったティータが別の缶を手渡した。

「ならクロノ、果実酒とかはどうだ？ 多分飲みやすいと思うぞ」

「ふむ、これは飲みやすいな……」

「味自体はジュースとほとんど変わらないからね。つい飲み過ぎたりもするけど、まあクロノなら大丈夫だろう」

「そこらへんは自制のないヴァイスと違って安心できるからな、クロノは」

「なんか俺は自制ないって言われてる気がするんですけど気のせいですか」

「そう言ってるんだ。気のせいじゃない」

「あはは、ヴァイスは普段の行動がねえ」

「……女子風呂」

「だからアレは冤罪だと何度言えばわかるんすかあ！」

叫ぶヴァイスにティーダが軽く笑ってヴァイスの肩を叩いた。

「悪い悪い、ついからかいすぎたよ」

「つたく、別に気にしてねえっすけど」

「で、誰の胸が一番大きかったんだ」

「いや、それが後一步のところまでバインドに捕まって見れてないんすよね——はっ」

「やっぱり覗こうとしてるじゃないか……」

酒を飲めば口は軽くなる。これは自明の理である。

クロノが酒を喉に流し込みながら、ティーダの持つてきたつまみを口に入れて、ほう、と唸った。

「美味しいな、自作か？」

「まあね。一応料理はティアの担当だけど、僕も全くしないってわけでもないし」

「へえ、普段は妹さんが料理するんっすね。ラグナの二つ上くらいだったから、確か九歳？」

「うん。でも『兄さんは仕事で疲れてるから』って、毎朝毎晩つくってくれてさ、最近は

弁当まで作つてもたせてくれるんだ」

「良い妹さんじゃないか」

「はは、だね。本当によくできた妹だよ。俺にはもつたいたい。最近どんどん可愛くなつてき、僕としては変に言い寄られたりしないか心配だよ」

「まだ早いつて。そんな調子じゃティアナちゃんが彼氏連れてきたりしたらどうすんだよ」

「彼、氏……?」

「何そのそんな単語初めて聞きましたみたいな反応。こじらせ過ぎだろ……」

「まあシスコンは立派な兄の証拠です。ここで一人だけ妹のいない先輩にはわかんないでしょうけど」

「待て、僕も一括りにするな。僕は普通だ」

慌てたように突つ込みを入れるクロノ。彼としてはそのところは是が非でも譲れないポイントだった。

「そーいや当のティアナちゃんいないな。今日はどうしたんだ?」

「ん、なんでも友達の家にお泊りらしくてき。今日の朝からいないんだ」

「そつか。まだ直接会ったことなかったから挨拶したかったんだけどな」

「は? 殺すぞ」

「唐突な殺害予告」

「セルジオだけは死んでもティアに会わせるつもりは無いぞ、この初恋キラーめ……!」
「は、初恋キラー?」

「ああ、それセルジオのあだ名だよ。訓練校時代に密かにつけられたやつだ」
「バリバリに初耳なんだが」

聞き覚えのない単語にセルジオが首を傾げると、苦笑いとともにクロノが委細を説明してくれる。

「セルジオ、訓練校の行事の一環で近隣の小学校に行ったこと覚えてるか?」

「ああ。あの地域との触れ合いも兼ねてボランティアとして魔法を教えにいったやつか?俺達が低学年担当だったやつ」

「そうそう。アレ、君は気づいていなかったが女の子の半分くらいはお前にお熱だったらしいぞ」

基本、小学校の頃のモテる条件は自分より凄い人である。それが足が速いやら頭はいいやら、細かいところは関係ない。とにかくわかりやすく自分より『大人な』部分を持つ人に憧れる。それが子供心というやつである。

その点、セルジオは外側だけ見ればしこたま乙女の理想を体現していると言えた。

背はすらりと高く、顔立ちも整っており、自分より幼い相手ゆえに人当たりも良く、い

つも優しい笑顔が貼り付けられている。ついでに言えば訓練校に通っているという箔もある。

簡潔に言おう、幼女アイにはセルジオがめちやくちや理想の大人に見えるのである。中身を見れば気も変わるのだろうが、生憎そこまでの目を彼女達は持つていなかった。

ハートなんてずきゅんずきゅん撃ち抜きまくりである。

セルジオの方はそんな事を微塵も気づいていなかったが、側から見たティータは「なんて残酷なことを……」と頭を抱えたものだ。

「結果、ついたあだ名が初恋キラー。みんなの畏怖がこもってる」

「そういうことから、セルジオの存在は妹持ちの奴らからは世にも恐ろしいものとして認識されている」

「く、くだらねえ……！ たかがそんな事くらいで……！」

「は？ たかが？ セルジオ先輩今たかがつつた？」

「ヴァイス……つて酒臭っ！ お前かなり酔ってるな」

がしり、とセルジオの肩を掴むヴァイスの顔は見るからに赤い。

「セルジオ先輩！ アンタ『初恋』つてどんなモンかわかつてるんすか！」

「そりゃ意味ぐらいは……！」

「違うんだセルジオ！ 君は何もわかっていない！」

「めんどくせえなこの酔っ払いども」

初恋！ それは人間誰しもがいずれの時に経験する甘酸っぱい経験である。大体の人間は年齢一桁の頃に経験し、そしてその相手は大抵手の届かない相手であることも多い。その為に『初恋は実らない』という格言があるほどだ。

それは甘酸っぱく眩しいものである。

だが！ この初恋がめちやくちや厄介なのである！

「いいか、初恋というのは恐ろしいものでな。例え、すっかり振られた相手でも、数年後出会って『綺麗になったね』なんて笑いかけられただけで、その子はころつと落ちかねないんだ！ 人はこれを初恋マジックと呼ぶ！」

「参考に聞くけど誰が呼んでるんだ」

「俺だ！」

「ティードだったかー」

遠い目をするクロロ。彼はこの中で一番酒に強かった。

「わかりますか、『初恋』ついたらそんだけ大切なモンなんすよ。どんなに縁が薄くなっても『初恋の人』ってのは永遠に特別ポジであり続けるんすよ！」

「その大切な初恋を！ 妹の大切な初恋をコイツみたいなほつといたら死にそうなやつにするわけには行かないんだよ！ 俺は！」

「わかりますかティーダーさん！」

「ああ、わかるともヴァイス！」

がしつと腕を組む赤い顔をした二人。明らかに酔っ払っていくつかタガが外れていた。

腕を組んだ二人がどうだわかったか、とばかりに視線を向けてきたが、当のセルジオは首をかしげるばかりだ。

「くそー！ もうこうなりやヤケだ！ 今日はあんたにも飲んでもらおうぞー！」

「いや、俺は仕事が」

「まあまあ、一口くらいいいだろう」

「ティーダー！」

羽交い締めにされて酒を飲まされるセルジオ。まあたまにはセルジオにとつてもいい息抜きになるだろう。そんな友人たちの姿を側から見ていたクロノの中にふと一つの疑問が生まれてくる。

「そういう君たちは初恋したことあるのか？」

「そりゃ俺も男です。したことあるに決まってるじゃないですか」

「へえ」

「まあかなり前のことなんで詳しくは覚えてないんですけど、確か隣に住んでたお姉さん

でしたかねえ。鍵落として家に入れない時に、慰めてから飴くれたんすよねー。それで一発でコロツと」

まあ、途中であつちはすぐに引つ越しちゃったんですけどね、とヴァイスが照れたように笑った。

「じゃあ、流れついでに俺の方もカミングアウトを一つしようかな」

くすり、とティーダが笑って手の中のグラスを見つめて呟いた。

「俺、訓練校の頃、エイミーが好きだったんだ」

「な、へ、え、エイミー？」

「そ。みんなご存知のエイミー・リミエツタ」

「へえ、リミエツタを。そんな素振り全然なかったけどなあ」

「まあ隠してたし。というか、エイミーに関しては俺だけじゃないと思うけどさ」

「まあエイミー先輩、人当たりよくて美人だし、まあ俺たち世代は一度は憧れる存在でしたよね」

「はは、だよね」

クロノが口をパクパクさせるのを見て、「そんなに焦るなよ」とティーダがけらけらと笑った。

「その、彼女に告白、とか、しようと思わなかったのか？」

「んー、まあ考えたことはあつたけどさ、何というかクロノとエイミイ見てたら、何となく察しちやつたんだよな」

「僕と、エイミイ？」

「うん。なんか『ああ、これ俺じゃないな』ってさ」

「あー、すげえそれわかるかも」

「たしかにエイミイとクロノなかよかつたもんじゃあ」

「ま、だから告白はしなかつた。俺もエイミイとは仲良い友人でもいたかつたし。だからさ、クロノ」

「——？」

「さつさとエイミイに告白したらいいと思うよ」

「な——」

「ぼちつとウインクを一つ飛ばしたティーダに、クロノが言葉を失う。

「ぼ、僕は別にエイミイの事を……」

「いや割とモロバレだから隠す意味ないと思うっすよ」

「は、え、そ、そんな事ないはずだっ！」

「まあそんなに気負わない方がいいって話。エイミイの方はクロノのことを憎からず思ってるはずだしさ」

「う、む……考えておく」

「で、だ」

そこまで話して、三人の視線がセルジオに集まって、固まった。

「えつと、セルジオ？」

「ほわ？」

「んん？」

「なあ、セルジオ、俺たちの話、聞いてたか？」

「あたりまえらろ？ 恋愛話だろ？」

「こ、これはまさか……！」

三人に見つめられるセルジオの顔が明らかに赤い。というか真っ赤で、いつもは理知的な光をのぞかせる瞳がとろんとして眠たげな色を見せている。

「おい、どんだけセルジオに酒飲ませたんだ！」

「いやほんのちよこつとつすよ！ マジで一口くらいしか飲ませてませんよ!」

「まさかと思うが……」

「「めちやくちや酒弱いのでは……?」」

正解である。

セルジオはとにかく酒に弱い。もし仮に飲んでもグラス一杯明け切ることがないだ

ろう。

本人が知っていれば、断固拒否したのだろう。けれど、そもそも彼はいつでも仕事を入れていたため翌日に響くのを恐れて基本酒は飲まない。だから、セルジオの周囲は、いやそれどころかセルジオ自身も自分がこれほど酒に弱いなど知らなかった。

三人が無言になり、こくりと頷いた。

今のふわふわしたセルジオなら普段聞けないとこまで聞ける、とそう確信したのだ。

「ここには聞かないで置いてやる優しさを持った友人は一人もいなかった。哀れ。」

「セルジオ、お前も何かないのか、恋愛話」

「恋愛話？」

「そうそう、そんだけ見てくれがいいんですしちったあ浮いた話があるんじゃないっすか」

「初恋、はつこい……」

急に話を振られたセルジオが赤い顔のまま頭をぼりぼりとかく。

「恋、『恋』ってなんだ？ ふつうのすきとはちがうのか？」

「おおつと、そのラインか」

「いや『好き』って感情はわかるんだ。でもその感情がどうして『恋』ってわかるんだ。人を『好き』って思うことに変わりはないだろう？」

「うーん酔っててなおこの感じ……実にセルジオって感じだ」

セルジオの熱に浮かされたようなその質問に、ティーダがふっと気障に笑ってみせた。

「いいか、セルジオ、昔どこかで偉い人はこういった」

キリツと表情を引き締めたティーダがぱちんと指を鳴らした。

「『恋は奪うもの、愛は与えるもの』ってね」

「わけわからん」

「あ、そっか」

ティーダはちよつとしゅんとした。その横で、呆れたようにクロノが嘆息を一つ零してこめかみを指で軽く叩く。

「まあ、わかりやすいのは一番近くににいる女の子だろう」

「へ?」

「セルジオ、君は今『大切な人』は誰かって聞かれて、誰が思い浮かぶ?」

「クイントさん」

「は? 人妻?!」

「それにメガーヌさん、ギンガちゃんたち、ゼストさん、クロノ、ティーダ、ついでにヴァイス」

「俺だけついでで泣きそう」

最初は驚いたが、セルジオが話を進めて、あ、そういう、と二人が察した。ヴァイスはちよつと涙を流していた。

しばらく名前を挙げていたセルジオが、思い出したようにああ、と一つの名前を零した。

「それに、高町」

出てきた名前にへえ、と三人が興味深そうにセルジオを覗き込んだ。

「タカマチさんは、セルジオにとって大切な人なのか？」

「よく、わかんないけど、高町は、大切だと、思った」

「大切」

「うん。なんとというか、あいつの笑顔見ると、あんしんして、まもりたいなー、とか……
わらわせてあげたいなー、とかおもうん、だ……」

セルジオがぼーっと天井を見つめる。

「どうやったら、『好き』ってわかるのかなあ」

ぼつり、とセルジオが呟くと、ティーダとヴァイス、そしてクロノが視線を合わせて、やれやれと肩を竦めた。

「なあ、セルジオ」

「うん？」

「二つ、俺たちからアドバイスというか、提案があるんだ」

首をかしげるセルジオに、彼らはただにつこりと笑ってこう言った。

「二度、気になる子とデートしてみろ」

家族あるいは『あの人』の話

航空魔導師三課。

ゼスト・グランガイツを部隊長とするたたき上げの魔導師が数多く所属する武装隊の一つ。

ミッドチルダの首都クラナガンの航空防衛を行うが、有事の際には他の部隊の応援に向かう事もある遊撃部隊という面も持っている。

そこに所属する魔導師『セルジオ・アウデイ』。彼こそが実力派の多い三課で十八歳という若さで分隊長を務める男である。

そしてその彼は今まさに！

「しにたい」

うっかりそんなことを口走るほどテンションが下がっていた。

(酔っていたからとは言えあの醜態……マジでしにたい)

机にゴリゴリと額を擦り付けて記憶をなんとか抹消しようとするが、残念ながらそんな程度で消えるほど頭の出来は悪くなかった。

ティーダ達と集まった翌日、朝起きて周囲に転がる三人を見て、羞恥のあまりセルジオはうっかりマルチタスクを解放して暴走しそうになった。ちよつと飲んだだけで酔っ払って色々根掘り葉掘り聞かれて、いらんことまで口走つたのを思い出したのだ。彼は記憶が残るタイプの酔い方をする男だった。

(マルチタスク暴走しなくて良かった。うん、ほんとよかった……)

普段の制御の大半をゼファーに任せるシステムを教授が組んでくれたおかげだった。本当に頭が上がらない。

「取り敢えず酒はもう二度と飲まない。どんなに勧められても飲まないったら飲まないぞ」

フラグ臭いことを言いながらセルジオが再び頭をガンガンと机に打ち付ける。

「……あれ何か言うべきなんでしょうか」

側から見ていたなのはそう言うが、クイントがゆるゆると首を振って留めた。

「放っておいてあげなさいな。誰でも一度は酒で大きなポカやるものだし」

「ふふ、経験者は語る、ね」

「う、その話はナシって前約束したでしょ、メガース」

クイントが気まずそうにコーヒを口に運んだ。どうやら彼女も飲みすぎて痛い目を見たことがあるらしい。

女子の結束を強くするのは第三者の悪口と相場が決まっているから仕方ないとも言えるかもしれない。

「そういえばなのはちゃん、セルジオ君と仲直りしたのね」

「え？」

「いやー、この前までなんかギクシヤクしてたじゃない。お姉さん心配してたのよ」

で、とクイントが前置きするとなのはに顔を近づけてにっこりと笑った。なのはの頬にたたり、と汗が流れ助けを求めするようにメガーヌへと目を向けたが、メガーヌはコーヒーのカップを手いつものように柔らかい笑みを浮かべているだけで何も言ってくれない。

「セルジオ君から話は聞けたの？」

「な、なんの話ですか」

「この期に及んで言い逃れしないのー。家族の話よ、家族の話」

流石にもう聞いたでしょ、というニュアンスを含ませた問いかけをクイントが投げた。彼女からすればセルジオのなのはへの信頼度であれば躊躇わないだろうという予想だった。

けれど、予想に反してなのはの反応は芳しくない。

「もしかして、まだなんにも？」

なのはが頷くと、あちやーとクイントが頭を抑えた。

「なんだか聞くタイミング逃しちゃって……」

「まあ確かにいきなり家族の話振るつてのも難しいわよねえ。ちよつとセピアさんの話はデリケートなところあるものねー」

「セピアさんって、前にも話されてましたけどもしかして……」

「うん、セルジオ君のお母さんの名前」

ピンと指を一本立てたクイントが「ちなみに私の先輩でゼスト隊長の同期」と付け加えた。

「その、セピアさん——セルジオくんのお母さんって今は……」

「……たぶん察してるでしょうけど、セルジオ君がまだちっちゃい頃に、ね」

ふと、以前セルジオとルーテシアのお守りをした時のセルジオが思い出される。彼はなのはの幼い頃の境遇を聞いて、ひどく寂しそうな、泣きそうな顔で

——なんか、その気持ちはわかる気がする。

——俺も、そうだったから。

そう言ったのだった。

あの言葉にはどういう意味が込められていたのだろうか。そう、考えずにはいられない。

ふーとメガーヌがコーヒーに軽く息をかけるのを潤した。

「まあそれ以上はセルジオ君に直接、ね。ちやうど彼もなのはちゃんのこと呼んでるみたいだし」

言われてなのはが目を向ければいつもと変わらない雰囲気のセルジオが手招きしているのが見えた。どうやらひとまず酒に關しては切り替えたらしい。

メガーヌやクイントの予想が外れていないあたり、流石の付き合いの長さ、と言ったところか。

「悪い高町ー、ちよつと仕事頼まれてくれー」

「はーい」

なのはが返事を返しながら駆けていく姿を見て、メガーヌとクイントが含むように二人で笑った。

遅々として彼らの関係は進んでいないようだが、それはそれで彼ららしいとも思えたのだ。

「この前高町に纏めてもらったデータ欲しいんだけど頼めるか？」

「うん、わかった。あ、これってき——」

「ん、それはな——」

「それと明日二課の方に挨拶行くから準備しといてくれ」

「わかった。合同捜査の件だよな」

「そうそう」

「じゃあアポはこっちで取っておくから提出ファイルの方は任せるね」

「助かる」

一つのモニタを挟んで話す後輩たちを尻目に、ずっと、と二人がコーヒーを啜る。もはや見慣れたいつもの光景だ。

打ち合わせを終えたなのはがセルジオの背後の棚からファイルを引っ張り出して、と、セルジオが何かを思い出したように、ああ、と言葉を漏らす。

「そーいや高町、今度の休日暇か？」

「うん、暇だよー」

「ならその日デートしないか」

「うん、いいよー」

「ブーーーーッ！」

「……………え？」

「あ、高町、合同捜査の件だけどき……………」

「え、ちよ、ちよっと待ってえっ?!」

「――?」

さらっと返答して「あれ? いまなんかすごい会話なかった?」と遅ればせながら理解したのが理解しきれずにピシリと固まる。

因みにメガーヌはあまりの衝撃展開にコーヒーを吹き出してクイントの顔を黒く染め、周囲の局員は絶句し、クイントはコーヒーをかけられたことには頓着せずもう次の会話に移行していたセルジオを慌てたように制した。

「せ、セルジオが休みを……?」

「それにこんな所で堂々と……嘘だ……」

「いや待て聞き間違いだったんじゃねえのか?」

「なんて聞き間違えたつてのよ」

「こう、『ひでえこ』としないか?』とか」

「そもそもひでえこつてなんだ、犯罪者に砲撃でトラウマ作ることか?」

「ワシたちはいま集団幻覚を見たんじゃないのか? あの人でなしが女の子デート誘うか?」

「ひでえこ言ってるのはあんたらだよ」

全くである。

「ええと、セルジオくん、誰と、誰が、何するつて?」

コーヒーを滴らせたクイントが大きく深呼吸をして、ゆっくりと、まるで子供に読み聞かせをするかのように、セルジオへと言葉を投げかけていく。

もしかして聞き間違いだったのでは、と思ったのだ。

それに、『セルジオ・アウデイ』という人間と『デートしようぜ』という言葉はかけ離れていた。

けれど、そのセルジオはというと不思議そうに首を傾げて、同じ言葉を繰り返す。

「いや俺と高町が今度の休日にデートしようって話です」

「マジ?」

「マジマジ」

さて、とセルジオが膝を打って立ち上がると軽く伸びをした。

「まあいいタイミングでしたし、デートの一つでもしところかなと」

(タイミング……?)

ほんの一瞬メガーヌが眉をひそめたが、疑問が明確に言語化されるには至らない。

「じゃあ細かい日程は追って連絡するな」

セルジオがなのはの頭を軽く撫でると書類を片手にオフィスを出て行く。オフィスの全員がその背中が見えなくなってもじつくり十秒固まって、そして、残された人物である少女に集まった。

「デート、デート、デート？ 私とセルジオくんが？ 二人で？ 付き合ってもないのに？ なんて？ え？ えーとえーとえーとどうしたら。あこーういう時はお姉ちゃんかお母さんに——」

「な、なのはちちゃん？」

「——きゆう」

「た、倒れたあ！ 知恵熱！ 知恵熱よ！」

「メデイーツク！ だれかー、早く来てーって、この中で治療魔法使えるの私だけか」
あまりの異常事態についていけずなのはが目を回しながら倒れ込んだ。



オフィスから出たセルジオは自分の起こしてきた波風など気に留めることもなく、なんなら「なんかやかましくなってきたな」とか人ごとに感じながら、手首のゼファーを起動する。

「ティードは思ったよりも情報持ってなかったな。あいつらが引き継いだ俺らの案件、

思つたよりも進んでないな」

残念ながらティードアのデバイスを調べても目当てのものは見つけることができなかった。もう少し期待していたのだが。

セルジオが軽い嘆息を漏らしてウインドウを消すと胸ポケットにある古びた懐中時計を取り出した。

「あれから十年以上経つのか」

古びた懐中時計は鎖は半ばから千切れ、カバーに刻印してある文字は潰れて読めなくなっている。あの日、火の中から掬い出せて、掴みとれたのはこれだけだった。

「——母さん」

思わず呟いて、自嘲気味に笑ってしまった。

今、自分にあの人をそう呼ぶ資格がないことなんか、誰よりもよくわかっていた。

「あの人の未来も、夢も、全部俺が壊したんだから」

熱で歪んだフレームが電球の光を反射して鈍く光る中、ひび割れたガラスの向こうの長針が音を立てて動いた。

少しの背伸びと勇氣

学校が終わり、セルジオとの約束の前日、なのはは自室で服をとつかえをひつかえしていた。

「これじゃない……こっちはちよつと子どもっぽいし……うう、どうしよう……」

しばらく服を組み合わせていたなのはが小さな嘆息を漏らして身体をベットに沈めた。ぎしり、とスプリングが軋んでほんの少しの振動を伝えた。

デート！

高町なのはは人生初めてのデートである！

フェイトたち女子の友達と出かける事を『デート』と茶化して言ったりはするが、『異性と一緒に出かける』という、狭義の意味の『デート』を行うのは彼女にとって初めての経験であった。

昔セルジオとは仕事の一環で一緒に出かけたことはあるが、あの時は三課の他の人の目もあつたので、今回のように二人つきり、となると心持ちも変わってくる。

そんななのは目下の悩みはデートに着てく服だった。

デートの定番と言えば少しだけおしやれしてきた女子に男子が「かわいい」なり「似合ってる」なりを言ってから始まると相場が決まっている。

「でもセルジオくんは言わなそうだなあ……」

くたり、と寝そべったままなのはが呟いた。

あの唐変木がそんな気の利いたことを言うとは思えなかったが、それでもせめて心の中だけでも可愛く見られたいのが乙女心。

であるからして必然的に服選びに力が入る。

入るのだが……。

「やっぱり決まらない……」

どんなに時間をかけてもどうにも明日着ていく服が決まらなかった。

別になのもよそ行き用の服を持っていないわけではない。むしろなのはは末っ子ということもあり、姉のお下がりや買い与えられたものも多く着る服には困らない。

けれど、今回はデートなのだ。しかも相手は六つも年上のセルジオ。小学六年生としては小柄な方なのはと同年代からしても大柄な方のセルジオでは身長差も大きい。

12歳のなのはは現在身長143センチ。それに対して18歳セルジオの身長は180を超えている。およそ40センチの差があるのだ。

その身長差でいつものような服を着ていっても吊り合うと思えない。

周囲に「兄妹？」と見られるのは乙女的にノウ。絶対にノウである。

身長差はどうにもならないがせめて服くらいは並んでも不自然じゃない大人びたやつを選びたい。

「けど、お買い物最近行ってなかったからなあ……」

以前は度々友人や家族と服を買いに行ったりしていたが、最近は忙しきにかまけて新しいものを買っていなかった。つまりなのはの私服は身長伸びが緩やかになり始めた小学四年生あたりで止まっているのだ。

無論六つも年が上の青年と釣り合うような服持っているはずもない。

「はあ……」

なのはの口から本日幾度目かの嘆息がこぼれた。

なのはは基本自分が好きではない、人より恵まれた容姿も、類稀なる魔法の才能も、人を思いやれることのできる心も、人に好かれるようなものであるとは思っていない。

人に役立つことが彼女にとっての存在意義であり、心の拠り所だ。それさえあれば彼女は他に何も求めない。

故に、なのはは自分を着飾ろうということをしない。人並みにファッションに興味もあるが、『服』を可愛いと思うことはあっても、『服を着た自分』が可愛いとは思わない。

年上の男性と並んで歩きたいと背伸びするような至つて普通の少女としての感性。

誰かの為に力を使わない自分なんか好かれるはずがない、そうでない自分に価値はないという強迫観念じみた確信。

それはどちらもなのは根幹を形作るものであり、その両者は矛盾なく両立する。

ぼんやりと天井を見つめたまま服の上から首元に手を伸ばすとちやり、と金属の擦れる軽い音。

胸元から引つ張り出すと光に反射してきらりと光るシルバーのネックレス。なのが目を閉じて手の中の星のような光を閉じ込めた。

「遠いなあ」

大人になれたならばもつと力になれるのだろうか。遠い背中に早く近づきたいな、とも。

そんな柄にもなくセンチメンタルな事を考えているのはを微笑ましく見つめる人物が一人。

「何が遠いの?」

「お、おとおお、お母さんっ?!」

勿論なのは母親の桃子である。

なのは「どこまで聞かれてた?!」と、まるでエロ本が見つかった男子中学生のよう

に慌てている横で、桃子が部屋を見回した。

「随分散らかったのねー」

「あう……」

「まあなのはの事だしちゃんと言付けるから良いんだけど、明日着ていく服は……決まってるのね」

「はい……」

途中でしゅんと肩を落としたのは。

その様子に桃子がなのはらしくないな、と少しだけ違和感を感じる。

母親の桃子でもこうしてなのはが悩んでいる姿をみるのは珍しい。

（確かデートの服選び、よね）

桃子が指を口に添えて考えを巡らせる。

「ねえ、なのは、こんなのじゃダメなの？」

床に広げてある服の一つを手にとってみせる。確か去年か一昨年か買った薄いピンクのワンピース。腰のあたりの大きなりボンがアクセントになっている。

「これに後はカーディガンとかを合わせれば可愛くなると思うけど、どうかしら？」

「うん、かわいい、けど……」

「けど……」

「ちよつと、子どもつぽい、から、なんかやなの」

そう言つて俯くなのはを見て、桃子がははーん、と今のなのはの考えを大体察した。

(セルジオくん身長高いものね)

このピンクを基調とした服ではまだ身長の違いどうしても子どもつぽい印象を与えてしまふだろう。

因みに今回のお出かけの相手はセルジオとはなのはは伝えていないのだが、桃子と美由希には大体雰囲気で察されていた。

(なんか自分の時を思い出しちゃうかも……)

士郎は若く見えるが桃子よりも一回り年上である。若き日の桃子もなのはのような悩みを持つていたものだ。

(やっぱ親子、なのかしらね)

うふふ、と声を殺して桃子が笑う。そして、「ちよつと待つてね」と言い残すとなのはの部屋から立ち去り、しばらくして戻ってくる。

その表情にはとても楽しげな色が浮かんでいて。

「お母さん?」

なのはが不思議そうに桃子の腕の中を見ると、そこには化粧のセットと彼女のものらしき服が。

「なのは」

「？」

「今からお母さんがちよつとお手伝いしてあげる」

ぱち、となのはに向けて目配せが飛ばされた。



ついにデート当日。

緊張した面持ちのなのはが集合場所へと足を運ばせる。

今日は11時にクラナガンの中央駅前に集合してからその後二人で昼食を食べた後デパートに向かうことになっていた。

「……ちよつとあついでい」

未だ季節は初夏。東京のような茹だるような熱気はないとはいえミッドでも夏は暑い。天辺近くで熱気を垂れ流す太陽を見上げるとふわりと乾いた風がなのはの栗色の髪

を揺らした。

ツインテールではなく、揺れたのはいつもと違うサイドポニー。

ふと、なのはの視界の端に駅の柱に映る自分の姿が目に入る。

少しベージュの色合いに近い桃色のフレアシフォンブラウス。シルバーのネックレスの覗くゆつたりと大きく開いた襟元は、なのはの白い肌とを惜しげもなく晒している。

そして花の刺繍があしらわれた深い藍色のフレアスカート。いつもは自分のイメージとは離れているから身につけることない色だが、そのおかげか少しだけ大人っぽく見えるような気がする。

その場でなのはがぐるりと回ると、動きに従ってサイドポニーとスカートが揺れた。

「うん、大丈夫」

なのはが満足げにほにやりと頬の筋肉を緩めた。

「レイジングハート、待ち合わせまであと何分？」

《 It is 15 minutes more, my Master. 》

「ありがとう」

リニアから下りて駅前の噴水の前まで少し早歩きをすると、夏らしい涼やかなヒールのあるサンダルが軽やかに音を立てた。

以前買っていた夏用のもの。それほど高いヒールではないけれど、それでも彼女のこ
とをほんの少し背伸びさせてくれる。

駅前の噴水は多くの人で賑わっていた。家族連れや、年配の夫婦らしき人々、しきりに時間を気にしている人たちの目的はきつとなのはと同じなのだろう。

(たぶんセルジオくんも来てるよね)

くると軽く見渡すと、見知った背格好の青年がぼんやりと空を見上げているのを見つけた。額に軽く汗を浮かばせているので、やはり約束の時間のかなり前からそうしているらしい。

オフの日にかけるといふ眼鏡に、暗い色合いの薄手のジャケット姿のセルジオは落ちて着いた雰囲気も相まってとても大人っぽく見えた。

ただ側によって声をかければいいだけなのに、何故かそうするのがためらわれる。

しばらく物陰から様子を伺っていると、胸元から取り出した懐中時計を見ていたセルジオに女性二人が声をかけた。

身振りから察するに何か誘っているようだ。いわゆる逆ナンというやつである。

「大人っぽい人だな……」

声をかけている女性はなのはよりも年上で、セルジオとの身長差はほとんど無い。連れ立って歩けばさぞ映えることだろう。

やがてセルジオがにこやかに笑って女性に手を振った。爽やかな、よそ行きの笑顔。残念そうに去っていく女性の後ろ姿をなんとなしに目で追って、またセルジオに戻した。

(私デートするんだ、あの人と)

とくん、と胸が跳ねたような気がして思わず胸を抑えるが、年相応の慎ましやかな柔らかなさを感じるだけだ。

《master?》

「あ、ううん、何も無いよ。なんにも」

ふるふると首を振ると、よし、と気合を入れて待ち人の方へと駆け寄って、声をかけた。

「ごめん、待たせちゃったかな」

「いや、十分前だ。全く問題ない」

セルジオは視線をあげると淀みなく返答をして、くすつと含むように笑った。

まさか自分を笑われたのか、ムツとしたなのはが問い詰めると、「お前を笑ったんじゃないよ」とセルジオが頭をかいた。

「ただ、こういう会話、前もしたなって思ってたよ」

「……そうだったっけ?」

「ん、覚えてないならいいよ」

「そう言われると気になるんだけど」

「まあ大したことじゃないって」

セルジオが最後にふつと笑って、今度はなのはをしげしげと見つめた。

また、胸が軽く跳ねた。

「服、いつもと違う感じだな。高町が寒色系だと新鮮だ」

「似合っていないかな……?」

「ん? いや似合ってると思うぞ。まあ俺はファッションわからんから勝手な意見になるが」

「そっか、ありがとう」

きゅつとなのはがスカートを握って眼鏡の向こうに見えるセルジオの翠の瞳を見上げるが、相も変わらず涼しい顔のまままだ。

ティードあたりならここでさらつと可愛いの一言でも言うのだろうが、残念ながらセルジオにそこまでの甲斐性はなかった。

(髪、なんも言われなかったな)

似合うとは言われたものの、何というか微妙にピントを外した答えに、なのはがもによる。

「そういえば、今日なんで私と、その、デート……する事にしたの」

「ん？ まあタイミングも良かったし、ちよつと買い物に付き合っただけで欲しくてき。女子からの意見が欲しかったんだ」

「買い物？」

何やらおかしな流れをなのはが感じ取った。

「今度ルーテシアちゃんの誕生日だろ？ だからプレゼントを買いたかったんだよ。だから、高町にも一緒に選んで欲しかったんだ」

「……そうだね」

「俺こういうの初めてだったからさ、付いてきてくれてほんと助かるよ。どうせなら喜んで欲しいしさ」

楽しんでセルジオが笑う。普段はこんな顔で笑うことなんか無いのに、それほどまでにルーテシアの事は大切なのだろうか。

やがて「じゃあ行くか」とセルジオが歩き始める。その背中をほんの少し恨めしげに睨んだのはがぼしよりと呟いた。

「ルーテシアちゃんのためだったんだ」

まあ確かにセルジオが恋愛感情を込めてデートに誘うなんてそんな事考えにくい。むしろ、そう言われて納得したまでである。

だが、落胆する気持ちがないと言ったら嘘になる。

「仕方ないなあ」

嘆息とともにそう零してなのはがセルジオの隣に並ぼうとして、不意にセルジオがなのはの方を振り向いた。

「髪」

「え？」

「いつものじゃないんだな。なんか大人な感じがして、少し不思議な感じだ」

「似合っていないかな……？」

伏し目気味に問いかけるなのはの声色は心配するかのようで、それに対してセルジオはさっぱりと迷う事なく返答した。

「いや似合ってる。なんというか、俺はその髪型の方が好きだな」

「そ、そそ、そっかあ」

「ああ……って、どうした口なんか隠して」

「な、なんでもにやい」

思わずなのはの口角が緩んでニマニマと笑いそうになるのを手で覆って隠した。しばらくセルジオは眉を寄せていたが、まあいいかと零してまた歩き出す。

(この髪型の方が好き、だって)

しやらりと栗色のポニーを触ると、セルジオの背中を追った。

からん、とサンダルが軽やかに音を立てる。

とくん、と小気味よく胸が弾む。

ふわり、とフレアスカートが風を孕んで膨らむ。

「ねえ、セルジオくん、今日はこれからどうするの？」

「んー、まずはデパートに行つて軽くおもちや屋にても行こうかと思つてる」

「お昼ご飯はその時に？」

「だな。一応高町が気に入りそうな店は調べてあるから、まあ好きな選ぶといい」

「ふふつ、ならエスコートお願いしていいのかな」

「はいはい、任せといてくれ、お嬢さん」

いつものように気負いなく会話を交えて、なのはがふとさつきまでのもやもやした気持ちになつてきているのに気づいた。

たつた一つの褒め言葉でそうなるとはなんとも現金な事だとは思つが……。

(なんか、すごくデートっぽいかも)

どうやら、自分はこのデートがかなり楽しみになつてきているらしかった。

暁の空で

ある休日の昼下がりに、クラナガンのデパートの喫茶店の窓際でひと組の男女が向かい合って座っていた。

一人は淡い金髪に翠の瞳のセルジオ。今日はオフのためか眼鏡をかけて普段よりはラフな服装だ。

その対面には栗色の髪と水晶の瞳の高町なのは。いつもと違うサイドテールは少しだけ彼女を大人っぽく見せている。

ルーテシアへのプレゼントの買い物が終わった二人は少し遅めの昼食を食べに来ているところだった。

腰を落ち着けてしばらくしてやってきた店員にセルジオがすぐにコーヒーとハンバーグステーキを、なのはがまごつきながらオムライスとオレンジジュースを注文する。

「オムライスのお客様ー」

「あ、私です」

「ハンバーグステーキのお客様ー」

「俺です」

「ごゆっくりどうぞーと言って去っていく店員を見送ったセルジオは手元のフォークとナイフに手を伸ばそうとして、対面のなのはが手を合わせているのに気がついた。

無言で同じように手を合わせるセルジオ。

なのはがくすりと笑う。セルジオが少し眉を寄せる。

「なんだ」

「合わせてくれるんだなーって」

「別に合わせてるわけじゃない。俺がやりたいからやってる」

「素直じゃないなあ」

「何を言う。俺はいつでも素直だろう」

「はいはい、そうだね」

それぞれ軽く手を合わせると目蓋を閉じて一言声を揃えた。

「いただきます」

なのははスプーンを手に取るとオムライスを一口すくった。

薄ぼんやりと湯気をあげる中、とろりとした半熟の卵がスプーンからこぼれ落ちそう

になって慌てて一口頬張る。

「ん〜、おいしい〜」

濃厚なトマトの風味を感じるケチャップライスと鼻腔に抜けるバターの香りの半熟卵。家でも再現できないわけでもないが、外で食べるから美味しい料理というのがある。

例えば今食べているようなバターのたっぷり使われてそうなオムライスとか。

もむもむとオムライスを頬張るとところけそうな笑みをこぼして頬を緩めるのは。見ているだけで美味しさが伝わってくるような表情だった。

しばらくオムライスを口に運んでいたなのはが、思い立ったように対面に座るセルジオへと目を向けた。

スプーンを動かす傍ら盗み見るようにセルジオを見るのは。

(……相変わらず静かに食べるなあ)

セルジオの前にあるのは特にメニューを見ることなく頼んでいたハンバーグステーキ。それをナイフとフォークで一口サイズに切り分けると黙々と口に運んでいる。

その間なののように美味しいという事もなければ、表情を崩す事もない。

それは『食事』と言うよりも『栄養摂取』と言った方がしっくりくるような気がした。

「なんだ」

自分を見つめる視線に気づいたのかセルジオが目だけをなのへと向ける。

「相変わらず黙々と食べるなーと思って」

「ちゃんと咀嚼してるから特に問題はないと思うが」

「もう、ご飯って栄養をとるだけじゃないでしょ？」

「いや食事の主な目的は栄養摂取だろ」

「そうじゃなくて、こう、なんだかなあ……」

「――？」

例えばさ、となのはが言葉をつなぐ。

「いま私はオムライスを食べています」

「そうだな」

「大きな声では言えないけど、ここのオムライスより翠屋うちの方が美味しいと思う」

「凄い自信だ」

「でも私は今の食事が結構楽しいです。なんでかわかりますか？」

「いきなりのクイズがきたな」

「正解した人にはなんと私のオムライスを一口プレゼント！」

「まあ別にそれはいらないが」

セルジオがナイフとフォークを置いて水を一口飲んで喉を潤すと、腕を組んでふむと

唸る。

「順当に考えるなら店内の条件が候補に挙げられるだろうな。家と違う場所で食べているという特別感、金を払っているという特別性、そうしたものが味を向上させているだろう」

「ぶー」

「む……なら、体を動かしたからというのはどうだ。玩具店は非常に賑やかだったからな、その分疲れて食事が美味しくなった」

「違います」

「じゃあ高町が無類の卵好きなんだろう。好物があれば他に何もいらぬ人がいるって聞く」

「不正解です」

「……お手上げだ。どうにも俺にはわかりそうにない」

指で作ったバツの向こうのこにことした笑顔のなのはに両手を上げて降参の意思を示した。

「ほんとにわからないんだ」

「生憎と」

なのはがやれやれとばかりに小さく肩を落とす。しかしその表情はやはり楽しんで、

口ほどには落胆はしてなさそうだ。

「セルジオくんと食べてるから、だよ」

「俺と？」

「そう。セルジオくんと」

不思議そうに首を傾げたセルジオがなのは見つめ返す。

「ごはんって人の気持ちと一緒に食べるものだと思うんだ。作ってくれた人の、料理してくれた人の、そして一緒に食べる人の」

スプーンを動かしてオムライスを一口すくって頬張ると、おいし、と満足そうに笑う。

「私は今セルジオくんとごはんを食べてるから普段よりも何倍もごはんが楽しい」

「……そういうもんか」

「そういうもんです」

納得いかなさそうに眉を寄せるセルジオ。その姿がなんとか子どもっぽく見えた。

そのいつもならなかなか見れない彼の表情にとくん、と小さく胸が高鳴るのが聞こえる。ビートが早まっていく。

(なんだか、セルジオくんが、今日は近い)

ごくり、となのはが喉を鳴らした。

「あの、ご、これ！」

「ん?」

「ひ、一口あげる!」

ずいっとなのはがスプーンを差し出すと、対面の青年の眉間の皺が深く刻まれた。

「正解した人にだけじゃなかったのか?」

「ぎ、残念賞です。あげないのもかわいそうですし」

載せたのは一口ぶんのオムライスと、距離を縮めたいという勇氣。

普段はできないような大胆な行動も桃子が選んでくれた服と化粧が背中を押してくれる。

「だから、どうぞ……」

自然に頬に熱が集まって視線が下に落ちていく。

柄にもなく胸のビートが加速してやたらと緊張してしまう。目の前にいるのはここ二年行動を共にしている相棒だというのに。

俯いてしまったなのはの差し出すスプーンを見つめてセルジオが黙りこくる。

「————」

普段なら「間接キスだぞ」とか言ってからかうだろうセルジオは、やがて何を思ったのぱくり、とスプーンの上のオムライスを頬張って咀嚼する。

もぐもぐとセルジオの口が動く。

「高町」

「ひゃ、ひゃい」

「……詳しい事はわからないけど、これが『美味しい』ってのはわかった」

降ってきた言葉になのはが顔を上げるとそこには、ゆるりとセルジオの満足そうな笑顔が待っていて。

「ありがとう高町、一つまた勉強になった」

「それなら私も嬉しいかな」

くすりと微笑みを交わして二人はまた一口口へと食事を運んだ。

その後、「俺のも一口返そう」とフオークを差し出すセルジオになのはが顔を赤くしながら応じたりという一幕もはさみながらも食事はつつがなく終わりを迎える。

（平常心、平常心。友達ならご飯を食べさせ合うくらいあるから。あるある、何も問題ないもん）

喧しく跳ねている胸をなんとか宥めすかして注文し直した飲み物に口をつける。そして、もう一度気を落ち着けるために薄く息を吐き出そうとして、それよりも早く対面からふう、と小さなため息の音が聞こえてきた。

「セルジオくん、疲れてる？」

「……まあな」

「もしかしておもちゃ屋さん？ 人混みとかダメだったっけ？」

なのはの脳裏に昼前に二人で連れ立って訪れたおもちゃ屋の賑わいを思い出す。するとセルジオがいや、と首を振る。

「別に人混みがダメなわけじゃないが、ちよつと圧倒された」

「まあそのおかげで良いものは買えたよ」、とセルジオが足元に置いてある紙袋に目を向けた。

中にはなのはと話し合いながら買ったぬいぐるみが入っている。

「というか、玩具店っていうのはいつもああいうものなのか？」

「うーんおもちゃ屋さんが静かな時っていうのはあんまり想像できないけど、でも今日は特に人が多かったんだと思うよ」

「？ 今日普通の休日だろ？」

「休日だからだよ。お買い物のおもちゃ買いに来たりする人も多いから。セルジオくんもそういう経験あるでしょ？」

「……ああ、そうだな」

なのはの問いかけに少し間を置いてセルジオが首肯した。そして何かを誤魔化すようにコーヒーに口をつけようとして、「いや」と言葉を漏らす。

「嘘だ」

「へ？」

「俺は嘘をついた」

しゃん、とセルジオが背筋を伸ばした。

「俺は一度も玩具店とかそういう所に行つた事はない。勿論、親とも」

空気が引き締まり、翠の瞳がなのはを捉えた。その輝きの中には緊張と、決意と、ほんの少しの怯えの色が覗いている。

「今日俺は高町にいくつか嘘をついた」

だから、とセルジオが言葉を繋ぐ。

「その事について謝つた後、お前に——君に聞いてほしい話があるんだ。もちろん高町が許してくれれば、だけど」

少しだけ気まずそうに言葉を濁して、けれど対面の少女からは決して目を逸らさないセルジオ。

一瞬、なのはが虚を突かれたように目を見開いたが、やがていつものように優しげに、ゆるりと表情を綻ばせる。

「ききたい。あなたのことを私に聞かせてほしいな」

「……ありがとう」

自己満足かもしれないけど、それでも高町に聞いて欲しかったんだ、と呟く。
「俺と、俺の家族と………俺の殺した母さんの話」



俺って孤児なんだ。

ん？ あー、違う違う。孤児院とかにいたんじゃないやなくて、なんていうか事件に巻き込まれて親を失ったとかそんな感じだって母さんには聞かされた。

まあそこらへんは小さかったから俺は覚えてないんだけどさ。とにかく俺に血の繋がった家族はいなかった。いわゆる天涯孤独ってやつだ。

身寄りもない。愛想も良くない年齢一桁のガキにはいくあてなんかなくて、でもそんな俺を引き取ってくれた人がいたんだ。

セピア・アウディ。

当時は地上本部でゼストさんの同僚として働いていた局員。

うん、そう、それが俺の母さん………になった人。

どんな人だったって？ うーん、説明が難しいけど、『強くて優しい人』だったと思う、あくまでも俺の知る限りでは。

俺みたいなめんどくさいガキを引き取って必死に働いて、同僚に尊敬されて、俺にもちゃんと気を配ってくれて、何より『管理局員』としての誇りを持っていた。

正しく、偽らず、優しく、強く、ただ市民の為に。

……違うよ、俺は母さんに似てなんかいない。俺はあの人とは程遠い。あの子の代わりになれたらとは、思うけどさ。

ああ、後は、ちよつと高町と笑顔が似てるかも知れない。

優しくして、あつたかくて、眩しくて、ずっと見てたいって思う、そんな感じの笑顔。

いたつ、いやお前が言えっていうから言ったんだろ……。

まあともかく、母さんは俺にとってはそういう人だった。

後話とかなきやいけないのは……ゼストさんだな。

そう、今の俺の『義理の父親』って事になつてゐるゼストさん。

ゼストさんは最初は俺の後見人だったんだ。なんでも母さんに頼まれて引き受けてくれたらしくてさ、良く母さんの家にも訪ねてきてた。

母さんと、ゼストさんと、俺と。あの時の母さんの家はその三人でいることが、なんとなく普通に思えてた。

ずっと続けばいいと、ずっと続いていくんだと、そう勝手に考えてた。そんな根拠、どこにも無かったのにさ。



なのはと連れ立って歩きながらセルジオはぼつぼつと自分と母親、そしてゼストのこ
とを語った。

どういふ関係だったか、どうやって『家族』というカタチになっていったのか。

それは今まで彼が語ろうとしなかった『セルジオ・アウデイ』という人間を形作る要
素。なのはが知ろうとしても知れなかった過去、彼と彼女の関係を進めるための一本の
楔。

「俺は、あの時初めて人の温もりというのを知ったように思う。それくらい、あの人たちは優しくて、大切だった」

セルジオに連れられるまま聖王教会の中を歩きながら、なのはがヒールのおかげでほ

んの少し近づいたセルジオの横顔を盗み見た。

いつもと変わらないように見えるけれど、ほんの少しだけ辛そうに唇が噛まれている。

やがてセルジオが教会の中を抜け、丁寧に手入れされた一つの墓の前で足を止めた。

掘られている名前は、セピア・アウデイ。

「どうしてここに、私を連れてきてくれたの」

「今日は母さんの月命日なんだ。だから丁度良かった、君とここに来るのが。俺の話をするのが」

セルジオは道すがら買ってきていた花を供えると目を瞑る。

「十年前、ミッドではじめてのロストロギアを用いたテロが行われたこと、知ってるか？」

「前言ったレリックを使ったやつだよ。今の廃棄都市の一角が火の海に包まれたって……」

「母さんはその時現場にいた。当時のあそこは管理局員の戦技披露のステージでな、まだ中継がメインの頃だったから観客こそ少なかったが、多くの人がテロに巻き込まれた」

「そんな……」

「そして、俺も、そこに……母さんの近くにいた」

ギリ、とセルジオが手から色が失われるほど強く握りしめると、苦しげに一言一言、過去の出来事に形を与えていく。

「テロが始まってすぐ観客の避難が始まった。普通にそうやって逃げておけばよかったのに、俺は、俺はっ……母さんが心配で、一人で会場に戻ってしまった。それが一番足を引つ張る事だなんて、露ほども思わずに」

火の海の中、母の名を呼んで走り回った過去を覚えている。忘れる訳がない、毎日毎日、毎日毎日毎日毎日、何故あんな事をしたのかと責め続けているのだから。

「そして無力なガキだった俺は当たり前のように死にかけて、そして母さんに救われた。母さんの命を犠牲にして」

目の前で自分の義理の母親の命が失われていく中、彼に残された一つの言葉。

『相手の心を想え。想いを絶やすな。希望を捨てるな。自分を信じろ』。そして——。「人を救え」

なのはは何も言わない。ただ語り続けるセルジオの背中を黙って見つめる。

「その日から俺はあの人の言葉に従って、あの人の死を無駄にしないように生きている。あの人の代わりになれるように、戦ってる」

そう言ったセルジオが目を開いて立ち上がると墓を一瞥して、半身を翻してなのはの

水晶の瞳を見つめた。

「これが俺の全て。俺の始まり。君に教えたかった事だ。軽蔑するなり、失望するなり、忘れてくれるなり、好きなようにしてくれ」

それ以上セルジオは何も言わなかった。言うべきことは言ったのか、ただ翠の瞳に悲しげな色を滲ませながら佇んでいた。

「ひとつだけ、きかせてほしいの」

なのはが風で揺れるサイドポニーを手で抑えながら自分の相棒とも言える青年を見上げた。

「なんで話してくれようと思ったの。きっと、これはセルジオくんにとって、とっても大切なことだったでしょ。それをなんで急に——」

「急じゃない。ほんとはずっと答えは出てたはずなんだけど、俺はそれを認めるのが、失うのが怖かった。でももしいつか失うとしても、高町に伝えたいって思ったんだ」

「——」

「俺の目指すもの、目指したかったもの、それが高町となら叶えられるって思ったんだ」
それは、とセルジオが続けて、ふっと柔らかく表情を変える。

「きっと、俺は高町が大切だったから。だから、俺のことを知って欲しかった」

沈みかけた太陽の暁に照らされるセルジオ。翠の瞳は暁の色合いを混ぜ込みながらも、決して揺れる事はなくただ静かになのはを見つめていた。

「——そっか」

短い言葉。なのは刹那の間にふつと笑みを浮かべた。そして今度は墓前で目を瞑って手を合わせて静かに祈る。

十秒、もしくは一分、長くも短くも思えるような黙祷を終えたのはがすくつと立ち上がり、セルジオと向かい合った。

「今日からは私のこと『なのは』って呼んで」

「え……?」

「呼んでほしいんだ、セルジオくんに。本当の貴方が、見えた気がしたから」

一瞬セルジオがあっけにとられたように目を見開いたが、頬をかきながら口を開いた。

「ええと、ナノ、ハ……?」

「ちがうちがう、な、の、は」

「ナノ、は、なノは、ナのは……?」

「ちーがーうー、なーのーはー!」

なのは、なのは、と数度か名前を連呼したセルジオは、やがていつものように嘆息交じりに笑みを漏らして手を差し出した。

なのはもその差し出した手に応じながら、くすつとおかしそうに笑う。

「よろしく、なのは」

「セルジオくんも、よろしくね」

二人の手が結ばれる。

「これって何回目の『よろしく』かな？」

「さあ、何回目だろうがいいんじゃないか。高町となら——」

「おほん」

「訂正、なのはとなら何回やろうと構わんさ」

くすくすと笑うなのはと話しながら、誰よりも大切だった人の墓に背を向ける。

（また来るよ。また、二人で）

そう心の中で伝えて、セルジオは夕焼けの中へと一歩踏み出した。



「……………変わったな」

暁に包まれる墓地で陸の制服に身を包んだ大丈夫が一人、去つていく二人の男女を見送つた。

今日は『彼女』の月命日。そして『彼』が愛する女性の墓前に花を手向けに来るのは決して不自然なことではなかった。

「あいつが自分で過去の話を、か」

以前ならする筈もなかった。きつとその記憶はセルジオにとつて忌々しい、罪の十字架そのものだったのだから。

「それ程までに、その存在は大きいか」

ふつと、薄く、けれど確かに笑みを浮かべるその所作はどこか彼の義理の息子を思わせた。

「俺たちの息子は、ちゃんと大きくなつてゐるぞ、セピア」

そして、彼は既に供えられているバラとは別の色の花束を置くと墓石のそばに腰掛けて空を見上げた。

暁に混じつた風が桃色と白のバラをそよそよと静かに揺らしていた。

空を見上げて

今でも昨日のように思い出せる。

君と俺が出会った日のことを。

「新人が配属されてくるらしいぞ」

「新人」

「まあでもそういう名目の武装隊の叩き上げだそうだ」

「叩き上げ」

「しばらくはお前とコンビを組むことになるとのことだ。ふん、足を引つ張らないと良
いかな」

となりの気難しい顔をした青年がふん、と鼻を鳴らした。

「その新人に何かあるのか、レジアス」

「何もない。ただ貴様と組むに値する者かわかるまで認められただけだ」

「そうか」

しばらくして隣の青年——レジアスと別れて訓練場に向かうと、そこには一人の女性が魔導用の杖を持って待ち構えていた。

「お、きたきた。ほんとに朝イチから訓練してるんだな」

女性が白いバリアジャケットから陸の茶色の制服へと姿を戻すと、軽い敬礼を見せた。

見慣れない相手だったものの、取り敢えず同じように敬礼を返しておく。

「あたしはセピア・アウデイ。今日からここに配属されました」

淡い金髪に翠の瞳。自分の肩ほどしかない上背。レジアスに聞いていた限り、年は奇遇にも同じで、階級は一つ下らしい。

花が咲くように浮かべられた笑顔を添えて差し出された手。しかしそれを無遠慮に自分が握り返していいのかわからず思わず眉を寄せた。

「なんだよまだるっこしいな、ほれ」

彼女の方からぎゅつと出しあぐねていた俺の右手を掴むと乱暴に握手をさせられる。ぶんぶんとセピアが手を振ると、動きに合わせるように横にくくったポニーテールがふわふわと跳ねた。

「んじゃあしばらくよろしく」

「……よろしく頼む、アウデイ二尉」

「あー、やめてよそういう堅っ苦しいの。あたしはセピア、気軽にそう呼んでほしいわ」
「しかしお前は女性で、俺たちはファーストネームを呼び合うほどの仲ではない」

「あたしが良いっていつてんだから良いのよ。その代わりあたしも貴方のこと名前で呼ぶから、それで対等。オーケー？」

「……了解した、セピア」

「うん、それで行こう、ゼスト」

それがそれから長い付き合いになる『セピア・アウデイ』という女性との出会いだった。

セピアはまごう事なき『天才』に分類される魔導師だった。

魔力量A A、魔導師ランクA A A。若干20という若さでいて二等空尉。しかも士官学校卒業などではなく現場からの叩き上げでその地位を獲得していた。

けれど、その事を決して驕ることはなく、仕事に責任を持ち、それでいて自己への努力を怠らなかつた。

何よりその心は『管理局員』としての鑑そのものだった。

自身の手柄ではなく人々の笑顔を。市民の生活を守るために戦い続けていた。

「おいアウデイ！ 貴様また命令無視しやがったな！」

「げ、レジアス」

「人を救うのは良い！　しかしいつもあんなに無茶苦茶されたら俺の立場がないだろう！」

「まあまあ事件は解決したんだし結果オーライでしょ？」

「何開き直ってやがる！」

「きゃーゼストー、レジアスが虐める〜」

「む」

「こら貴様ゼストの後ろに隠れるな！」

「いやほらあたしたち相棒だし」

「ゼストも眉を寄せて唸ってないで早くその阿保になんとかいってやれ！　貴様ら相

棒だろうが！」

「レジアスそう怒るな、市民は無事だったんだ」

「あー貴様らは本当に……！」

若い日のレジアスが文句を言いに来て、セピアがそれに気まずそうに応じて、自身はそんな二人を側からそれを見守っていた。

そんなことが一体何度あったのだろう。

出会って一年が経ち、二年が経ち、三人の職場が離れてからも三人の関係が変わることとはなかった。

「じゃー、レジアス婚約おめでとー！ かんぱーい！」

「乾杯」

「……ふん、儂の事などよりもお前らは自分のことを心配すべきだな」

「あつはつは、レジアス儂とかいつてじじくさー」

「セピアア！」

「きやー」

「……つたく、貴様もそろそろ良い年だろうが。いい加減身を固めるなりなんなりしたらどうなのだ」

「あー、それ上司にも最近言われててさあ。とんだセクハラだよねえ」

「それは結婚して少しは安定感を持つと暗に言われているのだ。お前は危なかつしすぎる」

「うーん、そうかなあ？」

「……セピアほどなら引く手も数多だろう」

「へ？」

「見目もいいし、高級取りで、公務員。気たてもいい。これで相手が現れないことはないだろう」

「お、おう、結構ストレートにいうじゃん」

照れたようにセピアが頬をかく。

「あーあ、いつそのことゼストがあたしのこと貰ってくれと楽なんだけどねえ。そしたらいい感じに無茶できるし」

「む?」

「どう、今なら可愛いお嫁さんがゲットできる権利も付いてくるけど買つとく?」

「……………セピア」

「なんて冗談! だからそう緊張した顔しなさんな!」

「……………そうか」

花のように笑うセピアが愛おしかった。なによりも大切だとすら思えた。彼女の微笑みを見ているだけで幸せだった。

自分のような偏屈な男では彼女は幸せにできないだろう。故に言葉にすることはない。

今は、この関係でいられることが心地よかった。

けれど、そんな関係が大きく変わる日が訪れた。

「よ、ゼスト、待った?」

セピアが一人の少年を連れてきた。彼女の腰ほどまでしかない身長。ふわふわとした頼りない雰囲気。淡い金髪から覗く瞳は、セピアと同じ透き通るような翠色。

「その子は？」

「あたしの息子」

「なん……だと……？」

「え、なんてそんなにシヨックそう？」

「いや、大したことではない。ああそうだ、お前も女性の幸せを得ることに憧れかないはずがないものな……」

「あー！ 違うって！ この子は養子！ あたしまだ哀しき独身貴族だから！」

そんな問答をしているとセピアの隣の少年がぼうっとしばらくゼストを見上げているのに気づいた。

少年は左手でセピアの服の裾を掴んだままぺちぺちとゼストの手を触って何かを確かめると小さく頷いた。

「とうさん？」

「いや違うが」

「……そっか」

虚ろな瞳で「ちがった」と呟くと少年は虚空に目をやったまま黙り込んでしまった。

「セピア、この子の名前は？」

「あー、それが、ちよつと事情がある子でね……彼自身の名前はないんだ」

「む」

「だから私がつけてあげました」

「ほう」

えへん、とセピアが胸を張った。

「『セルジオ』。セルジオ・アウデイ」

セルジオと出会ってからも彼女と彼の関係は大きくは変わらなかった。けれど、それでも変化が全くなかったわけではなかった。

「ゼストー、その棚からお皿出しといてよ、三人分」

「皿。これでいいのか」

「ゼストさん、そっちよりも隣の白いやつの方がいいと思います」

まず、セピアの自宅に行くことが増えた。どうやらセルジオはゼストの事を気に入ったらしく、度々会いたいとせつつかれたのだ。

それでゼストが週末にアウデイ宅を訪れるのは珍しくないことになった。

そして、セピアが何かを言いかけることが多くなった。

「……あのさ、ゼスト」

「なんだ」

「今の関係どう思ってる？」

「急にどうした」

「あたしは、正直今の三人でご飯食べるの嫌いじゃないんだよね。むしろ結構好きかも」

「……そうか」

でも、とセピアが言葉を繋ぐ。

「このままじゃいけないよね」

「……そうだな。いつまでも、このままではいけないかもしれないな」

しばらくゼストが黙り込み、そして意を決したようにセピアに向き直る。

「今度の戦技披露会が終わったら、お前に言いたいことがある」

「うん、私も実は言いたいことがあるんだ」

「ならばその時は」

「うん、一緒に」

そして、運命の戦技披露会がやってきた。

一生忘れられない、その日が。

紅蓮に包まれる会場。響く悲鳴と怒号。肌を焼くような熱気。

そして、鮮血にまみれたセピアを抱いたセルジオ。

見てすぐに理解する。もう二度とセピアが目を開くことはないのだということ、死んでしまった理由はセルジオを探していたからだということ、そして自身の気持ちを伝える相手がこの世から消え失せたということ。

ゼストの気配に気づいたのか、セルジオが名を呼んだ。その瞳は初めてあった時と同じ暗い空うらのような感じだった。

「ゼスト、さん」

「……………セルジオ」

「なんで、かあさんは、しんだんですか」

「……………」

「誰よりも人の為に戦ってきた人だったんです。優しい人だったんです。悪いことなんて何もしてなかった……………」

セルジオが叫ぶ。その目に涙は浮かんでいない。

「どうして、何にも役に立たない僕が生きてて、誰かのために戦ってきた母さんが死ななきゃならないんですかッ！」

紅蓮に照らされながら静かにゼストが言葉を紡いだ。

「運が悪かったんだ、セルジオ」

「は？」

「セピアは運が悪かった。だから……」

一瞬、心が軋んだ。だが、その音を無視して言葉が続けた。いつものように、変わらない表情を保って。

「人は運が悪くて死ぬんだ。誰かが、悪いわけではない。決して、お前のせいなんかじゃない」

「違う！ 僕が、俺がもつと力があれば、もつと強ければ救えたんだ！ 全部俺が、俺が……」

少年が泣きそうな顔でゼストの胸へと掴みかかり、そしてズルズルと崩れ落ちていく。

「……行こう、セルジオ。ここもじきに火の手が回る。セピアを、連れて帰らなければ」
口にしたかった言葉があった。

伝えたい想いがあった。

二人で交わっていた約束があった。

けれどそれも今は全て闇に消えた。死人と言葉を交わすことはできない。どれだけ焦がれようと、信じたくなからうと、それがこの世界の真理だ。

セピア・アウデイは死んだ。それが、現実だ。



「ルーテシアちゃん誕生日おめでとう！」

パーンと鳴ったクラツカーの小気味のいい音でゼストが追憶から帰還する。

ふっと目を上げればナカジマ一家にアルピーノ夫妻、セルジオとなのは達がルーテシアにプレゼントを渡しているところだった。

半身を起こすと肩からずりりと毛布が滑り落ちていき、今までソファに寝かされていたということを理解する。

(……失敗したな)

勧められるまま珍しく酒など飲んでしまったせいだろうか。

「はい、これプレゼント。リボンです。良かったらつけてね」

「わあ、なのはちゃん、ありがとう」

「いえいえ」

ルーテシアがなのはから渡されたプレゼントをぎゅっと抱きしめるとくしやりと嬉

しそうに笑う。

「ほら、セルジオくんも」

「あ、ああ」

なのはに促されてセルジオが紙袋から可愛らしくラッピングされたプレゼントを取り出すと、大人達の俄かに騒めいた。

「セルジオ君が、プレゼント……嘘、そんな人間みたいなことを……」

「うう、おねーさん、セルジオ君が成長してて涙が出そうよ……私の娘の時もプレゼント買ってあげてね……」

「お母さん！」

「セの字、お前も大人になってたんだなあ」

「俺の事を一体何だと思ってるすか」

げんなりした様子でセルジオが嘆息を一つ。そして屈んでルーテシアと目線を揃えると先日なのはと選んだプレゼントを手渡した。

「誕生日おめでとう、ルーテシアちゃん」

「くまさん！」

「気に入ったんなら良かったよ」

包装をあけて溢れんばかりの笑顔を浮かべたルーテシアは、なのはに貰った服と纏め

てくまのぬいぐるみを抱きしめる。

そして、ルーテシアはしばらくプレゼントを抱きしめていたがやがて意を決したように、まん丸の頬を真っ赤に染めてセルジオを見上げた。

「あの、せるじお、くんと、なのはちゃん」

「ん？」

「なあに？」

「ルーの、おにいちゃんとおねえちゃんになってくれませんか！」

「いや無理だろう。俺もなのはも血縁関係上ルーテシアちゃんの兄妹になることはできない」

「ふえ……」

「え？ あ、ごめ、ちよ、泣かないで。ええと、なんというか……」

「セルジオくん……」

「ええ、これ悪いの俺か？」

「当たり前です！」

セルジオにはっきりとぶつた切られたルーテシアの水晶のような透き通った瞳にみるみるうちに涙が溜まっていく。

じとつとなのはに睨まれ、セルジオが焦ったように『家族』の定義をルーテシアに説

明を始めていると、呆れた顔のメガーヌが横合いから口を挟んだ。

「この子一人っ子でしょ？ だから『お姉ちゃん』とか『お兄ちゃん』に憧れてるらしいの。それで、あなた達をお兄ちゃんとお姉ちゃんって呼びたいって聞かなくて」

「ああ、そういう」

ハンカチでルーテシアの涙を拭いてやりながら視線を流して、くすりと笑んでみせる。

「もし良かったら、なってあげてくれないかしら？ 少しの間でも構わないから」

「そういうことなら——ルーちゃん」

「なあに」

「私もルーちゃんのお姉ちゃんになりたいんだけど、いいかな？」

「いいの？」

「もちろん！ だから私のことはお姉ちゃんって呼んで欲しいな」

「おねーちゃん？」

花が咲くような微笑みを添えてなのはが頷くと、ルーテシアも嬉しそうにぱあつと笑顔を見せた。

それを隣で見ていたセルジオはしばらく気まずそうに頭をかいていたが、恐る恐ると言った様子でルーテシアの頭に手を伸ばす。

「俺も、その、お兄ちゃんでもよろしく。ルーテシアちゃん」

「うん！ おにーちゃん！」

嬉しそうにルーテシアが笑う。すると、セルジオの表情が安心したかのような柔らかいものへと変わり、軽く『妹』の髪を撫でた。

「嗚呼、そういう表情がまた……」

ぽつり、とゼストが呟くと誰にも悟られぬように起き上がると、一人でリビングからベランダに出て庭へと降りた。

びゅう、と服の中に潜り込んできた夜の風が火照った体に心地いい。

ゼストは賑やかなリビングを背にして一人で星屑が散らばった夜空を見上げて目を細める。

「……………セピア」

彼女と別れて一体何度その名前を呼んだだろう。

彼女が今の自分を見たら何というだろうか。未練がましい男だと笑うだろうか、今も想ってくれて嬉しいと言ってくれるだろうか。

「考えても仕方のないことだな」

自嘲気味に鼻を鳴らすと胸のポケットからタバコを取り出す。箱から取り出したタバコを軽く指で叩いて葉を詰めると啜えて火をつけた。

夜闇の中に仄かな赤色が現れて消える。

ふう、と紫煙を吐き出すとネクタイを緩めた。

「ゼストさん」

ふと、背中に聞き慣れた声がかかった。

「セルジオか、何か用か？」

「用も何もさつきまで眠ってた人が急にいなくなったら驚きますって」

「そうか、心配かけたな」

「いえいえ」

ちらり、と横目でセルジオがゼストの方を伺う。

「それ、一本貰っていいですか」

「煙草をか？ お前は……」

「もう十八です。年齢的には問題ありませんよ」

「そうか、そうだったな」

ゼストがライターとタバコのケースを差し出すとセルジオがゼストに言われるままに啜えて、火を点ける。

「——ん、げほっ、んえあ……あ、むり、くるし」

「ふ、誰しも初めての時はそうなるものだ」

「よくこんなの吸えますね、カッコいいから憧れてましたけど、俺にはちよつとむりそうです」

「憧れてた？ 煙草にか？」

「いえ、煙草を吸うゼストさんに、です」

「――」

「俺にとつては、ゼストさんはずつと憧れですから」

二人で空を見上げ、今度はゼストがセルジオの横顔を盗み見る。

初めて出会った日の少年はいつのまにか自分と変わらないほどまでに身長を伸ばし、ついに煙草を吸えるまでになってしまった。

だからだろうか、感傷的な気分になって、余計なことまで口走つてしまう。

「なあセルジオ、お前は俺の息子で良かったか？」

言つてしまつてから後悔する。そんなの聞くまでもないだろう。

自分はセルジオが母親を失つて初めて会った人で、よりにもよつて『運が悪かった』と言ひ放つたのだ。

それに引き取つてからも槍の稽古をつけたくらいで、『親子』として関わつた事などなきに等しい。

そんな自分の『息子』で良かったかなんて、答えは一つしかないだろうに。

軽く頭を抑えたゼストがタバコの火を消した。

「悪い、忘れて——」

「あの、ゼストさん、これ」

ゼストの言葉を遮るように、セルジオがジャケットのポケットから一つの細長い箱を取り出して差し出した。

手に押し付けられたものを促されるままに開いて、ゼストが呆気にとられたようにぼうっとそれに視線を落とす。

「ネク、タイ……。どうして俺に……？」

「あー、なんとというか、言いづらんですけど、先日俺なのはと出かけまして。その時に、母さんのこととか、ゼストさんの話をしたんです」

「セピアの……」

「まあそのあと、なのはの地元では父の日ってやつが近いらしくて、ルーの買い物ついでにそちらの方のプレゼントも選んだんです。」

それで、なのはがゼストさんに買ったらしいって勧めてくれて……」

だから、とセルジオが言葉を繋げると、意を決したようにゼストを見つめた。

今までのように見上げるのではなく、対等に、正面から目と目を合わせて。

「これが俺の気持ちです。俺は今の『セルジオ・アウデイ』だった事を、恨んだことなん

かありません。出会った全てが今の俺を作ってくれています」

セルジオに見つめられる。大切な、大切だった彼女と同じ瞳の色をした『息子』に。
(嗚呼、本当に……………大人になった)

ふっと、ゼストが笑みを浮かべた。

「なあ、セルジオ」

「はい？」

「ひとつ、話を聞いてくれないか？ 三課の今後についてだ」



夜空の下で一人佇むセルジオの背中を見つける。ぼんやりと空を見つめる姿が放つて置けなくて、サンダルを借りたなのはがセルジオの隣まで駆けていく。

「どうしたの？」

「ああ、なのはか」

今気づいたようにセルジオがなのはの名前を呼んだ。気配感知に秀でた彼が知り合

いの接近に気づかないなんてこと殆どないはずなのに。

「ゼスト隊長と何話してたの?」

「異動の話だ、教導隊への」

「もしかしてゼスト隊長が打診されてるっていう?」

「知ってたのか?」

「うん、噂で少し、くらいだけど」

「そうか、なら話が早くていい。なんても教導隊の方で人手が足りないらしくて、即戦力級のエースを求めてるらしいんだ。それで……………」

「それで?」

「ゼストさんから、代わりに俺が教導隊に行く事を提案された」

「ええっ?!」

「まあ驚くよな…………」

俺も驚いた、とセルジオが軽く笑う。

——教導隊と言えば管理局の花形だ。戦時のエースも多く在籍するそこでなら、三課にいるよりも濃い経験が詰めるだろう。

——俺にも異動の命は出ているが、今すぐという訳でもない。

——だからセルジオ、教導隊に行つて経験を積んで、そして。

「いつか、三課の隊長としてゼストさんの跡を継いでくれつて、そういう言われた」

なのはが目を丸くして、そしてがしつとセルジオの手を握つた。

「凄い！　凄いよセルジオくん！　教導隊で、しかもいつか部隊長を任せるつて、おめでとー！」

「あはは、さんきゅ、なのは」

「すごいすごい、と連呼するなのはだったが、セルジオが暫く黙り込んでしまつて、こてん、と首をかしげる。

「セルジオくん？」

「なのはが名前を呼ぶ。すると、セルジオはなのはの手をやんわりと振り払うと、空を見上げた。」

「そう言えばさ、なのはの三課の在籍の期限、そろそろ切れるよな」

「え、そうだっけ」

「ああ、もともと期限付きの出自、つて形だったし、まあ望めば延長はできるんだが……」

「そうなんだ……」

「なのはが小さく息を吐く。」

「それで話は戻るんだけどな、なんか教導隊の方いくつか空きがあるらしくてさ、頼めばあと1人くらいは補佐を連れて行けるらしいんだ」

すう、と小さく息を呑む音が聞こえた。

「もし俺がなのはについてきて欲しいって言ったら、どうする?」

青年を取り巻く環境と、動き出す歯車

「最近あの二人怪しいと思わない？」

「何のことよ」

「なのはちゃんセルジオ君のことよ」

航空魔導隊付きの食堂で頼んだパスタを頬張りながら対面でサラダとチキンを食べていたメガーヌへとクイントが話を振った。

「そうかしら？」

「だって二人でデートに行ったり、昼休憩とかよく一緒にご飯食べてたり、こう、なんとなくか、とにかく距離が近いというか気安い感じがするのよね」

「言われてみれば確かにそうかもしれないわね」

「極め付けは呼び方よ！ あの堅物が『なのは』って！ 名前で！ しかも呼び捨て！ あんなの初めて見たわよ！」

「まあ少し落ち着きなさいな」

「もぐっ」

やけに興奮した様子のクイントの口に呆れ顔のメガーヌがチキンを一口突っ込んだ。しばらく肉を咀嚼してクイントは静かになったが、疾風の如く食べ終わる。

「それになのはちゃん、最近髪伸ばしてるじゃない？ その理由を聞いてみたら」

ささっとクイントが髪を横で括る。

「『ある人から、その髪型好きだーって言ってもらえて』……………ってめっちゃ赤い顔で言われたのよ！ もうこれどう考えてもセルジオ君でしょ！」

「ふーん」

「……………メガーヌ反応うすーい」

「だってあそこなのはちゃんを押せば後はなるようになるような雰囲気あるじゃない」

「いやいやそれは流石に……………」

「否定しきれないでしょ？」

「うん、否定しきれないわ」

クイントが深く頷いた。

「昔は結構めんどくさい子だったんだけどねえ、セルジオ君。ずいぶん丸くなったわよねえ」

「それには同意するわ」

二人が顔を見合わせてくすりと笑う。

「初めてセルジオ君と会った日のこと覚えてる？」

「覚えてる覚えてる。たしかセピアさんに職場に連れてこられた時よね、まだ『僕』って
言ってたころ」

「あの頃は身長だつて私たちの腰くらいしか無くて、セピアさんの真似して杖持ってた
のよね」

「そうそう！ あつはは、なつつかしいー」

「もう、十年以上前になるのね……」

「もうメガーヌ、ちよつとババくさいわよ」

「仕方ないでしょ、私たちだつてもう30代よ？ 年相応よ」

「確かに、言えてる」

メガーヌが柔らかに綻ぶように過去を思い出しながら、クイントは快活に太陽のよう
に、それぞれ笑った。

「ほんとに、貴女とは長い付き合いになったわよね、クイント」

「まったくよ。初めて会った時はまさかこんなに長い付き合いになるとは思いもしな
かったわ」

「それは私もよ。だって私正直言つて貴女のこと苦手だったもの」

「あ、そういうこと言っちゃう？　じゃあ私もカミングアウト。私もメガーヌのこと最初は結構苦手だったの」

「それはなんとなく察してた」

「ありや、そうだったんだ」

「でも、一緒に何年も仕事して、今では貴女ほど信頼できる相手は数えるくらいしかないな
いって、そう思うわ」

「なーによ、メガーヌ。急に照れるじゃないの」

「だからクイントには話しておくわね」

「へ？」

しみじみと言いながらメガーヌがカップに入ったコーヒーストに少しだけ口をつけて、
ふっと遠いところへと目をやった。

「私、三課辞めることにしたわ」

「は、はあああああああああつ?!」

「声でかいし座つてクイント」

「え、ちよ、はあ?!」

クイントが頭の上に大量に？を浮かべながら、メガーヌを伺うが、当の本人はコー

ヒーを飲むだけで特に否定も訂正もしない。どうやら聞き間違えなどではないらしい。

「やめるって、本気？」

「本気。っていうかそのうち管理局もやめるわ」

「マジ？」

「マジよ」

「そりやまた、どうして……」

問われて「いくつか理由はあるけど」とメガガンが前置きして続ける。

「一番はルーテシアのこと」

視線は窓の外遠い向こうを見たままですとつとつと話し始める。

「仕事してて、質量兵器とか相手の魔法で怪我とかした時に思うのよ、『もし私が死んだらルーテシアはどうなるんだらう』って」

「……」

「そんなこと考えたら死ねないじゃない。それに、親が子どものそばにいないっていうのは結構応えることらしいしね」

「それは、そうかも、しれないわね」

「だから辞めるの。隊長には事務職への転属願いを出してるから、そのうち私も後方勤務になると思うわ」

「……まさかあんたからそういう言葉が出るとは思ってたわ」

「奇遇ね、私もよ」

あつけからんと言うメガーヌ。そして気落ちしたように少し目を伏せるクイント。

「最近のセルジオ君たちを見てたら思うのよ、もうあの子たちに後を託す頃なのかな、って」

「……………私たちだって、まだまだやれるでしょ」

「まあそうだけど、それでも先輩たちもきつとこんな気持ちだったんだなーってわかっちゃうとどうもね」

クイントとメガーヌは同期で殆どを同じ職場で過ごしてきた。クイントにとって管理局においての戦いは常にメガーヌと共にあったと言ってもいい。

その中で自分たちに後を任せて退職、事務職へと転向した先輩に多く出会ってきた。

ずっと年上で自分とは遠い話だと思っていたが、1番の相棒と言える相手がまさに今その道を辿ろうとしていた。

「だいたい二十年。管理局で働いてきた。確かにまだ戦えると思うわ。けど、今はルーテシアのことが大切な。あの子を、一人にしたくない」

「……………そっか」

クイントが目を閉じる。そして、大きな、大きな、胸の中の空気を全て吐き出すかの

ような、溜息をついて、ぼちっと目を開けた。

「あーあ、それじゃあ私たちのコンビも解消かー！　メガーヌとはもつと一緒に戦えると思つてたけど、仕方ないわね！」

戯けたようにクイントが笑つて、そして、ふつと一瞬だけ目を流した。

「もう、私たちもそういう年なのね」

変わらないと思つてた。変わつてないと思つてた。

ずつとこんな日常が続くと思つていた。

けど時計の針は進んでいく。

入った頃は十代で正義感に燃えていたクイントも、いつしか恋をして、結婚をして、娘を持った。昔のように身軽に動けなくなった。

食事をする時はゲンヤの好物や娘たちの食べる量を考慮するし、買い物に行つたつて自分の為だけの買い物をするこゝとなんてほとんどない。

夜に突然思い立つてファミレスでご飯を食べに行つたりしないし、後輩たちの頑張りを微笑ましく見守り応援している。

人はそれを『大人になつた』のだという。

いつまでも子どもそのままではいられない。嬉しいことがあつて、悲しいことがあつて、叶えたいものがあつて、挫折して、妥協して、後悔して。そうやって、時を経てき

た。

メガーヌは少し早かっただけだ。自分だっていつまでも前線で戦い続けるわけにはいかないだろう。

「私も、そういうこと、考えるべき時なのかな」

帰ったらゲンヤさんにそれとなく聞いてみよう、と薄く笑っているメガーヌを見て、ぼんやりと考えた。



ティータ・ランスター。

十九歳。管理局首都防衛隊所属の三等空尉。

彼は士官学校時代に両親を亡くしまだ幼かった妹と二人つきりになった。

「おかあ、さん……、おとう、さん……」

彼の前に二つの選択肢があった。

一つは親戚の筋を頼り今のまま士官学校で勉強すること。

もう一つは士官学校を中退し、中途採用で管理局に入局して妹と二人で暮らすこと。

前者ならばティアナは自分のような安定感のない若輩者ではなく、安心できる親元で生活することができる。自分は士官学校が全寮制という形式上一緒には住めないが、それもしばらくのことだ。

それに、彼には『執務官になる』という夢があった。

士官学校を中退するということはその夢から大きく遠ざかるということであり、故に彼自身のためには選ぶべきは前者だった。

でも、彼が選んだのは後者だった。

「ねえ、おにい、ちゃん……、これから、わたしたちどうなるの……？」

「ティア……」

「はなればなれに、なっちゃうのかな？」

「……ティアは、どうしたい？」

我ながらずい質問だったと思う。けど、潤んだ瞳に見上げられた時、ティーダの心は決まった。

「おにいちゃん、いっしょがいい」

それから、ティードは数日としないうちに士官学校を中退した。

だって、両親の墓前で涙を流す妹の手を握ったティードは感じたのだ、妹は自分が守らなければと。

それは義務や使命感ではなく、自分の夢よりも優先したいと思えた、胸の内より出でた新しい『夢』だった。

それからの日々は楽なことばかりではなかった。

それでもやってこれたのは偏に妹ティアナの存在があつたからだだった。

辛くてもティアナが作ってくれた料理を食べると次の日も頑張れた。凹んだ時もティアナの笑顔を見れば自分を鼓舞できた。

一人ではきつと自分はどこかで折れていただろうという確信にも近い想いがあつた。

「ごめんって、ティアナ」

「ふんだ、兄さんなんて知らない」

「俺だつて一緒に出かけたかったけど、仕事が入っちゃったんだ」

「今日は一緒にご飯食べに行くって前から約束してたのに」

「だからごめんって」

ぶいっと拗ねたようにそっぽを向くティアナの頭を軽く撫でると、恥ずかしそうに頬

を染めて「……誤魔化さないでよ」と口を尖らせた。

そんな何気ない仕草に愛おしきを感じながらも、しやがんで妹と目線を合わせる。

「じゃあ今日の埋め合わせって訳じゃないけど、今度一緒に買い物に行かないか？」

「買い物？ 兄さんと？」

「ぴこん、とティアナの耳が動いた。

「な、なんでまた」

「兄さん、新しい服が欲しくてさ、もしよかったらティアナも付き合ってくれと嬉しいんだけど……」

「そ、そこまで言うなら仕方ないから付き合っただけあげる」

「助かるよ、ありがとう、ティアナ」

「もう、その呼び方やめてっばー！」

「あはは、ごめんごめん」

今度こそ約束だからね、と言って見送ってくれるティアナに軽く手を振り返して約束の場所へと足を向かわせた。

きつとティードはティアナの親にはなれない。けどそれでいいと思っていた。支えて、支えられて、そうやって二人三脚で歩んできた。

それはいつかティアナがお嫁に行くまではそうなのだろう。非常に遺憾だが……兄

として妹のウェディングドレスを見れないというのはそれはそれで不満だ。

だから、いつかやってくるその日までは、兄妹二人で歩んでいくのだ。

外に出てぐいつと軽く伸びびをして、管理局から支給されているデバイスから本部へと通信を入れた。

すつと、ティーダの表情がほかの色を失う。

「こちらスレイヤーズ3ランスター」

『ランスターか、プライベート中に悪いな』

「いえ、構いません。それで隊長、何か？」

『今から隊舎の方まで来れるか』

「急ですね。何か事件ですか？」

『詳しくはこちらに来てもらってからになるが、事件が動きそうだ』

「——つ、それってまさか三課から引き受けた」

『察しが早くて助かる。では急行してくれると考えていいな』

「了解しました」

通信を切つてふう、とティーダが一息。

「行くか」

自身の職場へと走り出そうとして、ふと足を止めて振り返る。なんの変哲も無いマン

シヨン。ティアナと自分の暮らす家。

そこを何故かやけに離れがたいような気がした。



「おーい、なのはー」

仕事を終えた帰り、いつもなら三課から家に直行するなのはだが、その日は珍しく寄り道してミツドのとあるレストランにいた。

店に入ると先に席を取ってくれていたフェイトたちが手を振っている。

「ごめーん、待たせちゃった?」

「ううん、そんなに。なのはもお疲れ様」

「フェイトちゃんもはやてちゃんもおつかれー」

なのはを待つていたのは親友であるフェイトとはやての二人。明日は休日ということもあり、今日は三人で外食してそのままはやての家に泊めてもらう予定である。

「なのはもこんな時間までお仕事だなんて大変だね」

「ちよつと緊急のお仕事が入っちゃってね。まあ良くあることだからもう慣れたかな」

「ほえー、やっぱ陸は忙しいんやなあ」

「ほんとはもうちよつとかかりそうだったんだけど、セルジオくんが引き受けてくれたんだ」

「そらいい上司さんやなあ、セルジオさん」

「うーん、でもちよつとセルジオくんは仕事しすぎだから自分のこと労って欲しいんだけどね」

お仕事任せて来ちゃった私が言うことじゃないけど、となのはは少し困り顔。

「やっぱり誰かがブレーキ役やってあげなきゃセルジオくんは危なっかしいんだよね……」

しみじみというなのははやてとフェイトが同時にぶつと吹き出した。

「な、なに」

「だってそのセリフ、ちよつと前まで私とはやてで話してたことそのまんまだったから」「せやせや。なのはちゃんほーんと危なっかしくてこつちまでハラハラしとったんやで？」

「そ、それは面目次第も御座いません……」

しゅんと頭を下げるなのはに、フェイトたちは尚も楽しげに笑う。こういうことが冗談で言えるようになるくらいになのはが変わり始めてるのは二人にとっては嬉しいこ

とだった。

「この分じやあなのはちゃんはずつと陸におりそうやなあ」

「え？」

「だってなのはちゃんの口ぶりやとセルジオさんと離れることとか今のところ全然考えてなさそうやもん」

はやてが肘をつけて手に顔を乗せるとくすり、と笑った。

「いやー、セルジオさんも罪な男やなあ。なー、フエイトちゃん」

「うん、ちよつと妬けるかも、ね」

「べ、別にそういうのじゃ無いから！ あくまでもセルジオくんとはパートナーだから

！」

「うんうん、わかっとるで」

「たぶんはやてちゃんは全然わかってないっ」

ふく、と頬を膨らませるなのはに、こめんごめんとははやてが謝る。

「んじやあなのはちゃんとは近々いつしよに仕事することがあるかもしれへんなあ」

「どういうこと？」

「だって私、来年から『陸』の所属になるもん」

「え、えええっ?!」

「ほ、本局の方はどうなるの、はやて！ レテイさんの許可とか」

「もうとつてあるで。シグナムとかヴィータが一緒に、つてのは難しいけど、私とリインは動けそうなんよ」

「それは、なんというか、どうしてまた」

「んー、まあ大した話やないんやけど、私、指揮官になりたいんよ」

「指揮官に？」

「というか、高官？ そのためには陸でキャリア積んで部隊持てるだけの地位を持つのが手っ取り早いなーって思うて」

はやてがきゅつと手を握るとそばにあつたお冷の入ったグラスを手の中で弄ぶ。水の中で軽やかに氷が踊るの様子に視線を落としながら、はやては言葉が続ける。

「私は『闇の書』の主や。その事で私の家族を恨んでる人たちはぎょうさんおる」

「はやてに悪いところなんて……」

「ありがたいな、フエイトちゃん。でも、世間様はみんなそう思ってくれるわけやあらへん。管理局の中にも、私たちの事をよくない風に思つとる人もたくさんおる」

そのせいでヴィータなんかはちよつと『陸』の人たち苦手になつとるしなあ、とはやて。

「だから私にはある程度の立場が必要なんや。家族を守つて、こ夜天の書子の罪を償つて、そ

して何より、私と同じような思いをするような人がいないように」

「はやてちゃん……」

「なーんて、たは、ちよつとしんみりしてもうたな！ まあ、とにかく！ 二人も私が管理局のトップまで登りつめていく覇道を応援してくれると嬉しいで！」

「はやてちゃんならきつとできるよ」

「おーきに」

なのはがぐつと拳を握つて断言するとはやてが照れたように感謝の言葉を述べる。フエイトは二人をぼんやり見ていたが、突如はつとして自分もなのはに続いてはやてを激励する。

「うん！ 私もはやてならできると思う！」

「またまた、フエイトちゃんも私をおだてて」

「だつてはやてはフクゲイが上手いもん！ きつと他の人を蹴落として這い上がっているよ」

「あはは、おーきに……つて、ん？」

「？」

「フエイトちゃんそれ褒めとる？」

「え、褒めてるよ？」

「フエイトちゃん……」

すつと真顔に戻るはやてと「何が悪かったんだろう」と不思議そうに首をかしげるフエイト。そんな親友の姿になのはは名前を呼ぶことしかできない。

生粋の日本人のなのははやてと違い、ミッドチルダの人間であるフエイトは、多少国語が苦手（控えめな表現）だった。

「ま、まあみんなそれぞれ頑張ろうな！」

「雑！ はやてちゃん話題の切り上げ方が雑！」

「ねえねえ、はやては腹黒そうだからいけるよ、とかの方が良かったのかな？」

「フエイトちゃんって悪気がない分怒りにくいよね……」

「なのはちゃんようやくわかってくれたんやね……」

「え？ え？ 私なんかダメなこと言っちゃった？」

結論、フエイトはいつも通りフエイトだった。



毛布を被つて部屋の隅で膝を抱える。

「クイント・ナカジマ。セルジオ・アウデイの姉のような存在。大切な人。格闘技の師匠。ゼストさんの部下。髪の色は青。娘が二人。夫はゲンヤ。大丈夫忘れてない」

虚空の一点を見つめながら手に握ったナイフで自身の手首を切りながら、ぶつぶつと何事かを呟く。

「メガーヌ・アルピーノ。セルジオ・アウデイの姉のような人。大切な人。ゼストさんの部下。魔法と事務仕事を教えてくれた。娘はルーテシア。髪は紫。召喚魔法を使う。大丈夫忘れてない」

刃に切り裂かれた肌が血を流す暇もなく泡立つように治り、そしてその上からさらに傷が刻まれる。

「クロノ・ハラオウン。親友。はじめての友達。負けたくないやつ。髪の色は黒。パインドが上手い。執務官。一つ年下。大丈夫忘れてない」

暗闇の中、刹那の隙間で瞳が赤と翠が明滅する。

「ティータ・ランスター。年上。後輩。友人。妹が一人。航空魔導隊。髪の色は焦げ茶。デバイスは狙撃銃。ええと……風呂を覗いたんだっけ」

ぼうつとしばらく考え込むと、舌を軽く噛んで記憶を覚醒させる。つつ、と唇の端から一筋の赤色が滴る。

「ちがう、ヴァイスと、混ざってる。ティードの髪は橙。デバイスはハンドガンだ。忘れるな、間違えるな、俺はまだ大丈夫だ」

震える手で懐から薬を取り出すとそばに置いていたペットボトルの水と一緒に流し込んだ。

「まだ、大丈夫。おれは、おれだ……」

不意にカーテンの隙間から朝日が差して部屋の中を仄かに照らす。

以前ある少女はこの部屋を『がらんど』と表したことがあったが、今の状況を見てその感想を抱くことはないだろう。

最低限の金額しかかけなかったとわかる粗末なベッドは切り裂かれて綿がこぼれ出している。

水と携帯食料や缶詰の入っていた小さな冷蔵庫は扉がもぎ取られもう動きを止めて長いことが見て取れた。

申し訳程度の参考書などの本も引きちぎられ、破り捨てられ散らばり、もうどんなに手を施しても本来の用途では使えそうない。

まるで竜巻が部屋を襲ったかのような見るも無残なそんな部屋。

差した光が部屋の隅の人物の淡い金髪を照らして透かした。

「あさ、か……」

のそり、とその人物が立ち上がると、夢遊病者のような頼りない足取りで洗面所へと向かうとばしやばしやと顔を洗う。

そのついでに腕にこびりついて固化した血を洗い流していく。

いつもの朝、ここ最近続けている日課だった。

「……酷い顔だな」

鏡に映った自分の姿に青年が弱々しく笑った。

目の下に刻まれた深い隈。肌はいつもに増して青白く、病人のように生気がない。

彼が最後に心置き無く寝たのは一体いつなのだろうか。

いくらかはつきりした頭でそこいらに転がしてある携帯食料を手を取った。包装紙

には深い紫の文字で商品名が刻まれており、その隣には葡萄のイラストが載っている。

特にそこに何かを思うことなく手早く包装を剥がして、一口かじって、そのまま食べ

進める。

味がしない。まるで泥を食べているようだった。

「……ちゃんと、上手く笑えてるかな、俺」

毎日毎日鏡を見て笑顔を練習する。記憶の『あの人』と同じ笑顔ができてるか、理想

と離れていないかどうか。

不意に携帯端末が甲高い音を立てた。ポケットから取り出して表示された名前を見る、

「……………クロノ」

さつき確認した名前。忘れていない。

ぱしん、と一度顔を叩いて、心の在り方を切り替える。

「俺は、セルジオ・アウデイだ」

大丈夫。ちゃんと変わった。

「おう、どうしたクロノ、こんな朝早く」

『セルジオ、起きててくれて助かったよ』

「ん？ なんだよ、そんな暗いトーンで。あ、まさかりミエツタに…………」

『セルジオ、聞いてくれ』

「……………どうした、何があった」

しばらくクロノが黙り込む。

「クロノ、話せ。俺に隠し事をするな、俺たちは友人だろうが」

『……………これは、僕もさつき聞いたことで、正直、俄かに信じがたいことなんだ。でも、それでも、これは、夢なんかじゃない』

どくん、と胸が大きく脈打った。

『ティードが、死んだ』

想いのバトン

夜闇の中、デバイスを片手にしたティーダが部隊長からの指定されたポイントに向かう。

彼の任務はこのポイントで行われるはずの『ドクター』と質量兵器のブローカーの取引を抑える事。

しかし、今回彼らが掴んだ取引の予測ポイントはクラナガン各地にあり、ティーダが配置されたのはその中でも使われる確率が低いところだった。

(まあだからといって気を抜ける訳じゃないんだけどさ)

くると手の中でハンドガンを軽く回してオプティックハイドを発動、背景と同化するテスクチャを貼り付ける。

そして足音を殺しながら指定ポイントである裏路地に足を進めて、一人の影を見た。

「——っ」

思わず息を呑んだ。それはそこに本当に人がいたからや、自分が手柄を立てられると思っただけではない。

闇の中に光なくとも輝く銀髪、ガラス細工のような作り物めいた無機質な光を宿す青い瞳。

ただ、そこにいる少女は、ひたすらに言葉を失うほどに美しかった。

「やはり来たか」

鈴が鳴るような声。ガラス細工の瞳は見えていないはずのティーダをしつかりと見据えている。

(……噂に聞いてた戦闘機人)

ティーダが幻影魔法を解除し、銃口を銀色の少女へと向ける。

「管理局首都防衛隊のティーダ・ランスター三尉だ。抵抗をやめて投降しろ。悪いようにはしない」

「それは信じる道理はない。そも、私はお前を殺すためにここにいる」

「なに……?」

ティーダが眉を寄せた瞬間、長い髪をはためかせながら少女が跳んだ。

そして月光に煌めく一刃をティーダに向けて放ち、一言言葉を紡いだ。

「I S 《ランブルデトネイター》」



ティーダの前夜式いわゆる通夜。はクラナガンの聖王教会の一つで肅々と行われた。

もともとランスター兄妹に親族は少なかつたらしく今回の前夜式から葬儀までの手配は、生前の彼の友人が引き受けた。

前夜式には彼の友人数名と同僚が来るだけの楚々としたものであり、説教、献花までが恙無く終わり、軽い茶話会が聖王教会の一室で開かれることになった。

セルジオが一番最後に部屋にやってくると既に食事や飲み物を用意し終えて、席についていたヴァイス達が手招きしていた。

全員黒一色の喪服である。制服と最低限の私服しか持たないセルジオも今日のために急いでスーツを仕立てた。

セルジオが呼ばれるままに二人の元へ向かうと、ネクタイを軽く緩めて上着を脱いだヴァイスと、きつちりとした黒服のクロノが迎えてくれる。

ふつとセルジオが疲れたように笑んだ。

「……クロノ、お前死ぬほど喪服似合わねえな」

「ヴァイス程じゃない」

「ってなんで俺に振るんすかね。てか、セルジオ先輩の前じやみんな霞みますって」
「む？」

「普段のバリアジャケットが白いから見慣れないが……セルジオは喪服が似合い過ぎて怖いくらいだ」

クロノとヴァイスの髪色は黒と茶でミッドチルダの中では比較のおとなしい部類になる。普通は黒いスーツはこちら二人に似合うのだろう。

けれどセルジオは淡い金髪に翠の瞳という比較的明るい容姿をしているにも関わらず、他の二人よりも圧倒的に喪服が似合っていた。

二人とも無意識下でなんとなくセルジオに『死』に近い雰囲気を感じ取っていた。

「なんか嫁に先立たれた独り身の男の匂いがしますよ、先輩は」

「冗談やめろよ、覗き魔」

「困ったらそれっ引っ張り出して黙らせようとするのやめません」

「……すまん」

「ちよつと、謝らないでくださいよ。いつもみたいに、きてくれなきや困ります」

表面上はいつもの会話。けれどこの三人で集まっているからこそわかることがある。

彼らはずいぶん長い間四人でつるんできた。だから、自然と会話するときにはあと一

人の合いの手を待ってしまふ。

彼の飄々としながらも的確に芯をついてくるような指摘があるものと、つい思ってしまう。

三人の視線がぽっかりと空いた一席に集まる。そこはいつもなら爽やかな好青年が座っているところで。

「ティードさんの……ってまだ見つかってないんですけどっけ」

「……らしいな」

何が、とは誰も尋ねない。そんなの聞かなくなつてわかつていた。そして、その単語を出して彼のそれを認めるような真似がまだ出来ないことも。

「なんで行方不明じゃないんですかね。見つからないならまだ生きてる可能性だってあるじゃないっすか」

「……いやたぶん、その可能性は低いだろう」

「どうしてっすか」

「見つかってんだよ、あいつのデバイスが。破壊状態で」

「でも……!」

セルジオが空中に投影した一枚の写真をヴァイスの端末へと送る。

「——っ、これ、は……」

「最後にあいつが向かったと思わしき場所のだ。ツテで手に入れた」

薄暗い廃工場の一角は、まるで質量兵器である爆弾を無数に爆発させかのようにコンクリートがめくれ上がっており、付近には赤いものがべつとりと付着している。

「爆発で粉微塵に吹き飛んだ。逃げのびていたとしてもこんだけの出血だ。たぶん助かってない。それが上の下した結論だ。そして………俺もそう思う」

「アンタティーダさんのことが……」

「じゃあいつまでもありませんし幻想に浸ってろって言うのか？ 現実を否定して目を逸らしてその先に何があるんだ」

「そんな言い方っ！」

ヴァイスが勢いよく立ち上がるとセルジオの胸ぐらを掴もうと手を伸ばした。瞳は怒りに燃え、温度を感じさせないトーンで話すセルジオを睨め付ける。

そして、セルジオのスーツの襟元に手が届く寸前、ぱきん、と小さな音を立てて現れた青白いリングに絡め取られた。

「ヴァイス、セルジオ、いい加減にしろよ。そういう言い争いをする為に集まったわけじゃないだろう」

「……………悪い」

「……………すみません」

静かに宥めたのはクロノ。二人も深呼吸の後どちらからともなく頭を下げた。
「俺、今回のこと人ごに思えないんですよ」

ぼつり、とヴァイスが呟いた。

「ティードさん妹いたじゃないですか、話に聞いているだけでもめちやくちや仲良い兄妹だつての伝わってきて……………それなのに、それなのに兄が妹遺して逝くつて、あんまりじゃないですか」

「ヴァイス」

「わかっているんです、どうしようもなかったつて！俺じゃあ何にも出来なかったつて！」

でも、とヴァイスが拳を膝に打ち付けて顔を歪めた。

「だからつて、認められるわけ、ない……………」

二人は傍目から見ても妹を愛していることがわかった。きつとクロノもセルジオも知らない彼らだけが交わした話があつたのだろう。酒を飲み交わして、妹のこんな未来が楽しみだと語つた思い出があつたはずだ。

「畜生、畜生……………」

ヴァイスの握つた拳に透明な雫が落ちて弾ける。

クロノもセルジオも何も言わない。言えない。

「クロノは、ティードアの妹がどうなるか知ってるか？」

「さあな、僕も部外者だ。そこを根掘り葉掘りは聞けないさ」

「……たぶん、普通に考えて親戚に引き取られるんだろうな。まだ働ける歳じゃない。たぶん、ティードアだってそれを望んでいる」

「そう、だな」

ティアナはティードアの死を伝えられてから二人が知る前では一度も泣かなかった。常に気丈に、そして凜として兄を見送っていた。

「ほんとうに、すっかりした子だ」

そう話していた時、ふと彼らの視界に一人の人物が茶話会にやってきたのが映った。

「セルジオ先輩あれ……」

「首都防衛隊の、部隊長だな」

つまるところティードアの上司、いや元上司という表現が正しいか。

セルジオの視線に気づいたのか三課の部隊長も、不意にセルジオに目を向けて、すつと細めた。

「そうか、ランスターは貴様の友人だったな、アウディ」

「お久しぶりです、三佐」

憎々しげに吐き捨てた三佐にセルジオは敬礼で応える。

「相変わらず活躍してみたいじゃないか、え？　最近は前線じゃなくて指揮官での動きが多いみたいだが」

「お陰様で」

その物言いにヴァイスが一言物申さんと立ち上がりかけるのをセルジオが手で制した。

「三佐、お褒め頂けるのは光栄です。しかし今日はランスター一尉のための集まりです。私の話はいいでしょう」

「ふん、一尉ではない、奴は三尉だ。階級も知らないほど浅い付き合いだったのか、アウデイ」

「二階級特進です。彼は今、一尉扱いのはずです」

「馬鹿を言うな、何故殉職した愚か者を特進させる必要がある。私は奴に死ねと命じた覚えはない」

「——ッ、訂正、してください。ティーダ・ランスターは、優秀な男でした」
「断る。死にたがりの英雄気取りの無能にかけ言葉に間違いはなかるうよ」

その言葉にヴァイスが目を怒らせて三佐を睨み勢いよく立ち上がる。

「聞いてりゃオツサン好き勝手言うじゃねえか！」

「ヴァイスやめろ！　こんなことティーダは望んでいない！」

「離してくださいクロノ先輩！ こいつ、ティーダさんのことを……！」

クロノがヴァイスを抑えてその場に押しとどめようとする。だが、クロノは分かっていたいなかった、今誰を一番押さえておくべきかを。

「セルジオお前もヴァイスを——」

悲鳴が上がった。

「訂正、しろ……！」

「きさ、まア、アウデイツ……！」

クロノが目を向けると、そこには三佐の胸倉を掴んで壁際に叩きつけているセルジオの姿があった。

「人の為に戦ったティーダが、無能、愚か者、だと……？ 訂正しろッ！ 今すぐッ！」

「断る！ 貴様のような、貴様やグランガイツのような『死にたがり』に感化された愚か者を愚か者と言って何が悪い！」

「俺の悪口はいい！ 何と言っても構うものかッ！ でも、でも、殉職した、もう何も言えないティーダを貶める真似だけは看過できるはずがない！」

「そうだ、貴様は、貴様らはいつもそうだ！ 『死』を美しいものだと履き違えている！」

零距离から三佐とセルジオが睨み合う。セルジオの瞳が、赤く光り始める。

「人は生きるべきなのだ！ 任務の途中で死ぬことに何の意味がある！ 生きて次に繋

げることが『組織』としての正しいあり方だろうが！」

「人を救う事が間違いなはずがない！　そうやって誰かの犠牲の上に救われた命まで否定するのか！」

「粹がるなよ若造がッ！　奴が死んで救われた命がいくつあると思う?!　奴が、ランスタアが生きていればこれから何十倍もの人間を救えたというのに！　それを考えれば道半ばで死んだ奴を『無能』と言うのに何の問題があるのかッ！」

「ティーダ・ランスタアは優秀な男だった！　人の為に戦える立派な局員だったんだ！　俺なんかより、何倍も生きる価値のある人間だったんだ！」

「また、また貴様はそれだ……！」

「落ち着け、セルジオ！　三佐も落ち着いてください！」

そこで駆けつけたクロノによってセルジオが引き剥がされる。

三佐は解放された喉元を抑えて咳き込みながらもいまだに食ってかかろうとしているセルジオを睨んだ。

「セルジオ・アウデイ！　貴様は以前俺に『人を救うのを諦めない』とほざいたな！」

赤い目のセルジオが荒い息で三佐を睨み返す中、三佐はまた忌々しげに言い放った。

「そんな英雄気取りの死にたがりは一番大事な時に何も選べない！　そして大切なものを選べず結局全て失うのだ！」

あたりがしん、と静まり返り二人の荒い息だけが空間を支配する中、三佐が軽く制服を払ってその場を立ち去っていく。

「それが嫌だというなら、せいぜい足掻いてみせろ、セルジオ・アウデイ」

その背中がすっかり見えなくなってしまうってから、クロノはようやくセルジオの拘束を解いた。

「セルジオ」

「悪い、少し頭冷やしてくる」

ネクタイを緩めるとセルジオがその場を立ち去っていくのを見送りながら、クロノがポツリと呟いた。

「あいつ、あんな風に怒鳴るような奴だったか？」

クロノの脳裏に真っ赤に染まった瞳がこびりついて離れようとしなかった。

セルジオが一人、聖王教会の中を歩きながら、深い深呼吸を一つ。そしてマルチタスの管理から漏れ出してきた破壊衝動を丁寧、丁寧に、蓋をして閉じ込めていく。

思考の落ち着きに従って、目が翠から赤へと点滅するように変わり、そして何時もの色に戻ってきた。

「……………ティータ」

セルジオがやって来たのは礼拝堂、ティーダの棺桶のある場所だった。もともと、彼の遺体はそこにはない。けれど、今彼を一番近くに感じられるのはそこ以外になかった。

足を一步踏み込んで、空っぽの棺桶の前で静かに、声もなく肩を震わせる少女の姿を見た。

兄譲りの髪の色の小さな、小さな少女。

たった一人の家族を失った子どもが行く場所なんて、セルジオが知らないはずがなかった。

覚えがある。自分だって呆然とそこに何時間もいたのだから。

その小さな背中にいつかの自分を幻視して胸が軋む。

「にい、さん……」

どもりながらティーダを呼ぶ声。そんな彼女の名前を呼ぼうとして、思考が纏まらず名前が思い出せない。

記憶の中の本棚が散らかって抜き出したい情報が上手く抜き出せず、赤い衝動だけが暴れ始める。

「——ッ」

それでも、セルジオはなんとか踏み止まって目の前の小さな少女の事を思い出した。

「ティアナちゃん」

セルジオが名前を呼ぶと、はっとティアナが顔を上げてぐしぐしと目を擦った。

「兄さんのお友達のこと……」

「セルジオだ」

「……あなたが、あの『セルジオ』さんなんですわね」

「何かティーダから聞いていたのか？」

「ちよつとだけですけど」

隣いいかな、いいですよ、と短く言葉を交わして、拳二つ分空けてセルジオとティアナが並んだ。

「……いつも兄さんは、セルジオさんたちの話をしてました。自分には勿体無い友人達なんだって」

「あいつらしいな、無駄に自分を卑下したがる」

「兄さんは、自分の事を、凡庸な人間だと思っていましたから」

力なくティアナが笑って、すぐにまた俯いてしまう。

「ずっと兄さんが側にいてくれると思ってました」

ぼつり、と呟くティアナ。

「仕事から帰ってきた兄さんに『お帰り』って言って、晩御飯を『美味しいよ、ティア』つ

て言つて食べてもらえて、そして、休日には兄さんが魔法の使い方を教えてくれるんです。

「そんな、そんな『当たり前』がずっと、ずっと……………」

「……………わかるよ」

「気やすめ、言わないでください」

「違うよ。俺も、亡くしたことがあるから。たった一人の、家族」

ティアナがはつと顔を上げるとそこには困つたように頭をかくセルジオの姿がある。

「昔、尊敬する人に言われたことがあるんだ」

「そんけいするひと、ですか」

「『人は運が悪くて死ぬんだ』って。たぶん、それはある意味真理なんだ。間違えてない。

きつと、運悪く死ぬ人はいっぱいいる」

「……………」

でもさ、とセルジオが緩い笑みを浮かべて、ティアナの頭を撫でた。

「そういうのじゃ片付けちゃダメなんだ。そんな理由で人が死ぬなんて、俺は認められ

ない」

「セルジオさん……………」

「だから俺は今管理局で戦つてる。『運が悪くて』人が死ぬなんて、絶対に認められない

から」

ティアナが頭を撫でられながら、潤んだ瞳で翠の瞳の青年を見上げた。

「セルジオさん、ひとつ、教えてください」

「ん？」

「兄さんは、『無能』な人でしたか」

それはさつき三佐との言い争いの中で出た言葉だった。それは憧れの兄を失った少女にはどのように聞こえたのだろうか。

セルジオが静かに、けれどはつきりとした口調でティアナに言い切った。

「あり得ない。誰が何と言おうと、ティエーダ・ランスターは『優秀』な男だった。あいつなら、エースにだってなれていた」

「あり、がとう、ごさいます……」

ティアナから静かな嗚咽が漏れ始め、セルジオは目の前の少女を躊躇いがちに抱き寄せた。

ティエーダを救えなかった自分にその資格があるかは分からなかったが、少なくとも今は、そうするのが正しいような気がしていた。

しばらくしてセルジオはティアナと別れ、なんとなく聖王教会の外に出た。

夜の冷たい風を受け、薄ぼんやりと浮かぶ二つの月に照らされながら、母親の形見の懐中時計を手の中で弄ぶ。

カバー部分がひび割れて、フレームは熱で曲がってはいるがそれでもまだ時計としての機能は果たしている。

「死にたがり、か……」

心に深く刻まれた言葉。ほかの事は反論できても、それだけはセルジオは否定できなかった。

母親を失った日から自分は死に場所を探している。

多くの人を救い、母の代わりに成し得た時、それが代わりに生き残った自分が死ぬ時だと思う。

もとより紛い物。セルジオ・アウデイの人生はセピア・アウデイの代わり以外の何物でもない。

「……俺が、お前を殺したのか、ティーダ」

自分の行動が、人を救うという想いが、行動がティーダに影響を与えていなかったと言いつけるだろうか。

それで感化されたティードが、死地に赴くようなことをしたのだろうか。考えても仕方がない。けれど、考えずにはいられない。

「……………こんな時になんだよ」

不意にデータベースに連絡が入った。手首のゼファーではなく胸ポケットの中の『S2 U・カスタム』。ティードが作ってくれたものだった。

そのまま彼のことを思い出しそうになるのをなんとか押し込めて、通信を繋いだ。

「こちらアウディ、何か用——」

『セルジオか？ 俺だ、ティードだ』

「……………は？」



三課の部隊長の執務室でゼストは窓の外を見つめる。
今頃セルジオは友人の前夜式を終えて茶話会をやっている頃だろう。

「……友人が、か」

ゼストも入局してもうすぐ四十年だ。そうともなれば殉職した友人の数は片手では数え切れないほどいる。

セピアもその一人であるし、共に同じ釜の飯を食った男を失ったことも、大切な部下を失ったことも、可愛がつてくれた先輩を失ったこともある。

そういう別れを何度も管理局の武装隊という職業である以上、セルジオもこういった事がこの先あるはずだ。

ゼストが飲んでいた珈琲を机の上に置くと、名も知らぬセルジオの友人のために目を閉じて黙祷をする。

暫し執務室を静寂が支配して、突如、開け放たれた扉によってその沈黙は破られた。

弾かれるようにデバイスに手を添えたゼストが振り返ると、そこには汗を垂らしながら荒い息でこちらを見ている義息の姿が。

「セ、セルジオ……おい、お前今日は友人の……」

「生きてたんです！ ティーダが！ それで俺に連絡を！ しかもその時にとんでもないものまで俺にくれて！」

「待てセルジオ、落ち着け、一度会話の内容を整理しろ」

「あ、その、すみません」

セルジオは深呼吸を一つして表情を引き締める。

「さっき俺のデバイスを死んだはずの『ティータ・ランスター』から連絡がありました」
「なに……」

ティータ・ランスターはセルジオに言った。

自分は確かに接敵し敗北し、通信手段であるデバイスを失った。

けれどその直後隠蔽魔法を発動、自身を撃破した戦闘機人を追跡する事で、本拠地となる研究所を見つけたのだ、と。

デバイスを失っているため本部に連絡はできない。けれど研究所から一つの端末を盗み、なんとか管理者権限でアクセスできるS2U・カスタムには連絡が入れられたらしい。

そして、ティータはセルジオに研究所の位置のデータを送ったのち、今回の事件の予想を語ってくれた。

「ティータの予想では今回の件は、管理局の『裏切り者』が関与している、という話です」
「裏切り者、だと……?」

はい、とセルジオが頷いた。

「ティードが指定のポイントに向かうと銀髪の戦闘機人は『やはり来たか』と、言ったのだそうです」

「つまりランスターがそこに来るのを知っていた、ということか」

「基本的に管理局の回線は秘匿回線です。基本的にパスワードは常に変更され続けており、それを破るのは不可能と言っていていいでしょう」

「つまりランスターが来るのを知り得たの管理局内部の人間だけ。それで、裏切り者、か」

「前から違和感がありました。管理局が運行しているリニアのジャック。何故か漏れた三課のデータ。そして今回のティードの一件、それもすべて管理局内部に内通者がいるのだとしたら……」

「……………すべて繋がる、か」

ゼストがむう、と深く唸る。

「他にランスターは何を言っていた？」

「いえ、そこまで話したところで突然通信が切れて、それ以降は連絡が取れなくなりました」

ですが、とセルジオが言葉をつなげる。

「切れる直前、ティード以外の声が聞こえました。一応、ゼファーで解析にかけましたが間違いありません」

セルジオの表情が険しく変わり、暫く黙り込んだ後、重々しく口を開いた。

「あの声は、『戦闘機人』トーレのものでした」

それを聞いてゼストは目を見開くと、額を抑える。

「ゼストさん」

セルジオが今何を言わんとしているか、ゼストにはよくわかっていた。

曲がりなりにも彼はセルジオの父親で、こういう時何をしようとするかよくわかっていた。

「セルジオ、わかっているのか、お前がやろうとしていることは独断専行と命令無視、それにもつと言えば法律すら犯す可能性がある」

「わかっています」

「いくら戦闘機人の声が出たとしてそれが聞き間違いの可能性もある。お前の友人だってまだ生きているかはわからん」

「わかっています」

「……………本当にやるのか?」

「はい、俺は——」

ゼストが顔を上げる。そこには翠の瞳の中に決意を宿らせ、ゼストを見据える青年の姿があった。

「ティードを救つて、ドクターを逮捕し、『戦闘機人』の一件に終止符を打ちます。俺一人でも、やります」

永遠に思えるほどの刹那、二人は言葉なく見つめ合い、果たして視線を外したのはゼストの方が先であった。

ゼストがふつと気障に笑うと「わかった」と漏らした。

「三課全員に声を掛け希望者を募る。そしてメンバーが集まり次第、ランスターから提供された研究所に突入する。責任は、全て俺が取る」

「ゼストさん、それは……」

「もともと転属されかかってたんだ。お前が教導隊から帰ってくるまでは部隊長でいれそうにないが……まあ仕方ないだろう」

ゼストは椅子から立ち上がるとセルジオの胸に軽く拳を打ち付けて、優しい笑みを浮かべた。

「好きにやれ、今回はお前が三課のリーダーだ」

それはゼストからセルジオへのバトンタッチ。後は任せたぞ、という、言葉でなく想いで伝える行為。

セルジオ・アウデイを一人前だと認めた証拠だった。

そしてセルジオは万感の想いで細く息を吐いて、力強く両目を見開いた。
「はい。今度は必ず、助けます」

そうして、止まっていた歯車はまた廻り始めた。

星は見えない

翌日、セルジオは三課のオフィスに一人でいた。

時刻は定時を終えて、数時間。いつもはミッドを遍く照らす二つの月が輝いている時間だが、厚い雲によって街は暗い闇に閉ざされていた。

今回の一件、どこに内通者がいるかわからない以上セルジオが三課の面々に伝えたのは短い言葉。

戦闘機人事件が終わっていないこと。

もう一度関わるチャンスが現れたこと。

しかしそれは任務などではないこと。

そして以前と同じように死ぬ可能性もあること。

その場で三課の面々は直ぐに快諾してくれた。

暗い中でオフィスセルジオがゆっくりと目を開いた。

「……………ふう」

懐の懐中時計で時間を確認する。示された時間は取り決めがあったよりも、一時間早い時間。

オフィスには自分以外に気配はなく、その事にセルジオは密かに安堵の息を漏らした。

今回の件、自分一人が行くべきだ。

ゼストはああ言ってくれたが、それでも下手したら死ぬかもしれない任務だ。帰る人たちがいる仲間までは巻き込めない。

「セットアップ、ゼファー」

一瞬だけ目が紅く光ってセルジオの姿が陸の制服から、いつもの白いバリアジャケットへと変わった。

「薬はのこりはこれだけか……」

手の中には教授から渡されていた数ヶ月分の鎮静剤。これを飲み、マルチタスクを活用することでセルジオは破壊衝動の抑制を行なっている。

そしてセルジオはいくつかの錠剤を解析にかけて、効果がちゃんと増加し、尚且つ人体にギリギリ有害になるレベルを見極めて、十数個の薬を水とともに流し込んだ。

嘔吐感や虫が体を這い回り回るような嫌悪感を鎮静剤のお陰でいくらか負担が減っ

たマルチタスクに処理させ、最後に深い深呼吸と共に頬を叩く。

「よし、行くか」

そしてセルジオが三課の扉に手をかける。

「どこ行くのよ、私たちを置いて」

背中に、声がかかった。

弾かれるように振り返れば、先ほどまではいなかったはずのそこに、たしかに見知った『彼女』がいた。

「クイントさんどうして」

「それは私たちのセリフ。ね、メガーヌ？」

「まったくよ、変な気回しちゃって」

「メ、メガーヌさん？」

「ま、私にとつてはこの一件が最後の前線での仕事かしら？」

突然横合いからメガーヌが現れたかと思うと、とん、と軽くセルジオの肩を叩いた。

「どうして、集合時間はまだ一時間以上……」

「あはは、まあ答え合わせは後でね？」

ドン、とクイントが少し強めにセルジオの肩を叩くと、メガーヌが軽く指を鳴らした。すると薄暗かったオフィスに明りが灯り、扉が開いた。

「よーう、セルジオ、ワシ達を置いていくなんて水臭いぞ」

「まったく。いいとこ取りしようたってそうはいかないよ」

酒を飲ませようといつも戯れてきた先輩二人がオフィスに入ってくると、ドン、ドン、と二発続けて強めのパンチを肩に飛ばしてくる。

「なんというか、君は根本的などころで一人でやりたがりだもんねえ」

「というか、一人で何ができるつもりだったんだい？ オペレーターくらい呼んでくれたまえよ」

以前デートの時楽しそうにアドバイスをくれた女性オペレーターと、メガヌの夫が入ってきて、それぞれ軽く肩を叩いた。

「お、やーっぱ言われた通りだったな」

「付き合いの長さじゃ負けてないけど……理解度だったら俺らボロ負けだなー」

「いいとこ取りはナシだぜー？」

「ふつ、近々お前いなくなんだろ？ ならここで手柄立てといて、分隊長の座を貰つとかなきやな……」

「いやいや、今回の件任務じゃないから昇進ないと思うわよ」

「ん、じゃあ昇進のためにはここに来なきや良かった？」

「どいいつつ、どつちにしろお前は空気を読んでここにきただろ？」

「ガハハ、違いねえわ」

その後、三課のメンバー全員がオフィスに入ってきたながら、思い思いの力でセルジオの肩を叩いていく。

「みんな、どうして……」

セルジオが呆然としたように呟くと、不意に肩が大きな手で叩かれるのを感じた。

「まさか俺も置いていこうとするとはな」

「ゼスト、さん……」

「お前の相棒がいなければ、置いていかれるところだった」

ふっとゼストがニヒルに笑ってオフィスの中に入ると、自然、そこで待っていた最後の一人がセルジオの目の前に現れた。

「……………お前が原因か、なのは」

水晶の瞳、以前より伸びた亜麻色の髪は大人っぽいサイドポニー。

きつと彼がこの中で一番信頼している人物。

高町なのは。

「どうしてわかった」

「うーん、確信があったわけじゃないし、こう根拠を示せて言われても難しいけど、強いて言うなら……」

なのはの表情が柔らかく綻ぶ。

「セルジオくんがそう言う顔してたから」

その言葉を受けてセルジオが顔を覆って膝を抱えるてしやがみこんだ。

そして困ったように頭をかいてなのはを見上げて困ったように一言。

「ほんと、お前には勝てねえよ」

「ふふ、光栄です」

セルジオが表情を引き締めて立ち上がると、背後にいる三課の面々の方へと振り返る。その隣に慌てたように部屋に入ってきたなのはが並んだ。

「みなさん、来てくれてくれてありがとうございます。正直、ちよつとこの状況は予想外です」

そりやあな、と三課の面々が頷く。

「今回の件は半ば俺の我儘みたいなものです。以前手が届かなかった事件に手が届きそうになつてる。救えないと思つたものが救えるチャンスが目の前にある。俺はそれを諦めたくない」

クイントを見た。軽い目配せで答えられた。

「安全じゃありません。何も得られないかもしれないかもしれません。それでも、俺はこれを『やるべき事』だと思えます」

メガーヌを見た。小さく頷き返された。

「今回俺は誰も死なせるつもりはありません。全員で帰ってこれなければなんの意味もありません」

ゼストを見た。深く頷かれた。

「守りましょう、笑顔を。」

救いましょう、大切なものを。

止めましょう、悲しみを。

俺たちはその為に戦ってきたんだから」

なのはを見た。いつもの見惚れるような笑顔がそこにあつた。

「——戦いましょう、俺たちの手で、あした未来を掴む為に」



その日は、星が見えなかった。

「白光一刃ッ！」

斬、と振り下ろした槍が目の前のガジェットを真つ二つに斬り捨てた。

「ブリッツアクション！」

白光に包まれたセルジオの体がブレると、自分に刃を振るおうとしていたガジェット達の背後に回り込み、横薙ぎの一撃を叩き込む。

一拍おいて槍を受けたガジェットたちが煙を上げて爆発し、黒煙を立ち上らせた。

次の獲物を探してセルジオが周囲に目を向けると、既に戦闘は終了しており、三課の面々がデバイス片手に一息ついているところだった。

「セルジオ君突出しすぎ！ 少し落ち着きなさい！」

「え、あ、すみません……」

メガーヌから叱咤が飛んでハッと正気に戻る。

荒い息でセルジオは小刻みに震える自分の手を見つめて、何かを確かめるようにぎゅつと握りしめた。

戦闘は久しぶりだ。最近ではECの影響を恐れて後方支援や指揮が増えていたせいかな、少し荒っぽくなってるのかもしれない。

「セルジオ、次のルートはどっちだ」

「次は……左ですね。構造的にそちらに下に繋がる階段があるはずです」
「わかった。オペレーターにマッピングを頼もう」

今回の突入にはオペレーターも同行している。通常ならば三課の本部で通信による援護してくれるのだが、AMFの影響が予想されるため現場でサポートする事を提案してくれた。

そのお陰で、セルジオの広範囲解析による索敵とオペレーターたちのマッピングによつて三課は素早く研究所を突破していた。

ガジェットとの交戦は今までに三度。どれもAMF発生装置の付いたものであったものの、そうとわかっていれば三課の魔導師たちが負ける道理はない。

セルジオが足元の壊れたガジェットに目を落とす。

（出てくるのはガジェットばかり、か）

先程から彼らを襲うのはガジェットドローンばかりで、その他『ドクター』はおろか『戦闘機人』の影さえ見えない。

（誘い込まれてる、いや、ただ俺たちに対応できてないだけか）

今回の突入は三課の中で極秘裏に進められた。具体的な話は全て念話で進めだし、盗聴器などの危険も考えてジャマーも流していた。変装などの危険性も考えて一人一人に魔力調査による識別認証もやった。

バレルる要素の一つもない完全な奇襲だ。

「……セルジオくん？」

「——え、ああ、悪い、解析だな、すぐにする」

不意になのはに名前を呼ばれて目の前に分かれ道が現れているのに気づく。つい思索にふけつて索敵を怠ってしまった。

嗚呼ほんとうに最近の自分は気が抜けている。

(あれ、この反応はもしかして……)

そう、ぼんやりと思いつながら足を進め壁に手をついた瞬間、なのはとセルジオの間に、通路を塞ぐように壁が出現した。

「な、んだ、これ……？」

「——?! ——!」

「声が聞こえない。遮蔽されてるのか」

なのはが半透明の壁を叩くが、魔力か、はたまたセルジオたちの未知の技術により出現した壁はビクともしない。

せいぜい聞こえるのはくぐもった音くらいで会話ができるほどではない。

「ならっ!」

セルジオが槍に魔力を纏わせて全力で振るい——壁に当たった瞬間、魔力の構築

ごと粉々に砕かれた。

「おい、これまさか、フォーミュラシステムの応用か……?」

フォーミュラといえば管理局では半ばロストログリア扱いにされて封印された代物だ。もちろんなのはレイジングハートからも取り外された。

そんなものが、何故こんなところに。

『セルジオくん！ 聞こえる?!』

「なのは、そうか念話で……」

『今からこの壁にデイバインバスターをぶつけるから少し離れて!』

「いやたぶんお前の砲撃でも無理だ。側にゼストさんはいるか、少し話がしたい」

『……どうするつもりだ』

「たぶんこの壁は破れません。俺は一人でこの先に行きます。ゼストさんたちはそのまま通路を進んでください」

『危険すぎる。転移でこちらに戻ってこれないか、もしくは通路の壁をぶち抜いてこちらに繋げることは?』

「俺の短距離転移は目視が前提ですし長距離転移の応用も、正直このAMF下じゃ不安です。通路の件ですが……」

セルジオが壁に手を触れて解析魔法を使おうとするが、電気に弾かれたように魔法が

奥まで潜っていかない。

「たぶん高町の砲撃でもこの壁を抜くのには十分以上かかります。そんな事してたら相手は逃亡を企てるかもしれません」

『……………』

「それにさつき解析をかけた時、この先にティードアの反応がありました。あいつは、この先にいる」

『わかつているのか、セルジオ、これはどう考えても』

「畏ですよ。分かっています。それでも俺は諦められないし、前に進むしかありません」
しばらくの間ゼストからの通信はなかった。だが、深い溜息と共に、「わかった」という念話がセルジオへと伝わった。

「助かります。下でまた落ち合いますよう」

そしてセルジオが念話を切って前へと進もうとする。

『セルジオくん！』

「なのは？」

『あの、言いたいことが、あつて……………』

それをなのはの念話が引き止めた。セルジオの足が止まり、硬質な壁へと、なのはのいる方へと目を向ける。

『いろいろ、考えてみたんだ。私が何をしたいのか、とか。何をすべきなのか、とか』
「うん」

『それで、聞いて欲しいんだ、何をしたいか、何になりたいか。この戦いが、終わったら』
「それわざわざ今言う必要あったか？ クイントさんたちからかわれても知らないぞ？」

『あ………で、でも今言うべきだつてなんとなく思ったの！』

だから、となのはが言葉を繋いだ。

『ちゃんと帰ってきてね、みんなのところ』

心配そうな声色。少しだけセルジオの口角が緩む。

「わかった。約束だ」

『無茶しないでね！』

「……それは、約束しかねる」

そうして、セルジオは念話を切った。

距離が離れればAMFの都合上念話を飛ばすのは難しくなる。あちらにはオペレーターがいるが、こちらには状況に対応してくれる人員はいない。

だから、ここからは正真正銘に一人だ。

「待つてろよ、ティータ」

青年は駆ける。一度失ったと思つていた友人の元へ、今度は手遅れにならないように、一直線に、全速力で。

誓つた夢があつた。

守ると約束した人がいた。

幸せになつて欲しいと思う人たちがいた。

大切なものばかりで、俺にはもつたいないものばかりだ。

そしてそれが壊れる時は、拍子抜けするほど呆気ない。

「はあ、はあ、はあ……」

研究所の道を進み、そして一つの部屋の前でセルジオが荒い息を整える。

彼の探知に間違いがなければティータはここに居る。魔力は微弱で正直生きているのかもわからない。

——兄さんは、『無能』でしたか

あの少女の問いが胸の奥に染み付いている。あの少女を笑わせてあげたいと思う。勇気付けてあげたいと思う。あんな涙なんて、見たくない。

「その為には、お前が必要なんだ、ティード」

解析魔法をかけて扉のパスワードを解き明かし、そして、祈るような気持ちで扉を開ける。

そして、そこに——

「セルジオ……?」

いつもと変わらない、ティードの姿を見た。

身体は拘束されているものの、その身体に大きな負傷は見られない。体から力が抜けるのを感じた。

「良かった、本当に……………よかった」

からん、と手の中からゼファーが零れ落ち、そして膝について深い息をついた。

「セルジオやつぱり来てくれたのか……」

「当たり前だろうが。友達を放ってなんか置けるかよ」

「この馬鹿野郎が」

「お前には言われたくねえよ、この色男」

くくつと、二人が笑みを交わし合う。

「待ってろ、今拘束を解いてやる」

「悪い、助かるよ」

ティーダが足枷を解こうとしてくれるセルジオを見下ろすと、頬を半月に歪めて、深い笑みを浮かべた。

「本当に、ティーダを助けに来てくれてありがとう」

そして、首元に手を添えて、一気に電流を流した。バリアジャケットの保護のない首に直接接触られたため、セルジオの身体が電気で弾け、床に突っ伏した。

「な、にを……………」

セルジオがティーダを見上げて、手を伸ばし――

「はい、カット」

突然、背後から声がしてセルジオが飛びのくと、虚空から突然人が現れる。セルジオの解析にも引つかからなかったにも関わらず、最初からそこにいたように。

「なかなか面白い見世物でしたよー、死に別れた友達との感動の再会ーみたーいな、感じ
で」

くすくすと、現れた女性が深い茶色の髪を後ろに流して笑う。

「ああ、もういいですよ、ドゥーエ姉様」

「はいはい」

ティードの姿が変わる。セルジオの友人の爽やかな青年から、暗い金色の髪の美女へと、まるで夢から覚めるように、姿を変えた。

「あ……………」

ぱきり、とセルジオの中で何か繋がった。

ドゥーエ、という戦闘機人かいる。

『ドクター』の助手である長女の次に生まれ、それからずっと彼の目となり耳となり様々な情報を得てきた。

そんな彼女に与えられた先天性技能は『インヒューレンクスマスクライアーズマスク』。

その力は簡単に言えば『変装能力』。

聞いただけならば大したことがないようにも感じるその力。ただ他の誰かに成り代る、それだけならば幻影魔法でいくらでも代用できる。

だが、彼女のISは現代の管理局の科学による識別技術では見破ることができないともなれば話は変わる。

ライアーズマスク偽りの仮面を見分けるのは彼女の親である『ドクター』以外には不可能。

故に、仮面は剥がされない。

だから、三課内部に入り込んでデータを奪ったとしても、航空魔導隊の一員として情報を操作したとしても、気づかれないし、気づくことができない。

それが、ドゥーエの仮面。

ライアーズマスク偽りの仮面は道化師の仮面。

道化師が自ずから正体を明かすことはなく、ただ彼女は嗤うだけだ、楽しそうに、彼女の父とよく似た笑みで。

「正義感っていうのは厄介ですねえ」

眼鏡の女——戦闘機人クアットロが愉しげに嗤う。

「こーやって死んだはずの誰かを助けられる可能性を捨てられない。本当に、可愛いくらいに愚か」

「ティードを、どこへやった……！ 貴様らが、貴様らがあいつを……！」

「おお、美しき友情です。ま、私たちは戦闘機人なので貴方達の言う友情なんてこれっぽっちもわかんないんですけど」

「く、そ、うご、け……」

「ていうか、心配するのはお友達でいいんですかあ？」

「なに……？」

くすくすと笑いながらクアットロがしゃがみこんで、セルジオと目線を合わせる。眼鏡越しに彼女の父親と同じ色の瞳が細められて、邪悪な色を宿した。

「だって、貴方達誘き寄せられたんですよ？ 私たちが三課への対策立てなかったと

思ってるんですかあ？」

思考が、真っ白になる。

「因みに、この下には戦闘機人三体に、戦闘データをたっぷり詰め込んで性能も向上させた新型ガジェットに、今日のために特別に設えたAMF発生装置って、皆さんをもてなす機械オモチャが目白押しです」

「ーーーーー」

「ああ、フォーミュラの壁はもうなくなってると思うので行きたければお好きにどうぞ」
もう、迷う暇はなかった。

「エクリップドライブ、イグニッション」

思考が真っ赤に染まり大量のエクリップウイルスが体に流し込まれると同時に、ついでとばかりに身体が修復され、痺れが取れる。

そしてクアットロとドゥーエには目もくれず加速を発動させる。

途中、細かな機械音を響かせながら数体のガジェットが襲いかかってくる。

「Eclipse Divide」

トリガーワード
起動句と共に分断能力が発動する。

「どけ」

一体目を槍で切り捨て、返す刀で二体目のカメラ部分に槍を突き刺して、そのまま振

り回す。数十キロの金属の塊が振り回されるのにガジェットの体が耐えられるはずもなく、振り回された同族共々内部を砕きながら単眼から光を消した。

「邪魔だ」

来る時にいなかったのが嘘のように次々と現れては襲ってくるガジェットを消しとばしながら加速する。

「邪魔だ！」

ガジェットの爪が脇腹を斬り裂いたが、痛みなんてもう感じないので無視して先に進む。

「邪魔だッ！」

何かが自分の中から削げ落ちていくような感覚がする。でも、もう止まることはない。

「邪魔だアアアアアアアッ！」

そうしてガジェットの波を叩き伏せて、やってきた先に、見た。

「——あ」

血に濡れたトーレ。

側の赤く染まった銀色の少女——戦闘機人チンク。

見たことのない無数の巨大なガジェットドローン。

「あ、あ、ああ、あああ……」

そして、トーレの腕が、一人の男の胸を貫いている。

その背中を知っている。ずっと憧れていて、追いかけていて、大切に思っていた、その背中。

「ゼスト、さん」

トーレが腕を引き抜くと、胸に開いた巨大な穴から血が溢れ出て、男が膝をついて動かなくなった。

「ああ、遅かったな、アウディ」

トーレがひゅつと腕の血糊を払って、無感動に言い放った。

「ちやうど終わったところだった」

呆然としたセルジオが後ずさろうとして、足元の何かにつまずいて転んでしまった。

地面に手をつくると、なにかねっとりとした温かいものがてにこびりついている。

心臓が早鐘を打つ。

見たくないのに、見ずにはいられない。信じたくないのに、本能がそうだといっている。

そこには瞳から光を失って、足元で事切れているメガーヌの夫の姿があった。

いや、それだけではない。今日セルジオの肩を思い思いの強さで叩いてくれた先輩達
が、同じように、真っ赤に染まって倒れていた。

「そう、だ、メガーヌさんにクイントさん——」

「それならあつちの部屋で転がっているぞ。私が殺した」

「うそだ」

「嘘ではない。信じられないなら見てくるか」

ふらり、とセルジオが立ち上がる。

「おまえらが、やったのか」

「そうだ」

翠の瞳が、紅く染まっていく。

「ゼストさんは、クイントさんは、メガーヌさんは、みんなは——なのはは、死んだ
のか」

「まだの者もいるが、皆直にそうなる」

侵して、喰われてく。

「……………俺のせい、なのか」

「お前が発端か、と聞かれれば、そうだと答えよう」

何かが零れて落ちていく。

ずっと辛かった。

エクリプスの破壊衝動は甘いものなんかじゃなかった。

心の奥にいる誰かが、毎日毎日目の前にいる人たちを殺せつてうるさくて。血が見た
いって騒いだ。

そんなこと出来るはずもなく、必死に眠ろうとしたけど、寝ぼけてなのはを絞め殺し
そうになってからは怖くて眠れなくなった。

それからは眠る代わりに自分を傷つけることが多くなった。ナイフで自分の肉を
切った時に痛みよりも先に快感が襲ってきた。

肉を切るのが楽しくて、溢れてくる血が美しく、そんなことを考えてる自分にたま
らなく吐き気がした。

でも、もういいだろ？

みんな死んで、誰も守れなくて、ならもう、好きに生きていいだろう？

だつてセルジオ、あいつらはきつと殺していいやつだ。

「じゃあ、殺していいよな」

そうしてセルジオは初めて、完全に破壊衝動に飲み込まれた。

セルジオの姿が掻き消えて、瞬間、トーレが本能的に背後に刃を振るった。

それは機械らしからぬ経験則という第六感が教えてくれた警鐘^{アラート}。チンクではこうはいかなかった。

一度セルジオと戦っているという経験が彼女に与えた幸運だった。

白刃とトーレのブレードが爆ぜた。

『《ライドインパルス》』

「——加速機動」

加速は同時、技量はトーレの方が上、しかし殺意はセルジオの方が圧倒的に上。

トーレがインパルスブレードをセルジオの腹部へと向けて振るった。以前ならば槍で受けた一撃、しかし、それをセルジオは無視して腹でまともに受けとめた。

トーレが目を見開いたのもつかの間、傷口から鮮血が溢れたものの、瞬きの間に傷が塞がって行く。

「エクリプス、まさかここまで——」

「知るかよ」

セルジオが全力で槍を薙いだ。迷いのない、あまりにも鮮やかな一閃、それをかろうじてトーレは上体を逸らして避ける。

「ライドインパル——」

「Eclipse Dive」

目が紅く光り、加速しかけていたトーレのエネルギーが纏めて解かれ、肩を掴まれる。くるり、とセルジオが手の中で槍を回して持ち替えると穂先をトーレの喉元へと向けた。

「死ね」

ゼファアの穂先が振り下ろされる。

「《ランブルデトネイター》ッ！」

だがそこに鈴のなるような声が爆発音とともに割り込んでくる。戦闘機人チンクの爆発による攻撃が間一髪で間に合ったのだ。

横合いから不意打ち気味に叩きつけられ、セルジオの身体が地面に叩きつけられる。だが、セルジオは倒れない。

「は、はは、ははは、はははははッ！」

セルジオが狂笑する。

楽しくて、嬉しくて、心が踊っていた。

半月のような笑顔が歪む。いつものような柔らかいものは陰も見当たらない、壊れたような笑み。

セルジオが加速すし槍を振るうと、トーレとチンクもそれに応じた。

白光が弾け、深紅が暴れ、紫光が切り裂き、爆発の紅蓮が踊るのを、鮮血が彩った。

それはどこまでも残酷で、泣きたくなるほど美しい光景だった。

誰かのために戦うと言っていたセルジオ。そんな彼の今までの強さからは最も遠く、それでいて今までのどのセルジオよりも強い。

「あ、あははははっ！」

瞳を深紅に染めたセルジオはもう何も見えていない。

そもそもEC適合者は完全にECを発動させると、まともな視界を喪失する。

今の彼の瞳が映すのは熱源カメラを通して見たような、人の形をした魔力と熱。それ以外には叩いて血が出るナニカでしかない。

だから、彼は自分の前に何かが現れても、それがなんであるかなんてわからない。ただ自分の快楽を満たすためにそれを斬るだけだ。

例えば、それがどんなに大事な人であっても、彼女が自分を庇って前に出てきてくれたんだとしても。

そして、セルジオは目の前に現れた人影に何の疑問を持つこともなく、ただ愉しそうに、嬉しそうに槍を振るった。

斬、とナニカが斬れて、セルジオに鮮血が降りかかった。

それは、とつても、とつても、綺麗だった。

『破壊衝動』。

それはエククリプスウイルスに感染した者が遍く抱く、人を殺したいという思い。これがあるためエククリプスは『世界を殺す毒』となり、排除される存在となる。

ならば、人を殺すというのは何を基準に判断するのか？

それは簡単だ。

血だ。エクリプスドライバーたちは血を見て己の破壊衝動を鎮める。セルジオが自傷行為に及んでいたのもその為だし、他のドライバーたちも殺しをする際にはなるべく血が出る殺し方をする。

じゃあ、今血を浴びたセルジオが破壊衝動を解消して、突然正気に戻っても、なんの不思議があるだろうか。

長い夢を見ていた気がする。

ゼストさんが死んで、クイントさんが死んで、メガーヌさんが死んで、仲間たちもいっぱい死ぬ夢だ。

本当に怖い。なんでそんな夢を見たんだろう。

そんなこと、現実にあるはずが無いのに。

なんだろう、手がぬめぬめする。

おかしいな、なにか変なものでも触ったか。

いや待てよ、何かがおかしい。

俺はトールと戦ってて、それで、楽しくて、邪魔だったから誰かを刺して、俺は誰を刺した？

動悸がする。

視界に色が戻ったのに目線を上げるのが怖い。

あげてしまうと、決定的な何かが、壊れてしまう気がする。

けれど、俺の中の何かが俺の体を勝手に動かして顔を上げてそして――

――
あ

なんで、お前が、そこに居るんだよ。

なんで、刺されてるんだよ。

おかしいだろ、だって、これじゃあまるで俺が刺したみたいじゃ無いか。

彼女が俺を見つめる、いつもと同じ、俺が好きな笑顔で。

「なの、は……………」
「？」

喪失の代償

「なの、は……………？」

なのははいつもみたくに微笑んでいた。

ただ労わるように、優しく、柔らかく。

槍から手が離れなのはが解放されるとセルジオの手の中に小さな身体が倒れ込んでくる。

夢でも幻でもない。本物の、セルジオの世界でたった一人の相棒だ。

いつもは白いバリアジャケットからは、目を背けたくなるような紅色が流れ出て、じわりじわりと白を染めている。

彼女はぼんやりとした瞳でセルジオを見上げると、その存在を確かめるように頬に手を触れる。

「よかった、いつもの、せるじおくんだ……」

弱々しくか細い声でなのはが呟く。

「さつきまでの、せるじおくん、なんかこわかったから……」

なのはの瞳から光が消えていく。

「あ、あ、おれの、せいなの、か……」

「もう、せるじおくんは、ほんとうに、しかたないなあ」

「ごめん、なのは、おれが、おれが」

「いいんだ、わたしは、せるじおくんがしんぱいだった、だけだから……」

震える手でなのはがセルジオの頭を軽く撫でる。まるで幼子にそうするように、宥めるように慈しむように。

「もう話さなくていい。すぐ病院に連れていくから。俺を許さなくてもいい。だから、だから……」

「ねえ、せるじおくん」

なのはが薄く目を開けて、ふっと微笑みを浮かべる。

その微笑みはまるで触れたら溶ける雪の結晶のように儂く、死にたくなるほど美しい。

「なかせちやって、ごめんね」

なのはがゆっくりと目を閉じた。

「なのは、なのは？ おい、なんとか、言ってくれよ」

腕の中の少女はなにも言わない。

ふらり、とセルジオがなのはを抱いて立ち上がり、トーレ達へと背を向けた。

「待てセルジオ・アウデイ、何処へ行くつもりだ」

「病院へ行くんだよ。なのはを、助けるんだ」

「捨て置け、その少女はもう助からん」

「行くんだよ、行かなきゃ、いけないんだ」

謔言のように同じ言葉を繰り返すセルジオに、トーレは静かに刃を構える。

「私がそう易々とお前をここから返すと思うか」

「邪魔するな。急いでるんだ」

「聞けぬ相談だ。私はお前と戦うためにここにいる」

ぼう、とセルジオが生気のない瞳でトーレを見つめる。

「じゃあ、死ぬか」

セルジオの体を陽炎のような紅いエネルギーが包んで、翠の瞳が一瞬で紅く染まり――

「嗚呼、駄目だよ、セルジオ君。この舞台はまだ終わらない」

何かが、セルジオの背中を刺さった。

それはぱしゅん、と気抜けするような軽い音を立ててセルジオの中に何かを流し込んだ。

途端、陽炎が跡形もなく消え去り、セルジオの体を占拠していた物がこぞって動きを止めた。

「な、に……」

突然がくん、と膝から力が抜け落ちて、なのはの身体が地面に投げ出してしまふ。仲間達の血で濡れた床になのはが転がっていき、セルジオは何故か痺れたように動かない体を叱咤する。

救わなければならぬ。大切な人なんだ。せめて彼女だけでも。

「何処へ行くこうというのだ」

だが伸ばした手は虚しく空を切り、背中に足を叩きつけられ、そのまま動きを止められる。

「——トーレッツ！」

「動かない方がいい。今貴様に撃ち込んだのはEC抑制剤、先程までの回復力があると思わん事だ」

「く、そ、がアアアツ！」

「……憐れな、一度は私を破った男が、最早エクリプスの補助なしでは動けぬ程に侵食を受けているとはな」

嚇怒の意志でトーレを睨もうとして、足音が聞こえる。

一定のリズムで、足を進めた『ソレ』は、トーレに縫い付けられたセルジオの前で足を止めてしやがみ込んだ。

「やあ、久しぶり、セルジオ君」

親しげに、まるで街中で出会った友人に声をかけるかのように、その人はセルジオに声をかけた。

「教、授……………？」

セルジオに名を呼ばれて、彼は青い髪をかきあげながら、金色の目を細めた。

「なんで、どうしてとでも言いたげな顔だ。実に痛快だ」

「だまして、たのか……………！ 管理局を、俺たちを、ずっと！」

「その通りだ」

彼はいつもの白衣をはためかせながら、くつくつと笑って、パチン、と指を鳴らした。

「私は君に『ゼファー』を渡し、トーレを使って君を弄び、ティーダ・ランスターを殺し、君を誘き寄せた。全部、全部私がやったことだ」

教授にざあつとノイズが走り、姿が変わっていく。

短く切り揃えられた青い髪は濃さを増して濃い紫へと変わり、肩口まで伸びていく。金色の瞳はそのままだに、今までの中年の男性から若々しい男へと、幻が剥がれ本当の姿へと戻っていく。

「では、改めて初めまして、セルジオ・アウディ君」

瘦躯の男が白衣を翻し、表情を歪めた。

「私の名は『ジェイル・スカリエツティ』、またの名を『無限の欲望』アンリミテッド・デザイア。君の敵の名前だ」

「ジェイル・スカリエツティ……」

「ははは、そう固くならず気軽に、Dr. スカリエツティとでも呼んでくれたまえ、君と私の仲じゃないか？」

嘲るように、ジェイルが言う。

「……………んで……………た」

「ん？」

「なんでこんな事をしたっ!? なにが一体目的で、こんな事を……………!」

「ふむ、それは少し難しい質問だが、敢えて答えを出すならば……………」

スカリエツティは腕を組んで、しばらく考え込むと、やがて一つの答えを出した。

「その方が面白そうだからだ」

「は……………？」

まるで何を言っているかわからない。同じ言葉を話しているはずなのに、異界の言語を聞いたかのように、理解できなかつた。

「ん？ 言葉が足りなかつたかな？」

ジェイルが僅かに眉を寄せる。

「私の欲望が満たせそうだったからやつたんだ。三課を殺したのも、ティード・ランスターを殺したのも、君にエクリップスウィルスを渡したのも全部、そうした方が楽しそうだったからだ」

ジェイルはなんて事ないように、まるで明日の天気を教えるかのように、子どもたちが好きな野球チームを教えるかのような気軽さで、そんな、理解し難い事を言つてのけた。

セルジオがトーレに組み敷かれたまま、ジェイルに襲い掛かるとする勢いで吼える。

「そんな、そんなことで殺したのかッ!？」

「ああそうだとも」

「——ッ、てめえ、命をなんだと思つてやがるッ！」

セルジオの言葉を聞いた途端、ジェイルが一瞬ぼかんと目を開き、数瞬後には、狂つたように高笑いをし始めた。

「これは痛快だ！ 命！ 命と来たか！ よりにもよつて、『君』が！ 命と！」

「何が可笑しいッ!?!」

「ん、まさか君、わかつてないのかね、自分が『何』であるかを」

そしてジェイルは愉しげに、セルジオの根幹を揺るがす言葉を放つた。

「だって君、『人間』じゃないじゃないか」

歯車が、噛み合う音がした。

『プロジェクトF』。それは高町なのはの親友、フェイト・テストロッサの母、プレシアが行なっていた研究の一つ。

それは簡単に言えば遺伝子から同じ身体を作り出し、最後に記憶を転写することで死者蘇生を行おうとする技術だ。

しかしその研究は上手くいくことがなく、プレシアは『アルハザード』への道を追いかけることになる。

死者蘇生。

それは遍く者の夢。

大切な人と会いたい。もっと一緒にいたい。伝えられなかったことを伝えたい。

そんな事を考えたことがない人間など、この世界にどれほどいるだろうか。

けれどそんな事はどうでもいい人たちもいました。

プロジェクトFの遺伝子から身体を作り出す、という面にだけ目を向けた科学者たちが。

彼らは優秀な魔導師から細胞を取り出し、それを培養する事で、無限に優秀な手駒を作り出そうとしたのです。

しかし、プロジェクトFの第一人者であるプレシア・テストロッサでも上手くいかなかった、元となる人間の再現。

ただデータを盗み見た凡庸な科学者たちで上手くいくはずもなく、出来上がったのはヒトのカタチをしたただのモノでした。

何度も、何度も、何度も、何度も、科学者たちは実験を行いました。出来上がるのはヒトのなり損ないのようなものばかり。

そうして科学者たちは研究を繰り返すうちに、ついに管理局にその所業がバレて逮捕されました。

そして、その研究所にやってきた局員——セピア・アウデイは出会いました、自分と同じ色の髪をしたモノ。

ソレは、感情が芽生えなかったモノでした。

ソレは、魔力量がオリジナルから大きく劣ったモノでした。

ソレは、オリジナルの身体の再現すら出来なかったモノでした。

ソレは、おおよそ人に必要なモノが欠けたモノでした。味覚、視覚、触覚、そのどれもが通常の人と比べて大きく劣っていました。

だから『失敗作』と断じられ、塵のように捨てられていたモノでした。

ソレはこの研究所ではいくらでも転がっているそのほか大勢の塵となんら違いがありませんでした。

けれど、その失敗作に何か特別なところがあつたとすれば、『セピア・アウデイ』をオ

リジナルにして作られたモノで、まだ生きていたという事が挙げられるでしょう。

ソレは、セピアの前で、惨めに、無様に、それでも、小さく、とても小さく息をして、殆ど何も見えないであろう目を開いた。

澄んだ翠の瞳がセピアを見つめた時、彼女は思わずその出来損ないに手を伸ばしてしまいました。

ソレは、後々『セルジオ・アウデイ』と名付けられました。

何か胸の奥にすんと落ちてきて、でも、それでも信じられなくて首を振る。

それを見てジェイルはやれやれと肩を竦めて、いいかね、とセルジオに言葉を投げかけていく。

「君は生まれてから、風邪なんて一度も引いた事なかったろう？ それに、普通なら制御できない数のマルチタスクを使えただろう？」

——俺生まれてから一度も風邪引いた事ないんだけどな。

——なんか不思議とマルチタスクは人より多く制御できてさ。

いつか自分の言葉を思い出す。

不思議だと思っていたこれも、本当は自分が戦闘用にチューンされた存在である事の

名残なのだとしたら？」

「悲しくて泣いた事なんかないだろう？」

セピアが死んでも、ティードが死んでもセルジオは泣かなかつた、否、泣けなかつた。どうして周りの人が泣いているのか、なんで泣けるのかがわからなかつた。

「やたら人の真似をするのが上手くなかつたか？」

——ああ、見て覚えたので大丈夫です。

箸の使い方だつてなのはたちが使っているのを見ればすぐに覚えられた。

採用されることのなかつたゼファアの『模倣』機能を何故か一人だけ使いこなせた。

「食べ物好みもなければ、人に嫌われても何とも思わない。君は誰が何と言われようと、他人に怒ることなんて無かつた。それは人間の形として正常なんだろうか」

食べ物味なんてわからなかつた。だからみんなに合わせて「美味しい」と言つていた。だから一人の時は栄養だけを取るためにサプリをよく飲んでいた。

人に嫌われても何とも思わなかつた。そういうものだと思つて入れたから。

だつて『人に怒るのはいけないことだ』とセピアが言つていたから。

「思い出してもみたまえよ、よく言われてたんじやないのかい君は、本当に人間か、と」いつも、色んな人に冗談交じりに言われてた。

お前は本当に人間か?、と

一つ一つの問いかげが過去と、かけられてきた言葉によって、肯定されて、『セルジオ・アウデイ』を構成していたものが解かれていく。

「何より——」

セルジオの瞳から光が失われていく。そして、ジェイルは、最後にセルジオを砕く、決定的な撃鉄を下ろした。

「君がやってるのは母親の『真似』で、そこに君の意思なんて一つもないじゃないか」

——人を、救え。

そう、言われた過去きのうがあつた。

その日からセルジオは愚直に、その言葉に背かないようにだけ生きてきた。それは彼が決意したからではなく、そう心に刻まれたから。

「君には『自分』がない。ただ言われた通りに真似をするしかできない。まるで、出来のいいロボットのようにな」

『自分』がないから自分を幾らだつて犠牲にできた。お金だつていらなかつたし、休みだつて、なんなら友人だつて、家族だつていらなかつた。

だって、セルジオ・アウデイは、ヒトのカタチをしているだけのものだから。

「———そっか、俺は、本当に、『偽物』だったのか」

疑念は抱かなかつた。どれも、身に覚えがあることだったから。

セルジオの瞳から、光が消えた。

それを確認して、ジェイルが愉しげに表情を歪めて嗤った。

「嗚呼、良いね、その顔が見たかった」

まるで幼子がオモチャを見つけたように、ただただ嬉しそうに笑うジェイルは、光が消えて瞳でぼんやりと虚空を見つめるセルジオと目を合わせた。

そして、セルジオに向けて手を差し出した。

「なあセルジオ君、私の欲望に力を貸してみる気は無いかね？」

「なに、を……？」

「私は君の欲望を高く評価している。人に生み出され、人ならざるものとして生きる、君は言ってみれば私と同族だ。私なら君を導いていける。世界で私だけが君の気持ちに

心の底から共感できる」

「……………そんなのできるわけ」

なんで、出来ないんだ。

守るべき人たちはみんな死んで、なによりも大切な人は自分で傷つけた。

自分の持つていた夢もただの虚飾だと突きつけられて、それでも頑張る理由がどこにあるんだ。

——もういいだろう？

誰かの声が聞こえる。

ああそうだ、もう、セルジオ・アウデイなんか、誰かの為に生きる資格はない。

ならもう、この手を取って堕ちてもいいんじゃないのか。

虚ろな瞳でセルジオがジェイルへと手を伸ばして——

アンチエイシナックル
「繋がらぬ拳ウウウツ！」

「行きなさい、フオードツ！」

——青い疾風がその間に割り込み、紫紺の光が一筋の迅雷を飛ばした。

疾風は途中にいたチンクを吹き飛ばし、荒い息のままジェイルとセルジオとの間に立ち塞り、紫紺が命じた黒電はセルジオの上のいたトーレを吹き飛ばした。

呆然と、セルジオがその疾風かぜの名を、紫電ひかりの名を呼んだ。

「……………くいんと、さん」

「ハイ、セルジオ君、また会えて嬉しいわよ」

「……………めがーぬさん」

「また無茶しちゃって、君は」

いつもの快活な笑顔のクイント。しかしその顔は赤く染まり、左目から肩口まで大きな裂傷が刻まれてい、脇腹は吹き飛んだように大きくえぐれている。

その隣には召喚獣であるフォードに支えられながら、ふらつく足で微笑むメガーヌ。彼女に至っては既に左腕は無く、長く美しかった髪も無残に根元からちぎれている。

召喚獣であるフォードも甲殻は砕け、内部から体液を漏らして、片羽を頼りなさげに揺らしていた。

みんな満身創痍だ。

例えそれが蠟燭が燃え尽きる寸前の、儂い輝きなのだとしても、二人の命が消えるのは目の前なのだとしても。

しかし、それでも、二人はまだ生きていた。

セルジオの瞳に少しだけ光が戻る。

「この死に損ない供めが」

「なーによ、私たちに、トドメ……刺し損ねたのは、貴方でしょ、お嬢ちゃん」

チンクの言葉に皮肉げに言い返すクイント。

そして二人は互いの獲物を持って火花を散らした。

フオードもそれに続いて吹き飛ばされながらも殆どダメージらしいダメージを受けていないトーレに食らいついて行く。

「虫風情が調子に乗るなよッ！」

「……………」

加速するトーレと腕の刃を振るいながら、壁を蹴り、床を足場にそれに対応するフオード。

その間にメガーンは荒い息のまま、デバイスを構えて近くにいたのはとセルジオを

魔方陣の中心に配置し、術式を起動する。

「めがーぬさん、なにを、してるん、です……」

「転移魔法、使ってるの。あなたと、こほつ、こほつ、なのはちゃんだけでも、ここから、逃すわ……」

「そんなこと、だめです、あなたたちも、にげなくちゃ」

「無理よ。このAMFじゃ私でも二人飛ばすのが精一杯。それに、敵もきつと逃がしてくれないわ」

メガーヌが術式を構築するとふらつきながらデバイスを構えて、AMF下でバラつく魔力を丁寧、丁寧に魔法としての形を与えていく。

「ねえ、セルジオ君、最後にお願いがあるの」

メガーヌが、途切れ途切れになりながらも、必死に声を絞り出す。

「ルーテシアのこと、お願いね。あの子、あなたのこと、本当のお兄ちゃんみたいに、思ってるから……」

「いや、です、るーてしあちゃん、には、あなたが——」

「分かってる。でも、それでも、あなたに、頼みたいの……」

ついに自分の体重すらも支えきれなくなったのか、メガーヌが膝をついた。けれど、それでも魔法の展開は止めない。

「セルジオ君！ 私も、ちよつと言っておきたいことがあるの！」

クイントが拳を振るいながら、ニツと笑う。

「あなたを初めてセピアさんに紹介された時は、無愛想で、なに考えてるかわかんなくて、正直可愛くないって思ってた！」

「——くいんと、さん」

「でもさ、その分私はセルジオ君が変わっていくのをずっと見てた！ クロノ君と出会って、なのはちゃんと出会って、だんだん変わっていくのを！」

クイントがチンクの刃の爆発を受けて、大きく後ずさる。

「はあはあ、ほんとにさ、貴方はクソ真面目で！ 頭が固くて！ 融通が利かなくて！ でもいざという時には頼りになって！ それで、それで——」

クイントが拳を握り、全力で振るう。いつか、セルジオに教えてくれたストライクアーツ。

「——きつと誰よりも優しい」

「くいんと、さん……………」

体を動かす。けれどジェイルに打ち込まれた薬のせいか、体が思うように動かない。

それでも、諦めたく無くて、必死に二人に手を伸ばす。

クイントが優しく微笑みかけ、メガースがセルジオの頭を労わるように撫でた。

「頑張る姿を本当に誇りに思ってた」

「家族と同じくらい好きだった」

「本当の、弟みたいに思ってたわよ」

「家族をよろしくね」

魔法陣の淡い光が濃さを増していく。

「まっ——」

セルジオがメガーヌに手を伸ばして、優しく振り払われた。

「さようなら、セルジオ君」

そして、セルジオとなのはの姿がそこから掻き消えた。

後に残されたのは、力が抜けたように崩れ落ちたクイントとメガーヌ、トーレに斬り伏せられた召喚獣のフードの死体。トーレとチンク、そして今までその様子を静観していたジェイル・スカリエツティ。

「嗚呼、面白いものを見せてもらった。誰かの為に自分の命を使う、か。なんとも愚かしく素敵な歌劇だった」

ぱちぱち、とジェイルは手を打って、ふつと表情を消して、振り返るとその場から立

ち去っていく。

「トーレ、チンク、後は頼んだよ」

「了解しました、ドクター」

トーレが腕の刃を光らせて加速する。

その様子を背中を合わせて互いに支え合う二人がぼんやりと見つめ、どちらからとも無く口を開いた。

それは、ずっと二人で戦ってきた彼女たちの、最期の会話。

——ねえ、メガーヌ。

——なに、クイント。

——……………私、メガーヌとコンビを組めて、本当に良かったわ。

——私もよ、クイント。貴方と二人でやってこれて、良かったわ。

——そっか。それなら良かった。

——ほんとうに、よかった。

そうして二つの紅い花が咲いた。

その日、航空魔導隊三課は違法研究所の調査中に、十六名の隊員の内十四名を失い、一人は重症でミツドの病院へと緊急搬送された。

地獄のような惨劇の中、ほとんど無傷だったのはたった一人。

セルジオ・アウデイだけだった。

雨は止まない

高町なのはが墜ちた。

その報は彼女と仲の良かった友人、特にアースラメンバーにすぐに伝わった。

「はあ、はあ、はあ——」

フェイトが雨空の中自分が濡れるのも厭わずにひた走る。本当は魔法でもなんでも駆けつけたいのを必死に押し込めて、ただただ一生懸命に走り続けた。

「はやて！」

「フェイトちゃん……」

フェイトが病院に着いた頃には既にはやてやヴィータ、ユーノ、そして驚いた事にデイアーチエ達マテリアルズの姿もあつた。

しかしそんな事にフェイトが気を配る余裕はなく、沈んだ表情のはやてに詰め寄る。

「はやて、なのはは!?!」

「……治療中やけど今も意識は戻つとらへん。血を限界まで失つとるって」

「———そんな」

ぺたん、とりノリウムの床にへたり込むフェイトにはやてが慌てたように駆け寄る。

「フェイトちゃん！」

「じゃあなのはは、なのはは……」

「案ずるな、フェイト」

「ディアーチエ……？」

「先程エルトリアのアミタ達に連絡を入れた。渡航禁止の指令がある以上大きくは動けんが、それでも医療器具について幾らか話をつけられるそうだ」

「……エルトリアの？」

「ああ。人体科学についてはあちらの方が進んでおるからな。ナノハとて我らの友人だ、指を啜えて見ているつもりはない」

ほんの少しだけフェイトの表情に光が射した。確かにナノマシンなどの人体改造技術が優れたエルトリアの医療技術や、ユーリの人を癒す力があれば治療の目処もたつかもしれない。

「イリスの裁判のついでに此方に来ていたのが幸いしましたね……ナノハのご両親に連絡は？」

「さつきシャル達が連絡入れて、今迎えに行つとる。たぶんあと30分もすれば来れ

ると思う」

「にしてもさー、あのナノハが墜とされるってよっぽどだよねえ。誰がやったかわかればボクが直々にやつつけてくるのにさあ」

「誰が、か……………」

レヴィの声に、ぽつり、とユーノが呟いた。

「ほんとうに、今回の件はどうなってるんだらうね。僕の方で調べても情報が降りてこないんだ」

「ユーノ君でもわかれへんなんて」

「まあ諦める気はないし、自分で調査は続けるつもりだよ」

「ごめん、助かるわ。私も出来ることあったら力になるで」

「……………本当は生還した人から話を聞ければそれが一番なんだけど」

ちらり、とユーノの視線が逸れて、黙って外を見たままのクロノへと動いた。けれどクロノはその視線に気付いてか気付かずか、尚も雨雲に覆われた空を見るだけで何も言おうとはしない。

なにを考えているのかはユーノ達には窺い知れない。ただ、クロノの深い海の色の瞳は雨の向こうを見つめるだけだ。

そしてその後、高町家の家族が駆けつけても、アリサやすずかがやってきても、エル

トリアから許可を取って来たユーリが訪れてきた。

多くの人がなのはの見舞いに訪れ、皆彼女の怪我に悲しみ、怒り、心の底から心配した。

けれどどれだけ経っても、『セルジオ・アウデイ』が現れることはなかった。



レジアスが執務室の窓からクラナガンの街を見下ろす。深い雨に覆われた街はまるでそれ自身が泣いているかのようだった。

「……馬鹿野郎、俺を一人にしゃがって」

ゼストが死んだと伝えられたのは二日前。

三課はレジアスが与えていた違法研究所の独自調査の権利を最大限に使い、半ば独断専行に近い形で突入し、二人残して壊滅した。

今でも「ちゃんと管理してくれなければ困る」と言っていたジェイルの顔を思い出せる。

まるで嘲るようなジェイルに怒鳴り散らしそうになって、やめた。

レジアスはもうとつくに悪魔に魂を売っている。

陸のあがる犯罪率に、終わりになき戦いに疲れて、最高評議会に垂らされた蜘蛛の糸につい縋ってしまった。その日からレジアスは一番の親友と、親友の息子とを欺くことになった。

後悔しても後悔したりない。

心を殺して、ただ陸の平和のためにと言い聞かせる。

その為に目先の犠牲に目を瞑り、いつかの未来にやって来るであろう希望を信じている。

たとえそれが血に濡れた道なのだとしても、レジアスが選べる道はこれしかなかった。

「……………中将、そろそろお時間です」

不意に秘書である娘のオーリスから声がかかって思考の海から帰還する。

ちらりと時計を確認すれば、確かに次の公務の時間を考えるとそろそろ出発しなければ間に合いそうにない。

普段は後五分はやく声をかけられるものだが、もしかするとレジアスの心情を慮ってくれたのかもしれない。

軽く目頭を抑えると気持ちを入れ替えるためにネクタイを締め直す。

「なあオーリス、今後の三課をどうするべきだと思う」

「解体が妥当かと。高町三尉も意識不明の重体ですし、アウデイ一尉も精神的摩耗が酷く自宅療養を言い渡されていますから」

「……だろうな」

聞くまでもないことだ、とレジアスが目を伏せた。

（せめてあの二人の今後くらいは世話しなければゼストに申し訳がたたん）

その程度で償いになるとは思わないが、それでもせめてそのくらいはやらなければあまりにも自分が惨めだった。

不意に、レジアスの執務室に軽いノックの音が響いた。

誰か来客の予定があったか、とレジアスが眉を寄せたのもつかの間、入ってきた人物に目を見開いた。

茶色の地味な陸の制服。長時間雨にうたれたのかじつとりと濡れた髪は淡い金色で、前髪の隙間からはどろりと濁った翠色の瞳が覗いている。

「セルジオ、お前何故ここに……」

その問いかけにセルジオは焦点の定まらない瞳で、右手をオーリスの方へと差し出し、小さなメモリーカードを落とした。

「報告書です。今回の、三課の一件の」

「———な、そんなこと誰が」

「すみません徹夜で作ったんですけど、なんか、イマイチ集中出来なくて時間がかかってしまいました」

「セルジオ貴様——」

「ゼストさんがいないから俺がしつかりしなきゃいけないのに、ははは、困りました」

「セルジ——」

「ああ、今回の件本当にご迷惑お掛けしました。降格もなんでも受けるので、責任は俺が——」

「セルジオッ！」

レジアスが叫ぶと、セルジオがはつと顔を上げて、そして、いつもとなら変わらぬ完璧な笑顔を浮かべてみせる。母親とよく似た、毎日鏡の前で練習していた笑顔を。

「なんでしようか、レジアスさん」

あまりにも痛々しい笑顔だった。いつもと変わらない。それが故に、この青年がどれだけ参っているのか、どれだけ必死に取り繕おうとしているのかを感じ取る。

さしものレジアスも言葉を失い、静かに目を瞑るしかなかった。

「いや、何でもない。報告書ご苦労。今日は帰って休め。これからのことは追って通達する」

「そのことなんですけど、あの、レジアスさん」

「どうした」

「一つ、頼みたいことがあるんです」

セルジオが退室してしばらくして、オーリスは公務に向かう車の中でレジアスに問いかけた。

「中将、アウデイ一尉の頼みを聞くのですか？」

「……ああ」

「本当にそれでいいとお思いのですか？ 正直言つて今の一尉は任務に耐えられる状態とは思えません」

「だろいな」

「——つ、父さんは、セルジオ君が可哀想だとは思わないのですか？」

珍しく声を荒げたオーリスにレジアスが僅かに瞠目し、肩落としてそうだな、と声を

漏らした。

「なにもずっと奴の言う通りにする訳ではない。それは奴もわかってるだろうよ」

「ではどうやって……?」

「儂がやるのはほんの少し問題を先送りにするだけだ。あとは、セルジオ自身が決めるべきだ」

レジアスが窓越しの空を見上げて、目を細めた。

友が駆けていた青空は、今はどこにも見えなかった。

雨の中を歩く。

「……………行かなきゃ」

心が軋む音がした。

なのはの病室の前で恭也が自分の腕に巻かれている時計を確認する。

「恭ちゃんどこ行くの？」

おもむろに立ち上がりその場から立ち去ろうとするのを妹の美由希が引き止めた。恭也はしばらくの間何も言わなかったが、背中を向けたまま「野暮用だ」と返すとその場を後にした。

しばらく歩き、ミッドチルダの病院の様子に、このは地球とあんまり変わらないな、と考える。

しばらくはここに足を運ぶことも多くなるだろう。なのはだつて目を覚ませばきつと家族に会いたがるだろう。

(……なんだか昔を思い出すな)

あれはまだなのはが五歳に満たなかった頃、怪我をした士郎が入院した頃はこうして病院へ来るのが日課だった。

まさか、今さらそれをまた経験することになるとは思わなかったが。

しばらく歩いて恭也は一階まで降り、病院の玄関から外に出ると、雨の中に立ち尽く

す人影を見つける。

「……お久しぶりです、キョーヤさん」

それは恭也もよく知っている人物だった。

セルジオ・アウデイ。武術の才能がなくて、物腰が丁寧なのは相棒。一ヶ月という短い間稽古を共にしたただけだったが、不思議と印象に残る、気持ちのいい青年だった。けれど久しぶし振りに会ったセルジオは、随分と疲れているような、擦り切れてしまったようなそんな印象を抱かせた。

「やっぱり来たのか、セルジオ」

「俺が呼んだわけですし、来ないわけありませんよ」

「そうか、まあこつちに来い。いつまでも雨に打たれてるのも良くないし、せめてなのは顔くらい見えていけ」

「……大丈夫ですよ、俺、風邪引いたこと——いや、風邪ひかないので」

皮肉げにセルジオが鼻を鳴らして、ふっと視線を落とした。

「それに、そこに行く資格なんてありません」

——恭也さんとの、約束を破った俺では。

ざあざあと降り続ける止まない雨は、病院の軒下にいる恭也と雨にうたれるセルジオとを隔てているかのようにだった。

「……………お前のせいじゃない」

「違うんです、キョーヤさん、俺が、俺がこの手で、自分の意思で、あなたの妹を傷つけたんです」

ぎゅつと拳を握り、セルジオが表情を歪めて、叫ぶ。

「俺さえいなければ！　俺なんかがあなたの妹に出会っていなければ！　あなたの妹が怪我をすることなんてなかった！」

セルジオが膝について、拳を打ち付ける。上手く息ができない、ちゃんと吸ってるはずなのに喉の奥で空気がつつかえて、ずっと息苦しい。まるで空気が増えたかのようにだった。

「俺みたいな偽物が、生きてるせいで……」

恭也はそんなセルジオを見下ろしてただ黙り込む。

恭也にはセルジオの言う事はほとんどわかっていない。それもそうだろう、何故ならばセルジオに今回の一件に関して何かを言う権利はない。

戦闘機人にジェイル・スカリエッティ。それはレジアス・ゲイズの上司である『最高評議会』にとつては重要機密であり、おいそれとバラす事は出来ない。

だからセルジオは『なのはを刺したのは俺なんだ』と明かすことができない。

例えどんなにそうしたかったとしても、そうレジアスに命じられた以上、それを破る

事はできない。セルジオ・アウデイとはそういう生き物だ。

それでも恭也はセルジオの要領を得ない話を聞いて、なんとなくの事情を察した。

きっとセルジオはなんらかの事情を抱えており、そして、なのはのことを傷つけたのだと、そう感じ取った。

「……セルジオ」

恭也が雨の中のセルジオの側で膝をついてしゃがみ、肩を軽く叩いて言った。きつと、セルジオが今まで何回も胸に刻みつけてきた、その言葉を。

「運が悪かったんだ」

びしり、と胸の奥でナニカに輝が入る音がした。

「そんなことッ！」

思わず感情の赴くままに怒鳴りそうになって、セルジオがそれを振り伏せた。拳を握り、歯を強く噛み締め、臉をしつかりと閉じて、心の激情に蓋をして、立ち上がる。

「そんなこと、認められるはずがない……！ それだけは、認められないッ！」

そう言うセルジオは恭也に背を向けて覚束無い足取りで雨の中を歩いていく。一歩、また一歩と遠くになっていく背中。

雨粒で少しづつ遮られていく視界の中で恭也の口が形を作る。

「……………約束、か」

以前、『強さ』とは何かと言うことを二人で話した事があった。稽古の終わりに二人で道場の掃除をしながらした、他愛のない会話。

その中で、恭也は冗談交じりにセルジオに頼んだのだ。『なのはの事を頼んだぞ』、と。そして、セルジオはそれに力強く頷いた。

そのお礼に恭也が『徹』を見せたり、その後話し込みすぎて料理が冷えたと桃子に怒られたりした。

そんな思い出があった。

「――糞」

恭也が先ほどのセルジオがそうしたように拳を受け付ける。

何もできず、ただ妹とその相棒が苦しむのを見ているだけしかできない自分が、死ぬほど惨めだった。

雨はまだ、やみそうにもなかった。

雨の中を歩く。

「……………まだ、だ」

心の奥が、罅割れていく音がした。

セルジオはそして、また一人大切だった人の家族の元へ、足を進める。

「お前、セルジオ……………なのか……………」

玄関を開けてそこにセルジオがいるのを確認した時、ゲンヤは戸惑ったように名前を呼ぶことしかできなかつた。

だって、そこにいたのは間違いなくセルジオの姿をしていて、でも決定的にゲンヤの知っているセルジオではなかつた。

「お悔やみ、申し上げます」

まず紡がれたのはその言葉。

「あの、俺、なんでもします。これからお金を入れろって言うなら入れますし、二度と顔

を見せるなつて言うなら顔を見せません。だから、クソ、言いたい事はこんな事じゃない
くて」

ぎりつとセルジオが葉を噛みしめる。

「俺は、クイントさんに救われました」

「——」

「最後の最後、動けない俺と——あいつ、をメガーヌさんと、逃がしてくれて、それで
……………」

ゲンヤが、言葉を失う。

「ほんとは、ここにいるべきなのはクイントさんだったんです。怪我をしても、それ
も、生き残るべきなのはあの人たちの方で——」

「なあ、セルジオ」

ふつと、ゲンヤが視線を外して、絞り出すように行った。

「俺に、殴られに来たのか？」

「——ちが、そうじゃ……」

「いやそうだ。お前は俺に殴られに来た。自分の代わりにクイントが死んだ事を誰かに
責めて欲しくて、そして、一番適任だった俺のところに来た。そうだろ」

「そんなこと……………」

ない、と言い切れない自分がいた。

本当は、そうだったのかもしれない。謝りに行くなんて、自分のための言い訳で、ただ罰を与えられたかったのかもしれない。

どうしようもない『偽物』の自分を痛めつけたくて、ここまでやってきたのだろうか。セルジオはそれ以上何も言えない。

「悪い、セルジオ、俺はお前を殴るつもりはない。今となっちや確かめようがないが、それでもクイントがそんなこと望むはずもねえ」

「……………はい」

「あと、償いとかも、良いからよ。今はそう言うの、考える余裕ねえんだ」

「……………お忙しい時に、すみません、でした、ゲンヤさん」

最後に深々と頭を下げたその場から去ろうとした時、がつん、と何かセルジオの頭を強打した。

髪の毛の隙間を通ってつつ、と赤い筋が走り、顔の輪郭を伝って顎へと流れて、地面に雫を落とした。

「嘘つきー」

セルジオが顔を上げると、どろりとした瞳で、声の主を見て、また、息ができなくなる。

そこに、『クイント』がいた。

いや違う。いるのは娘のスパルと、ギンガだ。

ただギンガの髪型がいつものストレートのロングヘアではなくて、後ろで一つに結んだポニーテールになっている。リボンの色も、結ぶ位置も、クイントと全く同じ。

どんな気持ちで、彼女がその髪型にしたかなんて、わざわざ言葉にする必要があるのか。

ひゅつとまた何かが飛んできて、今度は肩に当たって地面で数度跳ねると、足元で止まった。

「おにいさんの、うそつき！ おかあさん、まもつてくれるっていったのに！」

「すばる、ちゃん……」

「わたしの名前よばないで！ おかあさんにつけられた大切な名前を、あなたが呼ばないで！」

足元で止まったものはナカジマ宅の玄関に飾ってあった集合写真で、その中では、クイントがいつかのように、快活な笑みを浮かべていた。

「スパル、やめろ、セルジオだって辛いんだ」

「じゃあなんで怪我してないの！ おかあさんは死んだのに！ なんであの人だけがしてないの!？」

「スバル……」

スバルがギンガとゲンヤの制止を振り切って外へ駆け出すと、セルジオの服を掴んでボロボロと涙を流し始める。

「かえしてよ！ わたしのお母さんを！ あんなに、やくそくしたのに！ まもるって！ だいじょうぶだって！」

「スバル、スバルやめろ！」

「だいつきらい！ おにいさんなんてだいつきらい！」

スバルがセルジオに拳を叩きつける。何度も、何度も、駄々をこねるように。写真の中のクイントは何も言わずに、その光景を静かに見つめていた。

雨の中を歩く。

「……………かかかか」

もう何が残っているかも分からなかった。

そこは以前メガーヌに聞いていたルーテシアがいつも預けられている託児所だった。メガーヌ達は長期の仕事などがあり、どうしてもルーテシアの面倒を見れない時には必ずそこに預けるのだと、そう言っていた。

「あの、えっと、ルーテシア・アルピーノって子、いますか？」

職員の一人に声をかけると、一瞬不思議そうな表情をされた後、首を傾げられる。

「ええと、ルーテシアちゃんの、お知り合いでしょうか？」

「はい、俺は——」

言いかけて、言葉に詰まる。

自分は、何だ。一体ルーテシアの『何』だと言うのだ。

結局言うに困って、目を伏せてしまう。

その様子に眉を寄せた職員がセルジオを怪しげに見つめる。

「おい、ちゃん？」

その時、躊躇いがちに声がかかった。

「ルーテシア、ちゃん」

「やっぱり！ おにいちやんだ！」

だつとルーテシアはセルジオの下まで駆け寄つてくるとびしょ濡れのセルジオの脚に抱きついて、嬉しそうに顔を擦り付けた。

「まあ、お兄さんだつたんですね！」

「えつと、そんなところ、です」

「じゃあ一応身分証の提示と、こここの所にサインお願いしますね！」

私その間にルーテシアちゃんの荷物取つてきますから、という言葉を残して職員が去っていく。

それを見送つた後、セルジオは手早く必要事項を記入すると、足元のルーテシアに視線を落とす。

「えへへー」

「ルーテシアちゃん、俺、濡れてるからさ」

「えー、たのしいよ？」

「服が濡れたらメガーヌさんに——」

「ママ?! ママはどうしたの？」

「メガーヌさんは——」

言いかけて、また息ができなくなる。

どの口が、そんなことを言うんだ。メガーヌの命を犠牲にして、ここにいくせに。それでも、その胸の軋みすら閉じ込めて、いつものような笑顔を浮かべてみせる。

「すこし、迎えに来るのが遅れるんだって、だから俺が代わりに」

吐き気がする。

「それにパパも仕事が忙しいらしくて、ちよつと会えないかもしれないけど」

吐き気がする。

「しばらくは俺がルーテシアちゃんの面倒を見るかもしれないけど、それでもいいかな？」

本当に、自分が気持ち悪くて仕方がない。

「いい、かな？」

「うん！ おにーちゃんとならいいよ！」

「そっか、じゃあ、取り敢えず帰ろう」

罪が、背負うべき責任が、少しずつセルジオを絡め取っていく。

ひとまずルーテシアを三課の仮眠室に寝かしつけると、セルジオの足は一人でにオフィスへと向かつていた。

ぱち、とスイッチを押して電気をつけると、一瞬で三課のオフィスが明るく照らされる。

あの日の、ジェイルの元へ全員で行った時から、何も変わらない。

「——畜生」

セルジオが呟いたと思つたら、目の前にあつた机を全力で蹴り上げた。魔力で強化された蹴りにただの安物の机が耐えられるはずもなく、簡単にひしゃげて部屋の端を転がっていく。

「——ねえー、セルジオくーん、ここの仕事手伝つてよー。」

ふと、幻聴が聞こえて、振り返るがそこに誰かがいるはずもない。

「黙れよ、黙つてくれ！」

がむしやらにセルジオが近くの棚を殴りつけると、書類の入ったファイルが溢れ、雪のごとく紙吹雪を舞い散らせた。

「——もう出来たの？ セルジオ君は物覚えが早いのね。」

「うるさい、うるさいうるさいうるさいッ！」

部屋の隅にあったコーヒーメーカーを叩き潰して、床に叩きつける。

——ん、このコーヒー美味しい。さっすがなのはちゃんねー。

——あ、ありがとうございますっ。

ただただ、手当たり次第に、目が着き次第に、本能の赴くまま、壊して、砕いて、殴つて、蹴つて、三課のオフィスで暴れるセルジオ。

——おい、セルジオー、パイ投げやらねーかー。

——セルジオ、訓練だ、少し付き合え。

——んお、みろよセルジオ！ 隊長の買ってくれたケーキめっちゃ美味そうだぞ！

——セルジオ君に頼らず自分で仕事しなさいっての。

——イタズラして悪かった！ 明日から真面目にやるから許せって、セルジオ！

——セルジオくん、こここの所なんだけど……。

思い出が詰まった三課を壊していく。まるで聞こえる声をかき消すかの様に。

「俺は、あの日から、母さんが死んだ日から、何も変わっちゃいない」

運が悪いなんて理由で死ぬ人なんか見たくなかった。

自分のように、親を亡くして悲しむ子どもを作りたくなかった。

誰かのために、戦える人でありたかった。

「何が守るだ！ 何が救うだ！ 何が悲しむ人を減らしたいだ！」

セルジオは叫ぶ。まるで自分を呪うように、慟哭するように。

「なにも、なにも守れてない……救えてない……減らせてない……！」

なのはを傷つけ、ティーダは救えず、そして、自分がメガーヌとクイントを殺し、同じ悲しみをする子どもを作った。

「なんにも、なんにも変わってねえじゃねえか……！」

誰もいない三課で、セルジオが顔を覆い、地面に崩れ落ちた。

「——俺は、無力だッ……！」

悲しくて、辛くて、折れそうになって、溢れた想いが、セルジオの瞳を濁らせる。

でも、それでも涙は出なかった。

まだ、雨は止まない。

別離

ルーテシア・アルピーノを引き取ることに決めた。

アルピーノ夫婦は親戚と疎遠だった。メガーヌ自身も早く家族を亡くしており、その夫も親戚つきあいほとんどなく、ルーテシアは所謂天涯孤独の身となっていた。

故に、セルジオはルーテシアを養うことを決意した。それが、自分にできる唯一の償いだと思つたから。

「じゃあこれで必要書類は揃つたと思うぞ」

「すみません、ありがとうございます、ゲンヤさん」

ペこりと頭を下げるセルジオ。

今二人は管理局の食堂の一角でルーテシアの引き取りについての書類について話をしていた。ギンガとスバルを引き取つた経験があるゲンヤが話を聞いてくれたのだ。もちろんセルジオは遠慮したのだが、ゲンヤに押し切られるように力を借りてしまつた。

軽く書類を纏めているセルジオにゲンヤが躊躇いがちに話しかける。

「なあ、セの字よ、ルーテシアはウチで預かつてもいいんだぞ。メガーヌは女房と仲が良

かってし、ガキどもだってルーテシアのことを迷惑には思うまい」

それに、とゲンヤが言葉が続ける。

「お前子どもを一人育てるってどういうことかわかってんのか？」

「……わかってます。俺だって、養子ですし」

「いいや、お前はわかってねえ」

ゲンヤがセルジオに向き直る。

「お前はルーテシアを養うだけじゃダメなんだ。『家族』にならなきゃなんねえんだ」

「家族……」

「時に喧嘩して、ぶつかって、でも一緒にいるのが当たり前で、それで代わりがないもの、それが家族だ。お前たちは、そういうものにならなきゃいけないんだ」

「……」

「飯食わせて学校に行かせるだけが家族じゃねえ。ちゃんとお前は、メガーヌの代わりにやんなきゃなんねえんだ」

「メガーヌさん、の」

セルジオが視線を落とし黙りこくってしまう。どうにもゲンヤは居心地が悪くて周囲を見渡して、ふと、やたらと自分たちを見ている視線が多いのに気づく。

(全部、セルジオを見てんのか)

ひそひそと何事かを呟きながら立ち去っていく局員たち。

それともそうだろうセルジオは三課唯一の無傷の生還者。管理局の一部では彼を『部下を切り捨てて逃げ帰った分隊長』と見る目があるのも事実だった。

(……気分悪いぜ)

ゲンヤが吸っていたタバコを携帯灰皿に突っ込むと小さく嘆息を一つこぼした。

「……悪い、年取ったら説教っぽくなっていけねえな。まあ、とにかく手が足りねえつて時はウチに連絡いれろ。いつでも面倒みてやるからよ。暇な時も顔見せに来いよ」

「お気遣いありがとうございます。でも、それはちよつと難しいかもですね」

「……スバルか」

「それにギンガちゃんだつて俺の事をよく思っていないみたいですね。顔は見せないほうがいいでしょう」

セルジオが書類をしまうと立ち上がる。

「もう行くのか？　今自宅療養中なんだろ、一緒に飯くらい——」

「いえ、ちよつと行くところがあつて」

セルジオが困つたように笑つて頬を指でかいた。

「あいつが、目を覚ましたらしいんです」



高町なのはが目覚めたことを伝えてくれたのはやはり、と言うべきか、意外に言うべきか、クロノ・ハラオウンだった。

『なんで連絡したのかはわかるだろう』

「……………ああ」

なのはが入院してから一週間。その間セルジオは見舞いに訪れたことはないし、恭也の一件を除けば近づくことすらしていない。

『なのはが、君に会いたがつてるんだ。せめて、顔だけでも見せてやれ』

「……………ああ」

『必ずだぞ。彼女は君を待っている。だれでもない、君を』

「……………そっか」

セルジオが小さく呟き、そして諦めたように表情を緩めた。

「じゃあ、ちゃんと終わらせなきゃな、自分の口で」

ゲンヤと別れ、一旦三課に戻り、そのあと一人、なのはの入院している病院へと向かう。ルーテシアはいない。ひとまず家の手配や受け入れの準備が整うまでは日中は託児所に行つてもらつている。

「……………雨か」

季節のせいかな最近はどうにも雨が多い。三課の玄関に置いてあるビニール傘を取つて開くと、雨の中へと一歩踏み出した。

さめざめと振り続ける雨は傘に弾かれて細かな音を立てながら表面を伝つて、地面へと落ちていく。

彼女とあつて自分は何を話せばいいのだろう、と考える。

あの日、全てが終わつた日、セルジオは自らの意思でなのはを傷つけた。エクリップスのせいもあつたらう、混戦状態だつたせいもあるだろう、けれど、たしかにセルジオは自分の意思でなのはを傷つけた。

恭也となのはを守ると約束した。けれどそれも守れなかつた。

いつか二人で誓つた夢があつた。けれどそれすらも他ならぬ自分の手で打ち砕いた。そして、何より自分が『人間』なんかじゃないと思ひ知つた。

味覚も視覚も触覚も、感情さえも人に劣つたなりそこない。フエイト・テスタロツサ

という『アリシア』にはなれなかったが、『人間』ではあったのとは違う。

セルジオは正真正銘の『ニセモノ』だ。

そんな自分が今更どんな顔で彼女に会えばいいのか。

「あの、この病院に、先日入院した管理局の魔導師がいると思うんですが」

「魔導師の方ですか？」

「えっと、まだ子どもで、髪は茶色の……」

「ああ、高町なのはさんですね。今はお友達が面会にいらしてらみたいですよ」

「そう、ですか」

受付の看護師から病室を聞くとエレベーターではなく階段でなのはの病室を目指して登っていく。

一段一段上りながら、ふと、セルジオは自分が拳を強く握りしめているのに気づいた。

(……怖い、のか、俺は)

彼女と会うのが、怖い。嫌われるのが、怖い。

いや違う、この感情が溢れてきた源はきつとそこではない。もつと許し難くて、深いところだ。

なのはの病室は5階にあった。管理局の若きエースというだけあって個室のかかなり上等な部屋を用意されているらしい。

個室の前に何人かの人がいる。

みんな知っている。

フェイト・テスタロッサ、八神はやて、ヴィータ、それにあの特徴的な赤髪はアミティエ・フローリアンだろうか。そう言えば一時的に裏技でこちらにやって来たとかそんなことを言っていた。

本当に彼女の周りにはぶっ飛んでいるというか、底抜けのお人好きが多いようだ。

少しだけ表情を緩めると、深く息を吸い込み、一步踏み出した。

「セルジオさん？」

最初に気づいたのはアミタだった。たった数度の間会って話ただけだったのに、どうやらセルジオのことを覚えていたらしい。

軽く頭を下げて病室へ向かおうとしたセルジオの足が止まる。

「何しにきた」

「……………少し話しに来たんです、ヴィータさん」

「目が覚めない時は一度も来なかつたくせに、目を覚ました途端見舞いに、か。ハン、いい身分だな」

「ヴィータセルジオさんだつて忙しかつたんやよ」

「忙しかつた?! それでも一度も顔見せれないとかあるわけねえだろ! こいつはなの

はの事なんかどうでもいいんだよ！ だからこうやって——」

「ヴィーター！」

セルジオは何も言わない。ただ、黙り込んだまま、扉の側にいるフェイトへと視線を動かした。フェイトが小さく笑んで扉の前から退いた。

「会ってあげて下さい。あんまり長くはダメですけど、たぶん喜びます」

「……ああ」

セルジオが扉に手をかけて、小さく、小さく息を吐き出すと、ゆつくりと扉を開いた。そして、それまで考えていた全ての思考が吹き飛んだ。

真つ白ながらんどうの病室。規則正しく響く機械音、繋がれた無数のチューブ。病室が薄暗いのは外から入る光がほとんどないからか。

そして、彼女は——高町なのははベットで半身を起こして、外を見つめていた。決して晴れることのない、雨雲に覆われた空を。

その姿は、どこまでも物悲しく、儂く、嫌になる程美しい。

最初に何を言うべきか考えながらここに来たのに、もう何も言い出せない。何を言うべきか、言わないべきなのか。顔を見せていいのか、近寄っていいのか、それすらもわからない。

「……………セルジオくん」

小さな声だった。弱々しい、閉じきった病室でもギリギリ聞こえるようなそんな声。きつとそれ以上大きな声は傷に障るのだろう、なんせ彼女は胸を突き刺されたのだ。

「えつと、久しぶり、になるのかな」

「……………そうだな」

彼女はあの時のことをどれ程覚えていたのだろうか。全部覚えているのか、それとも全て忘れてしまっているのか、部分的に覚えているのだろうか。

「取り敢えず座らない？ 立ち話もなんだし」

「いや、いい。長居する気もないしな」

「そっか」

そこまで話して、ふとセルジオが一つのこと気がついた。

なのはの髪が短くなっている。今まではサイドポニーにしていただけにそこその長さがあった亜麻色の髪が、今は肩口までも届かない程の長さになっている。

(俺が、斬ったんだらうか)

セピアと似ていて、思わず母親の姿を幻視したなのはの髪型。似合っているって言うたら嬉しそうなのは髪を触っていた。

それが何のせいなのか、それすらも覚えてない自分に嫌気がさした。

(——もう、なんだっていいか)

どろりとした瞳でなのは見つめる。

「あ、あのさ、あそこで別れる前に、『聞いて欲しいことがある』って言ったの覚えてる？ その件で私言いたいことがあるんだ」

「私ね、セルジオくんと——」

「お前『教導隊』に行け」

なのはの言葉を遮ってセルジオが言葉が続ける。

「現役に復帰するなら教導隊に行け。辞令もレジアスさんに頼んで取ってある。たぶん向いてるよ、お前は。クイントさんたちもよく褒めてたし」

「——」
「そもそも三課ウチにいるのが間違いだっただ。もつと早く、お前は出て行くべきだった」

高町なのはは優秀な魔導師だ。今は若き『エース』候補だとかそんなことを言われているが、三課でなければ、それこそ『本局』所属であればもつと活躍できただろう。

もしかすると今の年でも『エースオブエース』だなんて呼ばれた未来もあつたかもしれない。

なのはが言いかけた言葉を飲み込んで、へにやりと笑った。

「そ、そっか。じゃあセルジオくんを待たせないように急いで復帰しなきゃだね」

強がるように、誤魔化すように笑みを浮かべるのは。誰がどう見ても無理してて、作り物の笑顔。けれど、そんなことにすら頓着せずセルジオは無慈悲に言い放った。

「いや、俺は行かない。教導隊に行くのはお前だけだ」

なのはが言葉を失う。

「どう、して……………」

「俺は三課に残る。やらなきゃいけないことがあるんだ」

「なら私も——ッ」

「動かない方がいい。傷に障るぞ」

なのはが思わずセルジオに駆け寄ろうと僅かに身動きしただけで、苦しげな悲鳴を漏らしてベッドに倒れこんだ。

あつという間になのはの顔から血の気が引いていく。

「要件はそれだけだ」

「待ってセルジオく——うぐう」

背中を向けたセルジオをなのはが呼び止めようとしたが、最後まで言い終わることもできずに、荒い息で胸を抑える。

「セル、ジオ、くん……………」

何かを訴えかけるように水晶の瞳がセルジオの背中を見つめる。けれど、セルジオは

振り返ることはせずに、ただ、最後に一言だけ彼女へと言葉をかけた。

「達者でな、高町さん」

そう、呼んだ。

「あ——」

なにかが決定的に壊れた音がした。

セルジオが病室を出て行くと、扉の隙間からなのはの様子を見たフェイトたちがなのはへと駆け寄った。

視界の端にそれを捉えながら、その場から立ち去ろうとして、声がかかる。燃えるような赤髪の女性、アミティエだ。

「それで、いいんですか」

「……………良いんですよ。あいつを支えるべきなのは、あの子達ですから」

ふっと物憂げにアミティエが目を逸らす。

「セルジオくん！　なんで、なんで何も言ってくれないの！」

「なのは、ダメだって身体が……………」

「そんな泣きそうな顔して！　悲しそうな顔でお別れなんてできるわけない！」

「ダメやてなのはちゃん、一旦落ち着いて」

「なんで、なんで頼ってくれないの！ 私たち、相棒だったんじゃないの！」

なのはが病室の中から、痛みをこらえて必死に叫ぶ。友の制止も聞かず、ひたすらに。

「セルジオくん！」

けれど、その声がセルジオに届くことはなかった。

『父』と呼ばびたくて、でもなんだか照れ臭くて、呼べなかった人がいた。まだ教えて貰いたいことが、返したい言葉がたくさんあった。

大切に思っていて、姉のように感じていて、感謝の言葉も、想いも伝えきれなかった人たちがいた。

かけがえのない仲間たちがいた。良い人ばかりで、自分のことを気にかけてくれた人達。

初めて特別に思っ、笑顔に見惚れて、隣にいと安らぐ少女がいた。これからも一

緒にいたいと思っていた。

けれど、もうそれを取り戻す術はない。

時計の針は戻らない。

辛くても進むしかないのが、人生だ。

これが今回の事件の顛末で、これ以上何かが進展することはない。

そしてセルジオは三課に一人残されたまま、一年の時間が過ぎた。

幕間

『欲望』とは人を動かす原動力である。

人は遍く何かを望み、叶えんとする。

あれが欲しい、これがしたい、そう言った何かを強く欲する心、それが『欲望』。

人類の歴史は『欲望』の歴史だ。

もつと早く、もつと強く、もつともつともつと———そういう、求める心こそ人間に生まれた時からあるもので、原初の感情である。

であるならば、『欲望』に正直であるということは、かえって人としては正しいあり方であるとも言えるのかもしれない。

その定義に乗っ取ればジエイルはどこまでも『人らしい』人間だった。

「まあ、一先ずはこれでいいだろう」

ジエイルは研究所の培養液の中で眠る自身の作品の一つ、デイエチの調整を終えて目

の前の機械を操作した。後はマシンが自動的に怪我を治癒し、デイエチを目覚めさせてくれることだろう。

「……デイエチが落とされたのは意外でした」

側に控えるウーノの言葉にジェルイルはふむ、と声を漏らす。

「そうかね？」

「デイエチは射撃特化のナンバーズ。『高町なのは』とはバトルスタイルも似ており、AMF下で戦闘を行ったり以上、負ける要因はなかったはずでした」

「しかし実際は彼女にダメージを与えたに留まり、セルジオ・アウデイの元に行くのを許してしまった、と」

「確かに彼女の魔力量は多くAMFでもある程度魔法は使えるでしょう。それにしたとしても——」

「なんだい随分今回は執着するじゃないか、ウーノ」

「——っ、そんなことは、ありません」

ウーノは基本感情を乱さない。

それは彼女が初期の戦闘機人であるから感情が薄いというのもあるが、彼女は自分を『機械』であるべきと思っているのだ。故に敢えて残した『人間』の部分を否定する。

それはジェルイルからすればつまらない事だが、こうした変化を見れるならば悪くない

と思った。

「何、責めている訳ではないさ。私と同じく君も心を向ける対象を見つけたならばそれは良い傾向だ」

くつくつと笑うジェイルを見て、ふと、ウーノが一つのこと疑問を抱く。

ジェイル・スカリエッティはセルジオ・アウデイという存在に深い興味を抱いている。先ほどのジェイル自身の言葉を借りるなら、執着してると言ってもいいだろう。

今回の一件はセルジオに大きなダメージを与えた。だが、言ってしまうとそれだけだ。

ほかに得たものなど微々たるもので、いや、そもそもジェイルは今回の件を何かを得るために起こした行動ではない。

ただセルジオと顔を合わせるためだけに、今回の一件を起こしたのだ。

いったい、セルジオの何がジェイルを惹きつけたのだろうか。

ウーノはそれが『気になって』、ジェイルに尋ねる。

するとジェイルは深い喜色を浮かべて答えてくれた。

「彼はね、私と同じなのさ」

「ドクターとですか？」

その通り、とジェイルは頷いた。

ジェイルは管理局の上層部『最高評議会』と呼ばれる者たちに、遺伝子サンプルを元に作られた存在だ。

セルジオは違法科学者達によって生み出されたプロジェクトFのなり損ないだ。

自らの手駒として作り出された程のいい『モノ』、という意味ではセルジオとジェイルは何も変わらない。

ただ違ったのはその後、ジェイルは生まれついて『知識欲』を植え付けられ、『無限の欲望』を抱くに至った。

ならば、セルジオ・アウデイは？

くつくつと、ジェイルが身を歪める。

「彼は、親が死に、その願いを叶えるために、そう、死ぬ間際の『叶うはずもない夢』を追いかけて、『無限の欲望』を抱いた」

ジェイルが髪をかきあげて、笑う。

「私たちは生まれは同じのはずなのに、正反対の過去を辿り、そして今同じ『無限の欲望』を抱いている。なんとも愉快じゃないかッ！」

ジェイルが先天性の『無限の欲望』ならば、セルジオは後天的な『無限の欲望』だ。

セルジオにはその夢を追わない権利も、自らの夢を見る権利もあった。けれど、彼はそれを投げ捨てて、叶わない夢を追いかけた。

まるで、届かない星に手を伸ばすように。

「私は見てみたいんだよ、ウーノ。私と正反対に進んだ者の欲望が何処へ行き着くのか、そして、どこまでやれば折れるのか、知りたくて知りたくて仕様がなない」

ウーノが静かにジェイルに問うた。

「……………一体、どこまでがドクターの計略だったのですか？」

一瞬ジェイルは、瞠目したものの、すぐにいつもの深い笑みを浮かべる。

「さあ、どうだろうね」

ジェイルはそれ以上何も語らずに、手の中の端末に目を落とした。

「さてそろそろ今の研究も大詰めだ。まだ安定性はないが……」

すつとジェイルが背後の無数に並んだ培養ポッドのいくつかに目を向けて、歪みを深めてくつくつと身を揺らした。

「素体はあるからね、心配はいらないだろう」



暗闇の中に三つのモニターが浮かんでいる。

『航空魔導隊三課の壊滅。これもお前が手綱を握れなかった結果だ、レジアス』

『大切な手駒を失い、我らの計画にも多少の影響が出た』

『多少はジェイルの研究に還元できるのが不幸中の幸いか』

『今回のことは不問とするが、以後細心の注意を払い行動せよ』

「……は」

浮かぶモニターは三つ。

書記、評議員、議長とそれぞれ一人ずつ割り当てられている。

彼らこそが時空管理局のトップの一角、『最高評議会』。レジアス・ゲイズにとっては事実上の上司ということになる。

今この場にレジアスはいない。彼は執務室から通信でこの会話に参加しているだけであり、最高評議会とは顔を合わせたこともない。

ただ『地上の平和』の為に彼らの元で手となり足となり動くのが今のレジアスの役目である。

『レジアス、今日貴様を呼んだのは他でもない『セルジオ・アウデイ』のことだ』

「——はい」

『奴は我らの計画の主要たるものを掴んでいる可能性がある』

『左様。本来は首都防衛隊に任せ適当なところで終息させるつもりであったが、もはや
そうも言つてられぬ』

『くれぐれも奴には他言せぬよう厳命せよ』

『幸い奴はプロジェクトFの残骸、人の言うことに逆らうことはあるまい』

『ああ、例えその寿命がもう尽きるのだとしても、奴にはしっかりと首輪をつけておけ』

『お、お待ちください！ 今の言葉は、セルジオの寿命がもう尽きるとはどういうこと
ですか！』

聞き捨てのらない言葉にレジアスが慌てたように声を上げる。

『ほう、レジアス、貴様はまだ知らなかったか』

『良からう、ならば教えてやろう』

『セルジオ・アウデイは一年前に『エクリプスウイルス』に感染している』
「な———」

エクリプスウイルス。その名前をレジアスも知っている。一時期、最高評議会が『非
魔導師であっても戦力にできる』という点に着目して計画を立てたものの、結局成功例
が少なすぎて頓挫した計画だった。

「な、そんな、治療は……」

『不可能だろうな。もう奴は手遅れだ』

『ECに適合できる人間はほんの一握り。そしてその適合できる人間も、初期、中期と侵攻が進むたびに正気を失い、死に至る』

『そして『セルジオ・アウデイ』はそのエキリプスウイルスの侵攻度『末期』。あと一年も持てば良い方だろう』

『あわよくば貴様の後継者にと考えてはいたが……代わりはいくらでもいる』

セルジオ・アウデイは既にECに感染している？ 侵攻度は既に末期で、残りの寿命はたった一年？

(そんな、ことが……)

セルジオは親友たちの忘れ形見だ。せめてこの手を汚していたとしても、奴だけには幸せになってもらわなければならないと、そう考えていた矢先に、これだ。

これも、罰なのだろうか。

目先の人を犠牲にし、親友を欺いていた罰が、今レジアス以外を襲っているというのか。

『レジアス、セルジオ・アウデイに気を配れ。奴に怪しい動きがあればしつかり処理しろ、良いな』

「——私、は」

頷いて良いのか。自分はこのままこの者たちについて行って良いのか、本当にそれが友と誓った『地上の平和』に繋がるのだろうか。

レジアスが言葉に詰まり、その心の矛先が鈍る。

『どうした、レジアス、今更後悔しているのか』

『こうした事は初めてではないだろう。まさか、他人はできてても知人は嫌だというのはないだろうな』

その言葉にレジアスが拳を握り、歯を噛み締めて、絞り出すように声を出した。

「わかり、ました……。場合によっては、私が『セルジオ・アウディ』を、処理します」
『それでいい。それでこそ『英雄』だ、レジアス』

まるで嘲るかのようにレジアスと、亡き親友の若き頃の二つ名を使う顔なき声たち。

『もうよい、下がれレジアス』

「――は」

モニターの中央にあったレジアスのホログラムが消える。

『しかし『エクリップス』を今更使うものがないとはな。あの計画を切り上げるのは時期尚早だったか？』

『いいや奴は『完成品』ではない。そもそも『ゼロ因子適合者』になれる器でもなければ、その『種』はとうの昔に失われている。考えるに値せん可能性だ』

『それよりもエルトリアから持ち帰られた『フォーミュラ』、アレこそが私は興味深い』
『無機物を操作する力、か。今の管理局の凡夫達に扱いきれるのか』

『無理であろうな。しかし我らが管理すれば使えない技術でもないであろう。確か適当な計画がレジアスのものにあつた筈だ』

『『アインヘリアル』か。興味深いな、アレの素材には第23管理世界からのモノを使う予定であつたが、試してみるのもよいかもしれんな』

『しかし不確定要素が大きい。フォーミュラ自体にもまだ解明できてない点も多く、我らの手駒以外に任せるのは不安が残る』

『ならばエルトリアからの技術者——確か拘束中の犯罪者がいたな、アレを使えばよい』
『後は誰に任せるかだが……、それこそ、我らの『王』に任せるべき事ではないか？』

『ふむ、興味深いが、まだ行動を起こすには早い。今は様子を見る必要があるだろう』
『我らの残されて時間は余りにも少ない。故にこそ、我らは慎重に行動しなければなら

ない』

『全ては、管理世界の秩序のために』



最近窓の外を見る事が多くなつた気がする。

なのはの病室は五階に位置するためか、海鳴の自室よりも随分と空が近い。また病室ではレイジングハートと話すか、テレビを見る以外には特に出来ることもなく、従つてなんとなく空を見てしまう、というわけだ。

「……………青いなあ」

今日の天気は晴れ。先日の雨続きが嘘のように晴れ渡り、今はどこまでも青い空が広がっており目に痛いほどだ。

もし怪我していなければ今頃あの空を飛んでいたのだろうか、と考えて、追隨して一人の青年な思い出された。

——達者でな、高町さん。

セルジオが病室に見舞い——なのはに辞令を言い渡しに来たのはもう一週間前の事

となる。

その間、セルジオからは連絡も無かったし、もちろん病室に訪ねてくる事だつてなかった。

しばらくは「もしかして気が変わるのでは」と期待していた事もあつたが、一週間経つた今では、そう思う事もほとんどなくなつた。

きつと全てが終わつたあの日に、閉じられた壁の向こうでセルジオと別れてしまつてから、なのは達の関係は終わつてしまつたのだろう。

ぼうつと、なのはが寝転んだまま胸元に手を伸ばして、いつもの感触を捉えることができず、包帯の巻いてある傷口を軽く触つてしまう。

「——ッ、また、やっちゃつた、な……」

一瞬痛みに顔を歪めたなのはが、誤魔化すように空いていた左手で顔を隠した。

「もう、あのネックレスは無いのに」

初めてセルジオと出かけた日、セルジオに買ってもらつたシルバーのネックレス。

何でか凄く大切に肌身離さずつけていた。

後にセルジオはクイント達に離し立てられたから買つてくれたのだと知つてからも、大切であることは変わらなかつた。

しかし、そのネックレスは目を覚ました時には既になかつた。

起きた時に慌てて周りの友人達や看護師に聞いてみたが、皆首を振るだけでなのはの
求める答えをくれる人はいなかった。

腕で隠した向こうの瞳がほんの少しだけ潤みそうになって慌てて目元をぐしぐしと
擦った。

「涙脆くなってるなあ、私」

ふつとなのはがまた空へと視線を送る。

昔、仲間達と守っていた空は、今日もどこまでも青かった。

四章 新暦71年 《星を見上げて》

再起動（リブート）

朝起きてまずするのは朝食を作ることだ。

「よつと」

卵を割りベーコンと一緒に油をひいたフライパンに放り込むと、じゅわわと油が弾けた。そこに少しの水を入れて蓋をする。ベーコンエッグができるのを待つ間にトースターに食パンを二枚入れるとプチトマトとキャベツを洗って、キャベツの方は茹でておく。

そうこうしているとトースターがパンが焼けたと騒ぐのでパンを取り出すと手早くマーガリンを塗り、ベーコンエッグを野菜と一緒に皿に並べる。

「まあ、こんなもんか」

ベーコンエッグにトースト、茹でたキャベツにプチトマト。後は食後にヨーグルトを出すつもりでいる。

これでもなら味覚がイマイチはつきりしないセルジオでもほとんど味見無しでそれなりの味にできる。

「ルー、起きろー、遅れるぞー」

リビングの隣の寝室でまだ寝ているのですルーテシアに声をかけると、もによもと目をこすりながらルーテシアが起きてくる。腕の中には以前セルジオのあげたくまのぬいぐるみが抱かれている。

「おはよ、おにいちゃん」

「おはよう、ルー。早く顔洗って朝食にしよう」

「ん……………」

ルーテシアが未だ覚め切らない意識のまま洗面所に向かう。

その間にコップに牛乳を注いでいつものルーテシアの席に置いておいてやる。

「……………あらった」

「ん、そうか。じゃあ食べようか」

幾らか意識がはつきりしたらしいルーテシアはいつもの席につくとパンに手を伸ばそうとして、対面の手を合わせていたセルジオを見てハツとしたように自分も手を合わせた。

「いただきます」

「いただき、ます?」

セルジオの言葉を真似したルーテシアは今度こそパンに手を伸ばして一口かじる。

それはルーテシアの兄の奇妙な所作だった。兄はいつでも食事の前に手を合わせて「いただきます」と食事に手をつける。

きつとミッドチルダの文化ではないだろう。少なくともルーテシアの行く託児所に同じことをしている人はいない。

別に強制されるわけでもないがルーテシアもなんとなくそれを真似していた。

「こら、ルー口元が汚れてる」

「んむんむ、とれた?」

「ああ取れた。綺麗になってるよ」

食事を終えると、寝室のベッドに座っているセルジオの膝の間で髪をすいて貰う。

壊れ物を扱うかのようなひどく丁寧で、恐れるような触り方。忙しい兄が自分の事を大切にしてくれていると実感できるその時間がルーテシアはとても好きで、同時になんだか距離があるような感じがして、少しだけ苦手だった。

「ねえ、おにいちゃん」

「ん?」

「今日はおむかえおそくならない?」

「うん、大丈夫。今日はちゃんとみんなと同じ時間帯に帰れるように迎えに行くよ」
「そっかー」

ルーテシアが髪を梳かして貰いながら足をぱたぱたと振った。

セルジオに迎えに来てもらうのは嫌いではない。周りの友人たちから「あれがルーテシアちゃんのお兄ちゃん？」と驚いて貰えるのは気分がいいし、兄が管理局員、しかも武装隊である事も羨ましいと言われた事も多い。

けれど、それでも、ルーテシアはしばしば思ってしまった。

「ママとパパ、まだ帰ってこれないのかなあ」

ルーテシアも最初は両親を恋しがって酷く泣いていたが、一年もすればその回数は減っていく。だと言っても甘えたい盛りなの少女が親と引き離されて寂しくないはずがないのだ。

「ねえ、おにいちちゃん、ママたちのおしごとってまだかかるの？」

「……………たぶん、そんなに遠くないうちに帰ってこれるよ」

「ほんと?!」

「こら、こつちむいたら髪、できないだろう」

「……………はい」

髪を整えてもらおうと髪をリボン——以前おねえちゃんのはに買ってもらったもの——を使って

髪を結んでもらう。

「えへへ」

くるりと姿見の前で回ると気分良さそうに声を漏らすルーテシア。

その隣で既にワイシャツ姿だったセルジオはネクタイを締める。ハンガーにかけてあった上着に袖を通すと卓上に置いてあったバイクのキーを取った。

「ルー、そろそろ行くけど準備できてるか」

「あ、うん、すぐ行くー！」

ルーテシアは玄関の兄に返答して、ふと先ほどのことが思い起こされる。

振り返った時に見えたセルジオの表情は、ほんの一瞬だけ、酷く悲しそうな表情をしているように見えた。

（なにか、いけないこと言っちゃったかな）

けれどそれも一瞬のこと。驚きで瞬きした時にはもう既にいつものような感情を伺わせないものへと変わっていた。

（きのせい、だよね）

だってセルジオが弱音を吐くところなど一度も見たことがない。きつとルーテシアの勘違いだったのだろう。

バックを持って駆け出すルーテシアはセルジオからヘルメットを受け取ると手を繋

いで駐車場に向かった。

セルジオがルーテシアを引き取ってから一年。

まだルーテシアは自身の両親に二度と会えないことを知らないままだった。



航空魔導隊三課。

それはかつてストライカー級魔導師であったゼスト・グランガイツを隊長として組織された部隊であり、ミッド随一の実力派部隊だった。

しかしそれも既に過去のこと。

今はゼストの後継として元分隊長のセルジオ・アウデイを隊長として再編成が行われている。

だが一度全滅した部隊、しかも部隊長は19歳の一尉。そんな部隊に志願して入るも

のはおらず、セルジオ一人で三課としての機能を回しているのが現状だ。

セルジオが一人地上本部を歩いていると、見知らぬ人たちの視線を背中に感じる。

（俺もとんだ有名人になったもんだな）

たった一人の て武装隊にいる変わり者。部下を死なせて逃げ帰り、そしていなくなつた上司の後釜にまんまと収まつた若輩。

それがセルジオを見る周囲の目だ。そしてそれは何一つ間違つておらず、セルジオの現状を表す言葉だ。

だからセルジオも否定しない。

しばらく歩き地上本部の高層、中将クラスの執務室までやってくると軽く扉をノックする。

「入れ」

扉越しに聞こえた低い声に従つて扉を開け中に入る。

柱のように天井まで聳え立つ本棚の向こうにいるのは、神経質そうな顔をした小太りの男と、その側に控える一人の眼鏡の女性。

地上本部の司令官の一人、『レジアス・ゲイズ』と、その娘オーリス。

今のセルジオの——正確には三課の——直属の上司に当たる人物である。

「お久しぶりですね、アウディ一尉。義妹いもうとさんはお元気ですか」

「はい、お陰様で」

「そうですか。料理でしたらまたいつでも教えます。何かあれば遠慮なく連絡を」

「ありがとうございます、助かります」

「……少し疲労が見て取れますね。ちゃんと寝ていますか、身体は資本です。大切にしなければ」

「淡々と告げるオーリスだが、その言葉の裏にセルジオを気遣うような意思が潜んでいる。」

セルジオが薄い笑みでオーリスに答えると、視線をその隣のレジアスへと移す。

「それで今日は何のご用でしょうか。先日回していただいた案件なら報告書を提出したと思うのですが……」

「ああ、それは既に確認した。良くやってくれた、迅速な対応に感謝する」

「それが三課ウチの仕事ですから。まあといっても今は俺一人なんです」
ふつと自嘲げに表情が歪む。

「……エクリプスの侵攻は、そこまで見て取れん、か」

そう考えてレジアスが首を振る。

見てわかるならそもそもゼストがセルジオの異変に気付いていただろう。きっとセ

ルジオはエクリプスの侵食を他人に感じさせることはなく騙し切る。

（セルジオの寿命が最低あと半年足らず……）

最高評議会にセルジオについて教えられたのはおよそ半年前。

それからなんとかエクリプス治療の方法を探したものの中将とは言え、魔法もなく、あてになる人脈もあるわけでもないレジアスでは何も掴むことはできなかつた。

最高評議会の後ろ盾こそあるものの、今回の件で彼らがレジアスが手伝ってくれることとはないだろう。

「レジアスさん？」

ふと、セルジオに名前を呼ばれてレジアスが顔を上げる。

まだセルジオとの話の途中で少し考え込んでしまっていたらしい。

「すまん、用はお前の顔を見ておきたかったのもあるが、三課の今後について少し、な」

レジアスが机に肘をついて腕を組むと、セルジオの表情が硬くなる。

「知つての通り、三課は一年後に解体となる。それは事前に通達しておいた通りだ」

「はい。運用期間が最低十年を想定したためそこまでは部隊を存続させなければならぬ、と聞いています」

「そうだ。故に今貴様一人だけでも部隊として運用している」

本当は何をするかわからないセルジオを監視する意味も込めて寿命が尽きるまで三

課に押し込んでいるだけなのだが、それをセルジオは知る由もない。

「しかしかといつて今のようにな、お前一人を部隊に置いておく、というのは外聞も悪い」
「はあ」

「故に、貴様に一人魔導師を預ける。せいぜい上手く使うといい」

「え、新人、ですか？」

「有り体に言うとうそだ。お前が育て、助手として扱き使え」

「む、無理です！」

セルジオが叫んだ。

「今の三課にそんな余裕はありません！　そもそも、残り運用期間が一年なのに、新人だなんてそんなの無茶苦茶——」

すつとレジアスがセルジオを手で制する。

「案ずるな。完全な新人と言うわけではない。むしろ、名前は間違いなくお前も知っているだろうさ」

セルジオが眉を寄せると、レジアスが忌々しげに鼻を鳴らした。

「本局からの出向だ。しかもよりもよつて希少技能保持者だ。忌々しい」

「レアスキル持ち？　次元航行隊が良く許可しましたね」

「なんでも本人の希望だそうだ。実地での経験を積みたいと、あの三提督経由で言つて

きおった」

とにかく、とレジアスが前おく。

「しばらくはお前には出向してきた魔導師と共に動いてもらう。異存はないな？」

「……はい。レジアスさんがそう言うなら、俺は異論を唱えるつもりはありません」

翠に他の色合いが混ざったような濁った瞳のセルジオ。レジアスは僅かに目を伏せて息を吐くと、隣に控えているオーリスに声をかけた。

「奴を呼べ、今はちようどこにいただろう」

「良いのですか？ 正式な配属は来週からですが」

「構わん。ウチのを何度もここに足を運ばせることを考えればアレを呼ぶ方が良いだろう」

わかりました、とオーリスが頷くと端末を操作して、通信を繋ぎレジアスの執務室に来るように伝えた。

「レジアスさん、件の新人、俺も知ってるって言ってましたけど……」

「ああ、確か二年前か？ お前が高町空尉の救援に行った際にその場で指揮官をやっていた魔導師——いや、騎士か」

「騎士、ベルカの、騎士」

一人、思い当たる人物がいる。

数年前に一度出会い、その後なのはを通して何度か話したことがある、ベルカ式の魔法を扱う『騎士』。

「失礼します」

独特のイントネーションで扉が開かれ、声の主がレジアスの執務室に姿を見せた。

「ご無沙汰しています、レジアス・ゲイズ中將、オーリス・ゲイズ二等空尉」

小さな背丈。ブラウンのショートヘアは『陸』の茶色の制服の肩あたりまで伸ばされていて、髪を一房纏める髪留めが彩っている。

そして、此方を見つめる瞳は深い海の青。

「そして、お久しぶりです、セルジオ・アウデイー尉」

その少女を知っている。何度か話したこともあったし、何より『彼女』と別れた日、目の前の少女もそこにいた。

「『八神はやて』二等陸尉、現着しました」

『夜天の魔道書』最後の主。守護騎士たちの主で、SSランクの埒外の魔導師ランクからついたあだ名は『歩くロストロギア』。

「よろしゅう、おねがいます」

そうして少女は——八神はやては、にこりと人当たりの良さそうな表情を浮かべた。

奪われたモノ

人気がない早朝の修練場に人影が一つ。

「ゼファー、セットアップ」

腕のブレスレットに声をかけると一瞬でセルジオの姿がバリアジャケットへと変わる。

赤と黒のガントレット、以前とは異なる黒のコート。ゼファーがメカニカルな部分を残した槍へと変わり左手に握られる。

「——マルチタスク並列思考、起動」

最大十個使えるマルチタスクのうち三個をECの制御に回して、残りを戦闘に使用できるように解放する。

セルジオの翠の瞳に僅かに赤みが差したが、それだけで破壊衝動が漏れ出すこともない。

「身体強化発動——異常無し」

魔力を流して身体に異常がないことを確認すると、そのまま解析、槍への魔力付与、その他基本的な魔法も問題ないか確認する。

「じゃあ、後は砲撃と短距離転移だな」

すう、とセルジオが息を吐くと、いつものようにマルチタスクに負荷をかける無茶な魔法構築ではなく、丁寧に魔法を組み上げて行く。

「演算式駆動開始——短距離転移待機」

目視の範囲で座標を取得、構築された魔法式に座標を打ち込み、魔導師の心臓とも言えるリンカーコアから魔力を組み上げる。

「座標代入、演算完了——短距離転移——ツ、ぐ」

そして最後に魔力を流しこもうとして、びきり、と胸の奥が鋭い痛みにも襲われて、魔法式共々魔力が霧散した。

「はあ、はあ、く、そ……」

痛みに表情を歪めたセルジオが膝をついて荒い息を漏らす。

一年前、ジェイルの元から生還してからずっとリンカーコアの調子がおかしい。

解析や強化、加速などの適性があるか瞬間的な魔力の必要量が少ない魔法は使えても、そうではないもの、砲撃や転移などの魔法を使おうとするとリンカーコアが魔力を引き出すのを拒否するのだ。

理由はわからない。ただおそらくエクリップス関連だと察しはついてはいるものの、まるで身体の使い方を間違えているようなちぐはぐさが付き纏う。

「病院にでも、かかれりや、薬、なんだろうけどな……」
胸を抑えてボヤク。

以前は『教授』がいた。体の変調があれば彼の元を尋ねて検査してもらい、薬を処方して貰うことができた。

けれど『教授』は仮の姿であり、その正体が『ジェイル・スカリエツィ』と知った今はそうもいかない。

ジェイルはセルジオを騙して三課を壊滅させた。セルジオから全てを奪ったのはジェイルであり、その相手に力を借りるなどあり得ない。

そも彼は既にその痕跡を完全に消して、霞のように消えてしまった。コンタクトを取ろうにも取ることはできない。

故にセルジオは自分の今の身体の状態について理解が及んでいない。

それは最高評議会も同様であり、セルジオの身体の件もジェイルに研究データを提出させたからこそ知り得ている。

その後魔法の確認を終えると、始業の時間になるまで槍を振り、拳を握り、今の自分の技術に衰えがないかを確かめて行く。

幼い頃から何千、何万と繰り返してきた一連の流れ。

充分に魔法が使えないならせめて体術だけは万全に。今は一人だけで戦うわけではないのだから。

「……そろそろ二人が来る頃か」

水を流し込んでバリアジャケットを解除してシャワールームで軽く汗を流すと制服に着替えてネクタイを締める。

「俺は、『セルジオ・アウデイ』だ」

ばしん、と頬を軽く叩いて気持ちを入れ替える。

気づけば毀れそうになる心の刃を保つ為、溢れそうになる自責の念を漏らさぬように、自分という存在を思い出す。

このルーティンできちんと『自分』を維持する。

セルジオがオフィスに戻ると、そこには既に二人の人影があった。

「あ、おはようございます、セルジオ一尉」

「おはようですよ隊長さん！」

軽い敬礼とともに声をかけてくれたのは先日三課に配属された八神はやて。ちょうど今来たばかりだったのかデスクの上の整理をしているところだった。

そしてそれにはやくはやての融合機、リインフォース・ツヴァイもふよふよ宙に

浮かびながら敬礼を見せた。

「もう来てたんですか、八神二尉にリインフォース空曹」

「もう、隊長さん！ リインのことはリインで言いつて言いつてるですよ！」

「いえ、公使を分けるのは大切ですから」

「でも今はここにははやてちゃんと隊長さんしかいないですよ？」

「それでも業務中ですから」

不満そうに頬を膨らませるリインに軽い笑みを返してセルジオは自分のデスクについて今日の仕事の確認を始める。

「はやてちゃん、隊長さんが冷たいです」

「そうは言っても、セルジオ一尉の言つとることもそんなに間違つとらへんからな……」

「それでも名前くらい読んでくれてもいいじゃないですか」

「まあそれもそうなんやけど」

手のひらサイズのリインに袖をぐいぐいと引かれながら、はやてが空いたもう片方の手で頬をかいた。

（いい人、なのは間違いないんやけどな、セルジオさん）

三課に配属されて早二週間、その間セルジオといくつかの事件に当たってきた。どれも聞き込みや犯罪者の聴取といったもので、まだ戦闘を共にした訳ではないが、それだ

けの期間があれば大まかな人柄は掴める。

セルジオははやてを元犯罪者という事で偏見の目で見たりしないし、融合機——言つて見ればただの機械のラインを見下したりもせず、ちゃんと一人の局員として扱つてくれる。

そういう面ではセルジオは間違ひなく『良い人』だ。

(でもなんちゆうか、なのはちゃんに聞いていたのとはちよつとちやうな)

なのはに聞いていたセルジオ評は、『無茶しがちだが頼りになる人』、『優しくて人によく頼られる』だったのだが、どうにも今のセルジオとは少し違うように思えた。

(なんとか仲良くなれへんものかなあ)

ううん、とはやてが唸り、ラインの文句に相槌を返していると、そこまで無言でキーボードを叩いていた、む、と小さく声を漏らした。

「どうかしましたか？」

「いや、少し次の案件で調べなきやいけない事ができてただけです」

「次の案件ですか」

「はい、中將からの依頼で他の管理世界まで少し遠出することになりそうです」

「他の管理世界って、三課^{ツチ}って地上防衛の部隊じゃなかったんですか」

「本当はそうなんです、三課はもともと後始末に回ることも多くて、今は人も少ないで

すしその面が大きく出てる感じですよ」

「ははあ、なるほど」

さて、とセルジオが卓上の書類を纏める。

「少し俺は出てきます。本部の書庫の方で今回行く世界について調べたいですよ」

「あ、私も行きますよ！」

「ラインも行くですよ！」

「……いえ、今回は結構です。仕事についてはそちらに転送しておいたので——む」

フラットに断ったセルジオだったが、がっしとラインに袖を掴まれ遮られる。視線を落とせば人の手のひらほどの大きさの彼女は、不満を示すように膨れっ面。

「はやてちゃんは隊長さんの元に勉強しにきてるですよ。それをこんなところに一人なんてないですよ！」

「む」

「隊長さんならちゃんとははやてちゃんの先輩をやってくださいですよ！」

「む、む……」

ラインの勢いに気圧されるようにセルジオが唸った。

それを見たはやてがチャンスとばかりに、手を上げてラインに続く。

「私も将来『陸』で働きたいので地上本部の書庫について教えていただけると嬉しいで

す」

「……ですが」

「駄目ですか？」

「隊長さんリインからもお願いですよ！」

「私が早く仕事できるようになったらセルジオ一尉も助かるんと違いますか？」

はやてとリインにじっと見つめられたセルジオは暫く眉を寄せて唸っていたが、やがて根負けしたように肩を落とした。

その後セルジオ達は陸の書庫に行った——はいいのだが、望むようなデータについては得られなかった。

そもそも今回の案件はミッドチルダの外のもの。それを地上本部の書庫で調べようとする事が間違いだったのかもしれない。

「アテが外れたな……」

困ったように頭をかくセルジオ。

「今回の案件ってどう言うものなんですか？」

「あー、ある企業の研究機関付近の視察……って表面上はなってます」

「と言うことは実際は違うんです?」

「ですね。なんでも企業の方から付近に不審者がいるって連絡があったらしく。その企業が管理局にもある程度繋がりがあったため……」

「私たちに任務が、と」

「そういうわけです」

はあ、とセルジオが嘆息を漏らすと、はやてが、あの一、とセルジオを覗き見た。

「八神二尉?」

「陸の人って、あそこにはいかないんですか? 私たちにとってすれば、調べ物といえ

あそこなんですけど……」

「あそこ……?」

セルジオが眉を寄せると、はやてが軽く頷いた。

「時空管理局本局の無行情報データベース。今でも未整理の場所も多い、世界の本棚。通称——」

——『無限書庫』。



「隊長さーん、こつちですよー」

ラインとはやての案内でセルジオは『無限書庫』に訪れていた。

「ここが、無限書庫、か……」

案内のままにゲートをくぐると、とつぜんふわり、とセルジオの体が重力から解放されて宙に浮かんだ。

「まさか自分がここに来る日が来るとはな……」

目に入るのは上も下も右も左も本だらけ。これはたしかにその名の通り無限に広がる書庫に他ならない。

『無限書庫』は、情報を収集するロス・トロギアである。

もう失われたはずの過去の事から、学会で発表されたばかりの新しい論文まで、ロス・トロギアである『無限書庫』は常に情報を集め続ける。故に、凡そ『無限書庫』にない情報ないと言える。

けれどその『無限書庫』を『陸』の局員が使うことは殆どない。何故か。

その理由は簡単、『無限書庫』は『次元航行隊』の本拠地、『時空管理局本局』にあるのだ。

そこに陸の管理局員がわざわざ調べ物に行くということとは『陸』のデータベースではわかりませんでした。だから海の力を貸してください』と言いに行くようなものなのだ。

それは『陸』の人間として我慢ならない。

故に『陸』の人間であるセルジオも噂は聞けど『無限書庫』に実際立ち入るのは初めての経験だった。

ラインが辺りを見渡しているセルジオを連れてきている間に、はやては一人の人物に声をかける。

「おーいユーノクーン！」

「ああ、はやて。久しぶり」

はやてに声をかけられた少年——ユーノ・スクライアは眼鏡を指で押し上げると、古書の閲覧を止めてはやてに手を振り返す。

「それで今日は僕に何の用？ 確か陸に配属されたって聞いたけど」

「ちよつと調べ物手伝って欲しいんですよ。陸の方には欲しいものがあんまあらへんくて」

「調べ物、ね。いいよ、内容は？」

「ほんま？　ありがとうユーノくん」

はやてがにっこりと笑うとユーノの腕をとってぶんぶんと振った。そして遠くの方でラインに無限書庫のことを教えて貰っているセルジオを呼んだ。

「隊長さん、こつちですよ！」

「あたた、ラインフォー空曹ちよつと落ち着いて……」

早く早くと袖を引くラインに連れられて、ユーノの前にセルジオがやってくる。

「ええと、ユーノ・スクライア司書長……ですよね。はじめまして、私はセルジオ・アウデイー尉であります」

「セルジオ……アウデイー……あなたが、あのセルジオ一尉」

何事かを呟き僅かに瞠目したユーノだったが、その表情もすぐにいつもの好青年然とした笑顔へと変わる。

「こちらこそはじめまして、僕はユーノ・スクライアです。何かあれば気軽に声をかけてくださいね」

「ありがとうございます、スクライア司書長」

二人が和やかな笑みで握手を交わす。

「それで調べ物、とのことでしたけど、一体何を調べれば……」

「あ、いえそこまでお手数はおかけしません。閲覧権限さえ頂ければ自分で調べますよ」
「それは流石に難しいかと。無限書庫はかなりの広さがありますし、それな検索魔法
だつて……」

「一応俺も検索魔法に心得はあります。大丈夫、俺一人でやれます」

「セルジオ一尉流石にそれは」

「あ、八神二尉はスクライア司書長と閲覧許可を貰つておいて下さい」

「は、はあ」

「スクライア司書長も、そんな感じでしょうか？」

「……………わかりました。困ったことがあれば声をかけてください」

セルジオは頭を下げると一人で書庫の奥に飛んで行つてしまう。

「隊長さんも結構勝手な人ですう」

「あー、ごめんな、ユーノくん。きつと悪気はないと思うんよ、たぶん」

「いいよ、それはなんとなく僕もわかるし」

苦くユーノは笑つて、遠くに見えているセルジオの背中をじつと見つめて、すつと目
を細めた。

「彼が、『元』なのは、相棒……………」

その視線がほんの僅かに冷たいをもの孕んでいることにその場の誰も、ユーノ自身

でさえも気づいていなかった。



素早く検索魔法を走らせる。

(……ヤガミさんもリインさんも、スクライア司書長も良い人だな)

決して自分の態度は良いものではないだろう。他人行儀で、手前勝手に、褒められたものではない。以前のセルジオならこうではなかったはずだ。

(でも、俺は信じて良いのか?)

はやてたちに好感を抱くと同時に、胸の奥でぞわりとした疑念が鎌首を擡もたげる。

(あの人たちが、偽物でないという確証なんて、どこにもないのに)

あの日、敵はティーダに化けていて、それをセルジオは見破ることができなかった。

容姿も声も、それどころか一人一人違うはずの魔力反応ですら全く同じ。

そしてティーダと長年の友人であったはずのセルジオに悟らせないほどの擬態の上

手さ。

ならば同じように八神はやてが、ラインフォースが、ユーノ・スクライアがドゥーエの変装でないという可能性がどこにある？

変装でないと証明する手段は？

ない。そんなものはありはしない。

セルジオはドゥーエが変装して知人になりましたとしても気づく手段がない。

ならば、隙を見せてはいけない。心を許してはいけない。

同じ過ちを犯してはならないのなら、セルジオは誰も信じてはいけない。

「ん、あつたな」

セルジオが目当てのものを引っつけ出すと二つの本を魔法で手元まで引き寄せる。

「あつたあつた、『第23管理世界』と『ヴァンデインコーポレーション』の情報。どちらも陸にはなかったからな」

次の任務、目指す先は、第23管理世界『ヴァイゼン』。

歩幅

あの日から何をすればいいのかわからない。

身を捨てるほどに求めるものがあつた。

必死に手を伸ばして掴もうとした光があつた。

けれどももう星は見えず、ただ一人の義妹の為に日々を無為に繰り返している。

いつか、もう一度星が見える日は来るのだろうか。



第23管理世界。

一応管理世界の一つであるもののミッドチルダや他の一桁台の管理世界に比べると文化レベルは低く、次元通信なども全ての都市に配備されているわけではない。

けれど、この世界には一つ他の近隣世界には見られない特徴があった。

ここには『アルハザード』や『古代ベルカ』の関連遺物が眠っている遺跡があるのだ。もちろん明確にそうであるとわかってはいるわけではなく、その時代の遺物である可能性が高い、というだけなのだが、それでも希少であることは間違いない。

現にミッドチルダでは見られなかった遺物もいくつか見つかっており、『エクリップスウイルス』もこの世界で見つかったものであるが、セルジオは知る由もない。

そういった理由から第23管理世界は、管理局の管理下にも関わらず殆ど手つかずのまま自然が残り、代表的な都市の一つであるルヴェラは『文化保護区』として指定されていたりもする。

そしてその遺跡のいくつかは一部企業による研究施設が付近にあり、セルジオたちが訪れている『ヴァイゼン鉱山遺跡』もまたそうだった。

「いや、お待たせして申し訳ない」

セルジオとはやてが待たされていたヴァンデイン・コーポレーションの研究所の応接室に一人の男性が姿を見せる。

「少し会議が長引いてしまつて。私としてはさつきと終わらせたかったですかね」

「構いませんよ、そのお若さで一部門の室長ともなればお忙しいのでしょうか」

「ははは、陸きつてのホープに言われるとどうにもこそばゆいですね」

悪戯っぽい笑みで差し出された手に、セルジオ、はやても立ち上がってそれぞれ握手に応じた。

男が控えていた事務員の一人に飲み物を頼むと、セルジオとはやての対面のソファに腰をかけ、机を挟んで向き合う。

「さて、私は『ヴァンデイン・コーポレーション』の遺失遺物研究室長の『ハーヴィス・ヴァンデイン』と申します。ハーヴィスとお呼びください」

「ご丁寧ありがとうございます。私は航空魔導隊三課のセルジオ・アウディ一尉です。こっちは分隊長のヤガミハヤテ二尉です」

「八神はやてです。よろしくお願ひします」

「これはまたお若い。こちらこそよろしくお願ひします」

男——ハーヴィスは興味深そうに目を見開いたが、すぐにまたにこりと笑った。

「ハーヴィスさん、今日のお話は確か研究所に不審者が、というお話でしたが、詳しいお話は貴方から？」

「それは勿論……と言いたいところですが、その前にお二人は我が社のことをどの程度ご存知ですか？」

「一応、最低限のことは」

『ヴァンデイン・コーポレーション』。

ミッドチルダや、その他管理世界を中心にさまざまな事業を手広く手掛ける大企業。その中でも特に力を入れているのは『魔法兵器』についてであり、同様の研究を行っている『カレド・ヴルフ』社とは、わかりやすく言うならばライバル関係にある。

基本的には『ヴァンデイン家』による経営であるが、企業して40年経った二代目の今でも経営は傾いていない。

つまり、今セルジオたちの前にいるハーヴィスも二代目の跡を継ぐ存在、詰まる所次期専務取締役、と言うわけだ。

無限書庫で仕入れた情報と元からの知識を掻い摘んで伝えると、ハーヴィスは「素晴らしい」とぼん、と軽く手を叩く。

「なら本題に入って良さそうですね」

ハーヴィスは足を組むとポケットからペンを取り出して手の中で弄び始めた。

「始まりは一週間ほど前でしようか。私共の研究所に侵入者がありました」

はやてが眉を寄せる。

「侵入者、ですか？ 聞いていた話だと不審者だと……」

「ヴァンデイン・コーポレーションも大企業ですからね。無意味に悪評を立てられるのは困りますから」

「成る程、では、その侵入者については？」

「取り逃がしました。そして残念なことに遺跡から発掘された研究用の備品もいくつか盗まれました」

「それは、ロストロギア遺失遺物の盗難、と言うことでしょうか。だとしたら——」

表情を険しくしたセルジオの前でハーヴィスがチチチ、と指を振って舌を鳴らす。

「そこまで大騒ぎする程の事でもありません。確かにいくつか取り返しのつかないものもありましたが……それも本筋の研究に必要なものではありませんでしたから」

「……一応、それでも盗難届けは出していただきたいですね」

「ははは、それはいずれ。それで、話を戻しますが、その後盗まれた備品を調査して、私たちは次の侵入者の行動を割り出しました」

「は？」

「侵入者はまたここに来ます。そしてもう一度ウチの研究備品……今度は本命のものを持っていくでしょう」

「ちよ、ちよつと待ってくださいハーヴィスさん」

セルジオが慌てたようにハーヴィスを留めた。

「侵入者の行動がわかってるんですか？」

「はい」

「もしかして知り合いだったりしますか？」

「いいえ」

「……なら声明文でもありましたか」

「いいえ」

「……こちらでも調査したと言われても、根拠を示して貰わないことには信じられません」
「あー、やっぱりそうなりますか。こちらとしては『企業秘密です』としかお答えできないのが苦しいところですね」

くるくると回していたペンで頭をかくハーヴィス。先程から顔に貼り付けられた色は変わることはなく、その腹の中は窺い知れない。

「……此方が捜査資料の提供をお願いした場合はどうです」

「それも難しいですね。できるのは精々日付の予測くらいです」

「そうですか」

セルジオが表情を崩さないまま暫く黙り込むと、やがてわかりました、と絞り出すように声を漏らす。

「できる限りの情報提供をお願いします。私たちはしばらくは此方に滞在して対応します」

「おお、そうですか！ 流石アウディ一尉！ 此方の管理局ではなくわざわざ上に口を

きいてもらった甲斐があったと言うものです」

ハーヴィスがペンをポケットに直すとソファから立ち上がる。

「話もまとまったところで一緒に食事でもどうです？　もし良ければ一緒にしませんか？」と言つてもウチの食堂にはありませんが……」

「いえ、私たちはここで失礼させて貰います、ヤガミ二尉」

「はい、お話ありがとうございます」

ほんの少し残念そうに眉を寄せたハーヴィスに会釈すると、セルジオたちは応接室を後にする。

セルジオが軽く眉間を揉みながら研究所の外へと向かう廊下を進むと、頭の中にはやてからの声が響く。

「セルジオ一尉、さっきのハーヴィスさんの態度つて……」

「十中八九侵入者の事について知ってるでしょう」

「(ならもう少し突っ込んで聞いたりはできませんか？)」

「(企業の人間はああいう時は梃子でも話しません。どれだけ粘つても同じでしたよ)」

そこまで念話を送つて、不意にセルジオがふつと鼻を鳴らした。まるで、自らのことを自嘲するように。

「(まあ俺の人を見る目なんてあてにできませんが)」

「(？) どういう意味ですか？」

「(いえ、何でもありません。忘れてください)」

はやては何かを聞きただげにセルジオの横顔を見上げたが、セルジオは念話を一方的に切った。

(戦闘機人の変装も教授の嘘も見破れなかった俺だ。自分の目だつて信頼ならない)

セルジオは局員になつてもうすぐ10年に近い。その間に培つた人を見る目と経験は確かなものだ。だが、それを信じられるかどうかはまた別である。

足音を鳴らして研究所の廊下をセルジオの靴底が叩く。せかせかと無言で足を進めるセルジオにはやてが慌てたように声をかけた。

「セルジオ一尉、少し歩くの早いです！」

歩くのが？ とセルジオが僅かに首を傾け、そこまでして漸くセルジオがはやてが半ば小走りに自分についてきているの気づく。

(歩幅が、違うのか)

セルジオの足がぴたりと止まると、小走りのはやてがセルジオの背中に追突する。

「あいたつ」

「む、すまない、ヤガミ二尉」

「いてて、別にいいですけど……」

「いや、その……」

セルジオが不思議そうに自信を見上げるはやてに視線を落とす。

彼女の頭は180以上あるセルジオからみれば肩にも届かない程の高さにしかない。それだけ差があれば歩幅だって違う。セルジオの歩幅に合わせようとすれば自然、はやてのように小柄な子は早歩きになってしまいうだろう。

もしかして、昔セルジオの隣にいた少女もこうして歩幅を合わせてくれていたのだろうか。

いちち、と鼻を抑えるはやてにセルジオが向き直る。

「ヤガミニ尉」

「ほえ？」

「すまない、君のことにまで気が回っていませんでした」

「あ、いえ別に私はそんなに……」

「不甲斐ない上司です、俺は」

申し訳ない、とセルジオが頭を下げる。

しばらくはやてはぼかーんとしていたが、やがてぶつと堪え切れないうように笑いをこぼした。

「そんなわざわざ謝ってもらうことではないです」

「それでは俺の気が済まない」

糞真面目にまた頭を下げるセルジオ。

十九の男が中学生ほどの少女に深々と頭を下げて謝罪する姿は、はやての感性では珍しいものだった。

(これはなんちゆうか『セルジオくん』らしいかも)

少し頭が固くて糞真面目。どんな人にも丁寧に対応する不屈の人。なのはから聞いていた『セルジオ』評に少しだけ納得するはやてがいた。

その後、はやてに許してもらったセルジオは歩幅を少し緩めて研究所の外へ。

そして付近の鉾山町で待たせてあるリインの元へ。

「さてリインフォース空曹はどこにいるか」

「確か聞き込みをしておくとか言っていましたけど……」

「聞き込み、ですか」

二人の脳裏に「バッチリ任せとくですよ!」とサムズアップしたリインが思い起こされる。

「……新種の魔法生物と勘違いされてなければ良いですが」

「や、流石にそれはないでしょう……」

「どうでしょう、ここでは魔法生物が日常的に食べられているそうですから。案外あり

うるかもしれないよ」

「え、う、嘘ですよね……」

「ええ、冗談です」

「ん？」

「——ん、あちらにリインフォース空曹の魔力を感じますね、行ってみましょう」

あまりにもフラットに言われたので今なんと言ったか問いかけた衝動にかられるが、当のセルジオはリインの魔力を辿って行ってしまった。もう真実は闇の中だ。

セルジオについていきながらはやてが周囲の様子を確認する。

民家はどれも一階建の木造を主としたものが多く、クラナガンに見られるような高層ビルや、車などはほとんど見受けられない。

しかし住民は皆忙しく働きながらもどこか満ち足りた表情を浮かべている。

はやてが何となく『いい町だな』と頬を緩めると、またもやセルジオが急に足を止める。

「ぶぎゅ」

セルジオの背中に顔をぶつけてはやてが蛙が潰れたような声を出した。

「セルジオ一尉今度は一体なんですかあゝ」

「いや、リインフォース空曹が、その……」

「リインが？」

ひよつことはやてがセルジオの背中から頭を出す。

すると、そこに確かにリインはいた。

いつもの妖精のような手のひらサイズではなく、七、八歳ほどの大きさのモードになつており、どうやら連れ去られているのは杞憂だったようだ。

局員として町に溶け込もうとしたのはなるほど、確かに良かっただろう。

そう、町の子どもたちと空き地で一緒に遊んだりしていなければ。

リインは数人の子どもに混じつて鬼ごっこに興じており、弾けんばかりの眩しい笑顔を見せている。

「リインフォース空曹……」

「リイン……」

まあ確かにリインフォース・ツヴァイは製造つくりされてから三年足らず。精神的な年齢を考えれば遊びたい盛りなのかもしれない。

しばらく二人が何も言わずにリインを見てみると、一緒に遊んでいる子どもの一人、銀髪の子どもが「管理局員だ！」とセルジオたちを指差した。

何人かの子どももセルジオたちへと視線を向けて、リインもまたつられるように視線を動かして、笑顔がピシリと固まる。

「……………」

リインはしばらく気まずそうにはやてたちを見つめていたが、急にこほん、と咳払いをすると、何も言わない二人の元にかけてきた。

びしつと敬礼を見せるリイン。

「リインフォース空曹、聞き込みの結果特に問題は見つからなかったですよ！」

「いや今めっちゃ遊んでましたよね空曹」

「気のせいです！」

「いや服めっちゃ汚れとるで、リイン」

はつとしてリインが服を払うが、語るに落ちていた。

「ご、ごめんなさい？」

「リーイーンー」

「ひゃあつ、ごめんなさいですよはやてちやーン」

てへつとしなを作って謝ったリインだが、はやてはその程度で許してくれそうにはなかった。

「た、隊長さーん」

「私は少しレジアス中將に連絡した後、知人に連絡を入れてきます。妹のことがありますから」

「そ、そんなあ〜」

「空曹、しばらくお仕事が大変ですよ」

「わーん、はやてちゃんと隊長さんのいじわるう〜」

ラインがはやてに叱られる姿を見ながら、セルジオがくすつと思わず笑って、慌てたように自分の顔に手を触れる。

(……笑ったのか、俺)

誰かのおかげで笑ったのは随分久しぶりな気がしていた。

家族

「敬語やめませんか、セルジオ一尉」

時刻は深夜。場所はヴァイゼンの研究所のあてがわれた一室。情報提供を受けたもののそれを馬鹿正直に信じることもできず、結局こうして一晩中寝ずの番を申し出た、と言うわけだ。因みにリインはもう寝た。

ソファに座っているはやての問いかけに、少し離れてデータの整理をしていたセルジオがほんの少し眉を歪める。

「唐突ですね」

「まあもう深夜で研究所（じゆせうじよ）には人の気配もありませんし……正直私も暇なんです」

「それは同意しますが」

第23管理世界に来てから早数日。調査を続けても思うような成果は得られず、待てど暮らせどハーヴィスの言っていた侵入者が来ることもない。

一瞬咎めようかともおもったが、まあこのくらいいいかと思ひ直す。

ゼファーでのデータを整理する手を止めるとパイプ椅子に座りなおして、ぼりぼりとセルジオが頬をかく。

「それで敬語……ですか」

「それは、それ。私、セルジオ一尉の後輩で部下ですよ？　いつまでも敬語というのは居心地悪いです」

「しかし、公私を分けるのは大事ですし……」

「いや、その言葉には騙されません」

びしっとはやてがセルジオを指差す。

「なのはちゃんと話すときは敬語じゃあらへんかったと思うんですけど」

「……そうでしたか」

「まあそれは、最初からなのはちゃんみたいに接しろとは言いませんけども……」

「そういうヤガミ二尉も私には敬語じゃないですか」

「セルジオ一尉は上官ですし、私がタメで話すのも良くないでしょうし」

「いえ私は特に気にしませんよ」

「えっ」

はやてが瞠目する。

「私は特に話し方や呼び方には拘らない方です。呼びやすいように、話しやすいようにどうぞ」

「……ほんとにいいんですか？」

「ええ、公私の区別さえつくのなら」

はやては膝の上のリインに視線を落とすと、その合間にちらりとセルジオを伺う。

(……まだ、やな)

盗み見たセルジオにはどこか壁があり、とても以前海鳴でなのはと自分たちをからかった気さくな青年と同一人物とは思えない。

はあ、とはやてが小さくため息。

「やっぱり敬語の件はええです。私だけやってもアホみたいやし」

「む、そうですか」

「その代わり好きなもの話ししましょ！」

「好きなもの？」

はやてがぱんと、軽く手を叩くと首を傾けてにこりと笑う。

「やっぱ今の私とセルジオさんには親密さが足りへんと思います。やからお互いの事を知ろう思うて」

「そのために好きなもの、か。なるほど……」

ふむ、とセルジオが唸る。

「じゃあまずはセルジオさんの方からお願ひします」

「俺の好きなもの、好きなもの、か……」

「食べ物でもスポーツでも本でもなんでもええですよ」

セルジオはしばらく腕を組んで考えを巡らせる。

（好きな食べ物は……ない。何食つても同じだし。スポーツも殆どしない。娯楽本も読まない。バイクも母さんのモノなだけだしな……）

結果。

「好きなものは、特に……ない？」

「ええ……」

これにははやても流石にドン引きである。

なのはが以前言つてた自分よりも無茶苦茶という言葉に信憑性が出てきた。

（この人もしかしたら放つておいたらいけないタイプの人なのでは……？）

図らずも正解である。

「じゃあ私の方から、話しますからセルジオ一尉もその間に考えてください」

「む、申し訳ない」

「セルジオ一尉は謝つてばかりですねえ」

はやてがこほん、と咳払い。

「私が好きなのは『家族』です」

「家族？」

「はい、家族」

少し照れたようにはやてが続ける。

「不器用やけど優しいシグナム。気がきくけどどこか抜けとるシャマル。ツンケンしとるけど人の気持ちちがわかるヴィータ。寡黙やけどみんなの事をよく見とるザフィーラ。そして、末っ子みたいで甘えん坊のリイン」

はやてが自分の膝の上ですやすやと心地好さそうに眠りこけているリインの頭を人差し指で撫でる。

「みんな、血は繋がってないけど大切な『家族』です」

と、そこまで話してはやてが照れたように軽く頭を叩く。

「殆ど初対面の人に何話してらんでしょね。な、なんや話しづらくなってもうて」
「いや、そんな事はない」

「へ？」

「家族、『家族』……。家族が『好き』、か」

セルジオが椅子に腰かけたまま背もたれに体重を預けて天井を向いた。安っぽいパ

イプ椅子が体重に耐えかねたように軋む。

「そっか、そういう風に考えた事はなかったな」

セルジオが髪をかきあげると、はやてへと視線を戻す。

「俺は好きな『もの』はないけど、『人』ならいると思う」

「お、おおっ!!? だ、誰ですか?!」

「凄い食いつきだな……」

唐突に生えてきた恋バナの気配にははやてが鼻息を荒くする。

「えーと、いもうと義妹?」

はやてがピシリと固まる。

(セルジオさんはシスコン……まさかそんなこと……いやでも案外……)

尊敬できそうな上司の見る目が変わり始めているなど露知らず、セルジオが指を折る。

「それに、クロノ、ヴァイス、ゲンヤさん家族、それに、母さんとか、俺に魔法を教えてくれた人たち……」

そこまで言葉が続けるとはやてが「ああ、そういう」と『好き』の種類について理解し、すつとフラットに戻る。

「あとは……」

指を折々名前を挙げていたセルジオの表情がほんの一瞬陰るが、直ぐに元に戻ると薄く笑んだ。

「あとは？」

「あとは………まあ、ヤガミ二尉なんかも好きだと思いますよ」

「私もですか」

「はい、ヤガミ二尉はとても『いい人』だと思いますから」

「ほほう、その心は？」

「笑った顔が素敵ですから。俺の持論ですが、笑顔が素敵な人に悪い人はいません」

そう言うセルジオは真面目なもので、特にからかいなどではなさそうである。

これには流石のはやても少しばかり照れてしまう。いくらあつたばかりとはいえ、はやても中学生。年上の男性に笑顔が素敵なんて言われれば少しは恥ずかしくなる。

「そ、そう言えばセルジオ一尉って妹さんおったんですね」

「ああ、一応」

はやてはぱたぱたと手で顔に風を送りながら話題をかえる。これ以上変な事を言われないためだったのがちゃんと乗ってきてくれた。

「まあ妹と言っても血も繋がってない義理の妹なんですが」

「あ、じゃあウチと同じですね！」

「同じ、ですか……」

セルジオが今、ゲンヤの家に預けているルーテシアのことを思い出しているのか、目を遠くへと向ける。

「俺はちゃんとあの子の兄をやれてんのかな」

「セルジオ一尉？」

「こうして数日間帰れない。帰りに迎えに行く約束も破った数は両手では数え切れない。

……そんな俺なんかが兄なんて名乗る資格、本当はないんだろうけど……」

セルジオがどろりとした瞳を細めて口角を上げると、取り繕うように笑顔を貼り付けた。

「ヤガミニ尉は家族として上手くやっていく秘訣ってなんだと思いますか？」

「秘訣と言われても……」

「まあ喧嘩しないコツみたいなものでも教えて貰えれば、嬉しいかな、と。私はあまり家族というものに縁がなくて」

問われたはやてが秘訣、秘訣とぶつぶつ呟いて、やがてはつとしたように手を叩いた。

「秘訣っていうか、まあ、ウチで決めたルールみたいなのはありますよ」

「ルール？」

こくりと頷き、「簡単なことなんですけど私は大事だと思ふんです」と続けるはやて。そしてえへん、と胸を張ると、まるで生徒に授業をする先生のように、ゆつくりと、けれどもはつきりとした口調で口を開く。

「絶対に隠し事をしないことです」

刹那、ルーテシアとその両親の事が脳裏をよぎる。

なにもセルジオとて本気で家族について聞いたわけではない。世間話、普通はどうなのか、と気になっただけ。軽い気持ちの質問。

けれど、冗談も交えた軽い気持ちで発された言葉は、はやてが思う以上にセルジオに刺さった。

くは、とセルジオが自嘲するように声を漏らして、右手で顔を覆った。

「は、なるほど、それが、大事なのか」

じゃあ、セルジオには無理だ。

そもそもセルジオは始まりからして間違っている。

距離感がわからない。いつかの自分のように悲しんで欲しくないというエゴで、ルーテシアに偽った。

本当にルーテシアを思うならばセルジオは、ルーテシアを迎えに行つた日両親の死を伝えなければならなかつた。

けれど、セルジオは目先のことに囚われてそれをやらなかつた。

それで出来たのが現状だ。

毎日毎日、期待しながら親の帰りを待つルーテシア。

そしてセルジオは「まだ帰らないの？」と聞かれる度に、自分の不甲斐なさに、愚かしさに、醜さに吐き気を催しながら言うのだ。

メガーヌさんたちはいつか帰ってくるよ、と。

偽善だ。結局、自分は目指していたものの本質が見えていない。

人の涙を減らすということが、理不尽に死ぬ人を減らすということが、笑顔を守るということが、本質的に理解できていない。

(本当に、救えないな、俺は)

目が濁る。どろりとした汚濁が胸に溜まって、思考が鈍りそうになる。

「セルジオ一尉、あのどうかしたんですか——」

はやてがリインを膝から下ろしてソファに寝かせると、駆け寄つてこようとして——
——それよりも早く、セルジオが本能的に、異変を感知する。

(なんだ、これ)

胸がざわつく。

魔法ではない。探知のために使っている解析魔法には何も反応がない。

理由はわからないが、これが間違ひなく悪いものだということだけは理解した。

「ヤガミ二尉空曹と一緒に急いで防御魔法を貼れ！」

「え、でも」

「さっさとやれ！ 狙撃されるぞ！」

緊迫感のある怒声に反射的にはやてがりインと自分を取り囲むように魔力障壁を展開する。

瞬間、光が降って来た。

爆音とともに壁を打ち抜いたそれははやての障壁に受け止められ——る事はなく、はやての障壁が空気に解けるように消えた。

「え——」

弾丸が呆然としたはやてに迫る。思わず反射的に目を閉じそうになって、それよりも早く、ぐいつと首元を掴まれ全力で廊下に投げ捨てられた。

「——っ」

部屋を叩き出されて廊下をごろごろと転がるはやて。

「いたた——て、セルジオ一尉とリインは!？」

強かに打ち付けた頭の痛みもそこそこに先程まで自分がいた部屋を見て、絶句する。そこは壁、部屋の中すらも悉くを破壊されておおり、その中で動く影は二つだけ。

一人は、金と『青』の瞳に目を光らせるショートカットの寡黙な女性。腕、腰、腿、脚には紫のブレードを一對ずつ展開し、宙に浮かんで、部屋の中を見下ろしている。

そして、もう一人は、怯えたようなリインを胸に抱いたセルジオ・アウデイ。突如障壁が消えてかばいきれなかった彼女を庇ったのか、爆風を受けて額からは流血し、その左腕から先は既にない。

「た、隊長さん、り、リインのせいで……!」

「あ、あー、気にしなくていい、リインフォース空曹。すぐ治るから」

「な、何をすぐに治療魔法を——」

言いかけてリインとはやてが目を見開く。

セルジオの左腕の先が泡だったかと思うと、その断面から血を吹き出しながら『無傷の左腕』が生えてくる。

セルジオは一瞬苦悶の表情を浮かべたが、すぐに顔から色を消すとリインをゆつくりと床に下ろした。

「……久しいなア、一年ぶりじゃないかよ」

「そうだな、あの日以来だな」

「お前らが、ここを襲ったやつか」

「否、とも言えるし、是とも言える」

「……つまり、これはお前らの親の差し金つて事なんだな」

「私はこれ以上答える権利を持ち合わせていなくてな」

「そうか、なら俺が、言えることは一つだけ」

ぎん、とセルジオが目を怒らせて、宙から自分を見下ろした女性を睨んだ。

「お前をここで逃がすつもりはないぞ、トールレ」

女性——戦闘機人トールレはセルジオの問いに答える事なく、ただ静かに金と青の瞳でセルジオ見下ろして、ニイと愉しげに口角を吊り上げた。

「良からう、やれるものならやってみる、死に損ない」

瞬間、セルジオの目が薄白く光った。

「——加速機動ッ！」
ブリッツアクション

「IS 《ライドインパルス》」

二人が光へと変わり、はやての眼前で無数の燐光を舞わせた。

セルジオは槍で、トールレは刃で、それぞれを斬り伏せんと自身の技術の遂を尽くして

腕を振るう。

瞬きの間に十の劍戟が応酬され、呼吸の間に二重の斬撃が相手を刻む。

「あの日に戻れ、セルジオ・アウデイ」

ニイ、とトーレの表情が歪む。

「初めてあつた時、貴様の目には光があつた。ドクター曰く、人が生み出せる『欲望』の光だ」

「なに、を、言つてやがるツ！」

「次にあつた時、貴様の目には殺意があつた。そして躊躇いもなく私を殺そうとした。そして私は貴様には殺されかけて思つたのだ」

トーレが、啜う。

「死ぬわけにはいかない、まだ死ねない、とな」

愉しくて堪らないと言つた様子で、父親とよく似た笑みで。

「私はこの感情について知りたい。それには、貴様に『欲望』を抱いて貰わねばならん」

セルジオが突き出した槍が躲されて、トーレがセルジオの懐に潜り込んだ。

「だから、早くその死んだ目をやめろ、セルジオ・アウデイ」

「ぐっ——」

セルジオが反射的にトーレの懐に蹴りを入れると飛行魔法を併用して素早く距離を

取るとはやての横でブレーキをかける。

無茶な魔法行使と左腕の修復の消耗で息が荒いセルジオ。けれどそんな事には頓着せずはやてに口早に指示を出した。

「ヤガミニ二尉、リインフォース空曹、隊長として命令する。封時結界を展開後、君たちは今から伏兵を探せ」

「伏兵つて、襲撃犯はあの人……」

「アイツは白兵戦特化個体だ。あんなデタラメな砲撃は持つてない。どこかに支援個体がいるはずだ」

「わ、わかりました、一尉！ 一尉は——」

「俺はアイツをここで足止めする。勝てないかもしれないが、俺なんかの命で済めば安いもんだ」

トーレの言った通り死に損ない。今更自分の命なんて惜しいなんて思わない。胸がじくじくと痛むのを押し込めながら、セルジオが槍を握り直す。

横ではやてが何かを叫んでいるようだが、赤い思考が漏れ始めている彼には、もうなにも聞こえない。

「——加速機動」

音を置き去りにしてセルジオが加速し、そのままゆつたりと自分たちを見ていたトー

レに槍を叩きつけ、そのまま上空まで連れて行く。

「俺が、やらなくちや、駄目なんだ！ 生き残った俺が、死なせた俺が、みんなの代わりにお前らを逮捕しなきや！ なにも、なにも終わらないッ！」

「ハリボテの使命感と腐った刃で通せるならばその想い押し通して見ろ！」

「言われなくても、やってやるッ！」

例えいつか死ぬとしても、ここで死ぬのだとしても、せめてトーレくらい捕まえておかなきゃ、自分には死ぬ価値すらない。

いつか三佐の言った『死にたがり』を、彼の言っていた通り全てを失ってから証明するとは、何とも皮肉な話だった。

加速しながら斬り結ぶトーレとセルジオの周囲をはやての結界が覆って行く。

『《ライドインパルス》』

アナライズ・シミュレート
「模倣解析——百二十七手」

セルジオとトーレの速度は僅かにトーレが上だが、セルジオはその差をエクリップスによる回復とゼファーによる予測で補うことができる。

戦闘は千日手の様相を呈すかに思えたが、これは実際は違う。

トーレ達は犯罪者であり、この次元世界では孤立無援だが、ここは管理世界、セルジオ達局員には援軍があり、時間が経てば経つほど有利になる。腐ってもセルジオは一

尉、瞬時にそれだけの算段が立てられる頭があった。

つまり、互角の戦いの時点でトーレは敗北している、とも言える。

そして、そんな事実を前に、トーレは高く嗤った。

戦闘が愉しくて——ではなく、あまりにも考えのないセルジオがひたすらに可笑しかったのだ。

「なあ、セルジオ・アウデイ、貴様は私の姿を見ても何も思わなかったのか？」

トーレの左目が、金色に光る。

「あの日から一年も経っているのに？ お前が足踏みしている間は相手も足踏みしてくれていると？」

トーレの左目が、金色に光る。

「なあ、セルジオ・アウデイ、『機械』であり『人間』である戦闘機人が、何も変わっていないと思うのか？」

トーレの右目が、『青』く光る。

瞬間、セルジオが感覚的に、よく知った感覚を思い起こす。

「この、エネルギーは、まさか……！」

「さあ刮目しろ、そして心に刻め、セルジオ・アウデイ」

トーレの周囲を青白い陽炎が包み、戦闘機人本来のエネルギーと混ざり合い、群青の

陽炎へと変わる。

「フオーミユラスキル
F S ≪ アクセルインパルス ≫」

錆びた歯車が回り出す。

ぎしり、ぎしり、と軋みを上げて動き出す。

まるで、喝采の声を上げるように。

二人の差

「F S 《アクセルインパルス》」
フォーミュラスキル

陽炎が爆ぜる。

今まで互角に渡り合っていたはずのトーレが《ライドインパルス》より一段階スピードを増した。

計算しきれば万象を読み解き、未知の未来を既知へと引きずり落とす『ゼファー』の行動予測システムを、トーレがたやすく上回る。

「あ——」

——りえない、と思わず言葉が溢れるよりも早く、群青の陽炎が掻き消えると解析魔法とセルジオの『本能的』探知からも完全に消失した。

セルジオがその事に警戒をする事は叶わず、武器を構え直す暇すら与えず、トーレの使った能力について推察すらできない。

そして、全ては一瞬で終わった。

トーレが背後に回り込む。

ただ刃を構える

背中を真一文字に斬り裂いた。

特別な技巧を凝らしたわけでもなく、驚異的な攻撃力があつたわけでもなく、ただ、近づいて斬るといふ、剣を握りたての新兵でも出来ること。

ただそれを、瞬きすら叶わない速度、音が空気を震わせる速さを超えて、常人が思考できる速度を追い抜いて、行つて見せただけ。

「——あ、が」

それだけでエクリプスの侵食が末期のセルジオの回復力すら追いつかない一撃を叩き込んだ。

「私の勝ちだ、セルジオ・アウデイ」

それは、戦闘が始まってから僅か二分後の事だった。

勝者は短く、けれど万感の想いを込めて、墜落して地に這い蹲る敗者セルジオに告げる。

「く、そ……」

トーレが陽炎に身を包んだまま地に降り立つ。

見下ろした視線の先には半壊した研究所を背後に、取り落としたゼファーへと手を伸ばさんと躡もがくセルジオ。

背中から細い煙を上げながらふらつく身体を叱咤する。

「ぜ、フェア、は……」

ECは基本的にゼファアー内にあるデイベイダー550から供給される。デイベイダーはエクリプスを『感染させる』ものであつて『制御する』ものではない。そこから供給されるのはエクリプスウイルスそのものに他ならない。

故にセルジオが治療能力を高めようとするならば、エクリプスによる感染レベルを無理矢理に引き上げるしかない。

もしこれがデイベイダーだけでなく『リアクター』と呼ばれる制御するパーツがあれば話は違ったのだが、それを手に入れられる可能性のあつた『教授』は既にはいない。

セルジオが紅く霞む視界で槍の柄に震える手を伸ばすが、その腕をトーレが踏み潰す。

「ぐ、があつ」

「つまらん、つまらんで、セルジオ・アウデイ」

ぎしぎしと黒のガントレットごと腕を踏み潰しながらセルジオを見下ろすトーレ。

「以前の貴様はこんなものではなかつた。こんな容易くやられたりしていなかった。熱意があつた、根性があつた、殺意があつた、そして何より瞳の中に光があつた」

ところが今はどうだ、と言つてトーレはゼファアーを蹴飛ばす。槍がごろごろと転がりセルジオの手が届かぬ遠くへと吹き飛ぶ。

「目は腐り、あるのは申し訳程度の意味と、中身の伴わない薄っぺらい言葉。あのセルジ

オ・アウディとは思えん。偽物と言われた方がまだ信じられる」

「——ッ」

「それになんだ貴様、本当にこの一年何もしてなかったのか、何も成長していないぞ」

「そ、れは……………」

何も言えない。

あの日からセルジオの時計の針は止まってしまった。時間は進んでいるのに、周りはずっと、あの日に見たなのは顔が、ゼストの背中が、クイントの声が、メガーヌの手の感触が忘れられない。

先ほどまで浮かべていた笑みを消して、トーレがセルジオの腕を解放すると、そのままの勢いで雑に顔を横合いから蹴りつけた。

遠慮のない蹴りに、口の中が切れて頬の内側の肉が歯に突き刺さる。顔を地に擦り付け、げぼげほと咳き込むと血反吐と一緒に細かな白い破片がこぼれた。

「早く本気になれ。私にあの時の輝きを見せてみる。でないとお前は死ぬぞ」

「——っ、ア」

「私を許せんだろう。憎いだろう。復讐したいだろう。痛めつけてやりたいだろう。同じことをやって謝らせたいだろう。ならさっさと覚醒するなり捨て身で向かってくる

なりなんなりやってみる」

「ふ、ぎ、けんなっ!」

セルジオががむしやらに右拳を振るう。それは静かに佇む仇を狙って空気を掻き分け、そしてぱしん、と呆気ないほど軽い音を立てて受け止められる。

「こんなものか」

風切り音は一つ。瞬き一回にも足りぬ時間で陽炎を纏ったブレードは、セルジオの拳の先から肩口まで真つ二つに切り裂いた。

「ぐああああああつ!」

痛みに耐えかねた絶叫が結界の中に木霊する。

耳朶に響く音に関心を見せず、トーレが失望したように深い嘆息をこぼした。その顔は返り血に濡れている。

「なんだ今の適当な攻撃は。なぜ魔法を使わん。体術を使わん。初めて出会った時捨て身で私に炸裂弾を出した貴様はどこに行った」

拳の先から肩まで二つに泣き別れた腕の断面から止めどなく血が溢れ、その間にぶよぶよした黄色い脂肪と濁った白の骨と、赤黒い肉が覗く。

断面からは細かな煙が立ち上り泡立つように治癒されていくがそれでも背中傷も治りきっていないせいか、再生スピードが明らかに遅い。

都合のいい覚醒など起こらない。

停滞を選んだセルジオは、進化を選んだトーレには敵わない。

奇跡など起こらない。

奇跡は一生懸命の報酬だ。ただ無為に日々を繰り返し、怠惰に時間を消費した者の元に奇跡は降ってこない。

以前のセルジオならともかく、今のセルジオならわかる。わかってしまう。

セルジオではトーレに勝てない。これは、絶対に、絶対だ。

痛みに呻くセルジオのトーレを見上げる瞳に、絶望の色が混ざる。

「嗚呼、そこまで堕ちたか」

小さな声だった。まるで子どもが玩具を取り上げられたような、そんな心底ガツカリした声音。

「もう、これ以上生きていても貴様は生き恥だ。ドクターが何としようとしても、私は貴様はもう生きるべきでないと考えた」

ひゅつとトーレが刃を鳴らした。

「だから、ここでは終わっておけ、セルジオ・アウデイ」

セルジオの首に群青のブレードが添えられた。

へたり込んだままのセルジオの首元にブレードのエネルギーの胎動が肌を通して伝わってくる。恐ろしいエネルギー量だ。きっとトーレが軽く首を撫でるだけで胴体と頭は泣き別れ、自分という生命は終わりを迎えることだろう。

(死ねる、のか……俺……)

良いんだろうか、このまま死んでしまつて。

(俺は頑張つた、よな)

鍛錬は欠かさなかつたし、一人になつても言われた仕事はこなしてきた。

(偽物の俺が、なり損ないの俺が、凡人の俺が、よくやった、よな)

なら、いいんだろうか。

(ゼストさんとおんなじ風に死ねるから、悪くないのかな)

ぼう、とトーレを見上げていると、体からすくと力が抜けた。

そしてセルジオはトーレの振るう狂刃に身を委ね――

「セルジオさんっ!」

セルジオの身体を白銀の魔力盾が包んだ。ギン、と刹那の隙間トーレの刃を白銀が受

け止めるが、トーレの目が青く光ると幻のように儚く消える。

だが、その刹那の間、視界に白銀に混じって舞い散る黒翼。

まるで雪の様な白銀に映える黒の色、だがそれが見えたのも束の間、身体を誰かに引き倒されそのまま地面を転がるとトーレの刃から逃れた。

「何やつとるんですかセルジオさん！」

『リインたちが間に合ってなかったら死んじやってましたよ！』

「や、ガミさんに、その声は、リインさん……ですか」

「はい、そうです」

断言できなかったのは自分をかばってくれた子が先ほどの魔力光と同じ白銀の髪をしていたから。地面を転がって土に汚れてなお強く此方を見据えるのは、コバルト色の澄んだ瞳。

（ユニゾンって、やつか……）

融合機リインフォース・ツヴァイとその主八神はやてが魔力的同調を起こし、その能力を飛躍的に上昇させる古代ベルカのロストテクノロジー。

セルジオも知識としてはそのことを知っている。

「貴様、『八神はやて』だな。事前情報の中に入っていた、夜天の書の主」

「知って貰えてて光栄です。そういう貴女はどちらさんですか」

「貴様に名乗る名などない」

はやての問いかけを切り捨てると、トローレが刃を構えるけれど、はやては怯んだ様子すらなく、傷だらけのセルジオを胸に強く抱いた。

「退け、娘。私はその男に用がある」

「退きません。この人はもう傷つけさせへん」

「勘違いするな。これは命令だ、さもなければお前共々ここで殺すになるぞ」

「やれるんならやればええ」

なに、とトローレが眉を寄せる。

「貴女とセルジオさんが研究所を出て四分。私が一体今まで何しとつたと思います」

ライン、とはやてが小さく声をかけると、今まで幻影魔法で隠蔽されていたベールが剥がれ、はやての背後に展開された追尾式魔力刃ブラッテイダガーと、石化付与魔力弾ミストルテイが露わになる。

その数、二つ合わせて実に数百。

そして、その弾幕の背後に、巨大な収束砲をチャージした白銀のベルカ式魔法陣が鎮座していた。

「貴女がそこから一步でも動けばこれを撃ちます」

はやてがやったことは単純だ。セルジオがトローレを連れて空へと向かった直後現地管理局へ連絡を入れ、命じられた通り広域結界を発動。戦闘機人と自身らを隔離。

その魔力量に幅を利かせてたっぷり三分かけてる最大展開できる攻撃魔法を限界まで待機させると幻影魔法で覆い隠した。

誰にもできることではない。桁違いの魔力量と制御用魔導杖シュベルトクロイツ、魔導収集制御天デバイス書と外付けの演算回路フォーがあるはやてだからこそできたことだ。

伊達に『歩くロストロギア』と呼ばれているわけではない。時に一つの次元世界を左右できるだけの力を持つロストロギア、それに等しい力が彼女の体には宿っている。

「そんな脅しを通じるとでも?」

「脅しと思うかどうかはあんた次第やな」

「……ほう」

「私は今融合機とユニゾンしとる。そして最低限のダメージは融合機と私とで分担することができる。たぶん、あんたがどれだけ早くても私か融合機のどっちかがトリガー引くくらいでできるで」

「当たると思うか?」

「この数で当たらへんと思うん?」

ミストルティンは触れた箇所を石化するという付属効果を持ち、それはかするだけでも効果が発動する。一度起動して仕舞えば石化は全身に広がり、解除するには特殊な魔法が必要になる。

そしてブラッディダガーは追跡起爆弾、言ってしまったえば永遠に追いかけてくる爆弾の様なものだ。

いくらトーレの速度が驚異的と言えど視界いっぱい弾幕を完全に避け切るのとは不可能に近い。

ならば、とトーレが戦闘機人としてのシステムを使って数百メートル離れた森の中で息を潜めている狙撃手、デイエチに通信を入れる。

『デイエチ、話は聞こえていたな』

『うん。あの女の子を撃てばいいって事？』

『そうだ。相手は流石に倒れはせんだろうが……反撃のチャンスにはなるはずだ』

『相手の盾を消せないの？ トーレ姉さん最初の狙撃の時にあの子の盾消したよね』

『そう都合のいいものでもなくてな。では頼んだぞ』

トーレが通信を切ると、エネルギーを内部に新設されたフォーミュラ駆動路に流し込んでいく。すると光が弱まっていた『青』の目が次第に輝きが増していく。

その事にはやてがハツとしたように身を震わせると、腕の中で物言わないセルジオを守るように抱いた。

「FS 《アクセル》——」

「——ッ、響け、終焉の笛！」

そして、結界の中で互いの切り札を切ろうとした瞬間、はやてとトーレの間に、暁の閃光が穿たれた。

トーレとはやてが思わず動きを止めると、穿たれた暁の光が晴れて、その中から真っ黒のフード姿の影が姿をあらわす。

「リイン、あれは」

『少なくとも局員出ないことは確かです。デバイスに管理局登録がないです』

「ということは、新手の敵さん、ちゆうわけか」

はやてが警戒から身を固くしたが、影ははやて達を一瞥すらせず背を向けると、トーレに向き直る。

そしてボソボソとした声で何事かを伝えたと、トーレの表情が嫌悪に歪む。

「貴様——、いや良いだろう。今日のところは従ってやる」

ちつとトーレが小さく舌を鳴らすと目の光をそのままに身を固めるはやてに視線を送り、吐き捨てるように口を開く。

「今日は私たちは引く。もうここに来ることもないだろう。良かったな」

「それは、どういう意味や」

「額面通りだ。私たちはここから逃げる、そう言っている。どちらにしろ、もう時間制限だったようだしな」

ちら、とトーレが遠くへと視線を向ける。そこには夜空を切り裂くような光が結界越しに見えていた。恐らく現地管理局の増援だろう。

トーレははやての腕の中でぼんやりと黒い影を見つめているセルジオを視界の端に捉えると、忌々しげにふん、と鼻を鳴らした。

「セルジオ・アウデイ、せいぜい腑抜けたその根性を鍛え直しておけ、次は殺すぞ。」

そうして、トーレは、黒い影は、セルジオ達の前から姿を消した。

その後、駆けつけた現地局員が調べたところ、脱出不能の結界の中であつたにも関わらず、逃亡先どころか脱出の痕跡すら見つけることができなかつた。

「じゃあよろしくお願いします」

はやてはぺこりと頭を下げて、その後の処理を現地管理局に委ねる。

そして研究所の裏で膝を抱えるセルジオのもとへと向かう。

「はやてちゃん」

「リイン、セルジオ一尉は」

青白い顔をしたセルジオに付き添っていたリインがはやての姿を見ると側までやつてくる。

「やつぱり傷が自然に治つてゐるです。たぶん、魔法とかじゃないですよ」

「そつか。付き添つてくれてありがとな」

「いえ、リインも隊長さんには助けられたですから」

リインがはやての肩にちよこんと腰掛ける。

「セルジオ一尉、体の具合はいかがですか」

「……ああ、ヤガミ二尉か、仕事ならすぐに——と」

立ち上がるうとしたセルジオがよろめいて倒れそうになるのをはやてが慌てて受け止める。

自分よりも一回り小さなはやてに倒れこんだセルジオは、自然と肩に顔を埋める形になる。

疲労からか息が荒いセルジオは喋るたびにはやての髪を揺らして、吐き出される呼吸は襟の中から首元を撫でる。その感覚がなんとも言えずこそばゆい。

少し気恥ずかしさが襲つてきたものの、はやてはそんなことをおくびに出さずセルジ

才先ほどと同じように背中を研究所の壁に預けて座らせた。

「無茶せんてください。報告なら私たちがしましたから」

「悪い、な。最近どうにも……治療の速度が、落ちている。昔は、けほっけほっ、このくらいどうとも、なかつたんだが」

「治療の速度って……」

ちらり、とはやてがセルジオのトーレに切り裂かれたはずの右腕を見る。ポロポロのバリアジャケットの袖の中には、痛々しい怪我が覗いているものの既に血は止まっている。

信じられないことだが普通なら再起不能レベルとも言える負傷がもう治り始めているらしかった。

「セルジオ一尉、早く病院に行きましょう。お医者さんに診てもらって治療を……」

「病院はいい。どうせ治るんだ、そんなことってよりトーレ達の事だ」

「そんなことって、あなたの身体のことですよ?!」

はやてが声を荒げると、肩の上のラインがびくりと身を震わせておたおたと視線を二人の間で彷徨わせる。

だがはやてはセルジオから、セルジオははやてから視線を動かすことなく、互いに見つめあったまま動かない。

辺りを支配する静寂。

「ヤガミ二尉、君は……」

やがて、それを破ったのはセルジオの方だった。

「君は、『良い人』、だな」

ぼつりと呟いて、セルジオの顔が哀しそうに、けれどどこか嬉しそうに歪んだ。

「たぶん、君は俺のことを本気で心配してくれてる。出会って間もない俺のことを、それこそ本気で」

「当たり前、です」

「うん、それを当たり前前と感じれることが凄いな」

セルジオが傷ついた腕をぎゅつと抱く。

「普通は出来ないよ。出会って間もない男を、上司を仲間を殺した上司を、自分の親友を捨てた奴の心配までするなんて」

凄いな、ヤガミ二尉は、と青年はまた笑う。その笑顔が、きつと本人は笑顔のつもりであるボロボロの顔が、あまりにも痛々しくてはやてが言葉に詰まる。

「それが、さつきトーレに殺されようとした理由ですか」

「自分が生きちゃいけないって、生きる価値がないって思うとるんですか？ だから、私

たちの身代わりになっても良いって、それで死んでも良いって……そう思ってるんですか？」

(死ねる、のか……俺……)

良いんだろうか、このまま死んでしまつて。

(俺は頑張つた、よな)

鍛錬は欠かさなかつたし、一人になつても言われた仕事はこなしてきた。

(偽物の俺が、なり損ないの俺が、凡人の俺が、よくやった、よな)

なら、いいんだろうか。

(ゼストさんとおんなじ風に死ねるから、悪くないのかな)

ずっと胸の奥に占拠する想いがある。

それは、あの日死ぬべきだったのは自分ではないのか、という強迫観念めいた思想。ゼストは父親のように思っていて、誰からも頼りにされていた『陸』のエースだった。クイントはみんなに慕われ、やさしい家族にも囲まれた姉のように思っていた人だった。

メガーヌは娘のルーテシアとこれから大切な思い出を作って行く過程で、幸せになるべきだった人だった。

他の三課のみなんだって、誰一人だって死んで良い人はいなかった。

もし、死ぬべきだとしたら、家族もいない、偽物の自分であるべきだったのに。

「セルジオ一尉」

はやての海の色の瞳の中に映る自分の姿。斬られた腕を抑えた、ボロボロの死んだ目の男。

そして、セルジオが心の奥から吐き出すように、言葉を絞り出した。「だって、俺が死んでも悲しむ人なんていないから。」

ヤガミさんとは、違うから。

どうせ死ぬなら俺が死ぬのが一番——」

言いかけて頬を熱が襲った。一拍おいてぱん、と軽い音が耳朶を打ち、そこまでして今自分が頬を張られたのだということを理解した。

「ヤガミ、さ——」

「馬鹿ツ！ 自分が死んでもええやて?! そんなこと有り得るはずないやろ！」

ぼかん、とセルジオが張られた頬を抑えてはやてを見上げた。海のような瞳の奥に今は怒りの炎が燃えている。

「同じや！ 私も！ セルジオさんも！ 『今』を生きてる人間や！ そのまだ生きとる人が過去を追って、過去に囚われて！ 挙げ句の果てには死んでもええやて?! 寝言を言つて良いのは夜寝てる時だけや！」

なんでこの子は、こんな怒っているのだろう。こんな自分なんかの為に、どうしてここまで感情を荒れているのだろう。

「セルジオさん言うたやないか！ 『妹』がおるつて！ その子が、あなたが—— たった一人のお兄さんが死んで悲しまへんはずないやろ！」

ああ、この子は、自分を叱ってるんだ。きっと自分の行動が許せなくて、そのままにできなくて、背中を押したくて、叱ってくれている。

「あなたが本当に妹のことを思うなら絶対に死なへんつて、生きて帰つてやるつて思うはずや！ だから、だから——」

そこまで言つて、はやてが傷だらけのセルジオの頭を引き寄せて抱くと、頭を優しくポンポンと撫でた。

「ちゃんと生きてください、セルジオさん。『家族』が死んで一人残されるっていうのは、案外きついものなんです」

それは『家族』を亡くした事のある彼女だからこそ言える言葉だった。

「……………ごめん」

「別に気にしてないです。仮とはいえ、私はあなたの補佐ですから」

くすり、とはやてが笑って、また指で髪を梳くようにセルジオの頭を撫でる。

(……………頭を撫でてもらうなんて、随分と久しぶりだ)

昔彼の頭を撫でてくれた人たちのことを思い出し、セルジオは静かに目を閉じた。

(……………『家族』、か)

今は、きっと自分の帰りを待っている妹に、はやく会いたかった。

本気の嘘

結界から脱出し、ヴァイゼンの辺境に身を隠したトーレとデイエチ。

彼女たちは隔絶の結界を発動すると戦闘機人ナシバースのネットワークを使った回線でジエイルに連絡を入れる。正規のルートでは管理局が網を張っているため迎えを超越してもらう腹積もりだった。

その様子をフードの影は見守ると何も言わずにその場から立ち去ろうとする。

「待て」

それをトーレの声が呼び止めた。影が足を止める。

「先程、何故止めた」

「……今回の任務は、既に達成している。奴のデータ取得と、一部遺物の取得」

「だから何だ？ あのまま行けばセルジオ・アウデイを殺せた筈だった」

「ヤガミ・ハヤテの横槍が入ってもか」

「当たり前だ。今私の力があればあの程度問題なかった」

「……果たして、本当にそうかな」

影が視界の端でトーレを捉える。

「左足の軸、右脇腹、右腿の筋断裂、といったところか」

「——ッ、貴様」

「フォーミュラスキル、だったか。そう都合のいい力ではないようだな」

影はそれ以上何も言わず、デバイスである槍を軽く振って待機状態に戻すと再びその場から立ち去ろうとする。

「……レリックのお陰で動いている死人の分際で」

トーレが毒づくくと、影のフードの中から赤い光が飛び出した。

「旦那が黙っているのをいいことに好き勝手言いやがる！ お前旦那が助けに入らなきゃ危なかったこともわかんねえのか！」

「アギト」

「——ちっ、わかったよ」

赤い光はふわふわと辺りを飛び回ると影のフードの中に再び身を隠した。

影は近くの木に背を預けると、ちらりと目を遠くの方へと向けて細め、先ほどの光景

を思い起こす。

満身創痍の金髪の青年、影の知る彼よりも、少しだけ身長が伸びているようだった。

「……………セルジオ」

その声が届かに届くことは無く、暗い闇の中に静かにとけていった。

第23管理世界『ヴァイゼン』での研究所襲撃の一件は一旦の終息を迎えた。

というのも依頼主であるヴァンデイン・コーポレーションがこれ以上の捜査は不要、と被害届を取り下げたのだ。

もちろんセルジオは詳しい説明を求めたがハーヴィスは「申し訳ありません、これ以上はお答えできません」としか答えることはなかった。

そうなればセルジオたち三課にできることは無い。

もともと管轄外の案件だ。レジアスから指示があれば直ぐにでも帰る必要があった。

「では、失礼します」

セルジオは報告書の提出と事件の報告をすませるとレジアスの執務室を後にする。

「はやく三課に——と」

歩き出そうとしたセルジオがふらついて思わず壁に手をついた。

「……少し無理したもんな」

何故かはわからないが、ECを使ってしばらくは、こうして身体が上手く動かないことが増えた。破壊衝動については自傷行為である程度抑えられても、詳しい身体のことに関しては完全に門外漢だ。

セルジオは深く息を吐くと足を軽く叩いてレジアスの執務室に背を向けて歩き出す。

(見られてるなあ)

階下に降り、地上本部の中を歩くといくつかの視線が刺さり、ひそひそとした眩きが聞こえる。何を言っているのかわからないが、一々それに思考を割くことすら煩わしくセルジオは足早に立ち去る。

フロアを抜けて単車を停めている駐車場に向かおうとして、目に入るのはにこにここちらを見て手を振っている少女。

「お疲れ様です、セルジオ一尉」

「……俺は三課で待っててくれて頼んだはずだが」

「だからラインにお留守番してもらってますよ?」

「それはそれで心配だな……」

「あの子は結構しつかりしとるから大丈夫ですって」

「本当に？」

「……たぶん」

「そこは断言して欲しかった」

セルジオとはやてが並んで歩く。

沈む行く夕陽が二人の影を色濃く浮かび上がらせるが、暫くしても影は重なったまま
で距離が開く事はない。

歩幅が違う二人では、そのまま歩けばすぐに離れていってしまうはずなのに。

す、とセルジオが視線を隣を歩く少女へと落とす。

まだ小さな少女だ。歳は自分より六つも下で、身長だつて自分の肩にも届かない。

(けど、俺を助けてくれて、叱ってくれた子だ)

あの日はやては「家族を思うのなら生きろ」とセルジオに言った。その言葉は確かな
楔となつて彼の胸の中に打ち込まれている。

セルジオは『家族』とはどう言うものなのかわからない。

生まれが特殊であつた彼に生みの親と言える人たちはおらず、育ての親である義母を
早くに亡くし、義父とは「父さん」と呼びあつたこともない。

だからこそ、はやての『家族』について語る言葉が心に残った。

仕事の合間に話すシグナムの不器用な優しさだとか、シヤマルの案外ドジなところだとか、ヴィータの背伸びをして強がることだとか、ザフィーラの寡黙な頼り甲斐だとか、ラインの末っ子めいた人懐っこいところだとか。

そんななんでもない事を楽しそうに語るはやてを、セルジオはとても好ましく思う。

「……ヤガミさんは」

「はい？」

だからだろうか、つい今の自分の置かれている状況を、悩みをはやてにこぼしてしま
う。

「ヤガミさんは、家族にやむなくついた嘘があるとしたら、どうするべきだと思いますか
？」

「それは、どういう……」

「あー、深く考えなくていいです。こう、軽い雑談だとも思っていただければ」

苦く笑うセルジオの横顔からは特にそれ以上の色を伺い知ることはできない。

だから、はやては言われた通り友人と話す時のように、彼女がそうあつて欲しいと思
うように答えた。

「私は基本嘘は好きやないです。嘘をつかなきゃ守れへん関係なんて、本物と違うで

しよう」

でも、とはやてが言葉を続ける。

「もし、その嘘を突き通す覚悟あつて、本気で相手のことを思っているのなら、一概に悪いこととは言えへんと思います」

「嘘を貫く、覚悟」

「はい。その嘘が、『本気の嘘』であるなら、私はそれを駄目だとは言えへん」

『本気の嘘』を貫く。それは、セルジオで言えば一体何になるのか、言葉にするまでもない。

しばらくして二人が駐車場に停めてあるセルジオのバイクの下までやってくる。

「あ、じゃあ私はここから電車で——」

「ヤガミ二尉」

「え、わわっ」

胸元にひゅつとバイクのメットが投げられたのを、はやてが慌てたように受け取った。

「乗つて行くといい、どうせ帰るところは同じなんだ」

「ええんですか、私と、仲良くして」

「君は俺の補佐なんだろう？ なら、親しくして何が悪い」

ふ、とセルジオが頬を緩めると、受け取ったメットを抱いたはやてがちらりとセルジオを見上げる。

「……じゃあ、呼び方」

「ん？」

「呼び方、変えてええですか。いつまでもセルジオ二尉って呼ぶのも、ちよつと肩肘張ってしもうて……」

「ふふ、それくらいなら好きにしていいいぞ」

「やた、なら私の事ははやてって呼び捨てでよろしゅうお願いしますね！」

「え？？」

言葉を失うセルジオを尻目にはやては腕を組んでうんうんと唸る。

（そやなあ、セルジオ一尉は上官やしな、でもあんまり距離のある呼び方は……、セルジオさん、アウディさん、アウディ先輩、あ、そや）

はやての脳裏に友人の影がチラついて、くすりと含むように笑う。

「なら『セルジオくん』って呼んでみたりして——」

そう提案するとはんの一瞬、セルジオの表情がまるで今にも泣き出しそうな幼子のように見えた。

（え……？）

慌てて目を擦るが、今日の前にいるのはどこかつかみ所のない陰のある青年で、先ほどの表情は日の光に溶けてしまったのか、どこにも見当たらない。

「どうかしたか、ヤガミさん？」

「あ、いえ、何でもありません」

セルジオが不思議そうに首を傾げた。まるで、自分がどんな表情をしていたのかすら分かっていないように。

(……ちよつとだけ、ほんの少しだけ理解できた気がする、なのはちゃんがこの人を支えてあげたいって言っと思った理由)

暁の中に一人佇む青年の姿が眩しくて、はやてがほんの少し目を細めた。

いつかこの人が、彼の大切な人たちと笑い合える日がくればいいと、はやてはそう思っていた。

セルジオの価値観の中で呼び方というのは、その相手をどう感じているのかを窺いし

れる重要なファクターである。

例えば、セルジオは基本的に自分より年下の相手を名前で呼ぶ事はない。

なのはともそれなりの信頼関係を気づいても高町さん、もしくは高町呼びであった。けれど、これが年上の相手になると変わってくる。

師匠のゼストやクイント、そしてメガーヌはみな共通して「さん」という敬称を付けていた。

答えから言えば、これは『相手を守る対象であるか否か』というセルジオの無意識下での区別である。

守るべき相手は名字で、もしくはギンガちゃんのように愛称で呼び、そして時には冗談を言って茶化す。

そして共に戦う相手には敬称をつけて敬語で接する。

そして、名前を呼び捨てにする相手は、彼の中でも特別だ。背中を預け、預けられている。変わりが無い唯一無二の仲間、そういう相手を彼は呼び捨てにする。

故に、セルジオ・アウデイが呼び方を変えするという事は、その相手との関係を変える決意をしたという事だ。

三課で仕事を終えたセルジオは彼とルーテシアの家の家であるクラナガンにあるマンションの一つの駐車場にバイクを止めると、ヘルメットを外して小さく息を吐く。

「先輩」、先輩か……………」

数時間前、自分の事をそう呼んだ少女のことを思い起こして頬をかく。

——先輩、これからはそう呼ばせてもらいます。

男だらけの学生時代を過ごしたセルジオにとつては、女子に先輩と呼ばれるのは、ほんの不思議な感覚がした。学生時代、一人が欠けたせいでいつのまにか疎遠になってしまった友人たちを思い出させるようで、酷く懐かしい。

「八神か、はやて、か、まあどちらにしろ早く呼び慣れなきやな」

苦笑って一段一段、階段を上っていく。

その途中で胸の奥の暗い部分が問いかけてける。

信じていいのか、ドゥーエの能力を忘れたのか、あの子を信じたせいでまた騙されたら、そうやって誰かが傷ついたら、お前はどうするんだ、と。

そして、セルジオはその暗い考えに一瞬呑まれそうになったが、すぐに自分の中で一つの答えを出した。

「いいんだ、いつかの未来、俺が騙されるようなことがあっても」

セルジオが顔を上げる。その翠の瞳には紅の色が混ざり濁ってはいたものの、その奥には薄い光が宿っている。

「いつか騙される事を恐れて、いま八神を信じれないことの方が、俺は何倍も嫌だ」

人を信じたいから、信じるに足るものを見せてくれたから信じる。

きつと自分はそのくらいシンプルで良いのだ。

「……………ふう」

簡素なドアの前で、セルジオが薄く息を吐く。

この先には自分の義妹——ルーテシアが待っている。数日間の間ゲンヤに預かって貰っていたが、今日はまっすぐ家に帰っているはずだ。

ずっと悩んでいた。

あの日ついてしまった『メガーヌが生きている』という嘘。

その引け目のせいで腫れ物に触るように、メガーヌの真似をするようにしか接することしかできなかつた。

でも、それでは駄目だと、今はそう思った。

（自分がついた嘘が正しいかなんてわからない。けど、それでも俺は、この嘘を、『本気の嘘』にする覚悟ができた）

鍵を開けて、ゆっくりとドアに手をかけた。

「だからもう、迷わない」

扉を開けるとその音を聞きつけたルーテシアがぱたぱたと部屋の奥から走ってくる音が聞こえた。

「おかえり、おにいちゃん！」

廊下を駆けてくるとがっしと足にしがみつくルーテシア。絹のようにさらりと揺れる髪に恐る恐る手を伸ばす。まるで、壊れ物を触るかのよう。

——セルジオ。

ふと、いつかの誰かの、大切だったはずの『あの人』の声が蘇る。

（あの方は、母さんは、いつも俺に……）

優しく撫でようとした手を一度止めて、軽く握ると、セルジオを不思議そうに見上げるルーテシアに視線を移す。急に黙り込んでしまった自分を訝しく思ったのかもしれない。

くすり、と笑みをこぼして、セルジオは片膝をついてルーテシアと視線を合わせる。

「うりゃ」

そうして、ぐしゃぐしゃと荒っぽく頭を撫でる。髪が乱れるのなんか御構い無しのもうで本当の兄妹がそうするような、荒っぽいスキンシップ。

きゃー、とルーテシアは楽しそうに悲鳴をあげたのに、セルジオは追い討ちをかけるようにうりうりと重ねて頭を撫でた。

「ただいま、ルー」

もう一度ルーテシアと『本気』で向き合おう。

本当の家族を、
始めるために。

彼と彼

ユーノ・スクライア。

弱冠十四歳にして管理局本局の巨大データベースである『無限書庫』の管理者の長たる司書長を務めている少年である。

その功績は目覚ましいものであるが、それでも彼の人生を語る上で絶対に避けて通れない人物がいる。

ユーノが管理局との接点を持った始まりの事件『P・T事件』、就職を決めるきっかけになった『闇の書事件』、地球で起きたその二つの事件で中心にいた一人の少女。

『高町なのは』。

彼が遺跡で発掘したデバイス『レイジングハート』を託され、以後友として共に戦った栗色の髪の、笑顔が素敵な同い年の女の子。

そして、ユーノはびつくりするほど自然に、容易く彼女に心を奪われた。

一族全体が家族のような環境で育ったユーノにとって、はじめて深く関わった同年代の異性であったせいもあるだろうが、一番ユーノの心を捉えたのは彼女の魔法だった。

目を奪うような美しい桜色。その光は、彼の今までの人生を全て塗り替えるほどに鮮

烈だった。

一説において魔力は本人の心に影響されて色が変わるのだといつか本で読んだ事があった。

当時は眉唾だと思っていたが、なのはと出会ったあとはその学説も捨てたものじゃないと思う。

だって、なのはの心は魔力光が示したように、本当に素晴らしいものだったから。

常に笑顔を絶やさず、誰かのために懸命に戦う。そして、何よりその在り方はどこまでも不屈であった。

その声に、背中に、表情に、いつも勇気付けられてきた。

「いつかなのはの背中を支えてあげたいな」

それは少年の淡い誓い。

無茶しがちな彼女が全力で戦わせてあげる、傷ついたときに、迷った時に背中を支えられる、そういう存在になりたかった。

だから無限書庫で働きながら、彼女を支えられる自分になろうと研鑽を続け、そして、彼に一つの報が届いた。

——なのはが、墜ちた。

無限書庫から遮二無二駆け出した日に頬をうった冷たい雨の感触を、病室で無数の管に繋がれたなのは痛々しい姿を、何もできない自身の無力を、そして目覚めてから「リッカーコアに酷い損傷を受けている」と聞いた時のなのはの絶望したような表情を。

それほど、彼の胸に深く刻まれた事だったのだ、なのはの撃墜は。

なのはの撃墜の一件は不自然な程に詳細がわかっていない。

目撃者の証言はもちろん、出撃ログ、書類での報告書、付近監視カメラの映像すら残っていない。そして、唯一の無傷の生還者、『セルジオ・アウディ』も口を閉ざしている。もちろんなのはにも聞いてみたが、「怪我したせいかあの時のことはよく覚えてなくて」という答えしか返ってこなかった。

眉を寄せて硬い表情のユーノに、なのはは軽く微笑みかけて、「私のために、そこまで悲しんでくれてありがとう」と言った。

怪我が痛んでいるはずなのに、あんなに好きだった空を飛べなくなってるのに、自分を氣遣った笑みを浮かべたのだ。

ユーノはその時始めて、なのはのことがとても小さくみえた。

だから、ユーノ・スクライアは誓った。

絶対になのはを傷つけた人物を許さない。こんなに小さな子を、自分の大切な子を傷

つけた相手を絶対に探し出して、然るべき報いを受けさせてやる、と。

そして、彼が未だあの日の事件の真相にたどり着かないまま、二年の月日が過ぎていた。

勿論、その間遊んでいたわけではない。

彼の出来る限りの手段で事件のことを洗ったが、掴めたのは陸の中将のいくつかの汚職と、三課周りの情報だけ。

「……正直、お手上げだよ」

無限書庫の無重力空間でユーノが眼鏡を外して目頭を揉んだ。

投影された無数のパネルには彼が集めてきたデータが纏められていたが、どれもあの日の事件に直接の関係があるとは思えない。

「今の僕の立場じゃ採れるデータが限られてる」

ガリ、と親指を噛んで、ユーノが軽く手を振った。すると半透明のホロウインドウは手の動きに追従するように、無限書庫の中を滑っていき本棚にぶつかると弾けて溶ける。

「あ、ー、甘いものが欲しい。出来ればゲロ甘なやつ」

女性のようにも見える端正な顔立ちに似合わない、まるで夜勤明けのおっさんのような重低音を響かせるユーノ。

疲れ切った彼の脳が甘味を求めて暴れていた。

こんな時のために常備してあるチョコレートを取り出そうと、ポケットに手を突っ込むが伝わってくるのは包装紙のがさり、とした感触だけ。

もうとつくに全部食べてしまっていたらしい。

はあ、と軽く嘆息。

仕方ないので再びウインドウに向き合って手を動かし始める。次の昼休憩の時にでも補充する事をここに決める。

情報を整理していたユーノの目が、一人の名前を見つけて、ピタリと止まる。

「……セルジオ・アウデイ」

なのはの元相棒。今は三課の部隊長を務める青年。

彼に関しても、調べれば調べるほど謎が深まるばかりだった。まるで意図的に隠されているかのような、そんな意思すら感じた。

「気のせいだとは、思うんだけどね」

「ん、何が？」

「セルジオ・アウデイの事がだよ。調べても養子になる以前の記録が出てこないし、何で飯にもAAランク魔導師を潰れた部隊に置いておくのかもわからない」

「ああ、それ。何でも三課の運用年数的にあと一年は持たせなあかって私はきいとおつ

たけど」

「それなら尚のこと不可解だ。三課の運用年数は既に………って、あれ？」

「やつほ、ユーノくん、ずいぶんお疲れみたいやなあ」

「は、はやてつ?! いつから……」

「んー、ユーノくんが包み紙取り出してがっかりしてたくらいから」

悪戯っぽい笑みを添えて、はやてがポケットから取り出したクツキーを差し出した。

「いいよ、と断つたものはやてはニコニコしたままで、クツキーを引つ込める気配はない。」

「声くらいかけてくれればいいのに」

「なんや真剣な表情しとったから邪魔するのも悪いかなあと思うて」

有り難くクツキーを受け取ると、小さな恨み言と一緒に一口齧る。

しつとりとしたクツキー生地が口の中で踊り、細かな破片が溢れそうになるのを慌てて口に全部押し込んで防いだ。

供給されたブドウ糖に頭がほんの少し、上手く動き始める。

考えてみれば今日のはやてに頼まれていた調べ物の報告をする日だった。ついっ
い忘れていたらしい。

気分を入れ替えるのも兼ねて、ふう、と再び小さな嘆息。そして軽く手を振って昨日

のうちにまとめて出力しておいた書類を手元に呼び寄せた。

「はい、頼まれてたECに関しての報告書」

「さつすが、ユーノくん！ 仕事が早くて助かるわ」

「褒めてくれるのは嬉しいけど、今回に関してはそう大きな顔もできないかな」

「どうゆうこと？」

「んー、なんとというか、一応調べるには調べただけど、満足できるものは集まらなかった、って感じなんだよね」

首をかしげるはやてにユーノが頬をかきながら、つまりね、と説明を始める。

「はやてが期待してるようなECの根治治療や、その由来については分からなかった、ってこと」

そもそもECはヴァイゼン遺跡から発見されて十年程度の比較的新しいウイルスだ。そしてその危険性、有用性の低さから管理局では研究が進んでない。

無限書庫はあくまでも『情報を収集する』ロストログア。

言うなれば全世界に繋がる巨大な検索エンジンだ。研究の進んでいないことは探してもないのだ。

「せいぜいわかったのは、その来歴と感染者のデータくらい。力になれなくてごめん」

「いやいや、これかなり凄いで？ 私が調べても全然分からなかったんやし。ほんまお

「おきに」

「今度時間があるときにもう少し調べてみるよ。僕もこれだけしか分からなかったのは、少し悔しかったし」

「ふふ、最近のユーノくんはちよつと負けず嫌いになったなあ」

「そうかな？」

「うん、なんちゆうか、なのはちゃんっぽいかも」

「また、そんな冗談」

ふつとユーノが眼鏡を指で押し上げて、それにしても、と前置き、話を交える。

「突然ECの事を調べて欲しいなんて、何かあったの？」

「んー、まあ仕事の関係で少し、な」

「詳細を教えてもらえたりは？」

「いい女には秘密が多いもんやで。そしていい男は……」

「その秘密を詮索しない？」

「そゆこと」

コケティッシュに流される目線に、ユーノも戯けたように乗っかって、示し合わせたように軽口を叩く。

「いやー、ユーノくんはこういうのにノってきてくれるから好きや。すずかちゃんとはと

もかく、なのはちゃん達やところはいかへんからなあ」

「なのは達……アリサや、フェイトとか？」

「せやせや。なのはちゃんならまだええんやけど、フェイトちゃんやとネタの解説から始めなあかんから……」

「まあ、その、フェイトは、フェイトだから」

「フェイトちゃんやもんな……」

悪い子ではないのだ。ただ少しだけ察しが悪いだけ。

そうやってしばらくユーノと談笑していたはやてだったが、やがて携帯端末に連絡が入ると表情を引き締めた。

「ごめん、ユーノくん今日はここらへんでお暇させて貰うわ。そろそろ先輩の方に行かなあかんくて」

「先輩？」

「あー、セルジオさん。今日シヤマルんところで身体見てもろうてるんよ」

「病院、ね。どこか怪我でも？」

「まあそんなもんやよ」

はやては最後に「データありがとな」と言つてバッグに書類をしまうと、ユーノに手を振つて無限書庫を立ち去っていく。

ユーノもまた手を振って見送って、はやての姿がすっかり見えなくなってから手を下ろした。

「……先輩、ね」

「どうやらここ数週間で随分と仲良くなったらしい。」

「でもシャマルさんを紹介するまでか。まあはやては少しお節介焼きの気があるみたいだもんな」

「データを調べた限り以前の主治医の所にはもう三年近く行ってないようだし、懇意にする医者を探していたのかもしれない。」

「そう考えて、細かなノイズが思考の淵に引っかかる。」

「……三年以上、病院に行っていない、んだよな」

「なら何故今になっていきなりシャマルの元へと行きだしたのだろうか。」

「ユーノが無限書庫の虚空で指を踊らせると、以前調べたセルジオのデータ、特に通院記録に関するデータをファイルの奥から引っ張り上げる。」

「四年前、ここまで殆ど毎月病院に行くか、重傷で入院してるのに、急に病院に行かなくなってる……」

最後の通院記録は新暦の67年の春。それ以降は不思議な事に、セルジオ・アウデイが怪我をしたというデータが残っていない。

「67年に何かあったのか」

新暦67年、それはフィル・マクスウエルの事件が起こった年。そして、その場にセルジオ・アウデイがやってきて、洗脳されたなのは奪還したとの記録が残っている。

「……まさか、ね」

ほんの一瞬浮かんできた馬鹿げた考えを頭を振るって振り払うと、ユーノは司書としての業務に戻った。

「よろしくお願いします、シヤマル先生」

ペこり、と丁寧に下げられた頭。身長はすらりとして高く、身体つきは服の上からでも良く鍛えられているのがわかる。

ザファイラのような筋骨隆々なタイプではなく、必要な筋肉を鍛え、不必要な肉を削ぎ落とす、シグナムよりの技巧者なのだろう。

彼が頭をあげると、燦んだ翠の瞳にシヤマルの姿が映る。

「俺はセルジオ・アウディ。今日は八神の紹介で来ました。お忙しい中、お時間を作っていただきありがとうございます」

ピンとした姿勢、ハキハキとして丁寧な言葉遣い。

その態度にシャマルがほんの少しだけ虚をつかれた。

「あ、いや、そんな硬くならなくていいのよ。とりあえず楽にして座って」

「ありがとうございます。失礼します」

本局の彼女の医務室、その椅子の一つを勧めるシャマル。セルジオもまた軽く頭を下げると、椅子に腰掛ける。

「あ、これ差し入れです。よければ食べてください」

「これはご丁寧にも………これは」

「うまい棒です」

「うまい棒」

「安価でありながら味のバリエーションも多く、ウチの妹もお気に入りです。取り敢えず100本くらい買っておきました」

「100本」

因みに地球では一本十円で売っているが輸入しているミッドでは一本辺りの単価は約三十円程。なのでコスト面から言えばこの差し入れはそうおかしなものではない。

まあ初対面の、しかも女性への差し入れが駄菓子はどうなのか、という話はまた別だが。

「ええと、ありがとう」

取り敢えず曖昧な表情で礼を述べると、うまい棒のぎつしり入った袋を机の端に置いた。綺麗にラッピングされた袋と、子供に受けそうなカラフルな包装は非常にアンバランスだった。

(……ちよつと、思ってたのとは違うかしら)

シャマルの『セルジオ・アウデイ』に対するイメージは『冷静で徹底した合理主義者』というものだ。

エルトリアの一件での会議の様子や、ヴィータから伝え聞いたなのはの見舞いに訪れた時の様子からそういう先入観が形作られていた。

ちらり、とシャマルが書類の向こうのセルジオを伺う。

端正な顔立ちと丁寧な物腰は非常に人にウケそうだったが、女性の差し入れに駄菓子を持つてきたんだと思うと、なんだか抜けて見える。

「シャマル先生、どうかしましたか、俺の顔をじつと見て」

「な、なんでもないです。少し考え事を」

「そうですか、何か無礼を働いてしまったかと思いましたが」

「え、ま、そうですね……大丈夫よ、たぶん」

こほん、とシヤマルが軽く咳払い。

「ええと、はやてちゃんからはセルジオくん——ああ、セルジオくんって呼んでも構わないかしら？ いい？ ありがとう。」

それでセルジオくんの身体を徹底的に調べてあげて欲しいって頼まれたんだけど……、前の担当医の方のデータと違ってあたりするかしら？」

あるなら随分助かるのだけれど、と続けるが、尋ねられたセルジオは苦い顔。

「あー、あることはありますけど、正直役に立たないかなあと思います」

「それはやてちゃんも言ってたわ。どういうこと？」

「なんというか、上手く言葉にできないので、先に俺の体を調べて欲しいです、かね」

「……まあ、そういうならそうさせて貰うけど、後でデータは頂きますからね」

「……わかりました。後で、お渡ししますね」

お役に立てば良いですが、と困ったようにセルジオが付け加える。

その時は首を傾げたシヤマルだったが、全ての検査を終えて、その言葉の意味を理解した。

半日後、今の設備で出来る限りの検査を終えて、シヤマルとセルジオは、医務室に戻つてくると、先ほどのように向かい合つて座る。

「……こういうことだったのね、はやてちゃんがわざわざ私に任せただけだ」

セルジオは何も言わない。ただ困つたような笑みを浮かべているだけだ。

「E C適応者^{ドライバ}、まさか自分の目で見る日が来るなんて……」

「知つてたんですね」

「私も一応医者 of 端くれだから」

一時期E Cは再生治療の面から注目されたことがあつた。E C適応者達の異常な再生能力は、魔法による再生技術とは比べるまでもない。

彼らは身体を自在に操り、時に失つた腕までも生やしてみせる。もしそのシステムを解明し、自在に操れるようになった時の恩恵は言うまでもない。

けれど、現技術では御しきれないと判断され、計画は頓挫したはずだった。

けれど、目の前の青年を蝕む症状は明らかに、エクリプスウイルスであつた。

シヤマルが検査の結果に目を落として、唇を噛む。

「そんなに悪いですか、俺は」

「あつ、いやそんなこと——」

「自分の体の事です。なんとなくわかりますよ」

暗い表情のシャマルが慌てて取り繕おうとしたのを、セルジオが軽く笑って制すると、口を開く。

「俺、後どのくらい生きられますか？」

安らかな表情だった。まるで死ぬ事をなんとも思っていないような、そんな表情。

「それ、は……」

「遠慮しないでください、シャマル先生。もう長くはないことはわかります。俺の見立てでは、半年後に生きてるのは少し厳しいかな、とは思ってるんですが」

「そんなことっ！」

「なら後どれくらいですか」

淡々とセルジオが言葉が続ける。そしてシャマルは、悩みながらも肩を落として、答える。

「今のままなら、後一年、だと思おうわ」

「……一年、一年ですか」

「あくまでも今のままならよ。勿論私も治療に協力するし、きつと症状だつて改善するわ」

「ありがたいですけど、そこまでご迷惑はおかけできません」

「じゃああなたは医者の方に目の前で死にそうになっている重病人を見なかったことに

して忘れろっっていうの?」

「――」

「悪いけど、それは無理よ」

「シャマル先生」

「聞かせて頂戴、どうしてあなたがE Cこれに侵されたのかを」

良い人だな、と思う。

はやてが紹介してくれたのも、彼女を信じてあげて欲しい、と言った理由もわかる。

「話すと、少し長くなります」

そして、セルジオが訥々と語り始める。

E Cに侵されてからの日々を。

(……俺が死んでからのルーテシアの、こと、考えなきやな)

終わりの日は、それでも近づいてきていた。

サモンパニック!

暗い道を歩いている。

「ハハ、どこだ」

あたりは見渡す限り薄暗く、足元すら定かではない。

けれど、セルジオは理由もなく足を進めた。

どれだけ歩いたのだろうか、一時間か、二時間か、もしかしたらもつと長かったかもしれないし、短かったかもしれない。

だが、止まってはならないという使命感だけが体を突き動かしていた。

「……ん」

不意に、足元に転がっていた何かを思わず踏みつけてしまう。
眉を寄せたセルジオがしゃがんで踏みつけた何かを覗き込む。

「クイント、さん」

瞬間、息がつまり、思わず尻餅をついて後ずさる。

だが、そんなセルジオの腕を誰かが掴んだ。

『どうして』『どうして』『どうしてお前だけ』

「——は」

息が吐けない。

セルジオの手を掴む手が一つ、また一つと増えていく。

『なんでお前が生きてるんだ』

『俺たちだって生きてたかったのに』

『なんでお前が生きて俺たちが死んでるんだ』

『どうして』

ずぶずぶと、体が闇の中に沈んでいく。

「あ、あ——」

必死に手を伸ばして、一人の少女がセルジオを見下ろした。

『私を刺した時、どんな気持ちだった？』

その日の朝、彼の罪悪感が生み出した悪夢が、寝起きの彼の心をぽきりと手折った。

そのせいでいつも完璧に制御されている破壊衝動が割れた蓋の中から、抜け出しそうになる。

「あ、あ、あ、ああああああっ」

ベットから跳ねて起きたセルジオが、震える手で枕元に置いてあったナイフに手を伸ばす。

銀色に光る刃を手首に添えると、セルジオ迷うことなく深く刃を差し込んだ。ぱあつと血が散って、彼の視界の赤の割合が増える。

「はあ、はあ、はあ、はあ………」

自分の血を見て、意識を落ち着ける。

応急処置のようなものだが、それでも随分楽になる事は事実だった。

深く、深く息を吐いて、そして、セルジオが手の中のナイフを放ると、空いた手で顔を覆う。

「クソ、まただ……」

きつた手首が泡立つように治っていく感覚も、最初こそ違和感もあったが、いつのまにかそれも消えてしまった。

ほんの少し夢見が悪かった程度でうっかり家具を叩き壊しそうになってしまった。今は一人じゃないのだ。なんとしても『家族』を心配させてはいけない。

枕元のタオルで手首と顔についた血を拭くと、ベットのシーツに視線を落とす。そこには手首をきつた際に散ったらしい血痕がぼつぼつと残っていた。

「ルーにバレないように掃除しなきゃ……」

タオルトと毛布でシーツを隠すと、軽く伸びをして自室を出る。

今日は珍しく休みだ。ルーテシアが以前行きたいと言っていた、買い物にでも連れて行ってあげよう。

週末で朝の変身系ヒーローの番組を見ているであろうルーテシアのいるリビングへ向かう。

「ルー、おはよ——」

何かが、いた。

ぎらぎらと黒光りする甲殻。180近くある自分に届かんかとするような巨体。怪しく光る三対の黄色の複眼。

思考は一瞬。瞬時に寝ぼけていた意識を叩き起こす。

「——加速機動」

は、と小さく息を吐き、魔法を起動——しかけて、胸に刺すような痛みが伝わる。痛みが胸が軋むが、それを無理やりねじ伏せると、魔力を魔法式に乗せる。

淡い光が身体を包み、加速、目の前のナニカの背後に回り込み、人でいうと延髄にあたる部分に全力の蹴りを叩き込んだ。

魔法で強化した筈の足がみしり、と軋んだが、目の前のモノの黒い甲殻もまた、小さ

な悲鳴をあげる。

「硬くて通らない。なら——」

蹴りの勢いをそのまま反転させると、首元を抑えて怯んだ奴の腕を取ってそのまま床へと叩きつける。

羽をこすりあわせるような悲鳴が聞こえたが、それに意識を割く事なくそのまま腕を極めて——

「お兄ちゃんっ！」

きーん、と舌つたららずな声が割り込んでくる。

「ガリユーをいじめちゃだめーっ！」

「ル、ルー?!」

「おりてあげて、ガリユー、痛がつてる」

「え、がりゆ、え? なんだつて」

「もう、いいから」

「もは、ルー^{うーへひあ}テシア、^{まへへつめい}待て説明を」

ほかり、と胸を叩かれて、ぎゅうぎゅうと顔を押しされ、黒い奴の上から落とされた。

「だいじょうぶ、ガリユー、びっくりしたでしょ」

セルジオの戒めから逃げ出した、黒い奴はフローリングの上で正座をして、ナデナデとルーテシアに頭を撫でられていた。

「な、なあ、ルー、そいつは、なんだ？」

「ガリユーだよ」

「その、我流？　が何かを聞きたいんだが」

「ガリユーはガリユーだよ。お兄ちゃんわからないの？」

「うん、残念ながら全然わからないな」

「へんなの」

「いや多分この場で変なのは俺じゃないとお兄ちゃん思うなー！」

セルジオが頭を抱えると、ちらりとガリユーと呼ばれた黒い奴に目を向ける。

(……どこかで見たことがある気がするけど思い出せない。なんだろう、超進化したゴキブリとかだろうか)

しばらく頭を悩ませていたが、遂にふっとセルジオは爽やかな笑みを浮かべて、天を仰いだ。

「よし、わからん」

セルジオは考えるのをやめた。

「とういうわけで、八神に頼ることにした」

「いやどういうわけですか？」

「俺一人じゃ手に負えない。お前の力を貸して欲しい」

「いや私今日は非番ですし……」

「俺だつてそうだ。八神だけが頼りなんだ」

「この前まで壁つくつとつたくせに……」

「今は比較的信頼してるよ、補佐官」

「はいはい、先輩は口がお上手ですね」

朝一からセルジオのマンションに呼びつけられたにも関わらずはやては、なんだかんだ言いつつも一時間後にはやってきてくれた。

面倒見がいいというか、根本的なところで人がいいのだ。

「まあ一応紹介しとくよ、こっちは俺の妹のルーテシア。ルー、ほら挨拶」

セルジオが自分の足にしがみついて、見知らぬ来客に怯えるルーテシアの背中を軽く叩いた。

「ルーテシア、です……」

言うや否やルーテシアはまたセルジオの足にしがみついて隠れてしまう。

「あー、悪いな、八神。ルー、ちよつと人見知りする方だし」

「ええよ、ええよ、私もちっさい子が親元離れてる心細さとかはわかるつもりやし」

たはは、と笑ってはやてはしやがむと足の陰からちらちらと自分を伺っている屈んでルーテシアと目線を合わせる。

「私は八神はやて。お兄さんとはお仕事の同僚です」

「どうりよう?」

「あー、まあお友達でええよ。セルジオ先輩の友だち」

「友だち、お兄ちゃんのこと?」

「せやせや」

ルーテシアが目の前のはやてと、遠くにある兄との顔とを何度も視線を行き来させて、目をまん丸にして呟いた。

「お兄ちゃん友だちいたんだ……」

「いや、最近疎遠になってるけど俺にも友だちくらいいるぞ、ルー」

「セルジオ先輩……」

「あ、ちよつと待て可哀想な目で見ると、八神はクロノのこと知ってるだろ」

「そうですね、友達いますもんね、先輩」

「やめろ、私はわかってますよ、みたいな目は一番傷つくんだぞ」

はやては慈母の笑みをセルジオに向けると、ルーテシアに向き直る。

「私のことははやてさんでも、お姉ちゃんでも好きに呼んでな」

「……なら、はやてさん……」

「ほんなら、私はルーテシアちゃんのこと、先輩に倣って『ルーちゃん』って——」

「だめっ!」

びくり、とはやてが虚をつかれたように身を引いた。

「その呼び方は、おねえちゃん、だけでもん……」

ほしより、とルーテシアは言うのとセルジオの足を抱いて目線を落としてしまう。

しばらく部屋の中は水を打ったように静かだったが、やがてはやてがたははー、と空気を誤魔化すように笑う。

「そっか、ごめんな、ええと、ルー、ルー……あ、ほんなら私は『ルールー』って呼んでええ?」

「るー、るー?」

「うん、ルールー」

「ルールー。うん、いいよ、はやてさん」

「ほんま? おおきに、ルールー。あ、飴ちゃんあるけど食べる?」

「たべる」

はいあーん、とはやてがルーテシアの口の中に飴を入れると、口の中でもごもごこと飴玉を転がすルーテシア。

ほんの少しご機嫌になったルーから目線を外して、はやてが立ち上がる。

「悪いな八神、ルーちよつと親がいなくなつてから呼び名には神経質でさ」

「ええですつて。それよりも、お姉ちゃんつて、もしかしてなのはちゃんの事ですか？」

「……まあな」

肯定の言葉は短い。言外の雰囲気で、この話は続ける気がない、と伝えていた。

「自己紹介も終わつたし、本題に移ろう。今日八神を呼んだのは、そいつの件だ」

ぴつとセルジオが部屋の隅を指差すと、そこにはソファに行儀よく座る黒い奴の姿が

あった。

「あ、やつばあの子の件なんやね……今まで何も言われへんから触れてなかつたけど

……」

「お前が空気読むスキルが高いやつで助かつたよ」

まあそんなわけでかくかくしかじか説明を受けたはやて。

「朝起きたら既におつた、と。何か詳細わかつてそうな肝心のルーも」

「？ ガリユーはガリユーだよ？」

「なるほど、大体はわかったわ」

「え？ マジか」

「いやわかったのはこれは私には分からへんと言うことです」

なので、とはやてが言葉を繋ぐ。

「こう言うのに詳しい人を呼ばせてもらいます」

『それで僕に連絡を？』

「こう言う時に頼れるのユーノ君しかおらへんくて、お願い！」

『まあ別に良いけどさ』

はやてが連絡を取ったのは毎度のごとくというか、いつものようにと言うべきか、ユーノ・スクライア。

基本的に無限書庫は激務だ。それに加えて本人の生真面目さのせいで彼はほとんど毎日無限書庫に出勤している。

なのでこうして調べ物を頼め見たいときは、割と素早く取りかかってくれたりする。

ともすれば良いように使われているようにも見えるが、ユーノ生来の人の良さから、彼は露ほどもそうは思っていないようだ。

『ええと、朝起きたら家に居たんだけ。それでセルジオさんと妹さんの魔法適正はこれ……』

空中に投影されたホロウインドウの向こうのユーノが忙しくなく手を動かし始める。

いかにユーノといえどおそらくちゃんとしたデータを割り出すまでには時間がかかるだろう、そう思ったセルジオは取り敢えず先日のご感謝も込めて礼を言っておこうとする。

「こんな雑事まで手を煩わせてしまって申し訳——」

『よし、わかりましたよ』

「え？ 速っ?! まだ頼んで三十秒くらいしか経ってないぞ?!」

『あはは、このくらいならそんなに難しくありませんよ』

「ユーノくんやしな。このくらいはやってくれるで」

「え、そうか？ そうなのか？ これ俺がおかしいのか？」

セルジオ自身自分が解析や分析などの頭を使う分野においてそこそこの優れているとは自認していたが、一瞬で検索を終わらせたユーノには舌を巻かざるを得ない。

ユーノという少年は、はやてやなのはとは別の方向で『天才』だった。

『結論から言って、そこにいるのは所謂『召喚獣』と呼ばれるものです』

「召喚獣？」

『はやてにわかりやすく言うならシグナムたち守護騎士システムが近いと思う。主人の魔力を微量に得る事で生活する、主人を守る盾』

「召喚獣……そうか、お前はメガーヌさんのフォードと似たようなものなのか」

言われてみればメガーヌが連れていたフォードとどこか容姿が似通っているようだった。

「じゃあ、こいつはルーの召喚に応じてやって来たってことなのか？」

「お兄ちゃんこいつじゃなくてガリユール」

『いや、僕が調べてみた限り、召喚の才能が高いと極たまに召喚獣の方から逆召喚が行われたりするらしい。ルーテシアさんもその例なんじゃないかと』

「じゃあルーがあいつの名前を知ってたのは？」

「ガリユール」

『多分召喚獣の方から教えてくれたんじゃないかな。召喚に成功したってことは多分。ハスは繋がってるだろうし、軽い思念通話ができるはずだよ』

「そうなのか、ルー？」

「うん、自分で教えてくれた。それとあの子はガリユールだよ」

「はいはい、ガリユールな」

膨れっ面のルーテシアの頭をポンポンと雑に撫でてなだめると、ソファに座っている

ガリユーを手招きする。

ガリユーは自身を指差し、首を傾げたが、セルジオが尚も手招きすると、のしのしとルーテシアのそばまでやってくる。

「ええと、お前は——」

「ガリユー」

「……オーケー、ガリユーは、ルーの召喚獣って認識でいいの？」

「いいと思う」

「——」

「なるほど、それでこれからは四六時中家にいるのか、おま——ガリユーは」

じいつと睨むルーテシアに負けたように名前を言い換えると、ガリユーは静かに頷いた。

「メガーヌさんの件があったからいつかはこんな日が来るかもとは思ってたけど、こんなに早くか……」

セルジオが髪を書き上げた手でそのまま額を抑えると、深いため息。

「まあそれはともかくガリユー、お前何食べるんだ、樹液とか？ 虫っぽいし」

「お兄ちゃん」

「いやでも、見た目虫じゃんか……」

『多分食料は最小限でいいと思うな。基本的にはルーテシアさんから現界維持の魔力を貰えれば自活できるみたい。後は、果実とかでいい、はず』

「はず、なあ……」

ちらりとはやてがガリユーを伺う。

「取り敢えず、問題解決って事で、ええんですかね」

「いや待て八神、大事な問題がまだ片付いていない」

「え？」

「ここ、ペット不可なんだ」

「あ」

『あ』

「ガリユーって、ペットになると思うか？」

『……………たぶん、ならない、かな』

「……………ウチのザフィーラは一応使い魔って事でペットではないで」

「でも、ガリユー見た目めちやくちや虫だぞ」

「せやな……」

『そうだね……』

どーんと立っているガリユーに目を向ける。きらきらと光る甲殻、刺々しい見た目は

ご近所の評判によろしくなさそうだった。

ふう、とセルジオが今日何度目かになるかわからない溜息をついて、ルーテシアの肩に手を触れた。

「悪い事は言わない、ガリユーはしばらく元いたところに帰ってもらわないか」

「やだ、ガリユーは何も悪いことしてないもん」

「でも、ルーはまだ小さくてちゃんとお世話できないだろ？」

「できるもん。ちゃんとお世話できるもん……」

「本当に？」

「できるもん……」

「なんか、アレやな、風の谷のナ○シカを彷彿とさせるな、この会話」

『ごめんはやて何のこと？』

その後、なんだかんだあったもののガリユーは無事にルーテシアの召喚獣になったんだとか。

ガリユートの一件が片付き、通信を切ったユーノ。

「……前より明るくなってるな」

もしかしたら、あちらの方が素の『彼』に近いのかもしれない。

でも、そんな彼を見るたびに、心の中の暗い部分が鎌首を持ち上げるのだ。

——『彼女』は傷ついたので、彼はそれを忘れたように幸せになっている。

——いいのか、許していいのか。

——あの日、何が起きたか問い詰めるべきじゃないのか。

だが、それをユーノは振り払う。

人は前を向いて幸せになる権利がある。彼にだって立場があるし、それに、彼に報いを受けて欲しいわけではない。不幸せになって欲しいわけではないのだ。

「……仕事しよう」

自分に言い聞かせるようにそう言って、新しい依頼が来てないかの確認のためにメールボックスを開き、眉を寄せる。

「……誰だ」

一通、見慣れない宛先からのメールがあつた。

ユーノとコンタクトを取るには本局を通して無限書庫の使用申請の許可を取らなければならぬ。

故に、こうした宛先不明のメールは滅多に届かないのだが、それでも漏れはある。時折、こうして彼に擦り寄ろうとする輩がいるのだ。それは不明な学術調査だったり、企業のヘッドハンティングであつたりするのが大抵だ。

特に考えることなく、いつものように不明なメールを消去しようとして、手が止まる。普段なら捨てていたもの。けれど、その日のユーノは少しだけいつもと違った。

なのはの一件の調査の手詰まり、『彼』との関わりから湧き出た暗い感情。

少し、いつもと違うことをして気分を晴らしてみたかった。

そうして、ユーノはそのメールを開き、眉根を寄せた。

「これ、どういう事だ……」

書いてあつたのは、調査の依頼でも、ヘッドハンティングでもなく、ただ短く不可解な文が、一つだけ。

『セルジオ・アウデイには大きな『嘘』がある』

ユーノの心に、波紋が生まれる。

最初は小さなそれが、次第に波を立てながら、大きく広がっていく。心の中に生まれたその正体を、ユーノ自身も理解できなかつた。

何が君の幸い

「ほらもう9時だ、そろそろ寝る時間だ」

「まだ、おきてる……」

「いい子にしないとガリユースが森に帰っちゃうぞ」

「ガリユースは、いつでも私のそばにいるもん……」

「ならガリユースがもう眠いつてき。一緒に寝てあげてくれ」

「んう……」

目をこしこしと擦るルーテシアは、兄に導かれるままよたよたと自室のベッドに向かう。ベッドでは既にガリユースがシーツをきっちり伸ばして布団の用意をしている。いる。

「サンキュ、ガリユース」

こくり、とガリユースが頷く。

セルジオは軽くガリユースの肩を叩くとベッドに入ったルーテシアに布団をかけてや

る。

「ほーら、おやすみだ、いい夢をな」

「ねむくなるまで、お話しして」

「むかしむかしルーテシアは眠りにつきましました。これでいいな、おやすみ」

「むう……」

不満そうなルーテシアの頭をワシワシと撫で、側のガリユーに「早めに寝せてくれよ」と声をかけておくのも忘れない。ルーテシアはガリユーとある程度の意味疎通ができるので夜遅くまで話し込んでいたりするのだ。

最後に部屋の電気を豆電球に変え、扉をほんの少しだけ開けておく。まだ真つ暗だと怖がってしまうルーテシアへの気遣い。

リビングに戻ると一緒に見ていたアニメを止めて、ルーテシアのマグカップの中を覗き込む。

中には少し前に入れてやったココアが半分ほど残っていた。

やれやれと、頭をかいて生ぬるいココアを飲み干す。温度が低いのはわかるが、それ以外は味の違いはよくわからないが、生まれついでのことなのであまり気にしない。

空いたカップを持って台所へ行き、水につけておく。今日の洗い物は終わってしまったので、明日の朝食の後のものと一緒に洗うことにする。

「ん……………仕事、するかあ」

軽く伸びをして凝り固まった筋肉をほぐすと、帰宅の時に小物入れに入れておいたゼファーへと手を伸ばして、ポーン、とインターフォンが鳴った。

「こんな時間に誰だ？」

回覧板ではないだろうし、特にこの時間に尋ねてくる知り合いに心当たりもないので、傍迷惑な宗教勧誘か何かだろうか。

「前来た夜天教は後輩が夜天の主ですって言ったらすげえ顔してたな」

探せば霸王とか聖王の子孫もいたりしないだろうか。

そんなくだらないことを考えながら玄関で反射的に軽く解析魔法を使おうとする。

「——とと、あんまし頼るなってシヤマル先生に言われてたんだった」

いかんいかん、と独り言。

そして玄関の覗き窓に目を合わせて、ふっとセルジオの顔から色が消えた。

「……………よりによって、お前か」

見知らぬ人だったからではない。親しくない人だったからではない。会うのが嫌な相手だったからでもない。

けれど、だからこそ、今まで関わるのを避けてきた相手でもあった。

「……………わかってる。いつまでもこのままじゃいけない」

がちやり、とセルジオが解錠して扉を開け、反身を乗り出すと、意を決したように扉の前に立っていた人物と顔を合わせる。

「ちやんと会ってくれるんだな」

「……わざわざ来てくれたのを無下にはできんよ」

「そうか、ありがとう」

彼はいつのまにか随分と低くなった声で、けれど昔とほとんど変わらない様子で黒い髪の毛の奥の群青の目を細めた。

「ま、入れよ、クロノ」

「乾杯」

「乾杯」

「こん、と缶をぶつけ合うと、どちらも薄く口をつけた。

「急に押しかけてきて悪かったな。少し君と酒が飲みたくなってしまった」

「別に構わんさ、俺とお前の仲だ。最も、俺は酒に弱いからあんまり付き合えないが」

「本当に酒を飲みたいだけなら飲み屋に行く。セルジオと、つて部分が肝だ」
「左様で」

くいつとセルジオが缶の中身を傾ける。基本的にセルジオは酒などの嗜好品を買うことはない。眠気覚ましの為にコーヒーや栄養ドリンクを買うことはあるが、それだけだ。

だから今飲むのは全てクロノが買ってきてくれたものだったりする。

「最近どうだ、海の方は」

「管理世界、管理外世界にロストロギアと忙しくい。まあつまりいつも通りだ」

「そりや大変そうだな」

「自分で船を持つことがこんなに大変とは、母さんの下にいた頃は思いもしなかつたよ」
「そういう昇進したんだっけか。提督って言ったら陸で言えば……佐官扱いか。敬語でも使った方がいいですか、ハラオウン提督」

「君の階級を追い抜いたのは最近の話じゃないと思うが？」

「言つてろ」

くく、とセルジオが頬を緩め——そうになるが、何かを思い出したように表情を陰らせた。

まるで、笑みを見せてはいけないことを思い出したかのように。

「……君とこうして話すのも随分と久しい。確か半年ぶりくらいになるんじゃないか」
「……だな」

「三人で集まったのに至っては、あいつの葬式以来一度もない。ヴァイスとは？」

「時々顔を合わせるくらいだな。あいつ、この前転属して今は機動五課所属だよ」

「それはまた大出世だ。相変わらず妹とは仲良くやつてるだろうか」

「さてな、そろそろ思春期だろうからな、案外『兄さん嫌い』とか言われてるかもな」

「泣きそうなヴァイスが眼に浮かぶ」

「はは、違くない」

そしてまた会話が止まる。

リビングに広がる静寂の中で、セルジオは手の中で缶を弄ぶ。結露した水が表面を滑り落ちながら周囲を巻き込み、大きな雫となって机を濡らす。

「あー、セルジオ、はやては、どうだ？ 今は君の部下なんだろう」

「良い人だ。思いやりがあつて、優秀で、人をよく見てる。ああいう人はなかなかいない」

「少し心配してたんだ、僕は」

「心配？ 八神を？」

「君をだ。君はなのはがいなくなつてから」

「クロノ」

すつと、底冷えするような低い声がクロノの言葉を遮った。セルジオ自身、自分の口からそんな声が出て些か驚いたくらいだった。

「……腹の探り合いみたいな会話は、やめろ。何か話したくて、わざわざ事前に予定を確かめずにきたんだろ」

な、と向けられた視線に、しばらくの間クロノは何も言わなかった。けれど、缶の中身を口の中に流し込み、酒精の力を借りて、口を軽くした。

そして、居住まいを直し、淀みのなく言葉を紡いだ。

「今日はこれを渡しにきた」

差し出されたのは綺麗に箔押しされた一通の手紙。裏返してみれば、そこにはクロノとエイミイの名前が書いてある。

「……これ、まさか」

ああ、とクロノが頷いた。

「来月結婚する、エイミイと」

セルジオが面をあげて、手紙からクロノへと視線を移す。そこにはもう、先ほどまで垣間見えていた迷いはない。

「酒の席の冗談、つてわけじゃなさそうだな」

「もう挨拶も式場の予約も、随分前に済ませた。披露宴の招待の手紙も、ほとんどの人に送ってる」

「それは、その、なんだろうな……」

視線がまた受け取った手紙に落ちる。なんと言うべきなのか、何を伝えればいいのか、そんなことばかり考えてしまつて、祝福の言葉が出てこない。

「納得できないつて、顔だな」

「——そんなことツ」

「良いんだ、セルジオ。君がそう思うのも僕はわかる」

ふつと、クロノが表情を緩めた。

「今でも、ティーダのことを思い出すよ。あの日の無力と、後悔を」

「……ああ」

「ずっと考えてきた。迷つてきた。ティーダが死んで、僕は何をすべきなんだろう、何をなして行くべきなんだろうつて」

きつと、彼らの関係はあの日に一度終わってしまった。『四人』が減つて『三人』になる事はなく、彼らは一人と一人と一人に変わってしまった。

それだけ、ティーダの存在は、彼らにとって『当たり前』だった。

「でも現実を否定しても何も変わらない。僕たちは生きてるんだ。だから、生きて、精一

杯生き抜いて『幸せ』になるべきだ」

クロノが、セルジオを真つ直ぐ見つめたまま言葉を続けた。

「月並みな言葉にはなるが、きつと、それをティーダも、死んでしまった僕の父も、望んでいると思うから」

「……でも、そんなのただの俺たちの勝手な予想だ。どれほどその人の為と言つても、死人が蘇る事はない。何が彼らの本当の幸いかなんてわからない」

「そうだ、わからない。きつといつまで考えても答えは出ない問題だ。だからこそ、僕たちは足掻く。何を人生の指標とするべきなのか、『幸せ』とは何なのか。」

それについて考え続けることが、人であると言うことなんだと、僕は思う」

セルジオは、何も言わない。

それに対して、クロノはゆっくりと言葉を締めくくった。

「セルジオ、君は幸せになつて良いんだ」

セルジオは何も言わない。言えない。何を言うべきかも、わからない。

「……まあ、結婚式まで時間ももある。来るかどうかは、ゆっくり考えてくれ」

「ああ、悪いな」

「謝るなよ、何も悪い事はしてないだろう」

僅かに頬を緩めたクロノは缶に残っていた酒を飲み干すと、赤みがさした顔で手早く

荷物をまとめる。

「帰るのか」

「家でエイミイが待つているんだ。あまり遅くなると家から締め出されかねない」

「結婚前から尻に敷かれてるじゃねえか」

「まあ、エイミイだしな。彼女に勝てる奴なんて僕らの中では一人もいなかっただろ」

「ならお前が勝てないのも道理、か？」

「残念な事にね。それにエイミイの尻に敷かれるのは存外悪くない気分だね」

「堂々と惚気るんじゃないよ」

「とんとん、と爪先で地面を叩いて靴を履いたクロノの背中を見送りに来ていたセルジオが軽く殴る。」

クロノが扉に手をかけて部屋を出ようとして、わざとらしく「ああ、そうそう」と声を漏らした。

「実は友人代表のスピーチ、まだ決まっていなくてね。君さえ良ければ任せたいんだが」

セルジオが呆気にとられたように目を丸くして、力が抜けたように吐息を漏らす。

「わざわざ俺に頼まなくても良いだろ」

「共通の友人で考えれば君が適役なものでね」

「そこからへんはヴァイスとかに投げとけよ」

軽く言葉を交わして、小さく笑い合う。

「じゃあ、また」

「……ああ、また」

ぎい、と音を立てて扉が閉まると、先ほどとは打って変わった静寂が辺りを支配した。しばらくなんとなく扉を見つめていたセルジオ。けれど、軽く頭をかくと扉に背を向けて、リビングに戻る。

その道すがら、ほんの少しだけ開けておいたルーテシアの部屋を除く。

「……ちゃんと寝てるな」

ガリユーの腕を抱いてくうくうと寝息を立てる義妹に表情を緩め、部屋に滑り込むとベットの端に腰をかける。

きい、と小さくスプリングが軋む中、セルジオがルーテシアの顔にかかっていた紫の髪を指で払ってやると、頬の輪郭に指を滑らせる。

ルーテシアからんう、と小さな声が漏れた。

「人を好きになるって、どういうことなんだろうな」

ぼつりと、セルジオが呟く。

セルジオには恋がわからない。愛が分からない。

彼にとって『好き』の気持ちは共通のものであり、そこに恋という区別——言っ

まえば『好き』の優劣——を付けることができない。

「結婚すれば、恋をすれば、幸せなんだろうか。ゼストさんたちも——」

言いかけて、顔を覆って、自嘲気に顔を歪める。

「俺にそんなこと——」

その先の言葉を聞く相手も、彼の心を受け止める相手も、そこにはいなかった。

その日の空は青かった

ミッド郊外の森の中で篝火が揺らめき燃ゆる。

黒いフードに身を包んだ大丈夫は、森から拾ってきた枯れ枝を放り込み、アームドゲバイスである槍を近くに突き刺すと、背中を大木に預けてへたり込んだ。

「——ふ」

深く息が吐き出される。

ぱちり、と夜の黒の中で火の粉が爆ぜた。

火の粉はほんの僅かな間だけ眩しく輝いたが、すぐに虚空に溶けていく。

「……まさか、もう一度があるとはな」

男は表情を歪めて視線を落とす。握った拳に力を入れるが、彼の記憶にあるものよりも反応が鈍い。

「元より死した身、贅沢は言えんか」

そう言った男が腕を組んで脛を下ろそうとした時、懐の通信機が小さな音を立てた。

『やあ、ご無沙汰だね。貴方が此方になかなか顔を見せないから私から連絡を取ってしまつたよ』

虚空に映し出された画面に映るのは軽薄そうな笑みを貼り付けた瘦躯の男。一度死した彼を蘇らせた、張本人。

ジェイル・スカリエツィ。

「何の用だ。俺はお前と談笑をする気は無い」

『それはまたご挨拶だね。同じ目的を見据える仲じゃないか』

「勘違いするな。俺はあくまでも奴の元に行くことが目的であつて、貴様の仲間になつたつもりはない」

モニターの向こうのジェイルが眉を寄せ、

『じゃあ本題に入らせてもらおうか。以前頼んだあの件、今でも答えは変わらないかね？』

「……お前の探し物の件か。アレはリスクとリターンが釣り合っていない。管理局がそう易々と漏らすと思うのか？」

『だから君に頼んでいるのさ。ウチの娘たちでも、今回の件は少し手に余る』

「……………答えは変わらない」

『ふむ、それは私が頭を下げて頼み込んでモかな』

「貴様の頭など、何の価値にもなりはしないだろう」

「ハア、とモニターのジェイルが仰々しく嘆息を漏らすと、天を仰いだ。

「ああ、そうか残念だ。なら私も心苦しいが彼らと呼ばなければならぬな」

「ツ、貴様」

「いや、私も心苦しいよ。でも人手が足りないんだ、仕方ないだろう？ ああ、貴方がいれば私もこんな手を使わなくていいんだが……いやはや、仕方ない」

手で顔を覆いくつくつと体を震わせるジェイル。その手の隙間からは、隠しようがない深い笑みと、喜色に彩られた金色が覗いている。

全ては、彼の掌の上。もとより、男に断る道など残されていなかった。

彼は歯の根を噛み締めて、絞り出すように声を出した。

「……………今回だけだ」

『ほう？』

「今回は、俺とアギトも動く。その代わりに、今回で情報を確定させろ」

『グッド、それで手を打とう。いや私も貴方の力が借りれて有難い。持つべきものは良い友じ——』

ぶつり、と彼はジェイルとの通信を切って通信機を懐に滑り込ませる。

昔は、仲間と共に地上の平和を守ろうとしていた。けれど、今はその仲間すら失い、取

り締まっていたはずの犯罪者に身を墮としている。なんとも皮肉な話だ。

男は疲れたように笑みを漏らすと、ポケットから小さな懐中時計を取り出し、指で弾いて蓋の部分を開いた。

そこには二人の男性と、弾けんばかりの笑顔を浮かべた女性と、不思議そうにこちらを見ている少年の写真がはめ込まれていた。

「……………レジアス、お前は俺たちを」

男が目を細め写真に手を伸ばそうとした時、遠くから自身の名前を呼ぶ声に気がついた。

「おい、旦那ー！ ご飯買ってきたぞー、一緒に食べようー」

見れば遠くの方から十歳程の幼子が此方に手を振りながら走ってきていた。その髪は、炎を思わせるように紅い。

「ん？ 旦那、またそれ見てるんだ。何か大切なものなのか？」

「……………いや、大切なものだったんだ」

「……………」

「ふ、お前が気にすることじゃないよ、アギト。さあ飯にしよう」

「アタシカルボナーラのやつ買ってきたんだ！ 山盛り！ 旦那は辛いやつでよかったか？」

「ああ、ありがとう、アギト」

「ちよ、頭撫でるなよ、旦那！ アタシはこれでも純正ベルカの融合機——もがもが」

男は傍の少女の頭を撫でながら、空を見上げる。

かつて彼が飛んでいた空は、いつもと変わらず腹が立つほど眩しい星に覆われていた。

クロノとエイミィの結婚式が執り行われたのは、よく晴れた夏の日だった。

「そろそろ起きるか」

ぱちり、とセルジオが微睡みを経ること無く目を覚ますと、身体を休ませたせいで少し凝り固まった筋肉をほぐしながら目線を滑らせる。

三課の寮にいた頃と殆ど変わらない、寝具とクローゼットだけという殺風景な部屋の中に、申し訳程度に置いてあるカレンダー。その今日の日付には丁寧な文字で『クロノ・ハラオウン結婚式』とのメモが残っている。

「……………俺が行ってもいいものか」

貰った招待状は一応参列に丸をつけて、送り返したが、それでも、やはり行くべきかは悩んでしまう。

クロノと言えば海の若きエースだ。その結婚というだけあつて規模はなかなかのものであり、本局の高官なども多く招かれたのだと聞く。それに、『地球』の面々とも関わりの深い彼だ、恐らくはやての家族の守護騎士も、『彼女』も、いるのだろう。

「仕事ができたつて言つたら行かなくてよくなつたり……いや流石にそれは駄目だよな……」

一度しかない親友の晴れの日にはバックれるのは、一般常識に照らしてみれば、流石に許されることではない。

思わず頭を抱えそうになって、コンコンと軽いノックが聞こえてくる。

「そっか、ルーのごはん作らなきゃな」

つい忘れてた、と頭をかく。最近こうした物忘れが多くなっている。

忘れてはいけないことも、沢山あるはずなのに。

部屋から出ると、リビングから賑やかな朝のテレビの音が聞こえてくる。ルーテシアが好きでよく見ている変身ヒロインのアニメだ。セルジオはよくわからなかったが、付き合つて見るうちになんとなく覚えてしまった。

「よう、早いなルー」

「あ、おはよう、お兄ちゃん」

「」

「おはようさんです」

「ん、ガリユーと八神もおはよう」

「先輩朝何飲む派ですか？ 牛乳、コーヒー、一応野菜ジュースもありますよ」

「ああ、じゃあコーヒー。濃いめのやつブラックで」

「ほーい」

セルジオが食卓につくと、はやてが手早くコーヒーを淹れて、黄金色のトーストとおかず添えて目の前においてくれる。

取り敢えずコーヒーに一口口をつけて、ふう、と一息。

「つて、じゃねえだろっ！ なんで八神がウチにいるんだ！」

「ルールーが開けてくれました」

「はやてさんの朝ごはんおいしい」

「ルーテシアア！」

もむもむとはやての朝ごはんを頬つべたいっぱいに頬張ったルーテシア。

「勝手に鍵は開けちゃ駄目って前言ったろ……」

「はやてさんは友だちだもん」

ねー、と笑い合う二人にセルジオがげんなりと肩を落とした。

実はこうしてはやてが食事を作りに来てくれるのは初めてでなかったりする。以前セルジオが「ルーが好き嫌いして困る」とボヤいた時、少し世話焼きの気があるはやては料理を作りにきてくれたのだ。

しかもルーテシアはその時に胃袋を掴まれてしまったらしく、最初に怯えていたのが嘘のように懐いている。

「ほら先輩も朝ごはん食べましょ、クロノくんの結婚式にはまだ時間ありますし」

「……お前がここに来たのはそれが目的か」

「目的なんて嫌やわ、普通に心配やったから顔見せただけですよ」

「……………」

「そんなことより、かわいいー後輩が朝起きたらおるっていうなかなかくるシチュエーションについて何か一言」

髪を一つにくくって側に控えているはやてはにこにここと笑いながらそう言った。足首まで覆い隠すロングスカートに合わせたノースリーブのニットは清潔感のある白、ついでにエプロンまでつけて見た目はちよつとした若妻だ。

普通の男性ならそれだけでコロツと落ちかねないシチュだが、残念ながら相手はセルジオだ。

「次は不法侵入で訴える」

「ひどっ?!」

まあそんなこんなではやての作ってくれた朝食に舌鼓を打つと、着替えてクロノの結婚式に向かう。

セルジオの家から結婚式の執り行われる聖王教会まではそれほど遠くないので、歩いていくこととなる。

「ねえねえ、お兄ちゃん、私どう?」

「ん、可愛いと思うぞ」

「えへへ、じゃあガリユーは?」

「え、ガリユー? ガリユーは、うん、ネクタイいい感じだと思う、ぞ。こう、いい感じだ」

「やったねガリユー」

「――」

「ふんふんふーん」

楽しげにルーテシアがくるくると回る。その動きに追従するようにドレスの裾と紫の長い髪が踊った。

「ルールーご機嫌ですね」

「ドレスがきれて嬉しいんだろうさ。この前は結婚式に行きたいって言い出して大変だったんだよ」

「じゃああのドレスはそのために？」

「まあな。リミエツタに聞いたらドレスの裾持ちやらせてくれることになってさ、ほんとあいつには頭が上がらない——と、ルー、あんまり走るな、危ないぞ」

「はい」

「どうにも心配だな、ガリユー、一応気をつけてやってくれ」

「——」

「ん、さんきゅ」

頷いたガリユーの胸を軽く叩くと、ガリユーはルーテシアの側まで行って控えていてくれた。おそらくこれで一先ずは安心できるだろう。

「まったく、最近は腕白でさ——どうかしたか？」

「いえ、ふふ、なんだか、お父さんみたいやなあつて」

「やめてくれよ、俺は子持ちになる気はないぞ」

「でもルールーの心配する様子とか、ほんま所帯じみてるんやよなあ、お昼もお弁当自分で作ってはるし」

「やめてくれ、俺はそういうの、ほんとするつもりないからさ……」

「でも、先輩とルーラーが『家族』っぽいのはほんとですよ？　すっごい自然な感じに見えます」

「自然、か」

「はい、普通の仲良し兄妹です」

くすくすと笑うはやてに、難しい顔をしたセルジオがぽりぽりと頭をかいた。

「それは、たぶん八神のおかげだと思う」

「私の？」

「前言ったろ、『本気』で向かい合うことが大事だって。アレ、結構考えさせられた。ルーとの関係とか、俺がどうすべきかとか、そういうの」

だから、とセルジオが言葉をつなぐと、視線はルーテシアに向けたまま、ぶつきらばうに続けた。

「その、色々、ありがとう。お前がいてくれて良かったと思ってる」

なんでもそつなくこなすイメージのあった先輩のその言葉は、ほんの少しだけ彼を幼く見せて、はやての表情が綻ぶ。

「もしかして、今私口説かれています？」

「ばーか、五年はええよ、成人してから出直してこい」

「な、私これでも友達の中では、結構胸大きいほうなんですけどー！」

「え、テストタロツサさんの話した？」

「フエイトちゃんも反則やもん……」

「ははは、同い年だろ、テストタロツサさんも」

「ミッド人は乳がでかすぎるんや！ アレは何か使ってるで！ 豊乳魔法とか！」

「そんな魔法ないんだなあ」

「くそう、現実はこのなはずやないことばかりや……」

「お前クロノにぶつ飛ばされるぞ」

そんな真面目なような、くだらないような仲が深まったからこそできる気安い会話を交わしながら、セルジオ達は教会へと向かうのだった。

それと時を同じくした頃、管理局教導隊の隊舎で一人の少女が慌てたように走り回っていた。

「おい、何してんだよ！ そろそろ行くぞ！」

「あわわ、待ってよヴィータちゃん、だってお仕事の話が長引いちやつてえ」

「はやてもシグナムもとつくにあっちについたって連絡あったぞ！ 急がないと本当に

遅れちまうって」

「あ、でも、ヴィータちゃん私のこと待ってくれるんだ。優しいんだね」

「ば、ばかっ！ お、お前を置いて行ったらはやてに怒られるからだよ」

「えへへ、ヴィータちゃん」

「ユーノも車出して待っててくれてんだ！ や、やめるこのばかっ！」

彼女は、顔を赤くして出て行ってしまった友人に軽く笑みをこぼして、こっん、と彼女の相棒たる、胸元の赤い宝玉を軽く叩いた。

「いこっか、レイジングハート」

瞬くように光った宝玉を胸に入れると、彼女は友の待つ場所へと走り出した。

再会

「以上で友人代表の言葉とさせていただきます」

ペこり、と新郎の控え室でセルジオが頭を下げる。

すると、控えめな拍手と共にからからとした笑い声が響いた。

「なーんだ、大したもんじゃないっすか、セルジオ先輩」

「お前にそう言つて貰えたならひとまずは安心か」

「本当は当日のこんな時間じゃなくてもっと前に時間とつて欲しかったんすけどね」

「それは……返す言葉もない」

挨拶の原稿をスーツの胸ポケットにしまうと、ソファですすよと寝ているルーティアの横に腰掛ける。近くには同じくスーツ姿のヴァイスがネクタイを緩めて、軽く伸びをしている。

この部屋に本来いるべきクロノは今はいない。今はリミエッタの花嫁の姿を見に行っているのだ。

クロノには「お前たちも来るか？」と聞かれたが新郎と新婦の一生に一度の時間を邪魔するほど彼らは野暮ではなかった。

「そーいや、セルジオ先輩。最近前線の方まであんま出てこないって聞きますけど、なんかあったんすか？」

「……あー、気のせいじゃないか？」

「いやいやそれは無理ありますって」

誤魔化すように頬をかくセルジオ。

「まあ、心境の変化みたいなもんだ」

「ふーん」

「……なんだその目は」

「や、いちいち細々した事件まで顔出して煙たがられてたアンタが、ここ最近現場に近づこうとしないどころか、魔法使ってる姿見すらみないらしいじゃないっすか」

「俺だってもう部隊長だからな、昔のようには行かないってことだ」

セルジオが自分の胸に——その奥にあるリンカーコアへと意識を向けながら——軽く触れて、くしゃりと笑った。

そして、ぼんぼんと傍で眠るルーテシアの頭を撫でる。

「ぐつつりつつね」

「まあここに来るまでかなりはしゃいでいたか。ガリユーも出しっぱだったし、割と魔力消費もあつたのかもな」

「ああ、あの黒くてカッコいいアイツですかい。今はどこに？」

「カッコいい……？　確か八神に引つ張って行かれたな。なんか重い荷物があるから人手が欲しいんだと」

セルジオがルーテシアの頭を撫でて、スカートの乱れを軽く整えた。

(……ずいぶんそれらしくなっちゃって)

金髪のセルジオと紫髪のルーテシア。

二人の容姿は世辞にも似ているとは言えず、写真などで見比べて、二人を兄妹と見る者はいないだろう。

けれど今の二人はどうだろう。

安心しきったように身体を預ける姿を、愛おしげに指で髪をすく姿を見て、多くの人

はなんと思うだろうか。

答えはいくつかあるかもしれないが、それでも今の彼らのカタチが『家族』であることなど疑いようもないことだった。

「……よかつたつす、本当に」

「え？」

「いーえ、なんでも」

目の前の青年は二年前、三課の仲間を失って、親友の一人を失って、地上本部のホープとしての畏敬を失って、そしてかけがえのない相棒と分かれた。

それからまるで覇気がなくなつて、死んだような瞳になつてしまったセルジオを、ヴァイスは知っている。

けれど、そんな彼が今ルーテシアへと向ける優しげな目は、ヴァイスの記憶の中にあるセルジオを思わせた。

昔のままとは言わない。あの頃に戻つとも言えない。

けれど、セルジオ・アウデイは前に進んでいるのだと、ヴァイスにはそう思えた。

ちなみに、とヴァイスが腕時計を確認して大きく伸び。

「んじゃあまあ、俺はボチボチ行きますわ。受付、あんまり変わつてもらうのもアレですし」

「ん、そうか」

「セルジオ先輩はどうします？　一緒に行きますか？」

「んー、そうだな、俺もそろそろ……」

言いかけて、止まる。

そして、まるで何かに迷うように、恐れるように視線をゆらゆらと揺らした。

それはいつもの泰然としたセルジオからしたら随分珍しい表情だ。

「セルジオ先輩？」

ヴァイスが首を傾げる。

「あ、いや、その、だな……」

口を開きかけて、閉じる。そしてまた開きかけて、また閉じて、もう口が開かないように唇を噛む。

「やっぱなんでも——」

「高町ちゃんならまだ来てないっすよ」

「——」

「あー、なんでとか聞かないでくださいよ、分かり易すぎて説明する方が難しいんで」

「……そうか」

「その様子だとあれからまだ会ってないんすね」

「……ああ」

「話しいいじゃないっすか。高町ちゃんだつて、きつとアンタに伝えたいことがあるはずっすよ」

「いまさら、何話せつてんだよ」

セルジオが拳を握り、ぼつりぼつりとこぼすように語りはじめる。

「俺が、離れたんだ。大怪我させて、それでも俺に笑いかけてくれたあいつから」

そんな俺が、今更どのツラ下げてあいつと会えばいいんだよ、と吐き捨てるように言った。

「……サーセン、少し踏み込みすぎました」

「いや、こつちこそ悪かった。その、受付、頑張れよ」

「ははは、言うほど大した仕事じゃないっすよ」

じゃ、と軽く手を振って出て行くヴァイスに、セルジオもまた軽く手を挙げて答える。

ばたん、と扉の閉まる音だけがやたら大きく部屋の中に響き、力なく手を下ろす。

そして、拳を力なく握る。

「俺には責任があつた。義務があつた。俺が本当に覚悟あるなら、全部全部守らなきゃいけないやつたはずなんだ」

でも、現実の自分はどうかだつた？

「……………ゼストさん、クイントさん、メガーヌさん、みんな」

心のどこかが軋んだ気がして、天井の電灯を仰ぐ。

「会いたいよ」

その言葉は、むずがるようなルーテシアの声にかき消されるように、だだっ広い部屋の中に溶けていった。

しばらくしてクロノが戻ってきたので、寝ぼけ眼のルーテシアの手を引いて部屋を後にした。

「むー、ねむいい……………」

「昨日夜更かししていたせいだぞ。まったく、ベッドに入ってもガリユールと話せるのも困ったもんだな」

「むう……………」

「よだれ出てる。拭ってやるから顔見せてみ」

もにゆもにゆと目を擦るルーテシアの口元をハンカチで拭きつつ、懐中時計を取り出し時間を確認する。

後三十分もすれば参列者も揃い、そうなればいよいよ本番。それまでにはルーテシアをドレスの裾持ちのために、新婦の控え室に連れて行ったほうがいいだろう。

(……アイツも、いるかもな)

怪我してから半年後、『彼女』は不死鳥のように管理局、しかもそのエースの集う教導隊に舞い戻った。今では冗談めかして『ミッドの白い彗星』と呼ぶ人もいるんだとか。

そんな噂は聞けども、基本はデスクワーク中心となり前線に顔を出すこともほとんどなくなつたセルジオが顔を合わせる機会はなかつた。プライベートのことは言わずもがなだ。

そんな彼女は、きつと今。

「おにーちゃん、どこかいたいの?」

「え?」

「だって、すぐくるしそうだよ?」

「ーー」

ルーテシアが小さい手でセルジオのシワの寄つた眉間をもみもみと揉んで伸ばす。

そんなルーテシアに、一瞬セルジオは驚いたように目を僅かに見開いて、すぐに立ち

「上がるわしわしと頭を荒っぽく撫でた。

「わっ、わっ、もう、おにーちゃんっ」

「心配かけて悪い。ちよつとヴァイスのやつを激寒ギャグを思い出したせいでお腹が痛くなつてただけだ」

「えー、どんなのどんなの？」

「ルーが聞いたらあまりのつまらなさにひっくり返つて凍つてしまふかもしれないからなあ」

「え〜〜」

「そんな駄々こねてもーー」

「セルジオくん？」

一瞬、空気が消えたかと思った。

口を開いても息ができない。目の前にルーテシアがいるのに視界に入らない。思考が乱れて、自分が今どこにいるのか――

「セルジオくん、私よ。大丈夫ちゃんと見えてる？」

「あ、シャマル、さん……だつたんですか」

だが、すかさず軽く肩に手が添えられ、優しい声がかけられた。

そのおかげでなんとか自分を見失わないですんだセルジオが軽く咳払いをして、シャ

マルに向き直る。

品のいい薄緑色の服に身を包む彼女は白衣しか見たことのなかった彼にとっては随分と新鮮だった。

「ごめんなさいね。つい後ろから声をかけてしまつて」

「いえ、こちらこそ心配おかけしたみたいですみません」

「今は私がセルジオくんの主治医だもの。心配するのは当たり前よ」

「主治医、ですか」

「……嫌だつたかしら？」

「いえまさか。自分には勿体無いくらいですよ」

良かった、と微笑むシヤマルと、表情を隠すように前髪をかきあげるセルジオ。

そんな二人を兄の足にしがみついたまま不思議そうに見上げるルーテシア。

「おにーちゃん、このおねえさんだれ？」

「まあお姉さんですつて、ふふふ」

「あー、まあお兄ちゃんの仕事の知り合いだよ。お医者さんだからルーが風邪ひいたら

診察お願いするかもな」

「お、おいしやさん？」

「おう、ちゃんんと歯磨いて夜更かしせずにはないと、こーんなぶつとい注射お願いする

「羽目になるかもだぞ?」

「や、やだあつ、こわい……」

「もうセルジオくんは私のイメージをどうしたいの?」

「……」

「どうかしたかしら?」

「……いえ、なんでも」

「ふうん、そう……」

呆れたようにため息をついたシャマルの姿が一瞬メガーヌに重なって見えた。彼女も、周囲の無茶苦茶にいつもこんな風に困ったように笑っていた。

そんなことを考えてしまうのはルーテシアといるせいか、それとも繰り返して見る悪夢と後悔故か。

(……この人はシャマルさんだろ)

頭を振って思考を振り払う。

「ルーテシアちゃん、おうちでのお兄ちゃんってどんな感じかしら?」

「おにーちゃん?」

シャマルがしやがんでセルジオの足にしがみつくるルーテシアと目線を揃えた。

「いつもごはん作ってくれて、髪とかしてくれるよ」

「それは素敵ね。お兄ちゃんのご飯はおいしい?」

「うーん、ふつう!」

「ルー、作りがない事言うなよ……」

「でも最近をよくおうちにいるようになったからすきだよ。あんまりせんせん? にいかなくなつたんだって」

「なるほど、ちゃんと私に言われた通り大人しくしているみたいですね」

「なんだ疑つてたんですか? 俺も問診に嘘答えるのは流石にしないですよ」

「そうね、確かにそうだね」

クロノがいれば「お前は必要があればいくらでも嘘言うだろ」とでもいいそうだった。シャマルと話しつつ親父控え室に向かっていると、くいくいとスーツの裾が引かれた。

「ルー?」

「おにーちゃん、あの、ちよつと……」

「ん? 喉乾いたのか?」

「そうじゃ、なくて」

「なにモジモジ……ああ、トイレ行きたいのか」

「おおきなこえでいわないでっ」

「はいはい、じゃあ待つてるからちやちやつと出してこい」

「もうおにーちゃんデリカシーない！」

「ぼかり、と足を殴るとルーテシアがととと近くのとイレに駆け込んでいった。

「仲良いのね、本当の兄妹みたいだわ」

「あんまりべったりなるのは良くないとは思うんですけどね」

「それは自分が死んだ後にルーテシアちゃんが傷つかないように？」

セルジオは何も言わずに近くににあった窓に手をかけ空を見上げた。

沈黙が何よりも彼の心を述べていた。

「ねえセルジオくん、出会って数ヶ月の医者が何をつて思うかもしれないけれど、全部ダメだなんて投げ出してはいけないわ。今貴方がいなくなったらルーテシアちゃんは絶対にすごく悲しむわ」

「投げ出してなんかいません。ただ、現実的にこれからのことを考えると、俺がルーテシアの心の中に居座るのは、良くない」

「でも貴方が絶対に死ぬって決まったわけじゃないでしょう？ セルジオくんのエクリプスはリンカーコアを基点にしてその侵食を進めている。だから魔法を使わないようにしてからは現に……」

「けどそれも誤差みたいなものですよ。破壊衝動の発症確率がほんの少し下がるだけ。根

「治療にはならない」

「貴方を、助きたいの」

「十分助けられてますよ」

セルジオの薄い笑みはこれ以上の話には応じないと言う強い意志を感じた。

「さて、そろそろルーが戻って来ます。俺は控え室の方、に……」

「セルジオくん？」

「いえ、その、なんだ、あれ」

セルジオが先ほどまで見ていた空に明らかに魔法の光が散っている。周囲では僅かに黒煙が立ち上っているのも見える。

「航空隊の演習かしら？ それにしても随分市街地の近くでやるわね」

「いや、今日あそこで予定されている演習なんて……」

セルジオがポケットから通信端末を取り出すと念話の波長を合わせて、付近の警邏の通信へと割り込んだ。

「……どうやら事件のようですね。違法魔法使用者と交戦中ですね」

「セルジオくん、わかっていると思うけど」

「分かってます。俺は今日は非番だし、おそらく俺が行っても指揮系統の混乱が起きますから。それにあそこらへんは確かゲンヤさんの管轄で——は？」

「どうしたの?」

突如念話を繋いでいた通信端末を取り落とした。

そして、彼の窓枠に置かれていた手がぶるぶると震え始める。

「あり、えない。嘘だ、そんなことあるはずが、でも、そんな、でもほんとなら——」
「セルジオくん?!」

途端、セルジオが駆け出した。

シヤマルの制止の声など気にも留めない。

「どこに行く気なの?! 貴方は次魔法を使えば——」

「それでも! 俺が行かなくちゃいけないんです! だって、だって、あそこには、あの人が」

駆けるセルジオはネクタイを緩めてスーツのジャケットを脱ぎ捨てると、ワイシャツをまくり左腕の下につけていた待機形態のゼファーを現にした。

「あれセルジオ先輩、もう直ぐ式始まりますけど」

「ヴァイス披露宴の友人代表挨拶任せた!」

「えっ、おつとと、え? なんて、ちょ先輩?!」

原稿を受付のヴァイスに投げ渡すと近くの窓を開けて、足をかけると空へと跳んだ。

「セットアップゼファー!」

身体が光に包まれ着ていた服が黒のバリアジャケットへと変わる。

「……加速機動」
ブリッツアクション

一瞬の胸の痛みを抑え、赤混じりの白の光に包まれたセルジオは空の彼方へと飛び去っていった。

「……セルジオくん？」

ミツドの高く、澄んだ空。かつて友と守った空の下で、男は烈火を伴い佇んでいた。片手には身の丈にも迫る長大な槍。

フードを目深にかぶったバリアジャケットは管理局のものではなく、青空に馴染まぬ燻んだ色合いがまるで幽鬼のようだった。

そんな彼の元へ、数人の管理局員がやって来る。

「そこのお前、ここは市街地、許可ない魔法使用は禁じられている。即刻武装を解除して同行を願おう」

局員たちは取り囲むように空中の男へと、構えた管理局支給の杖型デバイスの切っ先を向けた。

だが目深のフードからわずかに覗く表情はぴくりとも変わらない。

「おい、そのお前、なんとか——」

やがて、おやすみ何も答えようとしない男に、局員の一人が業を煮やしたように声を荒げた時、強く吹き上げるように風が吹く。

男の顔を隠していたフードに風が孕み、今まで隠されていたその素顔が白日の元に晒される。

「な、お前、いや貴方は——」

その言葉が言い終わることはなかった。

それよりも早く口を開いた局員の腹に紅蓮に燃える槍が突き刺さっていたから。局員が血を流しながら意識を失い、落下しかけたのを仲間の一人が受け止めた。

それを無感動に見下ろしながら、彼は槍を回して魔法を展開すると、自分に言い聞かせるように、呟いた。

「俺は、亡霊だ」

だから。

「止めてみる、管理局の小童ども」

お前たちが正義を掲げると言うならば。

そうして、男は周囲の局員たちを斬り伏せていった。

非殺傷などと言う管理局の優しいシステムではなく、殺傷設定、人を傷つけ殺すための魔法を振るった。

「く、そ……」

黒衣の男が人気のない街に足をつけた。薙刀にも似た槍の切っ先は腕を押さえ痛みを堪える局員の喉元へ。

「避難誘導が迅速だったな。褒めてやる」

槍に暁色の魔力が満たされ、そして振り下ろされる。

「——ブリッツアクション加速機動ッ！」

だが、それを許さない人がいた。見過ごさない、救うと叫ぶ人が。

セルジオ・アウディ。かつて次の『陸のストライカー』と言われていた青年。

彼は黒衣の男と局員の間にも体を滑り込ませ銃を籠手で受けると、反対の腕で速射砲で反撃した。

赤混じりの砲撃が胸に突き刺さり男が付近のビルへと突っ込み、粉塵が吹き上がった。

「あ、あんたは、三課サードの生き残り……」

戸惑う局員にセルジオが男が吹き飛んだ方から目を逸らさず、意識だけを向ける。威力を殺しきれなかったのか槍を受け止めた籠手は半壊し、血が滴っていた。

「避難状況は」

「え？」

「避難状況はどうだって聞いてるんだッ！」

「ほ、ほぼ完了している。だ、だが、くれぐれも南の区画には敵を送らないでくれ！」

「南……？」

「二十分後グリューエンからの罪人移送が行われるんだ！もし攻撃の余波でも行けば……」

「……わかった。ここは俺が引き受ける。貴方は周囲の気を失った仲間を起こして退避してくれ」

「引き受けるって、俺たちは……」

「あの人、もし連絡通りそうなら相手の推定魔導士ランクはSオーバー。そうなれば首都防衛隊や教導隊案件だ。貴方たちじゃ敵わない」

「……っ」

「それより、あなたたちには生きてしななければならないことがあるはずだ」

「わかつ、た」

局員がデバイスを杖代わりにして立ち上がると近くにいた仲間にも肩を貸してその場から立ち去っていく。

「……信じたくなかった」

粉塵の中からゆっくりと出てくる人影。

その背格好、武器、そして、魔力の反応に、セルジオが手の中の槍を強く握る。

「なんで、なんで……!」

煙が晴れ、一人の男が再び姿を見せる。

身の丈ほどに迫る槍。長く乱雑に伸ばされた髪から覗く狼のような鋭い目。そして、セルジオと良く似た防護服。

その姿を、セルジオが見間違うはずがない。

「なんで、なんでこんなことしてるんですかッ! ゼストさんッ!」

ゼスト・グランガイツ。かつて『陸のストライカー』と呼ばれた男。

三課の前隊長で、武術の師匠で、義母の相棒で、彼の後見人で、気恥ずかしくて『父親』と呼ばなかった人。

セルジオのせいで、死んでしまった人。

「なんで、何も言ってくれないんですかッ?!」

ゼストが槍を構え、足元に逆三角形の魔法陣を展開する。その色は沈みゆく夕陽。

「何も、言う気はないって、ことですか……!」

セルジオが槍を構え、足元に円形の魔法陣を展開する。ECの赤が生来の魔力光の白と混じったその色は奇しくも同じ夕陽。

まるで鏡のような二人の間に一陣の風が吹き、それが合図となった。

「ブリッツアクション 加速機動ッ!」

同じ魔法式、同じ起動句。トリガーワード

光となった二人の男が槍をぶつけ、そしてそのまま打ち合いながら空へ行く。

かつて、彼らが力を合わせて守った空へ。

「……ッ!」

加速した世界の中でセルジオがゼファーでの突き。

何度も何度も繰り返した、ゼストから教わった基本の技。

だが、それもゼストには通じない。

まるで子どもの手を捻るように容易く突きがかわされ、お返しとばかりに背後に回り込んだゼストが全く同じ技を放つ。

セルジオがその挙動を感じ取り「避けよう」と考え——次の瞬間には腹を槍が貫通していた。

「な——」

それは確かに同じ技であった。だが、その完成度はセルジオと比べるのすらおこがましい。

それは、基本を繰り返した者が行き着く一つの到達点。
神速の刺突。

「か、は」

セルジオが血反吐——と言うには黒すぎる液体——を口から漏らしかけ、それよりも早く顔面に蹴りが叩き込まれる。

ばかり、と頬骨が砕く衝撃がセルジオから槍を抜き、そのまま付近のビルへと叩きつけた。

「——ひゅ」

セルジオの槍が今まで触れることすらできなかつたゼストの防護服に浅い一撃を入れた。

「——ッ」

初めてゼストが僅かに表情を崩した。

セルジオはその隙を見逃さず喰らいつくように次撃を繋ぐ。

きつと誰が見てもセルジオらしくないと言うだろう戦い方なのに—————今までのどんな時よりも強かつた。

攻撃を受けても治るから気にしない。

己の命を削るから魔力が減ることなど気にしない。

それが、エクリプス。人を世界を侵す毒へと変える異形のウイルス。

いかにゼストと言えどこのセルジオを相手にすれば無事では済まない。力は拮抗し始め、戦いは泥沼となるかと思われた。

けれど、奥の手を持っていたのはセルジオだけではない。

「——ユニゾン・イン」

業火が吹き荒れた。

ゼストを包む炎は、その髪を鮮やかな金に変える。

そして、決着は一瞬でついた。

「……火竜一閃」

ゼストがギアを上げ、灼熱の槍を唐竹に振り下ろす。ゼストが振るう故にその速度は神速。

内包された威力たるや、傷を負うことを恐れないセルジオに無意識で防御を選択させたほどだった。

かろうじて反応できたセルジオはなんとか滑り込ませたS2U・カスタムで受け止めようとして、真正面から叩き折られた。

「あり、え——」

ばかり、とS2U・カスタムからスパークを弾け爆発し、ゼストの火竜一閃が爆煙を斬り裂きセルジオに突き刺さった。

「ゼス、と、さ——」

セルジオが吹き飛び、空から地面へと叩き落とされた。

「げ、げほっ、げほっ……」

セルジオが傷口を抑える。本来なら数秒で治るはずなのに、一向に治癒する気配すらないのは、流石にエクリプスの限界がきているのか、それともゼストの一撃の桁違いの威力のためか。

「なんで、何も言わないんだよ。そんなに、俺が憎いんですか……」

地に伏したまま、空の死したはずの男へ、青年は叫ぶ。

「ずっと、夢に見る。みんなが死んだのが嘘で、クイントさんも、メガーヌさんも、みな生きてて、そして、ゼストさんも、そこにいて……」

血だらけで、傷だらけで、惨めに這うしかできないセルジオが、ゼファーを杖にふらふらと立ち上がるようにする。

いつも決して他人に本心を明かさなかったセルジオの強固な仮面。それが、限界までエクリプスに侵され、中身がぐしゃぐしゃになったせいで剥がれかけている。

「ずっと、会いたかった。ずっと、ずっと、会って謝りたかった。クイントさんにメガーヌさんに、みんなに、ゼスト隊長、ゼストさんに、あな、た、を……」

セルジオの瞳が、翠に変わる。

「父さん、って、呼びたかった……」

それは、ずっとセルジオの隠していた本心だった。

本当は、ずっと父さんと呼びたかった。

でも母親のセピアを蔑ろにしてしまうんじゃないかって怖くて。

そしたら『彼女』と出会って、前へ進むうと思えて、初めて『息子』としてプレゼントをあげられた。

けどなんだか今更呼び名を変えるのが気恥ずかしくて、怖くて、今のままでいいかな

んで、また今度でいいかなんて、思ってしまった。

でも、その機会は永遠に失われた。

もうセルジオがゼストを父と呼ぶことはない。

ゼストがそれに答えてくれることもまた、ない。

「――」

満身創痍のセルジオの前に、ゆっくりとゼストが降り立った。

彼はなおも表情を変えずに、セルジオの首に槍を添えた。

(……ゼストさんに、殺されるなら、仕方ない、よな)

この人に死ぬと言われるならば、セルジオは拒否できない。

指一本動かせないセルジオの脳裏に無数の記憶が浮かんでは消えていく。

親友、仲間、友人、後輩、先輩、妹。

(ごめん、な)

いくつもの名前と顔が浮かんでは消えていく中で、最後に残ったものは、一人の少女だった。

「……たか、まち」

声が誰にも届かず、虚空に消えていく。

そして、ゼストが刃を振り下ろし――刹那、桜色の流星が走った。

それは目に焼き付いて永遠に忘れないとすら思えるような、そんな美しい光だった。それを最後に、セルジオが気を失う。

ゼストが思わず飛び退き、槍を構え直して距離を取る。

その中で彼女はゆっくりとセルジオのそばに降り立つと、そつと頬に触れた。
「遅れて、ごめんね」

今のセルジオと対象的な、青と白のバリアジャケット。

長く流した髪は後ろで一つに結んだポニーテール。

手には彼女の在り方を現すかのような名のデバイス、『不屈の心』レイジングハート。

「管理局教導隊、高町なのは二等空尉、現着しましたっ！」

ララバイ

子どもの頃のセルジオは空を飛ぶ母を見るのが大好きだった。

淡い白色の光を纏って飛ぶセピア・アウデイはカッコ良くて、綺麗で、何よりも本当に楽しそうだった。

ふと、空にいた母が地上のセルジオに気がついた。

「おーい、セルジオ〜！」

地上のセルジオも大好きな母親に手を振り返し、笑った。

それは間違いなくセルジオ・アウデイにとつてはきらきら輝いている、夢のような時間だった。

だが、今ではその気持ちも本物だったかもわからない。

セルジオ・アウデイはセピア・アウデイの複製体だ。

使い捨ての強力な魔導士を生み出すことを目的とされたプロジェクトの失敗作。

誰かを真似することでようやく自己を保つことができる、出来損ない。

そんな自分が、『好き』っていう当たり前の気持ちを、理解できるんだろうか。彼は「俺には一生わからない」と思った。

目を覚ます。

「……戦いは、終わったのか」

いつの間にかベッドに寝ている。

首だけを動かしてみれば、そこは見慣れた清潔感のある病室。

いや見慣れたと言ってもエクリップスに感染してから病院にかかってはいなかったから、ここに自分が寝ているのは随分と久しぶりだった。

「あれからどのくらい時間が……っ！」

半身を起こし、部屋のどこかの時計を探そうとして、声を失った。

「なんで、ここにいるんだよ」

ベッドの側の椅子に腰掛け、毛布に覆い被さるように寝息を立てる一人の女性。

その髪は、かつて毎日毎日見た、栗色だった。

「……高町」

高町なのは。

彼のかつての相棒。

今でも残る罪の証。

起こそうと手を伸ばしかけて、すぐに力なく落ちた。

自分が傷つけ、一方的に無慈悲に別れを告げた。

そんな自分が彼女に触れる資格などもうあるはずもない。

「ずっとあなたのそばにいてくれたのよ」

「シヤマル……先生」

「先生？」

「いや、その、なんとなく」

いつの間にか病室に入ってきた白衣のシヤマルは、言葉を濁すセルジオに出来の悪い弟を見るように頬を緩めると、なのはとは反対側の椅子に腰掛けた。

「シヤマル先生、今は」

「あなたがこの病院に運び込まれて27時間。今は夕方ね」

「そんなに……っ、そうだクロノ！ あいつらの結婚式は」

「ちゃんと無事に終わったわ。あなたが望んだ通りにね」

「じゃあルーも……」

「頼まれた通りナカジマさんに預けて来たわ。

まったく、『俺のことは絶対にクロノには言わないでくれ』なんてはやてちゃんにメール送って。もう、はやてちゃん、カンカンだったわよ」

「俺が出なきゃあの場を抑えられたかわから……」

言いかけて、自分で首を振りその先の言葉を否定した。

「いや、俺が出たかった。あの人が、いるなら、俺が出るべきだと思ったから」

そして、また、何もできなかった。

またエクリプスに吞まれて、思うままに暴れて、負けた。

「……俺が気絶して、高町が来てから、どうなったって聞いてますか」

「ほんの少し戦闘を行った後直ぐに離脱したそうよ。追いかけたけど途中で多重転移。今引き継いだ首都防衛隊が痕跡を追ってるけど、おそらく撒かれたでしょうね」

「そう、ですか」

なぜあんなことをしたのだろう。

ゼストの死はセルジオ自身の目で確かめた。

なのにゼストは如何なる方法でか、生前と変わらぬ姿で、突如このミッドに舞い戻っ

た。

死体が見つかっていない以上、なんらかの形でその肉体が悪用されているのだろうか。

(いやあり得ない。最後のあの技の基本は、間違いなくゼストさんの『紫電一閃』だった) ベルカの騎士の秘奥にして基本『紫電一閃』。

そろそろ十年近い鍛錬を積むセルジオですら『白光一刃』という限定的な形でしか再現できていないもの。

何度も頭の中で思い描き、なぞる様にして使ってきたセルジオだからこそ、あれはゼストの意思のもとに振るわれたものだと言言できる。

生者か死人か幽霊か。

わかることはただ一つ。

ゼスト・グランガイツが本気で殺しに来ていたということだけ。

ふと、なんとなく自分の胸に触れて、傷が跡形もないのに気づく。

「傷が……エクリップスの影響、ですよね」

シャマルに問うと、彼女は表情をさっと陰らせる。

「シャマル先生？」

「……そのことで、セルジオ君に伝えなきゃいけないことがあるの」

しばらく彼女は目蓋を閉じて黙り込んでいたが、やがて、意を決したようにゆっくり目を開くと手の中の通信端末を二、三操作した。

低い音を立てて、セルジオの目の前に半透明のウィンドウが現れる。

軽く目を通す限り、どうやらセルジオのカルテらしい。

「セルジオ君、私今からとても大切なことを言うわ。すごくショックだと思うけど落ち着いて——」

「使えなくなつたんでしよう、魔法」

「——っ、なんで、わかつたの」

「初めての診察の時言つたじゃないですか」

「……そうね、自分の体のことだしわかる、か」

「シヤマルが端末を操作して、解析したセルジオの胸部——リンカーコアのある場所——を拡大する。」

「結論から言います。」

「貴方のエクリップス侵食は『末期』。そして、リンカーコアは、完全に侵食が終了してきているわ。」

「厳密に言うると、貴方の胸にあるこれはもう『リンカーコア』じゃない」

「セルジオが目の前のウィンドウに映し出された魔導師としての心臓をじつと見つめ

る。

取り乱すわけでも、悲しむわけでもなく、ただ何も言わずに。

予兆はずつとあった。

ジェイルの下から生還した後、魔法が使いにくくなった。

まるで、鋸で釘を打とうとするような、そんな違和感をずつと感じていた。

それもきつと、エクリプスが半ば侵食を完了していたから。

魔力を生み出すものとしての機能を、奪われていたから。

シャマルが自身の白衣の裾を強く握る。シワがつくのも厭わずに、強く。

「次大規模な魔法使用や、エクリプスの使用があれば、こうなる可能性があることは言っていたはずよ。忘れたとは、言わせないわ」

「覚えてます。昨日も、俺が行く前に警告してくれたことだって、聞こえてました」

「ならなんで——！」

シャマルが荒げた声を、セルジオはやんわりとした笑みで制した。

「……それでも、そうすべきだと思っただんです」

あの人が人を傷つけるところなんて、見過ごせるわけがなかった。

何があんでも、止めなくちゃいけなかった。

「なん、で、笑うのよ……」

それでもシャマルは納得しきれないのか、セルジオの胸元を力なく掴み悲痛な声を絞り出した。

「あなた、もう二度と魔法は使えなくなつたのよ?」

リンカーコアが侵食されたということは、それはもう魔力を生み出せないということ。

魔力が生み出せないならばそれは、もう魔法が使えないということ。

魔法が使えないということは、もうセルジオは魔導士じゃないということ。

——魔導士じゃないセルジオはもう、母の意思を継ぐことはできない。

暫しの沈黙の後、セルジオが優しくシャマルの手を振り解き、誤魔化すように頬をかいた。

「少し、一人にしてくれないですか? その、いろいろ考えたくて」

「……そうね、貴方もきつと辛いのに、ごめんなさい」

シャマルは通信端末を操作してウィンドウを消すと、「何かあつたらナースコールして頂戴ね」と言い残し、病室から立ち去つた。

貸し与えられただつ広い病室。

僅かに開いたカーテンから朱に染まり始めた西日が指し、ぼんやりと伸ばした手の中に入った。

遠くにある時はあれほど眩しく紅いのに、手の中にくればこの程度。

「それで、お前はいつまでそうしているつもりだ」

唐突に、セルジオが口を開く。目線はそのまま掌中の光に向けたままで。

すると、今まで眠って目を閉じていたはずの高町なのはが、ぱちりと目を開き体を起こした。

「……気づいてたんだ。いつから?」

「それを聞きたいのは俺の方だ。いつから起きてた」

「んー、シャマルさんが声を荒げたあたり、かな。ごめんね、盗み聞きをするつもりはなかったんだけど」

「……別に、そのうち広まることだ」

「それでも、ごめんね」

なのはがポニーテールを解き、癖のついた髪を手で梳いた。

その仕草を、セルジオは見たことがある。

「髪、また伸ばしてるんだ」

視線に気づいたのか、なのははほにやりと笑ってそう言った。

「色々、忘れたくなくて」

その言葉を聞いて、窓の向こうの夕陽に目を向ける。だが思ったよりも眩しくて、

うつすらと目を細めた。

「……だ」

「え？」

「クイントさんと同じ髪型だ」

「——やっぱり、わかっちゃうんだね」

会話、というにはあまりにもテンポが悪い。

まるで深海の中を手探りで進むような、そんな恐る恐る互いの独り言に応じるようなやり取り。

大人になったな、と思う。

もともと童顔だった顔はこの二年でぐん、と大人びた。

手足もすらりと長く、クラスではさぞ目立つことだろう。

でも同時に変わってしまったな、とも思う。

あの頃と変わっていないような笑顔を、あの頃ではしなかつただろう誤魔化すことに使っていた。

笑顔で誤魔化すのはセルジオのやることで、なのはがすることではなかつたのに。

でもそれは、きつとセルジオのせい。

また二人の間に息を止めなくなるほどの静謐が横たわる。

ただどちらも窓の向こうの夕陽を見つめる。同じ物を見ているはずなのに、彼らはまるで分かり合えていなかった。

どこか遠い病室で、子どもが泣いたような気がした。

「最近ルーちゃんはどうしてる？」

「にんじんを食べないことと夜更かしをすること以外はいい子だ」

「はやてちゃんに聞いてるよ。料理、作ってるんだってね」

「オーリスさんに……知り合いに習ってな。そう上等な物でもない」

「毎日大変だったりしない？」

「それほど負担はない。最近は八神も時々作りに来てくれるしな」

「……………そっか、はやてちゃんが。そうなんだ」

話題が途切れる。

不意に、ふつとなのはが目線を落とした。

指と指を重ね、絡めて、その後、ほどく。自分の中の感情の絡まりを一つ一つ整理するように、ゆっくりと。

そして彼女は、先の見えない静けさの中を一步踏み出した。

「昨日の、さ。ほんとに、ゼスト隊長、だったのかな」

一瞬、セルジオが横目になのはを見た。

「私も少し戦ったからわかる。あの人は本気だった。本気で人を傷つけようとしてた。あの人が、ほんとにあんなこと……実は偽物なんじゃ」

「本物だよ」

手を組み、解いて、また組んで。

答えはわかっているけど、それを認められなかった。

でも、セルジオは言い切る。

「本物の、ゼスト・グランガイツだ。……間違いない」

どこか遠いところを見たまま、彼は言う。

そんな彼の横顔を見つめて、またもなのはほにやりと笑って見せた。

「……君は、変わらないね」

「そういうお前は、変わった」

「二年だからね。もうすぐ、中学も卒業」

すう、となのはが小さく深呼吸。

そして背筋を伸ばし、まっすぐセルジオを見据える。

変わったものが多い。でもその瞳だけは、二年前と変わらず水晶のように澄んでいた。

「追うんだよね、ゼスト隊長を」

「……教導隊のお前には関係ないことだ」

「そんなことない。ゼスト隊長は私にとつても大切な人だよ」

訴えかけるようななのはの言葉に、セルジオが目を細めた。

「それでも、お前はこの件に関係ない。あとは俺がやる。お前はもう帰れ」

「……相変わらず、なんでも一人でもできると思ってるんだね。なんでそう思っちゃうの？」

「話すことはない。この件は陸が、三課がなんとかする。空のお前にはもう関係ない」

「昔は私の——なのはのこと相棒って言ってくれた！　なら——」

「昔は、な。今は違う。足手まといだ」

「——もう魔法が使えない君が、それを言うんだ」

その言葉が最後だった。

なのはが服のシワを軽く手で伸ばすと、立ち上がりつかつかと病室から出ていく。

伸びかけのポニーテールが、ふわりと跳ねる。

「……あの日と、逆になっちゃった」

なのはが病室の扉に手をかけて、ぴたりと動きを止める。

そしてセルジオに背を向けたまま、ポツリと呟くように、喉を震わせた。

「もう、名前では呼んでくれないんだね」

そして、扉が閉まった。

セルジオはそこでようやく目線を、彼女が座っていた椅子へ、そして去っていった扉の方へと滑らせた。

思い出す空がある。

そう、あの日もちようど今と同じような暁だった。

あの暖かな光が自分たちの未来を照らしてくれていると、そう信じていた。

——今日からは私のこと『なのは』って呼んで。

——呼んでほしいんだ、セルジオくん。本当の貴方が、見えた気がしたから。

セルジオが自身の胸に触れる。

「お前だつて呼ばなかっただろ、高町」

怪我はとつくに治っているのに、なぜか胸が酷く痛んだ。

「おーい、なのはー」

日も沈みかけ、夜の帳の気配に人々が足早に帰宅する頃、ユーノの待ち人は姿を見せた。

「あれ、ユーノくん？　なんでこんなところ？」

「ああ、フェイトから迎えを頼まれてさ。ちょうど僕も帰るところだったし」

「え、ええつ。もう、フェイトちゃんは心配性なんだから。……もしかして、待った？」

「んー、まあね」

「ご、ごめんね。わざわざ来てもらったのに待たせちゃって……」

「ああ、いや気にしないで。新車を何かと理由をつけて見せびらかしたくてさ。いい機会だったよ」

「ふふつ、そんなつもり全然なくせに」

ユーノが運転席から操作して助手席のドアを開けると、なのはが「ありがとう。お願いします」と言っただけで乗り込んだ。

その拍子になのはのポニーテールがユーノの視界を横切った。

ユーノは最近伸ばし始めたなのはのこの髪がなんだか好きだった。

小学生の頃から可愛いのは知っていたけれど、最近では伸ばした髪の毛のせいかな大人っぽさも加わって鼓動が早くなる時がある。

(ポニーテールだと、狙ったわけじゃないけど、なんか僕と髪型が似るんだよなあ)
車が滑るように走り出す。

その間、二人はいくつか会話を交わした。

何、どれも中身のあるものだったわけではないが、もうかれこれ六年以上の付き合いだ。会話のテンポも、話題も今更困ることはない。

友人のことを話し、家族のことを、仕事のことを話して、時に笑い、からかい、怒ったふりをして見せた。

なのははころころと転がるように笑い、ユーノもその笑い声で胸が温かくなった。

そのせいかつい、普段なら聞かないようなことまで口から滑り出た。

「あの子、なのはは」

「なにユーノくん」

「その、なんで、あの人……セルジオ・アウディ……さんのお見舞いに行ったりしたの？」
「え」

なのははが目を丸くして、困惑と驚きの入り混じる細い声を車の中で転がす。声はエンジンに揺られるように、次第に空気に溶けていく。

信号が赤に変わり、車を止めたユーノが助手席のなのはに目を向けた。

「悪い人じゃないのはわかる。でもあの人は昨日の結婚式だつて途中で抜けてたくさんの人に迷惑をかけたし、それに二年前のこと、忘れたわけじゃないだろう？」

「……うん、そうだね」

「なのはのためを思つて言うけど、あの人はきつとなのはのことなんかとも思つてない。僕には、人として必要なことがあの人には欠けているように見える」

「そうだね、私も、そう思うかな」

「ならなのははもつと自分のことを考える時間を増やしてもいいと思う。悪口を言いたいわけじゃないけど、あの人は……」

「信号、変わるよユーノくん」

「え、ああ、ごめん」

低いエンジン音。夜、街灯に照らされて時速40キロで自分を追い抜いていく生活の光。少し開けた窓から滑り込んでくる外気が肌を滑っていく。

「あの人は、確かになにも言わない。ぜんぶ、自分でやっちゃう人だよ」
でもね、となのはが空を見た。

かつて陸で、今は空で守っているその遠い青を。

思い出すのは、あの病室。

告げられた言葉に納得できなくて、でも、彼が疑わなかったことがひとつだけ。

「あの人はさ、私が空に戻ることに、疑わなかったんだ」

なのはがなんとなく胸元に手を伸ばして、レイジングハートの感触だけを感じ取って、ほにやりと笑った。

「だから、私も」

その日、なのはがそれ以上何かをユーノに語ることはなかった。

ただ降りる時に「ありがとう、またね」と言つて、いつもの笑顔で帰つていった。

彼女の人混みに消えていく背中を見送りながら、ユーノが唇を噛んだ。

「……いつも、そうだ」

結婚式の時、セルジオは受付の側の窓から飛び去つていった。

もうすぐ挙式だったこともあり、既に人はまばらであり、それに気づいた人は少なかったが、その場にちょうど、ユーノが連れてきたなのはがいた。

セルジオはまるで周囲なんて見えておらず、何か紙を受付の男性へと投げ渡すとあつという間にどこかへ行つてしまった。

その時は、噂に聞いていた通りの人だと呆れるだけだった。

だが受付の人が「嘘だろセルジオ先輩〜！」と頭を抱える横で、なのはの雰囲気は『変わった』時、そんな気持ちは吹き飛んだ。

なのはレイジングハートでどこかに二、三連絡を入れると、ユーノに言った。

——私、行かないや。

手を掴んで呼び止めなきや、反射的に溢れた思考に、ユーノは従い一步踏み出し、手を伸ばす。

だが、彼女はユーノの静止よりも早く、セルジオの後を追って空へと飛んだ。

まるで自由に飛ぶ鳥のように、空へ。

「なんで、いつも僕は、背中しか……」

ユーノ・スクライアにとって『高町なのは』は憧れの女の子だった。

自分に使いこなせないレイジングハートを用いて、抜群のセンスと、天に愛されたとしか思えない才能で、悲しみを希望に変えていく。

だからそんな彼女を後ろから支えるのは彼の誇りだった。

なのはのやりたいことを助けて、思い描く未来へと繋げていくのだ。

その役割に、満足していないはずなかった。

(でも、今の僕は、本当に今のままで……)

いつからだろう、高町なのはの中の危うさに目が行くようになったのは。

誰かを助けるために全力で、そのことで自分の幸せを認識する。そんな在り方が『高町なのは自身の幸せに繋がらないのではないか』、そう思い始めた。

「でも、僕の手はなのには」

目蓋を閉じると、一人の青年の姿が焼きついていた。

「セルジオ・アウデイ……あなたが、なのはを……」

何故ダメなのか。何故、自分の手は届かなかった。

ユーノが目を開けて、映し出している虚空のウインドウに目を向けた。

『セルジオ・アウデイには大きな『嘘』がある』

そこには、いつか届いた一通のメールが映し出されていた。

今、止まっていた時が、動き始める。

そして、半年

すやすよと眠るルーテシアを背中に、セルジオは夜の街をひた歩く。

なのはとの一件から一日、セルジオは退院した。

もともと怪我に関してはエクリップスの力でとくに治っていた。検査さえ終われば病院にいる意味もなかった。

シヤマルは大事をとつてもうしばらく入院するべきと言ったが、「ルーテシアを早く迎えに行つてやりたい」と言われては、強くは強制もできなかった。

「すう……すう……おに……ちゃん……」

揺らさないようにゆっくりと歩いていると、こつんと小さく石がぶつかった。取るに足らない小さな石ころ。

それをなんとなく、こつりこつりと転がしながら歩き始める。

一定だった足音に時折転がる石の音が混じる。

「……スバルちゃんも、ギンガちゃんも、大きくなってたな」

記憶で見たよりもずっと大きくなっていた。

最後にあつてから二年近くが経つてるのだから当然と言えば当然なのだが。

「スバルちゃんが俺を嫌つてるのは当然だけど、ギンガちゃんの方はもうそれすらしてくれなくなつちやつたな」

思い出すのはルーテシアを迎えに行った時のこと。

ゲンヤがいまだ仕事で帰つておらず、玄関ではギンガが迎えてくれた。

そして驚いた。

ギンガがクイントにも似ていたから。

「……ギンガちゃんが士官学校にいるとは知らなかったな」

よく考えれば当然かもしれない。

彼女はクイントのDNA情報から作られた戦闘機人。その細胞はかなり高いレベルでクイントと同じものであるだろうし、似てくるのは当然だ。

でも。

「……『もう母のような人を作りたくないんです』、か」

——家族をよろしくね。

まぶたを閉じれば今でもあの時の光景が目には浮かぶ。

「俺は、あの時の約束すら守れる時間があるのか……」

ルーテシアのそばにいななければならない。

スバルとギンガの日常を守らなければならない。

でももう自分に残されて時間は一年となくて。

あの二人を守るには今の自分はまだにも遠くて。

「どうしたらいいんだろうな、俺は」

蹴り損ねた石ころが転がって、側溝の黒い水の中に落ちて、ぼちやんと一際高い音を立てた。

時は、過ぎる。

「隊長さん、この書類の書き方を教えて欲しいですよ」

「ああ、そこだったら……」

幼い声に呼ばれ、ずり落ちた眼鏡を指で持ち上げつつセルジオが顔を上げる。

目の前にはいつの間にか書類を抱えた半泣きのラインがいて、セルジオはしゃがんで目線を合わせ対応する。

「ここは………で、ほら、少し古くて見にくいだけで今の形式とあまり変わらないでしょう？」

「ほんとです。じゃあここをこうしたら………どうですか隊長さん！」

「うん、ちゃんとできてる。さすがだなライン空曹は」

「ふふーん、なにセラインははやてちゃんの融合機、って頭撫でないでください隊長さん！ リインは子どもじゃないですよ！」

「おっとと、悪い。ついつい妹にするようになってしまつて」

「身長が低いせいで間違つてしまうのはわかりますがリインは立派なおとななのです」
「お」

「あはは、面目ない」

「まったくもうまったくもう、じゃあリインはこの書類を総務部に持つて行つてくるです。その間ちゃんと隊長さんは反省しておくですよ」

今のリインは人間形態といえど身長はおよそ小学生ほど。

そんな彼女に目線を合わせるために片膝をついて謝るセルジオの姿が、かえつてリイ

ンの幼さを強調しているようでもあった。

ととととと三課から出て行くリインを見送るセルジオと、そんな二人をニマニマと見るはやて。

そんな彼女に、自分の席に戻ったセルジオが軽いため息。

「八神、すけべオヤジのように笑ってないで言いたいことがあるなら言え」

「ひどっ！ 私これでも15歳のうら若き思春期の女の子なんですすよ〜？」

「自分でこれでもとかいう女が何を言う」

「まったく、次の春にはもう花の女子高生になるかわい〜後輩という言葉とは思えへんわ」

「一昨日沿岸地区に出た50体のガジェットを範囲石化魔法で瞬殺してなかったらそれに領いたんだけどな」

「あー言えばこー言うんやから。まあ、それも仲良くなった証として受け取るとそう悪いものでもないんやろうけども」

はやてとリインが来て十ヶ月と少し。

決して長いとは言えないが、短いとも言えない時間だ。

クロノの結婚式から既に半年。

セルジオは魔法を使えなくなったものの権限と指揮の腕がなくなったわけではない。

はやてとリインを実働部隊として三課も大小様々な事件に関わってきた。ふと、はやてが気づく。

「……先輩、なんか三課すごく片付いてへん？」

「やっぱ気づくか」

「そりやそうですよ。三課は私とリインと先輩しかいない小さい部隊とはいえ、書類の量なんか膨大やったもん」

「まあそこら辺はゼス……前隊長のころからのものもあつたからな」

でも、とセルジオが少しだけ目を伏せて、微笑んだ。

「三課も、あと一ヶ月で解体だ」

「……正確には部隊運用期限が来るだけで存続の可能性もあるんやろ？」

「存続させる部隊の所属人数が部長長合わせて三人なわけないだろう」

「むう」

「お前だつて一年の任期なのに、ここに愛着持つてくれてありがとな」

「別に自分のいる場所に愛着を持つことくらい普通です」

眼鏡の向こうの赤混じりの緑の瞳が細められるのに、はやてが居心地悪そうに身じろぎする。

慣れない。

最近のセルジオのこの素直さはどうにも落ち着かなかった。

はやてがまだ体が不自由だったころ、病院で時折会うお年寄りにこういう態度の人がいた。

その人は重い癌を患っていてまだ幼いはやてにうんと優しくしてくれた。

その人は「私はもうすぐ死ぬから、せめて他の人に素直に生きたい」と言っていた。

はやては、セルジオからもまた「もうすぐ死ぬのだからせめて」という思考を感じ取っていた。

だから、敢えて聞く。

「先輩は三課がなくなったらどうするつもりなんですか？」

「三課が……?」

「なーに意外みたいな顔しとるんですか。その話題を出したのは先輩やないですか」

「そーだなあ」

セルジオが目頭を揉みながら眼鏡を外して天井を見上げる。

「ううむ」

唸って目を瞑ってたつぷり一分。

考え事にしては短く、雑談にしては少し長い時間で、セルジオは答えを出した。

「ルーテシアの誕生日を祝いたい、かな」

「あれ、ルールーもう誕生日でしたっけ」

「ああ。二ヶ月後、もう6歳だ」

「ということは……もうすぐ学校に入学？」

「一年後にはな」

「あ、そこはミッドも地球と同じなんや」

「英才教育で早く入れる人もいるにはいるが、まあ俺はルーにはそこまでは求めないよ。ガリユーもいるしまだ自由にしていいだろう………なんだ八神その顔は。なぜニヤニヤしている」

「いや〜？ 先輩もお兄ちゃんらしくなつたな〜と。入学式とかめちやくちやしスコン晒しそーや」

「うっさいわい」

「なーんか深刻な顔で言うから私はてつきりなのはちゃん関連とばかり……もー、先輩も家族には甘いんですねえ〜」

「そんなんじゃないよ」

「またまた〜」

「お前俺をからかう時にイキイキしすぎだ」

はあ、とわざとらしく溜め息。外した眼鏡を付け直して、つぶやく。

「……それに二ヶ月後なんて、今の俺には夢みたいに思えるよ」

「——っ、すみません」

「おいおい、お前から話を振ってきたのに謝るなつての」

ハツとしたようにはやてが唇を結んだ。

この半年あまりにも普通に過ごしてきたせいかふとした時に忘れそうになるが、セルジオの寿命は風前の灯火なのだ。

本来セルジオのプロジェクトFの失敗作として生きられると予想される八十余年。

エクリプスの負担はその寿命を恐ろしいスピードで削り続けている。このままのスピードで削られ続けていくと、シャマルの見立てでは二ヶ月後はおろか一ヶ月後にどうなってるかもわからない、とのこと。

刻一刻と消えていく命。

セルジオは決してはやてにもルーテシアにも、主治医のシャマルにすらその負担を見せようとしませんが、今も彼の体には恐ろしい負担がかかっている。

「そう暗い顔するな」

黙り込むはやての頭をわしわしとセルジオが撫でる。

「俺だつて生きるのを諦めたわけじゃない。今もシャマル先生のとこで治療を受けてるし、八神だつてデイバイダーの負担を抑えてくれるものを探してくれてる。俺が絶対

に死ぬみたいな顔するなよ」

そうだろう？　とセルジオは眼鏡越しに瞳を細める。

「それに、まだまだあと一ヶ月は手のかかる後輩をしつかり扱かなきゃいけないしな。陸のどこに配属されても事務関係で困らないようにしてやるよ」

「……別に先輩が私の右腕になってそういうのぜーんぶやってくれてもええんですよ？

あ、でもそれやったらなのはちゃんに怒られちゃうかもしれないへんか」

「別に、あいつは関係ないだろ」

「ふふ、先輩なのはちゃんの名前出た途端顔がガチガチになるんやから。ほら、こーんな顔になってる」

「うるさいな」

セルジオがやかましい後輩のデコを小突こうとするがはやてはそれをひらりとかわしてケラケラと笑った。

なんてことはない、普通の仲の良い先輩後輩のじゃれあい。

「ね、先輩」

「ん？」

その中で、はやてが優しく表情を緩めて、目の前の折れかけの青年に語りかける。

「辛かったら、悲しかったら……死にたくなかったら、そう言っただええんですよ」

「……急にどうした」

「なーんかちよつと今のセルジオ先輩、私の小さい頃にとるなーと思って」

自分だけで生きていく「強い自分」でなければならぬと思っていた。

親がいなくても、病気でも、友達がいなくても、未来の自分が見えなくても、それでも迷惑をかけずに、強く生きていかなければならないと。

でも、そんな自分に寄り添ってくれる人ができた。

夜天の書から現れた守護騎士は誰よりも大切な家族になったし、はやてを助けてくれたのはたちは友達になってくれた。

そして、自分の幸せを願い、微笑みながら空に還った彼女がいた。

管理局で人のために働くようになって、迷惑をかけて、かけられるようになった。

フエイトはどこか抜けてて見てて世話が焼ける。

なのはは無茶しがちで見ててハラハラするから目が離せなくて。

迷惑をかけてはいけな思っていた。

自分だけでなんとかしなくちゃいけないと思っていた。

でも、迷惑をかけて、かけられる。その当たり前の中で、そんな考え方がとても小さな世界のものだったと気づいた。

「先輩は優秀やよ? その歳で部隊長やって、私とかリインにも優しくくて、妹さんも

「ちやーんと育てとる」

でもね、とはやてが続ける。

「それは、先輩だけで背負わなきやいけないものでもないと思います」

しん、と二人の間に静寂が広がった。

「なーんて、先輩に偉そうな口利きすぎでしたね。忘れてください」

だが、すぐにはやてはいつものように笑うと、ペロりと舌を出した。

「変な話してごめんなさい。あ、そういや私も書類の形式わからへんところあったん

やった！ 今教えてもらったりできますか」

「……ああ、持っておいで」

「やり〜」

セルジオははやての言葉に何も言わなかった。

ただ、ほんの少しはやてを見る目が懐かしいものを見るようなものにならわっていた。

——セルジオくんの背負ってるもの、私も一緒に背負わせて。

だって、その言葉は、彼が自分の意思で背を向けたものだったから。

ミツドの一つ隣の管理世界、その郊外の廃屋に一人の青年が踏み込んだ。

「……もぬけの空、か」

あたりを見回しつつ軽くため息を吐く青年——ユーノ・スクライア。

「あのアウディ一尉についての思わせぶりなメールを逆探知してここまで来たはいいけど、空振りだったかな」

軽く探知魔法を走らせながら周囲の状況を見てみるが人間の痕跡は最早ない。それどころか最後にここに人間が訪れたのもひと月は前だろう。

メールを貰ってすぐにここを逆探知するなり返信して接触を図っていれば、と思わずにいられない。

つつ、と近くの戸棚に指を走らせると積み重なったホコリがユーノの指の後を浮かび上がらせた。

「わざわざこんな辺鄙なところまで来たんだ何か手がかり一つでも……」

言いかけて、ユーノの探知魔法に引っかかる反応があった。

「これは、システムコンソール？　まだ動くかな……」

少し古びたキーボードを叩いて起動を試みる、が、反応はない。

「反応はなし。電気系統も通ってないみたいだしどつかで断線してるかもな。それに反

応が全くないのを見ると起動システムがそもそも破損してるとかかな。……面白い」

ユーノが軽く腕まくりをしてポケットから携帯用の簡易デバイス端末を取り出すとコンソールと接続。準備万端とばかりにメガネを指で押し上げる。

「僕が年にどれだけの時間難解なプロテクトのかかった魔導書と向き合ってると思ってるんだ。それを思えばこんな少し破損した端末程度……よし、開いた」

空中に浮かぶウインドウを操作し、奥の方に埋もれていた補助の起動システムにアクセス。そのまま正規の方法では閲覧ができなくなっていた内部データをサルベージしていく。

ユーノのデバイス端末の画面に表示される数字が1からゆつくりと進んでいき、10分ほどをかけて90前後まで増えていく。

残り100%のデータがサルベージされる数分間で、ユーノ・スクライアは思案する。
(仮にここのデータを完全な形でサルベージできたとしてそのデータはなんなんだ。いや、それ以前にここの施設にいた『誰か』は何を企んでいるんだ)

コツコツとコンソールを指で叩きつつ目を閉じ思考を整理していく。

(僕を脅したい？ そのためにメールを……いやでもだとしたらなぜアウデイ一尉の名前を書く。

はやてやフエイト……なのはならともかくアウデイ一尉と僕の関係なんてあつてな

いようなものだ。なら、あのメールは僕の思考の誘導と考えるのが妥当)

そして、端末の数字の一の位が8へと変わった時にゆっくりと目を開ける。

「つまり、あのメールの送り主は僕にアウディ一尉のことを調べさせたいわけだ」

ユーノが調べたセルジオのデータを貰いたいのか、それを取引に使いたいのかは知らないが、まあどちらにしろロクな相手ではあるまい。

「今更アウディ一尉のデータなんか集めてどうするっていうんだ。もう非魔導士の左遷されたエースじゃないか」

—— あの人はず、私が空に戻ること、疑わなかったんだ。

ちり、と先日のなのはの言葉が思考の端を焦がす。

ユーノが僅かに目を細めた時、端末から小さな音が鳴り、サルベージしたデータは100%になったのを報せてくる。

「……それもこのデータを見たらはつきりする」

そして、ユーノが端末に触れてデータを開こうとして——それよりも早く目の前に半透明のウィンドウが浮かび上がる。

「な、なんだっ?! 僕は何もしてないぞ?!」

慌てるユーノを前に浮かんだウィンドウは砂嵐を走らせながら、次第に一つの映像を写し始める。

『ねえ、せるじおくん。なかせちやつて、ごめんね』

そこには、血に濡れた一人の青年と、彼に刺された一人の少女が写っていた。

「……なの、は？」

希望と、喝采と、星空と

次元の海に浮かぶ時空管理局本局。

その医療区画の一室、シャマルの医務室にセルジオは来ていた。

「うん、うん、数値の前回からの変動値は予想の範囲内。ちゃんと魔法もエクリップスも使わないでおとなしくしてるみたいね」

「魔法はもう使えないんですがね」

「リンカーコアを刺激しないことが大事なの。ただでさえあなたの今の体は未知の塊なんだから」

「ですか」

「です」

子どものように聞き分けよく相槌を打つセルジオにシャマルがくすりと笑った。

もう服着ていいわよと声をかけられてカリカリと問診の内容を書き込んでいくシャマルに背を向けてセルジオが陸の制服に身を包む。

黒と白の海。青と白の空と比べるとずいぶん地味な茶の制服。

この制服とももう5年以上の付き合いなと思うと少し感慨深い。

「もう、わざわざここで着替えなくてもいいのに」

「でも着るだけですしどこでやってもそんなに変わらないのでは」

「それはそうかもしれないけど……私も一応異性なのよ?」

「あ、あー、すみません。なんとなく、シヤマル先生の前では気が緩んじゃって」

「私をそういう目で見れないのはわかるけど、他人の目にはちゃんときを付けておいた方がいいわよ」

「シヤマル先生はお綺麗です。俺の不注意でした」

「……もう、お上手ね。そういうこと言い慣れてるのかしら」

「まさか。ただクイントさんたちに——」

「言いかけて、ハツとセルジオが口をつぐみ、やがて作り笑いとわかる笑みを浮かべて言い直す。」

「昔の、同僚の人たちと、いろいろありまして」

「ゆつくり。言葉を選んで。心の柔らかいところを傷つけないように、ゆつくり。」

「……それは、その、ルーテシアさんのお母様たち、なのかしら」

「ですね。あの人たちともそれなりに長かったですから」

「そう。大切な思い出なのね」

強くズボンを握るセルジオの手をシャマルが優しく握る。

「無理に話さなくていいのよ。ゆっくり、向き合えばいいから」

「すみません」

「謝るのは禁止です。私はあなたの主治医なのよ?」

ゆるりと微笑むシャマルはそのままセルジオの頭を撫でてくれる。

まるで息子や弟にするような、そういう優しい手つき。

その手つきと笑顔に、なんとなくメガーヌの面影を見てしまう。

(ずいぶん、気を遣わせちゃってるな)

メガーヌがこういう顔をするときは決まって自分を心配して慰めてくれる時だった。

「そういえばルーテシアさんもうすぐ誕生日なのね。はやてちゃんが今度プレゼント選び手伝って頼まれたーって言っていたけど」

「ですね。そろそろ誕生日プレゼントも選ばなきやいけないんですが、どうにもあの年頃の女の子に何を送ったものか分からず」

「それとなく聞いてみたらいいんじゃないかしら。セルジオ君ならうまく聞き出せるんじゃない?」

「俺をなんだと思ってるんですか」

「スケコマシ？」

「生憎と俺は恋人がいたことすらありませんよ」

「もったいない」

「自分のことで手一杯なもので」

言つてから、セルジオが頭をかく。

「まあ、そういうわけで今年は結局八神に頼ることになったんですけどね」

「ええと、今度の休日だったかしら、ルーテシアさんと買い物に行くの。セルジオ君はなかなか休もうとしないんだから、ちようど良い機会だわ」

「はは、耳が痛いですね」

「そう思うなら次の休みはちやーンとルーテシアさんを喜ばせてくることね」

「肝に銘じます」

シヤマルとセルジオが顔を見合わせて少し笑い声を漏らす。

「……まあ、実はルーに今年の誕生日どうしたいかは聞いたんですけど、ちよつと叶えてあげるのには難しそうなので」

シヤマルが僅かに首を傾けるとセルジオは居心地悪そうに胸元のネクタイあたりを触つて、続ける。

『2年前の誕生日みたいにみんなで誕生パーティーがしたい』、だそうですね」
「それは、ちよつと難しいかもしれないわね」

セルジオは言葉ではなく苦笑って返答する。

二年前のルーテシアの誕生会のことは今でも昨日のように思い出せる。

クイントとゲンヤにお呼ばれして、スバルとギンガの手伝ったという料理を食べた。

メガーヌからちゃんとプレゼント選べたのね、とからかわれたこと。

タバコでむせたのをゼストに笑われたこと。

もう隣にいない彼女と、星空の下交わした言葉。

もう、戻れない幸せな時間。

束の間の追憶を振り払ってセルジオが立ち上がり、ネクタイを締め直した。

「今日はお世話になりました。次もまたお願いします」

「あ、ちよつと待ってセルジオ君。忘れ物よ」

「忘れ物？」

「今日の健診の前にゼファー、預かってたでしょう？」

「……あー、そういえば」

言われてみれば、渡した記憶もある。

どういう会話をしたんだっけ、と思ひ出そうとするがモヤがかかったように記憶がう

まく引き出せない。

ほんの一瞬、シヤマルが目を伏せた。

目の前の青年のほんの少しの言葉で全てを察したように。

だが彼女は深くは問わずにセルジオに預かっていた待機状態のゼファーを渡した。

セルジオが手渡されたゼファーをプレスレットとして手首につけようとして、はたと気づく。

「……色、変わってないですか、ゼファー」

前は確か銀色だったはずである。

しかし、いまのゼファーの待機状態は夕焼けのような暁の色。EC発動中のセルジオのエネルギー光に似てるのは気のせいだろうか。

「シヤマル先生、これはどういう？」

「……前、はやてちゃんが無限書庫でエクリップスウイルスについて調べたことあったわよね」

「え？ あ、ありましたねそんなこと」

「無限書庫は情報を収集するロストログア。だから研究されていないことは載ってない。無限書庫で調べてもエクリップスウイルスの『治し方』は分からなかった。

……でもね、とある技術の基礎理論の論文と設計図が見つかったの」

「とある技術、ですか」

「——『リアクター』」

「りあ、くたー?」

オウムのように言葉を反芻するセルジオ。

エクリプスウイルスを制御するために必要なものは三つと言われている。

一つがEC適応者である、『ECドライバー』。感染だけでも死につながる世界を侵す毒に耐える力を持つ、制御する可能性を持った存在。

次に感染源である『ディバイダー』。これは武器にもなり、ドライバーはこれを己の手足のように操る。

そして、最後に『リアクター』。

これは簡単に言うとその単体では体を侵す毒でしかないECを制御するシステムである。

このリアクターさえあれば、ECドライバーは己への影響を調整し、その破壊衝動すらある程度は抑制することができる。

もちろん理論上は、という枕詞はつくものではあるが。

「リアクター。これがあれば、きっとあなたの命はつなぐことができる……はずよ」

「リアクター……」

「そして、そのリアクターのシステムを今あなたのゼファーに部分実装してるわ」

「は？」

ぼかん、とセルジオが口を開ける。

「実装、されてる……？」

リアクター。ECを制御するシステム。それさえあればセルジオの負担を抑制できるもの。

それが実装されていると言うことは、セルジオの寿命問題の解決を意味する。

そう、思いつけたセルジオの思考を『部分実装』という言葉が遮る。

そして、目の前のシヤマルを見てみれば、未だ重苦しい表情のまま。

「……その顔を見るにこれで俺の諸問題が万事解決万々歳、というわけじゃなさそうですわね」

「ええ。無限書庫で手に入れたリアクターの理論、正直素晴らしかった……けど、問題が一つあったの」

シヤマルが手元の端末を操作するとセルジオとの間に半透明のウインドウが現れた。

それがリアクターの設計図であることはわざわざいうまでもなかった。

そこには詳細なリアクターのシステム面に関しての研究結果と運用方法、製造方法についてが述べてあるようだ。

それに目を通して、セルジオが止まる。

「リアクターの……生体、外装？ これって、まさか……」

「曰く、この論文によればリアクターは心を通わせるもの。故に『心があるものこそがリアクターとなるのがふさわしい』と、考えたそうよ。」

そしてその理論によく似たものを私は知っている」

人と一体になる、人でない心あるもの。

力を制御し、主人のために動くための生命。

「夜天の書の融合機。ユニゾンデバイス。この理論はおそらく、古代ベルカの融合機の理論が応用されてる」

「つまり、ベルカの融合機……その技術がリアクター完成のためには必要ってことですか？」

「ええ、だけど融合機の技術はもう失われた技術。はやてちゃんはアインス……ええと、いまのリインフォースの先代のことね、が残した外装とシステムを使っているのリインを作ったわ。でも……」

「俺の、俺のデバイス550専用のリアクターを作るにはそういうコピー元がないから作るのが難しいですね」

「……いまあなたのゼファーに積んでるのはその基礎システム部分。上手く組み込んで

ある程度は負担を抑えることはできるかもしれないけど、根治治療とは言いがたいでしょう」

「ある程度という」と

「おそらく起動すればあなたの破壊衝動を抑えるために回しているマルチタスク、それの一つか二つ分くらいなら代替してくれるはずよ」

「二つ……」

腕の暁色のブレスレットに触れる。

「ゼファー・デイバイダー550、リアクターシステム、アクティブ」

途端、セルジオの赤と翠の混ざった瞳の色から赤の色が幾らか薄れ、靄がかかったような記憶の輪郭が見え始める。

間違いなくセルジオを蝕み続ける破壊衝動の負担が軽くなっている。

例えばそれが、何重にも走らせているマルチタスクのうち二つ分を請け負っただけの焼け石に水のような影響だったとしても。

「すごい……久々だ、こんな自分の思考が制御できる感覚……」

「今あなたのデイバイダー550に適応するリアクターを作るための準備を進めてる。きつと、きつと遠くないうちに、あなたがあなたであるうちに準備してみせるから」

だから、とシャマルがセルジオの手を取った。

「まだ、諦めちゃダメよ、セルジオ君。あなたが死ぬと悲しむ人は、たくさんいるのだから」

——なーんかちよつと今のセルジオ先輩、私の小さい頃にとるなーと思つて

——それは、先輩だけで背負わなきゃいけないものでもないと思います。

「……わかつてはいたつもりですが、俺はいい後輩といい主治医に恵まれたみたいですね」

手を包む温かさに、セルジオが不器用に笑つた。

セルジオ・アウデイがECに感染してからもうすぐ三年。

最高評議会が予想したセルジオ・アウデイの余命が、残り二ヶ月ほどになった、とある日の出来事だった。

この場所はいつきても好きになれない、そうゼストは目を細めた。いくつ立ち並ぶ培養液の入ったカプセル。

機能だけを求めた結果剥き出しになっていく配線とダクト管。

否応にも、自分が蘇った時のことを思い出させられる。

ここはジェイル・スカリエッティの研究所の一つ。

次元犯罪者と名高いジェイルは無数の研究施設を様々な世界に持つっており、いざとなればすぐにでも放棄し、移ることができる。

ここもまた、そうした使い捨てができる研究施設の一つだった。

「旦那、なんでこんなところに来てんだよ。あの胡散臭いやブ医者に呼び出されたからって律儀に来ることはなかったじゃんかよ」

「言うなアギト。奴の言葉無碍にすればどうなるかわからん」

「ちつ、胸糞悪い医者だぜ」

ゼストの側でふよふよと掌サイズの融合機、アギトが悪態をつく。

彼女は以前ゼストが助けたベルカの融合機アギト。

蘇生してからジェイルの頼み事に入った違法研究施設に囚われていたユニゾンデバイスである。

烈火の劍精という二つ名も戴くだけあつて強力な力を持つのだが。

「アギト」

「ん？ どーしたんだよ旦那」

「いつまでも義理堅く俺に付き合わなくてもいいんだぞ。お前は自分の主人に相応しい騎士を探しているのだろう？」

「つたく、旦那もしつけーな」。

旦那が助けてくれなけりやアタシはあのまま研究所の実験品だった。それを救い出してくれたのは旦那だ。

だからアタシのこの命は旦那のために使うべきだと思うし、何よりアタシがそうしたい」

「アギト」

「だからそー心配そうな顔すんなよ旦那。

それに、旦那以上のベルカの騎士なんて、今の時代にやいねーだろ」

「ふつ、それは買い被りだが、ベルカを生きた融合機にそう言われるのは中々に悪くない」

「旦那はアタシを信頼しなさすぎだったの。もつとアタシに頼つて頼み事とかしてくれでもいいんだぞー？」

「いつも夕飯は買いに行ってくれるだろう？」

「そーいうのじゃなくてもつとちゃんとしたやつ！ ベルカの騎士と融合機っぽいやつ！」

じたばたとアギトが手足と羽をばたつかせて、ふつとゼストが頬の筋肉を緩めるだけの笑みを見せる。

「ではアギト、お前を俺の相棒だと見込んで一つ頼み事がある」

「！ ほんとか?! いいよいいよ！ 聞かせてくれよ旦那！」

「ありがたい。頼みというのはな——」

かつん、と乾いた足音が響いた。

その反響は今まで楽しげな雰囲気で談笑していたアギトの雰囲気を一変させた。

それは表情は変わらないながらもゼストもまたそう。

「……来たぜ、旦那」

「ああ」

紫の長髪。汚れひとつない白衣。ぎらついた金の瞳。隣に控える静かな女性。

「おやおや、来たとはご挨拶だなアギト君、そしてゼスト・グランガイツ」

「何の用だ」

「あなたは全く性急すぎる。久々の再会を祝しここは盃を傾ける、とはいかないものか

ね？」

「心にもないことを」

吐き捨てるように言うと、ジェイルは笑みを崩さないままその言葉を受け止めた。

否定はしない。その無言が答えだった。

隣に控えている秘書ウーノに目を向けてみるが、こちらもまた黙したまま目すら合わせようとしない。

「まあそう警戒するものじゃないよ。今日あなたを呼んだのは、ほんの少し頼みごとがあつたからだ」

「……俺には俺の目的がある。お前に手を貸すのは互いの目的が重なった時だけ、そう話についてはいたはずだ」

「冷たいことを言わないでくれたまえ。先日は管理局の魔導士に大立ち回りしてくれたじゃないか」

「貴様があいつらを盾に取らなければ力を貸すことなどなかつた」

じ、とゼストが自分より頭一つ小さいジェイルを見下ろすように睨む。

「次同じことをしてみろ。俺がもう貴様に手を貸すことはない」

「そーだそーだ、このセコ医者め」

ゼストの肩に座ったアギトが肯定の声を上げる。

ジエイルは言われるがまま、しばらく黙りこくっていたが、ややしてから口を開く。

「セルジオ・アウディ」

「――」

「案の定あなたを止めに来た。私はあの時頼んだはずだが、”管理局の保有する『フォーミュラナノマシン』の在処の特定のための陽動と止めにくる魔導士は全力で相手してくれ”と。なのになぜ殺さなかった？」

「奴が強かった。救援が迅速だった。それだけだ」

「面白い冗談だ。あれだけ局員がいて死者はゼロ。手を抜いていた以外にどう見ろと？」

今度はゼストが黙する番だった。

「私は死んだあなたを蘇らせた。それは私の目的のために力のある手駒が必要だったからだ。」

そして、ゼスト・グランガイツ、あなたもまたレジアス・ゲイズにその真意を聞いたすために、私に力を貸すように求めた……だろう？」

「……ああ」

「確かに前回の私の頼みはこれつきりと言われ、領いた。しかし、君もまた私の頼みを完遂したと言い難い。……残念だがね」

「ならばどうする」

「今度はしつかりやつてくれという頼みさ。今度の頼みでもまず間違はなくセルジオ・アウデイは現場に出てくるだろう。その彼と、全力で、もちろん殺すつもりで戦つてくれたまえ」

——もし今度また手を抜くようなら『彼ら』の今後は保証できないよ。

そう言つて、ジェイルがゼストを覗き込む。

欲望と狂気に彩られた金の瞳。

彼の言葉が、嘘ではないことを、ゼストは知っている。

「こんなやつ言うこと聞かなくていいって。こいつなどんなやつかは知ってるだろう？」

アギトが耳元で囁く。

一瞬、一回だけ瞬きをする様な、小さな時間、ゼストは口を結んで思索した。

そしてその刹那で、答えを出した。

「わかった」

「ま、待つてくれ旦那あ！ ちょっとよく考えてくれよ！」

「おお、そう言つてくれるか。やはりあなたならそう言つてくれると信じて——」

「お前との取引もここまでだ。これからは俺一人でやらせてもらう」

「……ほう」

すつとジェイルの目が細まった。

「あなた一人で管理局の数多の魔導士の防衛を抜けると？ あなたは私が蘇らせたとはいえその体は全盛期のものではない。その体では、レジアス・ゲイズの元に辿り着くのは不可能だろう」

「構わん。これ以上貴様に手を貸すよりは、この無念抱いたまま死ぬ方がいい」

「……『彼ら』の無事も、保証しないが？」

その質問には、答える価値もないとばかりに鼻を鳴らし背を向けるゼスト。

「ジェイル・スカリエッティ、お前は知らんだろう。誰かの幸せを願うという、当たり前前を」

「ヒトという生命は利己的なものだよ。己の欲望を糧に常に進化し続けた、罪深き獣だ」

「だから、貴様は変わらん。

欲するだけで、与えようとしない。

人の心を弄ぶだけで、理解しようとしなない。

人を眺めるだけで、その繋がりに意味を見出さない。

貴様の無限の欲望は、常に貴様の方向しか向いていないのだ」

ゼストの背中がジェイルから離れていく。

「……まさか、ここで反乱されるとはね。彼の蘇生は上の指示だが……首輪が足りなかったか。いやそもそも首輪として機能しきつていなかった……か」

「ドクター、このまま騎士ゼストを行かせてもよろしいのですか？」

「ん、ああ……そうだったな。」

ゼスト・グランガイツ、少し待ちたまえ」

ゼストが足を止める。だが背中を視線をジェイルに向けることはなく、背中を向けたままだ。

「貴様が何をいうつもりか知らんがもう無駄だ。俺は俺のやるべきことをやる。貴様とは既に縁が切れたものと思え」

「ああ、勿論だとも。私も既に君が意思を変えることはないと理解してる。だから、別れついでにツケを払ってもらおうかと思ってるね」

パチン、とジェイルが指を鳴らした。攻撃でもなんでもない、ただ指を擦り合わせただけの高い音。

「何、を——っ？ な、なに……」

だが、それだけで全ては終わっていた。

ゼストの胸を、腕が貫通していた。

「……同じ人間を二度殺すというのは、流石に初めてだな」

「戦闘機人、とー……れ」

金と青の瞳。底冷えのする武人の瞳だ。

トーレは必要以上に語ることはなく、ゼストの胸から腕引き抜き、軽く腕を振つてこびりついた血を払う。

「旦那！ しつかりしてくれ！ 旦那！ なあ、しつかりしてくれよお！」

支えを失ったゼストの身体が倒れるのと、アギトが叫ぶのはほとんど同時だった。

だが、ゼストは血混じりの咳をするだけで何か意味ある言葉をアギトに返すことができない。

30センチにも満たない身長のアギトが、6倍近い大きさのトーレを見上げ睨んだ。

「てめえ、旦那に何しやがった！ まさか隠れてやがったのか！ ベルカの騎士になんで卑怯な真似をッ！」

「……下らん」

「ベルカの騎士の誇りを汚しておいて何が下らねえってんだ！ お前はアタシが——げほっ！」

言葉を言い終わるよりも早く、アギトの身体に蹴りが叩き込まれる。小さなアギトはまるで人形のように易々と弾き飛ばされ、床に転がる。

「主人がいなければ本気も出せないデバイス風情が、騒ぐな」

痛みに堪えながら魔法を発動しようとしたアギトを、さらにトーレが踏みつけ押しつぶす。

「ぐ、ぎっ……この、卑怯……モノ」

「何か勘違いしている様だから教えてやる。

私はただ近寄って斬っただけだ。

この新しい力……『アクセルインパルス』によつてな」

「そ、ん、なこと……」

アギトは知らない。

トーレの使う『アクセルインパルス』が、異界エルトリアの技術『フォーミュラ』を用いたものだということ。

その速度は最高速がリーダーを振り切る速さを持つ『ライドインパルス』をも超えていることを。

そして、セルジオ・アウデイがそのあまりの速さに知覚すら敵わず、敗北したことを。押さえつけられるアギトを尻目に、ジェイルがゆつくりと、倒れ伏すゼストに近づき、膝を突き顔を覗き込む。

「油断が過ぎるよ騎士ゼスト。いやそれとも自分の知覚範囲には敵の気配が全くなかったかな？ あなた……君は、だから甘いんだよ。

君の身体を治したのは誰だ？

戦える様に調整したのは？

そう、私だ。

その私かなぜ、君の身体機能を操作できると考えない？」

「——」

「やれやれ、君が私の力になるならばこういった手段は取らなかつたんだがね、仕方ない」

ジェイルの金の瞳が、細くなる。口が、半月を描く。それは、ひどく歪な笑みだった。そして、それはジェイルが心からの欲を満たす策を動かすときの笑みだった。

「ウーノ、あの回収した群体から抽出したウイルスコード、あれの解析は終わっているかね？」

「5割ほど。あれほど完璧に構築され機械類を介して心にまで介入するプログラムとなると、そう簡単には」

「ふむ、問題はウイルスコード打ちこみの方か、なら軽く頭をいじれば問題はないから」

「き、さま、俺に、なにを、させるつもりだ……」

「？ 言っただろう、セルジオ・アウデイと殺し合ってもらうんだ」

「——ッ」

「人間味のない彼でも苦しむはずだよ。何せ君は育ての親だ。しかも自分のせいで死なせている。そんな君が自分を殺しにくる……その時彼は何を思うのだろうね」

「ジェイル・スカリエッツィ！」

「ああ、安心してくれたまえよ、その面倒な感情も消しといてあげるから。君の意思はもう必要ない。ただ、身体さえ動けばいいからね」

ゼストが残りの力を振り絞り身体を起こそうとするが、それよりも早く四肢を縛りつける様に赤の糸状デバイスが絡みつく。

「はは、そう興奮しないことだ。」

父と子の命をかけた最後の語りとなるだろうし、君が万全を尽くせる様調整してあげよう。

フルドライブは勿論、そうだね、そのユニゾンデバイスも常時ユニゾンできる様にもしてあげよう。

何、礼はいらないよ、私の頼みから始まったことだ」
くつくつと、ジェイルが嗤う。

「故に私の方から贈らせてもらおう、万雷の喝采を、ね」

星がよく見える夜だった。

ユーノ・スクライアは、無限書庫に併設された公園、その人気のない一角で空を見上げる。

ミッドチルダは魔法文明と共に科学も発展した世界。そのため、まばゆい星が常に見えるわけではないが、その日は昼間が雨だったせいか、よく星が見えていた。

「……確か、初めて会った日も、こんな星空だったっけ」

ユーノが振り向く。今日、ここに呼び出していた自分を。

「なのは」

高町なのは、彼の魔導士としての弟子。

大切な幼なじみ。

そして、淡い気持ちを向ける人。

「ユーノくんが私を呼び出すなんて珍しいね。どうかしたの？」

「はは、そうかな……いや、そうだったかもね。ここ最近、少しどっちも忙しかったしね」
彼女は仕事帰りなのか管理局の教導隊の制服のままではにかむように笑った。

最近伸ばしているという健康的なポニーテールが動きと一緒に小さく揺れる。

その姿に一瞬見惚れそうになりながら、頭を振って思考をフラットに戻す。

「なのはさ、三課がその、壊滅した時のこと、記憶が朦朧として覚えてないって言ってるよ」

「え、ああ、うん。みんなが研究施設に乗り込んだのは覚えてるんだけど、その前後がちょっと曖昧で……」

「そっか。その件、僕もちょっと気になってき、調べてたんだ」

「ユーノくんが……？ 調べてくれたの？」

「うん、なのはも、知るべきだと思ったから。」

でも、僕が調べた三課壊滅の出来事について、聞くかどうかは君に決めて欲しい。

あの日の、なのはがなぜ傷付かなければならなかったのかについてのわけを」

なのはの望まないことをしたいわけではない。

ただ、もし知りたいのなら、セルジオ・アウデイの話でこなかったその出来事に、何かを思うのなら――。

「教えて、ユーノくん」

「……迷わないんだね」

「ユーノくんが調べてきてくれたことだもん。きつと、私が知るべきことだと思って」

んだよね？」

「……………ああ」

ふう、とユーノが息を吐く。

今から自分は伝える。ここ数年での調査の結果を。

そして、自分が掴んだ真実を。

彼女が忘れている、全てを。

「あの日、なのはを刺して消えない傷を作ったのは、エクリップスで暴走したセルジオ・アウディだ」

きつとあの日はもう遠い

「……以上、計画の進捗に大きな問題はありません」

『(苦勞)』

光の消えた執務室。

宙に浮かんだ三つの影と、その中心に立ち淡々と報告を続けるレジアス。

『レジアス、お前が私たちの手足となり動いてくれるようになったのは間違いない。私たちの利だった』

『その尽力に感謝する。お前の献身は近い未来の次元世界の安寧へとつながるだろう』

『以前からお前の言っていた“アインヘリアル”、アレの製造のための予算も近いうちに工面しよう』

「……、ありがとうございます」

びく、とレジアスの表情筋が一瞬だけ反応した。

アインヘリアル。

レジアスの理想とする『魔力資質に左右されない兵器』。

友とかつて誓い合った『地上の平和』を守るためにレジアスを選んだ手段だった。

『……して、レジアス』

「は、なんででしょうか」

『セルジオ・アウデイー一等空尉の様子はどうか』

「……私が見る限り大きな変わりはないかと。上手く睡眠が取れていない様子は見えませんが」

『そうか。エクリプスに感染してなおここまで持つとは、アレが人造魔導士であるせいかもしれない』

『だが傾合いだろう』

『同意である』

「傾合い、とは……」

『そろそろ処分の時間だということだ。やつは知りすぎている』

「お、お待ちください！ アウデイー一等空尉には件の事件のことは口外しないことは約束させています！ 事件は首都防衛隊が引き継いでいるとも！」

『だからわざわざ殺すまでもないか？』

「そうです、やつとてまだ利用価値は」

『ない。我らが今まで奴を捨て置いたのはいずれ死ぬからだ。死を悟った人間の諦観に

払うべき警戒はない。しかし、状況が変わった』

『管理局の一部でセルジオ・アウデイのエクリプスの治療の動きがある。どうやらどこぞの誰かが無限書庫に眠っていた論文を見つけたようだ』

『治療の可能性ははつきり言って低い。正直論ずるまでもない。だが可能性は可能性だ。我らとジェイル・スカリエッティの繋がりの可能性を掴みかねん存在を生かしておくわけにはいかん』

『故に、セルジオ・アウデイは消さねばならん』

『案ずるな。処分は既にスカリエッティに命じた。遠くない未来に奴は死ぬことだろう』

『わかっておろうなレジアス。これは我らだけの問題ではない。お前の問題でもある』
『繋がりがあるみに出ればお前とて無傷ではない』

『貴様の失脚はアインヘルアルどころか地上の安寧を脅かすことになる』
『わかつているな、レジアス』

「は、い……」

絞り出すような声で答える。

だが顔は上げられない。俯いたまま、友の忘れ形見を見殺しにする命令を、ただ諾々と聞くしかない。

いつの間にか最高評議会との定期連絡は終わっていた。

部屋の明かりは戻り、だだっ広い執務室に一人残される。

副官であるオーリスは今はいない。今日はアインヘルアルの将来的な根回しのために他中将との会談に行っていた。

「……今更、農に後戻りなど」

独り言ちたレジアスの次の言葉を塞ぐように小さなノックが執務室に響く。

その音とともに憔悴した初老の男の顔が厳格な地上本部総司令の顔へと変わる。

「入れ」

許可をくれてやると、扉が開き一人の青年が扉を開ける。

短く切り揃えられた金髪。180を超える高い上背。陸所屬を表す落ち着いた茶の制服。胸には一等空尉の階級を表す階級章が光っている。

「失礼します」

セルジオ・アウデイ。

今は亡き友、ゼスト・グランガイツ、セピア・アウデイの忘れ形見。

「レジアス中将、以前話した三課の活動報告書についてまとめ終わったのでお渡しに来ました」

「そうか、そう言えば今日だったな」

セルジオがまとめてきた書類を提出し、それにレジアスがサインする。

「……三課も解散か」

「諸々の処理にあと一ヶ月は活動するでしょうが、そうなります」

「労を労った方がいいか」

「いえ、ちゃんと三課を落ち着けた時に取っておきます」

「そうか」

「はい」

緩く笑むセルジオ。

——故に、セルジオ・アウデイは消さねばならん。

「……………」

「中将どうかされましたか」

「いや、何でもないので。何でもな」

「そう、ですか」

訝しげにレジアスを見るセルジオだが、なんでも無いと言われてしまえば仕方ない。

上司の言うことに意を唱えるほど偉くなったつもりはない。

そんな中、ふとレジアスが受け取った書類に関係のない書類が混ざっているのに気づ

く。

「セルジオ、お前が有給とは珍しいな」

「え？」

「ふん、儂に提出した書類に紛れておるぞ」

「あ、す、すみませんっ！」

ほれ、とレジアスが差し出すと今まできつちりと直立していたセルジオが慌ただしく受け取りに来る。

その姿が、今年で21になるはずの男にしては随分間抜けに見えて頬が緩む。

「所用か？」

「あ、まあ、実はその日は妹の誕生祝いをする予定でして」

「買い物にでもつれて行ってやるわけか」

「まあそんな所です。普段は忙しくて中々構ってやれませんから」

「それがいいだろう。貴様はゼストに似て仕事の虫だからな。たまには無理にでも休むがいい」

「……はは、レジアスさんに言われたくないですよ。オーリスさんが父は休もうとしない、といつも言ってます」

「あいつめ」

セルジオが緊張を解いて「レジアスさん」と呼ぶ。

レジアスはそれに応じて、中将と一尉ではなく、親戚の叔父のように付き合う。

——わかつているな、レジアス。

その最中も、耳から最高評議会の面々に言われたことが消えて無くならない。

「では、私はこの辺りで失礼します」

「……ああ」

セルジオが頭を下げて去っていく。

その背中が、一瞬ゼストと重なった。

「セルジオッ」

「はい？」

「あ、いや……」

思わず呼び止めてから、言葉に詰まる。

お前は狙われてるから逃げろ、とでも言えばいいのか。

この余命いくばくもないと言われる若者に？

しかも、地上の秩序と安寧のために売り飛ばした自分の誇りを捨てて、可能性を、約

束を捨てて。

結局、レジアスは何も言えなかった。

だけど、せめてもの抵抗のように今の自分の捨てられない立場からできる最大限の想いを、伝える。

「……なるべく長く生きろ。お前には、三課が解散してからもしてもらいたいことが山ほどあるのだから」

「俺、まだ21ですよ？ レジアスさんこそ、身体を労ってください」

「……それもそうだったな」

セルジオが笑い、背を向け執務室から退出する。

レジアスは、それ以上何も声をかけることはせず、その煤けたような背中を見送った。

「おつでかけつおつでつかけ」

「（こ）ら走ると危ないぞ」

「はい」

るんるんと走り回ってルーテシアはセルジオに呼び戻されると、これまた走って戻ってきてがしつとセルジオの足にしがみつく。

そして、頭をぐりぐりとセルジオのお腹にこすりつけると、そのまま自分よりずっと上の方にある義兄の顔を見上げて、にこーつと笑う。

嬉しくてたまらないと、顔に書いてあった。

「ルー、手を繋ごう。人も多いし離れないようにな」

「うんっ、っ」

セルジオの手を握るルーテシアはにぎにぎとその感触を確かめるように、握り直すとにへへと声を漏らす。

「ねえねえお兄ちゃん、今日わたしの誕生日祝いなんだよね？」

「ああ、何か欲しいものがあるなら買ってやるし、今日一日はルーに付き合うよ」

「やったあ！ えとね、じゃあこの後きゅあきゅあの映画見て、それでそれで」

「うん、じゃあその続きはもう一人と合流してからにしようか。それまでにやりたいことまとめておいてな」

指折り数えてやりたいことを言うルーテシアの頭を繋いでない反対の手でよしよしと撫でてやる。

「さて、八神は、と」

今回、セルジオはルーテシアの誕生日プレゼント選び兼誕生日祝いのお出かけにはやてを誘っていた。

自分では何にしたらいいかもわからないし、それにセルジオはこういつた経験がなすすぎる。

その点、はやては信頼がおける女子だし、何よりルーテシアと仲も良い。

日頃の感謝と、三課解散の労いも込めて、今日は食事もご馳走するつもりだった。

「確か、モール近くの噴水広場にいるっていつてたかな……」

ほわわんとセルジオの脳裏に昨日退勤際に言われた八神の言葉が蘇る。

『私明日は噴水広場のところで青いショートバック持つとるから！ よろしくセルジオ先輩！』

よろしく……よろしく……とはやての声が反響していくのを脳内で確認すると、あたりを見渡す。

休日というだけあってずいぶん混み合った人混みに、なんとなく胸元に手が伸びた。

「……あ、アレか？」

噴水の近くに青色のショルダーバッグの女性が見えた。人気が多いせいで全体が見えるわけでは無いが、時間的にもアレで間違い無いだろう。

まだ小さなルーテシアに注意を払いながらはやてのいる方へ向かい、声をかける。

「よう、待ったか八神」

「あ、ようやく来た、はやてちゃん」

「え？」

「へ？」

世界が、静止した。

周りにごちゃごちゃといる名も知らぬ人たちの喧騒も、ルーテシアと繋いだ手も、自分の立っている感覚すら、まるで遠くにいつてしまう。

そして、ただ目の前の人物にだけ視界が奪われた。

栗色のポニーテールを留める澄んだ翠のリボン。それは、いつだったかつけてきて感想を求めてきたもの。

記憶よりも少し紅と艶がのった唇。あの頃は、化粧の仕方はよくわからないんだと言っていたのに。

そして、変わらない深い水晶の瞳。堕ちた自分に微笑んだ、星の光を宿した宝石。

セルジオ・アウデイのかつての相棒、高町なのはが、目の前にいる。

あまりの困惑に「なぜ？」と言う言葉だけが脳を動き回り、セルジオはびくりとも動くことができない。それは、どうやら、今日の前にいる高町なのはもそうであるよう

だった。

固まったセルジオの世界が、じわじわと広がるように思考を鈍化させつつあるのを、右手の強い感覚に引き戻された。

「おねーちゃん……?」

ぼつん、とルーテシアがつぶやいた。

その眩きに、なのはの視線がセルジオの隣へと滑り、そして、少し目を丸くした。だが、すぐに優しい、本当にやさしい、春の木漏れ日を思わせる笑みを見せた。

「おねー、ちゃん?」

「ひさしぶりだね、ルーちゃん」

「っ、ルー?」

するりとセルジオの手が解けてルーテシアが目の前のはに向かって駆け出した。

「おねーちゃんっ」

「……まだ、そう呼んでくれるんだね」

「だって、わたしのおねーちゃんは、なのはちゃん、ただだもん……」

「そっか」

なのはは少しかがむとまだ小さいルーテシアを胸で受け止めるように抱きしめる。

ぎゅつと、その再会を噛み締めるように。

よしよしと頭を撫でて、二人で喜びを分け合うように。
ルーテシアの肩が小さく揺れている。もしかしたら、泣いているのかも知れなかつた。

その二人に、なんとなく居心地悪そうに首元を触るセルジオが歩み寄る。

なのはがルーテシアを抱きしめたまま、顔だけをセルジオに向けた。

「な……いや、高町、お前なんでここに」

「セ、き、君こそなんでここにいるの？」

「……ルーの、誕生日だ。今日は少し出かけることにした」

「そうなんだ。ルーちゃんの誕生日、近いもんね」

「ああ」

「えと、仲良く、やってるんだね」

「……一応、な」

「そっか、そうなんだー……」

「ーーー」

「……………」

言葉に、詰まる。

「お前、は、なんで、ここにいる」

「私は、その買い物お待ち合わせ、で」

「待ち合わせか、奇遇だな。俺もその、待ち合わせだ。誰と待ち合わせてるんだ？ 俺は」

「あ、私は」

「八神なんだがな」

「はやてちゃんただけど」

「ん？」

「あれ？」

揃った声に二人が顔を合わせて、そしてすぐに全てを悟ったように「あー」と声を漏らした。

「つまり、はやてちゃんにはめられちゃった……のかな」

「……みたいだな。大方服装指定でもあったか？」

「うん、このシオルダーバッグこの前ははやてちゃんがプレゼントしてくれたやつで、今日はそれで来てって……」

「あいつめ」

「プレゼント選びに付き合ってたって、こういうことかー……」

脳裏に「セルジオ先輩は世話が焼けるんやからもう。そろそろ仲直りするんやで」と

サムズアップするはやての姿が見えるようだった。

ふう、とため息をついたセルジオが再びなのはの方へと目を向けると、ちょうど同じタイミングでセルジオの方を見ていたらしいなのはと視線がぶつかる。

さつと視線を互いに外す。

「——もう魔法が使えない君が、それを言うんだ」

数カ月ぶり、しかも別れ方は最悪である。

どちらもどう接するのが正解かわからないものの、ルーテシアがいるせいでそのことには触れられない。

だから、噛み合わなくても会話をする必要がある。

「えと、ルー、そろそろ、高町から離れないか。その、ここ人もいるし、さ」

「……でもおねーちゃん、ひさしぶりだもん」

「……別に捕まえてなくたって高町はどこかに行きやしないよ。ほら、涙拭いてやるからこっちにおいで」

「おねーちゃん……」

「うん、セ……お兄ちゃんの言う通りだよ、私はどこにも行かないよ?」

「……わかった」

するり、と腕を解いたルーテシアの顔をセルジオがハンカチで優しく拭いてやる。

その手つきはずいぶん慣れたもので、こうしたことが初めてで無いことを伺わせた。

なのは表情にほんの少しの寂しさが、きつと言葉にすれば「私の知ってる二人の關係じゃないな」とでも言うような、そんな色が浮かんだ。

ルーテシアと初めて会った時は、二人一緒だったのに、いつの間にか二人と一人になつていたと言う事実が、少し悲しかった。

「……君は、これからどうするの」

「俺は、八神がいらないが、まあなんとかやる」

「そっか」

「そう言うお前こそ、どうするんだ」

「今日休みにしてもらつてたから、特に。」

「はやてちゃんも、たぶん来ないみたいだし、帰ろうかな」

「……そうか」

はやての考えでは、なし崩し的に二人が同行することを狙っていたのだろうか、そう上手くはいかない。

もう、どちらもあの頃とは違う。

名前を呼び合った相棒同士だった、『セルジオくん』と『なのは』は、もういない。長い時間が、過ぎていた。

そんな二人の顔を、ルーテシアがかわりばんこに見比べて、やがて、はっとしたように目を輝かせた。

そしてぐいぐいとセルジオの服の裾を引く。

「ねえねえおにーちゃん」

「あ、ああ、どうした、ルー？」

「きょう一緒に出かけする人つてもしかしておねーちゃんなの?!」

「——あ、いや」

「もしかしてわたしが、前みたいにみんなでお誕生日パーティーしたいって言ったから、おねーちゃんよんでくれたの？」

「————」

前、がいつかなんて言うまでもない。

ルーテシアの記憶に残る誕生日パーティーなんて、一つしかないのだから。

でも、違う。これは、はやてが勝手にやったことで、セルジオはそんなことこれっぽっちも——。

目を瞑る。そして、セルジオが本当のことを伝えようと、ルーテシアに目を揃えるた

めに膝をつく。

そして口を開こうとしたが、それよりも早く、なのはがぼんぼん、とルーテシアの頭を撫でた。

「うん、そうだよ。お兄ちゃんがルーちゃんのお誕生日祝おうーって声をかけてくれたんだ」

「そうなのっ?! おにーちゃん!」

「高町おま——」

いいんだ、とばかりにふるふると首を振るなのは。そのほんの少し手前で、念話の聞こえないルーテシアが首を傾げている。

「おにーちゃん……? どうしたの?」

ほんの少し、悩んだ。

ほんの少し、罪悪感が走った。

ほんの少し、心に滲んだ淡い想いを見なかったことにした。

そして、全てを飲み込んで笑った。

「ああ、今日は高町と、ルーと、俺で遊ぼうか」

「うんっ! うんっ! うんっ!」

ぱああつとルーテシアがひまわりのような大きな花を咲かせる。

「おんなじだよ。私も」

ふと、懐かしいチャンネルで、念話が届いた。

「君と、おんなじ。ルーちゃんを喜ばせてあげたい。だから、今だけ」

「……すまん」

「(相変わらず、謝ってばかりだね)」

なのはがため息をついたような気がする。

だがそれを確認するよりも早く、ルーテシアが跳ねるように左手でなのはの右手を、右手でセルジオの左手を掴んだ。

「お、おいルー」

「ルーちゃんっ?」

「えへへ、おにーちゃんと、おねーちゃんとお出かけだ。わたし、ずっと夢だったんだ!」

ニコニコと、楽しそうに笑うルーテシア。

「いこっ! まず映画館だよっ!」

「わ、わっ、走ったら危ないよルーちゃん」

「ルー落ち着いて」

「あははっ、やーだもーんっ」

「きゃあっ、もー!」

「おねーちゃんおそいよ〜！」

駆け出すルーテシアと、それに引つ張られる二人。

壊れたはずの、変わったはずの関係が、いまルーテシアの手で繋がれて、前に進む。

セルジオの視界に、なのはが映る。

もうこんなに近くで見ることはないと思っていた、笑顔。

ずっとそばにいて欲しいとすら思っていたこともあるのに、今は夜見上げた星のように、ただただ遠くて、眩しいだけだった。

追憶

「すっごくおもしろかったね！」

「あはは、だねー。私もああいうアニメ久しぶりに見たから楽しかったな」

「わたしはピンクがスキなんだー。いっつも明るくておねーちゃんみたい」

「ほんとう？　なんだか恥ずかしいよ」

「そんなことないよ！　おねーちゃんはかわいくてかつこいいもん！」

「ふふ、ルーちゃんの方が可愛いよ。えいっ」

「きゃーっ！」

じゃれつくようになのはに抱きつかれてルーテシアが楽しそうにコロコロと笑う。

セルジオは一步下がってそんな二人を視界の端に捉えつつ歪んだ懐中時計を取り出す。

時刻はまだ昼過ぎ。解散には早すぎる時間だ。

「二人とも、昼飯でもいこうか。せっかくだし、前ルーが食べたいって言ったオムライ

スのお店」

「ほんと？ あなのふわとろのやつ？」

「うん。ここから遠くもないし……もちろん『おねーちゃん』がいいならになるけど」

「私は全然いいよ。今日はルーちゃんといっしょにいるって約束したんだし。……『おにーちゃん』がいいならだけど」

「？」

ぎこちない会話にルーテシアが首を傾げる。

セルジオは何か聞かれる前に妹の頭をくしゃつと撫でると、空いていた手でルーテシアの手を握り歩き出す。

道は先ほど調べたのでだいたい頭に入っている。迷うことはないだろう。

「〜♪」

セルジオの目から見たルーテシアはずっとご機嫌だった。

店に行つてしばらく並ぶことになった時ものとは話しながらちゃんと待っていたし、疲れたから抱っこしてくれと頼んでくることもなかった。

「おいしいね、おねーちゃん」

「ほんとだ。ううん、うちのお店でもオムライスを出してるけどこれはなかなか……」

「おねーちゃんのお店？」

「ああ、ルーちゃんには言ったことなかったかな。私のおうち、お父さんとお母さんが喫茶店をやってるんだ。ケーキとかコーヒートか出すからルーちゃんもいつかおいでよ」
「おねーちゃんの家?! いく! いきたい!」
「おいでおいでー。クリスマスとか忙しくなるけど終わったら余ったケーキとかお母さんが食べさせてくれるし。」

ルーちゃんはなんのケーキが好き?」

「いちごー! ふわふわの生クリームの! おにーちゃんがね、この前おみやげで買ってきてくれたの」

「……そうなんだね」

「うん! ね、おにーちゃん?」

「え、あ、おお。アレだよな、八神がカレー作りに来た日だよな。駅前の店で買ったんだよな」

「あそのこのケーキいちごが大きいから私好きだよ。また食べたいなあ」

「それはルーがいい子にしてるかどうかなあ」

「むー。私いい子にしてるよ。この前保育園でも……」

ルーテシアはころころ表情を変えながら大好きな二人に自分の経験を語る。

そんな義妹の姿をセルジオは微笑ましく思いつつ——同時に、記憶の端にひっかかる

既視感に思いを巡らせていた。

—— 私は今の食事が楽しいです。なんでかわかりますか？

—— 私は今セルジオくんごはんを食べてるから普段よりも何倍もごはんが楽しい。
い。

—— これ一口あげる！ 残念賞です。あげないのもかわいそうですし。

ちり、と額に痛みが走る。

(……これ、いつの会話だっけ。俺は何を食べてたんだっけ。分けて貰った一口に俺は何を思ったんだっけ)

昔のセルジオなら忘れてなかったんだらうか。

昔のセルジオはこの記憶を宝物のように感じていたんだらうか。

『誰かとの食事は楽しい』なんていう当たり前のことを教えてくれた彼女との思い出さえ、いまのセルジオは上手く思い出せない。

そのことが情けなくて、少し寂しかった。

昼食が終わるとなんとなくあたりをぶらつき始めた。

特に行き先が決まってるわけではない、いわゆるウィンドウショッピングというやつだ。

おもちゃ屋さんを適当に回り、セルジオが少し目を向けたデバイスショップを素通りし、なのはがクレープ屋さんから鉄の意思で目を逸らし、三人が足を止めたのはアパレルショップの前だった。

子ども用から大人用まで、普段着からちよつとオシャレな小物まで幅広く扱うミッドでは誰もが知る有名店である。

「この髪留めとかどう？ ルーちゃんの髪にあつて可愛いと思うよ」

「うーん、でもお花のやつはもうもってるんだ。ならこっちの緑の方が似たのはもってないし……」

「ならこのピンクのとかどう？ 私もピンクのは子どもの頃よく使ってたけど、いつも春がそばにいるみたいで楽しいよ」

「む、むむ……」

自分の手に持った緑の髪留めと、なのはの見せてくれるピンクのリボンを代わりばんこに見つつ唸るルーテシア。

しばらく悩んでいたルーテシアがぱつとセルジオを見上げる。

「おにーちゃんはどううちがいいと思う？」

「俺？ いや俺こういうのはあんま詳しくないんだけど」

「いいから言ってみて」

「む、むむ……」

どうやら自分では決めきれないので決断を兄に託したようだ。

急に振られたセルジオは先ほどルーテシアがしたのとよく似た仕草で悩む素振りを見せ、よしと頷いた。

「じゃあこっちの緑でいいと思うぞ。ルーがこの前ビビってたカエルっぽい色合いで綺麗だし」

「じゃあおねーちゃんの言うピンクのにする」

「なんで?!」

カエルとか言うからだと思うよ、となのはが声に出さずツッコんだ。

(別に人の気持ちかわからないとかじゃないけど前から時々びみよーにデリカシーないこと言ってたなあ。そういうところは変わらないや)

なのはから見たセルジオは随分変わったようにも思えたが、どうやらあんまり変わってないところもあるらしい。

——何か欲しいものでもあるのか。このくらいなら買つてやる。

——俺を恋人にも一つ買つてやれない甲斐性なしにする気か？

——アリバイ作りだ。万が一社員だつて企業にバレてプライベートできたつていう時、この店主が証言してくれると助かるだろ？

しゃがんでルーテシアと目線を合わせてリボンをしげしげと眺めているセルジオの姿が、いつか自分にネックレスを買つてくれた姿と重なる。

なのはの手はなんとなく胸元に向かう。

(……そうだった。もう無くしちゃったんだった)

あんなに大切にしていたのに、もうあの星のネックレスはなののはのもとには無い。

まるでセルジオと道を分けたことを指し示すように、その思い出と一緒に。

(覚えてるのかな。私もうすぐ君と初めて会った時と同じ歳になるんだよ)

その答えを知るすべは彼女にはなかった。

ひとしきり店を回ったあとはセルジオたちは自然と近くの公園に足を落ち着けていた。

「おにーちゃん！ おーい！」

「おー、きこえてるよー」

「みてみてシャボン玉！ ほらっ。ぷー」

「きやつ、もールーちゃんこつちにとばさないでよー」

「えへへー、でいばいんばすたーだよ！」

「やったなー。じゃあ私もディバインバスター撃っちゃうからねー」

《私を呼びましたマスタター？》

「おねーちゃん……？」

「あ、違う違う。本気じゃないから。うん、だからルーちゃんそんな急に真顔にならなくていいんだよ」

少し離れたところでシャボン玉で遊ぶ二人を見つつ、セルジオは太い木の幹に背を預けて眼鏡を外して目頭を揉んで、前髪をかきあげて深いため息。

「……気を遣われてんなあ」

誰かなと言うまでもない。高町なのはのことだ。

セルジオもなのはもルーテシアとは話せている。

セルジオとルーテシアが話してる時はなのは微笑みながら聞いているし、反対になのはとルーテシアが話してる時はセルジオも聞きに回っている。

ルーテシアがセルジオとなのはに話を振った時にはどちらも応じるし、会話が途切れることはほとんどない。

だがそれはルーテシアを挟んだ時に限ること。

セルジオがなのはに話しかけることはないし、反対もそうだ。

ここ数年積み重なった出来事のせいで明らかに二人はギクシヤクしていた。

でも、その中でもルーテシアがこうして楽しく笑っているのは、間違いなくなのはが気を遣っているからだ。

「このあとはどうしようかな……」

あと一時間もすれば日は傾き、地平線の向こうから二つの月が姿を見せる。

流石にそこまでなるとなのは付き合わせるのには良くないだろう。

「適当なタイムミングで解散して……ん、メール？」

手首につけているゼファーが光って通知を知らせてきたので、待機状態のままホロウインドウのメールボックスを開く。

「件名は空港警備についてか。そういえば今日ゲンヤさんのところの陸士部隊が近くの警備をしてるって八神が報告くれてたな」

軽く目を通したがどうやら仕事というよりもゲンヤ個人がセルジオに話を通しておきたかったらしい。

なんでも今日はミッドチルダ空港で他管理世界からの物品が移送されているらしく、その物品に三課も目を通しておいてほしいとのことだった。

『明日でいいからウチの部隊に寄ってくれ』、か。まあ確かにウチは陸士部隊のゲンヤさんよりはかはそのうのに詳しいとは思うが……」

こんなことをゲンヤがわざわざ頼みにくるのは珍しいを通り越して、少し変だ。別に事後処理の頼み事などがあるならそれでもいい。

だがもし……。

「何かきな臭いことを嗅ぎつけたんだとしたら……」

無意識にセルジオが拳を握る。

そしてウインドウを操作し、独自で調べた資料を開く——
「こんな時にまで仕事？」

——より前に、いつの間にか側に人が来ているのに気がついた。

誰かなど振り向いて確認するまでもない。

「ルーは？」

「トイレに行くつて。ついて行くこうとしたけど恥ずかしがられちゃつて」

すとん、と彼女がセルジオと同じ木陰に腰を下ろす。

同じように幹に背中を預けて、けれど視線は合わないように、少し離れた場所に。

「……まあ、最近は俺にもそんな感じだ。気にしなくていいのにな」

「いやそりやお兄ちゃんがついてくるのはヤでしょ。普通に」

「え？ そうなのか？」

「むしろルーちゃんは優しい方だよ。あのくらいの歳だと意味もなくお兄ちゃんが嫌いになる子とかいるし」

「そ、そうなのか……」

「そうなんですよ。ルーちゃんはいいい子に育ってるね。きみの影響もあるのかな」

「……さあ、どうだろうな」

セルジオがウインドウを消して、沈みかけの夕日をぼんやり見つめる。

セルジオは何かを言おうと口を開きかけて、でも何をいえばいいのかわからず、結局元通り口を結んで眼鏡を指で押し上げた。

なのはそんな彼の動きを背中越しに感じつつも問いかけることはなく、膝を抱えたままポツリとつぶやく。

「ルーちゃん、楽しそうだったよ。喜んでた」

「……ああ、そうだな。お前のおかげだ。ありがとう」

「んーん。言ったでしょ。私もルーちゃんには笑ってて欲しかったから。……それに君がいたからって言うのもあるだろうし」

「俺が？」

「自分の妹のことなのにわからないんだ。やっぱりそういうところはあんま変わらないね」

なんとなく、なのはが笑ったような気がした。

その雰囲気懐かしくて、セルジオはそんな気持ちを息と一緒に吐き出して、空気を吸い込み胸の穴を埋めようとする。

「指揮官、やってるんだね」

そんな中で話題を振ってきたのはなのはだった。

「最近よく噂を聞くよ。この前も陸士部隊とはやてちゃんを指揮して未確認機械兵をほとんど被害なく一掃したって」

セルジオがゆるく首を振る。

「それは俺がすごいんじゃないやなくて八神と陸士部隊が頑張ってくれたおかげだ。責任者の名前が俺だっただけで」

「でも実際に指揮したのは君だよ」

「それはそうなんだが……」

「というか、と今度はセルジオが逆に聞き返す。

「教導隊、調子良さそうだな。聞いてるよ、空の花形戦技教導隊の『不屈のエース』」

「もう、やめてよその呼び名は。がんばった結果がそういう風に評価されるのは嬉しいけど、恥ずかしいし……それにゼスト隊長ほど強くなれてる実感はないから」

『『エース』って呼ばれるのには意味がある。技術はもちろんその存在が与える希望と信頼。その姿に人は尊敬を込めてそう呼ぶんだ。』

いまのお前には、ぴったりだよ」

つぶやいて、セルジオの視線が地面に落ちる。

もう半年近く前、ゼストに敗北したセルジオを助けに現れたあのあたたかい光。

あの星の輝きは今でもセルジオの目に焼き付いている。

『不屈のエース』、そう呼ばれるのを心で理解させられるような、そんな眩さ。

「……教導隊が、お前の輝ける場になってくれたなら良かったよ」

「……そうだね。でもいまあそこにいるのは私の夢のためだよ」

夢、という言葉にセルジオが顔を上げた。

「あの日、私たちはたくさんのものを失って、傷ついた。そして経験をしたことのある人は他にもたくさんいて、涙を流す人はいまもいる」

なのはずいぶん長くなった髪に触れて、寂しそうに微笑んだ。

「私はずっと泣いてる人みんなを助けたいと思ってた。思ってる。でも、私だけじゃ届かないところもあるんだ」

だから、となのはが立ち上がり空の向こうに落ちかける夕陽へと目を向ける。

「私は教導隊で『育てる』。」

時空管理局に入ってきた『誰かを救いたい』って思ってる人に、私の知る限りの魔法を、技術を、経験を、ぜんぶ。

そうすることで泣いてる誰かに手を伸ばして、涙を拭ってあげられる人を増やしたい」

始まりはセルジオから教導隊へ進む道を示されたから。

そうしてなのは空へと戻り、再び魔法の力を手にした。

けどそれはセルジオにそうしろと言われたからではなく、彼女が選んだから。

彼女が「こうしたい」と強く思ったから。

そのために戦うことを決めたから。

人はその想いに、そう名前をつける。

「それがいまの私の『夢』」

強い言葉だった。決意と信念が伝わってきた。

それはいまのセルジオにはやっぱりまぶしくて。

「……きみは、さ。いま、なんのために戦ってるの？」

だから、その質問をされた時頭が真っ白になった。

「初めて名前を読んだ時、昔のきみは私に言ったよ。私の目をしっかりと見て、きみ自身の夢を」

「――」
無意識に視線をなのはに向ける。

そしてセルジオの赤混じりの翠の瞳と、なのはの水晶の瞳の視線が交わった。

―― 俺はみんなを助けたい。泣いてる人も、悲しむ人も、これ以上増やしたくない。みんなに、笑顔でいて欲しいんだ。

声が聞こえた。それは自分の声だった。

それはまだ母親の背中を追ってた頃の言葉。

自分が出来損ないの偽物だと知らない頃のもの。

自分のせいで騙されて、たくさんのものを失って、多くの人を傷つけてしまう前。もう戻れない、過去の自分。

「……いつの話してんだよ」

セルジオが目を逸らして立ち上がる。

話はここで終わりだ、と暗に言っていた。

「いい時間だ。そろそろルーを連れて……」

言いかけて、時計を見る。

「ルー遅くないか。トイレに行っただけなんだよな」

「え、うん。そのはずだけど……」

セルジオたちのいるところからトイレまで大した距離はない。なんなら出入りする人も見える程度には目と鼻の先だ。

だからこそ恥ずかしがるルーテシアをなのは一人にしたとも言えるし、セルジオもそれを特に気にしもしなかった。

ざわり、と胸がざわめいた。

「ルー……?」

何かに絡め取られたような気がした。

それは、全てを失ったあの日に感じたものに、よく似ていた。

「ルーテシアアーっ！ 聞こえてたら返事をしてくれ！」

「ルーちゃん！ ルーちゃん！」

セルジオとなのはがルーテシアの名前を読んで走る。

なのはが確認しに行つた時、トイレにルーテシアはいなかった。

セルジオに頼まれたなのはがすぐにサーチ魔法を使つてルーテシアを探したが姿ど

ころか、その痕跡すら見つけることができなかった。

（俺の解析がまだ使えれば……痕跡くらいは、くそッ！）

二人は公園を走り、ルーテシアが一人で出歩いた可能性を考えて街へと抜ける。

途中で付近の陸士部隊に迷子の届を出して、今日来た道を走つて戻つた。

「ルーちゃん！ ルーちゃん！」

でも、見つからない。

どこにもいない。その痕跡しか見つからない。

まるで地面に吸い込まれたように、ルーテシアの存在は消えてしまつていた。

走つて、走り続けて、でも見つからなくて二人は元の公園に戻つてくる。

あたりはすっかり暗くなり始め、人気もまばらになっている。

（何が起きてる何が起きてる何が起きてる。なんでルーテシアがいない。自分から動いた？ それで迷子になった。いやでも付近の陸士部隊に協力を仰いで随分経つ。もし

迷子になってるならそろそろ連絡はあるはずだ。でもまだないってことはそもそも迷子ではない？　じゃたルーの召喚魔法の不具合か？　いやそんなの動いてたらわかりやすい魔力が残る。それをあいつのサーチ魔法が見逃すわけがない。ならもしかして魔力を使わない方法で——いやそんなの可能なのか？

ちか、とセルジオの瞳の奥で赤い光が瞬いた。

思考は加速し、無数の可能性を試行していくがいつまで経っても結論に辿り着くことはない。

積み重なったノイズは、ただセルジオの中の焦燥だけを募らせる。

「クソッ！　何が起こってるんだ！」

ドン、とセルジオが拳を近くの樹木に叩きつける。

なのはの体が震えた。

「ごめん、私の、私の——」

「お前のせいじゃ、ねえよ。それだけはない。これは何かもつと不可解で、そう……」

カチリ、と思考がハマった。

「俺のことを、狙ってる」

夕日が沈んだ空の果てが、赤く輝いた。

「さあ、時計の針を動かす時だ」

『緊急事態発生！ ミッドチルダ空港で大規模な火災発生！ 運搬していたロストロギアが暴走を——』「至急応援を頼む！ このままでは市街地にまで《武装局員を呼んでくれ！ これは「火災が止まらない！ 付近の航空部隊にも連絡を入れろ！ くそ、こんな10年前の廃棄都市で起こった事故の再来——」『こちら首都防衛隊。今から救援部隊を組織、そちらに急行する。総員近くの上官の指示を仰ぎ——』

デバイスに、無数の緊急通信が鳴り響く。

声は一人のものではなく、一つの部隊のものでもない。

使われているのは緊急通信。付近の管理局員全てに助けを求めるシグナルであり、それはいまの事態の異常さを物語っていた。

「何が……起きてるんだ……」

「……空港だ」

セルジオの眩きに答えたのはなのはだった。

「あの方向、ミッドチルダの空港がある場所だよ！　そこで今日ロストロギアの受け渡しが行われていたはず……いやでも封印はしっかりしてあるはずなのになんでこんな……」

空港。ロストロギア。

その言葉にゲンヤのメールを思い出す。

確か今日ゲンヤの陸士部隊は空港で警護をしているはずだ。

もう日は沈んだのに空が赤い。

まさか燃え盛る炎があそこまで空を赤く染め上げているというのか。

（ならゲンヤさんは……いやゲンヤさんだけじゃない。あそこにあるのは『空港』なんだぞ。何も知らない市民だっているはずで……）

助けに行かなきゃ、まず初めに足が動きかけて、止まる。

（ルーは、ルーテシアはどうするんだ。無視するのか？　どこに行つたか分からないのに、それを忘れてあの火災現場に行くのか？）

じゃあルーテシアを探しに行けばと考えかけて、また足が止まる。

あの火災を無視していいはずがない。

あんな規模の火災などセルジオは知らない——否、一つしか知らない。

それは彼の母、セピア・アウデイが死んだ事件。

とあるロストログリアが起こした大規模火災事件、その規模と同等、もしくはそれ以上だった。

あの火災を無視すれば多くの人が死ぬ。

でもルーテシアを見捨てていいはずがない。ルーテシアはセルジオのたった一人の家族で、偽物だらけの自分がせめて本物にしようとしたもので、メガーヌから託された存在なのだ。

（俺は、俺は——）

セルジオの瞳が揺れる。こんなもの、選び切れるはずがない。

「俺は——」

でも選ばなきや、そう思った時、手を掴まれた。

「君はルーちゃんを探して。向こうには私が行く」

「お前……」

「きつとこの事態じゃ陸士部隊もルーちゃんを探せない。だから、いま一番ルーちゃんに必要な人は君なんだよ。」

おねがい、私の分まで。私の……」

ぎゅっと、なのはの握った手に力がこもる。

「お願い」

「だが、あの火災は……」

「ううん。きみはやれることをやって。大丈夫」

なのはの体が光に包まれ、防護服へと変わる。

白と青。夜の中でもひとときわ目立つ、その二色。

「私、『エース』だから。行ってくる」

最後にもう一度「だいじょうぶだから」と微笑んで、彼女は飛んだ。赤く燃える空の向こうへと。

それは周囲に希望を与える紛れもなく『エース』の姿で。

「……ルーテシアを、探さなきゃ。そうだ、いま、任されたんだから……」

空を飛ぶなのはに背を向けて、地を走るセルジオ。

目的地はわからないが、心当たりを片っぱしから当たればいい。

そうだ、まずは家に帰って、そして――。

『久しぶりだね、セルジオ・アウディ君』

そして彼は、かつて『教授』と呼んだ男から与えられたデバイスから、その声が流れ

るのを聞いた。

選択

ミッドの空を一人の少女が飛んで行く。

それはまるで夜を貫く桜の流れ星。

誰もが知る『不屈のエース』、高町なのは二等空尉。

『至急、魔導師に応援を頼む！ 東部でまだ要救護者が残っている！ 火の手が強く陸士では厳しい！』

「こちら本局戦技教導隊『高町なのは』二等空尉です！ 現在ミッド空港からおよそ800メートル地点！ 指示をお願いします！」

『高町なのは……不屈のエースか！ 助かります二尉！ 通信の通り東部で人手が足りていないのでそつちに。コールサインはひとまず本局01でお願いします！』

「了解です、本局01東部に向かいます！」

なのはが方向転換し、加速。

レイジングハートに送られてきた指定ポイントに向かうと、次第に空港の全容が見え始める。

「……ひどい」

視界に広がる真つ赤な炎。

そこらのショッピングモールなど凌駕する大きさの空港の至る所からの出火。

見渡す限り燃えてない場所を探す方が難しく、とにかく規模が大きいせいで生み出す熱量もまた大きい。

バリアジャケットのなのはですら肌に炎の圧を感じるほどだ。

幸運なのはロストログアが運搬されるといふこともあつて、ある程度は一般客の行動制限があつたことか。

そのおかげで最も最悪な『救助者が散らばり過ぎていふ』という事態は回避できているようだ。

しかし、依然して救助者の数も、居場所の詳細も未だ掴めていないのが現状。

救助が長引けば長引くほど救助者の生存率は下がっていく。いまはとにかく迅速な行動が求められる。

Master, that is the designated point.

It is recommended to make a way.

「わかった。本局01から本部へ、これより砲撃魔法を使用します。許可と周辺マップの解析、誘導をお願いしたいです」

『砲撃魔法、了解です。では本局01に魔法使用許可を——ガ、ガガツ』

「本部？」

『すみませ——二尉……ぐ、本部に……認——』

「本部、応答してください！」

《It is a radio wave interference.》

we are unable to contact the headquarters.

「そんな……！」

なのはは『不屈のエース』と呼ばれるほどの魔導師だ。

しかしそんな彼女は『時空管理局』に所属する公務員なのだ。許可がなければ魔法が使えないし、そもそも通信が使えない状況では誤射の危険性もある。

なのはが唇を噛む。

「でも、このまま見てるだけっていうわけにはいかないんだ」

自分は彼に「任せて」と言ったのだ。

ならば自分ではできることを精一杯にやらなければ。

高町なのはにできることを、全力全開で。

息を吸う。息を吐く。

覚悟は、決まった。

「レイジングハート、私にフィールド系魔法を使って。そのまま壁を貫いて突撃する」

《本気ですか？ Really?》

「レイジングハートに嘘はつかないよ。砲撃魔法が使えない以上そうするしかないも
ん」

私とレイジングハートならできるでしょ?という主人の言葉に、機械仕掛けの魔導師の杖はまるでため息を吐くようにその宝玉をチカチカと明滅させた。

《Please be careful, Master.》

「おっけー! じゃあいくよ、せーの——」

なのはの周囲に桜色のバリアが展開される。それは彼女の体を守る鉄より硬い魔法の装甲。

そしてなのははそのまま勢いよく加速する。

《——Master!》

「えっ、きやあつ!？」

けれど、それに割り込むようにどこからかレーザーがなのはを狙撃した。

偶然バリアを貼っていたためダメージはないが、多少のノックバックが発生して、なのはが空中でブレーキをかけた。

「——っ、レイジングハート！」

そしてなのはは杖を構えると反射的に砲撃、攻撃してきた相手を迎撃する。

砲撃と同時に使用したリーダー内で相手の反応がロストする。

「いまのは昔戦った機械兵……なんでこんなところに」

でもこれで終わった——そう思ったなのはが言葉を失った。

「なに、これ……」

探知魔法に敵の反応が増えていく。

十、二十、その数は加速度的に増え続け、百を超えたところでなのはの魔法では識別が困難になる。

なのはが敵の反応の方角に目を向けると、空港の彼方、海に向こうから何か黒い波が押し寄せてくるのが見えた。

「まさか、あれ全部がここに向かってるの……？」

昔戦ったものはAMF発生器を搭載していないものもあった。

遠くに見えるあの機械群もまたそうであるだろうが、問題はその数。

おそらく小隊一つでも厳しい。

あんなものを本気で相手するならば、それこそ広範囲殲滅特化の魔導師がいる。

「私は、あつちに行くしか……でも……」

未避難民の救助が遅れば、それだけで被害は拡大する。

しかし、あれほどの数のガジェットドローンが空港に押し寄せてくるともなれば絶対に避難の手は足りなくなる。

いや、それどころか未避難民がガジェットドローンに襲われるかもしれない。

(『アレ』を使えば、この距離でも殲滅できるかもしれない。でもそうしたら負担で……)

なのはが迷い、それでもレイジングハートを握り——真つ赤な空の中で、一陣の雷光が空を駆け抜けた。

『サンダーレイジ』

遠くの海で、眩い金色の閃光が弾けた。

それは雷。黒い波を切り裂く、雷電の戦斧。

『遅れてごめん、なのは。こっちは私が引き受けるよ』

「フェイトちゃん！」

フェイト・T・ハラオウン。

史上最年少執務官で、オーバーSランク魔導師で、高町なのはの大親友。

『私もいるでー、やほ、なのはちゃん。』

こちら『航空魔導隊三課』部隊長補佐八神はやて二等陸尉です。本部通信不良のため代理指揮を取らせていただきます。……とまあ、個人念話やけど形式は整えさせてもらいます』

「はやてちゃんもー！」

声の主は『八神はやて』。

航空魔導隊三課所属の幹部候補生で、小隊指揮権も持つ二等陸尉である。

「でもなんで、二人ともこんなところに……」

『私はエリオ……ちよつと保護観察の子を連れて空港の近くまで来てて。それで一旦は本部に行こうとしたんだけど、偶然海岸沿いにいたからこつちに』

『私は先輩となのはちゃんとルールがちゃんと出かけるかを確認したついでに、家族と新居とか見てから三課で時間を潰してたら……って、そんなことはどうでもええ！』
はやての口から今ちよつと聞き捨てならない単語が聞こえた気もしたが、緊急時故に聞き流す。

でもなのは絶対にあとで問い詰めようと決意する。

『とにかく、なのはちゃんいま本部通信不良のせいで魔法の使用許可出てへんのやろ？』

なら一旦なのはちゃんとフェイトちゃんを三課預かりって形にしてこつちから許可

出しとくな。思いつきりやってええで』

「……………いいの？」

『うん。さつき先輩からメールがあつてな、一旦私に指揮権を渡すつて来たんや。色々許可とるのに時間かかってもうたけど、今なら大丈夫や。まあ、フェイトちゃんはさつきもう大規模魔法使つてもうたけど……………』

『き、緊急時ですから！　　というかたぶん執務官の権限内の緊急時魔法行使ですから！』
友人たちのやり取りに少しだけなのはが微笑んだ。

そして、はやてが漏らした言葉に目を細めた。

「先輩……………そっか。きみはそれでもやるべきことはやめてないんだね」

『なのはちゃん？』

「……………ううん。はやてちゃん、使用許可をお願い。あとそつちから要救助者反応と周辺マップのデータこつちに送つてもらえたりできる？」

『大丈夫や。……………よし、送つたで。いけそうか？』

「うん、オツケー。これならこのまま突入して救助に回れると思う。でもフェイトちゃん……………」

『大丈夫。私はここでこのままこの機械兵の相手をするよ。はやてほどじゃないけど、私も範囲魔法使えるしね』

『ごめんな。私はこれから陸士部隊の方と合流して指揮に回らなあかん。緊急時のせいでただでさえ指揮官が不足しとるみたいやから……』

でも指揮権を代行してくれる人見つかったならそっちに助けに行くからな』
打ち合わせは終わった。

三人はお互いの戦場を定めると、小さく微笑む。

「じゃあ、二人とも」

『うん。なのはもはやても気をつけて』

『フェイトちゃんもな。しっかりみんな助けて、笑顔で朝を迎えないとな』

「うん、じゃあ、行こう！」

念話が切れると、レイジングハートがチカツと光った。

《Master, I can do anything.》

「私もだよ！ レイジングハート！」

なのはがはやてに送られたデータをもとに照準を合わせて、レイジングハートを構えた。

それに合わせるように円環状の魔法陣が展開され、桜色の魔力が収束されていく。

「デイバイン——バスターツ！」

光線が伸びる。

放たれた魔力の槍は空港の分厚い壁を燃え盛る炎ごと吹き飛ばし、人ひとりが余裕で通れる穴を開けた。

「行くよ!」

《All right!》

桜色の魔導師が空を飛ぶ。人を救うために、これ以上泣いている人を増やさないために。

そして奥へ奥へと飛ぶ中で、彼女は一人の男が佇んでいるのを見た。

「……え?」

なのはの身長を大きく上回る大丈夫。

手に握られる鉄の槍は身の丈に迫るほど。

バリアジャケットは、『彼』のものとよく似たデザイン。違うのは色だけで。

それは、まさしく、高町なのもよく知る――。

第十七話 「選択」

『久しぶりだね、セルジオ・アウディ君』

忘れられない声だった。

忘れようとする思わなかった声だった。

レジオスから「捜査はこちらで請け負う」と言われたせいで、追いかけることすら許されなかった、声だった。

「ジェイル・スカリエツティ……ッ！」

その男、ジェイル・スカリエツティ。

通称『無限の欲望』アンリミテッド・デザイア。

ギリ、とセルジオが歯が砕けるかと思うほど強く噛み締め、声を絞り出した。

「お前が、やったんだろ。ルーテシアを、連れ去ったのは」

『ほう、自分で気づいたのか。私につながるような痕跡は残していなかったと思うが？』
「だからだ。ルーがいなくなつた現場にはあまりにも痕跡がなさ過ぎた。まるで地面に溶けたみたいだった。しかも魔力反応もなしに、だ」

そんなことができる存在は、セルジオが知る限り一つしかない。

「戦闘機人。」

どんなカラクリかはわからないが、戦闘機人がルーテシアを攫つた、そう考えるしか

ない」

『しかし、君の妹なんか攫って私に何の得がある？ 君の妹にどんな価値がある？』

「俺が苦しむ。」

お前が昔言ったことだろう、『その方が面白そうだからそうする』って」

通信の向こうでジェイルがくつくつと笑みを漏らす。

『いやはや、やはり君は面白いよ、セルジオ・アウデイ君。たしかに私は君の苦しむ様を劇の演目のように思っているところはあある。』

だからこそ、惜しいな。そんな君がもうすぐエクリプスの毒に殺されてしまふ運命だなんて。しかも私の作った『ゼファー』のせいだ。これは流石に謝った方がいいかい？』

「……俺は俺を選んでここにいます。俺の愚かさも、俺の罪も、全て俺のせいだ」

だから、とセルジオが拳を握る。

「ルーテシアを、返せ。あの子は関係ない。あの子はただ俺の妹という場所にいただけなんだ。だから……解放、しろ。俺を狙うのなら他人を巻き込むな」

『……ウーノ』

パチン、と通信越しにジェイルが指を鳴らした。

するとどこからか一体のドローンが現れ、滑るようにセルジオのそばへと寄ってくる。

そして、そのガジェットが一つの映像を投影する。

そこには手を縛られてぐったりとしたルーテシアと、傷だらけで倒れる召喚獣ガリューが映し出されていた。

「お前……ッ！」

『安心したまえ、気を失っているだけだ。まあ急に召喚された召喚獣の方はかなり抵抗したから少し痛めつけてしまったが、それでも生きてるだろう。』

不必要に痛めつける趣味はないし、今助けに来るなら、どっちもまだ間に合うかもね。苦労はするだろうがこの通信を逆探知すればここを探し出せるかもしれないね』

だが、とジエイルは続ける。

『君が来るのは本当にこっちでいいのかい』

「なに、を……」

セルジオは『彼女』に任されたのだ。

本当は戦えるのなら戦いたかった。

でもいまのセルジオには魔法が使えない。かつてのように自分の力だけで状況をひっくり返すことができない。

だから、せめて自分は何としても妹だけは助けなければならぬ。

それが、いまのセルジオ・アウデイに残された唯一のものなのだから。

でも、そんな思いは、ルーテシアの映像が消えて、空港の映像が映し出された時、揺らいでしまった。

「……は」

燃え盛る炎の中、2人の魔導師が——否、魔導師と『騎士』が戦っていた。

見覚えのあるバリアジャケット。無骨な黒鉄の槍。

そして、使われるセルジオと同じ加速機動。

「……ゼスト、さん」

あの日、セルジオを叩き斬った男。

セルジオの師匠。かつて父と呼べなかつた人。

紅蓮の炎を纏ったゼスト・グランガイツが、金色の髪を揺らして、そこにいた。

燃え盛る空港の中、暁と桜が炸裂する。

《Master!》

「大丈夫！　まだ飛べるよ！」

側を抜けていった炎をかわしたなのはが旋回。地面を這うようなスレスレの軌道で飛行する。

「——炎よ」

そしてそんななのはを狙い撃つように追撃の炎熱が迫る。

それは刃。魔力を変換した炎を固め、物理的な破壊と、猟犬の如く目標を狙う追尾の性質を持ち合わせた、不可避の炎刃。

（かわせない——ならっ！）

くるり、となのはが反転するとレイジングハートのグリップを掴み、マガジンをロード。杖先に桜色の魔力球を収束する。

「ディバイン——バスターツ！」

なのはの眼前で刃と砲撃魔法が激突、轟音を伴う爆発を引き起こした。

「はあ、はあ、はあ……」

爆煙の中からはが荒い息のなのはが姿を見せると上を見上げる。

いま自分に焔の刃を飛ばした、かつて『ストライカー』を経て、『エース』とも呼ばれたその男を。

（やっぱり強い、ゼスト隊長は）

ゼスト・グランガイツ。

かつての地上本部所属の管理局員の中でも指折りの実力者。

局長でありながら『騎士』と呼ばれるほどのベルカ式の使い手。

三課にいた頃のなのはの上司であり、何度も陰ながら助けてくれた人。

そして、『セルジオ・アウデイ』の養父であり、師匠。

髪色こそ記憶とは違う金色になっているが、それはおそらくユニゾンしているデバイスのせいか。

たぶん前は使ってなかった炎熱の変換資質もユニゾンデバイスさんの力かな、となのはが推測する。

「……ゼスト隊長、なんでこんなことを」

空港の吹き抜けの高所から地上のなのはを見下ろすゼストの瞳に感情はない。

以前は確かな意思と強さを宿していた鳶色の瞳がいまはまるで深い穴のようだった。

ゼストがなのはの問いかけに答えることはなく、返答の代わりとばかりに加速して今度は、鋭い槍術による乱打になのはを巻き込んでいく。

「——う、く」

《Protection》

目で追うのすら困難な鉄の嵐の中、レイジングハートの力を借りてなのはは槍一つ一

つを捌こうとするが、全てを防ぎきることはできず、次第にバリアジャケットにダメージが蓄積されていく。

（だめだ近づかれたら防ぐのがせいじつばい。救助にはフェイトちゃんに回ってもらえることになったけど、けど——）

かわしきれなかった槍の穂先がなのはの頬を撫でる。

ぴ、と薄い赤の線がなのはの肌に刻まれた。

「私じゃ、ゼスト隊長を抑えておけない……！」

苦しげなのはの声が炎に吞まれて消えていく。

いまの管理局に、彼女のもとへ送れる人員は、いない。

「なん、で、ゼストさんと、あいつが……」

ガジェットとの映し出す映像の中ではゼストとなのはが戦っている。

セルジオはそれを遠く離れた街の外れでただただ見ていることしかできなかつた。

周囲に人気はなく、普段ならば『ルーテシアを探す中で自分が孤独になる機会をジェイルが待っていた』ということに気づけただろうが、いまのセルジオはそこまで考えが及んでいないようだった。

「これもお前の仕業なのか、ジェイル・スカリエッティ」

『ん？』

「ゼストさんは、もう死んだ。死んだはずだ。でも、あの人はいまあそこについて、そして、あいつと戦っている。」

「これも、お前がやったことなのか」

「もはや声に先ほどまでの怒りは無く、ただ苦しげに、確認するように言葉を絞り出すことしかできない。」

「それに対してジェイルは先ほどまでと変わらず、ただただ愉しそうに答える。」

『そうとも。』

「私が火災が起こるようにロストログアの封印を解き、管理局の連携を乱すための妨害電波を出して、その上でゼスト・グランガイツを送った。」

「いまの彼はレリックウェポンという擬似的な死者兵士の技術によるものでね。苦勞はしたが、中々の出来になったと自負しているよ。」

「もつとも、高町なのはと出会ったのは偶然とは言え少々出来過ぎだが」

そのせいで少し予定もズレているしね、と付け加えるジェイル。

『ああ、勘違いしないで欲しいがあのだ。ゼスト・グランガイツは先日君と戦った時の彼とはもう違う。』

あの時は彼には意思があった。そのせいでエクリップス状態の君にトドメを刺さずに帰るなんて勝手も許してしまっていた』

映像の中のゼストが槍を振るう。その技は生前と変わらずセルジオの目では追うことすら難しい。

「だがいまの彼は違う。もはやアレは私の命令を忠実にこなすだけの人形だ。私が壊せと言えば壊し、殺せと言えば殺す。死ねと言えば死ぬ。そういうモノだ」

くつくつ、とジェイルは笑う。

『彼は殺すだろう。何せ命じたのは塵殺だ。目の前にいるのが誰だろうと、ゼスト・グランガイツは殺してくれるさ。君のかつての相棒は、そんな彼に勝てるかな?』

レリックウエポン。

死者を蘇生し兵士として使う技術。

使者の尊厳を冒瀆し、かつての生の軌跡を踏みにじる。

ジェイル・スカリエッティはその上で意思をも奪い、自らの思うままに操れるのだという。

そんなことを、ゼスト・グランガイツがされているのだという。

『さて、セルジオ・アウデイ君。君は妹と父親のどちらを選ぶ？』

ジェイルが嗤う。愉しそうに、まるで喜劇を見る観客のように、口で半月を描いてくつくつと。

「どち、らを……」

手が震える。思考が乱れる。思考の乱れは身体に伝わる。

『決められないなら制限時間をつけようか。』

そうだね……じゃあ、一時間以内だ。それより早く来なかったらルーテシア・アルピーノは殺すよ。

ああいやそれとも実験材料にするでしょうか。召喚獣を操る素体は中々手に入らないのでね、貴重なサンプルになってくれるだろう。もちろんそうなれば命の保証はないけれど、君が選ばなかった方がどうなっても興味はないだろうか？』

手が、震える。

ルーテシア・アルピーノはセルジオ・アウデイに残された唯一のものだ。

ずっと「メガーヌが死んでいる」と言うことを伝えられなくて、壊れ物のように扱っていた。

それでも偽らない「本物」を始めたくて、家族になった。

ルーテシアの未来と幸せは、セルジオが守るべき責任だ。

ゼスト・グランガイツはセルジオ・アウデイの失った理想だ。

ずっと「父さん」と呼びたくて、それでも呼べなかった。

あんな風に強くて、大きな大人になりたくて、そのために槍を学んだ。死んでからもずっと心の中にはゼストがいた。

そんなゼストの死が凌辱され、守りたかった地上を破壊していると言う事実を、守ろうとした人々を殺そうとすることを見逃すなどできない。

迷う時間などない。

いまでもゼストは誰かを傷つけ、ルーテシアは人の命をモノのように扱う男のもとにある。

決断は、いまずぐししなければならない。

全てを失った日、ドゥーエの『ライアーズマスク』に騙された。

何故か自分たちの動向は完全にバレていたのは戦闘機人ドゥーエの諜報のせい。

そのせいでセルジオの心の奥にはへばりつくような他人への不信がある。

ずっと一人でやってきた。

たった一人で三課で戦ってきた。

八神はやてが先輩と呼んでくれても、リインが隊長と慕ってくれても、シャマルが身

体を心配してくれても、クロノが未来に歩む道を教えてくれても、『彼女』と再会しても、セルジオ・アウデイは一人だった。

だから、今も一人だ。

一人でできる限界で、手を伸ばすしかない。

故に、決めるしかないのだ。

妹か、父親か。

セルジオ・アウデイにとってそれはどちらの方が大事なのか？

「そん、なの……」

セルジオが膝をついて、地面に拳を叩きつける。

魔力は感じない。ただの非力な青年の、ちっぽけな拳だった。

セルジオの顔が歪む。そして終わることのない葛藤の果てに、言葉を絞り出した。

「そんなの、選べるわけねえだろ……。俺に、そんなの……選べるわけがない……」

自分の胸をかきむしり、髪を掻き乱し、赤の混じった翠の瞳は揺れる。

それでもセルジオ・アウデイには決められない。

だってどちらも大切なのだ。

どちらも偽物のセルジオに『本物』を覚えてくれた人なのだ。

ゼストは親のいないセルジオに『父親としての背中』を覚えてくれた。

ルーテシアは家族のいないセルジオに『妹と繋いだ手の温かさ』を教えてくれた。どちらも大切だからこそ優劣などつけられない。

セルジオ・アウデイはそういうイキモノだ。

誰かを模倣することを定められた人造魔導師の成り損ない。

人間のフリをしようとしていただけの、そんな存在。

「俺が死ぬばいいのなら死ぬ。俺が消えればいいのなら消える。でも、こんなはどうすればいいんだ……」

自分の壊れかけの心を取り繕い続けた二年だった。

孤独な二年で傷ついた自分が崩れないように必死に走り続けた日々だった。

でも限界だ。

リンカーコアは動きを止めた。魔力はなくなつた。

もうセルジオ・アウデイにできることなど何も無い。

情けなく地面に這いつくばることしか、できない。

『……はあ、つまらなくなつたね、君』

だが、そんな状況を退屈そうに見るジェイル。

『なんでエクリプスを使わないんだい。君には魔力はないがエクリプスなら起動できるはずだろう』

セルジオの視線が手首のゼファーへと向かう。

ゼファー。正式名称『ゼファー・ディバイダー550』。

ジェイルの手によって組み込まれたエクリプスを供給するディバイダー550と、そこにシャルマルの手によって付け加えられたエクリプスを制御する『リアクター』の基礎理論のみが組み込まれている。

かつてセルジオを世界を侵す毒へと感染させ、いまはシャルマルの尽力によってセルジオの破壊衝動を僅かに抑えてくれているデバイス。

『ゼファーを起動すれば君はまた戦える。』

まあリンカーコアのある頃でさえあつという間に暴走させられていた君だ。リンカーコアの完全な機能停止に陥ったいまでは、おそらく制御などできずあつという間に飲み込まれるだろうが……いや何、そのくらい安い代償じゃないか』

だって、とジェイルが続ける。

『君はずつとそうやって戦ってきただろう？』

自分を犠牲にして、危機に陥るたびにその力に頼ってきた。今回もそうすればいい。自分の欲するものを求めて、欲望のままに戦えばいいのさ。そうすれば少なくともどちらかは救える。いつもと同じだよ』

「どちらかは、救える……」

『ああそうさ。それが『セルジオ・アウデイ』だったろう？』

そこにあるのは悪意だった。

その決断が生み出す最悪を理解した上での嘔きだった。

でもその言葉は、『セルジオ・アウデイ』というイキモノを理解しているが故の言葉だった。

セルジオがブレスレットを握る。

そして赤の混じる翠の瞳を揺らしながら、それでもふらふらと立ち上がる。

そして起動句トリガーワードを思い起こす。

それは悪魔との契約。

地獄の片道切符。

自分の未来を、投げ捨てる行為。

でも、今はそれに頼るしかない。

だつて許せない。

こんな風に誰かを笑つて、楽しいからという理由で人の尊厳を踏み躪るこいつを、許しておけない。

そうだ、コイツの企みを打ち砕けるなら命だつて惜しくない。

だから、もういい。

「ぜ、ファー。エクリップス——」

不意に、声がよぎる。

——それは、先輩だけで背負わなきゃいけないものでもないと思います。

——まだ、諦めちゃダメよ、セルジオ君。あなたが死ぬと悲しむ人は、たくさんいるのだから。

——なるべく長く生きろ。お前には、三課が解散してからもしてもらいたいことが山ほどあるのだから。

——おにーちゃんっ！

——きみは、さ。いま、なんのために戦ってるの？

すとん、と足から力が抜けた。

「だめ、だ……」

『……何？』

「だめ、なんだ。なんでかわからないけど、おれは、この力をこういう風に使っちゃ、だめだ」

力なく首を振る。

理由はセルジオ自身も理解していない。

でも、これはダメだと心の中で何かが言っている。

そういう戦い方をしてはいけないと、そういわれている気がする。

『……トーレの言う通りだ、君は随分つまらなくなってしまうた』

セルジオの姿に落胆したような声色でジェイルは指を鳴らそうとし——ガジェットに搭載した計器の反応で、誰かがセルジオに近づいてきていることに気がついた。

そしてそれが『誰』かを理解した時、ぐんにやりと愉しげに顔を歪めた。

期待外れの演劇が、面白くなりそうな兆しを感じ取ったように、愉快そうに。

「……本当に、いたとは」

地面を踏む音がする。ゆっくりと、けれどもたしかに地面を踏みしめ近づいてくる。

そこまでされてセルジオは、ようやくその『誰か』の存在に気がつき顔を上げた。

「ユーノ・スクライア、司書長」

「……セルジオ・アウディ一等空尉」

燃える夜の中で、緑の魔力光が瞬いていた。

紅い空

「時空管理局です！ 皆さん急いで避難してください！」

火災と悲鳴に支配された空港で、局員が避難誘導を続ける。

局員は皆バリアジャケットを装着していたが、どうやら空戦魔導師はいないようで、誰もが市民を守るように走っていた。

その中で最前線近くで指揮を取る人物が一人。

陸士108部隊の部隊長、ゲンヤ・ナカジマである。

彼の部隊は本日護送されるロストログアの警備担当に割り当てられた『陸』の部隊の一つであったが、突如として起きた火災に状況も掴みきれぬまま対応をしていた。

「ナカジマ三佐！」

「おう、どうだ首都防衛隊は来てくれそうか？ ウチでも出来ることはやるが、流石に地上だけじゃ手が回らねえ。空から見ても、広範囲の鎮火に回れる手がある」

「それがさつきからの通信不良がまだ治ってなくて。管理局全体につながる緊急通信な

ら使えるんですが……」

「……そつちだと時間がかかりすぎるか」

「はい。ほとんど全隊が同時に通信を取ろうとするのでどうしても階級や部隊の精査に時間がかかってしまいます。」

一応こちらからの要望は伝えてありますが、肝心の首都防衛隊の末端まで通信が行き渡つてこちらに来てくれるまでどれだけかかるか……」

「ち、もともと臨時通信はここまで大人数の人間が連絡を取り合うことは考えられてねえ。基本簡易的な通信を一方的に送るだけのモンだからな。」

俺たちは俺たちで出来ることをやるしかねえ、か」

陸士108部隊の臨時的な本部にしているトレーラーの中でギリ、とゲンヤが拳を握った。

（陸、空、それに本局の連中。通信が潰されたせいでも混乱しちまつてる）

目頭を揉みつつゲンヤが思考を巡らせる。

（いつそどこかの誰かが軋轢も気にせず命じてくれりや楽になるのかも知れねえが、そんなことできるのは現場レベルの指揮官じゃ無理だ。それこそ将官レベルが現場に出てこねえと……）

この空港火災において対応にあたつてる部隊は大きく分けて三つ。

一つが『時空管理局地上本部』の陸士部隊。

これはミッドチルダにおける犯罪者の取り締まりや治安維持を目的とした部隊。言つてしまえば地球で言う警察のようなものである。

ゲンヤ・ナカジマの陸士108部隊はこれにあたる。

次に『時空管理局本局』の首都防衛隊。

首都防衛隊は本局のエリート魔導師を中心として組織された、ミッドチルダ首都クラナガンでの魔導犯罪に対抗するための航空戦力である。

今回のような緊急時には現場へと急行し、現地局員との協力のもと事態を収める役目もある。

そして最後に現場に居合わせた臨時の魔導師たち。

現状動いているのは、いまは海上でガジェットドローンの群れを足止めする『フェイト・T・ハラオウン』、少し遅れて現場にやってきて民間人救助に向かった『高町なのは』、そして航空魔導隊三課からの応援としてやってきた『八神はやて』を筆頭とした数人である。

どれもが同じ『管理局員』という肩書きでありながらもその所属が違う。

本来はまず代表となる部隊を選出、合同本部とするはずだが、今は通信不良のせいでその本部設置すらうまくいっていない。

おそらくどの部隊も通信復旧の対応や、臨時回線の使用、付近の魔導師などに命じて動いてはいるのだろうが、広すぎる空港をカバーするにはそれでは足りないだろう。

それこそゲンヤが言うように『全ての人間に指示を出せるくらい』の指揮官』が出てくれば違うのだろうか、それ程の権限を持つ人物が今のミッドチルダに何人いることか。

「ナカジマ三佐、第二班が帰ってきました」

「っ！ そうか！ それで状況は！」

「軽症者三名、大人二人と子ども一人です」

「そうか、ならそのまま市民を下げて今度は三班を出せ。一班は二班と情報共有をして未避難地域へと動く準備を頼む」

「了解。……あの、ギンガちゃんとスバルちゃんですが……」

「言うな。悪かったのは見学に来たと言って言う二人を止めきれなかった俺だ。それだけの話だ」

ギンガ・ナカジマにスバル・ナカジマ。

クイントが拾ってきた人造魔導師計画の被害者で、偶然にもクイントの遺伝子で作られた『戦闘機人』。

正確にはゲンヤと血のつながりはない。

でも、娘だ。

ゲンヤはそう思っているし、娘たちもそう思ってくれている。

愛すべきクイント・ナカジマとゲンヤ・ナカジマの娘たち。それがあの二人だ。

「それにあいつらなら無事だ。ギンガは局員候補生だし、スバルだってクイントの娘だ。

心配することはねえ。……心配しても、仕方ねえんだよ」

「……すみません」

「なんで謝るんだよ。お前は何も悪くねえだろうが」

補佐官を下がらせたゲンヤが小さく嘆息。

（ギンガ、スバル……無事でいてくれよ……）

一秒だけ、娘の無事を祈る。

そしてすぐに気持ちを入れ替えたゲンヤは再び先も見えぬ部隊指揮を再開した。

「ユーノ・スクライア、司書長」

「……セルジオ・アウデイー一等空尉」

闇夜の中、セルジオの前にユーノ・スクライアが現れた。

セルジオにとつては知らない顔ではない。

はやてを経由して知り合い、その後何度か仕事などで関わった。

深い関係とは言えないが、それでも決して知らない相手ではない。

(でも、なんでこんなところに。偶然、と考えるにはここらは人気がなさすぎる。なら……)

ユーノ・スクライアは自らの意思でセルジオに会いに来た。そう考えるのが自然だろう。

でもその理由が見えてこない。

ユーノがセルジオ個人に、しかもこの状況で会いにくる意味が、セルジオにはわからない。

『何故か分からないかな、セルジオ・アウディ君』

だがその理由に心当たりがある人物がこの場には一人いた。

夜の黒の中でユーノの瞳が瞬き、通信音声の中継するガジェットの方へと向けられた。

『二年前、三課が壊滅したあの日、ゼスト・グランガイツとその部下が死んだ日、君がエクリプスの狂気に吞まれた日、そして、高町なのはが堕ちた日、その全容は伏せられた。』

君も上層部、特にレジアス・ゲイズから命じられたようにね』

声の主はジェイル・スカリエツティ。

彼は出来の悪い生徒に一つ一つ物事を教え込むように、丁寧に語り始める。

『でもそれでも調査をやめない存在がいたんだよ。君が無くしたものを数えて、義理の妹と家族ごっこをしてる間にも、ずっとずっとあの日の真実を探し続けていた、そんな人物がね』

「……それは」

『そうだ。それがユーノ・スクライアだ。』

彼は君が語ることを禁じられた真実を探し続けた唯一人』

ユーノは何も言わない。

ただ闇の中で薄ぼんやりと浮かび上がる緑の瞳を時折瞬かせるだけだ。

『彼はね、高町なのはのためにずっと調べていたのさ、あの日何が起こったのか。』

無謀だ！ 何せそれは管理局の上層部の手で隠された事実だ！ 誰も知らない！

セルジオ・アウデイ以外は死んでいる！ 忘れている！

でも彼は諦めなかった。それが彼の欲だったんだろう。あまりにも健気で、思わず私も手を貸して、管理局の廃棄データの抽出を手伝ってしまったよ』

男は笑い、続ける。

『その果てに彼は辿り着いた。誰が高町なのは傷つけたのかの真実を、ね』

誰が、高町なのはを。

そんなもの、答えは一つしかない。

セルジオの手の中に、槍から伝う血の感触が蘇った。

「スクライア司書長……は……」

「知っていますよ」

その先の言葉を留めるようにユーノが言葉を重ねた。

「デイバイダー550。エクリップスウイルス。そして破壊衝動。全て知っています。貴方はあの日、エクリップスに呑まれ、なのはを傷つけた。そして貴方はそれをずっと口止めされていた。……調べたので、わかります」

淡々と告げられた言葉は全て事実だった。

ユーノの瞳に感情はない。

ただへたり込むセルジオを見下ろして、手を伸ばして緑の円形魔法陣を展開した。

「スクライア司書長、何、を」

「……僕はずっと誰がなのはを傷つけたのか、その真実が知りたかった。それは、償わせなかったから。その行為には代償があると、そう思っていたから。」

そして、いまその相手が目の前にいる」

ほんの少しユーノの感情のない瞳に、薄い色が滲む。

「……でも、それでも、聞かせてください」

ユーノがセルジオを見下ろしたまま、淡々と事実を確認するように問いかけた。
「貴方が、なのはを空から墮としたんですか」

沈黙は一瞬だった。

いや、もしかすれば一瞬にも満たないほどの刹那だったかもしれない。

それほどまでに、セルジオにとってその質問の答えは分かりきったものだった。

セルジオがユーノを見上げた。

瞳に今までの揺らぎはない。きつと瞳の中には、その事実だけは絶対に目を逸らさないという、そんな想いが覗いていた。

「ああ。俺が墮とした。俺がこの手で彼女を傷つけた」

ぎり、とユーノが歯を噛み締め、手を振った。

「——凍てつけ」

はやての魔法行使によって空港の炎に包まれた一角がまるごと吹雪に覆われる。

『歩くロストロギア』とも言われるはやての広範囲にして丁寧な制御された魔法の負担に、はやては小さく息をつく。

そんなはやての耳に、融合機リインフォースIIの声が届く。

『はやてちゃん、ひとまず隊長さんから許可いただけただけのところは消化できましたですよ！』

「ほんなら一度地上に戻るか。まだ首都防衛隊さんの方がどう動くかわからへんし、魔法に巻き込んだら事や」

黒い羽を飛ばたかせて素早く地上へと降りたはやてが近くのトレーラーへと走る。

そこは本局——首都防衛隊の仮設本部となっている場所だった。

「航空魔導隊三課の八神はやてです！ 指定区画の鎮火終了しました！ 次はどこに行けばいいですか！」

「三課……奴のところのか」

はやての声に応じたのは首都防衛隊の部隊長——この対策本部の臨時的な指揮官となつている壮年の男だった。

セルジオの知識に沿うのなら、その人物を「ティードの上官だった人」と言ったで

あろう人物である。

側には数人の通信士がおり、はやてはその通信士たちを横切り部隊長のもとまでいくと敬礼した。

「ご苦労八神二尉。だがまだ消火可能地域については絞り込めていない。少しの間待機命令を出す」

「待機で……そう言つてさつきは十分も！ 今動かなかつたら救えない命だつてあるかもしれないのですよ!」

「そんなことは分かつている！ じゃあ無闇矢鱈に魔法を撃ちまくり救助活動中の現地局員の邪魔をしろつても言うのか!」

通信が使えない上に地上本部の連中どころか非番の魔導師連中までいる！ 大規模魔法行使にはいつも以上に気を遣わねばならん!」

「それ、は……」

「それに貴様はこの場にいる数少ない現場に出られる指揮官だ！ 他にはできない役割をこなす責任がある!」

「……つ、でも、ならせめて臨時回線での指示に踏み切つてください！ あれなら私たちは本局魔導師だけじゃなくて地上本部の魔導師たちも聞いてます!」

「それが可能ならとつくにやつている！ だがやつらと私たちでは指揮系統が違う!」

ただでさえ混乱してる現場に本局のこちらの指示でも出してみる！ 間違いなく救助の手は滞る！」

首都防衛隊の長たる男が、忌々しげに舌を鳴らした。

「私たちは私たちが動くしかない。それが、最善なんだ」

まるで、自分にそう言い聞かせるようだった。

地上本部と本局の不仲は今に始まった事ではない。

広い世界を守護するために優秀な人材を必要とする本局と、その煽りを受け人手不足に悩み余裕のない地上本部。

どちらも「世界を守る」という目的は同じなのに、ただ所属が違うというだけで行動を共にできない。

いまだって陸士部隊も、首都防衛隊もそれぞれが同じ目的のために動いているのに、その気持ちは一つになれない。

でも、とはやてが心の中でひとりごちる。

(だとしてもこれはちよつと不自然やな。このタイミングで通信が使えなくなるなんて、まるで誰かが陸と海を協力させないようにしてる気がする)

陸と海は不仲だ。

でも彼らはその程度の大小はあれ、「人を救うために」局員になったのだ。

ここまでの事件の中で協力をしないほどではない。ただ、利用されている。

陸と海の指揮系統の違いという、ここまでの事態にならなければ露呈しないような問題点を。

(……セルジオ先輩、私に何ができるやろう)

その問いかけに答えが返ってくることはない。

だがせめて今できることはしようと、部隊長の指揮の補佐に入ろうとした時、不意に通信士の一人が声を上げた。

「ぶ、部隊長！」

「どうした！」

「こ、これを見てください！」

通信士が手元の端末を操作するとトレーラー内のモニターに映像が投影された。

映像の中では、桜色の流れ星と暁の光が幾度もぶつかり、空港内を縦横無尽に駆け抜けていた。

「あれ、まさかなのはちゃん？　じゃあもう一人の方は……」

はやてが映像に目を凝らしもう一人の光が誰なのかを認識するよりも早く、ぽつりと眩くようにその正体を言い当てる人物がいた。

「……グランガイツ。ゼスト、グランガイツ」

「ゼスト……？」

その名前に聞き覚えがあったはやてが眉を寄せる。

「それって、セルジオ先輩のお義父さんやなかったですか？」

「……そうだな。そして、航空魔導隊三課の元部隊長で、地上本部きつての『ストライカー』であり、『エース』だった男だ。

……死にたがりが、死んでから化けて出たか」

忌々しげに呟く部隊長は舌打ちひとつ鳴らして部下に檄を飛ばした。

「なぜあの二人はあそこまで動きながら戦っている！ 何か目的があるのか！」

「わ、わかりません！ 動きを見る限り何らかの目的意識があつてのことだと思つたのですが……」

「何らかの目的だと」

通信士の言葉に部隊長が黙り込んだ。

しかしそれも一瞬のこと、すぐに通信士に命じさせてカメラの捉えていたゼストとなのはの移動ルートを出して、それをじっと見つめる。

「……グランガイツの碎の補佐官」

「八神はやて二等陸尉です」

「ならば八神二尉、貴様はこの状況をどう見る」

「え、あの、いいんですか？」

「私は陸の連中のように実力者を差別することはせん。それにこのままでは私たちも陸と同じ、目の前のことをやることしかできません。」

グランガイツが何故あそこで戦っているかはわからんが、この空港火災と無関係とも思えん。私以外の視点から何らかの打開策が欲しい」

ほんの少し、意外だった。

はやては『航空魔導隊三課』に配属されてからセルジオの補佐官として活動していた。それは本局の口利きがあったとはいえはやての年齢からすれば異例の出世である。

そのせいか助けに行つた先で煙たがれることもあつたし、小娘と言われ侮られたこともある。

だからこうして正当に力を貸せと言つてくれる人——セルジオや陸の局員への当たりがキツイのは目につくが——は少し新鮮だった。

そういえば前首都防衛隊の話題になつた時セルジオが部隊長を「上昇志向は強いけど正当に人を見れる人だよ。俺は嫌われてるみたいだけど」と言つていたかもしれない。

(……リイン、話は聞いてたな？　なんか気づいたことあるか？)

(うーん……聞いてはいましたけど、私もあんまりわからないです。ただちよつと、なの

はちゃんじゃない人の方はやけに機械的で、直線的な動きをに見えるですよ)

(機械的で、直線的……)

ラインの言葉を口の中で転がしつつ、はやてがモニタ上に映し出された二人の動きの法則性を見つけようと目を細めた。

そして、気づく。

「これ、もしかして人の生体反応をもとに移動してるんと違いますか？」

「生体反応……そうか。この二人の交戦ポイントはどれもまだ未避難民がいると思われる地域だ。グランガイツはその生体反応に向かって飛び、もう一人の方はそれを止めに動いている、か」

「おそらく。こればかりは当人に聞いてみなければわかりませんが……」

そこまで話した時、不意にラインがはやてに慌てたように呼びかけてきた。

(はやてちゃん！ 通信が来てます！)

(通信？ いや今はちよつと……)

(相手はなのはちゃんです！)

(なっ……！)

その言葉に今度ははやてが慌てたように通信を繋いだ。

その際に隣の部隊長に確認をとってそのまま本部内の機器と臨時回線を繋ぐ。

『はやてちゃん聞こえる?』

「聞こえてるで! 今そつちはどういう状況——」

『ごめんあんまり詳しく話してる時間はないかも! いまは偶然近くまで来たからはやてちゃん個人に念話が届いてるけどたぶんそれも繋がらなくなる!』

なのははやての返答を待たずに通信を続けた。

『さつきから私が戦ってるゼスト隊長は未避難者の生体反応を追いかけて空港内を飛び回ってる! 私は何とかそれを止めてるけど避難にまでは手が回らないの! できるなら……んの方……救助に回って欲し……』

「——やっぱりそうやったか。わかっただ! そつちはこつちでまわるから安心してええ! でも、大丈夫なんかなのはちゃん。相手は『エース』級なんやろ」

『大丈夫。……ううん、ほんとうは勝てるかわからないけど、私……てる、から、彼を——』

ノイズ混じりに通信が切れた。

「……通信、ロストです」

「応援は送れるか」

「難しいと思います。あの『エース』級の戦闘についていける魔導師なんて今この場には……。そもそも高町なのは二尉が加速なしで渡り合ってるのが異常なんです」

「フエイトちゃん……ハラオウン執務官なら追いつけたかもしれないけど……でも、いま彼女が持ち場から離れたら機械兵の群れを抑える人がいなくなります」

「現状私たちが打てる手段はなし、か」

部隊長は小さく頷くと、周囲へと再度指示を出した。

「高町空尉の移動ルートを元に要救助者を捜索する。八神二尉、部下を預ける。小隊指揮権を役立ててもらおう」

「はい、大丈夫です。任せてください」

敬礼をしたはやてがトレーラーの外へと駆け出した。

（せめて、私が指揮しなくてもいいくらい状況が好転したなら……）

はやてが炎の中に時折桜と暁の混じる遠くの空を見つめた。

（なのはちゃん……もう少しだけ待ってな）

ユーノの手が振り下ろされ、そこから魔法が放たれた。生み出されたのはユーノの魔力光と同じ緑の鎖。

「——ロック！」

その鎖が、闇に溶け込むようにセルジオを囲んでいた。無数のガジェットドローンを縛り上げる。

そしてジェイルの通信を中継するガジェットの前に立って、セルジオを背中で庇った。

『……これは驚いたな』

ジェイルが少しだけ意外そうに声を漏らした。

『君はセルジオ・アウデイに真実を問いたため、いや、もつと言うならば『高町なのはを傷つけた』彼への怒りでここにいると思っていたのだがね』

「……違う。僕は彼を助けに来たんだ」

ユーノの表情はセルジオからは見えない。

だが声は力強く、いまの状況も含めてとてもその言葉が嘘だとはとても思えなかった。

「誰かが僕にセルジオ・アウデイのことを調べさせようとしているのは分かっていた。その人物はずっと僕に細かなヒントを、真実へとつながるピースをばら撒いていた。」

僕にはその理由がわからずずっとその痕跡を辿っていたけれど、あるとき気づいた。

この人物は僕がセルジオ・アウデイへと不信感を募らせるよう誘導している、と」

『でも君もそれに乗っただろう？ 実際には調べるまでに少し時間はかかったが、結局三課の真実を求めて私の廃棄ラボからデータを修復した。

そして、ここに、わざわざセルジオ・アウデイが一人になるタイミングでやってきた。

私がここに来ればセルジオ・アウデイの真実を知れると、メールで指示した通りに、
ね』

「いま空港ではかつてない火災が起きている。だが航空魔導隊三課ははやてしか現場に来ていない。もし、僕とセルジオ・アウデイを仲違いさせたい『誰か』がこの事件に関わっているのなら、それはセルジオ・アウデイを追い詰めたいからだ。

そして、僕が来なければ彼は更なる苦境に立たされる可能性もある」

『……随分と頭が回るようだ』

「半分は勘でしたし、まさか貴方だったとは思いませんでしたがね、広域次元犯罪者『ジェイル・スカリエツィ』」

『私のことまで知ってたか。これは流石に私が『ユーノ・スクライア』という人間を見誤っていたことを認めなければならなさそうだ』

ハア、と通信機の向こうでジェイルが大袈裟に息を吐いた。

『なんとも状況は思い通りにいかないものだ。やれやれ、故にこそ人の心とは、欲望とは面白いとはいえ、厄介であることもまた事実』

故に、とジエイルが指を鳴らした。

『少し無理やりではあるが、状況を動かさせてもらおうよ』

いままでユーノに縛られて身動き一つできていなかったガジェットドローンの単眼が光る。

それと同時にいままでユーノの魔法によって精密に操作されていた魔力の鎖が構成から解かれて霧散する。

「な、AMF対策の表層を魔力の膜で覆った特別性なんだぞー！」

『私とて既存技術で満足などしないさ。いままでの断続的なAMF発動と違い最新式は継続的なAMFの発動を可能にしている。まさに、魔導殺しだ』

魔導殺し、ガジェットドローン。その最新型。

しかもいまここにいる数十体、そのどれもが伸ばしたマシンアームに魔力ではない鋭利な鉄刃を持ち、その単眼からは物理的な破壊を生み出す熱線を放ち、『魔導殺し』たるAMFを持つ。

『存分に足掻いてくれたまえ、君たちの欲望を満たすため』

通信が切れ、そして一斉にガジェットドローンが動き出した。

「く、ワイドプロテクション！」

ユーノが手を振ると、セルジオの周囲に緑の半透明の障壁が現れる。

「スクライア司書長！ 俺は一人でも」

「貴方は今魔法が使えない！ 僕が何とかするのでそこにいてください！」

「でも、俺はあなたに守ってもらおう価値なんて——」

「いいから動かないで！ こっちは僕で何とかできます！」

すう、とユーノが息を吸い、襲い来る鉄の嵐へ向けて腕を振るった。

「チェーンバインド！ ストラングルバインド！ プロテクション！ フォトンスファイア——」

ユーノは魔法を打ち消す相手に対し、チェーンで地面を抉って土の重みで吹き飛ばし、魔力を固めて魔法が消える前にバインドで相手を握り潰す、多彩な魔法で戦った。

だが競り合えたのはほんの一瞬。機械たちの攻撃は打ち寄せる波のようで、数十体の絶え間ない攻撃は刻一刻とユーノを追い詰めていく。

そんな様を、セルジオはただ見ていることしかできない。

（俺は、何もできないのか。魔法の力を失ったせいで、戦うことすらできないのか）

手首を、正確にはそこにある暁の色のブレスレットを握る。

次使えばおそらく正気を保てないと言われた。

残り少ない寿命を残らず消し飛ばすことになると言われた。

(それでもこれを使えば戦うことはできる。そうだ、あの人同じなんてダメだ。ゼストさんが死んだ。メガーヌさんが、クイントさんが、みんなが……)

ユーノがガジェットと戦う光景があの日之三課の仲間達と重なる。

もうあんな風に無力を感じて失うなんてごめん。

(そうだ、戦えるなら戦えばいい。戦って、戦って……)

あれ、とセルジオの思考が止まった。

(何のために、戦うんだ。偽物の俺が、この力を、何のために……)

何もわからなかった。

なぜエクリプスを使う手が止まったのか、さつき起動を押しとどめた声は何なのか、セルジオには何もわからない。

でもユーノの戦う姿からずっと目を逸らさなかったから、限界を迎えたユーノが腹部にガジェットの熱線が直撃したことは見逃さなかった。

「ぐ、が……」

ユーノの細い体が吹き飛び、一体のガジェットの足元で止まった。

そして、ガジェットは目の前に現れた熱源反応の元を絶とうとマシンアームを掲げて、振り下ろす。

「しまっ——」

ユーノが目を見開き、なんとかそれを防ごうとするが、生み出した急場凌ぎのバリアはまるでガラスのように容易く砕けた。

人が死ぬ。ユーノ・スクライアの命の灯火が、いままさに吹き消される。

「——ゼファー、エク립スドライブ、イグニッション」

全ての思考は吹き飛んだ。

ゼストたちを失った過去も、自分の無力も、さつきから聞こえていた人たちの声も全て遠くに吹き飛んで、残った気持ちはたった一つだった。

けれどセルジオ・アウデイはその気持ちを理解する余裕もなく、ただ黒鎧を纏ってユーノとガジェットの間割り込んだ。

ズ、とガジェットドローンの刃がセルジオの胸を突き抜けた。

「——え」

ユーノの顔にびしゃり、と血飛沫がかかった。

「ごぶじ、ですか、スクライア、ししよ、ちよう……」

セルジオがいつものように笑って見せる。

その無理やりな笑みは血に濡れていて、とてもじゃないが誰かを勇気づけられるようなものではない。

それでも、セルジオは笑っていた。

「どうして、僕を——」

ユーノが問いかけるよりも早く、セルジオは自分を突き刺したガジェットドロゴンと後ろに跳んだ。

そして、自分の胸を突き抜けているブレードを掴んで、ぎりぎりと力を込めていく。刃が肉に食い込み、傷から鮮血が伝っていくが気にしない。

ただ目の前の物が無くならないのがイラついたようにただ力を込めて、ついには粉々に砕いてしまう。

ばらばら、きらきら。鉄が散って、ようやく邪魔な物が消えてくれた。

いい気分になって、呼び出した槍で背後の機械を叩き潰す。

「……は——」

視界が赤い。思考が定まらない。心がちっとも満たされない。

だから、壊そうか。

「ははは」

くるり、と彼は手の中で槍を回した。

ユーノはそんな彼の名を呼ぼうとて、自分の傍を通り過ぎた突風に煽られて吹き飛んだ。

槍を手にした黒い影が加速したのだと理解したのは、先ほどまでユーノを苦しめていたガジエツトドローンの三分の一が粉々に砕け散ったのを見てからだだった。

「ああ」

影が再び加速し、手にした槍を投擲した。

ユーノの目で追うのが難しいほどの速度で投げられた槍はまるで空を貫く雷のようで、ガジエツトドローンを5体まとめて貫通してからようやく止まる。

そして無手になった影はそのままガジエツトドローンの群れに飛び込んでいく。

無数の刃に切り裂かれ、レーザーに焼かれても彼は止まらない。負った傷はたちまち癒えて、むしろ傷を負った分だけその行動は苛烈さを増しているようだった。

それは黒い破壊の嵐だった。どこまでも紅い、世界を侵す毒だった。

「はあ……」

そうして、ガジエツトドローンの全てを破壊した彼——エクリップスに呑まれたセルジオ・アウデイがユーノに目を向け、頭を抑える。

「う、ぎ、が、あ、ああ……」

セルジオの瞳が紅く輝く。

「セルジオ空尉……」

ユーノがセルジオに近づこうと手を伸ばすが、頭を抑えて苦しむセルジオはその手を

乱雑に払った。

「く、るな。ダメなんだ、もう、俺じゃ……」

瞳が輝く。紅く、紅く、どこまでも紅く。

「ああああああアアアアッ！」

叫び、黒い影は目の前のユーノへと襲いかかる。

夜の闇、赤く燃える空すら染め上げるように、セルジオ・アウデイの最後のエクリプスの暴走が、いま始まった。

第十八話 「紅い空」

かつて信じた君へ

高町なのははユーノ・スクライアにとって手のかからない教え子だった。でも彼女のことを心配しなかったかというところと全くそんなことはなかった。

何せなのはは自分の魔法の才能を誰かを助けることに使っていたのだ。時には自分を省みない行動も取るなのはは常にユーノの心をすり減らした。

出会いはなのはが自分のやるべきことを手伝ってくれたことから。

魔法という世界をなのはに教え、彼女が望む『泣いてる子を助けてあげたい』という目的のために導き、その背中を押してきた。

なのはは優秀だった。高い魔力に、それを扱う地頭の良さ、何より空を飛ぶセンスがあつた。

ユーノの教えたことはあつという間になのはに吸収され、ユーノではとても追いつけないような高みまで行ってしまった。

まるで、空を飛んでしまうかのように。

それに悔しさを感じなかったかという嘘になるが、でもそれよりも嬉しさと誇らしさの方が勝った。

あの小さな女の子の背中を押せることが誇らしかった、あの危なっかしい女の子のやりたいことのために戦える自分に不満はなかった。

高町なのははずつと「誰かを救う」ことに全力だったし、ユーノはそれを支える「なのはの先生」だった。

でも、ある時少しだけなのはが変わって行った。

いつものように話していると時折、今までになかった名前が出て来るようになってきた。

『セルジオ・アウディ』。

クロノの同級生でライバル。士官学校を次席で卒業した秀才。

航空魔導隊三課の分隊長で、なのはの上司で相棒。

セルジオといくつもの事件と向き合うにつれて、なのはの中のスタンスが少しずつ変化しているのを感じた。

なのはを知る人たちが時折指摘する『自分を犠牲にしても誰かを救う』という信念に、なのは自身が疑念を抱くようになっていような、そんな気がした。

それはきつとセルジオ・アウディの影響なのだということも、わかった。

そしてある日高町なのはは空から落ちて、セルジオ・アウデイはそんな彼女に別れを告げた。

一方的に、なのはの言い分も聞かずに、淡々と「教導隊に行け」とだけ言い渡した。

ユーノ・スクライアにとって『セルジオ・アウデイ』とはどんな存在なのか。

世間の彼への評価は概ねこうだ。

なぜか一人だけ無傷で生還した指揮官。

部隊長の死で昇進した成り上がり。

未来のエースとも言われた堕ちたホープ。

でもユーノにとってのセルジオを言い表す言葉は上手く見つからない。

セルジオ——高町なのはの元相棒のことを考えた時にざわつく心がわからない。

いったい、ユーノ・スクライアは、何を思い、セルジオ・アウデイに疑念を抱き、彼

を助けに来たのだろうか。

「空尉っ！ 正気に戻ってください！ 今はこんなことしてる場合なんかじゃ——」

「ああああアアアッ！」

「——くそっ、ストラングルバインドっ！」

空に響く叫びをトリガーに白混じりの紅いエクリップスエネルギーが放たれる。

ユーノは素早く輪つか状のバインドでセルジオの手を拘束、引つ張ることで無理やり砲撃の方向を逸らした。

(……モロにあたればタダじゃ済まない)

体の脇を抜けていく光に背筋が冷える。

「——かそ、く、機動……ッ！」

ユーノの視界から黒鎧のセルジオが消失する。

残されたのは苦しげな「加速起動」というワードのみ。

(僕じゃ目で追うのは無理だ。なら——っ！)

ユーノが手を広げると周囲に半径2メートルの球状の障壁を展開する。

加速していたセルジオはそんなもの盾にもならないとばかりにエクリップスの「分断」ディバインド

で魔力の構成をまとめて解くと、槍で力任せに突き砕いた。

がしゃん、とガラスが割れるような音がする。

セルジオはユーノの作り出した障壁の内側に踏み込み、そしてそれを待ち構えていたかのような鎖に絡め取られる。

それはユーノの展開した壊されることを前提とした魔力障壁。

エクリップスを使ったセルジオの加速を自分の目で追うのは困難と判断したユーノは、

敢えて壊されるように盾を作り、どこからやって来るのかを特定できるようにした。

さらにそこから壊された障壁の座標に向けて、自動的にチェインバインドで迎撃するように魔法を組んだのだ。

曲芸じみた早技の魔法展開。

これほどのスピードで魔法を組み合わせさせることは、同時に二つのデバイスを扱ってみせるクロノですら難しいだろう。

「——っ」

狂気に吞まれた紅い瞳が細くなり、苦しげな声が漏れた。

セルジオの体がギリギリと緑の鎖で締め上げられていく。

だが魔力でできた鎖程度、エクリプス因子^ド適^{ライ}合^バ者ならば誰でもこの程度の拘束を無理やり破壊することができる。

「させるか——！」

だがユーノは拘束が解かれそうとみるや四肢、首、デイバイダーであるゼファーを握る左手を追加の鎖で締め取った。

セルジオの顔に苦しさが増し、ユーノの頬を汗が伝う。

ユーノの拘束とエクリプスの脅力は拮抗し、このまま膠着状態が続くかと思われた。

「——は」

だが、小さな呼吸とともにセルジオが紅く目を光らせて、その膠着は一気に崩れた。
「魔力分断」
マジック・ブレイク

急にユーノの維持していた魔法が脆くなり、セルジオの拘束が困難になる。

まずは腕、その次は足、それまで確かな強度でセルジオを繋ぎ止めていた鎖に細かなヒビが広がっていく。

そして数秒後には粉々に砕かれて、お返しとばかりに刃に収束された紅い斬撃が射出された。

それをあらかじめ待機させておいたチェーンバインドで自分を引っ張ってかわしたユーノは、セルジオと大きく距離を取る。

「エクリプスの分断効果か……！ まさか十秒もたないとは……いや、むしろ数秒もつただけありがたいのか」

はやてに頼まれてセルジオのためにエクリプスについて調べたのは他ならぬユーノだ。

だからエクリプスについての知識は人並み以上に頭に入っている。

文献の一つに、エクリプスは『世界を侵す毒』であると書かれていた

魔力分断に、異常な身体能力の向上、無限にも等しい治癒能力。

たしかにこれはいまの世界を根幹からひっくり返す可能性を持った毒であると言え

るだろう。

(いや、そうじゃなくても、セルジオ・アウディ空尉は強い。

いまは正気を失ってるせいで随分荒くなってるけど、あの身のこなしは少しの鍛錬で身につくものじゃない。

戦うためにずっと鍛錬を続けてきたんだ。それが、実を結んでいる)

無意識にユーノが唇を噛んでいた。

またもや黒い影が加速し、ユーノのもとへと切り込んでくる。

それを持ちうる魔法でなんとか防いで、いなして、自分にやってくる『死』の未来を少しでも遠ざけるために、足掻く。

そして、その中でユーノの胸に言葉にできない思いが浮かんでくる。

(なんで)

セルジオがエネルギーを最大まで収束して砲撃を撃った。ユーノはそれをシールドを重ねて勢いを殺して、分断が完了する前に回避した。

(なんで……っ)

セルジオが今度は槍を大上段に構えて叩きつけるように槍を振るった。ECで強化された身体能力から放たれるそれを食らえば、ユーノの細い体など容易く引き裂かれるだろう。

ユーノはそれをシールドのサイズを絞る代わりに硬度に回してなんとか防いで見せる。

(なんで、なんで——っ！)

防がれた槍が手から溢れ落ちていく。

だが紅い瞳は槍には目もくれず、右拳を握るとそのままユーノの顔へと向けて拳を振り回す。

ユーノはそれを受け止めきれなかったが、なんとか顔はそらして肩で受けた。

ミシリ、とユーノの肩が軋んで、そのまま振り抜かれた拳に吹き飛ばされて地面を転がる。

「なんで、だよ……！」

ユーノが肩を抑えて立ち上がろうとしたが、すぐ目の前にはいつの間にか槍を手に追撃しにきた紅い瞳があつて。

息つく暇もなく多重のシールドを展開すると、それを前に押し出して防ぐためではなく、殴打する盾として使った。

殺傷能力はないものの、面での強い打撃にセルジオの身体が吹き飛んでいく。

「なんで、貴方は！ 僕は！ なのはを！ こんな……っ！」

ユーノが指揮者のように横に手を振ると、吹き飛んだ相手に向けて無数の魔法陣を展

開。

そこから魔力でできた鎖を射出し、加えてセルジオの周囲を魔力の障壁で覆った。横に振った拳をそのまま握りしめると、障壁は中心へと向けて縮まり、無数の鎖ともの中にいるセルジオの身体へと殺到する。

「戒めろ——封鎖牢獄！」

シールド、バインド、結界の技術が高度に融合したユーノの工夫。

支援魔法のスペシャリストとしての彼が使う、エースにも通用するかもしれないというコンビネーション。

「——分断」

けれど、相手はエースではない。

エクリップスだ。世界を殺す毒だ。魔法文明の破壊者だ。

まるで当たり前のように障壁は破壊され、紅い瞳はユーノへ向けて加速した。

ユーノは再び多重のシールドを展開——しようとして、二枚生み出したところで魔法の演算が引つかかった。

封鎖牢獄の急速な演算で僅かに疲労が溜まっていた影響だった。

先ほどは無数のシールドの密度で無理やりセルジオの身体を吹き飛ばせたが、たった二枚では押し留めることすらできない。

シールドはまるで初めからなかったように破壊され、セルジオの右手がユーノの首を掴んで締め上げた。

「——はあ」

紅い瞳を光らせて、くるり、と手の中で槍を回して穂先をユーノの胸へと向けた。

全てを失った『あの日』と同じように、エクリプスの狂気に吞まれて、自分が何をしようとしているかすら理解しないまま。

そして、槍が振られる。躊躇いなんて、かけらもなかった。

そして首を絞められて爪先が浮いたユーノが、今まさにやって来ようとしている自分の死の前に、叫んだ。

「なんで、そんなに強い貴方が、その力をなのに向けたんだよッ！」

—— なかせちやって、ごめんね。

紅い思考の中で、その名前が脳を貫いた。

「——あ」

血が舞った。

だがそれはユーノのものではなく、セルジオのものだった。

ユーノを締め上げていた右手を離し、自分が振るった槍を自分の手で受け止めた、セルジオ・アウデイの血だった。

「ぐ、あ、ぎ、ああ……が、アアアアッ！」

からん、とセルジオの手からデイバイダーである槍、ゼファーがこぼれた。そしてセルジオは血に濡れた右手で、震える左手を抑えて、膝をつく。

「か、あ、は……」

ちかちかと目が紅と翠で点滅する。

正気と狂気のスイッチが入れ替わるように、瞳の色が入れ替わる。

一度始まったエクリプスの暴走は止まらない。

でも、いまセルジオはそれに抗おうとしていた。

もう自分の意思で制御などできるはずもない。

数年蓄えた破壊衝動の蓋はひとたび開かれてしまえば、もうどうしようもない。

人を殺すまで、誰かの血を見るまで止まらない。

でもセルジオは、かつては完全に暴走し、大切な相棒すら傷つけたその狂気を、いまはただ『そうしたくない』と、必死に抑えつけようとしていた。

その姿に、地面に転がるユーノが声を漏らした。

「なんで、止まれるんだよ……なんで、僕の時に……」

ぼろぼろと、ユーノの緑の瞳から涙が溢れる。

そして、ユーノは叫んだ。

「なんでいま止まれるなら！　なのはの時に、止まれなかつたんだ！　貴方は僕なんかの時じゃなくて、なのはの時にこそ止まるべきだった！　それができるのに、なんで、いま……っ！」

なぜ涙を流してるのか、なんで暴走するセルジオに今こんなことを聞いているのか、ユーノ自身も自分の行動の意味を説明できない。

でも、ただ『セルジオ・アウデイ』という人間を知りたかつた。

「なんでエクリプスを僕を助けるために使つたんだよ！　貴方だつて使えばタダで済まないと分かつてたはずなのに！　現にいま暴走して、さつき止まれたのは偶然だ！」

セルジオはかつてエクリプスの紅い思考に支配された。

そして破壊衝動に呑み込まれた果てになのはを傷つけた。その槍を止めることはできなかつた。

セルジオは今日再びエクリプスの紅い思考に支配された。

そして破壊衝動に呑み込まれ、ユーノを傷つける寸前に狂気に抗つた。その槍は直前で止まつた。

「なんで、僕を助けようとしたんだ……」

最後は消え入るような声だった。

その質問にまだ瞳の色が定まらないセルジオは、ただぼつりとつぶやいた。空っぽの心に唯一残っていた想いが溢れでたように。

「……わから、ない。でも、あなたが死ぬのは、人が目の前で死ぬことだけは、いやだったんだ」

セルジオ・アウデイは夢も、未来も、仲間も、何も残つてはない。

でも空っぽになつた器の中には、いまでも『目の前の人死ぬのはイヤだ』という、子どものわがままにも似た想いが眠っていた。

それはジェイルを許せないという想いでは使わなかつたエクリップスを、思わず使わせしてしまうくらいのも、セルジオの心に根差した純粹な気持ち。

「なんだよ、それ」

ユーノがぼつりとつぶやいた。

「なんで、貴方は間違つても、そこまで折れてしまつても、そこまで強くいられるんだよ……」

紅く点滅する視界の中、セルジオは首を振つた。

「強くなつて、ないです。俺はどうしようもないほど弱い。強くなつて、なれなかつた」
こんなもの強さではない。

選んだわけでもなく、ただイヤだという子どものようなわがままで動いただけだ。

自分はどうしようもないほど空っぽで、だからこそ、何も選べない。選んでこなかった。

そんな自分のどこに強さがあるのか。

「俺は、変われないんだ。昔からずつと、『誰かに言われたことを真似する』ことしかできない、それだけの偽物だった」

自分が失敗作だと、偽物だと言われた日から、自分の生き方に中身がなかったことをいやと言うほど思い知った。

無力で、ずつと変われない、形だけのハリボテだ。

「俺はずつと、何も生み出せない、誰かから与えられることしかできない、それだけの偽物だった……」

セルジオ・アウデイにとってそれは自分を指す真実。目の逸らしがなく、否定できないもの。

「それは、違うはずだ」

けれど、ユーノ・スクライアは、それを否定する。

「だってなのは、貴方が自分を傷つけたんだと知っても、それでもまだ貴方に助けられたと、そう言っていたんだから」

「…………え」

「忘れてなんかなかった。なのははもう、気づいてた」

第十九話 「かつて信じた君へ」

「あの日、なのはを刺して消えない傷を作ったのは、エクリプスで暴走したセルジオ・アウディだ」

星空の下、ユーノはなのはに真実を告げた。

そしてユーノはなのはに説明してくれた。

エクリプスとは何か、セルジオがなのはに何をしたのか。

ユーノの調べた範囲でわかることは、全て教えてくれた。

それを聞いた時なのはの中に生まれたのは、驚きでも、怒りでも、悲しみでもなくて、納得だった。

「…………やっぱり、そうだったんだね」

「……覚えてたの?」

「覚えてた、と言うほどじゃないかもしれないんだけどね。もしかしたらそうなんじゃないかなって、ちよつと」

言葉を選びながらなのはが垂れた髪を耳にかけろ。

「みんなには堕ちた時のことはよく覚えてないって言ってたよね。あれは嘘じゃないよ。でもね、ひとつだけ記憶に残ってるものはあつたの」

自然と手は胸元に向かつていた。

もうずいぶん小さく、薄くなつてしまつたけれど、でも今もたしかにある傷跡に。

「あの人だね、泣きそうな顔してた。」

おかしいよね。一度も泣いてる顔なんて見たことないし、泣いたこともない人なんだよ。」

でも、となのはは困つたように笑つた。

「やつぱり泣いてたんだ。その顔がね、本当に見たことないくらい辛そうで。」

あの人があんな顔になるってことは、たぶん一番やりたくなかつたことをやつちやつたんだらうなつて」

かつてセルジオ・アウデイはなのはに夢を語つた。

『すべての人を助けたい。

泣いてる人も悲しむ人も増やしたくない。

すべての人に笑顔でいて欲しい』

それは絶望的なほど遠くで輝く星に手を伸ばすような夢で、とてもじゃないが叶うとは思えない夢だ。

現実 は物語のように優しくなく、いつだってこんなはずじゃないことばかりで、運が悪くて死ぬ人がいる。

でもセルジオ・アウデイはそれを認めたくなかったから、ずっと一人で星ゆめに手を伸ばしていた。

「あの人は私を傷つけた。それは真実だと思う。

そのせいなのかな。昔は近くに感じた心がもう私には見えなくて、あの変わらなさが、少しさみしくて、少し怖い」

なのはが星空を見上げた。

「星が輝くのはね、燃えてるからなんだ。

精いっぱい生きてるから、綺麗なの。ずっとずっと、星はそうやって生きてきた。それはきつと変わらないことなんだ」

燃える星は、いまもなのはの頭上で輝いてる。

「彼は変わらなかつた。一人でもなんでもやつちやおうとする人で、一人で全部背負つ

ちやおうとする人だった」

輝く星全てが燃えている。ひとつとして例外はなく、燃えてるからこそ、美しい。でも、彼が変わらないのなら私が信じた彼だって変わらないうちにあるはずなんだ。

だから私は、まだ『私が昔信じた彼』を信じてみたい」

そして、なのはは空に向かって手を伸ばした。

まるで、届かない星に手を伸ばすように。

「だって、彼の想いが私を助けてくれたってことは、絶対に嘘にはならないから」

《《Master!》》

ふと、レイジングハートの声で目が覚めた。

ゼストとの戦いの中で吹き飛ばされて、ほんの少しだけ夢を見ていたようだ。

「いてて、ごめんレイジングハート、私どのくらい落ちてた？」

《《It's about 10 seconds. How are you?》》

「うん、それは大丈夫。レイジングハートがシールドを張ってくれたおかげだね。ありがとう」

《《

Don't Wally. More than that, there are still

「……そうだね、そうだった」

瓦礫から出てなのはがレイジングハートを構え直すと、と目の前に金髪のゼストが降り立った。

なのはのバリアジャケットは既に所々が敗れ、焼け焦げたような穴が空いているが、対するゼストのバリアジャケットに目立った損傷はない。

所々砲撃をくらったあとのようなものが残ってはいるが、それがゼストへ明確なダメージを与えられているかはわからない。

「やっぱりゼスト隊長は強いね。ただでさえ強いのにユニゾンデバイスとフルドライブモードの併用だもん」

《Master……》

「うん。わかっている。でも私たちがやらなきゃたぶんここにゼスト隊長に勝てる人はいないよ」

すう、となのはが小さく息を吸うと、ゼストを再び見つめた。

「隊長、聞こえていますか。私、高町なのはです。いまは管理局教導隊にいて、泣いている誰かを助けてあげられる人を育てるために戦っています」

ゼストの瞳に意思の光はないが、それでもなのはは語るのをやめない。

「二年前とはいろんなものが変わりました。でも変わらないものも、変えてしまっちゃいけないものもきつとある。」

そしてそれは、いまのゼスト隊長もそうです」

なのはが杖を構えて、グリップを握る。

マガジンを確認する。カートリッジは不足なし。

「隊長は誰かを守る人だった。そんなあなたが誰かを傷つけるために戦わされてるなんて、そんなのいいわけないっ！」

そして最後に崩れかけた天井から空を見上げる。

炎の光に邪魔されて、星は見えなかった。

けれどむしろ、その事実が気合が入った。

「だから止めます！ 私と、レイジングハートで！」

そして、その言葉を紡いだ。

「レイジングハート・エクセリオン！ リミットブレイク！ ブラスタター！」

《Bluster mode》

桜の吹雪が魔力の嵐となって吹き荒れる。

その中に立つ高町なのはが、杖をゼストへと向けて、言い放つ。

「私とレイジングハートの全力全開で、あなたを止めます！」

桜と暁の光が、再び燃え盛る空港でぶつかり、弾けた。

『だから私は、まだ『私が昔信じた彼』を信じてみたい』

昔信じたセルジオ・アウデイとは、いったい何か。

いやそもそも自分はいったい『何』なのか。

いま一度自分に問いかけてみる。

セピア・アウデイの遺伝子から作られた。

戦うために、命じられたことを遂行するために、人を真似するためにデザインされた。愛された結果生まれてきたのではない。

偶然生まれて、捨てられなかった失敗作が、たまたま優しい人に拾われただけ。

その人が母親になって、名前をくれて、生きる場所をくれただけ。

でもそんな優しい人も死んで、母の遺言を守り、母の代わりに生きようとしていた。

それが『セルジオ・アウデイ』。

セルジオはそんな自分を「偽物だ」と吐き捨てる。

人を守る、悲しむ人を減らすなんて夢も口先だけで、何よりも大切なものを自分の手で壊した。

守りたかったものは指の間から溢れて落ちていった。

必死に残ったものをかき集めて取り繕うとしたけど、それでも駄目だった。

魔法の力は失った。ルーテシアは守れなかった。

なのはは前に進んでいたのに、自分のやるべきことすら選べない。

犯した罪は消えないし、失った過去も取り戻せない。

でも前へと進んで何かを作ることではできたはずなのに、それもできなかった。

なんて無様で、不恰好。

好きになれるはずがない。嫌いになって当然だ。

ああ、そうだ。セルジオ・アウディは自分のことが世界で一番嫌いなのだ。

こんな存在、誰かのために命を使って消えてしまえばいい。

それだけのためにしか生きていてはいけない。それだけのために死ねばいい。

「なのに、なんで、まだ見捨てないんだ、信じようと、してくれるんだ……」

ルーテシアは血の繋がりのない自分のことを「おにーちゃん」呼んでくれる。

ゲンヤは二人の娘を育てるのに忙しいだろうに、それでも気を遣ってくれる。

クロノは前に進めてない自分へ、違う道もあると示してくれた。

ヴァイスはわざとらしくバカをやって、自分を笑わせようとしてくれる。

はやては不器用な自分に懲りずに付き合って、「先輩」と慕ってくれる。

シャルルは諦めて俯いた自分の顔をもう一度あげて、可能性を見せてくれた。

そして、『彼女』は、未だに自分を——セルジオ・アウデイを信じたいと、そう言っている。

優しい人たちだ。なんで、ずっとこんな自分に手を差し伸べてくれるのか、わからない。

なんで、『彼女』は信じたいと、セルジオの想いが嘘じゃないって、そう言えるんだろう。

だって、自分にそんな価値はないはずだ。

差し伸べられた手に返せるものなんて何も無いんだ。

「なのはは、今も戦ってる。たったひとりだ。

状況だって混乱してるせいで援護も送れない。

……僕だって助けにいけない場所だ」

でも、とユーノが拳を握る。

「あなたなら、できることがあるんじゃないのか。まだ、その手の中に残る何かがあるん

じゃないのか」

「そんなもの……」

あるはずがない。

魔法の力はもう失った。助けてくれた仲間だつてもういない。自分を突き動かしていた夢だつて、母親の真似の偽物だ。

「俺は、空っぽだ。なにも残つてなんかいない、それだけの——」

不意にぐいっと胸ぐらを掴まれ引き寄せられた。

やったのはユーノで、彼はそのまま彼らしくなく、セルジオを怒鳴りつける。

「いつまで、いつまで零れ落ちたものを見てんだよあんたは——」

勢い余つて額と額がぶつかつて、ユーノとセルジオの顔が近づいた。

「まだ、まだわからないのかよ！　なんでみんながあんたに手を差し伸べてくれるのか！　ほんとうに、わかんないのかよ！」

目の前には緑の強い光があつて、ユーノはまるで何かに痼癩をぶつけるように怒鳴つた。

「あんたが助けてきた人たちだからだ！」

——言葉が、胸の奥まで響いた。

「みんな、セルジオ・アウデイに助けられたと思つたんだ！

あんたの戦いで、救われたと思つたから、だから今度はあんたを助けたいって、そう思つたんじやないのかよ！」

ユーノの言葉には熱がこもっていた。

ユーノはセルジオに助けられた人間ではない。

けれど、その言葉には確かな確信と、熱があつた。

だつて、その生き方はユーノ・スクライアがずっと後ろから見ていた『高町なのは』の生き方と似ていたから。

周囲がセルジオに向ける感情が、ユーノが高町なのはに向ける感情によく似ているから。

だからこそ、確信とともに、そう言える。

「あんたはずつと、誰かを助けてきたから助けられる、そういう生き方をなのはに見せてきたんだろ！」

セルジオの胸ぐらを掴んだままのユーノの言葉止まらない。

ユーノもまた、自分の心をむき出しにするように、溜め込んだ全てを吐き出していく。セルジオの服を掴んで詰め寄ってるのはユーノなのに、続けるようにひとつひとつ、心が形になっていく。

「ずつと、僕はなのはの背中を見てた。彼女の背中を守れることは僕の誇りで、彼女の背

中を押せることは、僕の喜びだった」

高町なのはユーノにとつて教え子で、とても大切な女の子。

その背中をずっと守ってきた。それが誇りだった。

だけど、いや、だからこそ。

「ほんとうは、僕はあの子を守ってあげたかった。なのはの隣で、なのはの前に立って、彼女が笑っていられる場所を守りたかった……なのはを、一人にしたくなかった……」
ユーノ・スクライアは高町なのはが戦わなくてもいいようにしたかった。

闇の書事件で救えない悲しみを知って、それ以降どこか『人を救うためのシステム』のようになつて、一人で立てるようになっていってしまう高町なのはに、違う道を教えたかった。

その生き方でなくてもいいと、そう教えたかった。

そこまで言つて、ああ、とユーノが声を漏らした。

ずっと心の奥にあつたセルジオへの感情。

セルジオのことを考えるたびに胸の奥で蠢いていたこの名前のつけられなかった、何か。

今ようやくわかった。

「……僕はずっと貴方が羨ましかったのか」

それは、羨望だった。

「なのはが空に戻ることを疑わず、なのはに前へ進むことを疑われない、貴方のことが羨ましかった」

それは、なのはが背中を守る自分へ向ける信頼とは違うものだと、ユーノは感じていた。

なのはがユーノへ向けるものは、振り返って微笑んで勇気づけるような、そんな『後ろにいる誰か』へと向けるもので。

頼ってくれるけど、寄りかかってはくれない。

なのはがセルジオへ向けるものは、遠いどこかを一緒に見上げているような、そんな『隣にいる誰か』へと向けるものだった。

頼るのではなく、信じていた。彼ならこうすると、心の奥でわかっていた。

隣にいるから教えられるものが、見せられる景色があると、三課に配属されて変わっていくのはを見て、そう気づいた。

ようやく答えられる。

ずっとセルジオ・アウデイをどう思っていたのか、その答えが出せる。

「僕はずっと、なのはの隣なに立たてる人になりたかったんだ」

きつと、ユーノ・スクライアは、ずっとセルジオ・アウデイになりたかったのだ。羨ましかったから、知りたかった。

自分じゃなれないと理解していたから、助けに来た。

なのはにとつて必要な人だと、そう思ったから。

ユーノがセルジオを見つめる。

もう先ほどまでの怒りは瞳にはない。

ただただ水面のように静かな瞳で、セルジオを見つめている。

「なのははあなたを信じてるんだ。誰かを助けてきたから助けてもらえる、貴方を」
だつて。

「人が人に向ける信頼は、お互いに向け合つて、託し合うものなんだから」

「……あ」

信じて頼る。

それは一人だけでは成立しないものだ。

誰かがいて、誰かを信じる。そして頼る。

そうしたとき人の間に関係が生まれ、それが目に見えない確かな繋がりとなる。

そして、それは片方だけで成り立つものではない。

お互いに自分の気持ちを託し合うことが大事なのだ。

セルジオはずっと「色んな人に助けられてる」とそう思っていた。

でもそれが「セルジオがその人を助けたから」、その感謝を信頼という形で返していくれたのなら。

セルジオ・アウデイはずっと助け合っていたのではないだろうか。

与えられるだけではなく、奪うだけではなく——セルジオもまた誰かに何かを与えられていたのでは、ないだろうか。

「貴方はずっと、誰かを助けてきたからこそ、周囲に助けて貰える人間だった。

貴方が変われないのなら、その部分だってまだ貴方の中にあるんだよ」

ユーノがセルジオの手首を——ずっとセルジオにエクリプスを供給し、同時にその負担をマルチタスクで抑えてもいるゼファアを、握る。

セルジオはエクリプスに感染してから破壊衝動をその膨大なマルチタスクで抑えてきた。

普通ならそんなことはできない。

けれど、セルジオのマルチタスク技能は生まれの段階で「そうあるべし」と作られた故に膨大で高性能。

それは普通の人間が肩代わりするにはあまりにも負担が多い。

けれど、たった数年で無限書庫を整理し、司書長まで上り詰めたほどの情報処理能力が高いユーノ・スクライアは、そのセルジオのマルチタスクに並ぶほどのマルチタスク技能を発揮できる。

高町なのはが信じる人だった。

心の奥底で、羨ましいと思っていた人だった。

自覚のないまま、憧れていた理想の形を見せてくれた人だった。

だから、ユーノ・スクライアは託した。

高町なのはを助けに行ける、その可能性を。

「だから、思い出せ、セルジオ・アウデイ」

そして、ユーノはエクリプスの破壊衝動を抑える無数のマルチタスク、その全てを一時的に肩代わりした。

「——あ」

脳が澄んでいく。

ずっと奪われていた思考の主導権が返ってくる。

自由になったマルチタスクが自分のために使える。

エクリプスの負担のせいで忘れてしまった記憶を、思い出すために、マルチタスクを

使つてやれる。

それは、数年ぶりに勝ち得た『セルジオ・アウデイ』の束の間の自由。

「……………」

気がつけば、セルジオは記憶の中にいた。

それは三課での思い出の中だった。

かつて手の中にあつた幸せな日々だった。

クイントがいて、メガーヌがいて、ゼストがいて、仲間がいて、なのはがいた。

そしてその中に、セルジオもいた。

——セルジオ君ー、この仕事なんだけどきー。

——クイント、貴女またセルジオ君を頼つてゐるわね。たまには最後まで自分でやつて

みなさい。

——隊長が差し入れ買ってきてくれたぞ！ あの駅前のお高いやつ！

——よっしゃあ！ 早い者勝ちじゃの！

——ちよつと、走つたら危ないですって！ あ、高町はどうする？

——なのは……じゃなくて、私はそうだなあ……。

それをセルジオは俯瞰するように見つめている。

もう取り戻せない幸せのカタチ。

記憶は移ろう。

気づけば記憶の中のセルジオはクイントと模擬戦をしていた。

——ふー、まーた私の勝ちね。どうする？ 今日はこの辺にしとく？

——まだ、まだ……！ もう一本お願いします！ 今日こそ繋アシチエイシナックルがらぬ拳を完全にものにしてみせます！

——その意気やよし！ ま、でもあんまり肩に力を入れすぎないようにね。貴方はそのままで十分人を助けられるんだから。

——そうでしょうか。俺はまだまだ力不足を痛感するばかりで。

——そんなことないって。だってあなたはギンガとスバルを助けられたでしょ？

感謝してるのよ、あなたのおかげで私は娘たちと会えた。

ありがとうね、とクイントに頭を撫でられていた。

この頃はまだ、セルジオの身長はクイントとそれほど変わらなかった。

そういう、忘れてしまっていた日々があつた。

再び記憶は移ろう。

今度は記憶の中のセルジオは子守りをしていたルーテシアを、メガーヌに抱き渡すところだった。

——ありがとうね、今日は助かつちやつた。

——お礼なんてとんでもないです。メガーヌさんにはお世話になりましたから。このくらいなんでもありませんよ。

——こら、ちゃんとお礼の言葉は受け取りなさい。人が良いのは貴方の取り柄だけど、そういうところは良くないわよ。

——う、き、気をつけます……。

——わかればよろしい。そうだ、お礼ついでにこのあとうちで夕飯を食べて行かない？ たぶんルーテシアも喜ぶわ。

——そ、そんなこと俺なんかが申し訳ないです。

——あ、また。そういうところだつて言つてるのよ。ほら、もう言い訳は聞かないから早く荷物まとめて来なさい。

姉に叱られるように、セルジオがすごすごと荷物をまともに戻る。

背中越しに、メガーヌの呆れ混じりの、でもやさしさのある「困った子ね」という独り言が聞こえていた。

記憶は移る。移り続ける。忘れて、臆げになった日々をセルジオは思い出し続ける。

——ありがとな、セの字。今日はお前がいたからウチの部下どもも無事だった。

——隊長さん！ この前は助けてくれてありがたうですよー！

——ありがたうセルジオ君。この前リインちゃんを助けてくれたんでしよう？

——ありがとうセルジオ。君のおかげで犯人を捕縛できた。

——パイセン、ありがとうございました。おかげでラグナを撃たなくてすんだ。感謝しても、したりねえ。

——セルジオ先輩、あの時は砲撃からリインを守ってくれて、ほんまにありがとうございました。

忘れてしまっていた記憶、臃げになった記憶の中にはたくさん思い出があった。

大切な人たちに信頼されている、何気ない毎日があつた。

たくさん言ってもらえた、「ありがとう」があつた。

「ああ……そうだ、こんなことがたくさんあつたんだ……俺のいままでは、誰かにありがとうと言ってもらえる、そんな意味があつたんだ……」

ずっと奪つたと思つていた。失つたと思つていた。

その人の代わりに生きなきやと、そう思つていた。

「けど、きつとそれは違うんだ。俺は代わりに生きることを求められたんじゃない。

託されていた、あの人たちの想いを、受け継いでいたんだ」

確かにゼストも、クイントも、メガーヌも、仲間たちも、母親だつて死んだ。

でもそれが終わりなのではない。

死んでいった人たちは想いを託したのだ。

自分より後に生きる人たちを、セルジオ・アウデイを信じて。

セルジオがセルジオらしく生きていく中で、その意志を受け取ってくれればいいと思っていた。

手のひらからこぼれ落ちてなんかいなかった。

手の中に残っているものに、気づいていなかったただだった。

そして残ったものが何かを、いまの自分ならわかる。

だって思い出せる。みんなの想いが、言葉が、この胸にあることを。

ずっと、なくしてなんかいなかった。

誰かを信じるから信じてもらえる。

信じてくれる人たちなら、同じように信じていい。

だって、セルジオ・アウデイはずっとそうやって生きてきた。

それを、記憶の中の人たちの「ありがとう」で理解した。

「俺の手の中にはこんなにもまだ、残っているものがあつた」

記憶の中からセルジオが帰ってくる。

気づけば目の前にはユーノが荒い息でセルジオを見上げるようにしてそこにいた。

セルジオはユーノに向き直ると、深く頭を下げる。

「空尉、なにを……」

「ありがとう。貴方のおかげで、思い出せたものがあつた」

ユーノが驚いたように目を丸くしたが、すぐにふつと表情を和らさせた。

「きつと、なのはに必要だと思つた……いや、それだけじゃない。」

なのはの信じる貴方なら、僕のなりたかつた貴方なら、立ち上げられるんじゃないかつて、そう思つた」

そして何かに耐えるように拳を握り、自分の気持ちをゆつくりと言葉にする。

「もし、本当に貴方が変わつてないのなら。まだなのはの信じる貴方が残っているのなら。」

僕に、見せて欲しい。貴方の戦い方を。僕の理想を、僕の手の届かなかつたものを」

ユーノが立ち上がり、セルジオに問う。

「まだ空港火災は終わつてない。貴方の妹は攫われたままだ。なのははゼスト・グランガイツと一人で戦つてる。」

それでも、まだ立てますか？」

ユーノに手を差し伸べられ、セルジオは自分の手のひらに視線を落とす。

あの日、なのはを傷つけた手。仲間を守れなかつた手。

ジェイルの策略に絡め取られ、誰かと繋ぐことができなかつたその手を。

セルジオがユーノを見上げると、ユーノは澄んだ緑の瞳でただ黙つて、セルジオの答

えを待っていた。

それは信頼だった。

ユーノの瞳が「まだ僕らにはやれることがある」と、そう語りかけてきた。

迷いは消えていった。

セルジオがユーノの手を掴み、立ち上がる。

そして遠い空港を見つめ、壊れたガジェットドローンを見渡し、最後にゼファーに目を向けて、ユーノに向き直る。

翠と赤の混じった瞳の奥で、白い光が走る。

「ユーノ司書長、あなたに頼みたいことがある」

ミッドチルダ郊外の廃棄都市。その一角にある研究所で、ジェイルはことの成り行きを見守る。

「……しかし、セルジオ君がガジェットを壊したせいで通信ができなくなったのはもったいなかったな。ゼファーへ中継して通信が送れない」

つまらなさをそうに手元の機器を操作して、空港のゼスト、海上のガジェットドローン、意識のないルーテシアなどの映像を投影して並べる。

「ゼスト・グランガイツは想像以上の仕上がりになった。ウイルスコードのおかげで技術に翳りはなく、その上ユニゾンデバイスの火力の底上げまでできる。おそらく空戦S十以上はあるだろうね」

モニターに映るゼストが高町なのは追い詰めていくのを眺めて、深い笑みを浮かべる。

最高評議会に言われての実験だったが、思った以上に満足できるものとなった。

この分なら他の魔導師にもこうした技術を使ってみるのも面白いかもしれない。くつくつと笑うジェイルは、ふと隣にウーノがやってきているのに気がつく。

「ドクター、研究所に侵入者です。おそらく、ルーテシア・アルピーノを取り返しにきたものかと」

「ほう………ということは、彼かい？」

ウーノが頷き、手元の端末を操作し、研究所の監視カメラの映像を映し出した。

「……なるほどね、君はあちらを捨てたわけだ、セルジオ・アウディ」

そこには、陸の制服を身につけた金髪の青年が一人、立っていた。

今を戦う者たちへ

スカリエツティの研究所で、侵入者を追うガジェットドローンが起動する。

「状況はどうだい」

「いつの間にかゲート付近の監視カメラの映像がダミーに差し替えられていました。先ほどルーテシア・アルピーノを捕らえている部屋付近に探知魔法の形跡もありましたから、もしかすれば」

「既にルーテシアの居場所はつかまれている、か。いや、わざと見つけやすくしていたとはいえ優秀じゃないか。」

「いや、エクリップスで擬似的に魔法を代用できる今のセルジオ・アウデイ君ならその程度できて当然なのかな？」

「ジェイルはモニターに映る生体反応とそれを追うガジェットドローンの群れをおもしろそうに見守る。」

エクリップスを起動したセルジオは数十体のガジェットをもの数分でスクラップに

してしまった。しかしそれは数分だったから成り立ったことでもある。

ガジェットが二倍の数がいなければセルジオがギリギリ正気を保っている間にも全滅はさせられなかったであろう。

いま起動しているガジェットドローンはセルジオのもとに送った完全なAMF発生器付きのものではなく、その一つ前のバージョンの断続的にAMFを発動させるもの。運用としては数体で互いの穴を埋め合い、数の力で相手を封殺するのが目的となる。性能としては5体もいればミッドチルダ式のAランク魔導師を一方的になぶり殺せるであろう。

そしていま、そのガジェットドローンおよそ百体以上が一人の侵入者のために研究所から逃げ道を消すように動き出していた。

「はあ、はあ、はあ……」

荒い息で走る、走る、走る。

探知魔法ですでに周囲がガジェットドローンに囲まれつつあるのは理解している。

この数のガジェットドローン相手に囲まれば成すすべはない。

特にいまの自分はなおさらそうだ。

「ふう……」

探知魔法を起動し、いまだガジェットドローンのいないルートを模索する。

見つけ出した道を細心の注意を払って進み、そしてついにルーテシアのいると思わしき部屋に到着する——が、部屋の前には当たり前のようにガジェットが陣取っていた。

その数は凡そ十体ほど、無理をすれば戦って無理やり通れなくはないだろうが、帰りのことを考えれば得策ではない。

「なら……」

侵入ルートを再設定。条件に合う場所を搜索。発見、再び息をひそめて移動して、目的地のルーテシアの部屋、そこから一つ通路を挟んだ向かい側の部屋に滑り込んだ。

壁に手を付けて、魔法を起動。彼我の距離、目的地の座標を取得し、魔方陣を構築する。

「——ショートシフト
短距離転移」

世界から存在が消失、光に包まれた体がマイクロセカンド百分の一秒のラグを以て、再び三次元世界へと実像を結んだ。

目の前にはぐつたりとしたルーテシアがおり、近くには甲殻が傷つき細かに羽を振るわせている。

どちらも衰弱しているが、まだ無事なようだ。

小さく息を吐いて近づこうとしたとき、突然背後から拍手の音が高く響いた。

「いやはや本当にたどり着くとはね、さすがだよ。おめでとう」

瘦躯を白衣で包み、無造作に伸ばされた紫の長髪の向こうでは、金の瞳が狂気に輝く。

『無限の欲望』ジエイル・スカリエツティ。

いつも通り愉しげに、まるで演劇を見に来た休日のような紳士のような登場だった。

「……ジエイル・スカリエツティ」

「やあ、久しぶりだね」

いやそれとも、とジエイルが瞳を細めて指を鳴らす。

「はじめまして、というべきかなユーノ・スクライア司書長」

するとジエイルの背後にいたガジェットの一部が瞳を光らせ、AMFを発動させた。

すると、いままでセルジオ・アウデイの姿をしていた彼の姿が、揺らぐ。

金髪は今までよりも暗く、瞳は赤混じりの翠から緑に、陸の制服からどこか部族的な

バリアジャケットに変わっていく。

そこにいたのは見間違えようがなく『セルジオ・アウデイ』ではなく、『ユーノ・スク

ライア』だった。

「……気づいていたんですか」

「流石に最初は騙されたさ。君の変身魔法は完璧だった。見た目はもとより魔力反応の偽装までほとんど差異はない。スクライア一族は変身魔法の名手でもあると聞いてい

たが、なるほどどうやら嘘ではなかったようだ」

微笑むジェイルとじり、と一歩引くユーノ。

ユーノは探知魔法に続々とガジェットドローンが部屋の前に集まりつつあるのを感じながら、無数の魔法を組み立てていく。

短距離転移——座標の取得に使う探知魔法がAMFのせいで研究所の外まで届かない。長距離転移なら一気に逃げられるかもしれないが、そこまでの時間的猶予を与えてくれるか。

結果——発動までの準備時間でガジェットに近づかれれば終わりだし、そもそもAMFには無効化される可能性が高い。

ならば直接戦闘——ガジェットと自身の相性の悪さは先ほど痛いほど思い知った。

(……ダメだ、一か八か長距離転移を使うにしても、時間がない。なんとか、稼がないと) ユーノが脱出の算段を立てながら、ジェイルへとひとつの問いかけをした。

「自分で言うのもおかしい話だけど、僕の魔法にミスはなかったはずだ。でもあなたは僕がユーノ・スクライアだと分かった。なぜなのか聞いても」

「ああ、君の魔法は完璧だった。ただ、それ以外のところでひとつだけミスをしたのさ」ジェイルが丁寧に、出来の悪い生徒に答え合わせをする教師のようにユーノに語る。

「ルーテシア・アルピーノの部屋の前に来た時、ガジェットを見てわざわざルートを変更

したね。あれは実にセルジオ・アウデイらしくなかった」

「……それだけ？」

「そうとも」

ユーノが呆気にとられたように言葉を失った。

「セルジオ・アウデイは欲望の怪物だ。他者救済のシステムだ。そんな彼が『目の前に救える命がある』と認識した時迷わない理由がない。私が彼に与えた天秤にかける状況とは違う。目の前にあるただ一つの命、それがこぼれることに彼はひどい嫌悪感を抱く。それだけは認められない、とね。」

あとは簡単な推理と推測だ。セルジオ・アウデイに変身できて、ルーテシア・アルピノーを助けにこれる、それでいてああいう状況で冷静に必要な魔法を選択できる人物。まあ彼の交友関係の中では君だけだ。君はさっきまで彼と一緒にいたようだしね」

もつとも彼に殺されていなかったのは驚いたが、とジエイルは付け加える。

（それだけで僕のことまで……いや、それよりもこの人は……）

「く、くく、驚いているのかな、私が挙げた理由があまりに感情的だから」

セルジオらしくなかったから疑った。セルジオらしくなかったから、誰ならああいうことをするか考えた。そして一つの答えを導き出した。

それはまるでセルジオ・アウデイのことを、信じているようだとすら、思える。

「私に言わせればそう感情的でもないのだがね。なにせ、私と彼は存在として非常に近い。作られた命。他人から与えられた生き方。満たされない無限の欲望を抱えた人ではない」

最高評議会に生まれた段階で欲望を植え付けられた。

『欲を満たすため望むままに生きろ』と言われ、命じられたままに、望まれたように違法な研究に手を染めて、その結果無数の技術を生み出した。

それでも器は満たされず、常に自分の無限の欲望を満たすために生きている。

それが、ジェイル・スカリエツィ。

違法研究者に生まれた段階で模倣することを植え付けられた。

『人を救え』とそう言われ、言われたとおりに母親の模倣を始めた。周囲は彼にそれを求めなかったが、それでも彼はその道を進んできた。

それでも代わりになることなどできず、ずっと叶うはずのない願いに手を伸ばしている。

それが、セルジオ・アウデイ。

生まれは同じ。育った過程はまるで別。けれど結果は同じ。

その在り方の違いを、ジェイルはかつて自分を『先天性の無限の欲望』であり、セルジオを『後天性の無限の欲望』であると表現した。

「どちらも同じ、『人間ではない』と、ジェイルはそう言った。

「故に、私だから、私だけが彼のことかわかる」

一瞬、ユーノの瞳にジェイルの表情に何かよくわからないものが浮かんできた気がした。

けれどそんな揺らぎは次の瞬間には消えてしまつて、ジェイルはいつも通り楽しそうにつづけた。

「この状況も想定の中の一つだ。あの空港にはゼスト・グランガイツがいて、無数の助ける人間がいて、そして高町なのはがいる。ならば彼があちらを選ぶのは道理だ。命の数ではあちらに天秤が傾き、管理局員のルールから考えてもいくべきなのはあちらだ。

大方君はそんな彼を見てられずに助けに来た、というところかな」

答え合わせを終えた教師のようにジェイルが語り終える。

「そろそろ長距離転移の準備はできたかな、ユーノ・スクライア君」

「――」

「ああ、黙つていなくてもいい。時間を稼ぎたくてわざわざこうして話を始めたんだろ
う？ そんな勿体ぶつたところで意味もない。だから、逃げたかったら逃げたらいい。
ただし、一人だね」

「なんだつて……?」

ユーノが眉を寄せる。ルーテシア・アルピーノは手が届く距離にいる。わざわざ一人で転移する必要なんてない。

だが、そんな考えをジェイルはあざ笑うように打ち砕く。

クアットロ、とジェイルが低い声で指示を出すと、ユーノの背後のルーテシアとガリユーの姿が掻き消えた。

「これは……」

「私の作品の一人のものでね。魔力痕跡はおろか、その存在さえも偽装できる。優秀な能力だよ」

「ルーテシア・アルピーノがここにいるというのも嘘だったのか」

「いいやそれは本当さ。この研究所のどこかにはいるから探したければ探すといい。

最も、君がこのガジェットの群れから逃げられるのなら、だがね」

ジェイルの背後で百体近くのガジェットが蠢いた。

この群れを乗り越えていくことなど到底できないことは、わかりきっていた。

「これがセルジオ・アウデイの選択の結果だ。妹を捨てて、無数の命を救うことを選んだ。父のもとに行くことを選んだ。故に彼は、守りたかったものを再び失う」

ジェイルが踵を返して、部屋から出ていく。

「……やっぱり、あなたは全然彼のことをわかってない」

その背中に向けて、ユーノは言葉を発しするとジェルが足を止めて振り返る。金色の瞳は細く、まるで三日月のようにユーノを睨める。

「何……？」

ジェルは瞳がただ静かにユーノを見つめる。けれどユーノはひるまずに、毅然と言
い放つ。

「捨てたんじゃない。彼は——セルジオ・アウデイは何も捨てないために、僕に任せる
ことを選んだんだ」

地上本部、その執務室の窓から空が紅く染まるのが見えていた。

「まさか、この状況で私に動くなというのですかっ！」

「勘違いするなレジアス。動かないのではない、お前は別件を引き受けるのだ」

『南方で現在偶然違法魔導師が市街地で犯罪行為を行っているという情報が入った』

『付近には管理局地上本部の武装保管庫もあり、緊急度はこちらも高い』

「ですが、空港では……！」

『あちらにはあと二時間もすれば通信障害も落ち着くことになっている』

『それにいくつか秘密裏に確保しておきたいロストログアがある。あと二時間はあの空
港火災は終わってはならないのだ』

『わかっているな、レジアス。これも将来的に地上の平和と安寧を守るためだ』

『無数を救うための小さな犠牲、それを許容する勇氣を持って』

『貴様が、真に地上のことを思う『英雄』であるのなら』

『そのために我らは貴様を見出し、アレも託したのだから』

『理解しろ、レジアス』

通信が切れ、執務室の中に光が戻る。

「……儂はこの件に手を出すな、そういうことか」

「中将、最高評議会は……」

「いやそれは今はいい。何か連絡が来たのであろう、オーリス」

レジアスが椅子に倒れこむように座り、こめかみを抑えた。そして机の引き出しの一
つを見つめて、すぐに首を振った。

そんなレジアスに、補佐官であるオーリスが今しがた送られてきた情報を報告する。

「先ほどクラナガン南部で違法魔法使用が確認されたと連絡が来ています。本局の首都
防衛隊はいま空港に向かっていますから航空魔導隊に話が回ってくるかと思われま
すが……」

何やらオーリスが言いよどんだ。

「どうした、何が気になる」

「あまりに不自然です。報告ではA Aランク相当の魔導師集団とされていますが、魔力の反応を見る限りそれほどどの集団にも思えません。それに次第に市街地からも離れているようにすら思えます」

「……どうやら最高評議会の仕込みのようだな」

恐らく空港火災を終わらせないための理由づくりなのだろう。

自分たちの手足として動くレジアスが空港に行かない理由、ともすれば『ただの火事』よりも大きな事件を起こし、そちらを解決した功績でレジアスに箔をつける、そんなところだろう。

いやもしかすればこの状況もまた、レジアスが勝手に動かないための首輪にするつもりなのか。

「……オーリス、儂が指揮を執る。航空魔導隊に連絡を入れろ」
馬鹿な考えだ。

レジアスは既に親友を死なせている。親友の部下を死なせている。戦闘機人計画という人の命を軽んじる計画を黙認した。

今さら、レジアス・ゲイズが最高評議会から手を切れるはずがないのに。

「…………？」

不意に、執務室のドアが叩かれる音がした。

傍らのオーリスが眉を寄せ、扉の向こうにいる人物を確かめようとするが、それよりも早く扉は開かれた。

そして、『彼』は一步踏み出し、レジアス・ゲイズの前に立つ。

「…………セルジオ」

見慣れた顔の、親友の忘れ形見ともいえる青年がそこにいた。

第二十話 「今を戦う者たちへ」

高町なのはのデバイス、『レイジングハート・エクセリオン』は戦闘用形態は大きく分けて三つ。

ひとつめは射撃、誘導弾特化のシューティングモード。

ふたつめは砲撃特化のバスターモード。

最後に、フルドライブモードであるエクセリオン——ではなく、エクシードモード。

かつてレイジングハートにはエクセリオンモードという、カートリッジの使用をトリガーに、出力リミッターを撤廃することで爆発的な火力を引き出すシステムが搭載され

ていた。それは射撃、砲撃、切り札である収束魔力突撃^Aなどから、移動用の飛行魔法などすべての魔法を底上げするものだった。

けれどそれはいまだ未完成の部分が大きく、なのはの体に大きく負担をかけてしまっていた。

そんな問題を解決するためにエクセリオンに変わるフルドライブとして搭載されたのが『エクシードモード』。

これは言ってしまうえばエクセリオンモードの低燃費モード。使用魔法を砲撃、A・C・Sに特化することで負担を軽くし、なおかつカートリッジの使用なしでも起動できるようにしつつも、軽くなった負担の分を砲撃の威力のブーストに回している。

負担は前までよりも軽く、けれど火力は以前よりも高く。それが『エクシードモード』のコンセプトである。

だが、本当はあと一つだけレイジングハート・エクセリオンには隠された機能がある。まだ発展途上ながらも、エクセリオンモードの能力を引き継ぐシステムが。

負担を軽く、扱いやすくしたのがエクシードモードなら、これはその逆、負担を増やして火力を増強するもの。

その名を『ブラスタモード』。

『不屈のエース』最後の切り札にして、なのはの限界を無理やり超えさせるもの。

故にその機能はフルドライブ全力稼働ではなくリミットブレイク限界突破と、そう呼ばれる。

そしていま高町なのは、ゼスト・グランガイツを前にして、そのトリガーを引いた。
「デイバイン、バスターあぁー！」

《 Divine Buster 》

魔力の嵐が吹き荒れる。

感知した生体反応へとむけて空港内を飛行していたゼストに、なのはの限界を超えた砲撃が放たれた。

「——」
ゼストは今までと同じように炎熱付与した槍でそれを切り払おうとするが、できない。

先ほどまでとはまるで違う魔力の収束密度に反対に受け止めた槍の方がきしみ始める。それはまるで天がそのままゼストを押しつぶそうとしているかと思まがうほどの威力。

両者の魔力の拮抗は一瞬、次第に暁色の炎を桜色の光が押し込んでいく。

「——blast」

だが、決着がつくよりも早くにゼストは槍から左手を離し、炎を収束するとそれを簡易的な砲撃魔法として放出。僅かな間だけなのはデイバインバスターを受け止める

ことで、槍を浮かせるとそのまま加速、砲撃の下から抜け出した。

「——ブリッツァクション」

「アクセルシューター！」

ゼストが加速し、なのははそれを速射砲で迎撃する。

だがゼストは周囲に炎熱を纏ったフィールド系のバリアを纏うと銃弾をかわすことなく焼焦がして、なのはへと槍を振り下ろした。

だがなのはもまたそれを読んでいたのかあらかじめ置いておいた拘束盾で槍を拘束する。

盾に受け止められた槍が紐づけられた高速魔法に絡めとられていく——が、ゼストはそれよりも早く槍から衝撃波を発動、拘束を粉々に砕いて脱出する。

そしてついではばかりになのはの脇腹に蹴りを一発叩き込む。

「く、う——」

なのはの細かい体が吹き飛ぶが、壁に叩きつけられる寸前にブレーキをかけて踏みとどまると、休むことなくゼストを追った。

「——」

「——」

両者は激突し、距離を取って、再び加速し、射撃を、砲撃を、魔力刃をぶつけ合う。

その戦闘はまさしく『エース』級。

生半な気持ちで援護しようとするれば、それがかえってなのは足を引つ張ることになりかねないというレベルの魔法戦闘。

瞬きひとつの間に十の魔力砲が飛び交い、呼吸ひとつの間に二十の魔法が行使される。

これがエース。

『一人で戦況を左右しうる』と判断される、管理局における魔導師の頂点。

高町なのははそういう存在だと、いま周囲に認められている。

かつての^ゼエースと、いまの^トエース^ハ。

その実力は概ね互角と言えたが、しかしそれは条件付きのものだった。

(やっぱり、プラスターモードの継続使用はつらいかも)

本来、いま起動しているプラスターモードは短期使用を目的とした機能である。

砲撃を打つ際などに短時間だけ起動し、フルドライブの火力に更に威力を上乗せする。

それが本来の運用方法であり、いまなのはのように魔法の性能全てを底上げするものではない。

なのはだつて、本当はここまでの無理をするのは望んでいない。

ブラスタモードの負担のせいで胸の奥のリンカーコアがずきずきと痛むし、頭は風邪をひいた時のように熱っぽい。どれほど息を吸っても肺に酸素が届いてないと思えるほど苦しい。

でも、ブラスタモードに頼らなければなのははゼストと対等に戦うことすらできない。

いまのゼストは、生来の槍術、戦闘経験に加えて、いまはユニゾンデバイスの炎熱による多彩な魔法まで使ってくる。

同じエースという立場を持ちながらも、ここまで無理してようやく互角。

それほどまでに、ジェイルに調整されたいまのゼストは強かった。

(今のままじゃ、押しきれない。それよりも早く、私の魔力が底をつく)

ブラスタモードを起動してから五分経った頃、次第になのはの顔に白みが増し、額には玉のような汗が浮かび始める。

(もつと強い一撃がいる。ゼスト隊長の技術での切り払いを、炎熱の防御をまとめて打ち砕くようなそんな威力の一撃が)

死力を尽くしても、限界すら超えてもまだゼストを倒すには力が足りない。

いまの高町なのはでは、ゼスト・グランガイツを止めきれない。

「まだ、諦められない。だって助けられてない。私があの日誓ったものはまだ——！」

それでも心は折れない。

目の前の人を救おうという意思はなくならない。

不屈の心は、いまでも彼女の心の奥で燃えている。

例え勝ち目が見えなくても、無くならない想いがその胸にはあった。

「——っ」

ゼストとの戦いのなか生まれた僅かな余白。再びゼストがなのはへと襲い掛かるまでの数秒の猶予。なのははその中で、自身のデバイスへと語り掛ける。

「レイジングハートおねがい。あとすこしだけ、私の無茶に付き合って！」

《Let, show our "full power"。》

「うん、行こう！」

がしゃん、とマガジンが装填される。

「ブラスターモード——リミット2！」

不屈の心が、また一段、限界を超えさせる。

杖を構える。照準は今まさにこちらに向かつて来ようとしているゼスト。

《

The first bullet can always be prevented with

The first bullet can always be prevented with

》

「防がれた、次の瞬間！」

魔力が、集う。

「デイバインバスター・エクステンション」

レイジングハートから収束砲が放たれる。

それをゼストは今まで通り槍と炎熱付与した防御で防ごうとしたが、寸前でこれが一撃で自分を倒しえる魔法だと、判断する。

故に、選択されたのは今までと同じ防御ではなく、いままで一度も行わなかった回避。

「——ショートシフト短距離転移」

マイクロセカンド百万分の一秒の世界からの消失を以て、ゼスト・グランガイツが砲撃をかわし、高町なのはの背後に現れる。

完全な死角からの、完全な不意打ち。振るわれる刃は無慈悲に白い少女へと向かう。

防げない。躲せない——相手が、高町なのは以外ならば、だが。

「——ロック！」

瞬間、ゼストの体が設置型のバインドに絡めとられた。視認もせず、まるでゼストがここに転移してくると確信していたかのように。

「その手は、三課で泣いちゃうくらい食らいましたから。彼と、あなたに」

ふ、と瞬きの間、なのはがさみしそうに微笑み、そして振り返るとレイジングハート

の砲身をバインドから抜け出そうとしていたゼストへとむけた。

「ディバインっ！ バスターアアアア！」

「……セルジオ」

レジアスの前に、セルジオ・アウデイがいる。

親友の忘れ形見、自分が切り捨てることを、見捨てることを選んだ命が。

「レジアスさん」

セルジオが前へと進もうとすると、レジアスとセルジオの間にオーリスが割り込んだ。
だ。

「セルジオ一尉何を考えているのですか、いまは緊急時で——！」

「すみませんオーリスさん、緊急時なのは理解しています。でも、少しお時間をいただき
たいんです」

「何を——」

「よい、オーリス。セルジオに話させろ」

「中将、しかし……」

「よい、良いのだ」

オーリスはレジアスに反論しようとしたが、あまりにもレジアスの声が静かだったせいで何も言うことはできずに、言われるままに下がった。

そして、レジアスはセルジオと向かい合う。

「どうやってここまで来た。空港がああだ。入るには中々に面倒な許可が必要だったと思うが」

「知り合いの転移魔法で近くまで。あとは、まあ三課の権限で半ば無理やり来ました」
「無茶をするな。……いや、そうしなければならぬ理由があったのか」

そうでなければセルジオがここまで来ることにはないはずだ。

そして、いまのレジアスには何となく、なぜセルジオがここに来たのかわかる。

「時間がありません。なので単刀直入にお願いします」

紅と翠の混じった瞳が静かにレジアスを見つめる。

「空港に行つて指揮を執つてください。レジアスさんしかあの場の混乱は納められませ
ん」

予想通りだった。

現場の混乱はレジアスにまで報告は来ている。

なんでも通信機器が軒並みジャミングを食らっており、臨時回線しか使用できない状況だ。しかしそんな状況では陸と海の部隊それぞれが円滑に動けるわけがない。

だからこそセルジオはこうしてレジアスを頼ったのだろう。

事実上の陸の総司令とすら言われ、セルジオとも縁が深いレジアスならばと、そう思ったのだろう。

だが、いまのレジアスにそれはできないのだ。

能面のような表情で、事務的にレジアスは答えた。

「僕はそちらに行くことはできません。クラナガン南部で違法魔導師が出ている。僕はそちらの指揮を執る必要がある」

「それは、レジアスさんが行かなければならないんですか」

「一尉、言葉が過ぎますよ。違法魔導師グループ、それもAAクラスです。中将レベルでないと対応できませんし、末端まで指示は通りません」

オーリスが補足するようにレジアスの言葉を引き継ぐと、セルジオは「わかりました」と声を絞り出した。

そして、小さく息を吐くと、再びレジアスに向き直る。

「なら、代わりに一つだけ質問させてください」

セルジオの周囲の空気が変わった気がした。

この雰囲気には覚えがある。この顔は、いままで何かを決意して、踏み込んでくるときの表情だ。

それが、関係を壊すことになるかと理解した、退路を捨てた人間の覚悟。

「ジェイル・スカリエッティのことを、知っていますね」

その言葉にレジアスは顔色一つ変えなかった。

そう問い詰められる状況は何度も想定したし、それを否定する材料もいくらでも用意してある。

慌てるほどのことではない。そう、誤魔化せばいいのだ。

ずっと、そうしてきた。

偽って、黙らせて、そうやってきた。

だが、言葉が出てこない。セルジオの瞳に見つめられていると、用意してある言葉がどれも薄っぺらく感じてしまう。

こんなこと言いたくないなど、柄にもなく、許されるはずのないことを思ってしまう。そんな様子を感じ取ってか、レジアスの代わりにオーリスが口を開いた。

「当たり前でしょう。奴は広域次元犯罪者、それなりの立場にいるなら知っています。

それにそもそも二年前の三課壊滅の件は貴方からも報告をいただいているのですから私たちが知らないわけ——」

「レジアスさん、知っていますか」

オーリスの言葉をセルジオの言葉が留めた。

そして、ただ静かな瞳でレジアスを見つめる。

感情を表に出さず、問い詰めるわけでもなく、かといって何か確信があるわけでもなく、ただレジアスの言葉を信じて待っていた。

レジアスはほんの少し黙して、それから遠くで燃える紅い空に目をやって、頷いた。「知っている。儂は奴に力を貸していた」

そして、ずっと隠していたその真実を口にした。

「中将何を！ い、いいですかセルジオ一尉今のは」

「良い、もう、良いのだオーリス」

オーリスは必死に取り繕ってレジアスをかばおうとするが、それを止めたのはレジアスだった。

まるで死期を悟った老人のようにレジアスの顔は凧いでいた。いつか、この日がやってくるのを知っていたかのように。

レジアスは椅子から立ち上がると振り返って窓の向こう、クラナガンの市街、遠くで

燃える炎を見ながら続ける。

「セルジオ、『最高評議会』というものを知っているか」

「……管理局の最高意思決定機関と聞いています。ですがもう表立って管理局の経営方針には口を出されることはなく、いまは難事の際の相談役となっている、と」

「表向きはそうだ。だがな、最高評議会はずつと管理局を裏から支配しているのだ。幾人も高官のバックにつき、時には表沙汰にできないようなことも行い、ミッドチルダの平和を維持している。バランスをとっているのだ、彼らは」

窓ガラス越しにセルジオが見つめているのが見えて、レジアスは視線を下に向けた。

地上本部、陸の管理局員たちが守ることを望んだ町並みが広がっている。

そして、小さく息を吐いた。

「儂はな、その最高評議会と通じている。口添えをしてもらっていると聞いてもいい」

最高評議会がレジアスに初めて声をかけてきたのはセピア・アウディ——セルジオの養母が死んだ事件の直後だった。

彼らはレジアスに『地上の安寧を守るために手を汚す覚悟があるか』と問いかけ、レジアスはそれに頷いた。

セピアはレジアスにとっても大切な友人だった。

無茶しがちな後輩で、親友のゼストの大切な女性。まだ小さな息子だった。

セピアが死んだ火災事件はセピアだけではなく、多くの人を傷つけた。

無数の人が家族を、友人を、恋人を、大切な人たちを失った。

そんなこと繰り返すわけにはいかないとレジアスは誓ったのだ。

一刻も早く地上の平和を実現し、かつて友たちと語り合った世界を現実のものにする。

そのためにはならば何でもする。自分の手を汚すことすら躊躇わなかった。

故にレジアスは彼らの言葉に頷き、ずっとその手足となり動いてきた。

「ジェイル・スカリエツティは最高評議会の飼い犬でな。奴は最高評議会の命令をもとに様々な技術を作り出した」

人造魔導師、戦闘機人、ガジェットドローン、それにセルジオの使う『ゼファー』などの一部のデバイス技術。全てジェイルの発明だ。

そして、そうした技術は管理局にも恩恵を与えてきた。

セルジオの手首の待機状態のデバイスを窓越しにレジアスが見る。

「だがその陰でスカリエツティは無数の犠牲を出してきた。人造魔導師の成りそこないたち、その技術を発展させた戦闘機人の実験での犠牲者。

そして、僕は最高評議会に命じられるまま、その後始末をしていた。それは地上のためだという言葉を信じていたのもあったが……、何より僕は作られた命が消費されてい

くことには、問題を感じなかったのだ」

無意識にレジアスは拳を握っていた。

「部隊を動かし、任務を調整し、スカリエッティへと手が届かないように管理局を内側から動かした。時には内部から予算を流し、管理局の研究所と見せかけてスカリエッティの研究を援助した。

ただ命じられるままに、それが何を生み出すかも考えず。

そして、ようやく儂が自分のやってきたことの意味を知ったとき、すべては手遅れだった」

「意味、ですか」

「……お前たちのおかげだよ。三課はずっと戦闘機人や人造魔導師について調査していたらどう、何の因果かな、貴様たちの報告書の中に儂にも知らされていなかった最高評議会の動きがあった」

三課のような末端ではわからなかったかもしれないが、レジアスにはわかった。

だってそれは、間違いなく儂が動かし、もみ消したものだから。

他の誰にもわからなくても、レジアスだけにはわかった。

そうして、『今まで無視してきたもの』を調べ、実際に目で見て、レジアスは全てが遅かったことを知る。

「そこではな、無数の人造魔導師たちが生み出され、実験材料として使いつぶされていった」

レジアスはあの日から忘れたことなどない。

まだ年端もいかない命が無意味に生まれ、搾取され、すりつぶされて、誰にも知られずただ生ごみとして処理されていく姿を。

「罪など何もない、ただそう作られただけの命がゴミのように使い捨てられていた。

そうだ、あれはモノではなかった。儂が守りたかった地上に生きる人と何ら変わりない人間だった」

確かに彼らは愛されて生まれてきたのではない。でも、それでも人として生きていく可能性はあった。

いま目の前にいる青年のように、生きていける可能性だつてあったのだ。

「儂は、ずっと地上の平和を為したかった。

そのためになら自分がどれほど汚れてもいいと思った。その果てに、儂の——俺と、ゼストと、セピアの望んだ平和があるならそれでいいと」

レジアスが振り返り、セルジオの視線を受け止める。

「だが、それが間違いだったのだ。本当に平和と安寧を望むのなら、自分の手を汚す勇氣ではなく、誰かを犠牲にする勇氣ではなく、誰のことも傷つけない勇氣こそ持つべき

だったのだ。

ゼストや、セピアや、そして……セルジオ、お前のように」

それは、懺悔だった。罪の告白だった。誰にも言えなかった後悔だった。

直視できなかった、レジオス・ゲイズのこんなはずじゃなかった現実だった

「俺は、弱かったんだセルジオ。目の前にある甘い言葉に、楽な道を進む誘惑に耐えられなかったんだ」

きつとレジオスには最高評議会の手を取らない選択肢もあった。

ただただ正しい道を地道に一步ずつ進んでいくような、届かない星に手を伸ばし続けるような、そんな選択肢が。

でもそれはあまりにも夢みたいなこと、遠すぎる光で、だからこそレジオスは現実的な判断をした。してしまった。

「いままでの俺の全てが、間違いだった。間違い続けて、それを認められなかった日々だった」

レジオスが最高評議会の手を取らなければゼストはまだ生きていたのか。

セルジオがエクリプスの力を使うこともなかったのか。

ジェイル・スカリエツィがここまで力を持つこともなかったのか。

いま起きている空港火災もまた、起きていかなかったのか。

それともゼストはどちらにしろ自分の正義を信じた末に死んでしまうのか、セルジオが自分の身を犠牲にしてしまう道に進むのか、最高評議会は自分以外の誰かを見出して、どちらにしろスカリエッティに研究をさせたのか。

わからない。

「俺はもう、最高評議会に従い続けるしかない……」

ただわかるのは、レジアス・ゲイズは間違えたということだけだ。

許しを請うように頭を下げるレジアスを見て、セルジオは静かに目を閉じる。

そして、しばらくしてから「わかりました」と言った。

そしてレジアスに背を向けて執務室から出ていこうとする。

「アウディ一尉、どちらへ」

「空港です。まだきつと俺にもできることがあるはずですから」

「魔法が使えないあなたが、ですか?」

セルジオの足が止まる。

「いま現場は混乱している。そのうえで被害は大きく、そもそも戦えないことができることなどないでしょう。それどころかいたずらに現場を困惑させ、足を引っ張るだけかもしれない。それでも、行くのですか」

「……そうですね。オーリスさんの言うことは正しいと思います」

オーリスの厳しい言葉をセルジオは肯定する。
そして、レジアスに背を向けたまま、つぶやいた。

「……俺も、間違いました」

セルジオが口を開き、語り始める。

自分の後悔と、罪と、無くならない間違いを。

「……俺は、あの日間違った。そのせいでたくさんの人を、悲しませた」

雨の中、かつて目指した星を見上げた^{ゆめ}。

いつも見えていた星は見えなくなって、どこに進むべきかもわからなくなった。

それは『人を救う』というセピア・アウデイの夢を裏切ってしまったから。

自分のせいで、多くの人を悲しませたから。

「ルーテシアから、ギンガちゃんから、スバルちゃんから、ゲンヤさんから、恭也さんから、あいつから、たくさんものを奪った」

忘れたことなどない。ずっとずっと、夢に見る。

「それは消せない俺の罪で、過ちです。間違いです」

メガーヌを死なせ、ルーテシアからメガーヌを奪った。

クイントを死なせ、ギンガとスバル、ゲンヤからクイントを奪った。

無事に返すと約束したなのは傷つけ、恭也を裏切った。

あり得た未来を壊してしまつて、『彼女』に一方的に別れを告げた。

「俺の人を救いたいという夢のせいでも人が死んだ。もう何をすべきかもわからなかった。何をしたいかなんて残つてなかった。俺は、俺のすべきことがずつとわからなかった」

はやての、シャマルの、そのほか多くの人の繋がりはほんの少しだけ、セルジオの歩く道を照らしてくれた。

でも、決してセルジオ・アウデイの罪は消えないし、あの日の間違いを悔やまない時などない。

常にセルジオを苛む十字架であり続ける。

だから。

「もう間違い続けたくないんです。同じ間違いをしないために、あの日と同じ悲しみを生み出さないために、俺は戦いたい」

セルジオの罪はなくならない。無くした過去は取り戻せない。

でもセルジオ・アウデイの手の中には、まだ残っているものがあるから。

「俺は、そういうもののために戦いたい。いまを生きる、すべての人のために」

ぎゅ、とセルジオが拳を握り、歩き出す。

「間違えた過去に報いるためじゃない。もう一度、いまを生きる、すべての人のために」

まぶしい、とそう思った。

レジアスにはその思いは純心過ぎて、そんなもの理想に過ぎないと、そう心のどこかが馬鹿にしていた。

でも、だから、だからこそ、レジアス・ゲイズはその純粋な光オモイを美しいと、そう思う。
「待て、セルジオ」

レジアスがセルジオを呼び止める。そして、机の引き出しの奥に目を落とす。
「お前に、渡したいものがある」

空港の中で、レイジングハートを支えにしたなのはが壁によりかかるようにして立っている。

視線の先にはデイバインバスターに吹き飛ばされたゼストが叩きつけられた場所で舞う土煙。

《Master!》

「え、へへ、だいじょう、だよ……」

レイジングハートの声になのはは笑って見せるがとても大丈夫と言える状態ではなかった。

ブラスターステムの長時間使用に、度重なるゼストの攻撃でなのは体は限界だった。

再びブラスターステムを使って無理やり動いたとしてもゼストと戦おうとすれば一分もかからず落とされてしまうだろう。

「でも、なんとか、砲撃は当たった。私の全力、あれで倒せてなかったら……」
がらり、と瓦礫が崩れる音がした。

「……うそ」

土煙の中から、無傷のゼスト・グランガイツが現れた。

「こんなこと……」

思わず言葉を失いそうになるのはだったが、レイジングハートのデバイスコアがピカピカと光り語り掛けてきた。

《 No, take a closer look. The hair color is different. 》

「そっかゼスト隊長、ユニゾン、してたから……その分のダメージが、融合機さんには

あはあ、いったんだね」

ユニゾンデバイスと融合状態になると使用者とデバイスは完全に一体化する。

それは基本、魔力ダメージもまたそうなのだが、どちらか片方が望むのなら一人だけでダメージをすべて肩代わりするということも可能である。

どうやらなのはの全力の砲撃は全て融合機側に受け止められて、そのせいでゼストは無傷で乗り切ってしまったらしかった。

「――」

ゼストが土煙を払ってなのはに向かつて歩みを進める。

「これは、もうひと、がんばり、しなきや、だね……」

心配してくれるレイジングハートにごめんねと言って、なのはが杖を再び構える。

だが、そのとき急にゼストがふらついて膝をついた。

「――」

ゼストは一瞬動揺したように自分の足を見たが、すぐに立ち上がって空港の更に奥、最下層へ飛び去ってしまった。

「ま、まって――！」

なのはがゼストを追いかけようとするが、もう既にゼストはなのはに興味もないのか視界から消えていく。ただ自分にダメージを与えたなのはを脅威には思ったのか、槍か

ら魔力刃を飛ばした。

魔力刃がなのはの頭上に突き刺さり、火災でもろくなっていた天井を崩落させた。

「しまっ——」

なのはが飛行してかわそうとするがブラスタースシステムの負荷のせいで魔力がうまく引き出せなかった。

そして、無数のコンクリートの塊がなのはに降り注いでいく。

「——あ」

避けられない。防げない。なのはでは、もうどうにもできない。

「——加速機動」

ひどく懐かしい声が、聞こえた。

白と紅の混じった暁のエネルギー光。先ほどまで戦っていたゼストとよく似たバリアジャケット。いつからか濁ってしまった翠の瞳。そして、揺れる金の髪。

「……間に合ってよかった」

かつて別れたセルジオ・アウデイが、なのはを抱えて、そこにいた。

「なん、で……」

セルジオはルーテシアを助けに行ったはずだ。彼は選べなくて、だからなのはは代わりに戦おうとした。

なのに、どうして。

「大丈夫か、自分で立てるか」

「あ、う、うん、立てる、けど」

「ならよかった」

セルジオは助けるときに横抱きにしていたなのはを地面に下ろすと、なのはに背を向けて空港の階下へと一歩踏み出した。

「なんで、きみがここに」

なのはがセルジオの背中に向けて問いかける。

「ルーちゃんは、もしかして——」

「違う」

短い否定の言葉と共に、セルジオは半身だけ振り返る。

「何も諦めたくなかったから、ここに来た」

そして、燃える空港の中、なのはとセルジオのデバイスに——この空港にいる本局^{うみ}、地上本部^{りく}を問わないすべての管理局員に、通信が入る。

『総員に告ぐ！ 儂は時空管理局地上本部中将レジアス・ゲイズ！ これから全部隊は儂の指揮下に入ってもらおう！』

野太い声が臨時回線に殴りこんでくる。

『中将!? 現場に!?!』

『というか緊急通信になんで……!』

『いや待てこの人本当に中将なのか? とうかそもそも首都防衛隊の俺たちが陸に従う必要なんてないんじゃない?』

『失礼だが中将、我ら首都防衛隊は首都防衛隊の指揮権があり——!』

『やかましい! 貴様らの言い分など後で聞く! 責任などいくらでも後でとつてやる! いまは一人でも多くの人間を救うことが求められる! いいから儂の言うことを聞け!』

『ちゆ、中将、少し穏便に……!』

『ええい黙らんかオーリス! 貴様はクラナガン市街の指揮に集中せよ!』

いいか、この場に儂より上の階級のやつがいるか? おらんな。ならば儂の指揮下に入れ。儂の指示で貴様らに人を救わせてやる』

あまりに厚顔不遜な物言いで、誰もが言葉を失った。

でもこの通信を聞いて多くの局員たちが、果ては本局所属の首都防衛隊の部隊長ですら『中将には意見できない』と、そう思った。

『よし、文句のあるやつはいなくなつたな。ではこれより指示を出す。これより全局員は臨時回線を開き、それが本部からの指示だと考えよ。救助報告に関しては現場がまず

直属の上司に報告、それから首都防衛隊、陸士部隊の部隊長だけが報告してくることではまず陸士部隊——』

「……レジアスさんは相変わらず強引だなあ」

セルジオがほんの少し苦笑うと、先ほどゼストが飛び去った方向を見つめた。

「ゼスト隊長は、いま地下に……」

「ああ。わかつてる。俺が行くよ」

「私も……」

「ダメだ。お前は、もうゼストさんとは戦えないだろ」

なのはが駆け寄ろうとするのをセルジオは制した。

そんなことない、と否定しようとしたのはをレイジングハートがデバイスコアを光らせて諫める。

ブラスター2までつかったなのはの体は大きく消耗している。基本的な魔法を使うことはできるだろうが、おそらくもう先ほどのように高速戦闘が行えるほどの余力はないことを、レイジングハートは理解していた。

《Please 自take 愛good だcare いof マyourself. ター》
「でも……」

それでもまだ納得できないなのはに、セルジオは言葉をかける。

「お前が行くのはこつちじゃない。出口を失った未避難民が多い。壁を抜ける威力の砲撃が使えるお前の力がある」

それに、とセルジオが続ける。

「来る途中に聞いたがスバルちゃんと言とギンガちゃんがまだ見つからないそうだし、この火災に巻き込まれている。助けてやってくれ、お前の力で」

そしてセルジオは手首を叩くとブレスレットを槍に変形させて、ぶん、と振った。

「その代わりこつちは俺が行く。絶対にあの人を止める」

翠の瞳はかつてのように澄んでいない。紅が混じった色合いはどこか濁っていて、しかし、その瞳の中に白い光が走っている。

「……勝てるの。ゼスト隊長は強かった。それに、いまきみは……」

「勝つ。そして止める。それに今はユーノさんが演算を肩代わりしてくれてるおかげでちよつとばかり無理もできてな」

「へ？　なんでいまユーノ君の名前が出てくるの？」

「んー、まあ色々あったんだよ。いろいろな」

なのはが首を傾げると、セルジオはふつと薄く笑った。

その微笑みが、その誤魔化すような、からかうような表情がああ頃とすごく似ていて、なのはもまた思わず笑ってしまった。

だから、信じることにした。こういう顔をした時のセルジオを信じていた自分の気持ちを思い出して。

「わかった。なら絶対に勝つてね」

「ああ」

なのはが微笑み、セルジオは頷く。

そしてセルジオは飛び去ろうとして、とどまった。

まだちゃんと言っておかないといけないことがあるような気がしたのだ。

でも今は時間がない。悠長に話していられるほどの余裕はどこにもないのだ。

だから、セルジオはなのほに向き直る。

「この事件が終わったら伝えたいことがある。お前さえよければ、時間をもらえないか」
山ほど伝えなければならぬことがあると思つた。

ずっと目をそらしていた間違いを、隠していたことを伝えなければならないと思つた。

「やだ」

「えっ」

だが、なのははそんなセルジオの頼みをサクッと断つた。

そして、出来の悪い子を叱るように腰に手を当てて「あのね」と前置き。

「一方的に言われるのはもうやだ。だから、お話にしよう。私も言いたいこと山ほどあるから」

「——ああ、そうだな。そうだ、『お話』にしなきゃな」

セルジオが頷くと、なのはが満足げに笑う。

「任せた、『高町』」

「任せるよ、『セルジオくん』」

そして、二人は背を向けそれぞれ戦場に向かって飛んだ。

いまだ空に星は見えず。

けれど、二人の胸には不屈の想いが燃えていた。

星を見上げて

「捨てたんじゃない。彼は——セルジオ・アウデイは『何も捨てないために』、僕に任せることを選んだんだ」

ジェイルが眉を寄せた時、巨大な爆発音が響いた。

「来た……！」

ユーノがニツと笑うと、懐の簡易デバイスに通信が入る。

『悪いなユーノ司書長、遅くなった。盾の守護獣ザフィーラ現着した。機械兵の殲滅を開始する』

「ありがとうございます！ まだこの建物のどこかに囚われている女の子がいて——」

『案ずるな。そちらも含めて、既に動いている』

震、と空気が鳴る。

無数のガジェットによるAMFで魔力を断絶する空間に、炎の刃という物理的な破壊がもたらされる。

「——飛竜一閃」

宣言と共に連結刃によって部屋の入り口付近にたむろしていたガジェットドローンがまとめて切り裂かれ、爆発していく。

ガジェットドローンは魔力の結合を妨害するシステム。それは一度魔力から変換されてしまったものは対象とならず、故にこそ物理的な攻撃や、魔力変換資質はその天敵である。

「私を止めたいならこの十倍は持つてくることだ。もしくはAMFの濃度を倍にでもすれば、この刃鈍るかもしれない」

返す刀で爆炎を切り裂いて紫炎の騎士が機械仕掛けの剣を片手に現れる。

「地上本部陸士214部隊、剣の騎士シグナム、我が主と地上本部中将の命により現着した。……貴様がジェイル・スカリエツティだな」

烈火の将シグナム、現着。

「これはこれは、驚きのお客さんだ。一応こういうことは地上本部はしないようになっていたはずだが……これほどの勝手が君たちに許されているのかな？」

「世迷い言を。一般人誘拐の緊急時だ。故に無制限の大規模魔法行使についての許可をレジアス・ゲイズ中将からいただいている。我が主からは手加減するなども。貴様を捕縛することに、我が剣が陰ることはない」

「レジアス・ゲイズが？ ふむ、彼が裏切るメリットはなかったはずだが」

前方のシグナム、後方のユーノに挟まれながらもジェイルの態度は崩れない。

柳に風が吹くように、ただ今の状況を不思議そうに観察していた。

そんなジェイルにユーノは語りかける。

「メリットじゃない。動かしたんだ。彼の想いが、彼の言葉が、彼の生き方が」

「……はは。まさか、それがセルジオ・アウデイだと言わないだろうね」

「言うさ。彼はずっとそういう風に生きてきた。打算じゃない。計略でもない。人を助けてきた彼だから、結果として人に助けられる」

「ありえない」

ジェイルの金の瞳が細くなる。

「彼は私と同じ『無限の欲望』だ。己の手をどこまでも伸ばす存在だ。そうなんだ、そうであるはずなんだ。」

だから、ありえない、救うならば自分の手でのはず。自分の器を満たすための行動の
はず。全ては彼の空虚さを埋めるための行動だ。それ以外の目的で動けるはずが……」

「じゃあ、貴方とセルジオ・アウデイは同じじゃなかったんでしょうね」

——貴様の無限の欲望は、常に貴様の方向にしか向いていない。

いつかのゼストの言葉がジェイルの中に蘇る。

「……はは」

ジェイルの顔から表情が消える。いつもの愉し気で、どこか目の前の人物と同じステージに立っていない超越者のような側面が消えうせ、まるで機械のような無機質さへと変わる。

ともすれば不気味さすら感じるジェイルの態度だが、シグナムは特に揺らぐ様子もなく刃を鳴らした。

「何やら思うところがあるようだが貴様はここで逮捕させてもらう。逃げられると思わないことだ」

「……ああ、そういうえば君たちに追い詰められていることになっているんだね。あまりにどうでもいいことだから忘れていたよ」

「何……?」

「ぱちん、とジェイルが指を鳴らすとふつとジェイルの姿が透けていく。

それと同時に先ほどまでユーノの探知魔法に確かに存在していたはずのジェイルの生体反応が消えていく。

まるで、シルバークーテン演劇の幕が閉じるように、ジェイルの存在自体が消えていく。

「これは、さっきのルーテシアさんに使っていた……」

「娘の能力の一つだね。そもそも私はこの場にもいなかった、というわけだ。まあこういうセルジオ・アウデイが誰かを連れてくるという可能性を考えなかったわけじゃな

「い」

だが、とジェイルの幻影は消えかけながらどこかを見つめた。その方角はまさに今火災が起きている空港の方角だった。

「なるほど、彼は自分だけじゃなくて周囲の全てを巻き込んで、すべてを選んだわけだ。大した欲望だ。まさに、無限の欲望だ。興味深い。興味深いが——」

気に入らない、とそう言い残してジェイルの姿が掻き消える。

「……シヤマル」

『悪いけどそっちは追えないわ。一応探してるけど反応はないし、そもそも幻影を使っているのならスカリエッティ本人は付近にはいないと考えた方がいいわね。もしかしたらその幻影を出してた術者の方は近くにいるのかもしれないけれど……』

『ならばそちらは俺が探そう。俺の鼻が役立つこともあるだろう』

「すまないなザフィーラ。シヤマル、ヴィータはどうだ？」

『はやてちゃんのお願ひ通りクラナガン市街の救援に行ってくれたわ。教導隊は本局の所属だけどレジアス中將の口添えもあつて円滑にいきそうよ』

「そうか。ならば私はこのままユーノ司書長と研究所の中をガジェットを掃討しながら要救助者を搜索する」

『おっとシグナム姐さん俺を忘れて貰っちゃ困りますぜ。』

陸士214部隊、ヴァイス・グランセンニツク、既に生体反応のある場所は見つけてます。

「まあさつきみたいにダミーの可能性もあるんで急いだほうがいいとは思いますが……」

「わかった。ならばそちらに急行する。」

「……悪かったな、お前を現場からこつちに連れてきて。」

相手の戦力が未知数である以上、お前のある程度AMFを無視できる狙撃の腕が欲しかった」

『そういうのは言いっこないですよ姐さん。同じ部隊のよしみじゃないっすか』

通信のヴァイスはいつものように軽く笑って見せる。

『……それに、俺はセルジオ先輩には借りがあつた。部隊長だつて、俺の妹の一件もあつて

『アウデイに恩を返せるのなら返してこい』つて言ってくれましたしね』

「そうか。お前も我らと境遇は同じ、というわけか」

『シグナム姐さんですかい？』

「私の方は仲間だ。ラインが救われたことがあつてな。その借りと、主の頼みでここまで来た。ちょうどミッドチルダにもいたものでな」

『ふ、あの人らしいぜ』

シグナムたちがそれぞれルーテシアの搜索に動き始める。

夜天の守護騎士四人のうち三人が動員されるとはなんとも贅沢な話だが、逆に言えばこのレベルでなければガジェット相手には足りないともいえた。

いくら緊急時とはいえ、保護観察中のシグナムたちがここまで気兼ねなく魔法が使えることは本来はありえないのだが、そこはレジアスが中将という肩書でごり押しをしたようだ。

(……こっちは、任せてくれ。君の守りたいものは、僕らで守ろう)

ユーノが遠くを見つめる。それはジェイルが先ほど見つめていた方向と同じ、空港だ。

(そして——理想を見せてほしい。あなたにしかできない戦い方で)
空は紅く、いまだ星は見えない。

それでも、誰もがあきらめてはいない。

誰もが、戦っていた。

第二十一話 「星を見上げて」

「部隊長C区画の避難完了しました！」

「よし、では次はD区画の陸士部隊に合流しろ。先ほど中将からそこで地盤崩落が起きていると連絡があった」

「了解！」

「部隊長、八神はやて陸尉の広範囲魔法による消火の件ですが……」

「それは私たちでは管轄しなくていいと連絡があった。通信の混乱を避けるため極力部隊単位での報告をメインにする。八神はやて達には本部のレジアス中将が直接指示を出す」

了解、と去っていく部下に頷いた彼は、首都防衛隊の本部にしているトレーラーの窓から外を垣間見る。

そこでは先ほどまで自分のそばにいた少女が大規模魔法を行使している姿が見えた。

頼りになる指揮官が出て、ようやく彼女を一個人、一人の魔導師として使う余裕が出ていた。

「しかし……部隊長よかったですか、これでは自分たちが陸に大きな顔をさせるような真似」

「相手は中将だ。それに責任はしっかりとっている。ならばそれにわざわざ反対

する理由もない」

「そうかもしれないませんが……さすがに急にやってきたセルジオ・アウデイをあれほど好きにさせるのは……」

言われて、部隊長の脳裏に少し前に現れた青年の姿が思い起こされる。

——あいつの、高町なのはとゼスト・グランガイツのいる場所を教えてください。

——助けて。守りたい人たちがいるんです。

——お願いします。

「私は、自らを犠牲にすることで何かを為せると考えている人間が嫌いだ」

ふん、と彼は鼻を鳴らす。

「グランガイツはそういうところがあつた。そしてあの倅もな」

しかし、首都防衛隊、その部隊長としての立場にいる彼は思う。

人間一人にできることなどちつぽけなのだ。

そして、そのために管理局は部隊を作り、連携し、戦っている。

そんなこともわからず一人で死ぬ人間など、労う気すらしない。

死んで誰かを救うことに、いったい何の意味があるというのか。

「だが、あの時奴は私に頭を下げた。助けていから力を貸してください。レジアス・ゲイズ中將の指示を聞いてください、とな。そういわれては断れるものか」

あれは嘘やごまかしなどではなかった。本気でセルジオ・アウデイは力を貸してほしいと言っていたのだ。

あの、一人で何でもやろうとしていた、自己犠牲の化身のような男が。

「奴の目は一人で何かをしようとはしていなかった。だから私もあいつにかけることにした、それだけだ」

そう話して、彼は目を細める。

本部内のディスプレイの中では桜色の砲撃を撃つ魔導師が一人の少女を救い、燃える空港の中を白い光が駆け抜けているようだった。

「ふん、私の賭けもあながち分が悪くはなかったようだ」

そして彼は吼える。

「だがこのまま陸にでかい顔されるのは御免だぞ！ アウデイにいい様にされるだけで終わるなよ！」

星は見えない。

それでもまだ誰も諦めていない。誰もが、自分にできることをやっていた。

融合機アギトはベルカ式の純正ユニゾンデバイスである。

夜天の書の管制人格である初代リインフォースをもとに作られた、ある意味でコピーともいえるリインフォース・ツヴァイとは違う、正真正銘、古代ベルカで作られたオリジナル。

囚われていた違法研究所で付けられた識別コードは『烈火の劍精』。

けれどアギトは自分の過去の過去は思い出せない。度重なる実験で摩耗したメモリーは研究所にいるより前のことはわからなくなってしまうていた。

そんなアギトを救い、主人^{ロード}になってくれたのがゼストだった。

ユニゾンした時の相性がいいとは言えなかったが、ゼストは今の時代に珍しい『騎士』だった。

ベルカ式の優れた使い手というだけではなく、誰かを救おうという気高い在り方が騎士だったのだ。

だからアギトはゼストについていくことを決め、そんな彼が今は光の道にいないことを知り、そんな彼を支えたいと思った。

ゼストは寡黙な男だった。必要以上に話さないし、話したとしても口数は多くないせいであまり何を考えているかわからないタイプだった。

でも、そんなゼストが時折口に出す名前があった。

それは『セルジオ・アウディ』。

聞けばゼストの養子であるらしく、槍の指南もしたことのある人物らしい。セルジオのことを話すとき、ゼストの表情は安らかだった。

そしてことあるごとにアギトに「俺が死んだときは奴を頼れ」とも言った。

でもアギトはそれが面白くなかった。だってアギトのロードはゼストなのだから、どこまでも一緒に行きかけたかった。それが融合機というものだし、アギト自身の望みでもあった。

だって、アギトにとって、ゼスト以上の騎士などいるはずがないのだから。

「いつ、つ……」

瓦礫の中でアギトは目を覚ました。

「ここは……それに、旦那は……」

記憶がはつきりしない。体はなんだかかすきずきと痛むし、そもそも近くにゼストがない。

「そうかアタシ、スカリエッティの野郎に体をいじられて、操られた旦那と無理やりユニゾンさせられて……」

そして、機械のように淡々と人を襲うゼストに力を使われて、一人の魔導師の砲撃魔法に吹き飛ばされた。

どうやら魔力ダメージをゼストの分まで肩代わりした拍子にユニゾンが解けてはじき出されたらしい。

「旦那のところに、いかなきゃ……」

30センチほどの小さな体を震わせながら瓦礫を魔法で押しのとけると、ゼストの魔力反応がある空港階下へと向かう。

だってこのままにするわけにはいかない。ゼストがジェイルに操られて誰かを殺すなど看過するわけにはいかない。

「だってあの人はアタシのロード。ベルカの騎士。そんな人の生き方が、存在が、自分のことしか考えてないヤツに汚されるなんて、許せるはずがないんだ……」

羽を震わせて下へ下へと降りていく。

そして、ゼストの反応が目前に迫ったとき、アギトは槍を手に立つ一人の『騎士』を見た。

ギンガ・ナカジマにとって『セルジオ・アウデイ』は憧れの人だった。

お母さんに弟みたいにかわいがられて、家にご飯を食べに来ることも少なくなかつ

た。

よく顔を合わせていたわけでもなかったけど、たまに家に来たときは学校の宿題を見てください、一緒にストライクアーツの組み手をやったりした。

ちよつとしたことでも「ギンガちゃんはずごいな」って頭を撫でてくれて、普段はかけてない眼鏡の奥で翠の目を細めて微笑んでくれた。

たぶん、初恋だった。

セルジオが家に来ると分かったときはちよつと髪をまとめたり、服に気を遣ったり、あらかじめお風呂に入って置いたり。

今思い出すと浮かれっぷりが恥ずかしくなるくらいで、でも、あの時はそれが楽しかった。

あのやさしく笑う人を好きでいられることが幸せだった。

でも、それもクイントが死ぬまでのことだった。

雨が降る日、セルジオはクイントを助けられなかったことを謝りに来た。

父親のゲンヤはセルジオに「お前のせいじゃない」と声をかけた。妹のスバルはそんなセルジオに怒って、自分の癩癩をぶつけた。

でも、ギンガは何も言えなかった。

母親を守ってくれなかったセルジオが憎いのか、それとも自分と同じようにつらいは

ずと同情したいのか、それともっと別の感情があるのか、ギンガは自分で自分のことがわからなかった。

代わりに、セルジオのことを考えると辛くなった。あの人を好きだったという時間は確かに胸にあるのに、それを表に出そうとすると自分がどうしたいかわからなくなる。

だから、自分も管理局員になることにした。

両親と同じ道を進んで、セルジオと同じ道を進んで、自分みたいに家族を亡くすような悲しい出来事を減らせたなら、いまのこの気持ちが変わる気がした。

クイントが目指したものが、セルジオが何を思つて管理局にいるのかが、わかるような気がしたから。

「みなさん集まってください！」

ギンガが周囲の人たちを集めると、彼らを火の手から守るための簡易的な結界を施した。

「これは……」

「簡易的にはありますが結界です。これで空気や火の手の問題はしばらくは大丈夫だと思えます」

「お嬢ちゃんはどうするんだい。まさか、下層に行くのかい？」

「はい。妹を探しているんです。まだ見つかつてなくて、私が行かなくちゃ」

「しかしこれより下は火の手も強い。いくらお嬢ちゃんが魔導師だと言っても……」
「ご心配なく、私これでも局員候補生ですから。私頑丈ですし！」

それに、もう家族を失うわけにはいかない、そう心の中だけで溢す。

ぐ、と拳を握るギンガは、そのまま心配してくれたおじさんに笑いかける。

「それに、ほら、ここから数百メートルのところに魔導師の反応があります。きっと救助に来た魔導師ですよ」

そう言つてギンガが反応のある方へと目を向けて、ふと違和感を感じる。

(これ、なんか早すぎる気が……)

早いのはいい。だけど、あまりにもまっすぐにここに来すぎている気がする。

おそらく壁や床などを砕いて来ているのだろうが、火災が起きて不安定になっている建物の中ではあまりにも不用心すぎる気がした。

壁を抜くにしてもちゃんと計算して、それで細心の注意を払ってから行うべきことのはず。

ぴしり、と天井にひびが入った。

(———なにか、おかしい)

その時のギンガの思考は言葉にできない。けれど、ただなんとなくこのままじゃダメだと感じて、自分の持ちうる最硬の防御魔法を展開する。

そして、その論理的思考のない行動が正解だったと分かったのは一秒後。

「みなさん伏せて——」

暁の刃が、世界を食い荒らす。

それは純然たる破壊の化身。ただ目の前にある命を刈り取るだけのシステム。そうあれと命じられ、ただそれを忠実に守るだけの傀儡。

「ゼストさん、なんで——」

無限の欲望に操られたゼスト・グランガイツが、天井を砕いて現れる。

彼はそのまま加速すると眼前の生体反応の群れに槍を振るい、ギンガのバリアに激突した。

「くっ、アアッ！」

ギンガのバリアとゼストの槍とが競り合い、ほどなくしてバリアの方に細かな亀裂が入り始める。あまりの圧にギンガの膝が折れて地面について、そのまま押しつぶされそうになる。

「だ、め、だ……」

いまギンガの背後には結界に守られた人々がいる。

このままバリアが壊されてしまえばこの破壊の嵐はそのまま命を食い荒らすだろう。

それだけは、許されない。

ギンガが自分の後ろにいる人々を見る。自分を心配してくれた男性が、我が子を抱いた母親が、自分を心配そうに見つめる子どもがいる。

この人たちを守らなきゃ、という思いがギンガの体に力を与える。

「や、ああああっ！」

戦闘機人の体の限界の膂力を以てなんとか槍を弾き飛ばすと、ギンガはそのまま構えを取った。

「ゼストさん、あなたはお母さんと——」

底冷えのする機械のような冷たい瞳が、少女と、少女の守る命に狙いを定める。

「——っ、このっ！」

迷ったのは刹那。ギンガは自分たちの命が狙われていることを理解し、困惑しながらも母親譲りのシューティングアーツの右ストレート为数メートル離れたゼストに叩き込もうと走り出す。

だが、ゼストはそれをかわすことなく、槍の穂先でちよこんとつついて逸らした。

ギンガの体が泳ぎかけたが、ウイングロードの上で踏み込んでそのままジャブ、ストレートのコンビネーションにつなげていく。

ゼストはそれを先ほどと同じように最小の動きで全部いなしたあと、槍の柄部分をつま先で跳ね上げて、コンビネーションの隙間、息をついたタイミングのギンガの腹部を

強打した。

「お、ぐっ——」

苦悶の声と共にギンガの体がくの字に折れて、地面を転がり、未避難民を守る簡易結界の前で止まった。

「す、みま、せん……みなさんは、いまのうちに……」

「いやいいんだお嬢ちゃん！ もういい君だけでも逃げなさい！」

「そんな、こと、できる、わけ……」

ふらつく足で立ち上がろうとしたギンガの首筋に音もなく刃が添えられた。

みれば、いつの間にか目の前にゼストがいた。数メートルあった距離は一秒もかからず消え失せてしまっていた。

「——」

ゲームセットだ。ギンガに勝てる相手ではない。ギンガはまだ若く、それ故にゼストに追いすがれるほどの経験も、想いもない。

（——おかあ、さん）

暁の刃が肌を食い破らんと迫る。

ギンガは思わず目をつぶって、そして——もう一つの暁の光が彼女を包む。

「——よく頑張った」

ゆっくり目を開くと、大きな背中が見えた。その人は昔ギンガが憧れた人で、近づきたいって思った人で、変わってしまったと思った人。

彼は槍をはじくと、空いた片手でギンガを抱いてそのまま結界内の人々とまとめて短距離転移でゼストの射程距離から逃れた。

「——いてて、ユーノ司書長がいくらかマルチタスク持つてくれてるとはいえ、さすがに負担が重いな」

そういう彼の名前を、ギンガはぼつりとつぶやいた。

「セルジオ、さん」

「無事でよかった。怪我はない？」

「は、はい……」

セルジオの手を取って立ち上がったギンガが、ハツとしたように口を開く。

「セルジオさん実はスバルがまだ見つかってなくて！」

「うん、聞いているよ。そっちは高町に行ってもらっているから安心してくれ」

「なのはさんが……」

なのはの名前を聞いて安心したように息をついた。

なのは本人とかかわりがあったのもそうだが、不屈のエースの名前はギンガに少なくない安心感を与えたいらしい。

「……このまま君たちを地上まで送っていききたいところだけど、少し厳しそうだな」
そう言うセルジオの視線の向こうにはゼストがいる。

いまのセルジオはユーノに一部のマルチタスクを代替してもらうことでなんとかエクリプスを制御できるようになっている。そのおかげでこうして短距離転移や加速をエクリプスの力で使えているが、全力には程遠く、短距離転移ではせいぜい20メートル程度を移動するのがせいぜいだ。

かといって加速魔法の名手であるゼストから逃げ切るのはほとんど不可能に近い。
なら、選ぶべきものはひとつ。

「なあギンガちゃん、この人たちを地上まで守ってあげてくれないか」

「わ、私が？」

ギンガの目が丸くなる。

「うん。君に任せたい」

「で、でも私はさつきゼストさんに手も足も出なくて……」

「管理局員の仕事は敵を倒すことじゃない。人を守ることだ。少なくとも、クイントさんは俺にそう教えてくれたよ」

セルジオが立ち上がり、槍を構える。

「行くんだ。君はクイントさんみたいに人を守るための管理局員になるんだろう？」

ふ、とセルジオが笑った。その懐かしい微笑みに手を引かれるように、ギンガは強く頷いた。

「……はい！ みなさん、ここからは私が案内します！ 無事に地上まで行きましょう！」

ギンガが未避難民を連れて遠ざかっていくのを感じながら、セルジオがゼストの前に立つ。

「ここから先は、絶対に通しません」

ゼストの瞳に感情はない。ただ機械のようにセルジオを見つめる。

セルジオの瞳に動揺はない。ただ凧いだ海のようにゼストを見つめる。

「」

二人が鏡合わせのように武器を構える。

燃える空港の中、がらり、と瓦礫が崩れ、それが開戦の合図となった。

「 加速機動 二」

ゼストとセルジオが加速し、空気が弾ける。

炎の中を飛び回り、加速するゼストに必死に食らいついていくセルジオの脳裏に、ユーノの声がよみがえる。

——僕が一時的に君のエクリプスの負担の一部を肩代わりをする。

——ゼファーに僕のデバイスを通信で連結するから、たぶん基本的な技能くらいは使えるようになる。

——でも覚えておいてくれ、おそらくこれは君がゼスト・グランガイツと一対一で戦うまでのことだ。

——一連の通信妨害はおそらくゼスト・グランガイツのデバイスが起点になっている。そして、僕の通信も彼の近くでは妨害されてしまう。

——だから君が戦う時になれば僕はもう君の負担を肩代わりできない。

——もう一度、君は一人であのエクリプスと戦わなきゃいけないんだ。

は、とセルジオが息を吐く。

(案の定、ユーノ司書長との通信が切れてエクリプスの負担が戻ってきた……！)

ちかちかと視界が紅く染まり始める。

(だからどうした。まだやれるだろ。やれなきやダメだろ。ようやく、わかったんだろ！)

歯を食いしばって、ゼストに肉薄する。

突き、薙ぎ、斬り、持てる全てを使ってゼストに迫る。

けれど、ゼストはそのすべてをギンガにそうしたように、逸らして、躲して、カウンターで上位互換の一撃を叩き込んでくる。

「げほ——」

ぱつとセルジオの視界で血が舞って、セルジオの中のエクリプスの破壊衝動が増していく。

「まけて、たまる、か——！」

それでも、セルジオは必死に理性の細い糸を手放さない。

もう何度も暴走して、やりたくないことをやって、誰かの掌の上で踊らされた。

もうそんなのはごめんだ。だって、いまのセルジオの背中の向こうには守らなければならぬ人がいるのだから。

セルジオの基本を守る忠実な技をゼストは躲して、くるりと手の中で槍を握りなおす。

その動作に見覚えのあるセルジオが、瞬時に回避行動をとろうとしたが、それでは遅すぎる。

放たれたのは神速の刺突。

セルジオの動体視力で追うにはあまりにも速すぎる、武芸者の到達点。

かつてまだ意識があったころのゼストに使われたときは成すすべもなくセルジオは

吹き飛ばされ、エクリプスの暴走に至った、ゼスト・グランガイツの最強無比の一撃。それこそ――。

「――紫電一閃」

ベルカの基本にして秘奥、紫電一閃。

「ぐ、が――」

ゼストの槍がセルジオの脇腹をえぐり、地面に叩き伏せた。

見るのが二回目だったおかげでなんとか致命傷は避けたが、それでも血――のよう
な赤黒い液体がドボドボとこぼれていき、それに比例するようにセルジオの正気を削つ
ていく。

ちかちかちかちか、セルジオの瞳が紅く点滅する。

思考ははつきりしない。紅い思考はしきりに殺せと訴えかけている。もう何のため
に戦っているかもあやふやになってきた。

（もう、いいんじゃないか。好きに暴れよう。我慢する必要なんてない。どうせ俺は近
い未来に死ぬんだ。我慢して何になる？ 殺して、血を見て、ほら、想像するだけでも
楽しそうだ。お前^{おれ}だってそうしたいだろう？）

違う、とセルジオが槍を支えに立ち上がる。

「俺のやりたいことは、そうじゃ、ない。おれは、ずっと、もつと、大切なもののため

……

ちかちかちかちか、紅い光が瞳の中で瞬いた。

必死に理性で狂気を抑えようとするが、もう戦えるほどの意識がセルジオにはない。できるのは暴走しないように必死にこらえて、ゼストを通さないために立つておくだけ。

まるで白昼夢を見るように、セルジオ・アウデイはぼんやりとゼストの前に立つている。

「まもらなきゃ、いけない、んだ……」

それでもセルジオは体を動かした。

想いのままに、ふらりとセルジオがゼストに殴りかかりはするものの、まるで力が入っておらずぺちぺちと体を叩くことしかできない。

そして、ゼストの意識はその攻撃を攻撃だとも認識していなかった。

殴る、というにはあまりにも弱すぎて、何かもつと違う攻撃の予兆だとも考えたのだろうか。

「」

やがてそんなじゃれつきも払われて、力まかせにセルジオの顔が殴りつけられる。

ゴム毬のようにセルジオの体が弾み、壁へと叩きつけられる。

「ま、だ、お、れ、は……」

セルジオを見ててもゼストは全く揺らがない。

ジェイル謹製のウィルスコードを用いた洗脳は完璧だ。

例えばどれほどのが起きててもゼストの意識は戻らないし、手加減するなんて考えもしない。

生前のゼストならば、騎士としてのプライドがあつたが、そんなものは欠片も残っていない。

このままゼストは、セルジオを無感情に殺すだろう。

「悪いがそれはやらせねえよ、旦那」

炎の壁が、現れた。

「――」

一目で魔力によるものだと分かる紫の炎はまるでゼストを包むように広がり、今まさに刈り取ろうとしていたセルジオの命を救った。

そして、炎の中から剣の精霊が姿を見せる。

「お前が、セルジオ・アウディだな」

「きみ、は……」

「アタシはアギト。ゼストの旦那の相棒……だった。いまは違う。いまのあの人は、も

うアタシの知ってる旦那じゃない」

アギトは炎に閉じ込められたゼストに拘束を破壊されかけているのを見て、ちつと小さく舌を鳴らした。

「アタシの力じゃ長くは抑えておけないか」

宙に浮かんだアギトはじつとセルジオのことを観察するように見下ろした。

ゼストを追う中でアギトはセルジオのことを見ていた。

ぼろぼろの体に鞭打って、勝てるはずのないゼストに食らいついて、人を守ろうと足掻いていた。

どんなに頑張っても勝てないと少し考えればわかるだろうに、それでもあきらめずに必死に。

アギトにとってゼスト以上の騎士はいない。もう出会えるはずもない。

だからこそ、知りたい。あのゼスト・グランガイツの息子のことを、ゼストが後を託した人物のことを。

「お前、何でそこまでして戦うんだよ。お前じゃ旦那に勝てねえだろ」

セルジオは紅い瞳を点滅させながらも、ふらふらと立ち上がる。

そして、こぼれそうになる記憶を、心を、必死に掬い取って、ひとつの想いを形にした。

「守りたいからだ。あの人の生き方を、あの人が守りたいと思ったものを。俺の、託されたものを」

紅い瞳の奥で、白い光が燃えている。

まだ終わらないと、叶えたいものがあると、そう叫んでいる。

——アギト、お前を俺の相棒と見込んで頼みがある。

——セルジオのことを、見極めてやってくれ。そして奴がお前の眼鏡にかなうならば、力を貸してやってくれ。

——それが、俺のたった一つの……。

ゼストの最後の言葉がよみがえる。最後の最後、正気を失う前のゼストがアギトに託したたった一つ。

「……なあ、きみ」

セルジオがアギトに声をかけた。

「きみは、ゼストさんの、ユニゾンデバイスだったんだよな」

「ああ、それが何だかって言うんだ」

「じゃあ、俺に力を貸してくれないか」

「はあ……？」

アギトが目を細める。

「冗談か」

「違う、本気だ。本気で、きみに頼んでる」

「……お前、ミッドチルダ式の魔導師だろ。お前じゃアタシを使いこなせねえよ」

「それでも！ それでも……！」

セルジオがふらつく体を叱咤して、再び立ち上がりアギトと対峙する。

「守りたいものがあるんだ。それにきつと、君も、同じものを守りたいと思ってる」

アギトの背後で、炎の壁に亀裂が入る。

しかしアギトはそちらに気もやらず、セルジオの首元に近づくと襟をつかんで、睨んだ。

「お前、本気なんだろうな。旦那を止めたいと思ってるだろうな。マジで、勝つ気にいるんだだろうな」

「……ああ。俺は、ゼストさんを止めたい。そして守りたい。そのために、ここに来た」
アギトの瞳の中に炎が燃える。その名に相応しく、熱く、赤く。

「アタシの主人ロードの条件は『騎士』であること。いっちゃあなんだが、お前はまだまだだ。弱いし、技術も甘いし、そもそも旦那みたいにベルカ式の使い手ってわけじゃねえ」

「がん、と炎の壁が叩かれる。」

「でも、お前の言う通りにするしか今は道がない」

紫炎の壁が端から砕けていく。

「アタシ一人じゃ旦那は止められねえ。お前ひとりでも旦那は止められねえ」

セルジオが立ち上がり、アギトに手を伸ばす。

「乗ってやる。アタシを使って旦那を止めて見せろ」

アギトはそのセルジオの手に触れて、その想いに応える。

「お前のその心が、守るための騎士であるというならば、アタシを使って限界を超えてみろ！」

そして、紡ぐ。

「ユニゾン・インツ！」

セルジオの体を炎が包み——姿が全く変わらない。

「く、そ………！」

それはセルジオがミッドチルダ式の魔導師だったから——だけではなく、何かもつと根本的にアギトが不和を感じ取ったからだだった。

（こいつの体になにか、ある。……エクリップス、そうかこいつがやたらと暴走していたのはこれのせいだな。アタシへの感染の心配はない。これはこいつの体に根付いたものだ。それを理解してたからこいつも力を貸してほしいと言ってきた。現にアタシに負担は全くない）

セルジオの体に溶け込んだ状態で、アギトはセルジオの体を分析していく。

(……なんでこいつ、ここまで進行して死んでねえんだ。普通のやつならとつくに発狂して死んでるレベルだぞ。何が、そこまで……)

言いかけて、アギトが今の状態について理解した。

(違う。負担がないんじゃない。こいつはいまもアタシに負担が行かないようにしてるんだ。必死に制御して、アタシから力だけを借りようとしてる)

炎の中で、セルジオが苦悶の表情を浮かべている。

おそらくエクリップスの影響で意識はほとんど残ってないはずだ。

そんな中でも、セルジオ・アウデイはアギトに負担が行かないように、気遣おうとしていた。

(馬鹿じゃねえのか、お前死にかけてるんだぞ。そんなこと気にしてる場合じゃねえだろ)

そして、アギトが気付く。

セルジオの今の体に接続されているデバイスの中に眠るよくわからないシステムの存在に。

(これ、なんかさつきからしきりに動いてるな。もしかしてこのエクリップスってやつ(の制御システムか)

それはシャマルがゼファーに組み込んだエクリプスを制御するリアクターシステム、その未完成で捨てられた残骸。いまもセルジオのエクリプスの負担をわずかに軽くしているものだった。

セルジオの中で、アギトはそのシステムに間接的に触れる。

(……まだ未完成だ。わけわからんねえ部分も多いし、そもそも無駄だらけだ。

アタシならこれを応用して落とし込めるかもしれないねえけど、でもこんな得体の知れねえモンを使ったら、アタシはたぶん、ベルカの融合機としての純正さを失う)

ありえない、とアギトは首を振る。

融合機は本能的に自分の主人^{ロード}を求めている。

アギトにとってそれは、純正ベルカ式のユニゾンデバイスとしての自分のロードを見つけることを意味する。

そして、このシステムに手を出せば、アギトはきつと後戻りできなくなる。

そこまでして、アギトがセルジオ・アウデイに手を貸す理由はない。

(ワリいな、できることはやってやる。だが完全な融合は諦めてくれ。お前がベルカ式に適性があればまだ違ったかもしれないが……)

できることはもうない、とアギトは目を伏せると、それを感じ取ったセルジオは静かに目を閉じた。

炎の中、まだ完了しないユニゾンを制御しながら、自分の中にいる剣精に語り掛ける。「ごめん、やつぱり今の俺じゃユニゾン、できない、みたいだな……」

『お前のせいじゃねえよ。元からお前にユニゾンできる素養はない。そういう、体なんだ』

「そうか。そういう体か。なら、安心したよ」

セルジオが、懐から一つの無針注射器を取り出した。

その容器の中に満たされたのは無数の微粒子状の機械。

知る人が見れば、高町なのはレイジングハートに組み込まれていたナノマシンとわかるもの。

その名を『フォーミュラナノマシン』。

それは、この場にやってくるときレジアス・ゲイズから託されたもの。

本来は最高評議会からレジアスの手駒になる人物に与えろと、そういうわれて与えられていたもの。

けれどレジアスは、それを、今を戦うお前に託すと、セルジオに預けた。

ただ、セルジオ・アウデイならば正しいことに使ってくれると思っただから。

それは、レジアス・ゲイズが『最高評議会に従う』ためではなく、『間違い続けないため』に戦うと決めたことを示す、彼らへの反逆。

「——は」

そして、セルジオ・アウデイは、その注射器の中身を自分の体に打ち込んだ。

「か、ぎ——」

どくん、と心臓が強く高鳴った。

血管を通して異物が流れ込んでいく。それはセルジオのエクリプスに侵された体と癒着しながら、同時にまったく別種の変化も与えていく。

そして、それに一番最初に気づいたのは今まさに融合状態にあるアギトだった。

なぜかセルジオとの融合率が上昇していつている。

最初はほとんどゼロに近かったアギトとセルジオの魔力的なシンクロ率が、次第に上がっていく。

『お前、何やってんだ!』

「作り変えてるんだ、身体を……!」

『は?』

アギトが呆気にとられたように目を丸くした。

「君はベルカ式のデバイスなんだろう! なら俺の体をベルカ式に合うように作りなおせばいい! 俺のエクリプスと、このフォーミュラならそういうことができるんだ!」

昔、ジェイルのことをまだ教授と呼んでいたころ、セルジオは彼に言われていた。

フオーミユラのシステムがあればセルジオの体は治療できるかもしれない、と。そして、同時にどのような方法かも。

あの言葉が嘘でないのはわかっている。ならばあとは実践するかどうかだ。

『そんなの、いくらお前の再生力でも制御できるわけねえだろ！ それより先にお前の体に限界が来る！ 死ぬぞ！』

「だとしても！ それでも、やるんだ！ だって俺は——」

セルジオの眼前で、ついにゼストの戒めが破壊される。

槍を手にしたゼストが機械のような瞳でセルジオへと迫る中、叫ぶ。

「俺は、ゼストさんに救われてきた！ だから！ 俺は今、あの人を救いたいんだ！ 君なら——アギトならわかるだろッ！」

それはシンプルな理屈だった。

救われたから、救い返したい。恩返しをしたい。ただそれだけの単純な気持ち。

それ故に、アギトの——同じゼストに救われた融合機の心の奥深くまで届いた。

（アタシも、コイツと——セルジオと一緒に戦いたい）

炎が、逆巻いた。

（アタシには望みがある。でも、それよりもいまのアタシはセルジオの想いに共感している。セルジオの言うことが正しいって、心の奥で感じている）

それはいままでのセルジオを包んでいたものとは違った。もっと熱く、もっと純粹で、もっと澄んでいた。

（認める、こいつは——セルジオ・アウデイは『騎士』だ。誰かを守り戦う、そういうゼスト・グランガイツの遺志を継いでいる）

セルジオの中のアギトが振り向くと、そこには白い大きな光があった。

それは変質しきったセルジオのリンカーコア。そのそばには細くつながる糸がゼファアから伸びている。

この糸を掴めばゼファアからアギトに向けてリアクターシステムが流れ、恐らくアギトはベルカ式デバイスとしての純正さを失う。

でも、それでもいいと今は思えた。

ゼスト・グランガイツの意志を継ぐこの青年と戦うためなら、それも悪くないとそう思った。

『もう一度だ。もう一度、ユニゾンしなおすぞ！ セルジオ！』

「——ああッ！ 行くぞアギトッ！」

逆巻く炎の中、セルジオ／アギトが、叫ぶ。

『ユニゾン・インッ！』

魔力の炎が、吹き荒ぶ。

炎と共に、セルジオの体作り変えられていく——否、進化していく。

身を包む炎が、エクリプスの黒鎧に収束する。

支配していた紅い衝動が制御され、変質させたリンカーコアを真なる形に昇華する。

体を守るフォーミュラノマシンが体に適応し、バリアジャケットに純白のエネルギ―経路が引かれる。

そして、最後に瞳が光を宿す。左目はエクリプスを表す深紅に、そして右目は、セルジオ・アウデイ本来の翠に。

——エクリプスウイルスには、ステージ段階が存在する。

一段階目は、感染。

二段階目は、発症。

この二つは、読んで字の如く、エクリプスウイルスに感染し、そして体がエクリプスウイルスに適応する形に作り変えられる過程を指す。

三段階目の『適合』まで来てようやくエクリプスウイルスの適応者である『ECドライバー』と呼ばれる。この段階でのドライバーたちはその力を制御できず、ただその強すぎる力に溺れるように暴れることしかできない。

今までのセルジオはこのステージであり、故にこそ抑えきれない破壊衝動にさいなまれていた。

ほとんどの感染者はこの三段階目で終わる。人間の体には限界が存在し、自分の力だけではさらに次のステージには至れない。

でも、本当は最後のステージがある。

それが、病化。

エクリプスは本来は制御できるはずもない世界を殺す毒。

けれど、病化は『制御』の段階なのだ。

外付けのリアクターを使って、負担を軽減し、殺人衝動を抑え込み、その体に固有技能を目覚めさせる。

ゼファーに搭載されたリアクター理論ははまだ完成していない。

けれどレジアスから託されたフォーミュラが、アギトというユニゾンデバイスが、そして数年間耐えに耐えて完成したエクリプスを受け入れる体が、最後のステージへの進化を完了させる。

それと同時に今までセルジオの命を食いつぶしていたエクリプスが止まる。制御されていく。

完全制御されたエクリプスは無利益に主人の命を食い潰さない。

そして、その力を主人の命を侵すためではなく、戦うためのものに、今変える。すう、と息を吸った。短く、けれどまるで数年ぶりに息を吸ったかのように深く。思考が、制御できる。

「——セットアップ、ゼファー」

セルジオの紅と翠の瞳が、白く輝いた。

「——」

何故だかわからないが『そのセルジオ・アウデイ』に危険を覚えたゼストが加速する——だが、セルジオはそれをまるであらかじめわかっていたかのように回り込んで、魔力を収束する。

それは紛れもなく、砲撃魔法だった。

リンカーコアが侵食され、魔法の力が消え失せたセルジオ・アウデイが、この力を使えるはずがない。

それでも、これは紛れもない砲撃魔法。

「ダイバインカノンツ！」

「——つ」

——病化特性『侵食変換』。

セルジオのリンカーコアは確かに一度エクリップスに侵食され、魔力を生み出す力を

失った。

けれど、一度侵食されたリンカーコアは、セルジオがエクリプスを制御する中で、真の力に目覚める。

それは、自分の周囲のエネルギーを、魔力に変換するという能力。

ずっと魔力不足に悩み、持たざる者の戦い方をするしかなかったセルジオの手に入れた、新たな力。

「——っ」

ゼストはたまらずシールドで砲撃を防ごうとして——その魔力がまとめて構成ごとほどこされた。

「分断」
デバインド

それは、エクリプスの力。魔力自体の結合を否定する、『魔導殺し』。

ゼストの体に砲撃が炸裂しそのまま吹き飛んでいくが、壁に激突する直前で停止する。

今まで傷らしい傷のなかったゼストに入った、明らかなクリーンヒット。

「——加速機動」

ウイルスコードに支配された思考が、目の前の人物への脅威段階をひとつ引き上げた。

ゼストはそのまま加速魔法を発動、セルジオへと肉薄する。

そして構えて、神速の突きを放った。

それはいままでのセルジオならば目で追うことはおろか、知覚することすらできなかつたもの。

でも、いまのセルジオには、どうすればゼストに追いつかれるのか、その方法がわかる。

身体に、魔力ともエクリップスとも違う、まったく別種のエネルギーが満ちるのを感じる。

フォーミュラナノマシンには固有の力がある。それは使用者の体感時間を引き延ばし、加速の力を与える機能。

それをセルジオは、高町なのはを助けるために、何度も何度も、いやになるくらい見続けた。

ならば使える。

だって、セルジオ・アウデイは真似が得意なのだから。

トリガーワードは、そう。

「——『アクセラレイター』アアアッ！」

世界を置き去りにして、セルジオだけが加速する。

知覚時間が引き延ばされ、全ての景色が遅くなる。

この世界ならば、セルジオの目でもゼストの槍に反応できる。

一秒、セルジオが槍を構える。

二秒、構えた槍を弓を引くように大きく引く。

三秒、己を狙う大丈夫の黒槍と刃を重ねた。

四秒、加速が終わり、世界は動き出した。

「——ッ」

「——」

二本の槍が激突し、競り合い、弾かれるように距離を取る。

燃える世界で、鏡合わせの二人の男が対峙する。

「……俺はずっと空っぽだった。誰かに与えられたものをなぞるだけの、偽物だった。自分のやりたいことが、わからなかった」

炎を纏い、白い光に包まれて、自分の全てを制御するセルジオは語る。

ユーノとの戦いで、レジアスとの対話で、彼女から託されたものに気づいた時、自分の心に芽生えた熱を。^{オモイ}

「でも、気づいた。俺を信じてくれていた人たちがいた。ありがとうって言ってくれた人たちがいた。そして、信じて意志を託してくれた人たちが」

誰も信じられず、信じてもらう価値もないと思っていた。全てを失ったと思っていたから。

でも、残るものがあつた。そう、気づかされたものがあつた。

「俺はずっと託されていたんだ！ クイントさんに！ メガーヌさんに！ みんなに！ ゼストさんに！ そして、母さんに！」

みんなが託してくれた想いが、願いが、夢が、俺に中身を与えてくれていた！」
空っぽだと思っていた。偽物だと思っていた。誰かの代わりだと思っていた。

でも、それは違うんだと、セルジオは叫ぶ。

「だから俺はここから『本物』を始める！ 託されたものを！ 俺の信じたものを嘘にしないために！」

間違いを犯しても間違い続けないように。

偽物であつても、偽物であり続けないように。

「俺は時空管理局地上本部所属、航空魔導隊三課部隊長『セルジオ・アウデイ』」

彼は名乗る。自らが『何』であるかを。

「セピア・アウデイに導かれ、ゼスト・グランガイツの背中を見て育った！ 貴方の息子
！」

翠の瞳が、強く輝く。どこまでも明るい、意志の光を宿して。

「俺は俺をいま信じてくれる人たちのために！ 俺が信じたいと思うもののために！
俺に想いを託してくれた人たちのために！」

槍を構える。いまの自分を作ってくれた、その構えを。

「俺のすべてで、貴方を止める！」

あの日堕ちた星は、そうして再び輝いた。

起点となる者

白光と暁光が弾ける。

「はああッー！」

「——シッー！」

白い光はセルジオ・アウデイ。暁の光はゼスト・グランガイツ。

バリアジャケツトを翻し、銀の槍と黒の槍を閃かせ、風を抜き去って、二人の騎士は戦場を加速する。

「——」

二人の攻撃がぶつかり、僅かに距離ができたタイミングで、ゼストは自身のデバイスに魔力を纏わせる。今のセルジオ相手を落とすには単発の火力が足りないと判断し、それを魔力刃のエンチャントで上乘せしようとしたのだ。

ゼストの手の中で槍が躍り、一呼吸の間に六つの斬撃を叩き込んでくる。

「アギトー！」

『任せろー！』

対するセルジオはアクセラレイターで加速した知覚の中で、ゼファーにアギトの炎が上乘せされる。そして丁寧な、ゼストから教わった槍技をなぞり、六つの攻撃を防ごうとする。

「く、限界、か……ッ」

だが、ゼストの膂力はセルジオの想像以上、なんとか五つ目までは直撃を避けたものの、加速時間の制限時間が来たのもあって、六つ目の薙ぎ払いで腹部にもろに食らってしまう——が、その隙間に炎のシールドが滑り込む。シールドは槍を防ぐまでに至らなかったものの、勢いをいくらか減衰させることに成功する。

それでも尚、再構築されたセルジオのバリアジャケットがきしみ、ビリヤードのキューのようにセルジオの体が空中を滑っていく。

「——っ」と

セルジオの体が空中で緩やかに止まる。

途中でアギトが炎を踵から放出することでブレーキをかけてくれたおかげだった。

「いてて、ゼストさん相手だとアクセラレイターが切れるときついな。ありがとう、アギト。助かったよ」

『感覚鈍ってんのかもしれねーがもうエクリプスのバカみてーな治癒能力はないからな！ 制御状態の今あそこまでの出力はもうそうそう出せない！』

わかった、とセルジオが頷こうとしてゼストがふつと、自分たちから視線を外したに気づく。

セルジオが病化特性『侵食変換』により生み出した魔力で、素早く解析魔法を発動させるのと、ゼストが加速したのはほとんど同時だった。

「た、たすけて……」

「管理局です、もう大丈夫、これから地上に行きますから。じゃあこれから——」

セルジオの解析魔法に、人の反応が引つかかる。

「アギト周囲に生存反応だ！ ゼストさんを追うぞ！」

『ちつ、この反応救助中の局員とかだな。間が悪い』

「言ってる場合か！ アクセス、フォーミュラシステム！」

『フォーミュラエネルギー、ドライブ！』

燃えるように、セルジオの周囲にエネルギーが満たされる。

「アクセラ——レイターアアツ！」

世界が歪む、全てが知覚の中で遅くなり、セルジオだけがその世界を自由に動く。

目指すは今まさにゼストが槍を振り、切り捨てようとしている二つの命。

間に合わなければ彼らは為すすべなく死ぬだろう。そしてそれを為すのは、セルジオの大切な人。

そんなこと、許せるはずがない。

「させるか!」

セルジオがゼストに回り込んで、救助中の管理局員のもとにたどり着く前に槍を弾き飛ばす。

「あんたは、航空魔導隊の……」

「話はあとだ! 俺がこの人を止めるから貴方はこのままその人の救助を! 任せていいな!」

「あ、ああ! こっちは俺が! あんたも頑張れよ!」

管理局員の励ましの言葉が届くより早く、セルジオとゼストは加速、戦場が移る。

ゼストが目の前セルジオを相手にしながらも時折リーダーに探知される生体反応へと向かうため、彼らの戦場はいつしか最下層から地上に近いところへと変わっていく。

数十、数百の技の応酬。

お互い、いままで積み重ねてきたすべてを吐き出すような槍技の駆け引きが行われるものの、決着はつかない。完全な膠着状態だった。

(攻め、きれない……ッ!)

レジアスから託されたフォーミュラ、完全制御のエクリプス、取り戻した魔法の力、上乘せされるアギトの炎、そのすべてを総動員しているはずなのに、それでもゼストの積み重ねた技には届かない。

今のセルジオにあるものではゼストと互角に渡り合うのが精いっぱい。

むしろ、相手の攻撃についていっているという状態なことを考えるとわずかにゼストが上とすらいえる。

『セルジオ、いまのうちに言っておくことがある』

『アギト?』

『今の旦那は正気じゃない。ジェイルのやつに操られてる。ここまではわかるな?』

『ああ。ゼストさんが本気でこんなことするはずがない。前戦ったときはまだ慈悲、いや、騎士としてのプライドみたいなものがあつたけど、いまは違う。もつと機械的で、冷たい感じがする』

『だろうな。いまの旦那はジェイルのやつにウイルスコードとか言うやつを使われて正気を奪われてるんだ。そして、その起点にはリンカーコアに埋め込まれた『レリック』が使われている』

『——レリック』

その名前には聞き覚えがある。初めてトーレと戦ったときに展示されていたもので、

同じシリーズのものが過去には暴走して大規模な事件を引き起こしたこともあるロス
トロギアである。

『レリックは高密度の魔力結晶体。使い方次第でどんな無茶な魔法でも実現させてしま
う。それこそ、死者を一時的に蘇らせる、と言ったことでさえな』

『それは、つまり……』

『ああ。旦那は——ゼスト・グランガイツはもう既に死んでいる。意識だけが蘇り、い
ままでレリックの力で無理やり体を動かした。でも、その意識もジェイルに洗脳され
たときに消えた。いま目の前にいるのもうゼストの旦那じゃない。旦那の記憶と経
験を使っているだけの存在だ』

『……止めるにはどうしたらいい』

『ただの攻撃じゃダメだ。それじゃレリックが暴走して爆発する。そうしないためには
旦那の防御を抜いて、魔力ダメージでレリックを弾き出す。それしかない』

『ゼストさんの、防御を抜いて……』

ただでさえ伯仲する実力。その実力差をひっくり返し、均衡を崩すにはこのままでは
だめだ。

(使うしかない、ゼファアのフルドライブを)

ゼファアに搭載されたセルジオの奥の手、『行動予測システム』。

相手の戦闘データを集積し、分析し、それをもとに未来予知じみた行動予測を可能とするゼファアの機能。

だが、エクリプスの負担のせいで随分長い間この機能も使えていなかった。起動するのはそれこそ数年ぶりになるだろう。

かつてのように満足に扱えるかはわからない。

(でも、やるしかない)

ふう、と小さく息を吐く。

「ゼファア、フルドドライブ全力稼働」

紅と翠の瞳が、白く輝く。

「イグニツション——アナライズ解析、三十八手」

轟くように、魔力が炎へと変わる。

「アクセラレイターツ！」

世界を置き去りにしてセルジオが加速する。

彼の思考ではすでに数年に及ぶ『ゼストがどう動くか』の解析が終了し、自分が勝ちを掴むまでの予測は完了している。

ならば後は、その空想の中の虚像を、実像へと変えるだけ。

「一、二、三、四、五ッ！」

ゼストに肉薄したセルジオが手の中で槍を回すように技を繰り出した。

セルジオの槍技が確かな鍛錬により裏付けされた実力があるが、それでもゼストを一方的に追い詰められるほどではない。

そのため、ゼストは今までと同じように自分とよく似た技をいなして、回避しようとするが、その行動がわかっていたかのように、進行ルートに槍が差し込まれた。

「——っ」

「かかった——残り十一手！」

ぎん、とゼストが少し荒っぽく攻撃をはじくと、そこに生じた隙にねじ込むようにさらなる追撃が重なる。

ひとつ、ふたつ、みっつと重なる鉄の刃がついにゼストの槍を弾いて、セルジオの前に無防備な懐をさらさせる。

「アナライズ・シミュレート模倣解析——」

セルジオの動きに記憶の中のゼストの動きが重なる。

それはかつて見たゼスト最強無比の一撃『紫電一閃』。それを自分流にトレースして、落とし込む。

ゼスト・グランガイツの槍技を、自分の体に当てはめる。

「——白光二刃ッ！」

斬、と白く輝く刃は吸い込まれるようにゼストへと叩き込まれる。

「——うそだろ」

寸前、刃が指で受け止められる。槍を握らぬ空手、そのたった二本の指での刃を挟み込む白羽取り。

ゼストはそのままゼファアを弾いて、槍を握りなおすとまるで竜巻のように体を半回転させ、そのまま槍をセルジオに叩き込む。

「あ、ぎっ」

ゼストの一撃はバリアジャケットのフィールドバリアごと殴りぬき、セルジオを天井へと叩きつける。

セルジオの体が天井を貫通し、ひとつ上の階の天井にめり込んで、止まる。

『おいセルジオ大丈夫か！』

「だい、じょうぶ、だ……」

息も絶え絶え、といった様子でセルジオは声を漏らす。

アクセラレイターの恩恵を得た槍のスピードはゼストをして視認するのは難しかったはずだ。それに言うまでもなく、先ほどの白光一刃にはアギトの炎、セルジオの魔力による上乘せもされている。

にも関わらず、それをゼストはたった二本の指で受け止めた。

なんてデタラメ、なんて無茶苦茶、これがかつて陸を支えるストライカーとも呼ばれたゼスト・グランガイツの実力。

(強いのはわかっていたけど、まさかフルドライブでも押し切れないとは) ぐい、とセルジオが口の端から漏れた血を袖で拭う。

『セルジオ、旦那が移動した！ 今度は地上だ！』

「はあ、はあ、くそ、人のいる方に向かつてるのか……止めなきや、だな」

『……まだ戦えるんだろうな？』

「戦うんだ。俺はそのために託されたんだから」

セルジオが再び加速、周囲を解析魔法で索敵した後砲撃で天井を抜いて地上へと向かう。

空港から外に出ると火災に紅く照らされていた空はいつの間にか端の方からわずかに白み始めていた。

そして、その中で見つける、今まさに避難民の集まる仮設本部へと飛ぶゼストの姿を。「アクセラッツ！ レイターツ！」

ギイン、とゼストの前にゼファーが差し込まれ、そして二人はそのまま空へと向かう。人々の喧騒が、管理局員たちの姿が、燃える空港が、全てが遠ざかっていく。

そして、セルジオとゼストは空に二人つきりになる。

「——シッ！」

「は、ああああッ！」

かつて、彼らが守った空で、白と黒の槍が交差する。

(これ以上、長引かせられない)

病化特性『侵食変換』のおかげで魔力について不安はない。フォーミュラもぶつつけ本番にも関わらず問題なく稼働ができています。

だが、先に体の方が悲鳴を上げ始めている。

度重なる戦闘。無茶な身体改造。慣れないユニゾン。

細かな負担はセルジオの体に少しずつ積み重なっている。

きつと、次の攻撃がセルジオがゼストを倒すラストチャンス。

(でも、どうやったたら勝てる、あの人はストライカー。俺の師匠。俺の技の全てはあの年から教えられたもの。現に俺の切り札の白光一刃も防がれた。なら二槍で……いや、あの人に渡りあうには両手での精密さがある。それにそもそももう一つの槍はない)

ゼストの一撃に吹き飛ばされたセルジオが空中でブレーキをかける。

(どうすればこの人に勝てる。どうすれば俺が、ストライカーに——)

答えは出ない。

セルジオ・アウデイの中にそれを導き出す方法はない。

『——紫電一閃だ』

だが、アギトは違った。

『アギト、それはどういう？』

『セルジオ、お前さつきゼストの旦那のコピーみたいな魔法使ってたろ』

『白光一刃のことか？』

『ああ、それだ。お前が旦那を倒す手段として槍を選んだのは悪くない。射撃にも砲撃にも瞬時に対応してくる旦那相手にはたぶん最適に近い。でも、あれはダメだ。あれは、本物じゃない』

『どういう……？』

『あれはゼスト・グランガイツの一撃だ。一人の騎士が至った極致だ。そして、それはお前のための技じゃない』

セルジオの使う『白光一刃』はゼストの紫電一閃をもとに、自分の体に合うようにトレースされたもの。

周囲に「槍使いとしては大成しない」と言われたセルジオにとってそれは示された最適解であり、それゆえ今までずっと頼ってきたものであった。

だが、『烈火の劍精』、純正なベルカ式の融合機であるアギトは、それではだめだと、そう言う。

『合わせるな。ゼスト・グランガイツの模倣をするな。そして信じる。お前の、セルジオ・アウデイの積み重ねたものを槍へと宿し、閃く一つの紫電と変えろ』

古き騎士^{ゼスト}から、ベルカの融合機を通して、若き騎士^{セルジオ}へと技は受け継がれる。

『それがベルカの基本にして秘奥——『紫電一閃』だ』
模倣ではない完璧な紫電一閃。

真似ではない、偽物ではない、セルジオ・アウデイだけの極致。

そのためには、自分を信じるが必要だと、アギトはそう言った。

(信じる、自分を——セルジオ・アウデイのことを)

一瞬、セルジオが迷った。

その時脳裏に過つたのは自分の犯した過ち。誰かの想いを裏切ったという後悔。消すことのできない罪の記憶。

そして、ゼストの戦闘経験はそんなセルジオの感情の揺らぎを敏感に感じ取る。

「——紫電一閃」

放たれるはベルカの騎士の極致。ゼスト・グランガイツの到達点にして、必殺の一撃。

二人つぎりの空に、暁の光が輝いた。

その光景を、地上の人々が見上げていた。

「セルジオ先輩」

消火作業が落ち着いた八神はやてが空を見上げる。

「セルジオさん」

避難民を地上まで無事つれてきたギンガが空を見上げる。

「セルジオ空尉」

ミッドの郊外、無人の研究所からルーテシアを助け出したユーノが空を見上げる。

「——セルジオ」

間違い続けないために前線に出てきたレジアスが空を見上げる。

娘たちの無事の連絡を聞いたゲンヤが、妹の恩を返すために戦ったヴァイスが、部下に鋭い指示を出す首都防衛隊の隊長が、レジアスの代わりにクラナガンの市街で指揮を執っていたオーリスが、海上でガジェットと戦っていたフェイトが、主の指示で戦いに出ていた守護騎士たちが、セルジオに救われた管理局員が、炎の中自分を守る白い光を見た人々が、空を見上げる。

そして、助け出したスバルを抱いた彼女もまた、空を見上げる。

「——セルジオくん」

誰もが、空を見上げていた。

まばゆい——まるで星のように輝き燃える光を。

紅い空で、セルジオは叫ぶ。

「俺は、信じる！ みんなが信じてくれた俺を！ みんなの意志を託してもらった、セルジオ・アウデイをッ！」

そして、セルジオ・アウデイの瞳に光が走る。

「——解析^{アナライズ}、六手」

強く、明るく、もう二度と絶えない意志の光が。

「終わりは見えた——行くぞ、アギトッ！」

『ああ、行くぜマイロード！』

セルジオにゼストの『紫電一閃』が迫る。

空気を切り裂き、数秒後の相手の絶命の運命を宿す黒刃が肌に触れる。

「——短距離^{ショートシフト}転移」

しかし、その瞬間セルジオのマルチタスクに待機させていた魔法が発動する。

セルジオが一時的に三次元世界から消失し、百万分の一秒のラグを以て、ゼストから数メートル離れた空に出現する。

「フォーミュラエネルギー、ドライブ」

白い光が、焰のごとく身を包む。

「アクセラ——レイターアアアアアッ！」

世界を置き去りにする。全てが遅くなる世界を支配する。

音の壁を抜き去って、残った雑念を振り払い、信じた自分だけを刃のように研ぎ澄まし、閃く紫電の刃へと変える。

「——」

だがゼスト・グランガイツはそれでも尚反応する。

自分の渾身の攻撃がかわされても、完全な死角に回られても、それが視認すら困難なスピードでも、ゼスト・グランガイツは反応する。

彼は視認もせずただ直感のみで振り返ると、そのままセルジオを叩き落そうと槍を構えた。

「『そう来ると信じてたッ！』」

業、とセルジオに焰の翼が現れた。

それはアギトの炎による飛行魔法。ロードに飛翔の力を与える加速の炎。

融合機の魔力が変換された紫炎が、若き主人をさらにもう一段階加速させる。

そして、セルジオがゼストの予測より一手だけ早く射程距離の内へと入る。

魔力が燃える。デバイスが輝く。見据える予測が、いま確定した現実へと変わってい

く。

「——お、おとおおッ！」

意志は熱に。信頼は技に。不屈の想いは、刃に宿る。

これこそベルカの騎士の基礎にして秘奥。若き騎士の到達点。

白光は一筋の光芒へと変わり、全ての障害を抜き去る一撃となる。

「——紫電一閃ッ！」

それは一人の騎士の至った、誰の真似でもない、セルジオ・アウデイだけの極致だった。

星の見えない長い夜が明けていく。

「起点は、セルジオ・アウデイだった」

空を見上げて、レジアスは言う。

「奴は儂を動かさし、首都防衛隊を、局員たちを、人々をその行動を以て動かした。そして、まるで弾けるように、爆発するように、状況を変えていった」

レジアスだけではない。そのとき誰もが空を見上げていた。そこに見える光に惹かれるように。

「二人で状況を変えたわけではない。指揮して好転させたわけではない。だが、起点は奴だ。セルジオ・アウデイの想いが、はじまりだった」

誰からも認められる優れた者ではない。

一人で困難を打破する者でもない。

けれど、セルジオは戦いの果てに、自らの存在を示した。

「故に、これからはセルジオ・アウデイをこう呼ぼう」

燃える星。白く輝く一等星。意志を継ぎ、不屈の想いに変えるもの。

「——起点となる者」

最終話 「起点となる者」

ゼストを抱きかかえたセルジオが、もうすっかり火の手が弱まった地上に降りる。

セルジオの完全な紫電一閃はゼストのリンカーコアに癒着していたレリックを分離させた。

もう、ゼストがジェイルに操られることはない。

望まぬ殺しをすることも、ゼストの守りたかったものをゼスト自身が汚すこともない。

「……終わったな」

『……ああ。終わりだ』

ゼストの体を壁にもたれさせてセルジオが静かにそう言ったのを、アギトも肯定する。

レジアスの指揮、首都防衛隊の協力、臨時の魔導師たちの働きのおかげでもう火災自体は鎮火していた。あとは要救助者の確認だけだろうが、きっとそれもゼストが倒され通信が回復した今、スムーズに進むことだろう。

セルジオがもう動かないゼストの前で膝をついて、頭を下げた。

「……ゼストさん、すみませんでした。俺、あなたに、結局何も返せなかった」

答えはない。わかっている。だってゼストはもう死んでいると、そう言われた。

だけど、何も言わないことだけはできなかった。

「俺はあなたに、本当にたくさんのものをもらっていたのに、俺は……」

セルジオがぎゅっと拳を握ると、不意にその手が大きい武骨な手に包まれた。

「せるじ、お、だな……?」

「ゼスト、さん?」

セルジオの目が丸くなる。

いかな原理か、ゼストはうつすらと目を開いてセルジオのことを見つめている。

「ゼストさん無事なんですか! いや、よかつた急いで病院に」

慌てたようにセルジオが立ち上がろうとするのを、ゼストの手が引き留めた。

だが、その手には驚くくらい力が入っていない。

「いい。無駄だ。自分の体のことは自分が一番わかる。俺の体はもう既に死んでいる。いまは、レリックの魔力が少しだけ体に残っているおかげで喋れるだけだ。俺はまたすぐに、物言わぬ死体となる」

「じゃアレリックを戻せばまだいい! まだあなたは死ななくていい! 死んじゃダメだ!」

「わがままを言うな、セルジオ」

ゼストの手がセルジオの髪をくしゃつと撫でる。

「意識を奪われても、お前の声が聞こえていた。俺を止めようとしてくれる声が」
浮かべた笑みは嫌になるほど優しい。

「セルジオ、お前は俺に勝ったんだ、胸を張れ。そして、前へと進め。俺じゃない、未来を見据えろ」

「そんなの、いやだ。おれは、まだ何もあなたに恩返しできてない。まだ、なにも……」

「そんなことはない。俺は、ずっとたくさんのものをセルジオに貰っていた」

ゼストの息が少しづつ弱くなる。もう長くないことはだれの目に見ても明らかだった。

「セピアがセルジオを連れてきて、まるで家族のように過ごした日々は楽しかった。

セピアがいなくなってから、必死に強くなろうとするお前を守りたかった。

お前を弟子にとつて、自分の積み重ねてきた技で導いてやれることに満たされていた。

仲間と出会って成長していくお前を見るのは寂しくもあつたが、誇らしかった。

お前が俺にネクタイをくれた日、心の底から嬉しかった。

セルジオ、俺はお前と出会えて幸福だった。だから、いいんだ。これでいいんだ」

細くなった目の奥で鳶色の瞳を動かして、ゼストは語る。

「お前の母親は、セピアはお前に『人を救え』とそう言った。あれはな、きつとセピアの優しさだった」

それはセピア・アウデイの言い残した言葉の真の意味。

いままでセルジオではちゃんと受け止められるか、生き方に迷ってしまうのではないかと思つて言えなかつた言葉を、いま伝える。

「誰かを真似することを宿命づけられたお前が、誰かを助けることで助けてもらえる人間になるように。そして、お前にそうやって幸せに生きてほしかったから、そう言ったんだ」

でも、とゼストが遠くを見た。遠くで、セルジオが動かしだしたレジアスの指揮する局員たちの声が聞こえている。

「いまのお前はそんなことを言われなくても、そういう生き方ができている。誰かを助けてきたからこそ、自分も助けてもらえるような、そんな人間に」

そして、ぐい、とゼストがセルジオの体を引き寄せて、強く抱いた。

「セルジオ、お前は俺とセピアの自慢の息子だ。お前がどんな道を進んでも、ずっとお前を愛してる」

まるで父親が息子にそうするように、強く。温かく。

「お、れも……」

ぼろり、とセルジオの瞳から涙がこぼれ出る。

「俺、も……幸せでした。……『父さん』」

涙は、もう止まらなかつた。

セルジオは今まで一度も泣いたことがなかった。

泣く人の気持ちが変わらなくて、あのすべてを失った三課壊滅の日ですら涙は出なかった。

だが、いまのセルジオは自然と涙を流していた。

セルジオ・アウデイの初めての涙は、悲しみの冷たい涙ではなく、父の愛を知ったあたたかい、喜びの涙だった。

すとな、とそれまでセルジオを抱いていたゼストの腕から力が抜ける。

セルジオが慌てて抱き起そうとするが、それをゼストは目で留める。

「……セルジオ、言い残すことがある。メガーヌたちの、ことだ」

「メガーヌさんたちの？」

小さくゼストが頷く。

「あの日、ジェイルに騙されたあの日、俺たちは壊滅し、少なくとも人間が死んだ。そして、死体は回収された。俺はそうしたものの一つだった。

だが、中にはまだ生きている者もいる。俺は今までレジアスへの不信と、そいつらの命を首輪にして、動かされていた」

「な——」

伝えられたのは「メガーヌたちがまだ生きているかもしれない」という情報。

「きつと、レジアスも知らない。ジェイルは隠し事が多かったからな。だから、レジアスには……ああ、くそ、時間が、ない。思い出せない。……ほんとうに、しかたないな」
ふ、とゼストは小さく息を吐いた。

「アギト、セルジオと一緒にいるんだろう」

「……うん。いるよ」

「そうか。もう目がよく見えなくてな。でもお前の熱は感じる。……セルジオは危なか
かしいやつだ。お前が支えてくれると、嬉しい」

「……だな。旦那の息子らしい、危なっかしさだ」

「はは、言ってくれる」

ユニゾンを解いたアギトがゼストと小さく笑い合う。

そしてゼストはもう光が消えかかった瞳をセルジオに向ける。

「俺は、ここまでだ。だからここからはレジアスを頼れ。あいつの言葉を聞くことはで
きなかったが、この現場に出てきたあいつなら、罪を償える、はずだ。そして、きつと
信じられる」

ゼストはレジアスに最高評議会の手駒になった真意を問いただしたかった。

そのために生き返り。ジェイル・スカリエッティに従ってきた。

だがその生のロスタイムも、ここで終わる。

「セルジオ、あとはお前に託したい。お前に仲間を救ってほしい。約束、してくれるか」
そして、セルジオはまた一つ想いを、願いを、意志を託される。

「……はい。俺が、必ず助けます」

セルジオが強く頷く。

かつてのようになだ言われたからそうするのではなく、自分の想いで、意志を受け継ぐことを選んだ。

「ありがとう。安心したよ、ほんとうに……」

ゼストが空を見上げる。

管理局に入ってからずっと守ってきた空だった。友と守ろうとした世界だった。

「ああ、クラナガンの空は、いい空だ」

その目はどこか遠くを見つめている。

「レジアス、セピア、俺たちの空は、今日も本当に綺麗だ」

そして、ゼスト・グランガイツは旅立った。

かつて守った空の下、愛する息子に見守られながら。

静かに、その長い戦いに幕を下ろした。

明け方の空に、白い星が輝いた日のことだった。

セルジオが教会の脇、綺麗に手入れされた墓それぞれに花を供える。

刻まれた名前はセピア・アウデイ。その隣のはゼスト・グランガイツ。

セルジオの大切な両親の墓。

「……いままで、本当にありがとうございました」

セルジオは目を閉じて静かに祈り、誓う。

両親たちが安らかに眠ることを。二人に託された意志を胸に、自分の信じるもののため生きることを。

「私も、いいかな」

そして、そこに一人の少女がやってくる。

セルジオはそちらを見て、ただ「ああ」とだけ答えた。

彼女は花を供えると、先ほどのセルジオと同じようにしばらく目を閉じて何かを思

う。

「……ありがとな、わざわざ来てくれて」

「ゼストさんは私にとつても大切な人だったから」

そう言つて少女は——高町なのはは微笑んだ。

「それに、ここに來たら君に会えるような気がしたから」

水晶の瞳は昔から変わらない。ただ、静かに隣にいてくれた。

その存在を感じながら、セルジオはほつりとつぶやく。

「俺さ、ゼストさんと別れる時、初めて泣いたんだ。悲しくなかつたのに、何故か涙が止まらなかつた」

「弱くてダメだな」と頭をかくセルジオに、なのはは首を振る。

「そんなことないよ。君が泣きたいなら、泣けるなら、いいんだよ。君は、泣いてもいいの」

「……そうなんだろうか」

「そうなんだよ。だれでも、そうなんだもん」

昔そうしていたように、なのははセルジオの言葉をなぞつて肯定する。

そしてなのはは「誰もが知っている当たり前を」教えてあげた。

「だつて涙は悲しい時だけじゃなくて、嬉しい時にも流れるものなんだから」

「――」
ずっと、こうだ。

彼女はいつも、セルジオの知らなかった「当たり前」を教えてくれる。

その言葉に、優しさに、何度救われたことだろう。

「お前が変わったって言ったの、訂正しなきゃな」

呟いて、セルジオは立ち上がる。

そして、なのはの視線を正面から受け止めると、次に深く頭を下げた。

「ごめん。お前を傷つけて。そしてその責任も取らずに逃げ出して」

そしてセルジオは語る。ずっと胸の奥にあった、偽らない本物の気持ち。

「俺はお前を傷つけた自分が怖かった。いやそれよりも、なによりも、お前を傷つけたのが俺だってわかったとき、お前に嫌われるのが、怖かった」

子どものような、幼い感情だった。

あの子に嫌われたくないなんて、そんなちっぽけな、独りよがりな気持ちでセルジオは彼女を傷つけた。

「俺は、高町に嫌われたくなかったんだ。だから、離れた。ごめん。俺が全部悪かった」

一秒か、十秒か、一分か。

もっと長かったのかもしれないし、短かったのかもしれない。

けれど確かに存在した二人の間の静謐を、なのはが破る。

「セルジオくん、顔を上げて」

優しく声をかけられ、セルジオが弾かれるように顔を上げる。

「本当にすまない高ま——」

「せやつ！」

「はぐつ」

そして顔を上げた瞬間スナップの利いたまあまあいピンタを頬に貰った。

ぺたん、とセルジオが尻もちをつけて目を丸くする。

「ほんとだよっ！　なんでセルジオくんはいつも一人で何でも決めちゃうかな！　私た

ち相棒だったでしょ！　ならちゃんと相談してよ！

なに、それともセルジオくんの中で相棒だなんだっていうのは私みたいな子どもを黙

らせるための体のいい言い訳だったの？」

「いや、そういうわけでは……」

「じゃああの時も私に相談すべきだったよね。とかあれからもう三年になるんだけ

ど！　この三年間私がどんな気持ちでいたと思ってるのっ！」

「す、すみません……」

「まったくもう、セルジオくんはほんとうに仕方ないんだから」

でも、となのはも目を伏せる。

「ほんとはね、私もずつと怖かった。セルジオくんの心が見えなくなって、いままで近かつたはずのきみが遠くに行つちやつたみたいだった。だから、踏み込めなかつた。

セルジオくんも、つらかつたはずなのに。ごめんね」

「……そんなことない。俺だけが悪かつた。だから謝るのは俺だけだ。だからお前は謝らなくていい」

「いやいやいや私もきみにいろいろ言つちやつたし、なので謝ります！」

「いやいいいつて言つてんだろ強情だな。俺が悪かつた。高町は悪くなかつた。そうだろう」

「強情なのはセルジオくんの方でしょ！ 私がごめんつて言いたいんだからそれは受け取つてよ！」

「わかつた一旦それは受け取ろう。でも悪かつたのは俺だ、それはいいな？」

「一旦つて何？ 普通に受け取つてくれればいいじゃん」

二人してごめんなさいの押し付け合い。わあわあとお互い自分の方が悪いと言ひあう二人も声が響く。

「いやだから！」

そして、二人の声が重なつた。

「……ふふっ」

「……はは」

なんとなく、二人が笑みをこぼす。

「とりあえず休戦にしようか。ここ、お墓だしね」

「だな。そもそもこのあとルーを迎えに行くことになってるんだ」

「あ、ルーちゃん私も会いたいな。ついていつてもいい？」

「いいけど……俺バイクだぞ」

「んー、じゃあ久々に乗つけてよ。ヘルメットいつも二つ用意してたでしょ？」

「そりやあるにはあるが……」

「じゃあ決定で。あー、ルーちゃんと会うの楽しみだな」

「つて、ルーに会うのはいいがバイクに乗せるとは言つてないぞ！」

いつかのように、でもちよつとだけ変わった関係で、二人は両親の墓を後にする。

最後に、セルジオは一瞬だけ振り返る。

(……また来るよ。母さん、父さん)

そして、セルジオはいつの間にかバイクに乗せることになっているのをあしらいながら、彼らの守った街に帰っていった。

幕間

空港火災の一件からしばらくして、セルジオはレジアスの執務室を訪れていた。

レジアスはいつも通り執務室の椅子に座って、セルジオの報告書に目を通していく。

「死者は0、か」

「はい。重軽傷者の報告は来ていますが、民間人、局員どちらも死者はいないようです。首都防衛隊と陸士部隊が指揮が混乱しつつも個々で早い段階で動いてくれたおかげです
すね」

「だが被害は大きい。復興には少し時間がかかるな。……フォーミュラの調子はどう
だ」

「俺の主治医によればすごく安定してるって。なんでもいくらか寿命の問題も改善してるとかしてないとか……」

「そうか、ならばあれをお前に託したのは正解だったな」

報告書を受け取ったレジアスは目頭を揉むと、セルジオが頬を緩める。

「お疲れみたいですな、レジアスさん」

「当たり前だ。ただでさえ復興に手が回らんのに、この前の勝手な指揮の責任を取れと海からもせつつかかっている。まったく、あやつらめ」

「あまり強く海を嫌うのはやめてあげてくださいよ。彼らも同じ局員なんですから」

「わかつておる。まったく、お前に言われるとセピアにも昔似たようなことを言われたことを思い出す」

「はは、母さんの子どもですから」

ふん、と鼻を鳴らすレジアス。

セルジオはレジアスに一通りの報告を終えると、ずっと触れたかった話題について切り出した。

「……あの、最高評議会についてはどうですか。レジアスさんはずっとあの人たちの支援を受けていたんですよね」

レジアスはゆっくりと息を吐くのと一緒に表情を落ち着けた。

「……そのことについて、お前に話しておくべきことがある」

レジアスが椅子から立ち上がると、ガラス張りの窓の向こうの地上を見下ろした。

「儂は、責任を取ろうと思う」

地上から目を移すと、今度は振り返ってセルジオを見る。

「先日の空港火災の件以来最高評議会との連絡は取れなくなつた。おそらく、儂は見限られたのだろう」

当然だろう。なにせレジアスは完全に最高評議会の指示を無視したのだから。

「最高評議会はあれ以来沈黙している。どう動くかはわからん。

自分たちが動きにくくなるのを覚悟で儂を肅正するかもしれんし、もしかしたら儂以外のものを手駒にするかもしれん」

「完全に、敵対してしまつたということでしょうか」

「それもわからん。だが一つはつきりしているのは、もう、儂は以前のように最高評議会に頼れないということだけだ」

レジアスのずつと進めていた地上の防衛のための兵器、アインヘリアル計画も恐らく頓挫することになるだろう。

もとよりレジアスが強固に進めていたプランであつたし、それも最高評議会の後押しがなければ実現することはない。

「それに、空港火災の現場に行つて指揮を執つたからと言ってそれまでの罪が消えるわけではない。儂は間違つた。それは、正さねばならん」

す、とレジアスが机の中から取り出した電子端末を机の上で滑らせて、セルジオに差し出す。

「情報端末……?」

「最高評議会と出会つてからの儂のやつたこと、そして儂の知りうる限りの最高評議会の隠蔽の全てについて記されている。公表してもやつらを失墜させることはできないが、おそらくその権力を揺らがせることくらいはできるだろう」

「これを俺はどうすれば」

セルジオの問いかけられ、レジアスは語る。

「いまのミッドチルダには闇が巣食っている。それは最高評議会であり、それに懐柔された人々であり、そしてジェル・スカリエツィイでもある。

それは儂が光の道からそれたせいで生まれた闇だ」

地上の未来を守るため、という甘言に惑わされ楽な道を進んだ。

そのレジアスの決断のせいで多くの命が失われた。

例えその計画を進めたのは最高評議会でも。

実際に行つたのはジェルでも。

レジアスにできることはほとんどなかったのだとしても。

それでも、レジアスはそれを見てみぬ振りした。

その事實は、絶対になくなならない。
少なくとも、レジアスはそう思っている。

「きつといま儂がすべての眞實を話したとしてももみ消されるだけだろう。それだけ、この闇は深い。もしかしたら儂でもあれらに勝つのは難しいのかもしれない。」

だがそれでも、この後始末は儂がしなければならん。地上本部の、儂にしかできないだ」

レジアスがセルジオに向き直る。

「儂はこの闇と戦う。そして、全ての闇を消し去ったそのとき——儂は、然るべき裁きを受けたい。全ての罪を償うために」

これはエゴだ。ただの自己満足だ。

けれど、レジアスはそれをわかっていて、それでも地上を守りたいと、そう思っている。

その手が既に汚れていても、せめてその手を守るべき美しいものを支えるために使いたいのだ。

「だが、儂は自分が強くないのを知っている。一度間違った儂は、また道を誤るかもしれない」

どん、とレジアスがセルジオの胸を叩いた。

鍛えられた武人のもものではなかったが、固く握られた男の手だった。

「だからセルジオ、お前が『レジアス・ゲイズは間違っている』と思ったときは、そのデータを公表しろ。そして儂を止めろ」

じつとレジアスが目の前の翠と赤の瞳を見つめた。

「頼めるか」

セルジオはしばらく黙して、やがて小さく頷いた。

「……わかりました。預かります」

少しだけレジアスが安心したように手の力を抜くと、今度はセルジオがその手を取ってレジアスを見つめた。

「実は、俺からもお願いがあるんです」

幕間 「未来へ進むために」

「あ、来た」

「すみません、待たせましたユーノ司書長」

「いえ、僕もことの顛末は聞きたかったですし」

レジアスの執務室から退室すると、執務室の前で待ち伏せしていたユーノとはちあつた。

壁によりかかっていたユーノはセルジオの姿を見ると、三課に向けて歩くセルジオの隣に並ぶ。

「話はどうでしたか、レジアス中将はなんと?」

「これから最高評議会と戦うそうです。」

その証拠に最高評議会のデータももらいました。俺もレジアスさんに力を貸すつもりです」

「概ね予想通りですね。」

データをくれたのは予想外でしたが、どうやらレジアス中将の腹は決まっているみたいだ」

「これからは俺もレジアスさんのもとで学ぶことになりそうです。」

階級を上げてちゃんとした部隊を持つことも視野に入れた方がいいともいわれました」

二人は念話で事務的に情報交換しながら三課への道を進む。

「あれからジェイル・スカリエッティの情報は何かつかめましたか?」

「俺の方では何とも言えません。ルーも連れ去られた前後のことはよく覚えてないって言ってみましたし、研究所の方ももぬけの殻です。俺をおびき寄せるためだけのダミーだったと考えるのが一番妥当かと。ユーノ司書長は？」

「僕の方も似たようなものです。向こうから接触させようとしていたころとは違う。あれだけの幻影と隠蔽の技術がある相手に対して、本気で隠れられれば個人では限界があります」

「これ以上は本職の捜査官にも協力を仰ぐのが一番、か」

かちやつとセルジオとユーノが同じタイミングで眼鏡を押し上げる。

二人して「ん？」と目を合わせる。

「セルジオ空尉、いま真似しました？」

「いやしてませんよ。ユーノ司書長こそわざわざ俺のタイミングに合わせなくても……」

「してませんよ。貴方が真似したのを押し付けないでください」

「俺の方こそしてませんって」

「というか、そもそも何が楽しくてセルジオ空尉の真似なんかしなきゃいけないんですか」

「でも俺の妹はよく真似してましたよ。一時期は高町の真似で俺は一日百回くらいデイ

「バインバスターという名のパンチを食らってました」

「妹さんと一緒にされても困りますが。まあ、将来有望な魔導師でよかったですね」

「やれやれ、とユーノは肩をすくめると、角を曲がってセルジオとは別の道を歩いていく。」

「ユーノ司書長？」

「空尉との情報交換はこの辺で十分です。僕はこのまま無限書庫に戻ります」

「あの、ユーノ司書長」

「じゃあ、と片手をあげたユーノをセルジオが呼び止めた。

ユーノが足を止めて振り返ると、曲がり角の向こう、日に照らされたセルジオがじつと自分を見ていた。

「俺はあなたの期待に応えられたでしょうか。あなたの、託してくれたものをちゃんと受け取れたでしょうか」

「ええ〜」

「なんですかその顔俺そんな変なこと言いました!？」

その問いかけにユーノが虫を踏み潰したように、レンジでチンしたハンバーグが中がまだ冷たかったような、そんな何とも言えない表情を浮かべる。

そして眼鏡をかちやつとかけなおして、大きく嘆息。

「……ええ。嫌になるくらい、貴方は僕の期待に添えてくれました」

なんとなく、ユーノは長く伸ばした髪を触る。いつの間になのはと似た髪型になっていた自分の髪を。

「誰かの手を取ってみんなを動かして、なのはを助けた。そしてもつと多くの人を死なせなかった。全部、貴方がいたからできたことだ。

……僕にはできないことだった。貴方にしか、できないことだった」

そしてユーノは結んでいた髪をほどくと、ふ、と微笑んだ。

「やっぱり、僕はあの時貴方を助けに行つてよかった。いまは心の底からそう思います」

その笑顔はいろんな感情が詰まっているような気がした。

でもセルジオにはそのすべてを理解することはできなくて。

でもユーノのことをわかりたいとは、そう思つて。

だから、自分の素直な気持ちを伝える。

「俺も、実はユーノ司書長がうらやましかつたんです」

「え？」

「俺は人の気持ちかわからないことが多かつたから」

セルジオなちよつぴり困つたように微笑んだ。

セルジオ・アウディは自分が少し鈍く、ズレている人間だと自覚している。

だから、誰かに優しくすることはできても、『危ないからそれはするな』と叱ることはあまり得意ではなかった。

セルジオはどちらかというところ、『甘やかしてしまう』タチだった。

「だから、高町から信頼して背中を任せられているあなたが、少しだけ羨ましかった。

危ない時にはちゃんと人を止められて、正しいことを教えられて、ちゃんと叱ってやれるって、誰にでもやれることじゃないと思うので」

ほりほりとセルジオが頬を指でかく。

「あと、ユーノ司書長の中で俺が理想の姿に見えたのなら、それはユーノ司書長のおかげでもあると思います。

貴方が俺の妹を助けに行ってくれたから。俺たちは、お互いの大事なものを託し合うことができたから今があります」

セルジオ一人でゼストを止められたわけじゃない。

セルジオ一人でレジアスを説得しに行けたわけじゃない。

そして、セルジオ一人では助けるのは助けるわけでもない。

「だから、ありがとうごございました、ユーノ司書長」

そしてセルジオが頭を下げる。

ユーノは前髪をかき上げて、困ったようにつぶやいた。

「そういうところが羨ましいよ。けど、そういう貴方なら、いいのかもしれない」

それはセルジオには届かない声だったが、それを言えたことにユーノはすつきりしたようだった。

どこか、晴れやかさすら感じる表情で「セルジオ空尉」と名前を呼ぶ。

「ユーノ司書ちよ——おっと」

ひゅつと紙を投げ渡されたのをセルジオが指で挟んで受け止める。

「僕のデバイスのアドレスです。困ったときはいつでも頼ってください」

「……いいんですか？」

「どうせ乗り掛かった舟だ。ジェル・スカリエッティと最高評議会のこと、僕も付き合わせてください」

「そっか、ありがとう」

セルジオは瞳を僅かに丸くさせたが、すぐにうれしそうに頬をほころばせる。

そして今までよりいくらか近い距離感で——まるで友だちにでも語り掛けるように、口を開いた。

「なら、俺のことはセルジオでいい。敬語もいらない」

「そう。じゃあ僕のことユーノでいいよ、セルジオ」

ユーノ・スクライアはセルジオ・アウデイにはなれない。

セルジオ・アウデイもユーノ・スクライアにはなれない。

だから、二人は相手にないものを補って、これからもつと違う関係を築いていけるのかもしれない。

その関係に名前がつくのは、まだ少し先にはなりそうだが。

「……そうそう、言い忘れてたけど」

二人が別れようとしたとき、今度はユーノがセルジオを呼び止めた。

セルジオが声のままに振り替えると、ユーノは満面の笑みを——今までで一番イキイキとしたいい笑顔を浮かべていた。

「僕、セルジオのこと嫌いだから」

「えっ」

「いや君のことは認めたよ？　すごいと思うし、尊敬もしてる。協力もする。でもそれとなのはを三年間ほったらかしにしたのは一ミリも許すつもりないから」

「うっ」

セルジオが胸を抑えて後ずさる。

どうやらなのはの件はセルジオにとつて中々深い傷になっているようだった。

「そもそも年上のくせになのはに押されすぎだと思うよ。あと君の解析魔法精度はいいけど無駄が多い。今度術式見てあげるから持つてきなよ。今のままじゃちよつと見て

られない」

「……ユーノ、結構言う方なのな」

セルジオがじろつと睨むと、ユーノはこれまた楽しそうに笑った。

「当たり前だよ。僕の好きだった女の子を悲しませたんだ、少なくとも十年は蒸し返させてもらおうよ、セルジオ」

「あ、おかえりーセルジオ先輩」

三課に戻るとはやてが出迎えてくれた。

セルジオは制服の上着をかけると、自分のデスクの椅子を引いて座る。

「ありがとう。でも、今日八神は非番じゃなかったか？」

「新居の下見でこっちに来たもんやから、ついでに私物でも整理しよかなおもて」

「そういえば卒業のタイミングでミッドに越してくるつもりなんだったか」

「ですねー。家族もみんな管理局勤めやし、春からは私は高校いかに本格的に局員やるんでそっちの方が都合がよくて」

「もう一年か。なんだかお前が三課に来たのがずいぶん昔に思えるな」

「私にとつては氣の休まらない一年でした。なんせ、私の上官がえろう無茶しはる人でして。あー、私がいなくなった後が心配やわ」

「おっと、そんな上官に書類仕事から何から陸の仕事を叩き込まれたのはどこの誰だったかな」

「と、それを言われたら勝てませんね」

ヨヨヨ、と泣き崩れる真似をするはやてだったが、セルジオの反撃にあうと一転、へつて舌を出してお道化てみせた。

一年ではやてとも随分仲を深められた。

光を失ったセルジオははやてのこの明るさに、言葉に何度も助けられただろうか。

そんな後輩ともお別れともなれば、少しさみしいような氣もした。

「にしても、部屋片付きましたね。もうデスクも私たちのくらいしか残ってへんし」

そう言うはやてが三課を見渡すと、その言葉の通りがらんとしたオフィスが広がっている。

以前はセルジオ、はやて、ラインの三人しかいない部隊には不釣り合いなほどたくさんデスクがあったのに、いまはもうセルジオとはやてのものくらいしか残っていない。

セルジオははやてにつられるように三課を見渡した。

「少し前までは、変えてしまふのが嫌だったんだ。このオフィスをすつかり模様替えしてしまつて、俺の知つてる三課がなくなつてしまふことが嫌だった。そうすることで、俺が壊したものが戻らないことを認めることが嫌だった」

そう語るセルジオの目はひどく優しい。

「でも、三課がもうすぐなくなるつてなつて、ゼストさんとお別れができて、俺もようやく前に進める。あの人たちの気持ちと一緒に、託してくれたものと一緒に、昔の三課とお別れができる」

セルジオが自分のデスクを撫でる。

母親を失つて、帰る家がないセルジオにとつて三課こそが自分の居場所だった。

入局してからずっとそつとで、だからセルジオは誰よりも『三課』という形にこだわりがあつた。

一度自分が力任せに壊しても、元通り元に戻して、たつた一人つきりでもたくさんのデスクを並べてしまふくらいには、変えたくなかつた場所だった。

でもそんなセルジオもようやく前に進める。

見た目だけの形ではなくて、大切な仲間から託されたものはまだ手の中にたくさん残つてにことに気づくことができたから。

もう、大丈夫。

「やつぱり、三課はなくなってまうん？」

「ああ。『航空魔導隊三課』の運用期限は終わりだ。いや本当はもう終わっていたらしいが……まあ、とにかく終わりだ」

ゼスト・グランガイツが作り上げ、レジアス・ゲイズが背中を押して作った『航空魔導隊三課』は解体される。

かつて陸の人手不足の問題を解消するために作られた部隊は、いま静かに終わりを告げようとしていた。

「けど、全てが終わるわけじゃない」

だが、これは終わりではない。

「俺はこれから新しい部隊を作る。ゼストさんの作った『航空魔導隊三課』じゃない。俺の、俺がすべきことをやるための部隊を」

セルジオの言葉にはやてが少し驚きつつも、今聞いた言葉を咀嚼していく。

「ええと、それはつまり、これからもセルジオ先輩は陸で、それもレジアスさんのもとでやっていくつちゆうことですか」

「そうなるな。そのためのレジアスさんの協力ももう取り付けてきた」

「はやつ！ いつの間に!?!」

「んー、つい一時間前くらいだな」

「めっちゃ今さっきー！」

『ジェイル・スカリエツティを追う部隊を作ること』。

それがセルジオがレジアスとかわした約束だった。

なんとなく、今回の空港火災の一件を通してセルジオは感じ始めていた。

ジェイル・スカリエツティとは自分が決着をつけなくてはならないと。

そのためにいまの前線に出るだけの魔導師としての自分だけではだめだと。

ジェイル・スカリエツティは最高評議会がバックについた違法科学者であり、その手駒には魔法の通用しない戦闘機人、いくらでも生産できるガジェットドローンがいる。

それは一人で追いかけるだけでは絶対に捕まえることができない。

『部隊』がいる。

ジェイル・スカリエツティに対抗できるような、信頼できる仲間たちが。

「まあ、けどしばらくは仲間集めだな。いまは俺一人だし、そもそも八神がいなくなる
と補佐もいなくなるから、そこから探さないとなあ」

「補佐、やて」

セルジオのぼやきを聞いたはやては、隣に忍び寄るとふっふっふと肩を揺らして笑
う。

ちよつと、いや、かなり不気味だった。

「セルジオ先輩、補佐……という仲間が欲しいなら一人心当たりありますよ、私」
「心当たり？」

「はい。実はこの前から三課が新しい人員を募集してないか話を聞かれてまして、実はこのあと会う約束もしてるんです。ちょうどええですし、ここに呼びますね」

「ちよ、お前勝手に……」

「大丈夫です大丈夫です、絶対セルジオ先輩も納得する人ですから」

俺でも納得する人？と首を傾げるセルジオをそのままに、はやては通信端末を二、三操作するとその人物を三課まで呼び出した。

そして、数分して三課のドアが叩かれると、はやてが扉を開けた。

「紹介します、こちら私の後任の子です。春から管理局に配属されることになってる、新人ちゃんです……と言っても、セルジオ先輩の方が詳しいでしょうし、私はこれで失礼します」

「あ、ちよ、おい！」

「お二人でゆつくり」

はやてと入れ替わるように、三課に一人の人物が——少女が入ってくる。

長い藍色の髪。同じ色の深い色の瞳。セルジオが姉のように慕っていた人物とよく似た——けれど、クイントよりも少しだけ大人しさがある、そんな少女。

そして、セルジオはそんな彼女のことを知っている。いつそ、知りすぎていくほどに、知っていた。

彼女はセルジオに敬礼すると、母親譲りのはきはきとした声で名乗る。

「来月付で時空管理局地上本部に配属されます、ギンガ・ナカジマです。よろしく願います、セルジオ・アウデイー尉」

クイント・ナカジマの娘、ギンガ・ナカジマだった。

「ぎ、ギンガちゃん!?!」

セルジオが困惑したように立ち上がってギンガのもとまで駆け寄って、ぴたりと止まった。

思わず駆け寄ってしまったが、まともに話すのは久しぶりだ。どういう距離感が正しいのかわからなかった。

「えと、なんで俺のところ……?」

「訓練校は今年で卒業なんです。なのでどこかに配属希望を出すことになるんですが、セルジオ・アウデイー尉の補佐がいなくなれるというお話を聞いたので、ダメもとで希望を出してみようかと思いました」

「いや君はほら、ゲンヤさんの陸士部隊とかあつたらう?」

「最初は考えましたが、父に相談したところ『セの字のところに行きたいなら行ってやっ

「たらいい。あいつのもとでなら学べることも多いはずだ」と背中を押ししてもらいました」

「ゲンヤさん、ああ、くそお目付け役ってことかこれ？」

「いやそもそも、とセルジオが頭をかく。」

「俺は、その……君に、嫌われていると思っていた。俺は、クイントさんの死に関わっているから」

「……そうですね。昔は、貴方のことを考えることが辛い時期も、ありました」

「ギンガが目を伏せて何かに耐えるように自分の身を抱く。」

「だがすぐに顔を上げると、頭一つ高いセルジオを見上げる。」

「でもいまは貴方のことを知りたいと思っています」

「深い藍色の瞳はセルジオを真正面から見つめて離さない。」

「あの火災の日、セルジオさんは戦っていました。貴方の背中が変わっていなくて、なんだかその姿は、お母さんみたいで」

「燃える空港でセルジオはギンガに「管理局員としての在り方」を伝えてくれた。」

「その姿は間違いなく、ギンガの知っている優しいセルジオのものだった。」

「変わったと思った人は本当は変わっていないで。」

「お母さんの守りたかったものを今も守っている人のように思えて。」

でもギンガにはいまセルジオが何と戦って、何を守ろうとしているのかわからなくて。

どうすれば母親のような人を守る局員になれるか、目指す方向も見えなくて。

「だから、あなたの隣で、あなたの目指すものが私も見たい。その先にどんな光景があるのかを知って、私の道を見つけないんです」

真剣な瞳だった。

瞳の奥には確固とした自分の意志を宿した光が宿っていた。

もう、小さいころから知っている子どもだとは言えない、そういう強い光だった。

「俺、ギンガちゃんが思ってるよりも情けないかも」

「これからセルジオさんのことを知っていきたかったので知らない一面を知れるのはありがたいですね」

「たぶんしばらくはいろいろ忙しいと思う。俺、部隊立ち上げとかいろいろあるし」

「仕事が忙しいのはいいことです。やりがいもありますし」

「……八神曰く、俺の補佐はけっこう大変らしいぞ」

「望むところです。私、普段から父の栄養管理もしてるので。ばっちりセルジオさんのこともサポートします」

「あー、うん、それは、お手柔らかに頼みたいけど……」

やがてセルジオが根負けしたように笑みを見せると、手を差し出した。それにギンガも応じて、同じようにほほ笑んだ。

「よろしく、俺の補佐のギンガちゃん」

「よろしくお願ひします、私の上官のセルジオさん」

二人の手が結ばれる。

そうしてセルジオは、他には誰もいない隊室で新たな仲間の一人目と、再出発の握手を交わしたのであった。

セルジオ自身に少くない変化が起きたように、セルジオの周囲の環境もまた変わっていく。

その中でも一番大きな変化は融合機『アギト』についてだった。

「お前の罪は重くない。保護観察は入るけどもう出ていいってさ。しばらくは俺が身元引受人になるから」

「そーかよ」

「魔力ランクとかの制限もいらぬそうさ。取り調べにも協力的だったおかげだな。あ

りがとう」

「そーかよ」

「このあとはどうするかは……」

「……本当に良かったのかよ」

「何が？」

管理局の犯罪者更生のための隔離施設、その一室でアギトの身元引受人の書類にサインをしていたセルジオはアギトに名前を呼ばれて顔を上げた。

セルジオの前には人間サイズのアギトがいる。施設に収容されたら着ることになる拘束衣ではなく、既に普通の私服である。

「アタシを引き取ることだ。聖王教会からいろいろ言われたんじゃないのか」

「あー、まあ」

ずり、と鼻の頭から眼鏡がずり落ちる。

アギトは古代ベルカの純正のユニゾンデバイスである。

いまはゼファーに仕込まれていたリアクターのシステムが混ざりこんでいるため、前よりも稀少価値は下がってはいるのだろうが、それでもその存在はベルカを主体とする聖王教会としては喉から手が出るほど欲しいだろう。

おそらくアギトが行くと言えば喜んで聖王教会は迎えてくれるだろうし、きつとかな

りの好待遇が約束されているだろう。

融合機、魔法によって作られた命であっても、アギトを軽視するような組織でないことはセルジオも理解している。

「でもアギトはそうしたくないんだろう？　なら俺はそれを無理強いはしたくないな」

エクリプスの紅、生来の翠の二色の瞳が眼鏡の位置が正されると共に両方とも翠の瞳に戻る。

「でも俺の方も聞いておきたいな。なんでアギトは聖王教会に行きたくないんだ？」

そして、セルジオはアギトのことをじつと見つめると、アギトの言葉を待った。

アギトは少しだけ居心地悪そうにしていたが、やがて居住まいを正して語り始める。

「アタシは、ジェイルに思い知らせてやらなくちゃならねえ。ゼストの旦那の、ベルカの騎士の誇りを汚した罪の重さを」

ゼストは死んだ。

けれど、全てが終わってしまったわけではない。

「そしてアタシの今のロードはお前だ、セルジオ。だからアタシはお前と一緒に戦う。そのため、まだ教会に行くわけにはいかない」

ゼストのため。ベルカの騎士のため。

それが今のアギトが動くための理由であるらしかった。

セルジオは書類に記載をしていたペンを置くと、アギトに向き直る。

「……俺でいいのか」

「正直ダメだな。まだまだゼストの旦那には遠く及ばねえし。ベルカの騎士一年生つてところだ」

でも、とアギトは言葉をつなぐ。

「アタシはお前を選んだ。そうしたいって、そうするって、あの燃える空港でアタシは決めた」

「アギト」

「それに、お前、ジエイル・スカリエッティを追うんだろ。あの、メガーヌとかいう人たちを取り返すために」

メガーヌ、という言葉聞いたセルジオが動揺が体に現れたかのように体を揺らした。

だがそれも一瞬の揺らぎ。すぐに「ああ」と頷いた。

「俺にはな、義理の妹がいるんだ」

そして今度はセルジオが語る。いま、ゼストから託されたものへの想いを。

「その子はメガーヌさんの娘で、俺はその子を引き取ってメガーヌさんたちの代わりに育ててた。」

でも、家族にはなれなくてさ。ずっと家族がどうすればいいのかわからなくて、俺は『兄』としてあの子のそばにいていいのかも、わからなかった」

ルーテシア・アルピーノはセルジオのことを「おにーちゃん」と呼んでくれていた。それでもセルジオにはそれに応えてあげる自信がなくて、だからずっと壊れ物に触れるみたいに扱っていた。

「でも、今なら言える。

俺は『兄』として、ルーテシアをもう一度母親に会わせて見せる。

それが今の俺の決意だ」

ゼストが見せてくれた可能性をセルジオは信じる。

引き継いだ意志と約束を叶えて、ルーテシアに再び母親と会わせる。

それが再起した、セルジオ・アウディのルーテシアとの向き合い方。

セルジオの言葉を聞いて、ハツとアギトが笑った。

そして表情を引き締めると、セルジオの制服の襟首をつかんでぐいっと引き寄せる。

「ならこれは契約だ。アタシはお前に力を貸す。だからお前もアタシに力を貸せ。いつか、ジェイル・スカリエッティを倒すまで」

「……いいんだな」

「お前の道はアタシの道だ。お前の戦いはアタシの戦いだ。お前の夢は、アタシの夢だ。

さつきも言ったろ、アタシはあの空港の中でお前と戦うことを決めたって」

わかった、とセルジオが頷いた。

「なら契約だ。俺はアギトと一緒にジェイル・スカリエツィを倒す。そして罪を償わせて、奪われたものを取り戻す」

ニツとアギトが悪戯っ子のように笑った。

「……契約完了だな。マイロード」

セルジオもまたそれに微笑み返すと、手元の書類を持って立ち上がる。

「それじゃ俺の家に行こうか。いま妹と二人暮らしんだけど、やっぱアギトも自室ほしいよな」

「は？」

「あ、もしかしてアギトってそっちの人間サイズじゃなくて妖精みたいな大きさの方が本当の姿だったりするのか？　じゃあでっかい部屋だとかえって落ち着かない？」

「いや、ちよ、待て待て待て待て」

アギトが慌てて言葉を遮ると、はて？と首を傾げる青年に詰め寄った。

「え、なんだアタシと一緒に住む気なのか？」

「そりゃそうだろ。だって俺アギトのロードで身元引受人なんだから衣食住の面倒くらい見てあげなきゃな。それに保護観察の都合もあるから目の届くところにはいてもら

わないと困るし」

「いやだとしてもアタシは一人でもやっていけるっていうか……」

「そう言うなって。アギトってゼストとさんに助けられたんだろう？」

「じゃあ俺にとつては家族みたいなもんだよ。俺もあの人に世話になったしさ、家族の面倒くらいは見させてくれよ」

アギトの目が丸くなる。

「家族って、アタシ、その、融合機で、人間でもなくて……」

「それを言うなら俺だって生まれはまともじゃないよ。なにせビーカーの中らしいからな。大した違いでもない」

「それ、は……」

アギトがもじもじと指を組み合わせて、迷うそぶりを見せる。

ふ、とセルジオはいたずらっぽく笑う。

「ははーん、アギトさては照れてるな。はは、気にしなくていいよ、俺はやりたいことやってるだけだからさ」

「照れてなんかにやい！」

「あ、かんだ。アギト、けっこう子どもっぽいところあるんだな。ユニゾンの時はすごく頼りになったからわからなかったよ」

「ああああもう調子狂う！ しらん！ アタシをからかうのはやめろ！」

変わらないものはない。

変われなかった青年も一つの転機を以て前へと進む。

ゆつくりと、しかし確実に、止まっていたセルジオ・アウデイの時計の針は動き始めていた。